杉浦非水装幀

岡本綺堂集
長田幹彦集

改造社版

岡本綺堂（上）長田幹彦（下）二氏の近影

「長田幹彦集」目次

岡本綺堂集

弁慶も静も
京の踊かな
綺堂

俳諧師

登場人物──俳諧師鬼貫。路通。鬼貫の娘お妙。左官の女房お留。

元祿の末年、師走の雪ふる夕暮。浪花の町はづれ、俳諧師鬼貫のわび住居。軒かたむき緣朽ちたる破ら家にて、上の方には雪にたわみたる竹藪あり。下の方の入口には低き竹垣、小さき枝折戸あり。となりは墓場の心にて、矢はり低き竹垣をへだてゝ其内に雪の積りたる石塔又は卒堵婆などみゆ。雪しづかに降る。寺の木魚の音きこゆ。

(下の方より近所の女房お留、竹の子笠をかぶりて出づ。)

お留。あゝ、よく降ることだ。寒い、寒い。(枝折戸をあけて聲をかける。)もし、御めんなさい。お留守ですか。

お妙。はい、はい。(奥より鬼貫の娘お妙、十七八歳の美しき娘、やつれたる姿にて、煤けたる行燈を點して出づ。)

お妙。おや、おかみさん。まあ、どうぞおあがり下さい。

お留。なに、こゝでいゝんですよ。(笠をぬぎて緣に腰をかける。)寒いぢやありませんか。

お妙。ほんたうにお寒いことでございます。(表を見る。)今夜も積ることでございませう。

お留。二日も降りつゞいた上に、まだ積られてはまつたく遣切れませんね。年の暮に斯う每日降られては、どこでも隨分困ることでせうよ。

お妙。なにしろ、おあがりなさいませんか。そこはお寒うございますから。

(云ひながら下の方の爐を見かへれば、爐には火の氣がないので、お妙は困つた顏をしてゐる。)

お留。(それと察して。)いえ、もうお構ひなさるな。內の人もこの寒いので、持病の疝氣が起つたとか云つて、きのふも一昨日も仕事を休んでゐたのですけれど、もう數へ日になつて來て、お出入先から每日の催促があるので、今日はたうとう朝から仕事に出て行つたんですよ。

お妙。この降るのに、まあ。

お留。尤も家のなかの繕ひ仕事ですから、雪が降つても出來るには出來るんですがね。それでも左官といふ商賣は辛いものだと滾し拔いてゐるんですよ。そりやまあ寒いときに泥いぢりをするんですから、どうで樂な仕事ぢやありませんけれど……。

お妙。(身にしみるやうに。)そりや全くでございますわねえ。

お留。さう云つても、我慢して稼いで貰はなければ、今日が過されませんからねえ。こちらのお父さんは今日はお休みですか。

お妙。いゝえ、今もおつしやる通り、やつぱり我慢して出て貰はなければなりませんので、今朝から稼ぎに出かけましたが、この雪では嘸ぞ難儀であらうと案じてをります。

お留。このお天氣ではほんたうにお困りでせうねえ。その代りにこちらの御商賣なぞは、かういふ日の方が却つて可いかもしれません

よ。

お妙。（愁はしげに。）どうでございませうか。

お留。なにしろ、もう歸つてお出でなさるだらうから、早く火でも起して置いてあげたら何うです。外は隨分寒うござんすよ。

お妙。さうでございませうねえ。（再び爐の方を見かへる。）

お留。（それを察したやうに又うなづく。）いゝえ、どこでも焚物には困るんですよ。この頃のやうに炭や薪が高くなつては、その日暮し同樣の者はまつたく凌げません。それで、實はね。（聲を低めながら墓場を指さす。）わたしもあすこへ焚物を見つけに來たんですよ。

お妙。あすこへ……。（伸上りてのぞく。）

お留。あのお墓の古い塔婆を少し貰はうと思つてね。

お妙。お寺で呉れますかしら。

お留。（笑ふ。）呉れるもんですか。どうで呉れないに決まつてゐるから、默つて貰つていくんですよ。

お妙。まあ。

お留。だつて、お前さん。さうでもしなければ、この大雪の日に凍え死んでしまふぢやありませんか。佛樣だつて大目に見てくれますわ。

お妙。でも、まさかそんなことは……。

お留。まあ、默つておいでなさい。こゝの家へも持つて來てあげますから。

（お留は枝折戸の外に出て、あたりを見まはしながら生垣を押破つて墓場に忍び入るを、お妙は縁に立ちて不安らしく眺めてゐる。やがてお留は、新しいのと古いのとを取りまぜて澤山の塔婆を引つかゝへて出で、縁先へ引返して來る。）

お留。ねえ、お前さん。これだけあれば一時の凌ぎはつくと云ふものですわね。雪で濕つてゐるかもしれないが、兎も角もこれだけ置いて行きませうよ。

（お留は塔婆の雪を拂ひながら、その幾本かを縁に置く。お妙はやはり不安らしく眺めてゐる。）

お留。こちらなんぞはすぐ隣なんだから、焚物に困つたらいつでも斯うなさいよ。

お妙。でも、おかみさん。

お留。まあ可いから、お父さんの歸るまでに、早く暖かい火でもこしらへて置いておあげなさいよ。どれ、わたしも早く歸りませう。まあ、御覽なさい。些との間に又積りましたよ。（笠を持ちて起ち上る。）

お妙。氣をつけておいでなさい。

お留。はい、御免なさい。おゝ、降る、降る。

（お留は笠をかぶりて塔婆をかゝへ、挨拶してゆきかゝる時、上の方の竹藪の竹が二三本、凄まじい音して折れる。）

お留。（驚いて見かへる。）おや、竹が折れましたよ。

お妙。さつきから撓んで居りましたが、たうとう折れたとみえます。

お留。この雪ではたまりますまいよ。わたしの家なんぞも小さいから、うつかりすると壓潰されるかも知れない。はゝゝゝゝ。

（お留は笠を傾けて去る。ゆふぐれの鐘きこゆ。）

お妙。あのおかみさんはお墓からこんなものを持つて來て……。（塔婆を見る。）竊と行つて歸して來ようかしら。（起ちかけて又躊躇する。）あゝ、雪が降る。お父さまはさぞお寒いことであらう。

（お妙はぢつと思案の末、塔婆にむかひて合掌し、やがて思ひ切つて爐の側へかゝへて行き、それを爐に折りくべて燧石の火を打つ。塔婆は燻りて白き煙がうづまき颺る。表の雪は降りやまず。下の方よ

り俳諧師鬼貫、四十餘歳、導引のこしらへ、頭巾をかぶりて破れたる傘をさし、足駄をはきてとぼ〱と歸り來る。お妙は透しみて縁に駈け出る。）

お妙。お〻。お父さま。お歸りでございましたか。

鬼貫。どうもよく降ることだな。

お妙。さぞお寒かつたでございませう。

（お妙は手つだひて、鬼貫は傘をすぼめ、頭巾をぬぎ、からだの雪を拂ひて内にあがる。）

お妙。朝から少しも止まないので、お寒くもあらうし、お困りでもあらうと、案じ暮してをりました。

鬼貫。（爐のそばに來る。）お〻、爐の火が暖かさうに燃えてゐるな。きのふけふの大雪、外に出てゐるものも難儀だが、内にゐるものも難儀、殊に今朝から焚物は無し、内でもさぞ寒がつてゐるだらうと、おれも内を案じてゐた。

お妙。この寒いのに焚付はなし、お父さまがお歸りになつたらどうしようかと思つて居りますと、あの左官のおかみさんが……。（少しく云ひ淀みて。）これを持つて來てくれたのでございます。

鬼貫。内に火のあるのは不思議だと思つてゐたが……。あ〻、これは塔婆ではないか。

お妙。はい。（もぢ〱してゐる。）

鬼貫。（急に顏を陰らせる。）これを左官のおかみさんがくれたのか。

お妙。はい。

鬼貫。おまへが自分で取つて來たのではあるまいな。

お妙。（あわて〻。）まつたくあのおかみさんが取つて來てくれたのでございます。わたくしもどうしようかと思つたのでございますけれど……。（涙ぐむ。）お父樣がさぞお寒からうと存じまして……。

鬼貫。さうか。（歎息する。）

お妙。どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。（手をつく。）

鬼貫。今更叱つても仕方があるまい。まあ、湯でも沸す支度でもしてくれ。（や〻嚴かに。）こんなことを再びするなよ。

お妙。はい。恐れ入りました。

（お妙は眼をふいて、湯を沸かす支度をする。鬼貫はしばらく爐の火を眺めてゐる。）

鬼貫、お妙。

お妙。はい。

鬼貫。米はなかつたな。

お妙。（澁りながら。）はい。

鬼貫。（さびしく笑ふ。）いや、聞くまでもない。米櫃に一粒の米もないことは今朝から判つてゐたのだ。おれもそれを知つてゐるから、今日もこの大雪のなかを一生懸命に歩いたよ。（袂より笛を出す。）この笛を吹いて、大阪の町中を……。ふだんはおれの嫌ひな色町の方角まで、根よく流してあるいたが、馴染の薄いものはやつぱり駄目だ。どこでも呼んでくれてがない。

お妙。（歎息する。）さうでございませうねえ。

鬼貫。それでも一軒の小さい米屋でよんでくれたので、隱居らしい老人の腰を揉んで、二十文の錢を貰つて來た。

お妙。（ほつとして。）それはよろしうございました。

鬼貫。それからもう一軒、質屋に呼び込まれて二十文、あはせて四十文がけふ一日の稼ぎだ。（財布より錢を出してみせる。）

お妙。それでもまあ結構でございました。

鬼貫。（又もや寂しく笑ふ。）結構かもしれな

い。今の身の上では四十文の錢でも尊い。これがなければ親子二人が飢死だからな。

お妙。まつたく尊いのでございます。（錢を財布に入れて押しいたゞく。）

鬼貫。いや、飢死の方がましかも知れない。おれも以前は大和郡山の藩中で、輕いながらも武家奉公をした身の上だ。若い時から俳諧がすきで、窮屈な武家奉公がどうも面白くないと思つてゐるうちに、おまへが十三の時に女房が死んだ。それから思ひ切つて武士を捨て、稚いお前の手をひいて、すみ馴れた郡山の土地を離れる時は、おれも流石にさびしいやうな心持がしないでもなかつた。「笠とりて跡ちからなや春の雨」……それからこの大阪へ出て來たが、好きな俳諧を弄んでゐるばかりでは迚も世渡りの道が立たないので、思ひ付いた導引按摩治、これならば兎もかくも親子の口糊はならうと、初めは自分の家に看板をかけて見たが、ひとりも療治をたのみに來るものがないので、仕方が無しに按摩の笛を吹いて、毎日町中を流してあるくのも、かぞへて見るともう足かけ五年になる。家財も着類もみな賣り盡して、殘つてゐるものは親子二人のからだばかりだ。

お妙。（慰めるやうに。）その不足勝のあひだにも、俳諧の道に心をかたむけて、月雪花を樂むのが風流の極意ではございませんか。

鬼貫。（うなづく。）それはおれも知つてゐる。

お妙。清貧を樂むとか、ふだんから仰しやるのは、こゝのことではございませんか。

鬼貫。清貧を樂む……。（みづから嘲るやうに。）おれも今まではさう思つてゐた。さう思へばこそ家代々の祿をすてゝ、自分の好きな俳諧師にもなつたのだ。しかし今のおれ達の身の上は、清貧などといふことを通り越して、あんまり慘め過ぎるではないか。月雪花を樂む風流の極意もこの世に生きてゐればこそで、おれ達はもう生命があぶない。おれ達はその日その日の糧にも困つてゐる。あしたの命もおぼつかないほどに飢に迫つてゐる。むかしの鬼貫ならば、この雪の日には是非とも一句あるべきところだが、今日の鬼貫は歌も俳諧もあらばこそ、どうしたら今夜の米代を稼げるか、あしたの薪代を稼げるか、どうしたら親子ふたりの露命をつなげるかと、唯それぱかりに屈託しながら、大雪に埋もれた師走の町を一日さまよひ歩いてゐたのだ。大和も寒いところであつたが、浪花の冬も身にしみるな。

（お妙はうつむきて悲しげに聽きゐたるが、やがて湯の沸きたるに心づきて、茶碗につぎて父にすゝめる。鬼貫は徐かに湯をのみて又考へる。）

鬼貫。おゝ、さうだ。たしか去年の暮であつた。やつぱりこんな寒い日であつたが、おれはこの行燈の灯をぢつと眺めてゐるうちに、つい一句浮んだ。「ともしびの花に春待つ庵かな」——その頃はおれの心にもまだ餘裕があつて、春を待つといふ樂みがあつたと見える。その樂みも今は消えた。

お妙。え。

（お妙はいよ／＼悲しげに父の顏を見つめる。鬼貫はうつむきて溜息をつく。雪風の音して、竹藪の竹二三本又もや折れる。その音に鬼貫は顏をあげて庭を見かへる。）

鬼貫。竹が折れたな。

お妙。さつきからたび／＼折れるやうでございます。

鬼貫。これほどの大雪に壓されては、強い竹も流石にたまるまい。堪へるだけは堪へても、積る重荷に壓潰されて、倒れるもある、折れ

るもある。（ぢつと思案して氣を換へる。）これお妙。今夜の米を買つて來なければなるまいな。

お妙。ほんにさうでございます。これからすぐに行つてまゐりませう。

鬼貫。油はどうだな。（行燈を見かへる。）いや、四十文の錢で色々の買物も出來まい。油が盡きたら雪あかりでも事は濟む。兎も角もその錢で米と青菜でも買つて來い。

お妙。はい、はい。

（お妙は財布を帶にはさみて起ち上り、奥より風呂敷を持ちて出づ。）

鬼貫。あゝ、いつまでも降ることか。日が暮れて路が惡い。氣をつけて行けよ。

お妙。はい。氣をつけてまゐります。

（お妙は父の破れ傘を持ち、着物の褄をからげて、素足にて雪のなかを行きかゝる。）

鬼貫。これ、素足では冷たからう。穿きにくからうが、おれの足駄を穿いてゆけ。

お妙。（少し躊躇して。）何、すぐそこでございますから‥‥。

鬼貫。すぐそこでも素足では堪るまい。構はずに穿いてゆけ。

お妙。では、拜借してまゐります。

（お妙は父の足駄をはき、傘をかたむけて下の方に立去る。雪風の音。鬼貫は立つて縁先より娘のうしろ影を見送りゐたるが、やがて行燈をよきところに直して、小さき古机を持ち出し、しづかに筆を執りて懐紙に何か書きはじめる。雪の音、木魚の音。下の方より俳諧師路通、三十餘歳、乞食の姿にて破れたる菰をまとひ、古手拭をかぶりて出づ。）

路通。（門よりのぞく。）この雪の日に難澁いたすものでございます。どうぞお慈悲に一文遣つてください。

鬼貫。（書きながら見かへる。）氣の毒だが難澁はお互ひの身の上で、一錢の施しも出來ない。どこか外の家へ行つてくれ。

（云ひすてゝ鬼貫は矢はり書きつゞけてゐる。路通は伸びあがりて内を覗き、なにか考へながら下の方に立去る。鬼貫はやがて書き終りて筆を措き、丁寧に紙をたゝみて机の上に置く。それより押入をあけて袋に入れたる脇差を取出し、鞘をはらひて行燈の灯に照し視るとき、下の方よりお妙は風呂敷包みをかゝへて歸り來り、門口より内をのぞきて俄にたちどまり、不安らしくうかゞひゐる。鬼貫は破れたる半屏風を逆に立てまはして、その蔭に這入る。その途端にお妙は傘も包みも投げ出して内へ駈けあがり、屏風を押倒して父の手に取りすがる。）

お妙。（聲をふるはせる。）お父さま。どうなさるのでございます。

鬼貫。お妙。もう歸つたのか。

お妙。こんな刃物を持つて、お前はどうなさるのでございます。

鬼貫。譯はそこに書いてある。それを讀めば判ることだ。

お妙。いゝえ、そんなものを讀んではゐられません。もし、お父さま。おまへは何で自害なさるのでございます。

鬼貫。叱つ、靜かにしろ。

お妙。いゝえ、靜かには出來ません。まあ、兎も角もその刃物をお渡しください。

（たがひに爭ふ間に、下の方より路通は再び出で來り、門口よりうかゞひゐる。お妙は一生懸命に父の手より刃物を奪ひとりて泣く。）

鬼貫。これ、靜かにしろと云ふのに‥‥。なる

ほど吃驚するのも道理だが、たとひ自害しないでも仕合はもう生きてはゐられない……。よく考へてみろ。さつきも云ふ通り、あしかけ五年の浪々に、わづかばかりの貯へは勿論、家財も着類もみんな賣り盡して、導引揉療治にまで身を落したが、それでも世渡りは出來ないで、先月から三度の飯も満足に食つたことがない。これで幾日もつゞいたら、親子ふたりが抱きあつて饑死するより外はあるまい。考へてみても怖ろしいことだ。

お妙。饑死するのが怖ろしさに、いつそ自害するゝ覺悟したら、なぜわたくしにも打ち明けて下さいません。お前に捨てゝ行かれたら、あとに殘つたわたくしは何うなると思ふのでございます。やつぱり饑死するより外は無いではございませんか。(泣く。)

鬼貫。いや、おまへと俺とは違ふ。お前はまだ若い身の上だ。いつそ自分一人ならば、どこへ奉公しても生きてゐられる。決して饑死するやうな心配はない。あの書置を人に見せれば、心ある人は憫れんでもくれるだらう。おれも好んで死にたくはない。それで今日まで我慢に我慢をして來たが、ほかの事とは譯が違つて、人間がどうしても食へないとなれば、死ぬよりほかに仕様がない。生きたいと云つても生きてはゐられないのだ。判つたか。

お妙。いゝえ、どうしても死ぬほどならば、まだ生きてゆく道があらうかと存じます。唯今のお話をうかゞひますと、わたくしをお救ひ下さるために、お父さまが命をお捨てなさるやうに思はれまして、あんまり悲しうございます。わたくしはそんな不孝者になりたくはございません。から云ふ時には、わたくしが死んでお父さまをお救ひ申さねばなりません。

鬼貫。馬鹿なことを……。お前を殺してどうなるものか。

お妙。ほんたうに死ぬのではございません。唯今お父さまは何處へ奉公してもと仰しやいました。その奉公にまゐるのでございます。

鬼貫。奉公にゆく……。

お妙。はい。(決心したやうに涙を拭く。)奉公にまゐります。と云つて、お父さまに御不自由はさせません。わたくしに代つて朝夕のお世話を致すやうな、下女でも下男でもお雇ひ入れなすつて下さいまし。

鬼貫。その日の暮しに困る人間が下女や下男を置く。そんなことがどうして出來ると思ふのだ。(娘の肩に優しく手をかける。)おまへは少し取逆上せてゐる。まあ、まあ、おちついてよく考へるが可い。

お妙。(父の膝に手をかける。)もし、お父様。わたくしは奉公にまゐりまして、お父様に御不自由のないやうなお金を工面いたします。

鬼貫。むゝ。

(鬼貫は腑に落ちぬやうに考へながら、娘の顔をぢつと視る。お妙の眼からは涙が流れる。)

鬼貫。(俄に思ひ付いて。)あ、おまへは勤め奉公にでもゆく氣か。

お妙。はい。(父の膝に泣き伏す。)

鬼貫。(あわたゞしく。)いけない、それは不可ない。お前にそんなことをさせられるものか。おれは今まで唯の一度もそんなことを考へたことが無かつた。おれはそんな無慈悲ではないのだ。(娘の手を攫んで叱るやうに。)おまへはどうしてそんな馬鹿な、間違つた考へを起したのだ。おまへが自分ひとりで考へ出したのか、それとも誰かに智慧をつけられたのか。むゝ、あの左官のおかみさんに教へられたのか。大事の娘に勤め奉公をすゝめるなどとは、彼奴、思ひのほかの不埒

な奴だ。

お妙。（父に縋る。）いゝえ、左官のおかみさんの知つたことではございません。誰に教へられたのでも無く、わたくしが不意と考へ付いたのでございます。

鬼貫。何日そんなことを考へたのだ。

お妙。けふの雪をながめながら、お父さまが外で嘸ぞ寒いおもひをしていらつしやるだらうと思ひまして……。（泣く。）わたくしのやうなものでも勤め奉公に出ましたら、いくらか纏まつたお金も手に這入らうかと、不意と思ひつきましたその矢先へ、お父様が……。（落ちたる脇差に眼をつける。）こんな覺悟をなさいましたので……。

鬼貫。いや、判つた。なるほどお前の容貌ならば、廓へ身をしづめて相當の金にもなるだらう。おれも樂が出來るかも知れない。併しそんなことがどうしてさせられるものか。

お妙。お許しはございませんか。

鬼貫。（又もや激しく叱り付ける。）えゝ、念を押すまでもない。たとひ餓死をすればとて、わが子に遊女の勤めをさせるなどとは、以ての外のことだ。これ、よく考へてみろ、おれはお前が可愛ければこそ、自分を殺してお前を生かさうとしてゐるのだ。そのお前を苦界に沈めて、俺がその金で樂々と生きてゐられるか。親の心、子知らずとはお前のことだ。あんまり腹が立つて涙も出ない。おれが奉公しろと云つたのは、たとひ水仕奉公にもしろ、質直な正しい奉公をしろと云つたのだ。おれは死んでもどうなつても構はない、せめてお前だけは人間らしく生かして遣りたいと、苦勞してゐる俺の心がわからないか。

お妙。それはよく判つて居りますけれども、わたくしはどうしてもお父様を見殺しにすることは出來ません。

鬼貫。どうしても身賣をするといふのか。（詰めよる。）

お妙。（恐れるやうに。）では、わたくしは思ひ切つて身賣を止めませう。

鬼貫。むゝ、止めるか。それが當りまへだ。

お妙。その代りお父さまも……。死ぬのを止めて下さいまし。

（鬼貫は默つてゐる。）

お妙。もし、この通りでございます。（手をあはせる。）

（鬼貫は矢はり考へてゐる。）

お妙。これほどに申しても聽いてくださらなければ、お父様よりも先に、わたくしが寧そ死んでしまひます。

（お妙はそこにある脇差を取りて、縁先へ走り出る。鬼貫はおどろいて押へる。）

鬼貫。これ、飛んでもないことをするな。

お妙。いゝえ、死なせて下さいまし。

鬼貫。はて、判らない奴だ。

（二人はたがひに爭ふところへ、路通は枝折戸より入り來りて聲をかける。）

路通。あ、待つてくれ、待つてくれ。

（鬼貫とお妙はおどろいて見かへる。）

鬼貫。（咎めるやうに。）お前は誰だ。なにしに來た。

路通。（笑ふ。）さつき來た物貰ひだよ。

鬼貫。物貰ひ……。

（路通は頬冠りを取る。）

鬼貫。（透して覗る。）や、路通か。

路通。久振りだな。

鬼貫。まつたく久振りだ。

路通。その久振りのお客様が來たのだ。まあ、おちついて話さうではないか。

（路通は縁に腰をかける。鬼貫は早くその刃物を納めろと娘に眼で知らせる。不意の客來にうろ〳〵してゐたお妙も一

先づ刃物を鞘に納める。）

鬼貫。（なつかしげに。）なにしろ、久しく逢はなかつた。そこは寒い。まあ、こつちへあがつてくれ。

お妙。むさ苦しうございますが、どうぞお通り下さいまし。

鬼貫。（爐を指さす。）こゝには火がある。寒さ凌ぎに早くあたるが可い。

（おたへは立寄つて路通の菰を脱がせ、その雪を拂つて遣る。）

路通。いや、構つてくださるな。（鬼貫に。）なまじひ温かい火などにあたると、却つてあとが寒い。宿無しはこゝで澤山だ。併しこゝらも随分積つたな。（庭を見まはし、そこに落ちたる笠と包みとに眼をつける。）や、こゝに色々抛り出してある。

（笠と包みとを拾ひて椽に置く。お妙は會釋して受取る。）

鬼貫。（おたへに。）米を買つて來たのか。

お妙。はい。

鬼貫。丁度よい。青菜の粥でも焚いて、お客さまに御馳走しろよ。

お妙。はい、はい。

路通。それは何よりありがたい。久振りで御馳走にならうかな。

お妙。唯今すぐに支度を致します。（包みを持ちて奥に入る。）

（鬼貫は茶碗に湯を汲んで來て、路通のまへに置く。）

鬼貫。郡山で別れて以來だから、もう足かけ六年になる。そのあとはどうした。

路通。この通りだ。はゝゝゝゝ。

鬼貫。再び昔の姿になつたか。

路通。おれはこの姿で東海道の松原に寢てゐるところを、芭蕉の翁に見つけられて弟子の一人に取立てられたが、人間並の生活はおれの性にあはないと見えて、師匠にさん〴〵叱られた上に、二三年前から再び元の宿無しだ。乞食を三日すれば忘れられないと云ふが、まつたくこの方が氣樂でいゝやうだよ。

鬼貫。さうかなあ。（考へる。）それでも生きてゐられるかなあ。

路通。この通り生きてゐるのが論より證據だ。しかし俺はおれで、おまへに俺の眞似は出來ない。かうして平氣で生きてゐられるのは、この路通ばかりだらうな。

鬼貫。（感心したやうに。）さうかも知れない。

路通。おまへは斯うして湯をくれたが、おれは滅多にこんなものを飲んだことはない。喉が渇けばすぐにこれだ。

（路通は庭の雪を手に掬つて飲む。）

鬼貫。腹の減ることはないか。

路通。あるな。一日に一度ぐらゐしか食はない時がある。方々の家の門に立つても一文の錢だつて容易に惠んでくれるものではない。現にこゝの家でも斷られたからな。（笑ふ。）

鬼貫。それはお前と知らなかつたからだ。堪忍してくれ。

路通。斷られるのは慣れてゐるから、さのみ驚きもしなかつたが、どうも聞覺えのある聲だと思つたから、また引返して來てみると、いや大變な騷ぎで、いくら無頓着のおれもこれには流石に驚いたよ。鬼貫といふほどの風流人が何うも無分別なことだな。

鬼貫。無分別と云はれても仕方がない。おれはもう切端詰つたのだ。

路通。それが無分別だといふのだ。切端詰つたと云つても、なんとか生きてゆく道があるだらう。娘の方がおまへより些と利口のやうだ。

鬼貫。（少しく激して。）おれは自分の娘を賣つても生きてゐようとは思はないのだ。

路通。（笑ふ。）まあ、おちついて聽くがいゝ。誰がおまへの娘を賣れと云つた。おれはこの通りの獨り者だが、たとひ子供があつたにしても、その子供を賣飛ばして金にするといふ無慈悲な料簡にはなれさうもない。おまへの心は俺にもよく判つてゐるよ。
鬼貫。おまへも察してくれるか。
路通。むゝ、察してゐる。そこで、おまへも命を捨てず、娘も身を賣らず、無事安穩に生きてゐられる智慧を授けてやらうと思ふのだが、どうだ、おれの云ふことをきくか。
鬼貫。おれも死なず、娘も身を賣らず。（疑ふやうに。）おまへにそんな智慧があるかな。
路通。あるから教へて遣らうといふのだ。一體おまへたち親子が死ぬるとか生きるとか騷いでゐるのも、つまりは食へないからのことだらう。
鬼貫。（うなづいて。）まつたくその通りだ。よくよくのことだと思つてくれ。
路通。さあ、そこだ。おれは獨り者の上に、人間もほんたうに風流に出來てゐる。第一に乞食馴れてもゐるから、一日に一度ぐらゐしか飯を食はないこともある。いや、その一度も滿足に食へないやうなこともある。それでも些とも驚かないやうに仕込まれてゐるが、おまへ達は素人だ。唯の人間だ。腹の蟲が意氣地なく出來てゐるから、一度も飯を食はせないとすぐにぐう／＼泣き出すといふ始末だ。おれならこの境涯で平氣でもゐられるが、お前たちには迚もその辛抱は出來まい。おまへ達に取つては腹の減るぐらゐ怖ろしいことはあるまい。そこで、おれが飯を食へることを教へてやる。親子ふたりが滿足に三度の飯さへ食へたら申分はない筈だ。
鬼貫。それは勿論だ。おれだつて別に榮耀や榮華がしたいと望むわけではない。たゞ無事に生きてゐられゝばいゝのだ。
路通。それには斯うするのだ。よく見ろ。
（路通は庭の雪の上に指にて書く。鬼貫は行燈を持ち出して、緣の上から覗く。）
鬼貫。（氣色を變へる。）なんだと思つたら飛んでもないことを……。貴樣はそれだから師匠にも破門されるのだ。痩せても枯れても俺も鬼貫だ。そんな馬鹿なことが出來ると思ふか。
路通。（平氣で。）それが惡いか。
鬼貫。善いか惡いか考へても判るではないか。實にどうも呆れた奴だ。そんな料簡だから貴樣は乞食の味が忘れられないのだ。もう貴樣とは口を利かないから、早く出て行け。
路通。（再び緣に腰をかける。）なにをそんなに怒るのだ。
鬼貫。えゝ、なんでもいゝから早く出て行け。さあ、出てゆけ。
（鬼貫は路通の腕をつかんで、緣より引出さうとする。）
路通。まあ、待つてくれ、待つてくれ。
（鬼貫は緣より下りて路通を引出さうとする。路通は雪のなかに倒れる。）
鬼貫。早くゆけ。宿無しの乞食野郞め。
（菰を取つて路通に投げつける。路通は頭から菰をすつぽりと被せられて倒れながらに高く笑ふ。）
路通。はゝゝゝゝ。さう無暗に腹を立つなよ。さういふ馬鹿固い料簡だから、大事の命を安つぽく捨てる氣にもなるのだ。
鬼貫。なんだ。（緣にある傘を把つて振りあける。）
路通。（菰から顏を出す。）まあ、待てといふのに……。おれの云ふことがおまへにはよく呑込めないのだ。
鬼貫。えゝ、ちゃんと判つてゐる。おれに芭蕉

翁の僞筆を書けといふのだ、僞物を作れといふのだ。

路通。さうだ。さうだ。（雪の上に起き上る。）おれの師匠の芭蕉翁の短册は、廉くも二分や三分には賣れる。相手によつては二兩も三兩も出すかも知れない。ところが、その直筆の短册といふものが世間に少い。

鬼貫。それは俺も知つてゐる。

路通。おまへは能筆だ。武家の出だけに、字をかくことは確かに巧い。そのおまへが芭蕉翁の僞筆をかけば、誰でも屹と一杯食はされる。それ、どうだ。短册を一枚かけば、少くも二分や一兩にはなる、おまへの導引按摩治とは些と譯が違ふだらうぜ。

鬼貫。たとひ幾らにならうとも、人の僞筆をかいて金儲けをする、そんな曲つたことが出來ると思ふか。

路通。それではおまへはやつぱり餓死をする積りか。それとも可愛い娘を賣るつもりか。

（鬼貫は默つてゐる。）

路通。それともむざ〳〵娘を殺して、おまへも一緒に死ぬ積りか。

（鬼貫は矢はり默つてゐる。）

路通。どう考へても俺の指圖に附いた方が利口らしいな。あゝ、あんまり饒舌つたので喉が渇いて來た。（庭の雪を掬つて再び飲む。）

鬼貫。幾度云つても同じことだ。おまへのやうな人間を相手にしてはゐられない。頼むから歸つてくれ。（縁にあがる。）

路通。頼まなくてももう歸るよ。宿無しでも寢るところは何處にかある。久振りで俳諧の話でもしようと思つたら、とんだ喧嘩になつてしまつた。はゝゝゝゝ。

鬼貫。（少し考へる。）むかしのお前なら、昔の俺なら、かう云ふ雪のふる晩に、しんみりとした心持で、ゆつくり俳諧の話でも出來るのだがな。

路通。今だつて出來るのだが……。まあ、いゝや。これでお別れとしよう。（菰を被て手拭をかぶる。）たしか其角の句にあつたな。「なき骸を笠にかくすや枯尾花」おれの姿もそれに似てゐるやうだな。

鬼貫。おれはあんまり好きではないが、江戸の其角はまつたく器用だな。

路通。些と小細工をするが、彼奴なか〳〵うまいことを云ふよ。

鬼貫。（釣り込まれて起つ。）おまへは此頃一句もないのか。

路通。このあひだの晩、長柄の堤の下に寢てゐると、夜中に霜が眞白よ。（坐る。）おれも眼が醒めてびつくりした。そこでつい一句出來たのよ。

鬼貫。なんといふ句だ。（縁を降りる。）

路通。「隱れ家や寢覺めさらりと笹の霜」

鬼貫。「隱れ家や寢覺めさらりと笹の霜」むゝ、面白い、面白いな。（これも思はず雪の中に坐る。）いや、おれもこの間の朝、長柄の堤を通つて一句浮んだよ。

路通。やつぱり長柄の堤で出來たのか。して、その句は……。

鬼貫。「川越えて赤き足ゆく枯柳」

路通。なるほど。（うなづく。）赤き足ゆくが見つけ所だな。面白いな。

鬼貫。面白いか。

路通。面白い。かうして見ると、鬼貫はまだ殺したくないな。（笑ふ。）

鬼貫。死にたくないな。

路通。いくら喧嘩をしても、おまへと俺とはやつぱり友達だ。あゝ、久振りで面白かつた。（起ちあがる。）どれ、歸らうか。

鬼貫。もう歸るか。（これも起ち上る。）

路通。好鹽梅に雪も止んで、薄月が出たやうだ。

(路通は下の方へあゆみ去る。雪を照す月の光青し。鬼貫はあとを見送りて縁に腰をかける。)

鬼貫。おれは一途に怒つたが、彼奴はやつぱり好いことを教へてくれたのかしら。

(鬼貫はぢつと考へてゐる。ばさ〳〵と雪の落ちる音して、竹藪の撓みし竹は雪をはね返して立つ。)

鬼貫。(見かへる。)おれも生きることを考へなければならないなあ。

(奥よりお妙出づ。)

お妙。(そこらを見て。)おや、お客様は‥‥。

鬼貫。お客はもう歸つた。

お妙。お粥がやうやく出來ましたのに。もうお歸りになりましたか。

鬼貫。さうだ、さうだ。むやみに腹を立てたので、粥のことをすつかり忘れてゐた。遠くは行くまい。追掛けて呼び戻して來てくれ。

お妙。はい、はい。

(お妙はすぐ庭に降りて行きかゝる。)

鬼貫。(よび止める。)これ、これ。路通に逢つたらばな、粥のことばかりでなく、まだ外にもお話がありますからと云つてな。

お妙。お話のこと‥‥。

鬼貫。あの‥‥。(少し小聲で。)短册のことだと云へばすぐに判る。

お妙。(不安らしく。)お父さま。

鬼貫。いゝから早く行つて來い。

お妙。はい、はい。

(お妙は出てゆく。鬼貫は彼の書置をひき裂きて爐に投げ込む。月の光あかるく、雪の竹の刎ねかへる音。)

――幕――

(大正十年十月作)

心太

川越の喜多院に櫻を觀る。ひとへはもう盛りを過ぎた。紫衣の僧は落花の雪を袖に拂ひつつゆく。

境内の掛茶屋に這入つて休む。なにか食ふものはないかと婆さんに訊くと、心太ばかりだといふ。試みに一皿を買へば、價八厘。

花を誘ふ風は梢をさわがして、茶店の軒も葭簀も一面に白い。わたしは悠然として心太を啜る。

天海僧正の墓の前で、わたしは少年の昔にかへつた。

(『歌すゞり』より)

天狗

廣島の町をゆく。初冬の日は陰つて寒い。忽ちに横町から天狗があらはれた。足駄を穿いて、矛をついて、どこへ行くでもなく、迷ふがごとくに徘徊してゐる。一人ならず、そこからも此處からも現はれた。みな十二三歳の子供である。

宿に歸つてきけば、けふは亥の子の祭だといふ。あまたの小天狗はそれがために出現したらしい。

空はやがて時雨となつた。神通力のない天狗どもは、雨のなかを右往左往に逃げてゆく。その父か叔父であらう。四十前後の大男は、ひとりの天狗を小脇に引つかゝへて駈け出した。

(『歌すゞり』より)

正雪の二代目

登場人物――大泉伴左衛門。千島雄之助。深堀平九郎。津村彌平次。本庄新吾。大塚段八。三上郡藏。山杉甚作。備前屋長七。下總屋義平。義平の母おかめ。大泉の娘お千代。大泉の女中およし。同じくおみつ。下總屋の若い者時助。同じく勘八。下總屋の小僧仙吉。下總屋の女中おとよ。番太郎權兵衛。與力井口金太夫。同心野澤喜十郎。町の娘おもと。同じくおきん。ほかに同心、捕手。町の男。女、子供など。

第一幕

（一）

江戸の末期、文久二年十一月下旬の午後。

芝の田町、軍學劍術の指南大泉伴左衛門の道場。正面の上のかたに寄せて、一段高いところに疊を敷き、手あぶりの火鉢を置き、うしろは大形の襖。下手寄りの正面は板羽目にて、面、籠手、木太刀、竹刀、薙刀などの稽古道具をかけ、下のかたには杉戸の出入り口がある。大きい角火鉢には大藥罐をかけ、そのそばには炭取りと茶碗などもある。

（深堀平九郎、二十七八歳、先生の代稽古をしてゐる體、稽古着に胴と籠手を着けただけにて袴をはき、うしろ鉢卷をして竹刀を持ち、高いところに腰をかけて見物してゐる。大火鉢のまはりには門弟の津村彌平次、大塚段八、三上郡藏の三人が稽古を待つ姿にて、煙草をのんでゐる。そのなかで彌平次だけは面と胴をつけてゐる。道場のまん中には本庄新吾と刀屋のせがれ長七とが道具をつけて稽古をしてゐる。幕あくと、二人は激しく擊ち合ひ、新吾はだん〳〵に危くなる。）

彌平次。（のび上る。）これはいけない。本庄の方があぶないぞ。

段八。町人に擊ち込まれるとは意氣地のない奴だ。

郡藏。まつたくあぶない。これ、本庄、しつかりしろ、しつかりしろ。

（そのうちに新吾は籠手を打たれて竹刀を落せば、長七は附入つて更に胴を擊つ。）

新吾。まゐつた。

平九郎。や、見事だ、見事だ。長七。貴公は此頃めつきりと上達したぞ。

長七。ありがたうございます。

（新吾と長七は面を取る。）

新吾。籠手を擊つたらもう好いではないか。つづいて胴へ擊ち込むとは何のことだ。

平九郎。はゝ、負け惜みをいふなよ。眞劍勝負と相成つたら、そんな理窟を云つてゐられるものか。なんにしても貴公の負けだ。

長七。稽古にかゝると何うも夢中になつていけません。どうかまあ堪忍してください。

平九郎。なに、本庄にあやまることがあるものか。劍術の極意は相手をずば〳〵と斬りさへ

すればいゝのだ。まして唯今の時世では、なん時どこで眞劍の勝負が始まらないとも限らないから、平生からその積りで稽古をして、道具はづれでも何でも構はぬ、手あたり次第に引つぱたくがいゝぞ。内の先生はその流儀だ。

長七。よく判りましてございます。

（新吾と長七は會釋して火鉢の前に來る。板戸をあけて、女中およし、おみつ出づ。およしは大藥罐を持つ。）

およし。お湯はございますか。

段八。（火鉢の藥罐を取つてみる。）いや、空だ。空だ。水をさしてくれ。

おみつ。炭がございますか。

郡藏。（炭取りを取る。）これも空だ。吝々しないで炭を一杯に持つて來てくれ。いくら我々でも寒いからな。

およし。でも、今は寒稽古の筈ぢやありませんか。

（およしは笑ひながら藥罐に水をさし、おみつは炭取りを持ちて去る。）

平九郎。さあ、今度はだれの番だな。

彌平次。手前です。

平九郎。むゝ、津村か。貴公は面をつけながら煙草を吞んでゐるのか。ひどく都合がいゝな。

彌平次。（進み出る。）これは講武所から流行り出した鶺鴒張りといふ煙管です。

平九郎。（煙管を取つてみる。）なるほどこれが鶺鴒張りといふのか。講武所の奴等も巧いものを考へ出したな。これならば面を着けてゐても、煙草が自由に喫へるから調寶だ。おれも早速買ふことにしよう。そこらの袋物屋に賣つてゐるか。

彌平次。えゝ、此頃はどこにでも賣つてゐますよ。

平九郎。はゝあ、色々の物が流行るな。（感心したやうに煙管をながめてゐる。）

彌平次。すぐにお稽古が願へますか。

平九郎。まあ、この煙管でおれに一服喫はせてみろよ。

（平九郎は大火鉢の前にゆきて煙草をのむ。下のかたの板戸をあけて、女中おみつは炭取りに炭を入れて出づ。）

おみつ。このくらゐあれば宜しいでせう。

段八。よし、よし。これだけあれば凍え死ぬ氣づかひはあるまい。

おみつ。皆さんは隨分寒がりなんですね。

（おみつは笑ひながら去る。）

新吾。こゝの家の女どもは兎角われ／＼を馬鹿にする奴が多いな。

平九郎。貴公達がいつでも手ひどく引つぱたかれるのを見てゐるからだ。はゝゝゝ。

（下のかたより伴左衞門の妹お千代、十八九歲、襷と手拭を持ちて出づ。）

お千代。どなたもお精の出ることでございますね。

平九郎。御覽の通り、この寒いのに汗をながして、みんな一生懸命に稽古を勵んで居ります。

お千代。それはお羨ましいことでございます。わたくしもどなたにかお稽古を願はれますまいか。

段八。お嬢さん。わたしがお相手をいたしませう。（起ち上る。）

郡藏。いや、お手前はあと廻しだ。けふは拙者がお嬢さんのお相手をすることに、昨日から決まつてゐるのだ。（これも起ちあがる。）

彌平次。これ、これ。手前はさつきから支度をして、こゝに出てゐるではないか。貴公達が道具を着けてゐるあひだに、手前が先づ一本お願ひ申すのだ。

平九郎。これは道具を早く着けてゐる者の勝だ。さあ、津村。貴公からお稽古を願ひなさい。

彌平次。よろこんで。承知いたしました。

（彌平次はあわてゝ籠手をつけ、まん中に出て待つてゐる。お千代は身繕ひして襷をかけ、手拭にて後ろ鉢巻をして、眞剣にかけたる稽古用の薙刀を持つて出る。）

お千代。では、お願ひ申します。

彌平次。手前もお願ひ申す。

（二人は會釋して立向ひ、お千代は薙刀、彌平次は竹刀にて撃ち合ふ。平九郎は煙草をのみながら見物してゐる。他の門弟等も一心にながめてゐる。そのうちに、正面の襖をあけて、主人の作左衛門、五十六歳、髪は合總、羽織袴にて出で、下手の杉戸をあけて、門弟の一人千島之助、二十二三歳、[illegible]を脱いたる姿にて出で、いづれも立つたまゝにこの勝負を見てゐる。やがて彌平次はお千代に撃たれる。）

彌平次。まゐつた。

長八。又負けたか。どうも弱い奴だな。

彌平次。お嬢さんは手前にはどうも苦手だとみえて、残念ながら今日も撃ち込まれた。

孫藏。貴公はお嬢さんの顔ばかり見てゐるから、身體中が隙だらけで、たちまちに撃ち込まれてしまふのだ。

平九郎。いや、それはかりではない。（笑ふ。）貴公がお千代さんに勝たうといふには、まだ一年以上の修業が要るな。

彌平次。なに、もう二月か三月も勉強すれば、左角の勝負までには漕ぎ付けてみせますよ。（面をはづして汗をふく。）

平九郎。はゝ、どうもみんな負け惜しみの強い連中ばかりだ。併しまあ、その積りで、せい／＼勉強してくれ。

作左衛門。（微笑く笑ふ。）いや、武藝を磨くものには、その負けじ魂が大切だ。女に負けて恐れ入つてゐるやうではいけない。二月三月の後といはずに、明日にもお千代に撃ち勝つ工夫をしなければならんぞ。

彌平次。かしこまりました。

（作左衛門は坐る。彌平次は火鉢の前に坐る。お千代も鉢巻と襷を取る。）

長七。（進み出づ。）先生、お寒いことでございます。

作左衛門。おゝ、長七か。忙がしい中でよく精が出るな。

長七。仰しやる通り、このごろは商賣の方が夜も晝も忙がしうございますので、思ふやうにお稽古にも出られません。

作左衛門。この時節ではおまへの商賣の忙がしいのは當りまへだ。わたしが頼んで置いた刀の研ぎもなるたけ早く仕上げて貰ひたいな。

長七。職人に申付けまして、せい／＼念を入れて研がせて居りますから、どうぞ明日までお待ちをねがひます。

作左衛門。あの刀は先祖傳來の郷義弘だ。あれでなければ、まさかの時に思ふやうに腕を揮ふことが出來ないからな。念を入れて研がせてくれ。

長七。はい、はい。もう少しお稽古を拜見いたしてゐたいのでございますが、何分にも店が忙がしうございますので、これで御免を蒙ります。

作左衛門。むゝ。おまへは町人であるから、武藝も大事だが、商賣も大事だ。忙がしい時には遠慮なく歸るがいゝぞ。（左右を憚るやうに。）こゝで詳はしい事は云はぬが、ゆうべは色々の心配をかけたな。

長七。その御挨拶では恐れ入ります。では、どなたも御免ください。

（長七は伴左衛門とお千代に會釋し、更に一同にも會釋して、下のかたへ行きかゝる。）

平九郎。これ、これ。おれも二三日うちに磨ぎに遣るから、宜しく頼むぞ。

長七。いつでもお持ち下さい。

（長七は板戸をあけて去る。）

雄之助。（長七のあとを見送る。）町人にしては律儀よく精が出る。實に感心な男だな。

伴左衛門。まつたく町人にしては、頼もしい男だ。それでも長七は商賣が刀屋だから、武藝に縁の無いこともないが、あの義平などは薪屋の倅でありながら、劍道執心とは面白いな。

新吾。ふだんから薪を割り馴れてゐるので、あいつの腕つ節はなか／＼強うございます。

伴左衛門。むかしから下手な劍術を薪割り劍術といふが、義平の腕前はなか／＼薪割りではないやうだ。貴公たちも油斷してゐると、町人どもに叩きまくられるぞ。

お千代。長七さんや義平さんのほかにも、この道場へ通つて來る町人衆はまだ六七人ございますが、どの人もみな精が出るには感心して居ります。

雄之助。町人や職人までが自然に武藝を勵むといふのも、やはり時世ですな。

平九郎。たしかに時世だよ。かういふ穩かならぬ時世になつては、武士は勿論、町人でも職人でも唯安閑としてはゐられない筈だ。

伴左衛門。（うなづく。）さうだ、さうだ。躄か腰拔けならば知らず、五體滿足の人間がたゞ安閑としてはゐられない時節だ。ふだんから云つて聞かせる通り、夷狄の黒船がそれからそれへと押掛けて來て、港を開けの、交易をしろのと、得手勝手のことをいふ。それを唯一戰に撃ち拂つてしまへばよいものを、意氣地のない幕府の役人どもは、揃ひも揃つた腰ぬけばかりで、相手の云ひなり次第に、先づ神奈川の港を開く。つゞいて江戸に公使館や領事館を置いて、わが神國を夷狄に蹈みにじらせるとは何の事だ。苟くも大和魂のある者が、それを默つて見てゐられると思ふか。

雄之助。それがために櫻田門の一件も起つたのでございますが、それでも幕府はまだ眼が醒めないのでございませうか。

伴左衛門。（鐵扇を握つて罵るやうに。）往來なかで天下の大老の首を取られても、まだ眼のさめないやうな奴等を相手にして、議論は無益だ。もう斯うなつたら、腰ぬけの、骨無しの、弱蟲の、意氣地無しの、徳川幕府などを頼まずに、めい／＼の腕の力で攘夷を實行するより外はない。口の先でばかり喚鳴つてゐてはいけない。（自分の腕をたゝく。）この腕を働かせなければ駄目だ。この腕に物を云はせなければ何の役にも立たないのだ。その鬱勃たる慷慨悲憤の精神が諸人の腹の底からうづ巻きあがつて、武士は勿論、町人職人までが自然に武藝を勵むやうになつたのは、日月いまだ地に墜ちず、神州男兒の意氣衰へざる證據だと思へば、實に頼もしい、實に愉快だ。はゝゝゝゝ。（鐵扇をひらいて胸を煽ぐ。）

お千代。さういふお話をうかゞひますと、女のわたくし共でも何だか此の胸が躍るやうでございます。

雄之助。いつもながら先生の悲壯激越の御議論をうけたまはつて居りますと、わたくしも總身の血が湧きあがるやうに思はれます。

平九郎。貴公達でさへ其通りだ。まして拙者のやうに多年先生の御指南をうけてゐる者は、

血が湧くの、胸が躍るのといふのを通り越して、腹のなかには絶えず大あらしが起つてゐて、腸が引つくり返りさうだ。（いよいよ激昂した様子で。）先生、是非とも攘夷を實行してください。

作左衛　それは云ふまでもないことだ。身不肖ながら大泉作左衛門橘の正道、一家相傳の軍學を教へ、あはせて劍術を指南して、世間からは由井正雪の二代目であるなどとも噂されてゐるが、拙者は決して正雪のやうな謀叛を企てるのではない。わが日本國の危急存亡を救ふがために、まごころを盡して攘夷の議論を唱へ、更にそれを實行しようと考へてゐるのだ。おまへ達もかならず思ひ違ひをしてはならんぞ。いゝか。

一同。（聲をそろへて。）わかりました、判りました。

作左衛。判つてゐるなら諄くは云ふまいが、みんなもよく覺えて置け。（更に聲を勵まして。）うかうかしてゐると、わが日本國はほろびるぞ。それを救ふには攘夷のほかは無いのだ。

一同。はあ。

（下のかたの板戸をあけて、下總屋義平、二十二三歳、薪屋のせがれの拵へ、風呂敷づつみを抱へて出づ。）

義平。皆さん、今日は……。（一同に會釋して進み出る。）先生、お寒うございます。

作左衛。義平、まゐつたか。町人のおまへ達はよく寒い寒いといふが、この道場では寒いの暑いのといふのを禁じてある筈だ。かりにも武藝を學ぶもの、殊にこの天下多事の際にあたつて、寒いの暑いのと弱いことを云つてゐられるか。なん時でも火水のなかへ飛び込むほどの覺悟がなければならない。たとひ町人でもこの道場に足踏みをする以上、武士のたましひを持たなければならんぞ。

義平。恐れ入りましてございます。つい口癖になつて居りますので、詰まらないことを申上げて御機嫌を損じました。なに、わたくしは些とも寒いことはございません。今まで空つ風の吹く店先へ出て、襦袢一枚で松薪を二十把ほども打ち割つてまゐつたのでございます。薪割り劍術だなどと皆さんにひやかされますが、どうして、どうして、わたくしの腕つ節はなかなかしつかりしたものでございます。

平九郎。今も噂をしてゐたところで、おまへの腕の強いことは、おれ達もよく知つてゐる。お前や刀屋の長七は町人ながらも頼もしい奴だと、先生も褒めてゐられるくらゐで、それだけに又餘計の小言もおつしやるのだ。有難いと思はなければならないぞ

義平。さう仰しやられるといよいよ痛み入ります。町人ながらも何かのお役に立ちますやうにと、せいぜい勉強いたす積りでございますから、何分よろしく願ひます。

作左衛。そこで、けふは誰と立合はせるかな。

平九郎。（雄之助に。）千島、貴公は今朝から誰とも立合はないやうだな。

雄之助。午まへは他出して居りましたので、唯今はじめて道場へ這入つたのでございます。

平九郎。では、丁度いゝ。貴公、この義平と立合はつしやい。

雄之助。承知しました。では、支度をしてまゐります。（下のかたに去る。）

（義平は風呂敷づつみより稽古着や袴を出して着かへる。）

作左衛。おれはこれから急ぎの手紙を二三通書かなければならないから、しばらく奥へ行つてゐるぞ。

お千代。お手紙をお書きになりますか。

伴左衛。むゝ。神奈川宿の同志の者から密書が來た。京都からも來てゐる。すぐにその返事をかいて、江戸表の形勢をくはしゝ知らせて遣らなければならないのだ。

お千代。(不審さうに。)そんなお手紙がいつ參りました。

伴左衛。(すこし口籠つて。)え、午まへに來たのだ。

お千代。わたくしは一向存じませんでしたが……。

平九郎。いや、それは早飛脚が持つてまゐつたので、拙者がうけ取つて、すぐに先生におとどけ申した。

お千代。(まだ不審らしく。)あの、神奈川宿と京都から早飛脚が……。

伴左衛。(叱るやうに。)なにも珍らしがることはない。そんな密書はたび〲來るのだ。(起ちながら平九郎をみかへる。)平九郎、あとで鳥渡來てくれ。

平九郎。はあ。

(伴左衛門は奧に入る。)

お千代。わたくしはこの通りの生れ付きで、よく〱うつかりしてゐると見えまして、そんな密書がたび〲參ることを今まで些とも知らずにゐました。

平九郎。勿論密書の儀でござれば、それを存じてゐるのは拙者一人、先生が口外せらるゝのも今日がおそらく初めてでござらう。(門弟等に。)貴公たちも決して他言してはならんぞ。

彌平次。(小聲で。)やはり攘夷の一件ですか。

平九郎。(意味ありげに。)時節が來れば自然にわかることだ。まあ、まあ、默つて先生にお任せ申して置け。先生には深いお考へがあるに相違ないのだ。

(義平をはじめ、門弟等は顏をみあはせて、なんとなく緊張した氣分になる。下のかたより、雄之助は稽古着をつけて出づ。)

雄之助。(義平に。)お待たせ申した。

(雄之助は面籠手の道具をつける。義平も面を着ける。奧にて手をたゝく音がきこえる。)

平九郎。先生が手を鳴らしてゐられる。拙者を呼ばれたかな。

お千代。兎も角もわたくしが行つてみませう。

平九郎。いや、拙者に相違ない。すぐにまゐりませう。

(平九郎は急いで正面の奧に入る。雄之助は道具をつけ、竹刀を持つてまん中に出る。義平も竹刀を持つて出る。)

雄之助。貴公はこのごろ大分上達したさうだから、遠慮なしに思ひ切つて擊ち込むぞ。

義平。お手柔かにねがひます。

(二人は竹刀にて擊ち合ふ。お千代と門弟等は見物してゐる。)

(二)

大泉家の奧の間。上のかたに床の間、これに「天地有正氣」と大きく書いたる掛地をかけ、時節の花を生け、軍書のやうなものも積んである。それにつゞいて掬水の縁を付けたる出入りの襖。庭には松などの立木がある。左右は建仁寺垣。

(大泉伴左衛門は軍書の卷物をのせたる机を横にし、大きい手あぶり火鉢を前にして、敷皮の上に坐つてゐる。下のかたの縁づたひに深堀平九郎出づ。)

平九郎。御用でございますか。

伴左衛。むゝ。(顋で招く。)薪屋のせがれは稽古をしてゐるか。

平九郎。千島と立合つて居ります。
伴左衞。（苦々しげに。）おれは默つて聽いてゐたが、なぜ千島などと立合はせるのだ。千島のやうな正直者は遠慮會釋なしに撃ち込むではないか。
平九郎。はあ。（頭をかく。）ついうつかりして飛んだことを致しました。刀屋のせがれには本庄を立合はせましたが……。
伴左衞。本庄が負けたか。
平九郎。はあ。
伴左衞。それでなければいけない。いつも云ふ通り、相手は町人の素人だ。なんでも弱さうな奴を出して、向うに勝たせて置けばいゝのだ。（舌打ちして。）千島の奴め、本氣になつて無暗に相手をなぐるだらうな。
平九郎。あの男のことですから遠慮なしに打んなぐるかも知れません。まつたく氣のつかない事をして恐れ入りました。（少しく聲をひそめる。）そこで、あの刀屋のせがれは例の軍用金を持つてまゐりましたか。
伴左衞。ゆうべ竊と持つて來た。
平九郎。（笑ひながら。）幾ら持つてまゐりました。
伴左衞。五十兩持つて來た。刀屋はなか〳〵大身代だが、長七はまだ部屋住みだから、百兩二百兩などとまとまつた金は自分の自由にはならないらしい。
平九郎。それでも五十兩ならば上出來の方でございませう。今度は蒔屋の番でございますな。
伴左衞。一と口に蒔屋といつても、下總屋はこちらでも古い店で、商賣も手廣くしてゐる。地所や家作も澤山に持つてゐる。殊におやぢは先頃死んでしまつて、今ではあの義平が跡取りだから、刀屋のせがれとは違つて錢金が自由になる。どうしても彼奴からは二三百兩ぐらゐは引き出さなければならない。その矢さきに千島のやうな奴を立合はせて、色氣も無しにぽん〳〵打んなぐらせては、どうも工合が惡いではないか。
平九郎。（いよ〳〵恐縮して。）はあ。ではこれからすぐに參つて、ふたりの立合ひを止めさせませう。（起ちかゝる。）
伴左衞。むゝ。本庄を又出すわけにも行くまいから、三上を出せ。あいつは口ばかりで、腕は弱いからな。
平九郎。はい、はい。
（平九郎はあわてゝ引返さうとするを、伴左衞門は呼びとめる。）
伴左衞。待て、待て。その勝負が片附いたら、義平をこゝへよこしてくれ。
平九郎。軍用金のことはまだお話しにならないのですか。
伴左衞。このあひだも鳥渡ほのめかして置いたが、まだ本當の掛合ひには及んでゐないので、これから改めて富樓那の辯舌を揮はなければならないのだ。
平九郎。正雪の二代目といふ先生の舌三寸で、百兩が二百兩になるか。
伴左衞。おれが得意の楠流で說得して、二百兩がまた三百兩になるか。
平九郎。三百兩がまた五百兩になるか。
伴左衞。えゝ、貴樣も隨分慾張つた奴だな。
平九郎。そこが楠流のお仕込みでございます。
伴左衞。無駄を云はずに早く行け、行け。
（平九郎は早々に下のかたへ去る。）
伴左衞。（あとを見送る。）あいつ小利口さうで、とき〳〵に仕損じを遣るので困る。おれの道場にゐる奴等にはどうして馬鹿が多いかな。
（奥の襖をあけてお千代出づ。）

お千代。あの、深堀さんは‥‥。
伴左衛。平九郎は今そつちへ行つたが‥‥。千島と義平はもう濟んだか。
お千代。はい。
伴左衛。義平が負けたらうな。
お千代。（笑ふ。）それは知れたことでございます。初めから段が違ふのですから、まるで勝負にはなりません。眞向からお面をしたゝかに撃たれて、義平さんは泣きさうな顏をしてゐました。
伴左衛。（舌打ちして。）大方そんなことだらうと思つた。千島の奴め、馬鹿正直だからな。
お千代。なにが馬鹿正直でございます。たがひに立合つた以上は眞劍勝負も同様で、撃つか撃たるゝかの二つより外はないではございませんか。
伴左衛。理窟を云へばそんなものだが、そこには又、倫流の駈引もあるものだ。
お千代。では、わざと勝を讓つてやれとでも仰しやるのでございますか。倫流はそんな卑怯なものでございますか。
伴左衛。いや、さう云ふわけでもないが‥‥。
お千代。では、どうして千島さんが馬鹿なのでございます。勝つべき勝負に勝つたのが、なぜ馬鹿でございます。そのわけを屹と伺ひませう。
伴左衛。おれもあいつを馬鹿とは云はない、ただ馬鹿正直な奴だと云つたのだ。
お千代。馬鹿も馬鹿正直も同じことではございませんか。
伴左衛。うるさいな。お前はなぜそんなに千島の肩を持つて、おれに食つてかゝるのだ。
お千代。さういふあなたは、なぜ千島さんを馬鹿だと仰しやるのでございます。わたくしには其譯が判りません。
伴左衛。（じれる。）判らなければ默つてゐろ。あんな奴は馬鹿にきまつてゐる。馬鹿だ、馬鹿だ。この道場で一番の大馬鹿野郎だ。
お千代。もし、お兄いさま。
（お千代は屹となつて詰めよれば、伴左衛門はその顏をみて、急に氣がついて笑ひ出す。）
伴左衛。はゝゝゝゝ。まあ、さう向氣になるなよ。今のは冗談だ、冗談だ。はゝゝゝ。そこで、今こゝへ蒔屋のせがれが來るは。
お千代。義平さんが參るのでございますか。では、わたくしは御遠慮申しませう。（つんとして出かゝる。）
伴左衛。いや、おまへはこゝにゐて呉れた方がいゝのだ。おれは蒔屋のせがれに頼むことがあるから、お前もそばから口を添へて一緒に頼んでくれ。おまへが頼めば、あいつは屹と承知するよ。
お千代。わたくしが頼めば、どうしてあの人が承知するのでございます。
伴左衛。（意味ありげに笑ふ。）まあ、いゝから俺の云ふ通りになつてくれ。
お千代。さうして、なにを頼まうとなさるのでございます。
伴左衛。（小聲で。）實は軍用金の一件だ。
お千代。軍用金‥‥。
伴左衛。黑船燒撃、異人館燒撃、それらの軍用金が要るではないか。
お千代。（うなづく。）あゝ、そのことでございますか。
伴左衛。何事も御國のためだ。そのつもりでお前も加勢してくれ。
お千代。（凜然として又うなづく。）はい、判りましてございます。
（お千代は俄に緊張した顏色で形をあらためる。下のかたの緣づたひに下總屋義平出づ。）

義平。先生。お呼びになりましたか。
伴左衛。おゝ、義平。もつと近く来てくれ。けふは折入つてお前に内談がある。
義平。はい。
お千代。どうぞ御遠慮なくお進みください。
義平。はい、はい。
（義平はお千代の顔を横目に見て、伴左衛門の前にゐざり寄る。）
伴左衛。（形をあらためて。）扨、ほかでもないが、彼の黒船の一件だ。それはわたしからも毎々云ひ聞かせてあるから、おまへ方も薄々承知の筈だが、このごろの世のありさまを見るに、どうしても此儘では済まされない。一度は大風雨を起さなければ駄目だ。近いうちに時機をみて、攘夷の手はじめに先づ異人館の襲撃を行る。
義平。（これも緊張して。）異人館の襲撃……。
伴左衛。今だから云ふが、去年の六月、高輪の東禅寺へ斬込んだのも、みんなわたしが同志の者だ。併しあんなことではいけない。今度はもつと大がかりに遣る。
義平。もつと大がかりに……。
伴左衛。叱つ、大きな聲をしてはならない。そこで先づ江戸にある異人館を一度に焼き拂つて、それから水陸二手に分かれ、陸をゆく者は神奈川横濱へ押寄せて地雷火を仕掛ける。海をゆく者は横濱の沖へ乗り出して、そこにかかつてゐる黒船に大筒小筒を撃ちかける。水陸挟み撃の手筈は已に整つてゐるのだ。
義平。して、それはいつの事でございます。
伴左衛。なにを云ふにも大事の企てであるから、その時機をみるのが大切だ。はやまつて仕損じては、折角の苦心も水の泡となるからな。
義平。御もつともでございます。
伴左衛。したがつて、その時機はいつとも決まつてゐないが、遠からず實行する筈になつてゐる。勿論わたし達ばかりではない、ほかにも同志の攘夷家が大勢あつて、先頃から内々でその打合せをしてゐるのだ。
義平。先刻の密書といふのもそれでございますか。
伴左衛。さうだ。就ては何をいふにも先立つものは金で、その軍用金に困つてゐる。（ため息をつく。）勿論それ／＼に手をまはして調達してはゐるものゝ、何分にも大仕事で莫大の金が要るからな。（相手の顔をぢつと見る。）なか／＼思ふ半分も出來ないのだ。
義平。（同情するやうに。）さうでございませうなあ。その御苦心は幾重にもお察し申します。
伴左衛。察してくれるか。そこで、どうだらう。甚だ申しにくい儀ではあるが、何事も御國の爲だと思つて、おまへから三百兩ばかり都合してはくれまいか。
義平。三百兩……。（少しかんがへてゐる。）
（伴左衛門はお千代に眼くばせして、何か云へと指圖する。）
お千代。もし、下總屋さん。
義平。はい、はい。
お千代。今もお聞きの通りの次第で、兄も一生懸命の場合でございます。わが日の本は神國の御末、その神國が夷狄に汚されるのを、唯おめおめと眺めては居られません。女でこそあれ、わたくしも兄とこゝろを一つにして、御國のために何かの御奉公をいたしたいと考へて居ります。それにつけても先に立つのは軍用金のことで、わたくし共も明け暮れに心を痛めて居るのでございますから、そこをよくお察し下さいまして……。
伴左衛。われ／＼の企ては、彼の由井正雪の謀叛や大鹽平八郎の一揆などゝ同しやうに

考へられては困る。くどくも云ふやうだが、わが日本國のために夷狄を撃ち攘ふのであるから……。

義平。判つて居ります。わかつて居ります。先生のお企てが由井正雪や大鹽平八郎と違つてゐることは、わたくしにもよく判つて居ります。そこで、唯今わたくしが考へて居りましたのは、先生の仰しやつた三百兩、そのくらゐの金では何程のお役にも立つまいかと存じられますので……。

お千代。でも、三百兩といへば大金ではございませんか。

義平。勿論大金には相違ございませんが、非常の場合に三百兩ぐらゐでは……。せめて五百兩ぐらゐは差出しませんでは……。

伴左衛。え、五百兩……。（お千代と顔をみあはせる。）おまへが五百兩の金を都合してくれるか。

義平。微力ではございますが、そのくらゐのお役を勤めませんでは、わたくしの氣が濟まないやうに存じられます。先生が三百兩と仰しやるものを、こちらから五百兩に纏り上げましては、甚だ失禮のやうでもございますが、どうぞわたくしの心のうちも御推察下さいまして、枉げて五百兩の金子をお納め下さるやうに……。もし、お孃さま。あなたからも先生にお取りなしを願ひます。

伴左衛。（膝を打つて。）いや、あつぱれ見あげたこゝろざしで、伴左衞門も感服いたした。三百兩と申し出しても、あるひは百兩か二百兩に値切らるゝことかと竊かに危んで居つたところ、却つてそちらから五百兩に纏りあげるとは……。あゝ、これぞまことの大和魂、日本人は皆かうなくてはならぬことだ。拙者もおぼえず感涙に噎せ申した。同志の人々も定めて滿足であらう。（一同に代つて拙者から、お禮申すぞ。（一禮してお千代をみかへる。）どうだ、お千代。町人のなかにも下總屋のやうな天晴れの男もある。わたしも好い弟子を持つて、同志の人々にも肩身が廣いぞ

お千代。ほんたうに嬉しいことでございます。わたくしからもこの通り、お禮を申上げます。（手をつく。）

義平。いえ、いえ。さう仰しやられては痛み入ります。（誇るがごとく。）一寸の蟲にも五分の魂とやらで、わたくしのやうな者でも大和魂の半分ぐらゐは持ち合せて居りますよ。はゝゝゝゝ。

伴左衛。して、その金はいつ屆けてくれるな。

義平。どうぞ明日のゆふ刻までお待ちを願ひたうございます。

伴左衛。おまへを疑ふわけではないが、餘りに呑み込みが早いので……。（念を押すやうに。）これ、義平。よもや間違ひはあるまいな。

義平。（笑ふ。）忠臣藏の口眞似ではございませんが、下總屋義平も男でございます。

伴左衛。いや、それで拙者も安心いたした。

お千代。かへすがへすも有難うございます。

義平。（お千代の顔をみる。）先生をはじめ、お孃さまにまで、そんなに御丁寧の御挨拶をうけたまはりますと、五百兩はおろか、身上をみんな振つても差出したくなります。

伴左衛。それは又おひおひに頼むかも知れないが、差當りは約束だけの金をな。

義平。はい、はい。その御念には及びません。

（下のかたより緣づたひに平九郎が一枚の名札を持ちて出づ。）

平九郎。先生、こんな人物がまゐりました。

伴左衛。（名札をうけ取る。）山田甚作……。はて、聞いたやうな名前だな。

平九郎。なにか内密の用件で暫時御意得たいと

申すことでございます。

伴左衛。内密の用件……。(かんがへる。)まさかに留守も使へまい。兎もかくも通してみろ。

平九郎。はい、はい。(引返して去る。)

義平。お客来にございましては、わたくしはもうこれでお暇申します。

伴左衛。もう帰るか。用がなければ道場で遊んで行つたがよからう。(お千代に。)おまへは茶の支度をしろ。

(お千代は立つて奥に入る。義平はそのうしろ姿を見送つてゐる。伴左衛門は笑ひながらそれを見てゐる。義平は不圖みかへりて伴左衛門と顔をみあはせ、極り悪さうに會釋して早々に立去る。伴左衛門はやはり笑つてゐる。やがて戻つた平九郎は山杉甚作を案内して出づ。甚作は二十四五歳、ぶつ裂き羽織に小倉の袴をはき、朱鞘の大刀を持ち、少しく酒に醉つてゐる。)

平九郎。御案内申しました。

甚作。先日品川でお目にかゝつた中國の藩士、山杉甚作源の頼經でござる。(云ひながら座に着く。)

伴左衛。おゝ、先日御意得申した山杉甚作どのでござつたか。好うこそお尋ねくだされた。その節は場所柄とて碌々と御挨拶も致さなんだが、拙者は大泉伴左衛門、一名は正達、あらためてお見識りくだされ。平九郎、おまへも此のお方を存じてゐる筈だな。

平九郎。實はよく存じて居ります。(甚作に。)その節は飛んだ失禮をいたしました。

甚作。(笑ふ。)いや、拙者こそ散々の亂暴、重々の失禮、なんとも申譯がござらぬ。しかし場所が場所でござれば、おたがひに無禮咎めも相成るまい。はゝゝゝゝゝ。

平九郎。(笑ふ。)今日も大分御機嫌がよいやうでございますな。やはり南の方でございますか。

甚作。南とは云はず、北とは云はず、いはゆる南船北馬といふわけで、ゆく先々を飲みあるく。これでなければ豪傑の英氣を養ふことは出來ませんぞ。いや、拙者ばかりでない。御貴殿たちが先日品川で豪遊をきはめて居られたのも、おなじく英氣を養ふ爲でござらう。違ひますかな。

(伴左衛門と平九郎は顔をみあはせて苦笑ひする。)

伴左衛。その節は武士にもあるまじき[illegible]の體を御覽に入れて、面目次第もござらぬ。

甚作。いや、いや、今日のやうな世の中には、放埒も結構、亂暴も苦しうござらぬ。つまりは大石内藏助の廓通ひも同じこと、いや、いざといふ時に天下の眼をおどろかすやうな大仕事をいたせば、それで立派に武士の[illegible]を果したといふものでござる。

平九郎。まつたく左樣かも知れませぬな。

(奥よりお千代は茶を運んで出づ。)

お千代。(甚作に會釋して。)粗茶でございます。

甚作。いや、おかまひ下さるな。(お千代をみて。)これはなか〳〵の美人。御主人の御愛妾でござるか。

伴左衛。いや、それは拙者の妹、千代と申す不束者、お見識り置きをねがひます。

甚作。おゝ、妹御でござつたか。これは失禮。拙者は山杉甚作と申す田舍侍、今後はよろしくお賴み申す。

(甚作とお千代は挨拶する。)

甚作。就ては早速ながら御無心がござる。拙者は醉ざめで喉が渇いてなりませぬ。何か大きいものに冷たい水を一杯頂戴いたしたうご

ざるが……。

お千代。はい、はい。かしこまりました。

（お千代は奥に入る。平九郎は伴左衛門の顔をみて、自分もあちらへ行からかといふ。伴左衛門うなづく。）

平九郎。では、わたくしも暫時あちらへ参つて居りますから、御用があらばお呼びください。

（平九郎は二人に會釋して、下のかたへ去る。）

甚作。道場はなか〳〵御盛んのやうでござるな。世間の噂を聞きますれば、御貴殿は劍道のほかに軍學をも指南せられ、由井正雪の二代目と呼ばれてゐると申すこと。拙者も今後は何かにつけて御教訓にあづかりたいと存じてをります。

伴左衛。（得意らしく。）正雪の二代目などとは及びもつかぬこと。由ない噂を立てられて、拙者も却つて迷惑して居ります。御覽の通りの町道場で、あまりに盛んと申すほどでもござらんが、天下の形勢不穏になるに連れて、このごろは武術の稽古に通ふ者が殊に殖えてまゐりました。

甚作。失禮ながらどのくらゐの御門人を御指南でござるな。

伴左衛。（傲然として。）以前は二三百人でござつたが、只今では五百人を少々越えて居ります。

甚作。なに、五百人以上……。（すこし驚く。）それは本當でござるか。

伴左衛。武士にいつはりはござらぬ。夜も晝も拙者の道場に竹刀の音の絶え間はなく、なにぶんにも手狹でござるに因つて、近いうちに町内の角屋敷を買ひ取り、道場を唯今の三倍ぐらゐに取擴げようと存じて居ります。

甚作。ふむう。（いよ〳〵驚いた體。）それはまつたく御盛んのことでござるな。して、その五百人あまりの門弟衆のうちで、驚破と云ふとき先生と生死を倶にすると云ふやうな者が、およそ幾人ぐらゐござるかな。

伴左衛。いづれも義氣金鐵のごとき者共ばかりでござれば、拙者が一たび采をふれば、誰も彼も皆よろこび勇んで、火水のなかへも飛び込みます。

甚作。では、五百餘人の門弟が、いづれも先生と生死を倶にして、喜び勇んで火水のなかへも……ふむう。（又もや感歎する。）さりとはお羨ましい。御貴殿が日頃のお仕付け方も思ひやられて山杉甚作源の頼經、まことに感服仕つた。いや、恐れ入つてござる。（手をつく。）

伴左衛。はゝ、左樣に御賞美くだされては、拙者こそ却つて恐れ入る。どうぞお手をお上げくだされ。

（奥よりお千代は大きい湯呑みを盆に乘せて出づ。）

お千代。お冷を汲んでまゐりました。

（甚作はだまつて手をついてゐる。お千代は不審さうに兄の顔をみる。）

お千代。（小聲で。）泣いていらつしやるやうでございますね。

（伴左衛門は微笑みながら、そのまゝ置いてゆけと眼で知らせる。お千代はうなづいて竊と奥に入る。）

伴左衛。山杉氏、水がまゐつた。お飲みなされぬか。

甚作。はあ。ありがたうござる。有難うござる。（甚作は感激の涙をぬぐひながら顔をあげて、湯呑みの水を飲む。）

伴左衛。もう一杯さし上げませうか。

甚作。いや、十分でござる。唯今のお話で醉も一時に醒めました。（形をあらためる。）さて先生。先日品川の妓樓で初めてお目にかゝつ

た時には、拙者も大酔、御貴殿もよほど御酩酊のやうに見受けましたが、その砌り御貴殿には盛んに攘夷の説を唱へられ、夷狄にわが國土を蹂躙せらるゝは、神州男兒の恥辱であると仰せられたことは、酔中ながらも拙者はよく記憶してをります。

作左衛。なるほど其節は、隣座敷のお手前と測らずもお心安く相成つて、酔に乗じていささか平生のこゝろざしを述べましたる次第、かならずお笑ひくださるな。

甚作。いや、笑ふどころではござらぬ。德川の膝元といふこの江戸にも、御貴殿のごとき忠勇義烈の御仁が隠れてござるかと思へば、拙者は涙がこぼれるほどに嬉しうござつた。まつたく嬉しうござつた。（又もや感涙をぬぐふ。）就てはよそながら其の御様子を拜見いたしたさに、今日突然に推參いたした處、床には文天祥の正氣の歌がかけてある。五百人の門弟は先生と生死を俱にするといふ。これにて疑ふところもなく、御貴殿の人物も確かに見とゞけましたれば、あらためて拙者が胸中の秘密を打ちあけ申す。（左右をみまはす。）そこらに聴く人はござるまいな。

（作左衛門は無言にてうなづけば、甚作は一膝すゝみ寄る。）

甚作。拙者は中國の藩中なれど、唯今は浪人の身の上、攘夷の手はじめとして品川御殿山にある異人館を焼撃いたす覺悟でござる。

作左衛。え。お手前が……。

甚作。同志の者はわづかに五人、今宵の四つを合圖に討ち入つて、異人どもを片端より斬り倒し、その宿所をも焼き拂ふことに評議一決いたした。

作左衛。（いよ／＼驚く。）あの、御殿山の異人館へ夜討を企てらるゝと……。（わざと落付いて。）それはお勇ましいことでござるな。

甚作。もとより命を捨てゝかゝるからは、味方の多きを望むではござらぬが、五ケ國の異人館へ五人が向ふのでは、一ケ國一人の割合で、人數が少々不足でござる。就ては御貴殿の人物を見込んで……。

（云ひかけて相手の顏色をうかゞへば、作左衛門はおどろいて默つてゐる。）

甚作。先生と生死を俱にするといふ五百人の門弟衆のうちから、武藝もすぐれ、心も逞しい者二十人ばかりを引連れて、なにとぞ我々に御加勢下さるまいか。

（作左衛門は返事に困つてゐる。）

甚作。（たゝみ掛けて。）御貴殿が日ごろ唱へてゐらるゝ攘夷の御貴論を、われ／＼がこれから實行しようといふのでござる。よもや御異存はござるまいな。

作左衛。勿論それに異存はござらんが……。

甚作。では、お聞きとゞけ下さるか。

作左衛。先づお待ちなされ。唯今も申す通り、拙者に於ても勿論異存はござらんが、異人館焼撃の企ては……。少しく時節が早いかと思はれます。

甚作。時節が早いと申さるゝか。

作左衛。（あわてゝ）早い、早い。たしかに早うござる。時機到來すれば拙者も遣ります。併し今は早うござる。まして今夜などとは餘りに逼まつて居ります。

甚作。しかし形勢は次第に切迫して……。

作左衛。いや、早い、早い。

甚作。もはや一日も猶豫は相成りません。

作左衛。（いよ／＼慌てゝ。）いや、いや、何と云はれても、早い、早い。早うござる。お手前たちは年が若いので、たゞ一途に燥り立たるゝが、天下の大事は左様に輕率に取扱ふべきものではござらん。大局を見るの明あるものは、今しばらく隱忍して、おもむろに形勢

の變化を窺はなければなるまい。なにしろ、まだ早い、早い。お手前たちも無謀の企てはお止めなされ。

甚作。無謀の企て……。（むつとする。）では、貴殿はどうでも不承知か。われ〳〵の味方になつては下さらぬか。日ごろの攘夷論は皆いつはりか。

伴左衛。いつはりではござらんが、時節がまだ早いといふのに……。お手前はどうも理窟の判らぬ御仁だな。

甚作。二口目には早い早いと、それにかこつけて逃れようとするは……。さては貴殿、口と心とは違つてゐるな。

伴左衛。（ぎよつとして。）なんでも宜しい。お手前達のやうな亂暴者と論は無益だ。お歸りください。歸らつしやい。

甚作。いや、歸るまい。これほどの機密を打ちあけて、世間に洩れたら萬事の破滅だ。どうでも不同意とあるならば、拙者にも覺悟があるぞ。（朱鞘の大刀をひき寄せる。）

伴左衛。（おどろいて身がまへする。）これはいよ〳〵亂暴狼藉、言語道斷。お手前は氣でも違つたか。

甚作。馬鹿をいへ。われ〳〵攘夷の血祭に、先づ貴樣の素つ首をぶつ放すのだ。さあ、おのれ、覺悟しろ。（詰めよる。）

伴左衛。いや、どうも呆れた奴だ。

（伴左衛門も床の間の刀を取らうとする。この時、うしろの襖をあけて、お千代はうかゞひ出で、懷劍を拔いて甚作に斬つてかゝる。甚作も不意におどろいて身をかはしながら、鐵扇を把つてあしらひ、遂に懷劍を打ち落して お千代を引き据ゑる。そのあひだに、伴左衛門は刀を取つて起ちあがり、大きい聲で呼ぶ。）

伴左衛。狼藉者だ、狼藉者だ。早く〳〵まゐれ。

（甚作は舌打ちしてお千代を突き放し、縁より庭に飛び降りる。）

甚作。おのれ、卑怯者め。おぼえてゐろ。

（甚作は下のかたへ逃げかゝると、恰も庭口より千島雄之助が駈け來り、出逢ひがしらに甚作に突きあたる。）

雄之助。おのれ、曲者……。

（雄之助は組みつくを、甚作は振り放して逃げ去る。雄之助はつゞいて追つてゆく。お千代も落ちたる懷劍を拾ひて、これも庭へ駈け降りるを、伴左衛門は呼びとめる。）

伴左衛。これ、これ、どこへゆくのだ。

お千代。日ごろの修業も仇となつて、おめ〳〵おくれを取つたのが殘念でございます。あとを追つかけて二度の勝負を致さなければなりません。

伴左衛。いや、怪我でもすると詰まらない。あんな奴は千島にまかせて置けばいゝのだ。

お千代。その千島さんに怪我でもあつては猶大變でございます。

（お千代は下のかたへ駈けてゆく。）

伴左衛。これ、待て、待て。どうも氣違ひじみた奴が多いな。

（下のかたの緣づたひに平九郎が先に立ち、津村彌平次、本庄新吾、犬塚段八、三上郡藏出づ。彌平次等四人はいづれも竹刀又は木太刀を持ち、段八と郡藏は胴と籠手を附けてゐる。）

平九郎。先生。何事が出來いたしたのでございます。

伴左衛。今の浪士の奴めが不意におれに斬付けようとしたのだ。

彌平次。なにか口論でもなさいましたか。

伴左衛。別に喧嘩口論をしたと云ふわけでもない。あれは亂心してゐるのだ。

四人。氣ちがひでございますか。

作左衞。むゝ。氣ちがひだ、氣ちがひだ。

平九郎。して、あいつはどこへ參りました。

作左衞。おれが鐵扇で眉間を一つ擊つて遣つたら、緣から轉げ落ちて這々の體で逃げて行つた。

新吾。眉間を擊たれて……。緣から轉げ落ちましたか。

作左衞。それが卽ち東軍流の極意で、微塵の一手といふのだ。おまへ達に見せなかつたのは殘念であつたな。

段八。まつたく殘念でございました。

郡藏。して、相手はよほどの手利きでございましたか。

作左衞。この道場のうちでは恐らく彼の相手に立つ者はあるまい。あれほどの腕前を持ちながら亂心するとは氣の毒なことだ。それに付けても千島とお千代はどうしたか、行つて見て來い。ふたりは彼を追つて行つたのだ。

平九郎。左樣でございますか。それ。

(平九郎はみかへりて指圖すれば、彌平次等四人はあわたゞしく引返して去る。それを見送つて、平九郎は摺寄る。)

平九郎。先生。實のところは一體どうしたのでございます。

作左衞。あいつ等は徒黨を組んで、攘夷の手始めに御殿山の異人館を襲擊するから、おれにも加勢しろといふのだ。

平九郎。ふむう。(顏をしかめる。)して、御承知なさいましたか。

作左衞。途方もない、誰がそんな氣ちがひの仲間入りをするものか。それを厭だと斷つたら、今度は貴樣を血祭にするといふので、おれも少し驚いたよ。

平九郎。併しお怪我が無くつて結構でした。(笑ひながら。)先生。これからは些と川岸をかへて、よし原の方へ乘り出さうではございませんか。品川へは兎角にさういふ亂暴ものが入り込んで、とんだ係り合ひになりますからな。

作左衞。そればかりでなく、品川は眼と鼻のあひだで、どうも近所の噂になり易いからな。

平九郎。さうでございますよ。軍用金の使ひ途が萬一露顯した日には大しくじりですから……。

作左衞。(下のかたを見て。)叱つ、叱つ。

(平九郎はあわてゝ口を噤む。庭口よりお千代と□之助が引返して出づ。)

平九郎。おゝ、亂暴者はどうした。

□之助。殘念ながら取逃がしました。

作左衞。取逃がしたか。

お千代。わたくしは殘念でなりません。(泣く。)あんな男に不覺を取りまして……。お兄い樣に合はす顏がございません。

作左衞。(打消すやうに。)まあ、いゝ、いゝ。あんな者を相手にするな。あんな奴は逃がして遣る方がいゝのだ。あれは氣ちがひだ、亂心者だ。

雄之助。お千代さんのお話では、攘夷の血祭に先生の首を取るとか申したさうで……。

作左衞。それが氣ちがひの證據だ。攘夷家が攘夷家の首を取る……。そんな馬鹿なことがあるものか。

お千代。でも、ほんたうに氣ちがひやうにも見えませんでしたが……。

作左衞。いや、氣ちがひだ、氣ちがひに相違ない。おれにはちやんと判つてゐるのだ。

(庭口より下總屋義平、鉢卷片肌ぬぎにて木太刀を持ちて出づ。)

義平。先生。亂暴者が押込んださうでございますな。

作左衞。はゝ、騷ぐことはない。相手はもう逃

げてしまつた。

義平。浪士が斬込んだと聞きまして、わたくしはびつくり致しました。

作左衛。そんなことに一々びつくりしてゐて、今の世の中が渡れるものか。浪士などが十人や二十人斬込んで來ても、東軍流の一手で……。(鐵扇で撃つ眞似をする。)みんな此の通りだ。はゝゝゝゝ。

(作左衛門は反り返つて笑ふ。義平は鉢卷をはづして肌を入れる。)

皆之助。併しあんな奴は又出直して來ないとも限りませんから、めつたに油斷はなりますまい。

平九郎。今の先生は千金のおん身だ、用心に用心しなければなるまい。いろは歌留多にも油斷大敵と教へてあるからな。

お千代。(空をみる。)冬の日はみじかいので、もう暮れかゝりました。今夜は庭にかゞりを焚いて、夜陣を張らなければなりますまい。

義平。では、わたくしの内から松薪を運ばせませう。玄關先から庭先まで一面にかゞりを焚いて、味方の威勢をみせて遣るがよろしうございます。

作左衛。いや、世間の手前もあるから、むやみに騒ぎ立てゝはならない。今夜は宵から門をしめて、おとなしく謹慎してゐろ。たとひ何處で何事が起つても、決して駈け出してはならないぞ。

一同。(わからぬながらに。)はあ。

作左衛。ほかの門弟にも申聞かせて、今夜は一人も表へ出るなと云へ。出ると飛んだ連坐を受けるぞ。

一同。はあ。

作左衛。義平も早く家へ歸れ。

義平。(よんどころなく。)はい。

作左衛。表の門を早くしめろ。

平九郎。今からすぐに閉めますか。

作左衛。えゝ、知れたことだ。閉めろ、閉めろ。

(作左衛門は無暗に急き立てる。一同は煙にまかれてゐる。)

――幕――

第二幕

(一)

芝の田町、萱屋の店さき。正面は店にて、軒には下總屋と漆で書いたる看板の額をかけ、上のかたの奥には帳面が澤山にかけてある。よき所に帳場格子、店火鉢などもある。店の奥の上のかたは出格子の窓、その下には用水桶がある。下のかたには大きい物置小屋、それに薪や炭俵が積み込んである。

(十二月初旬の午に近い頃。下總屋の若い者時助、勘八の二人は小屋の前に出て、時助は薪を割つてゐる。勘八は炭を切つてゐる。小僧仙吉は炭團を干してゐる。近所の娘おもと、おきんの二人は遊藝の稽古の歸りのこゝろにて、燕口や撥などを持つて立つてゐる。煤掃きのやうな音きこゆ。)

時助。どこだ、どこだ。さつきからトンバタ遣つてゐるのは……。さう〳〵しい奴だな。

仙吉。横町の伊勢屋だよ。

勘八。横町の伊勢屋か。あいつも變り者だな。今から煤掃きをする奴もねえもんだ。

時助。ちげえねえ、江戸の煤はきは御城樣以來、十三日にきまつてゐますと云つて教へてやれ。

おもと。煤はきぢやあない、引越しよ。

勘八。引越しならあんなに叩き立てることはねえ。おらあ煤はきかと思つた。

時助。それにしても伊勢屋はどこへ引越すのだ。
おきん。こゝらは品川の海に近いから、山の手の遠いところへ引越すと云つてゐたよ。
勘八。そんなに黒船を怖がることもあるめえ。そのためのお臺場が出來てゐるのぢやあねえか。
おもよ。それでも安心は出來ないと云つて、隣町の三河屋さんでも、女や子供たちを川越の親類にあづけたと云ふわ。
おきん。あたし達もどこかへ逃げて行きたいわねえ。
時助。なにしろ世間がさうぞう〳〵しくなるのは困つたものだ。黒船は押寄せて來ねえにしても、御殿山でそんな一件があるからな。
仙吉。あの時はまつたく怖かつたな。
おもよ。異人館が燃えあがつた時には、あたしは顫へてしまつてよ。
勘八。異人館へ斬込むのは、今度で二度目ださうだが、どうも恐いことが流行るものだ。
(店の奥より亭主義平出づ。それを見て、若い者等はあわてゝ仕事にかゝる。義平は表へ出て下のかたを見る。)
義平。伊勢屋ではいよ／＼引越しか。
時助。もう御存じですか。
義平。きのふそんな話をちよいと聞いたが……。(笑ふ。)品川の近所は怖いさうだ。こゝらは海に近いので、ふだんから黒船を恐れてゐるところへ、御殿山の焼撃騒ぎが始まつたので、いよ／＼怖氣が付いて、急に引越すことになつたらしい。
勘八。今聞けば、三河屋でもおかみさんや子供を立退かせたさうですよ。
義平。氣の弱い者達はずん／＼立退くことだ。今に何事がはじまるか判らないからな。(若い者も娘も義平の前にあつまる。)
時助。旦那。まだ何事か始まりますか。
義平。始まらないとは限らない。いや、屹と始まるに相違ない。このあひだの御殿山の焼撃どころぢやあない。(得意らしく笑ふ。)もつと度偉い騒ぎが出來するかも知れないぞ。
一同。(顔をみあはせる。)さうでせうか。
義平。浪士の五人や十人が異人館へ斬込んだところで何うなるものか。
勘八。それでも異人は驚くでせうな。
義平。おどろくかも知れないが、そのくらゐのことでは日本人のほんたうの腕前をみせるわけには行かない。江戸の異人館なんぞを焼いたところで、多寡が知れてゐる。横濱にある異人館を片つ端からみんな焼き拂つてしまつて、それから沖にかゝつてゐる黒船を燒拂ふのだ。それでなければ、本當の攘夷が出來るものか。
時助。さうなると戰ですね。
義平。(だん／＼亢奮して來る。)今いふ通り、五人や十人が斬込むのとは譯が違つて、何百人が水陸二手にわかれて押寄せるのだから、地雷火を仕掛ける、鐵砲をうち掛ける、火をつける。その火のなかを潜つて、槍や刀で攻め込んで行く。その勇ましいことを考へても身體がぞく／＼するやうだ。
勘八。萬一そんなことが出來したら大變ですね。
義平。なにが大變だ。さうなるのが本當だとは思はないか。下總屋義平が男をみせる時節が來るのだ。(笑ふ。)それを思ふと、赤穗義士の討入りなどは仕事が小さい、まるで子供だましのやうなものだな。はゝゝゝゝ。
(時助と勘八は顔をみあはせてゐる。仙吉進み出づ。)
仙吉。旦那。向う横町の煙草屋で炭團を持つて來てくれと云つてゐました。

時助。さうだ。わたしも忘れてゐた。横町の鐵物屋でも堅炭を五俵持つて來いと云ふことでした。

義平。よし、よし。堅炭でも佐倉でも、炭團でも消炭でも、なんでも勝手に背負つてけ、持つてけ。からいふ時節になつたら、商賣の損徳なんぞを考へてゐる暇はないのだ。（娘等に。）おまへ達も幾ら町家の娘つ子だからと云つて、この時節に燕口なんぞをかゝへて、遊藝のお稽古に通つてゐると云ふことがあるものか。わたしの先生の道場へ行つて、ちつと薙刀の稽古でもしたらどうだね。

おもと。あら、いやだ。ねえ、おきんちやん。

おきん。あたし達に劍術のお稽古なんぞ出來やあしないわ。

義平。なに、出來ないことがあるものか。先生の妹さんなんぞは年も若し、容貌は好し、それで薙刀でも竹刀でも免許皆傳で、大抵の男はかなはないのだからな。

おもと。そりやあ劍術の先生の妹ですもの、強いのは當り前だわ。

おきん。あの人は内弟子の若い人とよく一緒にあるいてゐるわね。

義平。（聞きとがめる。）先生の妹さんが内弟子の若い男と一緒にあるいてゐる。その相手はなんといふ男だね。

おもと。なんといふ人だか知らないけれど、あたしも見たことがあるわ。色の白い、好い男の人よ。

おきん。ゆうべも横町の暗いところで、寒い風に吹かれながら二人で内所話をしてゐたわ。

義平。むゝ。（かんがへる。）その相手は千島だらうな。さうだ、さうだ。きつと千島に相違ない。どうも二人の様子がちつと可怪いと思つてゐたら、やつぱりさうであつたのか。（舌打ちして。）いま／＼しい畜生だ。

おもと。あら、そんなに怒ることはないぢやありませんか。

おきん。おまへさん、やきもちを焼いてゐるの。

二人。ほゝゝゝ。

義平。（氣がついて、苦笑ひする。）なに、やきもちを焼くといふわけぢやあないが、行儀のきびしい大泉先生の道場で、そんな不埒を働くとは怪しからぬことだ。

おきん。不埒だか何だか判らないが、たゞ立話をしてゐただけのことよ。

義平。その立話が不埒だといふのだ、男と女が暗いところで立話をしてゐるなどといふのは確かに不埒だ、不埒千萬だ。

（義平の様子が惡いので、娘等は顔をみあはせる。）

おもと。あんまりおしやべりをしてゐるといけないから、あたしもう歸るわ。左様なら。

おきん。さよなら。

（娘ふたりは早々に下のかたへ立去る。）

仙吉。先生のところの千島さんといふ人が、お孃さんと一緒にあるいてゐるのを、わたしも見たことがありますよ。

義平。おまへも見たか。相手はいよ／＼千島だな。

仙吉。たしかに千島さんでした。

時助。いくら先生の妹でも、もう年ごろの娘だからな。

勘八。それに、あの千島といふ人は、先生の道場では一番好い男だから、さうなるのが當りまへかも知れないよ。

義平。（ひとり言のやうに。）當りまへかも知れない。併し先生はおそらく御存じあるまいな。（また思ひ直して。）えゝ、勝手にしろ、勝手にしろ。そんなことは大事のまへの小事

だ。女のことなどに屈託して、天下の大事を忘れてはならない。下總屋義平は男をみがけば好いのだ。

（義平はひとり言のやうに云ひながら奥に入る。）

時助。（笑ふ。）旦那の忠臣藏が又始まつたぜ。

仙吉。（臺詞のやうに。）下總屋義平は男でごんす。

勘八。大きな聲をすると、奥へきこえるぞ。馬鹿な奴だ。

時助。しかし旦那の劍術氣ちがひにも困つたものだな。

勘八。それが此頃はだん／＼に嵩じて來て、異人館燒拂がどうだとか斯うだとか、途方もねえことを云ひ出すぢやあねえか。

時助。冗談にもそんなことを云つて、世間へきこえたら飛んだ目に逢ふぜ。どう考へても困つたものだ。

（上の方より刀屋のせがれ長七、風呂敷につゝみたる二三本の刀を持つて出づ。）

長七。お寒うございます。

時助。毎日空つ風が吹いて困ります。

長七。旦那は……。道場ですか。

勘八。いゝえ、内にゐます。まあ、おかけなさい。（店口から呼ぶ。）おい、おとよどん、おとよどん。

（女中おとよ、奥より出づ。）

勘八。刀屋の若旦那が入らしつたと、旦那にさう云つてくれ。

おとよ。はい、はい。（奥に入る。）

時助。おやあ、おれも織物屋へ堅炭をとゞけて來るかな。

勘八。おれも手傳つて遣らう。（仙吉に。）おまへも早く烟草屋へ炭團を持つて行け。

仙吉。あい、あい。

（仙吉は炭團を笊に入れて、下のかたへ去る。時助と勘八は小屋に入りて炭俵を持ち出す。奥より義平出づ。）

義平。今日は……。この頃はお忙がしいでせうね。

長七。むやみに忙がしくつて困ります。けふもこれからお出入り先を二三軒廻らなければなりません。だん／＼に寒くなつて、こちらの御商賣もお忙がしいでせう。

義平。なに、商賣なんぞは忙がしくつても閑でも構ひません。天下の大事が胸一杯につかへてゐるので、十露盤なんぞを彈いてゐる氣にはなれませんよ。

（時助と勘八は炭俵をかつぐ。）

二人。ぢやあ、ちよいと行つて來ます。

長七。御苦勞ですね。

（時助と勘八は炭俵をかついで、下のかたへ去る。奥よりおとよは茶を持つて出づ。）

おとよ。いらつしやい。

（おとよは茶をすゝめる。長七は默禮する。おとよはそのまゝ奥に入る。）

義平。これから道場へお出でなさるのかえ。

長七。實はその事で少し御相談に來たのですが……。（左右を見まはす。）おまへさんは先生のところへ軍用金をお納めになりましたか。

義平。納めました。おまへさんもお納めになつたさうですね。

長七。わたしは五十兩おとゞけ申しました。

義平。五十兩……。（少いといふやうな顔をする。）わたしは五百兩納めましたよ。

長七。五百兩……。（おどろく。）そんなにお納めになりましたか。

義平。先生は三百兩といふお話でしたが、こつちから糶りあげて五百兩にしました。なにしろ大がかりの仕事ですからね。莫大の軍

用金も要りませうよ。わたしも何とか都合して、そのうちにもう少し納めたいと思つてゐます。

長七。（かんがへる。）併し先生は深堀さんやお弟子たちを連れて、品川や吉原で毎晩のやうに全盛遊びをしてゐると云ふぢやありませんか。

義平。（うなづく。）それはわたしも知つてゐますが、世の中が引つくり返るやうな大仕事を目論んでゐるんだから、些とぐらゐの氣ばらしは仕方がありますまい。お弟子達だつて、みんな命がけで懸つてゐるんですからね。

長七。さう云へばさうですが……。（又かんがへる。）わたし達ばかりでなく、攘夷の軍用金と名をつけて、ほかのお弟子達からも取立てゝゐるさうですね。

義平。（又うなづく。）ほかのお弟子達だつて、都合の出來る人はみんな出すがようございますよ。それが本當ですよ。（云ひかけて少し考へる。）お前さんは何か先生を疑つてゐるんですかえ。

長七。疑ふと云ふわけでもありませんが……。此頃は先生の遊び方が少し激しいので……。

義平。（笑ふ。）まあ、まあ、長い眼で見ておいでなさい。大石内藏助を疑つた人達は、あとで恥をかきましたよ。はゝゝゝゝ。お前さんも用を片附けて早く道場へおいでなさい。わたしも午飯を食ふと、すぐに行きますから。（奥にむかつて呼ぶ。）おい、おい。

おとよ。はい、はい。（奥より出づ。）

義平。もう午飯の支度は出來たかね。

おとよ。もう出來て居ります。

長七。（起ちあがる。）ぢやあ、わたしも行きませう。

義平。追ッ立てるやうでお氣の毒ですが、どうも此頃はおちついてゐられないので……。（おとよに。）さあ、早く膳を出してくれ。

おとよ。はい、はい。（奥に入る。）

長七。どうもお邪魔をしました。

義平。御めんなさい。

（義平は早々に挨拶して奥に入る。長七はかんがへながら下のかたへ行きかゝり、ふと向うを見て思案し、引返して小屋のなかに隱れる。向うより大泉伴左衛門が先に立ち、深堀平九郎、津村彌平次、本庄新吾、いづれも醉ひて出づ。）

平九郎。天氣は好いが、風がなか〳〵寒うございますな。

伴左衛。取分けこの冬は空つ風が吹くやうだな。こゝまで來るうちに酒の醉も大抵醒めてしまつた。

彌平次。（笑ふ。）それで丁度いゝかも知れません。道場の近所へ來て、あんまり赤い顏をしてゐるのは、些と極りが惡いやうですからな。

新吾。近所ばかりでなく、留守番の奴等にも猜まれますよ。はゝゝゝゝ。

（四人は店さきを通りかゝる。）

伴左衛。亭主は店にゐないやうだな。

平九郎。朝から道場へ詰めかけてゐるのかも知れません。

伴左衛。さういふ氣ちがひも無くては困る。あいつが軍用金を奉納してくれたので、先づ當分は遊べるといふものだ。

平九郎。（店の方をみかへりながら。）先生……。（伴左衛門の袂をひく。）

伴左衛。（頓着せず。）併しゆうべは何うも面白くなかつたな。

新吾。やつぱり遊び馴れたせゐか、吉原よりは品川の方が居心がいゝやうでございます。

彌平次。そんなことを云ふとお里が知れるぞ。はゝゝゝゝ。

伴左衛。俵庄のいふ通り、やつぱり品川の方が居心がいゝやうだ。吉原で寒さうな冬がれの田圃をながめてゐるよりも、品川の廣い海を見晴した方が、どうも清々して氣分がはつきりするではないか。深場はどうだな。

平九郎。遊びと名が付けば、どつちでも惡くはありませんが、このあひだのやうな事もありますから、先づ當分は南の方角を避けた方が無事らしうございますよ。

(店の奥より義平の母おかめ、四十餘歳、出づ。)

おかめ。おゝ、先生ではございませんか。

伴左衛。おふくろか。せがれはどうしたな。

おかめ。義平は奥で御飯を頂いてをります。呼んでまゐりませうか。

平九郎。いや、別に用もないのだ。(促すやうに。)先生、まゐりませう。

伴左衛。こゝで水を一杯貰つて行かうかな。

おかめ。お冷でございますか。

平九郎。いや、いや。道場はすぐそこだ。先生。家へ歸つてからゆつくりと召上るが好うございます。

伴左衛。ひどく氣ぜはしない男だな。

(平九郎は彌平次と新吾に眼くばせして、早く先生を連れてゆけといふ。ふたりも心得て進みよる。)

彌平次。さあ、まゐりませう。

新吾。まゐりませう。

伴左衛。えゝ、うるさい奴等だ。

(三人にせき立てられて、伴左衛門は上のかたへ行きかゝる時、下のかたより山杉甚作出づ。)

甚作。先生……。大泉先生……。

伴左衛。誰だ、誰だ。(みかへる。)おゝ、お手前は……。

(伴左衛門はおどろく。平九郎も甚作をみて驚きながら身がまへする。)

甚作。(笑ひながら。)いや、先日は飛んだ失禮をいたして、何とも申譯がござらぬ。實はそのお詫ながら參上いたす途中、こゝでお目にかゝつたのは仕合せでござつた。

伴左衛。(油斷せず。)なに、詫に來る……。あれほどの狼藉をはたらいて、唯一通りの詫や挨拶で濟むと思はつしやるか。第一、お手前のやうな人物に屢々出入りをされては、拙者甚だ迷惑だ。足ぶみは屹とお斷り申すぞ。

甚作。(やはり笑つてゐる。)御迷惑は萬々察して居りますが、先づ先日のおわびを篤と申述べた上で、更に少々御無心申上げたい儀がござるので……。

伴左衛。無心がある……。(相手を屹と睨む。)扨はお手前、又もや拙者の首を取りに來たのか。

(伴左衛門は刀の柄に手をかける。平九郎は彌平次等に眼くばせして、いづれも鯉口をくつろげる。)

甚作。いや、いや。その御用心は御無用、今日拙者が御無心申すのは、大泉先生の首ではござらぬ。

伴左衛。では、なんの無心だ。

甚作。往來中では些と申しにくい儀でござるが……。(左右をみまはして、少しく聲を低める。)實は軍用金の御分配にあづかりたいのでござる。

平九郎。なに、軍用金を分配しろ。

甚作。(笑ふ。)これだけ申せば、先生にはよくお判りの筈だ。この上にくどいことは申すに及ばぬ。先生も拙者も一つ穴の貉だと御承知くだされればよいのでござる。あはゝゝゝゝは。

(伴左衛門は相手の顏をながめて考へてゐる。甚作は笑ひながら進みよる。)

甚作。まだ御疑念が霽れぬとあれば、もう少し詳しく申しませうか。

作左衛。いや、判つた、判つた。

甚作。おわかりになりましたか。

作左衛。むゝ。（笑ふ。）お手前の正體も大抵は判つたやうだ。

甚作。御安心なされたか。はゝゝゝゝ。

作左衛。はゝゝゝゝ。

平九郎。（不安らしく。）先生……。

作左衛。まあ、いゝ。（甚作に。）さあ、兎も角もお越しなされ。

（作左衛門は先に立つてゆく。彌平次と新吾はまだ不安らしく甚作を取圍んでゆく。）

平九郎。（あとに殘りて考へる。）して見ると、あいつもやつぱり食はせ者かな。どうも油斷のならないことだ。

（平九郎は人々のあとを追つて上のかたへ去る。おかめは始終無言で見送つてゐる。小屋の内より長七も伸びあがりて見送る。下のかたより八丁堀同心野澤喜十郎、手先ふたりを連れて出づ。手先の一人は長七に眼をつけて喜十郎にささやく。喜十郎うなづいて指圖すれば、

手先甲。（手先は長七に聲をかける。）もし、おまへさんは小屋の備前屋さんだね。

長七。左樣でございます。

手先乙。旦那が御用と仰しやるのだ。

長七。はい。

喜十郎。おまへは備前屋のせがれ長七だな。丁度好いところで逢つた。すこし調べることがあるから番屋まで來てくれ。

長七。どんなお調べでございませうか。

喜十郎。べらぼうめ。御用の調べ事が往來で出來るものか。貴樣は躄ぢやあるめえ。二本の足でずん／＼歩いて來い。ぐづ／＼してゐると繩を打つぞ。

手先。さあ、來い、來い。

（喜十郎は先に立ち、手先ふたりは長七を圍みて、下のかたへ引返して去る。おかめは驚いてあとを見送つてゐる。奥より義平出づ。）

おかめ。お前、小屋の長さんが自身番へ連れて行かれたよ。

義平。長さんが番屋へ……。誰が連れて行きました。

おかめ。八町堀のお役人のやうだつたよ。

義平。なんだらうな。（考へる。）どんな樣子か、ちよいと行つて覗いて來ませう。

（義平は出て行かうとするを、おかめは引きとめる。）

おかめ。うつかり行つて係り合になるといけないよ。

義平。なに、大丈夫です。

（義平は振切つて出てゆく。）

（二）

第一幕の道場。

（お千代は鉢卷、襷がけにて薙刀を持ち、千島雄之助は稽古着に道具をつけて竹刀を持ち、稽古をしてゐる。やがて二人はうなづき合ひて稽古をやめ、左右をみまはして進みよる。）

雄之助。（小聲で。）誰もゐないやうです。稽古はこのくらゐにしませう。

（お千代はうなづいて鉢卷を取る。雄之助も面を取りて額の汗をふく。）

お千代。そんなに汗が出ましたか。

雄之助。あなたと立合ふのですもの、どんな寒い日でも汗が出ますよ。油斷をしてゐたら、

向う脛を手ひどく擲つ拂はれますからね。
お千代。なんであなたにそんな事をするものですか。大丈夫ですよ。あなたこそわたしを憎がつて、隨分ひどくお撲ちなさる事がありますよ。
雄之助。それは先生や深堀さんの見てゐる時だけのことですよ。ほかに誰もゐないときに何でそんな暴つぽいことをするものですか。
お千代。どうだか當てになりませんわ。
（二人は仲よく寄添つて、上のかたの高いところに腰をかける。）
お千代。この二三日は急に寒くなりましたね。
雄之助。なにしろもう十二月の聲を聞いたのですから、このくらゐの寒さが本當でせうよ。この空模樣では近いうちに雪かも知れません。歳の暮に積られると、出這入りが不便で困ります。いくら世の中がさう〳〵しいからと云つて、道普請ぐらゐしたら好ささうなものだが、どこの町内でも此頃はちつとも構ひませんからね。
お千代。まあ、そんなことは何うでもいゝぢやありませんか。それよりも千島さん。大變なことがありますの。
雄之助。大變な事…。なんですか。（云ひかけて氣がつく。）あ、誰か來たやうです。
お千代。あら、誰か來ましたか。
（二人はあわてゝ道場のまん中に出て、薙刀と竹刀を取り、掛け聲をしながら二三度撃ち合つて又やめる。）
お千代。誰も來やしませんわ。
雄之助。來ないやうですね。はゝ、なんのことだ。
（二人は左右をうかゞひて、笑ひながら再び腰をかける。）
雄之助。そこで今のお話の大變とは、どんなことです。浪士でもまた斬込みましたか。
お千代。いゝえ、そんなことぢやありません。千島さん。（摺寄る。）あなたとわたしとの祕密を、兄が薄々感付いたらしいのです。
雄之助。先生が感付いた…。（案外おちついてゐる。）さうかも知れませんよ。先生だつて盲でも聾でもないのですからな。
お千代。おまへが何かにつけて千島を庇ふのはどうも可怪い。正直に白狀しろと云つて、兄がわたしを責めるのです。
雄之助。そこで、あなたは白狀しましたか。
お千代。どうして白狀出來るものですか。わたしは飽までも知らないと云ひ切つてゐるのです。
雄之助。（笑ふ。）いつそ思ひ切つて白狀したらどうです。先生も却つて安心なさるかも知れない。
お千代。なんで安心するものですか。物堅い兄のことですから、どんなに立腹するか判りません。
雄之助。立腹なされば丁度幸ひです。
お千代。あなたは破門、わたしは勘當されるかも知れません。
雄之助。（いよ〳〵平氣で笑ふ。）あなたは勘當、わたしは破門、さうなればいよ〳〵結構で、願つたり叶つたりですよ。
お千代。（呆れたやうに男の顏をみる。）あなた、どうかしたのですか。
雄之助。なぜです。
お千代。（用心するやうに起ち上る。）あなた、なんだか變ですわ。氣でも違つたのぢやありませんか。
雄之助。冗談云つてはいけません。から見えても、あなたよりは氣は確かです。あなた達の方が化かされてゐるのですよ。
お千代。何に化かされてゐるのです。
雄之助。（又笑ふ。）この道場に巣を作つてゐる

古狸と古狐‥‥。まあ、そんなものでせうな。
お千代。古狸と古狐‥‥。
雄之助。あなたはどうも正直だからいけない。この道場は化物屋敷と心得てゐれば好いのですよ。はゝゝゝゝ。
お千代。（俄に下のかたを見る。）あら、又だれか來たやうですよ。（薙刀を把り直して出る。）
雄之助。まあ、よろしい。先生に感付かれた以上は、もうびく／＼することはありません。そんな芝居は止しにして、まあこゝへお掛けなさい。少し御相談することがありますから。
（お千代はまだ不安らしく下のかたを窺ひながら、再び腰をかける。）
雄之助。御承知の通り、世の中がだん／＼騷がしくなつて來たので、幕府では別手組といふものをこしらへて、旗本や御家人の次三男を新規お召抱へといふことになりました。
（お千代はうなづく。）
雄之助。おかげで冷飯食ひの次三男が食ひ扶持にありつけると云ふわけで、わたしも近いうちに別手組お召抱へを願ひ出ようと思つてゐるところでした。さうなれば、先生に破門されても、こゝの道場を放逐されても、驚くことはありません。あなたも勘當されゝば丁度幸ひです。二人が手を引かれてこゝを出て行かうではありませんか。
お千代。（かんがへる。）そりやもう、一緒になりたいのは山々ですけれども‥‥。御國のために苦勞してゐる兄を見捨てゝ、このまゝこゝを出て行くのは、どうも濟まないやうな氣もしますので‥‥。
雄之助。それだから化かされてゐると云ふのですよ。眉毛に唾でも附けて、まあ、お聽きなさい。
（雄之助はお千代にさゝやく。お千代は一々おどろいて聽いてゐる。このあひだに、奧の襖をあけて大泉伴左衛門出で、ふたりの樣子をうかゞつてゐたるが、やがてだしぬけに呶鳴りつける。）
伴左衛。これ、なにをしてゐるのだ。
（ふたりはびつくりして飛び退く。）
雄之助。おゝ、先生でございましたか。
伴左衛。なにが先生だ。貴樣のやうな奴に先生と呼ばれては迷惑千萬だ。けふかぎり破門するぞ。
雄之助。（おどろきもせず。）わたくしを破門すると仰しやいますか。
伴左衛。勿論のことだ。仔細は一々云ふにも及ぶまい。貴樣は早々にこの道場を出て行け。お千代は一間に押籠めて窮命するから、さう思へ。
雄之助。わたくしの破門は致し方ございませんが、不義の御成敗ならばお千代さんも一緒に御勘當をねがひませう。わたくしだけ逐ひ出されるのは片手落ちでございます。
伴左衛。えゝ、やかましい。貴樣にそんな指圖をうける覺えはない。お千代はおれの妹だから、おれが勝手に仕置をするのだ。貴樣はだまつて早く立去れ。
雄之助。いや、片手落ちのお捌きではわたくし飽までも不承知でございます。わたくしを逐ひ出すならば、お千代さんも御勘當をねがひます。（お千代に。）さあ、あなたも支度して一緒にお出でなさい。
伴左衛。お千代。おまへは一足も動くことはならんぞ。兄が大勢の弟子を取立てゝ、まさかの時には御國のために竭さうとしてゐるのを、おまへは豫て知つてゐる筈ではないか。その兄の手助けをしようともしないで、内弟

子の一人と不義密通をはたらくとは、なんたる心得違ひだ。

雄之助。（笑ふ。）さう仰しやる先生が深堀さんを初めとして、大勢の弟子たちを代る〴〵に引き連れて、三日にあけずに品川や吉原へお乘り出しになるのは、どう云ふお心得でございます。わたくしは馬鹿正直と札附きにされて、みんなから仲間はづれにされてゐるので、一度もお供をしたことはありませんが、なんでも金錢を湯水のやうに撒き散らして、大盡遊びをなさると云ふことでございますが……。

伴左衛。おれの遊蕩は別に仔細のあることだ。大石内藏助が祇園島原撞木町に遊興したのは、一方には世間の眼をくらまし、一方にはおのれが英氣を養ふためだ。燕雀焉んぞ大鵬のこゝろざしを知らんとはこの事で、貴樣たちのやうな小人ばらに英雄豪傑のこゝろざしが判ると思ふか。馬鹿な奴め。

雄之助。正雪の二代目といふ先生の道場にまゐつて、あしかけ二年苦んだお蔭で、その英雄豪傑のこゝろざしと云ふものが、わたくしにもよく判つて來ました。英雄豪傑といふのは、心にもない議論を吐いて、世間を瞞着して、軍用金を澤山にかき集めて、自分の道樂に使ひ捨てることを云ふのです。

伴左衛。（すこし慌てゝ。）なんだ、なんだ。怪しからぬことを申す奴だ。もう一度云つてみろ。

雄之助。（又笑ふ。）幾度云つても同じことです。破門になつた以上、わたくしはもうお暇申します。（起ちあがる。）先生。歸り際にたゞ一言申上げて置きます。軍用金もう隨分お取立てになりましたらうから、先生がお得意の攘夷論もこゝらで大抵打止めになすつた方が宜しからうと存じます。どうも長々御厄介になりました。では、お千代さん。

（雄之助はお千代に眼で知らせて、下のかたへ立去る。お千代は薙刀を脇目にかける。）

伴左衛。（あとを見送つて罵る。）あいつ途方もないことを云ふ奴だ。これ、これ、お千代。おまへはよもやあんな奴と一緒に出て行きはしまいな。

お千代。お兄いさま。千島さんの云つたことは本當でございますか。

伴左衛。な、なんで本當なものか。一から十までみんな譃だ。あいつめ、だしぬけに破門を申渡されたので、氣が顚倒して、眼が眩んで、口から出まかせの譃をいふのだ。熱に浮かされた病人もおなじことで、相手にならない。あんな奴の云ふことを少しでも眞面目に聽いてはならないぞ。

お千代。英雄豪傑といふのは、心にもない議論を吐いて、世間の人を瞞着して、軍用金を澤山に取りあつめて、自分の道樂に使ひ捨てるのを云ふのださうでございます。

伴左衛。（呶鳴る。）うそだ。譃だ。あいつの云ふことは皆んな譃だ。それがおまへには判らないか。あんな狐や狸のいふことを眞面目に聽いてはならないと云ふのに……。

お千代。どつちが本當の狐か狸か。わたくしには正體が判らなくなりました。まあ、奥へまゐつてゆつくりと考へて見ませう。

（お千代は兄に會釋して、下のかたへ立去る。）

伴左衛。（かんがへる。）腹立まぎれに破門を云ひ渡したが、かうなると千島の奴めを無暗に逐ひ出すのも考へものだぞ。むゝ、さうだ、さうだ。

（伴左衛門は俄に起つて下のかたへ行かうとすれば、出合ひがしらに深堀平九郎

出づ。）

平九郎。おゝ、先生。千島を破門なすつたのでございますか。

伴左衞。お千代と不義を働いたので、一旦は破門を申渡したのだが……。まだ立去りはしまいな。

平九郎。内々で支度をしてあつたものと見えまして、手早く荷物を取りまとめて居ります。

伴左衞。では、いよ／＼油斷がならない。あいつに少し云つて聞かせることがあるから、もう一度こゝへ連れて來い。

平九郎。こゝへ連れてまゐりますか。當人はすぐに立去るやうに云つて居りますが……。

伴左衞。（せいて。）それだから早く連れて來いといふのだ。あいつ何うも見拔いたらしいからな。

平九郎。なにを見ぬきました。

伴左衞。英雄豪傑とは、こゝろにもない議論を吐いて、世間の人を瞞着して、軍用金をかき集めるのだなどと平氣で云ふのだ。

平九郎。（おどろく。）あいつがそんな事を云ひましたか。ふだんから馬鹿正直だと思つて油斷してゐたら……。それは怪しからん。實に案外でございました。

伴左衞。それだから迂濶にあいつを放逐するのも少し不安心になつて來た。無暗なことを世間へ吹聴されては困るからな。

平九郎。困ります、困ります。大困りでございます。では、破門の一件は無論にお取消しでございませうな。

伴左衞。むゝ、取消しだ、取消しだ。早く行け。

平九郎。はい、はい。（早々に引返して去る。）

伴左衞。どうもおれが些と拙かつたな。千島の奴め。おれの前でも平氣であんなことを云ふやうでは、お千代にも何を云つて聞かせたか判らないぞ。念のためによく詮議して置かなければならない。これ、お千代……お千代。

（伴左衞門は奧へ行かうとすれば、出合ながしらに襖をあけて、山杉甚作出づ。）

甚作。先生。いつまで拙者を待たせて置くのでござる。

伴左衞。おゝ、山杉氏……。實は少々こちらに取込みがござつて、まことに失禮をいたした。さあ、奧へお越しなされ。

甚作。いや、こゝで結構でござる。（坐る。）うけたまはれば何かお取込みがあるといふ、その最中に長居はお邪魔、早速用談に取りかゝりますが、彼の軍用金わけ前の一條、お聞き入れ下さるか。

伴左衞。では、貴公。異人館燒擊などと云つたのは譃か。

甚作。お察しの通り。（笑ふ。）御貴殿は堂々たる門戸を張つて、軍學劍術指南の看板をかけてゐる先生、殊に軍學は正雪の二代目とも云はれてゐるので、おなじ譃をついても人がすぐに信用する、軍用金も忽ちあつまる。それに引きかへて我々のやうな痩浪人は、なにを云つても取合ふ者もなく、旨い酒も容易に飲まれぬといふ始末。あまりお羨やましいので、つい一と狂言かきました。

伴左衞。この間はあんなことを云つて、拙者を試しに來たのだな。

甚作。失禮は幾重にも御免ください。併し迂濶に冗談も云へないもので、あれから四五日過ぎると、ほんたうに御殿山の異人館に火をつけた奴があつたには少し驚きました。

伴左衞。實は貴公等の仕業であらうと推量してゐたのだが……。さうすると、貴公はあの一件にかゝり合ひ無しか。

甚作。どうして、どうして、あんなことに係り合ふほどの度胸はありませんよ。はゝゝゝゝは。

伴左衞。そこで、貴公は幾ら呉れといふのだ。

甚作。さあ、百兩ばかり……。如何でせう。

伴左衞。(首をふる。)いけないいな。

甚作。では、七八十兩……。

伴左衞。いけないいな。

甚作。では、ぎり〳〵のところで五十兩……。それでも御不承知か。

(伴左衞門はだまつてゐる。)

甚作。それでも御不承知とあれば致し方がない。尾羽うち枯らしても山杉甚作源の頼經。御貴殿から二十兩や三十兩は貰ひたくない。

伴左衞。(見縊つたやうに。)貰ひたくなければ、この相談を止めたらどうだな。

甚作。その代りに、大泉先生の攘夷論は口ばかりで、あれは僞者でござる、食はせ者でござると、大きい聲で世間を數鳴つてあるきますぞ。(笑ふ。)まあ、喧嘩は止めにして、おとなしく五十兩お貸し下さい。

伴左衞。五十兩は高いな。

甚作。では、幾らと云はれるな。

伴左衞。先づ、三十……五兩ぐらゐかな。

甚作。三十五兩……。どうも勘定が惡いな。では、せめて四十兩に願ひたい。それで拙者も往生します。

伴左衞。その往生際がよくないな。

(伴左衞門は焦らすやうにまだ澁つてゐる。下のかたより下總屋義平出づ。)

義平。先生。(云ひかけて、甚作を見て躊躇する。)

伴左衞。なんだ。

(義平はやはり躊躇してゐる。)

伴左衞。なにか急用か。

義平。はい。

甚作。それでは拙者は暫時御遠慮いたさうか。

伴左衞。氣の毒だが、もう一度奥でお待ちください。

(甚作は澁々ながら奥に入る。)

義平。(聲を低めて。)先生。一大事でございます。備前屋のせがれが番屋へ連れて行かれました。

伴左衞。長七が自身番へ連れて行かれた。それはどうしたのだ。

義平。なんだか不安心でございますから、わたくしもあとを追つて行つて、番屋のかげで竊と樣子を窺つてをりますと、町人の身分で何で大泉の道場へ出這入りをするのだといふ詮議でございます。

伴左衞。町人でも武藝を習ふものは此頃幾らもある。それをなんで詮議するのだ。

義平。先づその詮議から始まつて、それからだんだんに先生の詮議に取りかゝると、長七も意氣地のない奴で、色々のことを喋舌つてしまひまして、攘夷の軍用金として下總屋義平へは五百兩を納めたの、自分は五十兩を納めたの、誰々は幾ら出したのと、みんなべらべらと申立てたのでございます。

伴左衞。仕樣のない奴だな。

義平。このあひだの晩、御殿山の異人館へ火をつけたのは先生達の仕業と睨んでゐるとみえまして、役人は頻りにそれを詮議してゐました。

伴左衞。(罵るやうに。)そんな事をおれが知るものか。ばか〳〵しい。

義平。それは御存じないとしても、一方の企てが露顯いたしましては一大事でございます。先生はどうなさいます。

伴左衞。一方の企て……。(義平の顏を見て、やゝ曖昧に。)むゝ、それは少し困るな。

義平。かうなつたらよもや無事では濟みますまい。(いよ〳〵亢奮して。)わたくしはもう覺悟して居ります。しかし長七のやうな意氣

地無しとは違ひますから、萬一召捕りになりまして、たとひ火水の拷問をうけましても、むやみに白狀するやうな卑怯な眞似はいたしません。下總屋義平は男でございます。町人でこそあれ、わたくしも天下の志士の一人でございます。

（伴左衞門は默つて考へてゐる。）

義平。あなたはどうなさいます。正雪の二代目で尋常に切腹をなさいますか。それとも捕手をひき受けて、花々しく斬死をなさいますか。

伴左衞。さう〳〵しい。まあ、靜かにしてくれ。

（下のかたより津村彌平次出づ。）

彌平次。おい、下總屋。おふくろが呼びに來てゐるぞ。

義平。おふくろが來ましたか。

彌平次。なんだか知らないが、顏の色を變へて、駈け込んで來て、すぐに伜を呼んでくれと云ふのだ。

義平。その用は大抵わかつてゐます。先生、もうお別れでございます。

（義平は覺悟して下のかたへ去る。）

彌平次。をかしな奴だな。先生。義平はどうかしたのでございますか。

（伴左衞門はだまつてゐるので、彌平次は不思議さうに立去る。それと入れちがひに下のかたより平九郎出づ。）

平九郎。千鳥の奴はどうしても肯かないで、強情に立去つてしまひました。

伴左衞。（みかへる。）千鳥はたうとう立去つたか。

平九郎。それからお千代さんもこんな書置をのこして、出て行かれたさうでございます。

伴左衞。お千代も出て行つたか。（忙がはしく書置をひらいて讀む。）

平九郎。やはり千鳥にそゝのかされたのでございませうな。

伴左衞。狐狸の化物屋敷を立去るに就て、お兄いさまの手箱のうちから金百兩を拜借してゆくと書いてある。

平九郎。行きがけの駄賃に金百兩とは……。お千代さんにも似合はない大膽不敵なことでございますな。これはいよ〳〵驚きました。

伴左衞。まだ驚くことがある。刀屋の長七が召捕られて、なにも彼も白狀したさうだ。

平九郎。（驚く。）え、ほんたうでございますか。

伴左衞。新屋のせがれが今こゝへ知らせに來たのだ。

平九郎。なんだか樣子が可怪いと思つたら、義平はそれを云ひに來たのですな。

伴左衞。このあひだの晩、御殿山へ火をつけたのは、おれ達の仕業と睨まれてゐるらしいのだ。

平九郎。（すこし安心して。）いや、それならば全く覺えのないことで、別に心配することもございますまい。何とでも申開きは立ちます。

伴左衞。御殿山の一件は勿論おぼえの無いことで、その申開きは立つ筈だが、困つたことには不斷からおれが心にもない攘夷論を唱へてゐる。おまけに異人館を攻めるの、黑船を燒撃するのと云つて、大勢から軍用金を取立てゝゐる。それらの機密が長七の口から洩れたらしいから、所詮無事には濟むまいではないか。今さら嘘でございますとも云へず、云つたところで、上役人が素直に承知する筈があるまい。

平九郎。（ため息をつく。）さうでございませうな。そこで、先生はどうなさいます。

伴左衞。それをおれも考へてゐるのだ。最初は一時の強がりに攘夷論を唱へたのが、だん

だん調子に乘り過ぎて、たうとう本物にされてしまひさうだ。（同じく嘆息する。）おれも正雪の二代目かな。

平九郎。さうして、長七はどうなりました。

作左衛。長七はどうなつたか知らないが、義平もつゞいて引擧けられるらしい。おふくろか呼びに來たといふのは大方それだらう

平九郎。（悸えたやうに。）さうすると、今度はこつちの番でございますな。

作左衛。さう思はなければなるまい。平九郎。おまへも覺悟しろ。

平九郎。え、覺悟とは……。

作左衛。世のことわざにも嘘から出た誠といふことがある。今さら役人どもに召捕られて、我々は儒者でございます、伜は學者でございます、日ごろの攘夷論はみんな嘘でございますと、本音を吹いて白状するのも、あまりと云へば恥さらしだ。もう斯うなつたら、乘りかゝつた船で仕方がない。いつそ思ひ切つてほんたうの攘夷家で押通してしまはうではないか。人は一代、名は末代、どうも其の方が立派なやうだぞ。

平九郎。（よんどころなく。）はあ。

作左衛。おれは書置をかいて切腹する。おまへ達も一緒に腹を切れ。

平九郎。はあ。

作左衛。さうすれば世間でもあつぱれ攘夷家の最期だと褒めてくれるだらう。

平九郎。（迷惑さうに。）承知いたしました。では、これから一同にその趣を觸れてまゐりませう、

作左衛。併しおれが書置をかく間、邪魔をしないやうにしてくれ。

（作左衛門は奥に入る。）

平九郎。どうも大變なことになつたな。

（平九郎はぼんやりと考へてゐる。下のかたより津村彌平次、本庄新吾、犬塚段八、三上郡藏があわたゞしく出で來り、いづれも武裝する心にて、羽目にかけたる鎗を着けようとする。）

平九郎。これ、これ。みんなどうするのだ。

彌平次。刀屋のせがれも蒸屋のせがれも召捕られました。

平九郎。それはおれも知つてゐる。

新吾。つゞいてこゝへも捕手が向ふといふ噂ですから、その防ぎをしなければなりません。

段八。先生はどうしておいでです。

平九郎。先生は奥にゐる。

郡藏。表口と裏口をどう防ぐか。先生のお指圖をねがひます。

平九郎。まあ、待つてくれ。少し靜かにしろよ。

（彌平次等は構はずに武裝する。下のかたより女中およし、おみつが手をひき合つて出づ。）

およし。もし、皆さん、何事が起つたのです。

彌平次。えゝ、おまへ達に話しても判らないことだ。

おみつ。でも、なんだか怖いぢやありませんか。どうしたんです

段八。なんでもいゝから、早く行け、行け。

郡藏。うか／＼してゐると、飛んだ目に逢ふぞ。

およし。まあ、どうしたらいゝだらうねえ。

（およしとおみつは怖々ながらに立去る。）

平九郎。先生は書置をかいてゐるのだから、邪魔をしてはいけない。（考へて。）おれも少し用がある。貴公達はこゝに待つてゐてくれ。

（早々に下のかたへ立去る。）

彌平次。併しこゝに待つてゐても仕方があるまい。

新吾。兎もかくも表口を見張つてゐようではないか。

一同。さうだ、さうだ。

（彌平次等四人も下のかたへ去る。やがて奥の襖を蹴放して、山杉甚作が逃げて出るを、手先三人が追つて出づ。）

手先。神妙にしろ、神妙にしろ。

甚作。人ちがひ…人違ひでござる。拙者は來客で…この道場の者ではござらぬ。人ちがひ…人違ひ…。

（甚作は叫びながら逃げかゝるを、手先等は追ひまはして組み伏せる。）

甚作。これは怪しからぬ。人違ひだといふのに…。人違ひ…人ちがひ…。

（甚作は叫びつゞけながら繩にかゝる。）

（三）

もとの番屋の店さき。

（下のかたよりおかめは番太郎の權兵衞に送られて出づ。）

權兵衞。どうも飛んだことになりました。

おかめ。（泣く。）せがれが眞先に召捕られ、つゞいて奉公人がみんなお呼び出しになつて、一體どうなることでせうかねえ。

權兵衞。ほんたらにお氣の毒なことでございますよ。併しまあお前さんだけ歸して下すつたのはお上のお慈悲でございますから、お調べの片附くまでは謹愼しておいでなさるより外はありますまい。番屋の方に何か變つたことがあれば、わたしがすぐに知らせに來ます。

おかめ。何分おねがひ申します。

（おかめは巾着より小錢を出し、紙につつんで遣る。）

權兵衞。ありがたうございます。

（權兵衞は下のかたへ行きかけて、小屋に眼をつけ、少しく思案しながら立去る。）

おかめ。（ため息をつく。）まつたくこれから何うなるのかねえ。

（おかめは眼をふきながら四邊をみまはし、これも小屋に眼をつける。）

おかめ。何かごそ〳〵云ふやうだが、犬でも這入つたかしら。

（おかめは小屋を覗きにゆくと、炭俵のかげには深堀平九郎が着流し、頬包りにて忍んでゐる。）

おかめ。おゝ、深堀さん…。

平九郎。叱つ、叱つ。

おかめ。（小聲で。）あなた…。いつの間にこんなところへ…。

平九郎。兎もかくも日の暮れるまでこゝに隱して置いてくれ。誰が來てもこゝへ入れてはならないぞ。

おかめ。はい。

（平九郎は再び隱れる。おかめは不安らしく左右をみまはしてゐると、奥より女中おとよ出づ。）

おとよ。お歸りなさい。

おかめ。留守に何事もなかつたかえ。

おとよ。はい。

（下のかたより野澤喜十郎は手先五六人を連れて出づ。あとより權兵衞も出づ。）

喜十郎。番太郎。これか。（十手にて小屋を指す。）

權兵衞。左樣でございます。

喜十郎。炭部屋に隱れてゐるとは、師直のやうな奴だな。それ、引出せ。

（喜十郎の指圖にしたがひて、手先は小屋へ踏み込まうとすれば、内より炭俵や薪を投げ出す。）

手先。御用だ、御用だ。

（手先は飛び込んで、平九郎をひき出せば、平九郎は一生懸命にふり放して下のかたへ逃げてゆくを、喜十郎と手先は

追つてゆく。）

おかめ。（權兵衞に。）おまへさんが訴へたのかえ。

權兵衞。隱して置くと、こちらの御迷惑になりますよ。

おとよ。（上のかたを見る。）あれ、あれ、道場の先生が……。

おかめ。おゝ、先生が縄附きになつておいでなさる。

權兵衞。先生もたうとうお召捕りになつたのか。

（下のかたより近所の男、女、子供、往來の人などがわや〳〵云ひながら出づ。上のかたより與力井口金太夫が先に立ち、同心一人と手先五六人が大泉伴左衞門に縄をかけて出づ。そのあとからも男女大勢が附いて出づ。）

金太夫。さあ、往來の邪魔だ、邪魔だ。退け、退け。

手先。（口をそろへて。）退け、退け。

（伴左衞門は舞臺のまん中に立ちどまつて左右をみかへる。）

伴左衞。（大きい聲で。）大勢のうちには拙者の名を聞き知り、顏を見識つてゐる者もあらうが、大泉伴左衞門橘の正連は攘夷のはかりごと顯れて、今や召捕りの身と相成つたのだ。大鹽平八郎や由井正雪の二代目と思ふな。拙者は楠や新田にも劣らぬ、日本國の忠臣義士だぞ。死んだ後には神に祀れ。

金太夫。さあ行け、ゆけ。

（金太夫等に追ひ立てられて、伴左衞門は悠々として向うへ牽かれてゆく。人々は感激の眼を以て見送る。）

――幕――

（昭和二年三月作）

夜泊の船

船は門司にかゝる。小春の浪おどろかず、風も寒くない。

酒を賣る船、菓子を賣る船、うろ〳〵と漕ぎまはる。石炭を積む女の手拭が白い。

向う河岸の下の關はもう暮れた。壽永のみささぎは何の邊であらう。

なにを呼ぶか、人の聲が水にひゞいて遠近にきこえる。四面のかゝり船は追ひ〳〵に灯を揭げた。すべて源氏の船ではあるまいか。

わたしは敵に圍まれたやうに感じた。

（『旅すゞり』より）

蟹

滿洲の遼陽城外、すべて綠楊の村である。秋雨の晴れた夕に宿舍の門を出ると、斜陽は城樓の壁に一抹の餘紅をとゞめ、水のごとき雲は喇嘛塔を掠めて流れてゆく。

南門外は一面の畑で、馬も隱るゝばかりの高粱が、俯しつ仰ぎつ秋風に亂れてゐる。

村落には石の井があつて、その邊は殊に楊が多い。楊の下には支那人が籃をひらいて蟹を賣つてゐる。蟹の大なるは尺を超えたものもある。

『平江紅樹賣鱸魚』は王漁洋の詩である。夕陽村落、楊の深いところに蟹を賣つてゐるのも、一種の詩料になりさうな情趣で、今も忘れ得ない。

（『旅すゞり』より）

番町皿屋敷

登場人物――青山播磨。用人柴田十太夫。奴權次、權六。青山の腰元お菊、お仙。澁川の後室眞弓。放駒の四郎兵衞。並木の長吉。橋場の仁助。聖天の萬藏。田町の彌作。ほかに若黨、陸尺、茶屋の娘など。

（一）

麴町、山王下。正面はたかき石段にて、上には左右に石の駒寄せ、石燈籠などあり。櫻の立木の奧に社殿遠くみゆ。石段の下には櫻の大樹、これに沿うて上のかたに葭簀張の茶店あり。店さきに床几二脚をおく。明曆の初年、三月なかばの午後。

（幡隨院長兵衞の子分並木の長吉、橋場の仁助は床几に腰をかけてゐる。茶店の娘は茶を出してゐる。宮神樂の音きこゆ。）

娘。お茶一つおあがりなされませ。

長吉。櫻も今が丁度盛りだね。

娘。こゝ四五日のところが見頃でございます。それに當年はいつもよりも取分けて見事に咲きました。

長吉。山王の櫻といへば、おれたちが生れねえ先からの名物だ。山の手で櫻と云やあ先づここが一番だらうな。

仁助。それだから俺達もわざ〳〵下町から登つて來たのだ。それで無けりやあんまり用のねえところだ。

長吉。これ、神樣の前で勿體ねえことを云ふな。山王樣の罰があたるぞ。

仁助。山王樣だつて怖えものか。おれには觀音樣が附いてゐるのだ。

娘。お背中にぢやあございませんか。（笑ふ。）

仁助。やい、やい、こん畜生。ふざけたことを云やあがるな。

長吉。まあ、靜かにしろ。どうせ姐さんに褒められる柄ぢやあねえや。はゝゝゝゝ。

娘。ほゝ、とんだ粗相を申しました。

（ふたりは茶をのんでゐる。石段の上より青山播磨、二十五歲、七百石の旗本。あみ笠、羽織、袴。あとより權次、權六の二人、いづれも奴にて附添ひ出づ。）

播磨。櫻はよく咲いたな。

權次。まるで作り物のやうでございまする。

權六。たなばたの赤い色紙を引裂いて、そこらへ一度に吹き付けたら、斯うもあらうかと思はれまする。

權次。はて、むづかしいことを云ふ奴ぢや。それより一口に、祭禮の軒飾りのやうぢやと云へ。はゝゝゝゝ。

（三人は笑ひながら石段を降りる。）

娘。お休みなされませ。

（三人は上の方の床几にかゝる。長吉と仁助は見てさゝやき合ふ。娘は茶を汲んで三人に出す。）

長吉。おい、ねえさん。こつちへももう一杯呉んねえ。

娘。はい、はい。（茶を汲んで來る。）

長吉。（飲まうとしてわざと顏をしかめる。）こりやあ熱くつて飲めねえや。

（長吉はわざとその茶を播磨の前にぶちまける。）

權次。やあ、こいつ無禮な奴。なんで我等のまへに茶をぶちまけた。

權六。かう見たところが粗相でない。おのれ等、喧嘩を賣らうとするのか。

長吉。賣らうが賣るめえがこつちの勝手だ。買ひたくなけりやあ買はねえまでだ。

仁助。一文奴の出る幕ぢやあねえ、引込んでゐろ。こつちは手前達を相手にするんぢやあねえや。

播磨。然らば身どもが相手と申すか。（笠を取る。）仔細もなしに喧嘩を賣る、おのれ等のやうならずものが八百八町にはびこればこそ、公方樣お膝元が騒がしいのぢや。

（この以前より放駒の四郎兵衛、町奴のこしらへにて子分二人をつれ、石段を降り來り、中途に立ちて窺ひゐたりしが、この時ずつと前に出る。）

四郎兵衛。仔細もなしに咬み付くやうな、そんな病犬は江戸にやあゐねえや。白柄組とか名を付けて、町人どもを嚇してあるく、水野十郎左衛門が仲間のお侍、青山播磨樣と仰しやるのはたしかあなたでごぜえましたね。

萬藏。さうだ、さうだ。この正月に山村座のまへで、水野と喧嘩をしたときに、たしかに見かけた侍だ。

彌作。違えねえ。坂田の何とかいふ奴と一緒になつて、その白柄をひねくり廻したのを、俺あちやんと覺えてゐるんだ。

（長吉と仁助は床几をゆづり、四郎兵衛はまん中に腰をかける。）

播磨。むゝ。白柄組の一人と知つて喧嘩を賣るからは、さてはおのれは花川戸の幡隨院長兵衛が手下の者か。

四郎兵衛。お察しの通り、幡隨院長兵衛の身内でも、ちつとは知られた放駒の四郎兵衛。

長吉。並木の長吉。

仁助。橋場の仁助。

萬藏。聖天の萬藏。

彌作。田町の彌作だ。

權次。やい、やい。こいつら素町人の分際で、歴々の御旗本衆に衝突かうとは、身のほど知らぬ奴とんぼめ等。それほど喧嘩が賣りたくば、殿樣におねだり申すまでもなく、云値でおれ達が買つてやるわ。

權六。幸ひ今日は主親の命日といふでも無し、殺生するにはあつらへ向きぢや。下町から[illegible]つて來た土[illegible]、山の手奴が引つ摑んで、片つぱしから溜池の泥に埋めるからさう思へ。

四郎兵衛。そんな嚇しを怖がつて、尻尾をまいて逃げるほどなら、白柄組が巢を組んでゐる此の山の手へのぼつて來て、わざ〳〵喧嘩を賣りやあしねえ。こつちを溜池へぶち込む前に、そつちが山王の括り猿、御子供衆のお土産にならねえやうに覺悟をしなせえ。

播磨。われ〳〵が頭とたのむ水野殿に敵意を挾んで、とかくに無禮をはたらく幡隨院長兵衛、いつかは懲してくれんと存じて居つたに、その子分といふおのれ等が、わざと喧嘩を挑むからは、もはや容赦は相成らぬ。望みの通り青山播磨が直々に相手になつてくるゝわ。

四郎兵衛。いゝ覺悟だ。お逃げなさるな。

播磨。なにを馬鹿な。

子分四人。えゝ、休めちまへ、休めちまへ。

（播磨も權次權六も身がまへする。四郎兵衛、その他四人も身構ひして詰めよる。[illegible]はうろ〳〵してゐる。この時、陸尺に女乗物をかゝせ、若黨一人附添ひて走らせ來り、喧嘩のまん中へ乗物をおろす。）

長吉。おい、おい。お前達も目さきが利かねえ。

仁助。こゝへそんなものを卸してどうするんだ。

二人。退いてくれ、退いてくれ。

(權次權六は若黨の顏を見ておどろく。)

權次。おゝ、こなたは小石川の。

權六。青山樣の御乘物か

(乘物の戸をあけ、青山の後室眞弓、五十餘歲、品格すがたにて出づ。)

播磨。おゝ、小石川の伯母上、どうしてこゝへ……。

眞弓。赤坂の菩提所へ參詣のかへり路、よいところへ來合せました。天下の御旗本ともあるべき者が、町人どもを相手にして、達引とか達入とか、毎日毎日の喧嘩沙汰、さりとは見あげた心掛けぢや。不斷からあれほど云うて聞かしてある伯母の意見も、そなたといふ惡たれ馬の耳には念佛さうな。主が主なら家來までが見習うて、權次、權六、そち達も惡あがきが過ぎまするぞ。

權次 權六。あい、あい。(頭を押へてうづくまる。)

四郎兵衛。見れば御大家の後室樣、喧嘩のまん中へお越しなされて、このお捌きをお付けなさる思召でござりますか。御見物ならもう少しおあとへお退り下さりませ。

眞弓。差出た申分かは知りませぬが、この喧嘩はわたしに預けてはくださりませぬか。播磨はあとで嚴しう叱ります。まあ堪忍して引いてくだされ。

四郎兵衛。さあ。(思案する。)

長吉。でも、このまゝで手を引いては。

仁助。親分に云譯があるめえぜ。

[illegible]。今更あとへ引かれるものか。

彌作。かうなるからは命の取遣りだ。

四人。かまはずに遣つちまへ、遣つちまへ。

眞弓。不承知とあれば、わたしがお相手。

四郎兵衛。え。

眞弓。それとも素直に引いてくださるか。

四郎兵衛。こりやあ困りましたね。いくら御武家にしたところが、女を相手に町奴がまさかに喧嘩もなりますまい。喧嘩は元より出たとこ勝負、けふに限つたことでもござりませぬ。お言葉に免じて、こゝは素直に歸りませう。長吉も仁助も蟲をこらへろ。

眞弓。よう聞き分けて下された。それならこゝはおとなしう。

四郎兵衛。どうも失禮をいたしました。もし、白柄組のお侍。いづれ又どこかで逢ひませうぜ。(長吉仁助等に。)今聞く通りだ。さあ、みんな早く來い、來い。

長吉 仁助。あい、あい。

(四郎兵衛は先にたち、長吉と仁助と子分二人は去る。)

眞弓。これ、播磨。こゝは往來ぢや。詳しいことは屋敷へ來た折に云ひませうが、武士たるものが町奴とかの眞似をして、白柄組の神祇組のと、名を聞くさへも苦々しい。喧嘩がなんで面白からう。喧嘩商賣は今日かぎり思ひ切らねばなりませぬぞ。

播磨。はあ。

眞弓。きかねば伯母は勘當ぢや。わかりましたか。

播磨。はあ。

眞弓。それ。

(眞弓は眼で知らすれば、陸尺は乘物を舁きよせる。眞弓は乘物に乘らんとして、再び首を出す。)

眞弓。これ、播磨。そなたが喧嘩をするといふも、一つにはいつまでも獨身でゐるからのことぢや。この間もちよつと話した飯田

町の大久保の娘、どうぢや、あれを嫁に貰うては。

播磨。さあ。（迷惑さうな顔。）喧嘩のことは兎もかくも、その縁談の儀は……。

眞弓。嫌ぢやと云ふのか。（かんがへる。）ほかの事とも違うて、これは無理強にもなるまいか。そんならそれはそれとして、かへす〳〵も白柄組とやらの附合は、きつと止めねばなりませぬぞ。

播磨。はあ。

（眞弓は乗物の戸をしめる。若黨等は播磨に一禮して向うへ乗物を舁いてゆく。）

權次。殿樣。悪いところへ伯母御樣がお見えになりまして。

權六。わたくし共までが飛んだお灸を据ゑられました。

播磨。（笑ふ。）伯母樣は苦手ぢや、所詮あたまは上らぬわ。今伯母樣に叱られた、その白柄組の水野どのは、仲間のものを誘ひ合せて、今夜わが屋敷へまゐらるゝ筈ぢや。醉うたら又面白い話があらう。

（風の音して櫻の花ちりかゝる。）

播磨。おゝ、散る花にも風情があるなう。どれ、そろ〳〵歸らうか。

權次權六。はあ。

（權次は茶代を置く。兩人は禮をいふ。播磨は行きかゝる。）

（二）

番町青山家の座敷。二重屋體にて、上のかたに床の間、つゞいて襖。庭には飛び石、上の方に井戸ありて、井戸のほとりに大いなる柳を栽ゑたり。おなじ日の夕刻。

（上の方より庭づたひに、用人柴田十太夫が先に立ち、腰元お菊、お仙の二人出づ。ふたりは高麗燒の皿五枚を入れたる箱を持つ。）

十太夫。これ、大切の御品ぢや。氣をつけて持つてゆけ。よいか。

二人。かしこまりました。

十太夫。唯今お藏から取出したばかりで、別に仔細もあるまいが、念には念を入れよと云ふこともある。お勝手へ持つて退るまでに兎もかくも一度吟味をいたさう。その箱をそれへ運べ。

二人。はい、はい。

（三人は縁にあがる。お菊は先づ箱をあけて五枚の皿を出す。十太夫は眼鏡をかけて一々にあらためる。つゞいてお仙も五枚の皿を出す。十太夫はおなじく檢めてうなづく。）

十太夫。よし、よし、十枚ともに別條ない。くどくも申すやうなれど、これは大切のお品ぢや。かならず粗相があつてはならぬぞ。

お仙。御用人樣。この十枚のお皿が何うしてそのやうに大切なのでござりまする。

十太夫。そちは新參、詳しいわけをよく知るまいが、このお皿は高麗燒で、御先祖樣から代々傳はるお家の寶ぢや。萬一あやまつてその一枚でも打碎いたら嚴しいお仕置、先づ命はないものと覺悟せい。

お仙。え。（顫へる。）

十太夫。ぢやによつて滅多に取出したことはないのぢやが、今宵は白柄組のお頭水野十郎左衞門樣がお越しに相成るについて、殿樣格別のお心入れで、御料理の器にそのお皿をおつかひなさる。又しても諄く申すやうぢやが、一枚一枚鄭重に取りあつかへ。割るは勿論、疵をつけても一大事ぢやぞ。よいか。

二人。はい、はい。

十太夫。殿樣がお歸りになるまでに、あちらの

お客間を取片附けて置かねばならぬ。では、そのお皿を元のやうに箱に入れて、お勝手の方へ運んでおけ。やれ、忙がしいことぢや。

（十太夫はそゝくさと庭に降り、下手の方に去る。お仙はあとを見送る。）

お仙。ほんにいつも〱氣ぜはしいお人ぢや。併しそれほど大切なお皿ならよく氣をつけて取扱はねばなるまい。なう、お菊どの。はて、お前は何をうつとりとしてゐるのぢや。

お菊。（突然に。）お仙どの。

お仙。なんぢやえ。

お菊。このごろ殿樣に御縁談があるとかいふ噂ぢやが、お前それをほんたうと思ふかえ。

お仙。さあそれは、新參のわたしには判らぬが、なにやらそんなお噂がないでも無いやうな。

お菊。無いでもないやうな。（口のうちで繰返す。）若しあつたとしたら。

お仙。おめでたいことぢや。

お菊。さうかも知れぬ。（腹立たしげに云さしが又思ひ直して。）いや、それは譃であらう。譃ぢや、譃ぢや。うそに違ひない。

お仙。でも、殿樣ももうお年頃ぢや。奥樣をお貰ひなさるに不思議はあるまい。

お菊。奥樣……。（又腹立たしげに。）内の殿樣は奥樣などお貰ひなさる筈がないのぢや。

お仙。はて、そんなに怖い顏をして、なぜわたしを睨むのぢや。お前はこのごろ樣子が變つて、ぢつと考へてゐるかと思へば、急にじれたり怒つたり、なにか氣合も惡いのかえ。

（お菊はだまつて俯向いてゐる。琴唄のやうな獨吟になる。）

〽世の中の、花はみじかき命にて、春は胡蝶の夢うつゝ、なにが戀やら情やら。

（お仙は五枚の皿を片附けて箱に入れる。お菊はやはり考へてゐる。）

お仙。おとなりのお屋敷では又いつものお琴のお浚ひが始まつたやうな。（箱をかゝへて起つ。）さあ、おまへも早うお勝手へ……。わたしは一足さきへ行きますぞえ。

（お仙は庭に降りて下の方に去る。）

お菊。（苛々して。）えゝ、なんとしたものであらう。わたしといふ者を打捨てゝ、ほかの奥樣をお貰ひ遊ばすやうな、そんな譃つきの殿樣でないことは、不斷からよく知つてゐるものの、小石川の伯母御樣の御媒介で、飯田町の大久保樣とやらから奥樣をお迎へなさる、内相談があるとやら。（また考へる。）いや、それはほんの人の噂ぢや。おゝ、さうぢや。現にこのあひだも殿樣にそれを云うて念を押したら、えゝ、馬鹿め、おれを疑ふにも程がある。まあ、默つて長い目で見てをれと、たゞ一口にお叱りなされた。叱られて嬉しかつたも束の間で、又なんとやら疑ひの芽が噴いてくる……。えゝ、もうどうともなれ。

〽物に狂ふか青柳も、風のまに〱もつれて解けて、絲のみだれの果しなき。

（お菊は少し悶れたる氣味にて皿を片づけてゐたりしが、また手をとめて考へる。）

お菊。よもやとは思ふものの、萬一ほんたうに奥樣が來るやうであつたら……。えゝ、氣の揉めることぢや。たとひ口ではなんと仰せられても、男はいつはりの多いものとやら。なんとかして殿樣の、心の奥を確かに見きはめる工夫はないものか。（思案しながら我手に持つたる皿にふと眼をつける。）お家に取つては大切な寶といふこの皿を、もしも妾が打碎いたら……。（又かんがへる。）とは云ふものの、大切なお道具を、むざ〱毀すは勿體ない。

〽雲さへ暗き雨催ひ、故郷の空はいづこぞと、ゆくてに迷ふ雁の聲。

播磨。はて、騒ぐな。どうぢや、菊。十太夫はあのやうに申して居るが、よもやさうではあるまいな。はつきりと申開きをいたせ。

お菊。（胸を押へて。）實は御用人様のおつしやる通り……。

播磨。わざと自分の手で打割つたか。

お菊。はい。

播磨。むゝ。（十太夫と顔を見あはせる。）さりとて氣が狂うたとも思はれぬ。それにはなにか仔細があらう。わしが直々に吟味する。十太夫はしばらく遠慮いたせ。

十太夫。いや、はや、呆れた女でござる。こりや、菊……。

播磨。（じれる。）よい、よい。早くゆけ。

（十太夫は上のかたに引返して去る。）

播磨。こりや、菊。そちはなんと心得て、わざと大切の皿を割つた。仔細を申せ。（物柔かに云ふ。）

お菊。おそれ入りましてござりまする。

播磨。最前も申す通り、その皿を割れば手討に逢うても是非ないのぢや。それを知りつゝ自分の手で、わざと打割りしとあるからは、よくよくの仔細がなくてはなるまい。つゝまず云へ。どうぢや。

お菊。もう此上はなにをお隠し申しませう。由ないわたくしの疑ひから。

播磨。疑ひとはなんの疑ひぢや。

お菊。殿様のお心をうたがひまして……。

（播磨はだまってお菊の顔を睨む。）

お菊。このあひだも四度お耳に入れました通り、小石川の伯母御様の御媒介で、どこやらの御屋敷から奥様がお輿入れになるかも知れぬといふお噂。あけても暮れてもそればつかりが胸に支へて……。恐れながら殿様のお心を試さうとて……。

播磨。むゝ。それで大方仔細は讀めた。それに就いてこの播磨が、そちを唯一時の花とながめて居るか、但しはいつまでも見捨てぬ心か。その本心を探らうために、わざと大切の皿を打割つて、皿が大事か、そちが大事か、播磨が性根をたしかに見屆けようと致したのであらう。菊、たしかにさうか。

お菊。はい。

播磨。それに相違ないか。

お菊。はい。

（播磨は矢庭にお菊の襟髪を取つて縁にねぢ伏せる。）

播磨。えゝ、おのれ、それ程までにして我が心を試さうとは、あまりと云へば情ない奴。こりやよく聞け。天下の旗本青山播磨が、戀には主家來の隔てなく、召仕へのそちと云ひかはして、日本中の花と見るはわが菊一人と、弓矢八幡、律儀一方の三河武士がたゞ一筋に思ひつめて、白柄組のつきあひにも吉原へは一度も足ぶみせず、丹前風呂でも女子のさかづきは手に取らず。かたき同志の町奴と三日喧嘩せぬ法もあれ、一夜でもそちの傍を離れまいと、かたい義理を守つてゐるのが、嘘や僞りでなることか、積つてみても知るゝ筈。なにが不足でこの播磨を疑うたぞ。

（お菊の襟髪をつかんで小突きまはす。お菊は倒れながらに泣く。）

お菊。その疑ひももう晴れました。お免しなされてくださりませ。

播磨。いゝや、その疑ひは晴れようとも、うたがはれた播磨の無念は晴れぬ。小石川の伯母はおろか、親類一門がなんと云はうとも、決してほかの妻は迎へぬと、あれほど誓うたをなんと聞いた。さあ、確と申せ。なにが不足でこの播磨を疑うた。なにを證據にこの播磨を疑うた。

お菊。おまへ様のお心に曇りのないに、不斷か

らよく知つてゐながらも、女の淺い心からつい疑うたはわたくしが重々のあやまり、眞平御免くださりませ。

播磨。今となつて詫びようとも、罪のないものを一旦疑うた、おのれの罪は生涯消えぬぞ。さあ、覺悟してそれへ直れ。

（播磨はお菊を突き放して刀をひき寄せる。下の方より庭づたひに奴權次走り出づ。

權次。もし、殿樣。しばらくお控へ下さりませ。さつきから物蔭で篤と立聞きをして居りましたら、お菊どのが大切のお皿を割つたとやら、碎いたとやら。そりやもうお菊殿の落度は重重、そのかぼそい素つ首をころりと打落されても、是非もない羽目ではござるものの、多寡が女子ぢや。骨のない海月や豆腐を料理なされても、なんの御手柄へもござるまい。さつきの喧嘩とは譯が違ひまする。こゝは何分この奴に免じて、そのお刀はお納めなされて下さりませ。

播磨。そちが折角の取りなしぢやが、この女の罪は赦されぬ。なんにも云はずに見物いたせ。

權次。一旦からうと云ひ出したら、あとへは引かぬ御氣性は、奴もかねて呑み込んでは居りまするが、なんぼ大切の御道具ぢやと云うても、ひとりの命を一枚の皿と取替へるとは、このごろ流行る取替べえの飴よりも餘り無造作の話ではござりませぬか。どうでもお胸が晴れぬとあれば、殿さまの御名代にこの奴が、女の頬桁ふたつ三つ擲倒して、それで御仕置はお止めになされ。

播磨。えゝ、播磨が今日の無念さは、おのれ等の奴が知るところでない。いかに大切の寶なりとも、人ひとりの命を一枚の皿に替へようとは思はぬ。皿が惜しさにこの菊を成敗すると思うたら、それは大きな料簡ちがひぢや。菊。その皿をこれへ出せ。

お菊。はい。

（時の鐘きこゆ。お菊は箱より恐る〳〵一枚の皿を出す。播磨はその皿を刀の鍔に打ちあてゝ割るに、お菊も權次もおどろく。）

播磨。それ、一枚……。菊、あとを數へい。

お菊。二枚……。

（お菊は皿を出す。播磨は又もや打割る。）

播磨。それ、二枚……。次を出せ。

お菊。三枚……。

（播磨はまた打割る。權次も思はずのび上る。）

權次。おゝ、三枚……。

播磨。次を出せ。

お菊。四枚……。（播磨は又もや打割る。）

播磨。四枚。……もう無いか。

お菊。あとの五枚はお仙殿が別のお箱へ入れて持つてまゐりました。

播磨。むゝ。播磨が皿を惜むのでないのは、菊にも權次にも判つたであらうな。青山播磨は五枚十枚の皿を惜んで、人の命を取るほどの無慈悲な男でない。

權次。それほど無慈悲でないならば、なんでむざむざ御成敗を……。

播磨。そちには判らぬ。默つてをれ。しかし菊には合點がまゐつた筈。潔白な男のまことを疑うた、女の罪は重いと知れ。

お菊。はい、よう合點がまゐりました。このうへは何のやうな御仕置を受けませうとも、思ひ殘すことはござりませぬ。女が一生に一度の男。（播磨の顔を見る。）戀にいつはりの無かつたことを、確かにそれと見きはめましたら、死んでも本望でござりまする。

増補信長記

登場人物――織田弾正忠信長。権中納言惟房。明智日向守光秀。杉谷の善住坊。[illegible]岡闇利。山岡対馬守貞正。堀尾茂助吉晴。池田勝三郎信輝。中川瀬兵衛清秀。高山右近。森蘭丸。中村孫平次。村井又右衛門。漁師六右衛門。六右衛門の娘お松。行者坊快全。相模坊法達。但馬坊来覚。漁師甲作。漁師八藏。餅を賣る商人。信長の家來、惟房の從者など。

上の巻

(一)

江州大津の浦、漁師六右衛門の家。上のかたによせて二重屋體。屋體の上のかたに佛壇、その下は押入。つゞいて縄暖簾の出入口。下のかたは古びたる壁にて、簑笠などをかけてあり。その前には爐を切りてあり。上のかたは低き窓にて、上下の壁も破れたり。屋體の下のかたには、少しく、あとへ下げて竈所、一つ竈など置きて、軒に縄暖簾を垂れたり。舞臺の角に柳の立木あり。下のかたの奥には琵琶の湖水遠くみゆ。

(元亀二年九月十二日の午後。六右衛門のむすめお松、十七八歳、竈の前に坐つてゐる。漁師甲作は[illegible]を着け、おなじく八藏は古き簑をつけて網を持ち、竹縁に腰をかけてゐる。波の音静かにきこゆ。)

甲作。なんだか空模様が可怪くなつて來たな。

八藏。八月のなかごろから照りつゞいたのだから、もうそろ／＼降つても好い頃だ。

甲作。それは世間の人の云ふことで、こつちとらの商賣には雨や風は禁物だ。

お松。(空をみる。)けふは朝からどんよりと陰つてはゐますけれど、あれ、あの通り、比叡の方には些とも雲が見えませぬゆゑ、大した時化もござりますまい。

八藏。ほんに比叡の頂上は晴れてゐる。この分ならば心配することもあるまいよ。

お松。比叡の山おろしが吹き出すと、湖水が暴れると昔からきまつてゐますが、好い鹽梅にこの秋は些とも風が吹きませぬ。

甲作。山下しの吹かないのは結構だが、そのかはりに山法師めが暴れ出して、こゝらでも随分迷惑してゐる。どうかあれを鎮めて貰ふ工夫はないかなう。

八藏。織田様の御上洛のあひだは、都もこゝらも一時は静かであつたが、その織田殿が北國へ御出馬になると、鬼の留守に洗濯とやらで、又ぞろ山法師どもが暴れ出したには困つたものだ。

お松。ほんにこのごろは物騒で、夜になるとうつかり一人では歩かれませぬ。

甲作。坊主のくせに女でも何でも攫つて行くといふから、お松坊のやうな若い女はなほ／＼氣をつけねばなるまいよ。

お松。忌なことでござりますなう。

(下のかたより漁師六右衛門、五十余歳、魚籠をさげて出づ。)

お松。（起つて縁を降りる。）おゝ、父さん。けふは早うござんしたな。
八藏。思ひのほかに漁があつたのか。
六右衞。（頭をふる。）どうして、どうして。あんまり天氣がつゞくせゐか、このごろは毎日思はしい漁もないので、いま／＼しいから好加減で戻つて來た。それでも見てくれ、こんな奴が二尾獲つた。（魚籃をみせる。）
甲作。なるほど、これは大きな鯛だ。父さん、ちかごろの大手柄だぜ。
六右衞。（打笑む。）と云つて、自慢するほどの物でもないが、から手で歸るよりはまあ優しか。こんなのが五六尾も獲れゝばなう。はゝゝ。
八藏。父さんもなか／＼慾が深いぞ。
三人。はゝゝゝ。
（お松は魚籃をうけ取りて、竹縁の端に置く。六右衞門は草履をぬぎて縁にあがる。）
六右衞。みんなはこれから出かけるのか。雨支度で用心の好いことだな。だが、日がくれたら又どんなに風が變らうも知れぬ。まあ、まあ、用心に如くはあるまいよ。
お松。用心と云へば、このごろは世間がなんだか騒がしいといふ噂。日の暮れぬうちに、いつもの酒屋まで鳥渡一走り行つて來ませう。（臺所へ壺を取りにゆく。）
甲作。相變らず毎晩寢酒をやりなさるのかね。
六右衞。若いときからの道樂で、どんな晩でも一杯引つかけなけりやあ寢付かれないのだ。板子一枚下は地獄といふ危い商賣を、この年になるまで遣つてゐるのも好きな酒が飲みたいのと、ひとりの娘が可愛いばつかりだ。
お松。（出で來る。）では、行つて來ますぞ。
六右衞。早う行つて來いよ。
お松。あい、あい。ふたりの衆もわたしの歸るまで遊んでゐてくだされ。
二人。あい、あい。
（お松は酒壺を持ちて、下のかたに去る。甲作と八藏はあとを見送る。）
八藏。お松坊もだん／＼好い娘になるなう。
甲作。なんでもこの大津の町では、一番の容貌よしだといふ評判だ。
六右衞。（嬉しげに。）まさかそれ程でもあるまいが、おれの娘にしては出來過ぎた方だ。それにおれが人並はづれた子煩惱と來てゐるから、なほ／＼可愛さが優して來る。どうかまあ好い聟でも取つて早く安心したいものだ。
甲作。かみさんは疾うに死んだし、ほかに子供は無し。天にも地にも掛けがへのない一人娘のお松坊だから、可愛いのも道理だ。
八藏。おれ達もせいぜい氣をつけて、好い聟どのを見つけて世話をしようよ。
六右衞。ふだんから片意地者の六右衞門だが、娘のためなら誰にでも手をさげる、頭も下げる。どうぞ好い聟があつたら世話をしてくれ。たのむぜ。
甲作。よし、よし、おれ達も屹と頼まれた。
八藏。まあ、まあ、安心してゐるがいゝ。
六右衞。ほんたうに呉々もたのんで置く。おまへ達はまだ若いから判るまいが、子の可愛さは又格別だよ。
二人。さうだらうよなう。
（向うより叡山の悪僧伯耆坊快全、相模坊法達、但馬坊來典の三人は足駄または草履にて、薙刀または八角棒を杖にして出づ。上のかたより餅を賣る商人出づ。）
商人。これは都の名物、笹粽でござい。
快全。こりや待て、待て。
商人。へい、へい。粽の御用でござりますか。
法達。いや、餅を買ふのでない。其方、けふは幾らほどの商賣があつた。

商人。へい、五十文ばかりござりました。

（三人は顏をみあはせる。）

快全。そればかりでは仕方がな〳〵、無いにはましぢや。兎も角もその五十文を置いてゆけ。

商人。え。

來典。おのれが賣溜めの錢を置いてゆけと云ふのぢや。ぐづ〳〵申すと命がないと思へ。

（薙刀を突付ける。）

商人。へい、へい。どうぞお助けくださりませ。

（商人は顫へながら賣溜めの錢をわたせば、來典は取つて懷ろに入れる。）

法達。われ等は下戸ぢや。ついでにその餅を三つ四つ置いてゆけ。

商人。へい、へい。

（粽を出せば、法達は取つて食ふ。）

快全。もう用はない。行け、ゆけ。

商人。へい、へい。（早々に逃げてゆく。）

快全。どうやら空が陰つてまゐつたなう。（云ひつゝ甲作等をみかへる。）こりや漁師。

八藏。甲作。へい。（顏をみあはせる。）

快全。其方の蓑を貸してくれ。

二人。え。

快全。空が陰つて來たによつて、蓑をかせと申すのぢや。えゝ、わからぬか。

（快全はつか〳〵寄つて、甲作の蓑をつかんで前へひき出す。）

甲作。蓑を貸せと仰しやるのでござりますか。

快全。知れたことぢや。早くぬげ。

（甲作は餘儀なく蓑をぬぐ。快全は取つて小脇にかゝへる。）

法達。こりや、そちらの漁師も蓑をぬげ。

八藏。へい、へい。

（八藏も蓑をぬぐ。法達は手に取りて顏をしかめる。）

法達。えゝ、こんな古蓑がどうならうぞ。（なげつける。）

八藏。要らぬとあれば丁度幸ひでござります。

（蓑を拾ひとる。）

甲作。おれは新しい蓑を着て來たばつかりに、とんだ追剝に出逢つてしまつた。

來典。なに、追剝ぢやと……。怪しからぬことを申すな。

甲作。ひとの着てゐるものを無理に剝げば追剝でござりませう。

八藏。おゝ、さうだ、さうだ。

快全。なに、おのれ無禮な奴、ゆるさぬぞ。

（快全等三人は立ちかゝる。六右衛門は縁をかけ降りて押分ける。）

六右衛。まあ、まあ、お待ちくださりませ。

法達。いや、ならぬ、ならぬ。

六右衛。でもござりませうが、わたくしが代つてお詫をいたしますれば……。（甲作等に眼くばせして。）お前達はこゝを早く、早く……。

二人。ぢやあ、父さん。たのんだぜ。

（二人は早々に逃げてゆく。）

來典。えゝ、待て、待て。

（三人は追はんとするを、六右衛門は遮る。）

六右衛。まあ、まあ、わたくしにお任せくださりませ。

快　。（うなづく。）よい、よい、しからば今度は其方が相手ぢや。そこ一寸も動くまいぞ。

（快全は縁に腰をかける。）

六右衛。御立腹は重々御道理ではござりますが、御覽の通りの濱育ち、失禮の段はまつぴら御免くださりませ。

快全。いや、ならぬ。その過怠としてわれ〳〵に酒を買へ。魚を出せ。

六右衛。え、御出家様が酒や魚を……。

快全。おゝ、山法師とておなじ人間ぢや。酒も飲めば魚も食ふわ。

吉晴。なにかは知らぬが、わしは行く手といそぐ者ぢや。どうぞ放してくだされ。
（振切つてゆかんとするを、六右衞門は又捉へる。）
六右衞。もし、わたくしの大事の娘を取られました。どうぞ取返してくださりませ。
吉晴。（立ち停まる。）して、むすめを誰に取られたのぢや。
六右衞。あの山法師のあばれ者に……。
吉晴。むゝ。（向うを見る。）
六右衞。こりやもう寧そおれ一人で……。
（六右衞門は向うへ駈け行かんとするを、吉晴は止める。）
吉晴。はて、待たつしやれ。わしに思案がある。
（六右衞門は猶かけ行かんとするを、吉晴は止める。）

（二）

おなじく江州瀬田の城内。本縁つきの二重屋體にて、上のかたに床の間、つゞいて襖。下のかたに折廻して廊下。庭には松の立木などあり。
（おなじ日の夕刻。床には鎧兜をかざりて、織田信長は寮皮に坐す。森蘭丸その傍に控へる。下のかたには瀬田の城主山岡對馬守貞正が控へゐる。侍女兩人が後に立ちて、酒宴の體なり。）
信長。（さかづきを乾して。）杯は主人に返らすぞ。
貞正。お流れ頂戴いたしまする。
蘭丸。御念の入りたる御款待。殿をはじめ我々一同いづれも滿足に存じ申すぞ。
貞正。御挨拶痛み入つてござる。北國御出馬とうけたまはつて、いさゝか油斷いたして居つたる處、思ひよらぬ御上洛におどろき慌てゝ御迎ひに出でたる次第、諸事不行きとゞきの段々平に御容赦くだされい。
信長。信長の進退は電光石火じや。敵にも味方にも油斷させて、その不意をおどろかすが面白い。北國の淺井朝倉征伐と聞いて、京浪華の奴儕も油斷して居るところへ、不意に信長の旗が見えたら、かれらも定めて慌つるであらうよ。はゝゝゝゝ。
貞正。（返杯する。）して、このたびの御上洛は三好の殘黨御征伐でござりますか。
信長。三好松永の徒は多寡の知れたものだ。信長の威勢に氣を挫かれ、そこや彼處に這ひかがまつて、はかばかしい軍もよう出來まい。信長がこのたびの上洛はほかに仔細あつてのことだ。當てゝ見い。
貞正。はあ。（考へてゐる。）
信長。はゝ、判らぬか。蘭丸はどうだな。
蘭丸。それがしにも何分合點がまゐりませぬ。
信長。そちにも合點がまゐらぬと申すか。まあ、よいわ。やがて判らう。
（信長は笑ひながら杯を取る。侍女は酌をする。貞正の家來一人出づ。）
家來。申上げます。
貞正。何事だ。
家來。叡山よりの使として、杉谷の善住坊がまゐられました。
信長。山門より使の僧がまゐつたと……。すぐにこれへ案内せい。
貞正。ほかならぬ山門のお使であれば、粗相のないやうに心をつけい。
家來。はあ。（引返して去る。）
蘭丸。山門のお使、何事でござりませうな。
信長。坊主どもはそち達よりもさすがに眼が捷い。（笑ふ。）信長上洛と聞いて、大方はそれと氣取つたとみゆるわ。こりや、對馬。そちは唯今家來にむかつて、ほかならぬ山門のお

傳へ、粗相なきやうにいたせと申附けたな。

貞正。いかにも左樣申しました。

信長。山門がそれほど怖ろしいか。

貞正。おそろしいと申さうよりも、尊いもののやうに心得て居ります。

（信長は唯あざ笑つてゐる。下のかたの庭口より以前の家來は、叡山の僧杉谷の善住坊を案内して出づ。善住坊は二十七八歳、高足駄をはきたり。）

家來。これへ御案内つかまつりました。

貞正。よい、よい。

（家來は一禮して去る。）

蘭丸。御使僧御苦勞でござつた。

貞正。先づこれへお通りくだされ。

善住。御免。

（善住坊は緣にあがる。）

信長。（わざと高聲に。）おゝ、坊主來たか。それへ坐れ。

（善住坊はむつとしたるが、思ひかへして座に着く。）

貞正。して、お使の趣は……。

善住。山門の使者として我等が今日まゐつたは餘のことではござらぬ。織田どのに對面して、直々におたづね申したき儀がござる。確とお答へくだされうや。

信長。はゝ、大分むづかしいことを申すな。なんなりとも問ひたくば勝手に問へ。信長は返答に澁るやうな男ではないぞ。

善住。さらば問ひ申す。このたび北國をひきあげて俄に上洛せらるゝは、三好松永の一族征伐のためにあらず、まことは山門に討手を向けらるゝ御所存とか、世上では專ら風聞いたすが、この儀如何でござらうな。

（貞正と蘭丸は顏をみあはせる。）

信長。（事もなげに。）今もその噂をいたして居つたところだが、お身達はまことに耳が捷い。どこで聞いて來たか知らぬが、それはまことだ、紛れもない實說だ。いかにも信長、翌日にも人數を繰出して、山門を攻めほろぼさうと存じて居るのだ。

（貞正と蘭丸は再びおどろく。）

善住。これは以てのほかのこと、その仔細うけたまはらう。

信長。仔細はおのれ等の胸に問へ。

善住。仔細と申すはおそらく淺井朝倉に加勢の儀でござらう。いかにも山門の衆徒一致して、淺井朝倉兩家を援けしに相違なけれど、それを今更かぞへ立てゝ、攻め亡さうなんどとは、近頃卑怯でござらうぞ。

信長。（聲を勵しうして。）なにが卑怯だ。

善住。室町殿のおあつかひにて、織田淺井朝倉の三家は一旦和議をむすび、北國へ引揚げたではござらぬか。したがつて山門と織田殿とのあひだにも、なんの恨みも殘らぬ筈。

信長。その淺井朝倉めは、約束を破つて再び敵となつた。

善住。たとひ兩家が約束を破らうとて、山門に於ては些ともかゝり合のないこと。それを兎やかう云ひたてゝ、王城鎭護の靈場へみだりに弓矢を向けらるゝとは、悉皆亂心狂氣の沙汰、日吉山王の冥罰もおそろしいとは思はれぬか。

信長。だまれ、賣僧。日吉山王の冥罰がおそろしいなどと、勿體らしくいふ口の下で、なぜおのれ等は大俗凡夫にも劣つたる惡行を働くぞ。法師の身として酒を飲み、なまぐさきを食ひ、あまつさへ山內に女子をひき入れて、言語にたえたる白癡を盡すのみか、山門の威勢を嵩にきて、洛中洛外は云ふにおよばず、江州一圓を横行して、上は朝廷をかろんじ、下は萬民をなやます。おのれ等は佛徒にあらずして國賊だぞ。

善住。なに、國賊ぢやと……。（屹となる。）

信長。それが國賊であるまいか。國賊をほろぼして世を救ふは信長の務だ。

善住。取止めたる證據もなきに、さまざまに詞をかまへて衆徒を誹謗し、由緒尊き山門を國賊と罵るは言語道斷。もうこの上は問答無益ぢや。（起ちかゝる。）

貞正。いや、しばらく……。（法衣の袖をとらへる。）

善住。佛敵の信長と同席するは法衣の汚れぢや。そこ放されい。

（善住坊は袖を拂つて縁を降り、足駄を穿きてゆきかゝる時、下のかたの縁傳ひに堀尾茂助吉晴、衣服をあらためて出づ。）

吉晴。御坊、待たれい。

善住。なんぢや。（立ちどまる。）

蘭丸。おゝ、堀尾殿、戻られたか。

信長。茂助か。近う進め。

吉晴。はあ。（進み入る。）叡山のお使、しばらく元の席にお着きくだされ。

善住。そこまでゆくは面倒ぢや。用があらばここで聞かう。

（善住坊は足駄穿きのまゝにて縁に腰をかける。）

吉晴。唯今あれにて承はれば、取止めたる證據もなきに、衆徒を誹謗するとか申されたが、衆徒の亂暴狼藉は疑ひもなきこと。その證人をこれへ呼び出し申さうか。

信長。面白い。早く呼べ。

吉晴。はあ。（下のかたに向ひて呼ぶ。）六右衛門、これへ出い。

（下のかたの庭口より漁師六右衛門、小腰をかゞめて出で、庭先にうづくまる。）

吉晴。殿に申上げまする。これは大津の浦の漁師六右衛門と申す者、途中より同道仕つてござりまする。こりや六右衛門、大將の御前であるぞ。

六右衛。はあ。（平伏す。）

吉晴。唯今の一條を御前において逐一申上げい。

六右衛。へい、へい。（すこしく進み出る。）恐れながら申上げます。唯つた今わたくしの宿へ、三人連れの山法師が押掛けてまゐりまして、居あはせた者の着てゐる衣を剥ぎ取りました。

信長。むゝ。

六右衛。それからわたくしが捕つて來た魚二尾を魚籃ぐるみ攫つてまゐりました。それから娘が買つて來た酒も、みんな飲んでしまひました。

信長。おゝ、左樣か。

六右衛。まだまだそればかりではござりませぬ。忌がる娘を手籠めにしてお山へ擔いでまゐりました。

善住。（堪へかねて。）だまれ。

六右衛。いや、いや、默つてはゐられませぬ。お松はわたくしのひとり娘、大事の大事の孥。それを無理無體に連れて行かれましては……。

善住。だまれ。

六右衛。お前に云うてゐるのではござりませぬ。もし、殿樣。大事の子を取られた親のこころを、お察しなされてくださりませ。いかに山門の御威光でも、あまりと申せば無理非道でござります。

善住。えゝ、やかましい。默らぬか。

（善住坊は衝と寄つて、足駄にて六右衛門を蹴倒す。）

信長。（蘭丸をみかへる。）あれ、止めい。

蘭丸。（縁より駈け降りて善住坊を遮る。）御坊、待たれい。上意でござるぞ。

善住。なにが上意……。佛敵の信長に諂うて、

あること無いこと尾鰭を添へてしやべり立つる老ぼれめ。われ等の足許に踏みにじつて呉れるわ。

（又打ちかゝるを、蘭丸は遮る。）

六右衛。なんで嘘いつはりを申しませう。たとひ斬られても叩かれても、云ふだけのことは云はねばなりませぬ。どうか、娘を戻してくださりませ。

善住。それを我等が知つたことか。

信長。よい、よい。六右衛門とやらの訴へは信長がたしかに聞いた。娘はかならず取戻して遣はすほどに、安心して待つて居れ。

六右衛。（喜ぶ。）では、娘は取戻して下さりますか。もし、この通りでござります。（手をあはせて拝む。）

信長。山法師は憎いやつだな。（善住坊を見ながら云ふ。）

六右衛。ほんに憎い奴等でござります。

（善住坊怒つて又寄らうとするを、蘭丸は隔てる。）

吉晴。六右衛門、願ひの趣お聞きとゞけに相成つて、そちは定めて満足であらう。この上は長居は恐れ、早々に立帰つて御沙汰を待て。

六右衛。はい、はい、ありがたうござります。くどいやうではござりますが、何分ともに娘のことを……。

吉晴。それは我々が引受けた。

貞正。猶豫いたさずに、行け、行け。

六右衛。では、御免くださりませ。

（六右衛門は先づ信長に一禮し、更に一同に會釋して立去る。）

信長。坊主、どうだ。あのやうな證人が眼の前にあらはれても、山法師の悪行は跡方もないことだと申すか。（あざ笑ふ。）おのれ等も今日あすの中にはほろびる身の上ぢや。この世の名残りに好きな酒でも飲んでゆけ。うまい肴もこゝにあるぞ。

（侍女に眼くばせすれば、侍女どもは肴を載せたる三方とさかづきとを縁先に持ち出して、善住坊の前に置く。）

信長。酌は女子だ。十分に飲め。

善住。われ等は法師ぢや。葷酒山門に入るを許さぬが昔よりの掟ぢや。（顔をそむける。）

信長。嘘をつけ。はゝゝゝ。現におのれが同宿の坊主どもは、大津の町で酒をぬすみ、魚を奪つたと云ふではないか。

善住。余人は知らず、この善住は酒や肴に用はないのぢや。

信長。まだ僞りを申すのか。おのれのやうな強情の奴は、女子の酌では埒があくまい。茂助、蘭丸。その坊主めを取つておさへて、口を割つても酒を飲ませい。

貞正。それは餘りのこと、なにとぞ其儀は御容赦を……。（とりなし顔に云ふ。）

信長。そち達の知らぬことだ。控へて居れ。それ、両人、早くいたせ。

二人。はあ。

（吉晴は三方を善住坊の前につき付けて、銚子を取る。）

吉晴。無骨ながら拙者のお酌で、一獻汲まれい。

善住。むゝ、左ほどに強ひらるゝなら辭退もなるまい。折角のさかづきは斯うして受くるぞ。

（善住坊は三方の上の土器を取りて、矢庭に信長をめがけて打ち付ける。信長は身をかはして中らず。）

蘭丸。無禮者……。

（走りかゝつて善住坊に組みつく。吉晴も身を楯にして信長を圍ふ。）

信長。（怒る。）おのれ、重々憎い奴。動くな。

（信長は太刀を取りて起ちあがるを、貞正はあわてゝ支へる。）

貞正。恐れながらお手討の儀は……。

信長。えゝ、止むるな。放せ、放せ。

(下のかたの縁傳ひに明智日向守光秀出づ。)

光秀。その御成敗しばらく、お待ち下さりませう。

貞正。おゝ、よいところへ明智殿……。

光秀。殿もお鎭まりなされませ。蘭丸も待たれい。

蘭丸。むゝ。(善住坊をおさへし手を放す。)

信長。光秀。なにしに止めにまゐつた。

光秀。御立腹御もつともではござりまするが、法師にむかつて酒を强ひ、肴を勸め、かやうな椿事を仕出されしは、あまりに事を好みし爲され方。

信長。信長が惡いと申すか。

光秀。いや、日ごろの御氣性としては左もあるべきこととお察し申上げますれど、兎もかくも彼は山門の使。けふのところは一先づ御赦しあつて、糾すべき罪あらば改めて糾すが法でござらう。

貞正。なにとぞ御宥免のほどを、それがしも共々に願ひまする。

信長。そち達がそれほどに申すならば、どうで遲かれ速かれ誅伐すべき奴だ。けふ一日の命を延べてくれるわ。

光秀。早速のお聞濟みありがたう存じまする。善住坊も唯今聞かるゝ通りの次第、今日はこのまゝ穩便にお引取りくだされい。

善住。(思案して。)むゝ。しからば何事も和殿に免じて……。

光秀。お引取りくださるか。

善住。して、山門への御返事は。

光秀。それも光秀が心得申した。

(眼で知らせる。善住坊うなづく。)

善住。萬事はよきにお賴み申すぞ。

(云ひすてゝ善住坊は悠々と立去る。蘭丸は縁をあがりて座に復る。)

信長。酒宴は止めだ。そこらを取片附けさせい。

貞正。はあ。

(侍女どもを見かへれば、侍女は銚子三方などを片附けて退く。)

信長。茂助、都のありさまは何うであつた。

吉晴。商人に姿をかへて、京浪華の形勢を探つてあるきましたが、三好も松永も差當りては……。(笑ふ。)手も足も出ぬやうでござりまする。

信長。さうであらうよ。(おなじく笑ふ。)

吉晴。唯われ〳〵の眼にあまりまするは、山法師どもの亂行日に日に募りて、さながら、山賊も同樣の振舞、苦々しい儀にござりまする。

信長。ぢやによつて、もう一刻も捨て置かれぬ。今夜にも信長みづから行き向つて、彼の叡山を攻めほろぼすのだ。卽刻に出陣の用意いたせ。

吉晴。はあ。

信長。對馬も城にあるだけの人數を連れてゆけ。

貞正。では、どうでも山門を……。

信長。くどい、くどい。もうやがて日が暮るゝぞ。早ういたせ。(焦れる。)

貞正。はあ。

信長。兩人ともに早くゆけ。

二人。はあ。

(吉晴と貞正は一禮して早々に立去る。)

信長。光秀、そちも一緒にまゐれ。

光秀。仰せに戻るは恐れ入れど、山門征伐のおぼし立はなにとぞお見合せのほど願はしう存じまするが、この儀如何でござりませうや。

信長。山門征伐はならぬと申すか。

光秀。改めて申さずとも、比叡の山は王城の鬼門を守る、國家鎭護の大道場として、幾百年

のむかしより上下の信仰はなはだ厚く、畏れながら朝廷に於ても、山門に對しては常にこころを置かせたまひ、思ふにまかせぬものは鴨川の流れ、雙六の賽、山法師と仰せられしとか承はる。されば僧徒の亂暴もあながち今に始まりしにもござりませぬ。何事も唯々大目に御覽せらるゝが、天下を治むる御度量かと存じまする。

信長。（あざ笑ふ。）多くある家來のうちでも、光秀と秀吉とは、相當の分別ある奴だと思うてゐたに、それまでが同じやうな事を申すか。山門の由緒あることは信長もかねて存じて居る。かれらが山門の威に藉て、むかしよりさまざまの亂暴狼藉をはたらき、上を惱まし、下を苦むることも夢よく存じて居る。それを今日まで無事穩便に捨て置いたは因循姑息と申すものだ。信長にそのやうな我慢は出來ぬぞ。

光秀。天下を治むるには、堪忍も我慢も大切でござりまする。由緒ある山門に弓鐵砲を打ちかけ、神社佛閣を破壞して惡虐無道の名を取りたまはゞ、世の人望をうしなひて、味方も敵となる道理でござりませうぞ。

信長。國賊ともいふべき賣僧どもを踏み殺すが、なんの惡虐、なんの無道だ。總別天下の武將たるべき者が、佛に諂ひ僧におもねり、殊勝らしく念佛など唱ふるが、この信長の氣に入らぬわ。このごろでも小田原の北條早雲、甲斐の信玄、越後の謙信、いづれも人並みに弓矢を取りながら、頭を剃りまるめて口の念佛、いや何たるざまだ。

光秀。人間にも後の世と云ふものがござりまする。頭を剃ると否とを問はず、佛を尊み、僧をうやまひ、來世の幸ひを祈るが習ひ、まして弓矢を取つて殺生を常とするものは……。

信長。信長の來世は地獄でも極樂でもなんでも構はぬ。佛をたのむ用は無いのだ。（屹と上[illegible]る。）

光秀。さはござれども、今一度御思案を……。

（光秀進んで信長の袖をひく。）

信長。えゝ、うるさい。

（扇にて打拂ふ。光秀再びひき止めんとすれば、信長焦つてその額を礑と打つ。）

信長。蘭丸、まゐれ。

（信長は蘭丸を連れて、つかつかと奥に入る。光秀はぢつとあとを見送る。時の太鼓きこゆ。）

——幕——

下の卷

（一）

江州打出の濱。正面は琵琶湖を隔てゝ比叡山遠くみゆ。砂地の布を敷きて、諸所に松の立木あり。

（おなじ日の夜にて、舞臺の前には一面に浪幕をおろしてあり。織田の家來中村孫平次は武裝して槍を持ち、軍兵五人を率ゐて出づ。）

孫平次。山法師どもの亂暴狼藉、このごろいよいよ募るに就いて、殿には最早捨置かれがたく、今宵これより攻めよせて、たゞ一戰に踏み潰せとの嚴しいお觸れだ。

兵甲。敵は名に負ふ荒法師。

兵乙。險しき山坂を足場として、一同必死に防ぐ時は。

兵丙。なかなか手強いことでござらう。

孫平次。とは申しても多寡が法師武者だ。所詮われわれの相手ではないわ。山門に向つて弓を引くは好ましからぬことではあれど、殿の御命には背かれまい。猶豫せずに早くまゐる

れ。

五人。心得申した。

（孫平次は先に立ち、軍兵等もつゞいて上のかたに去る。浪の音。浪幕を切つて落すと、たちまち鐵砲の音きこゆ。織田の家來數人、上下より走り出づ。）

家來一。不意にひゞきし鐵砲の音は何事でござるな。

一同。何事でござる。

（一同はあたりを窺ひて立騷ぐ。下のかたより森蘭丸出づ。）

蘭丸。いづれもかならずお騷ぎあるな。お輿を目がけて鐵砲を打ちかけたる曲者ありしも……。（聲を高くし）狙ひは狂うた。殿に御別條はござらぬぞ。

一同。はあ。

蘭丸。立騷がずと控へて居られい。

一同。はあ。

（一同は鎮まりて控へる。下のかたより織田信長は家來に舁つ輿をかゝせ、徒歩にて出づ。あとより山岡對馬守貞正をはじめ、家來數人したがひ出づ。）

貞正。何者の仕業か存じませぬが、危いことでござりました。

信長。淺井朝倉の忍びの者か、但しは山法師どもの仕業か。兎にもかくにも信長を狙ひ討にせうとは、敵ながら小氣味のよい奴だな。

（鐵砲の音又ひゞく。一同は彈丸を避けるこゝろにて、いづれも地に伏す。信長は獨り立つてゐる。下のかたより堀尾茂助吉晴は槍を持ちて走り出づ。）

吉晴。一度ならず二度までも……。油斷のならぬことでござりまするな。

信長。今の彈丸は丁度わが袖を掠つて通つたわ。（笑ふ。）

吉晴。何にいたせ、あたりをよく／＼詮議いたしませいでは……。

（信長は頤にてまねく。吉晴は進み寄る。信長はなにか囁きおせば、吉晴はうなづく。）

貞正。して、これより矢はり坂本へ……。

信長。勿論のことだ。（空を見る。）おゝ、宵の闇は陰つてゐたが、思ひのほかに好い月が出たなう。

（月出でて、湖水の浪かゞやく。信長は悠々として上の方にあゆみ去る。貞正、蘭丸、家來どもは皆附き添ひてゆく。初めに出でたる家來數人と吉晴だけがあとに殘る。吉晴は家來を招きてさゝやけば、一同は心得て左右の木かげに隱れる。時の鐘きこゆ。向うより杉谷の善住坊は身輕にいでたち、火繩筒を持ちて走り出づ。）

善住。信長めの運の强さよ。

（歯がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。）

家來一同。それ、曲者……。

（左右から組んでかゝるを、善住坊は鐵砲を逆手に取りて打ち拂ふ。家來共は刀をぬく。善住坊も刀をぬきて暴れまはるに、いづれも少しく持餘して見えたるところへ、堀尾吉晴出で來りて鬪ひ、遂に善住坊の刀を打落して組みとめる。家來ども立寄りて善住坊に繩をかける。）

（二）

比叡山坂本口、信長の假陣所。舞臺は嶮しき山坂の下のやゝ平らなるところにて、諸所に天を凌ぐ杉の大樹あり。杉の梢には十二日の月青くかゝれり。正面には山坂又は杉木立、こなたより山内の堂塔、[illegible]

坊などみゆ。

（上のかたの杉木立のうちに陣幕を張りまはして、織田信長は床几に腰をかけてゐる。左右には山岡對馬守貞正、森蘭丸、村井又右衛門、中村孫平次、ほかに家來、軍兵等大勢控へてゐる。二ケ所ばかりに枯枝を積みて大篝火を焚く。山內にては遠く勤行の鉦。木魚の音などきこゆ。）

貞正。あれ、お聽きなされませ、討手の寄するを知らず顏に、寺々にて勤行の鉦の音、木魚の音、山內は鎭まりかへつて居ります。

蘭丸。木の葉をこぼるゝ夜露の音も、手に取るばかりに聞ゆる靜けさは、思ひのほかでござりまするな。

信長。討手が向ふとは知りながらも、さすがに今宵とは思ひ設けず、かれらも油斷してゐるのであらうよ。先手より未だなんの注進もないか。

又右衛。中川瀨兵衛、高山右近、この兩人よりは未だなんの注進もござりませぬ。

信長。なにを猶豫いたして居るのか。日ごろにも似ず遲いことだな。

貞正。武勇をほこる兩人も、山門に向つて弓鐵砲を打ちかけまするは、すこしく憚つて居るかとおぼえまする。

信長。弱い奴等め。蘭丸。そちはすぐさま登山して、一刻も早く攻めかゝれと彼の兩人に催促いたせ。

蘭丸。はあ。

（蘭丸起ちあがらんとする時、下手の坂路を降りて、景鑑阿闍梨、六十餘歲の老僧、軍兵一人に案內せられ、鳩の杖にすがりて出づ。軍兵は手に松明を持つ。）

軍兵。中川瀨兵衛どのお指圖によつて、景鑑阿闍梨を御案內申しました。

（孫平次は起つて幕の入口に出る。）

孫平次。しばらくそれにお控へ下されい。（信長の前に來る。）いかゞ取計らひませうや。

信長。面倒だ。逢ふに及ばぬ、追ひ返してしまへ。

又右衛。景鑑阿闍梨は三塔にても一二をあらそふ碩學の老僧、兎もかくも御對面を許されましては……

信長。そち達は兎角に坊主の贔屓をするなう。よいわ。これへ呼べ。

孫平次。はあ。（幕の外にむかひて。）阿闍梨にはなにとぞお通りくだされ。

（景鑑は杖にすがりて幕の內に進み入る。軍兵は幕の外に控へる。）

信長。景鑑阿闍梨とは御坊か。それがしは信長だ。

景鑑。初めてお目にかゝります。いづれも御免くだされ。

（人々に會釋すれば、一同も禮す。景鑑は杖に倚りて立つ。）

信長。信長は氣がみじかい。用があらば早く申されい。

景鑑。織田どのには山門の罪を問ふとあつて、今宵俄に人馬を差向けられ、先手は西の穴生の坂口まで押寄せて、今にも攻めのぼらんず氣勢を示さるゝ。これに應じて血氣の若僧共も、太刀よ槍よと騷ぎさわぐ。

信長。むゝ、面白い。坊主どもが敵對するとか。

景鑑。いや、かくては柔和忍辱の道場も、血肉修羅の巷と相成る道理。あまりの淺ましさを見るに忍びず、なにとぞ穩便の御處置を願はんとて、それがしこれまで下山いたした。（一座を見わたして。）なう、方々。武士と武士とが弓矢を爭うてこそ、功名にもなれ、手柄にもなれ。法師を相手に鬪うて、それがなん

の譽になりませうぞ。つまりは佛に弓を引いたといふ、世の嘲りを受くるばかりか、來世は黑闇の無間地獄ぢや。

（人々は答へずして頭を俛る。）

信長。えゝ、又してもそれを云ふか。たとひ佛が尊くとも、これに仕ふる法師儕に、破戒無慚の惡行あらば、いかで免して置かれうや。理を非にまげて云ひ瞞めうとも、この信長は耳を假さぬぞ。（一座にむかつて。）おのれ等は眉に唾して、白藏主のやうな古狐にだまさるゝな。

景圓。織田どのは聞きしにまさる怖ろしいお人ぢや。（嘆息す。）

（下手の坂路傳ひに、中川瀨兵衞清秀出づ。すぐに幕の内に入る。）

清秀。阿闍梨はまだこれに居られたか。

信長。瀨兵衞、なにをうか／＼致して居る。先刻からもう一晌も過ぎて居るぞ。

清秀。はあ。

信長。坊主どもがそれほど怖ろしいか。

清秀。いや、左様なわけでもござりませぬが、阿闍梨の戻るまで差控へて……

信長。それが迂闊だ。おのれは唯信長の下知を背いて居ればよいのだ。早く／＼ゆけ、早くかゝれ。馬鹿な奴め。

清秀。はあ。（早々に引返して去る。）

貞正。（氣の毒げに。）阿闍梨には今聞かるゝ通りの仕儀でござる。他の惡僧どもとは事變りて、おん身の高徳はあまねく人の知る所。

又右衞。早々に下山して、せめて一身を全うせらるゝが、おん身の爲、世の爲でござらうぞ。

景圓。折角のお勸めではござれども、わが立つ杣の滅亡をよそに見て、おめ／＼下山する景圓ではござらぬ。三塔のほろぶる時はすなはち佛法の亡ぶる時ぢや。日ごろ讀誦する觀音經を身につけて、刀刃に貫かるゝか、兵火に焚かるゝか。しづかに最期を待つでござらう。いづれもお別れ申す。

（景圓は一同に會釋して幕の外に出で、軍兵に送られて坂路を登りゆく。一同は顏を見あはせて暫時の沈默。月はかくれて、をり／＼に梟の鳴く聲きこゆ。）

信長。暗くなつた。篝を強く焚け。

軍兵。はあ。

（軍兵等は枯枝を篝の火に添へる。火は炎々と燃えあがる。向うより池田勝三郎信輝は軍兵に松明を持たせて出づ。）

信輝。みやこより御使として權中納言惟房卿の下向でござりまする。

信長。なに、都よりの御使とな。それ、御出迎ひいたせ。

一同。はあ。

（信長をはじめとして、幕の内にある者いづれも起つて外に出で、形をあらためてひざまづく。向うより權中納言惟房は馬に乘りて出づ。軍兵二人は松明を持ちて案内し、ほかに仕丁等大勢したがふ。仕丁のうちには唐櫃を舁きたる者あり。信長等はうや／＼しく一禮す。）

信長。思ひもよらぬ御使の下向。信長をはじめ一同の者つゝしんで御出迎ひ仕る。

（惟房は馬を降りて幕のうちに入る。仕丁の一人は持ち來りし床几を据ゑる。信長、貞正、蘭丸、信輝、又右衞門、孫平次の六人は幕の内に入り、他の軍兵從者等は幕の外に屯す。）

信長。御使の趣、仰せきけられて下さりませ。

惟房。織田信長北國をひきあげて、重ねて上洛の趣きこし召され、上のおん使として權中納言惟房、唯今瀨田の城まで參向せしところ、

（信長は叡山攻口へ向ひしとうけたまはり、更にそのあとを追うてまゐつた。

信長。火急の事とて路次の警固もゆきとゞかず、失禮の段々平に御容赦くだされませう。

惟房。應仁以來の兵亂にて、花のみやこは荒れに荒れたるを、信長さきに上洛して、半月のうちに四方を切りしづめ、再びむかしの太平に復せしは、その勳功莫大なりとて、上にも御感なゝめならず、このたび再び上洛の時を待つて、恩賞として錦の陣羽織一着と、蘭奢待の名香を下したまはるべしとの御諚、ありがたく御受けいたされい。

信長。數にも足らぬ信長が寸功を、上には左ほどに御賞美あつて、世にもありがたき御諚を下されたるは、家の面目、身の本懷、つゝしんでおん禮申上げたてまつる。

惟房。唐櫃、これへ……。

仕丁。はあ。

（仕丁は幕の内へ唐櫃をかき入れて、信長の前に置く。）

惟房。信長、頂戴の品々をあらため見よ。

信長。はあ。

（信長は左右を見かへれば、蘭丸と信輝は唐櫃をあけて、陣羽織と香木をさゝげ出づる。）

信長。恩賜の二品、たしかに頂戴仕つてござりまする。近日上洛のみぎりには、この陣羽織を身に着けて、拜謁仕るでござりませう。（二品をいたゞく。）御前よしなに御取なしを願ひまする。

（蘭丸等は二品を再び唐櫃に收めて、すこしく後の方に運び入る。）

惟房。これにてお役も相濟んだ。今よりは唯の權中納言惟房として、お身に些と申し談じたい儀があるが、聞いてくれうか。

信長。なんなりとも御遠慮なく……。

惟房。餘の儀でもない。今宵の軍をやめて給らぬか。

信長。いくさを止めいと……今宵の軍を……。

惟房。さうぢや。山法師等が狼藉には惟房もかねて胸を痛めて居る。ましてお身達より見るならば、さだめて眼に餘ることもあらうが、延暦の草創より八百年、由緒正しき山門をただ一朝に破却するは、天下のために悲しむべきことぢや。弓矢の力をからずして彼等を鎭むる工夫はないか。どうぢやな。

信長。は、（返事に澁つてゐる。）

惟房。信長は不得心とみゆるな。事新しく申すまでもないが、王法と佛法とは車の兩輪ぢや。その佛法の源たる叡山をほろぼさば、國家の亂れをまねく基であらうぞ。

信長。は。（猶かんがへてゐる。）

惟房。まだ合點がまゐらぬか。せめては明日の朝まで延ばしてはくれまいか。それも成らぬか。

信長。（迷惑さうに。）ほかならぬ惟房卿の御扱ひ、無下にお斷りも相成りますまい。

惟房。しからば軍を待つてたもるか。

信長。はあ。仰せにまかせて明日まで……。

惟房。それは過分ぢや。惟房も初めて安堵いたした。（よろこぶ。）われはこれより登山して、山法師等にも理非を說きかせ、雙方の無事を計るであらう。誰かある、案內いたせ。（と起ちあがる。）

信長。勝三郎、お供申せ。

信輝。はあ。

（信輝も起つて案內せんとする時、遠近にて寐鳥の飛び起つ羽音すさまじくきこゆ。人々あやしみて空を仰ぐ。）

惟房。はて、心得ぬ。比叡の山風吹き絕えて、夜もやうやく更けんとするに、山中俄に物さわがしく、こゝの峯、あなたの森にて、寐鳥

のしきりに驚き起つは…。
（寺々にて撞き立つる早鐘の音きこゆ。人々は俄に起ちあがりて、うしろの山を見る。）

蘭丸。や、あの早鐘は…。

貞正。山門の人數をあつむる合圖。

又右衛。さては山内一致して。

孫平次。切つて出づると相見ゆる。

惟房。かゝる事もやあらんかと心を碎きし甲斐もなく、はや手おくれと相成つたか。今この際に山内より、矢一筋でも射出すが最後、山門自滅の基となる。そこに心がつかずして、武士を侮る山法師が、佛敵退治などと呼はつて、われから戰ひを挑むとは…。えゝ、淺ましや、なさけなや。さりとて、このまゝには捨置かれぬ。われは即刻登山して兎も角もかれらを制しとゞめん。西の穴生の坂道までは馬も通ふとおぼゆるぞ。馬曳け。早う、早う。

（惟房急いでゆきかゝるを、信長は遮る。）

信長。いや、しばらく…。月さへ暗き木下道、つゞら折りなる山坂を、急いで驅けたまふは、危し、あやふし。まして山門の惡法師ばらが、惡所絶所を遮つて、防ぎ矢射ることあるからは、如何なる過ちあらうも知れず。先づ〳〵お止まり下さりませ。

惟房。いや、いや、山門の滅亡を救ふがためには、惟房の命も惜むに足らず。いまだ大事とならぬうちに片時も早う。

信長。ではござりませうが、卿は都より下されたるおん使、おん身に萬一のことあらば、上に對して恐れあり、信長なんと申譯がござりませうぞ。

惟房。むゝ。（すこしく猶豫ふ。）

蘭丸。暫く…。

一同。しばらくお待ち下さりませ。

（人々は惟房を遮りとゞめる。早鐘の音いよ〳〵烈しくきこゆ。坂の上より中川瀨兵衛清秀再び走り出づ。）

清秀。申上げまする。（云ひかけて惟房をみて少しく猶豫ふ。）

惟房。苦しうない。早う申せ。

清秀。はつ。殿のお叱りを蒙つて、それがし唯今山内へ引返せしところ、われより寬るを待たずして、山門の方より俄に打つて出で…。

信長。むゝ。彼より軍を仕掛けたか。

清秀。はあ

惟房。して、して、どうぢや。

清秀。雙方たがひに入亂れて合戰最中にござりまする。

惟房。むゝ。

清秀。委細はかさねて御注進仕る。いづれも御免くだされ。

（清秀は云ひ捨てゝ去る。）

信長。お聞きの通りの次第、何事も是非なき成行とおあきらめなされて、御登山の儀は…。

惟房。思ひとまれと申すか。（思案して。）何事も最早水の泡ぢや。今となつては是非におよばぬ。我意に募りし法師ばらが、みづから招きし禍とは云ひながら、由緒ある山門が今宵かぎりに亡ぶるとは…。信長。

信長。はあ。

惟房。かへす〴〵も殘念に思ふぞ。

（早鐘の音又きこゆ。惟房は痛恨に堪へず、黯然として山のかたを見返る。）

惟房。この上に長居は無用。われは最早下山いたさう。

信長。陣中とて何の設けもなく、失禮おそれ入つてござりまする。（一同に向ひ。）それ、お見送りを…。

一同。はあ。

（惟房は幕の外に出でて再び馬に乗る。信長等も出でて見送る。）

惟房。信長。

信長。はあ。

惟房。山門の大衆三千人、ことごとく血氣の荒法師ばかりでもあるまい。高徳の聖、碩學の老僧、そのほか手向ひいたさぬ者には、かならず無慈悲の刃をあつるな。

信長。はあ。

惟房、さらばぢや。

（軍兵二人は初めのごとく松明を把りて先に立ち、惟房につゞいて仕丁等大勢ゆく。池田信輝も送りてゆく。早鐘の音又きこゆ。）

信長。多寡の知れたる法師武者を相手に、いつまで時を移して居るのか。（山を見る。）さりとは齒痒い奴等だなう。

（信長は呟きながら幕の内に入る。軍兵等は再びかゞり火に枝を焚べる。下手の坂路より高山右近走り出づ。）

貞正。おゝ、右近どの。いくさの樣子は……。

右近。山坂の案内をよく知つたる法師武者、ここに現はれ、かしこに隱れて、必死に防ぎ戰ふ間、先手も容易に進みかねて……。

信長。（怒る。）えゝ、さりとて手ぬるい奴等。おのれはどの面さげてこれへ來た。

右近。はあ。

信長。この上は容赦に及ばぬ。寺と云はず、社といはず、片端より燒き拂へ。

（一同は顔を見あはせる。）

又左衛。あつ、山門に火をかけて……。

信長。おゝ、山一面に燃してしまへ。

（信長はかゞり火の傍に立寄り、燃えたる大枝を取る。）

信長。山賊どもの巢を燒く松明だ。持つてゆけ。

右近。はあ。（進んで松明をうけ取る。）

信長。早く火の手をあけて見せい。

右近。はあ。（引返して去る。）

（これと同時に、向うより漁師六右衛門走り出で、幕の内に入らんとするを軍兵等は遮る。）

軍兵。えゝ、おのれは何者ぢや。

六右衛。大津の浦の漁師六右衛門と申す者でござります。どうぞ大將樣にお逢はせなされて下さりませ。

貞正。（起つて出づ。）おゝ、そちは六右衛門か。なにしにまゐつた。

六右衛。お約束の通り、娘をお戻しくださりませ。

貞正。さりとてこの場合にどうならうぞ。

六右衛。それでは御約束が違ひまする。えゝ、お前さまでは判らぬ。（貞正を突き退けて幕の内に入る。）おゝ、織田の殿樣、これにおいでなされましたか。このやうに軍が始まりましては、もううか〳〵しては居られませぬ。娘はどこに居ります。早うお松を戻して下さりませ。（狂氣のごとくに叫ぶ。）

信長。娘を案ずるのは道理だが、唯今對馬も申す通り、今この場合ではどうもならぬ。軍の果つるまで待つて居れ。

六右衛。いや、いや、軍の濟むのを待つてゐるうちに、娘に萬一の事でもありましたら、もう取返しが付きませぬ。織田信長ともあらう大將が、あれほど立派に請合うて置きながら、今となつて其のやうな遁口上は、そりや御卑怯でござりませうぞ。（詰め寄る。）

信長。なに、卑怯だと……。（屹となりしが又思ひ返して。）なるほど、そちの申すにも道理はある。やあ、孫平次。

孫平次。はあ。（進み出る。）

信長。先手の瀨兵衛や右近の許へまゐつて、山

内にある女子どもは、妄りに殺すな。勝手に
落してやれと申傳へよ。

孫平次。心得ました。

(孫平次は幕の外へ出づ。六右衛門も其
のあとを追つて出づ。)

六右衛。もし、わたくしも一緒にお連れなされ
て下されませ。

孫平次。何。(立ち止まる。)

六右衛。娘のありかを探したうござります。

孫平次。えゝ、軍の場所だ。迂濶にまゐつて
怪我するな。

(突き退けて走り去る。六右衛門もつゞ
いて追ひゆく。)

信長。蘭丸。まだ火は見えぬか。

蘭丸。いづこの峯もまだ暗うござります。

信長。なにをいたして居るかなう。

(向うより堀尾茂助吉晴は家來三人をし
たがへ、善住坊を縄にかけて牽いて出づ。)
(吉晴は手に鐵砲を持つ。)

吉晴。殿に鐵砲を打ちかけたる曲者は、仰せの
通りに仕つてござります。

信長。案の如くおのれであつたな。(善住坊を
睨む。)信長はおのれの如き生臭坊主に討た
るゝ男でないわ。其奴の持つたる飛道具はそ
れか。

吉晴。はあ。(鐵砲を出す。)

信長。(鐵砲と善住坊とを見くらべながら。)は
は、おのれ等の狙撃鐵砲は、叡山の猿か兎を
撃つに丁度相當ぢや。まことの武士の骨に透
るか。はゝゝゝゝ。(持つたる鐵砲を善住
坊の眼さきに投げ出す。)

善住。凡夫盛んにして神祟らずと、下世話に申
すはこのことぢや。日吉山王を頭にいたゞ
き、佛敵信長をほろぼさんと、一心籠めたる筒
先が、一度ならず二度までも狙ひの的をはづ
れしは、おのれが惡運の盡きざるところぢや。
王法佛法ともに廢つた。われ〳〵生きてなん
の望みがあらう。早く切れ、首を切れ。

信長。云ふまでもないことだ。おのれが王法を
かたむけながら却つて信長を罵るは、家をい
だいて臭きを忘るゝの例と知らぬか。やあ、
茂助。われに重々の無禮を加へし惡僧、尋常
の仕置では飽き足らぬ。瀬田の城内へ牽い
てゆき、生きながら土のなかに埋めて、竹鋸
で首を挽け。

吉晴。これは前代未聞のお仕置、あまりと申せ
ば怖ろしいやうに……。

信長。兎から申すな。おれの云ふがまゝに致せ
ばよいのだ。

吉晴。はあ。では、これよりすぐに引立てませ
うか。

信長。いや、待て。やがて火が騰るであらう。
其奴は暫くこゝに止め置いて、冥土の土産に
山門のほろぶるを見せてやれ。

吉晴。はあ。

(早鐘はげしく、坂の上より若き女三
人取亂したる姿にて逃げ來る。軍兵等
は遮る。)

軍兵。何者だ。待て、待て。

女。(口々に叫ぶ。)お助けなされて下さりま
せ。

(貞正も幕の入口に出づ。)

貞正。女子は放ち遣れとの仰せぢやぞ。

女。ありがたうござります。

(軍兵等は圍みを解く。三人の女は早々
に逃げ去る。おなじく坂の上より六右衛
門は流れ矢にあたりし體にて、娘お松に
扶けられて出づ。)

お松。父さん、氣をたしかに持つてくださりま
せ。

(六右衛門は幕の外に倒れる。軍兵等は
口々に叫ぶ。)

雑兵。流れ矢に射られたのだ。

又右衛門。出て見ろ。おゝ、先刻の漁師が娘が見れば疵を負うたやうだの。

信長。此中へ入れて薬をあたへよ。

（又右衛門はお松を扶けて、六右衛門と共に内に運び込む。六右衛門はまた倒れる。）

蘭丸。殿よりお薬をたまはるぞ。ありがたく頂戴いたせ。

（蘭丸は腰につけたる「印籠」より薬を取出して飲ませる。）

六右衛門。（眼をひらく。）娘はどこに……。お松、お松……。

お松。あい、あい。わたしはこゝに居ります。

（顔を差付ける。）

六右衛門。（微かに打笑む。）おゝ、お松……。無事で[illegible]たか。（云ひかけて苦しむ。）

お松。もし、父さん。これ、父さん。傷は浅うございますぞ。これ……もし……。

六右衛門。おゝ、お松……お松……。

（六右衛門はむすめの手を握りて倒れる。お松はわつと泣き伏す。）

信長。流れ矢に急所を射られて、もはや救ふに道もないか。命にかへて愛し児を助け出したる親心、おもへば不便なものだ。

お松。いつそわたしもないならば、こんな最期をさせまいものを……。父さん、堪忍して下さりませ。（泣く。）

（俄に凄じき風ふき出でゝ）

信長。俄に黒雲まき起り、山の木の葉を吹き落すは、かねて噂に聞き及ぶ、比叡の天狗[illegible]しにあらはれてあらうか。

善住。（あざわらふ。）日吉山王の怒りに觸れて、お山が暴るゝと知らざるか。おのれ等、今に天狗に攫まれうぞ。

（雑兵等は幕の外にて叫ぶ。）

雑兵。おゝ、火だ、火だ。燃えるわ、燃えるわ。

（信長は跳り立つて、うしろの山を仰ぎ見る。木の間がくれに火のひかりが赤く見ゆる。）

信長。おゝ、信長の手よりあたへたる一枚の篝火が、山門を焼きほろぼす薪となつたぞ。折柄のこの大風は、峯より谷へ、谷より峯へと、吹きあげ吹き下して、山一ぱいに燃え擴がるわ。おゝ、おゝ、火はいよ〳〵紅うなつた。（幕の外に出る。）あれ、あの大きい寺に火の雨が降りかゝるわ。あれ、あの高い塔が火の柱となつたわ。（耳をかたむける。）あれ、聞け。あなたこなたに阿鼻叫喚の声が、かすかに聞ゆるわ。焼けい、焼けい。三千の悪僧ばらをことごとく灰にして、山々の谷を埋めよ。（こゝろよげに火を見る。）

（他の人々も息をつめて、火の手のますます盛んなるを見る。明智光秀は人々より進み出で、山のかなたを睨みて[illegible]）

光秀。あゝ、あの火は……。

信長。（見かへる。）光秀か。今宵の寄手に加はらぬと申したに、あとより見物にまゐつたか。

光秀。お留守をあづかることは申したれど、叡山にはかに梵鐘の音は、耳を貫くばかりにこたへて、餘りの心もとなさに、忍んでこれまで参りました。

信長。よいところへ参つた。あの火を見い。

光秀。はあ。

信長。どうだ、好く燃えるなう。（打笑む。）

光秀。すべて是れ悪魔の所行。おそろしいと申さうか、浅ましいと申さうか。それがしは見るに忍びませぬ。

信長。悪魔とも云へ、鬼とも云へ、おれはおれの思ふところを眞直に行ふまでだ。かれらの滅亡は自業自得だ。

光秀。自業自得といふことを、殿にも御存じでございますか。(意味ありげに云ふ。)

信長。おゝ、おのれが犯せる罪に因つて……。

光秀。おのれが犯せる罪に因つて……。

信長。地獄の業火に焚かるゝのだ。

善住。さう云ふおのれも遠からず、生きながら地獄の火に焚かれうぞ。

信長。えゝ、やかましい。茂助、其奴を引立てい。

吉晴。はあ。

信長。六右衛門の死骸は、娘と共に宿許へ送つて遣はせ。

又右衛。はあ。

(又右衛門は軍兵等に指圖して、六右衛門の死骸を幕の外へ運び出す。お松も泣く泣く附いてゆく。光秀は默して嘆息す。)

信長。光秀。

光秀。はあ。

信長。そちが方には別に役目がある。この叡山に向はぬ代りに、早々に武者ぞろひをして丹波へゆけ。西丹波には赤井吉を差向けてあるが、かれ一手では暇がかゝる。その方は南丹波へかけ向つて片端から切りしたがへろ。

光秀。はあ。

信長。南丹波には秦の一家が八上の城に楯籠つてゐる。舊家でもあり、城の構へもよいと聞けば、右から左には埒があくまい。(すこし考へて。)あまり暇取つては面倒だ。いかなる手だてをめぐらしても、秦の一家を降參させろ。よいか。

光秀。かしこまりました。

信長。(吉晴をみかへる。)えゝ、なにを猶豫してゐる。その坊主を早く連れてゆけ。

吉晴。はあ。

(吉晴は餘儀なく善住坊を引立てる。善住坊は起ち上りて、つかつかと信長の前にゆき、たがひに睨み合ひながら下のかたへ牽かれてゆく。)

信長。光秀も坊主ももう一度あの火をみろ。はゝゝゝゝ。

(信長はこゝろよげに火を仰ぎ見る。火はいよいよ燃えひろがりて、うしろの山は一面に紅くみゆ。早鐘の音。風の音。)

——幕——

(大正四年一月作)

ひるがほ

午後三時頃、白河停車場前の茶店に休む。となりの床几には二十五六の小粋な女が腰をかけてゐた。女は茶店の男にむかつて、近在へゆく近道を訊いてゐる。あるいて行く積りらしい。

まあ、兎もかくも行つてみようかと獨り言を云ひながら、女は十錢の茶代を置いて出た。茶屋女らしいなと私が云へば、どうせ喰ひつめ者でせうよと、店の男は笑ひながら云つた。

夏の日は暑い。垣の晝顏の花は凋れてゐた。

唐がらし

日光の八月、中禪寺をさして舊道をたどる。紅い鳥が、蒼い樹のあひだから不意に飛び出した。形は山鳩に似て、嘴も口嘴もみな深紅である。案内者に問へば、それは俗に唐辛しといひ、鳴けば必ず雨がふるといふ。鳥はたちまち隱れてみえず、谷を隔てゝ二聲、三聲。私たちは恐れて路を急いだ。仲の茶屋へ着く頃には、山も崩るゝばかりの大雨となつた。

(『旅すゞり』より)

小梅と由兵衛

登場人物 ―― 梅澁の由兵衛。由兵衛の女房小梅。天王寺屋の手代三次郎。天王寺屋の丁稚長吉。賣卜者良齋。齋坊主西住。茶店の娘おしゆん。同心上原菅之助。ほかに長家の女房。娘。曾根崎の遣女。仲居。梅風呂の若い者。捕手など。

第一幕

大阪、聚樂町の裏長屋。二重屋體にて、古びて穢い家の作り。上のかたに古びたる押入。正面は暖簾をかけたる出入口あり。つゞいて破れたる鼠壁。前づらには毀れかゝつた竹縁あり。下のかたには一つ竈、引窓のある臺所。臺所の前には長屋の井戸あり。下のかたは隣家のこゝろにて、古びたる板羽目。上のかたにも隣家の臺所が見え、その臺所とまん中の家とのあひだに枯柳が一本立つてゐる。

（元祿二年の初冬のゆふぐれ。井戸端にて長屋の女房おかねが青菜を洗つてゐる。長屋のむすめおきくが米をといでゐる。下のかたの長屋のうちにて、念佛のたゝき鉦の音きこゆ。）

おきく。をばさん、寒くなりましたね。

おかね。まつたく寒くなつた。もうぢきに井戸端が氷るやうになるだらう。

おきく。お正月の來るのは樂みだが、冬の寒さを通り越すのが苦になりますね。

おかね。それでもお前さんなんぞは若いから、お正月の來るのが樂みだから好いのさ。わたし達のやうになると、お正月の來る前に冬の寒さよりも年の暮といふ怖ろしいものが控へてゐるからね。なんでも人間は若いうちのことだよ。

おきく。あら、をばさんだつてそんな年でもないでせう。

おかね。年は幾つでも、子供のふたりも持つと、もうすつかりお婆さんになつてしまふのさ。それが忌なら、お前さんなんぞもいつまでも獨り者でゐることだね。はゝゝゝゝゝ、さあ、もう好い加減にして内へ這入りませう。寒い、寒い。（笊に青菜を入れて起ちあがる。）

おきく。わたしも一緒に行きませう。（米かし桶をかゝへて起つ。）まだお念佛の鉦がきこえますね。

おかね。西住さんも朝から晩まで御奇特のことさ。併しあれも商賣だから仕方があるまいよ。

（おかねとおきくは連れ立ちて下のかたに去る。鉦の音つゞけてきこゆ。奧の暖簾口より由兵衛の女房小梅、三十二三歲、筒袖のやうな着物の上に繼ぎはぎの袖無しをかさね、細帶ひとつで出づ。）

小梅。（表をのぞく。）口のうるさい長屋の人たちも行つてしまつたらしい。

（小梅は臺所より笊に入れたる米を持ち出して井戸ばたへゆき、水を汲んで米を磨ぎはじめる。下のかたより良齋、三十五六歲、大道うらなひの姿にてあみ笠をかぶり、商賣道具を入れたる風呂敷づつ

みをかゝへ、片手には五六本の葱を持ちて出づ。)

良齋。おゝ、おかみさん、お寒うござるな。(小梅はだまつて米をといでゐる。)

良齋。(再び聲をかける。)おかみさん、急にお寒くなりましたな。

小梅。(顏をあげる。)おまへさんも察しが悪いね、こつちが默つてゐたら、默つて通り過ぎるものだよ。

良齋。しかし出這入りにはお互ひに挨拶して通るのが、一つ長屋の禮儀でござるからな。

小梅。その禮儀も時による。わたしはこんな裝をしてゐて、挨拶するのが極りが悪いから、それで默つて返事をしないのさ。そこを察して、素知らぬ顏をして通り過ぎるのが却つて禮儀といふものぢやあないか。

良齋。(竿越しに眺める。)なるほど面白いなりをしてゐる。

小梅。ほんたうに飛んだお笑ひ草さ。このごろはこんな女の猿まはしが大阪にも出來たさうだ。

良齋。おまへが猿まはしに出たら、容貌が好いから定めて稼ぎがあるだらう。

小梅。まじめになつてひやかすのはお止しなさいよ。おまへさんこそ今日は大層早いぢやないか。定めて亡者がたんと寄つて來たとみえるね。

良齋。なにさ。すこしかぜを引いたやうだから、日の暮れないうちに店をしまつて歸つて來たのだ。(葱を見せる。)これで雜炊でも焚いて溫まらうと思つてな。

小梅。葱を買つて來なすつたのか。鴨は無しかえ。

良齋。鴨どころか、しやもの骨もむづかしい。いや、今の世の中では、米なり粥なり三度三度滿足に食つて行かるれば結構だと思はなければならない。

小梅。それぢやあ、こんな裝をしてゐても恥かしくはないかね。

良齋。恥かしいものか。どうして、どうして立派なものだ。

小梅。なにが立派だ。好加減にしないと、冷たい水を頭からぶつかけるよ。

良齋。いや、御免、御免。では、お休みなさい。(行きかける。)

小梅。まだ日も暮れもしないのに、今からお休みなさいはあんまり早過ぎるね。

良齋。でも、わたし等のやうな寂寞たる獨り者とは違ふからな。

小梅。ばか〱しい。そんなことは昔の夢さ。ひとりで寂しければ、今夜わたしが遊びに行つてあげようか。

良齋。さあ。(かんがへる。)その御親切はありがたいが、おまへと差向ひでゐるところを由兵衞どのに見付かつたら大變だからな。

小梅。おまへさんを相手にして、やきもちを焼くほどの亭主でもないのさ。

良齋。これは御挨拶だ。まあ、まあ、お靜かにお休みなさい。

(良齋は上のかたにゆき、臺所の戸をあけて我家に入る。小梅は笑ひながら米をといでゐる。)

小梅。えゝ、冷たくつて遣切れない。もう好加減にして置かうか。

(小梅は水をながして笊をかゝへ、臺所に入る。下のかたよりおしゆん、十七八歲、美しい茶店の娘、足早に出で來りて内をうかゞひゐると、小梅は臺所より内に入る。)

おしゆん。(遠慮勝に聲をかける。)御免なさい。

小梅。誰だえ。(すかして見る。)おや、おしゆ

小梅。思ひやりがあるなら、女房を裸にして平気で済ましてもゐられない筈だ。……お前さんまあわたしの着物を御覧よ、なんぼ何でもあんまり極りが悪いから、井戸端へ出るにもお長屋の人達のゐないときを窺つて出るやうにしてゐるくらゐぢやないか。今もあの女が這入つて来て、わたしがこんな見つともない装をしてゐる所を見られたかと思ふと、なほなほ癪に障つたから、怒鳴りつけて追ひ返して遣つたのさ。

由兵衛。飛んだ八つ當りだ。

小梅。それもこれもみんなお前のせゐだよ。

由兵衛。誰のせゐだか知らねえが、自分のことばかり云ふな。おれだつてこの通り、袷にもかけないやうな姿をしてゐるのだ。

小梅。それは誰の着物だよ。

由兵衛。女房のお召物を拝領したのよ。どうも男には恰好がよくねえやうだ。

小梅。あたりまへさ。夫婦揃つて質人間の姿はありやあしない。（肩をすくめる。）着る物の話をしてゐたら、なんだか急に薄ら寒くなつて来た。おまへさん、一杯飲まないかえ。

由兵衛。（やゝ意外らしく。）むゝ、酒があるのか。

小梅。お肴はないよ。

由兵衛。もう、贅沢は云つてゐられねえ。冷でもいゝから早く飲ましてくれ。

小梅。それぢやあすぐに支度をするから、おまへさんは燈火を出してお呉れな。

由兵衛。よし、よし。（たち上る。）

小梅。まだ點けるにやあ早いよ。このごろは油が高いからね。

由兵衛。けちなことを云ふな。それだからお前は嫌ひだ。

小梅。世帯持つちやあ、女は誰も嫌はれるものさ。

（小梅は台所へ行きて酒の支度をする。由兵衛は奥へ入りて破れた行燈をさげて出づ。叩き鉦の音きこゆ。）

由兵衛。まつたく日が落ちると寒くなるな。

小梅。おたがひにこの姿ぢやあ、今年の冬は一倍堪へるのさ。

由兵衛。また始めあがつた。執念い奴だ。となりの坊主もまた／＼叩いてゐるな。あんな音をきくと猶さら寒くなる。

（ふたりは差向ひで飲みはじめる。）

小梅。（酌をしながら。）この頃のやうぢやあ全く愚痴も云ひたくなるよ。おたがひに意氣地が無くなつたね。

由兵衛。意氣地がねえといふわけでもねえが、どうも世渡りがむづかしくなつて来たのだ。おれも紺染め屋のせがれに生れて、四間間口の屋臺骨を踏まへてゐたが、十七八の頃から立派な道樂者になりすまして、おやぢが死ぬとすぐに店は沒落、いや見事なものよ。（笑ふ。）それからだん／＼に修業が積んで、胡椒頭巾の商賣をはじめるやうになつた。

小梅。わたしがお前と一緒になつたのは其時分だが、胡椒を隠して持つてゐて、往来の人に眼つぶしを食はせ、相手がうろたへる隙をみて懐ろの財布や持物を攫つてゆく、おまへの腕前はほんたうに鮮やかなもので、わたしもつくづく感心したよ。

由兵衛。それも長くは續かねえ。胡椒頭巾の辻強盗は由兵衛らしいと、世間の噂がだん／＼高くなるので、今度はおまへの入れ智慧で、板がへの商賣を又はじめた。

小梅。あれはわたしの新工夫さ。兩換屋へ板銀を持つて行つて、小粒と兩換へをして貰つた上で、今の金を鳥渡見せてくださいと一旦こつちの手に取戻して、素早く贋物とすりかへて渡すといふ、あの手妻も當分はうまく行つたね。

由兵衞。それも當分のことで、やつぱり長くは續かねえ。世間は廣いやうで狹いもので、このごろ流行る板換へも由兵衞らしいと眼星をつけられて、なんだか危くなつて來たから、足もとの明るいうちに止めてしまつた。

小梅。それから先は商賣無しで、子どもに捉まへられた鰌の子とおなじやうに、首を引つこめて小さくなつてゐるばかりだ。さりとて棒を肩にあてゝ青菜小菜も賣つてあるかれず、博奕をするにも元手は無し、かうなると、まつたく惡黨は潰しが利かないね。

由兵衞。どうで惡黨なんていふものは、あんまり地金がよくねえからな。潰しの利かねえのも無理はねえよ。

小梅。無理はねえと諦めてゐて、これから先をどうして命をつないで行くつもりだよ。ちつといゝかげんにしてお吳れな。

由兵衞。どうもうるせえな。明けても暮れても同じことばかり云ふなよ。かうみえても俺なんぞは何とかしてこの運勢を盛返すやうに、はかりごとを帷幕のうちにめぐらしてゐるのだ。

小梅。辻講釋のやうなことをお云ひでないよ。もう、もう、お前にやあ愛想が盡きたよ。

由兵衞。なに、愛想が盡きた。こいつ、このごろの漬菜ぢやあるめえし、大束なことをいふな。瘦せても枯れても梅澁の由兵衞、胡椒頭巾の由兵衞、板換への由兵衞だ。うぬが女房に馬鹿にされて堪るものか。

小梅。馬鹿だから馬鹿にされるのさ。それが口惜しければ利口な人間の眞似をして見せるがいゝ。

由兵衞。この上利口になりやうがあるものか。

小梅。(笑ひ出す。)その上に利口になつたら、菰をきて橋の上に坐つて、どうぞや一文だらうよ。

由兵衞。こん畜生、亭主を乞食扱ひにしやあがる。もう料簡はならねえぞ。(徳利を把る。)

小梅。なにをするんだね。無けなしの酒がこぼれてしまふぢやないか。

由兵衞。酒なんぞこぼれたつて構ふものか。貴樣の頭をぶち割つて、紅い酒を浴びるほど飲ませて遣らあ。

(由兵衞は徳利を把つて起たうとすれば、小梅は素早くその胸ぐらをつかんで小突きまはす。)

小梅。さあ、ぶてるなら打つて御覽。おまへのやうな出來そこなひの亭主に、おとなしく打たれたり踏まれたりしてゐるおかみさんだと思ふかよ。

由兵衞。えゝ、こいつ、惡巫山戲をすると打ち殺すぞ。

小梅。それほどの度胸があるなら思ひ切りよく殺しておくれよ。さあ、殺しておくれよ。

(小梅はむやみに由兵衞を小突きまはす。)

由兵衞。よし、殺してやるから覺悟しろ。

(由兵衞は小梅を突き倒して起ちあがる。)

小梅。お前ほんたうに殺す氣かえ。あきれた人だね。いゝかえ。わたしは大きい聲をして怒鳴るよ。わたしの亭主の由兵衞は胡椒頭巾の……。

由兵衞。これ、馬鹿をいへ。

小梅。わたしの亭主は板がへの由兵衞で……。

由兵衞。えゝ、とんでもねえことを云ふな。

(由兵衞は小梅をおさへようとして追ひまはす。小梅は逃げながら椽を降りる。)

小梅。さあ、もつと、大きい聲をして怒鳴るから、さう思つておいでよ。

由兵衞。どうも呆れた氣ちがひだな。これ、靜かにしろと云ふのに……。

小梅。いゝえ、靜かにしない。わたしの亭主は……。

由兵衛。まだ云ふのか。

(由兵衛は小梅を追ひまはしてゐる。上のかたの臺所の戸をあけて、良齋は寢卷姿にて出づ。)

良齋。又はじめたのか。困つたものだな。

(良齋はかけ寄つて夫婦を取鎭めようとする。由兵衛は良齋を突き倒す。)

良齋。これ、これ、わたしをどうするのだ。

小梅。お、お隣の良齋さんか。(由兵衛に。)お前、良齋さんをどうするんだよ。

由兵衛。(氣がついて。)やあ、となりの先生か。こりやあ粗相だ、堪忍しておくんなさい。

良齋。(おきあがる。)いくら粗相だと云つて、仲裁に出て來た人間をむやみに突き倒すといふことがあるものか。萬一腰の骨でも痛めてみなさい。あしたから商賣にも出られない。(着物の泥を拂ふ。)

由兵衛。いや、こいつが女のくせにあんまり增長しやあがるので、わたしも一杯機嫌でこの始末、まことに面目次第もねえのさ。

良齋。夫婦喧嘩も三月に一度か、半年に一度ぐらゐは、まんざら惡くもないものだが、おまへさん達のやうに三日にあげずでは、自分たちも面白くあるまいし、近所も迷惑だ。もう止さつしやい。止さつしやい。

小梅。良齋さん。おまへさんは占ひは上手かえ。

良齋。それを今更きくことか。辻占ひこそしてゐるが、その中ること神のごとくで、自分ながらも不思議に思つてゐるくらゐだ。

小梅。ぢやあ、一つ占つてくださいな。

良齋。なにを占ふのだ。

小梅。この亭主と一緒にゐる方がいゝか惡いか。後生だから占つてくださいよ。

良齋。いや、それは占ふまでもない。おまへと由兵衛殿とは、水と金との相性で、一生離れることの出來ないやうになつてゐる。

小梅。ぢやあ、やつぱり惡緣かねえ。

由兵衛。そりやあこつちで云ふことだ。そこで良齋さん。ついでにわたしのも見てくれまいかね。

良齋。おまへのは何だな。

由兵衛。わたしのは身の上の判斷で、これから運が開けるかどうだか、確かなところを占つてください。

良齋。さうなると些とむづかしい。まあ、待ちなさい。

(良齋は引返して我家に入る。そのあひだに由兵衛は緣にあがりて坐し、小梅は鬢など搔きあげながら緣に腰をかける。やがて良齋は商賣道具をつゝみたる風呂敷をかゝへて出づ。)

良齋。さあ、さあ、こゝで店を擴げなければならない。(風呂敷より算木や筮竹などを把り出し、天眼鏡を持つ。)さあ、御亭主、手を出さつしやい。

由兵衛。手を出せ……。(すこし躊躇する。)緣起でもねえが、まあ仕方がない。はい、はい。

(由兵衛は片手を眞直に出す。)

小梅。おまへさんは馬鹿だね。手のひらを出すんだよ。

由兵衛。こんなことは初めてだから、勝手がわからねえ。(手のひらを向けて。)さあ、ねがひます。

良齋。よろしい。(勿體らしく天眼鏡で照してみる。)

小梅。(のぞいて。)もし、どうです。一生うだつが上りさうもありませんかえ。

由兵衛。やかましい。默つてゐろ。

良齋。(ため息をつく。)いや、これは驚いた。

由兵衞。そんなに驚くことがあるかえ。
良齋。まあ、せいてはならない。
（良齋は筮竹を繰り、算木をならべて少しくかんがへてゐる。）
良齋。なるほど、これはまつたく大變だ。
小梅。大變とはどういふわけですよ。
良齋。今夜のうちに大きい福が來る。
由兵衞。大きい福が來ると云つて、大福餅でも貰ふのかえ。
良齋。いや、いや。おまへの手に大金が這入る。
由兵衞。ほんたうかえ。からかふのは御免だぜ。
良齋。決して譃や冗談ではない。今夜のうちに屹と大金が手に這入る。
小梅。幾らぐらゐ這入るでせうね。
良齋。その金高はわからないが、なにしろ大金に相違ない。まことにおめでたいことだ。
小梅。それがほんたうだつたら、良齋さん、おまへさんにも屹とお禮をしますよ。
良齋。（首をかしげる。）併しどうも不思議だ。念のためにおかみさんのも見て進ぜよう。
小梅。はい、はい。（手を出す。）
良齋。（天眼鏡で見る。）ほう、これも御亭主とおなじことだ。夫婦揃つてこれである以上は、いよ／＼間違ひはない。その金が手に這入つたら屹とお禮をして下さるであらうな。
小梅。それは呑み込んでゐますよ。
良齋。いや、それは有難い。かうなると、夫婦喧嘩のとなりにも住むことだ。はゝゝゝゝ。では、よいお話を待つてゐますぞ。
（良齋は商賣道具をまとめて我家に入る。あとに夫婦は顏をみあはせる。）
小梅。おまへさん。おたがひに運が向いて來たらしいね。
由兵衞。あいつの云ふことは本當だらうか。
小梅。當るも八卦、あたらぬも八卦とかいふが、あいつもまんざら跡方のないことも云ふまいぢやないか。
由兵衞。それもさうだな。ぢやあ、前祝ひに一杯飮むかな。（徳利をみて。）あゝ、いけねえ。今の騷ぎでみんな零してしまつた。
小梅。それだから云はないことか。夫婦喧嘩は世帶の損だよ。
由兵衞。臺所にはもうねえのか。
小梅。まだ少しはあるかも知れない。
（小梅は臺所より酒を持ち來りて、ふたりは又飮みはじめる。）
小梅。大金が這入ると云つて、一體どのくらゐ這入るんだらうね。
由兵衞。たんとも要らねえが、百兩ばかり欲しいな。
小梅。百兩あれば澤山さ。七八十兩でもいい。さうしたらもう好加減に足を洗つて、なにか小粹な商賣でも始めるんだね。
（下のかたより天王寺屋の丁稚長吉出づ。）
長吉。御免なさい。
由兵衞。え。誰か來たぜ。
小梅。わたしはこんな裝をしてゐて、もう出て行くのは忌だよ。おまへ出て御覽よ。
由兵衞。（着物をかき合せながら緣端に出る。）おい、誰だ、誰だ。
長吉。店の三次郎さんは來て居りませんか。
由兵衞。よく三次郎をさがしに來るな。（透してみて。）むゝ、天王寺屋の丁稚どんか。
長吉。店のお使で三次郎さんと一緒に出て、兩換町から歸る途中、おれは聚樂町の姉さんのところに一寸寄つてくるから、お前は高津のお社のあたりに遊んで待つてゐろと云つて別れました。
小梅。（ふり向く。）それぎりで三次郎は歸らな

いのかえ。

長吉。日が暮れかゝつても歸つて來ないので、一人で戻らうとしましたが、それでは悪からうと思ひまして、こちらへ探しにまゐりました。

由兵衛。三の野郎め、途中であの女に逢つたのだな。

小梅。仕様のない奴だねえ。(長吉に。)それでもまあよく探しに來ておくれだ。お前ひとりが先へ歸らうものなら、三次郎めはしくじつてしまふ。まあ、そこにかけて休んでおいでよ。三次郎の方でもお前をさがして、こゝへうろ／＼遣つて來るかも知れないから。

長吉。では、少しの間、こゝに待たせて置いて貰ひませうか。(縁に腰をかける。)

由兵衛。利口さうな丁稚どんだ。何か遣るものはねえか。

小梅。あいにくだねえ。(臺所へ起つてゆく。)

由兵衛。けふは三次郎と兩換町の何處へお使に行つたのだ。

長吉。兩換町の錢屋へ行つて、板銀を小判にかへて來たのでございます。

由兵衛。板銀を小判に兩換へして來たのか。して、幾らほど換へて來たのだ。

長吉。小判で百兩でございます。

由兵衛。百兩……。その百兩をふところにして、三次郎めは遊びあるいてゐるのか。

長吉。いえ、その小判はわたくしが預かつて居ります。

(このうちに、小梅は盆に茶碗をのせて臺所より出で、立つたるまゝにて聴いてゐる。叩き鉦の音きこゆ。)

由兵衛。年の行かねえ者に大金をあづけて、自分は身輕になつて遊びあるく。どつちにしても三の野郎は間違つてゐるな。小判百兩といへば大金だ。人に取られねえやうにしつかりと持つてゐろよ。

長吉。はい、財布に入れてしつかりと首にかけて居ります。

(由兵衛はその金がほしくなる。小梅は盆を持つて出づ。)

小梅。あいにくに何にもない。ぬるいかも知れないが番茶でもお飲みよ。

長吉。もうお構ひなされますな。(會釋して茶をのむ。)

小梅。三次郎はおまへを可愛がつてくれるかえ

長吉。大勢の番頭さんや手代衆のうちでも、三次郎さんが取り分けて可愛がつて下さります。

小梅。弟は馬鹿正直の代りに人間はおとなしいからね。丁稚どんなぞには當りがいゝだらうよ。それがまああいつの取得さ。

(このあひだに由兵衛は頻りに考へてゐる。)

小梅。併しその正直もあてにやあならない。三次郎もこのごろは浮ついてゐて困るよ。

長吉。野中の觀音様へ行くことでございませう。

小梅。ほゝ、おまへも知つてゐるのかえ。野中の觀音前の茶店の女でおしゆんと云ふのに熱くなつて……。お前、そんなことを御主人や番頭さんに云つておくれでないよ。

長吉。誰にも決して云ふなと、三次郎さんからも頼まれてゐますから、めつたにしやべる氣づかひはございません。

小梅。なにぶん頼みますよ。(云ひかけて由兵衛をみかへる。)もし、お前さん。急に默つてなにを考へてゐるのさ。

由兵衛。え、何。さつきの占ひのことを考へてゐるのよ。

小梅。おまへもそれを考へてゐるのかえ。(と

なりを頤で指す。）あの占ひはまつたく上手らしいね。

由兵衞。どうも上手のやうだな。

小梅。占ひは中つてゐるんだよ。（眼で知らせる。）

由兵衞。（うなづく。）中つてゐるな。

（夫婦は眼をみあはせる。暮六つの鐘きこゆ。家内はだん／＼に薄暗くなる。）

長吉。（こゝろづいて起つ。）あんまり遲くなると不用心でございますから、わたくしはもう戻ります。三次郎さんが見えましたら、宜しく仰しやつてください。

小梅。まあ、お待ちよ。あの……實はね。三次郎は家に來てゐるんだよ。

長吉。來てゐるのでございますか。

小梅。實はさつきから來てゐるのだけれど、少し醉つて寢てゐるので、起すのも可哀さうだと思つて、好加減なことを云つてお前を待たせて置いたのさ。お前は百兩のお金を持つてゐるのだらう。

長吉。はい。

小梅。年のゆかない者に大金を持たせて、どうして一人で歸されるものかね。まあ、お待ちよ。三次郎を呼んで來て、おまへと一緒に歸らせるから。（由兵衞に。）ちよいと奧へ行つて、弟を起して來てくださいよ。

由兵衞。なに、弟を起して來い……。

小梅。弟は奧に寢てゐるんだからさ。（眼で知らせる。）早く起して來ておくれと云ふのに……。

由兵衞。むゝ。

（由兵衞はなんだかよく判らないながらに首肯きて奧に入る。）

小梅。（長吉に。）すぐに連れて來るから待つておいでよ。

（小梅はつゞいて奧に入る。長吉は再び緣に腰をかけてゐる。下の方の長屋より齋坊主西住、提灯をとぼして出づ。）

西住。もし、御免なさい。はて、お留守かな。

長吉。いえ、みんな奧へ行つて居ります。

西住。おゝ、左樣かな。もし、御免なさい。

（奧より小梅出づ。）

小梅。あゝ、西住さんか。

西住。今夜は小橋の方へお齋に呼ばれて居りますので、これから行つてまゐります。留守をなにぶんお願ひ申します。

小梅。あい、あい。ゆつくり行つておいでなさい。

西住。お勤めとあれば是非ないものの、小橋の方はさびしい道で、夜はなか／＼難儀でございます。それに此頃はあの邊に惡い狐が出ましてな。

小梅。（焦れつたさうに。）それだから氣をつけて早くお出でなさいよ。

西住。はい、はい。では、何分おねがひ申します。

（西住はとぼ／＼と下のかたに立去る。）

長吉。三次郎さんはどうなされました。

小梅。それが困るんだよ。眼はさましたけれど、なんだか頭が病めて起きられないと云つてゐるのさ。それで何かおまへに話したいことがあると云つてゐるから、ちよいと奧へ行つておくれでないか。

長吉。はい、はい。ずつと通つても宜しうございますか。

小梅。この通りの家だから遠慮なしにおあがりよ。

長吉。では、御免ください。

（長吉は會釋して緣にあがり、奧に入る。小梅は行燈を吹き消して、表に氣をくばり、更に奧をうかゞつてゐたりしが、やがて簾をかける。）

小梅。もし、お前さん。
由兵衛。（内にて答へる。）なんだ。
小梅。大層靜かだねえ。
（奥より由兵衛は金財布を持ちて出づ。）
由兵衛。（笑ひながら。）この通りだ。（財布をみせる。）
小梅。絞めたのかえ。
由兵衛。むゝ。いゝしやもよ。
小梅。脆いねえ。
由兵衛。多寡がひよつ子だ。羽ばたきもさせやあしねえ。
小梅。あかりを點けるから、ちよいと檢めて御覽よ。
（小梅は行燈を持ち出して灯をとぼせば、由兵衛は財布から小判を出して見る。）
小梅。（のぞく。）百兩あると云つたぢやないか。
由兵衛。むゝ、確かにありさうだ。
（由兵衛は小判をかぞへてゐる。下のかたより天王寺屋の手代三次郎、二十一二歲、足早に出づ。）
三次郎。今晚は。
（夫婦はおどろき、由兵衛はあわてゝ小判を押隱して奥に入る。）
小梅。（すかしみて。）あゝ、三次郎か。今時分何しに來たのだえ。
三次郎。姉さん。店の長吉はまゐりませんでしたか。
小梅。長吉……。來ないよ。
三次郎。來ませんか。
小梅。おまへは長吉を探しに來たのかえ。
（云ひながら心づいて、小梅は緣ばなに出で、長吉の草履をそつと隱さうとする。）
三次郎。もし、その草履は……。
小梅。これかえ。これはお長屋の子供がさつき遊びに來て、歸りは阿母さんにおんぶして行つたので、そのまゝ脫いであるのさ。
（小梅は草履を臺所へ投げ込む。）
三次郎。あゝ、姉さん、姉さん。
小梅。なんだよ。さう〳〵しいね。
三次郎。（行燈の下を指さす。）そこに小判が一枚……落ちて居ります。
小梅。え。（あわてゝ小判を拾つて帶にはさむ。）
（三次郎は不審さうに姉の顏をながめてゐる。）
小梅。なぜ人の顏をじろ〳〵見てゐるんだよ。いくら貧乏してゐても、小判の一枚ぐらゐ持つてゐることもあるのさ。（紛らすやうに。）野中の觀音前に出てゐる女がさつきお前をたづねてこゝへ來たよ。
三次郎。さうでござりましたか。
小梅。さうでござりましたかも無いもんだ。おまへは今までその女と巫山戲てゐたんだらう。もう日が暮れたのに、いつまでうろ〳〵してゐるんだね。早くお店へお歸りよ。
三次郎。長吉はまつたくこゝへ來ては居りませんか。隱さずに敎へてください。
小梅。誰が隱すものかね。年の行かない丁稚を置去りにして、あんまりのらをかはいてゐるから、屹と先へ歸つてしまつたに相違ないよ。主人の使に出て來ながら、道草を食つてゐるといふのが第一にお前が惡い。さあ、さあ、御主人や番頭さんに叱られないやうに、早くお歸り、お歸り。
三次郎。はい。
小梅。何をきよろ〳〵してゐるんだよ。をかしな人だねえ。お歸りよ。
三次郎。（よんどころなく。）では、お暇申します。

小梅。あたりまへさ。おまへは主人持ぢやないか。

（三次郎はなんだか腑に落ちぬやうな顔をして、下のかたに行きかけしが、又引返して井戸のかげに隱れる。奧より由兵衞出づ。）

由兵衞。三の野郎はもう行つたか。もしや氣取られやあしねえかと思つて、流石のおれも少しひや〳〵してゐた。

小梅。なんだか變な顏をしてゐたやうだが、あの通りの馬鹿正直だから、よもや氣が附きやあしまいよ。それにしても又どんな者が來まいものでもないから、奧のものは早く何とか始末してしまはなければいけないね。

由兵衞。おれもさう思つてゐるのだ。緣の下なんぞに埋めて置くと、あとが面倒だ。なんでも人の氣が付かねえやうな、遠いところへ擔ぎ出してしまふに限るが、どこか好い場所はねえかな。

小梅。さあ。（かんがへる。）となりの齋坊主は小橋へ行くと云つてゐたが、あの邊はさびしくていゝぢやないか。

由兵衞。むゝ。さうだ。小橋へ行つて、野中の井戸へ沈めて來よう。おい、ぼろ葛籠を出してくれ。

小梅。お前さん、ひとりで背負へるかえ。

由兵衞。大丈夫だ、大丈夫だ。鎧櫃か背負ひ切れねえやうで侍になれるか。

小梅。はゝ、馬鹿にしてゐないね。

（小梅は表を窺ひながら行燈をさげて由兵衞と共に奧に入る。井戸のかげより三次郎は忍び出で、ぬき足をして、奧をうかがふ。上のかたの長屋の臺所よりも良齋が半身を出して窺ふ。やがて奧より由兵衞は頭巾をかぶり、尻を端折り、長吉の死骸を入れたる葛籠を背負ひて出づ。小梅は蠟燭をとぼして先に立ちて出で、再び表をうかゞひて良齋と顏をみあはせ、流石にぎよつとする。）

良齋。（しづかに。）御亭主は重さうなものを背負つて、どこへ行きなさるな。

小梅。お恥かしいが、質屋へ運ぶのさ。

良齋。はゝあ、それは御苦勞でござるな。

（由兵衞は緣を降りようとして、三次郎のすがたを透し見て怒鳴る。）

由兵衞。えゝ、誰だ、誰だ。

（三次郎はあわてゝ井戸のかげに隱れる。良齋はだまつて眺めてゐる。由兵衞と小梅は顏をみあはせ、小梅は早くゆけと眼で知らせる。夜まはりの太鼓の音きこゆ。）

——幕——

第二幕

（一）

曾根崎新地の梅風呂。すこしく上のかたによせて梅風呂と染め拔きたる長暖簾をかけ、入口の柱にもおなじく梅風呂と記したる行燈をかけたり。家の左右は千本格子にて、下のかたに櫻の立木あり。

（前幕の翌年、三月下旬の午後。櫻の木の下には、大道うらなひの良齋が笠をかぶりて店を出してゐる。風呂屋の女幾野と仲居おそめが店の前に立ち、幾野が占ひをたのんでゐる。どこやらで笛の聲きこゆ。）

良齋。（筮竹を取り、算木をならべる。）おまへのは待人でござるな。

幾野。さうでございます。

良齋。はゝあ。（幾野の顏をみる。）この卦によ

るゝきは待人は來らずとある。

おそめ。え。待人は來らず……。それはほんたうでございますか。

良齋。この通り、易の表にあらはれてゐる。

幾野。では、やつはりあの人のこゝろは變つたに相違ない。（おそめの手をつかむ。）おそめさん、こりやどうしたら好からう。（泣く。）どうしたらよからう。

おそめ。どうしたらと云つて、わたしにも仕樣がないものを……。

幾野。仕樣がないと云つて、近いうちには屹と逢はせてやると、おまへが確かに請合つたではないか。あれはみんな譃か氣やすめか。

（おそめを小突く。）

おそめ。それはお前、無理といふもの。何事も相手の男の心次第で、わたしの思ふやうにもなるまいではないか。

幾野。思ふやうにもならないものを、なぜ安々と請合つた。おまへは譃つき、今までわたしをだましてゐたか。（また泣く。）

おそめ。まあ、往來で見つともない。

幾野。もう恥も外聞も云つてはゐられぬ。あの人に逢はれぬと決まつたら、わたしはいつそ蜆川へ……。（かけ出さうとする。）

おそめ。まあ、とんでもない。（幾野を捉へる。）

幾野。えゝ、放して、放して……。

（幾野はふり放して駈け出さうとするを、おそめは支へ、ふたりは爭ひながら上のかたへ走り去る。）

良齋。（見送る。）これは大變なことになつた。併しあの仲居がそばに附いてゐるから、まさか本當に蜆川へ飛び込みもしまい。いや、今の騷ぎであの女達は見料を置かずに行つてしまつた。占ひも正直のことばかり云つてゐては商賣にならぬ。はゝゝゝゝゝ。

（梅風呂の暖簾口より店の男二人出づ。一人は箒を持ち、ひとりは手桶と柄杓を持ち、店の前を掃きかけて良齋の方をみかへる。）

男甲。大道占ひめ、また出てゐるな。

男乙。いま〳〵しい奴だ。

（ふたりは良齋の店のまへに來る。）

良齋。（笠の内にて。）結構なお天氣でござるな。

男甲。これ、いつも云ふことだが、場所もあらうに、なぜこんなところへ來て店を出してゐるのだ。

良齋。こゝは色町で、身の上判斷、待人、失せものを尋ねる人が多いので、わたし等の商賣には都合のよい所だ。

男乙。そつちには都合がいゝか知らないが、かういふ家業の店さきにそんな店を出してゐられては邪魔になる。もつと離れたところへ行つて貰ひたいな。

良齋。いつも云ふ通り、わたしはこゝの御主人夫婦に斷つて、この場所を借りてゐるのだ。

男甲。その御主人も飛んだ奴に貸したと困つてゐるのだ。

良齋。（しづかに。）では、御主人がわたしを追ひ拂へと云はれたのか。

男乙。さうも云はれないが、なんとかしてあいつを追ひ拂つてしまひたいと口癖のやうに云つてゐるのだ。

男甲。もう容赦は出來ないから、けふこそはいよいよこゝを立退いて貰はう。

良齋。いや、それでは約束が違ふ。この店が繁昌してゐる限りは、わたしもこゝに店を出させて貰ふ約束になつてゐる。おまへ達の知らぬことだ。なまじひの忠義立はしないがよい。

男甲。こいつ惡く落ちついてゐる奴だ。けふこそは腕づくでも立退かせるから然う思へ。

男乙。ぐづ〳〵してゐると、その店をぶちこはして蜆川へ叩つ込むぞ。

良齋。それは迷惑。まあ、まあ、止めてください。

男甲。（乙と眼をみあはせる。）いつまで云つても埒はあかねえ。二度と出て来ないやうにその店をぶちこはしてしまへ。

良齋。これ、無法なことをさつしやるな。

二人。えゝ、やかましい。

（ふたりは良齋の店をひつくりかへすを、良齋は支へる。この悶着のあひだに出居衆の女房小梅、前とは違ひて派手やかな姿、日傘を持ちて出づ。）

小梅。これ、これ、どうしたんだよ。

良齋。御覧なさい。お店の衆が押掛けて来て亂暴狼藉、かくの通りの始末でござる。

小梅。なにか喧嘩でもしたのですかえ。

良齋。喧嘩ではない。わたしがこゝに店を出してゐるのを、この衆が兎角に邪魔にして、毎日のやうに立去れ立去れとやかましく云ふ。それが嵩じて、けふは腕づくの騒ぎ、おまへからよく叱つてください。まことに穏かでないことだ。

小梅。それはどうも相済みませんでした。（男どもに。）おまへ達は良齋さんにあやまつて、倒した店を直しておあげよ。

（眼で知らされて、男どもは首肯く。）

男二人。はい、はい、まつぴら御免下さい。

（ふたりは倒したる店を繕ひて、元のやうに道具をならべる。）

小梅。あやまつたらもう奥へおいでよ。

男二人。はい、はい。（奥に入る。）

小梅。おまへさん。なぜ人の顔を見てゐるんですよ。

良齋。けふはどこへ行かれた。

小梅。野中の観音様へお参りをして来ました。

良齋。野中の観音へ……。むかしと違つて、大層御信心になられたな。

小梅。え、（忌な顔をする。）

良齋。いや、御信心は結構でござる。

小梅。それはそれとして、ねえ、良齋さん。おまへさん後生だからこゝへ店を出すのを止してくれませんかね。

良齋。（冷やかに。）やはりわたしにこゝを立退けと云はれるのか。

小梅。立退けといふと、何だか角が立ちますけれど、商賣をするのはこゝの家の前に限つたこともありますまい。わたしが改めて頼みますから、どこかほかの所へ行つてくださいよ。

良齋。そんなにお邪魔になりますかな。（かんがへる。）併しおかみさん。去年の十月二十七日の晩、わたしがおまへ方夫婦の身を上をうらなつて、今夜のうちに度えらい大きな福が来ると云つた。

（小梅はぎつくりしたやうに無言でうなづく。）

良齋。すると、その占ひが覿面にあたつて、裏屋住居のおまへ方がたちまちに身上を仕出して、今ではかういふ風呂屋の主人になられた。

小梅。（堪らないやうに。）判りましたよ。それがどうしたと云ふんですよ。

良齋。そのときにお前方は約束の通り、わたしに禮をくれると云はれたが、わたしは一文もいらないと云つて斷つた筈だ。

小梅。こつちで上げようといふお禮のお金を、おまへさんは何うしても受取らないで、その代りにおまへの店の前に、占ひの店を出させてくれと云ふことでした。

良齋。それ、それをちやんと覺えてゐられる程ならば、今更となつて兎やかう云はれる譯は

あるまい。おまへばかりでなく、御亭主の由兵衛どのも承知の上で、店びらきの日からわたしはこゝに店を出してゐる。それを追ひ拂はうといふのはお前がたの方が無理ではないかな。

小梅。(困つて。)でも、おまへさんが毎日こゝへ出て來て、わたし達の出這入りを睨んでゐられると、なんだか心持がよくないんですよ。

良齋。わたしが睨んでゐる……。そんなことがあるものか。わたしはこの通り、笠を深くかぶつてゐるではないか。

小梅。それでもなんだか煩いんですよ。

良齋。なにがうるさい。

小梅。おまへさんだつて無理に強情を張つてゐることも無いぢやありませんか。こんな大道へ店を出して、砂つぼこりを浴びてゐるよりも、どこかへ小綺麗な床店でも持つた方がいいでせう。さうでもすれば、わたしも三兩や五兩は都合してあげますよ。

良齋。折角だが金はいらない。おまへ方から金と名の付くものは一文も貰ひたくない。唯ここで商賣をさせて貰へばよいのだ。

小梅。(舌打ちして。)おまへさんは隨分意地が惡いねえ。

良齋。意地が惡いわけではない。それが當りまへのことだ。

小梅。(じれて。)えゝ、もう勝手にするがいゝ。人困らせの意地惡め、天のじやくめ。今にみろ。

(小梅は憎さげに罵りて、そのまゝ足早に暖簾口に入る。良齋は平氣で店に座をかまへてゐる。上のかたより三次郎が屈託顔にて出で、梅風呂の暖簾をくゞらうとして不圖うらなひの店に目をつける。)

三次郎。おゝ、いつもの易者が出てゐる。(思ひついて良齋の店さきに來る。)大分お暖かになりました。

良齋。はい。めつきりと暖かくなりました。おお、三次郎さん。別にお變りもないか。見れば顏の色がよくないやうだが、やはり天王寺屋の店にお勤めかな。

三次郎。いえ。店には勤めてゐられぬやうな譯がございまして、去年の冬から平野町の請人の宿にあづけられて居ります。實はそれに付きまして、先生の御判斷をねがひたいのでございますが……。

良齋。それはわたしの商賣、お安いことでござる。して、どういふことを見て貰ひたいと云はれるな。

三次郎。(躊躇して。)實はあの……。

良齋。むゝ。

三次郎。わたくしに大きい心配事がございまして……。

良齋。それはお氣の毒なことでござる。して、その御心配事とは……。

三次郎。(ため息をつく。)それが何うも……。めつたには云はれないのでございます。と申して、なんとか云はなければなりますまいが……。(いら〳〵して。)先生。わたくしは自分ひとりの胸にをさめてゐる大事のことがございまして、それを正直に何も彼も云つてしまへば、自分の身の明りも立ち、自分の胸も輕くなるのでございますが……。迂濶に云つては人の迷惑、云はなければ自分の氣が濟まず……。わたくしはまあ、どうしたら宜しいのでございませう。

良齋。さう取亂してはならぬ。まあ、おちついたが好うござるぞ。では、先づお前にどのやうな御心配があるか。わたしの方から占つてみませう。

三次郎。(ぎよつとして。)それが先生にお判り

になりませうか。

良齋。そこが占ひでござる。（天眼鏡を把る。）さあ、お手を拜見。

三次郎。（あわてゝ。）まあ、待つてください。見て貰つていゝか惡いか。（かんがへて。）もし、先生。わたくしの心配事はなんでもいゝとして、一體わたくしはこれから何うしたらよからうか。唯それだけを占つては下さりますまいか。

良齋。承知しました。では、それだけを占ひませう。

（三次郎は怖々ながら手を出せば、良齋は天眼鏡にてながめ、更に筮竹を取り、算木をならべてみる。そのあひだも三次郎はおちつかぬ體にて、不安らしく左右をうかゞひゐたるが、やがて下のかたを見かへる。）

三次郎。先生。あれ、あちらから來るのはお長屋の坊樣ではござりませぬか。

良齋。（おなじく見る。）おゝ、成程、あれは相長屋の西住さんだ。さうだ、さうだ。こつちを見てにこ〳〵笑つてゐる。あの坊さん、どうしてこゝらへ遣つて來たかな。

三次郎。（そは〳〵して。）婦夫婦の一つ長屋の坊樣が、こゝへ來る……。では、わたくしは又まゐりませう。

良齋。いや、遠慮はない。おまへもあの坊さんを識つてゐる筈だ。

三次郎。その識つてゐる人の顔をみるのが、此頃はなんだか怖ろしいのでござります。いづれ又まゐります。御免ください。

（云ひすてゝ三次郎は逃げるやうに暖簾の内に入る。）

良齋。どうも可怪な男だな。併し無理もない。

（下のかたより齋坊主西住出づ。）

西住。おゝ、良齋さん。毎日よく精の出ることでござりますね。

良齋。（笠をぬいで店を出る。）西住さん、どこへ行きなさる。おまへもこゝらの色町に檀家があるのかな。

西住。わたし等のやうな齋坊主をこゝらで頼む家はめつたにござらぬが、けふはこゝの風呂屋へ呼ばれました。（向風呂を指さす。）むかしの相長屋のなじみで、わたしもこの曾根崎に一軒の檀家が出來ましたよ。

良齋。けふは二十七日、おかみさんは觀音まゐりにゆく。家へはおまへを呼ぶ。なにか佛の命日でもあるとみえるな。

西住。大かたそんなことでござりませうよ。併し良齋さん、人間の運はわからぬものでござりますな。御承知の通り、わたし達の隣長屋に住んでゐて、宏客にむかつても滿足な長い着物一枚持たずに顫へてゐた由兵衞どの夫婦が僅に身上をこしらへあげて、たとひ小さい店にもしろ、この曾根崎の風呂屋を買つて、かうして派手な商賣をするやうになつたので、わたしも一旦はびつくりしましたよ。

良齋。（笑ふ。）おまへばかりでなく、世間でもびつくりする筈だが……。

西住。世間では……。（聲を低めて。）なんでも賽の目がうまく中つたのだらうと噂をしてゐますよ。まつたくあの夫婦は賽をころがすのが名人だと云ひますからね。

良齋。さうかも知れない。それでお前はこれから行くのだね。

西住。なにしろ昔とは違ふのだから、けふのお齋にはしつかり御馳走がありませう。それが樂みでござりますよ。はゝゝゝゝ。おまへさんも古いおなじみだから、一緒に呼ばれては何うですね。

良齋。呼ばれもしないところへ押掛けにも行か

れまい。又、呼ばれたにしても、わたしは御免だ。

西住。なぜね。

良齋。なぜと云つて、まあ止さう。どうも止した方がよささうだ。おまへも早くお經をあげて、早く御馳走になつて、早々に出て來た方がよからうぜ。

西住。では、まあわたし一人で行つて來るとしませう。はい、御免なさい。

(西住は會釋して暖簾をくゞり入る。)

良齋。けふのやうな日はもう好加減にして歸らうかな。いや、春の日の暮れるにはまだ間がある。あの軒行燈に灯の這入るまでこゝに控へてゐて、どんなことが始まるか、見とゞけて行くとしようか。

(良齋はしづかに笠をかぶりて、再び店の床几に腰をかける。下方入りの騷ぎ唄遠くきこゆ。)

(二)

梅風呂の奥座敷。本縁附の二重屋體にて、風雅なる造作と知るべし。上のかたに床の間、つゞいて出入りの襖、下の方は壁。上のかたは廻り縁にて、障子を半分しめてあり。庭には櫻の立木、石燈籠、飛び石などありて、上のかたには少しくあとに下げて土藏の白壁みゆ。庭の下のかたには低き四つ目垣を結ひて、小さき枝折戸あり。垣の裾には山吹など咲けり。枝折戸の外も庭のこゝろにて植込や建仁寺垣などみゆ。

(座敷には小梅がおしゆんの襟髪をつかんで引き据ゑ、長煙管をふりあげて折檻するを、三次郎が支へてゐる。)

三次郎。まあ、姉さん。そんな手暴いことを……。まあ、待つてください。

おしゆん。どうぞ堪忍して下さい。

小梅。どうして堪忍が出來るものか。年も行かない癖にして、こんな強情な奴はありやあしない。ちつと身にしみるやうに痛い目をみせてやるのだ。

三次郎。もし、それはあんまりでございます。

小梅。何があんまりだ。女の肩ばかり持つと承知しないぞ。

(小梅は三次郎を突きのけて、おしゆんを酷たらしく打つ。おしゆんは聲をあげて泣く。

三次郎。なんぼ何でもそんな邪險なことを……。(無理に小梅をおさへる。)一體どうすればよいのでございます。

小梅。長い短いは云はない。わたしの云ふことを素直にきいて勤めに出るか。

おしゆん。ほかのことなら兎も角も、そればかりはどうぞ堪忍して……。

小梅。また堪忍か。どこまで世話を燒かせる奴だか。これ、三次郎。こいつなか〳〵強情で手に負へない奴だから、お前からよく云ひ聞かしておくれよ。

三次郎。(聲をふるはして。)姉さん。それではまるで話が違ふではございませんか。その女はわたしに添はして遣るといふ約束で、觀音前の茶店から連れて來たものを、今さら勤め奉公に出すなどとは、たとひおしゆんが承知しても、この三次郎が不承知でございます。姉さんはこのあひだ何と仰しやつた。それほど思ひ合つてゐるものならば、いつそこつちへ連れて來て、家の手傳ひでもさせたらばと……。

小梅。それ御覧な。家の手傳ひをさせるといふ約束で連れて來たんぢやあないか。いくら姉弟の仲だと云つて、諸式の高いこの御時節に、弟の色女をひき摺り込んで、無駄飯をく

はして置いて堪るものかね。お氣の毒だが、わたしは藏屋敷を親類に持つちやあゐないんだよ。

三次郎。それですから手傳ひは元より承知して居りますが、唯の手傳ひと勤め奉公とは違ひます。可愛い女に勤め奉公をさせようと思つて、わたしがわざ〳〵こゝへ連れて來るか來ないか、積つてみても知れたことではござりませんか。

小梅。なにが可愛い女だ。この砂糖漬野郎め、甘つたるいことを云ふな。一旦こゝの家へ連れて來た以上は、おまへの女でももうお前の自由にはさせないよ。

三次郎。姉さんの自由にもさせられません。姉弟と思つて油斷したのが一生のあやまりであつた。毒蛇の棲家のやうなところに、その女をもう一刻も置くことは出來ません。わたしが連れて歸ります。さあ、おしゆん。早く來い。早く來い。

（三次郎はおしゆんの手を把つて行かうとすれば、小梅は三次郎をつかんで曳き戻す。）

小梅。姉弟だと思ふなら、なぜ姉さんの云ふことを肯かないのだ。毒蛇のすみ家が怖ければ、女を置いてお前だけ歸るがいゝ。

三次郎。いゝえ、わたし一人では歸りません。自分の女は自分で連れて歸ります。

（三次郎はおしゆんを連れて行かうとするを、小梅は遮る。この悶着の最中に、奧より由兵衛、風呂屋の亭主のこしらへにて、煙管と煙草盆を持ちて出づ。）

由兵衛。これ、これ、どうしたものだ。（雙方のあひだに割つて入る。）なんぼ移り換へ前だと云つて綻びでも切らしちやあ詰らねえ。まあ、靜かにするがいゝぜ。ふだんからおとなしい三次郎が姉弟喧嘩とはめづらしい。一體こりやあどういふ間違ひだ。小梅もまた色氣のねえ。座敷中へほこりを立てるな。

（由兵衛は笑ひながら座に着く。おしゆんは泣いてゐる。）

小梅。わたしだつて時候はづれの煤はきをしたくはないが、あんまり這奴等がわからない獸物揃ひだからさ。

三次郎。わたしに取つては唯つた一人の姉さん、大抵の無理は默つて通すつもりでござりますが、なにを云ふにもこの事ばかりは……。

由兵衛。（空とぼけて。）むゝ、小梅がそんな無理を云つたのかえ。

三次郎。（一生懸命に。）はい、無理でござります。無理でござります。勘當前の本店に出てゐるおしゆんを引き取つて下されて、まことにありがたいと思つて居りますと、それを無理無體に勤め奉公に出さうと云ふのでござります。

由兵衛。（やはり空とぼけて。）むゝ、そんなことか。女房がそんなことを云つたのか。それはおれも初耳だ。

（由兵衛はかんがへながら煙草をのんでゐる。小梅も由兵衛の煙草を長煙管につめて喫む。）

三次郎。（由兵衛に。）さういふわけでござりますから、姉さんが無理か、わたくしが無理か、どうぞお捌きをねがひます。

由兵衛。あらためて捌きを付けるまでもねえ。どつちが無理かは判つてゐる。だが、三次郎さん。おまへの姉さんだつて氣ちがひぢやあ無し、まして鬼でも蛇でもねえ。それがそんな無理を云ひ出すには、よく〳〵よんどころない仔細のあることだらう。一途に無理だの邪險だのと云はねえで、そこはよく察して貰はなけりやあならねえ。

三次郎。それは察しても居りますけれど、ほか

の事とは違ひますので……。

由兵衞。さあ、そこだ。去年の十月、思ひも付かねえ金が手に這入つたので、それを元手に賽ころを振つてみると、運のいゝときは不思議なもので、とん／＼拍子に云ふ目が出て、すこしは纏まつた金も出來た。さうなるといつまで裏長屋に燻ぶつてゐるのも氣が利かねえと、女房とも相談の上で、この風呂屋が賣物に出たのを幸ひに、先づ半金だけを渡してこつちの物にして、この正月から梅風呂の暖簾をかけることになつたが、新店の上に元手も十分にまはらねえから、大勢の抱へを飼つて置くことも出來ず、派手商賣だけに眼にみえねえ錢もいる。

小梅。それをわたしもよく云つて聞かせてゐるのに、どいつも這奴も聾みたやうな奴ばかりで、一向にお通じがないんだよ。それだから、當分のうちは、そのおしゆんを店の助けに出して貰つて、こつちの都合さへ付けばすぐにも店をひかせる。多寡が三月か四月のところだと割ッつ口說いつ賴んでも、女は強情で泣くばかり、男は喧嘩腰で姉に食つてかゝる。そんな判らずやが揃つてゐちやあ、なんぼわたしだつて大きい聲の一つぐらゐは出したくもならうぢやないか。

由兵衞。まあ、いゝ。おまへが口をきくと喧嘩になる。ねえ、三次郎さん。まあさういふ苦しい譯があるのだから、無理でも姉さんの云ふことを素直に肯いて……。

三次郎。え。では、おまへさんも同じやうなことを……。

由兵衞。女房に代つておれが賴む。梅風呂の由兵衞が手をさげて賴むのだ。なんと肯いては貰へめえかね。

（三次郎はだまつてゐる。）

由兵衞。忌かえ。おい、おしゆん坊。おまへはどうだね。

（おしゆんも默つて泣いてゐる。）

小梅。どいつもこの通りのじやい／＼馬だ。呆れるねえ。

由兵衞。三次郎さん。默つてゐちやあ果しがねえ。おれにこんなに口を利かせて、唯だまつてゐちやあ濟むめえぢやあねえか。

三次郎。（思ひ切つて。）たとひなんと仰しやりましても、こればかりはお斷り申します。

由兵衞。むゝ、さうか。立派な返事だ。男らしい挨拶だ。（小梅と顏をみあはせる。）それぢやあもうお前には賴むめえ。おい、小梅。その女を引摺つて行つて、あの土藏のなかへ打ち込んでしまへ。

（三次郎もおしゆんも驚く。）

由兵衞。おれが手を下げて賴むと云つても、肯かねえといふなら仕方がねえ。これからは男と男の達引だ。おれも梅澁の由兵衞に立ちかへつて、相手になるからさう思つてくれ。

（小梅に。）その女を早く連れて行け。

小梅。（おしゆんに。）さあ、きり／＼すの生れ代りぢやあるまいし、いつまで泣いてゐるんだね。泣きたければ商賣に出てから勝手にお泣きよ。それも賣物の一つになるだらう。

（小梅は立寄つておしゆんを引立てようとすれば、おしゆんは泣きながら身を藻搔く。）

おしゆん。あれ、助けて……。三さん、三さん。

（三次郎に寄らうとするを、由兵衞は隔てる。）

由兵衞。やい、やい。どうしてもおれの相手になる氣か。女房の弟だと思つて、甘くしてゐりやあ附上りやあがるな。

小梅。ほんたうに世話のやけた奴等だねえ。さあ、お出でよ。

おしゆん。あれ、どうぞ堪忍して……。どうぞ助けて……。

小梅。おまへのやうな強情な奴は、土藏の奥へ叩つ込んで、素裸にして荒繩で引つくゝつて置くからさう思へ。

おしゆん。あれ、助けてください。後生です。拜みます。

小梅。やかましいよ。

（おしゆんは頻りに泣き叫ぶを、小梅は無理無體に引摺つて、上のかたの緣づたひに連れてゆく。三次郎は追はうとするを、由兵衞はおさへ付けてゐる。）

三次郎。（身を藻掻く。）えゝ、おしゆんは遣られぬ。これ、おしゆん、おしゆん。

由兵衞。えゝ、さう〳〵しい。騷ぐな、さわぐな。

（由兵衞は三次郎を突き放して起ちあがれば、三次郎は又跳ね起きておしゆんのあとを追はうとする。）

由兵衞。（三次郎をひき戻して。）えゝ、執念ぶけえ奴だ。さつさと出て行け。（三次郎を緣より庭先へ蹴落す。）いつまでも騷いでゐやあがると、うぬ、ぶち殺すぞ。（烟管をふり上げる。）

三次郎。（無念の涙をふいて。）揃ひも揃つた鬼め、惡魔め。姉弟の義理も人情ももうこれまでだ。

（三次郎は今に見ろと云ふこゝろにて、足早に庭口より下のかたに立去る。）

由兵衞。（あざ笑ふ。）ざまあ見やがれ。おなじ血を分けた姉弟でありながら、小梅の弟にどうしてあんな生ぬるい野郎が出來たかな。

（由兵衞は引返して奥へ行かうとする時、奥より仲居出づ。）

仲居。あの坊樣がさつきからお待かねでござりますが……。

由兵衞。むゝ、齋坊主が待つてゐるのか。ごたごたしてゐるので忘れてゐた。すぐに行かう。（云ひかけて考へる。）いや、こつちに連れて來てくれ。

仲居。はい、はい。（引返して去る。）

由兵衞。（ひとり言。）あの坊主の顏をみるのもあんまり嬉しくねえが、まあ仕方がねえ。

（由兵衞はそこらを片附けて坐る。やがて襖の外にて西住の聲きこゆ。）

西住。はい、はい。判りました。（襖をあけて出る。）

由兵衞。西住さん。長く待たせて濟みませんでした。

西住。（あたりを見まはして。）いや、どこもかしこも中々お綺麗でござりますな。

由兵衞。なにしろ古い家を買つて些とばかり手入れをしただけで、まあ聚樂町の長屋よりも少しは優しぐらゐのところさね。

西住。どうして、どうして。結構な御普請でござります。（會釋して坐る。）そこで、早速でござるが、今晩の佛樣はどういふお方でござりますな。

由兵衞。今夜の佛は……。あの、何さ。わたしの女房の弟さ。

西住。では、あの三次郎さんといふお人の……。御兄弟でござりますか。

由兵衞。さう、さう。あの三次郎の弟さ。

西住。お幾つでおなくなりなされました。

由兵衞。え。十五か十六でしたよ。それは女房に聞かなければよく判らねえ。（笑ふ。）今までは知つての通りの裏屋住居で、佛いぢりどころの沙汰ぢやあなかつたが、曲りなりにも斯うして一軒の家を持つてみれば、信心も德のあまりで、まあ自分の家の佛には線香の一本も供へてやるといふ氣になつたのさ。さういふ譯だから、これからも時々に呼ばれて

來ておくんなさい。

西住。はい、はい。それは御奇特のことでござります。おなじ佛でも長命したお方は格別、年若でお果てなされたお方は、兎かくに魂がこの世に殘つて、得脱成佛がむづかしいものでござる。よく〱御回向をなされたが宜しうござります。

由兵衛。そんなものですかね。

（由兵衛は煙草をのみながら聴いてゐる。上のかたの縁づたひに小梅出で來り、障子の外に聽いてゐる。）

西住。現にこんなことがござりました。御承知でもござらうが、去年の十月二十七日の晩わたくしが小橋の方の檀家へお齋に呼ばれまして、その歸り路に……もう彼是れ四つ過ぎでもござりましたらうか、あの野中の井戸のところへ差しかゝりますと、暗い晩で、あたりに人通りは無し、遠くでは狐の鳴き聲がきこえる。わたくしもなんだか薄氣味惡くなりましてな、口のうちでは念佛を唱へながら急いでまゐりますと、井戸のなかから青い火が燃えてゐるやうに見えました。

（小梅は顔を出して、由兵衛と眼をみあはせる。）

由兵衛。むゝ。それからどうしたえ。

西住。あれは鬼火か狐火かと、わたくしはいよいよ氣味が惡くなりまして、急いでそこを駈けぬけようと致しますと、まあお聽きなさい、その青い火がふは〱と宙を飛んで、丁度わたくしの行く先を迷つてゆくやうでござります。もう堪らなくなつたのでわたくしは眼をふさいで一心にお念佛を百遍くりかへして、それから怖々ながら眼をあいて見ますと、その青い火はもう何處へか飛んで行つてしまひました。

由兵衛。それはやつぱり人魂とでもいふのかね。

西住。あとで聞きますと、順慶町の絲問屋天王寺屋の長吉といふ丁稚どのが何者にか絞め殺されて、野中の井戸に投げ込まれてゐたと云ふことでござりました。してみると、其晩にわたくしの眼にみえましたのは正しくその長吉の人魂……。それと知つて、又今更にぞつと致しました。どうで非命に死んだ人のたましひは浮ばれぬのはもつともでござりますが、前にも申す通り、取りわけて若い人が非業の最期、その魂がいつまでも迷つてゐるのは無理もないことだと存じました。

由兵衛。天王寺屋の丁稚のことはわたしも聽いてゐるが、その下手人はまだ知れないやうだね。

西住。まだ知れないさうでござります。その後も毎晩のやうに野中の井戸から青い人魂が迷つて出ると云ひますから、その下手人の知れるまでは、長吉といふ若い人の魂も浮ばれないことでござりませう。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。

由兵衛。人のことでもそんな話を聽くと、なんだか心持のよくねえものだ。ぢやあ、西住さん。あつちの御佛前へ行つて早くお經に取りかゝつてください。

西住。もうお經をはじめても宜しうござりますか。

由兵衛。女房もわたしもあとから參りますから、どうぞお早く願ひます。

西住。はい、はい。（起ちあがる。）今お話し申した天王寺屋の丁稚も二十七日、今夜のほとけ様と同じ命日でござりますよ。

由兵衛。不思議な廻り合せさね。

西住。では、御めんなさい。

（西住は奥に入る。障子のかげより小梅出づ。）

小梅。あの坊主、碌なことは云はないね。
由兵衛。むゝ、忌な話をしやあがる。あいつを呼ばなければよかつたな。
小梅。あいつばかりぢやあない、あの占ひ者の奴もなんとかして追ひ拂ふ工夫はあるまいかね。いくら初めの約束だからと云つて、家の前に店を出して毎日眼張つてゐることもないぢやあないか。出這入りのたんびに彼奴の顏をみると、なんだか氣が咎めてならないんだよ。
由兵衛。あいつはどうもあの晩の一件を氣取つてゐるらしいぜ。
小梅。それだから忌でならないのさ。あいつは屹とあの一件を知つてゐて、わざと面當てらしく家の前に來てゐるに相違ない。坊主は今夜だけだからいゝが、占ひ者の方は毎日眼張つてゐるんだもの、まつたく遣り切れないね。
由兵衛。おれもなんだか彼奴が氣になつてならねえ。困つた奴だな。
小梅。いつそ強請にでも來るならいゝが、たゞ默つてこの家を睨んでゐられちやあ、今の話の人魂よりも薄氣味が惡いよ。
由兵衛。まつたく生きた幽靈のやうな奴だ。（少しかんがへる。）もう仕方がねえ。おれがもう一度かけ合つて、あいつが素直に立退けばよし、強情にぐづ〳〵云つてゐるやうなら、日が暮れて歸るところを附けて行つて、人通りのねえところで……。
小梅。長吉の二代目かえ。
由兵衛。あいつもしやもだ。
小梅。さうした方が寢ざめがいゝね。
（奥にて叩き鉦の音きこゆ。）
由兵衛。坊主め、お經をはじめたな。
小梅。ぢやあ、わたし達も早く行かうよ。あの坊主はお酒をのむから、お齋のときには無暗に醉はして、人魂の話なんぞも封じてしまはうぢやないか。
由兵衛。それがいゝ、それがいゝ。おれ達も飲むとしよう。
（夫婦は起ちあがる。叩き鉦の音。）

（三）

もとの梅風呂の店さき。
（賣卜者の良齋はやはり笠をかぶりて店を出してゐる。笛太鼓の音遠くきこゆ。梅風呂より仲居が出で來りて、軒の行燈に蠟燭の火を入れて去る。）
良齋。（みかへる。）いよ〳〵軒の行燈に灯が這入つたぞ。もう何か始まりさうなものだが……。それともおれの占ひは外れたかな。
（下のかたより三次郎は覆面して忍び出で、梅風呂の暖簾のあひだより内をうかがふ。やがて町奉行所の同心上原善之助は捕手二人をしたがへて出づ。）
善之助。これ、三次郎。
三次郎。はい、はい。（覆面を取りてひざまづく。）
善之助。天王寺屋の丁稚長吉を絞め殺して、金百兩をうばひ取つたのは、その方の姉婿由兵衛の夫婦に相違ないか。
三次郎。相違ござりませぬ。そのときから大抵は察して居りましたが、何分にも親身の姉の身の上にかゝはりますことでござりますので、つい其儘に致して居りましたは、重々恐れ入つてござります。
善之助。姉弟の縁によつて、今まで口を塞いで居つたは不屆至極のことではあるが、訴人の功にかへて免してつかはす。その方は内の勝手を知つてゐるであらう。案内しろ。
三次郎。はい、はい。

（善之助は呼子の笛を吹く。左右より捕手六人出づ。）

善之助。裏表を囲んで取逃すな。

（捕手は心得て、二人づつ左右に別れて去る。）

善之助。（三次郎に。）それ、ゆけ。

（三次郎は先に立ちて、善之助は捕手ふたりを連れて内に入る。他の捕手二人は入口の左右にひそみゐる。）

良齋。（たち上る。）やつぱりおれの占ひは中つた。今に芝居がはじまるぞ。

（暖簾のうちより西住あわたゞしく走り出づ。）

西住。（あとを見返る。）それ、それ、大變なことになつた。

良齋。（笠を脱いで進み出づ。）これ、西住さん。どうした、どうした。

西住。（ぎよつとして振向く。）おゝ、良齋さんか。どうも怖ろしいことになりました。わたしがお經をあげてゐる最中に……。

良齋。いや、わかつた、わかつた。（笑ふ。）それではまだお齋の御馳走に有付かなかつたな。

西住。御馳走どころか。命からがらで逃げ出して来ました。

（暖簾の内より小梅は褄をからげ、あみ笠をかぶりて忍び出づ。左右に潜みゐたる捕手二人はすかし見て組み付く。小梅は振拂つて逃げんとするを、捕手はおさへて繩をかける。奥より由兵衛も繩にかゝり、善之助と捕手六人が附添ひて出づ。）

小梅。由兵衛さん。おたがひさまだね。

由兵衛。むゝ、一蓮托生だ。（良齋をみて。）やい、大道うらなひめ。貴樣が訴人したのだな。

良齋。しづかにしろ。訴人する程ならば疾うに訴人する。町内にとれながら傍目こゝへ見物に来てはゐないのだ。

小梅。ぢやあ、三次郎……。あいつだ、あいつだ。乾とあいつに相違ない。ほんたうに憎らしい奴だねえ。畜生め、おぼえてゐろ。

善之助。さあ、立て、立て。

小梅。（行きながら西住をみかへる。）西住さん。ひとつ長屋のおなじみ甲斐に、どうぞ御回向をねがひますよ。

西住。はい、はい。（口のうちで。）南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。（珠數を繰る。）

由兵衛。どうでおれ達は地獄へ墮ちるのだ。かいかん坊主のお念佛ぐらゐで救はれるのぢやあねえや。

小梅。違ひないね。はゝゝゝゝ。

（夫婦は笑ひながら下のかたへ引立てられてゆく。暖簾の内より三次郎はおしゆんの手をひいて出で、窃とそのあとを見送る。西住は念佛を唱へてゐる。良齋はやはり冷やかに眺めてゐる。）

——幕——

（大正十四年九月作）

風露集（一）

春

首を振る張子の虎や江戸の春

水村も簾もほしけり須磨の春

柳を花を錦に織るや京の春

西行作歌月に題して

侘寝を十日の霧や水櫻

題 白酒

南朝の春や吉野のひな祭

白酒にわが愛人の醉ふを見し

わが家

登場人物——鳥山源太郎。石井藤兵衛。深田長助。金村新吉。小使良藏。源太郎の妻お仙。娘お榮、お花。若き學生一人。若き店員三人。ほかに花見の人々など。

（一）

時は現代、春の末。晴れてあたゝかき日の午後。

場所は飛鳥山。舞臺は一面の芝原にて、所々に櫻の大樹あり。花は盛りをすぎたれど、枝はなほ白く、風の吹くごとに落花ははらはらと飛ぶ。山はうしろの方へ少しづつ高くなりて、櫻のあひだより工場の棟及び煙突など遠くみゆ。

（良藏、五十餘歳、會社か工場の小使とおぼしく、古びたる小倉の洋服を着て草履をはき、大きな洋傘を持ちて、下の方より出づ。）

良藏。（空を仰ぐ。）用心して傘を持つて出たが、いゝ塩梅に降りさうもないな。傘はお荷物になつても降つてくれない方が優しだ。（上の方を見る。）おゝ、電車が今着いたとみえて、大分ぞろぞろ登つてくるぞ。

（上の方より官吏風の夫婦と小兒、書生一人、商人風の男一人、女學生三人、兵士二人、相前後して出で來り、良藏とすれ違ひながら行きすぐ。良藏も上の方にあゆみ去る。下の方より鳥山源太郎、三十七八歳、今朝監獄から放免されたる男にて、髮は長くのびて左の頬に大いなる疵のあとあり。汚れたる職工服をきて、鳥打帽子をかぶり、新しき草履をはく。石井藤兵衛、五十餘歳の老鑛夫、これも同じく出獄者にて、よごれたる夏服を着て、古びたる麥藁帽子をかぶり、半ズボン脚絆にて新しき草鞋をはく。源太郎は手に何物をも持たず、藤兵衛は竹の皮づつみを新しき手拭につゝみてぶら下げ、片手には正宗の大壜を持つ。二人も群集とすれ違ひて、上の方へゆきかけしが、稍や疲れたる體にて立ちどまる。）

藤兵衛。（元氣よく。）さあ、さあ、此處らで先づ休まうぢやないか。何もさう血眼になつて駈け摺りまはるにも及ぶまい。（芝原のうへに胡坐をかく。源太郎は無言にて坐る。）風はひどく吹かず、日は照らず、暖かで好い時候になつたな。どうだい、花がよく咲いたぜ。久振りで人間の世界へ出てみると、なんだか夜が明けたやうな氣がするよ。おい、さつきからなぜ黙つてゐるんだ。ひとが口をきいたら何とか返事をしてくれるもんだぜ。お前はどうも愛嬌を知らねえ男だ。はゝゝゝゝ。なにしろそこら中をむやみに引張り廻されたので腹が減つて來た。今そこで仕込んで來た兵糧を取出さうか。

（藤兵衛は竹の皮包みをあけると、海苔卷の鮨あらはる。藤兵衛は先づひとつ頬張りながら、衣兜から紙につゝみたる猪口を取出し、正宗の壜の口をぬく。源太郎はだまつて見てゐる。）

藤兵衛。（一杯飲む。）ほう、胃の腑へ浸み込んで、胸から腹が一面に引つくり返るやうだ。なにしろ、この香を嗅いだだけでもありがてえ。たつた一杯でも三年の苦しみの半分ぐらゐは取返してしまつた。これも監獄といふ暗いところから、明るい娑婆へ出たおかげだ。人間の子はやつぱり人間の世界に生きてゐるに限るなあ。どうだい、出獄祝ひに早速一杯やらねえか。おめえも大好きだと云つたぢやねえか。

源太郎。（氣のない顔をする。）好きは好きだが……。酒の味なんぞはもう忘れてしまつた。

藤兵衛。そりやあ待方にゐるあひだは好きな物や旨い物の味はなるたけ忘れてゐる方がいゝのさ。だが、かうして自由な世界へ出て來りやあ、好きな酒は浴びるほど飲むがよし、旨いものはうんと食ふがよし、それが人間の慾だ。無理に慾をおさへて我慢してゐることはねえ。まあ、なんでも可いから一杯飲んでくれ。（猪口を突きつけて無理につぐ。）

源太郎。飲んでも今は醉ひさうもないよ。（つまらなさうに猪口をながめてゐる。）

（藤兵衛は芝のうへに寢轉びながら鮨を食つてゐる。源太郎は顔をしかめながら無理に一杯飲み、無言にて藤兵衛に返し、罎をとりて酌をしてやる。あなたの工場にて汽笛の聲突然にきこゆ。源太郎は俄に眼をあげて後を見かへる。）

藤兵衛。（起き直る。）えゝ、だしぬけにびつくりさせやがつた。（また寢轉ぶ。）こゝらにも此頃色々の會社や工場が殖えたとみえるな。おい、お前の勤めてゐたのも此邊の工場か。

源太郎。むゝ。あの汽笛を聽きながら、毎日眞黒になつて正直に働いてゐたんだ。（感慨に堪へざる氣色。）

藤兵衛。（笑ふ。）なるほど正直に働いてゐたに違ひなからう。お前がもつと横着な人間に出來てゐたら、つまらねえ事であんな暗いところへぶち込まれる筈がねえ。十倍も惡いことをしても、大手を振つて世のなかを立派に渡つてゐらあ。兎かく人間と云ふものはそんなもんだよ。

源太郎。（歎息する。）冗談ぢやあねえ、まつたく俺が惡かつたんだ。が、おれに限つては決して心から惡い事をしようと思つたんぢやあねえ。ほんの一時の出來心で、今から考へると夢のやうだ。なぜあんな料簡を起したんだらうなあ。

藤兵衛。工場の機械をかつぎ出したんだと云ふぢやあねえか。

源太郎。機械といふほどの物でもねえ、鐵の棒を十二本ばかり持ち出したんだ。それも女や博奕の爲ぢやあねえ、みんな女房子のために遣つた仕事だ。

藤兵衛。むゝ。（酒をのみながら聽く。）

源太郎。いくら脊汗を滴らして、一生懸命にかせいでも、貧乏はあとから追掛けて來る。とても七十錢や八十錢の日給ぢやあ女房と子供二人は滿足にすごされねえ。これぢやあいけねえと思つたから一時は好きな酒も止めてみた。煙草も止めてしまつた。それでもまだいけねえ。おれだつて人間だ、女房子は可愛いや。どうかして些とは樂をさしてやりたいと、それぱつかりを苦に病んでゐるうちに、昔からいふ通り……貧の盜みだ。ふいと魔が魅して、おれを滅茶滅茶にしてしまやあがつたんだ。（口惜しさうに云ふ。）

藤兵衛。（笑ふ。）まつたくだ。どうせ魔が魅すなら大きい魔が魅してくれゝばいゝものを、鐵の棒二本は些とつまらなかつたな。お前は

うだ。

藤兵衛。おめえの女房や子供達も、いづれ何處かへ引越したんだらうが、いくらお前が監獄にゐるからと云つて、その落付先ぐらゐを知らして遣しさうなもんだな。

源太郎。それには又色々な譯があるんだらう。どうか無事でゐてくれゝば可いが……。（汽笛の聲が又もや響く。源太郎はふら／＼と起つてうしろの方を遠く見る。）

藤兵衛。（おなじく起ち上る。）どうだい。いつそ工場へ行つて聞いてみたら……。そこにはお前の昔の友達もゐるだらうし、おめえの家族の行先を知つてゐる者もあるだらう。

源太郎。さうさなあ。（考へる。）こんなざまを昔の友達に見られるのも忌だからなあ。だが、どうしても知れないといふ曉には、まあそんなことでもするより外はあるまいよ。なにしろ今日中にはどうしても探し當てなけりやならねえんだ。

（二人は何の的ともなしに、櫻の木の間をぶら／＼あるく。藤兵衛も無言で附いてあるく。二人の沈默。櫻の花ははら／＼と散りかゝる。）

藤兵衛。（木の根につまづく。）えゝ、あぶねえ。久振りで飲んだせゐか、足もとが些と可怪くなつたか。はゝゝゝ。

（上の方より町の娘二人連れ立ちて出で、藤兵衛を見て笑ひながら行き過ぐ。）

藤兵衛。おい、おい、娘さん、笑つちやあいけねえ。から見えても氣は確かなんだから……。おれがこれで芝居に出る惡侍なら、取つつかまへて無禮無禮に手打にでもしろと云ふところだが……。（娘はおどろきて早々に逃去る。）あはゝゝ。ちつと弄はうと思つてゐるうちに、もう逃げて行つてしまつた。やつぱり年を老つちやあ女の子に嫌はれるな。（帽子を取つて頭をなで、その帽子を櫻の枝にかける。）

源太郎。（獨語のやうに。）おれの娘ももうあの位の年頃だなあ。

藤兵衛。さう考へてばかりゐるなよ。さつきも途中で云つたことを何うする。

源太郎。さあ。

藤兵衛。氣のねえ返事だな。まあ、もう一度よく聽けよ。（源太郎の手をとつて、藤兵衛は櫻の根に腰をかける。源太郎は木によりて立つ。）いくら探したつてお前の女房子なんぞは、どこにゐるか判るもんぢやあねえ。よしんば判つたにしたところで、五年も六年も音信不通で、お前が監獄のなかからたび／＼手紙を出しても、一度も返事をよこさねえやうな、そんな不人情な女房や子供に、めぐり逢つたところで何うなるものか。まあ、さうぢやあねえか。

源太郎。（むつとする。）おれの女房や子供が不人情だと……。

藤兵衛。さうとも。左もなけりやあ自分たちの引越した先ぐらゐは、どうしたつて知らして置くべき筈だ。いくらお前の方ではかり戀しいの、可愛いのと云つてゐたつて、むかうぢやあもうお前のことなんぞは忘れてゐるかも知れねえ。（源太郎は屹と睨む。）親とも亭主とも思つちやあゐねえかも知れねえ。

源太郎。（憤怒を無理におさへる。）はゝ、そんなことを云つてくれるな。おれの女房や子供達はまさかにそんな人間でもない筈だ。

藤兵衛。これは俺がちつと云ひ過ぎたかも知れねえ。だが、何より直接に、おまへの亭主が今日出獄されると云ふのに、ひとりだつて迎ひに來てくれるぢやあ無し、その引越した先も判らねえやうにして置くと云ふのは、どう考へても頼もしくねえやうに思ふが……。

まあ、それよりもおれの意見について、どこか面白いところへ行つてみろよ。廣い世間には色々おもしろい所があるから……。

源太郎。鑛山の鑛夫なんぞがそんなに面白いかなあ。（嘲るやうに云ふ。）

藤兵衞。面白くなくつて何うするものか。北海道へ行かうが、九州へ渡らうが、どこへ行つても鑛山の仕事は澤山ある。一つところに半年でも一年でも働いて、飽きた頃には又どこへでも勝手に飛んで行くんだ。鑛山の仕事を地獄のやうに云ふのは、鑛夫仲間のほんたうの面白い味を知らねえ奴等の云ふことだ。からだ一つさへありやあ何處へ行つても良い錢が取れて、うまい酒も飲める、女も買へる。こんな氣樂な身の上はありやあしねえよ。おれなんぞは、此年になつても、一旦噛みしめたこの商賣の味を忘れられねえから、監獄で稼ぎためた工賃を旅費にして今夜からでも汽車に乘つて、どこかの鑛山へたづねて行くつもりだ。東京なんぞにまご〳〵してゐて何うなるものか。おれなんぞの眼からみれば、東京こそほんたうの地獄だ。惡いことは云はねえから、思ひ切つておれと一緒に旅へ出ろよ。きつと面白いところへ連れて行つてやるから……。え、どうだい。

源太郎。お前は親切に勸めてくれるんだらうが……。（氣のすゝまぬ顔。）

藤兵衞。親切と云ふほどでもねえが、あんなところで一緒に臭え飯をくつて、おなじ日に又一緒に娑婆へ出るといふのは、これも何かの因縁だらうから、おれもお前を他人のやうには思はねえ。おい、兄弟、ぐづ〳〵してゐねえで……。（自分の足をみせる。）おめえも草鞋をはく料簡になれよ。

源太郎。おまへは氣が若いよ。おまけに一人身體だから、どこへ行つても暢氣で面白からうが、おれには自分の家がある。女房がある。子供がある。

藤兵衞。その家は何處にあるんだ。その女房や子どもが何處にゐるんだ。（笑ふ。）さつきから探しても判らねえぢやあねえか。

源太郎。なに、判らねえ筈はねえ。これからもつと探してみるんだ。二日でも三日でも探してあるくんだ。

藤兵衞。むかうでもそれほどに思つてゐてくれれば可いがなあ。

源太郎。（少しく激す。）えゝ、もう止してくれ。お前はなんにも知らねえんだ。おれの女房や子供はそんなのぢやあねえ。（腹立ちまぎれに傍の櫻の枝を折る。）

藤兵衞。（又笑ふ。）おれをなぐる氣ぢやあるめえな。（源太郎は無言に其枝を捨つ。）折角折つたもんだから杖にしろよ。どこの鑛山へ行くにしても、山越しをするにやあ杖がいる。おれも一本折つて置かうよ。（これも手頃の枝を折つて、杖をこしらへる。）え、おい。おなじことを幾度も云ふやうだが、女房だの子だのと云つて、なか〳〵頼みになるもんぢやあねえぜ。なんでも一身のほかに味方はねえもんだと覺悟してゐなけりやあ、人間の世界は渡られねえ。おれなんぞは疾うの昔から悟を開いてゐるから、のん氣に日本中を渡つて歩いてゐるんだ。

源太郎。（詞しづかに。）おまへの云ふことは判つてゐるよ。だが、自分の家のある者は自分の家が戀しいのが人情だからなあ。

藤兵衞。その人情といふ奴があるので、人間はとき〳〵馬鹿を見るんだ。

（源太郎はだまつて芝の上に坐る。藤兵衞は杖を突いてみて、うまく出來たと笑ひながら、枝にかけたる帽子をかぶる。上の方より良藏再び出づ。）

源太郎。(良藏を見る。)やあ、良藏さんぢやありませんか。(なつかしげに立寄る。)

良藏。(首をかしげる。)お前さんは……どなたでしたつけ。(薄氣味惡さうにじろじろ視る。)

源太郎。わたしですよ。源太郎ですよ。

良藏。源太郎……。むゝ、なるほど、源太郎さんか。しばらく見ないうちに大層變つた。(氣の毒さうにながめる。)おまけに顏をどうしなすつたのだ。

源太郎。(頰の疵をなでる。)監獄にゐるあひだに、同監の奴と喧嘩をして、作業場の鉈でこんなに遣られたんですよ。(苦笑ひする。)

良藏。むゝ、隨分ひどい怪我をしたものだ。そんな大疵が出來たのですつかり顏違ひがしてしまつて、だしぬけに聲をかけられたのぢやあ迚も判らないくらゐだ。でも、まあ無事に出て來られて結構だつた。

源太郎。實は今朝やうやう放免になつたんです。

良藏。それでもまあ好かつた。ほんたうにつまらないことで、長いあひだ苦んだらうね。

(藤兵衛は芝の上に坐つて、纔に殘りし酒をのんでゐる。)

良藏。(藤兵衛を見返る。)この人もお連かね。

源太郎。おなじ監に一緒にゐて、今朝も一緒に出たもんですから、兎もかくも連になつて此方まで來たんですが……。(打笑みて。)なにしろ、丁度いゝところでお前さんに逢ひましたよ。早速ですが、わたしの家の奴等はどこへ引越して行つたんでせうね。

良藏。近所へ行つて聞きなすつたかね。

源太郎。早速近所へ行つて聞かうと思つたんですが、五六年のうちにまるで樣子が變つてゐるんで、些とも見當が付かなくなつてしまひましたよ。(さびしく笑ふ。)

良藏。こゝらも一年增しに繁昌になるからねえ。おまへさんのゐた頃とはまるで變つた。まあ早くいへば、龍宮から歸つた浦島のやうなもんだらうね。

源太郎。(苛々して。)おまへさんは知つてゐるんでせうね。家の奴等を……。

良藏。あゝ、知つてゐますよ。

源太郎。どこにゐるんです。

良藏。(氣の毒さうに。)なに、直にこの近所だが……。あの、田端の方に……

源太郎。田端の方に……。(嬉しさうに。)ぢやあ、すぐそこですね。

良藏。あの邊もすつかり開けましたよ。

源太郎。そこで何をしてゐるんでせう。

良藏。私もよくは知らないが……。(云ひにくさうに。)なんでも食物商賣をはじめて、なかなか景氣よく暮してゐるさうですよ。

源太郎。食物商賣をはじめて、景氣よく暮してゐる……。そんな資本がどうして出來たかなあ。(考へる。)なにしろ、それでまあ安心しました。巢鴨へ行つてゐるあひだも、女房子のことばかり心配してゐましたが……。

良藏。おかみさんも娘さん達も無事に暮してゐることは確かだから、まあ安心しなさるが可い。わたしも行つて見たことはないが、なんでも家號は櫻家とか云つて、休憩所兼帶の小料理屋のやうなことを遣つてゐるのださうだが、娘達が二人とも既う年頃になつたので、これが看板で若い人たちが隨分這入り込むさうですよ。はゝゝゝ。はゝゝゝゝ。

藤兵衛。はゝゝゝ。(酒をのみながら笑ふ。)

二人はおどろきて見返る。)

源太郎。(藤兵衛を横眼で睨みながら、良藏に。)どうも色々ありがたうございました。おかげで家の者の居所もみんな判りましたから、これからすぐに尋ねて行きませう。

厚化粧して、美しけれども卑しく猥なる風俗なり。）

お花。たうとう本降りになつてしまつたことねえ。でも、今夜は大變に暖かいわ。

學生。（茶を飲みながら笑ふ。）だん／＼暖かになつて來て好鹽梅だ。花が散つて青葉になると、人の心も自然におちついて來るから勉強するには都合が好い。

お花。ほゝ、あなたは何を勉強なさるの。この上に勉強を積んだら大變よ。（笑ふ。）

學生。馬鹿を云ひたまへ。からみえても僕は眞面目に學校へ行つて勉強してゐる人間なんだからね。（これも笑ふ。）

お花。あなたの行く學校は遊ぶんでせう。淺草學校……それとも吉原學校……。

學生。殘念ながらそんな學校へは入學する資格がないんだ。これから些とお花さんに仕込んで貰つて、それから入學試驗を受けようと思つてゐるんだが……。其方の勉強は甚だ不得手だからね。（又笑ふ。）

お花。不得手で丁度いゝ位よ。その上得手に帆をあげられたら、本當に大變だわ。今でさへ好加減に人をだますんだから……。

學生。冗談ぢやない。僕が君をだましたかしら。

お花。始終欺してゐるわ。このあひだも淺草の活動寫眞へ連れて行つてやるなんて云つて……。（睨める。）

學生。あの時は實際よんどころない用があつたんで失敬したんだ。今度は屹と約束を履行するよ。

お花。どうだか的になりやあしないわ。

學生。だが、お花さんのやうな人とうつかり一緒に出歩いたりすると、とんだ問題をひき起すからね。

お花。問題が起つたつて、あたしは構はないわ。あなたが御迷惑なんでせう。

學生。僕は構はないがね。

お花。あたしだつて些とも構はないわ。ねえ、あなた、活動には限らないけれども、近い中どこかへ一緒に行きませうよ。よござんすか。今度は屹と間違ひなしよ。きつと連れて行つてくださいよ。

學生。むゝ、よろしい。今度こそは誓つて間違ひ無しだ。

お染。（笑ひながら。）ちよいと、森田さん。花ちやんばかりと約束していゝんですか。

お花。いゝんだわ。ねえ、森田さん。（媚びるやうに寄添ふ。）

學生。さあ、どうしたもんだらうね。

お染。あたしを置去りにして行くと、みんなに吹聽してやるから然う思つておいでなさいよ。

お花。吹聽される方が可いんですとさ。

お染。まあ、たまらないねえ。ほゝゝゝ。

（深田長助、四十餘歳、王子邊の商人といふ風俗、雨傘をさして出で來り、内の樣子を鳥渡うかゞひて入る。）

お花。（起ち上る。）あら、旦那。今晩は……。

お染。いらつしやいまし。

長助。たうとう降つて來たね。

（お染はすゝみ寄りて傘をうけ取り、片隅へ立てかける。長助は有合ふ椅子に腰をかける。）

學生。（たち上る。）ぢやあ、今夜は……。

お花。あら、お歸んなさるの。（小聲で。）ぢやあ、近いうちに屹とよ。よござんすか。

（學生はうなづきて、袂より蟇口を出し、いくらかの茶代を置く。）

お花。毎度ありがたうございます。入口まで送り出す。）え、あなた、きつとよ。

（學生は洋傘に雨を凌ぎて去る。）

長助。（笑ひながら。）若いお客にはなか〳〵御世辭が好いね。
お染。えゝ、花ちやんは若いお客が大好きなんですから……。
お花。あら、隨分だことよ。妾、ねえさんのやうな人形の食ひぢやあないわ。姉さんこそ……。
お染。あたしが何うしました。（笑ひながら詰寄る。）
お花。赤羽の工兵大隊の若い士官さんが來ると、ほかのお客を押つぽり出して騷いでゐるわ。
お染。嘘、嘘、そりやあお前さんですよ。あたしは斯うみえても……。
お花。本郷の人が附いてゐるんでせう。
お染。憎らしいねえ。畜生……。
お花。畜生でもよござんす。あたしだつて……。
お染。附いてゐる人があり過ぎて困るつて云ふんだらう。好加減におしよ。珍らしくもない。
長助。（相變らず笑つてゐる。）ほんたうに珍らしくも無いなあ、おまへ達の惚氣を聽くのは……。まあ、おれだから好いやうなものの、ほかの人の前ぢやあ些と愼むがいゝぜ。默つて斯うして聽いてゐると、來る人ごとに惚れてゐるやうだが、一體どれがほんたうなんだらう。
お染。みんなほんたうなんですよ。男で心から憎い人といふのは滅多にないわ。男が好いとか、お金があるとか、貧乏でも親切だとか、口前がうまいとか、みんな何かしら取得があるもんですよ。
長助。その取得を見つけて、一々惚れてゐた日には大變だな。
お花。まつたく大變よ。だから、家の姉さんなんぞは……。
お染。やかましい。默つておいでよ。（戯れにお花を突き飛ばせば、テーブルはかたむきて、疊に學生が飲みゐたる茶碗や土瓶などがらがらと轉け落つ。）
お花。（飛び退く。）あら、姉さん、隨分亂暴だわねえ。土瓶も茶碗もこんなに割れてしまつてよ。
お染。おまへさんが惡いからさ。あら、あら、こんなにしてしまつて……。
お花。自分がして置いて……。ほゝゝゝゝ。
お染。ほゝゝゝ。
長助。（苦笑ひする。）仕樣がないお孃さん達だなあ。早く片附けて置かないと、阿母さんに叱られるぜ。
（お染とお花は笑ひながら、土瓶や茶碗の割れたるを掻きあつめる。二重屋體の襖をあけて、源太郎の妻お仙出づ。お仙は三十五六歲なれど、年に似合はぬ派手づくりにて、お染お花の母とは見えぬまでに若くみゆ。）
お仙。なんだか知らないが、店の先で隨分さうざうしいねえ。（長助を見て。）おや、旦那、いらつしやいまし。あいにくに又降つてまゐりました。
長助。どうだい、この頃は店の方は……。
お仙。まあ好鹽梅に賑やかですよ。なにしろ此邊も日增しに開けて來ますからね。
長助。（誇るがごとく。）こゝへ店を出[illegible]、よかつたよ。はじめには自宅と思つたんだが、あの邊ぢやあ近所の手前もあるし、何處かほかに好いところはないかと思つて探してゐるうちに、こゝに古い貸家がある。あの頃はこゝらもまだ開けなかつたが、きつと今に繁昌すると見込みを付けて、すつかり手を入れてこれだけの店にしたんだ。でも、初めのうちは毎月食込みで、おれも隨分財布をはたかせられたが、五年六年と持堪へてゐるうちに、ど

うやら斯うやら物になつて、先づ安心といふものだ。

お仙。旦那には随分お世話になりましたねえ。この頃ぢやあ店も相當に繁昌しますし、娘達もみんな大きくなりましたから、あたしも少しは楽ができますよ。

長助。娘達が大きくなつたのは結構だが、阿母さんまでが娘たちを見習つて、毎日若い男を相手に巫山戯てゐちやあ困るぜ。

お仙。ほゝ、御冗談でせう。あたしはそんな浮氣者に見えますかねえ。(娘達は顔を見あはせて内證で笑つてゐる。)

長助。どうだか知れないぜ。町家のおかみさんは一年増しに若く化粧つて、娘と競争で客を引いてゐるといふ評判があるよ。

お仙。まあ、呆れるわねえ。誰がそんなことを云ふんでせう。(娘達はいよ〳〵笑つてゐる。お仙は不圖心附きて。)あら、旦那がいらしつたのに、まだお茶も上げないの。お前たちも随分ぼんやりだねえ。

お花。でも、うつかり旦那のそばへ行くと、阿母さんに怒られるわ。

お仙。あたしがいつ怒つたことがある。ほんたうに口の減らない子だ。

長助。(制して。)まあ、いゝさ。相手は子供だ。なにしろ、こゝにゐちやあ他のお客の邪魔になるだらう。

お仙。さあ、あつちへ……。(娘たちを見かへりて。)早くお酒の支度をおしよ。

お花。はい、はい。

長助。どれ、お座敷で一杯やるかな。今夜はあつさりとビールにしよう。

(長助は二重屋臺にあがりて、座敷に坐る。お仙も共に座敷に入りて、座蒲團や煙草盆を薦めなどする。)

お仙。(店の方にむかひて。)可いかい、ビールを早く持つておいでよ。それからお肴を……。旦那のお好きなものは知つてゐるだらう。

長助。今夜はもう一人あとから來るかも知れないから、そのつもりで頼むよ。

お仙。お連さんがあるんですか。

長助。王子の金村の息子がくる筈になつてゐるんだ。

お染。あら、あの方がいらつしやるの。

お花。姉さん。(背なかを撲つ。)

お染。(笑ひながら。)なにをするんだよ。

お花。それぢやああたしは手傳はないわ。御座敷の方の支度は姉さんひとりで受持よ。

お染。あゝいふ狡いことを云ふんだよ。(笑ひながら起ちあがり、臺所の方へ行きかける。)花ちやん。後生だから手傳つておくれよ。

(お花は笑ひながら頭を掉る。)ほんたうに意地悪だねえ。おぼえておいでよ。(板戸をあけて奥に入る。)

お仙。冗談ぢやあない。(お花に。)おまへも行つてお手傳ひよ。

お花。ねえさん一人で澤山だわ。

お仙。なぜさうだらうねえ。(長助に。)あたしの云ふことをきかないで仕様がないんですよ。

長助。金村の息子が來ると云ふんで、花ちやんは些と妬けるんだらう。はゝゝゝ。

お仙。ほんたうに色氣ばかり付いて困るんですよ。

長助。そりやあ阿母さんの子だから仕方がないさ。

お仙。あら。(撲つ眞似をする。)あなたとは違ひますからね。

(お染は奥の襖をあけて、ビール罎とコップなどをのせたる膳を持ちて出づ。)

お染。お肴は今すぐに……。(再び奥に入る。)

お仙。さあ、一杯めしあがれ。

（お仙は酌をする。長助は膝をくづして飲みはじめる。金村新吉、王子邊に住む若き商人、身綺麗にいでたちて雨傘を持ち、店口より入り來る。）

新吉。今晩は……。

お花。おや、いらつしやい。

（新吉は傘を置きて内に入る。）

お仙。もういらしつた樣ですよ。（店をみて。）さあ、どうぞこちらへ……。（蒲團を出す。）

新吉。どうも遲くなりました。（座敷へ通る。）

長助。なに、わたしも今來たばかりで、これから酒にならうといふ所ですよ。さあどうぞ樂にお坐んなさい。

新吉。はい。（會釋して蒲團に坐る。）

お仙。降るのによくお出でしたねえ。

新吉。なに、好鹽梅に小降りになりましたよ。

（お染は奥より肴を運びて出づ。）

お染。（につこりする。）あら、いらつしやい。しばらくお見えなさいませんでしたね。どうなすつて……。

新吉。商賣が忙がしいので、御無沙汰をしました。

長助。君を是非つれて來てくれと、始終責められ拔いて困つてゐるんですよ。

新吉。どうですかねえ。はゝゝゝゝ。

お染。さあ、お酌をしませう。今夜はほんたうに嬉しいのよ。

（新吉はお染の酌にてビールを飲んでゐる。お花は詰らなさうに店に坐つてゐたりしが、やがて店口に出て表をみる。）

お花。ほんたうに暗い晩だわねえ。（ひとり言を云ひながら、再び舊の椅子にかへる。）

（源太郎、藤兵衞は濡れながら出で來る。藤兵衞は櫻の枝の杖を持つ。）

藤兵衞。（見かへる。）おい、こゝだぜ。軒ランプに櫻家とかいてある。

（源太郎無言にてうなづき、懷かしげに内をのぞき込む。）

藤兵衞。（小聲で。）途中でも云つた通り、はじめからお前と歸つて來たと名乘らずに、唯の客のつもりで窩と這入り込んで、先づ樣子をうかゞふ方がいゝぜ。

源太郎。でも、すぐに見附けられるだらう。

藤兵衞。すぐに見附けてくれるやうなら結構だがなあ。まあ、なにしろ這入つて見ようぜ。おい、何をぼんやり考へてゐるんだ。自分の家へ這入るのにそんなに躊躇してゐることがあるものか。いや、まだ自分の家になるか何うだか決まつてはゐないんだが、兎もかくも雨がふるのに此處にぼんやり立つちやゐられねえ。お客樣がお二人さんお揃ひで、ずつと這入るとしよう。どんな怖ろしいことに出會つても、驚かないだけの度胸が据つてゐればいゝんだ。さあ、行かう。

源太郎。むゝ。

（藤兵衞は先に立ち、源太郎もつゞいて入る。）

お花。いらつしやいまし。

（お花は起つて進み出でしが、二人の風體のよからぬを見て、物をも云はずに唯じろじろとながめてゐる。）

藤兵衞。（平氣でにこ〳〵笑ひながら。）今晩は……。どうも降出して困りますね。（帽子の雫を拂ひながら、土間の椅子に腰をかける。）

（源太郎はあたりに氣を配りながら、おなじく椅子に腰をかける。）

お花。ほんたうに降りまして困ります。（氣の乘らぬ風で、通り一遍の挨拶をする。）

藤兵衞。方々をあるき廻つたので、やれ、やれ、くたびれた。雨には降られる、腹は減る。もし、姐さん。なんでも溫い肴を大急ぎでたのみます。

（源太郎はなるべく暗い方へ顔をそむけて、折々にお花の顔をぬすみ視る。）

お花。はい、はい。かしこまりました。（起つて奥に入る。）

お仙。お客様かい。（店の方をちよつとのぞきしが、格別に氣にもとめぬ風にて、再びビールの罎を取る。）さあ、金村さん。あなたは些ともあがらないんですね。お染のお酌でなけりやあお氣に入りますまいが、たまにはお婆さんにもお酌をさせてくださいなね。

新吉。おかみさんのお酌ならば猶結構です。是非一杯いたゞくことにしますよ。（お仙につがせて飲む。）

お染。あなた、あたしのお酌ぢやあ喫らないんですか。

新吉。（慌てゝ。）なに、なに、そんな譯ぢやあないんだが……。

お染。だつて、もう飲めないとおつしやつたぢやありませんか。ほんたうに貴方は譃つき、憎らしいのねえ。

長助。わざ／＼連れて來てやつたんだから、どうか仲よくして貰ひたいね。一體お仙がよくないよ。若いものは若い同志で遊ばして置くもんだ。

お仙。はい、はい。どうも浮氣をいたしまして相濟みません。ほゝゝゝゝ。

四人。はゝゝゝゝ。

（源太郎は折々に座敷の方をのぞき、耳をすましてこの對話を聽いてゐる。）

藤兵衛。今こゝにゐた綺麗な若い娘は、お前の子供か。

源太郎。むゝ、妹の方でお花といふんだ。

藤兵衛。ちよいと目につく兒だ。あゝいふ磁石が店にひかへてゐたら、若い男は隨分吸ひ附くだらう。（座敷の方を指さして。）あつちにゐる若い娘は、あの兒の姉さんらしいな。

源太郎。むゝ。あれが姉でお染といふんだ。

藤兵衛。姉妹ともに粒が揃つてゐるな。それからあの年増はなんだ。三十づらを下げて眞白に塗立つてゐる化物のやうな女は……。

（源太郎は默つてゐる。藤兵衛うなづく。）むむ。あれがおめえの女房だな。え、さうだらう。（笑ふ。源太郎は厭な顔をして默つてゐる。）姉妹はまだ若いんだから仕方がねえが、なんぼ斯ういふ商賣の家のおかみさんでも、ありやあ何うも恐れるな。色つぽいといふのを通り越して、すこし色氣ちがひといふ方だ。昔からあゝでも無かつたんだらうが、あんまり體裁がなさ過ぎるぜ。ちよいと觸つたら頽れさうな女だ。

源太郎。（眞面目に。）むかしは決してあんな女ぢやあ無かつたんだが……。

藤兵衛。人間といふものは其日其日で變るもんだ。まして女なんぞは七面鳥も同じことだよ。

お仙。ねえ、旦那。近いうちに東京の芝居へ連れて行つてくださいな。

お染。あたしは國技館の相撲も觀たいわ。

長助。どうも色々の註文が出るな。

お染。だつて、あたしは相撲を一度も觀たことがないんですもの。

長助。ぢやあ斯うするが可い。おれは阿母さんと芝居へ行くから、おまへは金村君と一所に相撲へ行くさ。

新吉。わたしも芝居の方に願ひたいもんですね。ねえ、お染さん。こつちも芝居にしようぢやありませんか。

お染。そりやどつちでもよござんすけれど……。（媚びるやうに。）妾、どこでも貴方のいらつしやる方へ行きますわ。

お仙。ぢやあ、みんなが芝居にきめて置くんですね。（洋盃を取る。）お前、一杯注いでおく

れよ。
お染。（酌をしながら。）阿母さん、今夜隨分飲むことね。
お仲。そりやあ旦那の前だもの。大びらだあね。ほゝゝゝ。
（源太郎はこれらの對話を聽くに堪へざるやうに眉を顰めてゐる。）
藤兵衞。さつきから聽いてゐりやあ、しきりに旦那旦那と云つてるが、あの年を老つてる方の男が、こゝの旦那らしいな。
源太郎。むゝ。それで判つた。（拳でテーブルを打つ。）
藤兵衞。誰か後楯がなけりやあこれだけの店を張つて行かれめえよ。開けたと云つてもこゝらはまだ邊鄙だからなあ。
（源太郎は眼をとぢてテーブルの上に俯伏す。お花は酒肴を膳にのせて運び出づ。）
お花。どうもお待遠さまでございました。
藤兵衞。や、ありがたい。（猪口を取る。）ねえさん、お酌を一つ……。
（お花はだまつて酌をする。雨、強くきこゆ。）
お仲。おや、又強く降つて來たやうだ。
新吉。止むでせうかねえ。
お染。止まなかつたら寧そ泊つていらつしやいよね、可いでせう。
長助。まあ、まあ、そんなことは醉つてからの御相談だ。なにしろ、飛沫が這入るから少し閉めようぢやないか。
お染。ほんたうに降込むわねえ。
（お仲とお染は起つて縁先の障子をしめる。）
藤兵衞。おや、あつちは幕がしまつたぞ。おれたちのやうなお客が來たので雲隱れかな。
お花。ほゝゝゝ。（酌をしながら。）お連さんの方はどうかなすつたんですか。
藤兵衞。え、なに。草臥れたので眠くなつたんだらう。（酒を飲みながら。）こりやあ好い酒だ。もう一杯……。（お花は酌をする。）姐さん、附かないことを訊くやうだが、あつちの座敷にゐる粋な年増はこゝのおかみさんかえ。
（お花うなづく）おやあ、あの床の前にゐる人は……。（親指を出して。）レコだね。
お花。ほゝゝゝ。（唯笑つてゐる。）
藤兵衞。（酒をのみ、肴を喰ひながら。）さつきから考へてゐるんだが、どうも姐さんは何處かで見たことがあるやうだね。
お花。さうでございますか。（笑つてゐる。）
藤兵衞。こんな白髮頭をした、こんな汚いなりをしてゐる老爺に、おかづきだなんて云はれちやあ定めて御迷惑だらうが、どうもお目にかゝつたことがあるやうだ。姐さんは上方邊にゐたことはないかい。
お花。えゝ。（不思議さうに見る。）
藤兵衞。さうだ。どうもさうらしいと思つてゐたんだ。ねえさんの名はお花さんと云ふんだらう。
お花。まあ。
藤兵衞。（笑ひながら。）おまへさんの方ぢやあ忘れてゐるだらうが、わたしは一度お前さんの家へ行つたことがあるよ。
お花。あら、さうですか。
藤兵衞。（手酌でしきりに飲む。）お父さんはどうしたい。相變らず達者でゐるのかい。
お花。あの、お父さんはもう居ません。
藤兵衞。死んだのかい。それとも何處へか行つたのかい。
お花。（返事に困る。）それが……あの……どうしたか判りません。
藤兵衞。それは困つたねえ。しかし死んだら何處からか沙汰があるだらう。

お花。さうでせうか。

藤兵衛。もし生きてゐれば、いつか一度は歸つてくるに相違ないよ。阿母さんも嘸ぞ心配してゐるだらうね。

お花。えゝ。（曖昧な返事をする。）

藤兵衛。（笑ひながら。）それともなんとも思つては居ないかね。あゝ云ふ新しいレコが出來ちやあ、はゝゝゝ。ところで、お前さんはどうだい。お父さんが早く歸つてくれば可いと思つてゐるだらうね。お父さんはおまへさんを大變可愛がつてくれたやうだから……。

（お花の顏をのぞき込む。）

お花。初めのうちはあたしも子供でしたから、早く歸つて來てくれゝば可いと思つてゐたんですけれども……。

藤兵衛。今ぢやあそれほどでも無いかね。してみると、おまへさんにもお父さんより可愛い人が出來たんだね、はゝゝゝゝ。

お花。あら、御冗談でせう。ほゝゝゝゝ。

藤兵衛。と云つて、お前さんの氣をひいて見たのさ。實はわたしもこの間までお前さんのお父さんと一緒にゐたんだ。

お花。まあ。（おどろく。）

藤兵衛。ところが、お父さんは……。半月ほどまへに病氣で死んだよ。

お花。まあ、さう。

藤兵衛。お前さんは隱してゐるけれども、お父さんのゐる所は大抵知つてゐる筈だ。ね、さうだらう。で、死んだことはこつちへ何にも通知して來なかつたかね。

お花。いゝえ。

藤兵衛。さうかねえ。（首をかしげる。）だが、死んだのはほんたうだよ。

お花。ほんたうですか。

藤兵衛。氣の毒なことをしたよ。（歎息する。お花は默つてゐる。）實はそのことを知らせに來たんだが、どうも明らさまには云ひにくいので、さつきからまあ色々なことを云つてゐたのさ。嘘だと思ふならこの男にも聞いてみるが可い。（源太郎の肩をたゝく。源太郎は徐かに顏をあげる。）

お花。（その顏を鳥渡見たるが、わが父とは心附かず。）あなた、ほんたうですか。（源太郎うなづく。）まあ、それで安心しましたわ。

（源太郎堪りかねて又俯伏す。）

藤兵衛。お父さんは死んだ方が可いかね。

お花。阿母さんだつて、姉さんだつて、もうお父さんのことなんか忘れてゐるんですもの。今だしぬけに歸つて來られちやあまつたく困りますわ。

藤兵衛。でも、お父さんの方ぢやあ阿母さんや子供たちに、逢ひたい逢ひたいと云ひつゞけてゐたよ。

お花。さうですかねえ。（格別に氣にも止めぬらしく。）なんでも先月頃でしたかねえ。お父さんのところから手紙が來たんですよ。王子の舊の家の方へ出したもんですから、澤山に附箋がついて……。

藤兵衛。どんな手紙が來たんだ。

お花。來月末には出獄するつて……。その手紙を阿母さんにみせたら、すぐに破いてしまつて……。

藤兵衛。むゝ。（顏をしかめる。）

お花。（平氣で。）ですから、お父さんは彼方にゐるうちに死んだ方が、却つて仕合せだつたかも知れませんわ。どうせ歸つて來たところで、誰も好い顏をしやあしませんもの。

藤兵衛。それもさうだなあ。（酒を飲む。）なるほどお前さんの云ふ通りだ。お前さんのお父さんは待たれてゐるところへ歸るのぢやあない、歸らなくつても可いと思つてゐるところへ歸つて來るんだ。いや、まるで忘られて

ある所へ歸つて來るんだ。歸つて來たところで、どうせ歡迎されないにきまつてゐる。こりやあ歸つて來ない方が優しだつたかも知れない。（德利を振つてみる。）姐さん、もう一本熱くして……。
お花。はい、はい。（奧に入る。）
藤兵衛。管びないから……おい、どうだ。（源太郎の背をゆする。源太郎は顔をあげる。眼には一杯の淚が溜んでゐる。）はゝ、泣いたな。今のやうな話を聞いちやあ、誰でも大抵泣きたくなるよ。
（源太郎は無言にて起ち上り、藤兵衛の杖を持ち、座敷の方へゆきかける。藤兵衛は止める。）
藤兵衛。おい、おい、どこへ行くんだ。それが惡い。（杖をうばひ取る。）これはおれの大事の杖だ。旅へ出るには杖がいる。お前もおれの意見に附いて、早く杖をこしらへて置けば可いのに……。まあ、我慢してゐろよ。もう一度巢鴨へ行きたいのか。（源太郎は倒れるやうに椅子にかゝる。）はゝゝゝゝ。悟りの惡い男だ。
（運送店の印半纏を着たる若き男三人入り來る。お花は德利を持ちて出づ。）
お花。（打笑む。）おや、いらつしやい。この四五日は些ともお見えなさらなかつたことね。
男甲。（男乙を指さして。）この男がほかに嵌り込む所が出來たもんだからね。
お花。どうせさうでせうよ。
（男三人は一方のテーブルを取りまく。お花は藤兵衛のまへに德利を投出すやうに置きて、早々に男の方へ行つてしまふ。藤兵衛は呆れて見送る。）
男乙。今笑つたのはみんな嘘だよ。今夜も此奴が無理に連れて來たんだ。
お花。どうですかねえ。あなた方はみんな嘘吐きだから、憎らしいわ。
男丙。こりや驚いた。なにしろ、いつもの通りね。
お花。はい、はい。あとでゆつくり窘めてあげるから、待つておいでなさいよ。（奧に入る。）
お仙。（障子をあけて顔を出す。）大分お賑やかな聲がしますね。（笑ひつゝ土間の方へ來りて立つ。）みなさん、今晩は……。
男甲。この三人が來るといつも騷々しいんだから……。
お仙。いゝえ、陽氣で結構ですよ。（障子の方にむかひて呼ぶ。）あの、お染……。ちよいと。
お染。あい。（これも障子を出て來る。）おや、いらつしやい。あたしの好きな人がお揃ひで……。
男甲。大分醉つてゐるやうだな。
お染。えゝ、今夜は阿母さんもあたしも好い心持に醉つてゐるのよ。一つ唄つて聽かせませうか。え、ちよいと、返事をおしなさいよ。（男甲の腕をとらへて小突く。）
男甲。（笑ひながら。）はい、はい。是非聽かして頂きたいもんですな。
男丙。實はそれを待ちかねてゐたんだ。
お染。さうでせう。まあ、ちよいと聽いて頂戴。（鼻唄。）惚れた男と正月の餅、いつも妾が化かされる……。
男三人。よう、よう。（手をたゝいて笑ふ。）
お仙。あたしだつて唄ふわ。（障子の内にて手をたゝく音。）仕樣がないねえ。（舌打ちしながら座敷へゆく。）
（源太郎は最前よりぢつと眺めてゐたりしが、この時、衝と起ちあがり藤兵衛の手を取る。）
源太郎。さあ、行かう。
藤兵衛。おれと一緒に旅へ出るつか。

源太郎。どこへでも一緒に行く。面白いところへ連れて行つてくれ。
藤兵衞。よし、よし。さう決まつたら又ほかでゆつくり飲むとしよう。おい、姐さん。勘定だよ。
お染。はい、はい。(奥にむかひて呼ぶ。)あの、花ちやん。御勘定ですよ。
お花。はい、はい。
(お花は奥より膳を持ち來りて、男等のテーブルの上に置き、更にこちらへ來る。)
お花。ありがたうございます。
藤兵衞。勘定は……。
お花。四圓十錢頂戴いたします。
藤兵衞。四圓と十錢……。あんまり廉くねえな。併し姐さんの白粉代も籠つてるんだから、無理もねえか。(衣兜から金を出してテーブルの上におく。)
お花。(お辭儀をして。)どうぞ又お近いうちに……。
藤兵衞。(源太郎に。)おい、杖を貸してやらうか。お前ももう眼が醒めたら、人をなぐる氣遣ひもあるめえ。
源太郎。むゝ。(杖をうけ取りて、門口より空をながめる。)まだ降つてるやうだ。
(二人は門を出る。お花はすぐに立戻りて、お染と共に三人の男に酌をする。雨の音。)

——幕——

(大正二年十一月作)

風露集(二)

少年行
白馬に珊瑚の鞭や春の風

若草
若草の春や戀草思ひ草
野に山に音なき雨や春の草

ある病家の病中を見舞ふ
冬眠のうはゞみ起きよ春の風

重病に伏したる婦人の全快を祝す
春なれや蝶の魂よみがへる

父一周忌
歸る雁歸らぬ人をなく日かな
晴れながら花に心の曇るとは

父三周忌、時に日露戰爭起る
花に泣く顏ふり向けよ北の空

熱海金色夜叉の碑
戀ひ死なば熱海の梅のちる頃に

鎌倉にて
大佛の物思ふ日や花ぐもり
花に舞うて雪を忍ぶや白拍子
汐干狩沙に新田の太刀踏まむ

春雨
淺草や五重の塔に春の雨
蜆賣る業平橋や春の雨
魚河岸に魚の別れや春の雨
春雨やあすは花賣る聲聞かむ
枕紙かへて寢る夜や春の雨

為朝と牛若丸の圖
伊豆の海の霞を破る遠矢かな
天狗暴れて鞍馬は寒し山櫻

畑打
畑打や孔明いまだ廬を出でず
義經も晝は畑打つ村芝居
廢兵のひとり畑打つ涙かな

花櫻
花の山迷ひ子を見れば大男
墓を賣る僧は櫻も賣りにけり
ちる花に外道の面や神樂堂

相馬の金さん

登場人物――徳川の御家人相馬金次郎。金次郎の弟牛三郎。おなじく御家人石澤寅之助。伊勢屋千右衛門。伊勢屋の番頭長兵衛。おなじく若い者富八、久七。常磐津文字若。文字若の母おとく。稽古の娘およし。ほかに職人。長屋の女房、子供。料理茶屋の女中。料理番。青山の伜。上野の伜。農家の娘、子供。質屋の小僧。燈籠賣。町家の女房、娘、女中、若い者、小僧。車力。荷持の男。中間。官軍の兵士など。

第一幕

（一）

江戸の末期。慶應三年、七月初旬の午後。神田明神下の質屋、伊勢屋の店先。正面の上のかたは戸棚。まん中は奥への出入り口。下のかたの壁には質帳を澤山にかけてあり。店の上の方には土藏の白壁。下のかたには格子戸。店の外は忍び返しの附きたる板塀にて、木戸あり、用水桶あり。表は往來の體にて、町家つゞきと知るべし。

（店の帳場格子の中には番頭長兵衛が帳面を繕つてゐる。若い者富八は帳面を前にして十露盤を彈いてゐる。職人岩吉は店の上のかたに腰をかけて煙草をのんでゐる。下のかたには長屋の女房おくまが赤兒を背負ひ、小さい女の兒を連れて腰をかけ、若い者久七を口說いてゐる。塀の外には小僧が水をまいてゐる。角兵衛獅子の太鼓の音きこゆ。）

おくま。ねえ、お前さん。後生だから、もう一度よく見て、百五十ばかり附けてお吳んなさいよ。（女の帯を突き付ける。）

久七。（帯をひろげて見る。）幾度見ても同じことで、四百と云つたら關の山で、その上は文久一つも附けられませんよ。

おくま。文久一つも附けられない。（呆れたやうに。）お前さんも若いくせに隨分邪慳な人だねえ。まあ、おとなしく云ふことを肯いてくださいよ。不斷の月とは違ふんですからさ。

久七。盆でも何でも、こんなに耳の切れた帶で五百も六百も貸せるものですか。そりやおかみさんが無理ですよ。

おくま。なに、あたしが無理をいふものか。お前さんの方がよつぽど無理だよ。

久七。いゝえ、おかみさんが無理ですよ。

おくま。いゝえ、おまへの方が無理だ、無理だ。（泣聲になる。）女だと思つて馬鹿にするんだよ。

女の兒。おつかあ、もう歸らうよ。

おくま。どうして歸れるものか。今こゝに大事の用があるんだよ。

女の兒。歸らうよう。（泣く。）

おくま。えゝ、強情な餓鬼だねえ。（女の兒のあたまをぴしやりと撲つ。）

（女の兒はわつと泣き出す。背中の赤兒も火の付くやうに泣き出す。）

おくま。どいつもうるさいねえ。

（おくまは起つて赤兒をいぶり付ける。）

赤兒はいよ〳〵泣く。女の兒も泣く。よき頃に水をまき終りて、小僧は木戸に入る。）

岩吉。いや、どうも大變だな。この暑いのにぎやあ〳〵泣き立てられちやあ、そばにゐる者までが逆上せあがつてしまふぜ。おい、久さん。なんとかして遣らねえか。

久七。だつて、お前さん。こんな帶で五百も六百も貸せるわけが無いぢやありませんか。

おくま。こんな帶といふけれども、このお正月に一分二朱で買つたんだよ。

久七。冗談云つちやあいけません、こんな帶が一分二朱で……。

おくま。二口目にはこんな帶、こんな帶と、あんまり馬鹿におしでないよ。

女の兒。（又泣く。）おつかあ、歸らうよう。

おくま。又泣きやあがる。（再び撲つ。）

長兵衛。（見かねて。）どうも困るな。（帳場から出る。）まあ、おかみさん。靜かにしてください。これ、久七。おかみさんが折角あゝ云つて口說きなさるのだ。もう百も附けてあげるがよからう。

久七。ぢやあ、おかみさん。きつちり五百といふところで我慢してください。

おくま。（舌打ちして。）仕樣がないねえ。ぢやあ、まあ、それで我慢して歸りませうよ。

長兵衛。（帳場から緡の錢を持つて來る。）さあ、これが一本、ほかに百ありますよ。

（長兵衛は四百文の緡のほかに、二十文十五文などの錢を取りまぜて渡せば、おくまは數へて受取る。）

女の兒。歸らうよう。（泣く。）

おくま。あゝ、歸るよ、歸るよ。なんといふ泣蟲だらう。皆さんどうもおやかましうございました。

（背中の赤兒は又泣く。おくまはそれをいぶりながら、女の兒をつれて下の方へ立去る。）

岩吉。やれ、やれ、これで世の中がおだやかになつた。

長兵衛。子供や赤ん坊や、色々の責め道具で嚇かされちやあ全くこつちが降參してしまひますよ。

岩吉。それぢやあ、おれもこれから責め道具を用意して來るかな。そこで、富さん。おいらの方はどうだね。

富八。岩さんの利分は二朱と六十四文になります。

岩吉。二朱と六十四文……。めつぽふ高いぜ。間違つてゐやあしねえかえ。

富八。二度も彈いてみたのですから大丈夫です。

岩吉。六十四文なんていふ端下は面倒だ。それ、二朱置いて行くぜ。

富八。あとは此次に頂きます。

岩吉。それはまあ其時のことだ。なにしろ利上げをしたのだから流しちやあいけねえよ。

長兵衛。わたしも承知してゐますから、決して流すやうなことは致しません。

久七。岩さんは景氣がいゝとみえますね。

岩吉。景氣が好ければ受けに來るが、泣きの涙で利上げをして、やう〳〵流れを扼ひ止める始末だ。

長兵衛。横濱へ仕事に行つて、大層儲けなすつたといふぢやありませんか。

岩吉。横濱へ行きやあ金でも轉がつてゐるやうに云ふが、さて踏み出してみると噂の半分にも行かねえ。往きと復りの路用を差引くと、江戸で稼ぐのも大した違ひはねえのさ。ぢやあ、番頭さん、賴んだぜ。

長兵衛。はい、はい。

（岩吉は下のかたへ去る。）

富八。あんなことを云つてゐるが、岩さんも横濱へ行つて隨分かせいで來たさうだ。

長兵衞。稼ぐには稼いだらうが、あの人のことだから神奈川あたりでみんな吐き出して來たらうよ。それでも利あげに來ただけが見つけものだ。

（長兵衞は笑ひながら帳場に戻る。下の方より盆の燈籠の荷をかつぎたる商人出づ。）

燈籠屋。燈籠や、燈籠……。（呼びながら向うへ立去る。）

久七。（表をみる。）あゝ、燈籠を賣りに來た。お盆ももう目の前だな。

富八。盆前にしちやあ不思議なくらゐに商賣が暇だぜ。

久七。それもやつぱり不景氣のせゐだ。なにしろ世間がさうぐ\しいからね。

長兵衞。世間のさうぐ\しいのが何より困る。かういふ物騒な時節には、こゝらの家なぞは猶さら氣をつけなければならない。日が暮れたら大戸をしつかり卸して、商賣を休んでしまへ。

富八。このごろは斬取りや押込みが無暗に流行るといふから、まつたく險呑でならない。

久七。番頭さんのいふ通り、かういふときには質屋なんぞが一番先に眼をつけられるから氣味が悪い。

長兵衞。商賣がひまな上に、押込みや押借りにお見舞ひ申されては泣きつ面に蜂だ。くれぐれも用心しなければならないぜ。

二人。あい、あい。

（向うより相馬金次郎、二十七八歳、道樂肌の御家人にて、風呂敷につゝみたる刀箱をかゝへて出づ。）

金次郎。（格子をあける。）どうだ、番公。べらぼうに暑いな。

（長兵衞等三人は金次郎の顔を見てうんざりする。金次郎はずつと這入りて店さきに腰をかける。）

富八。（よんどころなく。）これは相馬の旦那様、いらつしやいまし。

金次郎。（笑ふ。）こゝの家で正直に相馬の旦那様と云つてくれるのはお前ばかりだ。あとの奴等はみんな相馬の金さんと云つて、人を友達扱ひにしてゐやあがる。おい、番公。忌に他人らしく顔を背けるなよ。お友達の金さんが來たぢやあねえか。

長兵衞。（帳場を出る。）これは金さん。どうも厳しい殘暑でございます。

金次郎。世のなかに連れて、陽氣もなんだか番狂はせになつて來やあがつた。六月は馬鹿に冷々して袷を着るやうな始末だつたが、七月になつてから殘暑が滅法界にひどくなつて、この二三日はまるで釜うでだ。おまへ達はよく無事に生きてゐるな。石川五右衞門よりよつぽど強いぞ。あゝ、暑い、あつい。（扇を使つてゐる。）

長兵衞。（奥にむかつて。）小僧や、お茶を持つて來な。

小僧。（奥にて。）あい、あい。

長兵衞。この暑いのにどこへお出かけでございました。

金次郎。おまへ達も知つてゐる通り、おれの先祖は相馬小次郎將門だから、月に一度はかならず神田明神へ參詣に來る。けふも明神へ參詣して、型のごとくに武運長久をお祈り申した上で、それからこつちへ出かけて來たのだ。

長兵衞。あなたの御先祖が將門様といふことは豫てうけたまはつて居りますが、よく毎月かかさずに御參詣をなさいますね。

金次郎。先祖の將門は神に祭られてゐるが、そ

の子孫の相馬の金さんは百俵取りの貧乏御家人だ。あんまり格式が違ひ過ぎるので、先祖に對しても申譯のない次第だが、なんと云つても先祖は先祖だ。月に一度ぐらゐはお參りをして置かなければ、人間の義理が濟むめえぢやねえか。(富八と久七を見かへる。)やい、やい。おれが將門を云ふと、いつでも笑やあがる。うそだと思ふならおれの家へ來て、系圖の一卷をしらべてみろ。

(奥より小僧は茶を汲んで出づ。)

小僧。お茶をおあがりなさいまし。

金次郎。(小僧に。)どうだ、此頃は少しは白雲が癒つたか。用がなければ表へ出て、ちつと水でもまけ。幾らか涼しくなるだらう。

小僧。水はもう撒きました。

金次郎。骨惜みをするなよ。もう一度、撒け、撒け。

小僧。あい、あい。(奥に入る。)

金次郎。ことしは本祭の筈だが、神田は景氣よく出來さうかえ。

富八。ことしは御神輿が渡るだけで、なんにも催しはないと云ふことでございます。

金次郎。本祭に山車も踊屋臺も出さねえのか。神田つ子も意氣地がねえな。

久七。御時節柄で御遠慮申すのださうでございます。

長兵衛。御承知の通り、一昨年の本祭に山車や踊屋臺をひき出してお叱りを受けましたので、ことしは一切遠慮といふことになりました。

金次郎。ちげえねえ。公方様上洛のお留守中にどんちやん騷ぎ立てたといふので、一昨年はひどく叱られたつけな。今年も叱られる積りで威勢よく遣ればいゝのに……。それだから意氣地がねえといふのだ。いや、神田つ子ばかりぢやあねえ、一體に江戸つ子と云ふものの意氣地が無くなつた。なあ、番公。さうぢやあねえか。

長兵衛。へえ。

金次郎。だが、おれはおめえは大好きだよ。

長兵衛。(煙にまかれて。)へえ。

金次郎。おめえの名は長兵衛といふぢやあねえか。長兵衛はいゝな。いかにも江戸つ子らしい名前だぜ。おれは實に嬉しくつてならねえ。

長兵衛。まことに有難うございますと申したいのですが、金さんにあんまり油をかけられると、いつでもあとが怖ろしうございますからね。

金次郎。なにも怖がることはねえ。長兵衛は長兵衛らしくすればいゝのだ。

長兵衛。いや、その長兵衛といふ名は親が附けましたので……。

金次郎。親が附けても公方様が附けても、長兵衛は長兵衛だ。そこで、長兵衛さん。この權八が些と折入つて頼みがあるから、一番大親分の氣前をみせて呉れねえか。

長兵衛。大方そんなことだらうと思ひました。

(長兵衛は他の二人と顔をみあはせて、いよ〳〵うんざりする。)

金次郎。(笑ひながら。)と云つて、別にむづかしいことを頼むわけでもねえ。貧乏の方ぢやあ金箔附きの金さんも、この盆前はどうにも斯うにも凌ぎが附かねえ。なにぶん義理のわるい借金があるので、うか〳〵してゐると御身分にもかゝはると云ふ一大事だ。くどいことは云はねえから、ぐつと一番呑み込んで、長兵衛をおたのみ申すよ。

長兵衛。(迷惑さうに。)申すまでもなく、あなたのお屋敷は青山でございますから、御近所にお顔なじみの同商賣も澤山ございませうに、兎角わたくし共の店へ來て、なにか御無

理をおつしやるのは……。

金次郎。はゝ、野暮をいふなよ。近所で用が足りるくらゐなら、この暑いのに重い物をかゝへてわざ〳〵こゝまで繰出して來やあしねえ。近所の麻布や赤坂ではあんまり顔が賣れ過ぎて、金さんの睨みも利かなくなつたから、そこでおめえを口説きに來たのだ。いつもながら無理ばかり云つて濟まねえが、けふばかりは眞劍におれの話をきいて貰ひたいな。

長兵衛。では、まあ、折角でございますから、どんなお話か伺ふだけは伺つてみようぢやございませんか。

金次郎。さう來なければ長兵衛ぢやあねえ。(風呂敷をあけて箱を出す。)けふ持つて來たのはこの一品だ。

長兵衛。(のぞく。)お腰の物でございますか。

金次郎。むゝ。刀には相違ねえが、おれたちが腰にさしてゐるやうなガタ光ぢやあねえ。由來を話せば長くなるが、おれの家に先祖の時代から傳はつてゐる北辰丸といふ名刀は即ちこれだ。これは相馬の家の當主が家督を相續したときに、家寶として中身を一度あらためてみる。併しわが物とは云ひながら、一代に二度とは見ないことに決まつてゐるので、おれも十年前に一度見たぎりだ。さういふ譯で、つまり寶物だから、今までどんなに困つたときであつても、身に替へ、命にかへて大切にしまつて置いて、お前のところは勿論、どこの質屋の暖簾もまだ潜らせたことはなかつたが、今もいふ通り、今度といふ今度ばかりはどうにも仕様のない瀬戸際にせりつめたので、思ひ切つて抱へ出して來たといふわけだ。そこを察して、たんとの無心ぢやあねえ。十兩ばかり用立てゝ呉れゝばいゝのだ。

長兵衛。あの、十兩でございますか。

金次郎。十兩でいゝのだ。ほかの品とは違つて、家重代の寶物だから、なんぼおれのやうな人間でも、こればかりは決して流すやうなことはしねえ。そんなことをしたら相馬の家にも瑕が附くことだ。遲くも一月ばかりのうちには屹と受出しに來るから、どうかそれまでの所を融通してくれ。それも大金ぢやあねえ、指一本でいゝのだ。これだ、これだ。(指をみせる。)

長兵衛。どう致しまして、指一本とおつしやるが、十兩と申せば大金でございます。どんなお品か兎も角も拜見をいたした上で……。

(長兵衛は刀箱に手をかけようとするを、金次郎はあわてゝ押へる。)

金次郎。いや、いけねえ、いけねえ。むやみに箱を明けられちやあ大變だ。

長兵衛。なにが大變でございます。

金次郎。それには少し譯があるのだ。おれがこれほどに頼むのだから、中身を見ねえで此のまゝに受取つて貰ひたいな。

長兵衛。それはいよ〳〵御無理といふものでございます……。手前共も商賣のことでございますから、お品を拜見いたした上ならば相當の御相談も致しますが、いくら大切なお寶物でも、中身をなんにも拜見いたしませずに、たとひ一分でも御用立て申しますのは、質屋の法に缺けたことで、わたくし共が主人に叱られます。

金次郎。それはいかにも尤もだが、そこを曲げてお願ひ申すのだ。まあ、なんにも云はずに受取つてくれ。

長兵衛。たとひ何とおつしやつても、品物をあらためずにお貸し申すことは……。

金次郎。どうしても出來ねえと云ふのか。

長兵衛。いくら金さんのお頼みでも、それは堅くお斷り申します。

金次郎。どうも困つたな。それだからおれが手を下げないばかりに頼むのだよ。

富八。もし、親分の旦那様。番頭が申すのに決して無理はございません。お品を拝見しないで御用立て申すなどと云ふのは、商賣の法に無いことでございます。

久七。さう云ふことは何から何までよく御承知でありながら、けふに限つてなぜそんな御無理をおつしやるのでございます。

金次郎。みんなにさう云はれると、まつたく困る。おれもまんざらの朴念人でもねえから、無理は萬々知つてゐるのだが……。こいつはどうも困つたな。

（金次郎はかんがへてゐる。）

長兵衛。たゞ困る困るとおつしやつてゐないで、鳥渡あけて見せて下さるわけには參らないのでせうか。

金次郎。勿論見せればいゝのだが……。どうも困つたな。

長兵衛。わたくし共も商賣柄で、これまでにも方々のお屋敷樣から御大切のお品をおあづかり申したこともございますが、どちら樣でもみんな其のお品を一度は見せて下さるのに、あなたに限つてどうしても見せないと仰しやると、わたくしの方にも何だか疑ひが起ります。よもやそんな事もございますまいが、萬一その箱のなかに大切のお品が無いと致しますと……。

金次郎。馬鹿をいへ。なんぼおれでもそんな騙りのやうなことをするものか。かうなつたら見せて遣りたいのは山々だが、當主のおれでさへ一代に二度は見ないことになつてゐるのだからな。（又かんがへる。）併しさう云つてゐたら果しがねえ。いつそ思ひ切つて明けて見せるかな。（箱に手をかけようとして又躊躇する。）いや、いけねえ。どうも悪さうだ。

長兵衛。（笑ふ。）金さん。いつまでも焦らしてゐちやあいけません。あなたはいつでも駈引がうまいので、こつちが困つてしまひますよ。

金次郎。けふばかりは駈引も絲瓜もねえ、おれは本氣で云つてゐるのだが、おめえ達には呑み込めねえかな。ぢやあ仕方がねえ。ほかへ行つて頼んでみるとしようか。

（金次郎は箱を手早く風呂敷につゝんで引抱へ、二足ばかり行きかけて立ちどまる。）

金次郎。これから汗をふきながら、又方々をかけ摺りまはるのも難儀だ。やつぱりこゝの家へ荷をおろすより外はねえ。（引返して再び腰をかける。）おい、番公。一生に一度のお願ひだ。なんとか達引いてくれねえか。どうしても肯かれねえのかよ。

長兵衛。どうしても肯かないと云ふわけぢやあございませんが、幾度云つても同じことで、何分にも中身を拝見しませんでは……。

金次郎。それを素直に見せられるくらゐなら、こんなに口を酸つぱくして頼みやあしねえと云ふのに……。

長兵衛。でも、拝見しませんでは……。

金次郎。どうもお前も因業だな。

長兵衛。わたくしよりもあなたが無理でございますよ。

（ふたりは同じことを押合つてゐる内に、下のかたより石澤寅之助、二十五六歳、これも道樂息子の御家人にて出で、内を鳥渡のぞいて用水桶のかげに隠れる。奥より伊勢屋の亭主千右衛門出づ。）

千右衛門。これは金さん、お暑いことでございます。あらましのお話は奥で伺ひましたが、これは番頭が申します通り、お品を拝見いたしませんでは、とても金子を御用立てるといふわけには參りません。併し折角お出でになりましたものを、唯お歸し申すといふのも失禮でございますから、なんとか別に御相談の致

し方はございますまいか。

金次郎。これ、御亭主。なんだか忌なことを云ふぢやあねえか。別に御相談の致し方といふのはどういふことだ。痩せても枯れても御家人の相馬金次郎だ。出來ない相談の無理を云つて、一分や二分の煙草錢をいたぶりに來たのぢやあねえぜ。この通り、歴然とした質物を持參して金を借りようといふのだ。

千右衛。では、その歴然とした質物を一應拜見させて頂きたいもので……。

金次郎。又か。（舌打ちして。）さつきから諄く云ふ通りのわけで、おれでさへも一代に二度とは見ない大事の寶物だ。まして相馬の家の血筋でない者がむやみに箱をあけてみると、刀は蛇になつてしまふといふ云ひ傳へになつてゐる。

長兵衛。刀が蛇になる……。本當でございますか。

金次郎。それは昔からの云ひ傳へで、ほんたうに蛇になるか、ならないか、おれも確かには知らねえ。併し他人には決して見せるな、他人が見れば蛇になるといふ堅い戒めがある以上は、めつたな事も出來ねえので、おれも實はさつきから澁つてゐたのだ。さあ、これだけの仔細を正直に打ち明けたら、おめえの方でも疑ひを晴らして、この箱のまゝで預かつて呉れてもよからうぢやあねえか。

（金次郎は再び風呂敷をあけて、刀箱を亭主の前に出す。）

千右衛。（笑ふ。）人が見たら蛙になれとか云ふことは聞いて居りますが、人が見たら蛇になる……とは少々恐れ入りますね。わたくし共も多年この商賣をいたして居りますが、箱のそとから中身の見透しは出來ません。質物としておあづかり申す以上は、どうしても中身を拜見いたさなければなりません。後日に何かの間違ひがございますと、わたくし共ばかりでなく、あなたの御迷惑にも相成ります。兎もかくも念のために鳥渡覗かせて頂きませんでは……。（箱をひき寄せる。）

金次郎。いけねえな。おめえはどうしても見たいのかえ。

千右衛。拜見いたしませんでは、何分御相談が出來ません。

（千右衛門は箱に手をかけるを、金次郎はだまつて見てゐる。刀箱はけんどん蓋になつてゐるを、千右衛門は引きあけると、箱の中からは眞黒な蛇が出る。千右衛門もおどろいて箱を落せば、長兵衛、富八、久七もびつくりして騒ぐ。そのうちに蛇は這ひ出して縁の下に入る。）

富八。ほんたうに蛇が出た。

久七。蛇が出た。

（金次郎は店へ飛びあがりて、いきなり千右衛門を蹴倒す。）

金次郎。それだから云はねえことぢやあねえ。こんなことになりやしねえかと思ふから、あれだけに譯を話したのだ。からなつちやあ金を借りる、借りねえの論ぢやあねえ。おれの家の寶物は云ひつたへの通りに蛇になつてしまつたぞ。

千右衛。どうも飛んだことで……。

金次郎。えゝ、貴樣たちが好んで飛んだことを仕出來したのぢやねえか。たとひ質に置いたところで、無事に受け出せば濟むことだが、蛇になつてしまつてはもう取返しが付かねえ。さあ、亭主。家重代の刀を元の通りにして返してくれ。

千右衛。まことに恐れ入りましてございます。

金次郎。たゞ恐れ入つて濟むと思ふか。おれの刀をどうして呉れるのだよ。

（この時、表に窺ひゐたる石澤寅之助は

わざと忙がはしく格子をあけて入る。)

寅之助。おゝ、相馬。こゝにゐたか。

金次郎。石澤か。なにしに來た。

寅之助。さつきお前の家へたづねて行くと、弟が頻りに心配してゐる。どうしたのだと聞いてみると、兄きが盆前の遣り繰りに困つて、家重代の北辰丸をかゝへ出して、明神下の質屋へ持ち込んだと云ふのだ。

金次郎。弟め、飛んだことをしやべりやあがつたな。

寅之助。それを聞いておれも驚いた。いかに融通に困るからと云つて、重代の寶を質入れするなどとは以ての外のことで、そんなことが世間へきこえると、おまへばかりか組中の外聞にもかゝはると思つたので、早速に金の都合をしてお前のあとを追つて來たのだ。弟の話では、十兩あればいゝと云ふことだが、本當にさうか。

金次郎。まあ、さうだ。

寅之助。(ふところから金包みを出す。)その金はこの通り都合して來たから、質入れはまあ止めにしろ。(金次郎はだまつてゐる。)

寅之助。おまへだつて好んで質に置くわけでもあるまい。十兩の金の都合さへ出來れば、それでいゝのだらう。さあ、これを受取つてくれ。(金を渡さうとする。)

金次郎。(力なげに拂ひのける。)折角だが、その金はもう要らねえ。

寅之助。なぜ要らない。

金次郎。なぜと云つて……。おれも途方に暮れてしまつた。(溜息をつく。)

寅之助。(不思議さうに。)それは一體どうしたのだ。

(金次郎は再び默つてゐる。)

寅之助。どうも可笑いな。(人々をみまはして。)こゝで何事か起つたのか。

(長兵衛等も默つてゐる。)

寅之助。そこに刀箱がはふり出してあるやうだ。なんだか變だな。おい、番頭。どうしたのだと云ふのに……。はつきり云へ。

長兵衛。實はその、お刀が紛失いたしましたので……。

寅之助。刀が紛失した……。

長兵衛。箱の蓋をあけますと、お刀が蛇になりまして……。

寅之助。刀が蛇になつた。(かんがへて。)誰が箱をあけたのだ。

千右衛。中身を一應拜見いたさうと存じて、わたくしが明けましたのでございます。

寅之助。相馬の家の北辰丸は、當主でも一代に一度しか見ることは出來ない。その血筋でない者がめつたに箱をあけると、刀は蛇になるといふ云ひ傳へがある。おれもよもやと思つてゐたが、やつぱりそれが本當であつたのか。これ、金次郎。おまへは飛んでもないことをしたな。

金次郎。(再び嘆息する。)まつたく飛んでもない事をしてしまつた。先祖に對しても重々相濟まない。みんなおれが惡いからだ。

寅之助。そこで、お前はどうする。

金次郎。今さら誰を怨んでも仕方がない。家重代の寶物をうか〳〵持ち出して來たのが、おれの不覺だ。不斷からおれの身持が惡いので、先祖の罰が中つたのだらう。かうなつては、もう世間に顏向けも出來ない。相馬金次郎、百俵取りの小身でも武士の端くれだ。これからもう一度神田明神へ參詣して、身のあやまりを詫びた上で、鳥居の前で潔く切腹する覺悟だ。

(長兵衛等は顏をみあはせる。)

寅之助。むゝ、これはさうなくては成らないところだ。家重代の寶をうしなつて、お前もお

めおめと生きてはゐられまい。先祖への申譯、世間への申譯に、尋常に切腹しろ。朋輩のよしみにおれが介錯してやるぞ。
金次郎。友達のよしみに介錯してくれるか。
寅之助。併し金次郎、おまへは今、百俵取りの小身でも武士の端くれだと云つたな。武士ならば武士らしく、當のかたきを仕留めた上で、お前も切腹するがいゝではないか。
（人々は又おどろく。）
金次郎。成程さういふのも尤もだが、それも無益の殺生だ。元の起りはみんなおれが惡いのだから、何事も不運とあきらめて、おれ一人が自滅すればいゝのだ。
寅之助。いや、お前がおとなしくあきらめても、おれが勘辨出來ない。先づ第一にこの亭主の首を取つて、それを明神の前に供へて、それから切腹するのが武士の法ではないか。
金次郎。その武士ももう廢つたのだ。
寅之助。えゝ、意氣地のない奴だ。さあ、おれが證人になつてやるから、立派に相手を成敗しろ。亭主は勿論だが、何奴も這奴もみんな係り合ひだ。（長兵衞等を睨みまはして。）そこらに轉がつてゐる唐茄子野郎も、片つ端からばた〳〵斬つてしまへ。
（人々はいよ〳〵驚く。）
金次郎。まあ、さう云ふなよ。こゝで五人や三人斬つてみた所で、おれの面目が立つといふわけでもない。却つて恥の上塗りだ。
寅之助。なにが恥の上塗りだ。町人のために身をほろぼし、家を亡されて、たゞ默つてゐられると思ふか。さあ、金次郎。刀をぬけ。えゝ、何をぐづ〳〵してゐるのだ。そんな腑甲斐ない根性だから、こんな大事も出來するのだ。さあ、早く拔け。早く斬れ。
千右衞。あ、もし、もし、暫くお待ち下さいまし。大切のお刀を紛失させましたのは、わたくし共が重々の不調法、なんともお詫の申上げ樣もございません。併しこゝで相馬の旦那樣が御切腹なされましては、却つてお上に對して申譯のないことになりは致しますまいかと存じられますが……。
寅之助。えゝ、餘計なことをいふな。貴樣たちに武士のこゝろが判るか。第一、これが世間へきこえたら何うするのだ。
千右衞。世間へきこえると仰しやつても、これを知つてゐるのはあなた樣ばかり。なんとか御内分にして置いて頂く工夫はございますまいか。
寅之助。だまれ、默れ。さあ、金次郎。早く斬れ、斬つてしまへ。（じれる。）えゝ、齒がゆい奴だ。貴樣が斬らなければ、おれが斬つてやるぞ。さあ、亭主、そこへ直れ。
（寅之助は刀に手をかけて店へあがらうとするを、金次郎は支へる。）
金次郎。まあ、はやまるな。待つてくれ、待つてくれ。
（寅之助は肯かずに店へ押上らうとするを、長兵衞、富八、久七等も怖々ながらに支へる。）

（二）

青山、長者が丸。上のかたに寄せて、小さい古寺の門。左右は頽れかゝりたる練塀。門前に松の大樹。路ばたには秋草など茂りて、下のかたには田畑がつゞいて見ゆ。すべて今日の青山邊とは全く違ひて、江戸の場末の蕭條たる景色。寺内にて木魚の音。そこらにて蟬の聲もきこゆ。
（下のかたより農家の子供ふたり、一人は竿に附けたる袋を持ち、ひとりは黐竿を持ちて出で、蟬の聲をたづねながら松の

下にあつまる。上のかたより若い僧ひとり出づ。)

子供一。坊さん。蟬が高いところに止まつてゐて、竿がとゞかないんだ。

子供二。後生だから捕つておくれよ。

僧。(迷惑さうに。)ほかの事と違つて、蟬捕りの手傳ひはどうも困る。誰かほかの人に頼むがよからう。(云ひ捨てゝ下のかたへ去る。)

子供一。意地の悪い坊主だなあ。

子供二。そんなことを云つてゐるうちに、蟬は逃げてしまつた。

子供一。仕方がない。ほかへ行かう。

(二人は竿をかついで上のかたへ去る。入れちがひに農家の娘ひとりが手拭をかぶり、大きい風呂敷包みを背負ひ出で、下の方へゆき過ぎる。向うより相馬金次郎と石澤寅之助が話しながら出づ。)

金次郎。質屋の奴等も驚きやあがつたな。

寅之助。なにしろ民谷伊右衛門が二人づれで、辯天小僧を極めたのだから、奴等のおどろくのも無理はねえのさ。

金次郎。こつちの手妻は向うでも大抵察してゐたらうが、あゝなつちやあ何うにも動きが取れねえ。おれに十兩、おめえに口どめの五兩、〆めて十五兩で目出たく納まりやあ、向うも仕合せといふものだ。相手が悪けりやあどんなことになるか判るものか。

寅之助。(笑ふ。)おれ達よりも悪い相手があるかな。

金次郎。廣い世間だもの、どんな奴がねえとも限らねえ。おれ達なんぞはまだ／＼善人の部だよ。

寅之助。その積りで、もう少し修業を積むかな。それにしても刀箱から蛇を出すとは考へたものだぜ。

金次郎。刀箱から蛇が出るのも不思議はねえ。灰吹からは大蛇が出るといふぢやあねえか。

寅之助。ちげえねえ。あはゝゝゝ。

金次郎。はゝゝゝ。

(ふたりは笑ひながら舞臺に來かゝると、寺の門内より常磐津の師匠文字若、二十歳ぐらゐ、寺まゐりに來りし姿にて、日傘を持ちて出づ。)

文字若。おや、お二人さん。お揃ひですね。

金次郎。やあ、赤坂の師匠。なんだつてこんな所をうろ付いてゐるのだ。晝日中、狐に化かされたわけでもあるめえ。

文字若。このお寺へ來たんですよ。

寅之助。この寺へ來た…。こゝにやあ吉三さんといふお小姓でもゐるのかえ。

文字若。冗談ぢやあない、こゝはあたしの家のお寺なんですよ。お盆が來るから、ちよいとお參りに……。

寅之助。やれ、やれ、お若いのに御奇特のことだな。

(このあひだに金次郎は傍を向いて、小判一枚を出す。)

金次郎。そりやあ全く御奇特のことだ。常磐津の師匠の文字若さんが親の寺參りをしようとは思ひも付かなかつた。御褒美をやるから手を出しねえ。

文字若。なにをお呉んなさるの。

(不安心らしく手を出せば、金次郎は小判をそつと握らせる。)

文字若。(びつくりして。)あら、小判ぢやありませんか。なんだか氣味が悪いねえ。

金次郎。氣味が悪いは御挨拶だ。それはおれと石澤の二人がお盆のおしるしだよ。

文字若。まあ。(再び小判をながめる。)これこそほんたうに狐に化かされてゐるんぢやないかしら。

寅之助。狐でも狸でも金をくれゝば有難えぢや

あねえか。うつかりしてゐないで、禮をいへ。禮を云へ。

文字若。ほんたうに頂いてもいゝんですか。どうも有難うございます。金さん、この頃は忙がしいんですかえ。

金次郎。忙がしくもねえが、閑でもねえ。まあ、中ぶらりの所だ。近いうちに遊びに行くから、おつかあにも宜しく云つてくれ。

文字若。きつと來て下さいよ。おまへさんはこの頃、品川へ凝つて行くといふぢやありませんか。

金次郎。うそをつけ。おれはそんな道樂者ぢやあねえ。

文字若。道樂を看板にかけてゐる癖に、隨分勝手なことを云ふねえ。

金次郎。さういふお前こそ浮氣を看板にかけてゐるぢやあねえか。

文字若。あたしがいつ浮氣をしましたえ。

寅之助。おい、おい。往來なかで好加減にしろ。金さんひとりぢやねえ。傍には寅さんといふ立派なお武家樣が附いてゐるのを知らねえか。失禮のないうちに早く行け、行け。

文字若。まつぴら御免なさい。どうも子供でございますから。(笑ふ。)それぢやあ寅さんもお近いうちに……。

寅之助。知らねえ、知らねえ。(わきを向く。)

金次郎。(笑ひながら。)なんでもいゝから早くお歸りよ。

文字若。(おなじく笑ひながら。)はい、はい。

(文字若は金次郎に眼で挨拶して、向うへ去る。)

寅之助。(笑ひながら。)おい、こゝらは晝間でもさびしい所だ。町家のあるところまで送つて遣つちやあどうだね。

金次郎。へん、それほど鈍くもねえ積りだ。

寅之助。自分は鈍くねえ積りでも……。

金次郎。えゝ、よしてくれ。男にかゝはらあ。

(ふたりは笑ひながら上のかたへ行きかゝれば、荷持の男ひとり、長い紺かんばんに木綿の帶をしめて出づ。)

男。(丁寧に。)皆さん、お暑うございます。

金次郎。やあ、御苦勞。(かんがへて。)あしたはおれの當番だな。

男。左樣でございます。

金次郎。さうすると、いつもの通り、本多さんへ行つてな。毎々御無心ながら、明日もまた裃を拜借いたしますと頼んで置いてくれ。

男。かしこまりました。どなたも御免ください。(會釋して下のかたへ去る。)

寅之助。いつも〳〵人の物を借りるのも幅が利かねえ。裃なんぞは一つ拵へて置けばいゝぢやあねえか。

金次郎。おまへは感心に持つてゐるな。

寅之助。持つてゐるとも……。裃はおれたちの商賣道具だ。それがなけりやあ勤めが出來ねえ。

金次郎。なに、誰かのを借りて置けば濟むことだ。かうして懷ろに金を持つてゐても、どうも裃なんぞをこしらへる氣にやあなれねえ。

寅之助。いゝ心がけのお侍だ。拙者ほと〳〵感心いたしてござるか。あはゝゝゝ。

(下のかたより金次郎の弟半三郎、二十一二歳、講武所風の髪、竹刀と劍術道具をかついで出づ。)

半三郎。兄さん。今お歸りでございますか。石澤さんも御一緒でどこへお出でになりました。

金次郎。なに、ちよいと其處まで行つて來たのよ。

寅之助。けふも講武所か。なか〳〵勉強だな。どうだ、此頃はよつぽど上達したか。

半三郎。まあ、どうにか人並みには働けさうで
ございます。

寅之助。人なみの働きが出來れば結構だ。(金次郎に。)若い者が汗水を垂らしてヤットウの稽古をしてゐるのだ。お前の𧘕𧘔は兎も角も、弟には麻の羽織の一枚もこしらへて遣れよ。可哀さうぢやあねえか。

金次郎。まあ、そんなことは家へ歸つてからのことだ。さあ、早く歸つて、涼みながら一杯遣らうぜ。

寅之助。家で飲むのは詰まらねえぢやあねえか。

金次郎。いや、それは又あとの相談だ。どうでこゝまで引揚げて來たのだから、兎もかくも一度は家へ來いよ。

半三郎。(苦々しさうに。)又御酒でございますか。

金次郎。いくら飲んでも、けふはおまへの袴を剝ぐやうなことはしねえ。この通り懐ろは大丈夫だ。

(金次郎は懐ろを叩いて、寅之助と共に笑ひながら行きかゝる。半三郎は困つた顔をしながら附いてゆく。)

——幕——

第二幕

(一)

第一幕の翌年、慶應四年四月なかばの夕刻。

赤坂、田町、若松といふ小料理屋の前。まん中には短い暖簾をかけたる入口、そのなかは沓脫ぎのこゝろ。上のかたは板塀、その中に小庭のあるこゝろにて、見越しの松など見ゆ。入口にも柳の立木あり。下のかたは出窓にて、内には簾がおろしてあり。家の下のかたには、溜池を隔てゝ山王の山が若葉がくれに見ゆ。

(上のかたには色々の荷物を積みたる荷車を卸して、車力ひとりが休んでゐる。町家の若い者と小僧も一緒に休んでゐる。小僧は風呂敷を背負ひて、灯の無い弓張提灯を持つてゐる。)

車力。これから中野まで行つた日にやあ、夜になつてしまひますぜ。

若い者。勿論、夜になるのは覺悟の前だ。

車力。この頃は日が暮れると物騒ですからね。

若い者。江戸のまん中にゐると猶物騒だ。ちつとも早く逃げる方が無事だよ。(下のかたを見かへる。)それにしても、おかみさん達は遲いことだな。(小僧に。)お前、引返して見て來い。

小僧。あい、あい。

(小僧は引返して行かうとする時、下のかたより町家の女房と娘は荷物をかゝへ、女中は風呂敷づつみを背負ひ、ぶら提灯を持ちて出づ。)

女房。お前さん達はよつぽど待つたかえ。

若い者。あんまり遲いので案じてゐました。

娘。なにしろこんな荷物をかゝへてゐるので、なか〳〵捗取らないのよ。

女中。中野まではまだ隨分遠いのでせうね。

女房。ちつとぐらゐ遠くても、まあ我慢して行つておくれよ。辻斬や押込みは毎晩のやうに流行るし、なん時どこで軍が始まるか判らないんだもの。江戸にうか〳〵してゐられるものかね。

車力。まつたく困つたものですよ。さあ、日の暮れないうちに早く出かけませう。

若い者。行きませう、行きませう。

(車力は車をひき出せば、若い者と小僧

はあと押しをして上のかたへ去る。)

娘。暗くなると怖いねえ。

女房。それだから早くおいでよ。

(女房、娘、女中も急いで車のあとを追つてゆく。それと入れ違ひに、上のかたより錦切れを附けたる隊長一人が先に立ちて兵士七八人を引連れ、市中を見廻りの體にて出で來る。兵士は銃を荷つてゐる。隊長は下のかたに來りて、どつちへ行かうかと鳥渡思案したるが、兵士をみかへりて向うへ行けと指圖し、そのまゝ向うへ立去る。料理屋の暖簾をくゞりて、相馬金次郎が酒に醉つて出づ。金次郎は當時隱居の身の上なれば、武士ともみえぬ風俗、額に月代を生やして、唐棧の袷に半纏をかさね、何か文句を云つてゐるのを、女中がなだめながら送つて出づ。)

金次郎。えゝ、人を馬鹿にしやあがるな。いゝもに勘定を拂へば大切なお客様だ。なんで無暗に追ひ出しやあがるのだ。

女中。追ひ出すといふわけぢやございませんが、何分このごろは物騷でございますから、夜は商賣を休むことに致して居りますので……。

金次郎。だからよ。まだ本當に日が暮れねえぢやあねえか。

女中。それでも今頃から火を落すことに致して居りますので……。

金次郎。何をいゝ、ぺこぺこ云やあがるのだ。

(金次郎は女中の横つらを毆り倒す。暖簾のうちより文字若が折詰をさげて出づ。)

文字若。あれ、金さん。そんな亂暴なことをしちやあいけないぢやあないか。

金次郎。えゝ、引込んでゐろ。此頃はむしやくしやしてならねえから、せめて自暴酒でも鱈腹のんで遣らうと思へば、もう日が暮れますの何のと云つて、無暗に人を追ひ出しやあがる。料理茶屋は夜が商賣だのに、何だつて日が暮れると休みやあがるのだ。

文字若。そんな理窟を云つたつて、かういふ御時節だから仕方がないぢやありませんか。

金次郎。その御時節が癪に障つてならねえ。こんな御時節に誰がしたのだ。田舍侍が泥草鞋を穿いてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、錦切れを嵩にきて野方圖もなく威張り散らしやあがるから、こんな不景氣な世の中にもなつて來るのだ。

文字若。(左右をみかへりながら。)往來でそんな大きい聲をして、人にきこえるといけないからさ。

金次郎。だれに聞えたつて構ふものか。おれは本當のことを云つてゐるのだ。

文字若。まあ、いゝと云ふのに……。(女中に。)姐さん、まことに濟みませんでしたね。どうぞ堪忍して遣つてくださいよ。

(文字若は女中にむかひて、こゝはわたしが引受けたと知らせれば、女中は會釋して内に入る。金次郎はだん／＼に醉がまはりて、柳の木に倚りかゝる。)

文字若。さあ、おまへさん。早く行きませうよ。(空をみる。)日が暮れるの、暮れないのと押問答をしてゐるうちに、ほんたうに薄暗くなつて來たぢやありませんか。

金次郎。暗くなりやどうするのだ。化物でも出るといふのか。化物は江戸中一杯で、百鬼夜行どころか、このごろは夜も晝も見境ひはありやあしねえ。化物が怖くつて、一日でも生きてゐられるものか。ばか／＼しい。

文字若。なんでもいゝからさ。まあ兎もかくも家まで歸つてくださいよ。おつかさんが寂し

がつて待つてゐるからさ。(折詰をみせる。)

金次郎。そんな物はどうでもいゝ。犬にでも遣つてしまへ。

文字若。だつて、勿體ないぢやありませんか。

金次郎。なに、勿體ねえことがあるものか。(内をみかへる。)こゝの家もこの頃は急に惡くしやあがつた。一つだつて碌に食へる物はありやしねえ。そんな物をおつかあに遣るのは口よごしだ。犬にやれ、犬に遣れ。(折詰を取らうとする。)

文字若。あれ、いけないと云ふのに……。

金次郎。(無理に折詰を取る。)吝なことを云ふな。犬に遣らなけりやあ、そこらの溝へでも捨てゝしまへ。(折詰を持つて、よろ〳〵しながら下のかたを見る。)おゝ、來た、來た。はは、こりやあ捨てるより優しだ。

(下のかたより錦切れを附けたる兵士二人出づ。金次郎進み出て、その前に突つ立つ。)

金次郎。もし、もし、錦切れの旦那。失禮ながらこれを獻上しませう。(折詰を二人の鼻の先へぶら付かせる。)

兵士甲。えゝ、無禮なことをするな。

金次郎。失禮は初めから斷つてゐるぢやあねえか。お前さん方に江戸の料理といふのは何ういふ物だか、一つ食べさせて上げたいから、獻上しようといふのだ。

兵士乙。貴樣はよほど醉つてゐるな。

兵士甲。醉つてゐるから免して置くのだ。重ねて無禮を働くと、助けて置かんぞ。

金次郎。なんで助けて置かれえのだ。物を遣つた上に殺されてたまるものか。かうなりやあ意地づくだ。さあ、邪が非でもこの料理を貰つてくれ。

文字若。(はら〳〵しながら。)もし、おまへさん。好加減におしなさいよ。(兵士に。)旦那樣、この通り醉つて居りますから、幾重にも御勘辨をねがひます。

(暖簾のうちより以前の女中と料理番らしい男ふたりが覗いてゐる。)

兵士乙。醉つてゐる者は介抱して、早く連れて歸れ。

文字若。はい、はい。

兵士甲。この時節に他愛なく醉つてゐるとは、町人とは云ひながら不心得な奴だな。

金次郎。(呶鳴る。)おらあ町人ぢやあねえ。

文字若。(一生懸命に。)まあ、默つておいでなさいよ。

兵士乙。なに、町人でない。(金次郎を見て笑ふ。)丸腰で半纏をきて、いくら江戸でもそんな侍はあるまい。

金次郎。ところが、あるから不思議だ。貴樣達のやうな田舍者にはわかるめえ。

文字若。(泣聲になつて。)あれさ、およしと云ふのに……。

兵士甲。なにが田舍者だ。もう一度云つてみろ。

金次郎。田舍者だから田舍者だといふのよ。鎮守樣のお祭ぢやあこんな旨いものは食へねえ。話の種に江戸のお料理を食つてみろと、おれが親切に云つて遣るのだ。さあ、遣るよ。貰つて行け。

(金次郎は折詰を突き付くれば、兵士は堪へかねて叩き落す。)

金次郎。えゝ、なにをするのだ。

(金次郎は詰め寄らうとするを、兵士は突き倒し、鐵扇にてその額を打つ。金次郎は飛び起きるを文字若は搦み付いて押へる。暖簾のうちよりも男二人と女中が驅け出して、これも金次郎を抱きすくめる。)

兵士甲。はゝ、馬鹿な奴め。

兵士乙。江戸にはこんな奴が多いので困るな。
（兵士二人は笑ひながら上のかたへ立去る。金次郎は跳ね起きてそのあとを追はうとするを、人々はおさへ付けてゐる。）
男一。この節から錦切れなんぞに係り合ふと、飛んだ目に逢ひます。
男二。およしなさい、およしなさい。
文字若。それだから、云はないことぢやあない。あら、額から……。
（文字若は紙を出して、金次郎の額の血をふいてやる。金次郎もやうやく鎮まりて、紙にしみたる血の色をぢつと見る。）
女中。なにか血どめのお薬を持つてまゐりませうか。
金次郎。いゝよ、いゝよ。大したことはねえ。もうおとなしくするから、みんなあつちへ行つて呉んねえ。
文字若。たび〳〵お騒がせ申して、お氣の毒ですね。
女中。ぢやあ、お靜かに……。
（女中と男共は内に入る。）
文字若。おまへさん。痛くはないかえ。
金次郎。なに、それほどに痛くもねえが……。（かんがへて。）おい、師匠。後生だから幾らか都合してくれねえか。
文字若。どのくらゐさ。
金次郎。さあ、一兩でも、二兩でも、三兩でも……。まあ、幾らでもいゝや。
文字若。此頃はどこの質屋も休み同様だから、あんまり無理を肯いてもくれまいが、頭の物や他所行きを持ち込んだら、ちつとは融通してくれるかも知れない。さうして、そのお金をどうするの。
金次郎。どうするか、それはあとで云つて聞かせるから、その金の都合が出來たら、すぐにおれの家へとゞけてくれ。
文字若。あたしの家へ一緒に來るんぢやあないの。
金次郎。むゝ、これから眞直に歸ることにするから、屹と頼むぜ。
文字若。なんだか可笑いわね。なぜ眞直に家へ歸るの。
金次郎。まあ、兎も角もおれの云ふ通りにしてくれ。金の一件はなるたけ早いがいゝな。
文字若。（不審ながら。）あゝ、承知しました。お金の出來次第、すぐに届けに行きますよ。
金次郎。早く行け、早く行け。
文字若。あいよ。
（文字若は足早に下のかたへ去る。それを見送りて、金次郎は上のかたへ行かうとする時、上のかたより中間一人が酒に醉ひて出で、金次郎と摺れちがひてゆく。）
中間。また降りさうになつて來たか。空までが公方様のやうに泣きつ面をしてゐやあがる。あゝ、忌だ、忌だ。（唄ふ。）槍は錆びても名はさびぬ、昔ながらの落し指、ヨイ〳〵ヨイヨイ、よいやさ。はゝゝゝ。
（中間はよろけながら向うへ去る。金次郎は立ちどまりて耳をかたむけ、やがて足早に上のかたへ去る。）

（二）

青山、長者が丸。相馬金次郎の家。武士の屋敷とは名ばかりにて、殆ど空家かと思はれるほどに住み荒らしたる體。正面の床の間には掛物もなく、壁の破れたのが見えるばかりといふ有様。奥へ出入りの襖も無論に破れてゐる。他は推して知るべし。それでも下のかたには式臺附きの玄關あり、門は二本の丸太を立てたるばかりにて、左右には疎らなる竹垣が頽れかゝり、

そこには菫の花が咲いてゐる。庭も荒れ果て、上のかたには竹藪、ほかに樹木や雜草も繁つてゐる。家の外には田畑がつゞいて見ゆ。

（第一場と同じ日の宵。內には薄暗い行燈をとぼし、相馬半三郎は緣先で蚊いぶしを煽いでゐる。遠く題目太鼓の音、蛙の聲きこゆ。下の方より石澤寅之助は小倉の袴をはきて大小をさし、覆面用の黑い巾を持ちて出づ。

寅之助。（案內も無しに庭口へ通る。）やあ、蚊いぶしか。毎年のことだが、藪つ蚊には泣かされるな。

半三郎。今年は閏があつたので、取分けて早いやうです。

寅之助。（緣に腰をかける。）なにしろこゝらは寺と畑と竹藪に取りまかれてゐるのだから、蚊の棲家だか人間の棲家だか判つたものぢやあねえ。よくも先祖以來こんなところに住んでゐられたものだ。

半三郎。それでも先祖代々住み馴れた組屋敷だと思ふと、やつぱり離れる氣にはなれないものですね。

寅之助。離れたくないと云つても、どうで長くはゐられめえ。今度はちつと場所を擇んで、藪つ蚊や蛇の出ねえ村に住むことだ。

半三郎。長くはこゝにゐられますまいか。

寅之助。朝臣にでもなつたら格別だが、さうでなけりや遲かれ早かれ追つ拂ひを食ふだらう。安政の地震よりもどえらい大地震がゆり出して、德川の大屋根が一堪りも無しにぶつ潰されてしまつたのだから、その庇の下に住んでゐたおれ達が路頭に迷ふのは當り前さ。

半三郎。殘念なことですね。

寅之助。今さら愚痴を云つても始まらねえ。おたがひに今までは、たとひ小身でも百俵といふ先祖代々の祿が附いてゐたから、貧乏ながらも頤の干上る苦勞はなかつたが、もうこれからは俄浪人でうか〳〵しちやあゐられねえ。

半三郎。こつちの組には朝臣になつた人もあるさうですね。

寅之助。あるさうだともぢやあねえ。半分ぐらゐは朝臣になつたやうだ。朝臣になれば家屋敷は勿論、家祿も今まで通りに呉れるさうだから、おとなしく降參して朝臣になるのが利口かも知れねえが、それもあんまり意氣地がねえ。（上の方を指さす。）現に隣の山口も朝臣になつたと云ふぢやあねえか。

半三郎。（苦々しげに。）さうですか。隣にゐながら些とも知りませんでした。

寅之助。流石に世間の手前もあるから、なるべく內所にしてゐるのだらう。と云つて、われわれのやうに、脫走も出來ず、朝臣にもならず、唯いつまでも恭順で小さくなつてゐるのでは、差當り食ふことが出來めえぢやあねえか。そこで少し相談に來たのだが、今夜も兄きは留守かえ。

半三郎。ゆうべから出たぎりで歸つて來ないので、わたしも內々案じてゐるのですが……。

寅之助。兄きには赤坂の師匠が附いてゐるから、この御時節に悠々と、長火鉢の前にでも脂下つてゐるのだらう。まことに天下泰平のことだ。かうなると情婦のひとりも拵へて置かねえ奴は慘めだな。（少しかんがへる。）それぢやあ今夜も歸るかどうだか判らねえ。おい、半さん。兄きの名代に、おめえ少し手傳つてくれねえか。

半三郎。どんなお手傳ひを致すのです。

寅之助。さう眞面目に聞かれると返事に困るが……。實はこれだ、これだ。

（寅之助は覆面を見せ、刀の柄を叩いて見せる。）

半三郎。（首をかしげる。）それがどうしたと云ふのです。

寅之助。兄きとは大違ひで、ふだんから野暮堅え男だから、かういふ時には早わかりがしねえで困るな。先づかういふ風にして……。（覆面をして、腕捲りをしてみせる。）金のありさうな町人の家へ押込むのだ。

半三郎。え、町人の家へ押込む……。強盗に這入るのですか。

寅之助。人の家へ押込むにやあ限らねえ。途中でも金のありさうな奴をみつけたら、取つ捉まへて嚇しつけるのよ。

半三郎。（驚きと怒りを取りまぜて。）飛んでもないことを……。

寅之助。なにが飛んでもねえ。斬取り強盗は武士の習と云ふぢやあねえか。

半三郎。いゝえ、いゝえ、斬取り強盗などは武士にあるまじきことです。まして此の御時節に左様な不埒を働きましては、恭順の御趣意に背くではありませんか。

寅之助。いや、この御時節だから斬取り強盗もしなけりやあならねえ。今もいふ通り、家代々の祿に離れては、おたがひに食ふことが出來ねえぢやあねえか。さあ、惡いことは云はねえから、おれと一緒に來てくれ。さすがに面をむき出しぢやあ拙いから、手拭か風呂敷でおれのやうに覆面をするのだ。

半三郎。（腹立たしげに。）そんなことは出來ません。

寅之助。出來ねえことがあるものか。軍用金を出せとか何とか、凄味の臺詞はおれが好いやうに列べ立てるから、おめえは唯默つてだんびらを引つこ抜いて、おどしに振りまはして見せればいゝのだ。

（半三郎はだまつてゐる。）

寅之助。うまく行けば一と晩に五十兩や百兩はたんでもねえ。それで當分は寢て暮すのよ。こんな洒落れたことはねえぢやあねえか。

半三郎。なんでもお前さん一人で勝手にお遣りなさい。そんな仲間入りは眞平御免です。

寅之助。どうしても忌かえ。

半三郎。知れ切つたことです。

寅之助。（舌打ちして。）どうも話せねえ男だな。ぢやあ、又出直して來るとしようか。

（寅之助は下の方へ立去る。半三郎は返事もせずに顏をそむけてゐたるが、やがて起つてあとを見送る。）

半三郎。ほんたうに呆れた男だな。いくら兄さんだつて、まさかそんな仲間入りはしないだらう。

（半三郎は再び蚊いぶしを燻ぐ。其の間、隨田太鼓の音、さびしく聞ゆ。向うより相馬金次郎は貧乏徳利をさげて足早に出づ。）

金次郎。（空を見る。）なんだかぼつついて來やあがつた。今年はどうも雨が多いな。（云ひながら内に入る。）

半三郎。お歸りなさいまし。

金次郎。また蚊いぶしか。日が暮れると、宵曉それが一と仕事だつたが、もうこれで年明きだらう。

半三郎。そこらで石澤さんに逢ひませんでしたか。

金次郎。いや、逢はなかつた。あいつにも四五日逢はねえが、どうしてゐるかな。

半三郎。（兄の顏を見て。）おや、兄さんは顏をどうなすつた。

金次郎。（額をおさへる。）錦切れの奴等がなぐりやあがつた。

半三郎。喧嘩でもなすつたのですか。

金次郎。喧嘩といふほどでもねえ、ちよいと戯つて遣つたのよ。おい、茶碗を持つて來てくれ。

半三郎。はい、はい。

（半三郎は奥に入りて、茶碗を盆に乘せて來る。）

金次郎。（手酌で一杯のむ。）そこで、半三郎。今夜のうちに支度をして、おれと一緒に行け。

半三郎。え。では、あなたも石澤さんと同じやうに……。

金次郎。石澤がどうした。

半三郎。兄さん。そればかりはわたくしが堅く御意見申します。家代々の祿に離れて、たとひ浪々いたしましても……。

金次郎。なんだ、なんだ。なにを判らねえことを云ふのだ。

半三郎。いゝえ、判らないことはありません。斬取り强盗は武士の習などとは飛んでもないことです。

金次郎。えゝ、おれの云ふことをよくも聞かねえで、何を云つてゐやあがるのだ。おれがいつ斬取り强盗をすると云つた。おれの云ふのはそんなことぢやあねえ。おまへと一緒に上野へ行くのだ。

半三郎。上野へ……。（意外らしく兄の顏をみつめる。）あの彰義隊へ這入るのでございますか。

金次郎。さうだ。さうだ。

半三郎。兄さんはほんたうに上野へお出でになりますか。

金次郎。本當よ。なぜ不思議さうにおれの面をながめてゐるのだ。おれは醉つて云ふのぢやあねえ、正氣で云つてゐるのだ。

（金次郎は重ねて飮む。半三郎はかんがへてゐる。）

金次郎。上野へ行くのは忌か。

半三郎。いえ、行きたいのは山々ですが……。

金次郎。それだから一緒に行けといふのだ。

半三郎。さあ。（まだ考へてゐる。）

金次郎。（あざ笑ふ。）命が惜しいか。

半三郎。（屹となつて。）いえ、命が惜しいなどとは思ひません。併し公方様は飽までも恭順の思召で、家來一統にも恭順を守るやうにと堅く申渡されて居ります。この場合みだりに立騷ぐものは、主人のからだに刃をあてるも同様だとも仰せられました。

金次郎。（又飮む。）それがどうした。

半三郎。われ〳〵家來の分として、善惡ともに御主君の仰せを守らなければなりません。御主君が戰へとおつしやれば、何時でも戰ひます。上野に楯籠れとおつしやれば、何時でも參ります。しかし御主君が恭順せよと仰せ出されてゐる場合に、われ〳〵が勝手に徒黨を組んで、上野のお山に楯籠るなどとは、甚だおだやかならぬ事と存じられます。兄さんは誰に誘はれて、俄に彰義隊へ這入ることになさいました。

金次郎。だれに誘はれたわけでもねえ、自分ひとりで思ひ立つたのだ。おまへは二口目には御主君といふが、その御主君はどこにゐるのだよ。

半三郎。あらためて申すまでもなく、一旦は上野の大慈院に御逼息あそばされましたが、當月十一日、更に水戸へ御立退きに相成りました。

金次郎。それ見ろ。おれたちの主人といふ公方様は家來どもを置去りにして、自分ひとりで逃げて行つてしまつたぢやあねえか。そんな主人にいつまでも忠義立てをするのは馬鹿の骨頂だ。天下太屋の芝居ぢやあねえが、もう斯うなりやあ主でねえ、家來でねえ、一本立

の安達元右衛門様だ。恭順を守らうが守るめえが俺達の勝手次第で、だれの指圖を受けることもねえ筈だ。

半三郎。でも、兄さん……。

金次郎。えゝ、だまつて聞け。おれがこれから上野へ駈け込まうといふのは、主人の爲でもねえ、忠義のためでもねえ、この金さんの腹の蟲が納まらねえからだ。田舍侍が錦切れを笠にきて、大手をふつてお江戸のまん中へ乗込んで來やあがつて、わが物顔にのさばり返つてゐる。それぢやあ江戸つ子が納まらねえ、第一にこの金さんが納まらねえ。べらぼうめ、錦切れが何だ。錦切れが怖くつて、五月人形をひやかしに行かれるか。おれは去年神田の質屋へ行つて、蛇を種にして十兩まき上げて來た一件から、役向きの方もたうとう不首尾になつて、まだ若えのに隠居を申付けられ、弟のおまへが家督を相續することになつた。隠居といへば隠れた身分だから、引込んで小さくなつてゐればいゝやうなものだが、江戸つ子の面を泥草鞋で踏みにじられちやあ、隠居のおれでも我慢は出來ねえ。相馬の金さんはチヤキ／＼の江戸つ子だぞ。

半三郎。では、御主君の仰せに背いても、あなたは上野へ行くと仰しやるのですか。

金次郎。まだわからねえか。おれ達にはもう御主君なんて云ふものはねえといふのに……。江戸つ子のおれたちが田舍者を相手に喧嘩をする、唯それだけのことよ。

半三郎。それでは、默つて御主君に不忠となりはしますまいか。

金次郎。いつまで同じことを云つてゐやあがるのだ。（じれて呶鳴る。）忌なら止せ、勝手にしやがれ。江戸つ子の面汚しめ。

（金次郎は手酌でぐい／＼飲んでゐる。半三郎は又かんがへてゐる。薄く雨の音。向うより常磐津文字若は雨傘を半開きにして足早やに出づ。）

文字若。（内に入る。）たうとう降り出しましたね。

（金次郎はだまつて飲んでゐる。）

文字若。あら、みんなだんまりでどうかしたんですかえ。

金次郎。だれだ、誰だ。（透し視る。）おゝ、師匠か。大層早かつたな。

文字若。だつて、なるたけ早く届けてくれと云ふから、大急ぎで駈け付けて來ましたのさ。貞女といふのはまあこんなものさね。（笑ひながら縁に上る。）半さん、今晩は……。

金次郎。そんな奴に口をきくなよ。まあ、息つぎに一杯のめ。（茶碗をさす）

文字若。これで飲むのかえ。

金次郎。亭主のいふことを背くのが貞女だ。飲め、飲め。

文字若。いゝお貞女でも茶碗ぢやあ遣切れない。小さいお猪口はないのかえ。

金次郎。いくぢのねえ女だな。おい、半三郎。猪口を持つて來い。

（半三郎は無言で奥へ入る。）

文字若。おまへさん。兄弟喧嘩でもしたんぢやあないかえ。あんなおとなしい人をいぢめるのはお止しなさいよ。

金次郎。あんな馬鹿野郎を相手に、喧嘩をする張合もねえや。（奥に向いて。）やい、やい、早く持つて來い。何をぐづ／＼してゐやあがるのだ。

文字若。およしなさいよ。可哀さうぢやありませんか。（金次郎の額をみて。）おまへさん、額の傷はもう好いんですかえ。

金次郎。なに、もう何でもねえ。（額をなでる。）飛んだ仁木彈正だ。

（奥より半三郎は猪口を持つて出で、文字

膳の前に置く。）

文字若。どうも憚りさま。

金次郎。そこで早速だが、金の工面は出來たか。

文字若。御時節柄だから、どこでもなか／＼無理をきいてくれないのさ。やう／＼のことで二兩と一分、それでまあ我慢しておくんなさいよ。

金次郎。いや、大出來、大出來。それだけありやあ大願成就だ。

文字若。それにしても、そのお金を一體どうするのさ。その入り道を聞かないうちは、うつかり渡すことは出來ませんよ。

金次郎。そりやあ聞かねえでも話さなけりやあならねえ。さあ、注いでやるよ。

（文字若は猪口を取れば、金次郎は酌をしてやる。鐘の聲。）

金次郎。それが別れの盃だ。ぐつと飲んでくれ。

文字若。別れのさかづき……。（笑ひ出す。）あたしは手切れのお金を持つて來たんぢやありませんよ。

金次郎。いや、冗談ぢやあねえ。本當にわかれの盃だと思つてくれ。おれは今夜のうちに支度をして、上野の彰義隊へ這入るのだ。

と文字若。（びつくりして。）お前さん、本氣で云ふのかえ。

金次郎。むゝ、本氣だ、本氣だ。こんな自墮落な人間でも、相馬の金さんは江戸つ子だ。いつまで小さくなつて恭順してゐられるわけのものぢやあねえ。

文字若。彰義隊なんぞへ這入つて勝てるかしら。

金次郎。勝つか負けるか判らねえが、先づ十に九つはむづかしいな。

文字若。そんな危いところへ飛び込むことは無いぢやありませんか、誰から御褒美をくれるわけでも無し、負ければ死に損、こんな詰らないことはないと思つてゐるのに、お前さんもその仲間入りをする氣かえ。

金次郎。そりやあお前のいふ通り、いくら働いたところで誰から褒美をくれると云ふ譯でも無し、負ければ死に損、こんな割に合はねえ話はねえ。それは萬々わかつてゐるが、おれの性分でどうも我慢が出來ねえから、今さら未練らしく止めてくれるな。おまへに都合して貰つた二兩一分の金で、質でも受出して身拵へをして、上野の山へ楯籠るのだ。

文字若。半さんも一緒ですかえ。

（金次郎はだまつてゐる。）

文字若。（向き直る。）もし、半さん。おまへさんも一緒に行くんでせうね。

（半三郎もだまつて考へてゐる。）

文字若。ちやあ、おまへさんは行かないんですかえ。ねえ、半さん。はつきりと返事をして下さいよ。兄さんと違つて、お前さんは不斷から講武所で勉强して、劍術が大變によく出來ると云ふのに、そのお前さんが小さくなつてゐて、兄さんが彰義隊へ行くんぢやあ、まるであべこべぢやありませんか。

半三郎。（顏を上げる。）まつたくあべこべかも知れません。ふだんは武士の道を說いて、兄の放蕩を意見してゐたわたしが、この場合に引込んでゐて、兄が彰義隊の仲間入りをする……。どつちが好いのか、惡いのか、わたしにも判らなくなつて來ました。

金次郎。おい、師匠。そんな奴にはかまはねえで、早く金を渡してくれ。このたびぢやあ軍は出來ねえ。第一に幅が利かねえから、すぐに質屋へかけ付けて、色々の物をうけ出して來るのだ。昔ならば忍びの緒を切つて、兜に名香を焚かうといふ所だ。

文字若。どうしてもお前さんは行くのかえ。

金次郎。だれが何と云つても、もういけねえ。さあ、早く金をくれと云ふのに……。

文字若。（仕方なしに金を出す。）からと知つたら、お金の工面なんぞして來るんぢやあなかつたねえ。

金次郎。（紙につゝみし金をあけて見る。）む、二兩と一分……。ありがてえ、ありがてえ。これで金さんの死花が咲くといふものだ。

文字若。あゝ、こんな貞女にやあなりたくないねえ。（ほろりとする。）

金次郎。お前、泣くのか。

文字若。涙も出るぢやありませんか。（眼をふいて。）ぢやあ、もう、あたしも覺悟しましたから、一生のお別れに、思ひ切つて大きいもので飲ませて下さいよ。

金次郎。ぢやあ、これを遣らう。（茶碗を出す。）

文字若。ちよいと待つて……。

（文字若は起つて、行燈をそばへ持ち來り、かんざしで燈心をかき立てる。）

文字若。おまへさん、よく顏をみせて下さいよ。

金次郎。えゝ、芝居のやうなことを云ふなよ。飛んだ三の切だ。

（金次郎は茶碗を文字若にわたして、酌をしてやる。薄く雨の音、蛙の聲。文字若は飲み終りて金次郎に茶碗を戻し、酌をしてやる。）

金次郎。（酒をのみながら。）おつかあを大事にしろよ。

文字若。おまへさんが彰義隊へ這入るなんて、まるで夢のやうな話だから、阿母さんもさぞびつくりするだらうねえ。

金次郎。（茶碗を下に置いて。）さあ、夜の更けねえうちに、早く質屋を叩き起して來なけりやあならねえ。（起ちあがる。）

半三郎。（俄に進み出る。）兄さん。わたしも一緒にお連れ下さい。

金次郎。おれは質屋へ行くのだよ。

半三郎。その質屋へ一緒にまゐつて、わたしの物も少し受出して頂きたいのです。

金次郎。この野郎、蟲の好いことをいふな。貴樣の物なんぞを受けて遣るやうな金ぢやあねえ。

半三郎。いえ、質屋ばかりではありません。上野へも一緒にまゐります。

文字若。おまへさんも彰義隊へ這入るのかえ。

半三郎。もう斯うなつたら理窟を云つてはゐられません。わたしも兄さんに附いて行つて、死ぬときには一緒に死にます。

金次郎。むゝ、判つた、わかつた。（文字若をかへりみて笑ふ。）おい、師匠。這奴もやつぱり江戸つ子だ。

文字若。ほんたうに頼もしいねえ。（半三郎のそばに摺りよる。）おまへさん、なるたけ兄さんのそばに附いてゐて、世話をして遣つてくださいよ。

半三郎。それは確かに引受けました。

金次郎。ぢやあ、行かう。（縁を降りかゝる。）

文字若。（縁に出て空をみる。）まだ少し降つてゐるやうだ。そこにあたしの傘がありますよ。

金次郎。それほどのことはあるめえ。

文字若。まあ、持つておいでなさいよ。（傘を把つて渡す。）

（金次郎は傘をうけ取り、半三郎もそのあとに附いて出ようとする時、下のかたより石澤寅之助再び出づ。）

寅之助。（出逢ひがしらに。）おい。兄弟揃つてどこへ行く。

金次郎。やあ、いゝ所へ來た。（寅之助の腕をつかむ。）おい、おれ達と一緒に行かねえか。

寅之助。どこへ行くのだ。

金次郎。これから支度をして上野へ駈け込むのよ。

寅之助。上野へ駈け込む……。

金次郎。彰義隊よ。

寅之助。（意外らしく。）む、、彰義隊か。そいつは少し考へなけりやあならねえ。

金次郎。おれの歸るまでに考へて置いてくれ。

（金次郎はつかみし手を放し、傘をさして向うへ行きかゝる。半三郎も續いてゆく。寅之助は不思議さうにあとを見送る。文字若も縁に立つて見送る。雨の音。蛙の聲。）

——幕——

第三幕

（一）

おなじく五月十五日の朝。

赤坂、新町、常磐津文字若の家。正面の上のかたに縁壽棚。その下は地袋。まん中には奥へ出入りの葭戸二枚。つゞいて茶壁。それに三味線がかけてあり。上のかたは竹窓、下の方は格子戸にて御神燈がかけてあり。表は町家つゞきにて、隣の家の横手が見える。雨の音きこゆ。

（內には文字若の母おとくが稽古の娘およしと、稽古用の本箱を挾んで向ひ合つてゐる。おとくは三味線を前に置き、およしは彈き語りにて小夜衣千太郎の道行を唄つてゐる。）

およし。（唄ふ。）——ぬるゝ袂の露ならで、こゝろ置く身は雨空に、みだれて渡る雁さへも、もし追手かと驚かれ、ふるふ足もと音を忍ぶ、秋の蟲の聲かれて、田川の水のあさき縁、死ぬる覺悟も竊ゆゑに、あゆみかねてぞ立ちやすらひ——

（この淨瑠璃のうちに、下のかたより文字若は湯歸りの體にて、手拭や糠袋などを持ち、傘をさして花道に出づ。）

文字若。（あわたゞしく內に入る。）阿母さん、大變だよ。

おとく。なんだねえ、さう／＼しい。おまへの留守におよつちやんが來たから、小夜衣千太郎を浚はせてゐるんだよ。

文字若。小夜衣千太郎どころぢやない。阿母さん、お聽きよ。上野でいよ／＼軍が始まるとさ。

おとく。上野で……。いよ／＼軍が始まるのかえ。

文字若。官軍の方ぢやあ夜の明けないうちから繰り出して、下谷と本郷から攻めるんだとさ。酒屋の松さんが見て來たといふので、そこらでもみんなが騷いでゐるのよ。

おとく。成程そりやあ大變だ。それぢやあお稽古どころぢやない。およつちやんも早くお歸りなさいよ。

およし。ぢやあ、御めんなさい。左様なら。

（およしは三味線を片附けて、早々に歸つてゆく。）

おとく。（表をみる。）上野あたりの軍なら、まさかにこゝらが何うなると云ふこともあるまいけれども、さあと云つちやあ間に合はないから、今のうちに些と荷ごしらへでもして置かうかねえ。

（文字若はだまつて考へてゐる。おとくは引返して文字若のそばに來る。）

おとく。（小聲で。）ねえ、お前。金さんが彰義隊に這入つてゐるなんて云ふことを、誰にも話しやあしまいね。

文字若。そんなことを誰にいふものかね。

おとく。若しもそれが官軍の耳にでも這入る

と、あたし達もどんな係り合ひになるかも知れないから、内所にして置かないといけないよ。
文字若。おつかさん、済まないけれど、清浄湯を煎じて頂戴な。(額をおさへる。)
おとく。また頭痛がするのかえ、そんなときに朝湯に這入らなければいゝのにさ。今すぐに煎じてあげるよ。
(おとくは奥に入る。文字若は額をおさへて俯向いてゐる。雨の音。小鼓の音遠く聞ゆ。)
文字若。(顔をあげる。)あ、始まつたよ。
(文字若は俄に起つて門口に出る。小鼓の音。向うより近所の若い者三人、あるひは菅笠をかぶり、或は頭から桐油をかぶり、跣足又は草鞋ばきにて走り出て、下のかたへ行きかゝる。)
文字若。(呼ぶ。)ちよいと、鐵砲の音がきこえるやうですねえ。
若者甲。むゝ、戰爭だ、戰爭だ。
若者乙。どうせ上野までは行かれまいが、行かれるところまで行つてみる積りさ。
文字若。一緒に連れて行つてくれないかねえ。
若者丙。冗談云つちやあいけねえ。女なんぞにうつかり行かれるものか。
若者甲。おまけにこんなに雨が降るぢやあねえか。歸つて來て話して聞かせるよ。
若者乙。さあ、行かう、行かう。
(三人は下のかたへ走り去る。雨の音いよいよ強くなる。)
文字若。(空をみる。)あゝ、あいにくに雨が強くなつて來たねえ。
(向うより石澤寅之助は町人の姿、頬かむり、尻端折り、はだしにて、番傘をさして急ぎ出で、あとを見かへりながら格子の前に來る。)
寅之助。師匠。よく降るな。
文字若。おゝ、石澤さんですか。
(寅之助は頬かむりを取り、からだや足を拭きながら内に入る。文字若も引返して入る。)
文字若。いくさが始まつたさうですね。
寅之助。到頭ぽん〳〵撃ち出したやうだ。(表をみかへる。)おい、師匠。ちよいと奥を貸してくれ。誰が來ても、おれはゐないと云ふのだぜ。
文字若。いゝかえ。
(云ひすてゝ寅之助は早々に奥に入る。文字若は不安らしく見送る。雨の音、小鼓の音。向うより市中見廻りの兵士二人出で、あたりを見まはしながら格子をあける。)
兵士甲。これ、これ。
文字若。はい、はい。(出る。)
兵士甲。今この家へ町人風の男が入り込みはしなかつたか。
文字若。いゝえ。
兵士乙。本當に來なかつたか。
文字若。だれも參りません。
兵士甲。(御神燈をみて。)おまへは遊藝の師匠か。
文字若。はい。常磐津の師匠をいたして居ります。
兵士乙。(甲と顔をみあはせる。)それではほかを探してみようか。
(兵士二人はそのまゝ下のかたへ立去る。文字若は門口から見送る。奥より寅之助は文字若の着物を羽織りて窺ひ出づ。)
寅之助。師匠、これだ。(片手で拜む眞似をする。)助かつた、助かつた。
文字若。あなた、どうしたんですよ。
寅之助。此頃のどさくさ紛れに、ちつと荒つぽい仕事を遣つたので、市中見廻りの奴等に

眼を附けられて、油斷をしちやあゐられなくなつた。

文字若。おまあ、何か惡いことでもしたんですかえ。

寅之助。むゝ。あんまり好い事もしなかつたよ。町人の店を四五軒あらして、往來の奴を五六人おどかしたが、一昨日の晩は新町の酒屋へ押込んで、亭主と番頭を斬つたので、それから詮議が急にきびしくなつて來たらしい。もう斯うなつちやあ仕方がねえ。いつそ上野へでも駈け込まうかと思つてゐると、到頭いくさが始まつてしまつた。

文字若。ねえ、石澤さん。金さんの兄弟は今頃どうしてゐるでせうねえ。

寅之助。まさかに逃げも隱れもしめえ。今ごろは一生懸命に働いてゐるだらうよ。

文字若。さうでせうねえ。（又起つて表をみる。）金さんは劍術は出來ないんでせう。

寅之助。そりやあ侍のことだから、刀の持様ぐらゐは知つてゐるが、あの通りの人間だから勿論上手の方ぢやあねえ。

文字若。劍術なんぞは下手でも構はない。おれは江戸つ子の魂で闘ふのだと云つてゐましたが、いくら江戸つ子でも劍術が下手ぢやあ駄目でせうねえ。

寅之助。この節の戰ひは鐵砲といふものもあるから、劍術の出來るばかりが能でもねえが……。その鐵砲の撃ち方もよくは知るめえな。

文字若。あなたは劍術が出來るんでせう。

寅之助。おれも出來る方ぢやあねえ。まあ金公に些と優しぐらゐのところだ。

文字若。ちつとぐらゐ優しでも、からいふ時には大變に力になるでせう。（考へながら寅之助のそばに戻る。）ねえ、石澤さん。あなた、後生ですからあたしも連れて行つてくださいな。

寅之助。連れて行つてくれ。（文字若の顔をぢつと見る。）よもや上野へ行く積りぢやあるめえの。

文字若。いゝえ、上野へ行くんですよ。さつきから見物に行く人があるぢやありませんか。

寅之助。物ずきの奴は出かけるやうだが、男は格別、女の行かれる場所ぢやあねえ。芝居の立廻りとは譯が違つて、眞劍勝負の斬合ひだ。おまけに鐵砲は飛んで來る。どんな傍杖を食はねえとも限らねえ。

文字若。それやあ、あたしだつて知つてゐますけれど、なんだか行つて見たくつてならないんですよ。

寅之助。そんなにも行つて見てえか。情があるな。

文字若。情の有る無しは別として、どうもぢつとしてゐられないやうな氣がするんですよ。

寅之助。行つたところで、逢へやあしめえぜ。

文字若。大かた逢へないだらうとは思つてゐますけれど、なんだか其近所まで行つてみたいんですよ。

寅之助。おれも體の置き場に困つちやあゐるが……。（かんがへる。）軍をみかけて飛び込むのは、ちつと氣がねえな。

文字若。あなたは男のくせに弱いのねえ。

（奥よりおとくは藥茶碗を盆にのせて出づ。）

おとく。さあ、お藥が出來たよ。

文字若。どうも有難う。（茶碗をうけ取りて飲む。）

おとく。（寅之助に。）どうもおさら／＼しいことでございますね。

（寅之助はだまつて考へてゐる。小銃の音又きこゆ。）

おとく。（門口に出る。）鐵砲の音がだん／＼烈

しくなるやうですね。こゝらは大丈夫でせうか。
寅之助。こゝらは大丈夫だらうが……。（これも起つて表をのぞく。）おゝ降る、降る。雨のふる方が彰義隊には都合がよからう。この軍が夜まで續くと、面白いことになるかも知れねえな。
おとく。どうして面白くなるのでございます。
寅之助。暗くなればどんな彌次馬が飛び出さねえとも限らねえ。さうなると、寄手もちつと難儀だらう。
おとく。さうでせうかねえ。
寅之助。（俄に下のかたを見る。）あ、又來やあがつた。おい、おつかあ。おれのゐる事をしやべつちやあいけねえぜ。
（寅之助は再び奥に隱れる。おとくはきよときよとしてゐる。下のかたより以前の兵士二人が先に立ち、あとより更に二人附添ひて出づ。）
兵士甲。どうもこゝらへ逃げ込んだらしいが……。
兵士乙。もう一度、この家を詮議してみようか。
兵士甲。遊藝の師匠のうちに隱れてゐることもあるまい。はて、どこへ行つたかな。
（四人はあたりを見まはしながら向うへ立去る。おとくと文字若は内より窺つてゐる。）
おとく。ねえ、あの人たちは石澤さんを探してゐるんぢやあないかね。
文字若。あれ、靜かにおしなさいよ。
（奥より寅之助は襖をほそ目にあけて窺ふ。）
文字若。（小聲で。）もう大丈夫ですよ。（あつちへ行つてしまつたと手眞似で知らせる。）
寅之助。（出る。）これぢやあいよいよ油斷は出來ねえ。おれも逃げ道を考へなければならねえな。
（寅之助は不安らしく表をのぞく。雨の音にまじりて小銃の音いよいよ烈しく聞ゆ。これにて幕をおろし、すぐに再び幕をあける。）

（二）

おなじ日の午後。雨降りしきる。根岸、御行の松のほとり。上のかたに不動堂。それにつゞいて御行の松の大樹、その幹には注連を張る。上のかたには上野の森近く、青葉がくれに火の手あがりて見ゆ。
（上野の僧二人と小坊主一人、あるひは荷物を抱へ、或は經卷をかゝへて、素足に草鞋をはき、傘をかぶりて出づ。）
僧一。どう辛抱しようにも、あの火の粉ではとても堪らぬ。
僧二。吉祥閣が燒かれたので、それからそれへと火になつてしまつた。
小坊主。これからどこへ行くのでござります。
僧一。どこへ行くといふ的もないが、兎もかくも北の方角へ立退くとしよう。
僧二。われわれは出家ぢや。誰に逢つても咎められることはあるまい。
僧一。（空を見る。）あいにくに強く降ることぢやな。
（三人は急いで下のかたへ立去る。雨の音、小銃の音。上のかたより相馬半三郎はうしろ鉢卷、筒袖に擊劍の胴をつけて陣羽織をかさね、小袴、脚絆、草鞋にて、鎖切れの兵士二人と拔刀にて闘ひながら出づ。半三郎は奮闘し、兵士等は下のかたへ引いてゆくを、半三郎は追つてゆく。上のかたより相馬金次郎は手負の體にて

散らし髪、麻のかたびらに小袴、脚絆、草鞋にて大小をさし、櫻の枝を杖にして出づ。小銃の音つゞけて聞ゆ。金次郎は杖に縋りてあゆみ來り、半三郎のあとを見送りながら、不動堂の前に來てたゝずむ。下のかたより半三郎は引返して出づ。)

半三郎。兄さん、歩かれませんか。

金次郎。どうも意氣地がねえ。

(半三郎は金次郎を介抱して、堂の縁に腰をかけさせる。)

金次郎。半三郎、おれはもういけねえよ。

半三郎。氣の弱いことを云つてはいけません。大丈夫です。大丈夫です。

金次郎。氣休めをいふな。なにしろ肩と股とへ二發も彈を食つたのだから遣り切れねえ。

半三郎。なに、二發や三發の彈に撃たれても、急所さへ除けてゐれば大丈夫です。氣を落してはいけません。わたしが手を引いても負つてもお連れ申します。

金次郎。今の奴等はどうした。

半三郎。ひとりは斬り倒しましたが、一人は逃がしてしまひました。

金次郎。相手は二人、お前はひとり、加勢をして遣らうにも、おれはこの通りだ。どうなることかと案じてゐたら、ひとりを斬り倒して、ひとりを追拂つてしまつたか。おまへはやつぱり强いな。彰義隊もおまへのやうな人間ばかりだつたら、もう少し持ち堪へたかも知れねえ。

半三郎。なにしろ敵は大勢ですから、殘念ながら何うにもなりません。せめて夜まで持ち堪へられたら、加勢が出て來るかも知れなかつたのですが……。(上のかたを見る。)兄さん、あの通り燃えてゐます。

金次郎。敵の奴め、むやみに大砲なんぞを撃ちやあがつて、卑怯な奴等だ。

半三郎。火の粉と煙をかぶらなければ、もう少し防げたのですが……。まつたく殘念です。

金次郎。ほんたうだ。手前たちの方が大勢の上に、燒打ちのやうな目に逢はせやあがる。(上のかたを見返りて罵る。)それで勝つたつて何の手柄になるものか。馬鹿野郎め。

半三郎。併しこんな所にぐづ／＼してはゐられません。早く行きませう。

金次郎。こゝはどこだ。

半三郎。こゝは根岸……。御行の松です。

金次郎。なるほど御行の松か。(松をみる。)眼が眩んでゐるとみえて、どこだか見當が付かなかつた。(考へる。)それぢやあ丁度いゝ。おれはこゝで腹を切るから、おまへは早く逃げてしまへ。

半三郎。腹を切る……。それは飛んでもないことです。逃げられるだけ一緒に逃げませう。上野が負けても、力を落すことはありません。越後から出羽奥州はみんな徳川方ですから、そこらまで落ちて行つてもう一度戰ひませう。

金次郎。それだからお前は早く落ちろといふのだ。(苦しい息をつく。)おれはもういけねえ。この松の下で腹を切るから介錯してくれ。

半三郎。そんな弱いことではいけません。さあ、行きませう。おいでなさい。

(半三郎は介抱して連れて行かうとするを、金次郎は拂ひ退ける。)

金次郎。いや、いけねえ。權現樣は逃げるが勝だと敎へたさうだが、逃げられねえものを逃げたつて仕樣がねえ。江戸つ子は思ひ切りが肝腎だ。おれはもう歩かれねえ、逃げられねえ。さあ、こゝですつぱりと遣つてくれ。

(金次郎は大小を取りて縁に置き、肌をくつろげると、腋から腹へかけて經文をまいてゐる。)

半三郎。（困つて）もし、兄さん。死ぬのはいつでも死なれますから、もう少し我慢して行つてください。

金次郎。いやだ、いやだ。ぐづ／＼してゐて敵にでも生捕られてみろ、どんな目に逢ふか判るもんか。

半三郎。いえ、わたしが附いてゐるから大丈夫です。

金次郎。いくらお前が強がつても、敵は大勢なら仕様があるめえ。それ、見ろ、今さら未練らしいことを云はねえで、素直におれのいふことを肯け。（脇指に手をかける。）

半三郎。まあ、兄さん……。（脇指に取付く。）

金次郎。この野郎、強情に邪魔をすると承知しねえぞ。（無理に半三郎を突き放し、櫻の枝をふりあげて無暗に打つ。）もう遣切れねえといふのに、判らねえか。いつまでおれを苦ませて置くのだ。

半三郎。（決心して枝にすがる。）では、もう仕方がありません。こゝで立派に切腹をなさいまし。わたしが御介錯をいたします。

金次郎。さうか。（うなづきながら縁にぐつたりとなるを、半三郎は介抱する。）なあ、半三郎。おれも御行の松の下で腹を切りやあ立派なものだ。

半三郎。（涙ぐんで。）左様でございます。

金次郎。（眼をくつろげる。）みんなの眞似をして、そこらにあるお經をまき付けて來たが、かういふ時に役に立つた。これを取つてくれ。

（半三郎は手傳つて、金次郎の腹にまき付けたる經文をほどく。雨の音、小銃の音。向うより石澤寅之助は米俵をかぶり、文字若は赤合羽をきて手拭をかぶり、竹の子笠をかざして走り出づ。）

寅之助。もうこゝらより先へは行かれさうもねえ。山はあの通り燃えてゐるぜ。

文字若。もう行かれませんかねえ。

（二人はうろ／＼しながら上のかたへ行きかゝりて、文字若は不圖みかへる。）

文字若。あら、金さんが……。金さん、金さん。

寅之助。やあ、居た、居た。

（二人はよろこんで駈けよる。）

金次郎。おゝ、師匠と石澤……。どうして來たのだ。

文字若。あんまり心配だから、いくさの様子を見に來たんですよ。

半三郎。よくこゝらまで來られましたね。

寅之助。半分は夢中で、どこをどう廻つて來たか自分にもわからねえが、なにしろこゝでめぐり合つたのは有難え。師匠、折角出て來た甲斐があつたぜ。

文字若。ほんたうに無事でようございましたねえ。

金次郎。なに、無事なものか。おれはもう定九郎だ。

文字若。定九郎……。

金次郎。二つ玉を食つて半死半生だよ。

半三郎。兄はもう歩かれないから、どうしてもこゝで腹を切るといふのです。

文字若。腹を切る……。まあ、どうしたらよからうねえ。

寅之助。むゝ。（額をしかめながら訊く。）もういけねえか。

金次郎。いけねえ、いけねえ。神田の質屋を嚇かした時とは譯が違つて、今度こそは本當に切腹だ。

寅之助。どうしても切腹か。（半三郎に。）おめえは死ぬのぢやあるめえな。

半三郎。わたしは兄の死骸を片附けて、これから會津か越後へ脱走する積りです。

寅之助。おれも江戸にやあゐられねえ體になつてしまつたから、それぢやあお前と一緒に行

からか。

金次郎。みんな行け、行け。會津でも越後でも構はねえ。どこへでも行つて、おれの代りに威勢よく遣つてくれ。

文字若。おまへさんも一緒に行けばいゝぢやありませんか。

金次郎。それが行かれねえのだから、仕方がねえ。蹴合に負けた軍鶏ぢやあるめえし、いつまでじたばたしてゐられるものか。相馬の金さんはもうこれでおさらばだ。（脇指をぬいて經文をまきつける。）おい、師匠。今までのよしみだ。今年の新盆には迎ひ火を焚いてくれ。

文字若。情ないことになつたねえ。（泣く。）

半三郎。石澤さん、兄はわたしに介錯しろといふのですが、丁度あなたがお出でになりましたから……

寅之助。おれに介錯をしろといふのか。（少し躊躇して。）まあ、仕方がねえ。これも友達の役だ。（金次郎の刀を取る。）

金次郎。おめえが介錯してくれるか。おれは腹の切り様が下手だらうから、そつちで手際好くぽんと遣つてくれ。

寅之助。手際好くは些とむづかしいが、まあ一世一代の積りで遣つてみようよ。

金次郎。おれも一世一代だ。しつかり頼むぜ。

（金次郎は脇指を腹に突立てる。寅之助は刀をぬいてうしろへ廻る。半三郎と文字若は手をあはせる。雨の音、小銃の音。）

——幕——

（昭和二年六月作）

風露集（三）

畑仙齢畫伯追悼

天へ召されぬ下界の花を描けとて

蛙・田螺

食用の蛙も儕を歌ひけり

田を買ふの力なき人や田螺取る

宵の春　暮の春

伽羅ありやあらば袂給へ宵の春

錦繪を江戸のみやげや暮の春

青樓の屏風賣りけり暮の春

衣がへ

衣更へ實盛錦を着たりけり

心中や二人悲しき衣更へ

蟲齒に惱みながら拔きもやらで

蟲の巣を憎めど流石わか葉かな

尾上榮三郎追悼

どこへ行くぞ尾上の闇の時鳥

口紅の消えずやあらむ短夜に

虞美人の圖

楊貴妃は阿片を知らじ芥子の花

雨月物語「蛇性の婬」を讀む

蛇の衣ぬぎても重し戀ごころ

伊勢物語の筒井筒といふ心を

わぎ妹子と苺喰ひける昔かな

時鳥

血を灑めて誓紙書く夜や時鳥

歌よみに嘘つき多しほとゝぎす

願はくは胡蝶となつて細腰に着かんといふ唐詩のこゝろを

君の吸ふ青ほゝづきを妬みけり

箱根湖畔にて

富士の雲落ちて湖水にさみだるゝ

ほとゝぎす啼き亂れけり杉の雨

ある人の某政黨に入るを諫む

君渡る勿れ夏の川の水濁る

薫風　短夜

薫風に伽羅は木村の兜かな

短夜や釣り落したる大鯰

鳥邊山心中

登場人物——菊地半九郎。坂田市之助。坂田源三郎。菊地の若黨八介。お染の父與兵衛。若松の遊女お染。おなじくお花。花菱の仲居お雪。ほかに仲居大ぜい。

（一）

徳川時代。寛永三年十二月中旬の夜。京都祇園の茶屋。常足の二重家體にて、上の方に床の間、續いて出入りの襖。庭には飛び石、石燈籠などあり。騒ぎ唄のやうな下方入りの鳴物にて幕あく。

（すぐに竹本の淨瑠璃になる。）

淨へ色里に、きて新しき戀衣、お染と云へどどこやらに、染まぬ廓の風俗は、流石おぼこの町育。うき身はおなじ蓑蟲の、父をたづねてうろ〳〵と、座敷をぬけて忍び出で。

（奥の襖をあけて遊女お染、十七歳、あたりを窺ひながら出づ。）

お染。今お雪さんが耳打ちして、河原町の父さんがたづねて來たとのこと。はて、どこにゐさんすやら。

淨へ父の與兵衛は庭傳ひ、顔見あはせて。

（下の方よりお染の父與兵衛、五十餘歳の商人、風呂敷づつみを背負ひて出づ。）

お染。おゝ、父さん。

與兵衛。娘か。

お染。よう來て下さんした。して、あの春着は出來ましたかえ。

與兵衛。（縁に腰をかける。）おゝ、出來た、出來た。話はあとのこと。さあ見やれ。

淨へ何とく〳〵、とりいだす、濃紫と黒繻子、男女の箱小袖。

（與兵衛は風呂敷包みをあけて、黒とむらさきの着物二かさねを出す。）

お染。おゝ、ほんに見事に出來ました。父さん、たんとお禮を云ひまする。

淨へ父もほく〳〵打ちうなづき。

與兵衛。はゝ、自慢するではなけれども、この染色を見てくりやれ。可愛い娘が廓へ來て來年は初の正月、どうかして人にひけを取らすまいと、おれも蔭ながら案じてゐたが、江戸のよいお侍衆になじみが出來て、そのお客人にこしらへて貰ふと云ふこと。

お染。ほんに廓へ身を沈めてから、日數も淺いわたしとて、來る正月の紋日とやら物日とやらをどうしたものかと初めから案じてゐたに、店出しの晩からおなじみになつた江戸のお侍が、わたしのやうな者でも可愛がつてくだされて、夜も晝も揚げ詰め、ほかの座敷へはまだ一度も出たことがござんせぬ。まあ、喜んでくだんせ。

與兵衛。さあ、それぢやによつて、おれもそなたの爲、また二つにはその御客人の爲、なるたけ無駄な入費をかけずに、よい品をあつらへさせたいと思うたので、廓へ出入りの吳服屋をそつちのけに、おれが懇意な店へぢか掛合、半分値とまでは行かずとも、二割も三割も格安に仕立てさせた上に、これ見やれ、どうも云はれぬ染めの好さ。これなら誰に見られても恥かしいことは微塵もない。まあ、ち

よつと手を通して見や。
お染。はて、おまへもまあ氣の短い。まだお客人にも見せぬうちに、手を通しては濟まぬこと。いづれ祝儀になつたらな。
與兵衞。おゝ、是非一度はその衣裳を着た姿を……。
お染。見に來てくだんせ。
與兵衞。拜みに來ようか。（手をあはせる。）
お染。あれ、父さんがてんがうばつかり、ほゝほゝゝ。
與兵衞。はゝゝゝゝ。
淨〽たち上りしがまた見返り。
與兵衞。あゝ、これ、まだお目にはかゝらぬが、その江戸のお侍といふお方にの、おれが好うお禮を申してをりましたと、忘れぬやうに申上げてくれ。よいか。
お染。あい、あい。
與兵衞。この頃は惡い風邪が流行るさうな。よう氣をつけたがよいぞよ。
お染。あい、あい。
與兵衞。（ゆきかけて又立戻る。）それからなら、そのお侍といふのはお酒を召上るかの。
お染。あい。隨分たんと飲みなさんす。
與兵衞。そりやもう、あなたが召上るのはどんなに召上つてもよいがの。そなたはそのお附合をして、必ず無理な酒を飲むまいぞ。勤めする身に無理酒は大毒ぢやと云ふからの。
お染。よう合點してをりまする。
與兵衞。では、今云うたおれの言づてを必ず忘れてくれまいぞ。よいか、よいか。
お染。あい、あい。さういふお前こそ歸る道を忘れさんすな。
與兵衞。はゝ、こいつめ。いつの間にか廓の水にしみて、そのやうな憎て口をおぼえたな。はゝゝ……。
淨〽笑うてこそは歸りけれ。
（與兵衞は下の方に去る。）
お染。あゝして父さんが喜んでゐさんすのもみんなあの半様のお蔭、その揚げ詰めの御座敷をぬけ出して、いつまでもこんな處にゐては濟まぬ。どれ、早う行きませう。
淨〽行きかゝるうしろより、出合ひがしらに。
（奥より菊地半九郎、二十二歳の江戸の武士、酒に醉ひて出づ。）
お染。おゝ、お前は……。
半九郎。わしを置去りにして、今までどこに隱れてゐた。座敷をぬけて忍び男にでも逢うてゐたか。
お染。あい。このやうな男に逢うてゐました。
（衣裳をみせる。）
半九郎。おゝ、春着が出來たか。廓の習ぢやとか云うて、わしもそなたに釣合ふやうな新しい小袖を誂へさせられたが、これが私のやうな武骨者に似合ふかな。はゝゝ。まあ、よい、よい。兎もかくも仕舞つて置いてくりやれ。したが、折角こしらへたその小袖も、そなたと對に着る日はないかも知れぬ。
お染。え、そりや又なぜでござんすえ。
半九郎。將軍家が江戸へお歸りの日が迫つた。とばかりでは判るまいが、將軍家には先月はじめに御上洛、われ〳〵も御旗本の一人としてお供の數に加はり、京に旅寢のつれ〴〵に測らずそなたと馴染をかさね、來春までは逗留と思うてゐたに、元旦の拜賀は俄に御模様がへと相成り、當年内に當地をひき拂うて、江戸表へ御下向と今朝支配頭から觸れ渡された。この上は所詮逗留は相成るまい。遲くも五日か七日のうちには……。
お染。お別れになるのでござんすか。
淨〽あきれて詞も涙ぐむ。
半九郎。逢ふ夜の數は尠くとも、馴染んでから足かけ二月、さほどに深い仲でもなけれど、戀

や情は捨置いて、まだ廓馴れぬそなたの不憫さに、及ばずながら今日までは夜も晝もこゝへ來て、そなたの力ともなつたれど、侍は御奉公が大切、お供に外れていつまでもこゝに逗留は思ひも寄らぬこと。察してくりやれ。

お染。あい。（泣く。）

半九郎。市之助が無理に強ひるので、今宵は例よりも飲みすごした。あゝ、醉うた、醉うた。どれ、お染。水を一杯くんで來てくれぬか。

お染。あい、あい。（奥に入る。）

半九郎。おもへば不憫な。あゝ、醉うた。こりや堪らぬ。（肱枕して倒れる。）

浄〽無殘やお染は一時に、百年經たる窶れ顔、わかれと聞けば悲しさに、なみだに聲も顫はれて。

お染。（出る。）お清水を汲んでまゐりました。もし、半様。おゝ、いつの間にかうと／＼と…。

浄〽男の寢顔をうちながめ。

お染。忘れもせぬ先月のなかば、わたしが初めて店出しの夜に、こゝへ呼ばれた初會の一座は、どなたも江戸のお侍、粗匆があつてはならぬぞと、親方さんから氣を付けられ。

浄〽怖さ出るには出たれども、馴れぬ座敷の術なさに、唯なんとなく悲しくなり。

お染。廊下でひとりで泣いてゐたら、誰やらうしろからそつと來て、はて何を泣く、泣くほど悲しいことがあれば、わしが力になつてやると、見掛けは強さうなお侍が、優しう云うて下された。

浄〽その嬉しさが身にしみて、今更おもへば恥かしい。色の諸譯も知らぬ身が、歸るといふを引き止めて。

お染。無理に縋つた縁むすび。店出しの初めから仕合せな客を取りあてたと、朋輩衆にも羨まれ、父さんにも自慢して、喜んだのもほんの束の間、やつぱりわたしは不仕合せに。

浄〽生れたものかと忍び音に、かこち歎くぞいぢらしき。傍に奥は賑はしく、浮かれ立つたる市之助、お花の手を取りよろめき出で。

（奥より坂田市之助、半九郎とおなじ年輩の侍。遊女お花の手をとりて出づ。お染は着物を床の方におく。）

市之助。（これも酒に醉ひたる體。）これ、半九郎は何處に、どこに。おゝ、お染はこゝに…。半九郎も居たわ、ゐたわ。

お花。ほんに二人ともに手の惡い。座敷をぬけて隱れ遊び、このまゝでは堪忍なりませぬぞ。なあ、市様。

市之助。さうぢや、さうぢや。その罰には何がよからうな。なには兎もあれ、起せ、起せ。

お染。あい、あい。（半九郎をだき起す。）もし、お連衆が見えましたぞえ。

半九郎。（眼をひらく。）おゝ、市之助か。座敷をかへて飲み直さうといふ洒落か。面白い、面白い。（起き直る。お染は水を出す、半九郎はのむ。）

市之助。さあ、仲居どもをこれへ呼べ。

（お花は手をたゝく。あい／＼と答へて、奥より仲居大勢出る。或は燭臺を持ち、あるひは酒肴を運ぶ。）

市之助。さあ、さあ、陽氣に騷げ、さわげ。京で遊ぶもう四五日ぢや。江戸へのみやげに面白いことのあるたけを盡して歸らう。

お花。折角かうしてお馴染になりましたに、お名殘惜しいことでござんすな。もうこれ限りお目にかゝれまいかと思へば、心細いやうでなりませぬ。お染どのもそれを知つてかえ。

お染。あい。たつた今初めて聞きました。

市之助。聞いて定めて泣いたであらうな。はて、隱すな。白粉が涙でよごれてゐるわ。はゝ。これ、半九郎。お身はさつきからなぜ默ま

つてゐる。面白い面白いというた口の下から屈託らしい顔付、なんぞ仔細のあることか。

浄〽問はれて屹と顏をあげ。

半九郎。さて、市之助。お身とおれとは竹馬の友ぢや。遠慮なく賴みたいことがある。

市之助。あらたまつて何ぢやな。

半九郎。かやうな場所で申すも異なものぢやが、思ひ立つたら一晌も待たれぬ。この半九郎に二百兩の金を貸してくれぬか。と云うたところで、お身も旅先でそれだけの貯へはあるまい。お身は京の刀屋にしるべがあるさうな。わしの刀は備前物ぢや。その刀屋に談合して、二百兩に替へてはくれまいか。

浄〽市之助は眉をひそめ。

市之助。思ひもよらぬ賴みぢやが……。その二百兩のいりみちは……。

半九郎。京の鶯を買ひたいのぢや。

市之助。京のうぐひす……。はて、お身にも似合はぬ風流なことぢやな。（云ひつゝお染を見かへりて扨はとうなづく。）むゝ。して、その鶯を江戸へ連れてゆくのか。

半九郎。いや、籠から放して遣ればよいのぢや、大方舊巢へ戾るであらう。

お花。二百兩のうぐひすとは……もしやそこらに啼いてゐる……。（お染を見かへる。）

市之助。いや、そなたの口を出すところでない。（眼で制して。）さて、半九郎。見得の場所と云ひ滿座のなかで、それを打出すお身の心のうちは、市之助もよう察してゐるが、そりや惡い料簡、お身はあまりに正直過ぎようぞ。

半九郎。え。

市之助。わしも鶯は大好ぢやで、行く先々でうぐひすを聞いてあるく。殊に京はうぐひすの名所、金に明かし、暇にあかして、思ふさま鳴かせてみたが、所詮は一時の興にすぎぬ。江戸へ歸れば又江戸の鶯がある。

半九郎。ぢやによつて、わしもその鶯を江戸へ持歸らうとは思はぬが、鳴く音があまりに哀れぢやゆゑに籠から放して遣りたいのぢや。半九郎は人も知つたる意地張ぢやが、生れつきから涙脆い男、ありあまる金を持つた身でも無し、家重代の刀を賣つて……。これ、察してくれ。

市之助。それも鶯を買ひ取つて、わが物にでもすることか、籠から放してやるだけに、家重代の寶を手放そとは、まだ分別が至らぬ、至らぬ。何事もさう一向には思ひつめぬものぢや。

浄〽取合ふ氣色もなかりけり。お染は悲しさ勿體なさ、心で竊と手をあはせ、泣くよりほかに事ぞ無き。

市之助。さあ、これで鶯の話は濟んだ。息のあるうちに行く先々で、面白いこと仕盡したいのが、われ等一生の願望ぢや。（杯を取る。）さあ、つげ、つげ。

仲居。あい、あい。（酌をする。）

市之助。半九郎も飲め、飲め。

半九郎。むゝ。わしも飲まう。（大きい椀を取る。）さあ、これへついでくれ。

市之助。ほう、小氣味がよい喃。

浄〽笑ひさゞめく折柄に、坂田源三郎血氣の侍、苦り切つてぞ打ち通る。

お雪。（下の方にて。）まあ、まあ、お待ちくださりませ。

（お雪は仲居の風俗にて、市之助の弟源三郎を止めながら出る。源三郎は十九か二十歲ぐらゐの侍、羽織袴、大小にて、お雪を突きのけて庭先に入り來る。）

源三郎。兄上、これにおいでなされたか。

市之助。おゝ、源三郎か。なにしにまゐつた。

（源三郎は緣に上りて座につく。半九郎はだまつて酒を飲んでゐる。）

源三郎。（苦々しげに一座を見かへる。）拙者は兄に火急の用事があつてまゐつたもの。じやらけた女どもは見るも目障りぢや。みな立て、立て。

淨へ睨みまはされ、むつとして。

お花。おまへは市様の弟御さうな。いつもいつも親のかたきでも尋ねるやうな、むづかしさうな顔ばかり。ちと兄さまを見習うて、おまへも粋にならしやんせ。江戸への土産によい女郎衆をお世話しよ。京の女郎と大佛餅とは、唯見たばかりでは旨味の知れぬもの。お侍、こちから身揚りして懸るほどの心中噛みしめて味ふ氣があるなら、おまへも若い者がないとも限らぬ。兄嫁のわたしが意見ぢや、一座になつて面白う遊ばんせ。

源三郎。えゝ、つべこべと囀る女め。おのれ等の分際で、武士にむかつて假にも兄嫁呼はり、戯れとて容赦はせぬぞ。（刀を引寄せる。）

お花。おゝ、何ぼわたし等のやうな果敢ないものでも、鱧の骨切をみるやうに、さう安々とは切られまい。さあ、兄さまの眼のまへで、見事わたしを切つて見やんせ。

淨へ冷み笑へば堪忍せず。

源三郎。おのれその頰桁を……。

（刀をひき寄せるを、お染をはじめ、仲居等は寄りて支へる。半九郎は寝ころびて見物してゐる。）

市之助。源三郎。鎮まれ、鎮まれ。こゝをいづこと思うてゐるのぢや。

淨へ源三郎は膝つき寄せ。

源三郎。それは拙者よりお尋ね申すこと。兄上こそこゝをいづこと思召す。曩に御上洛の將軍家は俄にお歸りと觸れ出され、お供してまゐりし江戸の諸侍も、遠からず京地を引拂ふについては、上の御用は申すに及ばず、めい／＼の諸支拂ひ買ひがかりも綺麗にすませ、江戸への土産物も買ひとゝのへ、親類中の年寄どもへは神社の護符も頂いて行かねばならず、きのふは愛宕、けふは鞍馬と、天狗のやうに駈け廻る。その忙がしい最中に、みじかい冬の日を悠長らしい色里の居つゞけ遊び、私の用向は拙者一人が手足を擂切らしても事はすめど、上の御用は一人が一人役、それでお前さまのお役が勤まりまするか、組頭の首尾がよいと思召すか。京三界まで一緒に連れ立つて來て、弟に苦勞さするが兄の手柄か。すこしは分別なされませ。

淨へ疊たゝいて云ひまくれば、一座も白けてみえにけり。

市之助。もうよい、もうよい。なにも彼も判つた、判つた。兄もやがて歸るほどに、そちは一足先へ歸れ。

淨へみえ透いた一寸逃れと、弟はなか／＼合點せず。

源三郎。いや、どうでお歸りなさるゝならば、拙者も一緒にお供申す。さあ、すぐにお支度なされませ。

市之助。それは無理といふものぢや。歸るには相當の支度もある。まあ、なんでもよいから先へ行け。（起ち上る。）

源三郎。あ、兄上……。

市之助。はて、馬鹿堅い奴。野暮を申すな。

（市之助は奥に入る。お花もお染も仲居等もつゞいて奥に入る。）

源三郎。えゝ、情ない兄上……。もう一度御意見して、無理にも連れて戻らにやならぬ。さうぢや。

淨へ起たんとするを引止め。

（今まで横になりゐたる半九郎は顔をあげる。）

半九郎。源三郎。待て、待て。

源三郎。おゝ、半九郎か。

半九郎。かやうな場所で立騷いでは見苦しい。今夜はおとなしう歸つたがよからうぞ。兄はきつとこの半九郎が連れて戻る。安心して歸れ、歸れ。

源三郎。いや、安心してはゐられまい。一つ穴の貉が安請合を、眞にうけて歸られうか。兄がかやうな白癡を盡すも、お手前のやうな不しだらの朋輩があればこそぢや。よい朋輩を持つて兄は仕合せ、拙者乾とお禮を申すぞ。

淨〽むしやくしやむしや紛れの八つ當り。

半九郎。はゝ、そのやうに怒るものでない。お手前はまだ年か若いで、かとばかり惡い者のやうに云ふが、兄は兄、拙者は拙者ぢや。兄が遊ぶと拙者が遊ぶとは、おなじ遊びでも心の入れ方が違ふかも知れぬ。まあ、なんにも云はずに歸れ、歸れ。

源三郎。歸らうと歸るまいと拙者の勝手ぢや。

淨〽又起ちかゝるをお染は取付き。

お染。半様もあのやうに云うてござれば、まあ、まあ、お待ちなされませ。

源三郎。えゝ、面倒な。退いてをれ。

淨〽かよわき女を突き放せば、力餘つてよろよろ、倒れかゝりし膳の上、酒も肴も飛び散つたり。半九郎も短氣の男。

半九郎。やい、源三郎、年下の者と思うて和かにあしらうてゐれば、云ひたい三昧の惡口、仕たい三昧の狼藉、もう堪忍がならぬぞよ。素直に手をさげて詫びて歸れば可し、さもなくばおのれの襟髪を引つ摑んで、狗ころのやうに門端へ投け出すぞ。

源三郎。はゝ、そのやうな脅しを怖がる源三郎でない。夜晝と無しに兄をさそひ出して、あたら侍を腐らせた惡い友達。江戸の侍の面汚しめ。そつちから詫びをせねば堪忍ならぬわ。

淨〽負けず劣らず睨み合ふ。そばにお染は手に汗にぎり。

お染。どちらがどちらとも云はれぬ此場の仕儀、ましてお二人ともにおなじ御朋輩、もうお互ひに料簡して……

半九郎。いや、その料簡はもうならぬぞ。おのれこの半九郎を江戸の侍の面汚しと云うたな。その仔細を申せ。

源三郎。仔細は今更云ふまでもないことぢや。御用を怠つて遊里に入りびたる奴、それが武士の手本になるか。聞きたくば幾度でも云うて聞かす。菊地半九郎は侍の面よごし、恥さらし、武士の風上にも置かれぬ奴ぢや。

半九郎。おゝ、よう云うた。おのれも武士に向つてそれほどのことを云ふからは、相當の覺悟があらうな。

源三郎。おゝ、念にはおよばぬ。武士にはいつでも覺悟がある。

淨〽解けぬ詞の行きがかり、半九郎はつゝツと起ち。

半九郎。問答無益ぢや。源三郎、河原へ來い。

源三郎。面白い。眞劍の勝負するか。

淨〽いづれも堪へぬ血氣と短氣、押取り刀でたち出づれば、お染ははつと氣もそゞろ。

お染。なんぼ侍衆ぢやと云うて、瑣細なことから云ひ募り、眞劍の果し合とは、あまりと云へば餘りの御短慮。これ拜みます、賴みまする。どうぞもう一度分別して、仲直りしてくださんせ。

淨〽拜みまはるをまた蹴放し。

源三郎。女が留むるを幸ひに、云ひ出した勝負をやむるか。卑怯者め。

半九郎。なんの……。さう云ふおのれこそ逃ぐるなよ。

淨〽ふたりは緣より飛んで降り、さゝふる女を刎ね退けて、河原へ走りゆく水の、あはれやお染は起ちつ居つ、人を呼ぶ間も

あらばこそ、あとを慕うて……。

（二）

四條の河原。夜のけしき。所々に枯柳の立木などあり。水の音きこゆ。

淨〽ゆききさへ、暫し絶えたる夜の道、四條河原も冬ざれて、水の音のみ物さびし。

與兵衞。（出づ。）あゝ、暗い晩ぢや。河原を通る方が近道のやうに思うてゐたが、かう云ふ晩にはやつぱり町つゞきを歩いた方がましであつたかも知れぬ。祇園を出てから路寄りをしてゐたので、思ひのほかに夜が更けたやうな。どれ、どれ、いそいで歸りませう。

（千鳥の聲きこゆ。）

與兵衞。おゝ、千鳥が鳴く。いつも聞き慣れてゐるものの、赤兒のなくやうな哀れな聲ぢや喃。はゝ、今頃は娘もあの春着を江戸のお客人にみせて、さだめて自慢してゐることであらう。おなじ勤めをしてゐても、あゝいふ力になる頼もしい客人があれば、親方の首尾もよし、娘も氣丈夫、おれも安心と云ふものぢや。おゝ、千鳥が又鳴くわ。千鳥も寒からうが、おれも寒い。かぜ引かぬうちに行きませう。おゝ、よい鹽梅に雲の缺けたところから薄月が出たやうな。

淨〽呟き〳〵行きかけて。

（與兵衞は下の方に去らんとして、上の方を見かへる。）

與兵衞。や、誰やら斬合うてゐる様子。おゝ、刃物が光るわ。おゝ、おゝ、だん〳〵こつちへ斬結んでくるらしい。喧嘩か物取か知らぬけれど、傍杖の怪我せぬうちに、行きませう、行きませう。さうぢや。

淨〽やがて歎きの種ぞとも、知らぬ白髪の堅老爺、足をはやめて立歸る。

（與兵衞はいそいで立去る。水の音はげしく、上の方より半九郎と源三郎は斬結びながら出づ。月はをり〳〵に隠れて、二人は探りながらに闘ひ、半九郎は遂に源三郎を斬倒す。月はまた明るくなる。）

淨〽ほつと一息月かけを、たよりにお染は走り付き。

（上の方よりお染走り出づ。）

半九郎。おゝ、お染か。

お染。半様、お怪我はなかつたか。して、相手のお侍は……。

半九郎。この通りぢや。

お染。え。

淨〽ひと目見るよりぞつとして、齒の根もあはず顫へゐる。半九郎は騒ぐけしきもなく、刀を鞘に收めても、をさまりかねし胸の闇、暗きに迷ふばかりなり。

（半九郎は源三郎の死體を片寄せ、河の水をすくひて飲む。お染も手眞似にて自分にも飲ませてくれといふ。半九郎は水を入れる物がないと云ふ思入にて、自分の襦袢の袖をひき裂きて水に浸し、お染の口にふくませる。千鳥鳴く。）

半九郎。かよわい女子が血を見たら、さだめておそろしくも思ふであらう。どうぢや、もう落ちついたか。

お染。はい、はい。

淨〽とは云ふものの案じられ。

お染。わたしはこんな勤めの女子、お武家の法はなんにも知りませぬが、かうして人ひとり殺しても、お前になんの御咎めもござんせぬかえ。

半九郎。さあ、生れつき短氣の上に、酒には醉つたり、詞のゆきがかり、堪忍のならぬ羽目となつてあたら朋輩ひとりを手にかけたが……、今更思へば無分別。上洛のあひだは身持を

愼み都の人に笑はるゝなと、かねて支配頭より觸れ渡されてあるに、場所は色里、酒の上の口論、しかも朋輩をうち果しては罪を逃れんやうもない。

淨へさすがに酒の醉さめて、半九郎は茫然と
　今更悔むも甲斐ぞなき。

お染。そんならやつぱりお侍でも、人を殺した罪はのがれず。

半九郎。尋常に切腹するか。但しは兄の市之助に仔細をうちあけ、弟のかたきと名乘つて討たるゝか。二つに一つのほかはあるまい。

お染。えゝ。

淨へ呆れて詞もなかりしが。

お染。おゝ、さうぢや。これを知つてゐるはわたし一人、ほかには誰も見てゐぬのを幸ひ、早うこゝを逃げてくださんせ。

半九郎。なにを馬鹿な。半九郎はそれほど卑怯な男でない。さしたる意趣も遺恨もないに、朋輩ひとりを殺したからは、潔く罪をひきうくるが武士の道ぢや。若松屋のお染の客は人殺しと、あすは世間にうたはれて、そなたも肩身が狹からうが、それも因果ぢや、堪忍せい。

お染。なんの、なんの、勿體ない。あしかけ二月明暮れに、不憫を加へてくだされた、御恩は山ほどあるものを、まだそればかりか立ち際に、重代の刀を手放しても、わたしを受出して親許へ歸して遣らうの思召は、あんまり冥加がおそろしく、心で拜んでをりました。もし、半樣。どうでも死なねば濟まぬなら、一緒に死なしてくださんせ。

半九郎。いや、それもまた無分別。よしない義理をたて過して、この半九郎に命までも呉れようとは、親の歎きを思はぬか。

お染。その歎きを思はぬではなけれども、おまへと云ふものに取縋り。

淨へわたしは今日まで生きてゐた。

お染。さつきあの祇園の茶屋で、もうお別れと聞いた時から、心は疾うに。

淨へ死んだも同樣。

お染。日本中に二人とない、たのもしいお人に引分かれ。

淨へ年期のながい勤め奉公、どう辛抱がなる
　ものぞ。

お染。店出しの宵からお前さまの揚げ詰めで、汚れのない姿のからだは、どこまでも半樣ひとりを夫として、清い一生を送りたさ。

淨へ聞き分けてたべ、察してと、身をなげ伏
　してぞ泣きゐたる。

半九郎。わしもそなたを色里に沈めて置くがいぢらしく、身うけして親許へと、思ひしことも食ひ違うて、かうなるからは寧そのこと、そなたを殺すはそなたを救ふ、慈悲の殺生であらうも知れぬ。濁りに沈んで濁りに染まぬ、清い處女と戀をして……。

お染。死ぬる際まで離れずに……。

半九郎。そんならこゝで……。

お染。あゝ、もし。(さゝやく。)

半九郎。なるほど、屍を河原に曝さうよりも、いかなる人も遂にゆく鳥邊の山を死場所と……。

お染。折角こしらへた二人の春着を、あたら形見に殘さうよりも、死んでゆく身の晴小袖。

半九郎。ものゝふも討死と覺悟すれば、鎧物具みごとに扮裝ち、立派に死ぬるが世の習。

お染。忍んで茶屋へ引返し。

半九郎。死裝束を取つて來ようか。お染、來やれ。

お染。あい。

淨へ風にみだるゝ枯柳、まねくがまゝに引か
　れゆく。

　二人はあたりをうかゞひながら上の方に忍び入る。下の方より半九郎の若黨八

介足早に出づ。月はまた隱れる。）
八介。やれ、暗いことぢや。折角月が出たと思うたに、雲めがまた邪魔をし居つた。
（上の方より仲居お雪出で來りて、思はず八介に突き當る。）
お雪。おゝ、御免なされませ。
八介。さう云ふのは仲居のお雪殿ではないか。
お雪。ほんに八介殿でござんしたか。
八介。支配頭から火急のお招ぎで、旦那のお迎ひに來たのぢやが、いつもの通りおいでであらうな。
お雪。さあ、それが大變。おまへの旦那の半様は市様の弟御と果し合をなされうとて、この河原の方へ來られたとやら。
八介。え。して、して、それはいつのことぢや。
お雪。たつた今のことでござんす。
八介。たつた今なら何處ぞで太刀の音の聞えさうなものぢやが……。なんにしても其れはまことに一大事ぢや（上の方へ行かうとする。）
お雪。もし、もし、そつちではござんすまい。
八介。ではこつちか。（下の方へ行きかけて。）いや、こつちはわしが今來た路ぢや。なんにしても斯う暗うては埒があかぬ。早う提灯を持つて來さつしやれ。
お雪。合點でござんす。
（お雪は行きかけてつまづき、透しながらに上の方に引返す。）
八介。さあ、さあ、大變なことが出來てしまうたぞ。なんで又、市之助樣の弟御と果し合なぞなされたのか。えゝ、かうしてゐても氣が揉める。無駄とは知りながらもう一度こつちの河原を探して見ようか。（下の方に入る。）
（時の鐘、これより竹本の出語りになる。）
淨〽ひとり來て、ふたり連れ立つ極樂の、清水寺の鐘の聲、九つ心くらき夜に、捨つるこの身はいざ鳥邊野へ。をんな肌には白無垢や、上にむらさき藤の紋、中着緋紗綾に黒繻子の帶、年は十七初花の、雨にしをるゝ立姿。
（お染は文句の通りのこしらへにて、上の方より忍んで出で、あたりを窺ふ。）
淨〽男も肌は白小袖にて、黒き綸子に色あさ黄うら。
（半九郎も文句の通りのこしらへにて、あとより出る。茶屋の騒ぎの笛きこゆ。）
淨〽鳥邊の山はそなたぞと、死にゆく身のうしろ髪。
半九郎。ひく三味線は祇園町。
お染。茶屋のやま衆が色酒に。
半九郎。みだれて遊ぶ騒ぎ合ひ。
お染。あの面白さ見る時は。
淨〽あの面白さ見るときは、過ぎし霜月十五日、初の御見を思ひ出す。
お染。あゝ。今更それを云ふも愚癡でござんす。さあ、些とも早う。
半九郎。お染。
お染。半さま。
（月かくれる。ふたりは手を取りて行かうとする時、上の方よりお雪は提灯をもちて先に立ち、あとより市之助とお花出づ。）
市之助。それへゆく二人連は……。
（お雪はつか〳〵と寄りて提灯をさしつけるを、半九郎はたゝき落す。下の方より八介も出で來りて半九郎に突きあたる。半九郎は八介をつき放し、お染の手を取りて向うへ走り去る。皆々あとを透し見る。）
淨〽河原つたひに……。
（床の三重、時の鐘。）

——幕——

（大正四年八月作）

無禮講

登場人物　土岐藏人賴貞。賴貞の妻早咲。伊吹又兵衞。侍女ちか。ほかに齋藤の家來など。

後醍醐天皇の御宇、元徳元年九月なかばの夜。

京家の侍、土岐藏人賴貞の屋敷。庭のあき草に露ふかく、月のひかり冴えたり。座敷には短檠をおく。

（賴貞の妻早咲、二十歳前後、縁にたちて月を仰ぐ。蟲の聲さびしくきこゆ。）

早咲。（ひとり言。）おゝ、よい月ぢや。

（下のかたの褄戸をあけ、縁づたひにて侍女ちか薄絹をもちて出づ。）

ちか。夜がふけました。お冷えなさるでござりませう。これをおかけなされませ。

早咲。よう氣がついてくれました。ほんに夜がふけると、秋の寒さが水のやうに肌にしみて來る。

（ちかは早咲のうしろにまはりて、薄絹を被せかける。）

ちか。九月も十三夜を過ぎますと、朝夕はめつきりと冷えてまゐります。

早咲。まして夜ふけぢや。今夜ももう亥の刻を過ぎたであらう。（再び空を見る。）

ちか。亥の刻は疾うに過ぎました。やがて清水の子の刻の鐘がきこえませう。殿はまだお歸りにはなりますまいか。

早咲。さあ。（さびしげに考へる。）ゆうべは子の刻をすぎると、間もなく戻られたが……。今夜はどうであらうか。

ちか。一昨日の晩は夜のあける頃にやう〳〵お歸りでござりました。

早咲。ほんに一昨日の晩は今か今かと待ちわびて、たうとう一夜も睡らずに明かしてしまうた。（ため息をつく。）今夜もそのやうなことが無ければよいが……。それも武士の務とあれば格別ぢやが、此頃のはさうでない。無禮講とかいふお催しに加はつて、夜毎夜ごとの酒宴遊興……。留守居する女房が夜露に袂をぬらしながら、かうして待ち暮してゐるとは御存じないか。

ちか。ほんにこゝは端近で餘計に冷えませう。奧へお這入りなされませ。

（早咲はだまつて月をながめてゐる。ちかはその袂をひく。）

ちか。奧さま。（無理に内へ連れ込む。）一體あの無禮講とか申すのはいつまで續くことでござりませう。

早咲。（さびしく笑ふ。）それはわからぬ。興のさめるまでは續くのであらう。公家衆でも侍でも、さうじて男といふものは、家をわすれ、妻子をわすれて、酒宴遊興にうつゝを拔かしてゐるものぢや。

ちか。殊にその無禮講とか申しますのは、普通の御酒宴などとは違ひまして、隨分みだりがはしいものぢやとか云ふ噂でござります。

早咲。（あざけるやうに。）さうぢや。男は烏帽子をぬいで頭髻を放ち、法師は法衣をはいで白衣ひとつの姿となり、身分の高下もなく、禮儀も作法もなく、僧も俗も公家も侍も打ちまじつて、遊び戯れ舞ひ歌ふ。すべてが一

通りの遊興を通り越して、ほと〳〵狂亂にも近いとか聞いてゐる。それも卑しい地下の者どもならば知らず、公家では尹大納言どの、四條中納言どの、日野中納言どの、それらの方々をはじめとして、名ある殿上人が我先きにと寄りあつまつて斯くの始末。不行儀と云はうか、不しだらと申さうか。やがては上のお聞きにも達して、どのやうな御咎めを受けようとも知れまいと、それもまた案じられてならぬ。（また起ちかける。）あゝ、殿はまだお戻りにならぬか。ちか。

ちか。はい。

早咲。やがて子の刻であらうと云うたな。

ちか。左樣でござります。

早咲。かたぶくまでの月を見しかなといふ古歌のこゝろも思ひ當つた。（再び起つて緣に出る。）今夜の無禮講も曉方まで續くのではあるまいか。ちか、お前はもう休みや。

ちか。いえ、わたくしは……。

早咲。このやうに每晩遲くなつては、誰も彼もみな疲れる。ほかの女子共にもみな休めと云や。

ちか。して、おまへ樣は……。

早咲。わたしは妻の役、夜のあけるまでも起きてゐて、夫の歸るを待たねばなりませぬ。

ちか。では、わたくしも御一緒に……。

早咲。（じれる。）はて、くどい。早う行きやと云ふに……。

ちか。はい。

（ちかは丁寧に會釋して下のかたに立去る。）

早咲。肌が冷えて、つむりが痛む。夜露にうたれて風でも引いたのではあるまいか。

（早咲はひとり言をいひながら、惱ましげに元の座に戻る。鐘の聲。）

早咲。おゝ、あれが子の刻……。このごろの秋の夜は長い。夜のあけるまでには……。（ため息をつく。）

（ちかは再び出づ。）

ちか。奥さま。

早咲。（顏をあげる。）お歸りか。

ちか。はい。

（早咲はいそ〳〵起つて、出で迎へようとするところへ、土岐藏人賴貝、二十七八歳、酒に醉ひたる體、烏帽子を少しゆがめて被りしまゝ、奥の襖をあけて出づ。賴貝はよき男にて、よき衣を着たり。）

早咲。（嬉しげに。）お早うござりましたな。

賴貝。あまり早くもあるまい。子の刻の鐘を今聽いた。（膝をくづして坐る。）

早咲。丁度ゆうべと同じことでござります。

賴貝。それぢや。ゆうべは早く外して歸つたので、今夜はどうでも逃さぬ。ひがしの白むまでは座を起たさぬと、大勢が無理にひき留むる。それを摺りぬけてやう〳〵に逃げ歸つて來た。あゝ、喉が渇く。（ちかに。）白湯でも水でも一杯くれ。

（ちかは心得て立去る。）

早咲。では、餘の人々はまだ御酒宴でござりますか。

賴貝。長夜の宴ぢやとか云うて、夜もすがら飲み明かすのであらうよ。（ゆがみし烏帽子を押直しながら。）それに今夜は新しい趣向があつたので、人々も猶さら興に乘つてゐらるるやうぢや。はゝゝゝゝ。

早咲。今夜はどのやうな面白いことがござりました。

賴貝。それはな。（笑ひながら少し躊躇してゐる。）

早咲。新しい御趣向とは、どのやうなことでござりました。

賴貝。それは……。まあ、聽きやれ。年のころ

は十七八の美しい女が二十人あまり、生絹の單衣ばかりを身につけて、一座のなかに入りまじり、酌をするやら、歌ふやら、舞ふやら、よれつ縺れつ狂ひまはる……。

早咲。（あきれたやうに。）若い女子……美しい女子が、肌着も無しに……生絹の單衣ばかりで……肌寒いは扨措いて、それでは肌も乳房も透つて、恥かしいことではござりませぬか。

頼員。（笑ふ。）女には恥かしいことであらうが、男には興あることとみえて、聖護院の玄基法眼ほどの聖すらも、太液の芙蓉新に水を出づるに異らずと、手をうつて笑ひ囃された。

早咲。（いよ〳〵呆れる。）して、おまへ様はそれをなんと御覧なされた。

頼員。なんと見たとは……。

早咲。（やゝ激して。）若い女子にあられもない、あか裸も同様の姿をさせて、それと一緒に狂ひまはる。おまへ様も他の人々とおなじやうに、そのやうな猥らな淺ましい戯れに、うつゝを抜かしてゐられましたか。

頼員。（やはり笑つてゐる。）おれを責むるな。おれが目論んだことではない。

早咲。たとひ誰の目論見でも、おなじ莚につらなつて、おなじく狂ひ興じてゐれば、おまへ様も一つ穴の貉とやらではござりませぬか。

頼員。ひとつ穴の貉……。（少しぎよつとして妻の顔をみる。）

早咲。（きつとなつて。）わたくし改めておねがひがござります。

頼員。あらためて願ひとは……。

早咲。おいとまを下さりませ。

頼員。（おどろいて坐り直す。）なに、暇をくれ……。では、この頼員を見かぎつて、里方へ戻るといふのか。

早咲。わたくしには六波羅の奉行齋藤太郎左衛門尉利行といふ立派な親がござります。

頼員。それは云はずとも知れてゐる。その親の齋藤がわが子に暇取つて來いと教へたか。（やゝ不安らしく。）これ、確かに云へ。

早咲。いえ、父からはなんにも申しませぬが、あまりといへば淺ましい。（泣く。）この夏の頃からはじまつた無禮講のお催し、最初のあひだは五日に一度、三日に一度であつたものを、このごろは毎日毎晩、おほかた明日も午過ぎから又出直しておいでなさるのでござりませう。しかも遊興のたはむれが次第に嵩じて、わかい女子をうす物ひとつにして狂ひまはるとは、聞くさへも淺ましい、汚らはしい。もう〳〵わたくしには我慢も辛抱もなりませぬ。今夜かぎりにこの屋敷を立退いて、六波羅の里方へ戻りたいと存じます。どうぞお聽きとゞけ下さりませ。

頼員。夫の方から暇をくれるとも云はぬのに、女房の方から勝手に縁切つて戻るといふ。侍氣質の強い齋藤殿が我子にそのやうに我儘をゆるすと思ふか。

早咲。おつしやる通り、侍氣質の強い父でござりますれば、これほどの話を聽きましたら、屹と自分からも娘をとり戻すと云ひ出すでござりませう。わたくしの我儘を叱らうとは思はれませぬ。

頼員。むゝ。（かんがへてゐる。）

（ちかは湯を汲んで出づ。）

ちか。どうも遲くなりました。

頼員。（叱るやうに。）なぜ遲かつた。

ちか。お湯がさめて居りましたので、沸してをりました。

（頼員はちかのさゝげたる湯をひと口のみて顔をしかめる。）

頼員。えゝ、醉醒めにこのやうな熱い湯が飲め

ると思ふか。水を持て、水を持て。

ちか。はい、はい。(早々に引返して去る。)

早咲。(あざ笑ふやうに。)罪もないちかに八つあたりでござりますか。

(頼員はだまつて考へてゐる。)

早咲。して、わたくしへの御返事はいかゞでござります。

頼員。(怒る。)それほどに望みならば、暇をくれる。すぐに立去れ。

早咲。では、おいとまを下さりますか。

頼員。齋藤へは此方からも改めて挨拶する。ちかは里方から附添うて來た女ぢや。一緒に連れてゆけ。今度のことも大方はちかめが傍から何やかやと焚きつけたのであらう。憎い奴ぢや。

早咲。これはわたくしの一存から起つたこと。ちかをお憎みなされますな。

頼員。勿論かれめが何のやうに唆かさうとも、おのれの心さへ動かずば斯うはなるまい。憎めばとて怨めばとて、かれは枝葉ぢや。(妻を睨む。)縁あつて夫婦となり、あしかけ三年むつまじく語らうて、二世の末までもと云ひかはしたを忘れたか。

早咲。それはこちらから申すことでござります。おまへこそ家を忘れ、妻をわすれて、武士にもあるまじき猥らな遊興に耽つてゐるのではござりませぬか。

頼員。(じれる。)えゝ、くど／＼云ふな。早く立去れ。えゝ、出てゆけ。

早咲。はい。(すこし躊躇してゐる。)

頼員。望み通りに暇をくれるといふに、おのれはなぜゆかぬ。さあ、ゆけ、ゆけ。

(頼員は起つて早咲を庭口へ突き出さうとすれば、早咲は縁よりかた足ふみ落しながら夫の手にすがる。夫婦は月のひかりに顔をみあはせて、しばらく無言。ちかは水を汲んで出づ。それに氣がついて、頼員は妻のそばを少し離れて立つ。早咲はそのまゝ縁に腰をおろしてゐる。)

頼員。(ちかを睨んで。)おゝ、水か。これへ持て。

ちか。はい。

(とは云ひながら、頼員の顔色の唯ならぬのを見て、ちかは猶豫してゐる。)

頼員。なにを猶豫。早く持つてまゐれ。

(ちかは猶油斷せず、主人の顔色をうかゞつてゐる。)

頼員。えゝ、なぜこれへ參らぬ。

(頼員はじれて近寄らうとする時、早咲は縁へかけ上りて遮る。)

早咲。もし、おまへはなんとなさる。ちかを斬らうとなされますか。

(ちかはいよ／＼おどろいて身がまへする。頼員はだまつて睨んでゐる。)

早咲。今もいふ通り、ちかを憎むはおまへの僻みぢや。無體の御成敗なされますな。

頼員。里方から付いて來た女と思うて、何事も大目に見ておけばつけ上り、夫婦のなかに水をさす奴。もう堪忍が相成らぬぞ。おのれ覺悟せい。

(頼員は哮つて、ちかに近寄らうとするを、早咲はまた遮る。)

早咲。それほどまでにちかをお憎みなさるも、所詮はわたくしゆゑでござりませう。ちかを御成敗なさるまでもなく、寧そわたくしを斬つてくださりませ。

(頼員はだまつて突つ立つてゐる。)

早咲。さあ、わたくしを殺してくださりませ。死骸になつてこゝの屋敷を出れば、わたくしは本望でござります。(泣きくづれる。)

頼員。(うたがふやうに。)この屋敷を死んで出たいと…。父に顔をあはすが面目ないか。

早咲。（頭をふる。）いえ、いえ、そんなことではござりませぬ。（また泣く。）

頼員。去られた夫へ面當てに、いつそこゝで死にたいと云ふのか。

（早咲は泣きながら再び頭を振る。）

ちか。（思はず摺り寄る。）では、奥さまはこゝを去られて……。

頼員。はて、おのれらの知らぬことぢや。あつちへ行け。

（眼で知らされて、ちかは水を入れたる椀をそこに置き、不安らしく立去る。早咲はまだ泣いてゐる。）

頼員。（しづかに坐る。）これ、泣いてばかりゐては判らぬ。（やゝ打解けて。）なんでおまへは死にたいのぢや。

早咲。おまへに去られて……。いつそ死んだが優しでござります。（はげしく泣く。）

頼員。その恨みは筋違ひぢや。おれの口からは唯の一度でも、おまへを去らうと申した覺えはない。今の今まで、最愛の妻ぢやと思うてゐたに、おまへの方から不意撃に、去つてくれいと云ひ出したのではないか。

早咲。去つてくれいと云ふやうに仕向けたのは、やつぱりお前でござります。おまへ樣が惡いのでござります。

頼員。（かんがへる。）全くおれが惡いのかも知れぬ。今もいふ通り、おれも不意撃を食つて一旦はむやみに腹を立てたが、最愛の妻に巣守をさせて、夜晝となく遊び狂ふは、おれにも罪がないとは云へまい。（いよ〱打解けて。）今夜のいさかひもほかに知つた者はない。おたがひに勘辨すれば濟むことぢや。もうよいほどに和睦しようではないか。

早咲。（嬉しさうに。）はい。

頼員。ちかが水を持つて來た筈ぢや。これへくれ。

早咲。はい、はい。

（早咲は起つて、ちかの置いてゆきたる椀を持ち來れば、頼員は旨さうに飲む。）

早咲。まだ欲しうござりますか。

頼員。むゝ。ちかを呼べ。

早咲。いえ、わたくしが取つてまゐります。

（早咲は椀を持ちて、下の方の褄戸をあけて去る。頼員は笑ましげにあとを見送りしが、やがて起つて緣さきに出で、冴えたる月のひかりを仰ぐ。）

頼員。（ひとり言。）よい月ぢやな。

（蟲の聲きこゆ。頼員は月をながめてゐるうちに、次第に顏の色が曇つてくる。かれは思案に惱めるやうに幾たびか溜息をついて、我にもあらで緣に腰を落す。早咲は水を持ちて出づ。）

早咲。お待たせ申しました。

（頼員は無言にて椀をうけ取り、思案しながら飲む。）

早咲。なにを考へておいでなされます。

頼員。あらたまつて云ふも異なものぢやが、頼員も武士ぢや、なん時どこで討死しようも知れぬ。そのときにはお前はどうするな。

早咲。はて、忌はしいことを……。今夜に限つてなぜそのやうなことを仰せられます。

頼員。けふあつて明日無いが人の命、まして弓矢取る者はそれだけの覺悟が無くてはならぬ。世は太平のやうに見えても、なん時どのやうな軍が起らぬとも限らぬではないか。いや、近いうちに屹と起る。

早咲。え。それはどうした譯でござります。

頼員。それをこれから云はうとするのぢや。そこらには誰も居るまいな。

（頼員は庭に降りて、左右を見まはす。早咲も起ちて、座敷の左右をうかゞふ。やがて夫婦は顏をみあはせて、早咲は誰も

ゐないと眼で知らすれば、頼員はうなづいて縁にあがる。)
頼員。(念をおすやうに。)ちかは居らぬな。
(早咲はうなづく。)
頼員。誰も居らぬな。
(早咲は又うなづく。)
頼員。近う寄れ。今夜は思ひ切つておまへに大事をあかす。これは大事の上の大事ぢやぞ。かならず他言するなよ。よいか。
(早咲は息をのんで、無言にて首肯く。)
頼員。おまへ達は夢にも知るまい。京都には北條征伐のおぼし立あつて、公家には帥大納言、四條中納言、日野中納言、洞院左衛門督…。いや、ひとり一人にその名を數へてはゐられぬ。それらの人々のほかに、名ある上人僧都等も加はつて、このあひだから密々にその御評議ぢや。武士には一族の十郎頼貞をはじめとして、多治見國長、足助重成…。
(すこし聲をひそめて。)この頼員も御味方の一人ぢやと思へ。
早咲。(おどろく。)では、あの、無禮講といふは…。その御評議でござりましたか。
頼員。かの鹿が谷のむかしを學んで、無禮講の遊興にことよせ、鎌倉退治のはかりごと最早おほかたは整うたれば、おそくも當年内にはおん旗あげと決定いたした。就いてはこの頼員、一族の頼貞と共に一旦は一味荷擔したれど…。(云ひかけて吐息をつく。)よく／＼思案すればこの企て十に八九は成就すまい。鎌倉の高時入道、放埓驕奢のきこえ高けれど、北條九代の威勢はまだ／＼衰へたとは思はれぬ。それに敵對する我々は…。いかに器量才學すぐれたりとも、公家衆や上人や僧都では、いざ合戰といふ時の用には立たぬ。まことの手足となつて働くのはわれ／＼武士の役目ぢやが、さてその武士も前にいふ頼貞や多治見や足助の徒ばかりで、三百騎五百騎の人數を持つてゐるほどの大名はひとりもない。勿論、ひそかに廻文を送つて、諸國の武士を召しあつむる手筈にはなつてゐるものの、日和見の多い世の中、果してどれだけの味方がまゐらうか。
早咲。それほど覺束ないことと知りながら、何故いつまでもその徒黨に加はつてゐるのでござります。石をいだいて淵に臨むとやら云ふは、そのことではござりませぬか。いつそ今のうちに抜けてしまはれては…。
頼員。抜けらるゝものなら抜けてもしまはうが、頼員も武士の端くれ、まして左近の藏人をうけたまはる京家の武士が、退引きならぬ羽目になつて一旦荷擔した以上、今更どうにもならぬことぢや。諺にも云ふ乘りかゝつた船で、もうこの上はどんなおそろしい颶風や荒浪に出逢はうとも、行くところまでは行かねばならぬ。
早咲。して、そのゆく末は…。
頼員。それはわからぬ。おほかたは船がくつがへつて…。いや、そんなことは云ふまい、思ふまい。思うたら一刻も斯うして落ちついてはゐられぬ。その不安のあひだにも一つの慰めは彼の無禮講ぢや。おまへの前では些と云ひにくいことぢやが、われ／＼の身分では迚もならぬやうな山海の珍味をとゝのへ、たぐひなきまでに美しい女わらべをあつめ、上下の隔てなく打ちまじつて、夜も晝も醉ひたはむれ、舞ひ歌ふ、まことに前代未聞の盛宴、その面白さについ惹かされて…。
早咲。では、その無禮講の面白さに、身のゆく末もうち忘れて…。
頼員。いや。忘るゝと云ふではないが…。唯その面白さに惹きつけられて、半分は上の空で月日を送つてゐた。と云うたら、性根の据

らぬ奴と思ふかも知れぬが、今のおれとしてはそれより外に仕様がなかつたので、よのつねの遊女狂ひや身持放埒とは譯が違ふ。察してくれ。

早咲。（思案して。）それにしても、このまゝにうか〳〵と月日を送つてゐたら、やがて大事の時節が近づきませうに、そのときお前はどうなさるのでござります。

頼員。それは考へないことにしてゐる。おれはもうどうなつても構はぬと決めてゐるから、おまへは命を全うして、尼法師にも姿をかへ、土岐藏人頼員が菩提を弔うてくれ。かうして大事をうち明けたのも唯そのことを頼まう爲ぢや。きつと背いてくるゝかな。

早咲。御念にはおよびませぬ。

頼員。おそかれ早かれ、土岐の家は滅亡、頼員は世にないものと思うてくれ。

早咲。はい。（眼をふく。）

（ちか出づ。）

ちか。まだお休みにはなりませぬか。

頼員。おゝ、もう夜もふけた。

（早咲はうつむいて考へてゐる。）

頼員。（注意するやうに。）これ、ちかが參つたぞ。

早咲。はい。（顔をあげて、ちかを見かへる。）これ、酒の用意をしや。

ちか。これから御酒宴でござりますか。

頼員。（氣がついたやうに。）むゝ、さうぢや。奥で飲まう。酒の支度をいたせ。

（頼員は起ちあがる。早咲はまた考へてゐる。）

これにて幕をおろし、更に再び幕をあけると、やはり元の頼員の屋敷。秋の夜も已に明け放れたる景色。

（頼員は烏帽子をうち落されて大童となり、太き繩に兩手を縛められて、座敷のまん中にあぐらをかいてゐる。縁の下のかたに齋藤の家來伊吹又兵衛は太刀をつけ、直垂の袖をくゝり、長卷を傍にひき附けて張番してゐる。庭さきにも家來五六人が棒または刺叉のやうなものを持ちて警護してゐる。）

頼員。（狂へるやうに叫ぶ。）繩を解け、繩をとけ。

又兵衛。（なだめるやうに。）それはなりませぬ。今しばらく御辛抱なされませ。

頼員。繩を解け。太刀をわたせ。

（又兵衛は取合はずに默つてゐる。）

頼員。やい、又兵衛。おのれは舅の齋藤が家來ではないか。主人の婿の頼員に繩をかけて、座敷牢も同様のこの體たらくは、抑もなんたる事ぢや。仔細をいへ、仔細を申せ。いや、その仔細をいふ前に、先づこの繩を解け。

又兵衛。たとひ何と仰せられましても、これは主君の御指圖、手前が自由の取計らひはなりませぬ。

頼員。女房に酒を强ひられて、前後不覺に寢入つてゐるところへ、おのれらが不意に押込んで來て、無理無體にかくの始末。無禮と云はうか、狼藉と云はうか、言語に斷えたる振舞ぢや。おのれら何の仔細あつて、この頼員を生捕りにした。それをいへ。

又兵衛。（冷やかに。）くどくも申す通り、これは主君の御指圖でござる。

頼員。頼員をかやうに縛めて、さてこの上にどうするのぢや。

又兵衛。油斷なく警固せよとの御指圖でござる。そのほかには何にも存じ申さぬ。

頼員。えゝ、おのれらでは判らぬ。齋藤をよべ、

太郎左衛門を呼べ。
（又兵衛はやはり取合はず。頼員は焦れて起ちあがらうとするを、又兵衛は支へる。下のかたより椽づたひにて早咲出づ。）
早咲。殿、おしづまりなされませ。
頼員。おゝ、早咲……。又兵衛等がこの始末ちや。早く繩を解いてくれ。
早咲。（進みよる。）それはなりませぬ。父の指圖でござります。
頼員。おのれまでが同じやうに……。あゝ、扨はおのれ、大事を父に洩したか。
早咲。おまへさまは京方、父の太郎左衛門は鎌倉方でござります。今度のいくさに京方が勝てば父はほろび、鎌倉方が勝てば夫がほろぶる。まして京方に勝目がないと聞くかなしさに、淺薄ながらも女子の思案、おまへ様を醉ひ潰して置いて、夜のあけぬ間に父の屋敷へ驅け付けました。
頼員。大事露顯とは大かた察してゐたれど、よもや女房の口からとは……。おのれ、生みの父に功名手柄をさせたさに、夫を敵に賣り渡したか。
（頼員は憤然として蹶起し、早咲を蹴倒し、踏みにじる。又兵衛はおどろいて遮る。庭に控へたる家來共も一度に起つ。）
早咲。（踏まれながらに制す。）これ、これ、かならず立つまい、騒ぐまいぞ。又兵衛も退きやれ。なう、殿……藏人どの。夫を敵に賣り渡したは、夫の命が助けたさ、夫がいとしいばつかりに……。
頼員。（歯がみをして。）えゝ、いつはり者め。畜生め。夫の大事を敵方に内通して、それで夫の命が助かると思ふか、夫が無事であらうと思ふか。敵方の間者も同様、ふところに刃をいだく女とも知らずに、心をゆるしたは頼員が一生の不覺ぢや。おのれ、蹴殺し、踏み殺してくるゝぞ。
（また踏みにじらうとすれば、早咲はその足にとりつく。）
早咲。いえ、いえ、おまへを助ける工夫はある。今朝も父と相談の上、おまへを返り忠の者にして、無事に命が助かるばかりか、恩賞までも賜はる約束、決して相違はござりませぬ。
頼員。おゝ、この頼員を返り忠の裏切り者にしようと申すか。
又兵衛。かうなれば何も彼も申上ぐる。御主君と早咲様が色々に御相談の上で、表向きはお前様が返り忠のことにして六波羅どのへ訴へ出で、夜のあくるを待つて先づその徒黨の侍ども土岐頼貞、多治見國長の屋敷へ討手を差向け、ひとりも餘さずに生捕り又は撃ち取る手筈でござる。
頼員。（大息をついて。）むゝ。
又兵衛。それを聽いて藏人殿が、われも一緒に斬死と狂ひ出づるか、あるひは躁急つて切腹でも召さるゝか、それらのあやまち無きやうに、不意に取りおさへて警固つかまつれと、失禮をもかへりみず斯くの仕儀、なにとぞ御立腹をおしづめ下され。
（頼員は無言にて大息をついてゐる。）
早咲。もし、これでもまだ御得心がまゐりませぬか。
（頼員はまだ無言のまゝで突つ立つてゐる。貝の音きこゆ。家來共もみな色めく。）
又兵衛。（向うをみる。）おゝ、いよ〱討手が向うたか。
頼員。むゝ。頼貞の屋敷へも……國長の屋敷へも……。（思はず椽先へ出る。）彼等いかばかり猛くとも、不意の討手にかこまれては……。（身悶えして。）その返り忠の……裏切り者

が……こゝにゐるとはよも知るまい。（貝の音又きこゆ。）おゝ、貝の音か……。（じれる。）えゝ、縄を解け。太刀を持て……。

（頼員は縄にかゝりしまゝにて椽より駈け降りるを、家來どもは棒や刺又にて支へる。）

頼員。えゝ、止むるな、邪魔するな。

（頼員は押退け蹴放して行かうとすれば、早咲も又兵衞も庭にかけ降り、又兵衞は縄尻を取つて無理に頼員をひき据ゑる。頼員は倒れて地に坐す。）

早咲。（夫にとりつく。）おまへは狂うてどこへ行かるゝ。今となつて躁つたとて狂うたとて何となりませうぞ。無益の犬死をするよりも、此儘おとなしくしてゐれば、命も助かり、恩賞も賜はる。ゆうべお前はわたしを最愛の妻ぢやと云はれた、その妻といつまでも無事に榮えて暮す心はないか。どうでもわたしを尼にしたいか。

又兵衞。早咲樣のおつしやる通り、男御さまも萬事呑み込んでござりますれば、決して御如才はござりませぬ。唯ぢつとさへしてござればお身は安泰、三方四方無事と申すものでござる。先づその儘、その儘。（賺すやうに云ふ。）

早咲。さあ、こゝにゐては悪うござります。内へおあがりなされませ。（夫を優しく抱へ起す。）

頼員。（しづかに。）おれはもう騒がぬ。この縄を解いてくれ。

早咲。え。（又兵衞と顔をみあはせる。）

又兵衞。勿論お解き申しまするが、今しばらく御辛抱くださりませ。

頼員。返り忠をすればお前等の味方ではないか。味方をいつまで生捕りにして置くのぢや。おれはもう騒がぬと云ふのに……。

（早咲と又兵衞は再び顔をみあはせて、まだ躊躇してゐる。椽つたひに侍女ちかが出で來りて窺ふ。）

頼員。（見かへる。）おゝ、ちか。酒肴の用意いたせ。

ちか。はい。

頼員。ゆうべのやうな事では足らぬ。肴も澤山の品々を買ひあつめ、酒も十分に用意いたせ。

早咲。けふは久しぶりでお前が舞へ。ちかも歌へ。

二人。はい。

頼員。又兵衞も飲め。

又兵衞。はあ。

頼員。餘の家來共もみな飲め。羽目をはづして飲め。

家來。はあ。

頼員。けふからはおれの屋敷で無禮講ぢや。

（頼員は笑ひながら起ちあがる。早咲と又兵衞は先づほつとする。貝の音きこゆ。）

——幕——

（大正十三年九月作）

風露集（四）

英國に沙翁の故郷を訪ふ

栗の花アボンの河を流れけり

巴里にて

短夜といふは巴里の夜なるべし

踊子よ我に扇を投げたまへ

鸚鵡呼べど旅人さめず薔薇の花

海月

さながらに神代のすがた海月哉

海女の肌に海月の戀や晝の月

維新小話

登場人物――本多の妻おのぶ。その娘おいよ。內藤彌之助。町田重二郎。百姓五平。その倅五八。官軍の小隊長。兵士數人。

千住在の農家。茅葺の二重屋臺にて正面の上のかたに佛壇、その下は押入、それにつゞいて奥へ出入りの破れ障子あり。下のかたは壁にて、これに古びたる江戸繪など貼つてあり。更に折りまはして下の方には竹の窓あり。よきところに爐を切りて、自在に藥罐をかける。緣側は竹緣にて、切株の沓ぬぎあり。庭の上のかたには小さき池にて、菖蒲が咲いてゐる。下のかたには低き木戸、その外には大いなる葉柳の立木、そのうしろには田畝や人家をへだてゝ上野の森が遠く見ゆ。

（慶應四年五月十五日の午後。本多おいよ、十七八歳、三百石ぐらゐの旗本の娘、庭におりたちて池の菖蒲を折つてゐる。うすく雨の音、蛙の聲きこゆ。下の方より五平、五十餘歳の百姓のすがた、竹笠を持ちて出づ。）

五平。おゝ、お孃さま。小さめが降つてをりますのに、外へお出なされては濡れます、濡れます。菖蒲ならばわたくしが折つて差上げませう。まあ、まあ內へお這入りなされませ。

おいよ。（花を手に持ちて見かへる。）ぢいや、歸りましたか。鐵砲の音もしばらく止んだやうですね。

五平。はい。いくさも大抵おしまひになつたとか云ふ噂でございます。

おいよ。いくさが終つた……。（かんがへる。）さうして、どんな噂ですか。

五平。はい。（躊躇してゐる。）

（奥よりおいよの母おのぶ、四十歳前後、障子をあけて出づ。）

おのぶ。五平。歸りましたか。上野の模樣はどうでしたな。

五平。五八めは歸つてまゐりませんか。

おのぶ。息子はまだ歸らないやうです。

五平。左樣でございますか。どこの家でも戸をしめ切つてをりますので、くはしいことは判りませんが、上野や根岸の方から逃げて來る人たちの噂をきゝますと、お山の方はどうも模樣がよろしくないやうでございます。（下のかたを指さす。）あれ、あれを御覽なされませ。

おいよ。おゝ、火の手が大層あがつて來ました。（門口に出てみる。）

おのぶ。（緣より降りて、おなじく見る。）ほんに上野の森のうへに火の手が高くあがつて見える。敵の大砲で燒かれたか、それとも味方が自分で火をかけたか。いづれにしても、山內があのやうに紅くみえるやうでは……。（ため息をつく。）もう大抵はわかつてゐる。なんと云つてもこちらは小人數の上にあつまり勢、敵は大軍で三方から攻めかけてくる。殊にさつきから大砲の音もつゞけてきこえた。あれで隙間もなしに打ちかけられては……。

（雨の音強くなる。火のひかりもますます紅くなる。）

五平。おゝ、雨がまた強くなつてまゐりました。

おのぶ。その大砲の音ももう止んだか。（やはり愁はしげに火の手を眺めてゐる。）

五平。奥さま、おつむりが濡れます。

（五平は自分の竹笠を出せば、おのぶはその笠をかざしながら立つ。）

おのぶ。五平。

五平。はい、はい。

おのぶ。もうなん時でせうな。

五平。この騒ぎで、今朝からお山の鐘はきこえませんが、さつき淺草の八つが鳴つたやうでござりました。

おのぶ。日の暮れるまでにはまだふた時ほどある。なんとかしてそれまで持ち應へさせたいものだが……。（五平に。）おまへ氣の毒ですが、もう一度そこらまで行つて、よく聞き定めて來てはくれまいか。

五平。では、すぐに行つてまゐります。

おいよ。雨の降るなかをたびたび御苦勞ですね。それ玉にでも中らないやうに、氣をつけて行つてください。

五平。なに、大丈夫でござります。

おのぶ。これ、笠を……。

五平。いえ、これで宜しうござります。五八めはどこをうろ付いてゐるのかな。

（五平は腰にさげたる手拭をとり、頰かむりをして下のかたへ走り去る。雨の音。）

おのぶ。年寄をたびたび氣の毒だが、上野の様子がどうも氣にかゝつてならない。

（小銃の音二三發、遠くきこゆ。）

おいよ。また鐵砲がきこえました。

おのぶ。（すこし安心したやうに。）おゝ、鐵砲の音がまだきこえるやうでは、山内もどうにか持ち堪へてゐるとみえる。

（小銃の音つゞけてきこゆ。）

おいよ。（勇んで。）あれ、あれ、又きこえました。

おのぶ。（これも元氣づく。）闘ひはまだおしまひにはならない。彰義隊も必死で働いてゐるとみえる。

おいよ。おかあ様。雨が強くなつてまゐりました。もう内へお這入りなされませ。

おのぶ。しかしこの雨が味方には天のあたへで、もつと強く降りつゞけてくれた方がよい。

（おのぶは空をみながら引返して縁にあがる。おいよもつゞいて上り、そこにある小桶に菖蒲の花をさす。）

おのぶ。（花に眼をつける。）ことしは四月から兎かくに雨勝で、時候がいつもより冷えるせゐか、菖蒲も今が盛りらしい。

おいよ。六日のあやめと諺にも申しますに、けふはもう十五日、それでもまだ十分にさき揃はないのを見ますと、今年はよほど季節がおくれたのでござりませう。

おのぶ。世が變れば季節も狂ふものか、毎年おぢい様の御命日に菖蒲をそなへたことはなかつたに……。

おいよ。さうでござります。おぢいさまの御命日は五月の十六日、その頃にはこの花も大抵しぼんでしまひますのに、今年はめづらしいことでござります。

おのぶ。今夜はおぢいさまのお逮夜ですから、御佛前へそなへてお置きなさい。

おいよ。わたくしもさう思つてをります。

おのぶ。お逮夜でも御命日でも、今の身の上ではどうすることも出來まい。せめては御燈明を斷やさないやうに氣をつけてください。

おいよ。かしこまりました。

（おいよは花鋏にて菖蒲の花を程よく剪りて佛前にそなへる。おのぶは縁に立ちて表の方をながめてゐる。雨の音すこし

く薄くなりて、蛙の聲みだれてきこゆ。やがておのぶは佛壇のまへに來りて禮拜す。おいよもおなじく拜す。佛壇には燈明の火が薄くみゆ。）

おのぶ。世にめづらしい長生きと讃まれて、五年まへにおなくなりなされたおぢい樣は、まつたく仕合せなお方であつた。もう少し生きてゐて、この世のなかを御覽なされたら……。（思はず眼をうるませて。）あゝ、もうそんなことは云ひますまい。

（小銃の音又きこゆ。）

おのぶ。（嬉しさうに。）おゝ、まだ鐵砲の音がきこえる。（起つて空をみる。）早く日が暮ればよいが……。

（おのぶは奥に入る。おいよは縁に落ちたる菖蒲の葉や小桶などを片附けてゐる。下のかたより内藤彌之助、二十一二歳、これも二三百石の旗本の次男、町人が旅へでも出るやうな風俗にて、手甲、脚絆、草鞋ばき、大小を菰づつみにして背負ひ、すげ笠をかぶりて出づ。）

彌之助。（木戸の外から窺ふ。）御免ください。

おいよ。はい。（縁の端に出る。）内藤さんではございませんか。

彌之助。彌之助です。（左右を見かへる。）ずつと這入つても好いのですか。

おいよ。どうぞお通りください。

（おいよは出迎へる。彌之助は笠をぬいで内に入り、縁に腰をかける。）

おいよ。早速ですが、上野の方はどうでございませう。

彌之助。阿母さんは……。

おいよ。奥にをります。すぐに呼んでまゐりませう。しばらくお待ちください。（奥に入る。）

（小銃の音きこゆ。彌之助は起つて木戸の外をうかゞへ、再び引返して縁に腰をかける。奥よりおのぶ出づ。）

おのぶ。彌之助さん。變つたおなりでございますね。

彌之助。これでなければ上野の近所へは寄り附かれません。かういふ町人のすがたに化けて、今朝から上野の樣子をうかゞつてゐましたが……。本多の奥さん。（少しく聲を低めて。）どうも殘念です。

おのぶ。え。では、やつぱり……。

彌之助。（起つて下の方を指さす。）あの火を御覽でせう。

おのぶ。はい。さつきからあれを見まして、わたくしも心配してをりました。

彌之助。あれは吉祥閣が燒けるのです。

おのぶ。おゝ、吉祥閣が……。

（おのぶは顏色を暗くする。奥よりおいよは盆に茶碗をのせて出づ。）

おいよ。番茶でございます。

（彌之助は會釋して茶をのむ。）

おのぶ。（娘を見かへる。）これ、吉祥閣が燒けたといふことです。

おいよ。（おどろく。）あれ、吉祥閣が……。ほんたうでございますか。

彌之助。廣小路の正面から向つて來た薩州を、一旦は三橋まで追ひかへしたのですが、なにしろ敵は大砲を持つてゐるので、雁鍋の二階から續けて擊ち出したから堪りません。つい眼のまへの吉祥閣がたちまちに火になつて、その火の粉が山内一面にふりかゝつて來るので、彰義隊がいくら働かうとしても、火の粉と煙でどうすることも出來ず、黑門口から先づうち破られて、だん／＼に谷中口の方へ引き退つてしまひました。

おのぶ。（又もやため息をつく。）なるほど吉祥閣が火になつては……。この雨がもつと

強く降るやうに、さつきから祈つてゐましたに……。それでもまだ持ち堪へてゐるのでござりますか。

彌之助。まあ、弱いにはなり〳〵になつてしまひましたが、それでも強情に踏みとゞまつてゐる者も幾らかあるやうです。

おいよ。まだ時々に鐵砲の音がきこえて居ります。

彌之助。あの鐵砲の音がわれ〳〵の命です。なんとかして日の暮れるまで持ち堪へてゐてくれゝば好いのですが……。

おのぶ。ほんにさうでござります。日が暮れゝばあなた方のやうな次三男の人達や、町火消しの組々や、魚河岸の若いものまでが一緒になつて、そこらに火をつけて敵を燒討にする筈。彌之助さん、もう何時でござりませう。

彌之助。もう八つ半かと思ひます。

おのぶ。さうすれば、暮六つまでには一時半、もうしばらくのところでござります。夏の日が長いと云つても、雨の日は早く暮れるもの。（空をみる。）もつと雨が降つてくれゝばよいに……。

おいよ。まつたく今日にかぎつて、とりわけて日が長いやうに思はれてなりません。

彌之助。雨が強ければ防ぐには都合がいゝのだが。（同じく空をみる。）東照宮の冥助があらば、雨もふるか。

おのぶ。日が暮れるか。これ、おいよ。おまへも權現樣におねがひ申すがよい。

（おのぶとおいよは無言にて手をあはせる。下のかたより町田雄二郎、二十一二歳、やはり旗本のせがれにて彰義隊のこしらへ、右の足を白布にてまき、米俵のやうなものをかぶりて出づ。）

雄二郎。（内をうかゞふ。）御免なさい。

彌之助。（あわてゝ起つ。）誰だ。どなたでございます。

雄二郎。（顏を出す。）内藤か。

彌之助。やあ、町田か。早く這入れ。

おいよ。町田さんでござりますか。（あわてゝ縁を降りる。）

（雄二郎もうしろを見かへりながら庭に入り來る。）

彌之助。怪我をしたな。

雄二郎。何、大した事でもない。（縁に腰をかける。）本多の奧さん。御無沙汰をいたしました。

おのぶ。どうなすつたかと御案じ申してをりました。あらましのことは唯今彌之助さんからうけたまはりましたが、その後の模樣はいかがでござります。

雄二郎。たゞ殘念と云ふよりほかはありません。奧さん、お察しください。

彌之助。では、たうとう駄目か。

雄二郎。駄目だ、駄目だ。隨分根かぎり遣つて見たが、なにを云ふにも味方は小勢で、手負や討死はだん〳〵に殖えてくる。おまけに吉祥閣は燒かれる。火の粉は降つてくる。

彌之助。それは察してゐる。さだめて苦戰であつたらうよ。そこで、もういよ〳〵沒落か。

雄二郎。所詮支へ切れないので、山内の者は思ひ思ひに落ちてしまつた。勿論、まだ少しは踏みとゞまつてゐるのもあるやうだが、こゝに三人、あつちに五人と、分れ分れに鬪つてゐるのだから、勝つても敗けてもなんにもならない。もう運命は定まつてしまつたのだ。（おいよに。）おいよさん。濟みませんが、水を一杯のまして下さい。

おいよ。はい、はい。（奧に入る。）

おのぶ。まことに殘念でござりました。

彌之助。どうしても日のくれるまでは持ち堪へられなかつたかなあ。おれ達はこの通り支度

をして待つてゐたのだが……。

雄二郎。山の方でもそれを知つてゐるので、なんとかして日の暮れるまでと踏ん張つてみたが、やつぱり何うしても持切れなかつたのだ。

（おいよは急いで、茶碗を盆にのせて出づ。）

おいよ。お待遠さまでござりました。

雄二郎。ありがたう。（ひと息に水をのむ。）うまい、うまい。もう一杯くれませんか。

おいよ。はい、はい。（再び奥に入る。）

おのぶ。なんと申しても今更致方がござりません。上野がいよ／＼落ちたとなれば、あなた方はこれから何うなされます。わたくしの口から申すのも如何でござりますが、主人の藤十郎は御承知の通り、先月の二十日に奥州の方へ出發いたしました。その時にわたくし共は、やはり上野へおいでなされてはと申しましたところ、いや、おれは彰義隊の仲間入りをしたくない。上野に楯籠つて幾日を支へられると思ふか。そんなことでは大事はなせない。おれは出羽奥州の諸藩と聯合して、天下分け目の大いくさをするのだと申してをりましたが、今になつてかんがへますると、主人の申したこともまんざら外れてもゐなかつたやうに思はれます

雄二郎。まつたくさうでした。上野で闘つたところで、どうなることではなかつたのです。

彌之助。甲州か箱根でくひ止めるならば格別、江戸城を明け渡してから、いゝいゝじたばたしたところでもう遲かつたかな。

（奥よりおいよは再び水を持つて出づ。）

雄二郎。いや、どうも濟みません。（水をのむ。）

おいよ。もつと汲んでまゐりませうか。

雄二郎。もう澤山です。ありがたう。（茶碗を下におく。）

おいよ。御怪我はお痛みではござりませんか。

雄二郎。いや、別に痛むほどでもありません。ほんのかすり疵です。

おいよ。わたくし共にはよい金創の薬がたくはへてござります。それを塗つて差上げませう。（茶碗をもつて奥に入る。）

（彌之助はだまつて、おいよと雄二郎の二人をながめてゐる。）

おのぶ。主人からはその後なんのたよりもござりませんので、安否のほども判りませんが、奥州の方ではまだ華々しい戰ひもないやうでござります。上野を落ちた方々も大概はそちらをさして行かれるのでござりませうな。

雄二郎。さうかも知れません。いや、確かにさう云つてゐる者もありました。

おのぶ。そこで、くどくもおたづね申すやうですが、あなた方はどうなされます。やはり奥州へおいでになりますか。

二人。さあ。

（彌之助も雄二郎もかんがへてゐる。）

おのぶ。（やゝ嘲るやうに）それとも降參なされますか。

二人。（苦笑ひして。）まさか。

おのぶ。それでは武士をやめて、町人百姓におなりなされますか。

二人。さあ。（やはり考へてゐる。）

（奥よりおいよは貝に入れたる薬と新しき白布を持ちて出づ。）

おいよ。（縁を降りる。）布も濡れてゐるやうでござりますから、新しいのを卷きかへませう。

雄二郎。折角ですから、おいよさんに願ひませうか。

（雄二郎は沓ぬぎの切株に足をかけ、おいよはその白布を解く。彌之助はそれをぢつと見てゐる。）

おいよ。血が大分にじんで居りますが、どうな

されたのでございます。

雄二郎。なに、木の根につまづいて擦りむいたのです。

彌之助。木の根につまづいて擦りむいたのか。あつぱれの手並だな。はゝゝゝゝ。

（雄二郎はむつとしたが、だまつてゐる。おいよは藥をぬつて、白布をまきかへる。）

おのぶ。（娘に。）これ、ゆるまぬやうにしつかりと結んでおあげなさいよ。

おいよ。はい、はい。

彌之助。して、わたし達よりも、あなた方はこれからどうなさるのです。

おのぶ。牛込の屋敷を引き拂ひまして、奉公人どもには暇をつかはし、差當り親子ふたりがこゝの厄介になつてをりますが、いつまで斯うしても居られません。まして上野も落ちたとあれば、江戸に踏みとまつてゐる張合もぬけましたので、遠からずこゝを立退きまして、ちつとばかりのしるべを頼りに、しばらく上總の方へでも參らうかと思つてをります。

（雄二郎も耳をかたむけて聴いてゐる。）

おいよ。（白布をまき終る。）もつとしつかりと締めませうか。

雄二郎。（足をふんでみる。）いや、これで丁度いゝ加減です。どうも濟みませんでした。

彌之助。おい、町田。足ごしらへは出來たか。

雄二郎。むゝ。

彌之助。（突然に起つ。）では、行かう。

雄二郎。どこへ行く。

彌之助。知れたこと、奧州へ行くのだ。

（おのぶは左もこそと首肯く。おいよは少しおどろいて、雄二郎の返事を待つやうにその顔をみる。）

雄二郎。おれはさつきからそれを考へてゐるのだ。

彌之助。なにを今更かんがへる。江戸の侍の行く道は一つしかない筈だ。

雄二郎。江戸の侍の道は一つしか無いかしらぬが、人間の行く道は幾つもあるからな。（やはり考へてゐる。）

彌之助。では貴公は今こゝの奧さんに云はれたやうに、降參でもする氣か。それとも町人百姓にでもなる氣か。さうでなければ、おれと一緒に行け。脱走しろ。

（雄二郎はまだ考へてゐる。）

おのぶ。彌之助さんはこれからすぐにお立ちになりますか。

彌之助。ぐづ／＼してゐて、路を塞がれてしまふと困りますから、日のくれるのを待つてすぐに出發しようと思ひます。

おのぶ。それでは夕の御飯でも召上つて、御出發なさるが宜しうございます。奧州までは遠い道中、殊にふだんの旅とも違ひますれば、なにか御入用のものでもございますなら、御遠慮なく仰しやつて下さい。

彌之助。いや、別に……。（云ひかけて考へる。）奧さん。そのお詞にあまえて、わたくしから改めておねがひがございます。

おのぶ。（形をあらためる。）はい。なんなりとも承はりませう。

彌之助。（縁にかける。）ほかでもございませんが、わたくしはこれから町田と一緒に奧州へまゐります。もとより生きて還らうとは存じませんが、萬一ふたりのうちの一人が無事に戻つてまゐりましたら、それにお孃さんを下さるといふ御約束をして頂くわけにはまゐりますまいか。

おのぶ。以前とは違ひまして、唯今では宿無しも同様の身の上、ましてふつゝかな娘をさう仰しやつて下さるのは有難いことでございます。おふたりさんとは不斷から取分けて御懇

意をねがひまして、御縁があつたらどなたにかとは、主人とも内々相談いたしてをりましたくらゐでござりますから、こちらに決して否やはござりませんが、雄二郎さんの思召はいかゞでせうか。

おいよ。（あわてゝ。）おかあ様。あなたひとりでお決めなされても、わたしはそんな御約束は嫌でございます。

おのぶ。嫌だと……どうして嫌ですか。これはわたしの一存ではなく、阿父様もかねてさう云つてゐられたのでござりますぞ。

おいよ。それでも……。（思ひ切つて。）わたくしは嫌でござります。

彌之助。（俄に起つ。）奥さん。もうなんにも仰しやつて下さるな。わたくしはすぐ御暇申します。

おのぶ。今からすぐに……。

彌之助。すぐに參ります。町田は一緒には行きますまい。わたくしひとりで出發いたします。萬一生きて還らうかなどと卑怯なことを考へたのは、わたくしの不覺でした。もう二度とはお目にかゝりません。どなたも御機嫌よくお暮しください。（云ひすてゝ行く。）

おのぶ。あ、もし、ちよつとお待ちください。彌之助さん……内藤さん……。

（彌之助はそのまゝ下の方へ足早に立去る。おのぶは縁に立ちて見送る。下のかたより五平の倅五八、頰かむりをして出づ。）

五八。唯今戻りました。

おのぶ。おゝ、五八。途中でおいよには逢ひませんでしたか。

五八。いえ、お孃さまには一度も逢ひませんでした。どこで行き違ひましたか。

おのぶ。いくさはもう濟みましたか。

五八。はい。彰義隊は總崩れで、皆ちり〴〵に落ちてしまつたといふことでござります。一時は眞紅にみえた上野の火も、だん〳〵に消えてまゐりました。

（おのぶは再び庭に降りて下のかたを見る。上野の火の光はいつか薄くなつてゐる。雄二郎とおいよも來りて見る。）

おのぶ。さつきはあれほど燃えあがつてゐた火の手もいつか鎭まつて、上野の森も暗くなつた。（ぢつと眺めてゐる。）

五八。どれ、日のくれないうちに、水でも汲み込んで置きませう。奥さま。ほかに御用はござりませんか。

おのぶ。一日かけあるいて嘸ぞくたびれたであらう。ちつと休んだがよい。

五八。はい、はい。

（五八は家のうしろに入る。おのぶは引返して縁にあがる。）

おのぶ。雄二郎さん。

雄二郎。はい。

おのぶ。御覽の通り、彌之助さんはもう出發しましたが、あなたはこれから何うなされます。

雄二郎。（しづかに。）わたくしは奥州へゆくのを止めました。

（おのぶは不機嫌らしく默つてゐる。）

雄二郎。今になつてだん〳〵考へてみますと、肝心の御主君は恭順を旨としてゐられるのに、その家來どもが何のために騷ぎ立てるのでせう。ところが、人の氣といふものは不思議なもので、この場合に脫走するか上野へ楯籠るか、それでなければ侍の顏が立たないやうに思はれて、われも我もと飛び出したのです。わたくしなぞもやはりその仲間で、若い者のあと先見ずに、たゞ大勢に誘はれて、半分は夢のやうに彰義隊へかけ込んで、今まで命がけで働いて來たのですが、その夢ももう

醒めました。

おのぶ。（あざ笑ふやうに。）あなたのやうなお人に取つてはそれが夢であつたのかも知れません。その夢が醒めたあとは何うなるのです。

雄二郎。上野で討死してしまへば格別、かうして無事に落ちのびて來た以上は、再び火のなかへ飛び込むやうな氣にはなれません。當分はどこにか落ちついて、世のなりゆきを見さだめた上で、町人になるか、百姓になるか、しづかに一身の處置をきめようと思ひます。

おのぶ。（ます／＼機嫌を損じて。）それはよい御考へでござりませう。唯今あなたの仰しやつた通り、御主君が恭順を旨としていらせられるのに、その家來どもが騒ぎ立てるのは間違つたことで、先月奥州へ脱走しました主人の藤十郎も、唯今出てゆかれた彌之助さんも、みんな間違つた夢を見てゐるのでござりませう。あなたのやうな利口なお人の眼から御覽になれば、この場合に武士の意地などと云ひ張つてゐるものは、みんな夢をみてゐる馬鹿者かも知れません。わたくし共もその馬鹿者の妻や子でござりますから、とてもあなたのお話相手にはなりますまい。あなたはどうぞ御勝手にお休みください。わたくし共はもうこれで失禮をいたします。

（おのぶは起ちあがりておいよを眼で招き、そのまゝ奥に入る。）

雄二郎。（おいよに。）おかあさんはよほど御機嫌を損じたやうですね。

おいよ。母はふだんから武家氣質の強い人でございますから、あなたが奥州へお出でにならないのを殘念に思つてゐるのでございませう。

雄二郎。さうです、さうです。それが第一にお氣に入らないに相違ないのです。困つたものだ。（ため息をつく。）

おいよ。なんとかして母の心をなだめる工夫はないものでございませうか。

雄二郎。さあ、どうしたものかな。

おいよ。（すり寄る。）どうでございませう。あなたも奥州へ行つて下さいませんか。

雄二郎。え。わたしにも脱走しろと云ふのですか。

おいよ。さうして下されば、わたくしから母によく頼みまして、御出發の前にあなたと祝言のさかづきをさせて貰ひます。

雄二郎。それは勿論望むところですが……。

おいよ。左もなければ母のこゝろは解けないで、いつの世になつてもあなたとわたくしとは……。（涙ぐむ。）それが悲しうございます。

雄二郎。むゝ。（又もや溜息をついて思案してゐる。）

おいよ。どうしても奥州へ行くのはお厭でございますか。

（雄二郎はやはり返答に躊躇してゐる。）

おいよ。たとひ母がなんと申しましても、わたくしの心ではあなたのほかに夫はないと決めてをります。しかし父の安否はわかりませず、唯今では親ひとり子ひとりの身の上、その母の機嫌を損じたくはございませんから、母のこゝろも解け、わたくしの願ひもかなひますやうに……。もし、雄二郎さん。まだお聞き分け下さいませんか。

雄二郎。いや、あなたの云ふことはよく判つてゐますが……。まあ、もう少し考へさせてください。

（雄二郎はまだ考へてゐる。家のうしろより五八出づ。）

五八。もし、お嬢さま。御用心なさいまし。錦

切れお大勢で上野の落武者をさがしにまゐりました。
おいよ。え、上野の落武者をさがしに…………。（雄二郎に。）では、兎もかくもあすこへ………。
五八。早くお隠れなさいまし。
（おいよは雄二郎の手をとつて縁にあがり、佛壇の下の押入に隠す。五八はうろうろして表をうかゞつてゐると、下手かたより官軍の小隊長が兵士五六人を引き連れ、五平を追ひたてゝ出づ。）
小隊長。貴様の家はそこか。早くゆけ。
五平。はい、はい。
（一同は庭に入る。おいよは素知らぬ顔をして坐つてゐる。）
五平。お嬢さま。なにか御詮議があるさうでござります。
おいよ。（おちついて。）はい。なんでござります。
小隊長。おまへはこゝの家の娘ではあるまいな。
おいよ。わたくしは本多いよと申すもので、このあひだから母とふたりでこゝの厄介になつてをります。
小隊長。こゝへ彰義隊の落武者が來たであらうな。
おいよ。いえ、そんな者はまゐりません。
小隊長。これ、隠すな。右の足に白布をまいて、米俵をかぶつた侍が、こゝの家へ忍び込んだのを、近所で見たものがあると云ふぞ。その侍はどこへ行つた。
おいよ。存じません。
小隊長。剛情な奴だ。貴様も徳川の家來の娘だといふから、飽までも彰義隊を庇ふとみえるな。屯所へ引つ立てゝ吟味するぞ。
おいよ。わたくしは御吟味をうけるやうな覺えはございません。
小隊長。（兵士を見かへる。）それ、連れてゆけ。
兵士。さあ、來い。
（兵士はおいよの兩腕をとつて縁より引きおろす。）
五平。もし、お嬢さまをどうなさるのでござります。
小隊長。えゝ、邪魔をするな。
（小隊長は先にたちて、兵士はおいよを引つ立てゝゆく。五平と五八はうろ〱してゐる。奥よりおのぶは懐劍をさして出づ。）
おのぶ。しばらくお待ちください。
小隊長。（見かへる。）なんだ。
おのぶ。わたくしは、その娘の母でござります。彰義隊の落武者はたしかにこゝの家にかくれて居ります。唯今お引渡し申しますから、どうぞその娘をおゆるし下さい。
小隊長。たしかに引渡すか。
おのぶ。屹とおわたし申します。
小隊長。むゝ。
（小隊長は頤にて指圖すれば、兵士はおいよの手をゆるめる。）
小隊長。して、彰義隊はどこに隠れてゐる。
（おいよはあわてゝ縁にかけあがりて母に取縋る。）
おいよ。もし、おかあ様。
おのぶ。（それを耳にかけず。）この押入をおあらため下さい。
小隊長。それ。
（兵士は縁に飛びあがる。おいよはおどろいて支へようとするを、母はしつかりと抱へて動かさず。兵士は押入をあけると、雄二郎は覺悟して跳り出で、兵士をつき退けて庭に飛び降りて逃けようとするを、兵士は追ひすがりて組み付く。雄二郎は刀をぬく間もなく、組んづほぐれ

つ爭ひしが、遂に大勢に組み伏せられて、
繩をかけらる。）
小隊長。ほかに隱れてゐる者はないか。
おのぶ。そのほかには誰も居りません。
小隊長。む丶。
（小隊長は兵士に指圖して、雄二郎を引
つ立て丶ゆく。）
五平。やれ、やれ。怖いことであつた。
五八。どうかして逃がしてあげたいと思つた
が、なにしろ多勢に無勢だからな。
五平。つかまつたら最後だ。あのお侍も命は
あるまい。
五八。あ丶、お氣の毒なことだ。
（五平と五八は凋れながら家のうしろに
去る。時の鐘きこゆ。おのぶはおいよを
抱へたま丶、無言で立つてゐる。やがて
その手をゆるめると、おいよは母をつき
退けて駈け出さうとするを、おのぶは緣
先にて押さへる。）
おのぶ。これ、おまへはどこへ行く。あんな卑
怯者のあとを追つて行くつもりか。
おいよ。おかあ様、あなたはあんまりでござい
ます、あんまりでございます。（泣く。）
おのぶ。なにがあんまり……。おまへは武士の
娘、わたしは武士の妻、おたがひにそれを忘
れてはなりませんぞ。
おいよ。（屹となつて。）武士の娘ならば斯うし
て死にます。
（おいよは矢庭に母の懷劍をぬいて、わ
が喉につき立てる。）
おのぶ。あつ。おまへはどうして……。（娘を
か丶へる。）これ、娘……。おいよ……。お
いよ……。
（おいよは答へずして息絶ゆ。）
おのぶ。それでも武士の娘か。不孝者め。
（云ひさして娘の死骸を膝からおろし、
おのぶは顏をそむけて涙をのみ込む。家
のうしろより五平と五八出で來りて、さ
さやき合ひながら竊とのぞく。うすく雨
の音、蛙の聲きこゆ。）

——幕——

風露集（五）

塚原澁柿園氏追悼

柿落ちて夏の日に秋の愁ひかな

市川門之助追悼

眉刷毛やその白粉の花散りて

土用の丑の日

この夏を鰻と共に痩せにけり

蟬　螢

横町や銀杏一本蟬しぐれ

ひと夜さを焦れて朝の螢かな

母一周忌

夕顏やその日ばかりは廻り來て

蚊を憎む母に蚊やりの手向け哉

扇　團扇

繪扇をひき裂く京の別れかな

魚河岸の魚といふ字の團扇かな

世界怪談名作集の飜譯を終りて

みじか夜の夢を惡魔の覗きけり

秋

信濃路や僧も蕎麥うつ寺の秋

鯛喰うて寢轉んでゐても旅の秋

魂祭　燈籠

孤兒院や父母に泣く魂まつり

ながらへて戀のかたきを魂祭

燈籠に風白々と更けにけり

燈籠や寺無き村の墓まゐり

寺の門前（喜劇）

登場人物——寺の住職善隆。寺のむすめ町子。花屋の娘おとく。犬殺し長太。その弟長吉。納所隆格。檀家總代大崎、吉田。ちんばの乞食。寺まゐりの母と娘など。

時は現代。秋の日の午後。

場所は淺草のあたり、ある寺の門前。すこし上の方によせて屋根附の門あり。門につゞいて下の方には潜り戸があけられて、そこには小さき花屋の店が横向きにみゆ。花屋の店には樒や草花などが積まれ、高箒や手桶などがあり。往來にむかひし方は半窓にて、それより下のかたは扇骨木の生垣、そのなかは墓地と知るべし。上の方もおなじく生垣にて、門内には紅らみたる柿の大樹、そのほかにも植込の立木ありて、本堂に通ふ石だたみあり。

（犬殺し長吉、十七八歲、犬の死骸を入れる笊を下のかたに置きて、地にしやがんでゐる。花屋の娘おとく、これも十七八歲、手桶と柄杓を持ちて門前に水をまいてゐる。上のかたには蓙にて跛足の乞食の男、竹杖をそばに置きて坐つてゐる。門内より母と娘らしき參詣人出づ。）

おとく。（會釋する。）もう御參詣はおすみになりましたか。

母。毎度御厄介になります。

おとく。毎度ありがたうございます。

（母と娘は下の方へゆきかけ、娘は乞食の方を見かへりて母の袂をひけば、母はうなづきて立戻り、乞食に幾らかの金をやれば、乞食は無言にて頭を下げる。母と娘はそのまゝ下のかたへ立去る。おとくは水をまき終りて門内に入る。長吉はうつむいて居眠りをしてゐる。やがておとくは手桶をさげて再び出で來り、水を撒かうとして左右を見かへる。）

おとく。困るわねえ。（長吉のそばに來る。）ちよいと少し退いておくれよ。水をまくのに困るから。さあ、ちよいと退いて……。あら、寢てゐるの。仕樣がないねえ。

（おとくは手桶を下におきて、長吉をよび起す。）

おとく。ちよいと、起きておくれよ。長ちやん。そんなところに寢てゐると、兄さんに叱られるよ。え、長ちやん。巡査に叱られるよ。

長吉。（はつと眼をあく。）巡査……。

おとく。（笑ひ出す。）ほゝ、寢ぼけてゐるんだよ。

長吉。（眼をこすりながら。）だつて、巡査にやあ懲り〳〵してゐる。何度警察へ連れて行かれたか知れやしねえ。

おとく。首環のついてゐる犬を殺したからだらう。おまへが惡いんだから仕方がないぢやないか。

長吉。おいらぢやあねえ。兄貴が殺したんだ。それでもおいらまでが一緒に連れて行つて涼まされるんだもの、遣切れねえや。

おとく。だつて、おまへも手傳つたんだらう。

長吉。手傳はなければ兄きになぐられるからなあ。どつちにしても助からねえや。それにし

ても、兄貴はどこへ行つたんだらう。
おとく。さつきから歸らないやうだよ。
長吉。また居酒屋へ行つたかな。それともあすこのチャンの麥でも食ひに行つたかな。どれ、おいらもシウマイでも食つて來ようかな。
（起ちあがる。）
おとく。あら、いけないよ、そんな車をそこへ置いていつちやあ。
長吉。おいら一人ぢやあ挽けねえもの。
おとく。だから、兄さんの歸るまで待つておいでよ。一體その車には何匹這入つてゐるの。
長吉。けふはまだ一匹も殺さねえ。兄きも自棄で飲みに行つたんだらう。
おとく。犬を一匹殺すと幾らになるの。
長吉。警察から貰ふのは一匹二十錢さ。
おとく。皮や肉も賣るんだらう。
長吉。むゝ。それでなけりやあ商賣にならねえ、皮も肉も骨もみんな賣るのさ。
おとく。（顏をしかめる。）忌な商賣だわねえ。
長吉。（嘲るやうに。）それでも坊主の妾よりましだ。
おとく。（ぎよつとして。）え、なんだつて……。
長吉。なんでもいゝ。近所でみんな知つてゐらあ。
おとく。（腹立たしげに詰めよる。）なにを知つてるんだよ。
長吉。はゝ、大黒樣が般若になつた。怖い、怖い。食ひ殺されねえうちに、逃げよう、逃げよう。
（長吉は下のかたへ駈出してゆく。）
おとく。仕樣のない子だねえ。
（おとくは腹立たしげに長吉のうしろ姿を見送り、やがて手桶の水をそこらへ撒きはじめる。下の方より寺のむすめ町子、十九か二十歳ぐらゐ、學校より戻りし體にて風呂敷包みをかゝへ、袴、靴、洋傘を持ちて出づ。）
おとく。お歸りなさいまし。
町子。（車を見かへる。）あら、又こんなところへ車を置いて……。これは犬殺しの車だらう。（顏をしかめる。）なぜ見付けたら叱らないのよ。
おとく。兄さんはどこかへ云つてしまつて、弟ばかりがそこにゐたんです。
町子。弟でもなんでもいゝから、こんなところへ車を置いちやいけないと云つて、きびしく叱つてやればいゝのに……。
おとく。さう云つたんですけれど、いつの間にか何處へか云つてしまつたんです。
町子。（舌打ちするやうに。）ほんたうに仕樣がないわねえ。（云ひながら更に跛足の乞食に眼をつける。）あら、そこにも乞食が……。なぜ家の前にはこんなものばかり寄り集まつて來るんだらう。
おとく。（すこし同情するやうに。）あれは啞で跛足なんですから。
町子。啞でも跛足でも、家の門のまへに坐つてゐられちや困るわ。（命令的に。）こんなところにゐちやあいけないと云つて、早く追ひ拂つておしまひなさいよ。お父さんに屹と叱られるわ。
（おとくはよんどころなく乞食のそばへ進みゆきて、手眞似にてあちらへゆけといふ。乞食は無言にて幾たびか頭を下げるので、おとくは又すこし躊躇する。）
町子。（じれて催促する。）いゝから早く追ひ拂つておしまひなさいよ。
（おとくは再び乞食にむかひて、あちらへ行けと追ひ立てる。乞食は澁々ながら起ちあがり、町子の方を尻目に視て、杖にすがりながら上のかたに立去る。）
町子。今度からあんなものが來たら、すぐに追

ひ立てゝおしまひなさいよ。(再び犬殺しの車を見かへる。) ほんたうにこゝの門前をなんと思つてゐるんだらう。(叱るやうに。) おまへも氣をつけて吳れなくつちやいけないよ。

おとく。(素直に。) はい。

(町子は門内に入りかゝる。)

おとく。あの、お孃さん。

(町子は無言で立停まる。)

おとく。(聲をすこし低めて。) あの、さきほど遠山さんがお出でになりまして……。

町子。(あわてゝ立戻る。) え、遠山さんが……。早くさう云へばいゝのに……。何時頃に來たの。

おとく。一時間ほど前でございました。お孃さんはまだお歸りにならないと申したら、これを渡してくれと云つて、書いていらつしやいました。(手帳を裂いたらしい紙きれに萬年筆で書いたらしいのを帶のあひだから探り出す。)

町子。おまへ讀んだの。

おとく。いゝえ、横文字で書いてあるんですもの、讀めるもんですか。

町子。(うなづきながらその紙片をうけ取つて讀む。) わたしこれから鳥渡出て來ようかしら。(また躊躇する。) お父さんは家にいらつしやるの。

おとく。はい。大崎さんと吉田さんがおいでになつてゐます。

町子。さう。(また考へながら再びその紙片をよみ返す。) ねえ、おとく。遠山さんはこのごろ公園の待合へ行くといふのを知つてゐて……。

おとく。(曖昧に。) そんなこと存じませんわ。

町子。(疑ふやうに。) ほんたうに知らないの。ねえ、後生だから隱さないでさ。え、知らないの。遠山さんは淺草公園の光子とかいふ藝妓にお馴染があるといふぢやないか。(すり寄る。) え、ほんたうに知らないの。

おとく。存じませんわ。

町子。それから公園の歌劇の女優を連れて、どこへか行つたこともあるつて……。そんなことも知らないの。

おとく。知りませんわ。

町子。(じれる。) 隱さないでさ。まつたく知らないの。

おとく。(迷惑さうに。) まつたく知りませんわ。

町子。でも、遠山さんはわたしのゐない時にたびたびたづねて來て、おまへと大變に仲よく話してゐるぢやないか。

おとく。あら、お孃さん。

町子。お前、遠山さんに口止めされてゐるんぢやないの。(睨む。) それでなければおまへも遠山さんとどこへか一緒に行つたことがあるんぢやないの。

おとく。あら。

町子。遠山さんは浮氣者だから何とも云へないわ。男がよくつて、おまけに財産家の息子だから、誰でも引つかゝるんだわ。

おとく。でも、わたしがそんなことを……。

町子。どうだか知れないわ。

おとく。(困つた顏をして。) お孃さん。

町子。いゝえ、屹とさうに相違ないわ。わたし、お父さんにいつけて遣るからいゝ。

おとく。(すこし顏を赤くして。) 譃です。譃ですよ、お孃さん。わたしが何で遠山さんと……。そんなことがあるもんですか。

町子。知りませんよ。(意地わるさうに。) よござんすか、お父さんにさう云ひますよ。

おとく。だつて、なんにも覺えのないことですもの。(少しく聲をうるませる。) お孃さん、

そりやあ無理ですわ。

町子。どうせ無理ですよ。わたしはこんな我儘者の憎まれものなんですから。（罵るやうに。）けれども、ほんたうに遠山さんも遠山さんだわ。なぜわたしにこんなに氣を揉ませるんだらうねえ。

おとく。その手紙になんと書いてあるんです。

町子。なんにも書いてありやしないわ。ゆうべも人に待惚けを食はして、その云譯だわ。さうして、學校から歸つたら、すぐにいつものところへ來てくれつて……。もう止さう、よしませう。あんまり憎らしいから、今日はこつちで待惚けを食はして遣る方がいゝわ。ねえ、おとく。

おとく。（曖昧に。）さうですね。

町子。ねえ、その方がいゝだらう。ほんたうにあんな憎らしい人つたらありやしない。

（門内より町子の父善隆、五十に近き僧、ふだん着のまゝにて出づ。）

善隆。はてな。こゝへ大崎さんや吉田さんは見えなかつたかな。

町子。いゝえ。（紙片をふところに押込む。）

善隆。來なかつたか。

おとく。どなたもお見えになりません。

善隆。では、墓地の方へでも行つたのかな。（すぐに引返して去る。）

町子。（見送る。）お父さんは何をそはそはしてゐるんだらう。大崎さんと吉田さんが來て、また墓地のことで悶着してゐるんぢやないかしら。

おとく。そんなことかも知れません。墓地を縮めることは、檀家の人達のうちにも大分面倒をいふ人があるさうですから。

町子。（不滿らしく。）だつて、仕方がないわ。無駄な墓地を廣く持つてゐるよりも、出來るだけ狹くしてしまつて、その空地を相當の値段で賣る方がいゝわ。こゝらだつて一坪百圓以上の相場だといふから、百坪賣つても一萬圓からになるものを、たゞ明けて置くのはほんたうに無駄なことだわ。勿論、それには方々のお墓をなんとか始末しなければならないけれど、どこか隅の方へ一緒に改葬してしまへばいゝぢやないか。檀家の人達もそれをぐづぐづ云ふなら、ふだんからそのやうに相當の附屆けをして、寺の經濟が立派に行き立つやうにして置いてくれるがいゝわ。この物價の高いのに、ふだんは碌々構つてくれないで、こつちで墓地を整理するといへば、なんとか彼とか理窟をつけて邪魔をしようとする。それぢや寺の人間はどうして生きて行かれるんだらう。檀家の人たちも隨分わからずやの手前勝手だわねえ。

おとく。檀家の人達さへ承知すれば、すぐにお賣りになるんでせうか。

町子。承知しなくつても、構はずに賣る方がいいわ。お父さんはあんな風でゐながら、やつぱり檀家に氣がねをしてゐるから、ほんたうに焦れつたくてならないのよ。實際の話がここで墓地を整理して、いくらか纏まつたお金をこしらへて置いて貰はなければ、わたし達も安心出來ないわ。

おとく。（やはり曖昧に。）さうでございますねえ。

町子。さうだとも。死んだものよりも生きてゐる者の方が大切ぢやないか。おまへはさう思はないの。

おとく。そりやさうですけれど……。

町子。さう思つたら、おまへからもお父さんにすゝめておくれよ。おまへの云ふことなら、お父さん屹と肯くわ。

おとく。あら。（又もや顏を赤くする。）

（門内より大崎は六十前後、吉田は四十前

後、いづれも商人らしき風俗にて出づ。
あとより善隆も出づ。）

善隆。（追ひ縋るやうに。）まあ、お待ちください。もう一度御相談をいたしたいと思ひますから。

大崎。（冷やかに。）併しあれだけの墓地を賣るといふことになると、ほかの檀家の者がなかなか素直に承知する筈がありませんからね。

善隆。それは御もつともです。それですから、今も色々と御相談をいたしたやうな譯ですが、どうしてもいけますまいか。

大崎。吉田さん、どうです。

吉田。さうですね。

（二人は顔を見あはせて返事に澁つてゐる。善隆は町子とおとくに眼で知らすれば、町子とおとくは遠慮して一先づ花屋の店に入る。）

善隆。（催促するやうに。）いかゞでせうな。ほかの檀家の者が彼れ是れ云つたところで、つまりあなた方が御承知くだされば何とでも解決は付くと思ひます。御承知の通り、あの墓地をぎり〳〵一杯に整理すれば、二百五十坪以上、あるひは三百坪ぐらゐの地所は取れるだらうと思ひますから、坪七八十圓見當としても先づ二萬圓以上にはなるわけです。いや、近所迷惑の工場などを建てさせるのではありません、やはり普通の宅地にする筈で……。

吉田。普通の宅地にするんですね。

善隆。さうです、さうです。なにしろ家屋拂底で住宅難の聲がしきりに聞えますので、華族や富豪連も競つてその庭園などを解放する時代でございますから、いかに寺とは申しながら東京市内に廣い墓地を所有してゐるといふことは、どうも宜しくないやうにも存じます。この際、不用の墓地を整理して宅地にいたすと云ふことも、一種の社會奉仕でございますから。

大崎。社會奉仕……。（やはり冷やかに。）このごろは頻りにそんなことが流行しますね。併しこゝの墓地の一部を解放すると、そこへ何か料理屋のやうなものが出來るのだといふ噂ですが、まつたくそんなものが出來るのでせうか。

善隆。この地所を買ひたいと望んでゐるものは、こゝへ料理屋とかカフヱーとか云ふやうなものを建てさせて、土地の繁榮を計らうといふ計畫ださうです。（云ひかけて少し躊躇する。）實は、わたくしも寺の近所へそんなものが建てられるのは少々迷惑だとは存じましたが、それが土地の發展にもなることだと云はれてみますと、どうも斷るわけにも行かないので……。

吉田。（笑ひながら。）そこが例の社會奉仕ですね。

善隆。まあ、まあ、さういふわけで、たうとう承知するやうになつたのですが、何分にも檀家の方々の御諒解を得て置きませんと、後日に又いろ〳〵の問題が起りますからな。ことに檀家總代の中でも最も有力のあなた方に、よく其事情を諒解して置いて頂きたいと存じてゐるのです。なに、あなた方さへ確かに御承諾くだされば、ほかの檀家の人達にはわたくしの方からそれ〴〵に御相談をいたしましても宜しいのです。なにしろ買主の方でもひどく急いで居りまして、毎日のやうにまだか〳〵と催促にまゐりますので、わたくしも板挾みになつて、まことに何うも困つてをります。

大崎。（再び吉田を見かへる。）ねえ、吉田さん。どうでせう。この寺が郡部へでも移轉して、全部改葬といふのなら格別ですが、寺はこの

まゝで、その墓地の一部だけを分割して賣るといふことになると、社會奉仕だけでは濟みさうもありませんね。あれだけの墓地には隨分澤山の墓があります。たとひ其中には無縁の佛があるとしても、あれだけのものを皆んなどこかの隅へ投り込んでしまつて、そのあとへ料理屋やカフェーを建てる。そのうちには新開地の許可を得て、藝者屋でも出來るかも知れない。（苦笑する。）それではどうも檀家の人達も素直には承知しまいと思ふんです。第一、わたしにしてからが、すぐには贊成出來かねますからね。

吉田。さうですよ。それもお寺の方で何か今すぐ纏まつた金でもいると云ふやうな問題でもあれば格別ですけれど……。差當つて別にそれほどの事もないやうですから……。

善隆。いや、御覽でもありませうが、本堂の屋根がもう大破に及んでをります。屋根ばかりではありません、床も縁側も襖も障子も……。それを殘らず修繕いたすには、よほどの費用がかゝるだらうと存じます。と云つて、當節柄のことですから、檀家の方々に御迷惑をかけるのも心苦しうございます。

二人。むゝ。（考へてゐる。）

善隆。くどくも申す通り、今度の件につきましては、決してあなた方に御迷惑はかけません。唯あなた方が承認して下すつたといふことになれば、他の檀家へお話いたすにも非常に好都合ですから、どうか其邊の事情をお察し下すつて、まげて御承認を願はれますまいか。いかゞでせうな。

吉田。一體今度のことは、買主が直接の交渉ですか、それとも仲介者のやうな者があるんですか。

善隆。初めから買主が直接に申込んで來たのですから、周旋料のやうなものは一文もいらないのです。

吉田。賣つた金は全部こつちの手に這入るわけなんですね。

善隆。左樣、左樣、その通りです。

吉田。二萬圓以上……。（かんがへる。）それで墓地の整理や本堂の修繕が出來れば好いわけですが……。併しどうも……。（また考へる。）ねえ、大崎さん。わたし達ばかりでは何とも御挨拶は出來ませんね。

大崎。（冷やかに。）どうしても檀家の重立つた人達と、もう一度相談した上でなければ、はつきりした御返事は出來ませんよ。わたしは年寄だから時代おくれと云はれるかも知れないが、有縁にしろ、無縁にしろ、ほとけは佛で大切にしなければなるまいと思ふ。死んだ者はどうでもいゝと云ふので、鋤や鍬でむやみに人間の骸骨を掘つくり返して、芥溜のやうなところへどし／＼投り込むのは、どうも人情でないやうに思はれてならない。いや、まあ、いつまで云つてゐても際限のないことですから、今日はこれで先づ歸るとして、いづれ又あらためて御挨拶に來ることにしようぢやありませんか。

吉田。さうですね。（善隆に。）では、わたし達の方でも考へますから、あなたの方でももう一度よくお考へください。

善隆。（よんどころなく。）はい。なにぶんお考へをねがひます。

大崎。では、ごめん下さい。

吉田。どうもお邪魔をいたしました。（ふたりは挨拶して上の方へ行きかゝる。）

善隆。あ、吉田さん。（吉田は戻つて來る。大崎は構はずに去る。）

吉田。なんです。

善隆。（小聲で。）あの、あなたは今晩お宅においでせうか。

吉田。（少しかんがへて。）はあ、宅に居ります。

善隆。（大崎のうしろ影を窺ひながら。）ひよつとすると、七時か八時頃にお邪魔に出るかも知れません。

吉田。（おなじく小聲で。）はあ、お待ち申してゐます。（云ひすてゝ去る。）

（花屋の店より町子出づ。）

町子。お父さん。あの人達、隨分頑固ね。

善隆。（意味ありげの薄笑ひ。）なに、さうでもない。大崎さんは兎もかくも、吉田さんの方は何も彼もちやんと判つてゐながら、まあ一應はあんなことを云つてみるのさ。あの人の家へ今夜たづねて行つて、膝ぐみでよく話せば、きつと呑み込んでくれるに相違ない。

（袂から卷煙草を出す。）おい、おい。

おとく。はい。（店から出て來る。）

善隆。これに火をつけて來てくれないか。

（おとくは卷煙草をうけ取りて店に入る。）

町子。吉田さんは屹と承知するでせうか。

善隆。むゝ、承知する。わたしが屹と承知させてみせる。なに、周旋人に五分の禮金を拂ふと思へばいゝのだ。

町子。だつて、あの人に周旋して貰ふんぢやないでせう。

善隆。勿論周旋して貰ふんぢやないが、まあそれと同じやうに、五分ぐらゐの禮金をつかませることにすれば、吉田はすぐに承知するよ。いや、五分には及ばない。三分ぐらゐでも折合ふかも知れない。（笑ふ。）はゝ、あの男の腹はちやんと讀めてゐるのだ。

町子。隨分ずるい人だわねえ。

（おとくは卷煙草に火をつけて持つて出づ。善隆は無言にて受取る。町子は眼で笑ひながら、二人をながめてゐる。）

善隆。（煙を伸ぐ。）いゝ天氣だな。空はすつかり秋らしくなつた。

おとく。ほんたうに靜かな日でございますね。

町子。（堪らないやうに。）はゝゝゝゝゝゝ。

（町子はハンカチーフで口を押へながら足早に門内に入る。おとくは極りが惡さうに見送つてゐる。）

善隆。（苦笑する。）あいつも仕樣のない奴だ。（おとくのそばに寄る。）おまへにもからかふか。

おとく。（小聲で。）えゝ。

善隆。まあ、かまはずに置け。お轉婆で、我儘で、始末にをへない奴だ。年はおまへよりも上だが、まだ學校へ行つてゐるだけに、いから子供だからな。あれでも色氣が出たら、些とはおとなしくなるだらう。

おとく。（思はず笑ひ出さうとして、あわてゝ袂で口を押へる。）さうでございませうね。

善隆。（見咎める。）なにが可笑しい、何を笑ふのだ。（おなじく笑ひながら。）町子はお轉婆だが、おまへのやうな浮氣者ぢやないぞ。

おとく、あら。

善隆。さうでないといふ證據があるかな。（おとくの肩をたゝく。）

おとく。でも、あんまりですわ。

善隆。はゝゝゝゝゝ。（笑ひかけて氣がつく。）時に阿母さんはどうした。

おとく。本所の親類へまゐりました。

善隆。道理で、さつきから見えないと思つた。さて、おとく。

おとく。はい。

善隆。だん〳〵冬が近くなつたからな。おまへには襟卷を買つてやる。しかし町子とお揃ひだと又面倒だからな。町子のより少し廉いのを買つてやるから、それでまあ我慢して置けよ。いゝか。

おとく。(おとなしく。)ありがたうございます。

善隆。町子と違つて、おまへは素直だからな。はゝゝゝゝ。

(門内にて鴉の鳴く聲がする。)

おとく。見かへる。あら。鴉がまた來ました。

善隆。柿が赤くなると油斷ができない。叱つ、叱つ。

おとく。叱つ、叱つ。

(鴉はつゞけて鳴く。)

善隆。いま〳〵しい鴉めだ。そこらに竹竿があるだらう。

(善隆は尻を引つからげて、店先に立てかけたる竹竿を把り、柿の木の鴉を逐ひながら門内に入る。やがて鴉の聲やむ。善隆は竿を持ちて再び出づ。)

善隆。毎年のことだが、秋になるとうるさいな。

おとく。鴉が毎日狙ひに來るので困ります。

善隆。柿一つでも鴉なぞに取られて堪るものか。いや、鴉ばかりぢやない。子供にも盗まれないやうにしろ。こゝらの子供は育ちが悪いからな。(竹竿をおとくに渡す。)

(おとくは竹竿を片附ける。善隆は裾をおろす。)

善隆。おとく。

おとく。はい。(門前に出る。)

善隆。さつきからさう思つてゐたのだが、あの車はなんだ。あれは犬殺しの箱車ぢやないか。あんなものをなぜ門の前に置かせるのだ。

おとく。車を置いたまゝで、兄弟ともどこへか行つてしまつたんでございます。

善隆。(舌打ちする。)どうも世話の焼けた奴等だな。こゝの門前は車の置場ではない。まして犬殺しの車なぞは以てのほかだ。慈悲を旨とする寺の門前に、犬殺しの車を置いていくなぞとは、どうも困つた奴等だ。こんなところへ置いて行かれては迷惑する。おい、おまへも手を假してくれ。

おとく。はい、はい。

善隆。その車を隣の塀の前へ押して行くのだ。

おとく。はい、はい。

(善隆は又もや尻をからげ、おとくに手傳はせて、犬殺しの箱車を下のかたへ押して行かうとする。門内にて犬の吠ゆる聲、けたゝましくきこゆ。二人はおどろいて見かへれば、犬の聲つゞけて聞ゆ。)

おとく。犬が大變に吠えてゐますね。

善隆。なんだらう。まあ、待て。

(善隆は引返して門内に入らんとする時、納所の隆格、二十一二歳、はげしい權幕で犬殺し長吉の腕を引つ掴んで出づ。)

隆格。貴樣は實に怪しからん奴だ。

善隆。そいつが何うしたのだ。

隆格。こいつが墓地の生垣を押破つて這入つて來たのです。

善隆。(長吉を睨む。)なにか盗みにでも這入つたのか。

長吉。(睨み返すやうに相手の顔を仰ぎみる。)おいらあ泥坊ぢやあねえや。

おとく。ぢやあ、長ちやん。どうしたの。

長吉。おいらがシウマイを喰つて歸つてくると、丁度そこの横町の角でのら犬に逢つたから、ぶち殺してやらうと思つて追つかけると、垣根の下をくゞつてこゝの墓場へ逃げ込んだから、おいらもあとから追つかけて行つたんだ。泥坊ぢやあねえ。

隆格。たとひ泥坊でなくつても、境の生垣を押破つて、寺内の墓地へ無斷で入込むといふことがあるか。いたづら小僧め。

長吉。犬が逃げ込んだから追つかけて來たん

だ。いたづらぢやあねえ。
善隆。いたづらでなくてもやはり惡い。そこにある車はお前のだらう。早く挽いて歸れ。
長吉。(隆格に。)ぢやあ、坊さん。あの犬をこつちへ追ひ出しておくれよ。
隆格。馬鹿をいへ。
長吉。(憤然として。)なにが馬鹿だ。こつちは商賣ぢやあねえか。
善隆。商賣でもいけない。歸れ、歸れ。
おとく。長ちやん。もうお歸りよ。
長吉。だつて、今日はまだ一匹も殺さねえんだもの。(隆格に。)おい、後生だから追ひ出しておくれよ。
隆格。後生を知つてゐるなら、そんなことをするな。
長吉。(じれて舌打ちする。)判らねえ人達だなあ。
(下の方より長吉の兄長太、二十四五歳、やはり棒を持ちて出づ。)
長吉。(見かへる。)おい、兄い。いゝところへ來てくれた。
長太。なんだ、なんだ。
長吉。首環のねえ犬を見付けたから、追つかけて行つてぶち殺さうと思つたら、こゝの人達が邪魔をして仕樣がねえんだ。
長太。その犬はどこにゐる。
長吉。(門内を指さす。)この寺のなかに隱れてゐるんだ。
(犬の吠ゆる聲きこゆ。)
長吉。ほら、鳴き聲がきこえるだらう。
長太。たしかに首環はねえのか。
長吉。(うなづく。)むゝ。
長太。(すゝみ出づ。)もし、旦那方。まことに相濟みませんが、ちよいと御門のなかへ這入らせて頂くわけには參りますまいか。
善隆。折角だが、それは斷る。今もその子に云つたのだが、一旦こゝへ逃げ込んだ犬をおまへ方の手に渡すわけには行かないのだ。
長太。(不滿らしく。)いけませんか。
善隆。いけない。普通の在家とは違つて、こゝは寺だ。その門内へ逃げ込んだ以上、どうもおまへ方に殺させることは出來ない。
(犬の聲又きこゆ。)
長吉。(のび上りて門内をのぞく。)あ、まだ吠えてゐやあがる。
長太。お願ひですから何うかしてくれませんか。御門のなかへ這入つて惡ければ、表へ追ひ出してくれませんか。
善隆。あの犬はなんと鳴いてゐるのか。おまへ達に判るか。
長太。(あざ笑ふ。)冗談云つちやあいけねえ。いくら犬殺しだつて、犬の鳴く聲がわかるものか。おまへさんに判りますかい。
善隆。判る。ちやんと判つてゐる。あの犬は救ひを求めてゐるのだ。たとひ首環のない犬にしろ、のら犬にしろ、生あるものを無慈悲に殺すのを、われ〳〵が默つて見てゐられるものではない。あの犬はわれ〳〵の法衣の袖の下に隱れてゐる。それを救つてやるのは出家の務だ。
長太。(反抗的に。)そつちが法なら、こつちも務だ。わつし等だつて、洒落や慰みに生物を殺してあるくんぢやあねえ。警視廳から立派に野犬撲殺業の鑑札を貰つて、今日の商賣にしてゐるんだ。道樂半分に鐵砲をかついで、雉や鳩をぽん〳〵撃つてあるくのとは譯が違はあ。第一、のら犬をぶち殺して惡いものなら、警視廳で鑑札をくれて置く筈がねえぢやありませんか。寺でも唯の家でも、理窟に變りはねえ。のら犬を隱まつて置くのは、お尋ねものを隱まつて置くやうなものだ。意地の惡いことを云はねえで、早く犬を出しておく

んなさい。

善隆。いや、意地の悪いといふわけではない。なるほど警視廳の鑑札を持つてゐる立派な職業でもあらうが、それはおまへの方でいふ理窟で、慈悲を旨とする我々として見れば、自分の寺内へ逃げ込んだ犬をどうも見殺しにすることは出來ない。わたしの方でも賴むのだ。早く歸つて貰ひたい。

長太。歸れませんね。

隆格。歸れない……。まだおまへには判らないのか、我々は出家であるから、慈悲を旨としなければならない。そこで……。

長太。えゝ、そんな御說敎はどうでもいゝ。何度云つても同じことで、わつし等は洒落や慰みに犬殺しをしてゐるんぢやねえ。一匹殺せば二十錢になる。それで親子兄妹が今日の命をつないでゐるんだ。わつしの家にはレウマチスで體が半分利かねえお袋がゐる。まだ小學校へ通つてゐる妹もゐる。（長吉を指さす。）這奴とわつしと、三度の米を食ふ人間が四人も鼻をそろへてゐるんだ。慈悲も殺生もあるもんか。犬を殺さなければ生きてゐられねえんだから仕方がねえ。犬が大事か、人間が大事か、よく考へて見てくれるがいゝ。

お前さん達がほんたうに慈悲といふことを知つてゐるなら、あの犬をこゝへ追ひ出して來て、わつし等に殺させてくれるのが當りめえだ。犬を見殺しにするのが可哀さうか、人間を見殺しにするのが可哀さうか、おまへさん達にもそのくらゐの理窟は判りさうなもんぢやあねえか。譃だと思ふならこの箱をあけて見せてやる。けふは朝から間が惡くつて、まだ一匹もぶち殺さねえんだ。こんなことぢやあ明日の米も買へねえ。こつちでも賴むから、つまらねえ文句を云はねえで、早くあの犬を追ひ出しておくんなさい。ぐづ〳〵してゐると日が暮れらあ。

長吉。ほんたうだ。下らねえ御說敎みたやうなことを云つてゐねえで、早くあの犬を出しておくれよう。

（長吉は再び門内へ押込まうとするを、隆格は遮る。奧より町子は以前の着物を着かへ、華やかに粧ひて出づ。）

町子。あら、どうしたの。

長吉。（町子に。）おい、姐さん。あの犬をこつちへ追ひ出しておくれよ。

町子。（甚しい侮辱を感じたやうに。）わたし知らないわ。お父さん、なんだつてこんな者を御門の中へ入れようとするの。

善隆。いや、そいつが無理に押込まうとするのだ。（長吉に。）さあ、早く行け、行け。

隆格。行けといふのに……。

（隆格は長吉の腕を捻ぢあげるやうにして表へ突き出す。）

長太。やい、やい。おれの弟をどうするんだ。生臭坊主の木魚野郎め。いくら高慢な面をしやあがつても、手前が十二階下へ每晚ひやかしに行くことはちやんと知つてゐるんだぞ。

長吉。さうだ、さうだ。池のそばのおでん屋でコップ酒を飲んでゐやあがつたのは、あの蛸坊主だ。ざまあ見やがれ。

隆格。（赤面して。）こいつ飛んでもないことをいふ奴だ。貴樣のやうな奴は家宅侵入で巡査に引渡すからさう思へ。

長吉。誰が引渡されるものか。（持つてゐる棒をとり直して身構へする。）

おとく。長ちやん。およしよ。

長太。構ふもんか。あの犬をなぐり付けるつもりで、その梟入の向う脛をかつ拂つてしまへ。

隆格。なんだ。（腕まくりして行かうとする。）

善隆。まあ、よせ、よせ。あんなものを相手に

しても仕方がない。

町子。でも、あんな奴は懲しめのために、巡査に引渡してやる方がいゝわ。

長吉。なにを云やあがるんだ。ハイカラの、色気ちがひの、いかれた蝶め。

おとく。（心配して）長ちゃん、もうおよしといふのに……

長太。止すも止さねえもねえ。犬さへ渡してくれりやあ文句はねえんだ。おい、早く犬を出してくれ。

善隆。えゝ、うるさい、うるさい。貴様達がいくら何と云つても、一旦この寺へ隠れた犬を渡すことは出来ないのだ。

町子。こんな人間には動物愛護といふことが判らないんだから仕方がないわねえ。

隆格。どうで犬殺しなんぞしてゐる奴等ですもの、そんなことが判るものですか。

長太。なんでも勝手に云へ。手前達にほんたうの人間が判つてたまるものか。やい、長吉。こんな亡者どもを相手にしてゐると日が暮れらあ。もう好加減にして行かうぢやねえか。

長吉。ばかばかしいや。行かう、行かう。

（長太と長吉は箱車のそばへ行く。）

隆格。早く行け、行け。二度とこゝの門前へそんな車を挽いて来るなよ。

長吉。大きにお世話だ。やい、づくにふ。今度十二階下で出つくはした時にやあ、だしぬけにこれで撲り付けるから、頭に鉢巻をして待つてゐろ。わあい、赤い顔をしてゐやあがらあ。坊主、入道、蛸坊主。

（長吉はそこらにある小石を拾ひて隆格に投げつけ、笑つて囃しながら下のかたへ逃げてゆく。）

隆格。此奴、怪しからん。

（隆格は當座の立腹に幾分のてれ隠しもまじつて、足音あらく下の方へ追つて行く。）

長太。やい、この坊主、弟に指でも差すと料簡しねえぞ。

（長太も車をすてゝ隆格のあとを追つてゆく。）

町子。ほんたうに呆れた奴だわねえ。

善隆。まつたく仕様のない奴等だ。（気が付いて尻からげの裾をおろす。）いや、それでもまあ善いことをしたよ。わたし達のおかげで一匹の犬の命が助かつたのだからな。

町子。助けられた犬も幸福だし、助けたわたし達も幸福ですわ。

おとく。（心から感じたやうに。）まつたく善いことをなさいましたわねえ。

善隆。あいつ等がなんと云はうとも、慈悲善根をすると好い心持だ。（俄に気がついたやうに。）時に町子、おまへはそんななりをして、これからどこへ出かけるのだ。

町子。上野の倉橋さんのところへ行つて来るんです。

善隆。むゝ。學校のお友達のところへ行くのか。

町子。ピアノのお浚ひがある筈ですから。今夜は遅くなるかも知れませんわ。

善隆。遅くなるやうなら隆格を迎ひに遣らうか。

町子。（あわてゝ。）いゝえ、それには及びませんわ。お父さんも今夜お出かけになるんぢやありませんか。

善隆。むゝ。吉田さんのところへ行かなければならない。いや、その前に少し調べて置くことがあつたのを、今の犬騒ぎですつかり忘れてしまつた。

（善隆は足早に門内に入る。）

町子。仕様がないわねえ。あの車をおつぽりそ

こへ置いて行つて‥‥。

おとく。隆格さんはどこへ行つたんでせう。

町子。（心付いたやうに。）あのね。お父さんが隆格を迎ひによこすと云つても、わたしがそれには及ばないと云つたと云つて、屹と遣さないやうにしてお呉れよ。いゝかい、頼みますよ。

おとく。はい。

町子。今も聽いてゐた通り、今夜はお友達の金澤さんのところへ遊びに行くつもりになつてゐるんだからね。

おとく。（微笑む。）やつぱりいつもの所へいらつしやるんですか。

町子。（おなじく微笑む。）あんまり憎らしいから待惚けを食はしてやらうと思つたんだけれど、それも可哀さうだからねえ。いゝかい。お父さんには默つてゐておくれよ。

（下の方より隆格は汗をふきながら出づ。）

町子。あの二人はどうして‥‥。

隆格。巡査に引渡してやらうと思つたのですが、しきりにあやまるから堪忍してやりましたよ。

（隆格の少しあとより長吉出で、この對話を聽いてゐる。）

町子。（不滿らしく。）あやまつたばかりで堪忍して遣つたの。

隆格。でも、あんな奴等を相手にしても仕樣がありません。犬さへ助けてやれば、それでいいのですから。

（云ひかけてうしろを見かへり、長吉と顏を見あはせて隆格は屹と彼を睨みしが、そのまゝ足早に門内に入る。）

長吉。（笑ひながら進み出づ。）譃だぞ、譃だぞ。誰があんな梟入にあやまるもんか。あの坊主。あべこべに兄きに嚇かされて、這々の體で逃げて來やがつたんだ。

（下の方より長太出づ。）

長太。はゝ、意氣地のねえ坊主だ。眞劍におれと命の取り遣りをするかと云つたら、あいつ青くなつて、ふるへ上がつて逃げて行きやあがつた。はゝゝゝゝ。さあ、長吉。行かう。

長吉。こんな間のわるい日はねえな。

長太。まつたくだ。これも厄日で仕方がねえや。

長吉。歸りに又、日なしのお婆さんのところへ寄つて行くのかい。

長太。さうでもしなけりやあ凌げねえ。

（ふたりは箱車のそばへゆく。門内にて又もや犬の聲高くきこゆ。）

長吉。まだ吠えてゐやあがる。

長太。いまいましい畜生だ。人をじらすやうに無暗に吠えやあがる。

（二人は門内を見かへりながら車を挽き出さうとする。犬の聲つゞけてきこゆ。）

町子。大變吠えるわねえ。

おとく。（不安らしく。）どうしたんでせうねえ。

（門内より隆格は高箒を持ちて走り出づ。）

隆格。氣をおつけなさい。あの犬が今お住持を咬んだのです。

町子。あら、お父さんが犬に咬まれたの。

おとく。まあ。

（おとくはあわてゝ門内に走り入る。町子もつゞいて行かうとして、又立ちどまる。）

町子。でも、怖いわねえ。狂犬ぢやないかしら。

隆格。さうかも知れません。だしぬけにお住持の足に咬み付いて、それから本堂の縁の下へ逃げ込んだらしいのです。（長太等を見て。）

修禪寺物語

一

明治四十一年の秋に、わたしは伊豆の修善寺温泉へ行つて、新井旅館に滯在してゐた。その當時の日記によると、わたしは九月二十七日の午前八時頃、山の松茸の秋らしい香に醉ひながら朝飯を濟ませて、それからすぐに宿を出て、源氏の將軍頼家の墓に詣つたのであつた。日記には斯う書いてある。

――桂橋を渡り、旅館のあひだを過ぎ、射的場の間などをぬけて、塔の峯の麓に出づ。ところどころに石段あれど、路はきはめて平坦なり。雜木しげりて薄暗き竹藪あり。槿の花の白くさける垣に沿うて左に曲れば、正面に經堂あり。頼家の佛果圓滿を願ふがために、母政子の尼が建立せるものと傳へらる。鎌倉の覇業を永遠に維持する大目的の前には、あはれに甲斐なき我子をも犧牲にしたれども、さすがに子は可愛きものにてありけるよと推量れば、平生は蟲の好かぬ驕慢の尼將軍その人に對しても、一種の同情を禁め得ざりき。

更に左へ折れて小高き丘にのぼれば、高さ五尺にあまる楕圓形の大石に征夷大將軍左源頼家尊靈と刻み、煤びたる堂の軒には笹龍膽の紋を染めたる紫の古き幕を張り渡せり。堂の廣さは二坪を越ゆまじく、修禪寺の方をみおろして立てり。あたりには杉楓のたぐひ枝をかはして生ひたり。秋の日影はつめたく、いづこにか蟬の聲かれぐに聞ゆ。餘りにすさまじき有樣よとは思へども、これに比ぶれば範頼の墓は更に甚だしくあれまさりぬ。叔父御よりも甥の殿こそまだしもの果報ありけれと思ひつゝ、香を手向けて去る。入れ違ひに來りて磬を打つ參詣者あり。

頼家の墓所、予は單に塔の峯の麓とのみ記憶してゐたりしが、こゝにて聞けば、このところを指月ケ岡といふとぞ。頼家討たれし後、母の尼こゝへ來り弔ひて、空ゆく月を打仰ぎつゝ、『月は變らぬものを、かはり果てたるは我子の上よ。』と月を指さして泣きければ、人々もおなじ涙に暮れ、爾來こゝを呼んで指月ケ岡といふとぞ。蕭條たる寒村の秋の夕、幸なき我子の墓前に立ちて、一代の女將軍が月下に泣けるさまを想ひ見よ。まことに畫くべく歌ふべき悲劇にあらずや。彼女が斯くまでに涙を呑んで經營したる覇業も、源氏より北條氏に移りて、北條もまた亡びたり。これを思へば、秀頼と相抱いて城と共にほろびたる淀君こそ、人の母としては却つて幸なりけれ。感多くして立つこと多時。――

わたしはその晩、旅館の電燈の下で桂川の水の音を聽きながら、頼家の最期を戲曲に編まうと企てた。その明くる日、修禪寺の寶物に頼家の假面があるといふことを宿の主人から聞いて、すぐに修禪寺へ行つた。假面の作人は誰だか判らなかつた。戲曲の腹案はこゝにゐる間に大抵纏まつて、東京へ歸つてから筆を執つた。あくる年の春に脱稿したのが『修禪寺物語』で、それが初めて明治座に上場されたのは明治四

十四年の五月であつた。書きおろし以來、しばしば市川左團次君によつて上演されて、松莚十種の一つに數へられてゐる。

それから十年目で、今年の正月、わたしは重ねて修善寺へ行つた。十九日の午後、寒い風の吹く日に桂川を渡つて、頼家の墓に詣でると、あたりの光景はよほど變つてゐた。その晩、わたしはこんなことを書いて讀賣新聞社へ送つた。

——修善寺の宿に着くと、あくる日はすぐに指月ケ岡にのぼつて、頼家の墓に參詣した。わたしの戯曲『修禪寺物語』は十年前の秋、この古い墓の前に額づいた時に、わたしの頭に湧き出した產物である。この墓と會津の白虎隊の墓とは、わたしに取つて思ひ出が多い。その後にわたしはどう變つたか、自分にはよく判らないが、頼家公の墓はよほど變つてゐた。

その當時の記憶によると、岡の裾には鰻屋が一軒あつたばかりで、岡の周圍には殆ど人家が見えなかつた。墓は小さい堂のなかに祀られて、堂の軒には笹龍膽の紋を染めた紫の古びた幕が張り渡されてゐて、その紫の褪めかゝつた色がいかにも品の好い、而も寂しい、さながら源氏の若い將軍の運命を象徴するかのやうに見えたのが、今もあり〱とわたしの眼に殘つてゐる。ところが、今度かさねて來て見ると、堂はいつの間にか取拂はれてしまつて、懷かしい紫の色はもう尋ねる便宜もなかつた。なんの掩ひを有たない古い墓は、新しい大きい石の柱に圍まれてゐた。色々の新しい建物が岡の中腹まで犇々と押詰めて來て、その中には遊藝稽古所などといふ看板も見えた。

頼家公の墳墓の領域がだん〱に狹まつてゆくのは、町がだん〱に發展してゆく標である。紫の古い色を懷かしがるわたしは、町の運命に何の交渉を有たない、一個の旅人に過ぎない。十年前にくらべると、町は著しく榮えて來た。多くの旅館は新築したのもある。建增したのもある。溫泉俱樂部も出來た、劇場も出來た。かうして年ごとに繁昌してゆく此町のまん中にさまよつて、昔のむらさきを忍んでゐる一個の貧しい旅人のあることを、町の人達は決して眼にも留めないであらう。わたしは冷たい墓とむかひ合つて少時默つて立つてゐた。

それでも墓の前には三束の線香が供へられて、その消えかゝつた灰が霜柱のあつい土の上に薄白く零れてゐた。日あたりが惡いので、黑い落葉がそこらに凍り着いてゐた。墓を拜して歸らうとして不圖みかへると、入口の古い柱のそばに一個の箱が立つてゐた。箱の正面には『將軍源頼家公おみくじ』と書いてあつて、その傍の小さい穴の口には『一錢銅貨を入れると出ます』と書き添へてあつた。

源氏の將軍が豫言者であつたか、賣卜者であつたか、わたしは知らない。併しこの町の人達は、果して頼家公を靈なるものとして、斯ういふものを設けたのであらうか、或は湯治客の一種の慰みとして設けたのであらうか。わたしは試みに一錢銅貨を入れてみると、から〱といふ音がして、下の口から小さく封じた活版刷の御神籤が出た。あけて見ると、第五番凶とあつた。わたしはそれが當然だと思つた。將軍に若し靈あらば、どの御神籤にもみな凶が出るに相違ないと思つた。——

こんな苦い心持を懐きながらも、半月ばかり滞在してゐる間、毎日散歩に出るたびに、落葉と霜柱を踏みながらわたしは屢頼家の墓に参詣した。さうして、自分の古い作の修禪寺物語について考へた。香の烟につゝまれながら静かにその墓に向つてゐると、史實と空想とが一つに縺れ合つて、七百年前の鎌倉の世界がまぼろしのやうにわたしの眼の前に開かれた。

二

第一の幻影は、うち綾の小袿を着た二十前後の若い局風で、すぐれて美しい顔のどこやらに暗い影を宿してゐる女であつた。

『あ、あの烟は……。』

若い局は鎌倉御所の欄干に身を凭せて、あさ黄色に暮れてゆく大空の下に、烏賊が墨を噴くやうに真黒に噴きあがる烟の末を眺めた。建仁三年の秋も終りに近い九月の二日で、もう肌寒い夕の風はうす紫の小袿の廣い袂を吹きかへして、若い局の豊かな鬢の毛を微かになびかせた。

『堀藤次どの、火急にお目通りを願ひまする。』

侍女に取次がせて、ひとりの武士が歪んだ烏帽子の緒を締め直しながら、廻廊づたひに急いで來た。彼は年のころ五十一二で、うすい髭に掩はれた上唇が古い刀疵で兎口のやうに醜く裂けてゐる、頑丈な骨太の男であつた。局の顔をみて、碌々に會釋するひまも無しに、あわてた聲が彼の裂けた唇から迸走つた。

『お局、御覧ぜられたか。あの火の手を……。』

『北の御所の方角かとも見ましたが、なんぞの手過失でも……。』

『いや。』と、老いたる武士は頭を忙がしさうに掉つた。『過失ではござらぬ。不意に討手が押寄せて、北の御所は焼亡。あれ、あのやうな物の響きがお耳には入りませぬか。』

物音は疾うに耳にひゞいてゐる。それを怪しんで、局は今こゝへ物見に出たのであつた。北の御所へ討手——その注進を聴いて、局は取亂すほどに驚いた。

『討手は誰——北條殿か。』

『尼御臺の御下知をうけたまはつて、北條殿が惣大將。小山、結城、畠山、加藤、仁田の人々が一方には比企殿の屋形を取りまき、一方には北の御所に押寄せ、軍は今が最中でござりまする。』

局は身を戦慄かせて聴いてゐたが、忽ち身をひるがへして奥の方へ駈け出さうとした。その袂をとらへる間がないので、武士は無禮をかへりみずに、相手が長く引いてゆく紅の袴の裾を片足で緊と踏み止めた。

『先づしばらく。あの通りの猛火のなかへ女儀の身が、何として、なんとして……。』

『北の御所には若君が御座あるを忘れたか。放しや、放さぬか。』と、局は狂ふやうに身を藻掻いた。

それは武士もよく知つてゐるが、今この場合、局をおめ／＼と出して遣つて、若し何かの過失があつては自分の役目が立たない。彼はどうでも局を取鎮めなければならなかつた。老いたる武士は紅の袴を踏んだまゝで、狂ひ立つ局を口早に賺しなだめた。たとひ御所内にいかやうの騒動が起らうとも、若君に對して非禮を働く者があらうとも思はれない。何者か必ず守護して安泰の場所へ移しまゐらせたに相違ない。比企殿の御運は兎もあれ、若君の御身の上に障つて御別條はない。くれ／＼もお騒ぎなさるなと、彼は遮つて諫めた。

かう云つてゐる中に、外の響きはいよ／＼閙がしくなつて、太刀打の音さへも手に取るやう

に聞えた。うづ巻く煙のあひだからは火焔の波が高く狂ひあがつて、一旦暮れかゝつた秋の日が何者かの扇に招き返されたやうに、薄暗い空一面が眞紅に染められた。あのおそろしい火の中に生みの若君がゐるかと思ふと、局はもう半狂亂であつた。ひとの諫言などは逆上せた耳には入らなかつた。焦れて、躁つて、相手を突き退けて、彼女は遮二無二駆け出さうとすると、うしろから不意に癇の高い聲がきこえた。

『若狹。待て。』

それは將軍賴家の聲であつた。狂つてゐる女も、支へてゐる其家來も、さすがに形をあらためて喘ぐ呼吸をしばらく鎭めると、賴家も欄干近くあゆみ出て、眉の上を照らすばかりに輝く火焔の光をぢつと眺めてゐた。水のやうに蒼い將軍の顏も、雪のやうに白い將軍の小袖も、その火に焙られて薄紅く見えた。

『憎い奴め。』と、賴家は目眦を裂いて唯一言云つた。さうして、無言で局の手を取つて、奥の間へつか／＼と入つてしまつた。將軍につかまれた手を振拂ふ術もないので、局も無言でおめ／＼と引かれて行つた。

そのあとに附いて行かうか、それとも一先づ武者溜へ退らうかと、武士はすこし思案に迷つたらしく、燃え盛る火をいたづらに仰ぎながら一つ所にたゝずんでゐると、二十歳ばかりの若武士が彼のうしろを駈抜けながら聲をかけた。

『堀殿。一大事を御存じか。』

『おゝ、知つてゐる。』

なにも彼も知つてゐながら、彼は局に向つてあからさまに云ひ得なかつたのである。若狹局は比企判官能員の娘で、十五の年から源氏の將軍賴家の側に召出されて、一幡丸といふ若君を儲けた。順序から云へば、これが鎌倉三代將軍の季生である。その祖父たる能員の一門が外戚の威勢をふるふのは自然の勢ひで、それが北條の一門と衝突を來すのもまた避け難い自然の勢ひであつた。云ふまでもなく、北條時政の娘の政子は賴朝の御臺所で、賴朝の歿後は尼御臺と仰がれて、鎌倉幕府の女主人公となつてゐる。それに連なる北條の一門が外戚の威勢をたのんで、二代の將軍賴家を有る甲斐無しにあつかつてゐることが、年の若い賴家に取つては堪へ切れない不滿の種であつた。血を引いた祖父と孫とでありながら、時政と賴家とのあひだには何の親みもなかつた。それ等の事情は歴史家の筆にも屢々上つて、何人にも餘り詳しく知られ過ぎてゐる。

わたしも今こゝでそれ等の史實を[illegible]へてゐる餘裕がない。わたしの[illegible]は[illegible]の動くに連れて忙しく走つてゆく。

將軍の御座所とも見るべき廣い座敷には、將軍賴家と若狹局と、若い武士と老いたる武士とが、呼吸もしないほどに鎭まり返つて向ひ合つてゐた。老いたる武士は堀藤次親家で、若い武士は下田五郎景安であることは下の會話でだんだんに判つた。

二人の家來が代る／＼に報告で、けふの驚くべき出來事がことごとく賴家の耳に傳へられた。局の父の比企能員は藥師の尊像の供養といつはつて北條の屋形へおびき寄せられて、何の苦もなく討たれてしまつた。唯つた一人あやふい所を逃れた家來が比企が谷の屋形へ歸つて注進すると、比企の子供や家來どもは驚き憤つて、すぐに若君の一幡丸を守護して北の御所に籠つた。つゞいて北條方の討手が押寄せた。いくさは申の刻（午後四時）から始まつたが、酉の刻（午後六時）に近いころには、人數の少い御所方はだん／＼に討[illegible]られて、討死も出來た。手負も出來た。防ぎ矢を射るもの幾人かを殘して、その餘の者はみな内へ引返して若君の前で一度に自害した。屍の顏を隱すために、最後の

際に火をかけるのが此當時の習であるので、彼等の自害と同時に御所は一面の火となつた。若君一幡丸もその火焔のなかに飛び込んで、今年六歳の小さい骨を灰にしてしまつた。

半日のうちに父を討たれ、わが子を亡つた局の悲嘆は云ふまでもなかつたが、頼家の憤怒は其以上であつた。舅の能員を討たせたのも口惜しかつた。わが子を殺されたのも無論に悲しかつた。併しそれ以上に彼を憤激させたのは、將軍としての我が威嚴を滅茶苦茶に蹂躙られたと云ふことであつた。たとひ柔弱であらうとも、自分は鎌倉二代の將軍である。その將軍には一言の伺ひも立てずして、みだりに家來を誅戮する。それすら自分を蔑如にした違亂の仕方であるのに、まして能員は自分の舅である。一幡は自分の子で、ゆく〳〵は三代の將軍とも仰がるべき者である。その能員をほろぼし、一幡を殺して、勝鬨をあげてゐる北條の一類は、あまりに人もなげなる振舞である。自分に對して謀叛を企てたも同然である。自分の眼の前で舅をほろぼされ、わが子を殺されては、なみ〳〵の者でも唯おめ〳〵とは見てゐられまい。自分は將軍である。その將軍の權威を彼等は認めないのであらうか、彼等は將軍を恐れないのであらうか。

から考へると、頼家は總身が燒け爛れるほどに腹立たしかつた。彼は火焔の呼吸をついて少時は空を睨みつめてゐたが、やがてその立烏帽子が搖り落ちるばかりに頭をふるはせて、嚙み附くやうに吹鳴つた。

『北條めを誅伐せい。時政も義時も一人も殘さずに討ちほろぼせ。藤次も五郎もすぐに人數をあつめい。予の直書を渡すほどに、それを持參して和田と仁田の一族に召せ。』

血氣の景安はすぐに承はると答へたが、古兵者の親家は返答に躊躇した。上を凌ぐ北條の所爲が非義重々は勿論であるが、北條のうしろには尼御臺といふものが控へてゐる。彼等は尼御臺の下知といふのを頭にいたゞいて、能員誅戮を遂行したのであるから、表向きからいへば彼等は當面の責任者でない。この際、飽までも彼等の責任を問ひ、彼等の非義を責めると云ふことになると、つまりは尼御臺に楯を突く結果になる。尼御臺は將軍の母である。子が母にむかつて楯を突くと云ふことが既に其名儀に於て七分の不利益であるのに、鎌倉中の大小名はことごとく尼御臺の味方である。心からの味方でないまでも、北條の威勢に怖れて頭を擡げ得ないものが多い。和田とても頼みにはならない、仁田はけふの寄手に加はつた者である。たとひ將軍の直書を賜はつても、彼等が進んで將軍に忠節を竭すかどうかは甚だ覺束ないのである。こんな徒を頼みにして、迂濶に大事を思ひ立たれるのは、却つて將軍の御運を縮める結果になりはしまいか。

親家の澁つてゐるのを見て、頼家の癇癖はいよいよ募つた。彼は扇の骨の碎くるばかりに上疊を叩いて又叫んだ。

『藤次、なにを猶豫する。おのれも北條の方人か、但しは北條がおそろしいか。早く行け。』

『は。』とは云つたが、親家はまだ起ちかねてゐた。

『えい、おのれは頼まぬ。五郎、おのれ一人でゆけ。一刻を過さぬうちに人數をあつめて、北條の屋形に押寄せい。彼等の屋形の燒け落つる火を、頼家はこれにて快く見物せうぞ。若し、料紙と硯を持て。』

頼家は顫へる手に筆を把つて、和田と仁田とにあてた直書を書いた。頼家といふ書判まで据ゑられた。もう斯うなつては意見も諫言も無用である。主君と運命を倶にするよりほかはないと健氣に覺悟した親家は、一通の直書を押頂い

てすぐに和田の屋敷へ向つた。景安は仁田の屋敷へ行つた。

あとには陶器のやうな顔をした若い男と女とが残つた。男は女の手を把つて、再び旧の欄干のほとりに出た。鎌倉山の大空には秋の星が限りなく燦いて、もう焼け落ちてしまつた北の御所の上には、うす白い煙がまだ一面に這ひ拡つてゐた。

『あれを見い。鬼火がや。』

焼け残つた瓦や土塀のあひだから青い火がへいらへらと燃えてゐた。

『あれ、若君が呼んで居りまする。』

『一幡が呼んでゐる。』

『あれ、煙のあひだから小さい手をあげて、わたくしどもを招いて居りまする。』

欄干から飛び降りようとする局の臂は、頼家に緊と掴まれた。

『物に狂ふな。狂ふほどならば頼家が先づ狂ふわ。一幡の仇も、能員の仇も、一時の後にはみな亡ぶる。待て、待て。』

頼家は調子のはづれた声で高く笑つた。

三

一旦消えた二つの幻影が再びわたしの眼の前にあらはれた時には、その世界はまるで變化してゐた。そこは伊豆の三島神社の前で、頼家は美しい輿に乗せられてゐた。あとの輿には若狭局が乗つてゐた。二つの輿のそばには、下田五郎景安とほかに四五人の近習と侍女どもが附いてゐた。

それから少し距れて百人ばかりの武士が左右に分れて控へてゐた。鎧を着てゐる者は一人もなかつたが、彼等は直垂の下に腹巻をしめて、籠手脛当を着けて、弓や長巻を持つてゐた。彼等のうちには險しげな眼を光らせて、将軍の身のまはりをじろ／\と睨め廻してゐるのもあつた。痛々しげな眼をそむけて、麗かに晴れた秋の空を見あげてゐるのもあつた。社頭の大きい杉の梢には旗のやうに白い雲が長く流れてゐた。

このまぼろしの世界が眼に映つた時に、それが普通の社参でないことをわたしの豫備知識がすぐに教へてくれた。将軍頼家は北條誅伐の密謀が脆くも露顕して、鎌倉から伊豆に移されて狩野の庄の修禅寺に押籠められるのであるその途中、伊豆の府にさしかゝつて、三島の社の前を過ぎたので、頼家はこゝにしばらく輿をおろさせて、参拝に半時あまりを費したのである。供のうちに堀藤次親家の老いたる姿の見えないのは、和田の屋敷へ使に行つた帰り途で北條の家来どもに討たれたのである。

かう思つてよく見ると、今年まだ二十三といふ若い将軍の顔は傷ましいほどに蒼ざめて窶れてゐた。若い局の顔にも血の気が失せて、まるで白い蠟で作られた人形のやうにも見えた。治承四年、父の頼朝がまだ蛭が小島に蟄してゐた時に、この御社に参拝して源氏再興の祈願を籠めたことがある。さうして伊豆を討つて出て、鎌倉に覇府を開いたが、その子の頼家は遂人同様の身となつて、鎌倉から逆に伊豆へ送られるのである。若い将軍は神の宝前に額づいて何事を念じてゐたか知らないが、やがて参拝も終つて再び輿に乗らうとする時に、彼はうしろの輿を見かへつて慌しく声をかけた。

『若狭。なんとした。』

家来共もおどろいて眼を遣ると、若狭局は今や輿に乗移らうとして、俄に小膝をついて悩ましげに悶え始めたのであつた。景安は侍女に指図して局を介抱させた。局は胸が塞がるやうに痛むと云つて、鳩尾のあたりを抱へて土に俯伏してしまつた。見送りに出た社人も慌て騒いで、奥へ薬を取りに行つた。

九月もなかばに近い日の白晝であつた。社頭の小川の縁には薄の白い穂が吹くともない秋風に軽く靡いてゐる。その薄の葉を折り敷いて、局の痩せた姿は横へられた。いづれも唯狼狽へてゐるばかりで、捗々しくは介抱も出来ないのであつた。

『こゝらに醫師は住まぬか。』と、頼家は焦れるやうに左右を見かへつた。こゝらに醫師は住まぬといふ頼りない返事を聞いて、彼はいよ〳〵焦れた。

『かうと知らば、鎌倉から典薬の者を召具してまゐらうものを……。さりとは無念ぢや。社司の許には薬の貯へもあらう。早う持て。』

『唯今社人が取りにまゐりました。』と、景安は答へた。

『遅い、遅い。早うせい。』

主人があまりに急かるゝので、景安はすぐに社内へ催促に行つた。警固の武士の群から四十前後の分別らしい男が進んで来て、将軍の前にひざまづいた。それは狩野小次郎行光であつた。

『申上げまする。若狭の御局、不時のおん悩み、御介抱は勿論の儀でござりまするが、これから修禪寺まではまだよほどの路程でござれば、途中で日が暮れましては御難儀。局の御介抱は近習侍女衆に任せられて、上様には御立を……。』

『介抱は近習侍女どもに任せて、予に直ちに立てと云ふか。』

『はあ。』

『若狭を見捨てゝゆけと云ふか。』

『はあ。』と、行光は上眼で将軍の顔色を窺つた。

『忌ぢや。』

頼家の聲が励しいので、行光もしばらく猶豫つた。それを見向きもしないで、頼家は輿を降りて局のそばへ立寄つた。

『若狭、どうぢや。まだ落着かぬか。』

局は微かに首肯くばかりであつた。一日のうちに父をほろぼされ、子を亡つて、悲嘆の積り積つた上に、自分の侍く将軍家は鎌倉を逐はれて押籠めの身となつたのである。人間として堪へられぬ限りの打撃を一度に受けた局の弱い魂は、鎌倉を出る前からもう半分は死んでゐた。その半死半生の魂と身體とを怪しい輿の上に揺られながら、きのふは険しい箱根の峠を越えて来たので、その疲労にいよ〳〵苛まれた彼女の身體は、もう生きるにも生きられなくなつて来た。さらでも細つた魂の緒がもう切れかゝつて来た。彼女は自分が折り敷いてゐる枯薄と同じやうに、こゝで果敢なく折れて倒れるよりほかはなかつた。

秋の日は死にかゝつてゐる女の白い顔をあかあかと照してゐる。それを見つめて頼家も黙つてゐた。修禪寺に女を召連れてゆくと云ふに就いては、殊に比企能員の娘を連れるといふに就いては、北條にも少しく故障があつたのを、局からも押返して願ひ、頼家からも尼御台に訴へて、特に彼女を伴ふことを許されたのであつた。それが途中でこの始末である。かうと知つたらば、いつそ鎌倉に殘してくれば好かつたものをと、頼家も今更悔まれた。彼はどうかして此の惨らしい女の命を繋ぎ留めたかつた、

『若狭、心をたしかに持て。どうぢや。』と、頼家は再び呼んだ。

『上様……。』と、蟲のやうな聲が局の青ざめた唇から出た。『わたくしは所詮……お供はなりませぬ。打捨てゝお出でくださりませ。』

『えゝ、そちまでが行光と同じやうに……。』と、頼家は寧ろ腹立たしさうに云つた。『今この際にそちを捨てゝ……頼家はどこへ行かれうぞ。よく思うても見い。母には疎まるゝ、家来ども

には蝦かるゝ。將軍職は穢はるゝ。鎌倉の屋形は追ひ掃はるゝ。天にも地にも賴家の味方といふは、そちと……こゝにゐる僅かの家來どもばかりぢや。取分けて若狹、そちに離れて……賴家が何とならうぞ。』

彼の聲はだん〳〵に濕んで來た。身にあまる勿體なさと云ふやうに、局は切れ〴〵の呼吸の下から咽ぶやうに云つた。

「添けない御詞……。七年このかたの御恩……。せめては修禪寺までお供して朝夕の御介抱をと存じましたに……却つて逆さまの御介抱を受くる。お詫も……お詫も……。』

あとは擦れてよくも聽き取れないので、賴家は草にひざまづいて耳を寄せた。侍女どもは遠慮して、少し引退つて見てゐると、賴家は食ひ入るやうに眉を顰めながら、幾たびか首肯いてゐた。

「おゝ、未來は……未來は……。それは云ふまでもないことぢや。唯無念なは……征夷大將軍源賴家が側女、若狹局ともあらう者が、匹夫下﨟にも劣つて……犬猫のやうに路草の上に野垂死……。あまりに無殘で口惜しい。鶴が岡八幡に見放されて、鎌倉を追ひ放たれた賴家は、こゝまで流浪うて來て、又もや三島明神にも見放されたか。源氏の家にはいかなる祟がある。賴家は過世にいかなる罪を作つたぞ。』

濕んだ眼を水干の袖に拭つて、賴家は社のかたを屹と睨みつめると、局は力ない手でその袂に取縋つた。

『さりとは怖ろしい。勿體ない。假にも神を恨ませたまふな。たとひ草の上、土の上に命を終らうとも……神の宮居のおん前で死ぬるといふは、せめてもの仕合せ、神のお惠……。ありがたいとこそ思へ、恨めしいとは露塵ほども思ひませぬ。たゞ心殘りは……。』

こゝまで一息に云つて來て、もうその息は續かなくなつた。賴家の袂に引かれるやうに重く、なつたと思ふと、彼女はその袂を摑んだまゝで俯伏してしまつた。景安が先に立つて、社人が藥湯をさゝげて駈け付けたが既う遲かつた。せめてもの心ゆかしに、その藥湯を局の口に銜ませたが、それは末期の水にもならなかつた。局のたましひは將軍よりも先に、修禪寺の旅に上つてゐた。

「局は御臨終ぢや。」と、景安は聲を陰らせて一同に云ひ聞かせた。

侍女どもは聲をあげて泣き出した。近習の直垂の袖も一度にさや〳〵と動いた。行光も烏帽子の緒を締め直して、再びひざまづいた。弓や長卷は地に伏した。

「若狹の亡骸は修禪寺まで一緒に舁いてゆけ。」

と、賴家は輿に乘りながら云つた。

『社頭をお淨めくだされ。』と、行光は社人に會釋して先に立つた。それに連れて一度に立ち上る長卷の白い刃に、秋の日がきら〳〵と光つた。大きい一羽の鳶が杉の上を悠々と舞つてゐた。

景安が指圖して、局の亡骸は輿の上に移された。侍女どもは薄の花を折つて來てその枕もとに插むと、白い穗は力なくそよいで黑い髮の上に亂れた。女どもは皆な顏を掩ひながら輿のあとに附いて行つた。

かうした悲しい慘たらしい出來事の世界かいつまでも續くのをわたしは恐れてゐると、その寂しい秋が忽ち華やかな春に變つた。それが明くる年の三月中旬であることをわたしは直覺した。暖かく晴れた日の光が野にも山にも滿ちてゐた。大きい川の水が石に堰かれて白く流れてゐた。その川端や畑のあひだに、花盛りの八重櫻が遠く近く咲き亂れてゐた。

この櫻の立木を背景にして、賴家と下田五郎

景安の二人が立つてゐた。こゝは修禪寺の門前にながれ落ちる桂川の上流で、二人はこれから川傳ひに奥の院へ參詣する途中であらうとわたしは想像した。賴家も景安も若かつた。而もこの麗かな春の光を浴びてゐる人物としては、彼等の影があまりに寂しいので、わたしは何だか物足らなく感じてゐると、遠い上流の方から更に一つの影があらはれた。縹色に小櫻を染め出した衣を着て、服裝はもとより若狹局と比べ物にもならないが、その匂ひやかな眉附は彼女に些とも劣らないほどの美しい女であつた。

女はもう賴家の前に近づいて來た。

四

水干に立烏帽子を着けて、家來に太刀を持たせてゐるほどの人が、こゝらの山家に幾人も住んでゐよう筈がなかつた。常は奥深く垂籠めてゐて滅多にその姿を見せることが無くても、それが修禪寺におはす鎌倉の貴人であることは、女にも大抵想像されたのであらう。彼女は川端の若草の上にひざまづいて、二人の通り過ぎるのを待つてゐた。

賴家は彼女と瞳を見合ふほどに近づいた。さうして、その瞳は動かない物のやうに据つてしまつた。彼はしばらくその女を見つめてゐたが、やがて景安を見かへつて云つた。

「彼女をこれへ召せ。」

景安に誘はれて、若い女はうや／＼しく將軍の前に出た。賴家のうしろには大きい櫻の木が枝をかざしてゐた。その明るい花の色に照されたやうに、女は顏をうす紅くして跼まつてゐると、賴家はしづかに聲をかけた。

「そちはこのあたりの者か。」

『塔の峯の麓に住んで居りまする。』

山家の育ちといふにも似合はず、彼女は行儀よく答へた。

「これから窟まではよほど遠いか。」

『坂東道ではまだ三里ほどもございませうか。』

『こゝらの者とあれば、そちも窟詣をいたしたことがあるか。』

『唯今も參詣いたしてまゐりました。』

賴家の問に應じて、若い女は桂の窟の說明をした。そこは弘法大師が惡魔を封じ籠めたところで、窟の入口には二本の年古る桂が立つてゐて、その根から清水を噴いて、末は修禪寺の方へ大きく流れて落ちるので、川の名を昔から桂川と呼び慣はしてゐると云つた。女の卑しくない、さうして爽かな口吻が賴家の興味をひいて、彼は笑ましげにその物語を聽いてゐた。

『ほう、この川上に二本の桂があるか。』

「遠い昔から二本立列んで居りますれば、女夫の桂と申しまする。」と、女は微笑んだ。

『女夫の桂……。』

賴家は急にさびしい心持になつて、櫻の梢をみあげた。今は世を捨てたやうな彼も、女夫の名を偶然に云ひ聞かされて、若狹の悼ましい記憶が俄に胸の奥に甦つたのであらう。彼は低い嘆息と共に獨語のやうに云つた。

「非情の草木にも女夫はある。人にも女夫はありさうな。」

女は默つて眼をあげると、それが丁度みおろした賴家の眼と出逢つた。今度は女の瞳が動かなくなつた。賴家は又しづかに訊いた。

「そちの名は何といふぞ。」

「桂と申しまする。」

「桂……。川の名と同じぢやな。」

賴家も微笑んだ。若い女の瞳は燃えるやうに輝いた。景安は太刀をさゝげたまゝで、默つてひざまづいてゐた。三人の足下や膝の下には一面の若草が青い茵を敷いて、日に焙られた和かい匂ひが彼等の袖や袂を暖かく包んだ。

『いや、面白い話を聴いた。急ぎの路を呼び止めて心ないことであつたぞ。予は頼家ぢや。修禪寺へも折々は遊びにまゐれ。』
景安は頭を掻いで、頼家は徐かにあるき出した。女はいつまでも草の上に小膝を折つたまゝで、黄い塵に追はれてゆく主從のうしろ姿を見送つてゐた。そよりとも風の吹かない日で、川づたひの長い街道に薄墨色の水干と褐の直垂とのほかには人の影も見えなかつた。上流へ遡るにしたがつて、うす白い土の色はだん〳〵に狹まつて、黄い畑が廣く突き出してゐた。二人の衣の色はその菜の花のかげに隠れてしまつた。
女は膝の塵を輕く拂つて起ちあがつた。川向ひの山々はその肩に薄紫の隈を取つて、眼の前に青々と浮き出してみえた。鶺鴒に似た鳥が河原の白い石から石へと飛び渡つて、その長い尾の閃きが眼眩しいほどに光つてゐた。
彼女の名が桂と云ふことは、その名乘るのに因つてわたしは識つた。彼女はもう二十歳ぐらゐで、伊豆の山家にはめづらしい所謂﨟闌けた容形で、脊もすらりと高い、鼻も高い、顏色も艷やかに白い、口もとも引締つた、どこやらに驕慢の相を忍ばせてゐるやうな女であつた。彼女は晴やかな顏をして、晴れた大空の下を徐かに歩いて行つた。修禪寺の高い甍を横にみながら、虎溪橋を渡つて塔の峯の青い裾にゆき着くと、小さい竹藪をうしろにして一軒の草葺家根が低く見えた。門には僅ばかりの竹の戸が閉てあつて、内には紙砧の音がきこえた。彼女は默つて戸をあけて入つた。
それを聞きつけて、内から又一人の若い女が出て來た。その年頃と顏とを見て、それが彼女の妹であることはすぐに覺られたが、妹にはもう眉が無かつた。その夫らしい二十二三の男は明るい竹縁に出て、少し猫背に屈みながら砥石で何か光るものを研いでゐた。
『お歸りなされませ。』と、妹はしとやかに會釋した。
『通ひ馴れた路でも窟まではなか〳〵遠い。』と、姉の桂は微笑んだ。『殊に春の日ももう暖かうなり過ぎて、これ見やれ、襟には薄い汗が滲む。』
懷紙で細い頸のまはりを拭ひながら、桂は縁にゐる男を見かへつた。
『春彦どの。精が出ますの。』
『おのが職ぢや。怠つてはなるまい。』と 春彦は見向きもしないで素氣なく答へた。
『それを今更聞くことか。』と、桂は冷笑ふやうに云つた。さうして、爐の前へ行つて温い湯を飮んでゐた。
妹は默つて庭に降りて、日あたりの好い莚の上に坐つて再び紙砧を擣ちはじめた。修禪寺紙は又の名を色好紙とも呼ばれて、昔からこゝの名物であつた。その砧の音を遠い世界の響きのやうに徐かに聞きながら、桂は夢見る人のやうに煤けた天井をみあげてゐた。
『姉さま。お前も一休みしたら、こゝへ來て擣ちなさらぬか。』と、妹は庭から伸び上つて呼んだ。
桂は返事をしなかつた。垣の隅に咲いてゐる遅い椿の紅い花が靜かに落ちた。どこやらで鷄の聲が長閑にきこえた。妹は又呼びかけた。
『姉様、姉様……。』
『何ぢやの。』と、桂は鬱陶しさうに振向いた。
『砧はもう擣つまい。わたしは忌になつた。』
『窟詣でお疲れなされたか。』と、妹は砧の手をやすめて優しく訊いた。
『いや、それほどに疲れもせぬが……。えゝ、面倒な。わたしも今そこへゆく。』
思ひ直して桂も庭に降りた。姉は妹とむか

ひ合つて、拍子よく砧を擣ち始めた。女の襟に紅い袖が左ひだりに動くに連れて、椿の花は又ほろ／＼と零れて落ちた。保彦は砥石を片蹴けて奥の細工場へ入つた。

　この家は面作師であつた。家の奥の薄暗い壁には、羅刹や野干や飛出やべし口や、色々の閙な舞楽の假面が懸けてあつて、さながら悪魔の住家のやうに、うす暗い中から思ひ／＼の眼を見張らせてゐた。壁につゞいて蒲簾が低く垂れてゐて、簾の中が細工場になつてゐるらしかつた。

　細工場でも鑿と槌との音が静かにひゞいた。庭でも砧の音がつゞけて聞えた。秋の長い日もだん／＼に方向を轉じたらしく、軒先に垂れてゐる小さい簾のかげが斜めに落ちて、西向きに坐つてゐる妹の眼を反けるやうになつた。姉は背にうけてゐる日影を仰ぎながら砧の手を休めた。

『もう一晌も擣ちつゞけたので、肩も腕も痺るるやうな。もうよいほどに止めうではないか。』

『日の暮るゝにはまだ半晌あまりもござらうに、もう少し精出さうではござんせぬか。』と、妹は相變らず擣ちつゞけてゐた。

『精出したくばお前ひとりで精出して働くがよい。父様にも保彦殿にも褒められうぞ。わたしは忌ぢや。もう忌になつた。』

　姉は投げ出すやうに砧を捨てると、妹の細い眉はすこし顰んだ。

『貧の手業に姉妹が年ごろ擣ち馴れた紙砧を、兎かくに飽きた、忌になつたと、昔に變るお前がこの頃の素振は、どうしたことでござるか喃。』

『いや、昔とは變らぬ。ちつとも變らぬ。』と、姉は誇るやうに冷笑つた。『わたしは昔から此のやうなことを好きではなかつた。父様が京鎌倉においでなされたら、わたし達も斯うはあるまいものを……。名聞を好まれぬ職人気質で、この伊豆の山家に隠れてしまうてから既う幾年になる。親に連れて子供までも鄙に育つて、爲事なしに今の身の上ぢやが、父様は格別、わたしはこのまゝに朽ち果てようとは夢にも思はぬ。近い例は今わたし達が擣つてゐる修禅寺紙ぢや。はじめは賤しい人の手に作られても、色好紙と呼ばれて世に出れば、高貴のお方の手にも觸るゝ。女子とても其通りで、たとひ賤しう育つても、色よし紙の色好くば、關白大臣将軍家のお側へも召出されぬとは限るまいに、賤の女が生業にする紙砧をいつまで擣ち覺えたとて何とならうぞ。忌になつたと云うたが無理か。』

　これは妹も今初めて云ひ聞かされたことではない。姉がふだんから口癖のやうにそれを繰返してゐるので、一つ軒の下に起臥してゐる妹の耳には、左のみ新しいことではないらしかつた。併しそれが耳新しく感じられないだけに、おとなしい妹の身としては、これほどに誇の強い姉の行末が猶更に案じられるらしかつた。

『さりとて、人には人それ／＼の分があるもの。』と、彼女は穏かに打返した。『關白殿や将軍家のお側近う召さるゝなどと夢のやうな出世を頼みにして、心ばかり高う打ちあがつては……。』

『末が覺束ないとお云やるか。ほゝゝゝ。』と、姉は白い齒をそらせて高く笑つた。『お前とわたしとは第一に心の持方が違ふ。妹のお前は今年十八で、もう保彦といふ郎を有つてゐる。それに引換へて、姉のわたしは二十歳といふ今日の今まで、夫も擇まずに過したは、あたら女の一生をこの草の家に住み果つまいと思へばこそぢや。職人風情の妻となつて、それで満足してゐるお前達には、わたしの心は判るまい。』

　日の影はだん／＼に薄れて来て、姉の肩に垂

れた黑い髮も光らなくなつた。うしろの竹藪では長い日の暮れるのを惜むやうに鶯が鳴いた。

奧の細工場から先刻の春彦が再び出て來た。

「桂どの。」と、彼は緣の上からみおろして云つた。『職人風情と左も卑しい者のやうに云はれたが、予の口から親御の職を貶めらるゝか。職人もあまたある中に、面作師といへば世に恥かしからぬ職であらうぞ。あらためて云ふにも及ばぬが、わが日本開闢以來、初めて舞樂の面を刻まれたは勿體なくも聖德太子ぢや。つゞいては藤原淡海公、弘法大師、倉部春日、この人々から今に傳へられて來た由緒正しい職人とは知られぬか。』

見ごと高慢の義姉を云ひ伏せた積りらしかつたが、相手は問題にならないと云ふ風にいよいよ空嘯いた。

「それは職が尊いのでない。聖德太子や淡海公といふ其人々が尊いのぢや。彼の人々も生計に面作りはなされまいが……。」

「生計にしては卑しいか、さりとは異なことを聞くものぢやの。」と、若い職人は肱を張つて詰めかゝつた。「明日にもあれ、この春彦が稀代の面を作り出して、あつぱれ日本一、天下一の名を取つても、お身はまだ職人風情と侮るか。」

「云んでもないこと、日本一でも天下一でも職人は職人ぢや。殿上人と弓取とは一つになるまい。」

どちらが賣詞か買詞か、いづれもだんだんに云ひ募つて來た。

「殿上人や弓取がそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。」

「はて、くどい。知れたことぢやに……。」と、桂は顏を背けてしまつた。

詞爭ひは悶かしくなつたらしい。若い職人は腕をまくつて緣から降りようとするのを、妹はあわてゝ押隔てた。

『これ、春彦どの。一旦かうと云ひ出したら飽までも云ひ募るのが姉樣の氣質ぢや。忤うては惡い。もう喧嘩は止してくだされ。』

おろおろしながら支へる妻の優しい顏をみても、春彦の煎立つた胸はまだ鎭まらないらしかつた。彼は喘ぐやうに罵つた。

「その氣質を知つてゐればこそ、日ごろ堪忍してゐれど、あまりと云へば詞が過ぎる。女房の緣につながつて姉と立つれば附け上り、やゝもすれば我を輕しむる面の憎さよ。時宜に因つては姉とは云はすまいぞ。」

『おゝ、姉と云はれずとも大事ござらぬ。』と、桂も肩を聳かした。『職人風情を妹婿に有つたとて、姉の見栄にも手柄にもなるまい。』

「まだ云ふか。」

その口を引裂かうとでもするやうに、春彦は妻をひき退けて筵の上に飛び降りた。まぼろしの世界はすこし混雜して來た。夫を遮らうとする妻と、妻を掻き退けて行かうとする夫と、二つの影が縺れて動いた。

「えゝ、騷がしい。鎭まらぬか。」

少し沈んだ、底力のある聲が俄にひゞいた。

それは細工場の方から聞えたらしかつたので、わたしは薄暗を透して奧の細工場の方に眼を向けると、家の奧までもう滲み込んで來た夕暮の色は、そこらに堆く散り敷いてゐる木の屑をうす黑く染めて、そのなかに大きく浮き出してゐる幻の人影をだんだんに押包まうとしてゐた。その薄暗い中でも大きい人の輪郭はわたしにありありと窺はれた。

彼はもう六十に近さうな、骨の太い、見るから頑丈らしい老人であつた。年ごろ自分の職に魂を打込んでゐたせゐかも知れない、彼の老いたる顏にも木彫の面の何者にか肖てゐるやうな、荒削りの、線の太い、一種の強ばつた感じをあたへる人相を具へてゐた。彼は古びた袪

烏帽子をかぶつて、袖の狹い縞の袷を着て、白い小袴をはいてゐた。鼻の下と頤のあたりには白い髭が薄くみえた。彼はもう夕暮の色が袴の膝の上まで這ひ上つて來たのを知らないやうに、鑿と槌とを持つて一心に木彫の假面を打つてゐた。

この老人が姉と妹の父で、あはせて春彦の舅であることは、三人に對する詞附ですぐに判斷された。鎮まらぬかと聲をかけられて、妹と春彦の夫婦は奧へ入つた。由ないことを云ひ募つて、細工のお妨けを致した不調法はどうぞ御料見を願ひたいと春彦はあやまつた。妹も詫びた。姉娘の名を桂といふことは、わたしも前から知つてゐたが、この對話を聽いてゐるうちに、妹娘の名は楓といふことを初めて教へられた。

「これもわたしが姉樣に意見がましいことなど云うたが果、姉樣も春彦どのも必ず叱つて下さりまするな。」と、おとなしい楓はしをらしく、姉と夫とを庇ふやうに云つた。

老人は光つた眼に優味をみせて微笑んだ。

「はゝ、なんで叱らう。叱りはせぬ。姉妹の喧嘩はまゝあることぢや。珍らしうもあるまい。時にけふも既う暮るゝぞ。お前達は早う夕餉の支度やら燈火の用意でもせい。」

桂もさすがに父には忤はなかつた。云ひ附けられたまゝに素直に起つて、裏口の小川へ水を汲みに行つた。楓は庭に降りて、砧や筵を片附けてゐた。

「なう、春彦よ。」

喧嘩相手の出て行つたのを見送つて、老人は諭すやうに婿に云ひ聞かせた。

「姉とは違うて氣高い娘ぢや。おなじ家内で一所に暮せば、一年三百六十日、面白くもない日も多いであらうが、何事もわしに免じて料見せい。お前もかねて知つてゐる筈ぢや。彼女を生んだ母親は其昔、みやこの公家衆に奉公したもので、不思議な縁でこの夜叉王と夫婦になつて、遠い東へ流れ下つたが、育ちが育ちぢやで、兎かくに氣位が高く、わしのやうな職人風情に連れ添うて、一生空しく朽ち果つるのを、悔みながらに世を終つた。その形見の娘がこの桂と楓の二人ぢや。おなじ胤とは云ひながら、姉は母の血をうけて公家氣質、妹は父の血をひいて職人氣質、子供の性が違へば自然に親の愛も違うて、母は姉贔屓、父は妹贔屓、思ひ思ひに子どもの贔屓爭ひから、埒もない夫婦喧嘩などしたこともあつたよ。併しその母はもう死んでゐる。わしの眼から見れば、姉も妹もおなじ娘ぢや。母のないのを幸ひに、父が妹にばかり片贔屓するかと思はせて、姉のこゝろを僻ませるも好ましうないと、わしも大抵のことは大目に見ゆるして置く。ぢやに因つて、彼女がなにを云はうとも、めつたに腹を立てまいぞ。人を人とも思はぬやうに氣位が高う生れたは、母の子なれば是非もないのぢや。」

この長い話のうちに、老人は自分で夜叉王の名を云つた。彼は伊豆の夜叉王といふ高名の面作師であつた。夜叉王の名を聞かされると同時に、わたしは覺つた。修禪寺にある頼家の面といふのは恐らく彼の手に作られたのであらう。かう思つてゐると、果してそこへ修禪寺の僧の影が見えた。

『夜叉王どの、上樣のお召しぢや。明朝巳の刻に寺までまゐられい。』

五

使に來た僧の姿はすぐに隱れてしまつた。楓がさゝげ出して來た燈臺の火もふいと消えてしまつた。今までそこに危坐つてゐた筈の春彦の瘦せた姿も見えなくなつた。わたしは夢のや

らな心持で眼をしばたゝくと、幻の世界は舞臺の暗轉のやうに何時の間にか形を變へてゐるのであつた。而もよく視ると、その舞臺はやはり舊の夜叉王の家であつた。
　時刻もやはり夕暮であつた。薄暗い細工場もそのまゝであつた。そこに鑿と槌とを持つてゐる夜叉王の頑丈な骨組もそのまゝであつた。木の屑もそのまゝに散つてゐた。たゞ變つてゐるのは家のまはりの景色である。庭の紅い椿は疾うに散り盡してしまつたらしく、それに列んだ大きい百日紅のいつまでも其梢に夕日を殘してゐるやうに紅々と咲き亂れてゐるのが眼についた。疎らに結ひまはした垣の裾や、傾きかゝつた竹縁の下には、露を零したやうな白い草花がしよんぼりと咲いて、そこらには秋の蟲の冷たい聲が流れてゐた。秋――春の世界からいつか既う秋の世界に移り變つてゐるのである。その三月四月のあひだに、何事が水のやうに流れて過ぎたか。それについて徐ろに想像や判斷を下す餘裕をあたへないで、色々の幻影が夕暗のあひだから繋つて浮き出して來た。わたしのあわたゞしい眼はすぐに其方に向けられた。
　眞先に立つてゐるのは修禪寺の僧であつた。僧はゆふぐれの路を照すために燈籠をさけてゐた。それに續いて來たのは將軍頼家であつた。下田五郎景安も主人の太刀をさゝげて附添つてゐた。二人は竹の枝折戸の前に立つた。
　僧が咳きすると、奥から楓が出て來た。
「將軍家の御微行ぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。」と、僧はおだやかに而も嚇すやうに云つた。
　楓は頭を押附けられたやうにはつと其處に平伏してしまふと、奥の細工場から夜叉王も出て來た。
「思ひも寄らぬお成とて、何の設備もござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。」
　頼家はうなづいて竹縁に腰をかけると、縁先に吹いてゐる白い花は、將軍の眞白な大口袴に色を消されて、ゆふ闇の底にその小さい姿を隱してしまつた。口上は自分から云はうか云ふまいかと、景安はすこし猶豫ひながら主人の顔色をうかゞふと、氣の短い頼家は取次を待たずに口を切つた。
「やあ、夜叉王。頼家が今宵たづねて參つた筋は、問はずとも大方は察して居らう。予が面體を後の形見に殘さうと存じて、さきに其方を修禪寺へ召寄せ、頼家に似せたる面を作れと繪姿までも遣はして置いたに、日を經るも出來せず、幾たびか延引を申立てゝ今まで等閑に打過ぎたは何たることぢや。其方も伊豆の夜叉王と云はるゝほどの者、多寡が面一つの細工にいかほどの丹精を凝らせばとて、二月三月には仕上げらるゝ筈。當三月の末より足かけ五月とも相成るに、いまだ出來いたさぬと申すは餘りの懈怠、もはや猶豫は相成らぬぞ。予は生れ附いての性急ぢや。いつまで待てど暮せど埒あかず、あまりに齒痒う存ずるまゝに、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促にまゐつた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細を云へ、仔細を申せ。」
　將軍の聲は癇癖に顫へてゐた。夜叉王はうやうやしく手をついて答へた。
「御立腹重々恐れ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍源氏の棟梁の生けるお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。未熟の夜叉王をお見出しにあづかりまして、修禪寺の御座所へ召されましたは確かに當三月の末でござりました。」
「それ、それを存じて居るならば、それより幾日か、指折つても知るゝことぢや。ならぬものならば成らぬと其時眞直にはなぜ云はぬ。頼家はたしかに頼んだ。おのれも確かに受合うたを

忘れたか。」

源氏の將軍が不意にこの破ら家をおどろかした仔細は判つた。彼は自分の顏に似せた木彫の面を夜叉王に誂へたのである。わたしが今まで見せられて來た順序によると、夜叉王の娘が桂川の上流で賴家に偶然行き逢つた體の日のゆふぐれに、娘の父は修禪寺へ召されたのである。美しい娘の父と知つて、賴家は俄に彼を召したのか。あるひは前から其心があつたところへ、恰もその娘に出逢つたのが動機となつて、性急の彼はすぐに其父を召す氣になつたのか。劇の世界ではそれに就いて詳しい說明を與へてくれないが、おそらく後の方ではあるまいかとわたしは自分勝手に解釋してしまつた。いづれにしても、その誂への假面はまだ出來してゐないのである。それに對する夜叉王の申譯はからであつた。

「御用をうけたまはつて最早半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに夜晝となく打ちましても、意にかなふほどのもの一個も作りあけることが出來ませぬ。更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。」

それを察しるやうな相手ではないらしかつた。殊に堪忍袋のもう切れてゐるらしい彼は、そんな一通りの申譯を耳に入れさうもなかつた。賴家は嵩にかゝつて叱り附けた。

「えゝ、催促の都度に同じことを……。その申譯は聞き飽いたぞ。」

「この上はたゞ延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までには必ず出來いたすか。あらかじめ期日を定めてお詫び申したら何うぢやな。」

と、景安は傍から取りなし顏に云つた。

その期日は申上げられませぬと、夜叉王は憚る色も無しに答へた。面を作ると口に云つても、左の手に鑿を持ち、右の手に槌を持ちさへすれば、それで無造作に出來るといふ譯のものではない。番匠が家を作り、塔を組むにも、それ相當の苦心がある。ましてこれは生きたものを作るのである。唯の柾木を削つて、男や女や天人夜叉羅刹のたぐひ、六道の巷に有りとあらゆる善惡邪正の面に、生きた魂を打ち込むのである。それは何日でも容易く出來るものではない。作人の五體に漲る精力が左右の腕に自然あつまる時、わが魂は流れるやうに彼に通つて、初めてこゝに其面が作られるのである。但しその時の來るのは半月の後か、一月の後か、あるひは一年二年三年の後か、自分にも確かには判らないと云ふのであつた。

職人として彼の申條は至當であつた、少しも間違つてはゐなかつた。もと〳〵期限を切つて約束したのでない以上、彼の申譯は立派に立ちさうなものであるが、場合が場合、相手が相手、迚もこのまゝで無事には濟むまいと景安もはら〳〵してゐるらしかつた。取分けて、案内に立つて來た僧は氣が氣でないらしく、持つてゐる燈籠を草の上に置いて一膝ゆり出して來た。

「これ、これ、夜叉王どの。上樣は御自身も仰せらるゝ通り、至つて御性急におはしますぞ。いつまでも取留めもないこと申上げたら、御癇癖はいよ〳〵募らうほどに、こなたも職人冥利に、いつの頃までと日を限つて、確と御返事を申上げるがよからうぞ。」

「ぢやと云うて、出來ぬものは[illegible]。」と、夜叉王は顏をそむけて取合はなかつた。

「なんの、こなたの腕で出來ぬことがあらう。」と、僧は強情な職人を賺すやうに云つた。「面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば京鎌倉にも聞えたものぢやに……。」

「それゆゑに出來ぬといふのぢや。」と、夜叉王は強い聲で云つた。「わしも伊豆の夜叉王とい

へば少しは人にも知られた者、たとひ御侍ゐを受けうとも、おのれが心にかなはぬ細工を世に殘すのは何ぼう無念ぢや。』

無念といふ詞がどう聞えたのか、先刻から癇癖に身を顫はせて聽いてゐた頼家は、もう堪らぬと云ふやうに相手を睨んだ。

『なに、無念ぢや……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬと申すか。』

『恐れながら早急には……。』

夜叉王の返事は變らなかつた。彼は白い鬢の毛一筋も動かさないでぢつとしてゐた。頼家はもう何にも云はないで、その手を景安のさゝげてゐる太刀にかけたかと思ふと、彼は奪ふやうにそれを引取つて、すぐに抜かうとした。その一刹那である。わたしの見識つてゐる女の白い顔が奥から現はれた。

『しばらくお待ち下さりませ。』と、桂はするすると走つて來て、身を楯にして父を庇つた。

『えゝ、退け、退け。』と、頼家は起つたまゝで叱り附けた。

『先づお鎭まり下さりませ。』と、桂は手をあはせた。『面は唯今獻上いたしまする。』

哮り立つてゐた頼家もすこし張合ひ抜けがしたらしかつた。景安も僧と顔をみあはせた。併し頼家の氣色はなか〳〵解けなかつた。

『おのれ前後不揃ひのことを申立てゝ、予を欺かうでな。』

『いえ、いえ、詐りは申上げませぬ。』

問題の面は確かに出來してゐると桂は云ひ切つた。彼女は父にむかつて、もう此上は仕方がないから昨夜やう〳〵出來した彼の面をいつそ獻上したらよからうと勸めた。夜叉王は默つてゐた。僧はそれを聞いて、自分の命が救はれたやうに喜んだ。

『それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば早う上様にさしあげて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。』

その親切らしい勸告を、夜叉王は悄然として投げ返した。

『命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つたことでない。默つておゐやれ。』

『さりとて、これが見てゐられうか。人を救ふは出家の役ぢや。さあ、娘御、その面といふを持つて來て、兎もかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。』

僧はもう父を相手にしないで、娘に催促した。桂はすぐに起つて細工場へ入つて、一つの白木の箱をかゝへ出して來た。彼女は恐れ氣もなく頼家の前に進んで、うや〳〵しく其箱をさゝげる時に、二人の眼は出會つた。頼家は無言で箱の蓋をあけると、その中からは木彫の假面があらはれた。頼家は磨ぎあげた鏡にむかつた時と同じやうな心持で、しばらく恍然と自分の面に對ひ合つてゐるらしかつたが、やがて感嘆の長い吐息を洩した。

『おゝ、見事ぢや。よう打つたぞ。』

『さう、上様御顏に生寫しぢや。』と、景安も伸び上つて覗きながら、思はず聲をあげた。

僧も仕たり顏に首肯いた。

『さればこそ云はぬことか。それほどの物が出來してゐながら、兎かく澁つてゐられたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男ぢや。はゝゝは。』

安心と得意とを一つに集めたやうに、僧は貴人の前で高らかに笑つた。頼家も滿足の眼をかがやかして、いつまでも飽かずに其面を見つめてゐると、その面の作人は形をあらためて云つた

『何分にも心にかなはぬ細工、人には見せまいと存じましたが、かく相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面を何と御覽なされま

する。』

『さすがは夜叉王。天晴れのものぢや。頼家も滿足に思ふぞ。』

今までの憤怒の色はどこへか消えて、源氏の將軍は小兒のやうに笑つた。それが夜叉王には嬉しくないらしかつた。

『あつぱれとの御賞美は憚りながら御鑑識違ひで、それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。』と、彼は悲しむやうに云つた。『年來あまた打つたる面は、生きてゐるやうぢやと人も云ひ、おのれも許して居りましたが、不思議なことには此度の面に限つて、幾たび打ち返しても生きたる色なく、いづれも魂の宿らぬ死人の相。それは世にある人の面ではございませぬ。死人の面でございまする。』

老いたる職人の悲哀は誰にも理解されないらしかつた。頼家も景安も唯默つて聽いてゐるばかりであつた。將軍の御機嫌が折角直りかかつた所へ、又ぞろ詰らないことを云ひ出されては面倒だと思つたらしく、僧は一方をおさへ附けて早くこの場を切揚げようとした。

『これ、これ、そのやうな不吉なことは申さぬものぢや。何であらうと御意に適へばそれで重疊。ありがたくお禮を申されい。』

『むゝ。兎にもかくにもこの面は頼家の意にかなうた。持ち歸るぞ。』

『達つて御所望とござりますれば……。』と、夜叉王は力なげに云つた。

『おゝ、所望ぢや。それ。』

頼家は頤で指圖すると、桂はその假面を舊の箱に納めて、謹んで將軍の前にさゝげる時に、一種の媚を含んだ彼女の眼は再び將軍の眼と出會つた。慾の深い將軍は假面のほかに、もう一つの生きた土産を持つて歸る氣になつたらしかつた。

『猶重ねて主人に所望がある。この娘を予が手もとに召仕ひたう存ずるが、奉公さする心はないか。』

この註文に對しては、老いたる職人は案外に素直であつた。

『ありがたい御意にござりまするが、これは親の口から何とも御返事は申上げられませぬ。本人の心任せに……。』

その尾に附いて、桂は待設けてゐたやうに進み出た。

『父樣。どうぞわたしを御奉公にあげて下さりませ。』

『愛い奴ぢや。奉公を望むと申すか。』と、頼家は笑ましげに云つた。『さらばこれより其面をさゝげて、頼家の供してまゐれ。』

『かしこまりました。』

この約束は將軍と娘との對談で無造作に決つてしまつた。頼家が起つと、景安も起つた。桂も假面の箱をかゝへて起つた。さつきから呼吸を嚥み込んで此場の成行を見つめてゐた妹の楓は、出てゆく姉の袂を竊と曳き止めた。

『姉樣。おまへは御奉公に行かしやりますか。』

不安らしい妹にひきかへて、姉の生々した顏には若い女の誇が滿ちてゐた。

『おまへは夢のやうな望みぢやと、いつもわたしを笑うてゐたが、その夢のやうな望みが今叶うた。』

差當つては何とも云ひ返すことの出來ない妹に、姉は冷やかな笑みをくれて、しづかに我家の門を出ると、外はもう暮れ切つてゐた。足元の暗い頼家は草の根につまづいて少し蹌踉いた。と、桂は馳寄つて背後から抱へるやうに押へた。さうして、先に立つてゆく僧に聲をかけた。

『燈火をこれへ。』

僧は燈籠を桂に渡して、彼女の手から假面の

箱をうけ取つた。桂はその燈籠をかざして、賴家と列んでゆくと、輕く搖れる灯のひかりは門端の草の葉を薄白く照して、將軍と女と、僧と家來と、四つの影は一つの灯を包んで行つた。と思ふと、家のなかでは物に驚かされたやうな女の聲がきこえた。

『あれ、父樣。なんとなさる。お前は物に狂はれたか。』

聲を立てたのは楓であつた。彼女のおどろくのも無理はなかつた。父の夜叉王は細工場から槌を持出して來て、壁にかけてある彼の羅刹や野干の假面を手あたり次第に引摺り卸して、片端から打碎かうとしてゐるのであつた。娘が一生懸命の力で獅嚙み附かれて、振りあげた父の手もすぐには打下すことが出來なくなつたが、彼は堪へ遣らぬ憤怒と悔恨とに身を悶えながら、火焰のやうな大息をついた。

一切端つまつて是非におよばず、拙き細工を献上したは、悔んでも返らぬ我が不運ぢや。あのやうな面が將軍家の御手に渡つて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひを貽さば、一生の名折れ、末代の恥辱、所詮夜叉王の名は廢つた。職人もけふかぎりで再び槌は持つまいぞ。』

又ふり上げようとする父の腕に、娘は必死となつて取縋つた。

『さりとは短氣でござりませう。いかなる名人上手でも細工の出來不出來は時の運で、一生のうちに一度でも天晴れ名作が出來たらば、それが即ち名人上手ではござりませぬか。拙い細工を世に出したを左ほどに無念と思はれたら、これからいよいよ精を出して、世をも人をも驚かすほどの立派な面を作つてくだされ。恥を恥として職人を止むるか、恥を忍んで恥を雪ぐか。よくよく御分別なされませ。』

父の血を引いてゐるといふ娘だけに、彼女はこの場合にも職人のゆくべき途を忘れなかつた。彼女は泣いて父を諫めた。わが子が意見の涙で燃え立つた胸の火もさすがに衰へたらしく、父は壁に倚りかゝつて深い思案の眼を瞑ぢた。

山家の秋の宵は露の中にしつとりと濕つて、どこやらで里の童の笛を吹く聲が遠くきこえた。

六

まぼろしの世界はいつか又變つた。

石の多い山川のほとりである。かなりに瀨の早い流れは石と石とに堰かれて、小さい渦を卷いてゐるのもある。石の上を跳り越えて咽び落ちて行くのもある。その水のひかりを宵月がうす明るく照してゐる。低い岸の頽れかゝつたところには長い薄も伸びてゐる。蘆の葉も茂つてゐる。岸と岸とのあひだには狹い板橋が架されて、橋の向うには大きい寺の山門の甍が夜露に光つて高く聳えてゐる。この川が桂川で、大きい寺が修禪寺であることをわたしはすぐに覺つた。

薄の葉がくれに秋の螢のやうな燈籠の灯が一つ、迷ふやうにぼんやりと小さく浮び出して、二つの人影が漸次にこちらへ近づいて來た。一人は賴家であつた。ほかの一人は桂であつた。桂は片手に燈籠をさげてゐた。二人は水の音に送られながら川下の方へ辿つて來た。

『月はまだ出ぬか。』と、賴家は東の山の端を振仰いだ。『川原づたひに夜行けば、薄にまじる蘆の根に、水の聲、蟲の聲、山家の秋は又一入の風情ぢやなう。』

『馴れては左ほどにも覺えませぬが、鎌倉山の星月夜とは違ひまして、伊豆の山家の秋の夜はさぞお寂しうござりませう。』と、桂は慰めるやうに云つた。

頼家はさびしく笑つた。

『鎌倉山の星月夜――それが何で懐かしからうぞ。鎌倉は天下の覇府、大小名の屋敷が甍をならべて綺羅を競へど、それは表面の栄えに過ぎぬ。裏面はおそろしき罪の巷、悪魔の巣ぢや。まことの人間の住むべき所でない。鎌倉などへは夢も通はぬ。』

外戚には虐げられ、家来には侮られ、将軍職は逐はれ、一人の子は焼き殺され、最愛の側女は途に斃れる。禍といふ禍に祟られ尽した頼家の眼から観たらば、歌によむ鎌倉山の星月夜も決して懐かしいものではあるまい。寧ろその名を聞くさへも呪はしい心持がするに相違あるまい。實際、人間の住むべきところではないと思つてゐるのであらう、彼の述懐に虚偽はないらしかつた。

桂は彼の不運に同情すると共に、それから湧き出して来た自分の幸運を喜ぶやうに囁いた。

『鎌倉山に時めいておはしませば、上様は申すまでもない日本一の将軍家、山家育ちのわたくし共は下司やお婢女にもお使ひなされまいに、恐れながら上様の御果報拙いがわたくしの果報でござりました。尋常ならば御目見得も許されまいわたくしが、忘れもせぬこの三月、館詣の下向路で直々にありがたいお詞を賜はりました。』

『おゝ、さうぢや。さうであつた。』と、頼家は微笑んだ。『その時にそちの名をたづねたらば、川の名と同じ桂と云うた喃。』

まだそればかりではないと桂は云つた。彼の館の川上には一本の桂の立木があつて、その根から清水を噴出して末は修禅寺へ流れて落ちるので、川の名を桂といひ、その樹を女夫の桂と呼び慣へてゐることを自分が説明した時に、お前様はなんと仰せられたと、彼女は思ひありげに頼家に訊いた。頼家も思ひ出したやうに又微笑んだ。

『おゝ、予も確かに覚えてゐる。非情の草木にも女夫はある。人にも女夫はありさうなと……。』

笑ひながらも頼家の聲は寂しかつた。痛々しい若狭局の最期の顔が、再び彼の眼前を掠めて過ぎたらしかつた

『お戯れかは存じませぬが……。』と、桂は少し怨むやうに云つた。そのお詞が冥加にあまつて、この願が必ず成就するやうにと、自分はそれから怠らずに館へ日参してゐると、女夫の桂には果して效驗があつて、ゆくへも知れない水の流れも今夜といふ今夜、思ひ通りの嬉しい逢瀬に流れ寄つたのである。自分は佛の恵を感謝しなければならない。あはせてお前様の御恩をも感謝しなければならない。佛は自分の誠心を享けてくれるに相違ないが、お前様はどうであらうか。それが心許なく思はれてならないと彼女はどうしても源氏の将軍を蠱惑しなければ已まないと云ふやうに、あらん限りの媚を男の前にさゝげた。

頼家の心はもう彼女の手に攫まれてしまつたらしかつた。

『運の拙い頼家の身近う参るがそれほどに嬉しいか。』

彼は燈籠の灯に照された女の白い顔を今更のやうに眺めてゐた。草にひざまづいてゐる女の袂には薄の青い葉が折れて縺れて、露の多い草の奥には名も知れない色々の蟲が思ひ〳〵に戀を歌つてゐた。靜寂な初秋の宵である。その蟲の聲々が水のやうに頼家の胸に沁み透つて、彼は靜かな而も涙ぐまれるやうな寂しい心持になつたらしい、徐ろに狩衣の袖をかき合せながらしんみりと語り出した。

『なう、桂。そちも世の噂で大方は存じて居

らう。予には比企判官能員の娘で若狹局と
いふ側女があつたが、この修禪寺へ伴はれて來
る途中で、不憫や病に斃れてしまうた。それも
鎌倉の仇どもの爲す業ぢやと、一時はいふばか
りに胸を燃したが、日を經るに連れてその恨も
漸次に薄れた。いや、薄れたのでない。それも
逃れぬ宿世の業ぢやと心弱くも諦めて、けふ
まで寂しい月日を送つてゐたのぢや。察してく
れ。この修禪寺は温かい湯の涌くところぢや
で、温かい人の情も涌かう。今から後に不運
な頼家の友となつて、この堪へがたい寂しさを
慰めてくれ、就いてはそちが二代の側女、名も
そのまゝに若狹と云へ。」
「あゝ、わたくしが二代の若狹……若狹局……。
局と名乘つても苦しうござりませぬか。」
「頼家の側に仕ふるからは、若狹局と人も云は
う。我が名乘つても仔細はあるまい。」
「ありがたうござりまする。」
伊豆の職人の娘が一足飛びに若狹局――そ
れが桂といふ女の虚榮心を滿足させたに相違
ない。彼女はその額髪を露の上にすり附けて、
うや〳〵しくお禮を申上げた。
蟲の聲が吹き消したやうに俄に歇んだ。頼家
の眉は動いた。

「人が參つたやうな。心をつけい。」
燈籠の弱い灯を目的に、草を踏んで忍ぶやう
に近寄つた一人の武士があつた。彼は三十餘歳
であらう、侍烏帽子の緒を堅く締めて、直垂
に籠手脛當を着けてゐた。彼は坂東訛りの太い
濁つた聲で云つた。
「上、これに御座遊ばされましたか。」
「誰ぢや。」
桂のかざした燈籠の光で、頼家は頬髯の厳め
しい彼の面附を睨むやうに透して視た。
「金窪行親でござりまする。」
「おゝ、兵衛か。」と、頼家の眼はいよ〳〵神經
質らしく輝いて來た。「鎌倉表より何しにまゐ
つた。」
「北條殿の御使に……。」
「なに、北條の使……。さてはこの頼家を討た
うが爲な。」
相手の眼の色が嶮しくなるのを竊と窺ひなが
ら、鎌倉武士はしづかに答へた。
「これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺ひとして
行親參上、ほかに仔細もござりませぬ。」
「云ふな、兵衛。籠手脛當に身を固めて夜中の
參入は、察する所、北條の密意をうけて予を不
意討にする詭計であらうが……。」と、頼家は又

叱つた。
それに對して、行親は神妙らしく辯解した。
世の中が此頃やう〳〵鎭まつたと云つても、平
家の餘黨がまるで盡したと云ふわけでもない。
日は箱根から西の山路には盜賊どもが徘徊する
といふ噂もある。それ等の用心のために斯樣に
扮裝つてゐるので、決してほかに詭計も仔細も
ない。唯今當地に到着して、すぐに修禪寺に參
入すると、上樣にはお留守といふことであつた。
家來の身として悠々とお歸りを待受けてゐるの
も失禮であると考へたので、お出迎ひながらに
こゝまで尋ねてまゐつたのである。上樣に對し
て不意討の、待伏せのとは、實に飛んでもたい
ことで、假にも左樣のお疑ひを蒙るのは近頃
心外の儀であると云つた。
彼の云ひ譯にも一應の理窟はあつた。この時代
の武士の旅に籠手脛當ぐらゐはさのみ珍らしい
ことでもなかつた。しかし彼が何と陳じても、
北條の使――それが第一に頼家の氣に入らなか
つた。源氏の外戚でも縁者でも、頼家からいへ
ば、北條は憎い仇である。頼家の身に降りかゝ
つて來たもろ〳〵の禍は、みな北條の奴原の
詭計である。その北條の見舞などを受ける覺え
がない。受けても嬉しくない。寧ろ腹が立つの

であつた。

「たとひ如何やうに陳ずるとも、北條の使などに對面無用ぢや。使の口上聞くに及ばぬ。歸れ、歸れ。」

相手の權幕があまりに激しいので、一癖あるらしい鎌倉武士ももう取附く島がなかつた。彼はよんどころなく起たうとして、自分に燈籠を差附けてゐる若い美しい女の顔にふと眼をつけた。

「この女子は……。」

「予が召仕の女子ぢやよ。」と、頼家は煩ささうに云つた。行親は仔細らしく眉を寄せた。

「御謹愼の折柄に、素性も得知れぬ賤しの女子どもを御側近う召されましたは……。」

彼が桂を賤しいと云つたのは、その貧しげな服裝から判斷したのであらうが、それがひどく桂の自尊心を傷けたらしい、彼女は堪へかねたやうに行親の前に出た。

『金窪殿とやら、兵衛殿とやら。お身は下者か人相見か。初見參の妾に對して、素性の賤しい女子などと迂濶に物を申されな。妾はみやこの生れ、母はお宮仕も致したもの。まして唯今は上樣お側へ召出されて、若狹局とも名乘る身に、一應の會釋もせいで……。あまつさへ無禮の雜言は、鎌倉武士と云ふにも似ぬ、さりとは作法をわきまへぬお人よ喃。」

行親はわざとらしい驚きの表情を見せた。

「なに、若狹局……。して、それは誰に許された。」

「おゝ、予が許した。」と、頼家は引取つて云つた。

「北條殿にも謀らせたまはず……。」と、行親は詰るやうに將軍の顔をみあげた。

頼家の癇癪は又もや爆發したらしい、彼は足もとの草の葉を蹈みにじつて呶つた。

「北條が何ぢや。おのれ等は二口目には北條といふ。北條がそれほどに怖いか。時政も義時も予の家來ぢやぞ。」

行親は強情に押返した。

「さりとて尼御臺もおはしますに……。」

北條は家來分にしても、尼御臺の政子は確かに將軍の生みの母である。以前は兎もあれ、現在の幽閉の身の上で、頼家がみだりに家來や侍女を召抱へることは許されない筈である。一應は鎌倉に申立てゝ其許可を受けなければならない。それを楯にして、行親は何か一と議しようと云ふ下心であるらしかつたが、頼家は頭から取合はうともしなかつた。

「えゝ、くどい奴。おのれ等の指圖を受けうか。退れ、退れ。」

「左樣にお憤り遊ばされては、行親申上ぐべきやうもござりませぬ。仰せにまかせて今宵はこのまゝ退散、明朝あらためて伺候の上……。』

「いや、かさねて來ること相成らぬ。若狹、まゐれ。」

頼家はもう見返りもしないで、桂と一緒にあるき出した。橋を渡つてだん／＼に小さくなる燈籠の灯のかげを、行親は默つて見送つてゐると、風もないのに背後の草叢がざわ／＼と搖れて、蛇のやうに薄の間から這ひ出して來た者があつた。狐のやうに木のかげから跳り出した者があつた。人數は五六人で、いづれも鉢卷に籠手脛當を着けて、手には長卷を持つてゐるのもあつた。

「先刻より忍んで相待ち申したに、何の合圖もござりませねば……。」と、先に立つた一人が小聲で云つた。

「流石は上樣ぢや。早くもそれと覺られて、なかなか油斷を見せられぬ。」と、行親は殘念さうに云つた。「この上は修禪寺の御座所へ寄せかけ、多人數一度に亂入つて本意を遂げうぞ。上樣は早業の達人、近習の者どもには手練がある。

小勢と侮りて不覺を取るな。場所は狹し、夜戰ぢや。うろたへて同士擊すな。』

暗殺者の一隊は薄や蘆をくゞつて、その黑い姿をかくした。薄い月はいつか隱れて、夜の川原は水の明りで仄白いばかりであつた。

將軍の運命と同じやうに、この悲劇の映畫も急轉してゆく。それを見つめてゐるわたしの眼は、その忙がしさに少し疲れて來た。

こゝは修禪寺の湯殿らしい。暗いなかにも湯の匂ひが漲つて、石風呂の底から白い湯煙が裊々と颺つてゐる。うす寒い秋の夜風が板戶の隙間から洩れて來た。その風を厭ひながら一人の若侍が紙燭を持つて先に立つて來ると、そのあとから賴家と桂が來た。桂は賴家の帷子を兩手にさゝげてゐた。そのうしろには景安が太刀を持つて附いてゐた。

賴家が湯殿へ一足ばかり踏み込んだ時である。先刻から附纏つてゐた黑い影が何處からかばら／＼と飛び出して來た。家來の持つてゐる紙燭はすぐに叩き落されてしまつた。あたりは眞暗で、わたしにはもう何にも見えなくなつた。

七

修禪寺では早鐘を撞き出した。なにか變事が起つたに相違ない。わが家の竹縁に一人で兀然と腰をかけてゐるのは夜叉王である。蟲の聲を聞いてゐるのか、鐘の音を聞いてゐるのか、それとも何か考へてゐるのか、わたしには想像が附かなかつた。

夜露を蹴散らすやうな草履の音が忙しくきこえて、楓が呼吸を切つて外から驅込んで來た。彼女は倒れるやうに父のそばに腰をおろした。

『父樣。夜討ぢや。』

『夜討か。』と、夜叉王も思はず向き直つた。

『敵は誰やらわからぬが、人數はおよそ七八十人、修禪寺の御座所へ夜討をかけましたぞ。』

『ほう、修禪寺へ夜討とは……。平家の殘黨か、鎌倉の討手か。兎にも角にも大變ぢや喃。』

『ほんに大變でござります。春彥どのは昨日から三島詣に出てまだ戾らず。何としたことでござりませう。』

おちつかない娘を諭すやうに、夜叉王は徐かに云つた。

『はて、我々がうろ／＼と立騷いだとて何の役にも立つまい。たゞ其成行を眺めてゐるばかりぢや。まさかの時には父子が手をひいて此處を立退くまでのことで、平家が勝たうが、源氏が勝たうが、北條が勝たうが、われ／＼には何にも係合ひのないことぢや。』

『それぢやと云うて、不意の戰に姉樣は何となされう。もし逃げ迷うて過失でも……。』

『いや、それも時の運で是非もない。姉には又、姉の覺悟があらうよ。』

娘は父のやうに落付いてはゐられないらしかつた。彼女の魂を脅かすやうな早鐘の音に追ひ立てられて、楓は又すぐに起上つて門口に出た。遠近の暗い木立では寢鳥の驚いて騷ぐ羽音がきこえた。

『娘よ。そこらにうろ／＼してゐて、流れ矢などに中つてはならぬ。內に引込んでゐやれ。』と、夜叉王は內から聲をかけた。

呼ばれて楓はおとなしく內へ入ると、やがて表には又急がしい足音がきこえて、春彥がつゝかいつか入つて來た。彼は今恰も三島から戾つて來たのであらう。待ちかねてゐた楓は夫に取縋つた。

『おゝ、よいところへ戾つてくだされた。修禪寺には夜討が掛つて……。』

『こゝへ來る途中で村の人達から大略の樣子を聞いた。』と、春彥はうなづいた。『寄手は北條方ぢやと云ふぞ。』

『して、姉樣の安否は知れませぬか。』と、楓は

又訊いた。
「姉が何とした。」
「先刻上樣のお供して修禪寺へ……。」
「それは思ひも附かぬことぢや。が、姉は扨措いて、上樣の御安否すらもまだ判らぬ。小勢ながらも近習の衆が火花を散らして追ッつ返しつ、今が合戰の最中ぢや。」と、春彥は川向うから遠目に窺つた夜討の樣子を忙がしさうに話した。
夜叉王は嘆息した。
「何をいふにも多勢に無勢ぢや。御所方とても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知れてゐる。とても逃れぬ御運の末ぢや。叔父御の蒲殿と云ひ、當上樣といひ、どうした因緣かこの修禪寺は、土の底まで源氏の血が沁みるなう。」
彼はそのまゝ細工場へ入つてしまつた。
「いつぞや蒲の殿樣御最期の時には、お寺へ火をかけられたとやら。今夜はどうであらうかなう。」と、楓は夫に囁いた。
『さあ、それも判らぬ。すべてが判らぬ。』と、春彥も嘆息した。『神詣とは云ひながら、二日ほども仕事を休んだれば、明日からは精を出さねばなるまいぞ。今夜のうちに小刀を研いで置かうよ。』

彼も舅のあとを追ふやうに細工場へ姿をかくした。楓はまた鶴と門に出ると、月はすつかり隱れてしまつて、大きい闇が修禪寺の村を掩つてゐた。その暗いなかに人の足音が聞えたので、彼女は何とは無しに悸然として內へ引返すと、足音はこの門口へ來て停まつて、枝折戶を押破るやうに倒れかゝつた者があつた。楓は又一種の不安に襲はれて、ぬき足をして再び門口を窺ふと、倒れた人は苦しさうに喘いでゐた。
「どなたでござります。」と、楓は怖々に聲をかけた。
「おゝ、妹……。父樣はどこにぢや。」
それが姉の聲であると知つたので、楓はあわてゝ表へ駈け出した。
「姉樣か。どうなされた。」
桂は返事をしなかつた。その苦しさうな息遣ひがいよいよ妹の不安を誘ひ起したので、楓はすぐに內へ引返して、父と夫とを呼び出して來た。春彥は倒れてゐる女をかゝへ起して、兎もかくも緣先まで扶け入れると、楓は細工場から燈臺を持ち出した。その黃い灯に照された桂の姿は異樣であつた。彼女は帷子の上に直垂を羽織つて、片手には假面を持つてゐた。片手には長卷を杖にしてゐた。

『おゝ、娘。無事に戾つたか。』と、夜叉王も緣先に出て行つた。
「上樣お風呂を召さるゝ折柄、鎌倉勢が不意の夜討……。」と、桂は土に横はりながら云つた。「味方は小人數、必死に鬪ふ……。女でこそあれ此の桂も、御奉公始めの御奉公納めに、この面をつけてお身代りと早速に分別して……。夜の暗いを幸ひに打物を把つて庭に降りて、左金吾賴家これにありと呼はりながら走せ出すと、群がる敵は夜目遠目に眞の上樣ぞと心得て、擊ち洩さじと追つかくる……。」
「さては上樣お身代りと相成つて、この面にて敵をあざむき、こゝまで斬抜けてまゐつたか。」
夜叉王は庭に降りて、娘の手から假面を取りあげた。桂の手は血に染みてゐた。假面の額には生々しい血のあとが飛沫いたやうに濺がれてゐた。夜叉王は緣に腰を落して、默つてその假面を見つめてゐた。
よく覗ると、桂の姿は世に慘たらしいものであつた。彼女がおどろに振被つてゐる黑髪の間からも生血がべつとりと滲み出してゐた。眉の外れから小鬢へかけても同じく紅を浮はせてゐた。春彥は千切れかゝつた直垂の袖をまくり上げて見ると、彼女は肩にも腕にも胸のあたり

にも幾ヶ所の深手を負つてゐるらしい、薄い帷子は一面の血に浸されてゐた。この血だらけの痛々しい女をどう取扱つていゝか、春彦も實に手の着け樣がないらしかつた。これでは所詮助からないと覺悟したらしく、楓は泣いて姉を抱へあげた。

『さりとは淺ましい、酷たらしい。姉樣、死んで下さりまするな。』と、彼女は呼び活けるやうに姉に囁いた。

『いや、いや、死んでも憾はない。』と、桂は亂れた髮を掻きあげながら云つた。『この草の家で五十年百年生きたとて何とならう。たとへ半晌一晌でも將軍家のおそばに召出され、若狹の局といふ名をも賜はるからは、これで出世の望みもかなうた。死んでもわたしは本望ぢや。』

夜叉王は石のやうに默つてゐた。彼の眼はいつまでも假面の上に吸付いてゐた。桂は云ふだけのことを云つて、その顏を妹の膝の上に押附けてしまつた。おそろしい沈默は少時つゞいて、桂の微かな呼吸の聲と庭にすだく蟲の聲とが、却つて秋の夜の靜寂を添へるやうにも聞えた。と思ふと、その沈默を破るやうに、又一つの幻影が闇の中から掠き出して來た。それは先刻も見た修禪寺の僧で、その頭を袈裟に包んでゐた。

『大變ぢや、大變ぢや。隱まうてくだされ。』

轉けるやうに内へ駈込んだ彼は、足下に横はつてゐる半死半生の女につまづいて又驚いた。

『やあ、こゝにも手負が……。おゝ、桂どの……。こなたもか。』

『して、上樣は……。』と、桂は顏をふりあげて訊いた。

彼女の身代りが無效であつたらしいことは、わたしも前から察してゐたが、僧もやはり同じことを報告した。上樣ばかりでなく、近習の者共もみな斬死したと云つた。桂はそれぎりで又倒れてしまつた。

『これ、姉樣。心を確かに……。なう、父樣。姉樣がもう死にまするぞ。』と、楓は自分の膝から滑り落ちようとする姉を抱へながら、悲しげに父を呼んだ。

夜叉王の眼は初めて假面を離れた。彼の眼は歡喜に輝いてゐた。

『姉は死ぬるか。姉も定めて本望であらう。父もまた本望ぢや。幾たびか打直しても此面に、死相のあり/\と見えたのは、わが技の拙いのでない、鈍いのでない。源氏の將軍賴家の卿が斯うなるべき御運とは、今といふ今になつて初めて覺つた。神佛ならでは知し召されぬ人の運命が、先づ我作にあらはれしは、自然の感應と云はうか、自然の妙と云はうか、技藝神に入るとは眞にこの事であらうよ。伊豆の夜叉王は我ながら日本一ぢや、天下一ぢやよ喃。』

父は肩をゆすり上げて誇るやうに笑つた。

桂も苦しい息で快げに笑つた。

『わたしも職人の娘でない。日本一の將軍家に召されたお局樣ぢや。死んでも思ひ殘すことはない。この上は些とも早う上樣のおあとを慕うて、未來の御奉公……。父樣……。どなたにも既うお別れぢや。』

妹の膝から再び滑り落ちようとする娘の腕を、父はぐいと掴んで引き起した。

『やれ、娘。若い女子が斷末魔の面を後の手本に父が寫して置きたい。苦痛を堪へてしばらく待つてくれ。』

彼は春彦に指圖して、細工場から硯や紙を運ばせた。

『娘、顏をみせい。』

娘にはもう苦痛も無いらしかつた。彼女は妹夫婦に扶けられて、縁の傍へしづかに這ひ寄つて來ると、老いたる職人は筆を執つて一心にその顏を寫し始めた。うす暗い燈臺の灯は眞直

に燃えて、夜叉王の莊嚴な顏を神のやうに照した。

修禪寺の僧は口のうちで佛名を唱へた。

まぼろしの世界はこゝで消えてしまつた。明るい日の下には賴家の墓が横はつてゐる。墓の柱には彼の御神籤の箱がかゝつてゐる。眼の下には湯の町の煙が白く流れてゐる。わたしは晴い心持で宿へ歸るのが例であつた。

くどくも云ふ通り、これまで書いて來たのはすべて幻の世界の出來事で、恰も活動寫眞をながめると同じやうに、觀る人間と觀られる人物とのあひだには何の交渉を見出すことも出來ない。此方は默つて觀てゐるのである。先方は勝手に動いてゐるのである。それでも唯つた一度、ある夜の夢に夜叉王に逢つた。

「君は隨分ひどいぢやないか。いくら藝術家だつて、現在の娘が今死ぬといふ場合に、平氣でその顏を寫生してゐるのは……。」と、わたしは云つた。

老いたる職人は何にも返事をしなかつた。

しかし彼は嘲るやうな眼をしてわたしをじろりと視た。

風露集（七）

秋の暮

欠びする女衒の面や秋のくれ

秋の暮隣の時計かぞへけり

幽靈が渡しを呼ぶや秋のくれ

額田六福の新居を祝す

家を作り菊を作り詩を作れ

不眠症に惱みて

子鼠よ側に來てくれ夜半の秋

時事に感ず

誰が家ぞ鼠小僧を魂祭

瓜の番おのれも瓜を盜みけり

時雨

辻堂へ猿も逃げ込む時雨かな

景清の笠や時雨の五條坂

初時雨逢はで別るゝ夜なりけり

朝鮮にて虎に逢ひしといふ人の直話を聞きて

虎の口を逃れしと聞く寒さかな

雪の虎汝巴提便の名を知るや

下の關にて

鰒を賣る老爺平家を名乘れかし

雪と氷を題にして戀をよめる

君が名を雪に書きけり消えにけり

恨み寢の枕も床も氷かな

妻の病める時に

冬を怨む庭の殘菊宿の妻

吉野山の忠信

一山の僧犇くや雪の鷲

霜　氷　霰

川十里鷗の羽や苫の霜

朝霜やけふ初陣の武者震ひ

富士に湖一夜のうちに氷かな

詩人病めり筆も硯も氷る夜に

こま犬の顏に社頭の霰かな

人に寄す

思ひ草思はれずして枯れにけり

まぼろしの戀や越路の雪女

雪

那須の雪殺生石を埋めけり

關守は熊に喰はれぬ蝦夷の雪

山伏や雪に貝吹く羽黑山

雪の夜を四十七人急ぎけり

河豚　海鼠

ふぐを喰ふわれ失戀の人ならず

河豚の友馬肉の友をあざけりぬ

横にふる東京の雨や海鼠賣

兩國の秋

（一）

『今年の殘暑は隨分ひどいね。』

お絹は樂屋へ這入つて水色の𧘕𧘔をぬいだ。

八月なかばの夕日は孤城を圍んだ大軍のやうに、莚張りの小屋のうしろまで直寄せに押寄せて、すこしの隙もあらば攻め入らうと狙つてゐるらしく、破れた荒莚のあひだから黃金の火箭のやうな强い光を幾條も射込んだ。その燃える箭をふせぐ楯のやうに、古ぼけた金巾のピラや、小穢い脫捨ての衣服などが體裁なく掛つてゐるのも、狹い樂屋の空氣をいよ／＼暑苦しく感じさせたが、一座の頭のお絹が今あわたゞしく脫いだ舞臺の衣裳は、袂の長い薄むらさきの紋附の帷子で、これは見るから涼しさうであつた。

白の肌襦袢一枚の肌も露出になつて、お絹はがつかりしたやうに其處に坐ると、附添ひの小女が大きい團扇を持つて來て背後からばさ／＼と煽いだ。白い假面を着けたやうに白粉をあつく塗り立てたお絹の額際から頸筋にかけて、白い汗が幾條かの絲をひいて彈くやうに流れ落ちるのを、彼女は四角に疊んだ濕れ手拭で幾たびか煩さうに叩きつけると、高い島田の根が拔けさうにぐら／＼と搖いで、紅い藥玉のかんざしに銀の長い總がひら／＼と亂れて戰いだ。見たところは精々十七八の婀娜氣ない若粧りであるが、彼女がまことの曆は二十歳をもう二歳も越えてゐた。

『ほんたうにお暑うございますね。』と、小女のお君は團扇の手を働かせながら相槌を打つた。『暑いせゐか、木戸も閑なやうですね。』

『あたりまへさ。この暑さぢやあ、大抵の者は茹つてしまはあね。どうせこんな時に口をあいて見てゐるのは、田舍者か勤番者か陸尺ぐらゐのものさ。』

手拭で眼の縁を拭いてしまつて、お絹は更に小さい懷中鏡を把り出して、斑にはげかゝつた白粉の顏を照して視てゐた。

『中入りが濟むと、もう一度いつもの藝當を御覽に入れるか。忌だ、いやだ。からだが惡いとでも云つて、お若のやうに二三日休んで遣らうかしら。』

『あら、姐さんが休んだら大變ですわ。』と、お君はびつくりしたやうに眼を丸くした。

『お若さんが休んでゐるのはまだ可いけれど、姐さんに引かれちやあ、まつたく大變だわ。』と、茶碗に水を汲んで來た他の若い女が云つた。『あたし達はほんの前藝ですもの。』

『前藝で澤山だよ、この頃は……。ほんたうの藝當はもう少し涼風が立つて來てからのことさ。この二三日の暑さに中つたせゐか、あたしはまつたく身體が變なんだよ。』

『そりやあ陽氣のせゐぢやありますまい。』と、地彈きらしい年增の女が隅の方から忌に笑ひながら口を出した。『向柳原は、どうしたのかこの二三日見えないやうですね。』

『二三日どころか八月に這入つてからは、碌に寄附きやあしないのさ。畜生！ 覺えてゐるが好い。』

お絹は眼にみえない相手を罵るやうに呟いた。金地に紅い大きい花を毒々しく描いてある舞臺持の扇で、彼女は傍にある箱を焦れつたさうにとん／＼叩くと、箱の小さい穴から靑い頭の蛇がぬる／＼と首を出した。

『畜生！ お前の出る幕ぢやあないんだよ。』

扇で頭を一つ叩かれて、蛇はおとなしく首を竦めて箱の穴に隠れてしまつた。

『八つ中りね。可哀さうに……。随分邪慳だこと。』と、若い女が笑つた。

『あたしは邪慳さ。おまけにこの頃は癇が起つてじり〱してゐるから、彼の遠慮はないんだよ。』と、お絹は扇で又もや其箱を強く叩いたが、蛇はもう懲りたと見え、今度は首を出さなかつた。

『お察し申しますよ。』と、年増はすこし阿諛るやうに沁々云つた。『向柳原はほんたうに何うしたんでせう。まつたく不實ですね。そんな義理ぢやあないでせうが……。』

『義理なんか知つてる人間かい。』と、お絹は左も憎いもののやうに扇を投げ捨てた。『今に見るが好い。どんな目に逢はせるか。』

お君は左の手掌に一摑みの米をのせて來て、右の指先で一粒づつ摘みながら箱の穴のなかへ丁寧に落してやると、青い蛇の頭が又あらはれた。今年十五のお君ももう馴れてゐるとみえて、別に氣味の惡さうな顔もしてゐなかつた。

舞臺の方でかい、かち〱といふ拍子木の音がきこえると、お絹はそこにある茶碗の水を一息にぐいと飲みほして怠さうに起ちあがつた。お君はうしろに廻つて再び彼女に別の衣裳を着せかへた。今度は前と違つて、吉原の花魁の裲襠を見るやうな派手な絢爛しい扮裝で、眞紅な友禪模樣の長い裾が暑苦しさうに彼女の白い脛に絡みついた。お絹は緋縮緬の細紐を緩く締めながら年増の方を見かへつた。

『をばさん。けふは三味線が鈍かつたぜ。もう少し早間にね。好いかい。』

『はい、はい。』

簀をもう一度搔きあげて、お絹は悠々と樂屋を出ると、お君は蛇の箱をかゝへて其後について行つた。年増も三味線をかゝへて起つた。あとに殘つた若い女は、ほつとしたやうな顔をして、お絹が脱捨ての襦袢や帷子を疊み附けてゐると、今まで隅の方に默つて煙草を喫つてゐた五十ぐらゐの薄痘痕のある男が、さつきの蛇のやうに頭を擡げて這ひ出して來て、若い女に話しかけた。

『お花さん。姐さんはひどく御冠が曲つてゐるね。』

『大曲り。毎日みんなが呶鳴られ通しさ。遣切れない。』と、お花は舌打ちした。

『だが、無理ぢやあねえ。向柳原が近來の仕向け方といふのも些と宜しくねえからね。』

『まつたく豐さんの云ふ通りさ。けれども、姐さんも隨分無理を云つてあの人を窘めるんだからね。いくら相手がおとなしくつても、あれぢやあ我慢が續くまいよ。』

『それもさうだが……。』と、豐といふ五十男はどつちに同情して好いか判らないやうな顔をして又默つてしまつた。

この一座の姐さんと呼ばれてゐる蛇つかひのお絹には、仁科林之助といふ男があつた。林之助は御直參の中でも身分のあまり良くない何某組の御家人の次男で、ふとした機からこのお絹と親しくなつて、それが爲に實家をたうとう勘當されてしまつた。低い家柄に生れた江戸の武士としては、林之助は些とも木綿摺れのしない温順しやかな男であつた。相當に讀み書きもできた。殊にお家流を達者に書いた。

勘當された若い武士はすぐにお絹の家に引き取られた。お絹が可愛がつてゐるものは、林之助と蛇とであつた。かうして一年ほども仲好く暮してゐる中に、男はある人の世話で御小納戸衆六百五十石の旗本杉浦中務の屋敷へ中小姓として住み付くことになつた。窮屈な武家奉公などしないでも、お前さん一人ぐらゐは妾が立派

に逃してみせると、お絹はしきりに追つて止めたが、柔順な林之助も此時ばかりは無理に振切つて出て行つた。杉浦の屋敷は向柳原で、この兩國と餘り遠くもなかつた。それはお絹が可愛がつてゐる三匹の青い蛇がだん／＼に寒さに弱つてゆく去年の冬の初めであつた。

旗本屋敷の中小姓が重な勤務は、諸家への使番と祐筆代理とであつた。人品が好くてお家流を達者にかく林之助は、かうした奉公の人に生れ付いてゐたので、屋敷内の氣受けも惡くなかつた。屋敷へ入つてからも、林之助は用の間をみてお絹にたび／＼逢ひに來た。東兩國の觀世物小屋の樂屋へも時々に遊びに來た。それが今年の川開き頃から漸次に足が遠くなつて、お絹の家にも樂屋にも林之助の白い顏が見えなくなつた。焼けるやうな盛夏の暑さに向つて青い蛇は生々した鱗の色を甦らせたが、蛇つかひの顏には暗い影が始終絆つてゐた。

『どう考へても向柳原の仕打が其でねえやうだ。』と、豐は最後の判決を下した。『些とぐれえ姐さんが無理を云つたところで、そりやあ柳に受けてゐるだけの義理もあらうと云ふもんだ。なにしろ彼是れ一年の餘もあゝして世話になつた以上は……俺達のやうな斯んな人間でも人の世話になつたことは覺えてゐる。まして痩せても枯れても二本差してゐるんぢやねえか。堀川のお俊を惡く氣取つて、世話しられても恩に被ぬは、あんまり義理が惡からうと思ふが……。ねえ、どんなもんだらう。』

『そりやあ此方でばかり云ふことで、男の方の身になつたら又どんな理窟があるかも知れないからね。』と、若いお花は冷やかに云つて、扇で胸を煽いでゐた。

『お花さんは兎かくに男の方の贔屓ばかりするが、こりやあ些と可怪いぜ。』

『さうかも知れない。』と、お花はつんと澄ましてゐた。『向柳原は好い男だからね。』

『姐さんより年下だらう。』

『二歳違ひだから二十歳さ。』

『色男盛りだな。』と、豐は羨ましさうに云つた。

『世間に惚れ手も澤山あらあね。姐さんばかりが女でもあるまい。』

『悟つたもんだね。』

『悟らなくつて斯んな稼業ができるもんかね。姐さんはまだ悟が開けないんだよ。』

『さうかしら。だつて、蛇は執念深いといふぜ。』

『蛇と人間と一緒にされて堪るもんかね。』

『よう、よう。浮氣者。』と、豐は反り返つて手を拍つた。

『靜かにおしよ。舞臺へ聞えらあね。』

二人はだまつて耳を澄ますと、舞臺では見物の興を唆り立てるやうな、三味線の撥音が調子づいて賑やかにきこえた。

『姐さんはまつたくこの頃は顏色がよくないね。』と、豐は又さゝやいた。

『癇が昂ぶつて焦れ切つてゐるんだもの。あれぢやあ身體にも障るだらうよ。あんなにも男が戀しいものかね。』

『浮氣者にやあ判らねえことさ。』

『知らないよ。禿頭！ 畜生！ もゝんじい！』と、お花は扇を投げつけて笑つたが、また急に仔細らしく顏をしかめて舞臺の方を見かへつた。舞臺の三味線の音は吹き消したやうに鎭まつてゐた。

『おや、どうしたんだらう。』

見物のざわめく聲が俄にきこえた。舞臺の上をあわてゝ駈けてゆく足音もみだれて響いた。一種の不安に襲はれた二人は思はず腰を浮かせて舞臺の樣子を窺はうとするときに、小女のお君が顏色を變へて樂屋へ駈け込んで來た。

「大變！　姐さんが舞臺で倒れて……。」

ふたりも飛び上つて舞臺へ駈け出した。

二

向兩國の觀世物小屋でこんな不意の出來事が人を驚かしたのは、文化三年の江戸の秋ももう一日で丁度最中の月を觀ようといふ八月十四日の午の七つ下りであつた。座がしらのお絹が舞臺で突然に倒れたので、見物も樂屋の者も一時は驚いたが、お絹はすぐに樂屋へ擔ぎ込まれた。あとは前藝のお花がすこし繋いでゐて、それから太夫病氣の口上を述べて、いつもよりは早目に打出した。

お絹がほんたうに人心地の付いたのはそれから半時ばかりの後で、醫師はやはり暑氣中りだと云つた。しかし左のみに心配するほどのことではない、かうして安靜に寢かして置けば自然におちつくに相違ないと氣つけの藥をくれて行つた。はじめは非常に驚かされた木戸の者も樂屋の者もこれで漸くおちついて、見舞の口上などを云つてだん／＼に歸つた。お絹はもう眼を明いてゐたが、それでもすぐに起きる元氣はなかつた。枕邊には前藝のお花と小女のお君のほかに地彈きのお辰と樂屋番の豐吉とが殘つてゐた。樂屋には他にもう一人お若といふ前藝の女があるのだが、これも暑氣中りで二三日前から休んでゐた。その上にお絹が又病氣引きといふことになれば、この小屋は明日から休むよりほかはないと、關係の者はすぐに明日の糧を氣配つたが、かうなると皆んなも蘇生つたやうな氣になつた。

「まあ、まあ。なにしろ好かつた。この二三日はあんまり殘暑が酷いからさ。おまけにこの樂屋は些とも風が這入らないんだからね。」

お辰は病める太夫の枕邊をそつと離れて、樂屋のうしろに垂れてゐる蘆簾を少し押分けると、ゆふ日の光はもう山の手の高臺に隱れて、下町の空は薄い淺黄色に暮れかゝつてゐた。上流から一艘の家根船が徐かに下つて來て、大川の秋の水は冷やかに流れてゐた。近所の小屋もみな打出したとみえて、世間は洪水のあとのやうにひつそりして、川向うの柳橋や棧橋で人を呼ぶ甲走つた女の聲が水にひゞいて遠く聞えるばかりであつた。

「それでも日が落ちると、ずつと秋らしくなるね。」と、お辰は舊の枕もとへ復つて來た。さうして、お絹の蒼ざめた頰に團扇の風を輕く送りながら、その力のない瞳を覗き込むやうにして訊いた。

「氣分はどうですえ。もう快いの。」

お絹は首肯くやうに眼をかすかに動かした。今お辰に聲をかけられるまで、彼女の魂は夢と現の境にさまよひながら、男と自分との樂しい過去や、切ない現在や、悲しい未來や、さまざまの戀の姿を胸の奥に描いてゐたのであつた。

林之助が杉浦の屋敷へ住み付くときに、お前は再び武士になつて此のわたしを何うして呉れると念を押したら、それは決して心配するな、時節が來れば屹と夫婦になる。蛇つかひの足を洗つて相當の假親をこしらへて、仁科林之助の御新造樣と呼ばせてみせると、男は重い口で自分に誓つた。併しそれは一時の氣休めで、自分が武家の女房になれようとは思へなかつた。自分でもなりたいとは思はなかつた。こゝで一旦手を放せば、自分が摑んでゐる男は鳥のやうに逃げてしまつて、おそらく再び自分の手へは戻るまい。所詮男と自分との緣は無いものだと、お絹は止めても止まらない男を出して遣るときに、心の底では悲しく諦めてゐた。

併し男はその後もたび／＼逢ひに來てくれた。さうして、時節を待つてくれ、きつと夫婦になると繰返して云つた。いくら嬉しいと思つ

でも、お絹は宿屋の女房にはなれなく
なかつた。それでも男がそれほどに自分を思つ
てゐて呉れると云ふことに就いて、彼女は云ひ
知れない樂みと誇りを制へることは出來なかつ
た。彼女は泣きながらもやはり林之助に惚れ拔
いてゐた。男が此頃些とも寄附かないのを、彼
女は病氣になるほどに怨んでゐた。

上の御用が忙がしいので屋敷が拔けられな
い。さういふ餘儀ない事情があるのを知りなが
ら、男を怨むほどに初心でもない、沒分曉でもな
いと、お絹は自分で自分の値踏みをしてゐた。
併し林之助が姿をみせないのは他に理由があ
るらしい。その疑ひが彼女の胸に強い根を張つ
て、若しそれが果して事實ならば、男を扼殺し
て遣りたいほどに口惜しく思ひ詰めてゐた。う
たがひ相手はやはりこの兩國の列び茶屋の
お里といふ娘で、その店へ時々に林之助が入込
んでゐるといふ噂を、お辰やお花の口から彼女
の耳にも囁かれた。勿論、茶屋へ行つて茶を飲
んだからと云つて不思議はないが、この頃自分
のところへ些とも寄附かないといふ事實に照し
あはせると、それが深い意味を有つてゐるやう
に疑はれないでもなかつた。お絹の疑ひは一
日增しに根強くなつて、もう此頃ではどうして
も然うなければならないと思はれるやうになつ
て來た。

「今に證據を見つけて遣る。」と、彼女は心の
うちで叫んでゐた。お辰やお花にも探索をさせつ
て、お里の店の樣子を絶えず探らせようとして
ゐた。

今も夢うつゝで其事ばかりを考へてゐた。もう
少し涼しくなると、彼女は鱗形の浴衣を着付け
た紅い振袖をきて、劇で見る清姫のやうな姿に
なつて、舞臺で蛇を使ふことがある。自分が丁
度その姿で男を追ひ掛けてゆくと、兩國の川
が日高川になつて、自分は蛇になつて泳いでゆ
く。そんな姿が幻のやうに彼女の眼の前にあ
らはれた。と思ふと、自分の可愛がつてゐる青
い蛇が忽ち一丈あまりの大蛇になつて、林之
助とお里の二人を卷き殺さうとしてゐる。男と
女は悲鳴をあげて苦しみ悶いてゐる。そんな怖
ろしい景色が、活き機關のやうに彼女の眼の
前に展開された。その機關の道具は又變つて、林
之助と自分とが日傘をさして、長閑な春の日に
兩國橋を睦まじさうに手をひかれて渡つてゆ
く……。

それは悲しいか、怖ろしいか、氣味が好いか、
嬉しいか、お絹もそれを判然と意識するには頭
が餘りにぼんやりしてゐた。

「もう一度お藥を飲みませんか。」と、お君が聲
をかけた。

お絹は又もや微かに首肯いた。藥を飲まされ
て、あたりが少し明るくなつたやうに思はれた。
彼女は肱をついて試みに起き直つてみた。もう
眩暈がするやうなことはなかつた。先刻は舞臺
で蛇を頭に卷いてゐると、その蛇がだん〳〵に
強く絞め付けて來るやうに思はれて、遂には眼
が眩んで氣が遠くなつた。それから樂屋へ擔ぎ
込まれるまで、彼女はなんにも知らなかつたの
である。多年可愛がつて使ひ馴らしてゐる蛇が
自分を絞める筈がない、まつたく夢の中で眼
が眩んだものだと、お絹はその當時のあとさき
を覺束ない記憶の中から呼び出した。

「もう何ともありませんか。」と、お花も見守つ
て訊いた。

「もう大丈夫、みんなも心配したらうね。堪忍
しておくれよ。」と、お絹は案外にはき〳〵した
聲で云つた。

「歩いて歸れますか。駕籠でも呼んで貰ひませ
うか。」と、お花は又訊いた。

「さうねえ。」

お絹は鳩尾をかゝへるやうに俯向きながら

考へてゐたが、ふと何物かが其の眼前を閃いて過ぎたやうに、屹と顔をあげた。

『なに、もう好いだらう。あたし、あるいて歸るよ。すぐ其處だもの。』

醉ざめの人のやうに、まだ何となくふら／＼する足元を踏みしめて、お絹は花瓣のやうな紅い衣裳を脱ぐと、肌襦袢は氣味の悪いほどに冷たい汗に浸されてゐた。お君に身體を拭かせて、島田を解いて結び髪にして、お盥の水で顔を洗つて、彼女は自分の浴衣に着かへた。ほかの者もみな歸り支度をした。後片附をしてゐる豐吉だけを樂屋に殘して、女達四人は初めて外の風に吹かれた。

殘暑は日の中のひとしきりで、暮に近づくと大川端には涼しい夕風が行く水と共に流れてゐた。高く澄んだ空には美しい玉のやうな星の光が、二つ三つぱつちりとかゞやいて、十四日の月を孕んでゐる本所の東の空は朱[illegible]したやうに薄明るかつた。川向うの列んだ茶屋ではもう軒提灯に火を入れて、その限り無い蠟燭の火影が水に流れて黄く搖めいてゐるのも、水邊の夜らしい秋の氣分を見せてゐた。

『おやあ、お大事に……、あした又……。』

お辰とお花はお絹に挨拶して別れた。お花は歸途に深川のお若の家へ寄つて、病氣の樣子をみて來ると云つた。

『さうしてお呉れよ、あたしだつて又何時倒れるか知れないから。』

お絹はお君に蛇の箱を持たせて本所の方へ行きかけたが、すぐに立止まつて明るい廣小路の方を顎で指して示した。さうして、兩國橋の方へ引返すと、お君も素直に附いて行つた。

外の涼しい風に吹かれて、お絹は拭つたやうに爽快な氣分になつたが、それでも足元はまだ何となくふら付いてゐるので、時々に橋の欄干に凭りかゝつて、なにを見るとも無しに川の面をみおろしてゐた。一體どこまで行く積りか、お絹には鳥渡見當が付かなかつた。

橋を渡り盡してお君も初めて覺つた。お絹は列んだ茶屋の不二屋を目指してゐるらしく、軒提灯の涼しい灯のあかりを横ぎつて通つた。まだ宵ながら其處らには男や女の笑ひ聲がきこえて、麥湯の匂ひが香ばしかつた。不二屋の軒提灯をみると、お絹は火に吸ひ寄せられた灯取蟲のやうに、一直線にその店へ這入つて行つた。ふたりは床几に腰をかけると、若い女がお茶を汲んで來た。それが娘のお里でないことはお絹も知つてゐるので、更に身をねぢ向けて店のなかを窺ふと、お里はほかの床几の客となにか笑ひながら話してゐた。

お里は今年十八で、兎かくに色々の浮いた噂を立てられ易いこゝらの茶屋娘のなかでも、初心でおとなしい女といふ評判を取つてゐることはお絹も疾て聞いてゐた。林之助は今年二十歳になるけれども、まるで生息子のやうな温順しい男であつた。おとなしい男と温順しい女――お絹は林之助とお里とを結びつけて考へなければならなかつた。彼女は默つて茶を飲みながら、絶えず後目遣ひをして、お里の髪形から物言ひや立振舞をぬすみ視てゐた。

『大分に涼しくなりましたねえ。』と、お君は我知らずに口から出たやうに云つた。

今年は殘暑が強いので、お絹もお君も周圍の人達もみな白地を着てゐた。その白い影がなんとなく薄寂しく見えるほどに、今夜の風は俄に秋らしくなつた。

三

お絹は茶代を置いて床几を起つた。

『もう些とこゝらをぶら付いて見ようぢやないか。』と、彼女はお君を見返つた。『それにしてもお腹が空いたね。何處へ這入つても仕様がないか

ら、そこで鰻でも喫べようか • つまらないことを考へてゐると人間は痩せるばかりだ。些と暖つこいものでも喰つて肥らうぢやないか。」

「あら、姐さん肥りたいの。」と、お君は暗いなかで驚いた顔をしてゐるらしかつた。

「お前さん肥る方が好いよ。あたしのやうな痩せつ法師だと、さつきのやうに直に打ち倒れるよ。」

かういふ中にもお絹の眼には、小肥りに肥つて稍や括れ顎になつてゐる若いお里の丸顔がありありと映つた。地藏眉の下に鈴のやうな眼をかゞやかしてゐる人形のやうな顔——それがお絹には堪らなく可愛く思はれると同時に、堪らなく憎いものにも思はれた。

「何だつて彼はあいつの顔を態々見に行つたんだらう。」

ひよつとするとそこに林之助を見つけ出すかも知れないと思はないでもなかつたが、お絹はそれよりも先づなんとなくお里の様子が見たかつたのであつた。見て何うするといふこともない。まさかに喧嘩を賣るわけにも行かない。大儀な足を引摺つて長い橋を渡つて、飲みたくもない茶を飲みに來たのは、自分ながら馬鹿馬鹿しいやうにも思はれた。お絹は列び茶屋の夜店の前を通りぬけて、廣小路最寄の小さい鰻屋の二階へ上つた。

『もう氣分はすつかり快いんですか。』と、お君は又訊いた。

「あゝ、もう大丈夫だよ。」

お君に酌をさせて、お絹は酒を飲んだ。酒は舌に苦いやうで味がなかつた。やつぱり身體が快くないのかしら——かう思ふと彼女はそゞろに寂しくなつた。女も二十二にもなつて、殆ど人交ひも出來ないやうな、こんな稼業をしてゐて、末はどう成行くことであらう。去年の冬に林之助と別れてから、お絹はめつきりと肉の衰へを感じるやうになつた。先刻のやうなことが度々續いたら——と、彼女はうしろの壁に映る自分の痩せた影法師を思はず見返らなければならなかつた。

燭臺の蠟は音もせずに流れた。明日の十五夜の用意であらう、小さい床の間には一束の薄が生けてあつて、その仄白い花のかげには悲しい秋がひそんでゐるやうに思はれた。お絹はいよいよ寂しくなつた。

「君ちやん。なんだか陰氣だから、そこの窓をお開けよ。」

お君が明けた肱掛窓から秋の夜風は水のやうに流れ込んだ。こつちの隣の廣小路の土藏の白壁は今夜の月に明るく照されて、屋根の瓦には露のやうなものが白く光つてゐた。お絹は林之助が發句を作ることを不圖思ひ出した。あしたの晩は月を觀て名月やなどと頻りに首を捻ることだらうと可笑しいやうにも思はれた。それとなくお里と約束して、どこへか月見にでも行くだらうかと、急に腹立たしくもなつた。

こんな子供を相手にしても仕方がないとは思ひながらも、お絹は御神籤を探るやうな氣でお君に訊いてみた。

「お前、林さんが不二屋へ行くと思ふかい。さうして、あのお里さんと仲好くしてゐると思ふかい。」

「そんなこと知りませんわ。」と、お君は喫べかけた鰻の尻尾を口から出したり入れたりしながら答へた。「だけれども、そんなことは無いでせう。誰だつて本當に見た人はないんですもの。お花さんは誰のことでも然う云ふんですから。」

お花にそんな癖のあることは事實であつた。男と女とが少し馴々しく詞をかはしてゐると、お花は必ずこれを意味ありげに解釋しなければ氣が濟まなかつた。林之助とお里との名を結

ひつけて、お絹の前に黒い影を投げ出したのもお花が第一の口切りであつた。しかしお花が自分に對してそんな無責任な譃を吐かうとは、お絹も流石に信じられなかつた。

『譃ですよ。きつと譃ですよ。』と、お君は鰻を嚥み込んでしまつて又云つた。

子供は正直である。正直なお君の口からかういふ保證の詞を聽かされて、お絹は便りないなかにも何だか心强いやうにも感じた。苦い酒も無理に飲んでゐるうちに幾らか醉が廻つて來て、自分一人でいくよ〳〵考へてゐても詰らないといふやうな浮いた氣も起つた。このあひだから自分の小屋へ足近く見物に來る若旦那風の男があつて、それは淺草の質屋の息子だとお花が話したことも思ひ出された。その男もまんざらの男振ではないなどとも考へた。自分が舞臺から情の籠つた眼を投げれば、彼を捕虜にすることは左のみむづかしくもないと云ふやうな一種の誇心も起つた。さうは思つてもやはり林之助が戀しかつた。

お絹とお君が夜露に濡れて一つ目の家へ歸り着いたのは、その夜の四つ頃午後八時であつた。家には毎日留守番をたのむ隣家のお婆さんが睡さうな顔をして待つてゐた。お婆さんはお土産の折を貰つて喜んで歸つた。

『君ちやん。戸をお閉めよ。もうすぐに寢ようぢやないか。』

『はい。』

お君は素直に格子を閉めに行つた。お君は近所の大工の娘で、家の都合が好くないのと、現在の母は生みの親でないのとで、去年からお絹の家へ弟子とも奉公人とも付かずに預けられてゐるのであつた。繼しい母の手に育てられただけに、年の割には何かとよく氣が注くので、お絹も彼女を可愛がつてゐた。

『お休みなさい。』

睡い盛りのお君は床に這入ると直に又たゝき起された。寢ぼけ眼を擦りながら格子をあけて出ると、外には若い男が忍ぶやうに立つてゐた。隣と隣との庇合から落ち込んで來る月のひかりを浴びて、彼の横顔は露を帶びたやうに白く見えた。

『あら、林さん。』

『大變に早寢だね。』と、林之助は笑つてゐた。

『姐さんはもう寢たのか。』

お君にあとを閉めさせて、林之助はずか〳〵と奧の六疊へ通ると、お絹はもう寢床から脱け出してゐた。林之助は主人の使で割下水まで來たので、その歸途に鳥渡寄つてみたのだと云つた。お君が火消壺からまだ消えない火種を拾ひ出して來ると、林之助はとりあへず一服喫つた。

『どうしたい。顔の色が惡いぢやないか。』

『けふは舞臺で倒れたの。』

『そりやあいけない。どうしたんだ。』

『なに、すぐに癒つたの。やつぱり暑氣中りだつてお醫師がさう云つて……。』

『なにしろ、大事にするが好いぜ。惡いやうならば無理をしないで、二三日休んで養生した方がいゝだらう。』

『いゝえ、それほどでも無からうと思つてゐるの。いつそ一思ひに死んだ方が好いかも知れない。』

こんな問答をしてゐるうちにも、お絹は眼にみえない何物かを相手の顔色から見出さうと努めてゐるやうに、絶えず其顔をぢつと見つめてゐると、男は女の瞳を恐れるやうに行燈の暗い方へ眼を反けてゐた。女はこの頃の無沙汰に就いて正面から男を責めようともしなかつた。男も云ひそゝくれたやうな風で、自分からは何にも云ひ出さなかつた。お絹は長い煙管で徐かに煙草を喫つてゐた。

『あたし、考へると、先刻あのまゝで死んでし

まつた方が仕合せだつたかも知れない。生きてゐたところで、あんまり面白い世の中でも無し、一思ひに死んでしまつた方が未練が残らなくつて好い。」
二日目には死にたいと繰返していふお絹の料簡を、林之助も大抵は察してゐた。そんなことを云つて自分の気を引いて見るのだと云ふことは能く判つてゐた。こゝでうつかりして返事をすると、それを云ひがかりに執念深く絡みついて来るお絹のいつもの癖を知つてゐる彼は、成るべく逆はないやうに避けてゐるのを唯一の楯と心得てゐるので、今夜もおとなしく黙つて聴いてゐた。
「但ちやん。お酒は無いかい。」と、お絹は次の間へ声をかけた。
「いや、さうしちやあ居られない。もうすぐに帰らなけりやあならないんだ。あんまり無沙汰をしてゐるから唯鳥渡寄つて見たのさ。もう五つ過だ。早く帰らなけりやならない。御用人が中々やかましいから。」と、林之助は煙草入をそろそろ仕舞ひかゝつた。
「それだから屋敷者は忌さ。あたしがあんなに止めたのに、お前さんなぜ行つたの。御用人に叱られたつて構はない。屋敷をしくじるやうに、表はふだんから知つてゐるんだから。」
『冗談ぢやあねえ。』と、林之助は仕方無しに笑つた。「いつも云ふ通り、おれも武士の子だ。いつまでもお前の厄介になつて喰ぶら／＼してゐるのもあんまり口惜しい、どうにかまあ自分だけの身じんまくは自分でしなけりやあならないと思つて、窮屈な屋敷奉公も我慢してゐるんだ。おれの料簡も今にわかる。まあ、お互ひにもう少しの辛抱だ。」
『へん、久しいものさ。』
お絹は煙管を取つて又すひ始めた。さうして、横眼で男の顔をじろ／＼睨めてゐた。その蛇のやうな眼が男には怖ろしかつた。お絹は色の蒼白い細面で、長い眉と美しい眼とを有つてゐた。林之助も昔はその妖艶な瞳の力に魅せられたのであつた。しかもだん／＼深く馴染むに連れて、殊に一つ家根の下に朝夕一緒に暮すやうになつてから、彼女の妖艶な眼の底に云ひ知れぬ一種の怖ろしい光の忍んでゐることを林之助は漸く発見した。自然の生れ付か、あるひは多年弄んでゐる蛇の感化か、いづれにしてもお絹が蛇のやうな凄い眼を有つてゐることは争はれなかつた。お絹が天明五年巳年の生れであると云ふことも思ひあはされて、林之助は次第にいよ／＼怖ろしくなつた。かれが再び、屋敷へ武家生活に立戻らうと思ひ立つたのも、實はこの怖ろしい眼から逃れようとするのが第一の目的であつた。
併し林之助は彼女の怖ろしい眼を恐れると同時に、彼女のあたゝかい情を忘れるほどの不人情者ではなかつた。彼はお絹を裏切らうとは思はなかつた。さりとて余りに接近するのも不安であつた。約めて云へば不即不離といふやうな甚だ曖昧な態度で、二人の関係を相變らず繋ぎとめて行かうと考へてゐるのであつた。然し斯うした不徹底な態度を取るといふことは、決して相手を満足させる方法ではなかつた。お絹の胸に色々のうたがひや嫉みの芽を吹くのも無理ではなかつた。
今夜もそのおそろしい眼と向き合つてゐる。林之助は努めて相手の視線の外に逃れ出ようと眼を背けてゐるのも、彼としては殊によんどころない事情であつた。それが久振りで逢つたお絹にはなんだか物足りないやうな、冷たいやうな、疑はしいもののやうに思はれてならなかつた。
二人は又しばらく黙つてゐた。縁の下では蟲の聲がきこえた。

四

「林さん。お前さん、おたがひに斯うしてゐて詰らないとお思ひでないかえ。」

お絹は徐かに煙管を叩きながら、又しても男のこゝろを探るやうな疑ひ深い眼をして訊いた。林之助も眞面に向き直らないわけに行かなくなつた。

「詰る、詰らないの論ぢやない。いつも云ふ通り、今がお互ひの辛抱時だ。そりやあ斯うして離れてゐれば、おれだつて寂しいこともある。お前だつてあゝ詰らないと思ふこともあるだらう。併しそこが辛抱だよ。おれだつていつまで斯うしちやあ居ない。その中にはだん／＼出世して給人か用人になれまいものでもない。その曉にはお前を引取るとも、又おまへが窮屈で忌だと云ふならば窃と何處かへ圍つて置くとも、そりやあ又どうにでも仕樣があらうと云ふものぢやあねえか。」

林之助の云ふことは大道占ひの講釋のやうに譃で固めてゐた。彼の奉公してゐる杉浦中務の屋敷は六百五十石で、旗本のうちでも先づ歴々の分に數へられてゐるので、用人や給人はすべて譜代である。渡り奉公の中小姓などが並大抵のことでその後釜に据られる譯のものではない。林之助も無論それを知らない筈はなかつたが、この場合、先づこんなことでも云つて女の手前を繕つて置くよりほかはなかつた。

さうした氣休めはもう幾たびか聞き慣れてゐるので、お絹も身に沁みて聽かうとはしなかつた。併しそんな見え透いた嘘を吐いてまでも、自分の機嫌を取るやうに努めてゐるらしい男の心はやはり憎くなかつた。

「だけど、お前さん、お歴々の御旗本の御用人様が兩國の橋向うの蛇つかひを御新造にする。そんなことが出來ると思つてゐるの。」

「表向きは無論できねえ理窟さ。だから、一旦綺麗に足を洗つて置いて、それから相當の假親を拵へりやあ又何うにか故事附けられると云ふもんだ。又それが小面倒だとすれば、今も云ふ通りどこへか圍つて置く。つまり二人の末長く添ひ遂せりやあ、それで別に理窟はねえ筈だ。」

これも去年の冬から何度繰返してゐるか判らない。お絹も何度聽いてゐるかわからない。二人が額を突きあはせれば、いつもこの同じやうな問題を中心にして、男は的になりさうもないことを云ひ、女も的にならないことを知りながら澁々納得してゐる。その間には云ひ知れない悩みと寂しさとを感じてゐながらも、お絹は切るに切られない絲に引摺られてゐた。

今夜、お絹にはまだ他に云ひたいことがあつた。列び茶屋のお里のことが胸一ぱいに支へてゐながらも、流石に正面から切出すのを差控へてゐなければならなかつた。それでも何とかして、この新しい問題を解決した上でなければ、男を今夜このまゝに歸したくないので、彼女はだまつて俯向きながら、林之助を無理にひきとめる手だてを色々に工夫してゐた。

男も立端を失つたやうに、一度しまひかゝつた煙草入れを又明けて、細い銀煙管から薄い煙を吹かせてゐたが、その吸殻をぽんと叩くのを機會に、今度は思ひ切つて起ちあがつた。

「まあ、からだを大事にするが好い。又近いうちに來るから。」

「列び茶屋へばかり行かないでね、些とこつちへも來てくださいよ。」

思ひ餘つたお絹の口から忌味らしい一言がわれ知らず滑り出ると、林之助は少し顔をしかめて立停まつた。

「列び茶屋へ行く……。誰が……。」

『お前さんがさ。みんな知つてゐるよ。』
乘りかゝつた船で、お絹もから云つた。
『へん、つまらねえことを云ふな。』
問題にならないと云ふやうな顔をして、男はすい／＼出て行かうとした。その後姿をぢいつと見つめてゐるうちに、お絹は物に憑かれたやうに俄にむら／＼と氣が昂つて來た。彼女は不意に起ちあがつて長火鉢の角につまづきながら、蹌けかゝつて男の肩に齧み付いた。
『林さん。おまへさん、隨分薄情だね。』
だしぬけに鋭いヒステリックの聲を浴びせられて、氣でも違ひはしないかと云ふやうに、林之助は呆氣に取られた顔をしてお絹をみると、彼女の凄愴い眼は上吊つてゐた。その聲はもう嗄れてゐた。
『お前さん、あたしといふものを何うして呉れる積りなの。おまへさんを屋敷へ遣つた以上は、どうせ二人のあひだに長い正月のないことは妾も大抵あきらめてゐたけれども、眼と鼻の廣小路へ來て列び茶屋の娘とふざけ散らしてゐる。そんなことをされて、おとなしく見物してゐる妾だと思つてるのかえ。』と、お絹は早口に云つた。『いつも云ふ通り、蛇は執念深いんだから、さう思つておいでなさいよ。』
『列び茶屋の娘……。そりやあ思ひもつかねえ滿足だ。なるほど友達の交際で、列び茶屋の不二屋へ、此中ちよい／＼遊びに行つたこともあるが、なにも乙に絡んだことを云はれるやうな覺えはねえ。から見えてもおれは大川の水、あつさりと清いものだ。』
『惡く、お洒落でないよ。』と、お絹は男の肩を一つ小突いた。『お前さんが不二屋のお里とトチ狂つてゐることは兩國でみんな知つてゐるんだよ。さあ、これからあたしと一緒に不二屋へ行つて、あたしの眼の前でお里と手を切つておくれ。』
林之助はいよ／＼煙にまかれた。彼が友達と一緒に此頃列び茶屋へ入り込むことは事實であつた。不二屋のお里とも馴染であつた。併しどう考へてもお絹からこんな難題を持掛けられるやうな疚しい覺えはなかつた。
『馬鹿だな。誰かにしやくられたと見える。』
と、林之助はなまじひ辯解をしない方が却つて自分の潔白を證明するかのやうに唯輕く笑つてゐた。
それでもお絹はどうしても肯かなかつた。彼女はまつたく氣でも狂つたやうに男にむかつて遮二無二食つてかゝつて、邪が非でもこれから不二屋へ一緒に行けと云つた。彼女の蛇のやうな眼はいよ／＼凄愴くなつて、眼眦には薄紅い血が滲んで來たやうにも見えた。辯解するよりも、宥めるよりも、林之助は一刻も早くこの怖ろしい眼から逃れなければならなかつた。彼は挨拶もそこ／＼にして、悸えた心をかゝへながら格子の外へ逃げるやうに出て行つてしまつた。
『あれ、姐さん。』
跣足で追つて出ようとするお絹を、お信は轉げるやうに駈けて來て抱き止めた。
『姐さん、お待ちなさいよ。林さんはもう遠くへ行つてしまつたわ。』
お絹は燃えるやうな息を吐いて土間に突つ立つてゐた。
『姐さん、譃よ、譃よ。お花さんの云ふことはみんな譃よ。林さんはなんにも知りやあしないのよ。列び茶屋の娘なんて皆んな譃よ。きつと譃に相違ないのよ。』
譃といふ字を幾つも列べて、お君はおど／＼しながらも一生懸命にお絹をなだめようとすると、お絹は解けかゝつた水色の細紐を長く曳きながら上り框へ頽れるやうに腰を落した。
『寢衣の儘でこんなところにゐると惡いわ。早く内へお這入んなさいよ。』

臺所から雜巾を持つて來て、お君はお絹の足を綺麗に拭いてやつて、六疊の寢所の方へ劬りながら連れ込んだ。お絹は枕を抱へるやうにして蒲團の上に俯伏したが、その痩せた肩に大きい波を打つてゐるのを、お君は不安らしく眺めてゐた。

『さつきのお藥をあげませうか。』

『好いよ、好いよ。あたしに構はずに寢ておしまひよ。』と、お絹は煩ささうに俯向きながら云つた。

お君は起つて格子を閉めに行つたが、やがて引返して來てお絹の枕もとに坐つた。緣の下で蟋々と刻んでゆくやうな蟲の聲が又もや耳についた。どこかの隙間から忍び込んで來る夜の冷たい風に、行燈のうす紅い灯が微かにちろ／＼と搖らめいて、痩衰へた秋の蚊がその火影に迷つてゐた。

『もうお前、お寢よ。あしたの朝、睡いから。』

『あたし、今夜は起きてゐますわ。』

『あたしはもう快いんだよ。』

『でも、こんなに癪が昂つてゐて何んなことがあるか知れませんもの。姐さん、ほんたうに身體を大事にしてくださいよ。』

『好いよ、判つてるよ。』と、お絹は邪慳に叱りつけた。叱られてもお君はまだそこに悄然と坐つてゐた。露地のなかで犬の聲がきこえたので、もしや林之助が又引返して來たのではないかと、お君はそつと起つて行つて雨戸の外に耳を澄ましたが、犬の聲は漸次に遠くなつて、溝板の上には誰も忍んでゐるやうな氣配もきこえなかつた。

『誰か來たの。』と、お絹は急に顔をあげた。

『いゝえ。』と、お君は枕邊へそろ／＼と又戻つて來た。

『お前、好加減にしてお寢よ。』

『えゝ。』と、お君はまだ澁つてゐた。

『云ふことを聞かないと承知しないよ。』

枕をつかんで叩き付けさうな權幕をみせても、お君はまだ強情に動かなかつた。默つて坐つてゐる彼女の小さな眼からは白い雫がほろほろと流れてゐた。それを見ると、お絹は急に堪らなくなつたやうに、蒲團の上から滑り出してお君の身體を横抱きにしつかりと抱へた。

『君ちやん、堪忍しておくれよ。あたし、この頃はとき／＼に癪が起るんだからね。もうなんにも叱りやあしないよ。ね、ね、好いだらう。これからいつまでも仲好くしようね。』

お君の濕れた顔をぢつと見つめながら、お絹は自分も子供のやうにしく／＼泣き出した。なんとも云ひ知れない悲しさが胸の底から滲み出して、お君も抱かれながらに啜り泣きを止めなかつた。

五

お絹のおそろしい眼から逃れた林之助は、大川端まで來て初めてほつとした。十四日の大きい月は中空に眞丸く浮き上つて、その影を涵してゐる大川の波は銀を溶かしたやうに白くかがやきながら流れてゐた。長い橋の上には、雪駄の音もしないほどに夜露がしつとりと冷たく降りてゐた。林之助はその濕つた夜露を踏んで急ぎ足に橋を渡つて行つた。

『門番の老爺に又忌な顔をされるのか。』

そんなことを考へながら林之助は廣小路へ出ると、列び茶屋でももう提灯をおろし始めたとみえて、どこの店でも床几を片附けてゐた。玉蜀黍や西瓜や枝豆の殼が散らかつてゐるなかを野良犬がうろ／＼さまよつてゐた。

『今晩は。今お歸りでございますか。』

自分の前をゆく若い女がふと振向いて丁寧に挨拶したので、林之助も足を停めてよく視ると、女は不二屋のお里であつた。

「じやあ、今晩は。里ちやんの家はこつちへ行くの。」

「えゝ、外神田で……。」

向柳原へ歸る男と外神田へ歸る女とは、途中まで肩をならべて歩いた。お絹から思ひもよらない疑ひを受けてゐる林之助は、かうして夜更にお里と繋がつて歩いてゐることが何だか疚しいやうに思はれてならなかつた。併し先方から馴々しく近寄つて來るものを、まさかに置去りにして逃げて行くほどの野暮にもなれなかつた。二人は輕い冗談などを云ひながら連立つて歩いた。

「好いお月樣ですことね。」と、お里は明るい月を左も神々しいもののやうに仰いで視た。

「ほんたうに好い月だ。明日のお月見はどこも賑やかいだらう。里ちやんも船か高臺か、いづれ御約束があるだらうね。」

「いゝえ、家がやかましうござんすから。」

家が嚴しいのか、本人の生れ付か、兎にかくにお里が物堅い初心な娘であることは林之助も認めてゐた。彼はお絹の妖艶な顏とお里の人形のやうな顏とを比較して考へた。執念深さうな蛇の眼と無邪氣らしい鈴のやうな眼とを比較して考へた。さうして、なんにも知らずに人から呪はれてゐるお里が氣の毒にも思はれた。

お絹は今夜自分を不二屋へ引措つて行つて、彼女の見る前でお里と手を切らせると云つた。勿論、それは一時の云ひ懸りではあらうが、もし果してその通りに二人が不二屋へ押掛けて行つたら、お里は一體どうするであらう。それを考へると、林之助は可笑しくもあり、又氣の毒でもあつた。そのお里はなんにも知らずに自分と一緒にあるいてゐる。人目には妬ましく見えさうなこの姿を、お絹が見たらなんと思ふであらう。林之助は自分のうしろから蛇の眼がぢいつと覗いてゐるやうに戰かれて、俄にあたりを見まはすと、明るい月は頭の上から二人をみおろして、露の沁み込んだ大道の上に二つの影繪を黒く描いてゐた。夜ももう更けてゐるらしかつた。

「いつも一人で歸るの。」

「いゝえ。」

列びの茶屋の某家に奉公してゐるお久といふ女がやはりお里の近所に住んでゐるので、毎晩誘ひあはせて一緒に歸ることにしてゐたが、今日はその女が店を休んだので、お里は伴を失つて寂しく歸る途中であつた。彼女が贔屓の林之助に聲をかけたのも、畢竟は歸途のさびしい爲であつた。この頃、柳原の堤に辻斬が出るといふ物騒な噂があるので、お里はそんなことを云ひ出して身が竦むほどに顫へてゐた。それは闇夜のことで、晝のやうに明るい月夜に辻斬などが濫多に出るものではないと、林之助は力をつけるやうに云ひ聞かせた。向柳原へ歸る彼は、堤の中途から横に切れて神田川を渡らなければならなかつた。

「わたしはあつちへ行くんだから、こゝでお別れだ。まあ、氣を注けて……。」

「はい。ありがたうございます。」と、お里は賴りないやうな聲で挨拶した。それが何となしに哀れを誘つて、林之助はいつそ彼女の家まで一緒に送つて行つて遣らうかとも思つたが、自分も屋敷の門限を氣遣つてゐるので、この上に道草を食つてゐるわけには行かなかつた。そのままお里に別れて橋を渡り過ぎながら不圖みかへると、堤の柳は夜風に白く靡いて、稲荷の祠の大きい銀杏の梢に月夜鴉が啼いてゐた。白地の浴衣を着て俯向き勝ちに歩いてゆくお里の後姿がその柳の葉がくれに小さく見えた。

五六間もゆき過ぎたかと思ふと、あづま下駄のあわただしい音が、背後から林之助を追つて來た。振向いてみると、それはお里であつた。彼女

女は林之助にわかれると急に寂しく心細くなつたので些とぐらゐ廻り路をしても好いから、自分も柳原堤を眞直に行かずに、林之助と一緒に向柳原へ廻つて、それから外神田へ出ようと云ふのであつた。ふたりは又一緒にあるき出した。

『しかし向柳原まで來ちやあ餘程の廻り路になる。ぢやあ寧そわたしがお前の家まで送つてあげよう。』と、林之助も見かねて云ひ出した。

お里も最初は辭退してゐたが、仕舞には男のいふことを肯いて、外神田の家まで送つて貰ふことになつた。月はいよ〱冴え渡つて、人通りの少ない夜の町をさまよつてゐる唯つた二人の若い男と若い女とを鮮明に照した。ふたりの肌と肌は夜露に濕れて、冷たいまゝに寄添つてあるいた。歩く途次で、お里は自分の身の上などを少しばかり話し出した。

お里は不二屋の娘ではなかつた。不二屋の株を有つてゐる婆さんはもう隱居して、日本橋の某女が揚錢で店を借りてゐる。お里はその女の遠縁に當るので、一昨年の夏場から手傳ひにたのまれて、外神田の自宅から毎晩通つてゐるが、内氣の彼女は餘りそんな稼業を好まない。自宅にはお德といふ母があつて、これも娘に浮いた稼業をさせることを好まないのであるが、幾らか稼いで貰はなければならない生計向の都合もあるので、仕方が無しに娘を兩國へ通はせてゐる。七年前に死んだ惣領の息子が今まで達者でゐたらとは、母が明暮れに繰返す愚癡であつた。

『餘計な御世話だが、早くしつかりした婿でも貰つたら好ささうなもんだが……。』と、林之助は慰めるやうに云つた。

『なんにも株家督があるぢやあ無し、なんでわたくし共のやうな貧乏人のところへ婿や養子に來る者があるもんですか。』と、お里はさびしく笑つた。『自分ひとりならば寧そ堅氣の御奉公にでも出ますけれど、母を見送らないうちは然うもまゐりません。』

お里の聲は濕んできこえたので、林之助はそつとその横顔を覗いてみると、彼女は月の光から顔をそむけて袖の先で眼頭を拭いてゐるらしかつた。おとなしい林之助の眼にはそれが惨らしく悲しく見えた。さうして、かういふ哀れな娘を呪つてゐるお絹の氣ちがひ染みた妬みが腹立たしいやうにも思はれて來た。

不二屋へ毎晩這入り込む客の八分通りは皆なこのお里を的にしてゐるのであるが、彼女が斯うした悲しい寂しい思ひに沈んでゐることは恐らく夢にも知るまい。現に自分を誘つてゆく諸屋敷の若侍達も、どうだ、好い旦那を世話して遣らうか。などと時々に戯つてゐる。自分も毒にならない程度の冗談を云つてゐる。お里は丸い顔に可愛らしい靨をみせて好加減に相手になつてゐる。それは茶屋女の習と林之助も今まで何の注意も拂はずにゐたが、今夜は彼女の身の上話をしみ〲と聞かされて、もう迂濶と詰らない冗談も云へないやうな氣になつて、林之助もおのづと眞面目な話相手にならなければならなくなつた。

二人の話聲はだん〱に沈んで行つた。問はれるに從つて、お里は色々のことを打明けた。七年前に死んだ兄のほかには殆ど賴もしい親戚もないと云つた。不二屋のおかみさんも遠緣とは云へ、立入つて面倒を見てくれるほどの親身の仲でもないと云つた。母は賃仕事などをしてゐたが、それも病身で近頃は止めてゐると云つた。お里の話は氣の弱い林之助の胸に沁みるやうな悲しい賴りないことばかりであつた。

林之助は自分と列んでゆくお里の姿を今更のやうに見返つた。紅い切をかけた大きい島田

髷が重さうに彼女の頭をおさへて、房々した前髪に插まれた鼈甲の櫛やかんざしが夜露に白く光つてゐた。白地の浴衣にこの頃流行る麻の葉絞りの紅い帶は、十八の娘をいよ／＼初々しく見せた。林之助はもう一度お絹とくらべて考へた。お里は兎かく俯向き勝ちに歩いてゐるので、その白い横顏を覗くだけでは何となく物足らないやうにも思はれた。

『どうもありがたうございました。さぞ御迷惑でございましたらう。』

外神田まで送り付けて、路の角で別れるときにお里は繰返して禮を云つた。自分の家はこの横町の酒屋の裏だから、雨のふる日にでも遊びに來てくれと云つた。それが一通りのお世辭ばかりでもないやうに林之助の耳に甘く囁かれた。まんざらの野暮でもない林之助は、阿母に好きなものでも買つてやれと云つて、いくらかの金を渡して別れた。お里は貰つた金を帶に挾んで、幾たびか見かへりながら月の下を辿つて行つた。

お里に別れて林之助は急に肌寒くなつた。夜もおひ／＼に更けて來るので、彼は向柳原へ急いで歸つた。歸る途中でもお絹とお里の顏が混亂になつて彼の眼のさきに閃いてゐた。

一お絹に濟まない。

お絹の眼を恐れてゐる林之助も、お絹の心を憎まうとは思へなかつた。彼は義理を知つてゐた。彼はお絹の濃やかな情を忘れることは出來なかつた。お絹が兎角に苛々して、やゝもすると途方もない氣ちがひ染みた眞似をするのも去年の冬以來のことで、つまり自分が彼女の家を立退いてからの煩ひである。現に今日も舞臺で倒れたといふ。林之助は近ごろ彼女のところへ些とも寄附かなかつた自分の不實らしい仕向方を悔まずにはゐられなかつた。無論、屋敷の御用も忙がしかつた。友達の交際もあつた。しかし無理に遣繰れば何うにか時間の偸めないこともなかつた。ひとに對つては何と上手に辯解をしようとも、自分の心にむかつては立派に辯解することができないやうな、うしろ暗い自分の行爲を林之助は自分で咎めた。

誰に水をさゝれたのか知らないが、お絹が飛んでもない疑惑や嫉妬に心を狂はせるといふのも、つまりは自分が無沙汰に無沙汰をかさねた結果である。世間には片輪の女房を有つてゐる夫もある。大あばたの女と仲好くしてゐる男もある。うす氣味の惡い蛇の眼を自分ばかりが恐れ嫌ふのは間違つてゐる。これからは先つ自分の心を持ち直して、お絹のみだれ心を鎮める工夫をしなければならない。自分と、お絹と、蛇と、この三つは引離すことの出來ない因果であると悟らなければならない。さうは思ひ極めながらも、林之助が睫毛の塵ともいふべきは彼のお里の初々しいおとなしやかな顏容であつた。それがなんと無しに彼の眼先を暗くして、お絹一人を一心に見つめて居ようとする彼の瞳の邪魔をした。

屋敷の門前へ來て再び空を仰ぐと、月は遠い火の見櫓の上にかゝつて、その裾に一刷毛掃つたやうな白い雲の影が薄く流れてゐた。かういふ景色は能く繪にあると林之助は思つた。

六

十五夜のあくる日は雨になつて、殘暑は大川の水に押流されたやうに消えてしまつた。二十八日は打止めの花火といふので、柳橋の茶屋や船宿では二十日頃からもう其準備に忙がしさうであつたが、五月の陽氣な川開きとは違つて、秋の花火はおのづと暗い心持が含まれて、前景氣がいつも引き立たなかつた。江戸名物の一つに數へられる大川筋の賑ひも今年はこれが終りかと思ふと、心なく流れてゆく水の色にも冷た

い秋の姿が浮んで、うろ〳〵船の灯の數が宵々ごとに減つてゆくのも寂しかつた。

雨國の秋——お絹はその秋の哀れを最も悲しく感じてゐる一人であつた。十四日の夜以來、林之助は思ひ出したやうに足近くたづねて來た。併しいつもそは〳〵して忙がしさうに歸つて行つた。十日のあひだに四日も訪ねて來たが、しみ〴〵と話をする間もないやうに急いで歸つてしまつた。

『人焦らしな。いつそ來てくれない方が好い。』と、お絹は物足らないやうな愚痴をいふこともあつた。

『來なければ來ないで恨をいふ、來れば來るで愚痴をいふ。困つたお孃樣だ。』と、林之助は笑つてゐた。

まつたく林之助のいふ通り、どつちにしてもお絹には不足があつた。男が屋敷奉公をやめて、再び自分の手許へ戻つて來ない限りは、ほんたうに胸の休まる筈はないと自分でも思つてゐた。男を引戻したい、引戻したい。お絹は明けても暮れても唯それぱかりを念じてゐた。そんなら去年なぜ出して遣つたかと自分のこゝろに訊いてみても、確かな返事を受取ることが出來なかつた。去年は悲しく諦めて離れた——而もいよ〳〵離れてみると戀ひ死ぬほどに懷かしくなつて來た——お絹は去年おめ〳〵と男を出して遣つた自分の愚な心を、笞ちたいほどに罵り悔まずにはゐられなかつた。

『お菓子は如何です。』

五十を二つ三つも越したらしい女が駄菓子の箱をさげて樂屋へ竊と這入つて來た。明後日が花火といふ二十六日の午過ぎで、お絹が例の水色の社袢をぬいで中入に一服喫つてゐる所であつた。

『相變らずお市か捻鐵だらうね。』と、前藝のお若が蒼い顏を突き出した。お若は病氣が癒つて五六日前からやう〳〵舞臺へ出るやうになつたのであつた。

『お前さん、隨分意地が綺麗だね。まだお醫師の藥を飲んでゐる癖に……。』と、そばからお花も摺り寄つて來た。さうして、『姐さん、如何。』と、笑ひながらお絹に訊いた。

『澤山。』と、お絹は重さうに頭を振つた。『だけども、みんなが喫べるならお喫べよ。代は一緒に拂つてあげるから。君ちやん、お前もたんとお喫べ。』

『どうも御馳走さま。』

みんなが一度に挨拶して、お若もお花もお君も、地彈きのお辰も、樂屋番の豐吉も、數にあつまつて來る鯉のやうに四方から菓子の箱を取りまいた。菓子賣はこゝらの觀世物小屋の樂屋へ入込んでゐるお此といふ女であつた。姐さんの客といふので、みんながこゝを先途と色氣なしにむしや〳〵食つてゐるのを、お絹は箱に凭りかゝりながら默つて離れて眺めてゐた。

『おまへさん、列び茶屋へも行くんだね。』と、お花は菓子を食つたあとの指を舐めながらお此に訊いた。

『はい。まゐります。』

『不二屋へも行くだらう。』

『はい。』

お花はお絹に眼配せをしながら、何喰はぬ顏でお此にまた訊いた。

『お前さん、あの不二屋の里ちやんといふ子を知つてゐるだらう。』

『おとなしい姐さんでございますね。』

『あの子に、此頃情人が出來たつてね。』

『さあ、そんなことは存じませんが……。』と、お此は笑つてゐた。

『向柳原の方のお屋敷さんだつて云ふぢやあないか。』と、お花も笑ひながらカマを掛けた。

「おまへさん、毎日行くんだもの、知つてゐるだらう。」
お此の返事は曖昧であつた。單に向柳原の屋敷者といへば大勢あるが、お絹の男も向柳原にゐることをお此はかねて知つてゐた。その男が彼の不二屋へ遊びにゆくこともお此はやはり知つてゐた。こゝでうつかりしたことを饒舌つて、どんな當り觸りがないとも限らない。諸方へ出入りする自分の商賣上、なるべくこんな問題には關り合はない方が怜悧だと思つたらしく、お此は巧みにお花の問を避けて、明後日の花火の噂などを始めた。
先刻から少しく眼の色の變つてゐたお絹は、もう焦れつたくて堪らないといふ氣色で、凭りかゝつてゐた箱をかゝへながら衝と起つて、お此の膝の前に詰寄るやうに坐つた。
「お此さん。」
その權幕が激しいので、相手は狼狽へた。
『は、はい。』
『向柳原と云へば大抵判つてゐるだらう。あたしの許の林さんのことさ。あの人が此頃むやみに不二屋へ行く。きのふも一昨日も一々昨日も、這入り込んでゐたと云ふが本當かえ。さうして、あのお里と云ふ子と可怪いと云ふのもほんたうだらうね。」
お此は返事に困つたやうな顏をしてゐた。しかし果して林之助とお里とのあひだに情交があるか無いか、そんなことは彼女にも鑑定は付かないらしかつた。お此はまつたく何にも知らないと正直さうに答へた。
林之助とお里との問題については、お花は最初から情交ありげに吹聽してゐる一人であつた。現にけふも榮屋へ來て、林之助が此頃毎日のやうに不二屋へ這入り込むといふ新しい事實を誇張的にお絹に報告した。その矢先へ丁度お此が來合せたのであるから、並大抵の辯解ではお絹はどうしても承知しなかつた。
「お此さん、おまへさんも強情を張らないで、知つてゐるだけのことは云つておしまひよ。さ、」
お花も傍から口を出して責めた。
『だつて、お前さん。あたしがその本人ぢやあるまいし、人のことが何うして判るもんですかね。そんな無理なことを……。』
半分云ふか云はないうちに、お絹は默つてお此の腕をつかんだ。
「あ、姐さん。どうなさるんです。ひどいことを……。」
振放さうと藻掻くお此の腕を、お絹は押へるばかりに片手でしつかり摑みながら、片手で箱をとん／＼と叩くと、穴のなかから青い蛇が長い首を出した。お絹はその鎌首を摑んで、ずるずると引き出して、お此の顏の先へ突きつけた。
「さあ、云はないか。」
お此は眞蒼になつて口も利けなかつた。彼女は死んだ者のやうになつて唯はい／＼してゐると、お絹は凄惨い眼をして冷笑つた。
「おやあ、隱さずに云ふんだ。なんでも好いからお前さんの知つてゐるだけのことを云つておしまひよ。」
世にもおそろしい蛇責に逢つては、お此も降參するの外はないと觀念したらしい。自分の知つてゐるだけのことは何でも云ふから、兎もかくもその蛇をしまつて呉れと詫びながら頼んだ。
「お前さん、知らない筈がないぢやあないか。お前さんがお里の家のすぐ近所にゐると云ふことも、あたしはちやんと知つてゐるんだよ。」
お絹は嘲けるやうに睨んだ。蛇を摑んでゐる手はまだ袂の下に隱してゐた。
お絹が根掘り葉掘りの詮議に責められて、お此も知つてゐるだけのことを何でも答へた。しかし

十四日の月を踏んでお里が林之助に送られて歸つたことは、二人のほかに知る者はなかつた。お此も無論知つてゐなかつた。お絹がお此を殘酷に虐んで、やう〳〵聞き出した新しい事實は、以前よりも此頃はお里の店へ林之助が足近く通つて來ると云ふだけのことに過ぎなかつたが、それだけのことでもお絹の胸の火を煽るには十分であつた。

『お此さん、ありがたうよ。』と、お絹はわざと落付いたやうな聲で云つた。『もう其外にお前さんの知つてゐることは何んにも無いんだね。』

林之助がどんな着物を着てゐたとか、どんな菓子を買つて食つたとか、お里にどんな冗談を云つたとか、茶代は幾らぐらゐ置いたらしいとか、そんなことまで殘らず饒舌り盡してしまつたお此は、もう此上は怖ろしい蛇を頸に卷き付けられても、何にも口から吐き出す材料はなかつた。

『後生ですからもう堪忍して下さい。まつたく何にも知らないんですから。』と、お此は手を合せないばかりにして、自分に詐りのないことを訴へた。

『もう好いでせうよ。姐さん。』

お花も見かねて取りなし顔に云つた。自分が先立になつてお此を責めたのではあるが、蛇責の酷い拷問には彼女もさすがに驚かされた。罪のないお此をそれほどに窘めるのも可哀さうだと思つたので、お花も仕舞には却つてお絹をなだめる役に廻つたのである。

「あんまり窘めて濟まなかつたね。こりやあお菓子の代だよ。」

二朱の銀をお絹から貰つて、お此は又おどろいた。お絹は剩錢は要らないと云つた。

『その代りお前さんに傳言を賴みたいんだがね。不二屋のお里に逢つたらば、これから林さんを一切寄せ付けないやうにして呉れと、さう云つておくれ。好いかい。よく忘れないやうにお里に云つておくれよ。若し此後も相變らず不二屋に林さんの姿を見掛けるやうなことがあると……。

青い蛇の首がお絹の袂の下から出た。

『あたしはこれを持つてお里のところへお禮に行くからね。』

『姐さんばかりぢやあない。あたし達も加勢に行くよ。』と、お花も一緒になつて嚇した。嚇されてお此はまた縮み上つた。

『冗談ぢやあない、本當にこれでお里の頸を絞めてやるから。』と、お絹の白い手のさきには蛇の頭が氣味惡く蠢いてゐた。

お此は二朱の銀を頂いて早々に逃げて歸つた。

七

『まあ、誰から來たんだらうね。』

大きい鮓の皿を取りまいて、樂屋中の者が眼を見あはせてゐた。お此が嚇されて歸つたあとへ、木戶番の又藏が鮓屋の出前持と一緒に樂屋へ這入つて來て、お絹さんへと云つて其の鮓の皿を置いて行つた。

『誰が呉れたの。』と、お花が訊いた。

「あとで判りやす。」

又藏は笑ひながら行つてしまつた。お遣ひ物の主は結局判らなかつた。併しこんなことはさのみ珍らしくもないので、みんなは今まで駄菓子をさん〲咬つた口へ更に鮪や鰶や海苔まきを遠慮なしに押込んだ。お絹も無理に勸められて海苔卷を一つ食つた。

「けふは御馳走のある日だつたね。」と、地彈きのお辰は海苔の附いた口唇を拭きながら、鐵漿の黑い齒をむき出して笑つた。

「みんな姐さんのお蔭さ。」と、お若も茶をのみながら相槌を打つた。

「それでも好く出てきてくれたわね」

男が促した。帯を締めたまゝで突立つて、お花に酌をさせて一口飲んだ。お花が取持顔に何かと色々の話を仕向けると、男も輕い口で受けた。

男は淺草の和泉屋といふ質屋の伜で、千次郎といふ道樂者であつた。吉原や深川の酒の味ももう嘗め盡きて、この頃は新しい歡樂の世界をどこにか見出さうと焦つてゐる彼の眼に、ふと映つたのは南國のお組であつた。彼は自分の物好に自分で興味を有つて、この美しい蛇つかひの女に接近しようと努めた。樂屋への遣ひ物、木戸番への鼻藥、それもとゞこほりなく行き渡つて、今夜こゝでお組と盃を交しあはせるまでに手順好く運んだのである。彼は可なりに飲める口とみえて、二人の女を向ふへまはして頻りに杯を流行らせてゐた。

男振もまんざらではない、道樂者だけに容子も野暮ではない。お花が頻りに褒めちぎつてゐるのも、あながちに慾心からばかりでもないことをお組も承知してゐた。彼女が今夜こゝへ呼ばれて來たのも幾分か浮いた心も伴つてゐないでもなかつた。どうせ林之助とは添ひ遂せる仲ではない。殊に男は不二屋のお里の方へ兎かく引き付けられるやうになつてゐる。自分だけお人好しに苦勞してゐるよりは、此方とは面白く浮かれて見るも好い。と、自暴も手傳つた氣まぐれから、今夜も頓にお花に誘ひ出されたのであつた。偖し來てみると、やはり面白くないことが多かつた。

第一には此家の女中たちの素振が面白くなかつた。彼等は自分の素性を薄々知つてゐるらしく、口へ出してこそ何とも云はないが、蛇つかひの女を卑しむやうな、忌み嫌ふやうな氣色をあり／\と見せてゐた。自分の商賣の立派なものでないことは、自分自身も無論承知してゐるので、彼女も人に向つて、自己の身分を誇らうとは思つてゐなかつた。しかし彼等から侮蔑むやうな素振を眼のあたりに見せつけられると、お組は堪忍がしきれなかつた。彼等とても大名高家の奥樣ではない、多寡が茶屋小屋の女中ではないか。その女中風情に卑められるのは如何にも口惜しいと、彼女の神經はむら／\と起つた。

それから更に面白くないのは千次郎の態度であつた。なるほど道樂者だけに話も面白い。すべての取廻しも野暮ではない。併しその野暮でないのを衒かすやうな所に、お組には堪らないほど不快の點が多かつた。所詮彼の胸には色の戀のと名付けられるやうな可愛らしいものを有つてゐるのではない。單に一種の變り物を賞翫するやうな心持で自分を弄ばうといふに過ぎないことも、お組にはよく見透された。

女中達に對する不平と、千次郎に對する不快と、この二つがお組を驅つてしたゝかに酒を飲ませた。彼女は大蛇のやうに息もつかずに飲んだ。そばに觀てゐるお花はだん／\に蒼ざめてゆく彼女の顏色に少しく不安を懷いて來た。

『あの、お前さん。あんまり飲むと毒ですよ。』

『いくら飲んだつて好いよ。あたしが飲むんぢやないから。』と、眼付のいよ／\凄愴くなつて來たお組は、左の手には杯を持ちながら、右の手で袂を弄つてゐた。

それを見てお花はいよ／\不安に思つた。もしや先刻のお此の二の舞をこゝで演るつもりではあるまいか、彼女はすこし膝行り出てお組の楯になつた。よもやこゝまで蛇を連れて來る筈もあるまいとは思ひながら、彼女はそつとお組の袂を探らうとすると、お組は眼を瞋らせてその手を強く弾き退けた。

『なにをするんだよ。人の袂へ手を遣つて…。お前、巾着切かえ。』

『なんだ、なんだ。袂に大事の一卷でも忍ばせてあるのか。』と、千次郎は笑つた。

『えゝ、大事なものよ。おまへさんに見せて上げませうか。あたしの袂に忍ばせてあるのは商賣道具の青大將よ。』

傍にゐた女中達は、いゝ、と云つて飛び上つた、まだ其正體を見とゞけない中に、千次郎も顏色を變へて起ち上つた。お絹は冷笑ひながら兩方の袂を輕く振つてみせた。

『ほら、御覽なさい。大丈夫。だが和泉屋の若旦那。おまへさんは隨分賴もしくないのね。あたしの商賣がなんだと云ふことを今初めて知つたんぢやありますまい。それを承知の上でこゝまで呼び出して置きながら、蛇と聽くと直ぐに怖毛を振つて逃腰になるやうぢやあ、とても末長くお交際はできませんね。ねえ、花ちやん。それを想ふと、向柳原はやつぱり可愛い所があるね。なにしろ蛇とあたしと一緒に小一年も仲好く暮したんだからねえ。』

お絹はもう行儀よく坐つてゐられないほどに醉ひ頽れてゐた。彼女は片手を疊に突いて、ぐつたりと疲れた人のやうに、痩せた肩で大きい息を吐いてゐた。

『ねえ、花ちやん。向柳原はまつたく賴もしいね。家を勘當されても、浪人しても、蛇とあたしと一緒に暮してゐたいと云ふんだからね。あたしも今夜といふ今夜つくづく悟つたよ。女がほんたうに可愛いと想ふ男は、一生に唯つた一人しか見付からないもんだね。どう考へても浮氣はできない。花ちやん。お前、なんだつてあたしをこんな所へ連れて來たんだえ。えゝ、口惜しい。』

彼女はお花の膝に獅嚙み付いたかと思ふと、更にその胸倉をつかんで無暗に小突きまはした。相手が醉つてゐるので、お花は何うすることも出來なかつた。女中達はおどろいて燭臺を片寄せた。

『負へねえ狂女だ。』と、千次郎も持餘したやうに苦笑ひをしてゐた。

『姐さん。あやまつた、あやまつた。堪忍、堪忍……』

お花は小突かれながら頻りに謝ると、お絹は相手を突き放して蹶然と起ちあがつた。亂れた髮は黑い藻のやうに彼女の蒼い顏を鎖して、その間から物凄い二つの眼ばかりが草隱れの蛇のやうに光つてゐた。

『あたし、もう歸りますよ。誰がこんな所にゐるもんか。駕籠を呼んでくださいよ。』

八

向島を出たお絹の駕籠は四つ頃(午後十時)に、向柳原の杉浦家の門前におろされた。垂簾をあげて這ひ出したお絹はよろけながら下駄を突つかけて立つた。提灯の火かげにぼんやりと照された彼女の顏はまだ蒼かつた。暗い夜で、雨氣を含んだ低い雲の間にうす白い銀河が微かに流れてゐた。

駕籠屋には何にも云はないで、お絹はよろよろと潜り門の前へあるいて行つた。門にはもう錠が卸されてゐて、闇に白い彼女の拳が幾たびか其扉に觸れると、傍の出窓から門番の老爺が首を出した。

『どなた……。』

門番は大きく呼んだ。

『あたしですよ。』とお絹は答へた。『仁科林之助さんに逢はしてください。』

『門限を御存じないか。』

『それでも急用なんですよ。早く明けてください。後生ですから。』

その媚いた口吻に門番も不審を打つたらしい。やがて行燈を持ち出して來て、窓のあひだから表の人の立姿を仔細らしく照して視た。

『急用でも夜はいけない。あした又出直して來さつしやい。』

『焦れつたい人だねえ。用があると云ふのに……。』

『おまへは一體誰だ。どこの者だ。』と、門番は聲を尖らせた。

『林之助の女房ですよ。』

『林之助殿の女房……。』

『だから、早く逢はしてください。』

『では、待たつしやい。』

門番は不承不承に奥へ這入つた。お絹は古い門柱へ倒れるやうに倚りかゝつて、熱い息を噴いてゐると、眞暗な屋敷の奥では火の廻りの木の音が刻むやうに遠く響いて、どこかの草の中からがちや／＼蟲の聲もきこえた。

やがて潜り門の錠をあける音が嗄めいて、暗い中から林之助の白い姿が浮き出した。林之助は白地の寢衣を着てゐた。

『林さん。』

聲をかけて寄らうとするお絹を、男は押戻すやうにして門の外へ出た。ふたりは長屋の窓下を流れてゐる小さい溝の縁に立つた。溝の石垣のなかにも蟋蟀がさびしく鳴いてゐた。

『おい、どうしたんだ。今時分こんなところへ出て來て……。』と、林之助は小聲で叱るやうに云つた。

『お前さんに逢ひたくつて……。』

『馬鹿……。』と、林之助は又叱つた。

武家奉公の林之助が兩國の蛇つかひに馴染があるなどと云ふことは勿論祕密にしなければならない。どんなことがあつても屋敷へたづねて來てはならないと豫て固く云ひ含めてあるのに、夜中だしぬけに御門を叩いて自分をよび出しに來るとは、あんまり遠慮がなさ過ぎると、林之助は呆れて腹が立つた。

『どうせ馬鹿ですから堪忍してください。妾、今夜はどうしてもお前さんに逢ひたくつて、逢ひたくつて……。』

その酒臭い息と、縺れた舌とで、女はひどく醉つてゐるのを林之助は早くも覺つた。憖ひとこでぐづ／＼云つてゐるよりも、だまして早く追ひ返した方が無事らしいと氣が注いて、彼はそこに待つてゐる駕籠屋を呼んだ。

『おい、おい。この女は大分醉つてゐるやうだ。氣をつけて送つてくれ。お絹、いづれ明日逢つて詳しい話を聽くから、今夜はおとなしく歸つてくれ。』

『あい。』

それとも何か急に用でも出來たのか。』

返事に困つてお絹はぼんやりと默つてゐた。不圖した浮氣からお花に誘ひ出されたが、さて行つて見ると面白くないことだらけで、胸の懊惱に堪へないお絹は、その反動で林之助が遮二無二戀しくなつた。飛び立つほどに逢ひたくなつた。殊に酒には絶か醉つてゐるので、彼女は前後の考へも無しに自分の駕籠をこの屋敷まで送らせたのであつたが、來てみると別に用はない。彼女は林之助の顔を見ると、張りつめた氣が急に弛んで、狐の落ちた人のやうにぼんやりしてしまつた。それでも直におとなしく歸らうとはしなかつた。

『お前さん、今夜出られないの。』

『どこへ行くんだ。』

『あたしの家へ……。』

もう一度『馬鹿』と云ひたいのを林之助は咽喉へのみ込んで、今夜これから出るわけには行かない。明日はこつちから屹と訪ねて行くから待つてゐろと賺すやうに云ひ聞かせて、無理に女の手を把つて駕籠に乘せようとすると、お絹は男の腕へぶら下るやうにして、處女のやうな婀娜氣ない甘えた聲で云つた。

『林さん。妾、これからは何でもお前さんのい

ふことを素直に聞きますからね。不二屋へ行つちやあ忌よ。え、よくつて。』

『承知、承知。』

銀河はいつか消えて、うす白い雲の光ほどこにも見えなかつた。お絹を乗せてゆく車体の幌を、影の寄せた稲妻が弱く照して、袖をかきあはせて立つてゐる林之助の寝衣の襟に、秋の夜露が冷々と沁みて来た。

『遅い。門を開けさせて、気の毒だつたな。』

門番に挨拶して林之助は自分の部屋へ帰つた。寝際を起された彼は眼が冴えて再び眠られなかつた。お絹は今夜なにしに来たのであらう。恐らく酒に酔つた勢いで唯なにが無しにこゝへ押掛けて来たものと解釈するより外はなかつた。この頃だんだんに気ちがひ染みて来たお絹の乱れ心を林之助は悲しく、浅ましく思つた。これがいよいよ昂じて来たら何を仕出すかも判らない。真昼間このこの玄関へ乗り込んで来るかも知れない。その時には自分の身はなんとなる。林之助は去年のさびしい浪人生活を思ひ出さずにはゐられなかつた。お絹の凄い眼に絶えず見つめられてゐる怖ろしさと苦しさとを恐れずにはゐられなかつた。

お絹は自分を[illegible]所の家へ再び引戻さうと念じである。冗談ではあらうが、屋敷をしくじるやうに祈つてゐると云つたこともある。或は今夜を手始めに、これから度々こゝへ押掛けて来て、所詮この屋敷には居堪まれないやうに仕掛けるのではあるまいかと、林之助は又疑つた。時節を待てとあれほど云つて聞かせてあるのに、まだ判らないのかと林之助は腹立たしくもなつた。彼は又もやお絹とお里とをくらべて考へた。お絹と深く馴染む前に、なぜ早くお里を見付け出さなかつたのであらうと今更のやうに悔まれた。さうして、二日目には不二屋のことを云つて執念深く絡みかゝるお絹の嫉妬が煩くなつた。おれはどうしても蛇の眼から逃れることが出来ないのであらうか。これも因果と諦めて仕舞はなければならないのであらうか。おれは忌らしい蛇の纏めを解いて、ほんたうの女と人間らしい恋をすることは出来ないのであらうか。

『取殺すなら、殺してみろ。』

かういふ口の下から、彼は云ひ知れぬ恐怖に襲はれて、とてもお絹の呪ひに堪へられないやうな不安をも感じた。これまでの義理も捨てられなかつた。煩いとは思ひながらも、その情の濃い味ひを忘れることはできなかつた。考へ疲れた彼のあかつきの夢は、胸へ這ひあがつて来る青い蛇に魘された。

あくる朝はなんだか気分が快くなかつた。ゆうべ能く眠られなかつたのと、寝衣で夜露に打たれたのとで、身体が鈍いやうにも思はれた。お絹をたづねる約束をはつきり記憶してゐながらも、林之助は早朝から屋敷を出てゆく元気もなかつた。その中に主人の使で牛込まで行かなければならないことになつたので、彼はたうとう両国橋を渡る機会を失つてしまつた。

『留守に又押掛けて来やあしまいか。』

危みながら帰つて来たが、お絹も今日は姿を見せなかつたらしい。誰もたづねて来なかつたといふ門番の話を聴いて林之助は先づほつとした。その日は一日陰つてゐて、夕方から霧のやうな雨がしとしとと降つて来た。急に袷が欲しいほどに涼しくなつて、疝気持の用人はもう温石を買ひに遣つたなどと云つて、蔭で若侍達に笑はれてゐた。

雨はその晩から明くる日まで降り通した。けふの花火はお流れであらうと、林之助は雨の音を侘しく聴いた。さうして、雨の降る日にでも遊びに来て呉れと、このあひだの晩お里に囁かれたことを思ひ出した。併し彼はどうしてもお

築地の方へ行かなければならないと思ひ直した。けふも午下りでなければ出られなかつたので、八つ（午後二時）少し前に屋敷を出て、冷たい雨のなかを兩國へ急いだ。

打止めの花火を雨に流された兩國の界隈は、惨めなほどに寂れてゐて、列び茶屋も大抵は床几を積みあげてあつた。野天商人もみな休みで、こゝの名物になつてゐる蟒の大蛇や鰐の蒲焼の匂ひも嗅ぐことはできなかつた。秋の深くなるのを早く悲しむ河岸の柳は、毛のぬけた女のやうに薄い鬢を振りみだして雨に泣いてゐた。荷足船の影さへ見えない大川の水はうす暗く流れてゐた。

林之助は暗い心持で長い橋を渡つた。

九

今頃自宅へ行つてもゐないことを知つてゐるので、林之助はお絲を東兩國の小屋にたづねると、お絲もお君も見えなかつた。お絲はきのふの朝から氣分が悪いのを無理に押して樂屋へ這入つたが、どうしても中途で我慢ができなくなつた。このあひだのやうに舞臺で倒れるやうなことがあつては大變だと皆んなも心配して、中入前に自宅へ送つて歸したが、それから續いて氣分も勝れないで、今日もたうとう休むことになつた。折角の書入れ日に雨は降る、姐さんには休まれる、いや散々ですと、樂屋番の豐吉がこぼし抜いてゐた。

『まあ、一服お喫んなさいまし。』

豐吉に煙草盆を出されて、林之助も直には起たれなかつた。殊に樂屋中の者とも皆んな顔を識り合つてゐるので、彼は濕つぽい座蒲團の上に片膝をおろして、煙草をすひながら二言三言詰らないことを話してゐた。豐吉を除いて、ほかの女達は流石にそれ／＼小綺麗な單衣を着てゐたが、それでも滅切り涼しくなつたと寂しさうにいふ彼等の顔の上には、だん／＼に冬に近づくのを悲むやうな薄い色が浮んでゐた。晝でも樂屋の隅には痩せた蚊が唸つてゐた。

「御免なさい。」と、お花は林之助に會釋して舞臺へ出て行つた。出るときに豐吉を見返つて、火鉢の大藥罐を頤で指した。

「あたしの引込んで來るまでに能く沸して置いて頂戴よ。からだを拭くんだから。」

「あい、あい。」

「姐さんがゐないと思つて乙う幅を利かすね。」と、お君はお花のうしろ姿を見送つて云つた。

「へん、馬鹿にしてゐやあがる。」と、豐吉は罵るやうに云つた。「からだが拭きたけりやあ大川へでもぼん／＼飛び込むがいゝや。」

「でも、けふは姐さんの代りを勤めてゐるんだから仕方がないさ。」と、お君は妬ましさうに云つた。

「姐さんはよつぽど悪いのかね。」

林之助に訊かれて、お君はすぐに首肯いた。

「それやまつたく悪いらしいんですよ。なんでも一昨日の晩は大變にお酒を飲んで、夜風に吹かれてそこらを夜半までうろ／＼してゐたんで、風邪を引いたらしいんですよ。」

「一昨日の晩……。」と、林之助はすこし考へた。「一體どこでそんなに飲んだんだらう。」

ふだんからお花とは餘り仲の好くないらしいお君は、この問に對して無遠慮にべら／＼饒舌つた。なんでも一昨日の晩、姐さんはお花に誘ひ出されて向島の某料理茶屋へ行つた。そこで無暗に飲んで來たらしいと云つた。

「お花が奢つたのかしら。」

「どうですかねえ。」と、お君は意味ありげに笑つてゐた。お花がそんな處へ連れ出して奢る筈がない、客に連れられて行つたに相違ないと云ふことは林之助にもすぐに覺つた。

「花ちやんは悪い人よ。」

かう云つたお若は、豊吉と眼をみあはせて急に口を噤んだ。林之助は面白くなかつた。これには何か深い意味が忍んでゐるらしく思はれた。併しこの上に根問ひしても、どうで正直のことは白狀しまいと思つたので、彼は好加減に話を切りあげて起つた。

外へ出ると雨はまだびしよ／＼と降つてゐた。林之助は傘をかついで往來にぼんやり突つ立つてゐた。病氣と聞いたらば猶更急いでお絹を見舞ふべきであるのに、彼はなんだか足が向かなかつた。今の話の樣子では、お花の取持で茶客と向島へ行つたらしい。加之それが普通の客ではないらしく思はれてならなかつた。自分のところへ押掛けて來たのはその歸途に相違ない。當付けらしく自分を戲ひに來たのか、それとも後悔してあやまりに來たのか。いづれにしても、林之助は快い心持で其話を聞くことは出來なかつた。

『併し折角こゝまで來たもんだ。行つてみよう。』

林之助はまつすぐに本所へ行つた。傘をかたむけて狹い露地へ這入ると、露地の角の店にはもう燒芋の煙が流れてゐた。お絹の家は晝でも表の戸が閉めてあつたが、叩くとお君がすぐに出て來た。

『おそろしく用心が好いね。』

『こゝらは下駄を取られますから。格子に錠がないんですもの。』と、お君は云譯をしながら濡れた傘を受取つた。

奧に寢てゐたお絹はすぐに起き直つたらしい。林之助が足駄をぬぐのを待ちかねたやうに聲をかけた。

『お前さん。昨日なぜ來て呉れなかつたの。』

『きのふは御用で牛込へ行つた。』

枕邊に坐つた林之助の顏を、お絹は默つてぢつと眺めてゐるので、彼は堪へられなくなつて眼を反けた。

『下手な捕人のやうに、二口目には御用、御用……。屋敷者にはほんたうに都合が好いね。』

『屋敷者も樂ぢやあねえ。』

『樂ぢやあねえ屋敷者を好んでする人もあるのさ。誰も頼みもしないのに……。』と、お絹は口で笑ひながら眼で睨んだ。

『一體どこが惡いんだ。飲み過ぎたんだと云ふぢやあねえか。』

『兩國の方へ寄つたの。お花に逢つて……。』

『むゝ、みんなに逢つた。』

お絹はしばらく默つて俯向いて、油の匂ふ枕をうつとりと見つめてゐた。もう枯れかゝつた朝顏の鉢を一つ列べてある低い窓の外には、雨の音が咽ぶやうにきこえた。

『林さん。』と、お絹はだしぬけに云つた。『妾、お前さんにあやまることがあるの。實は一昨日の晩、お花にうつかり誘ひ出されて向島の料理茶屋へ行つたと思つてください。石を抱くまでもない、あたしは何も彼も正直に白狀しますよ。そのお客といふのは何日も來る淺草の質屋の息子で、あたしも些とは面白いかと思つて行つてみると、まるで大違ひ。あんまり癪に障つたから、自棄になつて無暗に飲んで、喧嘩面でそこをふいと出てしまつて、それからお前さんの屋敷へ押掛けて行つたの。ね、判つたでせう。お花がなにを云つたか知らないが、ほんたうの話はそれだけですからね。必ず惡く取つちやあ困りますよ。それにしても、あたしが惡いんだから謝ります。ね、堪忍してください。』

『それだけのことなら何もあやまる筋でもあるめえ。俺あもつと惡いことをしたかと思つた。』と、林之助は少し皮肉らしく笑つた。

『なんとでも云ふが好いのさ。』と、お絹も寂しく笑つてゐた。

お君が羊羹を切つて菓子皿に盛つて來た。そ

れは今朝兩國の小屋主から見舞に送つたのだと云つた。手炙を組みながら林之助は復もとの古い屏風をながめた。林之助がまだこゝにゐる頃に粗相で一ヶ所破いたので、なにか貼りをするものはないかと彼は近所の繪草紙屋へ行つて探した末に、鬼の念佛の一枚繪を買つて來て貼り付けた。夜泣の呪ひにもあるまいしと、お絹は思はず噴出したことがあつた。

その一枚繪は煤びたまゝで今も屏風に貼り付けてある。林之助に取つてはこれも懐かしい思ひ出の一つであつた。彼はこゝへ身を寄せてから小一年のあひだの出來事をそれからそれへと思ひ泛べた。さうして、自分の眼の前に儚ましげに坐つてゐるお絹の衰へた姿を悼ましく眺めた。その妖艶のおもかげは昨日に變らないが、僅か見ないうちに小鬢の肉が落ちて、頬が痩せて、水のやうな色をしてゐる顔の寂しさが眼に立つた。それと同時に、眼瞼の腫れ窪んだ俤の眼がいよ〳〵凄惨く見えるのも林之助を脅かした。

「お前さん、まだあたしを疑つてゐるの。」と、お絹は蒲團に片手を突きながら訊いた。

「なに、何とも思ふものか。」

差當つては林之助は斯う云ふよりほかはなかつた。彼はこの上に向島の一件を詮議するわけにも行かなかつた。お絹もけふはお里のことを一言も云はなかつた。ふたりは秋の雨を聴きながら、靜かに世間話などをしてゐた。二人がこれほど睦まじく打解けて話し合つてゐるのは近頃に珍らしいことゝ、次の間で聴いてゐるお君もなんとなく嬉しかつた。

併し斯うして打解けてゐるのは表向きで、二人の魂は却つて漸次に遠ざかつて行くのではないかと云ふやうな寂しい思ひが林之助の胸に湧いた。口では何とも思つてゐないと云ふものの、向島の一件はまだ自分の胸の奥に蟠つてゐる。お絹もお里のことを忘れたのではあるまい。たがひの胸に思ふことを抱いてゐながら、それを押隠して美しく附合つてゐる、それが已に他人行儀ではあるまいか。たがひの思ふことを遠慮なく云ひ合つて、泣いたり笑つたりした昔の方が林之助にはいつそ懐かしいやうに忍ばれた。打解けてゐながら段々に離れてゆくやうな寂しい心持、それを林之助は我ながら何うすることも出來なかつた。何うしてこんな心持になつたのか、それは自分には判らなかつた

お絹の胸にも不安のかたまりが鉛のやうに重く沈んでゐた。一昨日の晩の氣まぐれは自分でも深く後悔してゐる。自分の男は林之助のほかにないと云ふことが、今更のやうに思ひ沁みた。殊にきのふの頃ひからは彼女は急に氣が弱くなつた。醫師にも大事にしろと云はれたが、今朝から身體に惡寒がして、胸のあたりが痛んでならなかつた。咳をするたびに、背骨へ響くやうに切なかつた。彼女は身體の悩みの募るに連れて、いよ〳〵林之助が戀しくなつた。

それにつけても、向島の一件を林之助が案外手輕く聞き流してゐるのが不安であつた。お花やお君のおしやべりが何を云つたか知れたものではない。それを林之助はどう聞いたか、なんと思つてゐるか。なまじひ何にも云はずに打解けた樣子を見せてゐるだけに、心の奥底が知れなかつた。

お絹も林之助もかうした別々の心を有ちながら、日の暮れる頃まで仲よく話した。あまり長く起きてゐては惡からうと、お絹を寢かして林之助はそつと歸つた。

「姐さんに氣をつけておくれよ。」と、林之助はお君に頼んで露地を出た。暗い雨の音が傘をたたいて、本所の七不思議の狸でも化けて出さうな夕暮であつた。薄ら寂しくなつた林之助は、これから屋敷へ歸つて餘り旨くもない惣菜を食

ふよりも、途中でなにか温かいものでも食つて行かうかと思つた。お絹が起きてゐれば無論一緒に食ふつもりであつたが、病人の枕もとに坐つて自分ひとりで食ふ氣にもなれないので、彼はそのまゝ出て來たのであつた。お絹の家にゐる時にたび〳〵食ひに行つたこともあるので、林之助は近所の蕎麥屋へ這入つた。

彼は一人でちびり〳〵と酒を飲んだ。

一〇

その晩の四つ過ぎに、林之助は屋敷へ歸つた。

「どうも遲くなつて濟まないね。」

門番の老爺に挨拶して、彼は自分の部屋に這入つた。薄ら寒い雨の夜をあるいて來て、内へ這入ると急に酒の醉が發したらしく、彼は赫々と熱る頰を押へて自分の小さい机の上に少時うつ伏してゐた。それから徐かに起ちあがつて、戸棚から蒲團と衾をひき出した。彼は蒲團の上に坐り直して今夜のことを考へた。

彼は雨の夜の蕎麥屋で一人でさびしく飲んでゐた。漸次に醉がまはつて來るに連れて、彼はお里のことを不圖思ひ出した。雨のふる日にでも遊びに來てくれと囁かれた甘い詞を又しても思ひ出した。けふの雨で花火はお流れになつて、列び茶屋も大抵休んでゐることを彼は先刻見て知つてゐるので、お里は内にゐるに相違ないと思つた。

「これから行つて見ようかしら。」

林之助はふら〳〵とそんな氣にもなつた。お絹の影が彼の頭から消されたのではなかつたが、醉つてゐる彼は何かまふものかと大膽に構へた。單にお里の家へ寄つて來るだけのことならば、別に仔細もない筈だと彼は自分で理窟を拵へてしまつた。勘定をすませて表へ出ると、秋の日はもう暮れ切つて、雨戸を半分ひき寄せてある町家の灯の影が、暗い往來を淡く照してゐた。雨は相變らず咽ぶやうにびしよ〳〵と降つてゐた。彼は傘をかたむけて外神田まで濡れて行つた。

このあひだの晩お里に敎へられた通りに、横町の酒屋の狹い裏へ這入ると、右側に小さい二階家があつて、格子と臺所とが列んでゐた。林之助はそつと格子をあけると、内では鈴の付いた鋏を置く音がきこえて、入口の障子がさらりと開いた。うす暗い行燈の灯のかげを背後にしてゐるので、出て來た人の顏は此方によく見えなかつたが、「あら。」と可愛らしい女の聲が彼女であることを林之助はすぐに覺つた。お里はいそ〳〵してこの若い武士を内へ招じ入れた。二階家と云つても、俗にいふ行燈建で、上下とも一間宛しか無いらしく、下の六疊には古いながらも能く拭きこんだ長火鉢を据ゑて、茶簞笥が行儀よく列んでゐた。小さい神棚には燈明の灯が微かにゆらめいてゐた。

「こんな狹いところで……。」と、お里は恥かしさうに云ひ譯をしながら、いぢくつてゐた小切を片付けて、薄い座蒲團を出した。林之助は長火鉢の前に坐らせられた。お里は茶を淹れて、振出しの箱のなかから金米糖などを出した。

『それでも好く入らしつて下さいましたね。』

お里は嬉しさうに云つた。おふくろは近所に百萬遍があつて、燈火が點くとすぐに出て行つたから、四つ過ぎでなければ歸るまいとのことであつた。相手が迷惑さうな顏を見せないので、林之助も腰を落付けてゆつくりと話しはじめた。併しかういふ家へふらりと遊びに來て、先方の茶や菓子を食つて唯べら〳〵と饒舌つてゐるほどの野暮でもないので、林之助は鮓でも取らうと云つた。ついでに酒を買つて貰ひたいと云つて、幾らかの銀を出した。

「降るのに氣の毒だね。」

「なに、隣の子に賴みますから。」

隣の女の兒に使をたのんで、お里は鐵瓶の下に炭をついだ。小降りにはなつたらしいが、雨はまだ瀟々と降つてゐた。百舌鳥の鋭らしいのが雨の中にきれぐ\に聞えた。

「秋の雨はなんだか陰氣で寂しうございますね。」と、お里は錦繪の花魁を貼つた背後の壁を見かへりながら云つた。自分は一體陰氣な質であるが、斯ういふ日にはなんだか引入れられるやうに氣が滅入つて、自然に悲しくなるなどと話した。けふの花火がお流れになつて、お前ばかりでない、みんなも陰氣な顔をしてゐるだらうなどと、林之助も云つた。談話はだん\/に暗い方へ綫を引かれて行つて、このあひだの晩の續き話のやうに、お里は自分の頼りない身上を語り出した。親ひとり子一人で他には力になつてくれる親戚もないと、彼女は訴へるやうに云つた。殊に母は病身であるから、何時どんな悲しいことが落ちかゝつて來るかも知れないなどと、心細いやうに云つた。談話はいよ\/沈んで行つた。

うす暗い心持でお絹の家を出た林之助は、ここで又こんな滅入つた話を聽かされるのは辛かつた。彼は陽氣に冗談の一つも云つて見たかつた。店にゐる時もおとなしいといふ評判の男ではあるが、自分と二人ぎりの場合には愈よおとなしい寧ろ陰氣な位に沈んでゐるのが、林之助にはなんだか物足らなかつた。併しいかに温順しいと云つても、元來が水茶屋の女である以上、一通りのお世辭や冗談ぐらゐが云へないのではない。それが自分に對してはいつも眞面目過ぎるほどに堅氣らしく交際つてゐるのは、流石に通り一遍の客とも思つてゐないのであらうかと云ふやうな一種の自惚れも林之助を唆かした。又それぱかりでなく、心の弱い彼としては、斯うした涙の多い話は上の空で聞き流してゐることは出來なかつた。彼は漸次にその話の底の方まで引き入れられて、おのづと涙を誘ひ出された。

そのうちに鮓が來た。酒が來た。お里はすぐに燗の支度をした。自分は些とも飲めないと云つたが、それでも無理に二三度は猪口をうけ取つた。林之助も飲んだ。酒の醉が若い二人を誘つて、だん\/に明るい華やかな方へ連れ出した。林之助も輕い冗談を云つた。お里も袂を口に掩ひながら笑つた。彼女はもう醉つたと云つて、夢見る人のやうに恍然してゐたが、その鈴のやうな眼のなかには愛らしい瞳が生きてかがやいてゐた。

雨の音がざつと又強くなつたので、お里は縁側へ出て、疎らに閉めてあつた雨戸をばた\/と閉め切つてしまつた。林之助も起つて手傳つて遣つた。

「どうも濟みません。」

「なあに、こゝの家へお婿に來たんだから。」と、林之助はお里の肩を輕く搖つて笑つた。

どこかで雨漏りがするらしく、天井の裏でときどきに雨滴の落ちる音がほと\/と聞えるのも寂しかつた。紙の煤けた行燈の火は陰つたやうにぼんやりと暗かつた。二人はしばらく默つて火鉢の前にむき合つてゐた。

四つ少し前に林之助は歸つたが、阿母はそれまで歸つて來なかつた。今夜も林之助は幾らか包んで置いて歸つた。

林之助は蒲團の上で、これだけのことをそれからそれへと繰返して考へた。お里と自分とのあひだには、もう切放すことのできない羈絆が結び付けられたことを觀念すると同時に、彼は云ひ知れぬ悔恨と苦悩とに犇々と責めつけられた。かう云ふ場合に大抵の人が試みるやうに、彼もそれを酒の科に嫁けて、自分の重荷を輕くしようと努めた。併しそんな卑怯なこと

で、自分の魂が安まらうとは流石に思はなかつた。

「おれは意氣地がないな。」と、彼は唇をつかんで自分を嘲つた。自分の古い友達のなかには、三人五人の馴染の女をだまして振捨てた者もあつた。よし原の女郎を欺して仕替へさせて、その金で藝者と駈落をした者もあつた。併し、自分には到底そんな不正直な眞似はできなかつた。たゞの一度もそんなことをした例はなかつた。自分はゆく先々で戀を撒つて歩くやうな人間ではなかつた。あとにも先にも唯つた一度お絹と戀に落ちて、その罠から抜出すことができないで今も踠いてゐるのではないか。それが又別の新しい罠に罹つて、更に首を絞められてどうするのか。彼はつくづく今夜の自己を憫まずにはゐられなかつた。さうして、あまりに正直に生れ過ぎた自己を齒痒く思はずにはゐられなかつた。宵に軍鷄屋を出たときの勇氣と大膽とは、今の林之助の頭腦からは吹き消したやうに消え失せてゐた。

『かうなればお絹を捨てるか、お里に背くか。』

二つに一つに決めてしまはなければ、彼は一日も安心してゐられないやうに思はれた。兩手に桃と櫻などといふ洒落れた詞は、林之助には一切不通用であつた。彼は唯どちらか、その一枝を大事に守つてゐなければ氣が濟まなかつた。淺憎い女の眼を忍れてゐながらも、まつたくお絹を見捨て得なかつたのも斯うした正直な心の叫びであつた。世間普通の人の眼から見たらば、多寡が吹つかひの女と水茶屋の女と、そんな女の二人や三人かなんだと云ふかも知れない。そのときの出來心で、兩方拾つて兩方捨てろと云ふかも知れない。自分には到底それができないのを林之助は口惜しく思つた。腑甲斐なく思つた。意氣地無しだとも思つた。彼はそこに自分の美しい魂を見出し得ないで、却つて自分の馬鹿正直が情ないやうにも思はれてならなかつた。

それでも彼は矢張その美しい魂に支配されてゐた。どちらかの女に對して自分の罪を詫びてあきらかに一人を捨てゝ一人を取らうと決心した。而もこれまでの行懸りから云ふと、彼はどうしてもお絹を裏切ることはできなかつた。お絹の呪ひもおそろしかつた。

「なぜ今夜お里を訪ねたらう。』

どう思ひ直しても、彼は今夜の自己を悔まずにはゐられなかつた。彼の涙は枕の上にはらはらと零れた。彼はまぼろしのやうに眼の前にあらはれて來たお里のおとなしやかな顏に向つて、手をあはせて幾たびか詫びた。

彼を安らかに眠らすまいとするやうに、雨は大きい屋根の上を夜通し流れて、軒の大樋に溢れるやうな音を立てゝゐた。

二

それから三日ばかりは御用繁多で、林之助は屋敷を出られなかつた。九月に這入つて晴れた空がつゞいた。けふは夕方から深川に俳句の運座があるので、先づお絹の病氣を見舞つて、それから深川へ廻らうと、彼は午下りから屋敷をぬけ出した。

往來の人はみな袷を着てゐた。林之助も新しい袷を着た。澄み切つた碧い空に秋の風が高く吹いて、屋敷町には赤とんぼうの群が眼まぐるしいほどに飛び違つてゐた。鷹匠が鷹を据ゑて通るのも、やがて冬の近づくのを思はせた。町へ出ると草鞋を吊した辻番で鰯を買つてゐるのが見えた。

柳橋の袂で林之助は友達に逢つた。彼はやはり淺草の或旗本屋敷の中小姓を勤めてゐる男で、これも今夜の發句の會へ出る一人であつた。彼は梶田彌太郎と云つて、林之助よりも三

歳ばかり年長であつた。

『やあ、どこへ。』と、二人は立停まつた。今夜の發句會の話なども出た。彌太郎はこれから兩國へ遊びに行かうかと云つた。ゆく先は列び茶屋に決つてゐるので、林之助はすこし躊躇した。お里に逢ふのはなんだか氣が咎めるやうであつた。

『え、お里の顏でも見に行かうぢやないか。』と、彌太郎は云つた。それとも御用かい。

着流しの林之助は御用に行くとも云はれなかつた。彼は斷り切れないで一緒に引摺られてゆくと、不二屋の軒提燈は秋風にゆらめいてゐた。二人はずつと店へ這入つて床几に腰をかけると、これも顏なじみのお染といふ若い女が愛想好く茶を汲んで來たが、茶釜の前にもお里の姿は見えないので、林之助は一種の失望を感じた。

『けふは何うしたい、お里は……。』と、彌太郎も的が外れたやうな顏をして訊いた。

『里ちやんはもう少し先刻までゐたんですけれど、阿母さんが急病だと云つて、家から迎ひが來たもんですから、びつくりして歸つたんですよ。』

『おふくろが急病……。』と、林之助も驚いた。『先刻までこゝにゐた位ぢやあ、ほんたうの急病なんだね。』

『えゝ。今朝まで何ともなかつたんださうですがね。どうしたんでせう。迎ひの人の口吻ぢやあもう不可ないらしいんですよ。』と、お染も顏をしかめて云つた。『その話を聞くと、可哀さうに里ちやんはわあつと泣き出して……。あの兒はふだんから親孝行なんですからね。愈よいけないとなつたら嘸ぞがつかりするでせう。』

『そりやあ氣の毒だね。』

彌太郎もさすがに顏の色を陰らせた。林之助は茶碗を持つてゐる手先が顫へた。病身とはかねて聞いてゐたが、現に先月末の花火の晩には近所の百萬遍の珠數を繰りに行つたお里の母が、けふ俄に死にさうな大病に取憑かれるとは、あんまり果敢ないやうに思はれた。その母の枕もとに親孝行のお里が取亂して泣いてゐる、傷らしい姿もすぐに彼の眼に泛んだ。

『蟲が知らすとでも云ふんですかしら。里ちやんはこの二三日何だかぼんやりしてゐて、唯うつとりと背後の川の水を眺めてゐたりして、人が聲をかけても返事をしないこともあるんですよ。お前さん何うかしたんぢやないか、しつかりおしよと叱つたりしたこともあるんですが、今思ふと矢張こんなことがある前兆だつたのかも知れませんね。』と、お染は又云つた。

お里がこの二三日を物思はしげに暮したのは、母と別れる悲しい前兆であつたらうか。なんにも知らないお染が一途にさう解釋するのは無理もなかつた。併し林之助は、もつと深い意味でこれを考へさせられた。あれ以來、ぼんやりするほどに思ひ詰めてゐるお里を、自分はどう處分しようと考へてゐるのか。彼は我ながら悚然とするほどに自分の酷たらしい心を恐れた。

『里ちやんの家は都合が好いのかね。』と、彼は知れ切つたやうなことを訊いてみた。お染も知れ切つた事をといふやうな顏をして、すぐに打消すやうに答へた。

『どうせ斯ういふところへ來てゐるんですもの、都合の好いことがあるもんですか。ほかに頼りになるほどの親類も無いさうですから、阿母さんの病氣が長引くやうだつたら勿論のこと、今すぐに死なれても第一に御葬式にも困るくらゐでせうと思ふんですよ。こゝのおかみさんも幾らか面倒をみて呉れるでせうし、あたし達もまあ些とでも何とかして遣りたいと思つてゐるんです。』

聞けば聞くほど林之助の頭は痛くなつた。彼は飲んだ茶を吐き出したくなつた。彌太郎もよほど氣の毒になつたのと、一つはお染に對する見得もまじつてゐるらしく、幾らかの銀を紙に包んで、お前の行く序にこれをお里に遣つてくれと出した。林之助も見てゐられなくなつて、彼も紙に包んだものをお染の手へ渡した。しかし此位のことでは濟むまい。自分はなんとか特別の算段をして遣らなければなるまいと、彼は胸のなかで其銀の工面を考へた。それにしても、こゝに唯ぶら〳〵してゐては何うにもならなかつた。

彼は好い加減の口實を作つて、彌太郎にわかれて一先づ不二屋を出た。

『どこへ行かう。』

少くも一兩の金がほしいと彼は思つた。その工面が付かなければ二歩でも三歩でも好いが、旗本屋敷の中小姓ではその取分も知れてゐる上に、暇さへあれば遊びあるいて無駄な小遣錢をつかひ盡してゐる現在の彼は、食ふにこそ不自由はないが、百でも餘分の貯蓄などのあらう筈はなかつた。加之その小遣の多くはお絹の貢物であつた。彼もこの場合には、お絹のところへ無心に行きたくなかつた。用人や給人にももう幾許づつか借りてゐるので、この上に頼むわけには行かない。質屋を口説くにした所で、金目になりさうなものを有つてゐない。さりとて大小を質に置くわけにも行かない。林之助もこれには行き詰つた。それでも彼はどうしても幾らかの金が欲しかつた。無理な工面をしても直に外神田へ飛んで行つて、泣き腫らしてゐるお里の眼の前へその金をずらりと投げ出して遣りたかつた。

『かういふ時に人間は惡氣を起すのだ。出來るものなら俺も定九郎でも極めたい。』

彼はこんな途方もないことまでも考へた。さうして、自分で悖然として後先を見まはした。彼の足は行くともなしに兩國橋を渡りかけてゐた。橋番の小屋で放し鰻を買つて、大川へ流して遣つてゐる人があつた。林之助はその財布を引つ奪つて逃げたかつた。

焦れても躁つても何う仕樣がない。ひとの物に眼をかけるよりも、いつそお絹に借りた方が無事である。ほかに遣ふ金と違つて、これをお絹から借出すのは何分にも心苦しく思はれてならなかつたが、現在の林之助としてはこれが最も容易い方法であつた。お絹も病氣で寢てゐる。そこへ押掛けて金の無心を云ふではあまり無面目の仕方だとは思ひながらも、まさかに盜賊もできない以上は、この位のことは我慢するよりほかはないと、彼は思ひ切つて橋を渡つた。

『やあ、旦那。』

樂屋番の豐吉に不意に聲をかけられて、林之助はびつくりしたやうに立停まつた。豐吉は樂屋の合間を見て、お絹さんの家へちよつと見舞に行つて來たと云つた。

『お絹さんはどうも好くありませんぜ。なんだかこゝが甚く切ないと云つてね。』と、彼は肋骨のあたりを叩いてみせた。

『困つたね。』

『あなたもいづれ御見舞でせうが、まあ勤めておあげなせえましよ。お絹さんも可哀さうですよ。さう云つちや何ですけれども、樂屋の者なんて皆んな不人情ですからね。本氣になつて世話をしてゐるのは、あの小つぽけなお君といふ兒だけでさあね。』

林之助はだまつて突つ立つてゐた。觀世物小屋のさう〴〵しい鳴物の音も彼の耳へは響かなかつた。豐吉はまた囁いた。

『それから、旦那。まあ當分不二屋へ這入り込むのをお止しなせえましよ。お絹さんはそれは

かりを苦にしてゐるんですから。こゝであんまり心配させると猶々身體の毒ですぜ。』

『なに、この頃は些とも行きやあしねえんだ。お辰やお花のお饒舌がつまらねえことを云ふんだらう。』と、林之助は好加減に胡麻かしてゐた。

『ほんたうですぜ。あたしが先へ死ねば、きつと林さんを迎ひに行くつて、お絹さんがさう云つてゐましたぜ。』

豐吉は嚇すやうに云つた。林之助はさびしく笑つてゐた。

『まあ、行つていらつしやい。』

樂屋へ這入つてゆく豐吉のうしろ影を見送つて、林之助の足は又重くなつた。お絹に金を借りるのはどうしても義理が惡いやうに思はれた。このまゝ引返さうかとも考へたが、お絹がそれほどの容體ならば直に見舞つて遣らなければなるまい。こゝまで來てから引返すといふ法はない。金の話は別として、兎もかくも顏をみせて來なければ人情がないと思ひ直して、彼は又まつすぐに路を急いだ。

露地を這入つて格子をあけると、お君が出て來た。

『あら、豐さんが引返して來たのかと思つたら……。さあ、どうぞ。』

お君は急ににこ／＼して林之助をお絹の枕もとへ導いた。お絹は半分死んだやうになつてうと／＼と眠つてゐた。その寢顏にはこの間見たよりも更にげつそりと痩が見えて、顳顬の骨が露出になつてゐるのも傷ましい病苦の姿をまざまざと描いてゐるので、林之助は思はずほろりとなつた。彼はお君にむかつて病人の容體を訊くと、やはり豐吉の話の通りであつた。お絹はとき／＼に熱が昇つて肋骨が痛む、それが苦く切なさうだとのことであつた。

『君ちやん。』

林之助は小聲で彼女を呼んで、次の間の長火鉢の前へ行つた。

『それで、お醫師はなんと云つてゐるね。』

『お醫師樣はよつぽど大事にしなけりやいけないと云つてゐるんです。』と、お君は眼を濕ませてゐた。

『さうかい。』

林之助は指のさきで眼頭を撫でると、お君はもうしく／＼泣いてゐた。

『樂屋の者も看病に來てくれるかい。お花もお若も……。』

みんな出掛けに一度づつは見舞に來てくれるが、親身に看病してゆく者もないとお君は頼りなさうに云つた。それでも豐吉はゆうべも來て、四つ少し前まで居てくれたと話した。世間には表面ばかりの親切が多いと、林之助はいく／＼思つた。しかし振返つてみると、自分も其間ではないかとも思はれた。彼は自分で自分の不人情を責めた。

『わたしは主人持で、思ふやうに看病にも來てゐられないからね。氣の毒だけれども、姐さんの世話はお前ひとりに頼むよ。もし急に模樣でも變るやうなことがあつたら、豐吉にたのんで私のところへ報して遣しておくれ。豐吉はわたしの屋敷を知つてゐるから。』と、林之助はお君に囁いた。お君は眼を拭きながら首肯いた。さうして、姐さんを起しませうかと訊いた。

『いや、折角よく寢てゐるものを無理に起さない方が好い。』

二人は默つて火鉢の前に坐つてゐた。そのうちにお君は藥鍋を持ち出して來て、火鉢の上で煎じはじめた。林之助は默つて煙草をのみながら、澁團扇で火を煽いでゐるお君の小さい手先を唯ぼんやりと眺めてゐた。やがて鍋の蓋がごとごと跳ると、强い匂ひを含んだ藥の煙が靡くやうに林之助の袖に白く流れた。お里の家に

もこんな匂ひが漂つてゐるか、それとも線香の烟が舞つてゐるかと思ふと、どつちを向いても涙を誘はれることが多かつた。

林之助は今年の秋のわびしさに堪へられなかつた。

二

藥が煎じ詰つたので、お君はお絹を起しに行つた。そつと揺り起されて、お絹は眼を瞑ぢたまゝで訊いた。

『林さん。まだそこにゐるの。』

林之助はぎよつとして見返つた。

『妾、なんだか現のやうに林さんが枕邊にゐると思つたけれども、夢だつたかしら。』と、お絹は云つた。林さんは先刻から來てゐるとお君が云ふと、お絹は初めて眼をあいた。林之助も起つて枕もとへ行つた。

『やつぱり來てゐたのね。どうも然うらしいと思つた。』と、お絹はさびしく微笑んだ。『もうお前さん、來て呉れやしまいと思つたのに……。』

『冗談云つちやいけない。いつも云ふやうだが、屋敷の方にも御用が多いので、夜でも晝でも勝手に出るといふわけには行かねえからね。このあひだ來た時から今日初めて外へ出たんだ。だれに訊いても判る。そりや嘘ぢやあねえ。なにしろ何日までも悪くつちやあ困つたものだ。精出して養生しねえよ。』

『お前さん、大變優しくなつたねえ』と、お絹は又笑つた。『どうせこんな長いことはないんだから、少しは優しくして呉れるのも好いさ。』

『病は氣から出るといふぜ。しつかりして呉れ。』

林之助はお絹を抱き起すやうにして藥を飲ませて遣つた。さうして、まだ若い身體だから、どんな病氣でも養生次第で癒らないことはない。氣を弱く持たないで、ゆつくりと療治をしてくれと、お絹を勵ますやうに云つて聞かせると、お絹も素直にうなづいてゐた。しかし今度の病氣ばかりは容易に癒りさうにも思はれない。お前さんに逢はれる日もあるならば、屋敷から幾日かの暇を貰ふか、それとも一生の暇を取るか、どつちにしても當分は屋敷をあけて、あたしの枕もとへ來てゐて呉れ。その上でお前さんの看病がとどいて若しも重ければ、これぎりに死んでも思ひ殘すことはない。あたしはどうかしてお前さんを最う一度自分の手元へ引戻さうと念じてゐるうちに、たうとうこんな病氣になつてしまつた。せめて死際にはお前さんの手から一杯の水でも飲ませて貰ひたいと、お絹は沁々云つた。

『林さん。然うかい。』

眼瞼は押潰したやうに落ち凹んでゐても、餌を狙ふやうな蛇の眼が底の方に光つてゐた。現在の痩せ衰へたお絹の顏にはそれが一層凄愴く見えたので、林之助は今更のやうに身が竦んだ。彼はどうしても否とは云はれなくなつた。あとは兎もあれ、この場では一應承知したと云はなければならないやうに思はれた。

『よし、よし。判つた。しかし武家奉公といふものは面倒なもので、親の死にきを探しに出るから、と云つても、けふ、今日すぐに暇を呉れるわけのものぢやあねえ。長の暇を貰ふにしても今すぐと云ふ譯には行かねえから、屋敷にゐる間はなんとか都合して毎日見舞に來る。さつきもお君に賴んで置いたたが、急な用ができたら直に屋敷へ迎ひに遣してくれ。いつでも直に飛んで來るから。ね、それで好いだらう。』

『無理すんぢやあるまいね。』と、念を押してお絹は納得した。彼女はすでにもう何時だと訊いた。先刻八つの鐘を一つ聽いたとお君が云ふと、それでは林さんの好きな蒲燒でも誂へろとお絹は寢ながら指揮した。そこに、さうしてゐる

られないと林之助は云つたが、さすがに振切つて起ちかねてゐると、お君はすぐに近所の鰻屋へ驅けて行つた。

『林さん。新しい袷なんぞ着て粧してゐるんだね。』と、お絹は仰向いて男の姿をながめた。

『むゝ。これか。』と、林之助は袷の膝を撫でた。『そら、いつか話したことがあるだらう。この四月に新しく拵へて、一度も手を通さねえで藏入りにした奴さ。秋風が立つちやあ遣切れねえから、御用人を口說いて二步借りて、これと一緒に羽織や冬物を受けて來た。』

『不二屋へ運ぶのが忙がしいから、身のまはりなんぞには手が屆かねえのさ。』と、お絹は笑つた。『御用人さんに二步借りて、それをどうして返すの。』

『都合の好い時に返すのさ。まさかに利も取るめえ。』と、林之助も笑つた。

『おまへさんにも都合の好い時があるのかしら。ちよいと、お前さん。この蒲團の左の下から紙入れを出して頂戴な。』

云はれた通りに林之助は紙入れを取つて渡すと、お絹はそのなかから二步を出した。

『暇を貰はうといふ矢先に、借なんぞがあつちや拙いから、よくお禮を云つて、御用人に早く返しておしまひなさいよ。』

『だが、こつちも病氣で物入りの多い所だらう。』と、林之助は手を出しかねて躊躇してゐた。

『何、こつちは又どうにかなるから。』

二步の銀を手に握つて、林之助は氣の毒でもあり、嬉しくもあつた。けふは幾らかの無心を云ふつもりで來たのであつたが、このありさまでは到底云ひ出せないと彼はもう諦めてゐると、その銀が偶然手に入つて、彼は拾ひ物をしたやうに嬉しかつた。屋敷の用人から二步借りて、袷や冬物の質請けをしたのは譃ではなかつたが、それは今すぐに返さないでも好い。この二步があれば、お里の家へも顏出しができる。かう思ふと、彼は今直にもこゝを飛び出したくなつた。今まではおちついて腰を据ゑてゐた彼も、銀をつかんで急に氣が變つた。お里のことも急に氣にかゝつて、彼はなんだかそは〳〵して來た。しかしお君はまだ歸らない、誂へ物もまだ來ない。殊に銀を貰つてすぐに逃げて歸るのも氣が咎めるので、彼はおちつかない心持を無理に押付けて、質に取られた人のやうにおとなしく坐つてゐた。

やがてお君は歸つて來た。どうしてか今日は註文が立込んでゐるので、鰻の出前はすこし手間が取れると云つた。林之助はそれを好い機に、自分は日が暮れるまでに屋敷へ歸らなければならないから、手間が取れるならば寧そ斷つて來てくれと云つた。

『飛ぶ鳥はあとを濁すなと云ふこともある。屋敷にゐるあひだは生帳面に勤めて置かなければいけねえ。』

『それもさうかも知れない。』

お絹も別に厭な顏をしなかつたので、お君は引返して鰻屋へ斷りに行つた。その歸るのを待ちかねて林之助も歸り支度をした。

『ぢやあ、あした又來るぜ。君ちやん、好いかい。頼むよ。』

露地を出ると、日はもう暮れかゝつてゐた。お君は露地の口まで送つて來て、姐さんの容體がどうもよくないから、明日もきつと來て吳れと縋るやうに云つた。その潤んでゐる顏が林之助には惨らしく見えた。彼はきつと來ると約束して別れた。

橋の袂へ來ると、芝居小屋では打出しの太鼓がきこえた。早く閉まつた觀世物小屋では、表の幟を取り卸してゐるのもあつた。燒いた唐黍を横銜へにして、なにか大きな聲で唄ひながら通る中間もあつた。まだすつかりは暮れ

判らないのに、真白な白粉の顔を手拭にかくして一町四方へ忍んでゆく若い女の姿もあつた。それらを追掛けて、中間連の女なにか喋つてゐた。かうした賑らな夕暮の混雑に眼離れてゐる林之助は、何も何も見向きもしないで、急ぎ足に橋を渡つた。川の面には薄い霧が流れて、列んだ茶屋にはもうちら／＼と提灯の火が揺めいて見えた。その華やかな灯のなかに、今夜はお里を見出すことが出来ないのだと思ふと、彼の足は神田の方へ向つてます／＼急がれた。

酒屋の路地へ這入つて、格子の前に立つと、入口の障子は半開かれて、線香の匂ひが狭い沓脱にまで溢れてゐた。こゝはもう葬の匂ひではなかつたので、林之助は急に暗い心持になつた。案内を乞ふと、女の児が出て来た。それはこの間の晩に使をたのんだ隣の娘らしかつた。内へあがると、やはり近所の人らしいおかみさんや娘が四五人ごた／＼坐つてゐて、逆さに立てまはした古い屏風のかげからは線香の煙がうづ巻いて流れてゐた。その屏風のそばに蒼い顔、お里がしよんぼりと坐つてゐたが、彼女は島田をほどいて銀杏返しに結ひ替へてゐるので、林之助には鳥渡その顔が判らないほどに寂しく見えた。

午前には隣のおかみさんが話しに来た。その時までは阿母も別に變つた様子もなかつた。胸が少し切ないやうだと云つてゐたが、やはり例ものやうに火鉢の前で襦袢の襟おくりなどをしてゐた。午飯を喰つてしまつて、臺所へ茶碗小鉢を洗ひに出ると、彼女はだしぬけに倒れた。その物音に驚かされて隣から駈けつけて来た時には、彼女はもう生きてゐる人ではなかつた。それからすぐに兩國へ使を遣つて、お里は轉げるやうに駈けて歸つたが、とても間に合ふ筈はなかつた。そんな話をして、お里は聲を立てゝ泣いた。

林之助は彼の二歩を紙につゝんで出した。もつと何うにかしたいのだが思ふやうに行かないから、差當りはこれで堪忍してくれと云つた。お里は頂いて、それを隣のおかみさんに渡した。おかみさんが葬式萬端の世話を焼いてゐるらしかつた。おかみさんは受取つてすぐに佛前に供へたが、二歩の貴重は彼女の注意を惹いたらしく、今更のやうに林之助とお里の顔をじろじろと見くらべてゐた。かうした家へ大小をさした人が悔みに来るのは、すこし不似合であると見えて、ほかの女達もみな林之助に眼をあつめて、今までひそ／＼囁いてゐた者も一度に口を結んでしまつた。こゝに長く居ては皆んなの邪魔になると、林之助も覺つた。どうせ周囲に大勢の人がゐては、お里と打明けて話をする機會もあるまい、かた／＼今日は早く歸る方がいゝと思つて、彼は早々に暇乞ひをしてここを出た。

露地の出口で菓子賣のお此に逢つた。お此もこの近所に住んでゐるので、これからお里の家へ悔みに行くのだと云つてゐた。

「旦那様もお里さんのところへ入らしつたんですか。」と、お此は仔細らしく訊いた。

隠すこともできないので、林之助も正直に答へると、お此は危むやうに囁いた。

「あなた、お里さんのところへ行くのはお止しなさいましよ。飛んだことが出来ますよ。』

このあひだ兩國の樂屋で蛇責に逢つたことを、お此は身顫ひしながら話した。

『あの時のことを考へると、今でもぞつとします。わたしはもうそれ限りあの樂屋へは商賣にまゐりません。お絹さんは、もし此後も相變らず小屋にあなたの姿を見掛けるやうなことがあると、この蛇を持つてお里のところへお禮に行くと、かう云ふんです。それですもの、若し

あなたがこゝの家へ来たなんて云ふことが知れたら、そりや何んな騒ぎが起るか知れませんよ。第一お里さんが可哀さうですからね。死なんぞ持つて来られた日にやあ、あの児は眼をまはして死んでしまひませう。

林之助も息をつめて聴いてゐた。

一三

―困つたものだ。

林之助は日のうちで幾たびか斯う思つた。お此と別れて屋敷へ帰る途中で、彼はお絹を憎むの念が胸一ぱいに溢れ切つてゐた。彼はお絹があまりに執念ぶかいので憎くなつた。罪もないお里をそれほどに苦めようとするお絹の悪み深い心には、どう考へても同情することが出来なくなつた。一種の意地と一種の江戸子気質とが彼を煽つて、彼に弱いお里を飽までも庇つて遣らなければならない、それが男の役目であると云ふやうにも考へはじめた。

先月までの林之助は兎もあれ、今の彼はお絹に対してあまり立派な口を利けた義理でもないのであるが、彼はもうそんなことを考へてゐる余裕がなかつた。お此を贔屓にして、更にお里を贔屓にしようとするお絹の残酷な復讐手段に対して、彼の胸には強い反抗心が渦巻いて起つた。彼はいつそお絹を殺してしまひたいほどに腹が立つた。また一方から考へても、自分はもうお里を見捨てることの出来ないやうな破目になつて来た。今朝まではなんとかして、お里に詫びて、いつそ綺麗に手を切らうかとも考へてゐたのであるが、そのお里の母は死んで、彼女はかねて口癖のやうに果敢なんでゐる悲しい頼りない身の上にいよ／＼沈んでしまつた。それを今更無慈悲に突き放すことが出来るだらうか、お里が素直に承知するだらうか。おとなしい彼女は泣く／＼承知するかも知れないが、そんな弱い者いぢめをして仁科林之助、江戸つ子でござると威張つてゐられるだらうか。林之助は眼にみえない絆がお絹の蛇以上に自分を絞め付けてゐることをつく／＼覚つた。

そんなことを思ひ悩んで、林之助は今夜も眠られなかつた。夜があけると、今朝も拭つたやうな秋晴れで、隣屋敷の大銀杏の葉が朝日の前に金色にかゞやいてゐた。高い空には無数の渡り鳥が群れて通つた。その碧空をみあけてゐる中に、林之助の頭脳はまた新しくなつた。

ゆうべは一途にお絹を憎んでゐたが、罪はやはり自分にある。かうした関係をいつまでも繋いでゐたら、お絹もお里も自分もます／＼深い苦悩の底へ沈んでゆくばかりである。気を弱く持つてゐては際涯がない。どうしてもこゝでお里に因果をふくめて赤の他人になるよりほかはない。無慈悲のやうでもいつそ一日も早い方が好い、一寸逃れに日を延ばしてゆくほどいよいよ二進も三進もゆかないことになる。彼はお里の母の初七日でも済んだ頃に、もう一度その家へたづねて行つて、おだやかに別れ話をきめようと思つた。自分はそれほど無慈悲な男でもないが、かうなつたら何うも仕方がないと、林之助は悲しく諦めた。かうした諦めを付けるまでには、彼の眼からは男らしくもない涙が幾たびか滲んだ。

その日は御用があつて、林之助はどこへも出られなかつた。けふも屹と来てくれとお若に口説かれたことを思ひながらも、彼はどうすることも出来なかつた。彼はお絹の怨みを恐れながらも、たうとう両国橋を渡る機会がなかつた。あくる日もまた忙がしかつた。彼は自分で渋谷の果まで使に遣られた。この頃は意地の悪いやうに屋敷の用があるので、彼はすこし焦れつたくなつて来た。なるほどお若のいふ通り、屋敷奉公をやめた方が気楽かも知れないと思ふこと

もあつた。

併し林之助は大小を捨てゝ町人にならうとは思はなかつた。お絹の絲に引かれながらも、手ぶらで何時までも彼女の厄介になつてゐたくも無かつた。屋敷をやめれば是でも非でもお蝶の懐中へ戻らなければならない。朝晩におそろしい蛇の眼と睨み合つてゐなければならない。林之助は第一にそれを恐れてゐた。やはり今のやうに遠く懸け離れてゐて、さうして時々に逢つてゐるのが一番無事であると信じてゐた。

九月八日の午前に、林之助は些との暇を見て兩國へ行つた。あしたは重陽の節句で主人も登城しなければならない。その前日の忙しい中をくゞりぬけて、彼はもう堪らなくなつて、屋敷を飛び出したのであつた。

兩國の秋はいよ／＼深くなつて、路傍には栗を焼く匂ひが香ばしく流れてゐた。併しこゝの名物の見世物小屋や野天商人が商賣をはじめるのは午過ぎからで、午前の廣小路は青物の世界であつた。夜あけから午までは青物市がこゝに開かれるので、西兩國には荒莚を一面に敷きつめて、近在の秋の姿を江戸のまん中にひろげてゐた。霜に染められたかと思ふ川越芋の紅いのに隣つて秋茄子の美しい紫が眼についた。どこの店にも枝豆が澤山に積んであるので、やがて十三夜の近づくのが知られた。これから薄明の市の賣物にならうといふ枝豆の青い葉や白い根には、白い露と柔かい泥とが一緒に濡れて粘れてゐた。江戸中の繁華を一つに集めたかと思はれるやうな兩國にも、暮れゆく秋の色といふものが漂つてゐるやうに見えるのは、この頃の薄寒い朝の景色であつた。その青物の露を踏んで、林之助は橋を渡つた。

『あら、入らつしやい。』

格子をあけると、お君はすぐに駈け出して來た。うす暗いお絹の枕もとには樂屋番の豐吉も坐つてゐた。前藝のお若もしよんぼりと坐つてゐた。いつも留守番を頼むといふ隣のお婆さんもぼんやりと屈んでゐた。どことなしに藥の煙が匂つて籠つてゐた。

『おや、いらつしやい。』と、豐吉は振返つて先づ聲をかけた。さうして、すぐに入口へ起つて來た。

『旦那。いけませんぜ。あれほど私が云つて置いたのに……。あなたはどうも不實ですぜ。今日はよつぽどお迎ひに出ようと思つてゐたんですが……。』と、彼は林之助を咎めるやうに云つた。

『いや、なにしろ御用が忙しいんで何うも斷りもならねえ。あしたは節句といふ忙しい中を、今日はやう／＼拔け出して來たくらゐなんだから、まあさう叱つて貰ひたくないね。』と、林之助は苦笑ひをした。『さうして何うだね。病人の容體は……。』

豐吉は顏をしかめて首を振つた。

『惡くなるばかり。』

『困つたもんだ。醫師もあぶないと云つてゐるかね。』

『はつきりと云はねえが、もう匙を投げてゐるらしいんですよ。なにしろ、咳が出て、胸から肋骨が痛んで熱が出て……。どうも此秋は越せまいと思ふんです。わたくしも長らく御世話になつた姐さんですが……。』

もう今にも死ぬもののやうに豐吉は嘆息をついてゐた。かうなつたら寧そお絹が死んでくれれば好いといふやうな考へが、林之助の頭腦を稻妻のやうに掠めて通つた。彼はだまつて内へ這入ると、お若もお君もお婆さんもみな眼を赤くしてゐた。林之助は自分の不人情が急に恥かしくなつて、肩身が狹いやうな心持で病人の枕もとに窮と坐ると、お絹はもう正體がなかつた。もう誰の見境もないらしかつた。ときどき

に苦しさに胸をかゝへながら、彼女は髪を振り亂して、夜着を跳ね退けて、夢中で床の上に起き直らうとして又倒れた。と思ふと、溺れた人が何物かをつかんで縋らうとするやうに、彼女は痩せた手をのばして寝床の上を這ひまはつた。それが傷いた蛇の蜿蜒つてゐるやうにも見えて、林之助には凄惨かつた。

彼はいよ〳〵氣が咎めてならないので、周圍の人達にむかつて頻りに自分の無沙汰の云ひ譯をした。屋敷の御用の忙しいことを話した。主人が節句の登城の前日に、たとひ半晌でも屋敷をぬけて、かうして見舞に來たことが、彼の不實でないといふ十分の證據にはならないらしく、どの人も彼に對して冷たいやうな眼を向けてゐた。

「なにしろ私も主人持だから、毎日見舞に來るわけにもいかない。まあ、皆さん。なにぶん願ひますよ。」と、林之助は皆んなにくれ〴〵も頼んでゐた。まつたく今日は忙しい身體であるので、ゆつくりとこゝに坐り込んでゐることを許されなかつた。彼は小半晌ばかりで病人の枕もとを起つた。

歸るときに豊吉が格子の外まで送つて出た。

「旦那。ようござんすかえ。姐さんは九死一生といふ場合なんですぜ。お屋敷の御用は仕方がありませんが、ほかの何事を措いてもこゝへ來なけりやあ義理が濟みませんぜ。どうせ死ぬもんだからなんて薄情なことは爲つこ爲しですぜ。」

林之助はだまつて首肯いた。

『不二屋のお里の阿母が死んださうですね。』と、豊吉は又云つた。

どこか急所を抉られたやうに、林之助ははつと顔色を變へて、すぐには返事が出來なかつた。

一四

林之助が歸ると、やがて午が近づいた。青物市ももうそろ〳〵引ける時刻になつたので、觀世物小屋に用のある人達は一度に起つた。豊吉とお若は連れ立つて歸つた。お絹は聞き疲れてしばらく存々と睡つてゐた。隣のお婆さんもこの間に家の用を片附けて來たいと云つて歸つた。

お絹の枕邊にはお君が一人さびしさうに坐つてゐたが、今年十五で外の戀しい彼女は、やがて病人の寝息をうかゞつて、音のしないやうに格子をあけて、そこから半身を出して何を見るともなしに表を覗くと、長い往來は露地の幅だけに明るく見えて、そこには色々の秋の姿をした人が走馬燈のやうに通つた。鮓を賣る聲もきこえた。赤蜻蛉を追ひまはる小兒の黐竿も見えた。お君はうつとりとそれを眺めてゐると、内からお絹の弱い聲がきこえた。

『君ちやん、君ちやん。ゐないの。』

『はい。』

はつきりと返事をして、お君はあたふた内へ駈け込むと、お絹はいつか眼を醒ましてゐて、藥を飲ませてくれと云つた。まだ少し早いと思つたが、お君はすぐに藥鍋を温めにかゝつた。粥をたべるかと訊いたら、お絹は默つて首を掉つた。

托鉢の坊主が門に立つて鉦を叩いたので、お君は出て行つて一文遣つた。藥が煮詰まつて枕邊へ持つてゆくと、お絹は苦さうに一口吸つたが、それはほんの喉を濕すに過ぎないらしかつた。

「君ちやん。あたし少しお前に云つて置きたいこともあり、頼んで置きたいこともあるんだよ。」と、お絹は案外にはつきり云つた。これほどしつかりと口が利けるやうならば、姐さんも少し快くなつたのかしらと、お君はなんだか頼もしいやうにも思はれた。

『君ちゃん、お前には色々世話になつたけれども、今度はあたしも既ういけないよ。あたしも覺悟してゐるよ。』

お君は涙ぐんで聽いてゐた。

『そこで、あたしが賴むことゝ云ふのは、お前も大抵察してゐるだらうけれど……。向柳原の林さん、あの人は隨分薄情だと思ふよ。』

『あら。林さんはもう少し先刻までこゝに來てゐましたよ。』と、お君は慌てゝ打消すやうに云つた。

『さう。』と、お絹はさびしく笑つた。『そりや據ろなしの義理づくさ。あたし、どう考へてもあの人は人情がないと思ふ。』

一體この家を逃げ出したといふのが已に賴もしくない。この夏頃からあたしに隱して列び茶屋へ遊びにゆく、それが又憎らしい。たしかな證據を握つてゐないけれど、どうもお里と林之助とは一通りの馴染ではないらしく思はれる。證據がないので今まで堪忍してゐたが、いよいよ斯うと見極めが付いたら、あたしは不二屋へ蛇を持つて行つて、いつかお此を責めたやうに、お里を擲たらしく責めてやりたい。お里の頸へ蛇をまき付けて、子供が野良犬をひき廻すやうに兩國中を引摺つてあるいて遣りたいと思つてゐた。併しそれももう出來ない。就いてはあたしの死んだのを幸ひに、二人が好い氣になつて仲好くするやうなことがあつたら、どうぞあたしに成り代つて仇を取つてくれと、彼女はしみじみ云つた。

お君はやはり涙ぐんで聽いてゐた。

『お前は子供でも蛇といふ味方があるんだからね。大人だつて怖いことはないよ。あたしの魂も蛇に乘憑つて屹とお前の加勢をしてあげるからね。好いかい。』

もし林之助に見せたら氣絶するかも知れないと思はれるほどに、お絹の窪んだ眼はいよいよ凄愴く光つた。絲のやうに瘦せ細つた顏とこの凄愴い眼とをぢいつと見つめてゐると、お絹が蛇か、蛇がお絹か、お君にも判らないほどに怖ろしかつた。お絹は枕もとへ蛇の箱を持つて來いと云つた。

『君ちゃん。神棚の御神酒と、それからお米を持つて來ておくれ。』

箱はお絹の枕もとに運び出された。彼女はお君にかゝへられて蒲團の上に起き直つて、自分の尖つた膝の上に其箱をのせて貰つた。いつものやうに箱をとんとんと輕く叩くと、一匹の青い蛇の頭が箱の穴からぬるぬると現はれた。

お絹は小さい土器に神酒德利の雫をそゝいで、その口のさきへ押遣ると、蛇は神酒を嘗めるやうに旨さうに嘗め盡した。お絹は更に自分の手掌に米をのせて出すと、蛇は鈍い眼で左右を見まはしながら、一粒も殘さずに啖み込んでしまつた。

『お前、あたしを忘れちやいけないよ。もう好いからお歸り。』

お絹に頭を撫でられて、蛇はおとなしく首を引つ込めた。彼女は再び箱をたゝくと、待ちかねてゐたやうに第二の青い蛇が穴から首を出した。お絹はかれにも神酒と米とをあたへた。さうして同じやうにあたしを忘れるなと云つて聞かせた。かれが穴に隱れると更に第三の青い蛇が頭をあらはして、これもお絹の手から神酒と米とを授けられて嬉しさうに首を垂れてゐた。

彼女はその蛇の首をつかんで穴からずるずると抽き出すと、蛇は二つに裂けた紅い舌を火焔のやうにへらへらと吐き出しながら、お絹の瘦せた手首へ戯れるやうに絡みついた。

『銚子出る時ゃ涙で出たが……。』

小聲で唄ひながら、お絹は片手で膝をたゝいて拍子を取ると、蛇は滑かな膚に菱形の尖つた鱗を立てゝ、眼瞼のない眼を眠るやうに瞑ぢ

た。しかしかれは何時までも安らけく其音樂を聴いてゐることを許されなかつた。

『今宵で銚子の風も最後――。』

唄の聲がふるへながら消えると同時に、かれは尾の先をつかんでずる〜と手首から引き解かれた。

『君ちやん。お前、知つてゐるだらう。かうして斯うするんだよ。』

尾をつかまれた蛇は縄を絡ねたやうに胴を捲いて、空を二つ三つ舞つたかと思ふと、その持主の細い腕にくる〜とまき付いた。お絹はお君を見返つてにいと笑つた。お君は身を固くしておかつと見つめてゐた。

『さあ、好いからお歸り。』

箱の中の蛇もお絹の頭を離れて、もとの箱の穴へ追ひ遣られた。

『あたしが死んだらば、お前やつぱりこの商賣になるかえ。』と、お絹は訊いた。

『あたし、巳年でないから駄目ですわ。』

『さうも限らない。お君だつて巳年ぢやないけれど……。』と、お絹は考へてゐた。『だが、まあ止した方がよからうよ。こんな商賣するもんぢやない。あたしだつて、こんな商賣でなけりやあ男に愛想を竭かされなかつたかも知れない。だけれども、あたしがゐなくなると、おまへは家へ歸らなけりやあなるまい。可哀さうだね。』

お君は兩袂で顔を掩ひながら啜り泣きをはじめた。

『阿母さんが違つてゐるんだからね。あたしも既う少し達者でゐれば、お前の面倒を見てあげられるんだけれど……。おたがひに運が惡いんだから仕様がない。』

お絹は崩れるやうに蒲團の上に俯伏すと、お君は聲を立てゝ泣き出した。

『姐さん。後生ですから死なずにくださいよ。姐さんが死ねば……あたしも死んでしまひます。』と、お君は又しやくり上げた。

『そりやあ妾だつて死にたかあないけど……。妾、ほんたうに死に切れないけれど……。好いかい。今のことはお前に頼んだよ。あたしの着物でも何でもみんな形見にお前にあげるから。たに、御葬式ぐらゐは小屋の方でどうにかして呉れるだらうよ。だがね、この蛇は人にやつかり渡しちやいけないよ。これだけは飼ひ馴らしてあれば賣つても好値になる代物だし、また何かの役にも立つかも知れないから。誰がなんと云つても渡しちやいけないよ。』

『はい。』と、お君は泣きながら首肯いた。

けふは風の工合か、東兩國の觀世物小屋の囃子の音が手に取るやうにきこえた。お絹はさつきから自分でも不思議だと思ふくらゐに、氣分もはつきりして、舌も自由に働いたのであるが、云ふだけのことを云つてしまふと、急にがつかりと氣が弛んで、眼が眩みさうに頭が熱つて來た。彼女は俯伏したまゝで又正體もなく昏睡に陷つたので、お君はそつと寄つて、上から衾をきせて遣つた。縁の下では晝でも蛼が鳴いてゐた。

日が暮れると、豐吉を先に立てゝ、お若やお花やお辰がぞろ〜と見舞に來た。お花とお辰は先へ歸つた。豐吉とお若はあとに殘つて、お君と三人で薄暗い行燈の下に默つて坐つてゐた。さつきから幾度も風鈴そば屋の聲を聞くので、この頃の夜もだん〜に長くなつたかと思はれた。綿衣の節句もあしたに迫つて、その夜寒をよび出すやうな鐘の聲が御船藏の屋根のあたりで遠くきこえた。

『さびしいね。』と、お若は襟をかき合はせた。

『さびしいなあ。』と、豐吉も腕をくんだ。

大川の水の音もこゝまで聞えるほど靜かな夜であつた。お絹は急に夢から醒めたやうに叢

掻いて、再び蛇の蜿蜒るやうに蒲團の上を這ひまはつた。彼女は林之助の名を二度呼びつゞけた。三度目にお里の名を呼んだ。

一五

豐吉が向柳原の屋敷へあわたゞしく駈付けたのは、その夜の八つ半（午後九時）頃であつた。

『お絹さんは到頭いけませんでした。』

『ふむ。何時頃……。』と、林之助もさすがに顏色を變へた。

『たつた今です。兎も角もすぐに來ておくんなさい。みんなも待つてゐますから。』

林之助は行かれないと氣の毒さうに云つた。なにぶんにも主人は明日早朝の登城であるから、自分がこれから屋敷を明けるわけには行かないと斷つた。豐吉は不平らしくぐづ〳〵云つてゐたが、林之助はまつたく何うしても行くことは出來ないのであつた。彼は色々に譯を云つてやう〳〵に豐吉をなだめて歸した。

『薄情ですねえ。お絹さんが化けて出ますぜ。』

と、豐吉は忌味を云つて歸つた。なんと云はれても林之助は仕方がなかつた。豐吉ばかりでなく、嚴しい屋敷の掟を知らない者どもは、みんな自分を薄情とか不實とか非難してゐるであらうと、林之助は心苦しく思つた。さうして、お絹の死目に逢はなかつたことが殘り惜しくも思はれた。自分にも罪があるやうに思はれて何だか氣が咎めてならなかつた。それと同時に、自分の身體をくゝられてゐた繩が自然に解けたやうな輕い氣にもなつた。

『おれがお絹を殺したわけではない。』と、彼は自分で自分を辯護した。死目に逢へなかつたのも自分の罪ではない、今夜行かないのも自分の薄情からではないと、彼は色々の理窟をかんがへて努めて自分を辯護しようと試みた。それでも何だか自分に後暗い點があるやうに危まれた。

彼は今にもこゝへお絹のおそろしい眼が現はれて來はしまいかと恐れられた。お絹に別れたことも悲しかつた。煩いとか執念深いとか思ひながらも、彼女と自分とのあひだには切ることのできない絆がしつかりと結び付けられてゐたのであつた。自分も無理にそれを振切らうとはしなかつた。その絆が自然に切り放されて、自分は今初めて自由の身となつた。彼は思はずほつとすると同時に、又なんとなく心さびしくなつた。お絹が急に戀しく懷かしくも思はれた。

お經の文句は何にも知らない彼も、今夜は佛壇代りの机にお絹の俗名をかいた紙片を貼つて、それにむかつて一心に南無阿彌陀佛と念じた。とき〴〵に部屋の障子に女の髮の毛がさら〳〵と觸るやうな音が耳について、彼は總身に水を浴びせられたやうに感じた。屋敷を出られない彼は今夜はこゝで通夜をするつもりで、明けの鶏のきこえるまで行儀よく机の前に坐つてゐると、初めてお絹と馴染んだ時のことや、本所の家に一緒に暮してゐた時のことや、自分がこゝへ來てから後のことや、色々の思ひ出がそれからそれへと湧き出して、彼の眼は絶間なしに濕んだ。お絹はやはり生かして置きたかつた。らしと見し世ぞ今は戀しきとは能く云つたものだと、彼は今更のやうに感じた。

明日は主人が登城の當日で、林之助はなにを考へてゐる間もなかつた。彼は用人に叱られないやうにかひ〴〵しく働いた。登城もとゞこほりなく濟んで、主人が屋敷へもどつて來ると、彼も先づ荷を卸したやうに思つた。お絹の送葬はけふの暮方と聞いてゐるので、たとひ途中の見送りは出來ないまでも、せめて門送りだけでもしたいと思つて、彼は早々に屋敷を出た。出る先になつて氣がついたのは、お里の母の死を

聞いた時とおなじやうに、彼は幾らかの銀を用意して行かなければならない事である。いつもの場合と違つて、彼は空手でお絹の家の格子をくゞるわけには行かなかつた。

　このあひだの二歩がまだ返してないので、林之助は又もや用人に賴むことも出來なかつた。屋敷中にはほかに融通の付きさうな人物は見付けられなかつた。彼は苦しまぎれに門番の老爺を口說いた。門番は內職をして小金を溜めてゐると云ふことを知つてゐるからであつた。門番は素直に貸してくれないのを、林之助は色々に賴んだ。それでも彼は肯かなかつた。門番は林之助が蛇つかひの小屋や列び茶屋へ足近く入込むことを知つてゐるので、彼の銀の費途を疑つて、さう云ふ不信用の人間に大事の金を貸されないと云ふやうな口吻で、飽までも頭を橫に振り通した。林之助も根負けがして、仕方が無しに屋敷を出たが、どう考へても空手では行かれなかつた。彼は友達の梶田彌太郎のところへ行つて賴まうかとも思つたが、これから訪ねて行つても果して家にゐるか何うだか判らなかつた。居たところで屹とその銀が出來るかどうかも疑問であつた。そんなことに暇取つてゐる中に、葬式が出てしまつては何にもならないと、林之助はむやみに氣が急いた。

『えゝ、もう仕方がない。』

　彼は思ひ切つて馴染の質屋へかけ込んで、大小を投げ出して銀を借りた。武士の大小であるから片時も離すことはできない、今夜中には屹と受け出すと番頭を口說いて、彼は二兩二歩を借り出した。それを懷中にして本所へ一散にかけ付けると、お絹の棺は小屋の者と近所の人たちに寂しく送られて、今やかつぎ出されようとする所であつた。林之助は棺のまへに坐つて線香を供へた。美しい水色の杜若もそこには見えなかつた。絢爛しい華魁の衣裳もみえなかつた。たゞ白木の棺桶が荒繩で十文字にくゝられてゐるだけであつた。あまりの果敢なさに林之助は胸が詰るやうになつて、淚が止度無しにほろ／＼と流れた。彼は取りあへず一兩の金を包んで、けふの葬式萬端を取賄つてゐるといふ小屋主に渡した。

　八幡鐘が夕六つを撞き出すころに、棺はいよいよ送り出された。お若もお君も眼を泣き腫らして棺のそばに附いて行つた。林之助も家の外まで送つて出ると、ゆふぐれの町には秋の霧が薄く迷つて、豐吉とほかの二三人が振り照してゆく提灯の火の影は、その霧隱れにぼんやりと搖れて行つた。それをいつまでも見送つて立つ林之助の眼には淚のあとが乾かなかつた。

　一旦引返して內へ這入ると、隣のおばあさんが留守番役に一人坐つてゐた。林之助は彼女からお絹の臨終のありさまなどを詳しく聽いた。お絹が最後にお里の名を呼んだのを知つて、彼は又ぞつとした。

　寺は深川で、見送りの人達も四つ(十時)前には皆な歸つて來た。なぜか知らないが、みな林之助に對しては無愛想で、彼に嫌みの口上をいふ者は一人もなかつた。豐吉やお若も傍を向いてゐて殆ど挨拶もしないばかりか、豐吉はときどきに當て擦りらしい毒口さへ放つた。それも畢竟は屋敷の物堅い掟を知らないで、一途に自分を不人情の人間と恨んでゐるせゐであらうと林之助も察してゐたが、今となつては一々その云譯をするのも面倒であつた。武士が大小までも手放して來たほどの切ない心はお前たちには判るまい。おれの心は佛がよく知つてゐる筈だと、彼は肚のなかで彼等の無智を嘲つてゐた。

　そのうちに小屋主は氣がついて林之助に注意した。

『失禮でございますが、旦那樣、お腰の物は……』

こんな混雑の時でございますから、もし間違ひでもありますとなりません。」

林之助はぱつと赤面した。まさか大勢の前で、武士が大小を質に入れて来たとは云へなかつた。返事に困つておど／＼してゐると、豐吉は薄痘痕の顔に三角の眼をひからせた。

「なるほど旦那は丸腰で……。へえ、もう今日かぎり御屋敷の方はお止めになつたんでございますかえ。はゝあ、それぢやあこゝの姐さんがゐなくなつたんで、大びらでお里の方へ引取られるやうなことで……。なんでもお里のおふくろの死んだ時にやあ大層に肩を入れてお世話をなすつて遣つたさうで……。へえ、みんな知つてゐますぜ。」

彼は憎々しく冷ら笑つた。丸腰を見とがめられて赤面してゐるところへ、又もやこんな忌味を云はれて、林之助は思はず勃然とした。

「お里のおふくろが死んだ時に香奠を出したのがなんで悪い。香奠を出さうと出すまいと俺の勝手だ。貴様達におれの料簡がわかるか。」

豐吉も負けずに何か云はうとするのを、小屋主がおさへた。ほかの者もなだめた。兎もかくも武士の林之助を相手にして喧嘩をしては面倒だと思つたらしい。それはそれで濟んだが、四方八方から意地の悪い眼で睨まれてゐるやうで、林之助はなにぶんにも居心が悪いので、碌々に挨拶もせずにふいと表へ出てしまつた。彼の腰のまはりは淋しかつた。そのうしろ姿を見送つて、内ではくす／＼笑ふ聲も洩れきこえた。

「怪しからん奴等だ。」

林之助は腹が立つて堪らなかつた。彼は懐中にまだ一兩二歩の銀が殘つてゐるので、近所の軍鷄屋へ又もや這入つた。悲哀と忿怒とが縺れ合つて、蛇のやうに亂れてゐる胸の苦悩を救ふために、彼は澤山も飲めない酒を無暗に飲んだ。

『このあひだもこゝで飲んで、それからお里の家へ行つたのだ。今夜はどこへ行かう。』

彼は丸腰で屋敷の門を潜れないことを考へた。もう今頃からどこへ行つても、大小をうけ出す金の才覺もできさうもない。さりとてお里の家へ引返す氣にもなれないので、林之助はゆく先に迷つた。醉も手傳つて彼はもう自棄になつた。今夜もこれからお里の家へ行かうと思つた。お絹はもう死んでゐる、お里の阿母も死んでゐる、だれにも遠慮も氣兼も要らないと思つた。軍鷄屋を出ると、彼の足は外神田へ向つた。

めづらしく霧の深い夜で、林之助は深い海の底を泳いでゆくやうに感じた。

十三夜も過ぎた。十五日は神田祭で賑はつた。

林之助はお里と一緒に祭禮を見物した。彼の大小はお里の着物や帯と一緒に、無事に質屋の庫から請出されてゐた。お里の顔には母を亡つた悲しみの色がもう拭はれてゐた。林之助の胸には、お絹を亡つた悲しみの雲が吹き遣られてゐた。二人に取つては樂しい祭禮の夜であつた。

祭禮に疲れた人たちは、更に新しい騒ぎの種を發見して驚き騒いだ。お里の家がいつまでも戸をあけないのを不思議に思つて、近所の者が戸をこぢあけて覗くと、お里の寢姿は下の六疊に見えなかつた。彼女は二階に若い男と枕をならべたまゝで死んでゐた。ふたりの頸には青い蛇が絞め付けるやうに固くまき付いてゐた。

それと同じ日に、兩國の秋の水にお絹の小さい死骸が浮きあがつた。彼女も懐中に一匹の青い蛇を抱いてゐた。

木曾の旅人

一

T君は語る。

その頃の輕井澤は寂れ切つてゐましたよ。それは明治二十四年の秋で、あの邊も衰微の絶頂であつたらしい。なにしろ昔の中仙道の宿場がすつかり寂れてしまつて、土地にはなんにも産物は無いし、皆ともう立ち行かないことになつて、ほかの土地へ立退く者もある。わたしも親父と一緒に横川で汽車を降りて、碓氷峠の舊道をがた馬車にゆられながら登つて降りて、荒涼たる輕井澤の宿に着いたときには、實に心細いくらゐ寂しかつたのです。それが今日ではどうでせう、まるで世界が違つたやうに開けてしまひました。その當時わたし達が泊つた宿屋はなにしろ一泊三十五錢といふのだから、大抵想像が付きませう。その宿屋も今では何とかホテルといふ素晴らしい大建物になつてゐます。一體そんなところへ何しに行つたのかと云ふと、つまり東京から碓氷の紅葉を見物しようといふ親父の風流心から出發したのですが、妙義で好い加減に疲れてしまつたので、碓氷の方はがた馬車に乘りましたが、山道で二三度あぶなく引つくり返されさうになつたのには驚きましたよ。

わたしは一向面白くなかつたが、親父は閑靜で好いとかいふので、その輕井澤の大きい薄暗い宿屋に四日ばかり逗留してゐました。考へてみると隨分物好きです。すると、その三日目は朝から雨がしとしと降る。十月の末だから信州の山の中はなかなか寒い。おやぢと私とは宿屋の店に出て、大きい爐の前に坐つて、宿の亭主を相手に土地の話などを聽いてゐると、やがて日の暮れかゝるところに、もう五十近い大男が門口からずつと這入つて來ました。その男の商賣は獵師で、曾て五六年ほど木曾の方へ行つてゐたが、さすがに住み馴れた故郷でもやはり懷かしいとみえて、この夏の初めからこゝへ歸つて來たのださうです。われわれも退屈してゐるところだから、その男を爐のそばへ呼びあげて、色々の話を聽いたりしてゐるうちに、獵の男が木曾の山奥にゐたときの話をはじめました。

『あんな山奥にゐたら、時々には怖ろしいことがありましたらうね。』と、年の若い私は一種の好奇心にそゝられて訊きました。

『さあ。山奥だつて格別に變りはありませんよ。』と、かれは案外平氣で答へました。『一番怖ろしいのは大風雨ぐらゐのもんですよ。獵師はときどきに怪物にからかはれると云ひますがね。』

『いゝえ、えてものとは何です。』

『なんだか判りません。まあ、猿の甲羅經たものだとか云ひますが、誰も正體をみた者はありません。まあ、早くいふと、そこに一羽の鳥があるいてゐる。はて珍らしいと云ふのでそれを捕らうとすると、鳥めは人を焦らすやうについと逃げる、こつちは焦つて又追つて行く。それが他のものには何にもみえないで、獵師は鳥を追つて行くんです。その時にほかの者が大きい聲で、そらえてものだぞ、氣をつけろと呶鳴つて遣ると、獵師もはじめて氣が付くんです。なにしろ最初から何にもゐるのぢやないので、その獵師の眼にだけそんなものが見えるんです。そ

れですから木曾の山奥へ這入る猟師は決して一人で行きません、屹とふたりか三人連れで行くことにしてゐます。ある時にはこんなこともあつたさうです。山奥へ這入つた三人の猟師が、谷川の水を汲んで飯をたいて、もう蒸れた時分だらうと思つて、そのひとりが釜の蓋をあけると、釜のなかから女の大きい首が跳り出たんです。その猟師はあわてゝ釜の蓋をして、上からしつかり押へながら、えてものだ、えてものだ、早くぶつ放へと呶鳴りますと、連の猟師はすぐに鉄砲を取つてどこを的とも無しに二三発つゞけ撃ちに撃ちました。それから釜の蓋をあけると、女の首はもう見えませんでした。まあ、斯ういふたぐひのことをえてものの仕業だと云ふんですが、そのえてものに出逢ふものは猟師仲間に限つてゐて、仲小屋などでは一度もそんな目に逢つたことはありませんよ。」

かれは太い煙管で煙草をすぱ〳〵と燻らしながら澄まし込んでゐるので、わたしは失望しました。さびしく衰へた古い宿場で、暮秋の寒い雨が小歇みなしに降つてゐる夕、深山の奥に久しく住んでゐた男から何かの怪しい物がたりを聞き出さうとした、その期待は見事に裏切られてしまつたのです。それでも私は強請るやうに執拗く訊きました。

「しかし五年もそんな山奥にゐては、一度や二度はなにか變つたこともあつたでせう。いや、お前さん方は馴れてゐるから何とも思はなくつても、ほかの者が聞いたら珍らしいことや、不思議なことが……。」

「さあ。」と、かれは行燈の煙が眼にしみたやうに眼を瞬きました。「なるほど考へてみると、長いあひだに一度や二度は變つたこともありましたよ。そのなかでも唯つた一度、なんだか判らずに薄気味の悪かつたことがありました。なに、その時は別になんとも思はなかつたのですが、あとで考へるとなんだか気味が好くありませんでした。あれは何ういふわけですかね。」

かれは重兵衛といふ男で、そのころ六つの太吉といふ男の児と二人ぎりで、木曾の山奥の杣小屋にさびしく暮してゐました。そこは御嶽山にのぼる黒澤口から更に一里ほどの奥に引込んでゐるので、登山者も強力もめつたに姿をみせなかつたさうです。さてこれからがお話の本文と思つてください。

『お父さん、怖いよう。』

今までおとなしく遊んでゐた太吉が急に顔の色を變へて、父の膝に取りついた。親ひとり子ひとりでこの山奥に年中暮してゐるのであるから、寂しいのには馴れてゐる。猿や猪を友達のやうに思つてゐる。小屋を吹き倒すやうな大風雨も、山がくづれるやうな大雷鳴も、めつたにこの少年を驚かすほどのことはなかつた。それが今日にかぎつて顔色をかへて騒ぐ。父はその頭をなでながら優しく言ひ聞かせた。

『なにが怖い。お父さんはこゝにゐるから大丈夫だ。』

『だつて、怖いよ。お父さん。』

「弱虫め。なにが怖いんだ。そんな怖いものがどこにゐる。」と、父の声はすこし暴くなつた。

「あれ、あんな声が……。」

太吉が指さす向うの森の奥、大きい樅や栂の梢に隠れて、なんだか唄ふやうな悲しい声が切れ〳〵にきこえた。九月末のゆふ日はいつか遠い峰に沈んで、木の間から洩れる湖のやうな薄青い空には、三日月の淡い影が白銀の小舟のやうに浮んでゐた。

「馬鹿め。」と、父はあざ笑つた。「あれがなんで怖いものか。日がくれて里へ帰る、樵夫か猟師が唄つてゐるんだ。」

「いゝえ、さうぢやないよ。怖い、怖い。」

『えゝ、うるさい野郎だ。そんな意氣地無しで、こんなところに住んでゐられるか。そんな弱蟲で男になれるか。』

叱り付けられて、太吉はたちまち竦んでしまつたが、やはり怖ろしさは止まないとみえて、小屋の隅の方に這ひ込んで小さくなつてゐた。重兵衞も元來は子煩惱の男であるが、自分の嚴乘に引きくらべて、わが子の臆病がひどく癪に障つた。

『やい、やい、何だつてそんなに小さくなつてゐるんだ。こゝは俺達の家だ。誰が來たつて怖いことはねえ。もつと大きくなつて威張つてゐろ。』

太吉は默つて、相變らず小さくなつてゐるので、父はいよ／＼癪に障つたが、流石にわが子をなぐり付けるほどの理由も見出せないので、たゞ忌々しさうに舌打ちした。

『仕樣のねえ馬鹿野郎だ。およそ世のなかに怖いものなんぞあるものか。さあ、天狗でも山の神でもえてものでも何でもこゝへ出て來てみろ。みんなおれが叩きなぐつて遣るから。』

わが子の臆病を勵ますためと、また二つには唯なにが無しに癪に障つて堪らないのとで、かれは焚火の太い枝を把つて、火のついたまゝで無暗に振りまはしながら、相手があらば一撃ちと云つたやうな劍幕で、小屋の入口へつか／＼と駈け出した。出ると、外には人が立つてゐて、出合ひがしらに重兵衞のふり廻す火の粉は、その人の顏にばら／＼と飛び散つた。相手も驚いたであらうが、重兵衞もおどろいた。兩方がしばらく默つてにらみ合つてゐたが、やがて相手は高く笑つた。こつちも思はず笑ひ出した。

『どうも飛んだ失禮を致しました。』

『いや、どうしまして……。』と、相手も會釋した。『わたくしこそ突然にお邪魔をして濟みません。實は朝から山越しをして草臥れ切つてゐるもんですから。』

少年を恐れさせた怪しい唄の主はこの旅人であつた。夏でも寒いと云はれてゐる木曾の御嶽の山中に行き暮れて、かれはその疲れた足を休めるために此の焚火の煙を望んで尋ねて來たのであらう。疲勞を忘れるがために唄つたのである。火を慕ふがために尋ねて來たのである。これは旅人の習で不思議はない。この小屋はこゝらの一軒家であるから、樵夫や獵師が煙草やすみに來ることもある。路に迷つた旅人が湯を貰ひに來ることもある。そんなことは左のみ珍らしくもないので、親切な重兵衞はこの旅人をも快く迎ひ入れて、生木のいぶる焚火の前に坐らせた。

旅人はまだ二十四五ぐらゐの若い男で、色の少し蒼ざめた、頰の瘦せて尖つた、しかも圓い眼は愛嬌に富んでゐる優しげな人物であつた。頭には鍔の廣い薄茶の中折帽をかぶつて、詰襟ではあるが左のみ見苦しくない縞の洋服をきて、短いズボンに脚絆草鞋といふ身輕のいでたちで、肩には學校生徒のやうな茶色の雜嚢をかけてゐた。見たところ、御料林を見分に來た縣廳のお役人か、惡くいへば地方行商の藥賣か、先づそんなところであらうと重兵衞はひそかに値踏みをした。

かういふ場合に、主人が先づ旅人に對する質問は、昔からの紋切形であつた。

『お前さんはどつちの方から來なすつた。』

『福島の方から。』

『これから何地へ……。』

『御嶽を越して飛驒の方へ……。』

こんなことを云つてゐるうちに、日も暮れてしまつたらしい。燈火のない小屋のなかは燃えあがる焚火にうす紅く照されて、重兵衞の四角張つた顏と旅人の尖つた顏とが、うづ卷く煙のあひだからぼんやりと浮いてみえた。

二

「おかげさまで大分暖かくなりました。」と、旅人は云つた。「まだ九月の末だといふのに、こゝはなか〳〵冷えますね。」

「夜になると冷えて來ますよ。なにしろ暗ケ嶽では八月に凍え死んだ人があるくらゐですから。」と、重兵衛は焚火に木の枝をくべながら答へた。

それを聞いただけでも薄氣味惡くなつたやうに、旅人は洋服の襟をすくめながら首肯いた。

この人が來てから凡そ半時間ほどにもならうが、その間に彼の太吉は、子供に追ひつめられた石蟹のやうに、隅の方に小さくなつたまゝで身動きもしなかつた。が、彼はいつまでも隱れてゐる譯には行かなかつた。彼はたうとう自分の怖れてゐる人に見付けられてしまつた。

「おゝ、子供衆がゐるんですね。うす暗いので先刻から些とも氣がつきませんでした。そんなら、こゝに好いものがあります。」

かれは首にかけた雜嚢の口をあけて、新聞紙につゝんだ竹の皮包をとり出した。中には海苔卷の鮓が澤山に這入つてゐた。

「山越しをするには腹が減るといけないと思つて、食物を澤山かひ込んで來たのですが、さうも食へないもので……。御覽なさい。まだこつちにもこんなものがあるんです。」

もう一つの竹の皮づつみには、食べ殘りの握り飯と刻み鯣のやうなものが這入つてゐた。

「まあ、これを子供衆にあげてください。」

こゝらに年中住んでゐるものには、海苔卷の鮓でもなか〳〵珍らしい。重兵衛は喜んでその贈物をうけ取つた。

「おい、太吉。お客人がこんな好いものを下すつたぞ。早く來てお禮をいへ。」

いつもならば黙つてゐても飛び出して來る太吉が、今夜はなぜか振向いても見なかつた。かれは眼にみえない怖ろしい手に摑まれたやうに、默くなつたまゝで竦んでゐた。さつきからの一件もあり、且は客人の手前もあり、重兵衛はどうしても叱言を云はないわけには行かなかつた。

「やい、何をぐづ〳〵してゐるんだ。早く來い、こつちへ出て來い。」

「あい。」と、太吉は微かに答へた。

「あいぢやあねえ、早く來い。」と、父は呶鳴つた。「お客人に失禮だぞ。早く來い。來ねえか。」

氣の短い父はあり合ふ木の枝を取つて、わが子の背にたゝき付けた。

「まあ、あぶない。怪我でもすると不可ない。」と、旅人はあわてゝ遮つた。

「なに、云ふことを肯かない時には、いつでも引つ叩くんです。さあ、野郎、來い。」

もう斯うなつては仕方がない。太吉は穴から出る蟹のやうに、小さいからだをいよ〳〵小さくして、父のうしろへ這ひ寄つて來た。重兵衛はその眼さきへ竹の皮包みを開いて突きつけると、紅い生姜に青黒い海苔を彩つて、小兒の眼には左も旨さうにみえた。

「それみろ。旨さうだらう。お禮をいつて、早く食へ。」

太吉はやはりうしろに隱れたまゝで、やはり黙つてゐた。

「早くおあがんなさい。」と、旅人も笑ひながら勸めた。

その聲を聞くと、太吉はまた顫へた。さながら物に襲はれたやうに、父の背中に犇と嚙みついて、しばらくは呼吸もしなかつた。彼はなぜそんなにこの旅人を恐れるのであらう。小兒にはあり勝の人見知りかとも思はれるが、太吉は平生そんなに弱い小兒ではなかつた。殊に人里

の遠いところに育つたので、非常に人を戀しがる方であつた。樵夫でも獵師でも、あるひは見しらぬ旅人でも、一度この小屋へ足を入れた者は、みんな小さい太吉の友達であつた。どんな人に出逢つても、太吉はなれなれしく小父さんと呼んでゐた。それが今夜にかぎつて、ひどくその人を嫌つて恐れてゐるらしい。相手が子供であるから、旅人は別に氣にも留めないらしかつたが、その平生を知つてゐる父は一種の不思議を感じないわけには行かなかつた。

「なぜ食はない。折角うまい物を下すつたのに、なぜ早く頂かない。馬鹿な奴だ。」

「いや、さうお叱りなさるな。子供といふものは、その時の調子でひよいいと拗れることがあるもんですよ。まああとで喫べさせたら可いでせう。」と、旅人は笑ひを含んで宥めるやうに云つた。

「お前がたべなければ、お父さんがみんな喫べてしまふぞ。いゝか。」

父が見返つてたづねると、太吉は僅かにうなづいた。重兵衛は傍の切株の上に皮包みをひろげて、錆びた鐵の棒のやうな海苔卷の鮓を、またゝく間に五六本も頬張つてしまつた。それから藥鑵のあつい湯をついで、客にもすゝめ、自分もがぶがぶ飲んだ。

「一時にどうです。お前さんはお酒を飲みますかね。」と、旅人は笑ひながらまた訊いた。

「酒ですか。飲みますとも……。大好きですが……。かういふ山の中にゐちやあ不自由ですよ。」

「それぢやあ、こゝにこんなものがあります。」

旅人は雜嚢をあけて、大きい罎詰の酒を出してみせた。

「あ、酒ですね。」と、重兵衛の口からは涎が出た。

「どうです。寒さ凌ぎに一杯遣つたら……。」

「結構です。すぐに燗をしませう。えゝ、邪魔だ。退かねえか。」

自分の背中にこすり付いてゐる我が子をつき退けて、重兵衛は傍の棚から忙がしさうに徳利を把り出した。それから焚火に枝を加へて、罎の酒を徳利に移した。父にふり放された太吉は猿曳に捨てられた小猿のやうにうろうろしてゐたが、煙のあひだから旅人の顔を見ると、また忽ちに顫へあがつて、筵の上に俯伏したまゝで再び顔をあげなかつた。

「今晩は……。重兵衛どん、居るかね。」

外から聲をかけた者がある。重兵衛とおなじ年頃の獵師で、大きい黑い犬を牽いてゐた。

「彌七どんか。這入るがいゝよ。」と、重兵衛は燗の支度をしながら答へた。

「誰か客人がゐるやうだね。」と、彌七は肩にした鐵砲をおろして、小屋へ一足踏み込まうとすると、黑い犬はなにを見たのか俄に唸りはじめた。

「なんだ、なんだ。こゝはお馴染の重兵衛どんの家だぞ。はゝゝゝゝ。」

彌七は笑ひながら叱つたが、犬はなかなか鎭まりさうにもなかつた。四足の爪を土に食ひ入るやうに踏ん張つて、耳を立て、眼を瞋らせて、頻りにすさまじい唸り聲をあげてゐた。

「黑め。なにを吠えるんだ。叱つ、叱つ。」と、重兵衛も内から叱つた。

彌七は焚火の前に寄つて來て、旅人に挨拶した。犬は相變らず小屋の外に唸つてゐた。

「お前好いところへ來たよ。實は今このお客人にかういふものを貰つての。」と、重兵衛は自慢らしく彼の徳利を振つてみせた。

『やあ、酒の御馳走があるのか。なるほど運が好いなら。旦那、どうも有難うごぜえます。』

『いや、お禮をいふほどに澤山もないのですが、

まあ寒さ凌ぎに飲んでください。喫び残りで失禮ですけれど、これでも下物にして……。」

旅人は包みの握り飯と刻み鯣とを出した。海苔巻もまだ幾つか残つてゐる。酒に目のない重兵衛と彌七とは遠慮なしに飲んで食つた。また静かな山奥の夜は寂寞で、たゞ折々に峯を渡る山風が大浪の打ち寄せるやうに聞えるばかりであつた。

酒は左のみの上酒といふでもなかつたが、地酒を飲み馴れてゐるこの二人には上々の甘露であつた。自分達ばかりが飲んでゐるのも流石にきまりが悪いので、をり〳〵には旅人にも茶碗をさしたが、相手はいつも笑つて頭を振つてゐた。小屋の外では犬が待ちかねてゐるやうに吠えつゞけてゐた。

「騒々しい奴だなあ」と、彌七は呟いた。「奴め、腹が空つてゐるのだらう。この握り飯を一つ分けてやらうか。」

かれは握り飯を把つて軽く投げると、戸の外までは轉け出さないで、入口の土間に落ちて止まつた。犬は一物をみて入口へ首を突つ込んだが、旅人の顔を見るや否や俄に狂ふやうに吠え哮つて、鋭い牙をむき出して飛びかゝらうとした。

「叱つ、叱つ。」

重兵衛も彌七も叱つて追ひ退けようとしたが、犬は憑物でもしたやうにいよ〳〵狂ひ立つて、焚火の前に躍り込んで來た。旅人はやはり黙つて睨んでゐた。

「怖いよう」と、太吉は泣き出した。

犬はます〳〵吠え哮つた。小兒は泣く、犬は吠える、狭い小屋のなかは亂脈である。客人の手前、あまり氣の毒になつて來たので、無頓着の重兵衛もすこし顔を嶮めた。

「仕様がねえ。彌七、お前はもう犬を引張つて歸れよ。」

「むゝ、長居をすると却つてお邪魔だ。」

彌七は旅人に幾たびか無禮を詫つて、早々に犬を追ひ立てゝ出た。と思ふと、かれは小戻りをして重兵衛を表へ呼び出した。

「どうも不思議なことがある。」と、かれは重兵衛に囁いた。「今夜の客人は怪物ぢやねえかしら。」

「馬鹿を云へ。えてものが酒や鮓を振舞つてくれるものか。」と、重兵衛はあざ笑つた。

「それもさうだが……。」と、彌七はまだ首を捻つてゐた。「おれ達の眼にはなんにも見えねえが、この黒めの眼には何か可怖い物が見えるんぢやねえかしら。彼奴、人間よりよつぽど利口な奴だからな。」

彌七の牽いてゐる熊のやうな黒犬がすぐれて利口なことは、重兵衛もふだんから能く知つてゐた。この春、大猿がこの小屋へ襲つて來たのを、黒は焚火のそばに寝そべつてゐながら直に覺つて追ひ掛けて、たうとう彼を咬み殺したこともある。その黒が今夜の客にむかつて激しく吠えかゝるのは何か仔細があるかも知れない。わが子がしきりに彼の旅人を恐れてゐることも思ひ合されて、重兵衛もなんだか忌な心持になつた。

「だつて、あれが眞逆にえてものぢやあるめえ。」

「おれも然う思ふがの。」と、彌七はまだ腑に落ちないやうな顔をしてゐた。「どう考へても黒めが無暗にあの客人に吠えつくのが可怖い。どうも唯事でねえやうに思はれる。試しに一つ打つ放してみようか。」

さう云ひながら彼は鐵砲を取り直して、空にむけて一發撃つた。その筒音はあたりに谺して、森の寝鳥がおどろいて起つた。重兵衛はそつと引返して内をのぞくと、旅人は些とも形を崩さないで、やはり焚火の煙の前におとなしく

坐つてゐた。

『どうもしねえか。』と、彌七は小聲できいた。『可怪いなら。ぢや、まあ仕方がねえ。おれはこれで歸るから、あとを氣をつけるが可いぜ。』

まだ吠えやまない犬を追ひ立てゝ、彌七は麓の方へ降つて行つた。

三

今まではなんの氣も注かなかつたが、彌七に嚇されてから重兵衛もなんだか薄氣味惡くなつて來た。まさかに怪物でもあるまい――かう思ひながらも、かれは彼の旅人に對して今までのやうな親みを有つことが出來なくなつた。かれは默つて内へ引返すと、旅人は彼にきいた。

『今の鐵砲の音はなんですか。』

『獵師が嚇しに撃つたんですよ。』

『嚇しに……。』

『こゝらへは時々にえてものが出ますからね。

畜生の分際で人間を馬鹿にしようとしたつて、そりや駄目ですよ。』と、重兵衛は探るやうに相手の顏をみると、かれは平氣で聽いてゐた。

『えてものとは何です、猿ですか。』

『さうでせうよ。いくら甲羅經たつて人間にや敵ひませんや。』

から云つてゐるうちにも、重兵衛はそこにある大きい鉈に眼を遣つた。驚破と云つたらその大鉈で相手の眞向を殴はして遣らうと、ひそかに身構へをしてゐたが、それが相手には些とも感じないらしいので、重兵衛もすこし張合拔けがした。怪物の疑ひもだん〱に薄れて來て、かれはやはり普通の旅人であらうと重兵衛は思ひ返した。併しそれも束の間で、旅人は又こんなことを云ひ出した。

『これから山越しをするのも難儀ですから、どうでせう、今夜はこゝに泊めて下さるわけには行きますまいか。』

重兵衛は返事に困つた。一時間前の彼であつたらば、無論にこゝろよく承知したに相違なかつたが、今となつてはその返事に躊躇した。よもやとは思ふものの、なんだか暗い影を帶びてゐるやうな此の旅人を、自分の小屋に明日まで止めて置く氣にはなれなかつた。

『折角ですが、それはどうも……。』

かれは氣の毒さうに斷つた。

『いけませんか。』

思ひなしか、旅人の瞳は鋭く光つた。愛嬌に富んでゐる彼の眼が俄に獸のやうに險しく變つた。重兵衛はぞつとしながらも、重ねて斷つた。

『何分知らない人を泊めると警察でやかましうございますから。』

『さうですか。』と、旅人は嘲るやうに笑ひながら首肯いた。その顏がまた何となく薄氣味惡かつた。

焚火がだん〱に弱くなつて來たが、重兵衛はもう新しい枝を炙べ足さうとはしなかつた。暗い峯から吹きおろす山風が小屋の戸をぐら〱と搖つて、どこやらで猿の聲がきこえた。太吉は先刻から筵をかぶつて隅の方に竦んでゐた。重兵衛も云ひ知れない恐怖に囚はれて、再びこの旅人を疑ふやうになつて來た。かれは努めて勇氣を振ひ興して、この不氣味な旅人を追ひ出さうとした。

『なにしろ何時までも斯うしてゐちやあ夜が更けるばかりですから、福島の方へ引返すか、それとも黑澤口から夜通しで登るか、早くどつちかにした方が可いでせう。』

『さうですか。』と、旅人はまた笑つた。

消えかゝつた焚火の光に薄明るく照されてゐる彼の蒼ざめた顏は、どうしてもこの世の人間とは思はれなかつたので、重兵衛はいよ〱堪らなくなつた。併しそれは自分の臆病な眼がさ

うした不思議を見せるのかも知れないと、かれはそこにある鉈に手をかけようとして幾たびか躊躇してゐるうちに、旅人は思ひ切つたやうに起ち上つた。
『では、福島へ引返しませう。さうして、明日は強力を雇つて登りませう。』
『さうなさい。それが無事ですよ。』
『どうもお邪魔をしました。』
『いえ、わたくしこそ御馳走になりました。』と、重兵衛は氣の毒が半分と、憎いが半分とで、丁寧に挨拶しながら入口まで送り出した。ほんたうの旅人ならば氣の毒である。人をだまさうとする怪物ならば憎い奴である。どつちにも片附かない不安な心持で、かれは旅人のうしろ影が大きい闇につゝまれてゆくのを見送つてゐた。
『お父さん。あの人は何處へか行つてしまつたかい。』と、太吉は生返つたやうに這ひ起きて來た。『怖い人が行つてしまつて、好いねえ。』
『なぜあの人がそんなに怖かつた。』と、重兵衛はわが子に訊いた。
『あの人、屹とお化だよ。人間ぢやないよ。』
『どうしてお化だと判つた。』
それに對して詳しい説明をあたへるほどの知識を太吉は有つてゐなかつたが、かれはしきりに彼の旅人はお化であると頭へたから主張してゐた。重兵衛はまだ半信半疑であつた。
『なにしろ、もう寢よう。』
重兵衛は表の戸を閉めようとするところへ、袷の筒袖で草鞋がけの男がまた這入つて來た。
『今こゝへ二十四五の洋服を着た男は來なかつたかね。』
『まゐりました。』
『どつちへ行つた。』
教へられた方角をさして、その男は急いで出て行つたかと思ふと、二三町先の森の中でたちまち鐵砲の音がつゞいて聞えた。重兵衛はすぐに出て見たが、その音は二三發で止んでしまつた。前の旅人と今の男とのあひだに何かの爭鬪が起つたのではあるまいかと、かれは不安ながらに立つてゐると、やがて筒袖の男があわたゞしく引返して來た。
『ちよいと手を貸してくれ。怪我人がある。』
男と一緒に駈けてゆくと、森のなかには彼の旅人が倒れてゐた。かれは片手にピストルを掴んでゐた。
『その旅人は何者なんです。』と、わたしは訊きました。
『なんでも甲府の人間ださうです。』と、重兵衛さんは説明してくれました。『それから一週間ほど前に、諏訪の温泉宿に泊つてゐた若い男と女があつて、宿の女中の話によると、女は蒼い顔をして毎日しく〳〵泣いてゐるのを、男はなんだか叱つたり嚇したりしてゐる樣子が、どうしても女の方では忌がつてゐるのを、男が無理に連れ出して來たものらしいといふことでした。それでも逗留中は別に變つたこともなかつたのですが、そこを出てから何處でどうされたのか、その女が顔から胸へかけてずた〳〵に斬り刻まれて、路ばたに抛り出されてゐるのを見つけ出した者がある。無論にその連の男に疑ひがかゝつて、警察の探偵が木曾路の方まで追ひ込んで來たのです。』
『すると、あとから來た筒袖の男がその探偵なんですね。』
『さうです。前の洋服がその女殺しの犯人だつたのです。たうとう追ひつめられて、ピストルで探偵を二發撃つたが中らないので、もうこれまでと思つたらしく、今度は自分の喉を撃つて死んでしまつたのです。』
親父とわたしとは顔を見あはせて少時默つてゐると、宿の亭主が口を出しました。

『ぢやあ、その男のうしろには女の幽靈でも附いてゐたのかね。子供や犬がそんなに騷いだのをみると……。』

『それだからね。』と、重兵衛さんは仔細らしく息をのみ込んだ。『おれも急にぞつとしたよ。いや、俺にはまつたく何にも見えなかつた。彌七にもなんにも見えなかつたさうだ。が、小兒は顫へて怖がる。犬は氣狂ひのやうになつて吠える。なにか變なことがあつたに相違ない。』

『そりやさうでせう。大人に判らないことでも子供にはわかる。人間に判らないことでも他の動物には判るかも知れない。』と、叔父は云ひました。

わたしもさうだらうかと思ひました。しかし彼等を恐れさせたのは、その旅人の背負つてゐる重い罪の影か、あるひは殺された女の凄慘い姿か、確かには判斷がつかない。何方にしてもわたしはうしろが見られるやうな心持がして、だん〴〵に親父のそばへ寄つて行つた。丁度彼の太吉といふ子供が父に取付いたやうに……。

『今でもあの時のことを考へると心持がよくありませんよ。』と、重兵衛さんは又云ひました。

外には暗い雨が降りつゞけてゐる。叔父はだまつて爐に粗朶を炙べました。――その夜の情景は今でもあり〳〵とわたしの頭に殘つてゐます。

三條大橋

京は三條のほとりに宿つた。六月はじめのあさ日は鴨河の流れに落ちて、雨後の東山は青いといふよりも黑く眠つてゐる。

このあたりで名物といふ大津の牛が柴車をひいて、今や大橋を渡つてゐる。その柴の上には、誰が風流ぞ、むらさきの露の滴る菖蒲の花が挾んである。

紅い日傘をさした舞子が橋を渡つて來て、恰も柴車とすれ違つてゆく。

所は三條大橋、前には東山、見るものは大津牛、柴車、花菖蒲、舞子と繪日傘――京の景物は總てこゝに集まつた。（『旅すゞり』より）

天國

倫敦の場末の町を通る。この國では一年中で最も氣候が好いといふ五月の晴れた日である。英國の五月は天國であると、わたしは或人から聞かされてゐた。

繪葉書などを列べてゐる小さい古い店の前に、世帶窶れのしたやうな四十前後の女がぼんやりと青空をながめてゐる。その足もとには飢ゑたやうな瘦犬が詰まらなさうに蹲つてゐる。

埃だらけの服を着た大道藝人らしい男がマンドリンをかゝへながら、疲れ切つたやうな顏をして、青葉の立木に倚りかゝつてゐる。

天國といふのは、やはり氣候だけのことであると私は思つた。（『旅すゞり』より）

火藥庫

一

『わたしの友人に佐山君といふのがあります。現在は××會社の支店長になつて上海に勤めてゐますが、このお話——明治三十七年の九月、日露戰爭の最中で、遼陽陷落の公報が出てから一週間ほど過ぎた後のことです。——の當時はまだ二十四五の青年で、北の地方の某師團所在地にある同じ會社の支店詰めであつたさうで、勿論その地位もまだ低い、單に一個の若い店員に過ぎなかつたのです。××會社はその頃、その師團の御用をうけたまはつて、何かの軍需品を納めてゐたので、戰爭中は非常に忙がしかつたさうです。佐山君は學校を出たばかりで、すぐにこの支店に廻されて、あまりに忙がしいので一時は面喰つてしまつたが、それもだんだんに馴れて來て、やうやう一人前の役目が先づとゞこほりなく勤められるやうになつた頃に、この不思議な事件が出來したのですから、その積りでお聽きください。』

かういふ前置きをして、M君は彼の佐山君と火藥庫と狐とに關する一場の奇怪な物語を說き出した。

遼陽陷落の報知は無論に歡喜の聲を以て日本中に迎へられたが、殊に師團の所在地であるだけに、こゝの氣分は更に一層の歡喜と誇とを以て滿された。盛大な提灯行列が三日にわたつて行はれて、佐山君の店の人達も疲れ切つてしまふほどに毎晩提灯をふつて步きつゞけた。聲のかれるほどに萬歲を叫びつゞけた。そのおびたゞしい疲勞の中にも、會社の仕事はますます繁劇を加へるばかりで、佐山君等は殆ど不眠不休といふありさまで働かされた。

けふも朝から軍需品の材料をあつめるために、町から四里ほども距れてゐる近在を自轉車で駈摺りまはつて、日の暮れる頃に歸つて來ると、もう半道ばかりで町の入口にゆき着くといふところで、自轉車に故障が出來た。田舍道を無暗に駈け通したせゐであらうと思つたが、途中に修繕を加へる所はないので、佐山君はよんどころ無しにその自轉車を引摺りながら步き出した。この頃の朝夕はめつきりと秋らしくなつて、佐山君が草臥れ足をひきながら辿つて來る川縁には、ほの白い蘆の穗が夕風になびいてゐた。佐山君は路傍の立木に自轉車を倚せかけて、卷莨をすひ付けた。

『そんなに急いで歸るにも及ぶまい。おれは今日だけでも他の人達の三倍ぐらゐも働いたのだ。』

こんな自分勝手の理窟を考へながら、佐山君は川端の根方に腰をおろして、鼠色の夕靄がだんだんに浮き出してくる川下の方をぼんやりと眺めてゐた。川の向うには雜木林に深くつゝまれた小高い丘が黑く横はつて、その奥には師團の火藥庫のあることを佐山君は知つてゐた。さうして、その火藥庫附近の木立や草叢の奥には、晝間でも狐や狸が時々に姿をあらはすと云ふことを聞いてゐた。

莨好きの佐山君は一本の莨を喫つてしまつて、更に第二本目のマッチを擦り付けた時に、釣竿を持つた二十八九の男が蘆の葉をさやさやと搔き分けて出て來た。ふと見るとそれは[illegible]田大尉であつた。佐山君は殆ど毎日のやうに師團司

令部に出入するので、經理部の向田大尉の顔をよく見識つてゐた。
「今晩は……」と、佐山君は起立してうや〳〵しく敬禮した。
大尉はたしかに此方をじろりと見返つたらしかつたが、そのまゝ會釋もしないで行つてしまつた。佐山君は自分に答禮されなかつたといふ不愉快よりも、更に一種の不思議を感じた。この戰時の忙がしい最中に、大尉が悠々と釣などをしてゐるのも可怪い。ことに大尉は軍人にはめづらしいくらゐに愛想のよい人で、出入りの商人などに對しても、いつも丁寧に應對するといふので、誰にも彼にも非常に評判のよい人である。その大尉殿が毎日のやうに顔を見あはせてゐる自分に對して、なんの挨拶もせずに行き過ぎてしまつたのは、どうも可怪い。うす暗いので、もしや人違ひをしたのかとも思つたが、マツチの火に映つた男の顔はたしかに向田大尉に相違ないと、佐山君は認めた。
「わざと知らぬ顔をしてゐたのかも知れない。」
大尉は忙がしい暇をぬすんで、自分の好きな魚釣に出て來た。そこを自分に認められた。この軍國多事の際に、軍人が悠長らしく釣竿などを持出してゐるところを、人に見つけられては工合が悪いので、彼はわざと知らぬ顔をして行き過ぎてしまつた。――そんなことは實際無いとも云へない。佐山君は大尉が無愛想の理由を先つから解釋して、そのまゝに自分の店へ歸つた。ゆふ飯を食ふときに、佐山君は故參の番頭に訊いた。
「向田大尉は釣が好きですか。」
「釣……。」と、彼はすこし考へてゐた。「そんな話は聞かないね。向田大尉は非常な勉強家で、暇さへあれば家で書物と首つ引きださうだ。」
川端で先刻出逢つた話をすると、かれは急に笑ひ出した。
「そりや屹と人違ひだよ。大尉はこの頃非常に忙がしいんだから、悠々と釣なんぞしてゐる暇があるものか。夜更けに家へ歸つて寝るのが關の山だよ。第一、あの川で何が釣れるものか。ずつと下の方へ行かなければなんにも引つかゝらないことは、長くこゝにゐる大尉がよく知つてゐる筈だ。あすこらで釣竿をふり廻してゐるのは、ほんの子供さ。大人がばか〳〵しい、あんなところへ行つて暢氣に餌をおろしてゐられるものか。」
さう聞くと、どうも人違ひでもあるらしい。うす暗い川端で自分は誰かを見あやまつたのであらう。彼が挨拶なしに行き過ぎてしまつたのも無理はなかつた。勤勉の大尉殿がこの際に、見す〳〵釣れさうもない所で悠々と絲を垂れてゐる筈がない。かう思ひながらも、佐山君の胸にはまだ幾分の疑ひが殘つてゐて、叢のあひだから釣竿を持つて出て來た人は、どうも向田大尉に相違ないらしく思はれてならなかつた。併しどちらにしたところで、それが差したる大問題でもないので、佐山君もその以上に深くかんがへて見ようともしなかつた。
「それとも、君は狐に化かされたのかも知れないよ。」と、番頭は戯ふやうに笑つた。「君も知つてゐるだらうが、あの火藥庫の近所には狐や狸がたび〳〵出て來るんだからね。この頃は滅多にそんな話を聞かないが、以前によくあの邊で狐に化かされた者があつたさうだ。」
「さうかも知れない。」
佐山君も笑つた。しかし内心はあまり面白くなかつた。どう考へても、彼の見たのは向田大尉に相違ないやうに思はれた。なんとかして大尉が確かにあすこで魚釣をしてゐたといふ證據をつかまへて、自分を嘲つてゐる番頭どもを降參させて遣りたいやうにも思つたが、この上にそん

なことを考へるべく彼はあまりに疲れてゐた。十時頃に店の用を片附けて、佐山君は自分の下宿へ歸つた。

疲れてゐる彼は、寢床へ潜り込むとすぐにぐつすりと寢入つてしまつた。さうしてこの一夜の中に、どこでどんなことが起つてゐたかをなんにも知らなかつた。夜があけて、いつもの通りに出勤すると、どこで聞き出して來たのか、店員達の間にはこんな奇怪な噂が傳へられた。

『向田大尉がゆうべ火藥庫のそばで殺されたさうだ。』

『いや、大尉ぢやない。狐ださうだ。』

きのふの夕方の一條があるので、この話は人一倍に佐山君の耳に強くひゞいた。彼はその事件の眞相を確めたいのと、ほかにも店の用事があるのとで、かた／＼例よりは早く司令部へ出張すると、司令部の正門から恰も向田大尉の出て來るのに出逢つた。大尉はふだんよりも少し蒼ざめた顏をしてゐたが、佐山君に對してはやはり丁寧に挨拶して行き過ぎた。呼び止めて、きのふの釣のことを訊いてみようかとも思つたが、場合が場合であるので、佐山君は遠慮しなければならなかつた。

いづれにしても、向田大尉が健在であることは疑ふまでもない。大尉が殺されたのではない、狐が殺されたのかも知れない。大尉と狐と、その間にどういふ關係があるのか。佐山君はいよ／＼好奇心に唆られて、足早に司令部の門をくゞつた。店の用向を先づ濟ませてしまつて、それからだん／＼訊いてみると、大尉殿の噂は皆な知つてゐた。時節柄そんな噂を傳へると、それから又色々の間違ひを生ずるといふので、司令部では固く秘密を守るやうに云ひ渡したのであるが、問題が問題であるだけにその秘密が完全に防ぎ切れないらしく、將校達は流石に口を噤んでゐても、兵卒等は佐山君にみな打明けて話した。

『狐が向田大尉殿に化けたのを、哨兵に殺されたのさ。』

佐山君は呆氣に取られた。

二

司令部の門を出ると、佐山君と相前後して戸塚特務曹長が出て行つた。特務曹長とも平素から懇意にしてゐるので、佐山君は一緒にあるきながら又訊いた。

『ほんたうですか。火藥庫の一件は……。』

『ほんたうです。』と、特務曹長は眞面目にうなづいた。『わたしは大尉殿に化けてゐるところも見ました。』

『狐が大尉殿に化けたのですか。』

『さうであります。司令部にかつぎ込んだ時には、たしかに大尉殿であつたのです。それがいつの間にか狐に變つてしまつたのです。』

『たしかに大尉殿であつたのですか。』と、佐山君は念を押した。

『さうであります。わたしも確かに見ました。』

一方の大尉が無事である以上、殺された大尉殿は狐でなければならない。併しそれがどうしても佐山君には信じられなかつた。昔話ならば格別、實際に於てそんな事實が決してあり得べき筈がないと彼は思つた。戸塚特務曹長はこれからその件に就いて火藥庫までゆくと云ふので、佐山君も彼と一緒に行つて現場の樣子を見とゞけ、あはせて昨夜の出來事の眞相を知りたいと思つて、彼の川縁の丘の方へ肩をならべて歩き出した。

『で、一體ゆうべの事件といふのはどうしたのですか。狐が大尉どのに化けて、なにか惡戲でもしたのですか。』

『それはさういふ噂です。』と、特務曹長は薄い

口髭をひねりながら、重い口でぽつり／＼と話し出した。「昨夜、いや今朝の一時頃です。あの歩哨の草叢の中にぽつかりと灯のかげが見えたのです。あの邊は灌木と薄が一面に生ひ茂つてゐる處で、その中から灯が見えたかと思ふうちに、ひとりの人間が提灯を持つて火藥庫の前へ近寄つて來ました。哨兵がよく見ると、それは向田大尉殿でありました。哨兵は無論に大尉殿の顏を識つてゐます。特に大尉殿は軍服を着て、司令部の提灯を持つてゐるのですから、なんにも疑ふ處はないのであるが、軍隊の規律としてたゞ見遁すわけには行かないので、哨兵は銃劍をかまへて『誰かッ』と聲をかけたのです。けれども相手はなんにも返事をしない。哨兵は再び聲をかけて『停まれッ』と云つたのですが、やはり停まらない。三度目に聲をかけても、やはり默つてゐるので、哨兵はもう猶豫するわけには行かなくなつたのです。」

「でも、見す／＼向田大尉殿だつたのでせう。」と、佐山君は遮るやうに云つた。

「軍隊の規律ですから已むを得ません。」と、特務曹長はおごそかに答へた。「ことに火藥庫の歩哨は重大の勤務であります。三度まで聲をかけても答へない以上、それが見す／＼向田大尉殿であつても打捨つては置かれません。哨兵は駈け寄つて、その銃劍で一突きに突き殺してしまつたのです。さうして、その次第を報告すると、司令部の方でも大騷ぎになつて、當直の將校達もすぐに駈け付けてみると、死んでゐるのは確かに向田大尉殿でありました。」

「あなたも現場へ出向かれたのですか。」と、佐山君は喙を容れた。

「いや、わたしは行きませんでした。併しその死體を運び込んで來るのは見ました。大尉殿は軍服を着て、顏の上に軍帽が乘せてありました。そこで、先づ大尉殿の自宅へ通知すると、大尉殿はちやんと自宅に寢てゐるのです。大尉殿が無事に生きてゐるといふのを聞いて、みんなも又驚いて、再びその死體をあらためると、それはどうしても大尉殿に相違ないのです。さうして、たしかに大尉殿の軍服と軍帽を着けてゐるのです。唯、帶劍だけは無かつたのです。そのうちに、ほんたうの大尉殿が司令部に出て來て、自分でも呆れてゐる始末です。」

この奇怪な出來事の說明を聽かされながら、佐山君はあかるい秋の日の下をあるいてゐるのであつた。大空は青々と澄みわたつて、火藥庫の秘密をつゝんだ雜木林の丘に、繭のやうに白く流れてゆく雲の下に青黒く沈んでゐた。特務曹長は一息ついて又語り出した。

「なにしろ、大尉の服裝をした人間が火藥庫の附近を徘徊してゐたのは事實で、しかも今は戰時であるから、問題はいよ／＼重大になつたのであります。で、その怪しい死體を一室にかつぎ込んで、今井副官殿と、安村中尉殿と、本人の向田大尉殿とが嚴重に張番して、兎もかくも夜の明けるのを待つてゐたのです。すると、不思議なことには、夜がだん／＼に白んで來ると、その死體がいつの間にか狐に變つてしまつたのです。軍服はやはりそのまゝで、軍帽を乘せられてゐた人間の顏が狐になつてゐるのです。靴はどうなつたのか判りません。彼が持つてゐたといふ司令部の提灯も、普通の白張の提灯に變つてゐるのです。これにはみんなも又おどろかされて、大勢の人達を呼びあつめて立會の上でよく檢査すると、彼はどうしても人間でない、たしかに古狐であるといふことが判つたのです。その狐はわたしも見ました。由來、火藥庫の附近には古狐が棲んでゐると傳へられてゐるのですが、その狐が何かの惡戲をするつもりで、却つて哨兵に突き殺されたのだらうといふのです。餘り奇怪な話で、われ／＼には殆ど

信じられないことですが、何をいふにも論より證據で、そこに一匹の狐の死骸が横はつてゐるのであるから仕方がない。どう考へても不思議なことであります。』

『實に不思議ですね。』と、佐山君も溜息をついた。ゆうべ囓つた魚肉も、やはりその狐ではなかつたかとも思はれた。

丘塚特務曹長が平素から非常に眞面目な人物であることは佐山君はよく知つてゐた。口では信じられないと云ひながらも、特務曹長は眼のあたりに見せ付けられたこの不思議を飽までも不思議の出來事として素直に承認するより外はないらしかつた。話はこれで一先づ途ぎれて、二人は默つて丘の裾まで行き着いた。薄や茅が一面に生ひしげつてゐる中に、たゞ一筋の細い路が蛇のやうに蜿つてゐるのを、二人は辿り辿つて登つて行つた。頂の上から吹き下した木の葉がさら/\と落ちて來た。

『大尉に化けた狐が殺されたのは、この邊ださうです。』

特務曹長は指さして教へた。それは火藥庫の門前で、枯れた薄が大勢の足あとに踏みにじられて倒れてゐるほかには、なんにも新しい發見はないさうであつた。

三

特務曹長に別れて歸る途中も、佐山君はこの奇怪な事件の解決に苦んでゐた。どう考へても、そんな不思議がこの世の中にあるべき筈がなかつた。しかし何處の國でも戰爭などの際には兎かく色々の不思議が傳へらるるもので、現に戰死者の魂がわが家に戻つて來たといふやうな話が、この町でも幾度か傳へられてゐる。かうした場合には狐が人間に化けたといふやうな信じがたい話も、案外何等の故障無しに諸人に受け入れらるるのである。佐山君が店へ歸つてこれを報告すると、平素はなにかにつけて小理窟を云ひたがる人達までがたゞ不思議さうにその話を聽いてゐるばかりで、正面からそれを否認しようとする者もなかつた。

いかに祕密を守らうとしても、からいふことは自然に洩れ易いもので、火藥庫の門前に起つた奇怪の出來事の噂はそれからそれへと町中に擴がつた。それには又いろ/\の尾鰭をそへて言ひ觸らすものもあるので、師團の方では、この際あらぬ噂を傳へられて、いよ/\諸人の疑惑を深くするのを懸念したのであらう、町の新聞記者等をよび集めて、その事件の顛末を一切發表した。それは佐山君が丘塚特務曹長から聞かされたものと殆ど大同小異であつた。諸新聞はその記事を大きく書いて、大尉に化けたといふその狐の寫眞までも掲載したので、その噂に再び花が咲いた。

それと同時に、また一種の噂が傳へられた。向田大尉はほんたうに死んだらしいといふのである。狐が殺されたのではなく、向田大尉が殺されたのである。現にその事件の翌夜、大尉の自宅から白木の棺をこつそりと運び出したのを見た者があるといふのである。しかし佐山君はすぐにその噂を否認した。狐が殺されたといふ騒ぎ中、自分は司令部の門前でたしかに向田大尉と顔を見あはせて、いつもの通りに挨拶までも交換したのであるから、大尉が死んでしまつた筈は斷じてないと、佐山君は飽までも主張してゐると、恰もそれを裏書きするやうに、また新しい噂がきこえた。大尉の家から出たのは人間の葬式ではない、彼の古狐の死骸を葬つたのである。畜生とはいへ、假にも自分の形を見せたものの死骸を野に曝すに忍びないといふので、向田大尉はその狐の死骸をひき取つて來て、近所の寺に葬つたと云ふのであつた。

『さうだ。屹とさうだ。』と、佐山君は云つた。

但しこゝに一つの不審は、その後に司令部に出入するものゝ中に向田大尉の姿を見かけないことであつた。大尉は病気で引籠つてゐるのだと、司令部の人達は評判してゐたが、なにぶんにも本人の姿がみえないといふことが諸人の疑ひの種になつて、大尉の葬式か、狐の葬式か、その疑問は容易に解決しなかつた。ある時、佐山君が支店長にむかつて、向田大尉殿はたしかに生きてゐると主張すると、支店長は意味ありげに苦笑ひをしてゐた。さうして、こんなことを云つた。

「狐の葬式はどうだか知らないが、向田大尉は生きてゐるよ。」

その中に、十月も半ばになつて、沙河会戦の新しい公報が発表された。町の人達の注意は皆なその方に集められて、狐の噂などは自然に消えてしまつた。こゝは冬が早いので、火薬庫附近の薄叢もだん／＼に枯れ尽した。沙河会戦の続報も大抵発表されてしまつて、世間では更に新しい戦報を待ちうけてゐる頃に、向田大尉は突然この師団を立去るといふ噂がまた聞えた。これで大尉が無事に生きてゐる證拠は挙つたが、他に転任するとも云ひ、あるひは戦地に出征するとも云ひ、その噂が区々であつた。

佐山君の支店ではこれまで商売上のことで、向田大尉には特別の世話になつてゐた。殊に平素から評判のよかつた人だけに、突然こゝを立去ると聞いて、誰も彼も今更名残り惜しいやうにも思つた。

支店長は相当の餞別を持つて、向田大尉の自宅をたづねた。さうして、無論に司令部からも手傳ひの者が来るであらうが、出発前に何かの用事があれば遠慮なく云ひ付けてくれと云ひ置いて帰つた。その翌日、支店長の命令で、佐山君とほかに一人の店員が大尉の家へ顔を出すと、家中は殆どもう綺麗に片附いてゐた。大尉は細君と女中との三人暮しで、別に大した荷物もないらしかつた。

「やあ、わざ／＼御苦労。なに、こんな小さな家だから、なんにも片附けるほどの家財もない。」

大尉は笑ひながら二人を茶の間に通した。全體が五間ばかりで、家中が殆ど見通しといふ狭い家の座敷には、それでも藁包みの荷物や、大きい革包や、軍用行李などが一杯に置き列べてあつた。

「皆さんにも折角お馴染になりましたのに、急にこんなことになりまして……。」と、細君は自分で茶や菓子などを運んで来た。

細君の暗い顔が、佐山君の注意をひいた。もう一つ、彼の眼についたのは、茶の間の佛壇に新しい白木の位牌の見えたことであつた。佛壇の戸は開かれて線香の匂ひが微かに流れてゐた。

どこへ転任するのか、或は戦地へ出征するのか、それに就いては大尉も細君も一切語らなかつた。佐山君達も遠慮してなんにも訊かなかつた。混雑の際に邪魔をするのも悪いと思つて、二人は早々に暇乞ひをした。

「さうしますと、別に御用はございませんかしら。」

「無い、無い。」と大尉は笑ひながら首を掉つた。「支店長にもどうぞよろしく。」

「はい。いづれ御見送りに出ます。」

二人は店へ帰つてその通りを報告すると、支店長は黙つて首肯いてゐた。しかし彼の顔色もなんだか陰つてゐるやうに見えた。向田大尉がこゝを立去るのは余り好い意味でないらしいと、佐山君はひそかに想像してゐた。それから三日目の夜汽車で向田大尉の一家族はいよ／＼こゝを出発することになつた。大尉は出発の時刻を秘密にしてゐたのであるが、どこで聞き傳へたのか、見送人はなか／＼多かつた。その

汽車の出てゆくのを見送つて、支店長は思はず嘆息をついた。

『いゝ人だつけがなあ。』

それから半月ほど經つて、向田大尉から支店長にあてた郵便が到着した。狀袋には單に向田とばかりで、その住所番地は書いてなかつたが、消印が東京であることだけは確かに判つた。佐山君はその郵便物を支店長の室へ持つてゆくと、彼は待ちかねたやうにそれを受取つた。

『向田大尉殿は東京へ行つたのですか。』と、佐山君は訊いた。

『さうだ。』と、支店長は氣の毒さうに云つた。『今だから云ふが、あの人は罷めたんだよ。』

『なぜです。』

『惡い弟を持つたんでね。』

支店長はいよ〳〵氣の毒さうな顏をしてゐたが、その以上の說明はなんにも與へてくれなかつた。向田大尉――あの勤勉な向田大尉は、軍國多事の際に職を罷めたのである。佐山君もなんだか暗い心持になつて、默つて支店長の前を退いた。

三

『づこれぎりです。』と、M君は云つた。『僕もその以上のことは實際なんにも知らないさうです。併し支店長の唯一句――惡い弟を持つた――それからだん〳〵推測すると、この事件の祕密もおぼろげながら判つて來るやうにも思はれます。向田大尉には弟がある。それが不良い人間で、どこからか大尉のところへふらりと訪ねて來た。佐山君が川緣で夕方出つた男は、おそらく本人の大尉でなく、その弟であつたらうと思はれます。兄弟であるから顏付もよく肖てゐる。殊に夕方のことですから、佐山君が見違へたのかも知れません。いや、佐山君ばかりでなく、火藥庫の哨兵も司令部の人達も、一旦は見あやまつたのでせう。して見ると、狐が大尉に化けたのではなく、弟が大尉に化けたのらしい。その弟がなぜ又夜ふけに火藥庫の附近を徘徊してゐたのか、それはよく判りません。それが戰爭中であるのと、本人がよくない人間であるのと、この二つを結びあはせて考へれば、大抵は想像が付くやうにも思はれます。弟が突き殺されてしまつたところへ、兄の大尉が駈付けて來て、一切の事情が明白になつた結果、大尉の同情者の計らひで、その死體がいつの間にか狐に變つて、何事も狐の仕業といふことになつたらしい。大尉の家からこつそり運び出された白木の棺も、佛壇に祀られてゐた新しい位牌も、すべてその祕密を語つてゐるのではありますまいか。かうして先づ世間を取繕つて置いて、大尉も弟の罪をひき受けて職を抛つた――。いや、これはみんな私の想像ですから、誰かほんたうか勿論保證は出來ません。向田大尉の名譽のためには、やはり狐が化けたことにして置いた方がいゝかも知れません。狐が化けたのなら議論はないが、人間が化けたとなると色々面倒になりますからね。』

風露集(八)

千鳥

川千鳥蕪村太祇は羽織かな

木屋町やひとり寝る夜の川千鳥

雪を賦にして我兄弟をとゞめとありけ

大磯や千鳥をかくす浪の雪

時致の弓や箱根の雪の竹

大石内藏助の圖

十八個條申開きて年のくれ

こま犬

一

これはS君の話である。S君は去年久振りで郷里へ歸つて、半月ほど滯在してゐたといふ。その郷里は四國の讃岐で、Aといふ村である。

『なにしろ八年ぶりで歸つたのだが、周圍の空氣は些とも變らない。まつたく變らな過ぎるくらゐに變らない。三里ほど傍までは汽車も通じてゐるのだが、殆どその影響を受けてゐないらしいのは不思議だよ。それでも兄などに云はせると、一年増しに變つて行くさうだが、どこが何う變つてゐるのか僕たちの眼にはさつぱり判らなかつた。』

S君の郷里は村と云つても、諸國の人のあつまつて來る繁華の町につゞいてゐて、表通りは殆ど町のやうな形をなしてゐる。それにも拘らず、八年ぶりで歸郷したS君の眼には何等の變化を認めなかつたといふのである。

「そんなわけで別に面白いことも何にもなかつた。勿論、おやぢの十七回忌の法事に參列する爲に歸つたので、初めから面白づくの旅行ではなかつたのだが、それにしても面白いことはなかつたよ。たゞ、唯一つ今夜の會合には相應しいかと思はれるやうな出來事に遭遇した。それをこれからお話し申さうか。』

からいふ前置きをして、S君はしづかに語り出した。

僕が郷里へ歸り着いたのは五月の十九日で、あいにく毎日小雨が煙つたやうに降りつゞけてゐた。おやぢの法事は二十一日に執行されたが、こゝらは萬事が舊式に據るのだからなかなか面倒だ。ことに僕の家などは土地でも舊家の部であるからいよ〳〵小うるさい。勿論僕はなんの手傳ひをするわけでもなく、羽織袴で唯うろ〳〵してゐるばかりであつたが、それでも好い加減に疲れてしまつた。

式が濟んで、それから料理が出る。なにしろ四五十人のお客樣といふのであるから、隨分忙がしい。おまけに斯ういふ時にうんと飲まうと手ぐすね引いてゐる連中もあるのだから、いよいよ遣切れない。それでも後日の惡口の種を播かないやうに、兄夫婦は前から可なりに神經を痛めて色々の手配をして置いただけに、萬事がとゞこほりなく進行して、お客樣いづれも滿足であるらしかつた。その席上でこんな話が出た。

「あの小鉄が淵の一件はほんたうかね。」

この質問を提出したのは隣に住んでゐる肥料商の山木といふ五十あまりの老人で、その隣に坐つてゐる井澤といふ同年配の老人は首をかしげながら答へた。

「さあ、私もこのあひだからそんな話を聽いてゐるが、ほんたうかしら。」

「ほんたうださうですよ。」と、又その隣にゐる四十ぐらゐの男が云つた。「現にその啼聲を聽いたといふ者が幾人もありますからね。」

『蛙ぢやないのかね。』と、山木は云つた。「あの邊には大きい蛙が澤山ゐるから。」

「いや、その蛙は此頃ちつとも鳴かなくなつたさうですよ。」と、第三の男は説明した。「さうして、妙な啼聲がきこえる。新聞にも出てゐるから嘘ぢやないでせう。」

こんな會話が耳に這入つたので、接待に出てゐる僕も口を出した。
『それは何ですか、どういふ事件なのですか。』
『いや、東京の人に話すと笑はれるかも知れない』と、山木はさかづきを措いて、自分が先づ笑ひ出した。
山木はまだ半信半疑であるらしいが、第三の男――僕はもうその人の顏を忘れてゐたが、あとで聞くと、それは町で絲屋をしてゐる成田といふ人であつた――は大いにそれを信じてゐるらしい。彼はいはゆる東京の人の僕に對して、雄辯にそれを說明した。
この村はづれに小袋が岡といふのがある。僕は故鄕の歷史をよく知らないが、彼の元龜天正の時代には長曾我部氏が殆ど四國の大部分を占領してゐて、天正十三年羽柴秀吉の四國攻めの當時には、長曾我部の老臣細川源左衛門尉といふのが讃岐方面を踏みしたがへて、大いに上方勢を惱ましたと傳へられてゐる。その源左衛門尉の部下に小袋喜平次秋忠といふのがあつて、それが僕の村の附近に小さい城をかまへてゐた。小袋が岡といふ名はそれから來たので、岡とは云つても殆ど平地も同樣で、場所に依つては却つて平地よりも窪んでゐるくらゐだが、兎もかくも昔から岡と呼ばれてゐたらしい。こゝへ押寄せて來たのは浮田秀家と小西行長の兩軍で、小袋喜平次も必死に防戰したさうだが、何分にも衆寡敵せずといふわけで、四五日の後には落城して、喜平次秋忠は敵に生捕られて殺されたとも云ひ、姿をかへて本國の土佐へ落ちて行つたともいふが、いづれにしてもこゝらで可なりに激しい戰鬪が行はれたのは事實であると、故老の口碑に殘つてゐる。
ところで、その岡の中ほどに小袋明神といふのがあつた。彼の小袋喜平次が自分の城内に祀つてゐた守護神で、その神體はなんであるか判らない。落城と同時に城は焚かれてしまつたが、その社だけは不思議に無事であつたので、そのまゝに保存されてやはり小袋明神として祀られてゐた。僕の先祖もこの明神に華表を寄進したといふことが家の記錄に殘つてゐるから、江戶時代までも相當に尊崇されてゐたらしい。それが明治の初年、こゝらでは何十年振りとかいふ大水が出たときに、小袋明神も亦この天災を逃れることは出來ないで、神社も神體もみな何處へか押流されてしまつた。時は恰も神佛混淆の禁じられた時代で、祭神の判然しない神社は破却の運命に遭遇してゐたので、この小袋明神も再建を見ずして終つた。その遺蹟は明神跡と呼ばれて、小さい叢林と古塚などは昔ながらに殘つてゐたが、さすがに誰も手を着ける者もなかつた。そこには栗の大木が多いので、僕たちも子供のときには落栗を拾ひに行つたことを覺えてゐる。
その小袋が岡にこのごろ一種の不思議が起つた――と、まあ斯う云ふのだ。なんでも彼の明神跡らしいあたりで不思議な啼聲がきこえる。はじめは蛙だらう、梟だらうなどと云つてゐたが、どうもさうではない。土の底から怪しい聲が洩れて來るらしいと云ふので、物好きの連中がその探索に出かけて行つたが、やはり確かなことは判らない。故老の話によると、むかしも時々にそんな噂が傳へられて、それは明神の社殿の床下に棲んでゐる大蛇の仕業であるなどと云ふ說もあつたが、勿論それを見さだめた者もなかつた。それが何十年振りかで今年また繰返されることになつたと云ふわけだ。
人間に對して別になんの害をなすと云ふでもないから、どんな啼聲を出したからと云つて別に問題にするには及ばない。たゞ勝手に啼かして置けば好いやうなものだが、人間に好奇心といふものがある以上、どうも其儘には濟して置

かれないので、村の青年團が三四人づつ交代で探險に出かけてゐるが、いまだにその正體を見出すことが出來ない。その啼聲も絶えず聞えるのではない。雨のあひだは毎晩繰り返つてゐて、夜も九時過ぎからでなければ聞えない。それは明神跡を中心として、西にきこえるかと思ふと、又東の方角にきこえることもある。南に方つてきこえるかと思ふと、また北にもきこえると云ふわけで、探險隊もその方角を聞きさだめるのに迷つてしまふと云ふのだ。

そこで、その啼聲だが——聞いた者の話では、人でなく、鳥でなく、蟲でなく、どうも獣の聲らしく、その調子はあまり高くない。なんだか地の底で誰か泣くやうな悲しい聲で、それを聞くと一種の凄愴な感をおぼえるさうだ。小袋が岡の一件といふのは大體先づかういふわけで、それがこゝら一圓の問題となつてゐるのだ。

「どうです。あなたにも判りませんか。」と、井澤は僕にきいた

「わかりませんな。たゞ不思議といふばかりです。」

僕はから簡單に答へて逃けてしまつた。實際、僕はかういふ問題に對して、餘り興味を持つてゐないので、それ以上、深く探索したり研究したりする氣にもなれなかつたのだ。

二

あくる日、なにかの話のついでに兄にもその一件を訊いてみると、兄は無頓着らしく笑つてゐた。

「おれはよく知らないが、何かそんなことを云つて騒いでゐるやうだよ。はじめは蟇か鼠のたぐひだと云ひ、次には梟か何かだらうといひ、後には何だらうといひ、何がなんだか見當は付かないらしい。又この頃では石が啼くのだらうと云ひ出した者もある。」

「はゝあ、夜啼石ですね。」

「さうだ、さうだ。」と、兄は又笑つた。「夜啼石傳說とか云ふのがある、云ふぢやないか。こゝらでもそれから考へ付いたのだらうよ。」

僕の兄弟だけに、兄もこんな問題には全然無興味であるらしく、唯それぎりで消えてしまつた。併しその日は雨もやんだ、午頃からは青い空の色がところ〴〵に洩れて來たので、僕は午後からふらりと家を出た。ゆうべは夜の法事で、夜のふけるまで騒がされたのと、いくらか無頓着な僕でも幾分か氣疲れがしたのとで、なんだか頭が少し重いやうに思はれたので、なんといふ目的も無しに雨あがりの路をあるくことになつたのだ。僕の郷里は田舍にしては珍らしく路の好いところだ。まあその位がせめてもの取得だらう。

すこし[illegible]になる所へ、子供のときに遊んだことのある森や流れや、さういふ昔馴染の風景に接すると、さすがに僕も多少の想ひ出がないでもない。僕の卒業した小學校がいつの間にか建て換へられて、よほど立派な建物になつてゐるのも眼についた。町の方へ行かうか、岡の方へ行かうかと、途中で立ちどまつて思案してゐるうちに、ふと思ひついたのは彼の小袋が岡の一件だ。そこがどんな所であるかは勿論知つてゐるが、近頃そんな問題をひき起すに就いては、土地の樣子がどんなに變つてゐるかと云ふことを知りたくもなつたので、ついふら〳〵とその方面へ足を向けることになつた。かうなると、僕もやはり一種の好奇心に驅られてゐることは否まれないやうだ。

うしろの方には小高い岡が幾つも續いてゐるが、問題の小袋が岡は前にも云つた通りのわけで、殆ど平地と云つても好いくらゐだ。栗の林が依然として茂つてゐる。やがて雨になれは、その花が一面にこぼれることを想像したが

ら、やゝ爪先あがり、細い路をたどつてゆくと、林のあひだから一人の若い女のすがたが現はれた。だん／＼近寄ると、相手は僕の顔をみて少し驚いたやうに挨拶した。

女は町の肥料商――ゆうべ此の小袋の問題の一件を云ひ出した彼の山木といふ人の娘で、八年前に見た時にはまだ小學校へ通つてゐたらしかつたが、高松あたりの女學校を去年卒業して、今年はもう二十歳になると聞いてゐた。どちらかと云へば大柄の、色の白い、眉の形の好い、別に取立てゝ云ふほどの容貌ではないが、こゝらでは十人並として立派に通用する女で、名はお辰、當世風にいへば辰子で、本來ならばお互ひにもう見忘れてゐる時分だが、彼女には昨日の朝も逢つてゐるので、雙方同時に挨拶したわけだ。

『昨晩は父が出まして、色々御馳走にあづかりましたさうで、有難うございました。』と、辰子は丁寧に禮を云つた。

『いや、却つて御迷惑でしたらう。どうぞ宜しく仰しやつて下さい。』

挨拶はそれぎりで別れてしまつた。辰子は村の方へ降りてゆく。僕はこれから登つてゆく。云はゞ雙方すれ違ひの挨拶に過ぎないのであつたが、別れてから僕は不圖かんがへた。あの辰子といふ女はなんの爲にこんなところへ出て來たのか。たとひ晝間にしても、町に住む人間、殊に女などに取つては用のありさうな場所ではない。あるひは世間の評判が高いので、明神跡でも覗ひに來たのかとも思はれるが、それならば若い女が唯ひとりで來さうもない。尤もこの頃の女はなか／＼大膽になつてゐるから、その啼聲でも探險するつもりで晝のうちに其場所を見さだめに來たのかも知れない。そんなことを色々にかんがへながら、更に林の奥ふかく進んでゆくと、明神跡はむかしよりも一層荒れ果てゝ、このごろの夏草が可なりに高く亂れてゐるので、僕にはもう確かた見當も付かなくなつてしまつた。

それでも例の問題が起つてから、わざ／＼踏み込んで來る人も多いとみえて、そこにも此處にも草の葉が踏みにじられてゐる。その足跡をたよりにして何うにか斯うにか辿り着くと、やう／＼に土臺石らしい大きい石を一つ見出した。そこらにはまだ外にも大きい石が轉がつてゐる。中には土の中へ沈んだやうに埋まつてゐるのもある。こんなのが夜啼石の目標になるのだらうかと僕は思つた。

あたりは實に荒涼寂寞だ。鳥の聲さへも聞えない。こんなところで夜ふけに怪しい啼聲を聞かされたら、誰でも餘り好い心持はしないかも知れないと、僕はまた思つた。その途端にうしろの草叢をがさ／＼と踏み分けて來る人がある。ふり向いてみると、年のころは二十八九、まだ三十にはなるまいと思はれる痩形の男で、綺麗な洋服を着てステッキを持つてゐた。おたがひに見識らない人ではあるが、かういふ場所で雙方が顔を合はせれば、なんとか云ひたくなるのが人情だ。僕の方から先づ聲をかけた。

『隨分こゝらは荒れましたな。』

『どうもひどい有様です。おまけに雨あがりですから、この通りです。』と、男は自分のズボンを指さすと、膝から下は水を潜つて來たやうに濡れてゐた。氣が付いて見ると、僕の着物の裾もいつの間にか草の露に浸されてゐた。

『あなたも御探險ですか。』と、僕は訊いた。

『探險といふわけでも無いのですが……』と、男は微笑した。『あまり評判が大きいので、實地を見に來たのです。』

『なにか御發見がありましたか。』と、僕も笑ひながら又訊いた。

『いや、どうしまして……。まるで見當が付き

ません。』

『一體ほんたうでせうか。』

『ほんたうかも知れません。』

その聲が案外嚴格にきこえたので、僕は思はず彼の顏をみつめると、かれは神經質らしい眼を皺めながら云つた。

『わたくしも最初は全然問題にしてゐなかつたのですが、こゝへ來てみると、なんだかそんな事もありさうに思はれて來ました。』

『あなたの御鑑定では、その啼聲はなんだらうとお思ひですか。』

『それはわかりません。なにしろ其聲を一度も聞いたことがないのですから。』

『なるほど。』と、僕もうなづいた。『實はわたくしも聞いたことがないのです。』

『さうですか。わたくしも先刻から見てゐるのですが、若し果して石が啼くとすれば、あの石らしいのです。』

彼はステッキで草むらの一方を指し示した。

それは社殿の土臺石よりもよほど前の方に横はつてゐる四角形の大きい石で、すこし傾いたやうに土に埋められて、青芒のかげに沈んでゐた。

『どうしてそれと御鑑定が付きました。』

僕はうたがふやうに訊いた。最初は些とも見當が付かないと云ひながら、今になつてはあの石らしいと云ふ。最初のが謙遜か、今のが出鱈目か、僕にもよく判らなかつた。

『どういふ理窟はありません。』と、かれは眞面目に答へた。『唯なんとなく然ういふ氣がしたのです。いづれ近いうちに再び來て、ほんたうに調査してみたいと思つてゐます。いや、どうも失禮をしました。御免ください。』

かれは會釋して、しづかに岡を降つて行つた。

三

僕が家へ歸つた頃には、空はすつかり青くなつて、明るい夏らしい日のひかりが庭の青葉を輝くばかりに照してゐた。法事が濟むまでは毎日降りつゞいて、その翌日から晴れるとは隨分意地のわるい天氣だ。親父の後生が惡いのか、僕たちが惡いのかと、兄は眼ぶしい空をながめながら笑つてゐた。それから兄は又こんなことを云つた。

『けふは天氣になつたので、村の青年團は大擧して探險に繰出すさうだ。おまへも一緒に出かけちやあ何うだ。』

『いや、もう行つて來ましたよ。明神跡もひどく荒れましたね。』

『荒れる筈だよ。ほかに仕樣のないところだからね。なにしろ明神跡といふ名が附いてゐるのだから、滅多に手を着けるわけにも行かず、まあ當分は藪にして置くより外はあるまいよ。』と、兄は飽までも無頓着であつた。

その晩の九時頃から果して青年團が繰出してゆくらしかつた。地方によつては養蠶の忙がしい時期だが、僕等の村には餘り養蠶が流行らないので、俄天氣を幸ひに大擧することになつたらしい。月はないが、星の明るい夜で、田圃を縫つて大勢が振照してゆく角燈のひかりが狐火のやうに亂れて見えた。ゆうべの疲れがあるので、僕の家ではみんな早く寢てしまつた。

さて、話はこれからだ。

あくる朝、僕は寢坊をして——ふだんでも寢坊だが、この朝は取分けて寢坊をしてしまつて、床を離れたのは午前八時過ぎで、裏手の井戸端へ行つて顏を洗つてゐると、兄が裏口の木戸から這入つて來た。

『妙な噂を聞いたから、駐在所へ行つて聞き合はせてみたら、まつたく本當ださうだ。』

『妙な噂……。なんですか。』と、僕は顏をふきながら訊いた。

『どうも驚いたよ、町の中學のMといふ教員が小袋が岡で死んでゐたさうだ。』と、兄も流石に顔の色を變らせてゐた。

『どうして死んだのですか。』

『それがわからない。ゆうべの九時過ぎに、青年團が小袋が岡へ登つてゆくと、明神跡の石の上に腰をかけてゐる者がある。洋服を着て、たゞ默つて俯向いてゐるので、だん／＼近寄つて調べてみると、それは彼の中學教員で、からだはもう冷たくなつてゐる。それから大騷ぎになつて色々介抱してみたが、どうしても生き返らないので、もう探險どころぢやあない。その死骸を町へ運ぶやら、醫師を呼ぶやら、なか／＼の騷ぎであつたさうだが、おれの家では前夜の疲れでよく寢込んでしまつて、そんなことは些とも知らなかつた。』

この話を聞いてゐるあひだに、僕はきのふ出逢つた洋服の男を思ひ出した。その年頃や人相を訊いてみると、いよ／＼彼に似てゐるらしく思はれた。

『それでその教員はたうとう死んでしまつたのですね。』

『むゝ。どうしても助からなかつたさうだ。その死因はよく判らない。おそらく腦貧血ではないかと云ふのだが、どうも確かなことは判らないらしい。なぜ小袋が岡へ行つたのか、それもはつきりとは判らないが、理科の教師だから多分探險に出かけたのだらうと云ふことだ。』

『死因は判らなくても、探險に行つたのは事實でせう。僕はきのふ其人に逢ひましたよ。』と、僕は云つた。

きのふ彼に出逢つた顛末を殘らず報告すると、兄もうなづいた。

『それぢやあ夜になつて又出直して行つたのだらう。ふだんから餘り健康でもなかつたさうだから、夜露に冷えて何うかしたのかも知れない。なにしろ詰まらないことを騷ぎ立てるもんだから、たうとうこんな事になつてしまつたのだ。昔ならば明神の祟りとでも云ふのだらう。』

兄は苦々しさうに云つた。僕も氣の毒に思つた。殊にきのふ其場所で出逢つた人だけに、その感じが一層深かつた。

前夜の探險は教員の死骸發見騷ぎで中止されてしまつたので、今夜も續行されることになつた。教員の死因が判明しないために、又色々の臆說を傳へる者もあつて、それがいよ／＼探險隊の好奇心を煽つたらしくも見えた。僕の家からはその探險隊に加はつて出た者はなかつたが、ゆうべの一件が大[illegible]の神經を刺戟して、今夜もまた何か變つた出來事がありはしまいかと、年のわかい婦人などは夜の更けるまで起きてゐると云つてゐた。

それらには構はずに、夜の十時頃、兄夫婦や僕はそろ／＼寢支度に取りかゝつてゐると、表は俄にさわがしくなつた。

『おや。』

兄夫婦と僕は眼をみあはせた。かうなると、もう落付いてはゐられないので、僕が眞先に飛び出すと、兄もつゞいて出て來た。今夜も星のあかるい夜で、町には大勢の[illegible]人どもが何かがや／＼立騷いでゐた。

『どうした、どうした。』と、兄は聲をかけた。

『[illegible]木の娘さんが死んでゐたさうです。』と、雇人のひとりが答へた。

『[illegible]子さんが死んだ……。』と、兄もびつくりしたやうに叫んだ。『ど、どこで死んだのだ。』

『明神跡の石に腰をかけて……。』

『ふうむう。』

兄は溜息をついた。僕もおどろかされた。それからだん／＼訊いてみると、探險隊は今夜もまた新しい死骸を發見した。女はゆうべの中學教員とおなじ場所で、しかも同じ石に腰をか

けて死んでゐた。それが山木のむすめの辰子とわかつて、その騒ぎはゆうべ以上に大きくなつた。併し中學教員の場合とは違つて、辰子の死因は明瞭で、彼女は劇藥を嚥んで自殺したと云ふことがすぐに判つた。

たゞ判らないのは、辰子がなぜこゝへ來て、彼の教員とおなじ場所で自殺したかと云ふことで、それに就いて又いろ〳〵の想像説が傳へられた。辰子は彼の教員と相思の仲であつたところ、その男が突然に死んでしまつたので、辰子はひどく悲觀して、おなじ場所でおなじ運命を選んだのであらうといふ。それが一番合理的の推測で、現に僕も彼の林のなかで先づ辰子に逢ひ、それから彼の教員に出逢つたのから考へても、個中の消息が覗はれるやうに思はれる。併しまた一方には教員と辰子との關係を全然否認して、いづれも個々別々の原因があるのだと主張してゐる者もある。僕の兄なぞも其一人で、僕とても彼のふたりが密會してゐる現狀を見とゞけたと云ふわけではないのだから、彼等のあひだには何の聯絡もなく、みな別々に小袋が岡へ踏み込んだものと認められないことも無い。そんなら辰子はなぜ死んだかと云ふと、かれは山木のひとり娘で、家には相當の資產もあり、家庭も至極圓滿で、病氣その他の事情がない限りは自殺を圖りさうな筈がないと云ふのだ。かうなると、何がなんだか判らなくもなる。

更に一つの問題は、Mといふ中學教員が腰をかけて死んでゐた石と、辰子が腰をかけて死んでゐた石とが、恰も同じ石であつたと云ふことだ。そのあたりには幾つかの石が轉がつてゐるのに、なぜ二人ともに同じ石を選んだかと云ふことが疑問の種になつた。誰のかんがへも同じことで、それが腰をおろすに最も便利であつたから、二人ながら無意識にそれを選んだのだらうと云つてしまへば、別に不思議もないことになるが、何うもそれだけでは氣が濟まないとみえて、村の人達は相談して遂にその石を掘り出すことになつた。石が啼くといふ噂もある際であるから、この石を掘り起してみたらば或は何かの祕密を發見するかも知れないといふので、かた〴〵その發掘に着手することに決まつたらしい。

當日は朝から陰つてゐたが、その噂を聞きつたへて町の方からも見物人が續々押出して來た。村の青年團は總出で、駐在所の巡査も立會ふことになつた。僕も行つてみようかと思つて門口まで出ると、あまりに混雜しては種々の妨害になるといふので、岡の中途に繩張りをして、彌次馬連は現場へ近寄せないことになつたと聞いたので、それでは詰まらないと引返した。

いよ〳〵發掘に取りかゝる頃には細かい雨がほろ〳〵と降り出して來た。先づ周圍の芒や雜草を刈つて置いて、それから彼の四角の石を掘り起すと、それは思つたよりも淺かつたので、比較的容易に土から曳き出されたが、まだその傍にも何か鍬の先にあたるものがあるので、更にそこを掘り下げると、小さい石の狛犬があらはれた。それだけならば別に仔細もないが、その狛犬の頸のまはりには長さ一間以上の黑い蛇がまき付いてゐるのを見たときには、大勢も思はずあつと叫んださうだ。蛇はわづかに眼を動かしてゐるばかりで、人をみて逃げようともせず、いつまでも狛犬の頸を絞め付けてゐるらしく見えるのを、大勢の鍬やショベルで滅茶滅茶に撲殺してしまつた。生捕りにすればよかつたとあとでは皆んな云つてゐたが、その一刹那には誰も彼もが何だか憎らしいやうな怖ろしいやうな心持になつて、半分は夢中で無暗にぶち殺してしまつたと云ふことだ。

狛犬こ四角の臺石に乗つてゐたことは、その大きさを見ても判る。なにかの時に狛犬はころ

げ落ちて土の底に埋められ、その臺石だけが殘つてゐたのであらうが、故老の中にもその狛犬の形をみた者はないといふから、遠い昔にその姿を土の底に隱してしまつたらしい。蛇はいつの頃から卷き付いてゐたのか勿論判らない。中學教員も辰子もこの臺石に腰をかけて、狛犬の埋められてゐる土の上を踏みながら死んだのだ。有意か無意か、そこに何かの祕密があるのか、そんなことはやはり判らない。

又その狛犬は小袋明神の社前に据ゑ置かれたものであることは云ふまでもない。然らば一匹ではあるまい。どうしても一對であるべき筈だといふので、更に近所をほり返してみると、やうやくにしてその臺石らしい物だけを發見したが、犬の形は遂にあらはれなかつた。

この話を聽いて、僕はその翌日、兄と一緒に再び小袋が岡へ登つてみると、けふは繩張が取れてゐるので、大勢の見物人が群集して思ひ思ひの噂をしてゐた。蛇の死骸はどこへか片附けられてしまつたが、彼の狛犬とその臺石とは掘返されたまゝで元のところに横はつてゐた。

『むゝ、なか／＼よく出來てゐるな。』と、兄は狛犬の精巧に出來てゐるのを頻りに感心して眺めてゐた。

それよりも僕の胸を強く打つたのは、彼の四角形の臺石であつた。彼のMといふ中學教員が――おそらく其人であつたらうと思ふ――ステッキで僕に指示して、「若し果して石が啼くとすれば、あの石らしいのです。」と教へたのは、確かに彼の石であつたのだ。Mはそれに腰をかけて死んだ。辰子といふ女もそれに腰をかけて死んだ。さうして、その石のそばから蛇にまき付かれた石の狛犬があらはれた。かうなると、さすがの僕もなんだか變な心持にもなつて來た。

僕はその後十日ほども滯在してゐたが、彼の狛犬が掘出されてから、小袋が岡に怪しい啼聲は聞えなくなつたさうだ。

風露集（九）

師走　冬籠

風の吹く師走の町や慈善鍋

ほし魚を猫に取らるゝ師走かな

幾人のかたきを持ちて冬ごもり

木蓼

信濃の奥にふみ迷つて、おぼつかなくも山路をたどる夏のゆふぐれに、路ばたの草木の深いあひだに白點々、さながら梅の花のごときを見た。

後に訊けば、それは木蓼の花であるといふ。猫にまたゝびの諺はかねて聞いてゐたが、その花を見るのは今が初めであつた。

天地蒼茫として暮れんとする夏の山路に、蕭然として白く咲いてゐるこの花をみた時に、わたしは云ひ知れない寂寥を感じた。

干した蝮を煮て食はされたのは、この夜の宿であつた。

（「旅すゞり」より）

雪女

一

O君は語る。

大正の初年から某商會の滿洲支店詰を勤めてゐた堀部君が足かけ十年振りで內地へ歸つて來て、彼が滿洲で遭遇した雪女の不思議な話を聞かせてくれた。

この出來事の舞臺は奉天に近い芹菜堡子とかいふ所ださうである。わたしも曾て滿洲の土地を踏んだことがあるが、その芹菜堡子とかいふのはどんなところか知らない。併しそれが所謂雲朔に近い荒涼たる寒村であることは容易に想像される。堀部君は商會の用向きで、遼陽の支店を出發して、先づ撫順の炭鑛へ行つて、それから汽車で蘇家屯へ引返して、蘇家屯から更に渾河の方面にむかつた。蘇家屯から奉天までは眞直に汽車で行かれるのであるが、堀部君は商賣用の都合から渾河で汽車にわかれて、供に連れた支那人と二人で奉天街道をたどつて行つた。

一月の末で、一昨日と昨日はこゝでも可なりの雪が降つた。けふは朝から陰つて、劍のやうに尖つた北風がひう〳〵と吹く。土地に馴れてゐる堀部君は毛皮の帽子を眼深にかぶつて、あつい外套の襟に頰をうづめて、十分に防寒の支度を整へてゐたのであるが、それでも總身の血が凍るやうに冷えて來た。おまけに途中で日が暮れかゝつて、灰のやうな細い雪が突然に吹きおろして來たので、堀部君はいよ〳〵遣切れなくなつた。たづねる先は渾河と奉天との丁度まん中で、その土地でも有名な劉といふ資產家の宅であるが、そこまではまだ十七淸里ほどあると聞かされて、堀部君はがつかりした。

日は暮れかゝる、雪は降つて來る。これから滿洲の田舍路を日本の里數で約三里も步かせられては堪らないと思つたので、堀部君は途中で供の支那人に相談した。

『これから劉の家までは大變だ。どこか其處らに泊めて貰ふことは出來まいか。』

供の支那人は堀部君の店に長く奉公して、氣心のよく知れてゐる正直な青年であつた。彼は李多といふのが本名であるが、堀部君の店では日本式に李太郎と呼び慣はしてゐた。

『劉家、遠いあります。』と、李太郎も白い息を噴きながら答へた。『併しこゝらに客棧ありません。』

『宿屋は無論あるまいよ。だが、どこかの家で泊めてくれるだらう。どんな穢い家でも今夜は我慢するよ。この先の村へ這入つたら訊いて見てくれ。』

『よろしい、判りました•』

二人はだん〳〵に烈しくなつて來る粉雪のなかを衝いて、俯向き勝ちに喘ぎながら步いてゆくと、葉のない楊に圍まれた小さい村の入口にたどり着いた。大きい木のかげに堀部君を休ませて置いて、李太郎はその村へ駈け込んで行つたが、やがて引返して來て、一軒の家を見つけたと手柄顏に報告した。

『泊めてくれる家すぐに見付けました。家の人、大層親切あります。家は綺麗、不乾淨ありません。』

綺麗でも穢くても大抵のことは我慢する覺悟で、堀部君は彼に誘はれてゆくと、それは石の

井戸を前にした家で、こゝらとしては先づ見苦しくない外構へであつた。外套の雪を拂ひながら、堀部君は避けるやうに門のなかへ駈け込むと、これは滿洲地方で見る普通の農家で、門の中には可なりに廣い空地がある。その左の方には雇人の住家らしい小さい建物があつて、南にむかつた正面のやゝ大きい建物が母屋であるらしく思はれた。

李太郎が先に立つて案内すると、母屋からは五十五六にもならうかと思はれる老人が出て來て、こゝろよく二人を迎へた。なるほど親切な人物らしいと、堀部君も先づ喜んで内へ誘ひ入れられた。家のうちは土竈を据ゑた一間をまん中にして、右と左とに一間づつの部屋が劃られてあるらしく、堀部君はその左の方の部屋に通された。そこは無論土間で、南側と北側とには日本の床よりも少し高い寝床が設けられて、その上には古びた莚が敷いてあつた。土間には四角なテーブルのやうなものが据ゑられて、木の腰掛けが三脚列んでゐた。

老人は自分がこの家の主人であると云つた。この頃はこゝらに悪い感冒が流行つて、自分の妻も二人の雇人もみな病床に倒れてゐるので、碌々にお構ひ申すことも出來ないと、氣の毒さうに云譯をしてゐた。

「それにしても何か食はして貰ひたい。李太郎、お前も手傳つてなにか温かいものを拵へてくれないか。」と、堀部君は寒氣と疲勞と空腹とにがつかりしながら云つた。

「よろしい、よろしい。」

李太郎は老人に頼んで、高粱の粥を炊いて貰ふことになつた。彼は手傳つて土竈の下を焚きはじめた。その煙がこちらの部屋まで流れ込んで來るので、堀部君は慌てゝ入口の戸を閉めたが、何分にも寒くて仕樣がないので、再びその戸をあけて出て、自分も竈の前に屈んでしまつた。

老人が堀部君を款待したのは仔細のあることで、彼は男女三人の子供を有つてゐるが、長男は營口の方へ出稼ぎに行つて、それから更に上海へ移つて外國人の店に雇はれてゐる。次男は奉天へ行つて、日本人のホテルに働いてゐる。さういふ事情から、かれは外國人に對しても自然に好意を有つてゐる。殊に奉天のホテルでは次男を可愛がつて呉れるといふので、日本人に對しては特別の親みを有つてゐるのであつた。その話を聞いて、堀部君は好い家へ泊り合はせたと思つた。彼は高粱の中へ豚の肉を入れたもので、その煮えるのを待ちかねて四五椀啜り込むと、堀部君の額には汗が滲み出して來た。

『やれ、ありがたい。これで蘇生つた。』

ほつと息をついて元の部屋へ戻ると、李太郎は竈の下の燃えさしを持つて來て、寝床の下の炕爐に入れてくれた。老人も乾いた高粱の桿をかゝへて來て、惜氣も無しに爐のなかへ沢山押込んだ。

「多謝、多謝。」

堀部君はしきりに禮を云ひながら、爐のあたたまる間、テーブルの前に腰をおろすと、老人も來て色々の話をはじめた。こゝの家は主人夫婦と今年十三になる娘と、別棟に住んでゐる雇人二人と、現在のところでは一家内あはせて五人暮しであるのに、その三人が枕に就いてゐるので、働くものは老人と小娘に過ぎない。仕事のない冬の季節であるから好いやうなものの、ほかの季節であつたらどうすることも出來ないと、老人は眉を皺らせながら話した。それを氣の毒さうに聴いてゐるうちに、外の吹雪はいよいよ暴れて來たらしく、窓の戸をゆする風の音がすさまじく聞えた。

こゝらの農家では夜も灯を點さないのが習

で、平生ならば火縄を吊して置くに過ぎないのであるが、今夜は客への款待振りに一挺の蝋燭がテーブルの上に點されてゐる。その弱い光で堀部君は懐中時計を透してみると、午後六時を少し過ぎた頃であつた。こゝらの人達はみな早寝であるが、堀部君に取つてはまだ宵の口である。いくら疲れてゐても、今からすぐに寝るわけにも行かないので、幾分か迷惑さうな顔をしてゐる老人を相手に、堀部君は又色々の話をしてゐるうちに、右の方の部屋で何かがいゝりといふ音がしたかと思ふと、老人は俄に顔色を變へて、あわたゞしく腰掛けを起つてその部屋へ駈け込んで行つた。

その慌て加減があまりに烈しいので、堀部君も少し呆氣に取られてゐると、老人はなにか低い聲で口早に云つてゐるらしかつたが、それぎり少時は出て來なかつた。

『どうしたんだらう。病人でも悪くなつたのか。』と、堀部君は李太郎に云つた。『お前そつと行つて覗いてみろ。』

他の内房を窺ふといふのは甚だ宜しくないことであるので、李太郎は少し躊躇してゐるらしかつたが、これも一種の不安を感じたらしく、たうとう抜足をして眞中の土間へ忍び出て、右の方の部屋をそつと窺ひに行つたが、やがて老人と一緒にこの部屋へ戻つて來た。老人の顔の色はまだ蒼ざめてゐた。

『病人、悪くなつたのでありません。』と、李太郎に説明した。しかし彼の顔色も少し穏かでないのが、堀部君の注意を惹いた。

『ぢや、どうしたんだ。』

『雪の姑娘、來るかも知れません。』

雪の姑娘――日本でいへば、雪女とか雪女郎とか云ふ意味であるらしい。堀部君は不思議さうに相手の顔を見つめてゐると、李太郎は小聲で答へた。

『雪の娘、鬼子あります。』

『幽靈か。』と、堀部君もいよ〳〵眉を皺めた。『そんな化物が出るのか。』

『化物、出ることあります。』と、李太郎はまた囁いた。『この家、三年前にも娘を取られました。』

『娘を取る……。その化物が……。可怪しいな。ほんたうかい。』

『譃ありません。』

なるほど譃でもないらしい。死んだ者のやうに默つてゐる老人の蒼い顔には、強い強い恐怖の色が浮んでゐた。堀部君もしばらく默つて考へてゐた。

二

雪の娘――幾年か滿洲に住んでゐる堀部君も、曾てそんな話を聽いたことはなかつたが、今夜はじめてその説明を李太郎の口から聞かされた。

今から三百年ほどの昔であらう。清の太祖が遼東一帶の地を斬り從へて、瀋陽――今の奉天――に都を建てた當時のことである。數ある侍妾のうちに姜氏といふ麗しい女があつて、特に太祖の恩寵を蒙つてゐたので、それを妬むものが彼女に不貞の行ひがあると云ひ觸らした。その相手は太祖の近臣で楊といふ美少年であつた。それが太祖の耳に入つて、姜氏と楊とは殘酷な拷問をうけた。妬む者の讒言か、それとも本當に覺えのあることか、その噂は區々で何れとも決定しなかつたが、兎もかくも二人は有罪と決められて、楊は死罪に行はれた。姜氏は大雪のふる夕、赤裸にして手足を縛られて、生きながらに渾河の流れへ投げ込まれた。

この悲慘な出來事があつて以來、大雪のふる夜には、妖麗た白い女の姿が吹雪の中へまぼろ

しのやうに現はれて、それに出逢ふものは命を亡ふのである。そればかりでなく、その白い影はをりをりに人家へも忍び込んで來て、若い娘を招き去るのである。招かれた娘のゆくゆくは判らない。彼女は姜氏の幽魂に導かれて、おなじ渾河の水底へ押沈められてしまふのであると、土地の者は恐れ戰慄いてゐる。その傳説は長く消えないので、渾河地方の雪の夜には妖麗幽怪な姉娘の物語が今もやはり繰返されてゐるのである。現にこゝの家でも三年前、丁度今夜のやうな吹雪の夜に、十三になる姉娘を誘ひ出された怖ろしい經驗を有つてゐるので、一昨日の晩も昨夜も一家内は安き心もなかつた。幸ひにけふは雪も歇んだので、先づほつとしてゐると、夕方から又もやこんな烈しい吹雪となつたので、風にゆられる戸の音にも、天井を走る鼠の音にも、父の老人は弱い魂を脅かされてゐるのであつた。

『ふむう、どうも不思議だね。』と、堀部君はその奇怪な説明に耳をかたむけた。「ぢやあ、この家では曾て娘を取られたことがあるんだね。』

『さうです。』と、李太郎も怖ろしさうに云つた。「姉も十三で取られました。妹も今年十三になります。また取られるかも知れません。」

「だつて、その雪女はこゝの家ばかりを狙ふ譯ぢやあるまい。近所にも若い娘は澤山ゐるだらう。』

『しかし美しい娘、澤山ありません。こゝの家の娘、大層美しい。わたくし今見て來ました。』

『さうすると、美しい娘ばかり狙ふのか。』

『美しい娘、雪の姉娘に妬まれます。』

「怪しからんね。』と、堀部君は燭の火を見つめながら云つた。『美しい娘ばかり狙ふと云ふのは……。まるで我々のやうな幽靈だ。」

李太郎は莞爾ともしなかつた。彼もこの奇怪な傳説に對して、頗る根強い迷信を有つてゐるらしいので、堀部君は可笑しくなつて來た。

「で、昔からその白い女の正體をたしかに見とゞけた者はないんだね。」

『いゝえ、見た者澤山あります。あの雪の中に……。』と、李太郎は見えない表を指さした。「白い影のやうなものが迷つてゐます。そばへ近寄つたものは皆死にます。』

「それ以上のことは判らないんだね。で、その影のやうなものは、戸が閉めてあつてもすうと這入つて來るのか。」

「這入つて來るときには、怖ろしい音がして戸が毀れます。戸を閉めて置いても防ぐこと出來ません。』

「さうか。」と、堀部君は思はず聲を立てゝ笑ひ出した。

日本語の判らない老人は、びつくりしたやうに客の笑ひ顔をみあげた。李太郎も眼をみはつて堀部君の顔を見つめてゐた。

「こゝらにも馬賊はゐるだらう。」と、堀部君は訊いた。

「馬賊、居ります。』と、李太郎はうなづいた。

「それだよ。屹とそれだよ。」と、堀部君はやはり笑ひながら云つた。『馬賊にも限るまいが、兎にかくに泥坊の仕業だよ。むかしからそんな傳説のあるのを利用して、白い女に化けて來るんだよ。つまり幽靈の眞似をして、方々の若い娘を攫つて行くのさ。その行くへの判らないといふのは、どこか遠いところへ連れて行つて、淫賣婦か何かに賣り飛ばしてしまふからだらう。美しい娘にかぎつて攫はれるといふのが論より證據だ。ねえ、さうぢやないか。』

「さうでありませうか。」と、李太郎はまだ不得心らしい眼色を見せてゐた。

『お前からこゝの主人によく話してやれよ。そ

れは渾河に投げ込まれた女の幽靈でもなんでもない。たしかに人間の仕業に相違ない。たしかに泥坊の仕業で、幽靈の振りをして若い娘を攫つて行くのだと……。いや、まつたくそれに相違ないよ。むかしは本當に幽靈が出たかも知れないが、中華民國の今日にそんなものが出る筈がない。幽靈が這入つて來るときに、戸が毀れるといふのも一つの證據だ。何かの道具で叩き毀して這入つて來るのさ。ねえ、さうぢやあないか。ほんたうの幽靈ならば何處かの隙間からでも自由にすつと這入つて來られさうなものだのに、怖ろしい音をさせて這入つて來るなどはどうも怪しいよ。それらを考へたら、幽靈の正體も大抵は判りさうなものだが。……」

　天晴れ相手の蒙を啓いた積りで、堀部君はこゝまで一息にしやべり續けたが、それは一向に手堪へがなかつた。李太郎は木偶の坊のやうに唯きよろりとして、此方の口と眼の動くのを眺めてゐるばかりで、なんとも判然した返事をしないので、堀部君は少し焦れつたくなつて來た。利口なやうでもやはり支那人である。今時こんな迷信に囚はれて、飽までも雪女の怪を信じてゐるのかと思ふと、情なくもあり、ばか／＼しくも感じられてならなかつた。堀部君は叱るやうに彼を催促した。

「おい。そのことをこゝの主人に話して、早く安心させて遣れよ。可哀さうに顔の色を變へて心配してゐるぢやないか。」

　叱られて、李太郎も忤はなかつた。彼は主人の老人にむかつて小聲で話しかけた。堀部君も一通りの支那語には通じてゐるので、彼が正直に自分の意見を取次いでゐるらしいのに滿足して、默つて一聽く、人の顔色をうかゞつてゐると、老人は苦笑ひをして徐かにその頭を掉つた。

「まだ判らないのか。馬鹿だな。」

　堀部君は舌打ちした。今度は直接に自分から懇々と云ひ聞かせたが、老人は暗い顔にたゞ薄笑ひをしてゐるばかりで、どうしてもその意見を素直には受入れないらしいので、堀部君もいよ／＼癇癪を起した。

「もう勝手にするが好い。いくら云つて聞かせてもわからないんだから仕方がない。こんな人間だから、大事の娘を攫つて行かれるんだ。ばかばかしい。」

　こつちの機嫌が惡いらしいので、老人は氣の毒さうに默つてしまつた。李太郎も手持不沙汰のやうな形で俯向いてゐた。

「李太郎。もう寝ようよ。雪女でも出て來るといけないから。」と、堀部君は云ひ出した。

「寝る、よろしい。」

　李太郎もすぐに贊成した。老人は挨拶して自分の部屋の方へ歸つた。寝床の筵を探つてみると、煖爐は丁度いゝ加減に暖まつてゐるので、堀部君は靴をぬいで寝床へ上つて、毛織の膝掛けを着てごろ寝をしてしまつた。李太郎はもう半分以上も燃えてしまつた蠟燭の火を細い火繩に移して、それからその蠟燭を吹き消した。火繩は蓬の葉を細く撚り合はせたもので、天井から長く吊下げてあつた。

　疲れてゐる堀部君は暖かい寝床の上で好い心持に寝てしまつたが、自分の頭の上にある窓の戸を強く搖するやうな音におどろかされて眼を醒ました。部屋のうちは眞暗で、細い火繩の火が秋の螢のやうに微かに消え殘つてゐるばかりである。向う側の寝床の上には、李太郎が鼾を立てゝ寝入つてゐるらしかつた。耳をすまして窺ふと、家のうちは森として鼠の走る音も聞えなかつたが、表の吹雪はいよ／＼吹き暴れて來たらしく、浪のやうな音を立てゝごう／＼と吹き寄せてゐた。窓の戸のゆれたのはこの雪風であることを、堀部君はすぐに覺つた。滿洲の雪の夜、その寒さと寂しさとには馴れてゐるな

ながらも、堀部君はなんだか眼が冴えて再び寝つかれなくなつた。
床の上に起き直つて、堀部君はマッチを擦つて、懐中時計を照してみると、今夜はもう十二時に近かつた。ついでに巻煙草を喫ひつけて、その一本を喫ひ終つた頃に、烈しい吹雪はまたどつと吹き寄せて来て、窓の戸を吹き破られるかと思ふやうにがた／＼と揺られた。昔の話を思ひ出して、彼の雪女が闖入して来る時には、こんな物音がするかも知れないなどと堀部君は考へた。さうして、又もや横になつたが、一旦冴えた眼はどうしても合はなかつた。
「なぜだらう。」
自分は有名な寝坊で、いつも朋輩達にも笑はれてゐるくらゐである。何様どんな所でも、床に就けば屹と鼾きでは正體もなく寝てしまふのが例であるのに、今夜にかぎつて眠られないのは不思議である。やはり彼の雪女の一件が、頭のなかで何かの邪魔をしてゐるのではあるまいか。俺もだん／＼に支那人にかぶれて来たかと、堀部君は自分で自分の臆病を嘲つたが、又考へてみると、幽霊よりも馬賊の方がおそろしい。幽霊などは初めから問題にならないが、馬賊は何をするか判らない。日本人が今夜こゝに泊り込んだのを知つて、夜中に襲つて来ないとも限らない。堀部君は革鞄の中からピストルを探り出して、枕もとに置いた。かうなるといよい眠られない。いや、眠られない方が本當であるかも知れないと思ひ直して、堀部君は寝床の上に起き直つた。
寝鎮まつた村の上に吹雪は小歇みもなしに暴れ狂つてゐた。夜がふけて煖爐の火もだん／＼に衰へたらしく、堀部君は何だかぞく／＼して来たので、探りながら寝床を這ひ降りて、まん中の土間へ焚物の高粱を取りに行つた。土間の隅には彼の土竈があつて、そのそばには幾束の高粱が積み重ねてあることを知つてゐるので、堀部君は探り足でその方角へ進んでゆくと、切株の腰掛けにつまづいて危く轉びさうになつたので、堀部君はあわてゝマッチを擦ると、その火は物に掴まれたやうに、ふつと消えてしまつた。

三

その一刹那である。入口の戸にさら／＼と物の觸れるやうな音がきこえた。
暗いなかで耳を澄ますと、それは細い雪の觸れる音であるらしいので、堀部君は自分の神經過敏を笑つた。しかもその音は續けて聞えるので、堀部君はなんだか氣になつてならなかつた。先刻から吹きつけてゐる雪の音は、こんなに靜かな[illegible]かいものではない。氣のせゐか、何者かが戸の外へ忍んで來て内をうかがつてゐるらしくも思はれるので、堀部君は抜き足をして入口の戸のそばへ忍んで行つた。戸に耳を押付けて、じつと聞き澄ますと、それは雪の音ではない、どうも何者かがそこに佇んでゐるらしいので、堀部君はそつと自分の部屋へ引返して、枕もとのピストルを掴んだ。それから小聲で李太郎を呼び起した。
「おい、起きろ、起きろ。李太郎。」
「あい、あい。」と、李太郎は寝ぼけ聲で答へたが、やはりすぐには起き上りさうもなかつた。
「李太郎、早く起きろよ。」と、堀部君は焦れて揺り起した。「雪女が來た。」
「あなた、嘘あります。」
「嘘でない。早く起きてくれ。」
「ほんたうありますか。」と、李太郎はあわてゝ飛び起きた。
「どうも戸の外に何かゐるらしい。僕も一緒に行くから、戸をあけて見ろ。」
「いけません、いけません。」と、李太郎は制し

た。『あなた、見ること宜しくない。隠れてゐる、よろしい。』

暗がりで顔は見えないが、その聲がひどく顫へてゐるので、彼が異常の恐怖に襲はれてゐるらしいのが知られた。堀部君はその肩のあたりを引つ掴んで、寝床から曳摺りおろした。

「弱蟲め。僕が一緒に行くから大丈夫だ。早くしろ。」

李太郎は探りながらに靴を穿いて、堀部君に引つ張られて出た。入口の戸は左右へ開くやうになつてゐて、まん中には錠かけてあつた。そこへ来て又躊躇してゐるらしい彼を小聲で叱り励まして、堀部君はその扉をあけさせた。李太郎は顫へながら錠を外して、一方の扉をそつと細目にあけると、その隙間から灰のやうな細い雪が眼潰しのやうにさつと吹き込んで来た。片手にはピストル、片手はハンカチーフで眼を拭ひながら、堀部君は扉のあひだから表を覗くと、外は一面に白かつた。

どちらから吹いて来る風か知らないが、空も土もたゞ眞白な中で、そこにも此處にも白い渦が大きい浪のやうに巻き上つて狂つてゐる。その外にはなんの影も見えないので、堀部君は案に相違した。なんにも居ないらしいのに安心して、李太郎は思ひ切つてその扉を大きく明けると、氷のやうな寒い風が吹雪と共に狭い土間へ流れ込んで来たので、ふたりは思はず身を竦める途端に、李太郎は小聲であつと云つた。さうして、力一ぱいに堀部君の腕をつかんだ。

「あ、あれ。御覧なさい。」

彼が指さす方角には、白馬の跳り狂つてゐるやうな吹雪の渦が見えた。その渦の中心かとも思ふところに、更に一層の白い影がぼんやりと浮いてゐて、それは女の影であるらしく見えたので、堀部君も愕然とした。ピストルを固く握りしめながら、息を殺して窺つてゐると、女のやうな白い影は吹雪に揉まれて右へ左へ漂ひながら、門内の空地をさまよつてゐるのであつた。雪煙かと思つて、堀部君は眼を据ゑて屹と見つめてゐたが、それが煙かまぼろしか、その正體を確めることが出来なかつた。併しそれが人間でないことだけは確かであるので、馬賊の懸念は先づ消え失せて、堀部君もピストルを握つた拳がすこし弛むと、家のなかから又もや影のやうに迷ひ出たものがあつた。

その影は二人のあひだをするりと摺り抜けて、李太郎のあけた扉の隙間から表へふらふらと出て行つた。

「あ、姑娘。」と、李太郎が小聲で又叫んだ。

『この家の娘か。』

あまりの怖ろしさに、李太郎はもう口が利けないらしかつた。併しそれが家の娘であるらしいことは容易に想像されたので、堀部君はピストルを持つたまゝで雪のなかへ追つて出ると、娘の白い影は吹雪の渦に呑まれて忽ち見えなくなつた。

「早く主人に知らせろ。」

李太郎に云ひ捨てゝ、堀部君は強情に雪のなかを追つてゆくと、門のあたりで娘の白い影が又あらはれた。と思ふと、それは浪に攫はれた人のやうに、雪煙にまき込まれて門の外へ投げ遣られたらしく見えた。門は幸ひに低いので、堀部君は半分夢中でそれを乗り越えて、表の往来まで追つて出ると、娘の影は大きい楊の下にまた浮き出した。

「姑娘、姑娘。」と、堀部君は大きい聲で呼んだ。「上那兒去。」

どこへ行くなどと呼びかけても、娘の影は見返りもしなかつた。それは風に吹き遣られる木の葉のやうに、何處ともなしに迷つてゆくらしかつた。それでも姑娘を呼びつゞけて七八間ほども追つてゆくと、又ひとしきり烈しい吹雪が

どつと吹きまいて來て、堀部君はあやふく吹き倒されさうになつたので、そこらにある楊に取付いてほつと一息ついた時に、堀部君は更に怪しいものを見せられた。それは先刻門內の空地にさまよつてゐた女のやうな白い影で、娘よりも二三歩先に雪のなかを浮いてゆくと、娘の影はそれに後れまいとするやうに追つてゆくのであつた。うづ卷く雪煙の中にその二つの白い影が消えてあらはれて、縒れて縺れて、浮くかと思へば沈み、たゆたふかと思へば又走つて、やがて堀部君の眼のとゞかない所へ隱れてしまつた。

もう諦めて引返して來ると、內には李太郎が蠟燭をとぼして、恐怖に滿ちた眼色をしてぼんやりと突つ立つてゐた。

「姑娘はどうした。」と、堀部君はからだの雪を拂ひながら訊いた。

「姑娘、居りません。」

堀部君はさらに右の方の部屋をたづねると、主人の老人は寢床から這ひ落ちたらしい妻をかかへて、土間の上に泣き倒れてゐた。娘らしい者の姿は見えなかつた。

話はこれぎりである。堀部君はあくる朝そこを發つて、雪の晴れたのを幸ひに、三里ほどの路をたどつて劉の家をたづねると、その一家でも昨夜の話を聴いて、みな顏の色を變へてゐたさうである。こゝらの者はすべて雪女の傳說を信じてゐるらしいとのふことであつた。若し堀部君に探偵趣味があり、時間の餘裕があつたらば、進んでその祕密を探り究めることが出來たかも知れなかつたが、不幸にして彼はそれだけの事實をわたしに報告してくれたに過ぎなかつた。

風露集（十）

年の瀬　年の暮

年の瀬や四十に近き鬪ひ者

面壁の達磨かしこし年のくれ

鶯を賣らばや我も年のくれ

日本は阿修羅の國や年の暮

花屋敷の虎眠りけり年の暮

雜

秋雨を衝いて、箱根の舊道を下る。笈の平の茶店に休むと、神崎與五郎が博勞丑五郎に詫證文をかいた故蹟といふ立札がみえる。

五六日まへに、修學旅行の學生の一隊がこゝに休んで、一羽の鷄を盜んで行つたと、店のおかみさんが甘酒を汲みながら口惜しさうに話した。

「あいつ、泥坊だ。」と、三つばかりの男の兒が母のあとに附いて、まはらぬ舌で罵つた。

この兒に初めて泥坊といふ言葉を教へた學生等は、今頃どこの學校で勉强してゐるであらう。

赤穗義士の立札は雨に濡れてゐた。

（「旅すゞり」より）

年譜

明治五年

綺堂、名は敬二。十月十五日の午前六時頃、東京高輪の泉岳寺畔に生まる。舊幕臣にして、『星月夜顯晦錄』『三國妖婦傳』等の著者たる高井蘭山翁の舊宅なり。

父の通稱は敬之助、維新後に純とあらたむ。敬之助は明治の初年、江戸を脫走して官軍に抗し、敗殘の身を高輪にある英國公使館内に隱して、遂にその書記生となる。妻幾野との間に子三人あり。長女は夭折し、次女は梅、その次に生まれたる長男を敬二と命名す。舊暦の十月なれば、敬二の生まれたる朝は霜甚だしく、天氣快晴なりしといふ。この年、大陰暦を太陽暦に改められ、十二月三日を以て六年一月一日とす。

明治六年（二歳）

六月中旬の朝、庭に面したる六疊の小座敷に睡眠中、黃貂に咬はれんとして救はる。

明治九年（五歳）

三月、麻疹に罹りて危篤。一旦死したる如くにて又蘇生す。

明治十九年（十五歳）

この頃より初めて文學者、殊に劇作家たらんと志す。時恰も藩閥政府の全盛時代にして、江戸の殘黨の子弟は官途に立身の望みなきを感じたればなり。

明治二十三年（十九歳）

一月より編輯見習として、東京日日新聞社に入る。爾來、新聞記者として劇評の筆を執る。

明治三十年（二十六歳）

一月、小島邦重の長女榮と結婚す。

この頃しばしば戲曲を書きたれども、各劇場は門戸を閉ぢて局外者の作を容れず、新聞雜誌も戲曲の掲載をよろこばず、空しく筐底に藏するもの三十餘種。

明治三十五年（三十一歳）

一月、歌舞伎座にて岡鬼太郎君と合作の二番目狂言「金鯱噂高浪」四幕を上演。自作の舞臺に上されたる始めなり。世評宜しからずと聞ゆ。

四月七日、父の純、六十九歳を以て死去。

明治三十七年（三十三歳）

二月、日露開戰。東京日日の從軍記者として出征、第二軍に配屬、滿洲の戰地に向ふ。十月十三日、沙河會戰激烈をきはめ、從軍記者の死傷あり。岡本も小銃彈に帽を擊ち落されたれど、幸ひに無事。十一月下旬に歸京。

明治四十一年（三十七歳）

七月、川上音二郎が革新劇を組織し、その依賴によりて『白虎隊』三幕を起稿、更に『奇兵隊』三幕を追加して『維新前後』と題し、九月二十日より明治座にて開演す。前半の『奇兵隊』不評、後半の『白虎隊』好評。

九月、伊豆の修善寺溫泉に滯在。そのあひだに『修禪寺物語』の草稿成る。

明治四十二年（三十八歳）

八月よりやまと新聞社に入る。

十一月、明治座一月興行の脚本として、史劇『承久繪卷』三幕をかく。市川左團次のために専ら戲曲を執筆するの始めなり。

明治四十三年（三十九歳）

八月、『太平記足利合戰』三幕をかく。

十一月、舊作『黑船話』を明治座にて上演。

十二月、『貞任宗任』三幕を書く。

明治四十四年（四十歳）

二月、『村上義光』二幕を書く。それを明治座の三月興行に上演の際、警視廳の許可を得ず、殆ど全部を訂正す。五月、明治座にて『修禪寺物語』初演。左團次の夜叉王、好評。七月、元園町一丁目十九番地の居宅を去つて、同町二十七番地に移る。

この年の劇作は、「村上義光」のほかに、『箕輪の心中』三幕、『大津繪草紙』三幕、「お七」一幕、「平家蟹」一幕、「世々の曾我」一幕、「兒が淵」二幕、「品川の臺場」三幕などにて、いづれも各劇場にて上演。

大正元年（四十一歳）

九月下旬より上總の成東鑛泉成東館に滯在し、中村歌右衛門のために「細川忠興の妻」一幕をかく。歌舞伎座上演の豫定なりしが延期となり、大正五年十一月、帝國劇場にて初演。

このほかの劇作は、舊作『弟切草』一幕の訂正初演を始めとして、「新朝顔日記」一幕、「べらぼうの始」一幕、「長恨歌」二幕、『千葉笑ひ』一幕、「武田信玄」一幕など。

十二月中旬より胃腸を病んで、年末まで臥床。あはせて神經性レウマチスに惱む。

大正二年（四十二歳）

九月、仙臺、松島をめぐりて金華山に參詣し、その歸途、水戸にも立寄る。その紀行「仙臺五色筆」あり。

十一月頃より神經衰弱に惱まされ、連夜不眠、時に腦貧血を起して卒倒せることあり。

十二月かぎりにて、やまと新聞社を退く。爾來、家居。專ら著作に從事す。

この年の劇作は、「淺茅が宿」二幕、『室町御所』三幕、「切支丹屋敷」一幕、「蟹滿寺緣起」一幕、「名立崩れ」一幕、「雨夜の曲」三幕、「鎌倉の一夜」二幕、「わが家」一幕、「佐々木高綱」一幕など。但しその全部が全然新作にあらず、十數年來むなしく篋底に藏し置きたる草稿を更に訂正增補したるもあり。

大正三年（四十三歳）

五月より八月に亙りて、「日本新聞」に小說「二三雄」を連載。

八月、甥の石丸英一同道にて、福島縣須賀川町に姉夫婦を訪ひ、歸途轉じて上州磯部鑛泉に赴き、七日間滯在。そのあひだに、妙義山に登り、長野の善光寺にも參詣。

十一月、齒痛に惱む。

この年の劇作は、「なこその關」三幕、「蒙古襲來」二幕、「浪華の春雨」一幕、「酒の始」一幕、「箙の梅」一幕、「板倉內膳正」一幕など。

大正四年（四十四歳）

五月より「時事新報」に小說「妹」を連載。

八月、上州磯部に赴きて半月ほど滯在。そのあひだに「鳥邊山心中」一幕をかく。

九月より「時事新報」に小說「鳥籠」を連載。

この年の劇作は「鳥邊山」のほかに、「增補信長記」二幕、「尾上伊太八」三幕、「能因法師」一幕、『入鹿の父』一幕、「景清」一幕など。

大正五年（四十五歳）

五月、上州磯部に赴きて十日間滯在。そのあひだに「隅田川心中」一幕を書く。

六月、初めて「半七捕物帳」を起稿。翌年三月までに前篇七回成る。

七月より「時事新報」に小說『綺絹』を連載。

八月より「國民」に小說「墨染」を連載。

十一月、神經衰弱にかゝりて連夜不眠。十二月國府津海岸に三週間ほど轉地靜養す。

この年の劇作は、「隅田川心中」のほかに、「番町皿屋敷」一幕、『阿蘭陀船』一幕、「三巴雪夜話」二幕など。

大正六年（四十六歳）

二月、腦貧血に倒れて、半月あまり臥床。

五月より「福岡日日」に小說「夏羽織」を連載。六月より「萬朝報」に小說「曙」を連載。
十月より「婦人公論」に小說「玉藻前」を連載。
十月、「半七捕物帳」續稿を起稿、翌年四月までに六回成る。
この年の劇作は、「京の友禪」一幕、「遊女物語」三幕、「籠釣瓶」三幕、「頼豪阿闍梨」一幕、「清正の娘」一幕、「長曾禰虎徹」二幕など。

大正七年（四十七歳）

一月より「東京日日」に小說『片絲』を連載。同時に「報知」に小說「うす雪」を連載。
一月、修善寺溫泉に滯在。その見聞雜記『春の修善寺』を「讀賣」に掲ぐ。歸途、沼津に遊ぶ。
七月より「讀賣」に小說『人形の影』を連載。九月より「萬朝報」に小說「誓の石」を連載。
九月、眼病に罹りて、醫師より夜間の讀書執筆を禁ぜらる。二月にして癒ゆ。
この年の劇作は、「新鏡山」三幕、『勾當內侍』二幕、『唐人塚』一幕など。

大正八年（四十八歳）

一月、帝國劇場の囑託を受け、同劇場の伊坂梅雪君と共に、大戰後の歐米劇界視察の途に上ることに決す。その準備中、一月中旬より流行性感冒に罹り、肺炎に變じて一ケ月あまり臥床、一時は出發を延期せねばならぬかと危まれしが、努めて起床。二月二十七日、横濱出帆の天洋丸に乘込む。
それより米國及び英佛等の諸國をめぐりて、八月二十三日、神戶に歸着。
十一月、帝國劇場のために『戰の後』二幕を書く。
十一月より「讀賣」に小說『雁の翅』を連載。

大正九年（四十九歳）

一月、流行性感冒を繰返して、約一ケ月臥床。つゞいて齒痛にて手術を受く。
四月より「婦人公論」に小說『小坂部姫』を連載。同時に「文藝倶樂部」に『半七聞書帳』を連載。九月より「萬朝報」に小說『極樂』を連載。
十月九日、七歳より我家に養ひたる甥の英一、十八歳にて死去。追悼の俳句日記『叔父と甥と』を書く。
この年の劇作は『小栗栖の長兵衞』一幕、『ちなは物語』三幕、近松原作の脚色『二枚繪雙紙』二幕など。

大正十年（五十歳）

三月、今年も流行性感冒に犯されて約一ケ月臥床。更に中耳炎を誘發し、五月に至りて漸く癒ゆ。五月下旬より箱根の堂ケ島溫泉に赴き、三週間滯在。
十月十五日、五十回誕辰に相當するを以て、劇作家協會主催にて、午後一時より有樂座に於て文藝講演會を開き、午後六時より帝國ホテルに於て祝賀會を開かる。一句あり。「ゆく秋を胡弓ひきけり老が身の。」
この年の劇作は近松原作『天網島』の脚色二幕と、「曾我物語」一幕、「仁和寺の僧」一幕、『村井長庵』四幕、「大阪城」二幕、「俳諧師」一幕、「節分」一幕、『前太平記』三幕、『金色堂』三幕、「邯鄲」一幕など。但し『曾我』と『節分』は舊作の訂正なり。

大正十一年（五十一歳）

八月二日、母幾野七十七歳を以て死去。
この年の劇作は、「御影堂心中」二幕、「西南戰爭聞書」六幕、「城山の月」四幕、『小田原陣』三幕、『白來也』二幕、「寺の門前」二幕、「階級」一幕、「薩摩櫛」三幕、「眞田三代記」など。

大正十二年（五十二歳）

三月より齒痛に惱み、右の奥齒七枚をぬき去る。六月には中耳炎再發、月餘にして癒ゆ。
九月一日、關東大震災のために、元園町の自宅は同夜半に燒失し、三十餘年來蒐集せし和漢洋の藏書ことごとく灰となる。幸ひに一家

無事。翌二日、目白の額田六福方に避難して、一ケ月あまり寄留。「婦人公論」の需めによりて「火に追はれて」と題する震災記事をかく。

十月十二日、假に麻布區宮村町十番地の貸家に移る。この家も震災のために大破して、雨の漏ること甚し。

この年の劇作は、「熊谷出陣」三幕、「兩國の秋」三幕、「江戸名所圖會」一幕、「臼井の留守宅」一幕、「朝飯前」一幕など。

大正十三年（五十三歳）

三月十八日、麻布を去つて、市外大久保百人町三百一番地に移る。

五月、春陽堂より「綺堂戯曲集」第一卷を發行。爾來、積んで十三卷に至る。

八月、急性腸胃加答兒に罹りて、約一ケ月臥床。

この年の劇作は、「雁金文七」二幕、「鬼の腕」一幕、「筑摩の湯」一幕、「維新小話」一幕、「無禮講」一幕、「蛇を賣る女」一幕、「小坂部姫」三幕、「家康入國」三幕など。

大正十四年（五十四歳）

五月、春陽堂より「綺堂讀物集」を發行。爾來、積んで五卷に至る。

六月二十日、大久保を去つて、麹町區麹町一丁目一番地に移る。半藏門外なり。

十二月二日、腦貧血にて卒倒し、年末まで休業靜養す。

この年の劇作は、「虚無僧」二幕、「小梅と由兵衞」二幕、「時雨ふる夜」一幕、「新宿夜話」一幕など。

昭和元年（五十五歳）

二月末より感冒にかゝり、更に中耳炎を併發、約二ケ月にして癒ゆ。

七月十三日、突然に胃痙攣を發して仆れ、その後半月あまり臥床。

麹町附近の區劃整理やうやく決定。再築落成して、元園町一丁目二十七番地の舊宅地へ、足かけ四年ぶりにて復歸することとなり、十一月三日移轉。句あり。「野狐の穴へ戻りて冬籠り。」

この年の劇作は、「勘平の死」三幕、「湯屋の二階」三幕、「唐絲草紙」三幕、「權三と助十」二幕、「風鈴蕎麥屋」二幕、「江戸子の死」二幕、「三河萬歳」四幕、「黄門記」三幕など。

昭和二年（五十六歳）

一月、「増補信長記」が露譯せられ、レニングラードの國立アカデミック・ドラマ劇場にて上演。六月「修禪寺物語」が佛譯せられ、巴里のシャンゼリゼー劇場にて上演。

この年の劇作は、「雁金文七」の増補一幕、「牡丹燈記」三幕、「正雪の二代目」二幕、「水野十郎左衞門」三幕、「相馬の金さん」三幕、「後日の長兵衞」一幕、「五右衞門の釜」三幕、「雷火」二幕、「おさだの仇討」二幕、「水滸傳」三幕など。

昭和三年（五十七歳）

二月、感冒に犯されて、一ケ月あまり臥床。又もや中耳炎を併發して、四月に至りて漸く癒ゆ。十月、神經衰弱より不眠症を起し、その後半年間、一切の執筆を廢す。

この年の劇作は、「吉野の忠信」一幕、「原合戰」一幕、「利根の渡」三幕、「近松半二の死」一幕など。

昭和四年（五十八歳）

一月、湯河原に轉地。二月より更に熱海に移りて、三月歸京。

六月、「世界怪談名作集」の飜譯成る。

十月、再び湯河原に轉地。

十二月、嫩會同人等と共に、演劇雜誌「舞臺」を發刊。

この年の劇作は、「朝鮮屛風」三幕、「天保演劇史」三幕、「水滸傳の林冲」三幕。

（明治時代を省略して、大正以後を詳かにす）

長田幹彦集

夢占

一

薄絹でふうはりと包んだやうな柔らかな月の光の射しそふ晩であつた。春は漸う闌けて、東山に煎る若葉の緑が、祇園町の方まで匂ひを送る微風の底には、夜ごとに都踊の紅提灯が色氣を含んだ艶女の瞳のやうになまめかしく搖れてゐる。春は祇園町に戀ごころを吹き込む生命のやうなもので、そこに集ふ人波はその生命に操られる木偶なのであつた。

古めかしい茶屋々々の二階からは絃歌の響が聲しつとりと流れて、妓達の唄ひさんざめく聲のなかにも櫻の花の散り迷ふやうなうすら悲しい戀がひそんでゐる。誘ふ水あらばの唄にもうたはれる情のいきさつは人々の眼に濕んで、末は白川から鴨川のせゝらぎへしつぽりと流れ落ちてゆく。伊勢字のぼんちと春勇が仲、下河原の仲小路はんと綱龍が仲、さうした相合傘の多愛のない浮名は今日此頃を情の瀬戸に立ちそめて、明日を定めぬ心中沙汰ならねど今の世を近松が昔になぞらへて人の口の端にのぼるのも、皆春がさせる戯れなのであつた。そして東山の薄暗がりから響いて來る智恩院の鐘聲だけは浮かれきつた人の胸に薄皮一枚へだてて無常の風をひいやりと滲ませ、茶屋歸りのそゝり唄は粹に口ずさまれても、月影の明るいひけ過ぎの大路を踏んでゆく千鳥足はどうやら生者必滅と抹香くさい字を書いてゆく。

こゝは名も末吉町、軒から軒へ續く茶屋々々はいづれも老舗ぞろひで、小格子のかゝりも昔ながらに古めかしく、角行燈に書かれた屋號は狭い町筋を態とほの暗くしてゐる。そこに行き通ふ人影も何處やら酒の香に滲んで、ふと行燈の影に佇む人の横顔をみても、忠兵衛、治兵衛、さては佐野の茶まで思ひ起させ、諸國諸人の集ひながらすつかり芝居がかりになつてゐる處がこの町の一德なのである。

まだ宵の口なので、そこには島田の鬢をふくらませた藝妓の白い額もついと横町から流れてくる。花簪の銀房とだらりの金絲を闇に光らせて、木履の音だけでころころと歩いてゆく舞妓もゐる。行きずりに、

「玉千代はん姐はん。何處へ。」などと艶な聲が挨拶をかはしてゆくのも春めかしく、芧姆はその間を袖を合はせて肩寒さうにちよこちよこ小走りに驅けぬけてゆく。

大榮の奥座敷では嵐山歸りの花見連がこれから都踊へ繰り込まうと云ふので妓達の勢揃へをするためにお誂への果ものとかきやを肴にあつさりと盃の數を重ねてゐる。寺町の佛具屋の主人、麩屋町の宿屋のぼんち、それに御幸町の先生まで交つての大一座で、三軒家で夜食をしたゝめたので、なかにはもう頰を眞紅に熱らして絃も借りずに流行唄をうたつてゐるやゝな手合もゐる。

「どうや、みんなもう支度はよろしいやろ。そろそろ繰り出さうやないか。」

と、ひとりが云ひ出すと、他の一人はそれを抑へて、

「ま、お待ちいな。まだしらした藝妓も舞妓も來やへんやないか。」

一もう來いでも宜しい。何んぼ忙しうても、私らがしらせるのに、早う來んやうな女はもうひいきにしてやらんわ、阿呆らしい。」

「ま、そないにお云ひやはんかて宜しいやおへんか。忙しないお方やなあ。」仲居は心得てつ いと銚子をとる。

一番口やかましいのが一番先についと盃を出して、

「それ、それ。酒さへ呉れたら云ひ分はないのや。はゝゝ。そやけどな。こないにして待つてるのは辛いもんや。待つ身に辛き、……」

「はゝゝ。あの聲を聞いとみい。あれがほんまの胴破りや。」

「胴破りちや何んどすね？」仲居は袖で笑ひを抑へながら訊く。

「胴破り云うたらな、……」さう云つた當人が自分から噴笑して、「はゝゝ。あの聲で唄うて貰うたら、三味線が胴から張り切れるやないか。あんたも氣の廻らん人やな。」

「ほゝゝ、阿呆らしい。ようそんな惡いことお云ひやすえなあ。」仲居は腹を抱へながら顔を背けてしまつた。

「餘りきつう云つて貰ひますめえぜ。」唄つてゐた男は急に南座の狂言で江戸役者の使つた科白の眞似をして、

「この聲で鶯啼かせたこともあるわえ。」

「なんで鶯が啼くもんかいな。そら朝寢の鼾聲で何處ぞの鶏が時をつくつたんやろ。はゝ。」

「叶はんな。」

一座はてれたやうな顔をして盃をとる男を眞中にしてわつと笑ひ崩れた。

その時、通縁になつた小座敷の向うの紙襖が、すうつとあいて、ほんのり點つた雪洞の陰から、

「姐はん、おほきに。」と、云ふ纖細い聲が聞えたかと思ふと、笑ひ聲のなかに藤色友禪の振袖を着た人形のやうな小さな舞妓が紅いだらりを曳いて入つて來た。

「えらい遲うなつて濟んまへん。」

その妓は口籠るやうに呟きながら伏目になつて何處へ坐らうかと云ふ風にためらつてゐたが、それをみた仲居は眼顔で合圖のやうなことをして、

「あこの旦那はんのねきへおいでやす。」

「へ、ほんならこゝへ坐らして貰ひまつせ。」

と、その儘床の前へ坐つた佛具屋の主人の脇息の傍へ行つて、小さくなつてしんなり坐つた。

「ほ、誰やと思うたら、菊勇はんやな。あんたいつ見ても人形のやうに小つこうてえゝな。竹取姫のやうに年は取らへんのか。」

「阿呆らしい。私かてお正月には年をとりましたえ。」

菊勇は眞顔になつて云ふ。

胴破りの聲の主人は又口を出して、

「あんたも怪體な妓やな。年をとらん人間があるか。お正月にならんかて、人間は毎日々々年を老つていくもんや。」

「さうどつか？ そやけど姐はんやお母はんがな、お正月になると年をとるのや云うて、白朮詣の晩に今夜は寢んと年の來るのをみといでやす云はれましたさかい、私よう寢んと起きてたんどつせ。」

「はゝゝ。賢い妓やなあ。ほしたら年が來たか？」御幸町の先生は脈をとるやうな格好をして盃をあげながらまぜつかへす。

「ふん、來ました。」菊勇は益々眞顔になつて、「丁度臺所で婢衆が火を入れる時こ、何やしら山の方で怪體な音がして、すうつと寒うなつたんどつせ。ほんでに私姐はんに寒うて叶ひまへんちふとな、今や、年が遠いところから歩いて來て、あんたの體へ入つて來るのや、云ははるのどすがな。」

「はゝゝゝ。面白い。ほんで年は見えたかい

な。」佛具屋の主人は額に皺を集めて、さも面白さうに聞く。

「いゝえ。ちよいとも見えしまへなんだ。ほんでに私、年ちふやうなもん見えしまへんやないか云ひますとな、お母はんが年の見えんやうな人があるか、そやさかいにあんたには雷さんが太鼓を叩かはるのも見えんのや云うて、えらい阿呆のやうに云うて呉れやはるのどつせ。」

「はゝゝ。こらあかん。惡いお母はんやな。」佛具屋の主人は腹を抱へて、苦しさうに咳入りだした。

一座も腹をかゝへた。賑やかな笑ひ聲は障子の外へ來て佇んでゐる春をさゞめかした。

菊勇は怪訝さうな顔になつて、

「そやけど、なあ、へ、ほんまに私を嬲らんとほんまのこと云うとくれやすな。あの雷はんちふもんはほんまに繪に描いたるやうに太鼓を叩かはるのどつか？」

先生はそれを聞くと、又噴笑して、

「あんた一體幾歳になつたんや？」

「私どつか。私はな、十三になりました。」

「十三にもなつて、雷さん知らいでどないにする。もう旦那はんの出來る頃やないか。あんたも阿呆やな。」

「そないにきつう云はんとおいとくれやすな。私はどうせ阿呆どすさかい。」

菊勇は急に悄れて首垂れてしまふ。

佛具屋の主人はそれをみると彼女の肩へ手をかけながら、

「いや、決して阿呆なことはあらへん、賢い、賢い。今時十三にもなつてこんな罪のない妓は珍らしいわ。」

「惡いお方、いけずやなあ。」

菊勇はその儘、傍を向いて口をつぐんでしまつた。その眼には長い睫毛が細かくふるへて、いつか悲しさうに潤んでゐた。

そこへ、又通線の方から二人の藝妓がつながつて入つて來て、

「遲うなつてえらい濟まんこと。もうどだい忙しうて。」と、云ひながら方々へ割り込んで坐つた。

一座はそれで又賑やかになつて、盃がひとしきり彼方此方へ動いた。都踊の噂や、嵐山の花の噂は各自の口から喧しく物語られて、輕い洒落や皮肉が云はれる度に、艶めいた笑ひ聲が酒の香と一緒に紙燭の光をゆるがして、ほの暗い明るさのなかにはてらてら光る額や、黒髪や、着物の美しい色彩が繪のやうに亂れた。

しらした妓の數が揃ふと、彼等は支度をして、三番の都踊に間に合ふやうに座を立つた。

二

「うすものの、輕き袂に匂ふなり、……」鼓唄のたてが澄んだ美聲でたからかに唄ふと、冴えた鼓がそれに答へて本舞臺では幾十人とない踊り子が花環のやうになつて、縺れつほぐれつ美しい舞ひの手を見せる。三味線の連彈は天井に板を打つやうなかすかな撥音を谺させて、太鼓小鼓のゆるやかな調べとともに、幾十の袂は華やいだ染模樣と金絲の縫ひを絢亂と渦卷かせる。しなやかな白い纖手はその渦を操る生命のやうなものであつた。

菊勇は藝妓達の一番後に隠れて、前の人々の肩越しにそつと伸びあがつて舞臺をみてゐた。そこには自分達のおつれが皆で此處を晴れと舞ひつれてゐる。あそこに舞つてゐるのは品江はん、こつちが玉龍はん。人顔もはつきりと見えて、ぬけるほど白く化粧つた顔がまるでふだんとは打つて變つた美しさを示してゐる。顔の寂しいと思つた人も、こゝでは笑つてゐるやうに賑やかにみえる。丸すぎると思つた人も、こゝでは水の滴るやうに凄婉にみえる。

菊勇はぢつと眼を据ゑてみてゐるうちに口には云ひ盡せぬ羨ましさが小さな胸一杯に込みあげて來た。あゝやつて舞ひ續けてゐるおつれ達に比べて、自分は何をしてゐるのだらう。都踊の番組がきまる日には胸を轟かして讀みあげられる書きものをみてゐたが、自分の名がその中になかつた時の悲しさ、今思ひ出しても彼女は涙ぐまずにはゐられないほど口惜しい。自分の舞ひは筋がよくても何しろ體の小さいのが舞臺にはふさはず、それによし又舞臺にのぼれても旦那のない悲しさには人並の支度さへ出來かねる。旦那といふものの話はうすうす聞かされてゐながら、唯一途にそれが恐ろしくて、屋形のお母はんがお茶屋の仲居を相手にどんな談でも盲でもえゝさかい、この妓を助けると思うてなどと耳打ちをしてゐるのを聞いた時にはぞつとして心からお母はんを憎んだが……併し今ああしておつれ達が踊つてゐるのを見るとその旦那さへあればと云ふやうな氣もする。かうして客達からは阿呆と罵られ、その人達の陰にかくれてこつそり踊りを見てゐる自分の肩身の狹さを思ふと、さすが子供心にも身を切られるやうに悲しくて彼女は泣かずにはゐられなかつた。いくら抑へようとしても云ひ甲斐のない涙はどうしても抑へることが出來なかつた。

白粉で塗り隱された菊勇の頬にはまだ仇なさけを知らぬ涙が幾しづくとなくしたゝり落ちた。そのひとしづくには蜆川を流れる水の濁りはなくて、丁度白川砂の底から湧いてくる泉のやうな淨らかさが輝いてゐた。それを彼女は友禪の振袖でそつと人知れず押拭ひながらさう云ふ時にはきまつて思ひ出す幼馴染のお小夜はんのことを思ひ出してゐた。

お小夜はんは菊勇にとつてたつた一人あつて二人とない懷かしい心の友だつた。三本木にある小さな宿屋の娘で、年も同いどしの十三歳で、美しさは自分に劣つても人並すぐれて賢い、思ひ遣りの深い子だつた。菊勇の兩親がまだ此世に生きてゐた時分には、隣同志に住ひあつてゐた縁故から二人は親達が親類つきあひをしてゐるまゝにいつともなく絶ち難い絲に因はれて、到頭今のやうな仲になつてしまつたのであつた。そして打續く不幸から兩親に死に別れ祇園の屋形へ身を賣られるまで二人はいつも手を執り合つて鴨の河原に夏は螢、冬は月影を追ひ求めて歩いたのであつた。そして去年の十一月、初めて見習ひから舞妓の店出しをしてからは變りはてた美しい姿をめでて、お小夜はんは京極へ使ひにやられた歸りなどには必ず屋形へ寄つて、多愛のない物語りに、束の間の逢瀬を樂しんでゆくのであつた。

「お小夜はんと私とはなんで姉妹に生れしまへなんだやろなあ。」思ひ餘つて菊勇がこんなことを云ひだすと、お小夜はんは、

「ほんまになあ、さうやつたら私こんな辛度い思ひをして逢ひに來いでもよろしいのになあ。」

それが二人には越えかねる關なのであつた。

菊勇はさうしたお小夜はんのことを思ひつゞけてゐるうちに又いつともなく亡き兩親のことが思ひ出された。店出しの時には、美しくなつた自分の姿を喜んでくれるだらうと思つて、わざとだらりまできちんとしめて、屋形の姉衆と一緒に黑谷の丘の片影にあるお墓へお詣りに行つたが、今ではどうやらこんな身になり果てたことが兩親に對して濟まぬやうな氣もする。生きてゐると云ふことと、死ぬこととの差別が考へれば考へるほど分らなくなつて、寂しいささやかな二基の墓碑をみてもそのなかにあの父親と母親が入つてゐようとはどうしても想像されなかつた。東山を越えて彼方の何處かにきつと今でも私が行くのを待つてゐられるに違ひ

ないと云ふやうな氣がされてならなかつた。いつぞやもお小夜はんにそのことを話したら、彼女も、

「ほんまになあ。」と、云つて遠くを眺めるやうに眼を瞬りながら合點いた。……

舞臺の方ではぱつと薄紅い蠟燭の波が搖れて、踊妓達は一齊に小櫻の枝を宙にかゝげた。花道の上の囃しでも、祇園囃しの重々しい大太鼓と太鼓がゆるやかに鳴りはじめて冴えた鉦の音が特異な律調を作つてゆく。

三番の踊りはこれで終りを告げたのである。

「あゝ、いつみても都踊は美しいな。どれ、そろそろ立たうか。」佛具屋の主人は感じ入つたやうに呟きながら後を振顧つた。

仲居はそれを聞くとうつとりと夢から醒めたやうに微笑んで、

「もうちよつとお待ちやすな。えらい人どすさかい。」と、云ひながら、花道へ引上げてゆく踊妓の列に見入つてゐる。

先生はいつのまにか柱に倚りかゝつて、少し口をあけながらさも快ささうに寝入つてゐた。

「ふわ、怪體な、こつちやの旦那はんよう寝とゐやすぜ。」

ひとりの藝妓が頓狂な聲で叫ぶと、皆はやつとそれに氣づいて、

「こらあかん。ほんまに不心得な男やな。」と、云ひながらいきなり兩方から肩をとつて引起した。

と、先生は煩ささうに伸びをして、

「誰れや。なんぞ早う出來るものを持つといでやす。」

何處かの茶屋にゐる夢でも見てゐるとみえて、口のなかでぶつぶつ寝ごとを云ふ。

「はゝゝ。せうむない。」

皆は思はず噴笑さずにはゐられなかつた。端にゐる客も立上りながらその容子をみて笑つた。

その聲が餘り大きかつたので先生はやつとぼつかり眼をあけてきよろきよろしながら立上らうとした。

佛具屋の主人は透さず、

「都踊は美しかつたた、先生。」と云ふと、彼はてれた笑ひ顏をして、その儘うつとり舞臺の方へ眼をやつた。

皆は又ひとしきりくすくす笑ひだした。

歌舞練場の外へ出ると、いつの間にか夜もしつとりと更けて、夜寒が行き通ふ人の縮めた首筋にしみついてゐる。道の片側には篝火の煙が紅く流れて、物賣る商人の聲も何處か薄寒く、さすがは山近い京の街のこととて路にうつる燈影のなかにも惱ましげな春の色がすつかり消えてしまつてゐる。

万亭の角まで來ると、托鉢歸りらしい一人の美僧が、しよんぼりうなだれてゆく菊勇と法衣の袖を摺り合はせながら山の方へ歸つて行つた。

三

その夜も更けて、もはや草木も睡る丑滿時である。

菊勇はほかの藝妓や舞妓達と一緒に旦那はん方に連れられて、八坂の上にあるさる席貸の奥座敷に寝てゐた。雜魚寝の折はきまつて宵の口を騒がすおつれの奴達も今はもうぐつすりと寝靜まつて、聞えるものといつては庭の遣水のひそやかな呟きと聲を爭ふ鼾の音ばかり、吹く小夜風も鳴りをひそめて、四邊は物凄いほど深沈と更けてゆくのである。

菊勇は何かの夢に驚かされてふつと眼を瞬いた。枕もとには影のやうな丸行燈が點つて、ほの暗い物の影はあやかしのやうに奈良晒の面に

吸ひ込まれてゐる。床の間にかゝつた達磨の幅は白眼だけちらちら光らして、青貝の螺鈿の入つた料紙筥や、硯筥、さては又よく拭き込んだ床柱までものを云つてゐるやうにほのかに冷たく輝いて、枕屏風の銀が墨繪の竹を浮きたゝせたまゝそこはかとなく冷炎を燃やしてゐる。

菊勇は何故かぞつとした。

直ぐ隣りに寝たおつれのつね勇はそれとも知らずに快ささうに眠りこけてゐる。こゝへは巫女踊がはねるとすぐよばれて来たので、宵の口の疲れで前後も知らず寝てゐるのである。髪も大形のをしどりに結つて、頭よりも大きい花簪の数々はそのまゝそつくり床の間へぬぎ捨て、燃えたつやうな紅鹿の子の長襦袢の襟に顎を埋めて、友禅縮緬の夜着から乗り出すやうにしながら寝てゐる。舞妓のなかでも一二を争ふ美貌なので、行燈の光に照らされるその寝顔は祇園の誇りのひとつであつた。濃い白粉を油で拭きとつたあとがほんのり残つて、鼻の隆や、頬の片陰は薄墨でぼかしたやう、そして一文字にないた眉毛と、濃い口紅だけは濃くのばした絖に落した顔料のやうに匂つてゐるのであつた。

その隣りにも、またその隣りにも同じやうな寝顔がさまざまな形をしながら綺のやうにほの見えてゐる。

菊勇は何故か又ぞつとした。

ふと見ると、縁端の障子の面には異様なものの影がしみついてゐる。青ざめた、定かならぬ人の姿で、手を斜に垂らした先から青いしづくがたらたらと滴り落ちてゐる。そして首がふらふら彼方此方へ動いて、その度毎に體が揺れたり縮まつたりする。——それは雨戸の隙洩る落ちがたの月影であつた。

菊勇は恐ろしさの餘り首を縮めてぶるぶる慄へてゐた。少しでも體を動かすと冷汗がすうつと滲み出るやうで、たゞ生唾を呑みながら縛れた舌を強く強く噛んでゐた。……

何處からかかすかな呼び聲がする。

春月のお八重はん姐はんの聲だ。

「菊勇はん。何をうろうろしとゐやすのえ。早う枕の間へいとおくれやはんか。旦那はんがきつうせいとゐやすさかい……——」

菊勇はそれをきくとはつとして起上つた。緋鹿の子の寝衣を着てゐると思つたのが、いつか自分の一番好きな卯の花模様の襲ねに變つて、姐はんから譲つて貰つたお納戸に亀甲の大模様を繡ひとつただらりまでしめてゐるのである。

菊勇は嬉しくなつて、旦那はんは何やしらと思ひながらいそいそ暗い廊下を渡つて行つた。廊下の板のきしむ音が異様に響きあがつて、角につけた掛行燈の灯影がいつになく暗い。そして庭の樹立から射しこむ月影はそこらに敷いた白川砂の面でほんのりと光つてゐる。

枕の間の前まで行くと、菊勇は、

「姐はん、おほきに。」と、小聲で呟いて、そこの襖をすらつと開けた。それと一緒に彼女は客の旦那が餘り不思議なので悸乎として思はず後へ身をひいた。

床の間の正面のところには菅笠をかぶつて眞黒な法衣を纏つた僧形の人がたつたひとりでしよんぼり坐つてゐる。成駒屋のやうに面長な、美しい顔の若いお坊さんで、きつと眞一文字にひき結んだ唇は泣いてゐるやうだつた。そしていつになくそこにはたつた一挺の紙燭が點されてゐるきりで、壁の色も定かならぬほど四邊が朦朧としてゐた。

菊勇は薄氣味悪くなつてぶるぶる慄へてゐると、お坊さんはやがてこつちの方へ眼を移して、

「あんたが菊勇はんか。ほんまに長いことやつたな。」と、優しい聲で言葉をかけてくれる。

菊勇はその樣子がいかにも知人らしく思へたので、

「忘れて濟んまへんけど、あんたはんは誰方はんどしたかいな。」と、おづおづ聞いてみた。

と、坊んさんは笑ひもしず、

「私はな、黑谷の寺にゐた青蓮や。もう忘れてしまうたか。頼りないこつちやなあ。」

青蓮といへば兩親の葬ひの時に何くれとなく世話を燒いてくれた老僧である。幼心にも白髮のまじつたあの長い眉毛だけは忘れぬか、それにしてもこんな美しい若僧が青蓮はんと名告るのはどうしても腑に落ちなかつた。

菊勇はその儘靜かに起つて、紙襖のなかへ入つた。

「もうあんた私を忘れてしまうたか。ほんまに頼りない子やなあ。」

坊んさんは同じ事を繰返して立膝の上に重ねた白蠟のやうな手を動かしながらそつと手招きをした。

菊勇はその言葉を聞くと急に何かしら悲しくなつて、

「どうせ私は阿呆どすさかい。」と、云つて、小さな聲で啜り泣きをしだした。

坊んさんはそれを見ると、急に眉を曇らせて、

「えゝ子や、えゝ子や、私を忘れたかて大事ない。私はあんたがいつち好きや。ま、そないに泣かんと、もつとこつちやへお寄りいな。」

「おほきに。そやけどな、此頃みんなして私のことを阿呆や阿呆やいははるよつてに、私、それが悲しいて悲しいて叶はんのどつせ。あんたはんお坊んさんどすさかいに、どうぞあんじよう敎へてお呉れやす。ほんまにどないにしたら賢うなつて、都踊やたら、溫習會やたら出さして貰ふやうになりまつしやろなあ。」

菊勇は思ひ入つたやうな調子で首を傾げながら訊く。

坊んさんはさういふ顏をしげしげ打眺めてゐたが、一言も返事をして呉れない。餘りなと思つて此方でも潤んだ眼でぢつと見上げてゐると、やがて坊んさんは細い女のやうな指を法衣の袖からそうつと出して、あらぬ菊勇の後の方を指ざした。

と振顧ると、そこには冴え返つた月光のなかに、庭の櫻がまるで花傘をひろげたやうにほの白く一面に咲き亂れてゐる。花はひとひら一片五つの花瓣をみせて、そのなかには一樣に露のやうな月のしづくを湛へてゐる。

「ほんまによう咲いてますえな。このお座敷においでやすお客はんは誰方かて美しい云うてお讃めやすえ。」

菊勇は花の姿が餘り美しいので、ついうつとりと見惚れながら呟いたが、坊んさんの指がまだその花の下蔭をぢつと指さしてゐるので、不思議に思つて思はず眸を凝らすと、その時、彼女は櫻の根がたに思ひもかけぬ人の姿を見出した。

そこには暫らく逢はなかつたお小夜はんが來て立つてゐる。黑繻子の襟のかゝつた青い着物を着て、ちんこだらりをきちんとしめて、髮も舞妓風に結つて、まるでいつぞやの芝居でみた中將姫のやうな姿をしながら櫻の根がたにしよんぼり俛首れて立ちつくしてゐる。

菊勇はそれを見るとはつと嬉しくなつて、

「まあ、お小夜はん。あんたはんどうおしやした！」と、叫びながらすらすら起上つて緣端の方へ出て行つた。

お小夜はんにはその聲が聞えなかつたかして、ものも云はずに石像のやうに立ちすくんでゐたが、吹く風もないのに櫻の花が雫のやうにちらちら散り迷ふと、それに驚いてかお小夜はんはすうつと顏をあげた。

「お小夜はん、あんたはんどうおしやした。い

つこゝへおいでやしたんどす？」

菊勇はさう叫びながら跣足でそのまゝ敷石づたひに花蔭へ下りていくと、お小夜はんはやつとその姿をみつけて、

「ほ、おみよはん。私な、さつきにからあんたを待つてたんどつせ。これから伏見の小母はんのとこへ行きまへうやないか。私も衣裳をちんと着かへて、他處行きの出來るやうにしたるのどつせ。」

お小夜はんはやつと花の下から敷石のところまで歩いて來て、丁度着物を見せびらかすやうに、兩袖を蝶のやうに擴げて後姿を見せる。その背ではさまざまな紅や藤色や、黄色の模樣が縺れたりくづれたりした。

菊勇にはお小夜はんが舞妓になつてゐるのが少しも不思議には思へなかつた。もう遠い昔から一緒に女紅場へ通つてゐたやうな氣がして、懷かしさがしみじみと胸に滲みとほつて來るやうだつた。

「ほんまに私も伏見へ連れていつて欲しいわ。そやけど、私も衣裳をかへて來んなりまへんな。」

菊勇は今更のやうに自分の姿を見廻しながら云つた。

「阿呆らしい。あんたはそんなりで宜しいわ。早う行かんとまた私のお母はんが追うて來やはつて、きついめにたゝかはるに違ひない。私、今日はなにも惡いことしいへんのに、きついめに叱られたんにやわ。」

さう云ふお小夜はんの眼には大きな涙の玉がぼろぼろと流れてきた。彼女は袂を顏に押當ててしくしく聲をたてて啜り泣きしはじめた。黑繻子の襟は月の光に冷たく光つて袂は嗚咽するたびに細くふるへた。

菊勇はふつとお小夜はんのお母はんの顏を思ひだした。癇性で、氣むづかしやで、一寸のことにもよく腹を立ててはお小夜はんを打つたり、叩いたりした。その怒つた時の顏を思ひ出すとぞつとして、一刻の間もかうしてゐられないやうな忙しない氣になつて、友禪の裾もちらほらと一生懸命に處定めず驅けだした。

「これ、菊勇はん。お待ち。なんぼあんたが逃げたかて、もう駄目や。」

何處かで鋭い聲が聞えたかと思ふと、突如肩のところを冷たい手でむんずと攫んだ。まるで氷のやうな冷たい手だつた。

「あゝ、お小夜はんのお母はんが。……」と、思ふと、はつとして彼女は足がたちどころにすくんでしまつた。折角春を祝うて買つた衣裳が破れると思つても、恐ろしくてどうしても後を振向くことが出來ない。唯いたづらに兩手で空を攫みながら悶えてゐると、その時、すぐ耳のそばできやツと魂消るやうなお小夜はんの絕叫が聞える。菊勇はお小夜はんが慘たらしくずたずたに斬られてゐるのだなと思ふと、急に恐怖のあまり聲を放つて泣きだした。

「菊勇はん。」「菊勇はん。」

遠いところで誰れかが名を呼んでゐる。

苦しさ、切なさにふつと眼を睜くと、今迄とは似てもつかぬ席貸の奥座敷で、小窓から射してくるすがすがしい光は消え殘つた行燈と光を爭ひながら四邊を曉方らしい色で彩つてゐる。雜魚寢の人はまだぐつすりと寢入つてゐて藝妓の花之助はん姐はんだけが派手な長襦袢の肩を寒さうに夜着から出して、細い煙管で煙草を吸ひながら此方をまじまじ見てゐる。

「菊勇はん、なんぞ恐い夢でも見たんか。えらい泣き聲をたてて、ま、どうえ。」

菊勇はまだ冷たい手で肩をしつかりと攫まれてゐるやうで、身動きが出來なかつた。

「なあ、あんた。まだ夢が醒めへんのか。私の顏が分るか。」

さう云はれて菊勇はやつと我れに返つた。今

のは夢であつたかと思ふと、ほつとして、腋の下へ冷汗がじとじとゝ滲み出てゐるのをはじめてそれと感じた。

「はあ、夢やつたかいな。私もう恐うて恐うて……」と、云ひかけると、彼女はなにかしら譯もなく嬉しくなつて思はず涙をはらはらと枕のうへへしたゝらした。

その朝、みんなひと風呂つかつて、田舍亭のお料理で朝飯をよばれる時、訊かれるまゝに菊勇は夢のいちまきをすつかり物語つた。

默つて聞いてゐた佛具屋の主人は、語り了ると嚇すやうに、

「惡い夢を見たもんやなあ。その夢占はようないえ。」と、笑ひもしずに云つた。

「ほんまどつか。私恐いわ。」

菊勇は眞蒼になつて一座の顏を見まはした。

座にゐた老妓は、

「ほんまどころかいな。そないにして坊んさんの夢をみたもんは近いうちに如來樣のお傍へ上らんならんえ。」

「姐はん、ほんまどつか。私、もう厭やわ。」

菊勇はおろおろ聲になつて袂を顏に押しあててしまつた。

「はゝゝゝ。せらむない。その夢占はえゝ旦那はんが出來るちふ謎やがな。阿呆やなあ。」

一座は明るい朝の光のなかでどッと笑ひくづれた。

四

行く春の惱ましい日も過ぎて、祇園のさかりは、鴨川のせゝらぎが舞臺までも聞えて來る先斗町の歌舞練場へと移つて行つた。紅に千鳥を染めぬいた提灯はあの長い廓の軒に宵闇を照らして、祇園會の鉾が町々を渡るまでは沙汰すぎた女のやうなしづけさが祇園の町を包むのであつた。

その日は佛具屋の主人の催しで、又例の極道づれは午過ぎから俥をつらねて大榮の門を出た。そして汽車で木幡まで行つて、そこから又八臺の俥をつらねて茶園のなかの日盛りを淸い水の流れる宇治の里へと志した。

途々黃檗の御寺へもお詣りして、門前の茶店で鄙びた冷酒の馬鹿をつくし、茶園に日蔽ひをかけてゐる茶摘女の唄を驚かしたりしながら古風な勾欄のある宇治の長橋へかゝつたのはもう汗を催すくらゐな日射しが愛宕の峯へ舂く頃ほひであつた。

近江境の連峯は青々と燃えたつて、そこにも五月がのんびりした夢をみてゐる。山々が兩方から立重なつた谿間にはそれでもまだ春が殘つてゐて、紫に澄んだ急灘は比良邊の雪解の水か、石山の櫻を溶かしてゐた水か、そこはかとない花の匂ひをば浮べてゐるやうにも思はれ、十三重の魚供養の寶塔も白く晒れて、浮舟の洲には蘆荻がもう行々子の巢をつくつてゐる。そして平等院のこんもりした樹立にも、堤の並樹にも青葉が重々しく匂つてゐるのである。

俥の上から振顧つて川しもの方を眺めると、伏見、中書島、さては淀、八幡につゞく川沿ひの平野や巨椋の池は唯みる蘆荻の綠と、菜の花の黃で、一筋の流れが盡きるところには西山城の山々が日射しを斜にそらして夢よりも淡く煙つてゐる。河面からは下り船の艪聲もたえて、空には揚雲雀の囀りだけが喧しい。

一行は先づ菊屋の門で轅棒を下ろさせた。

「お越しやす。お越しやす。」の聲に迎へられて、川つきの座敷へ通されると、すぐまた酒になつて、河原へ出て遊ぶ間もなく日はとつぷりと暮れてしまつた。

その夜である。

御幸町の先生は藝妓の花之助と、それから宿屋のぼんちは同じく藝妓の勝千代と、粹がきい

たかきかぬかしてひと足さきへどこかの座敷へ姿を隠してしまつた。そして佛具屋の主人は一番しまひまで座に殘つて、京都から持つて來させた鷺しらずを肴にちびちび盃をあげてゐたが、これもいつの間にか姿を消してしまつた。

跡に殘つた菊勇はほの暗い紙燭の影にしよんぼり坐つて袋のなかからそつと押繪の人形と小箱を出して人知れず樂しんでゐたが、そこへ大宅のお母はんがにやにや笑ひながら入つて來て、

「あんたまあいつまでそんなもんを大事にしてゐるのえ。ほゝゝゝ。」と云ひながらぢつと菊勇の顏をみつめたが、少時たつと、笑つてゐたお母はんの眼は妙に嚴らしくなつて來て、そこにあつた湯呑に水注しの水をつぐとお盆のまゝ菊勇の方へ突き寄せて、

「さあ、あんたこの水を持つてあこの旦那はんのところへいといでやす。行儀ようするのえ。」

菊勇は默つてそのお盆を持つて廊下づたひに離れの方へ歩いて行つた。お母はんはその足音にぢつと聞き耳をたてゝた

夢占。ゆめ占はかうして敢なく解けてしまつても、あの菊勇の何とも笑はれぬ日はいつになつたら來ることであらう。

歩く（一）

私は近頃、一週に一度か、若しくは十日に一度位の割合で、三里乃至四里の道を歩くことにしてゐる。それは無論いづれの意味に於ても、健康にいゝからやつてゐるのである。私は生活の樣式を全然變へてみたいと思つて、永年あんなに飲んだ酒をぷツつりやめてみた。ところがテキ面に一種のアルコホール中毒症を起して、去年一年は隨分そのために苦しい思ひをした。溫泉へ二月も引籠つて靜養をしてみたが、一向はかばかしくない。まるで精神消耗症のやうな病狀で、陰鬱はする、焦燥はやる。時々は發作性に絶滅の感を覺える。不眠、妄想、極度の亢奮、あらゆる形になつてさうした苦悶が私の神經を脅やかした。私はこのまゝ廢人になるか、死ぬかするのではないかと思つて、すつかり悲觀してしまつた。醫師も呆れて、文士なんていふものは神經の出來が違ふ。これでは女だか、男だか分らないと云つて、しまひには匙を投げてしまつた。それもその筈で、たつた今しがたまで百以上の脈搏がうつてゐたのが、醫師に手をとられると、けろりと平脈に戻つてしまふといつたやうな神經ぶりを示してゐたからである。

そこで私は醫師の鞭撻に從つて、抵抗療法をやりはじめた。先づ最初にやつてみたのが登山である。私は湯河原にゐる間に、或る風の靜かな日を選んで、たつた一人で日金山へ登つてみた。海拔にしたら三千尺たらずの山だが、併し私の足では上下三時間はかゝるのである。道も相當に急であつた。

ところが驚いたことには、醫師が豫言してくれた通り、さう大して苦しみもしずに絶頂に達することが出來た。平常はともすると階段を上つてさへ脈搏が高まるのに、そんな高い山へ登つても別にさう苦しくもない。私は日金山の絶巓に立つて夕陽の相模洋を下瞰した時には、心臟め糞食へッといふやうな愉快を感じた。それからが私は急に心機一轉して、自分の心臟の活力に對して可成りな自信をもつことが出來るやうになり、もう毎日々々箱根道へ登つたり、日金山へ登つたり、閑さへあると山ばかり歩いてゐた。

零落

一

私が野寄の町へ入つたのはもう十月の末近い頃であつた。北の國の冬は思つたよりも早く來て、慌しい北風が一夜のうちに落葉松の梢を黃褐色に染めてしまつたかと思ふと、すぐそのあとから凍えたやうな灰色の雲が海の方から斷絕なしに流れて來て、夜となく晝となく、寂しい氷雨がばらばらと亞鉛葺きの屋根に降り灑ぐやうな日が幾日となく續いた。收穫のすんだ野面や、なだらかな起伏のつゞいた傾斜地には薫りの高い林檎が紅く熟しきつて、せはしげに餌を漁りながら冬に慴えて啼きしきる群鴉の聲も悲しく、雲のきれめから時折姿を現はす國境の連山の頂にはもういつしか眞白に雪が降り積つてゐた。

私はその町の大通りの端れにある穢くるしい旅人宿の二階で、なすこともなく幾日かの取留めもない日を送つた。二箇月に餘る長い旅を續けて來た私は、いつしか疲勞のあとにつゞいて起る不思議な心持に惱まされて、もうすつかり元氣と云ふものを喪つてゐた。これから先どういふ路をとつて旅をつゞけて行かうといふ計畫もなく、それかと云つて、また自分から進んで急に懷かしい東京の方へ引返さうといふ氣もなく、唯その日その日の徐ろに移つてゆく果敢ない變化を賴りに、路銀の殘つてゐる間は何時までもこの衰頹してゆく靜かな廢市に逗留してゐたいやうな氣になつてゐたのであつた。

事實私にとつては此度の旅ほど法外な、變化の多い旅はなかつた。――青い酒や、紅い酒を並べたカッフェーや、毒を含んだやうに脣の紅い女や、瞳を爛らかす眩い燈火の輝き、すべてさうした若い生命を蝕む濃烈な刺戟に充たされた都會の生活がしみじみ厭はしくなつて、眞夏の白けた日射しがまだ甍の上に烈々と燃えさかつてゐる頃、至純な自然の抒情詩を懷かしむ心持でふと旅へ出たのではあつたが、常陸の海岸から磐城境の炭坑地方まで來かゝると、例の氣紛れな私の好奇心はいやがうへに增長して來て、福島、仙臺、と旅程は次第々々に延びてゆくばかりであつた。礦山の坑夫を誘拐して歩く山のしと稱する惡漢に欺かれて、龕燈返しの密室を有する怪しげな淫賣宿で四日も五日も逗留を强ひられたり、樺太へ出稼ぎに行く若い酌婦の一團と道連れになつたり、路銀が盡きて、賭博に耽る鐵道工夫の群や藥賣りの親爺などと宿場はづれの木賃宿に夜を明かしたり、種々さまざまな、普通の賢い旅人の見も知らぬ危けな出來事に出逢へば出逢ふほど、私は却つて謂はれるやうな不思議な興味を覺えて兎角するうちに到頭青森まで來てしまつた。

そして眞紅に燒け爛れた夕雲が陰鬱な青森灣のうへを北へ北へと流れて行く光景をみると、今度は平生から遙かに憧れてゐた北海道の未開の自然が俄に慕はしくなつて、まるで理性の麻痺した狂人のやうな氣持で即夜夜航の連絡船に飛び乘つたが、愈々函館の港外へ近づいて、暗い津輕海峽の怒濤が舷側を打つ轟響を聞きながら、ほのぼのと白んでゆく曉方の空に眞白な海鳥が幾羽となく群れ飛んでゐる姿をみた時には、さすがに我ながら淚の滲むやうな悲壯な氣にうたれて、船尾の冷たい欄干に身を倚せたまま遠い遠い海の彼方の內地の空をみつめながら

茫然と立ち盡した。あの荒寥とした駒ケ嶽の高原から、遙かに噴火灣の紺碧を眺めた時も、人住まぬ未開地のやうな網別の谿谷から雪を戴いた崇嚴なマッカリヌプリの山容を振り仰いだ時も、また倶知安の新開町で暗澹とした夜の闇の底に黄いろい灯が幾つとなく寂しげに瞬いてゐるさまを望んだ時も、眼に迫る遣る瀬なき哀愁は覺えながら、私にはまだそれでも自然に對する好奇な旅人の鋭い感覺が殘つて居た。遠く「カウカサス」の山地の方へ遁れてゆく彼の「コザック」の若い主人公のやうな美しい憧憬も、情感も殘つてゐた。そしてまたこの新らしく開拓された地方の奇怪な熊の話にも、純樸なアイヌのメノコの纖細りにも限りない興趣を誘はれるだけの素地を、私は決して失はなかつたのである。

それがどうしたものか僅か一箇月ばかり經つた後、あの殖民地のやうな美しいアカシアの並樹をもつた札幌の町を離れる頃には、もういつの間にかその新らしい驚奇も、憧憬も悉く跡かたもなく消え失せて自分自身が既に生れおちからの漂泊者ででもあつたやうな寂しい、頼りない氣持になつてゐた。旅宿で逢ふ人も、汽車の中で逢ふ人も、親切な人も、冷淡な人ももう唯通り一遍の逢遇で、意味もなく身邊を流れ過ぎてゆく水のやうに思はれ、自分の身が全く孤獨であることを痛いほど明らかに知るにつけ、もう美しい自然の魅力さへ私の心には何等の印銘をも殘さないやうになつた。そして、この野寄へ來る途すがら、ほそぼそと降りしきる雨に濡れながら、索漠とした石狩川の流れを渡つた夜の、滅入るやうな疲れ果てた氣持は、到底旅愁といふやうな空疎な言葉で云ひ表はすことの出來ない切なさをもつてゐた。一度は後に見捨てて來た都會の華麗な生活に對する思慕の情が、その時、忽然と湧き起つて、暗い河面には珠玉を綴ねたやうな妖艶な燈火の紅影が波紋のやうにありありと漂めいたが、それとともに私は何とも知れぬ不安さへ覺えて、遣り場のない悲しみが潮のやうに胸の底へ波うつて來るのであつた。……

野寄へ落着いてから幾日目かのことであつた。その日もいつものやうに朝からなすこともなく空しい時を過して、人氣のない部屋の隅へ火鉢を抱へながらしよんぼり坐つてゐると、いつのまにかもう寂しい黄昏の色が障子のうへへ一面に匐ひかゝつて來た。

「あゝ、今日ももうこの儘暮れてしまふのか。」と思ふと、私は餘りの所在なさに堪へかねて、小窓の硝子戸を細目にあけて、そこから蒼茫と暮れてゆく四邊の光景を眺めた。

黄褐色に枯れた石狩の原野は際涯もなく小雨に煙つて、みるもの總て生氣を失つた冷たい黄昏の底に、ひろびろと濫れた湖のやうな石狩川の河面がほの白く浮き出してみえた。枯葦のそよぐ蕭條とした岸邊には灰色に建ち腐れた製紙工場や、洪水のために半ば倒壞しかゝつた倉庫などが今にも河底へ滑り落ちさうに平たく建ち續いて、濕つぽい風が聲もなくそのうへに吹き滿ちてゐた。眼を移して町の方を顧みると其處にも灰色の衰頽が力なくたち澱んで、軒並の店看板にも、家々の外壁にも、又は路傍の石崖の斷面にも、すべての繁榮を呪ふ「時」の浸蝕が怖ろしいまで鮮やかに浮きあがつてゐたが、中にも、旅宿のすぐ下を流れてゐる大きな溝渠が、開拓者といふ純潔な理想家の手によつて人工的に井然と掘鑿されたにも拘らず、最早いつしか死相を帶びた蒼黑い水塘に閉ざされて、痩せ細つた水草が底の方から湧きあがつて來る沼氣に誘はれながらぬらぬらと蛆のやうに蠢いてゐる有様は、この町の悲慘な推移を最も

鋭く暗示してゐるのであつた。
　私は身も心も、このもの悲しい色彩のなかへ、引込まれてゆくやうな氣持で、何時までも、何時までも、遠くたちかさなつた町の家並のうへへ眼をさまよはせてゐた。と、深い溝渠の底からも、家々の蔭からも、または往來の途絶えた狹い街路の面からも、いつかしら濃い夜の闇が次第々々に湧きあがつて、その底には、雲氣に慴えたやうな灯の光がぼんやり雨に滲みながら遠く近く瞬きはじめた。私は、その黄昏の死色が頭から足の爪先まで沁み徹つてゆくやうな寂しさに犇々と取圍まれながら身動きもせず茫然としてゐたが、そのうちに、果てしもない空虚のなかへ唯ひとりとり殘されたやうな心細さが容赦もなくじりじりと心の底へ喰入つて來て、しまひには到頭座にゐたゝまれない鬱氣が滲入つて來た。で何と云ふつもりもなく立ち上つて、その儘冷たい糠雨の降り罩めてゐる戸外へぶらりと飛び出してしまつた。
　大通りへ出ると、町の人々はもう越年の準備で忙しかつた。納屋から橇を曳出してきて丸釘をしめなほしたり、冬籠りの間の食用に供する野菜物を圍つたりするので、疲れきつたやうな顔容をしながら靜かに立働いてゐた。

　案内さへ知らぬ暗い巷路を、寒い風に追はれながら右へ左へさまよひ歩いてゐるうちに、私はふと思ひもかけぬ色街らしい一廓の街へ出た。硝子窓のある西洋風の板羽目を用ゐた廢滅しかゝつたやうな建物ばかり建ち並んではゐたが、それでも河の漁期で、人が入込んでゐるだけに何處となく景氣づいて、賑やかな三味線の音や、艶めいた女の笑ひ聲はそこにも濃い酒と、安價な媚びを賣る女のあることを想ひ起させた。と、私の心はもう久しい間さういふものに飢ゑてゐたやうに激しく躍つてきて、火の方へ引寄せられてゆく夏蟲のやうに前後の辨へもなくふらふらとそのなかでも一番見附きのいい醉月亭と云ふ料理店の表階子を登つてしまつた。そして明るい洋燈の下に鮭の刺身や、鯡子の酢あへといつたやうな土地の季節に應じた種々の肴と、熱い湯氣のたつ酒が置きならべられた時には、云ひ知れぬ嬉しさが喉元まで込みあげて來て、貪るやうな手つきで頻りに盃の數を重ねた。
　遮るもののない寛ぎが靜かに胸に溢れてくる頃、私は勸められるまゝに内藝者の美登利といふ妓を招んだ。小樽生れの頰の紅い、氣の輕さうな女だつた。年は十八だと云つてゐたが、その割りには老けてみえる方で、別に取立てていふほど美しくもなければ醜くもなかつた。私はかうした寂しい晩にふさはしい情調の滿足を求める外に、この女をどうしようといふ好奇心もなかつたので、旅宿の廊下で行逢つた人のやうな拘りのない態度であつさり過つてゐたが、そのうちに漸次とまはつて來る酒の醉ひと一緒に河の漁獵の話などをも思はずはずんで、互に少しづつ隔てがとれて來た頃、彼女は急に思ひ出したやうに浮々した調子をかへて、
「ねえ、貴方、少しお願ひがあるんですけど聞いて下すつて。」と、云つて、顏色をよむやうな眼眸をしながら私をみつめた。
「何だい、遊んでゐる姐さんでも招んで呉れつて云ふのかい？」と、私もつい引込まれて眞面になつて訊いた。
「いゝえ、そんなことぢやありません。」暫らくの間躊躇するやうな氣振りをみせてゐたが、やがて思ひきつたやうに、
「あの、誠に申しかねますけど、これから芝居見に連れてつて下さいな。」
「なに、芝居？　此邊のことだから又聞車の浪花節だらう、俺は誰方のお願ひでもあいつばつかしは眞平だね。」

「いゝえ、今度のはさうぢやないんですよ。」と、美登利は眞氣になつて打消しながら、
「今度は中村一座つていふ舊芝居がかゝつてゐるんです。昨夜内の姐さんと一緒に見にいつたんですけど、そりや實によく演りますよ。もう二人してさんざ泣かされちやつて、筋もなにもよく覺えて來なかつた位なんですもの。」
私はさう云はれて初めて思ひ出した。この二三日前から毎日午後になると賑い觸し太鼓の音が雨に紛れながら町から町へ、どろんどろんと靜かに響いてゆくのであつた。平生から旅役者とか、旅藝人とかいふやうな憐れな漂泊者に對して特殊の興味を懷いてゐた私は、舊芝居、中村一座といふ言葉を耳にすると、急に誘はれるやうな懷かしさを覺えて、その儘直ぐに行つてみる氣になつた。で、立ちぎはに、「その一座に誰かお前の惚れた役者でもゐると面白いんだがな。」と、心に思つた儘を揶揄ふやうに云ふと、美登利は、
「ゐないこともないわ。」と、云つて蓮葉に笑ひながらいそいそ身支度をしはじめたが、その眼には包みきれぬ嬉しさが輝いてゐた。そして姐さんも見度がつてゐるからといふので、その店の若い女將も取卷きに加はることになつた。

二

野寄座といふ芝居小屋は、その郭を出端れた處にあつた。濕つぽい潮氣のひそひそと漂ひあがつてくる暗い濠渠を渡ると、僅かばかりの廣場があつて、潮雨に吹曝されたバラックのやうな見すぼらしい小屋の表がかりがすぐその向うに立ち現はれて來た。漆喰塗りの板壁はところどころ創痕のやうに剝げ落ちて、傾きかゝつた破風の下には役者の藝名のしるした繪看板と小さな紅提灯が薄寒さうに懸けつらねられ、色の褪めた幟がその薄闇のなかで雨に濡れながらはたはたと重々しく鳴つてゐた。そして、大人十二錢、小人六錢と拙い勘亭流で書きあらはした黄いろい紙行燈の影から客を呼ぶ木戸番の聲さへ何となくひつそりとしてもの寂しかつた。
私は女將のあとについて木戸を潛つた。
「へえ、お三人さま。」と、下足の老爺が勢よく札を打合はせると、爐傍で股火をしながら居睡りしてゐた表方の男は吃驚したやうに眼を覺まして、きよろきよろ四邊を胸したが、すぐ後に女將と美登利が立つてゐるのをみると、急に間のぬけた愛想笑ひを浮べて丁寧に挨拶をした。そしてアセチリン瓦斯の匂ひの漂つた階段を上つて、私達を二階桟敷へ案内した。
小屋のなかは表がかりの割りに廣かつた。それでも、たかだか四百の入りが關の山であらう。じめじめするやうな垢染みた疊を敷きつめた土間には、隅の方に小さな花道がついてゐるきりで、桝もなにもなければ、窓もなかつた。低い天井には、眞黒に煤けた廣告幕のやうなものが幾枚となく張り連ねてあつて、そのうへには雨漏りの痕がぼやけたやうな雲形を一面に描いてゐた。舞臺寄りに、僅か四つのアセチリン燈が點つてゐるきりなので、場内の隅々にはいぢけたやうな薄闇が漂つて、饐え腐ちてゆく果敢ない燻滅の香がそのなかにおつとりと澱んでゐるやうに思はれ、殊にその晩は入りが漸う四分ぐらゐの景氣だつたので、がらんとした寂しさはまたひとしほだつた。
その晩の出しものは『中將姫』に『野晒悟助』だつた。もう一番目は既に終つて、丁度中入りの幕間であつたが、私達が席につくとやがて色の褪めた繼ぎはぎだらけの引幕を掲げて、直垂のやうな淺黄の着附けの上へ襟い紋付の羽織をひつかけた一人の役者が今鬘をとつたばかりといふやうな顔容をしながらぬつと出て來た。
「東西、東西。」と彼は聲高に云ひながら舞臺の

端へ平蜘蛛のやうに平伏して、新潟訛りのある鼻聲でながながと口上を述べはじめた。

「一演藝中には御座りますれど、一寸御免な蒙りまして明晩の外題を御披露致します。またしても扮裝を致した儘でこれへ出まして、さぞかしお見苦しうは御座いませうが、今晩も最早時間が迫つて居りますので、お湯に入つてゐる暇がありません。……えゝ、御當所開演中は御贔屓をもちまして每夜々々賑々しく御賢覽下され、樂屋一同大喜びで御座います。さて、又候明晩取り仕組んで御一覽に供しまする狂言の儀は、一番目狂言と致しまして「苅萱道心筑紫家苞」二番目「野狐三次」都合あはせて八幕、幕あひなしの大勉強をもつて御覽に入れまする間、何卒明晩もお誘ひあはされまして御來場のほど偏に願ひ上げ奉ります。……扨て茲もと取り仕組んで御一覽に供しまするは、お馴染の「野晒悟助」、先づは愈々、住吉社内の場より始めますれば、幕が開きましたら隅から隅まで御神妙に御賢覽下さる可し。先づはそのため口上東西。」

緣日商人のやうな切り口上で述べたてながら、態と首を左右に振り動かして、白粉を塗つた美しくもない顏を觀客の前へ見て吳れがしにひけらかす容子が蟲唾のはしるほど厭味だつた。東京の華やかな劇場の空氣に馴らされた私は、擽られるやうな可笑しさを耐へながら、

「おい、美登利、お前の惚れてゐるのはあの役者だらう。」と、揶揄ふと、さすがに彼女も噴笑して、

「厭だわ、あんな厭味な奴ッ。」と、云ひ放つて私の脾を輕くうつた。

「何を云つてるのさ。お前さんにや丁度いゝ似合ひ類ぢやないか。」と、女將も相槌を打つて面白さうに笑つた。

幕が開いた。住吉神社の松原はまるで櫟林のやうに暗かつた。海の遠見には唯淺黃の幕を垂らしただけで、役者の頭の閊へさうな低い鳥居の兩袖には玉垣もなければ、鋪石もなかつた。そして妙な處に書割があつたり、石燈籠があつたり、有り合はせの道具を種々にはぎあはせたものと見えて、場面には辻褄の合はぬ處が多かつた。それに舞臺へ出て來る提婆組の惡侍どもや町娘の小田井までが兎もすると役々の氣をぬいて、女將や美登利の方へ厭な眼遣ひをする容子が可笑しくて、私はしみじみ芝居をみる氣にもなれず、丁度その時隣月亭から婢が運んで來てくれた酒肴を開きながら、手酌でちびりちびり酒ばかり飲んでゐた。

そのうちに、ふとした機會で私の眼は思はず土器賣の娘に扮した若い役者の方へ惹かれていつた。年はまだ十八九であらう、ほつそりした眼の大きい、何處か愁ひを含んだやうな美しい顏容で、細く慄へる柔やかな聲までそつくり女だつた。私は輕い驚きに打たれて、美登利の肩をそつと突きながら、

「ありや何んて云ふ役者だい。莫迦に綺麗ぢやないか。」と、小聲で訊くと、彼女は振顧りもせず、

「田之助つて云ふんです。」と、うはの空で答へて釘づけにされたやうに一心にその役者の橫顏を凝視めてゐた。

私の心はその美しい田之助の顏からいつの間にか自然と演技のなかへ吸ひ込まれて行つた。と、土器賣の詑助に扮した扇昇といふ役者の藝がその時になつて初めて眼について來た。娘に對する濃やかな情愛や、場當りの輕い諧謔のうちに、旅藝人にはまるで豫期してゐなかつたやうな老熟さが現はれてゐるのをみると、私の心からは今までの不愉快な矛盾が悉く消え去つて、熟しきつたやうな興味が漸次と湧きあがつて來た。そして幕が下りてから後、女將に、

「東京の芝居で、千両役者ばかり見つけて被在つた眼にや、さぞ可笑しう御座いませうねえ。」と、云はれた時には眞實私はもう笑へなくなつてしまつた。

「いや、どうして中々うまいよ。」と、私は自ら確めるやうに強い聲で云つて、

「扇昇といふ役者なんざ東京へ出したつて決して恥かしかないね。」

「まあ、可成りにや演りますけど、なにしろ田舍のことですから。……」

「それに、今娘になつた女形なんざ男にや惜しい位の容貌ぢやないか。」

「え、全くですね。私もあんな可愛い役者は久し振りで見ますよ。ねえ、美登利さん。お座敷へ招んだらさぞだらうね。」と、若い女將は生娘の昔に歸つたやうな浮々した聲で笑ひながら美登利の袖を強くひいた。

美登利は意味の分らぬ薄笑ひを浮べながら眼で答へて、思ひ出したやうに、

「はい、お酌。」と、冷たい酒を私の盃へ注いだが、暫らくするとまた何時の間にか舞臺の方へ顔を振り向けて、風を孕んでふはりと膨れあがつてゐる幕の面をうつとり凝視めてゐた。

幕數が進むにつれて私は益々深く此の憐れな一座の演ずる不具な技藝に引込まれていつた。一座の役者達の境遇が、孰れも一種の永遠の旅人であることが、私の心に強い強い懐かしみを喚び起して、彼等の過去の生涯に對する空想や、萍のやうな現在の生活に對するさまざまの情感が漸次と細く縺れてゆくうちに、到頭或不思議な感激が私の胸一杯に漲つて來た。私は突如我を忘れたやうに財布の中から三圓ばかりの紙幣を取り出して、それをそつと女將の手へ握らせながら、

「お前の家の名にして、これで纏頭をつけておやり。」と、小聲で囁いた。

「まあ。」と、女將はさも吃驚したやうに私の顔をじろじろ眺めてゐたが、やがて、

「こんなに澤山お遣りなさらなくても宜しう御座んすよ。此邊ぢや五十錢が定例なんですから。」

「まあいゝから、それだけ通してお呉れ。」と云つて私はその儘顔を背けてしまつた。

女將はそのうへ抗ひも出來ず、笑ひながら立ち上つて廊下の方へ出て行つた。するとやがてさつきの表方の男が揚幕のところからそつと花道へ出て來て、私達の坐つてゐる棧敷の横板へ脊のびをしながら、金三十圓、中村一座へ、醉月亭御客樣と筆太に書いた疊一枚ぐらゐな大きさのビラを貼りつけた。多數の觀客は一齊に舞臺から眼を移して私達の方を不思議さうに眺めた。しまひには、仁王と刃を合はせてゐる悟助までが、時々そつとそのビラの面へ流眄をはしらせた。

幕がおりると間もなく後の板戸がすうつと開いて、そこから二人の老爺が顔を出した。とみると、一人は舞臺顔とさして變らぬ扇昇で、もう一人は一座の紋のついた印半纏を着た座頭だつた。

「どうも只今は有難う御座いました。」と、二人はその儘冷たい板敷のうへへ手をついて、卑下した言葉で纏頭の禮を述べた。

「いや、どうも僅かなことで。まあ此方へ入つて一杯お上り。」と、私は妙に嬉しくなつて盃をさしたが、座頭は舞臺の都合でゆつくりしてゐられぬと云つて、幾度か禮を繰返しながら歸つて行つた。扇昇の方だけが、私達と一緒にあとまで棧敷に殘つた。

彼はもう五十の坂を餘程越してゐるのであらう。世路の艱難が刻みつけた深い皺は額にも頬にも幾條となく暗く陰影を描いて、何處となく生に疲れたやうな弱々しい表情が動いてゐた

が、それでも輕く微笑む度に、その圓らな剽輕な眼と、色の褪めた脣の邊には、惡氣のない心をその儘證據だてるやうな何とも云へぬ懷かしみが濃く浮きあがつて來た。そして洗ひ晒しの盲縞の布子に、綠の擂り切れた角帯をしめて、少し前屈みに坐つてゐる彼の姿をみると、私は胸をそゝられるやうな感激にうたれて、頻りに彼に盃をさした。

「いや、どうも有難う御座います。手前は至つてこの御酒の方は好物でな。」と、彼はさも嬉しさうに脣をひきゆがめながら、殘り少なになつた酒を惜しむやうに味つてゐたが、やがて私の顏をしげしげうち眺めて、

「失禮な事を伺ふやうで御座んすが、貴方樣は此方のお方で？」と、怪しむやうに訊いた。

「いや私は東京からやつて來たものさ。」

「さうで御座いませうな。どうもお見懸け申すところ彼地の方としきや思はれませんもの。」と、彼は大きく合點いて、又盃を脣へもつていきながら、人懷こい調子で、

「から申すとお恥かしう御座いますが、實は私も生れは東京で御座んしてな。……」

「東京？ へえ、そりや懷かしいねえ。」思ひもかけぬその言葉にひどく驚かされて、私は思はず聲を高めながら云ひ放つたが、丁度その時は野晒の後日譚めいた次の幕の愁嘆場があいてゐたので、しんとした土間からは白い顏が幾つとなく私の方を見上げた。連れの女達も涙ぐんだ顏をそつと振向けて薄く笑つたが、私はそんなことは氣にもかけず熱心に「さうしてもう久しく旅へ出てゐるのかね。」

「へえ、もう何で御座います、彼此二十年にもなりますよ。」と、扇昇は寂しく笑ひながら噎れた聲で徐かに答へた。

「東京は何處だね？」

「生れは淺草で御座いますけど、彼地でも矢張り子供の時分からこの稼業をして居りましたもんですから。……」

「ほう、何處へ勤めてゐたね？」と、私は益々興味を惹かれて、貪るやうに彼の顏を見詰めながら訊いた。

「今は何うなつて居りますか、もう長いことかうして他處の土地へ出て居りますんで薩張り分りませんが、その時分にや吾妻座といふのが御座んしてな。その座へあれでも五年越し缺かさず出て居りましたよ。」と、彼は深く息をついて、

「自體、私はもと橘屋でしてな。三八さんや、橘藏さんなぞとは隨分久しいこと交際つて居りましたが。……」

と、何か長い話でもしさうにしたが、その時、板戸の隙間から勞働者のやうな顏容をした一人の下廻りが首をだして、小聲で扇昇の耳へ何事か囁いた。と、彼は急に浮かぬ顏になつて思ひ切り惡さうにもぢもぢしてゐたが、やがて舞臺でするやうにとんと疊のうへへ片手をついて、

「では、樂屋の方が忙しいさうで御座いますから、私はこれで失禮を致します。どうもつい長座を致して。」と、云つて徐かに立上つた。私は何だか一旦貰つたものを奪ひ返されるやうな離れ難い氣がして、幾度か止めてはみたが、使に立つた下廻りがせきたてるので詮方なく別れの言葉を述べた。

「暇があつたら私の宿へ遊びにおいで。毎日寂しくつて困つてゐるんだから。」と、私が感情の籠つた聲で云ふと、彼は板戸の外へ出ながら名殘り惜しさうに振顧つて、

「有難う御座います。是非彼地のお話を伺ひにあがります。貴方樣もお暇で御座いましたら、穢い處で御座んすけど、樂屋へもお入りなすつて下さいまし。では姐さん方、どうも種々御馳

走様になりました。」と、低く頭をさげて、その儘樂屋の方へ歸つて行つた。

私は、その肩寒げな寂しい後姿をみると急に胸が込みあげて來て、板戸の閉ざされたあとまでもぢつとそつちを凝視めてゐた。二十年も昔に都會を逐はれた憐れな藝人の成れの果。その長い長い漂泊の生涯。それを思ふと、酒の醉ひに彩られた私の心には慘ましい同情の念が息塞まるやうに波うつて來て、冷やかな事實の裏に鉛の如く膠着してゐる暗い人生の姿がまざまざと見透かされるやうな突詰めた氣持がして來た。

打出しの太鼓が鳴ると私は連れの女達にせきたてられて漸う立上つた。漸次と客の減つてゆく薄暗い土間には、すぐそのあとから陰影のやうな寂寥が匐ひ寄つて來て、幕の裏で道具をかたづける物音だけが冷たく響き渡つた。狹い階段もうはの空で下りて木戸へ出ると、表方の溜りの薄闇がりには座頭と太夫元が待受けてゐて、

「又明晩もおいでを。」と、いひながら賑やかに私達を送り出した。その聲が私の胸には住み馴れた世界から逐ひたてられるやうに慘たらしく響いた。

芝居を出ると、冷たい風の吹きしきつてゐる廣場の角の處に迎ひの婢が醉月とかいた提灯をみせて待つてゐた。私はたつてと云つて勸められるのを斷つて、その儘女達と別れて、唯ひとり寢靜まつた眞暗な街路をとぼとぼと旅宿の方へ歸つて行つた。そして横しぶきに吹きつける冷たい雨の脚に追はれながら憐れな扇昇や田之助のうへを夢のやうに思ひ續けた。

三

その翌晩も私は魂を引寄せられるやうな氣持で、降りしきる霙のなかを野寄座へ行つた。例の小橋の上まで來懸ると、その晩はどうしたものか、軒へかけた懸行燈も、紅提灯もすつかり消えて四邊はまるで空家のやうにしんと靜まり返つてゐた。近寄つてみると、木戸の格子戸も堅く閉ざされて、裸の幟棹だけが四本も五本も闇のなかへぬつと突立つてゐるばかりであつた。私はその樣をみると胸を押縮められるやうな失望を覺えて、暫らくの間その儘ぼんやり座のまへへ立ち竦んで眞暗な表がかりをうち眺めてゐた。漂泊常ならぬ旅藝人の事ゆゑ、入りが思はしくないのに見切りをつけて、急にまた先の興行地へ移つて行つたのではあるまいかと思ふと、しまひには淡い悲しみさへ忰々と湧き起つて、そのまゝ宿へ歸る氣にもなれず、足は自ら醉月亭の方へ向いたが、小半町も來た頃、私はふと樂屋へ來いと云つた扇昇の言葉を思ひ出して、若しやと思ふ氣に先立たれながらまた急に後戻りをした。

眞暗な座の周圍を幾度か行きつ戻りつした末、私はやつと樂屋口へ通ふ狹い路次を探し當てた。恐る恐るそこから木戸をあけて中へ入つてゆくと、丁度舞臺裏と思ふ邊に荒れはてた小庭のやうな十坪ばかりの空地があつて、張りもの〻壞れたのや、空俵や、薪などが堆く積んであつた。樂屋の小窓からは黄いろい灯の光がぼんやり末廣がりに雨のなかへ滲みだして、呟くやうな人の話聲がひそひそと洩れて來た。私はその下へ歩み寄つて案内をこうたが、降る雨の音に紛れて私の聲は容易になかへ通じなかつた。幾度か試みてゐるうちにやつとすぐ上の硝子戸が開いて、そこから印半纏を着た道具方らしい若い男がぬつと顏を出して、迂散臭さうに私の顏をみつめながら、

「何だな。」と、突慳貪に訊ねた。

私は態と言葉を卑くして扇昇に逢ひに來たことを告げた。そして案内を頼むとその男は煩さ

さらにぶつぶつ口小言を云ひながらそのまゝ顔を引込めたが、それと同時に樂屋のなかでは、「誰れだ。誰れだ。」と、三四人の聲が聞えていろんな顔がかはるがはる窓口へ現はれた。私は態と傘で顏を隱した。

少時するとあらぬ方でがらりと板戸を開ける音がして、さつと流れた燈の光のなかに半身外へ出した扇昇の姿がみえた。

「誰れですい？」と、彼は眉を顰めながら私の方をみてゐたが、私だといふことが分ると急に聲の調子をかへて、

「おや、貴方樣でしたか。こりやどうも失禮を。さあ、どうぞ穢いとこで御座んすけどお入んなすつて下さいまし。」と、いそいそ戸を開け擴げた。

私は俄に溢れて來る懷かしさを抑へて、

「實は今夜も見に來たんだけど。……」と暗い足許を探りながら其方へ歩み寄ると、彼は額に人の好ささうな太い皺をみせて、

「そりやお氣の毒さまで。何分入りがありませんので到頭休んでしまひましたが、まあずつとお上んなすつて下さいまし。おい、野郎共。そのお通り路を少しあけてくんな。」と、彼は忙しさうに先へ立つて私を案内した。

入口の土間の隣りは道具方や、下廻り達の溜りになつてゐると見えて、賤しい顔容をした男の顔が薄暗い洋燈の光のなかに幾つも並んでゐた。私は怪訝な眼眸をして見返る彼等の間を通りぬけて、冷たい板敷の上へ出たが、わたり七間にも足りない狹い舞臺はすつかり道具がかたづけてしまつてあるのでがらんとしてもの寂しく、樂屋の方から流れてくる靄のやうな薄い光が簀の子の上までぼんやり匂ひあがつて、人氣のない觀客席の暗闇からは濕つぽい匂ひのする風がすうつと包むやうに冷たく吹いて來た。私は導かれるまゝに、扇昇の後についてぎしぎし軋む階子段を上つた。

二階の樂屋は二十五六疊も敷かる細長い大部屋だつた。天井には煤けた梁が肋骨のやうに現はれて、乘込みの時に使ふ各自の藝名を記した繪ビラを結んだ造花の櫻が一列に插しつらねてあつた。反古で張つた板壁の際には衣裳の入つてゐるらしい三升や桔梗の紋どころの剥げかゝつた古葛籠が幾つも積み重ねてあつて、その側の棚にはいろいろな男や女の鬘が曝首のやうに置き並べてあつた。そしてまた三つの窓際にはそれぞれ小棚が釣つてあつて、そのうへには白粉入の竹筒や、水銀の斑らに剥げ落ちた凹凸な鏡や、その他の、細々した化粧道具が亂雜に取散らかしてあつた。二箇所に釣るした、暗い釣洋燈の光は、それ等總ての慘ましい物象のうへに深い、深い悲しみの陰影を隈どつてゐた。

部屋の眞中に据ゑた大火鉢の周圍には、田之助や昨夜口上を云つた幸吉をはじめ一座の役者が八九人圓座になつて茶話をしてゐたが、私が入つてゆくのをみるとぴたりと話をやめて、急に座を開いた。孰れも好奇心に充ちた眼眸で私の顔を偸み視ながら默つて挨拶をした。

扇昇は座に就くと、大藥罐から濃い番茶を湯呑に注いで薦めながら改まつて昨夜の禮を云つた。そして長い煙管で煙を吐きながら、

「寒いのによくお出懸けでしたなあ。」と云つて嬉しさうに笑つた。

私は口を開かうにも何しろ見知らぬ男ばかりの中なので妙にとり附き場がなくて困つた。それに役者らしくない二三の男の容子をみると博徒の宿へでも連れて來られたやうな淡い恐れさへ手傳つて、猶更舌の力を奪はれてしまつた。

扇昇は頻りに取做す氣で、

「だが妙な御縁で、珍らしいお方にお眼にかゝれたもんですよ。私はもう、東京のお方と何

ふと心からお懷かしう御座んしてな。」と、しみじみ懷かしさうに眼を細めながら云つて、「此地には大分長く御逗留で？」

「いゝえ、まだ一週間ばかりですよ。」

「何か御商用ででも？」

「なあに、唯ぶらぶら見物旁々旅をしてゐるんでさあ。」

「そりや何より結構で御座いますなあ。」と、扇昇はつとめて一座の話を促すやうに四邊を見返りながら笑つたが、併しその甲斐もなく却つて重苦しい沈默が火鉢の周圍にたち歸つてきた。

それとともに、私の心からはいつかしら初めて小屋へ入つて來た時の疼くやうな歡びが漸次と消え失せて、緊張してゐた情趣はみるみる厭はしい破綻を示してきた。そして樂屋の隅々まで遍滿してゐる詩のやうな美しい廢滅の匂ひが、今にも醜いものの爲めに裏切られてしまひさうな恐れが胸一杯に込みあげて來て、しまひには到頭我慢がしきれなくなつた。で、私は思ひ切つて扇昇を隅の方へ呼んで、何處か氣のおけない家へ行つて一杯飮みながら面白い昔話でも聞かうと云ひ出すと、彼は急に相好を崩して、

「有難う御座いますが、それぢや餘りお氣の毒ですから……」と、心にはない遠慮をした。

「いゝさ。暇なら是非一緒につきあつておくれ。」

「さうで御座んすか。ぢやまあお言葉に甘えまして。」と、云つて暫らくの間、何か思惑ありげにもぢもぢしてゐたが、やがて云ひ難さうに、

「實は誠に申しかねますが少々お願ひがあるんで。」と、口のなかで呟きながら一座の方を顧みて、田之助をそつと眼で招んだ。

田之助は怪訝な顏容をしながら立つて來た。と、扇昇は笑ひながらその耳へ口を寄せて、まるで我子にでも對するやうな優しい聲で、

「今旦那がな、何處かへ連れてつて一杯飮ましてやると仰有るから、お前もお願ひ申して一緒にお伴をさせて戴きなよ。」

それを聞くと田之助は女のやうな柔らかい頰に包みきれぬ嬉しさを波だたせながら默つて頭をさげた。固よりその願ひを待つ迄もなく、此方から頼んで無理にも來て貰ひ度いくらゐだつたので、私は幾度か大きく合點いて、その儘階子段を下りた。そして薄暗い張物の陰に立つて待つてゐると、二階では二人が皆に何か云はれてゐる聲が聞えてきた。

「おい、田之公。お前は何處へ行くんだい？」

と、頓狂な聲がしたが、それに答へる田之助の返事は聞きとれなかつた。と、今度は幸吉の意地張つた聲が嫉ましさうに、

「旨え穴に喰ひ付きあがつたなあ。一體ありや何者でえ。……ふん、錢のある奴にや兎角莫迦が多いや。」

「失禮なことを云ふもんぢやねえ。東京の方はみんな太ツ腹だ。手前みたやうに根性がぎすぎすしちやゐねえんだ。」と、扇昇の太い聲が聞えた。私は聞くに耐へないやうな不愉快な氣になつて、そつと足音のしないやうに舞臺から樂屋口の方へぬけ出した。と、やがて扇昇は鯉口のやうな厚いアッシを引被けて、その後から田之助が銘仙か何かの座敷着に着換へて、帶を結びながらいそいそ下りて來た。

「どうもお待遠樣でした。」と、扇昇は笑ひながら戸を開けて、暗い路次を先へ立つた。

戸外へ出ると、私は今迄の不快な氣分がさらりと消え失せて、再び新らしく熟しきつたやうな情調になつた。遠い北の國の果てで、見も知らぬ旅藝人と夜の雨に濡れながら、燈の疎らな寂しい街を歩いてゐるのが、何か深い因緣ごとのやうにも思はれ、懷かしい東京の空を思ひ起しながらも私の胸には口をきくさへ惜しい

やうな嬉しさが一杯に漲つてきた。

「あの幸吉つてのは一座に長くゐる男なのかい？」と、私は長い沈默の後に、ふと思ひ出してつかぬことを訊いた。

「なあに、渡り者でさあ。」と、扇昇は吐き出すやうに云ひ放つたが、そのあとに續いて田之助は、

「性が惡くてほんとに困るんです。」と、女のやうな約ましやかな聲で添け加へた。

ふと氣づくと、私達はもういつの間にか醉月亭の前まで來かゝつてゐた。今夜は珍らしく客がないと見えて、明るい二階座敷もひつそりとしてゐる。私が先にたつてつツと店口へ上ると、帳場に坐つて子供をあやしてゐた女將は吃驚したやうに飛んで出て來て、口早に昨夜の禮を云ひながら、

「おや、まあ、今夜は面白いお連れさんですね。」と、云つて蓮葉な聲を出して笑つた。

「驚いたらう。もうすつかり口說き落して、いい仲になつちやつたんだよ。」と、私もつい引込まれて笑談を云ふと、後では扇昇が聲をあげて笑つた。そして彼は卑下した言葉で田之助を女將に紹介はせながら、

「どうぞこれから御贔屓に願ひます。」と、丁寧に頭をさげた。

私達はすぐ奧まつた二階座敷へ案內された。そして一つの餉臺を三方から圍んでゆつくり坐つた。見つくろつた肴も運つて、熱い酒が各自の盃に注がれると、扇昇と私との話は期せずして東京の芝居談に落ちて行つた。扇昇は貪るやうな調子で、諸方の座の運命や、役者達の浮沈を細々と聞糺したが、併し二人の間には餘りに長い歲月の逕庭があつた爲め、同じ事實を話し合つてゐながら互に意味の通じないやうな事が多かつた。殊に私の語る現在の役者の名や、狂言の名は彼にとつて最も解し難いものの一つで、それが話題に上る度に、彼は幾度か「先代」といふ言葉を繰返さなければならなかつた。

そのうちに、彼はまだ若かつた時代の思ひ出の方へ漸次と話を移して行つた。その頃繁榮を極めてゐた芝居町の光景や、當り狂言の荒筋や、今はもう殆んど世人の記憶から拭ひ去られたやうな多くの名優の逸話などがそれからそれへ絕え間なく續いた。私は過ぎ去つた世界の美しい繪卷を繰展げてゆくやうな面白さに引入れられてうつとり耳を傾けたが、そのうちに深い皺の刻まれた扇昇の頰には酒の醉ひとともに異樣な若々しさが自然と輝いて來て、身振り手ぶりをする度にぢつと私の顏を瞻める彼の瞳の底には限りない歡びが燃え上つて來た。そして戒を破つた僧の怨念で生きながら手足を地獄の毒氣に蝕まれた昔の田之助の上へ話が及ぶと、その妖艷な「時代」の亡靈が巧みに彼の脣から織り出されて、私は全く彼の話上手に魅せられてしまつた。

その時、ひそやかな足音がすると廊下の面を滑つて來た。と、みると、二人の役者達にはみえない障子の陰に美登利の白い顏がふうはり浮び出て、暫らくの間そこから私の顏をぢつと瞻めてゐたが、何と思つたかにつと艷やかに笑つて、輕く體を揉みながら兩手を犇と組み合はせて私を拜んだ。私は物語りの腰を折る心許なさに、たゞ默つてその容子を見てゐたが、到頭我慢しきれなくなつて噴笑しながら、

「何をしてゐるんだな。入つたらいゝぢやないか。」と、呼んだ。

その聲に應じて彼女はやつと明るい座敷のなかへ入つて來たが、いつもより厚く化粧したその頰には上氣したやうな血の色がぽうつと燃えてゐた。彼女は私の傍へきて座をしめると、妙に取澄ました顏容をして、

「ほんとに酷いわねえ。」と、意味の分らぬことを云ひながら突然有り合ふ銚子を取り上げたが、その手は可笑しいほどぶるぶる慄へてゐた。

私はそれをみると可憐な女の心持がすつかり讀めて、再び擽られるやうな氣持になりながら、

「おい、美登利。お前の御贔屓はこの田之助さんだつたつけね。」と、空惚けて正面から揶揄ふと、彼女は俄にさつと耳の附根から眞紅になつて、

「知りませんよ、そんなこと。」と、云つて、私の膝をちかッと抓りあげた。

美登利のために話の繼穗を奪はれてぼんやりしてゐた扇昇は、その容子をみると直ぐに氣の好い笑ひを洩らして、

「いやはや、この田之さんにも困りもんで御座いますよ。方々で惡い罪を作りましてな。はゝはゝゝゝ。今にあの手足へもきつと怨靈が憑きませうよ。」さう云ふ聲はまるで祖父が孫自慢をしてゐるやうだつた。そして笑談らしく眞顔になりながら、「ですが、全く情事は若いうちの事ですな。男盛りも二度とないつてことを云ひますが、全く白髪が生えちや意氣地がありませんや。」

「だけど、二十年もさうして旅をしてゐる間にや、隨分面白いこともあつたらうねえ。」と、私は又話頭を扇昇の方へ移しながらしんみりした調子で云つた。

「そりやないぢや御座んせんけど、今から考へてみりや皆夢でさあ。はゝゝゝ。」と、深く息をひくやうに笑つたが、やがて又徐かな調子になつて、「私はいつも此奴に云つて聞かせるんですが、修業盛りにやまつたく女は絶ちものでさあ。私どものやうな細い稼業をしてゐるものは、ちよいとした一時の迷ひで出世の梯子を跨ぎそこなつたら、もう一生浮ばれやしませんからなあ。」

「さうだらうともさ。併し田之助さんのやうに餘り綺麗すぎると、ついこんなのが引懸るんだねえ。はゝゝゝ。」

と、私は、時々田之助の方へ燃えるやうな流眄を送りながらうつとりしてゐる美登利の肩を叩きながら笑談のやうに云つて、「お前も惚れるんなら先の修業の邪魔にならないやうにするがいゝぜ。」と、高く笑つた。

酒の弱い彼女はもう度胸が出來たと見えて間の惡い顏もしずに、浮々した聲で、

「大丈夫ですよ。私の方でいくら惚れたつて、先樣で相手にして下さらないから。」

それを聞くと、扇昇は急に氣が變つたやうに噪ぎ出して、

「ふゝ、味を仰有るぜ。」と、頓狂な聲で叫びながら、舞臺でする『茶屋場』の伴内のやうに平手で頤をついと上へ押しあげて、態と猿のやうな滑稽けた顏容をしながら、

「私がもう十年若いてえと、お相手になつて鞘當の一幕も演じるんだが、惜しいことにや年を老りましたよ。はゝゝゝ。だが、今だつてなあに相手次第に依つちやまだまだ、昔からこの役者つてえ商賣にや思惑違えの御得がありましてね。こんな顏だつて、舞臺で精々塗り立てた處を御覽に入れりや、滿更でも御座んすまい。」

「ほゝゝゝ。厭だわねえ。」と、女も、田之助もその容子をみると腹を抱へた。

そこへ階下から餘りお賑やかだからと云つて、女將まで笑ひながら上つて來た。扇昇はまたそれに機を得て、一時に醉ひが發したやうに浮かれ出した。側で見てゐると可笑しい程擧動に油がのつて、輕い地口を云つたり、多愛もない笑談を云つたり、ひとりで騷いでゐたが、そのうちに感興が張ち切れさうに熟して來たと

みえて、到頭、さびた中音で語呂のいゝ流行唄をうたひはじめた。そしてそれにも飽きてくると、今度はついと立上つて、勿體らしく衣紋をつくろひながら、

「近頃は地がないんで、舞臺ぢやさつぱり踊りませんが。……」と、云つて、美登利の絃をかりてをどりを踊りだした。

「紀伊の國」や、「喜撰」をやつてゐるうちはよかつたが、美登利の知らない古い手になると、彼は笑ひながら、

「えゝ、面倒臭え、口三味線で踊つて退けうわい。」と、聲色まじりに云ひ放つて、忙しげに口で絃の音を眞似ながら頻りに踊つた。體が固くなつたせゐか、身ぶり手振りに折々調子のはづれた穴はあいて來るが、それでも流石は昔みつちり仕込んだ藝だけに、決して醜くはなかつた。そして一生懸命に踊りぬいてゐるうちに、漸次と息づかひがせはしくなつて來て、彼の額には玉のやうな脂汗が自づと滲み出て來たが、やがて苦しげな咳嗽をたて續けにせき込んだかと思ふと、急に眩暈でもして來たのか、疊の上へぐたりと倒れてしまつた。

「どうしたい。」と、私が思はず聲をかけると、彼は顔を顰めながら力なく笑つて、

「愚痴を云ふんぢや御座んせんが、全く年にや勝てませんなあ。」と、悲しげに呟いて漸う起上つて座になほつた。私はその悴けたやうな窶えた顔をみると過ぎ去つた憂い辛い苦勞がその儘その面に凝結して來たやうに思はれて、思はず眼を逸らした。私は、亞鉛葺の屋根を打つ雨の音にぢつと聞き入つてゐると、いつかしらこの年寄つた藝人の悲慘な生涯が暗い陰影のやうになつて私の眼の前にふらふらと搖曳して來たが、それとともに私はその行詰めたやうな深い悲しみを心ゆくまで味つてみたい氣になつて、噪いでゐる女達や田之助を外にして、新らしい盃を扇昇へさしながら、

「一體、お前さんはどうして旅へなんぞ出ることになつたんだね。」と、感情の溢れた聲で訊いた。

扇昇はそれを聞くと、暫らくの間まじまじ私の顔をみつめてゐたが、やがて苦しげに笑つて、

「まあ、それも、かう云ふと可笑しう御座いますが、つまり女故ですな。それをお話しすりや隨分長いことになりますが。……」と、彼は酒で脣を濕しながら、諄々と身の上話をしはじめた。初めは促されてやつと一句二句づつ途絶れながら云つてゐたのが、暫らくすると漸次興にのつて來て自分から身を入れてしみじみ話しだした。

彼をかうした憐れな旅役者の境涯へ追ひ落したのは、今からはもう二十餘年も昔吉原の京町で可成りの全盛を誇つてゐた遊女だつた。お互に惚れあつて、夫婦約束の堅い誓紙までとり交した。そしてもうあと半年で年季もあけると云ふ間際になつてその女はその頃流行つた虎列剌の爲めに扇昇を跡に殘して死んでしまつた。彼はその女のことについて餘り多くを語らなかつたが、その時分は彼もまだ額に皺のない若い役者であつたといふ事實だけで、私はこの相思の二人の間に纏綿してゐた情緒と、それが女の死後彼の胸にどれほど慘ましい創痕を殘したかと云ふことを十分想像することが出來た。その戀人の死は、彼にとつて耐へ難い損害ではあつたが、それよりも猶一層彼を苦しめたのは、それ迄につくつた諸方の不義理であつた。その爲めに彼はその頃淺草の三筋町で清元の師匠をしてゐたたつた一人の母親まで喪つて、到頭憐れな流浪の身となつてしまつた。

……その時分にやまだ座の方でも相中どころでしたから、身上と云つたつて別に定つたもの

があるぢやなし、年が年中まあ貧乏のし通しだつたんです。ですから一旦捨鉢になつたとなると、肩身の狹え土地なんぞにや微塵も未練は殘りや致しませんや。錢にさへなりや何處へでも行けつてんで、丁度あれは憲法發布の時でしたよ。十人ばかりの見ず知らずの一座で千葉へ買はれて行つたんです。それがまあこんな旅役者風情に身を落すはじまりで、それからずつと房州路へ廻りましたが、その時分にや何を云つてもまだ年は若いし、女は出來る、金は出來る、全く旅つてものはこんな面白いものかと思ひましてね。先のことなんかまるで考へもしずにぐるぐる方々を廻り歩いてゐるうちに、到頭何時の間にかほんたうの旅役者になつてしまひました。」と、彼は寂しく笑ひながら、又盃をとりあげた。そして冷たくなつた酒を口に含んだまま、ぢつと一處に眼を据ゑてゐたが、やがて嗄れた聲で痰をきりながら、

「その間にや幾度かもう一度東京へ歸つて見度いとも思はないぢやありませんでしたけど、その時分にやもう師匠も亡くなつてしまふ、他に賴りにする人はなし自分も結句かうして旅へ出てゐる方が氣樂のやうな氣もするんで、到頭この年になるまでこんなことをして暮してしまひましたよ。……何しろあの中村一座へ入つてからだつて、もう十年近くにもなりますんですからなあ。」

「さうかねえ。」と、私は淚の滲むやうな悲しい心地に浸りながら、「今ぢやもう少しも東京へ歸つてみようと云ふ氣はないかね？」

「いゝえ、もうどう致して。私のやうなものが今更歸つてみましたところで仕樣が御座んせんや。身寄のものも生きてるか、死んでるかそれさへ分りませんし、たかだか飢ゑて死ぬ位が落ちかも知れません。はゝゝ。まあかうして旅を歩いて居りますうちに、せめて內地で骨になれりやそれでもう本望で御座いますよ。」と、彼は汚れた前齒をみせて態と聲高に笑つた。

私はそれを聞くと眼の前が急に暗くなつてゆくやうな氣がして、心の底では人知れず歔欷した。この一篇の哀史を身に纏つた憐れな藝人に對する同情の念は、その瞬時から不思議な執着に變つて、私の心に深い深い創痕を印した。

そして到頭その晚は二人を無理に引留めて、一緒にその料理店へ泊つた。私は女將や美登利が餘りだと云つて留めるのも聞かず、扇昇と臥床を並べて寢ながらまた彼の色褪せた脣から起伏の多い生涯の追憶を貪つた。秋田で機屋の下男にまで成り下つた話や、函館で小料理屋の入夫になつた話や、さうした可笑しいやうな悲しいやうな閱歷を細々と物語つてゐるうちに、彼は宵からの酒疲れが出たと見え、いつの間にかすやすやと深い睡眠に落ちてしまつた。苦もなげな寢息は、滅入るやうなひそやかな雨滴の音に紛れて、暗く息づく行燈の火影は彼の横顏を木彫りの面のやうにぼんやり浮き出させたが、私はそれを瞶めてゐるうちに譯もない悲しさが犇々と胸に込み上げて來て、到頭曉方まで、さまざまな妄想にとり閉まれながらまんじりともしなかつた。

四

その翌日も、またその翌日も私は野寄座を訪れた。扇昇は久し振りであんな面白い一夜を送つたと云つて、私の顏をみる度に禮を云ふことを缺かさなかつた。田之助もそのうちにすつかり私に馴染んで、時々は「大江山賴光館」や、「大鼓わりの仁田」などと云ふ古い臺本などを持つて私の宿へ話しに來ることもあつた。そのほか一座の誰れ彼れとも漸次と知り合になつて來たが、深く知れば知るほど私はこの一團の役者のなかに不思議な零落の人がゐるのに驚かされ

ない譯にはいかなかつた。そして扇昇にひかれた執着はいつともなしに漸次と一座の人々の上にまで擴がつて行つた。

座頭は嵐佳久藏といつて大阪の先代璃珏の弟子であつた。今では舞臺へ出ることは多くないが、臺本や演技にかけては驚く可き精通家だつた。道具方の豐斎はこれも矢張り大阪もので、以前は梅昇の弟子で、子供の時から舞臺の上で苦勞をして來た男ではあつたが、今ではもう暗い簀の子の下で、塵に塗れながら道具を組立てることより外に殆んど何の能もない憐れな不具者だつた。鳴物のお吉も生れは東京だつた。

併し此等の人々の中で最も不思議なのは蝠若といふ年老つた役者であつた。生れは何でも栃木邊で、若い頃には東京にもゐたといふが、もう七年も一座にゐながら誰ひとり彼の閲歴を詳かに知つてゐる者はなかつた。彼は一座でも全く一個の廢人として通つてゐる男で、「達磨」といふその仇名が示すやうに、日がな一日口もきかず樂屋の片隅へ孑然と坐つて、ぼんやり空を瞻めてゐるやうな男であつた。宙乘で舞臺へ落ちてからさうなつたのだとは云はれてゐたが、それには鉛毒や女の毒が餘程手傳つてゐるらしく、口をきく時には必ず脣を激しくひき歪めて、やつと子供のやうな片語を發し得るに過ぎなかつた。そして唯食慾だけが並はづれて激しかつた。三人前の飯を平氣で平げる位のことは決して珍らしくなかつた。田之助などは彼が猿のやうな顔をして怒る容子が可笑しいと云つて、よく惡戯したり、揶揄つたりしていゝ玩弄ものにしてはゐたが、併し一座ではこの臺詞も碌に云へぬ男を誰も彼も皆不思議な位親切に介抱してやつてゐた。或日、私が扇昇にその譯をきくと、彼は寂しく笑つて、

「彼奴も可哀さうな男ですよ。あれでもこの一座へ來た時分にやケレン師で素晴しい人氣をとつたもんですがねえ。私達だつてこんな稼業をしてゐりや何時あゝなるか分らねえんですから義理にも薄情な眞似は出來ませんや。」と云つた。

それから又一座にはもう一人妙な老婆がゐた。それはお花婆さんと云つて、以前は郡山邊の有福な生絲商人の後家であつたが去年の夏、網走へ興行にゆく途中、上常呂の谿間の寂しい驛遞で病死した鶴藏といふ役者に惚れて、身上もすつかり入揚げてしまつた果句、何時とはなしに一座のものになつて、もう八年近くも一緒に旅歩きをしてゐるのださうで、氣の輕い酒の好きな呑氣な女だつた。

私は死んだ鶴藏の名人であつた話も聞いた。旭川で女の手品遣と駈落した梅吉の話も聞いた。それから又田之助が去年の冬小樽の運送問屋の娘に唆かされて、東京の方へ出奔しようとした話も聞いた。雨に降りこめられたうすら寒い樂屋で、一座の人々と膝を並べながら、さうした耳新らしい話を聞くことが私にとつてはどんなに樂しかつたらう。日一日に新らしい興味と、憧憬がそのなかから湧き起つて私は知らず識らずの間に漸次と深く沒頭して行つた。そして私の名が誰彼の別ちなく自由に呼び馴らされるやうになつた頃には、もう私はその一座から全く離れ去ることの出來ないものになつてゐたのであつた。

或晩、私は寂しい夕餐を終ると又例のやうに宿をとびだした。

その晩は珍らしく凩の吹き去つた跡で、深海の底を思はせるやうな大空には蒼白い月光が際涯もなく充ち溢れてゐた。觸れたら音を立てて崩れさうな脆い寒氣は萬象の面を恐ろしいまで透明に見せて、ひつそりした廢市のうへに

は柩衣のやうな凄まじい色が慄へてゐた。
野寄座の前まで來かゝると、その晩も木戸の灯が落ちて、人影もない廣場には月の光が我もの顏にたちはだかつてゐた。私はいつもよりひとしほ堪へ難い寂しさに誘はれて、また扇昇達と面白い話でもしながら一夜を明かさうと思つて、通ひ馴れた狹い路次を樂屋の方へ入つて行つた。
階下の溜りでは道具方の豐爺や、鳴物のお吉や、下廻りの誰彼が暗い洋燈の下へ集まつて頻りに花札をひいてゐた。僅か二厘か、三厘の端錢を賭けて勝負を爭つてゐるのだが、彼等の顏には張りきつた熱心が動いてゐた。私はその側をすりぬけて二階の樂屋へ上らうとしたが、階子段のところにはお花婆さんが小さな豆洋燈をつけて眼鏡をたよりに衣裳の綻びを縫つてゐて、私が來かゝるのを見ると、さも根が盡きたと云ふやうに、腰をのばしながら默つて挨拶した。
「どうしたんだい。又今夜も丸札ぢやないか。」
と、私は愛想よく笑ひながら訊いた。
「え、つい今しがた札場が上りましたで。」
「困るねえ、毎晩これぢや。二階もいやにひつそりしてゐるぢやないか。皆はどうしたい？」
「今夜はねえ、座頭が割前を出して、皆して醉月亭とかへ飲みに行きやしたよ。散錢でも敷かなきやとても遣りきれねえつて云つてるんです。」
と、彼女は眉を顰めて困つたやうな身振りをした。それを聞くと私は急に落膽して、
「ぢや誰もゐないのかい。」
「いゝえ、二階にや扇昇さんや、照さんが殘つてゐやすよ。扇昇さんは又例の持病でな。今日は一日ひどく鬱ぎ込んでゐやすから、旦那どうにかしておやんなせえな。」と、婆さんは小鼻のわきに一杯小皺を寄せて笑つた。
私はその儘樂屋へ上つた。
火鉢の側には扇昇と、照十郎がしよんぼり對向ひに坐つて、少し離れた窓際には例の幅若が棚の上へ片肱凭せながら怯えたやうな空洞な瞳を空にさまよはせてゐた。そのほかには三つの大入道のやうな黒影が壁の上へ匍ひかゝつてゐるぎりで廣い樂屋はいつになくひつそりと靜まり返つてゐた。
側へ寄つてみると、扇昇は「新田館の場」で笹目の兵太を勤めたらしく、鬘をとつただけで布子で作つた色の褪めた鎧の上へ眞紅な陣羽織を着込んで、其上から樂屋着の穢い褞袍をはおつてゐた。照十郎も湊御前の派手な着附けに金絲の繡のある補襠を着た儘大跌坐をかいて徐かに煙草を喫つてゐた。いづれも支度をかへる元氣もなささうに悄れ返つて、今入つて來たばかりの私にも、彼等がもう長い間一言も言葉を交さずに坐つてゐたらしいのがはつきり感じられた。
それでも一番先に挨拶したのは照十郎だつた。私はそれに輕く答へながら、
「又今夜も出來ないんだつてねえ。」と云ふと、彼はつくづく情なささうな聲で、
「何うもこれぢや全く遣りきれませんや。なにしろ三幕もあけて入りが十二つて云ふんですから驚くぢやありませんか。それに今夜つから特別大勉強をして、場代木戸錢とも八錢てえ安値にしたんですから、上り錢がしめて九十と六錢さ。これぢや一座二十五人がお飯を戴くことはさて置き一晩の税金にもなりやしませんや。」
「酷いねえ。」私も氣の毒になつて思ひやりの深い調子で云つた。
「なにしろ臺詞を云つたつて、土間ががらんとしてゐやがるから、張合ぬけがして、てんで芝居になつて來やしませんや。」と彼は自棄に煙管を叩きながらくどくどと不入りの愚癡をこぼしだした。……一體この石狩川の下流に沿つた町々

は漁期をあてに入りこんでは來たものの一座にとつては殆んど初めてと云つてもいゝほど馴染の淺い土地だつたので、初日から三日目頃までは可成りの大入りを占めたにも拘らず、もう五日目となるとぱらりと客が落ちて、二週間ちかくもうつてゐながら上り錢は一座の米代を支へるにも足りない程だつた。一座は今更どうすることも出來なかつた。幾許かの纏まつた金が集まるまでは次の興行地へゆくことはもとより、越年のために小樽の根城へ引上げる事すら出來ず、毎日々々當てにもならぬ客足を賴みにして、何時までもこの野寄へ逗留してゐなければならないのであつた。

扇昇はその晩どうしたものか、いつもとまるで違つてゐた。丸札を出さうが、入りがなからうが、いつもなら眞先に飛び出して來て根も葉もない輕口を云ひながらひとりで喋いでまはる人が、どうしたものかその晩ばかりは蒼ざめた顔容をしてまるで口もきかず、前屈みに圓く坐つて影の薄いやうにしよんぼりしてゐた。私は心細くなつて、

「おい、扇昇さん、どうしたんだな。馬鹿に悄氣てるぢやないか。」と、賑やかに話を促した。

「また例の持病でさあ。鬱ぎの蟲が腹んなかへ入つたんですよ。」と、照十郎は側から笑ひながら口を入れた。

「持病つて、何處か惡いのかい?」

「いゝえ、私は時々たゞから鬱いで來ましてな。……」扇昇は聲まで低く落して、寂しさうに呟いた。

「ぢやなぜ座頭なんかと一緒に飲みに行かないんだい? 盃のちんと云ふ音を聞きやそんな持病なんざ何處かへとんで行つちまはあね。」と、私は氣をひきたてるやうに云つたが、併し彼はたゞ、

「えゝ。」と、煮えきらない返事をするばかりであつた。

私は詮方なしに默つてその横顔をぢつと瞻めてゐた。薄暗い洋燈の光を斜に受けた半面には濃く塗つた白粉がばさばさに乾いて、處々荒れた地膚が黒く透いてみえた。そして蟀谷から頬へかけてたるんだやうな薄い陰影が浮いて、深い皺が幾條となくその上に斷れこんでゐる樣をみると、私はまた耐らないほど胸が迫つて來て、態と景氣よく調子を張りながら、

「どうだい、此れから座頭達の向うを張つて、何處かへ飲みにいかうぢやないか。」と、云ひ出すと、彼は何時になく氣の進まぬ氣振をみせて、

「え、有難う御座います。」と、禮だけ云つた。

照十郎もいつかその調子に引込まれて、つまらなさうな顔をしてゐたが、やがて、

「そんな無駄なお錢を使ふより、今夜は樂屋でしんみり飲まうぢやありませんか。さつきから扇さんのおつきあひで私まですつかり氣を腐らしちまひましたよ。」

相談はすぐそれに纏まつた。照十郎は引立てるやうに扇昇を促しながら階下へ着換へをしに下りて行つた。私は僅かな酒代を彼に渡してそれでいゝやうに取計らつて貰つた。

二人が立つて行つた跡には、私と、婦若とたつた二人ぎり對向ひに面を合はせて殘つたが、やがて彼は何と思つたかふらふらと蹌きながら立上つて、隅の方から引幕の古いので作つた夜具をひき出して來て、窓際へごろり横になつてしまつた。そして瘦せた手を延ばして小棚から駄菓子のやうなものを袋ごと取りおろして、頻りにもりもり嚙つてゐたが、その音が聞えなくなつたかと思ふと、彼は、いつの間にかもうぐつすりと深い眠りに落ちてゐた。緩やかに寢息を吐く度に、夜着の背なかで、鶴藏さんへ、と書いた大きな紅文字が、生命を得たやうにかすかに蠢いた。

暫らくすると、扇昇も照十郎も風呂を使つて平生の樂屋着に着換へて上つて來た。と、すぐにもう三升のついた大葛籠が餉臺のかはりに火鉢の側へ持ち出されて、小道具のなかから撰り分けた德利や盃がその上へ體よく並べられた。階下から、下廻りの一人が、買つて來た酒をもつて上つて來ると、照十郎はまめまめしく立働いて、それを大藥罐のなかへ注けて燗をした。やがて香ばしい乾魚を肴に私達の貧しい饗宴は開かれたのであつた。

扇昇は、私や、照十郎にすゝめられて重い手つきで幾つとなく盃を重ねたが、それでも矢張り浮いて來なかつた。默つて俯向いて考へ込んでゐる間に、光のない瞳は時々私達の方へさまよつて來たが、ふと視線があふと彼は輕くうなづいて寂しく微笑むばかりであつた。それにひきかへて酒の弱い照十郎はすぐに眼の周圍を眞紅にしながら、話の調子までひどく若やいで來て、何くれとなく口まめに喋舌りつゞけた。私も餘り扇昇が沈んでゐるのでつい照十郎の話の方へ引入れられて、

「どうだい、照さん。ちつと罪つくりな話でも伺はうぢやないか。」と、思はず水を向けると、彼は急に相好を崩して、

―はゝゝゝいゝねえ。だけど、私や妙な性分でね。こんな稼業をしてゐながら、美い女をやらうなんてえ了簡を起したことあ一度もねえんですよ。まあ大概の場合が、此奴あ錢になる女だと踏んでからでなきあ手が出ませんや。―

―そりやまた酷いねえ。よく貢ぐとか、貢がせるとかいふ事を聞くが、隨分腕がいるもんだらうねえ?―と云ふと、彼は益々圖に乘つて、

―なあに、大した腕もいりませんや。だが此の息ばかりや旦那方みてえな錢のある方にや分りませんな。此間も旭川で饂飩屋の娘から七兩がとこ卷きあげてやりましたが、こいつが此節ぢや一番面白うがしたね。一體、田之公なんざ年もいかねえ癖に大きな事ばかり云つてやがるけど、澁皮のむけた面ばかりぢや中々さう口ほど器用に行くもんぢやありませんや。どうして當節の女ときたら皆悧巧になりやがつて、散々人を遊んどいて、いざとなると鐚一文だつて私達の自由にやさせませんからなあ。その饂飩屋の娘なんざあ、名はお菊ちやんてんですが、馬鹿な惚れかたをしやがつたもんでさあ。年は二十七だが、面だつてなに大して踏めねえ方ぢやねえんで。……」と、彼は齒の拔けた穢らしい口を開けながら、聞くに耐へないやうな惚話を並べはじめた。

私はいゝ加減な返事をしながら側を向いて、いつか田之助の口から聞いた此の役者の身の上を思ひ起してゐた。彼はなんでも函館在の生れで、父親は博徒で、彼がまだ頑是ない子供の頃、入獄した儘行方不明になつてしまつたのださうである。そして彼はたつた獨りの母親に死別れるとすぐ大工になつて、樺太から露領のニコライエウスク邊を散々流浪した擧句、到頭この一座へ入つて役者になつてしまつたが、浪花節と賽ころが一番好きで五十近い年をしてゐながら、過去に大工であつたことが唯一の誇りであるらしく、一生に一度でいゝから舞臺らしい舞臺で二挺鉋をグッグッとひききるやうな威勢のいゝ役を勤めて見てえと始終口癖に云つてゐるやうな男であつた。

―……つまり私が役者なんかしてるけど、何處か堅氣なところがあつて賴もしいと、かう云ひやがるんです。だからお前さんがそんなに苦勞してるんなら、私や身の周圍のものをすつかり賣り拂つてでもきつとどうにか助けて上げるつてね。へゝゝゝ。一寸安くねえ幕ぢやありませんか。」と賤しげな笑ひを洩らしながら倦きもせず管を卷いてゐる。そして私が聞いてゐない

のをみると今度は扇昇の方を向いて、「なあ扇さん。おい橘屋。まあ聞きねえつてことよ。とうずばぬけて惚れて來りや、ちつとやそつとの錢を絞つたつて罰も當るめえぢやねえか。たあ。」

扇昇は盃の縁をかみながら私の方を向いて苦笑ひをしたが、急に眞顏になつて、

「そんな罪なことをするもんぢやねえ。」と、腹の底から押し出すやうに重々しく云つた。

「へん、畜生めえ、堅さうなことを仰有るぜ。ねえ、あなた。旦那。それからねえ、私も愈々度胸をきめましてね……」と、又彼は私の肩を叩いて、妙な手つきをしながらその先を話しはじめた。

やつとその一段を話し終ると、彼は急に今迄の女のこともケロリと忘れてしまつたやうに、「時に橘屋。そんなに塞がねえで、ちつと賑がらぢやねえか。今夜はやかましやの座頭もねえんだから、久し振りに三味線でも彈いて景氣をつけてやれ。」と、獨言を言ひながらふらふら立上つて、階子の上り口から下を向いて、「おうい、豐さん。一寸來ねえ。それからお花婆さん。お前も三味線をもつて上つて來なよ。」と、呼んだ。

扇昇は私の顏をみながら腹立たしさうに眉を顰めたが、何とも云はうとはしなかつた。照十郎が座にかへるとやがて階下から豐爺がにやにや薄氣味惡く笑ひながら跛をひいて上つて來た。

「さあ、此方へ來て一杯飲みねえ。今夜は旦那の御馳走だぜ。」

「はいはい。それはまあ御馳走さまで。えへゝへゝ。」と、彼は苦しさうに坐つて頭の禿げあがつた圖ぬけて長い顏に間延びた表情を浮べながら盃を受けた。

そこへ又お花婆さんが三味線を抱へて上つて來た。

貧しい饗宴は期せずして不思議な色彩を帶びて來た。廢滅の壁に圍まれて、一生活の日のめもみたことのないやうな濕々した樂屋の空氣も、いつかしら濃い酒の香に蒸されて、紋どころの剝げ落ちた古葛籠の食卓の周圍にはいづれも四十の坂を通り越した憐れな零落の男女が五人まで寄り集まつて、互に過去の閲歴を押し隱すやうな慘ましい眼眸をしながら、騷々しく盃をあげた。

なかでも照十郎は獨りで燥ぎながら、

「おい、お花婆さん。お前も、先の成田屋が死んでから滅切り老けたぜ。ちつと浮氣でもしねえな。はゝゝゝ。」

「笑談云ひなさるなよ。此年になつて何が出來るもんかね。當節ぢやそれよりもひどく喘息が病めてねえ。」

「喘息か、はゝゝゝ。そいつがなきや俺も情婦に持つがなあ。折角乙な話になつてる時なんぞにひゆうひゆうやり出された日にや全く浮ばれねえよ。」

「酷いことを云ふ人だよ。これだつて一度は文金に結うたこともあるがな。」

「昔ぢやどもならんわ。はゝゝゝ。」と豐爺は長い顏を斜にしながら笑つたが、やがて、「それよりや旦那へ御返禮に唄でもうたつてお聞かせや。」

「幾ら呉れるよ。」と、お花婆さんも調子をつけながら笑談らしく云つた。

「あれだもの、色氣どころの騷ぎやあらへん。」

やがて彼女は娘盛りに習ひ覺えたと云ふ仙臺邊の俗謠を唄ひ出した。その顏面には何の情緒も動いて來ないのに、低く沈んでゆくその嗄れた聲には昔を思ひ起させるやうな哀切な調子があつた。私には、濕氣で皮の弛んだ三味線の音までが、嗚咽してゐるやうに聞きなされた。

次に照十郎が頓狂な聲を振絞つて得意の「國定忠治」を唸つたが、自分でも巧くいかないと思つたと見えて、

「どうも寒のせゐかまるつきり聲が潰れちやつた。」と、尤もらしく喉の邊を撫でながら、「ねえ、旦那。豐さんの義太夫をひとつ聞いてやつてお呉んなせえ。さすがは上方だけに本物ですぜ。」

それを聞くと、豐翁は待ちかねてゐたやうに微笑んで、勿體らしく居住ひをなほしながら、

「もう喉が潰れてしまうたんで、さつぱり調子がつきまへんわ。」と、云つて、『太十』の佐和利を語りはじめた。偶にはチョボの代りも勤める男だけに、聲には艶がなくても節廻しだけはさすがに巧みだつた。そして嗄れた聲で綿々として「操」の情緒を語る時、彼の禿げ上つた額には汗が薄く滲んで、瞑つた眼の周圍には泣いてゐるやうな表情が浮んだ。

照十郎は時々思ひ出したやうに頓狂な懸聲をかけて、體ごとそのもの悲しい佐和利のなかへ引込まれてゆくやうに輕く手足を搖り動かしながら一心に聞き惚れた。お花婆さんも血の氣の褪せた脣をきつと結んで、うつとり眼を据ゑてゐたが、しまひには聞き飽きたと見えて、側をむいて欠伸をしはじめた。

やがて一節を語り終ると、豐翁は汚い手拭で額口の汗を押し拭ひながら、

「これでも昔は隨分女子を泣かせた喉だつせ。」

と、得意らしく云つた。

私は自分の立入ることを許されない世界に連れて來られたやうな氣がして、唯ひとり窓際の柱に背を倚せながら、異邦人のやうな寂しい心持で、漸次と興趣が熱して來る一座の饗宴を打眺めてゐたが、しまひには到頭耐らなくなつて、

「どうだい、扇昇さん。清元でも出さないか。」

と、親しいものを求めるやうに促すと、恍けた顏容をして居眠りをしてゐた彼は、薄く眼を瞬いて、

「もう長いことやりませんから。……」と氣のぬけた聲で答へた。

五

二度買ひ足した酒が殘り少なになる頃には、豐翁もお花婆さんもすつかり醉ひ疲れて、階下へ降りてしまつた。照十郎は仰向けに寢そべつた儘呂律の廻らぬ口で頻りに「國定忠治」の續きを唸つてゐたが、その間延びた節も、いつの間にか、高い鼾聲に變つてしまつた。それと同時に、遠くへ吹き去つてゆく凩の音を思はせるやうな寂寥が再び樂屋の隅々まで擴がつて來た。私は今更のやうに酒の匂ひの殘つた四邊を眴すと、座に居耐れないやうな寂しさが自然と湧いて來て、燗のつきすぎた酒をそつと扇昇の盃へつぎながら、また彼から懷かしい昔話を語らうとした。

初めは氣の進まぬやうな顏をして深い思ひに沈んでゐたが、到頭餘儀なくされて彼は盃をとりあげながら徐かに口を切つた。

「今頃こんな事を云つたつて、誰もほんとにしちや呉れませんけど、私やあの松岸にもゐたことがあるんです。全くあすこはいゝ處でした。こんな氣の鬱く晩には彼處にゐた時分のことが思はれてなりません。」と、云ひながらいつもとまるで違つた途切れ勝ちな悲しい聲で、大利根の流れに沿つたあの寂れ果てた松岸遊廓の昔を語り出した。

今でも現存してゐる開新樓と云ふ妓樓は丁度その時分が全盛期で、大漁踊りの唄にまでうたはれた美しい花魁と酒の香が、遊惰な男を諸方から誘き寄せた近郷唯一の歡樂境であつた。銚子からも對岸の常陸からも、又川上の町々か

らも數多い嫖客が夕暮とともに舟で送られて來て、朝には岸邊に戰ぐ蘆荻の間から、大廈の欄に倚つて見送る妓達と名殘りの盡きぬきぬぎぬの別れを惜んだ。

「大漁祝ひの晩なんといつたら、そりや全く豪勢なもんでした。百五十疊も敷かる大廣間を明け擴けて百目蠟燭を晝間のやうにかんかん點けて、銚子からは女役者の一座がやつて來る、花魁は花魁で揃ひの衣裳で總踊りをやつたもんです。大傳馬を仕立てて乘り込んで來る旦那衆や、網主なんてものはその頃の金にして一晩に二百の三百のつて投げだしたもんですからなあ。」と、話し續けてゐるうちに漸次と興が乘つて來て、彼は思はず眼を輝かした。

「お前さんはあすこでも矢張り役者をしてゐたのかい？」私は燃え上つて來る彼の感興に薪を添へる氣で云つた。

「いゝえ、花魁衆の振附をしてゐましたんです。あれでも彼是三年ばかりゐましたが、私には今迄歩いたうちで一番面白い土地でした。」と、彼はその頃の思ひ出をまざまざとみるやうに大きく眼を睜きながらうつとりした。そして暫らくすると何か樂しかつた出來事でも思ひ起したのか、輕く微笑みながら、私の方を向いて物語りを續けようとしたが、その時、階子段のところで足音がして、ひよつくら田之助が歸つて來た。それを見ると扇昇は急に氣が變つたやうに晴やかな顏容になつて、

「どうしたんだい、もうお退けかい？」

「いゝえ、私ひとり先へ歸つて來たんだ。」と、田之助はいつにない不機嫌な顏をしてゐる。

「なんだな、氣持でも惡くなつたのか？」と、彼は笑ひながら顏をみてゐたが、田之助が返事もしずに着換へをはじめるのを見ると、急に眉を顰めて、

「又幸吉の野郎と女のはりッこでもしたんだらう。」

「うゝん、詰まらないこつたけど、幸さんがあんまりなことを云ふから。……」と、田之助は口惜りながら云つて、火鉢の側の徳利をかたづけて、そこへ坐つた。

「しやうのねえ奴等だなあ。一體あの幸吉つて野郎は根性がよくねえんだ。舞臺の上ぢや手足の置きやうも碌々知らねえ癖にしやがつて、女を作へることばかり考へてゐやがる。今夜歸つて來たら俺がうんと脂を絞つてやるから、まあ、そんな浮かねえ顏はよしにして、機嫌から直しなよ。」と、扇昇は今しがたとはまるで別人のやうな聲で恐ろしく氣負つて云つたが、暫らくすると又もとのやうな感傷的な沈んだ調子に返つて、

「だけどお前もちつと氣を付けなくちやいけねえぜ。今のうちは女よりも何よりも修業が第一だ。俺みたやうになつちや藝人ももう駄目だからなあ。」としみじみ云つて、私の方を顧みながら、「ねえ、貴方、可笑しなことを云ふやうですが、私や此奴あゆくゆく見込みのある奴だと思つて居りますんです。田之助てえ藝名も出世の早かつた紀の國屋に因んで私がつけてやりましたんで、茲五年なり十年なり檜舞臺でみつちり修業させさへすりや末はきつと一廉の藝人になれる奴なんですが、どうかまあ、いゝ傳手でも御座んしたら、東京へ招んで出世の出來るやうにしてやつて下さいまし。」と、扇昇は沈んでゆく氣持を紛らかすやうに笑つたが、彼の胸の底に懷へてゐる總ての感情は自づと瞳のなかにはつきり映つて來た。

田之助の出世。それが時世に疎くなつた扇昇の果敢ない空想であるとしても、私にはそれを笑ふことの出來ない程の同情がその場合十分に充ち溢れてゐたので、

「何と云つても修業が第一だ。」と、つい引込ま

れてしんみり云ひながら幾度か合點いたが、その時ふと見ると階子の上り口に白い女の顏がみえた。
「誰だい。女がゐるぢやないか。」と云ふと、田之助は急に狼狽へて立上つて、私達の思惑をよむやうな眼眸をしながら、ツッと其方へ出て行つた。そしてその儘長いこと小蔭で二人は立話を續けてゐたが、私はちらとみた顏が氣になるのでそつと覗くと、その女は醉月亭の美登利だつた。私は吃驚して、
「美登利ぢやないか。何もそんな處で立話をしてゐることはない、さあ此處へお入り。」と、云つてみたが、暫らくの間返事がしないので、何氣なく立上つて、そつちへ出て行くと、彼女は柱の陰へ顏を隱して、頻りに泣いてゐた。田之助はその肩へ手をかけて何やらひそひそ慰めてやつてゐる樣子だつた。
「何をしてゐるんだな。」と、笑ひながら後へ立つと二人は打踏めされたやうにツッと兩方へ飛退いて、逃げるやうな身構へをしたが、美登利は私の顏をみると突如袂で顏を掩つて、
「私が惡いんです、私が惡いんです。」と、胸を絞るやうな泣き聲で云ひながら其儘階子を降りて樂屋口の方へ逃げて行つた。呼び戻さうとして跡を追驅けると、彼女はそこの板戸の口から冷たい月光のなかへすッと消えてしまつた。
私には今宵醉月亭で起つた紛紜がやつとはつきり分つた。で、當惑した顏をして舞臺へ下りてゐた田之助を連れて笑ひながら樂屋へ歸つて來ると、扇昇は何と思つたか突如、田之助をきつと見据ゑて頬の肉をふるはせながら、
「おい、田之さん、お前まさかあの女をどうかしたんぢやねえだらうな。」と云つたが、その聲には罪を詰るやうな激しい調子があつた。
田之助はおどおどしながら俯向いてゐたが、漸う細い聲で云ひにくさうに、
「だつて私の方からどうかうつて云つた譯ぢやないんだもの。」
「小生意氣な口をきくぜ。大概にしな。お前の方で引緊めてゐりや、女が手出しをする譯はねえんだ。旦那がどんなに氣を惡くなさるか、そんな了見ぢや俺や堪忍が出來ねえ。」と叱るやうに鋭く云ひ放つたが、やがてひどく氣をかねてゐるやうな眼眸で私をみながら、「若え者は仕樣のねえもんで御座んすなあ。」
相互に何だか氣拙い思ひがして三人はその儘口を噤んでしまつた。扇昇は一處をみつめながらぢつと考へ込んでゐたが、深い嘆息をつく度に彼の顏には又漸次と暗い陰影が射して來た。到頭しまひには我慢が出來なくなつたと見えて、田之助の方を向いて悲しげな思ひ入をしながら、
「今更云ふんぢやねえが、女つてえものは全く恐いもんだ。お前は、當人の成田屋から聞されてゐるんだからまだ忘れもしめえが。……」
と、死んだ鶴藏の情事を、愚痴をこぼしてゐるやうな果敢ない聲でくどくどと私に話して聞かせた。
それはまだ鶴藏が大阪役者の一座にゐた時分のことださうである。或年金澤から能登路へかけて巡業して歩いた事があつたが、其途中彼はふと或大きな町の町長の愛娘に思はれた。その頃町長といへば一介の河原乞食とは武家と町人よりもまだ烈しい階級の懸隔があつたので、粹な乳母の取り持で嬉しい首尾は叶つたものの、互に思ひ詰めれば詰めるほど其土地が狹くなつて、愈々一座が次の興行地へ乘込まうと云ふ時には、愛着の念に眼の眩んだ娘はもう出奔するより外に道がなかつた。で、追手が懸つたら刺し違へて死ぬつもりで、その頃の金で二百圓といふ大金を盗み出して、鶴藏と一緒に舞臺でする梅川忠兵衛のやうな美しい旅路

、出たが、まだ故郷から十里も逃げのびないうちに警吏の手に捕へられて彼は誘拐の罪で獄に繋がれる、娘は母親の膝元に嚴しい監禁の身となつて、到頭彼が入牢してから三月目に惨ましい狂死を遂げてしまつた。

—そのために成田屋は牢から出て來ても一座へ歸參することは出來ず、あの名人が長年の間苦勞のしづくめで、到頭こんな旅先で死ぬやうなことになつてしまひました。……當人の話ぢや生涯に一番綺麗で一番執着の深かつた女だてえますが、よくよく忘れられなかつたものと見えまして、死ぬ二三日前にも其のことを云ひ出して、「俺あ近えうちに又逢へるかも知れねえなあ。」なんて云つてましたつけが、あの氣の剛い成田屋がその時ばかりは涙を零しましたよ。」と、扇昇は急に聲を曇らせながら嘆息を吐いて、少時の間きつと脣を噛みしめてゐたが、やがてまた失はれた緒を探るやうに、「梅公なんぞも今ごろはどうしてゐやがるかしら。彼奴も舞臺へかけちや技量は確かだつたがなあ。……」と誰れに云ふともなく歔欷するやうな聲で呟いた。

窪んだ扇昇の眼はいつしか涙に濕んでゐた。それを紛らかさうとするのか、彼は皺ばんだ頬に寂しい笑ひを浮べながら空になつた徳利を倒さまにして、未練らしく酒の餘滴をきつたが、その手は云ひ甲斐もなく小刻みに慄へて盃の縁はかちかちと冷たい音をたてた。私はそのさまをぢつと見てゐるうちに、詩のやうな惨ましい零落の姿をその儘凝視してゐるやうな心持になつて思はず苦い涙を呑んだ。

ひつそりとした樂屋には「時」の滴る音さへはつきり聞き分けられるやうな靜けさがたち歸つて來て、時々田之助が思ひ入つたやうに吐く嘆息が疼くほど明らかに響き渡るばかりであつた。硝子窓から戸外をみると家々の屋根にはもう眞白に霜が置いて、その家並の彼方に荒寥とした石狩川の流れがひろびろと彎曲しながら遠白く眺められた。灯影さへ見えぬ原野の面は無限の寂寥に掩はれ、その果てに聳えた國境の連山には雪が幻の如くに明るく輝いて、見渡すかぎり天にも地にも、蒼ざめた月光が音もなく降り灑いでゐた。私はその廓落とした大自然に面を合はせてゐるうちに、いつかしら、冷たい眞實の底からひそひそと湧き上つてくる聲なき慟哭が胸一杯に充ち溢れて、今、遠く都會から離れたこの石狩河畔の寂しい廢市で、『篠目の兵太』や『土器賣の詫助』に扮しながら衰殘の藝を賣つてゐるこの憐れな俳優の末路に藝術的感激の極致を見出さない譯にはいかなかつたのである。

それから二週間ばかり經つて後のことであつた。私は、寂しい河沿ひの街道を、道具や、衣裳や、鍋釜の類まで車に積んで、次の興行地へ移つてゆく旅役者の群のなかにうち交つてゐた。造花の飾りをつけた駄馬は眞晝の明るい空氣のなかに爽やかな鈴の音を響かせながら、その群を導いてゆくやうに先に立つた。私は晴やかな顔色をした扇昇と肩を並べて歩きながら、今夜石狩の町で一座の演ずる『忠臣藏』の定九郎に扮するため彼から仔細にその役の型を教はつてゐた。私達のすぐ後には醉月亭の美登利が涙を封じて贈つた守袋をしかと肌に押當てて、しよんぼり俛首れながら歩いて來る田之助がゐた。その後にはまた照十郎や豐爺や一座の誰彼が苦もなささうに笑ひ興じながら續いた。そして、冷たい風が河面から吹きあげて來る度に、霜で浮きあがつた街道の黄いろい砂塵は車の轍から道を遮るやうに濛々と舞ひ騰つた。……

（明治四十五年四月作）

浄明寺横町

浄明寺横町で名代のものは角の煙草屋の看板娘と、寺裏の大銀杏樹と、それから横町の中程のところへ出る小松鮨であつた。煙草屋の娘は今年の秋に橋向うの材木屋へ嫁にいつてしまふ、大銀杏樹はつい此間の暴風で大枝を三本も吹き折られてしまつたので、今では三つの名物のなかでも小松鮨ばかりが僅かにその名残りを止めてゐるのである。

大橋から廓へ通ふ一筋の横町には此邊で育つたものもよく覺えないくらゐの昔から、夜毎にいろいろな屋臺店が立つならはしになつてゐた。おでんもあれば牛飯もある。立喰ひの安西洋料理もあれば鮨もあるといつた風で、いづれも廓へ通ふ客を相手に相應に繁昌はしてゐたが、併しそのなかでも小松鮨に肩を並べる家は一軒もなかつた。移り變りの激しい小店のことゝて、一年と續くものは珍らしかつたが、そのなかで小松鮨だけはもう十五年から賣込んだ屋臺であつた。前の親爺は河岸で小松の看板をかけてゐた家の弟だつたが、地道な男にも似合はず、少しばかり小金がたまると人にすゝめられて相場へ手を出したので、それがぐれはじめで到頭屋臺ぐるみ今の佐吉に渡すやうなことになつてしまつたのであつた。

今の親方の佐吉ももとは人形町の都鮨の職人で、酒飲みの遊び好きの、何處といつて取柄のない男ではあつたが、それでも商賣にかけてはなかなかしつかりした腕をもつてゐた。それに今はもう半身不隨で、家で寢たつきりになつてゐる内儀さんが名うての働きものだつたので、この屋臺が賣りものに出た時に、先の親方に泣きついてやつと株を買ひ受け、それから丁度今日まで七年の間、二人で稼ぎ込んで兎に角浄明寺横町の名代とまで唄はれる店に仕上げたのであつた。殊にこの小松は煮物が旨いといふので賣込んでゐた。

佐吉も今では昔のやうに大酒も飲まないが、しかし生來からの職人氣質なので、つい酒を飲むと惡い朋輩に誘はれて店の賣溜めを擾拂つては遊びに出たりした。商賣のことには身を入れるが、平常の身持はだらしのない一方で、殊に内儀さんが寢つくやうになつてからは小言の云ひてがないので、大びらで遊んで歩いた。それ故、一日に十圓十五圓の鮨はつけてゐながら、いつもぴいぴいしてゐた。時々客が少しは蓄つたらうなどといつて冷評したりすると佐吉は眞面目腐つた顏をして、

「はゝゝ。笑談でせう。金を殘すつもりなら、こんな道樂な稼業はしませんや。せいぜい行え酒を飲んで、面白え思ひをして死に度えからまあかうしてゐるんでさあ。」と云つて、空嘯いてゐた。

佐吉には十七になる忠治(これは佐吉が講釋の國定忠治が馬鹿に好きなので態とつけたのである。)といふ息子と、十五になるおせいといふ娘があつた。子供はこの二人つきりで、晝間は家で手傳はせて、晩は二人とも屋臺で小僧がはりに使つてゐた。忠治は年よりも老せた子なので、一人前の若衆のやうによく働いた。客がそれをほめると佐吉は笑ひながら、

「なあに、蛙の子は矢張り蛙の子でさあ。今に私みたいになるから見てゐて御覽なさい。」と、云つてゐた。

その晩は恐ろしい師走風が吹いてゐた。戸外

には煙のやうな砂塵が舞ひ立つて、年の暮によくあるやうな底冷えのする晩であつた。向側の店明りは不氣味な程冴えて、寺の壁際に竝んだ屋臺の暖簾は絶えず吹きあくられ、向通りの電車道では曲角をまがる鐵輪の軋りが歯の根に疼くやうに冷たく聞えてゐる。とみると寺の屋根を掩ふやうに聳えた大銀杏樹は散り殘つた葉をばらばらふるひ落して裸になつた梢のところには大きな寒月が蒼白く輝きながら懸つてゐた。

佐吉はちよつと客の合間をみて、さも冷たさうに七輪の火に手を炙つてゐたが、甲鉢のなかの飯がもう殘り少なになつたのを見ると、傍で寒さうに肩をすくめてゐる息子の忠治の方をみながら、

「おい、忠公。手前家へいつてもう一釜持つて來な。今夜はこの風だから、それだけつけちやつたら山にしよう。この寒さぢやお客樣もあるめえからな。」と、云ふ。家といふのはそこから二町ばかり離れた裏町にあつた。

忠治は水鼻汁を啜りながら、

「だつてお父つあん。まだ十時がちつと過つたばかしだぜ。」と、云ふ。

「うむ、またそんな時間か。」と、云つて佐吉は棚の上の眼覺時計をみたが、そのまゝ魚を圍つて置く箱の傍から大きな貧乏徳利を引出して振つてみながら、やがて湯呑をとつてそれへごぼごぼと注ぐ。それは佐吉が寒さを凌ぐ樂しみ酒であつた。彼は屋臺へ坐るとすぐからもうかうやつて一杯二杯づつ呷つてゐなければ仕事が出來ないのであつた。

佐吉はもう一度徳利を振つてみて、

「おい、忠公。手前これをもつていつて、又三河屋からいつものやつを取つて來て呉んねえか。今夜は寒さが強いせゐか、馬鹿に早くなくなつちまえやがつた。」と、云ふ。

忠治は下駄を穿いて下へ降りながら、その徳利を受取るには受取つたが、

「お父つあん、また飲むのかい。もう今夜これだけにしとおきよ。もうお仕舞はすんでるんぢやねえか。」と、云ふ。

佐吉は傍を向いて笑ひながら、

「生を云ふねえ。まあ考へてみろ、この空ッ風が吹くのに白面でゐられるけえ。愚圖々々云はずに取つて來な。そのかはり手前には温かい蕎麥を奢つてやらあ。おゝ、さうさう、家へいつたらお母やおせいにも饂飩でもとらさせてやんねえ。」と、云つて、子供思ひの彼は寛濶めいた手つきで懷のなかから三十錢ばかりつまみ出して、忠治に渡してやる。

忠治は仕方がなささうに徳利をかゝへて、

「うゝ、寒いや。」と、云ひながら、轅の古布で圍つた屋臺の陰から吹く風の中へ飛び出してゆく。

それと引違へに二人の客が入つて來たので、佐吉は、

「いらつしやい。」と、云ひながら、湯呑のなかの酒をぐつと呷つて、仕事にかゝつた。鮨を並べる塗板のうへには明るい電燈の光が銀色の鯖の肌にくつきりと冴えてゐる。客は不器用な手つきをしてそれをむしやむしや食べだした。佐吉は顔見知りのない客なので、紅い鮪の、いい加減なところを二つ三つつけたきりで何をつけませうとも云はずに默つてみてゐた。

その客が二十錢ばかりの勘定を濟まして歸つていつてしまふと、又店はがらんとしてしまつた。往來では風の音がひとしきり電線を鳴らして、すぐ隣町の料理屋でやつてゐる騷ぎの三味線が吹きちぎられるやうに聞えて來る。佐吉は又七輪へあたりながらぼんやりしてゐた。皺の出た彼の顔は赤く光つて、どんよりとした眼には疲れたやうな醉ひがみえてゐる。

そこへ今度は遠くの方から冴えた下駄の音が聞えて、思ひなしかどうも自分の店へ來る客のやうな氣がしてゐると、果して、暖簾をかゝげてついと入つて來たひとりの男がある。年の程はやつと四十を出たくらゐで、中折帽を眼深に被つて、毛皮のついた外套の襟ですつぽり肥つた顎を隱してゐる。

佐吉はそれをみると吃驚して、

「おゝ、旦那。」と、云つたが、客はその聲で隱袋から手を出して帽子を後へずらしながらさも意外さうににつこり笑つて、

「や、親方。お前まだ達者だつたのか。」と、云ふ。

佐吉は笑ひながら、

「達者だつたかは心細うござんすね。はゝゝは。それよりも旦那こさあお珍らしいぢやござんせんか。一體どうなすつたんですい？」と、さも懷かしさうに云ふ。

客も少し醉つてゐるらしく、

「いや、しばらく〳〵だつたなあ。はゝゝゝゝ。全く面目ねえ。お前も連中から聞いたらうが、俺やすつかりぼしやつちやつてね。しばらく息をぬきに上方へいつてゐたが、實はつい五日ばかり前にやつと又此方へ歸つて來たのよ。」と、云ふ。

その客といふは木場で材木の仲買をしてゐる山佐の番頭で、安どんといふのだつた。これも矢張り遊びの好きな人間で、店の名で金を廻しては自分でこつそり商賣をして、その上りでぶらぶら飮んで歩いてゐたが、去年の秋、ふとしたことから帳尻がばれて、店にも居難くなつてふいと姿を消してしまつたのであつた。小松の屋臺にはもう四年も昔からの馴染で、今日は芳町へいつた歸りだとか、今夜はこれから洲崎へ行くのだとか云つてはよく寄つて食べていつた。何よりも鮪のトロが好きで、氣に入るとひとりで三十錢も四十錢もたべていつた。佐吉も馬鹿に氣合が氣に入つて、一緒に連れられて遊びにいつたことなども三四度はあつたが、それが急に姿を消してしまつたので、何だか心寂しい氣がして同じ仲間のものが食べに來たりすると、いつも安さんはどうしてゐますと云つて、その安否を訊ねるのであつた。最初のうちは何處へいつたともまるで行方が知れなかつたが、そのうちに大阪へいつてゐるといふことが誰れからともなく聞えて來たのであつた。佐吉は鮪のトロのいゝのが出る時分になるとふとその安どんのことを思ひ出したりした。それが今日になつて思ひがけもなくひよつくら姿を現はして來たので、佐吉が驚くのも全く無理はなかつた。

佐吉はまだ夢でも見てゐるやうな顏をしながら、熱い茶を湯呑についで出して、

「いや、旦那、私やあんたが大阪へいらつしやるつてえお噂は聞いてましたが、それにしても全く變ぢやありませんか。今頃お目にかゝれるなんて全く變でさあね。はゝゝゝ。だがまあよくお歸んなさいましたよ。」

安どんはにやにや笑ひながら、

「何が變なことがあるもんか。なにも東京に愛想がつきた譯ぢやねえし、實はもう此方へ歸り度くつて堪らなかつたのさ。お庇護樣でさあやつと身性が直つて、又お前達にも逢へるやうになつて、俺やこんな嬉しいこたあねえぜ。まあ喜んで呉んねえ。」

佐吉はさういふ口調がすつかり昔の通りなので、ひとしほ懷かしくなりながら、

「いや、恐れ入りやす。私も皆さんが被在るとよく旦那のお噂をしちやゐたんですが、まあしかし御無事でお目出度うござんす。」と云つて、布巾でそこらを拭きながら鮨をつける支度をして、「だが、なんでござんせうなあ、大阪は又大

阪で面白らがせう。」
安どんは顔をしかめて、
「うん、まあ、ぶらぶら遊んでゐるにや面白えところだが、俺あみたいな意地の汚えものにや、なによりも食物で中心がついていけねえや。」
「だつて大阪は大層食べもののうまいところだつてえぢやござんせんか。」
「そりやまづくはねえが、やつぱり何を云つても生れた土地のものが嬉しいさ。第一大阪にや鮪がねえからね。俺あもうこの鮪が食ひ度くつて、どれほど難儀をしたか知れやしねえ。東京驛へつくとすぐ河岸へいつて、喉から出るほどやつたが、全くお袋に逢つたより嬉しかつたね。今夜も久しぶりで洲崎へでもいつてみようと思つて、此處まで來かゝるとお前のところのことを思ひ出したのさ。誰れかの話に又代が變つたとか聞いてたから、お前にやもう逢へねえものと思つて、暖簾をくゞつたが、かうして屋臺へ入つてみると相變らずなんでほんとに懷かしかつたよ。」
佐吉は不平さうな顔をして、
「誰れがそんな代がかはつたなんて縁喜でもねえことを云ひやがつたんでせう。仕様のねえ奴だ。この小松の屋臺はまだちつとも腐つちやるませんぜ。腐るどころかお庇護様でこの頃ぢや十五兩からの鮨をつけてゐますあ」と、肩を張つて云ふ。
安どんは四邊を見廻しながら、
「そりやまあ結構だ。さう云やあ屋臺も此節ぢや小綺麗になつたぢやねえか。どうだい、今日の仕込みは？」と、魚の入れてある箱の方を覗き込む。
佐吉は自慢らしく箱の蓋をあけて、
「旦那。いゝ晩にいらしつた。今日の鮪は全くようがすぜ。久しぶりでひとついゝところをおあがりなすつて下せえ。」と、云つて、態と落着き拂ひながら大きなシビの一塊を手許の板のうへへ持ち出す。半分切り取つたなかには中脂の旨さうな肉が電燈の光を受けてむちむち冷たく光つてゐる。
安どんは感心して、
「ふむ、矢張り江戸だなあ。」と、嘆息をつくやうに云ふ。
佐吉は薄刃でいゝところを斜に二片ほど長く切つて、肉の塊はそのまゝ箱へをさめて、今度は馴れた手つきでその鮪を幾片にもおろして飯につけだす。安どんは外套の袖のなかからぬつと手を出して、つける奴を片つぱしからさも旨さうにつまんで食べた。その手つきにも鮨食ひらしいいなせなところがあつた。佐吉は安どんの指に今迄つひぞ見なかつた太い金の指環がはまつてゐるのをその時初めて見た。着物も澁い結城お召の羽織が外套の間からちらちらみえてゐた。
そこへ家へ飯をとりにいつてゐた忠治が大きな飯櫃を背負つて、片手にはさつきの徳利をぶらさげたまゝ、聞き覺えた浪花節のひと節を口吟みながらぬうつと歸つて來た。安どんがゐるのを見ると、彼も顔を見知つてゐるので、
「いらつしやいまし。」と、云ふ。
安どんは鮪を頬張りながら、
「親方。こりやあの忠公かい？　恐ろしく大きくなりやがつたな。まるで見違へるやうだ。はゝゝゝ。」と、云ふ。
佐吉も笑つて、
「柄ばかり大きくなりやがつて、から役にや立たねえんでがすよ。」と、云ひながら、忠治が持つて來た飯櫃をとつて甲鉢へあける。そして徳利をそのまゝ又箱の傍へ片づけようとするのを安どんはふと見咎めて、
「おい、親方。相變らずやるんだねえ。はゝゝ。」と、笑ふ。

佐吉も苦笑ひをして、
「へゝ、これぱつかりはねえ。でも私も年のせゐか此頃は大して飲めなくなりましたよ。」と、云つて、又鮨をつけだす。
安どんは默つて笑つてゐたが、忠治の方をみながら、
「ぢや遊びもそろそろ忠公の方へ讓りかね。馬鹿に年寄じみちやつたぢやねえか。はゝゝゝはゝゝゝ。」
「はゝゝゝ。どうして、そつちの方はまだなかなかそんなこつちやござんせんや。此奴あ圖體ばかり大きくつてまだ大門から向うへ一足も踏込んだこともねえんでげすよ。ですから遊びの株はまだ讓れませんや。それに此頃は嚊が例の病氣で寢たつきりだもんでね。へゝゝゝへ。」
「うん、さうさう。内儀さんは病氣だつたたな。それぢや猶可けねえ。」と、安どんは鮨を口のなかでもぐもぐやりながら云つてゐたが、やがて茶のなくなつた湯呑をとつてにやりと笑ひながら「親方。お前さんのお仕着へ手を入れちや濟まねえが、どうだい、一杯讓つてくんねえか。はゝゝゝ。」と、云つてそれを差出す。
佐吉は惜しげもなく德利を出して、
「冷おやいけますまい。ちよつとつけませう。」と、云つて、手早くそこにあつた正宗の壜を洗つて、それへ一杯注いで、七輪の藥罐のなかへ入れる。そして二人は酒飲みらしく顏を見合はせて笑つた。
安どんは大阪の方の景氣のいゝことなどを話しながら鮨をつまんでゐたが、燗がつくと湯呑に一杯受けてぐうつと呷りながら、
「ふう、こりやいゝ酒だ。あゝ旨え。ついでだ、もう一杯貰はうかな。」と、云ふ。
佐吉は又酌をしてやつた。
忠治は呆れたやうな顏をして見てゐた。
佐吉はそのまゝ自分も思ひ出したやうに燗のあまりを湯呑へついで飲みながら、
「旦那、それであんた今何方です？ 又山佐へお歸んなすつたんですか？」と、訊く。
安どんはちよつと眉を動かして、
「いや、もうあすこへはいくら厚顏しくつても歸られねえぢやねえか。俺も今度大阪で少しばかり儲けて來たから、ひとつ何か商賣でも始めてみようと思ふんだが、やつぱり水で育つたものは駄目だね。自分ぢや可けねえと思つてゐながら、つい兜町へ足が向いちまひやがつてね。はゝゝゝ。」
「いや、そんなら結構でさあ、當節は大分株も動いてやすから、又ボロいこともござんせう。それでやつぱりおひとりなんですかい。」
「當り前さ。年は老つても女の子に不自由はしめえし、なにを好んで、足手まとひの女房なんか持つもんけえ。はゝゝゝ。ひとりものゝ方がどれくらゐ氣樂でいゝか分りやしねえやな。」
佐吉はしみじみ感心したやうに、
「全くでござんすなあ、私も旦那方のやうなお身分が羨ましうござんすよ。」と、うつかり云つて、ふと氣をかねたやうに忠治の方をみながら、「おい、藥罐に水を入れときねえ。」と、云ふ。
安どんはいゝ機嫌になつたと見えて、鮨に食つてしまつてもなかなかそこを動かうともしなかつたが、そのうちにこの近邊の若い者らしい二三人の客が來て食べるとすぐに歸つていつた。
安どんは醉つた眼をそこらへさまよはせながら頻りに舌なめずりをしてゐたが、ふいに、「おい、親方。どうだい、久しぶりだ、俺が奢るから今夜一緒に交際はねえか。」と、云ひ出す。
佐吉はにたりと笑つて、
「へえ、有難うござんす。だがまだこんなに飯

が殘つてゐやすから、これをどうにかつけつちまはねえぢやねえ。」

安どんは鼻の先で笑つて、

「ふん、そんな吝つたれなことを云ふなよ。小松鮨の佐吉さんぢやねえか。昔の馴染が來たんだあ。はゝゝゝ。大したことは出來ねえが、まあ洲崎なら大籬ぐれえ彈むよ。」と云つて、外套の隱嚢から革製の紙幣入を取り出し、そのなかから五圓紙幣を一枚ぬきだしてぽんと飯臺の向うへ放り出しながら、

「親方。これでもう山にしようぢやねえか。俺も大きなことを云ふやうだが、今度はちつたあ紙幣の匂ひのする體になつて歸つて來たんだぜ。」と、云ふ。態と見せびらかすやうに手に持つてゐるその紙幣入には紙幣がづつしりと入つてゐるらしかつた。

佐吉は氣前よく五圓紙幣を投げだされたので、すつかり氣を呑まれてしまつた。

「旦那。こんなに頂いちや多うござんす。」と、云つて、返さうとするのを、安どんはついと身を引きながら、

「まあ、いゝやな、とつときねえ。それだけで名代の小松鮨を山にしたと思やあいゝ氣持だ。はゝゝゝゝ。」と、鷹揚に笑つてゐる。

佐吉は一寸紙幣を額のところへ持つていつて、

「さうでござんすか、ぢやまあ頂いときます。」と、云つて、錢箱へ入れたが、下地はいくら遊びの好きな佐吉でもさすがに息子の手前があるので、少時の間考へて、やがて思ひ切つたやうに、

「それぢやお言葉に甘えてお伴をしますかな。はゝゝゝ。全く久しぶりでお目に懸つたんですものねえ、こゝでお斷りしちや實も花もありませんや。」と、自分に云ひ譯をするやうに云つて、態とそこらを片づけるやうな振りをして忠治の方へは顏を背けながら、

「おい、忠公。手前濟まねえけど、ひと走り飛んでつて、家から俺の唐棧の半纏をもつて來て呉んねえか。お袋の寢てゐる枕許の簞笥のなかへ入つてるから。もし分らなかつたら、おせいに聞いて、持つて來て呉んな。」と、云ふ。

忠治は又かといふやうな顏をしてまじまじしてゐたが、かういふ時に何か云ふときつと怒鳴られるので、やがて素直に出ていつた。

その間に佐吉はいそいそ廓のことなど話しながら、薄刃を洗つたり、七輪の火を始末したりしてゐたが、ふと思ひついたやうに徳利をとりあげて、

「旦那。まだお酒は澤山ござんすよ。もう一本つけやせうか。」と、云ふ。

安どんは手を振つて、

「いや、もう結構だ。行先が極りやなにもお前さんの飲む口まで張りあげる必要はねえさ。はゝゝゝ。先へいつて女の子のお酌で飲む方がいくらうめえか知れねえからな。」と、云ふ。

少時すると忠治は佐吉の自慢の唐棧の半纏を肩から引擔ぐやうにして息せき歸つて來た。佐吉は、

「うむ、御苦勞、御苦勞。」と、云つて、狹い屋臺のなかで上被をぬいでそれを羽織りながら、

「まあ、下の着物はこれでいゝだらう。ねえ、旦那。どうせ職人だあ、これで御勘辨を願ひます。」と、云ふ。

安どんは又鷹揚に笑つて、

「御勘辨どころぢやねえさ。豪儀な唐棧だ。いいこしらへぢやねえか。」と、云ふ。

佐吉は嬉しさうににこにこして、

「それぢやひとつお伴しませうかな。おい、忠公、手前それぢや氣の毒だが、店をしまつて屋臺はいつものやうに引込んどいて呉んな。それから薄刃はちやんと水をきつてな。……」と、云

ひ置いて、そのまゝ下駄を突懸けて、屋臺の外へ出る。

忠治は明るい電燈のなかへたつたひとり取殘されると、急に心細くなつたか寂しさうな眼つきをして、

「お父つさん。お前今夜歸つて來るのかい？」と、云ふ。

暖簾の外では安どんの崩れるやうな笑ひ聲が聞えて、

「はゝゝゝ。此奴あよかつた。この樣子ぢや親方、此節ちよくちよく家を明けるんだね。」と、云ふ。

佐吉は蓋ひの外で、

「はゝゝゝ、御冗談でせう。とんだところでばれちやつたね。」と、いつにない若々しい聲で云つて、

「おい、忠公。今更そんな餘計なことを聞くにや當らねえぢやねえか。旦那のお伴で行くんだもの、さうのめのめ泊つて來られるけえ。はゝはゝゝ。おつと、煙草入を忘れた。」さう云ふ聲と一緒に佐吉は醉の氣で赧れた紅い手だけをにうつと蓋ひの間から突込んで、槴の傍に置いてあつた煙草入をとつてゆく。

「そいぢや頼むぜ。」と、いふ聲も吹く風の底から恐ろしく威勢よく聞えて來た。

忠治はそつと蓋ひの間から顏だけ出してみたが、佐吉が安どんの後から笑ひ興じながら、いてゆく姿が眞白な月光の底に明るく見えてゐた。二人はやがて横町を大通りの方へ曲つて行つてしまつた。

その晩、いつまで待つても佐吉は家へ歸つて來ないので、裏町の長屋にある小松鮨では一時を打つと間もなく、忠治ももうどうせ歸つて來ないのだらうと思つて、戸をしめて寢てしまつた。店がひと間、二階が一間の狹い家なので、いつもおせいは二階へいつて病人のお袋の傍へ寢る、忠治は父親と一緒に店へ寢ることになつてゐた。その晩も忠治はあとで叱言を云はれるといけないと思つて、飯臺やら、籬のしてある鮨の笊やらを取散らしたなかへ親父の臥床だけは敷いといてやつた。そして毎晩のしきたりでは寢る前に一度づつ母親の便器の世話をしてやることになつてゐるので、それを濟ますと忠治はそのまゝ冷たい臥床へ入つて寢てしまつた。

いつもは晝間の疲れで枕に就くとすぐにぐつすり寢てしまふ忠治も、その晩はどうしたのか妙に眼が冴えて眠られなかつた。自分でも不思議に思つて、一生懸命に目を瞑つてみるがなかなか眠れない。風は漸次と吹き落ちて、戸外の月夜の明るさが戸の隙間から細い縞のやうになつて射し込んで來る。天井で鼠の荒れ廻る音と、遠い町を流れてゆく火の番の拍子が、す寂しく聞えて、寒氣は足先から水でも浴びせられるやうに迫つて來る。さうかうしてゐるうちに柱時計は眞闇なかで三時を打つてしまつた。

忠治は幾度か寢返りを打ちながらしまひには寒いので蒲團を引被つて自分の膝をぢいつと抱きしめながら丸くなつて寢てゐたが、そのうちにうとうとしかけたと思ふと、突如、戸外の方で誰かが、とんとんと激しく雨戸を叩く音が聞えた。初めは隣りの家のやうに聞えたので、忠治はそつと顏だけ蒲團の外へ出して聞き耳をたててゐたが、二度目のときにはたしかに自分の家の戸だと分つたので、きつと親方が歸つて來たのだらうと思つて、彼はしぶしぶ起き上つていつた。そして手探りに下駄をさがして土間へ下りると、いつものやうに呂律の廻らぬ聲で「俺だ。」といふ親父の聲を豫期しながら、

「お父つあんかい？」と、聲をかけてみた。

と、戸外では聞き馴れぬ聲が、

「あの、淨明寺横町に出てゐる小松鮨さんは此方ですか？」と、云ふ。

忠治は變に思つたので、急に聲を改めながら、

「へい、手前です。」と、答へて、がらりと戸を開けてみたが、それと一緒に白晝のやうな明るい月光が戸の外へ──今まで立澱んでゐたやうに、土間へ流れ込んで來る。その月光のなかに頭から膝掛けを被つた車夫體の男がぬつと立つてゐた。

忠治はびつくりしてまじまじその男の顔をみてゐたが、少しもその顔には見知りがなかつた。とその男はいかにも寒さうに歯の根をがたがたさせながら、

「あの私は洲崎の住吉樓から使ひに來たんですが、此方が小松鮨さんなら、あの親方が今急病でひどく苦しんでますから、誰方か大急ぎで來て下さるやうにつて頼まれて來たんですが。……」

と、云ふ。

忠治はそれを聞くと餘り思ひ懸けなかつたので悸乎として、

「なに、お父つあんが急病ですつて？」と、耳を疑ふやうに訊き返して、「急病つてどんな鹽梅なんでございます？」

「さあ、私は使ひでよく知りませんが、なんでもお酒を飲み過ぎて、どうとかしたつて小母さん達がさう云つてましたよ。兎に角、私や俥を持つて來ましたから、誰方か大急ぎでいらしつて下さい。」と、云ふ。

忠治はそれを聞くともうぢつとしてゐられなくなつた。此の前にも一度大酒を呑んで親父が血を吐いたことがあるので、又そんなことではあるまいかと思つて、そのまゝ寝着のうへから小松鮨の半纏をきて、二階へ寝てゐる母親や妹達には何んとも云はずに、雨戸をそつと外から閉めて、大急ぎで家を出ていつた。そして路次口まで出てゆくと、そこには紅い提灯をぼんやり點した一臺の俥が置いてあつたので、あとから隨いてきた俥夫に、

「おや若衆さん、濟みませんがどうか大急ぎで。……」と、云つて、それへ乘つた。

大通りへ出ると、月は丁度眞向うの家並とすれすれになつて、何處の屋根にもまるで雪でも降つたやうに霜が眞白に輝いてゐる。がらんとした電車道には片側だけ明るく月の光が射して、凍りついたやうな軒燈の列が寂しく明滅してゐるばかりで人ッ子ひとり通らない。

俥夫は寒いので一生懸命に駈けながら、途々自分が使ひを頼まれた次第を細かに話してくれた。丁度その俥夫がもう夜も更けたので、いつもの溜りへ歸らうと思つてぶらぶら空俥をひいて住吉樓の前まで來かゝると、なかからふいに聲がかゝつて、實は急病人があるからこれこれのところまで使ひにいつて來てくれと頼まれたのだといふ。その時住吉樓の玄關のところには小母さんらしい老婆と、外套を着た中折帽をかぶつた男が立つてゐて、その男は使賃だといつて一圓紙幣を一枚呉れたといふ。

忠治はその外套の男が安どんだと思つたので、

「それぢやその外套を着た旦那はどうしましたい？ その旦那が家のお父つあんを連れてつたんですよ。」と云ふと、俥夫は事も無げに、

「その旦那はもう一臺外の俥をよんで、私より先に大門を出ていきましたよ。なんでも醫者のところへいくとか云つてましたが、私がみてたらずつと黒江町の方へいつてしまひましたよ。」

と、云ふ。

忠治は、變だとは思つたが、その場合安どんに對してはそれ以上に考へる餘裕もなかつた。

金刀比羅樣の側の小橋を渡ると、銀色に光る海と、がらんとした埋立地の向うに紅い廓の灯が點々と輝いてみえる、白けた道を一散に走つてゆくうちに、朝歸りの客をのせた俥らしいのが二臺ほど擦れ違つていつたが、そのほかには往來の人影もなく、大門のところへ來てやつとまた三四臺の俥に逢つた。橋を渡ると、ひろびろとした廓の大通りには落ち方の月が眞向に射し渡つて、霜は道の面に冷たく光つてゐた。角の交番の前を通るとき、帽子も被らぬ忠治の姿を怪しく思つたか、鳥のやうにすつぽり頭から外套を引被つた巡査がじろじろとこつちをみまもつてゐた。

やつとのことで住吉樓の前で俥を下りると忠治は全く案内知らぬところなのでどうしていゝのか分らなかつた。俥夫は大戸の眞中のところに切つた小さな潜り戸を開けて中へ入つていつたが、やがてそこから顔だけ出して、

「さ、此方へお入んなさい。」と、いふ。

忠治は躍る胸を押へながらおづおづ入つていつた。

廣々とした玄關の板敷には電燈がたつたひとつ點つて、そこには不寢番の若い者が眞紅に火の熾つた大火鉢へ股火をしながら立つてゐたが、忠治が入つてゆくのをみると、唯默つて、此方へといふやうに眼顔で云ひながら正面の大階段をとんとんと上つていつた。忠治も仕方がなしにそのあとからついていつた。

階上へ上つてみると、中庭を取圍んだ四方の廣廊下にはひつそりと風寂びて、紅黄いろい燈の點つた同じやうな部屋が幾つとなく續いてゐる。ほの暗い薄闇からはさもだるさうな重ね草履の音がして思ひがけないところから花魁が寒さうに肩をすくめながら出て來たりする。

番頭は廊下の曲り角のところまで來ると、そこの一間の障子際にたつて、

「お初どん、お初どん、さつきの、……」と、聲をかける。

と、なかでは煙管をはたく音がして、ぶつきらぼうな聲が、

「あい、今いきますよ。」と、云ひながら、やがてそこの障子をあけて髪の薄い、痩せ呆けた一人の遣手婆さんが出て來る。そしてふと忠治をみながら、

「お前さん、小松とかいふお鮨屋さんから來なすつたのかい？」と、訊く。

忠治は丁寧に頭を下げた。

婆さんはそれを見るとさも迂散臭さうに彼の頭から足の先までじろツと見ながら、

「そいぢやお前さん、あの人の息子さんなんだらう。どうもよく似てゐるよ。」と、云つて、

「まあ、此方へいらつしやい。あの急病とは云つたけど、どうも容體がひどいらしいんだよ」と、ひつそりした聲で呟きながらそのまゝ忠治を連れて二三間ばかり先の名代部屋へいく。

そこの障子を開けてみると、なかには古びた屛風が立ててあつて、その陰に紅更紗のついたむくむくした蒲團が敷いてある。床の間もなければ、置いてある道具もないので、疊四疊の小部屋には十燭の電燈の光が侘しさうに澱んでゐるのであつた。

忠治は初めてこんなところへ來るので、少しは好奇心も働いて、ふと蒲團のなかを覗くとそこには父親の佐吉が少し蒲團からずり落ちたやうな形になつて、枕もなにもしずに寢てゐるのである。枕許にはコップをひつくり返しこもしたものと見えて、水のこぼれたあとが古疊にしみついて、その傍には火の消えた煙草盆が置いてあつて、父親の煙草入と煙草の吸ひさしたのが落ちてゐる。

忠治は蒼ざめた父の顔をみると怪乎として、いきなりその枕許へ膝を突きながら、

「お父つさん。お父つさん。どうしたんだね。」と、呼んでみた。

それでも佐吉は眉ひとつ動かさない。

忠治は變に思つて、猶顏をさしよせながら、

「お父つさん。俺だよ。忠治だよ。」と、呼んでみたが、佐吉は矢張り身動きもしない。

忠治は龜縮んだ手をぬつとのばして、佐吉の額へ觸つてみたが、それと一緒に顏色をかへて、

「やツお父つあん、大變だ。」と、泣き聲をたてながら、いきなり上の夜着をはねのけてみた。そして洗ひざらした浴衣一枚になつてゐる胸のところへ手を當ててみるともうそこらは薄氣味惡く冷えきつて、心臟はぴくりとも動いてゐない。佐吉はもういつの間にか死んでゐたのであつた。

遣手はそれをみると、これも蒼くなつて、腰を折りながら、

「どうかしたんですかい？」と、呟いたが、忠治と同じやうに手をのばしておづおづ胸のところを觸つてみると、「あツ。」と聲をたてて、すぐ後にぬうつと立つてゐる番頭の方を振返りながら、「おい、吉どん、た、大變だよ。此の人は死んでゐるツ。」と、叫ぶ。

番頭も吃驚したやうな顏をしてのつそり部屋のなかへ入つて來たが、もうどうすることも出來なかつた。

そこへ隣りの廻しでその聲をきゝつけてか、やがて父親の敵方らしい二十六七の年增の花魁が紅の入つた縞の部屋着をだらしなく引懸けて、眠さうな眼つきをしながら入つて來た。

「をばさん、お客樣どうかしたの？」と、立つたまゝで夜具の方を覗き込みながら訊いたが、婆さんは口をあぐあぐさせて、

「どうかしたどころぢやないよ、死、死んぢまつたんさ。」と、云ふ。

それを聞くと花魁も度膽をぬかれたやうな顏になつて、

「まあ、死んぢやつた！」と、云つたが、つい今しがたまで添寢してゐながら死んだと聞くと、まるで別な世界から來た人間のやうにさも氣味惡さうに袂で顏を掩つてしまふ。その肩は眼に見えるやうにぶるぶる慄へてゐた。

それから二十分ばかり經つて、病院の醫者と巡査がやつて來たが、もうその時には注射をすることさへ出來なかつた。佐吉は酒を飲みすぎて、そのために突然心臟痲痺を起して死んでしまつたのであつた。

漸次樣子を聞いてみると、その晩は表座敷で藝者を三人も招んで、さんざ騷いだ擧句、退過ぎになつて部屋へ入つたが、花魁が一度目の廻しに來てみると、佐吉は胸が苦しいといつて、俯伏せになつてうんうん呻つてゐたといふ。きつと飲み過ぎだらうからといつて花魁が寶丹をもつて來て飲ませてやると、それで少しは落着いたといつてゐたが、やがて又ひどく苦しみだしたので、お連れを起しにいつて、それぞれ手當てをしたのだといふ。その時までは誰れも死ぬやうな病氣ではないと思つてゐたのであつた。

遣手婆はおろおろ聲で、

「座敷ぢや久しぶりだといつて、章魚を踊つたりなんかして、面白さうに遊んでゐたすでたが、まるで夢みたやうだねえ。」と、云つた。

敵方の花魁は默つて、鶴龜々々といふやうな怯えた顏容をしてゐたが、忠治は父親の枕許へ坐つたきり、泣くにも涙が出ないやうに茫然としてゐた。

硝子戸になつた小窓にはいつの間にかもう蒼ざめた曉の薄明りが冷たくしみついて來た。

譃のやうに敢なく死んでいつた佐吉はその翌翌日町の世話役達が集まつて、形ばかりの葬式は營んで呉れたが、扨て困るのはあとに殘つた

唯一人の内儀さんと、二人の子供であつた。郵便局の貯金帳に殘つてゐるのはほんの仕込みの資本ぐらゐなもんなので、小松鮨ではどうしても何とか都合をして屋臺を出していかなければ家の者三人の口が干上るといふ有樣だつた。町の世話方は折角賣込んだ店なので然るべき職人を連れて來て店の株を貸すなり、又は歩合で商ひをさせるなりした方がいゝといふ説に傾いたが、しかしもうかう押詰つては差當つてどうにも出來ないので、兎に角、忠治ももう十七になることだし、どうにかして當分の間彼に屋臺を持たせるより他にいゝ思案はないのであつた。忠治も町方からさういはれると、心細いながら引受けない譯にはいかなかつた。

そのうちにその年ももう押つまつて、淨明寺では年の市の立つ日が來た。忠治は大方煮ものゝ作り方や、鮓の鹽加減なども見覺えてゐるので、河岸の方は佐吉の仲間だつたものに引廻して貰つて、やつとその晩から自分で屋臺を張ることになつた。

その日は萬事の取廻しが親父の生きてゐた時分のやうにはいかないので、忠治は早くからおせいを手助けに使つて支度をして、兎に角曲りなりにもいつもの立場へ屋臺を曳いていつた。

近邊の人達は氣の毒がつて屋臺の傍へ來てはいろいろ世話を燒いて呉れたりした。

「ほんとにまあ飛んでもねえこつたつたねえ。だがまあお前さんがかうやつて店をやつてける年頃になつてゐるからいゝやうなもんだけれど、さもなけりや病人のお母さんを抱へて大抵なこつちやないよ。」などと云つて、水を汲んで來てくれる内儀さんもあれば又、

「親父や腕はよかつたが、全く酒で生命をとられたんだなあ、お前も金刀比羅樣へ願をかけて一生酒だけは絶ちねえよ。」などと親切に言葉をかけて、暖簾を手傳つて釣つてくれる親爺もゐた。

日が暮れる頃にはそれでもやつと屋臺の形がついた。忠治は親父の坐つてゐた腰敷きの方へちよこなんと坐つて、魚の箱を開けてみたり、庖丁桶を置き換へてみたり、そはそはしてゐた。いつも忠治の坐るところには妹のおせいがお筒つぽを着て、不馴れな手つきで七輪の火を熾してゐる。

戸外は年の市へいく人でざわざわ賑つてゐた。暖簾の陰からみるといつになく女の往來が多くて、もうなかには注連飾りなどをぶら下げて歸つてゆくものもゐた。そして年の市の露店の出た隣町にはカンテラの火が紅く曇り空に映つてゐた。

そこへいろいろ世話を燒いて呉れた町方の人がぽつぽつやつて來て呉れた。お祭禮の時などには眞先に飛び出してゆく三番組の親分は湯歸りに手拭をぶらさげたまゝ、ひよつくら入つて來て、

「おゝ、忠公。結構だな。はゝゝゝ。さうやつてゐるとお前もいゝ職人のやうで何處か落ちついて來たぜ。爭はれねえもんだ、庖丁をもつ手つきが親父そつくりだなあ。」などと態と陽氣に聲をかけて、「おい、紅いのをひとつつけて呉んな。いつもは俺下りだが、今夜はお客樣だぜ。はゝゝゝ。」

忠治は笑ひながら鮪を切つて、飯につけて出したが、親分はそれをみると又笑ひ出して、

「おい、忠公、お前なかなかうめえが、これぢや握り方が大き過ぎるぜ。親父から聞いて知つてるだらうが、この鮨屋の職人てえものはその手つきひとつで店を潰すといつてな、此節のやうに米の高え時分にや氣をつけねえと、とんだ損をするぜ。はゝゝゝ。」

忠治はつゝましやかに笑つてゐた。

親方は五つほどつまむと、懐から湯錢の餘

りらしい銀貨を出して、
「さ、此處へおいとくぜ。お前もその分ならやつていけさうだ。まあ、いゝ鹽梅だ。まあせいぜい身を入れてやんなよ。」と、いつてぷいと歸つてゆく。
　忠治は親父の生きてゐる時分からやりつけてゐる「有難うござい。……」を云つて、それを送り出した。
　それから二代りばかり客が來たが、それが歸つていつてしまふと、しばらくの間客足がまるで途絶えてしまつた。
　忠治はおせいと二人で小さくなつて七輪の火にあたつてゐたが、夜が更けるに從つて、漸次と底冷えがして來た。蓋ひの簾間からみると空は暗く垂れ下つて、吹く風もないので、四邊の燈影や、白く乾ききつた路の面がくつきりと冷たく冴えてみえる。年の市のどよみはそこなかを空さうに流れて來るのであつた。
　忠治はいくら思ひ出すまいとしても亡くなつた父親のことが思ひ出されてならなかつた。毎晩親父が使ひなれてゐた庖丁や、山葵卸しなどを見るにつけても餘りに思ひ懸けないその死にやうが不思議に思はれてならなかつた。漸次と考へつめてゆくとどうしても親父はこの廣い世界の何處かに生きてゐるやうな氣がして、いくら打消してみても死んだとは思はれなくなつて來る。
　ふとおせいの方を振返ると、彼女も矢張り父親のことを考へてでもゐると見えて、黒眼勝ちな瞳をうつとりと据ゑて、何か頻りに考へ込んでゐる。そゝけた髮の毛には電燈の光がしみついて、見るから頼りなげなその姿が忠治には耐らなく可哀想になつて來る。
　忠治は默つてゐられなくなつて、
「おい、おせい公。矢張り伜が代りにやつてるんで、お客樣が來ねえなあ。」と、佗しさうな聲で云ふ。
　おせいはふつと我れに歸つたやうに顏をあげて、
「え？」と云つたが、蓋ひの隙からそつと町筋に並んだ屋臺の列を覗いてみながら、向うの與平さんとこにやお客が一杯入つてるね。矢張りお父つさんがゐないとお客をとられつちまふんだねえ。」と、心細さうに云ふ。その眼には子供らしい涙が光つてゐた。
　忠治はそれを聞くと自分までが急に引入れられるやうに心細くなつて、先のことよりも先つ當つて、毎日これだけの仕込みをしてこれが客がないために殘つていくとしたらどうだらうと思はずにはゐられなかつた。今は時候が時候なので鮪なぞは三日や四日置いたときに足がつくやうなことはなかつたが、それでも河岸へいく度に何かしら仕込みをしなければ威勢が悪いやうな氣がするので、漸次仕込みの種だけが嵩まつて、金が拂へないやうになつたらどうしようと、そんな子供らしい心配が胸一杯に溢れて來る。と、今度は又漸次と客を他の店に取られ、病人の母を抱へて路頭に迷はなければならなくなつたらどうしようといふやうな不安がそれと一緒に先々とひろがつて來て、忠治は身柱もとから水を浴びせかけられたやうな突詰めた思ひに引入れられていつた。
　そこへ今度はすぐ家の路次口にある筆屋の老人がひよつこり暖簾をくゞつて來て、
「今晩は。」と、云ふ。
　忠治はふつと我れに返つて、
「小父さん。被來い。」と、態と勢よく云つた。
　筆屋の主人はそれを見ると皺だらけの顏でにこにこ笑つて、
「はゝゝゝ。もうすつかりお父つあんの代りが出來るなあ。いゝ鹽梅だ。どうだい、お客は

元どほりの顏がみえるかい？」と、云ふ。
忠治は揉み手をしながら、
「小父さん、矢張り私ぢや可けねえと見えて今夜さつぱりお客様がないんですよ。」と、訴へるやうに云ふ。
筆屋の主人は苦もなささうに白い髯を弄りながら笑つて、
「はゝゝゝ。さうお前、店を出した晩ばかりぢや分りあしないやな。第一まだお前の手性をみたお客はいくらもないんぢやないか。なにも今夜ひと晩で氣を腐らすにや當らないさ。」
「だつて、親父が死んだ噂を聞いて、お客様がみんな他へいつちまつたんぢやねえかと思つて、私や心配でならねえです。」
「いや、さう心配するがものはないさ。これほど賣込んだ屋臺だし、あゝして思ひ懸けもなく親父が亡くなつちまつたんだから、お客様はお前が可哀想だと思つて、却つて來て下さるさ。商賣といふものはさうしたもんぢやないよ。」
と、云つて、忠治がつけてだす鮨をむしやむしや食べながら、「こりや結構々々。仕込みから何からお前さんがひとりでやんなさるのか？」と、云ふ。
忠治は恥かしさうに、
「え、まあ、どうやら私がやるんでござんすけど、今日の鮨は辛過ぎやしませんか。」
「いや、これなら上等に。これだけやれりやお前さんの腕で立派にやつていけらあねえ。ほんとにしつかり勉強して、お母さんに安心させてやんなよ。」と、云つて、筆屋の主人はその次の鮨に手をつけながら、「しかし佐吉さんも馬鹿なことで生命を落したもんさねえ。かういふことがあるから私はふだんから酒をつゝしめと云つてゐたんだ。お前さん達のやうな大きな子まであるのに、女郎屋の二階で死ぬたあよくよくだ。ほんとに笑談ごとぢやないよ。お前さんなんかも此れからが大事だ。偶にや女郎買ひにいくのも仕方がないが、酒だけは飲みなさんなよ。」
さう云つてゐるところへ又一人外套を着た脊丈の高い男が入つて來た。年の市の歸りとみえて、太い〆飾りを外套の翼のなかからみせてゐる、それは山佐のすぐ近處にある勝傳といふ材木問屋の主人だつた。ふとみると後には屋臺に脊丈の屆かないくらゐな男の子を連れてゐる。
忠治は古い馴染の客なので、
「いらつしやい。」と、云つて、筆屋の主人の方にそのまゝにして置いて、茶を注いで出しながら何をつけませうかといふ顏をしてみせる。
勝傳の主人は子供の方を向いて、
「おい、坊や。お前何をたべる。海苔卷がいゝだらう。」と、云つて、「ぢや海苔を卷いてくんな。」
忠治は棚のうへからブリッキの海苔箱を下ろして、卷きにかゝつたが、勝傳の主人はそれをぢつと見ながら、
「おい、忠公。今度は代變りがして、お前がやるんだつてな。ほんとに此間は又とんだことだつたなあ。俺や店の若え者から聞いて吃驚したよ。」と、云つて、熱い茶を啜る。
忠治は飯を握つて海苔のうへへのせながら、
「へえ、どうも有難うございます。どうか又相變らず御贔屓に願ひます。」と、ませたことを云ふ。
勝傳の主人は大きく合點いて、
「なんだつてえぢやねえか、なんでも山佐の安と一緒に遊びにいつて、その晩いつちやつたつて話だが、親父のずべらにも呆れるぢやねえか。遊びの好きな男だつたから、まあ親父とすりやそれが相當な死にやうかも知れねえ、はゝゝ。」と、笑つて、出來た海苔をひとつづつ

子供につまんでやつて、——だが親父も人をみて交際やあいゝのに、相手が悪いやな、安のこつたから、後のかけ構なしに無闇に飲ませやがつたに違えねえ。仕様のねえ野郎だ。」

笹屋の主人は氣澤山に口を入れて、

「ほんとでござんすなあ。家にや病人の内儀さんや子供が二人もあるのにそれを引張り出すなんて随分思ひ遣りのねえ人もあつたもんですよ。そのためにとんだことになつてしまつて後に殘つたものは法返しがつきやしませんや。」

勝傳の主人はそれを輕く受けて、

「全くですとも。」と、云つたが、又忠治の方を向いて、鮪を註文しながら、——それでなにかいその あとで安が顔出しでもしたかい?」と、訊く。

忠治は首を振つて、

「いゝえ、親父が死んだ晩にも私がいつた時分にやもう彼在いませんでしたが、そのあともぱつたりお見えになりませんですよ。」

勝傳の主人は唇を引歪めて、

「それ見ねえ、ぢや彼、たしかに又風を喰つて遁けちまひやがつたに相違ねえ。腹の悪い奴に逢つちや叶はねえなあ。」と、云ふ。

忠治は鮪をつけながらそれを聞き咎めて、

「ぢやあの旦那はどうかなすつたんですか?——

——どうかなすつた處ぢやねえさ。お前達は知るめえが、彼奴は山佐を失策つてから大阪へいつてやがつて、彼地でもなにかよくねえことをして土地にゐられなくなつたんで、又此方へ舞戻つて來やがつたのさ。さうして、今度はあの木場の松井た、あすこの若造をだましてなんでも四日ばかりの間に二千兩からの金を卷き上げてそのまゝ姿を隱してしまひやがつたのさ。ほんとに太い野郎ぢやねえか。」と、云ふ。

笹屋の主人は眼を丸くして、

「へえ、それがこゝの親方を連れ出した人なんですか? まあ、驚いた奴があるもんだな。」と、話に引込まれてゆく。

忠治も呆れて、庖丁を持つ手をやめながら、

「旦那、そりやいつ頃のことなんでございませう。親父が死んだあとでござんすか?」と、思はず乘り出して聞く。

勝傳の主人は鮪の脂のついた指を擦りながら、

「待てよ、お前んとこの親父の死んだのはいつだつけな。」

「この十七日の晩でござんす。」

「うむ、十七日? それぢや死ぬ前の晩にそれがばれたんだ、ぢやきつと卷き上げた金を懐に持つてやがつて行きがけの駄賃にお前の親爺を連れ出しやがつたんだな。」と、いふ。

忠治はさう云はれると、その晩安どんがいやに紙幣びらを切つてゐたのを思ひ出した。づつしりと紙幣の入つてゐさうな財布を出してみせたりしてゐたのが、今見るやうに眼に殘つてゐる。あの晩もそんないきさつで親父を連れ出したのかと思ふと、中折帽を眼深にかぶつた安どんの顔が親父を殺した下手人のやうな恐ろしい顔になつて心の底に映つて來た。

勝傳の主人は安どんが松井の若旦那をだまかして、材木の金を巧く卷き上げた話などをしながら鮨を食べてゐたが、十ほど食べてしまふと、氣さくな調子になつて、

「おい、忠公、仕込みはいゝが、握りがどうも親父ほどにいかねえぜ。鮨屋つてえものは難かしい商賣だ。氣を入れて、暖簾に傷をつけねえやうにしろよ。とんだ親父をもつたおかげでお前までが苦勞をするなあ。」と、云ひながら手を洗つて、懐から大きな財布をだして、——いくらだ?」と、いふ。

忠治はさういはれると何だかしんみり人の情が身にしむやうに思はれて、思はず、聲を落しながら、

「三十四錢頂きます。」と、云ふ。
勝傳の主人は五十錢玉をひとつ放り出して、
「ぢやまあ一生懸命にやんねえ。さあ、坊やいから。」と、云つて、暖簾を出ていつたが、その途端に、
「おゝ、寒い。おや、到頭降つてきやがつたな。」
と、いふ聲が外から聞えて來た。
筆屋の主人も續いて歸つていつてしまふと、あとは又急に寂しくなつてしまつた。店には電燈ばかりがやけに輝いてゐるやうで、鮪の脂の色が妙にうら悲しく見える。ふと聞耳をたてると戸外では何だか急に人足がざわつき出したやうなので、忠治は何氣なく蓋ひの隙間から顏だけ出してみると、さつき勝傳の主人が云つたときには氣にも留めなかつたが、戸外ではいつの間にか大粒な雪がちらりちらりと降つてゐるのであつた。往來の人は春を祝ふくさぐさの買物を抱へて、袖を合はせながらそのなかを急ぎ足に驅けてゆく。
「あゝ、到頭雪になつちやつたな。」と、忠治は口のなかで呟いて、今日はもう商賣もこれつきりかと思ふと、ひとしほ心細くなつて來た。
雪は暗い空から絶え間もなく降つて來て、店明りのなかへ出るとほの白くちらちらと彼方此方へ躍り狂ひながら漸次と激しく降りまさつてゆく。
忠治はそのまゝ首を引込めて、
「おい、おせい公。雪が降つて來たぜ。今夜はいよいよアブレだな。」と、態と調子を變つて云つたが返事がないので、ふと後を向くと、おせいは餘り晝間體を使つたので疲れが出たか、屋臺の障子のところへ倚りかゝつて、こくりこくり居眠りをしてゐるのであつた。
忠治はそれを見ると可哀想になつて、いつも親父がするやうに、又饂飩でも奢つてやらうかと思つたが、飯臺の下の錢箱を見ると親父の時分と違つて、銀貨の數が數へるほどしか入つてゐなかつた。
それから二時間ばかりの間に六七人の客があるにはあつたが、その晩は考へてゐた半分も賣れなかつた。そしてその客が歸つていつたあとにはもう往來にも雪のせゐかめつきり人通りが薄くなつて、暖簾をくゞつて來る客はひとりもなかつた。
忠治は時々眼を覺ましては又居眠りをしだすおせいをそのまゝにして置いて、自分ひとりちよこなんと七輪の前へ坐つてゐたが、人足が薄くなるにつれ四邊はいつになくひつそりして來て、氣は滅入つてゆくばかりであつた。もし親父がゐたら今頃は又酒を買ひにやらかる時分だなあとふつと思ひ出すと、彼は何かなしに急に胸が迫つて、思はず汚れた上被りのうへへぼろりと涙を落してしまつた。
暖簾の蔭から見ると路面にはもう雪が眞白に積つてゐる。ぢいつと聞いてゐると、屋臺の上蓋ひに當る雪の音は喘ぐやうにさらさらと鳴つて、その寂しい音とともに深川[illegible]横町の夜は忍ぶやうにひそやかに更けて行くのであつた。

雜吟（一）

東風吹いて枯葉に光る小砂かな

寂しさやまた崩れたり雲の峯

行々子鳴きやめば川の月夜かな

硝子玉のぢッとしてゐる夜寒かな

母の手

一

「お母さん、お母さん。いま假寢をしちや風邪をひきますよ。もう三時間ばかしで着くんだから、どうにかして[illegible]被在い。」と、浩一は、車窓の横木へ當てがつた空氣枕の中へ半ば顔を埋めながらうとうとと眠りかけてゐる母親の耳へ口を寄せて、小聲でも優しく呼覺ますやうにした。母親はその聲を聞くと、夢のうちに目を動かして何やら苦くさうな氣勢をみせたが、やがて薄く眼を瞬いて浩一の方を見ながら力なげに笑つて、「あゝ、私やついうとうとしてしまつた。もう何時頃だい？」

「いま八時打つたばかしです。」

「さうかい……おや、まだ降つてゐるんだね。」と、母親はその儘[illegible]けに指先で皺に[illegible]れた手の甲を撫でさすりながら淋しい雨の音にうつとり聞き入つてゐたが、いつの間にか又ぐたりと首を曲げて果てしない夢路に入らうとした。

浩一は少時の間耐力のないその様をぢつと瞶つてゐた。そして心の底で、

「ひどく疲れてゐるんだな。」と傷々しげに呟いて、今起すのも却つて思ひ遣りのない仕業だと思ひながら、そつと手をのばして今にも肩から滑り落ちさうになつてゐるセル地の肩掛けをもとのやうに懸けなほしてやつた。

列車は文目も分かぬ夜の闇に閉ざされた下野の原野をひた走りに走つてゐるのである。[illegible]々と[illegible]く轍の音とゝもに車窓を打つ雨の音も凄まじく、車の動搖につれて或ときは奈落の底へ墜落してでもゆくやうな淋しい噪音が床の下から湧き起つて來る。車室のなかは人[illegible]息に蒸されて、噎せかへるやうな煙草のけむりと汗の匂ひが濃く空氣を彩つてゐる。そしてこゝばかりは別な世界のやうにほゝけた薄暗い洋燈の光がものの影をすゝけて暗く、朦朧と照らし出してゐた。

乘客は寸隙もないほどぎつしり込み合つてゐた。座席から溢れた多くの男女は床の上へ坐つたり、開き戸へ背を凭せかけたりしながら旅疲れて大抵はさまざまな醜い恰好をして睡りこけてゐた。或ものは腕木から倒れ落ちさうになつて、また或ものは人の荷物の上へ掩ひかぶさるやうになつて、しかも前後も知らずにぐつすりと寢入つてゐた。また隅の方では壜詰の酒を呷りながら大聲で喋舌り散らしてゐるものもゐた。

浩一は所在なさに煙草をとり出して吸ひながらぼんやり眠つてゐる母親の横顔を眺めた。年頃の苦勞にひどく萎ばんた顔のあたりには薄く汗が浮いて、暗い光のはひかゝつた右の頰は鉛のやうに蒼ざめて見えた。深い眼の窪みやうも今更のやうに眼について、ぢつと考へてゐると、平常から親思ひの彼の胸には、情ないやうな云ひ知れぬ寂しさが自づと溢れて來た。

この母親は彼にとつて此の世のなかに殘された、たゞひとつの最も貴重な寶ものであつた。數多い血縁のものどもも大方は死に絶えて今では母親を除いては彼の他にたつた一人の妹が殘つてゐるばかりなのである。併し其の妹も女學校の教員といふ職務のために體を縛られて、遠い札幌の町に獨棲みしてゐるので、年のうちに一度二度顔をあはせる事はあつても、逗留の

日數が限られてゐるため肉緣の温かい情をしみじみと味ひ得ることは極めて稀で、事實彼はこの四五年の間、母親とたつた二人きりで極めて寂しい生活を續けて來た。それに亡なつた父の殘して行つた僅かな資産は彼の學資を償ふにさへ不十分だつたので、彼等は常に不足勝ちで暮らさなければならなかつた。殊に彼が肋膜を冒されて三月餘りも病院通ひをした時なぞは爪の先に火を點すやうなさゝやかな生活さへ持ち耐へかねて、母親は彼に隱れて自分の衣類や持ち物まで金に代へるやうな憂きめさへみた。それ故、彼等二人の間には世間並の親子が持つてゐる感情以外に或深い深い羈絆があつて、子供の時から、彼の生活は殆んど母と云ふものを中心にして築きあげられたと云つてもいゝ位であつた。

彼は今年の七月になつてやつと苦しい學生生活を脱することが出來た。學んだ學校も私立大學であつたし、彼自身の才能も決して人にすぐれてゐるといふ方ではなかつたが、併し生活が彼に與へた異常な努力は結局の幸福を齎して、卒業の成績が並はづれて良かつたため、彼はすぐに大きな紡績會社の事務員として就職することが出來た。會社でも彼の眞面目な、細心な勤めぶりが殊の外重役の氣に入つて、待遇も最初から極めてよかつた。

八月の月なかには會社の定例にしたがつて彼の受持の課にも休暇が出た。殊にその年は對清貿易が盛んであつた爲め、事務は多忙を極めてゐたにも拘らず、課長は彼に十日間の休暇を與へた。彼はその短い時日を利用して平生から一種の狂熱をもつて夢想してゐたやうに、母を連れて旅へ出ようと企てた。それ以來毎夜毎夜、母親と一緒に寂しい晩餐を濟ます時、話の主題は必ず旅行の目的地の評議に落ちて行つたが、結局彼は母が常々から一生に一度は是非參詣してみたいと云つてゐた善光寺を中心にして、甲斐信濃の山々を歴遊して歩くことに決した。彼は、會社以外の端仕事や、飜譯などによつて得た四十圓ばかりの貯蓄を引出して、それに母には隱して窃に友人から融通して貰つた二十圓ばかりの金を加へて旅費をとゝのへ、さまざまの旅支度も自分から氣を配つて十分に整へた。

休暇になる三日ばかり前から彼はもう夜の目も睡らぬほど亢奮してゐた。綠に燃える山々や、美しい水の流れる溪流が幻のやうになつて彼の眼の前に往返した。そしてその都度母親の蒼ざめた頰に浮ぶ滿足の微笑を夢想すると、彼はもう耐らなくなつて躍る胸をぢつとおさへしめながら人前も憚らず嬉しさうに笑ひ崩れた。

愈々出發の日が來た。四五日以前から降つたり、照つたり怪しげな空模様が打續いてゐたが、その日も生憎夜半からまたひそかな雨脚の音がしとしとと軒先に傳つてゐた。一途に思ひ詰めた彼はそんなことには少しも頓着せず、暗いうちから飛び起きて、子供のやうにそはそはしながら、家中を歩き廻つた。やがて夜が全く明けはなれると、彼は雨に氣怯れして心を據ゑかねてゐる母親を叱るやうに引き立てながら飯田町の停車場へ向つた。

プラットフォームに立つた時、母親は吹きつける濕つぽい風に眉を顰めながら「こんなお天氣ぢや先が思ひ遣られる。」と、いかにも氣が進まぬらしく呟いて、暫らくの間人氣の薄い列車の前へ佇んで躊躇してゐたが、彼はそれをしみじみ聞き入れもせぬやうに、

「なあに、こゝには雲脚が早いんだもの、二十里も出離れりや青空が見えまさあ。」と、浮き浮きした調子で勇ましく云ひ放ちながら一足先へついと身輕に乘り込んだ。母親も詮方なしにすごすご傘をすぼめてその後に續いた。

列車は煙のやうな小雨に降りこめられなが
ら灰色の陰鬱な空の下を、西へ、西へ、と馳つていつ
た。郊外の寂しい四月の雑木林の想出や、
る武藏野へ、武藏野の果てから國境の山地へ、そ
して九時少し過ぎには脚下を去來する雨雲の斷
れめから遙に桂川の溪谷を見下ろしながら深
い深い地底を貫いてゆく恐ろしい笹子の隧道へ
さしかゝつたが、それを出ると浩一の豫言した
通り空にはところどころ青空が見えはじめて、
緑に飾られた甲斐の盆地には眞夏の生々とした
日の光が斑をなして輝き渡つた。その爽やか
な、明るい光景を見た時、彼等母子の胸には、
幸福といふよりも寧ろ限りない感激が一時に襲
ひかゝつて來た。浩一は鞄のなかから地圖をと
りだして、折々雲の間から紫がかつた美し
い姿を現はす富士や赤石の連山を一々それに引
較べながら、慄へる指先で母親に説明して聞か
せてゐたが、終には胸に泛らつて來る歡喜の
ために却つて言葉もとぎれて、唯茫然と車窓か
ら移りゆく山河の色に見惚れてゐた。黙つた人
のやうなその兩眼にはいつしか涙が一杯に溢
れてゐた。

其晩は甲府に泊つた。その翌晩は諏訪。かう
云ふ風にして彼等の旅路は何の障もなく漸次、
と捗つていつた。諏訪からは又々雨に降り罩め
られる憾みはあつたが、一度旅へ出て度胸の据
つた彼等にはそれも愉樂を妨げるほどでもな
く、或場合には却つてしんみりとした懐かしい
旅情を増す種にさへなつて、汽車の中にゐる時
も、旅宿でほの暗い洋燈の影に枕を並べて臥
る時も、彼等は常に幸福に醉つてゐた。

當の目當ての長野へ着いたのは丁度東京をた
つてから五日目のことであつた。旅馴れない二
人は此處まで來るとさすがに今迄經驗したこと
のない旅疲れを覺えて、何處となく力ぬけのし
たやうな哀深い心持に囚はれたが、それでも宿
へ着くとすぐ俥を命じて、車軸を流すやうに激
しく降りしきる雨のなかを善光寺へ向つた。

雲を突くやうな大伽藍、四時絶ゆることのな
い香華の薫り、かうした嚴かな聖地の光景を
眼のあたりに見た彼等の歡びはどんなであつた
らう。年來の宿望が叶つたばかりではない。住
み馴れぬ世界の榮光が何となく心の底へ滲み
とほつて來るやうに思はれて、黒つぽい本堂の
疊の上へ立つた時には五體の血肉が一時にひき
絞られるやうに感じた。

丁度其日、本堂で何かの法會があつたので、彼
等も法唄を聞いて、幾多の善男善女とともに亡
き人の數に入つた父親や、その他血縁の者達の
冥福を心から祈つた。殊に信仰といふ傳習的な
習慣に馴らされた母親は異常な感激に心を奪
はれて、聲高に念佛を唱へつゞけながら、何時
までも佛前を去らうとはしなかつた。彼もそれ
を強ひて急き立てようとはせず、内陣の奥深く
點つた蠟燭の光のほの暗く瞬くさまを眺めなが
ら、ぼんやり戸外の雨の音に聞入つてゐたが、母
親は折々頭をあげて涙を拭きながら、

「あゝ有難いことだ。これでもう何時死んでも
安心だ。」と夢現のやうに呟いてゐるのを聞く
と、彼の胸には譯もない悲しみが迫つて來て、
漸々と鉛のやうな冷たい狹霧の底へ沈んでゆく
やうな心地になつた。そして堂の下の胎内めぐ
りをした時、冥府のやうな闇がりのなかで極樂
へ導くといひ傳へられてゐる鐵の錠を頻りに探
しあぐんでゐる母親の聲を聞くと彼は耐らなく
なつて、そつと懐中電燈を點してまで、彼女に
それを握らせようとした。その爲めに彼は却つ
て母親の怒りを買ひさへもした。

長野では雨と疲勞の爲めにまる二日間逗留し
た。そして次の日の朝早く、もう一度善光寺へ
參詣して、今度は信越線で愈々歸京の途につい
た。

い宗教上の慰安を得た彼女の頭には何か大きな思ひがけない變化が來なければならない筈である。丁度重荷を背負つて長い坂路を上りつゞけてゐた者が、それを下ろすと同時に激しい疲勞と眩暈とを感ずるやうに、彼女の頭には今取留めのない弛緩と、衰弱が襲つて來てゐるのではあるまいか、そしてそれが直ちに死と云ふ恐ろしい結果を生む原因になりはしまいか、と思ふと、彼は今迄忘れてゐたさまざまな前例まで思ひ合はせて、今にもその事實が迫つて來るやうな強迫を覺えながら、心を絞られるやうな氣持になつた。そして、その次の瞬間には死んだやうになつて寢てゐる母親の顔をみるさへ耐へきれなくなつて、「お母さん、お母さん。」と怯えたやうな息づまつた聲で呼びながら、冷たくなつてゐるその痩せた手をそつと握つた。

熟睡してゐる母親は眼を覺まさうともしなかつた。却つて對向ひの座席に假睡をしてゐた學生風の若い男はその聲に驚かされて、ふつと眼をあいて、彼の方を怪訝さうに見つめた。彼はそれを見ると、また急に氣恥かしいやうな、咎められてゐるやうな氣になつて、思はず握つてゐた母親の手をつきはなして、車窓の方へ眼を逸らした。

窓の硝子は殘らず人蒸息で白く曇つてゐた。車が搖れる度に小さい水滴がその面から生れて幾條となく細い縞を描きながらたらたらと滴り落ちた。彼は不透明なその硝子をとほしてみるともなく外をみた。すべては漆のやうな暗闇であつた。時折、その闇のなかから、田畑のうへに氾濫してゐる水の面だけが、ほの白く滲んだやうに浮き出してみえた。人里のありさうな平地を駛つてゐるたびに、唯一つの燈火もみえず、機關車から吐き出す火の粉が闇にまぎれてついついと流星のやうに飛んでゆくばかりであつた。疲勞と心配とで、極端まで感傷的になつた彼は、涙の出るやうな突詰めた氣でいつまでもいつまでもそのさまを見送つてゐた。彼は一刻も早く東京の家へ辿り着いて、この苦痛を逃れ度いとあせつた。あせれば躁るほど彼の心には不安の陰がより深く喰ひ入つて來た。

小山驛へ着くと、停車場は非常な混雑であつた。驛員の一人は、まだ停車もせぬ先に車室のなかへ飛び乘つてきて、利根川大氾濫のため東京行は不通であることを聲高に喚きまはつた。乘客はその聲で一齊に夢を破られた。はじめは信じられないやうな、きよとりとした顔容をして互に顔を見合はせてゐたが、それが事實であることを確めると、俄に困惑の色が彼等の頬にのぼつた。或ものは絕望したやうに深い嘆息をつき、或者はまたうはづつた聲で激しく鐵道を罵つた。

生れて初めてかうした出來事に出逢つた浩一は、ほとほと途方に暮れて、どうしていゝかまるで法がつかなくなつてしまつた。彼は度を失つたやうな聲で、

「お母さん、お母さん。起きて下さい。又不通なんですよ。」

母親はその聲にびつくりして眼を覺まして、怯えたやうに四邊をみまはしながら、

「あゝ吃驚した。もう着いたのかい。」

「小山へは來たけど、東京行は又不通なんですつて。」

「え、不通？　そりや困つたね。」母親はそはそは襟をかき合はせながら眼の色を變へた。

「今聞いたら何時開通するか分らないんださうです。」

「困つたねえ、どうしよう。」

二人は顔を見合はせたまゝ、云ふべき言葉もなくて吐息[illegible]ついてゐた。

他の乘客は口々に小言を云ひながら立上つて、そろそろ車を[illegible]はじめた。彼等も詮方なしに

て息を切らしながら頻りに愚痴をこぼした。

多くの人の行く方へ、あとをついてゆくうちに、やがて彼等は古い驛路らしい本通りへ出た。出水に襲はれてゐる上に無數の旅客が入り込んでゐるので、町は何處へ行つても活氣立つてゐて、賑やかな店明りや、客を送り迎へする商人の聲のなかにもまだ宵の口のやうな生々した氣持が含まれてゐた。そして忙しげに往來してゐる人々の間には、大きな荷車に家財を積んで在の方から避難して來る農民の群や、提灯を振りかざして街をとんでゆく水防夫の群があつた。

彼等は町の本宿に散在した宿屋を、一軒々々訪ねて歩いた。何處の家でも店口まで客が溢れてゐて、同じやうな挨拶で斷られた。木賃宿のやうな穢らしい安宿まで探したけれども矢張り駄目だつた。そのうちに町は漸次寂れて來て、何時の間にか畑や、森の續いた暗い町端れへ出てしまつた。と、母親は突如路傍の草叢へくづをれるやうに屈んで、

「あゝ、私はもう死にさうだ。早くどうかしてお呉れよ、こんなことなら旅へなんぞ來るんぢやなかつた。」と息をきらしたから泣きさうな聲で訴へた。それを聞くと浩一は急に胸が迫つて、顫へる手先で母親の背を抑へながら、

「今そんな弱音を吹いちや駄目です。さあ、お立ちなさい。もう一度探してみませう。若し泊る處がなかつたら警察へでもなんでも頼んで探してもらひます。ほんの雨さへ凌げりやいゝんだから。……」

彼はそこで母親の手をグツと握りしめ、背負ふやうにして支へながら又もと來た道へ引返した。二町ばかりも引返したと思ふ頃、彼はとある小路から出て來る一人の巡査を認めた。と、彼は云ひ知れぬ落着を覺えて、つかつかとそつちへ走り寄つて、

「一寸お願ひ致します。」と、哀願するやうに呼びかけながら、事情を縷々と訴へて宿の周旋を頼んだ。

巡査も初めは迷惑らしい顔をして默つてゐたが、さすがに氣の毒になつたと見えて、

「兎に角此際のことですから、果してあるかないか分りませんが、まあ探して見ませう。」と、云つて、角燈を振り照らしながら先へ立つた。

町の中程まで來かゝると巡査は兩側の家々をとみ、かうみしてゐたが、やがて宿屋と書いた古行燈の出た穢らしい二階家の前で、立止つた。そして彼等をその門口へ待たせて置いて、中へ入つて何やらごとごと談判してゐたが暫らくすると黒い暖簾の下つた戸口から顔を出しながら小聲で、

「何分何處も一杯で迚もいゝ宿は手に入りませんから、此處でまあ辛抱しなさい。」と云つて、彼等を内へ導いた。

店口のやうになつた狹い土間には小穢らしい五十恰好の老婆が突立つてゐて、惡丁寧な言葉で彼等を迎へた。そしてバケツに水を汲んで來て、足を濯がせた後で、彼等を正面の廣階段から二階へ案内した。階段をのぼりきると、狹い廊下が左右に續いてゐて、その兩側には、小さく仕切つた部屋が幾つも並んでゐた。その中からは、話聲や、猥らな笑ひ聲が洩れて來て、入口の障子には男と女の怪しげな姿が影繪のやうになつて映つてゐる處さへあつた。

彼等は疲れきつたやうな足音をたてながらその前を通つて、一番奥まつた狹い四疊の部屋へ案内された。そこで荷物を卸すと、浩一も母親も背が拔けたやうに座蒲團の上へ打倒れてほつと嘆息をついた。

三

物置のやうな狹い湯殿で一風呂浴びて、汗臭

たが、やがて漸う静かになつたかと思ふと今度はどうしたものか忙しく鼻を啜りはじめた。その響音から推すと、彼女はどうやら聲を呑んで歔欷をしてゐるらしかつた。

浩一は限りない好奇心を刺戟されて、眼が何時の間にかはつきり冴えてしまつた。息を殺して女の一擧一動をも聞き洩らすまいとした。彼は悲しげに歔欷してゐるのを聞くと耐らなくなつて、幾度か聲をかけようと焦つたが、喉に痰がからむやうで氣恥かしくてどうしても言葉が出て來なかつた。どんな顔をした女だらう。どういふ身の上で、どうした譯でこんな宿屋で落ち合ふことになつたんだらう。疑ひはそれからそれと枝を插して、何時際限がつくとも知れなかつた。彼は自分でも小説を書いてゐるやうな氣持になりながら、この二人の姉弟が親のない憐れな孤兒で、今は錢の蓄へもなく、明日の糧をどうして得ようといふやうな果敢ない身となつて、東京の方へ流れてゆくのではあるまいかとも思つてみた。するとそれがもう次の瞬間には洪水といふ大きな背景とともに確乎とした事實であるやうに思はれて來て、それに對して同情の深い態度で救助の途を講じてやつてゐる自分の姿がはつきりと想像の面に浮んで來た。しまひには面窶れのしたしをらしいその女の顔容までが今眼の前にみるやうに濃い夜の闇のなかにくつきりと描き出された。彼は留途のない空想に悩まされながら渇いた喉を何時迄もごくりごくりとかすかに鳴らしてゐた。

四

翌朝早く眼を覺ますと小窓にはもう爽々しい朝日の光が一面にさしかゝつてゐた。障子の破れめから見える大空は、昨日までの陰鬱な雲模様をけろりと忘れてしまつたやうに、蒼々と澄み渡つて、時折煙のやうな軟らかな白雲がふはりふはりと流れて行つた。

浩一は枕の上に起上ると、事件の多かつた昨日とはまるで別人になつたやうな輕快な氣持を感じた。そして或る強い期待を以て隣りを覗みた。果して部屋の隅には二人の姉弟が床を並べて斜めに寢てゐた。姉はまだ二十歳を過ぎてゐまいと思はれる年恰好で、夜の目の想像とは全で似てもつかぬ面長な何處か強さうなところのある娘だつた。弟の方は十一二で、下膨れのした可愛らしい顔容をした子だつた。浩一はそれをみると何となく張合ぬけのしたやうな失望を覺えて、何かまだその後に隠されてゐるやうな思ひに悩まされながら、やつと目方、眼を据ゑてゐた。二人とも前後も知らぬやうにぐつすり寢込んでゐた。殊に姉の方は昨夜の疲れが一時に出たとみえて、中形の浴衣にメリンスの帯をだらしなくしめた儘いかにも取亂した姿をしてゐた。寢亂れ髪のまつはりついた顔から、額口へかけて、脂汗がしつとり滲み出て、ところどころ蚊に刺された跡が紅く腫れあがつてゐた。

浩一はそれを見てゐるうちに漸くと體中を針で刺されるやうな心持になつた。部屋中に籠つた寢息いきれや、汗臭みた寢衣がひやひやと肌に觸れる不快さも打忘れて、うつとり娘の寢姿を眺めてゐたが、やがて何と思つたか、またごろりと横になつて忙しげに瞬たきしながら、體を棒のやうにこはばらせて、態とらしい欠伸をした。

間近な停車場で消魂しい汽笛が鳴り響いた。その物音に驚いて彼はまた起上つた。そして無意識に姉を呼び起さうとしたが、中々起きさうもないので彼はそれに惱まされたやうな顔をしながら立上つて障子をあけてふらふらと廊下へ出て行つた。

狹い階段を傳つて洗面所へ降りると、そこにはもう朝歸りの客がたて込んでゐた。宵の酒氣

が醒めきれないと見えて、彼等の體からは饐えたやうな酒の匂ひが發散して、どの眼も、どの眼も一樣にどんより血ばんでゐた。彼等が白粉の斑らに剝げ落ちた醜い顏の女達と戲れあひながら、朽ちかゝつたじめじめした流床の上で顏を洗つてゐる樣子をみると、浩一は手水を使ふ氣もなにもなくなつて、すぐもと來た方へとつて返した。そして階段を二三段上りかけると、又氣が變つて、裏口の方へ拔けて、そこから戸外へとび出してしまつた。

朝日にきらきら輝いた泥濘道を荷車や、駄馬に追はれながら停車場の前までやつて來ると、もう砂利を敷きつめたそこいらの廣場は白く乾いてゐた。そして陽炎のやうな水蒸氣の立昇る間には旅客の群が一杯に溢れてゐた。人込みを分けて待合室へ入ると、正面には大きな掲示が張つてあつて、子供の書くやうな拙い字で墨くろぐろと古河、栗橋間汽船便午前十時より開始仕り候と書いてあつた。それを見ると彼は急に東京の土を踏んだやうな心安さを覺えて驛員から船に乘る手續きを聞き糺したあとで又ふらりと停車場を出た。

歸りには足の向くがまゝに停車場の横手から線路端の桑畑へはいつた。青々と生ひ茂つた葉の上には、露の玉がぎらぎら光つて、落ちさうな草いきれが地の面から一面に湧き上つて來た。涼しい軟風が渡つて來る度に、葉摺れの音がまるで甦つた喜びを訴へてゐる囁きのやうに聞きなされた。彼はいつとも知れず出水のことも旅のこともすつかり打忘れたやうに自然と心が輕くなつていくのを覺えて、澄みきつた空氣を深く吸ひ入れながら頻りに口笛を吹きはじめた。と、ある小川のほとりまで來かゝると、彼は突如下駄をぬいで膝頭まで水の中へ踏み入れながら、脚早に流れてゆく薄濁りのした水を掬つて顏を洗つた。

宿へ歸つてみると、もう母親も合宿の姉弟も身じまひを濟まして茶を啜りながら彼の歸りを待ちあぐねてゐた。人懐こい母親はいつのまにか男の子まで手なづけて、何くれとなく他愛のない雜談を交してゐた。

娘は彼が入つて來るのを見ると、約ましやかに居坐ひをなほして、

「どうも昨晩はお喧しう御座いましたらう。いくら申して聞かしても聞きませんもんですから。……」

と、吃りながら云つて、丁寧に挨拶した。

彼は言葉の脚をとられたやうにどぎまぎして、

「いゝえ、どうしまして私こそ。」と、つかぬ返事をしながらその儘赧くなつた顏を母親の方へむけて、

「ねえ、お母さん、今日は愈々東京へ歸れますよ。巧くいきや午過ぎには上野へ着きます。」とそはそはしながら云つた。

「さうかい。そりや好い都合だねえ。」と、母親も昨夜とはまるで違つた好い血色を見せて氣輕に云つて、「お前もう停車場へ行つて來たのかい。まあ、まあ、手廻しのいゝこつたね。そして汽車は何時から通ひ出したんだい?」

「汽車の方はまだ駄目です。何しろ橋手前の堤防が百間の上も崩れてゐるつて云ふんですから、とても三日や四日ぢや通じますまい。」

「ぢや又今日も汽車で乘り廻すのかい、厭だねえ。」

「いゝえ、さうぢやありませんよ、お母さんも氣が早いなあ。」と、浩一は殊更らしく高聲で笑つて、「船で利根を渡るんです。朝の十時から古河と北の先の栗橋の間に汽船が出來るつて云ふからそれで向河岸へ渡るんです。」

「船? まあ、船と聞いてもぞつとするよ。こ

流木を押しはなさうと試みた。船頭等は、

「危い、危い。」と口々にそれを制したから、今度は力一杯に綱を張つて船を廻さうとした。その途端にどうしたはずみだつたか、艫の方の櫓を滑いでゐた船頭の櫓綱がぷつりと切れて、彼はひとたまりもなく渦まく水流のなかへ顛倒に陥つてしまつた。

それでなくてさへ浮足だつてゐた乗客は、それを見ると、

「あれ、あれッ。」と、狂気のやうに叫んで、一斉に立上つた。彼等は、

「立つちやいけない。立つちやいけない。」と叫ぶ船頭の聲も耳に入らぬやうに狼狽へまはつたが、その中に船は全く流れに横を打たれるやうな位置になつて左舷が俄にぐつと傾いた。その刹那、立つてゐた乗客の大部分は體の中心を失つて一度によろよろと傾いた左舷の方へ雪崩をうつて倒れた。

「あれ、お母さん。危いッ。」と、浩一は人の下に押されながら、無意識に母の肩へ手をかけた。母はその時失神したやうな眼つきをしてぢろりと彼の顔をみたが、その次の瞬間にはもう舷を越えて溢れて来る濁水が彼女の腰を浸してゐた。そして鋭い、女の絶叫が耳のそばで聞えたかと思ふと、彼の體は何ものかに抱きかゝへられたまゝさつと横なぐりに水のなかへ突落されてしまつた。

暫らくの間は無我夢中であつた。ふと気がついた時には彼自身でも漸次と深い水の底へ沈みつゝあることが朧げに分つた。水は絶えず彼の體を揉むやうに重苦しく流れてゐる。今にも胸を壓潰されさうな息苦しさが全身に貫ひかゝつてゐる。彼は唯激しいその苦痛から遁れようとして必死になつて手足を踠いたが、何者かの手のやうなものが體の邊にしつかり絡んでゐて、その爲めに體が自由にならないのをそれとなく感じると、彼は俄に渾身の力を揮つてそれを突き離さうとした。併し彼が踠けば踠く程却つてそれは腰のあたりまで執念深く絡りついて来てどうしても離れようとはしなかつたが、最後に兩足に力を籠めて底に踏みつけると、しまひには頭顱ががんぐわんになつて碎けるやうにするすると流れ去つた。それと同時に彼は體が急に軽くなつてゆくやうに思はれて何時となく再び気が遠くなつてしまつた……

六

浩一は、頬の邊に、猛烈な日光のやうな暑さを感じた。何處か遠い方で大勢の人聲がわアわアと大聲をあげて喚いてゐるやうな響をかすかに聞いたが、それと同時に朧げな意識が少しづつ蘇つて来て、誰かが遠くの方から、

「おーい、おーい。」と彼を呼びとめてゐるらしいのを感じた。彼は一時も早く水の上へ浮び出ようとして、手足を矢鱈に踠いたが、どうしたものか五體は釘づけにされたやうにこはばつてゐて少しも動かない。……

その時、彼は臍のあたりに氷の塊の冷たさを覚えた。その冷たさは瞬く間に頬から眼へ抜けてゆくやうに思はれたが、やがて彼の體を重苦しく抑へつけてゐた磐石のやうな力は少しづつ減じて行つて、何とも云ひやうのない心地よさが彼の全身に流れて来た。

彼はぽつかり目を瞭いた。ぼんやりした眼界には鬚の生えた顔ときらきら光るコップが見えてゐた。

「あなた。あなた。お気がつきましたか。私の聲が分りますか。」その鬚の生えた顔がはしけに動いて、歎くやうな細い聲で云つた。

彼はその言葉が自分に對して云はれてゐるのを明らかに知ると、大きな聲で返事をしようとしたが、舌も歯もすつかりとれてなくなつて

船の覆沒した事實が鐵道員の言葉と一緒に漸々とはつきりして來た。船が流木に引懸つて、船頭が水中へ落ちて、……その瞬間に至つて彼の心には電光のやうな勢で母と云ふ觀念がひらめいて來た。

「母はどうしましたらう？　母は。」と、浩一は突如蒲團の上へむつくと飛び起きて、眼をきよときよとさせながら狂氣のやうに叫んだ。

「え、お母さん？」と、鐵道員は意外な言葉にグッとつまつて、呆氣にとられたやうな顏をして浩一の方を見たが、醫員は素早くその話の脚をとつて、場馴れた落着いた聲で、

「隣りの十二號室においでです。何か御用ならお言傳しませうか。」

「えゝッ、助かつたんですか。ほんとですか。」と、浩一は思はず膝を乘り出してきつと醫員の顏を見据ゑたが、やがて嬉しさうに顏を崩して、「あゝ、まあよかつた。私は又助からなかつたのかと思つてひどく吃驚しました。」とその儘また力なげにがつくりと枕の上へ頭を落した。

そして額口に流れ出た冷汗を拭きながら甘えるやうな聲で、

「一寸招んで頂けますまいか。」

「いや、今は可けません。あの方は少し心臓に異狀がありますから滅多に體を動かしては却つて惡いです。明日の朝でもお逢ひになつたらいゝでせう。」と、醫員は飽くまで色を動かさずに云つた。

鐵道員は漸う醫員の言葉の裏に潜んだ意味を了解したらしく、傷々しげな顏容をしてそつと浩一の方を偸み見てゐたが、やがて挨拶もそこそこにして室を出て行つた。

其頃から浩一の頭には少しづつ妙な錯覺が起つて來た。水中に沒しようとした刹那の激しい恐怖が再び彼の心に返つて來て、滿だかな濁水が丘陵のやうに聳くなつて幾度か彼の眼前に襲ひかゝつて來るやうに思はれた。その都度彼は臥床からがばとはね起きて、血の氣のなくなつた顏に悲痛な表情を浮べながら、頻りに泳ぐやうな妙な手つきをした。

それが靜まると、今度は母親のことが再び彼の念頭に浮んで來た。彼女はもう疾うから船になんぞ乘らずに歸京してしまつてゐるやうに思はれて、彼が潜り戸をあけて歸つてゆくと、茶の間の暗い小窓からいつものやうに顏を出して、眼鏡越しに此方をぢつと見据ゑながら、

「お歸り。」と、云ふ。……

彼は瞳を大きく瞠つたまゝその不條理な妄想を一心になつてみつめてゐた。そして頻りに譯も分らぬ言葉を口走りながらにたにたと氣味惡く笑つた。醫員は眉を顰めながらその樣を穴のあくほど見てゐたが、やがて當惑したやうに眉根を寄せながら枕許にあつた牛乳に黄いろい散藥を混ぜて彼に飲ませた。そして頻りに眠ることを勸めた。

彼の妄想は又枝をさした。今度は母親と一緒に上野の停車場を出てゆく場面である。母は蒼ざめた勢のない顏をして土産ものを汽車中に置き忘れて來たことを頻りに悔んでゐる。彼は何んだか涙のでるやうなもの寂しい氣持になつて、駄目だとは思ひながら、

「それぢや私が行つて探して來ませう。」と、云つて、ふと振顧ると、すぐ後には例の合宿の娘が立つてゐる。彼はそのまゝいつまでもその娘と二人で譯も分らぬことを親しげに語り合つた。……そのうちに彼は又胸を壓すやうな重苦しい疲勞を感じて、昏々と深い眠りに落ちていつた。

夢のなかの遠くの方で帛を裂くやうな泣き聲が聞える。今にも息の根を止められさうな男の子の泣き聲である。

「姉さんがゐないよう。姉さんがゐないよう。」

その聲が漸次と近づいて來るに從つて、言葉がはつきり聞きわけられるやうになつた。

「姉さんがゐないよう。姉さんがゐないよう。」

彼はふと其聲に眠りを覺まされて、蹴飛ばされるやうにがばと撥ね起きた。もう夜は深沈と更け渡つて、四邊には不可思議な靜けさが、ぢつと立ち罩めてゐる。黑布で包んだ電燈の光は室内を陰晴と照らし出して、その餘映は天井の面に幻のやうなぼやけた怪しげな象を描いてゐる。

耳を澄ますと、何處か、遠いところで出水の警鐘が頻りに亂打され、カーテンの隙間からみえる眞暗な野の末には幾つとなく星のやうに紅い篝火が燃えてゐる。凄まじい風の音が時折さあツと硝子窓へ吹きつけて來た。

「姉さあん。姉さんがゐないよう。」その聲が今度は風の音に紛れながらすぐ隣室の邊に聞えて來た。泣き疲れて嗄れはてた憐れな聲だつた。

彼はその咄嗟、洪水がこの家まで襲ひかゝつて來たのだと思つて慄然として、

「大水だ、大水だッ。おい早く起きて呉れんか。大水だ。」と、火のつくやうに激しく叫びながら、すぐ傍に寢てゐる看護婦の臥床のうへへばたりと倒れかゝつた。と、看護婦は何と思つたか慌てて飛び起きて、片手に枕を抱へたまゝ廊下へ出る戸口の邊をうろうろしたが、彼は忽ちその後へ飛び縋つて、

「早くお母さんを起して來て呉れ。早く逃げんと迚も助からんぞ。」

看護婦ははじかれたやうに戸を開けて外へ飛び出した。その時漸う明らかな意識が彼女の頭へ返つて來たと見えて、彼女はきよときよと四邊を見廻しながら、

「あゝ、吃驚したわ。水なんか來やしないぢやありませんか。ありや風の音ですよ。」と、云つて、笑ひながらまた室へ歸つて、靜かに戸を閉ぢようとした。

「馬鹿を云へ。水だ。水だ。あれ、あんなにざアざア云つてるぢやないか。早くお母さんを起して來て呉れ。」

「お母さんて誰方です？」

「十二號にゐる僕の母だ。分らない奴だな。」と、彼は嚙みつくやうに激しく怒鳴つて、突如彼女を肩で突き退け、腰に毛布を卷きつけたまま室の外へ駈け出して行つた。そして破れるやうな音をたてながら隣室の戸を開け放した。

室のなかには昨夜の合宿の男の子がたつたひとり臥床の上にしよんぼり坐つて、明るい電燈の光に照らされながらしくしく歔欷いてゐた。彼はそれをみると躍り上らんばかりに驚いて、

「あツお母さんがゐない。ど、どうしたんだ。」と、吃りながら叫んで、氣もそゞろに毛布の裾をずるずる引摺りながら、今度はその先の室の戸を開けてみた。そして順々に各室を探して廻つたが、到頭何處にも母親の姿を見出すことは出來なかつた。

後からおどおどしながら隨いて來た看護婦はその狂氣した姿をみると恐ろしさにふるへながら、醫員から注意のあつたことも何も打忘れて、

「何處をお探しになつたつて、そんな方は病院にはゐませんわ。」

「ゐないことがあるもんか。僕は確かに先刻逢つたんだ。早く先生のところへ行つて呼んで來て呉れ。金はいくらでも遣るから。」と、彼は看護婦の方へ縋り寄つて、その手を激しく握り緊めようとした。彼女はその恐ろしい形相をみるとゾッとして、突如悲鳴をあげながら當直室の方へばたばたと逃げて行つてしまつた。

跡に取り殘された彼はうはづつた聲で、
「お母さん。お母さん。」と、呼びながら廊下をうろうろして廻つたが、その時また、
「姉さんがゐないよう。」と、ひとしきり喉も張り裂けんばかりに泣き叫ぶ男の子の聲が聞えて來た。と、彼は先刻小耳に挾んだ鐵道員の言葉をふつと思ひ起して、あの子の姉は溺死したのではあるまいかと云ふ考へが直覺のやうに浮んで來たが、その刹那、彼の念頭には病的な不思議に透明な意識が返つて來て、船の沈むとき彼を見た母親の物凄い顏がすつと現はれてきた。それと同時に彼の胸に縋りつかうとした母の手を思ひ出した。水の底で蹴放した柔かい物體を思ひ出した。そして次の瞬間に母親の救はれてゐることが全然不可能であるのを朧げに覺ると、彼は突如、
「あツ、あツ、お母さんが。……」と、息のぬけたやうな響のない聲で呻いて、その儘聲を放つて號泣しはじめた。そして激しく身悶えしながら十二號室の前まで蹌けてきたが、その時彼の顏面はもうこはばつたやうに痙攣つて、頬から顎へかけて笑ふやうな泣くやうな異樣な表情がさつと走つたかと思ふと、やがて大きく開いた唇から白い泡をたらたら吐き出しながら彼は前のめりにばつたり倒れて了つた。

看護婦が當直の醫員を起して再び歸つて來た頃には、彼はもう全く人事不省に陥つてゐた。唯時々、
「うむ、うむ。」と、かすかに呻いて、指の先をぴくぴく痙攣させるばかりで、涙にみちた兩眼は死魚の眼のやうにどんより据つてゐた。

醫員は慌てて幾滴かの注射を試みた。併しその都度彼はごろごろと喉を鳴らしてたゞ粘々した泡を吐くばかりで一向に蘇生しようとはしなかつた。
「もう駄目だ、心臓痲痺を起したんだ。」と、醫員は暫らくしてから投げ出すやうに云ひ放つて、ぼんやり突立つてゐる看護婦の方を顧みて、
「早く小使を起して、警察へ報せにやつて呉れ。」と、命じた。

看護婦は返事もしずに眼を瞬つてまじまじしてゐたが、薄暗い光のなかで刻々に死の色に掩はれてゆく浩一の物淒い顏をみると、俄に遑い恐怖に襲はれて、物に憑かれたやうにわツと激しく泣きはじめた。

（明治四十五年六月作）

歩く（二）

それがいつの間にか日課のやうになつて、一日のうちに少なくとも一里は歩かなければ、どうも氣持が惡かつた。そこで東京へ歸つて來てからも、天氣のいゝ日には出來るだけ爽かな外氣の中を歩き廻る。それが此頃では習慣になつて、一日に一時間づつは必ず歩くやうになつた。

さうなると健康はめきめき恢復して來た。うまいものを食つて、酒をのんで、自動車にのつて、夜更しばかりしてゐた時代とはまるで見違へるやうに體が輕くなつてきた。それと同時に精神力も眼にみえて確かになつて來た。かうなつたのも、全く歩くことの餘禄だと思ふ。人間も四十になると、やつぱり附け燒刃がはげて、本然の眞骨頂がいやでも露出して來るものだとしみじみ感じてゐる。ブルジョアジーなんていふものは體質と性格によつてどうでもなるものである。私なぞは素朴な、枯淡なそして日本人的な無産派的生活の方へしらず知らずの間に誘はれていくのらしい。

島原

行く春のなごりを惜しませるやうな小雨の降り罩めたある日の午後、谷崎君と私は三條の岡本氏のおふるまひで島原の角屋へ行つた。島原といへば数多い京都の色街のなかで最も古めかしく、そして最も憐れな姿で衰殘の名殘りを留めてゐる唯一の廓であることは云ふまでもない。祇園や先斗町の妓樓々々が美しい夜を彩る古風な軒行燈をはづして奇怪な電燈に變へたり、夕涼みの床を飾る團扇のゆらぎを扇風器にかへたりしてゐる今日の世に、此廓ばかりは傾きかゝつた武家門のやうな大門で日に月に推移してゆく時代の潮騒を喰ひ止めてそのなかで靜かにしかも不可抗な力に詛はれながら漸次と廢頽の死屍と化しつゝあるのである。そして祇園で名代の万亭が在來の誇りを擲つて電鈴で婢衆を呼ぶ安價な便宜に倣つてゐる間にも、この廓を代表する角屋では依然としてほの暗い紙燭の灯影に亡び行く果敢ない美を擁護して、辛うじて殘された過去の全盛を偲ばせてゐるのである。日本に唯一の美しい太夫道中の行はれるのもこゝである。春雨のそぼふる夜、新芽をふいた柳の樹蔭に梅川忠兵衛の悲劇を思はせるやうな軒行燈のほのめくのもこゝである。淡い月影の烟る朧夜に錦繪からぬけ出て來たやうな太夫衆が三つ足の木履を踏みならしながら練り歩くのもこゝである。總て徳川期の平民藝術の巨匠が精根を盡して描き殘した艶麗ななかに何處か頽しのかゝつた美の形態の或るものは全く木乃伊の姿と化してこの一郭の衰頽した色街に埋沒されてゐるといつても過言ではないのである。はじめて京都の土を踏んだ時から私にとつてはこの廓をみることが已み難い願望のひとつになつてゐたが、幸ひ岡本氏の好意によつてその願ひは最も適當な時期に於て實現される機會に到達したのである。

その日は一座五人、態と西京の場末に俥を駛らせる無趣味を避けて、七條の停車場から僅か五分ばかりの丁場を汽車で丹波口へ出て、そこから島原へ入つた。遠くにみえる東寺の塔や、本願寺の甍は暖かい雨に烟つて畑につづく朱雀の町には石炭殻をしきつめた泥濘路のところどころに緑草が眼にたつほど青々と萌えたつてゐた。

廓へ入ると狹い陰鬱な街筋にはそれでなくてさへ懶い晝さがりの寂しさが一面に漂つて絃歌のぞめきはもとより女の笑ひ聲ひとつ聞えない。何處の店先をみても降る雨の音に閉ざされて、まるで住む人もない空家のやうにひつそりと靜まり返つてゐる。そして軒並につゞいた紅殻塗りの細目格子はいづれも黝んだ汚色をみせて眞青に色づいた籬のなかの柳の新芽だけが我がもの顔になよなよと靡いてゐる。

角屋は廓の端れに近い小路のなかほどの處にあつた。間口の廣い二階建で、細目格子で包まれた表がかりには慘ましい古びかたが露骨にみえてゐても、さすがに島原で二百有餘年の間全盛を誇つてゐた家だけあつて、何處かどつしりした落着きが窺はれるやうに思はれた。眞中に開いた門を入ると正面には暖簾のかゝつた暗い臺所口がみえて、石鋪きの道を右へ曲つた突當りに大玄關があつた。流連の客でもあるとみえて、軒下には長山と太夫の名を書いた黒塗りの大長持がかたよせてあつた。後で仲居に聞いてはじめて分つたが、太夫衆が茶屋入りする

時には夜具から枕箱まで一式この長持のなかへ入れて、丁度藝妓が褄取りをするやうに若衆がさし棒をいれて出先へ擔ぎ込むのださうである。

式臺をして玄關に立つて訪ふと、やがてひつそりした奧の方から鐵漿をつけた赤前垂の仲居が出て來て、

「お越しやす。どうぞお上りやして。」と、淑やかに挨拶しながらいかにも鷹揚に私達を迎へた。そして自分から先に立つて、暗い廊下を幾曲りかして一番奧まつた「松の間」といふのに私達を案內した。

そこは二十四五疊も敷からうといふ陰氣な大廣間で九尺床のかゝりから書院までまるで大寺の黑書院へでも入つたやうである。薄暗いなかに襖や壁の煤けた金箔がちらちら冷たく光つてその上に描かれた名工の墨繪はもう識別し得られぬほど朧げになつてゐる。そしてその廣間をとりまはす緣は檜の一枚板で、餘程巧みに上庇を釣りかけたものと見えて角々には一本の柱もない。正面に見渡す庭には臥龍の姿をした松の古木が匍ひまはつて、築山の片影には自然木の上に建てられた瀟洒な茶室がみえてゐる。私は何よりも先づ數寄を凝らしたその結構に驚かされてしまつた。

小さな婢衆は入れ換はり立ちかはり座蒲團や煙草盆や茶器を運んで來た。いづれも松にゆかりのある意匠が凝らしてある。私は初めて見る珍らしさに一々それ等を嘆賞しながら苦い茶を啜つてゐたが、そのうちに岡本氏の提言で私達は一通り部屋々々をみせて貰ふことになつた。

婢衆の後について暗い階子をのぼると、二階にはさまざまの名のついた客間が幾間となくつづいてゐた。扇づくしの「扇の間」簾づくしの「簾の間」それから綴錦のやうな緞子を張りつめた「緞子の間」それ等がいづれも薄暗い光のなかに各意匠を競つて展開して來る。私は寺の寶物でも見せて貰ふやうな氣持で見て廻つた。四邊はしんとして緣端の板の軋む音までが家ぢうに響き渡るやうな氣がする。そしてどの間をみても黴くさいやうな古めかしい匂ひが充ち溢れて、朧げに明暗する結構の美がいつともなく私を不可思議な情感のなかに誘つて行つた。煤けた壁や、古木の柱にとめ兼ねる古昔の放蕩の歷史や、蘭麝の匂ひにつゝまれた當時の全盛がやがて想像の綾絲に織り出されて、遊樂の巷にかゝる贅を盡すことの出來た二百五十年前の豪奢な泰平の世のさまが今更のやうに思慕された。そしてそれと同時に江戸の衰微を悲しむ詩人の嘆きよりもこの島原の生ける抒情詩により深い、より慘ましい哀傷を覺えない譯にはいかなかつた。

一巡見終ると、今度は「松の間」から二階の「青貝の間」へ席を移して、愈々酒宴が開かれた。すべて青貝の螺鈿を施した古い器具に取圍まれて杯を汲み交してゐるうちに私の胸には漸々と現實を脫離してゆく感激が燃え上つて來た。唐風の欄を越えて彼方には洛西の菜畑が昔ながらの眞黃いろな花筵を敷いて、雨に煙る山々の姿までが畫中の趣をなしてゐる。そして二人三人と數を增して來る藝妓の姿もいつか現實性を奪はれて、四邊の物象を點景に渾然とした畫趣のなかに溶けてゆくやうに思はれた。

黃昏はいつしか消えて、朧げな紙燭の光が間內にゆらめく頃になると一座の人々の顏にも柔らかな酒の醉ひがぼうつとのぼつて來た。藝妓達と語り合ふ言葉も彈みがちになつて、ふとした話のきつかけから、末は大方取留めもない洒落になつたり、地口になつたりして、一座は引入れられるやうに誰からともなく賑やかに笑ひ崩れた。そしてしめやかに降りまさる雨の音と

ともに興趣は熟して、古めかしい島原の廓の夜は次第々々に更けて行くのであつた。

　いよいよ太夫のおかしが始まると云ふので仲居頭らしい鐵漿をつけた丸髷の紅前垂が次の間から蒔繪の臺にのせた杯を持つて入つて來た。そしてそれを座敷の眞中から少し下つた處へ置いて、燭臺を彼方此方に置きかへたり、白蠟の心を剪つたりしだすと、さすがに噪ぎきつてゐた嫖客達も鳴りを靜めて、一座は何ものかに壓しつけられるやうに妙にひつそりと聲をひそめてしまつた。殊にさうした古式な廓の習慣を初めてみる私は、燃えさかる好奇心と期待とに胸を躍らせて、ぢつと息をつめながら今か今かと待ちあぐねてゐた。

　やがて三間ばかり距てた遠くの廊下の方で板の上を滑つて來るやうな跫音とシャリシャリといふ不思議な物音が幽かに聞えて來た。ひそひそ四邊を忍んで笑ふ女の聲がひと足ごとに近づいて來たが、やがて次の間の紙襖が音もなくすうつと開いて、そこから漆のやうな隣座敷の暗闇がそつと差し覗くやうに見えて來た。と、その瞬間、暗中にきらりと輝くものがあつて、右左にかすかに搖れたかと思ふと、すぐ前の曲彔ノ模様を象嵌した衝立の陰にほの白い女の顔がぽつと浮き上つて來た。立兵庫の髷に插し簪した澤山の笄をきらきら輝かしながら少時の間其處に立ち澱んで衣紋をつくろつてゐたが、やがて歌麿の線の纖細よりも、豐國の内容を持つたやうな太夫が煤けた砂壁の前へその全幅の姿を現はして來た。そして燻んだ五彩にいろどつた裲襠の模様のなかに縫つた金絲だけを鮮やかに浮き立たせて、胸のところへ幅廣に結んだ帶の下へ兩手を置いたまゝ、ほの暗い燭臺の光に照り映えながらしづしづと歩み出て來て、

　杯を置いたあたりへ來ると、その儘ゆつたり腰をおろして長い裲襠の裾を片手でしなやかに捌いた。そして右の手で靜かに杯をとりあげて、木彫の面のやうな厚化粧の横顔には如何なる表情をも動かさず、肩から腰、肩から手先への線の流れをまるで浮世繪に現はれた姿態のやうなさまざまな形に崩しながら杯ごとの型をはじめた。

　私は釘づけにでもされたやうに恍惚とそのさまを凝視した。ひとつの姿態から次の姿態へ移る度に私の心には何んともいへぬ讃嘆の念が喘いで來た。私の眼に映る太夫はもう廓の廢頽した空氣のなかに生活してゐる一個の無智な娼婦ではなかつた。元祿の末期から文化文政へかけて爛熟しきつた妖麗な藝術の假象で、殊に繪絹の面に現はされたその精髓を最も偶成的に、そして最も傳統的に解したり、結びつけたりしながら夢幻の美を織り紡ぐ蜘蛛の姿のやうに見えたのであつた。

　紙燭の光のなかには、杯を置いた太夫が今度は裲襠の裾を引捌いて、春信の女の如くに不自然な、而も肉感的に極めて美しい嬌態をしながら斜めに體をひきゆがめた。

「あんたは〻、光雲太夫はあん。」と、仲居頭が手をついて、滲入るやうなかぼそい聲で殊更に語尾を消しながら云ふと、それを機に太夫は初めて人間に歸つたやうな色つぽい眼許で一座をきつと見渡しながらすうつと立上つた。そして少しぬげかけたやうな艶な裲襠の後姿をみせて、その儘またすらすらと衝立の後へ入つて、次の間の暗闇のなかへいつともなく搔き消えてしまつた。

　私は見殘した夢の跡を追ふやうに心の底に倒影して來るさまざまな印象を取纏めようと力めながらそのあとをぼんやり見送つた。冷たい暗闇の底には砂壁の面に嵌め込んだ青貝の螺鈿がちらちら猫の眼のやうな光をほのめかして、煤けた柱にも、欄間にも、天井にもすべて古

の榮華を思はせるやうな追憶的な氣持が充ち溢れて來た。そして滅びゆく過去の幻影が殊更に惨ましく、悲しく私の心を刺衝して、ひつそりとした間内の更けさの底には時の流れ落ちてゆく寂しい響がありありと聞えて來るやうな氣がした。

「えらう感心しとゐやす。一遍お杯しとくれやす。」と、側にゐた老妓が笑ひながら私の肱をゆり動かした時、私は返事もせずに深く思ひ沈んで、次第々々に繪卷の如く展がつてゆく過去の時代の方へ瞳を轉じて行つた。妖艶な太夫と白面の遊冶郎との間に纏綿した美しい傳奇の夢はやがて私の眼の前に不可思議な鄕國の姿を示現した……

ひけすぎになつて、しんと寢靜まつた廊下を禿に送られながら今宵一夜の宿と定められた「八景の間」の方へゆく時、私は彼方の廣縁を小さな雪灯をかゝげながら妖精のやうな姿をしてすらすらと歩み過ぎてゆくひとりの太夫を見た。緋地に麻の葉をおいた部屋着に淺黄の男帶をふさふさと前上りにしめて、障子の面に幻のやうな後影を描きながら歩いてゆくその姿。私はその姿と、ほの暗い灯影に白蠟の心を剪る祇園の舞妓とを思ひ合はせて、古昔の物語りにある凄艶な美感の極致を偸みみたやうな恐れに襲はれたのであつた。

歩く（三）

つまりもとへ戻つていくのである。ビーフステーキとチーズで食傷した奴には、青草と鹽を食はせるに限る。

遠くへ出る時には、先づ朝の八時に家を出て、何等の旅程もたてずに漫然と汽車に乘る。それも三等だ。そして氣に入つた場所で降りて、そこからこれと思ふ方面へ向つて漫然と歩いてゆく。大概四十五分で一里といふ歩度であるから、三時間も歩けば相當の道程になる。辨當と番茶は持參でいゝのであるから、隨所に於いて風景を樂しみながら食味を滿喫させることが出來る。麥飯もかうなると實にうまい。又土地々々によつて、團子、蜜柑、柿等の名物があるので、一層妙である。かくして日沒まで歩き廻つて、又汽車で東京へ歸つて來る。家へ歸つて風呂へ入つて、その夜は勞働者のごとくに安眠するのである。從つて歩く場所もまるで一定してゐない。品川から川崎まで、逗子から三崎まで、小田原から箱根、大月から猿橋、秩父の機業地から三峯、我孫子から佐原、大原から小湊、足尾から日光、旅程は實に無盡藏である。無計行き暮れゝば、田舍の旅籠で一夜を明かすこともある。

歩いてゐる間は、成る可く無念無想であることに力める。さうなつてくると、昔の旅僧のやうに、歩くといふことに一種の哲理を感じてくる。どうみても人生漫歩といふ形である。風景を鑑賞するのにも、人事を玩味するのにも、歩くといふ速度はまことに工合がいい。丁度適當なスピードである。村へ入れば村をみ、山へ入れば山をみ、史蹟へ入れば過去を低徊し、工業地帶へ入れば生產を思ふ。極めて無礙な、滑脫な心境で、悠々と自然の間を彷徨する。疲れゝば草に坐して、蒼空を振仰ぐ。田畝の間に踞しては、林空に飛鳥の聲を聽く。時勢に懸絶してゐるところに、又一種云ふに云はれぬ妙味がある。

一體私は子供の時から非常に健脚であつたのである。休暇毎に私は未知の山川を跋渉して飽くことがなかつた。

澪

一

羊蹄、樽前の山嶺を越えて凄まじい北風がもう間もなく雪を運んで來ようとする頃であつた。黄褐色に彩られた荒涼とした膽振の原野の彼方此方に散在してゐる新開の村落を流れ歩いてゐた中村一座はかねて古馴染の巡業地の一つになつてゐた室蘭へ乘り込んで、久々で芝居小屋らしい表がかりのある末廣座の蓋をあけた。夏場から引續いての不入りでひどく惱まされた擧句、一座の屋臺骨になつてゐた鶴藏は網走へ興行にゆく途中、上常呂の寂しい谿間の驛遞で病死してしまふし、旭川ではまた立女形の梅吉に逃げられてしまつたので、今度の室蘭の興行も苦い經驗を嘗めつくした座頭の眼にはもう初日から大方底が見えすいてゐたのである。

その晩は丁度三の替りの出しものとして、「忠臣藏」と「矢口渡」の頓兵衛内の場を演じた。旅藝人の拙い演技とはいひながらこの二つはいつ出しても相應に入りのある狂言だつたが、生憎宵の口から降り出した雨に抑へられて八時過ぎになつても一向に客足がつかず、たゞツケを打つ音ばかりが小屋の外まで勢よく響いてゐた。

茶屋場のだれた一幕がすむと、お輕に扮した美しい田之助は、平右衞門が置き忘れていつた手拭が足もとに落ち散つてゐるのを見付けて、そつとそれを拾ひあげながら誰れよりも遲れて舞臺をひいた。道具と道具の間の狹い通路を裲襠の裾を氣にしながら張りものの裏へ入ると、そこは穴藏のやうな暗がりで、揚屋の道具をこはす鐵槌の音が妙に冷たくひびきわたつてゐた。

「おい、田之さん。ちよいと待ちねえ。」と、張りものの陰からいきなりしや嗄れた聲が彼を呼びとめた。その呼びかたがあまり唐突だつたので彼は吃驚して思はずそこへたちどまりながらぢつと眼をすゑて暗闇の中をみつめた。呼びとめたのは九太夫に扮した扇昇といふ年老つた朋輩だつた。

「おい、田之さん。お前もいゝ腕になつたなあ。」といひながら扇昇は田之助のそばへ歩み寄つて、「今夜はもう安宅の關ぢやあ通されねえ。さあ目をつぶつて一分出しな。」

「何をいつてるのさ。何がいゝ腕だい。」

「おい、おい。いゝ加減にシラをきるもんだぜ。情人が出來るとどいつもこいつもみんな圖々しくなりやがるなあ。棧敷の四つ目は一體どうをさまりをつけるんだい。」

「棧敷の四つ目? それがどうしたつ?」

「それ見やがれ、ぎつくりだらう。」

「また一件かい。あれを今更種にするたあ野暮ぢやないか。」

「笑談いつちやいけねえ、俺のいふなあイ印のことぢやねえぜ。……それぢやお前まだ知らねえんだな。驚いたなあるぜ、ぢや俺が教へてやるからちよいと來な。一目みて吃驚するなよ。」と、扇昇は一人で合點しながら田之助の長い袂をつかんで張りものの裏を鳴物の溜りの方へ引張つて行つた。下手の道具はもうあらかたこはされて薄明るい舞臺の光が大部屋の梯子段のあたりまで斜めに流れこんでゐた。

囃しのところには鳴物を受持つてゐる雇ひ婆さんがたつた一人で三味線を抱へたまゝ薄暗い中で頻りに居眠りをしてゐた。扇昇はそのそばから體を横にのして棧窓になつた小さな口をあけ、から觀客席の方を覗いてゐたが、やがてそれへ田之助の重い臺をおしつけるやうにして、

「さあ、文句をいはずに棧敷の四つ目を見な、代は見てのお戻りだ。」

田之助はそこからそつと觀客席をみた。薄明るい電燈の光に照らし出された穢い小屋の一部が、濁つた水の底へでも沈んでゐるやうにぼんやり霞んでみえた。やつと百五十ばかりの入りなので土間も棧敷も歯がぬけたやうに穴があいて、舞臺からみた時よりも猶一層がらんとしてもの寂しく思はれた。彼は棧敷の一から順にみていつた。そして四つ目に來たときはつと胸を衝かれて思はず頭を後へひいた。――丁度三つ目を占めてゐる三人連れの男客の陰に銀杏返に結つた蒼白い女の顏がみえた。しかもそれは彼の記憶にまだ生々しい痕跡を残してゐる女の顏だつた。

「どうして來たんだらう。」と、彼は自分の心に問ひかけるやうに呟いた。八月の末に小樽で別れた筈の女が汽車で小一日もかゝるこの室蘭へどうしてやつて來たのだらう、女の身分と位置とをよく知つてゐる彼にはそれが殆んどあり得べからざることのやうに思へたので、疑ひは思ひもかけぬ激しい心の擾亂を喚びおこした。

「どうだい、見えたかい。確かに小樽のレコだらう。」と、扇昇はぼんやりしてゐる彼の肩をたたきながら訊いた。

「あゝ、だけどどうしてこんな處へやつて來やがつたんだらう。」

「それを俺が知つたことかい。はるばるあゝして尋ねて來たからにやどうせ惡いことはねえやな。なんでもいゝから二分出しな。この年寄に一杯まかなつて罪亡しをして置かねえと跡で祟るぜ。」と、扇昇は人のよささうな聲をだして笑つた。

「ちよいとお待ちよ。次第によつちや二分位出すけど……」田之助は臺を傾けてもう一度穴から棧敷をみた。眉の濃いところといひ、鼻のたかいところといひ、その女はたしかに小樽の女だつた。お勝さんだつた。

屋根裏のやうな樂屋へ歸つて來て、下廻り達と一緒に衣裳の始末をしたり、顏を洗つたりする間も田之助は棧敷の女のことばかり思ひつゞけてゐた。幾度か挨拶にゆかうと思ひ惑つて到頭ゆき得なかつた。何かが彼の心を重く抑へつけてゐるやうで、さう安々と女に逢つてはならないといふ聲が何處からともなく聞えて來るやうな氣がした。

やがて次の幕があいた。冴えかへつた拍子木の音がやんでしまふと樂屋は急に靜かになつた。彼は窓際の鏡臺の前へ坐つて次の幕の力彌の顏をつくりながら今度は落ちついて女のことを考へはじめた。しかし幾度考へなほしても彼女が室蘭へやつて來た理由はまるで雲をつかむやうであてさへつかなかつた。戀しい自分の跡を慕つて逢ひに來たものとしては、過ぐる日小樽での別れが餘りにあつさりすぎてゐたやうに思へた。そして仕舞ひには何かしら重大な事件が眼のまへに迫つて來てゐるやうな淡い恐れさへ覺えて、胸が操られてゐるやうに輕く躍つてきた。

顏をつくつてしまふと、彼はつと立ちあがつて、いつでもするやうに後の壁にかけてある古びた姿見の前へ立つた。横あひから射して來る電燈の光は白粉と砥の粉とで巧みに彩つた彼の顏を似顏繪のやうに美しく鏡の面へ浮きだ

させた。それをみると彼は何とも云ひやうのない滿足と誇りとを感じて、艶やかに微笑んだり、口を緊めにひきゆがめたりいろいろに表情をかへたがらうつとりと見惚れた。この美しさに迷はない女が何處にあらう、四十里五十里の路は遠くてもこんな美しい男のために旅をするのなら、それが却つて女の身にとつてはうれしい種になるのかも知れないと思ふと、今迄心の底に蟠つてゐた小樽のことが譯もなくかたづいてしまつたやうで急に明るい心に歸つた。そして彼が今迄に經驗した情事のなかで最も華やかな色彩をもつてゐる彼女との間の關係をこだはりのない氣持で再び心に思ひ起すことが出來た。

……女は小樽でも三流と下らない角正といふ有福な運送店の總領娘であつた。名はお勝さんと云つて、年はもう二十歳を越えてゐたらしかつた。初めて彼と關係の出來たのは丁度去年の盆の事で、一座が小樽の花園座でしきりにかぶつてゐる最中であつた。或晩佐用といふ名で樂屋へ饅頭が運つたが、その金高は並はづれて多かつたので、田之助は座頭に連れられて棧敷にゐる客のところへ挨拶に行つた。客といふのは二人連れの女だつた。一人は土地で名高い潮月といふ料理店の女將で、もう一人がそのお勝さんだつた。そしてその翌晩、芝居がはねるとすぐ田之助は潮月へよばれていつたが、まだ子供氣の失せなかつた彼は譯もなく恐ろしくて、座敷の敷居を跨ぐときぶるぶる戰へた。浮いた稼業はしてゐても、旅から旅を渡り歩いてゐる憐れな藝人にはかうした晴れがましい座敷へ出ることが既に意外な出來事だつたのである。その時座敷にはお勝さんの外に女將もゐた。そして何もかも呑み込んでゐるやうな落ちついた顏つきをして頻りに二人の間をとりなしてゐたが、時分を見計らつて巧みに座をはづしてしまつた。

——もつと此方へお寄りな。と、初めてお勝さんに聲をかけられたとき彼はまたぶるぶる膝をふるはした。そして兩方の頰が焼けるやうになつたのを今でもはつきり憶えてゐるが、我儘な氣のきつさうなお勝さんの眼つきはその時からもう田之助の心をすつかり征服してしまつた。その眸の下にゐる間は身動きさへすることも出來ないのだといふやうな意識が不思議な位彼の心の底深く喰ひ込んだ。彼としては奴隸のやうに身を卑くして、女のいふ通りになつてゐるより外はなかつた。

二度目に逢つたのは恐ろしい吹雪の晩であつた。樂屋口からすぐ橇に乘せられてお勝さんと一緒にまた潮月へ行つた。その時幌の隙間から見たその景色はどんなに物凄かつたらう、街燈の暗い光に照らされ、街には降りしきる雪が煙のやうに渦巻いて、人の往來は全く途絶えてゐた。橇がとある坂路へかゝつた時、死んだやうな雪の夜の沈默を破つて何處からともなく凄い犬の遠吠が聞えて來た。彼は恐ろしさにぞつとして思はず女の膝へ手を置いた。すると女は何と思つたかいきなり彼の肩へ腕をまはしてぢいつと抱きしめながら冷たい頰をすりよせた。板片のやうに固く凍つた綾織のコオトの肩が痛いほど強く彼の首筋を抑へた。——その晩彼は到頭物置のやうな寂しい樂屋の二階へ歸ることを許されなかつた。そしてその翌朝今迄に握つたことのないほど澤山な金を貰つてやつと執拗な女の手から解放された。

三週間の日數をうつてしまふと一座は其處からすぐ旭川へ移つて、暫らくの間おもにその附近の町々を興行して歩いてゐたので、二人は自然と逢ふ瀬を斷たれてしまつた。今年に入つてから三月と八月に一座はまた小樽の土を踏むことが出來た。その都度面白をかしい追憶の

數々が薫りのたかい酒のやうになつて彼の心に殘つた。

しかし田之助も今では女の心持がすつかり呑みこめて來た。それと同時に處女でゐながら茶屋遊びでも何んでもやつてのける氣性の激しい、妙にひねくれた性質を少しづつ持て餘すやうにもなつた。殊に發作のやうなはげしい愛撫を受けるとき、彼は幾度か顔をそむけて苦笑ひしたが、戀の上でさへ、對等の位置にたつことの出來ない彼の身としては飽くまでも自分を抑へて專心女の氣に入るやうに振舞ふより外はなかつた。……

「成駒屋さん。ちよいと樂屋口まで。」と、聞きなれた聲がいきなり彼を呼んだ。果てしなくのびてゆく思ひ出の絲がふつりと切れて彼は急に我に返つた。彼はどぎまぎしながら後を向いて、

「何か用かい？」

「え、是非お目にかゝり度いつてえ人が來てゐますぜ。」と道具方の靑さんは梯子段のところから首を出して、額の禿げあがつた長い顔に思惑ありげな笑ひ顔を浮べながら云つた。

彼の胸はまた激しく躍りだした。あの女だと思ふとなんだか三方塞がりのところへ追ひこまれたやうな氣がして、どうしても落着いてゐられなかつた。急いで衣紋をつくろつて、先づ第一に何と云つて挨拶をしようなどと考へながら、道具方の後から恐る恐る樂屋口へ出てみた。

そして土間から顔をだしてのぞくと、開戸の陰に一人の褄をとつた女が立つてゐた。電燈の光はそこまで屆かないので誰だかまるで分らなかつた。

「誰方です？」彼は強ひて氣を張りながら聲をかけてみた。するとその女はいきなり彼の側へつかつかと歩み寄つて、

「私よ。」と、小聲で云ひ放つてクスクス笑ひだした。それは近頃彼がひいきになつてゐる小糸といふ藝者だつた。腰のよく据らないところをみると、だいぶ醉つてゐるらしく強い酒の匂ひが彼女のまはりに濃く漂つてゐた。

「おや小糸姐さんですか。私は又誰方かと思つた。さあお入んなさい。そこぢや雨がかゝります。」と、彼はやつと安心の吐息をつきながら、いつものやうに愛想よく女を迎へた。

「いゝえ、さうしちやゐられないの、今開春樓のお座敷で阿彌陀をやつてね、私が八百屋のくじをひいちやつたもんだから行きがけの駄賃に一寸寄つたの。」小糸は肩を揉みながら浮々した調子でいつたが、急に彼の耳のそばへ口を寄せて囁くやうに、「今夜都合はどう？」

「え、有難う。別段差支はないんですけれど。……」

「厭に浮かないのねえ、體でも惡くつて？」

「いゝえ、そんな譯ぢやないんですけど。……」と、田之助は口の中で呟いた。そこへ先刻の扇昇が樂屋着の半纏をひつかけてぬつと出て來た。彼は不思議さうに田之助の後姿をみてゐたが、やがてにやりと笑つて、

「おい、田之さん、ちつたあ人前もあるぜ。」

「あら、扇昇さん、今晩は。」と、小糸はついと半身明るみのなかへのり出して艶やかに笑ひながら、「あんたも年甲斐がないのねえ。」

「ほ、姐さんでしたか。こいつあ大笑はれだ。私はまた餘り容子がいゝから何處かの方かと思ひましたよ。」扇昇はてつきり小樽の女だとふんでゐたのがはづれたので少しテレながら、「そこは端近だ。まあこつちへお入んなせえ。立話も餘りおつぢやありませんぜ。」

「有難う。少しばかり恥かしう御座んすから。……」と、いつて小糸はまた面白さうに笑つた。そして懷から紙入を出して、そのなかから小さく折つた紙幣をとりだし、ぼんやりして

ゐる田之助の手にそつと握らせながら、扇昇に聞えないほどの聲で、
「これで何か贖して下さいな。」と、云つた。
「どうも毎度恐れ入ります。こんなことしなくつてもよう御座んすのに……」
「だけど私、氣がすまないから。そして今夜何時頃歸らせて？」
「大切へは出ますから十時過ぎには伺へませう。」
「さう。ぢや彼處へね、きつとよ。」と、小糸は薄暗のなかから名殘り惜しさうに田之助の眼のところをぢつとみてゐたが、
「ぢや、きつとよ。後程。」と、小聲でいつて澁蛇の目の傘を伊達にさしかけながら楽屋から裏木戸へ通ふ狹い路次を歸つて行つた。田之助は涙ぐんだやうな力のない眼眸をしてその後をいつまでも見送つてゐた。
「田之さん。何んだつてそんなとこで見得をきつてゐるんだな。見つともねえぢやねえか。」扇昇は小道具の側の土間へ下りてかんかん熾つてゐる爐の上へ股火をしながら彼の方を見かへつた。皺だらけな小さな顔には事を好むやうな意地の悪い笑ひが漂つてゐた。田之助はそれをきくとふと我に歸つて扇昇と顔をみあはせたまゝクスクスと意味もなく笑つた。そして彼の側へ歩み寄つて丁度小糸がさつきしたやうに貰つた紙幣を默つて扇昇の手へ渡した。
「何んだい、こりやあ。……」
「先刻のお約束さ。小糸さんから楽屋へお通しですと。」と云ひ放つて田之助は女のやうに美しく笑ひながらぢつと扇昇を見下ろした。
「へえ、旨くやつてやがるな。」彼の顔にはこの汚い醜態に對して關心のない敵意を示す表情が動いた。そして何か辛辣な冷評でも加へようとするらしかつたが、その言葉は知らず識らずの間に溶けて、彼の口元へ意味のない笑ひを刻んだ。
「成駒屋さん、そろそろ出番ですぜ。」張物の陰からのそりと出て來た鳴物の八公は後からかう呼びかけた。それを聞くと田之助は周章てて部屋へ歸つて出幕の用意をした。着附けをしながら耳を澄ますと舞臺の方からはもう加古川本藏の怒罵する聲が高く低く波うつて聞えて來た。

チョボの池につれて傷ついた本藏は苦しげに物語りをはじめた。……その時、田之助ははじめて棧敷の方へ眼を配つた。どうしたものか其處にはもう小樽の女の姿はみえなかつた。使所へでも立つたのかと思つて、幾度となく氣をとめてみてゐたが、女は到頭最後まで歸つて來なかつた。
彼は冷たい舞臺の板敷の上へ坐りながらひどく心をいためた。一年と云ふ長い年月の間寒いにつけ暑いにつけ數へ盡せぬほど世話になつてゐながらはるばる訪ねて來てくれたのに挨拶にもいかなかつたのを女は怒つて歸つてしまつたのではなからうか。もしさうとすればこれが縁のきれめになつて、もう二度とふたたび逢はれなくなるのではあるまいか、平生から我の強い女のことだから、一旦別れると云ひだしたら、理が非でもそれを押しとほさなければ置かないだらうと思ふと彼は急に翼を斷たれたやうに心細くなつて、一刻も早くあとを追ひかけていつて詫をしなければならないやうな、つきつめた思ひが頻りに胸先へこみあげて來た。事實彼は女が戀しいから別れ度くないのではなかつた。彼の胸には先づあの女と別れてから後の物質上の損害、殊に金錢上の大きな損害が電のやうに閃き過ぎた。今迄の經驗によると、彼は小樽へ行く度每に必ず思ひもかけない利益にありつくことが間々あつた。興行が當らうが當るまいがそんなことは全然氣にかける必要はな

かつた。女は金錢上の世話から衣裳の世話まで一切引受けてやつて呉れた。そして別れる時にはきつと二三箇月の間は少しも不自由をしない位な小遣錢をくれた。さうした打算的な關係が戀しい懐かしいと云ふ感情の羈絆よりもより強く彼を縛めてゐたのであつた。

「……ぢや待遠へね。きつとよ。」思ひ惑つた彼の心の底へ突然また小糸の聲がよみがへつてきた。蜜のやうな甘い囁きは靈魂までも蝕むやうに深く深く響きわたつた。と、彼は俄に力を得てこんな浮氣稼業をしてゐればさうさう義理なぞを守つていけるものぢやない、その日その日の岸を求めて流れていけば末はどうかなるにきまつてゐる、といふやうな投げ遣りな心持になりながら無理な首尾をして小糸と逢曳した幾夜の思ひ出を丁度盃の數でも重ねていくやうに貪りはじめた。そしていつか小糸の美しい横顔を思ひ浮べて、それと舞臺の端に坐つた小浪御寮の頤の長い顔とを幻の中でくらべてみて竊かに今夜の思ひがけない逢ふ瀬を樂しんだ。拍子木が入つた後までも彼はまだうつとりとした眼眥をして眼の前に擴がつた幕をみつめてゐた。繼ぎはぎのある煤けたその面には夜風が慴えたやうな波をうたせながらすうツと匐ひかゝつた。そのなかにさへ彼は小糸の白い頬に漂ふ微笑を見附けだしたほど亢奮してゐた。

樂屋へ歸つてみると扇昇は薄暗い電燈の光のなかで遊んでゐる下廻りを相手にもう酒宴をはじめてゐた。一座の定紋のついた古葛籠が餉臺がはりに彼等の眞中へ据ゑられて、その上には鯣の乾物や豆が新聞紙に包んだまゝ置いてあつた。酒の弱い下廻りはもう眼のまはりを眞紅にして頻りに鼻歌をうたつてゐた。

「田之さん、お先へはじめたぜ。」と、扇昇は彼の姿をみるやいなや云つた。そして嬉しさうに笑ひながら、「お前ももう體があいたんだから早くそのヅダ袋をぬいで仲間へ入んな。久し振りで面白く飲まうぢやねえか。酒は白瀧をきばつといたから無類飛切りだぜ。」

「まあ、お前さんおさりよ、私やこれからちよいと出て來なくつちやならないから。」田之助は其方へは見向きもせず衣裳をぬぐ手ももどかしさうにそはそはしながら答へた。

「畜生、又今夜も旨えくちがあるのか。馬鹿にしねえぜ。」扇昇は盃がはりの茶碗へ手酌でつぎながら「この酒もお前の情事のカスリかと思ふと餘りいゝ氣持はしねえなあ。」と云つて腹の底まで見えるやうな大口をあいて面白さうに笑つた。

田之助はそのまゝ一風呂浴びて小樽の女から去年の冬作つて貰つた座敷着に着換へて出支度をした。そして何をするともなく鏡臺の前へ坐つてぢつと考へてゐると、ふとまた小樽の女のことが氣になり出した。このまゝ出てしまつて、跡へもし使ひでも來たらどうしよう、此處まではるばる訪ねて來て逢はずに歸ることがどうしてあの女に出來よう、きつと何か思惑があつて早く芝居を出たに違ひない。……そのうちに何んだか急に逢つてみたいやうな思ひもしだして氣が妙に沈んで來た。彼はどうしていゝかまるで決斷がつかなくなつてしまつた。

酒宴は漸次面白さうにはずんで來た。終には道具方の爺さんまで座に加はつて、各自賽の日で金高を爭ひながら十錢二十錢のはした金を集めて、それで酒を買ひたして飲みはじめた。扇昇は醉ふときつと持ち出す昔話をそろそろ出しかけた。それは彼がまだ旅へ出ない時代の思ひ出で、もう今は大方世の中から忘れられてしまつた江戸の芝居小屋や、または亡き人の數に入つた多くの名優の逸話がおもであつた。

「丁度俺が吾妻座につとめてゐた頃だつたな。……」と、いふやうな前置きをして、諄々と

物語りをすゝめてゆくとき、彼は不思議な若々しさを帶びて來るのが常であつた。熱のこもつた眼眸、無数の皺を刻みつけられた口もとには、それと同時に言葉よりもさらに深い或ものが漂つて、涙の出るやうな悲慘な矛盾が自づと彼の身邊に湧きあぶつて來た。零落はもう禿げあがつた額から小刻みに慄へる指の先まですつかり浸みとほつてゐたのである。

「どうしたい色男、行かねえのかい。」扇昇はふと話の腰をきつて問ひかけた。田之助は喪心したやうに押默つて、蒼い面にふるへてゐる自分の映像をぢつとみつめてゐたが、問はれた方へはみむきもせずに、

「まだ時間があるから。」と力なげに呟いた。

「早く行つてやんな。餘り待たせるもんぢやねえぜ。」と、扇昇は眞顏で云つて、何と思つたかいきなり田之助の肩へ手をかけ、さびた中音でつひぞ出したことのない唄を唄ひはじめた。それは今から二十年も三十年も昔に流行した小唄の一つで、低く沈んでゆく節まはしは、まるで聲を忍んで歔欷してゐるやうに聞きなされた。ごろごろ寢そべつてゐる下廻りどもは愚鈍な顏をくづして譯もなくゲラゲラ笑つたが、田之助はついその聲の悲しさにひき入れられてうつとり聞き入つた。年老つた憔れた朋輩の胸の底を今ひそかに流れてゆく過ぎし日の幻影が、彼の心にそれとなく反映するやうに思はれた。女に對する苦勞の賴りなさがそれとともにしみじみ思ひ出されて、なんだか唯一人暗い穴の底へでも落ちてゆくやうな寂しさが彼の心を捕つた。彼は堪らなくなつて扇昇の茶碗をかりて、苦い酒をたてつゞけに呷つた。そして怪訝な顏つきをして彼を顧みてゐる扇昇の眼のところをぢつとみつめながら寂しく笑つた。亞鉛葺の屋根に降りそゝぐひそやかな雨の音にまぎれて、港を出てゆく汽笛のひゞきが遠くきれぎれに聞えてきた。

二

大切の幕があいてから間もない頃だつた。平生餘り樂屋の方へ出入りしない木戸番が、田之助に宛てた一通の封書を持つて入つて來た。佐川といふ女文字の裏書をみると、田之助は急に眼が覺めたやうな心地になつて醉ひ癡れた一座のものに氣取られないやうに隅の方の電燈の下へ行つて手早く封を切つた。

「ゆうべ急に思ひたつて今やつと此の地へつきました。お前さまのからだがあいたらすぐ來て下さい。ぜひぜひ逢ひたいの、あたしは明日のあけがたの汽船で遠方へいくのだから今夜逢へなければもう一生逢へなくなるかもしれない。……」と、薄墨でロオル紙へ走り書きした小樽の女の手紙をみると田之助は先づ激しい驚愕に胸を衝かれた。心待ちに待つてゐた或一大事が、思ひも懸けぬ姿をして眼の前へ暴露して來たやうな惑亂を感じながら、事の眞相を捕へようとして、幾度となく同じ文面を讀み返した。そのうちに、僅か六行に足りない、短い文言の間から、女の思ひ盡してゐる逢ひたさ、懷かしさだけが自づと浮きあがつて、胸から胸へしみじみと滲み透つていくやうに思はれて來た。

「木戸へ俥が待つてますが。……」手持無沙汰さうに突立つてゐた木戸番は、後から待ちかねて聲をかけた。

それを聞くと田之助は妙に周章てながら、「今すぐ行くよ。」と、小聲で云ひ放つて、その儘手紙を懷中へ捻込んで、樂屋から舞臺裏へ降りる梯子段の方へ行かうとした。

「おい、田之さん、何處へ行くんだい？」今迄悲しげな小唄に身も心も溶けて行くやうな果敢ない調子でうたひ續けてゐた扇昇は、その時、ふと田之助の後姿を見附けて追ひ縋るやうに

呼びかけた。そして何時の間にか空になつてしまつた徳利を倒にして、思ひ切り惡さうに酒の滴雫をきりながら、

「お前が行つてしまつちやあ、俺あ寂しくなるぢやねえか。」

「ぢき歸つて來るよ。」と、田之助は暗い梯子段を二三段降りながら振り返りもせずに云つた。そして皺だらけな蒼い顏に寂しい表情を浮べながら、そつと彼の後姿を見送つてゐる憐れな勝藏を後に殘して其儘急いで舞臺裏へ降りてしまつた。

紅提灯と繪看板で飾られた木戸口から、迎ひの車に乘つて末廣座を出ると、暗く更け靜まつた街路には霧雨が烟のやうに降り罩めてゐた。幌の隙間から時々冷たいその滴雫が酒に熱つた彼の頬へ颯と心地好く吹きつけた。何處を何う通つて、何處へひかれてゆくのか、まるで知らなかつた。心の中は唯もう今夜逢はうとする女のことで一杯になつてゐた。中にも明日の曉方の汽船で遠方へ旅立ちをするといふ手紙の文面がまるで黒い惡魔のやうに彼の心を驚かした。そして今女の身の上に、何か大きな變事が降り懸つてゐるといふことだけは確かに胸に落ちたが、それが果して何事であるか、殆んど想像の緒を得ることさへ出來なかつた。彼は暗闇を手探るやうな心地でその想像のつかない事實をあれか、これかと頻りに思ひつゞけた。

夢から夢へ流れてゆくやうな、取留めのない思ひは、やがて車の梶棒がごとりと地につくと同時にふつりと破れてしまつた。彼は躍る胸を抑へながら俄かに明るい三和土の玄關へ降りた。其處は彼も兼々聞知つてゐた菊壽亭といふ宇聞きつての料理店だつた。

物音を聞きつけて、帳場の方から白粉をつけた女中がぞろぞろ出て來た。迎ひを出す時から噂になつてゐたものと見えて、中には延び上つて田之助の方を見てゐる女もゐた。

「さ、どうぞ此方へ。先程からお待ちかねですよ。」と、その中の一人が云つて、氣恥かしさうに眼を逸らしてゐる彼を、奥まつた二階の方へ案内した。薄暗い廊下を歩いて行くとき、彼は一歩毎に胸が烈しく亂れていくのを覺えたが、やがて女中は突當りの唐紙の前へ立つて、

「お連樣が被來いました。」と、云ひながらそつとそれを開けると、中は電燈の光の眩しい小座敷で、小作りの女がたつたひとりいろいろな皿を並べた膳を前にして、しよんぼり坐つてゐた。

「どうも遲くなりまして。……」

田之助は端近に坐りながら、喉を押絞められるやうにやつとこれだけ云つた。

お勝さんは一度きつと彼の方をみて、また眼を逸らしながら、

「あたし晩の八時の汽車で、此處へ着いたんだよ。吃驚したらう？」と、存外平氣な調子で云つて、袂から卷煙草を出して吸ひはじめた。

田之助は女が怒つてゐるのではあるまいかと思つて、辯解でもするやうに、「實は先程幕間に一寸御挨拶に出ませうと思つてゐたんですけど。……」

「あら、私がゐたのを知つてたの？」と、お勝さんは嬉しさうに笑ひながら云つて、もう一度田之助の方をぢつと見た。そして態とらしい假面を脱いだやうな、感情の添つた語調で、ほんとの事を云ふと、私は芝居でよそながらお前さんに別れをして、その儘立つてしまはうと思つてたんだよ。」

「何處へ、被往るんです？」と、田之助は少し醉つてゐるせゐか、胸をそゝられるやうな氣持になりながら、訊いた。

「それに就いて、お前さんにも相談しなけりやならない事があるんだけど、……まあ、一杯おあがりよ。」と、云つて、お勝さんは冷たい酒を

ぐつと呷つて、滴雫もきらずにつと盃を田之助へさした。彼はそれを受けながら、はじめて女の顔を偸みみた。小樽で別れた頃よりもひどく痩せて、蒼ざめた頬には小鼻のあたりから陰鬱な影がさして、妙に険を帯びて見えた。彼は何かしら恐ろしいやうな氣がしてなるたけ重大な話題に觸れないやうに、苫小牧から室蘭への苦しい旅行の話などしながら、矢鱈に盃の數を重ねた。そして飲んではさす盃を女は少しも拒まなかつたが醉ひは漸次と蒼白いその頬を染めて、濁つた眼眸は丁度絶望した人のやうな、異樣な輝きをもつて來た。

二人は抗し難い力に遮られるやうに漸次と口數もきかなくなつた。終には唯燃えるやうな眸を見詰めながら默つて坐つてゐた。下座敷には土地の大盡客でも來てゐるらしく、先刻から三挺ばかりの三味線に下方まで入つて賑やかに唄を唱じてゐたのが、何時の間にか火の消えたやうに靜かになつて寂しげな端唄の絃の音ばかりが雨滴の軒を傳ふ音にまじつて、細々と聞えて來た。

「寂しいねえ、お名殘りに藝者でも招ばうか。」

と、妙に勢づいては云つたが、その時流石に氣の強いお勝さんの眼にも涙が一杯に溢れて來た。彼女は堪らなくなつたやうに、涙聲で、

「私は何うも彼もお前さんに隱して、此儘別れてしまはうと思つてゐたんだけど、もう迚も我慢が出來ないから、いつそ、悉皆話してしまはうねえ。」と云つて、強ひて涙を隱すやうに聲を呑んだ。

お勝さんは家出をして、東京にゐる伯母さんの處へ逃げて行く途中だつた。父親が樺太の漁場で失敗したのが元になつて、彼女の家はこの夏頃から少しづつ折合が惡くなつてゐたところへ、今度又子供の時分から彼女の敵になつてゐた繼母と結婚の事から端なくも烈しい爭ひが起つて彼女は到頭家を出奔しなければならないやうになつた。昨日の朝、愈々心を決して家の者共の起上らない朝まだきに裏門からこつそり脱け出して、直ぐ小樽から汽車で函館へ行つてしまふ心算だつたが、愈々永の別れとなると妙に田之助に未練が殘つて、昨日一日札幌の宿屋で暮らして、今日到頭室蘭行の汽車に乘つたのだと、彼女は事細かに物語つて聞かせた。

田之助は今迄に聞いた事もない不思議な物語りを聞かせられるやうな好奇心をもつて、うつとりと聞き入つた。芝居でよくやるやうなその筋道が殊更に彼の情緒に媚びた。そして家出をして來たといふ實在の女を考へるまへに、まづ舞臺で芝居をしてゐるやうな氣持になりながら、

「それぢや これが永のお別れになるんですねえ。」と、しみじみ云つた。

それを聞くとお勝さんは又眼を濕ませて、

「私、逢ふまではその心算でゐたんだけど、かうして逢つてみると何だかお前さんを手離すのが厭になつちやつた。」と、云つて、ぢつと田之助の思ひ入つたやうな美しい顔を見詰めてゐたが、やがて狂氣のやうに彼の側へすり寄つて、突然膝の上へ身を投げながら、

「ねえ、お前さん、お前さんも私と一緒に東京へ行つてお呉れな。」

田之助は吃驚して、身をひかうとした。次の瞬間に戯欷いてゐるやうな女の肩の顫へが腕の底に滲んでいくと、彼はふと又反抗することの出來ない權威に壓しつけられたやうな氣がして、唯寂しく笑ひながら、何とも答へることが出來なかつた。

女は漸う顔をあげて、譫言のやうに言葉を續けた。

「お前さんだつて、一生此樣な旅役者で終る氣はなからうし東京へ出て今のうちに何か手頃

な商賣でも始めて見たら何うだらうと思ふの。それともまた此の商賣がいゝと云ふんなら、東京にや幾らでもいゝ師匠があるんだから、そんな人の弟子にして貰つて、立派な舞臺でみつちり修業したら、私どんなにかいゝだらうと思ふんだよ。……」

東京！　檜舞臺！　かうした華やかな幻影は、遠い北の果ての國々を漂泊してゐる無智な彼等にとつて、まるで天國のやうな美しさを見せる憧憬なのであつた。新開町の貧しい小屋に寢る夜な夜な、凍えたやうな豆洋燈の光をかきたてながら、劇界が昔噺のやうに物語つて聞かせた大江戸の芝居町の賑はひや、一睨み千兩と云はれたやうな名優の姿などが、お勝さんの言葉と一緒に髣髴として彼の眼の前に浮び上つて來た。あゝ行きたい、一生のうちに一度はどうにかしてさう云ふ華やかな境遇に身を置いてみたい。と思へば思ふ程、若い彼の心には意地の惡い苦痛の陰影が射して來た。

「ねえ、田之助さん、私と一緒に行く氣はなくつて？」と女は默つて俯向いてゐる田之助の首へ腕をまはして、根柢から彼の心を搖り動かすやうにせがんだ。

「有難う御座います。さう願へりや結構なんですけど、私もあの座頭にや親も及ばないほど世話になつて居りますから……」

「だけど座頭だつてお前が一廉の立派な役者にならうと云ふのを、まさか惡くも思ふまいぢやないの。」と、云つて、又ぢつと彼の眼のところを見詰めたが、家を捨て、親を捨てて來た彼女の思ひ入つた眼許は常よりも幾層倍も力強く彼の心の底へ喰ひ入つて行くやうに思はれた。

彼はもう答へる言葉も封ぜられて、たゞ冷たい床の縁を嚙みながら、深い思ひに沈んだ。

十三歳の時拾はれて、初めて舞臺を踏んでから丁度六年と云ふ長い歳月の間、一座にどんな淋しい出來事があつても彼はあの座頭の側を離れようとしなかつた。座頭も子飼ひから育てた憐れな弟子には、人一倍苦勞をしただけに、自づと贔屓が違つて、親身の親兄弟も及ばないやうな世話をして呉れた。譬ひ一座が明日の飯に困つて、衣裳から小道具のやうなものまで、太夫元へ入質して、愈々ちりぢりに解散してしまはなければならないやうな場合になつても、彼は憐れな弟子だけは捨てなかつた。その座頭の大恩を賣つて、たとひ自分の立身の爲めとはいひながら、今女と一緒に出奔してしまふと云ふ事は到底彼のなし得る事ではなかつた。假しまたなし得るにしても、そんな事で今の身の上から救はれようとは夢にも信じられなかつたのである。下座敷では絃の音も唄聲もふつと止んでしまつた。そして更けまさる夜とともに雨の音ばかりが高く低く聞えて遣りばのない悲しみがひよろ長い影のやうになつて、ふらふらと間内を漂つてゐるやうに思はれた。田之助は女を抱いたまゝ、詮方なしに押默つてゐたが、その時、ふと今迄女の勢に氣壓されてすつかり忘れてゐた小糸との約束を思ひ出した。十時過ぎには行くと云つて置いたから今頃はさぞあをくらい燈の下で待ち焦れてゐることだらうと思ふと、彼は急に胸苦しくなつて、座にゐたゝまれないやうな氣持になつた。そしてあの可愛い小糸や、懷かしい一座の者達から自分を引離さうとする恐ろしいお勝さんの姿をみると、淚に滲んだ眼許から、小刻みに顫へてゐる後れ毛まで、みんな憎らしくなつて、身を投げ出してゐるのを幸ひに、打つて打つてうちのめして、一刻も早く此場を逃げ去つてしまひ度いやうな殘酷な氣もして來た。

お勝さんは餘り彼が默つてゐるので、もどかしがりながら到頭顏を上げて、「どうするの、行つて呉れるの？」

「私にやどうしても座頭に濟まないやうな氣がしてなりませんから。……」と、彼はきれぎれに答へて、暫らくの間躊躇してゐたが、やがて酒の力をかりてきつぱり言葉を續けた。「それに今夜も明日の稽古をして置かなければなりませんので、餘り遲くまでお邪魔をしてゐる譯には參りませんから、いづれまた明日でも座頭とよく相談しました上で御返事致しませう。」

それを聞くと、お勝さんは突如身を起して、

「そんな事をしてゐりや私の方が駄目になつてしまはあね。何しろ家からお金や證券やなんかどつさり持出して來たんだから、いつ追手が懸るか知れやしないんだもの。」と、云ひながら、彼女は床の間の上に置いてあつた膃肭獸皮の小さな鞄をあけて、田之助に見せた。中には書類のやうなものが一杯入つてゐた。

彼はそれを見ると又妙に恐ろしくなつて、眼を逸らしながら、

「私の方もまた明日から狂言が替るもんですから。……」と、飽くまで彼女から逃げ去る手段を盡さうとしたが、それはもう彼にとつて全く無駄な努力だつた。

女はそれと見て取つたらしく、忽ち顏色を變へながら、彼の顏を穴のあくほど見詰めてゐたが、やがて唇のあたりを神經的に痙攣させて、

「お前さんも隨分薄情なんだねえ。そんな氣ならどうでも勝手にするさ。」と、投げつけるやうに激しく云ひ放つて、ついと顏を背けてしまつた。

その強い一言で、彼はまた氣を挫かれてしまつた。胸の中ではどんなに焦れても、このうへ反抗することは到底彼には出來なかつた。その儘立つにも立たれないやうな、みじめな顏容をして心の底では小糸のいとしい幻影を貪りながら、彼はまた冷たい盃を唇へ持つていつた。

三

夜はもう十二時過ぎて、船着きの町もひつそりと寢靜まつた頃、酒の醉ひに意識を晦まされた二人は停車場の隣りにある船車連絡の待合室へ來てゐた。ぼやけたやうな力のない電燈の光は土間に置並べた三つの大きな卓子を寂しく照らして、隅の方の疊敷きになつた處へいぎたなく眠り倒れてゐる二三人の旅客の鼾聲が、凍えきつた靜けさの底を這ふやうに聞えてゐた。

ふたりは山のやうに炭火を熾した大火鉢の傍に座を占めて、互に顏を見合はせながらまるで夢のやうな事を思ひ耽つてゐた。中にも田之助はいろいろに說伏せられてやつと女と一緒に旅へ出る氣になつた身でゐながら、今は全く東京といふ華やかな幻影に眩惑されて、もう一座のことも小糸のこともすつかり忘れてしまつたやうな氣持になつてゐた。東京へ出たらあゝもしようかうもしようと云ふやうな取留めのない企てが醉つた頭の底に數限りなく簇り起つて、空想はそれからそれへと絲卷をほぐすやうに際限なく續いた。

「貴方がたは何處へおいでです？」と、突然、眠さうな聲が何處からか訊いた。女は肩でも突かれたやうに吃驚して、思はず聲のした方を振顧ると、いつの間に出て來たのか料理場の戸口の處へ、洋服の上から褞袍のやうなアッシを着込んだ一人のボオイがぼんやり突立つてこつちを見てゐた。

「森へ行きたいと思ふんだが、船は何時に出るんだい？」と女は體を捻向けたまゝいらいらした聲で訊きかへした。するとボオイはその鋭い視線を避けるやうに顏を背けながら、「森行は午前三時の振洋丸です。」と、他事のやうに呟いて、さも堪へきれないといふ風に眼をしばたゝきながら大きな欠伸をしたが、やがて、「そんならも

うちきに艀船が出ますから切符を買つてお乗込みになつたらいゝでせう。」と、氣のない聲で附け加へた。

女はそれを聞くと直ぐ出札口へ行つて、二等の切符を二枚買つた。そして係員から船客名簿へ載せる姓名を訊かれた時、つとめて平氣を裝ひながら、小樽區色内町荒井みつ、同じく政次郎と澱みもなく答へた。彼女は再びもとの席へ歸ると、うつとり思ひ入つてゐる田之助の耳へ口を寄せて、

「お前さんと私は姉弟なんだからそのつもりでおいでよ。」と、囁いて、苦もなささうに艶やかに微笑んだ。

程なく頭からすつぽり外套をかぶつた若い船頭が艀船の出ることを知らせに來た。疊の上へ眠り倒れてゐた他の旅客も同船の人々とみえて欠伸をしながら起上つて寒さにふるへながら身支度をはじめた。ひとわたり小荷物の手配や、艀券の受渡しがすんでしまふと、やがて一同は船頭に導かれて待合室を出た。

雨はいつかしら雪になつてゐた。音もなく更け靜まつた小砂利道には、片側だけ薄白く降り積つて、ところどころの水溜りにこぼれた軒燈の光も凍えたやうに冷たかつた。二人は連れの人達から少し遲れてひとつの傘の下に身を押し縮めながら歩いた。冷たい女の手は傘の柄を持ち添へた男の手を上からしつかり握りしめてゐた。

移民取扱所の角から海岸づたひに波止場へ出ると、頬を劈くやうな冷たい風が俄に横様に吹きつけて、一團になつた人々は背を聳かしばりながら、思はず輕い呻き聲をたてた。眼の前に擴がつた海は黑耀石のやうに暗く澱んで、右往左往に入り亂れながら降りしきる雪は吸び込まれるやうに音もなくその面に消えた。そして荷揚場の巨大なアーク燈が息づく度に、陸岸近く繋つた汽船の姿が怪物のやうな沈默をまもつた儘、影のやうに浮きあがつたり消えたりした。一同は吹雪に弄ばれながら、そのまゝ波止場の突端から小さな艀船に乗り移つて、五町ばかり沖に碇泊してゐる本船へ向つた。

森がよひの振洋丸は、僅か百五十噸ばかりの小蒸汽船だつた。艀船から舷梯へ上るとき田之助は紅い碇泊燈の光に照らされた薄闇の中で、足許の定まらない女の體を強く抱きしめながらやつと引き上げた。甲板へ上ると、もう雪が布を敷いたやうに眞白に積つて、船員の室では五六人圓座になつて酒を飲みながら大聲で何やら笑ひ興じてゐた。彼等は微かな燈の光をたよりに裾にまみれた雪を拂ひ落しながら、穴藏のやうな暗い船室へ降りて行つた。

二等室には彼等のほかに一人の相客もなかつた。豆洋燈のやうな暗い光に照らされた人氣のない室の氣勢は何となく恐ろしげであつたが、彼等にとつてはそれが却つて自分達の世間離れた寂しい棲處のやうで心安かつた。

「何日頃東京へ着くんでせう？」と、田之助はじめじめした疊の上へ腰をおろすとすぐ待ちかねたやうに口をきつた。

「さあ、仙臺か何處かでほとぼりの冷めるまで隱れてゐたいと思ふから、あとどうしても一週間位はかゝるだらうね。」と答へた女の聲にも何處となくいきいきとした力が籠つてゐた。

「一週間？　そんなに長くかゝるんですか？　私また明後日頃は着くのかと思つてました。」

「ほゝゝゝゝ、そんなに早く東京へ行き度いの？」

「え、出來ることなら早く行つて見度う御座います。」と、田之助は憧憬をその儘口へ出すやうに答へた。女はそれを聞くと笑ひながら、

「お前さんも妙な人だね。つい今しがたまで行くのは厭だつてあんなに私を困らした癖に、も

う心底から氣が變つたんだねえ。」と、揶揄ふやうに云つたが、やがて調子をかへて、「そりやお前さんがその氣なら、私の方はどうでも都合するわ。」

「いゝえ。なにもそんなに急ぐ譯ぢやないんですけど、千兩役者のする芝居つてものがどんなものか早く見たいやうな氣がしましてね……」と、云ひさして、田之助は彼女のやうなほつそりした顔に美しい微笑を浮べた。

それから二人の間には東京へ着いてからあとの種々の計畫が話題に上つた。空想はもう殆ど確乎とした事實のやうに物語られた。殊に田之助は若々しい歡びに亢奮して、平常よりも二倍も三倍も口まめに饒舌つた。そのうちに體が溫まつて來るにつれて、今迄寒氣のために[illegible]れてゐた酒の醉ひが、再び彼等の心臟へ歸つて來た。ひとしきり燃えるやうな熱い血があらゆる脈管に漲りわたると、やがてそのあとから體の節々も蕩けてゆくやうな甘い快感が徐々として續いた。彼等は何時の間にか語るべき言葉さへ奪はれて、恍惚と顔を見合はせながら幾度か脣を寄せて接吻した。

出帆間際になつて一人の旅客が彼等の室へ乘り込んで來た。不恰好な毛皮の外套を猪首に着て、口髭を長く生やした老紳士だつた。ボオイに荷物を運ばせて傲然と振舞つてゐる樣子を見ると、彼等は俄に何とも云ひやうのない暗い氣持になつて、自分達の幸福を盜む爲めに闖入して來たやうなこの新來の客を心底から憎んだ。

孤獨な寂しさを訴へるやうな汽笛が、晴澄んだ夜の空へ遠くきれぎれに響きわたつた。それと共に異樣な靜けさに捲はれてゐた甲板が俄にどよめいて來て、船員の跫音が右往左往に行違つた。舳の方では船長の太い叫び聲が手にとるやうに聞えて、鐵鎖の觸れる音と喧擾のやうな忙しい機關の音とが騷々しく縺れあふと、やがて船は小刻みに慄へながら徐かに動きはじめた。

二人は小高い寢臺の處へ床を並べて、圓い窓から遠く別れゆく室蘭の町を眺めつくした。いつ明けるとも知れない夜の闇を背景に、山の中腹からだらだらな傾斜につれて海の方へ續がつてゐる街々には、瞳のやうな灯の光が幾列となく縞をなして、青や紅の碇泊燈を點したまゝ暁方まで眠つてゐる泊り船の檣にも、北の國の寂れた港を思はせるやうな深い悲しみが流れてゐた。船が進むに從つてその灯の色も次第次第に薄れて、終にはとある岬に遮られて全く影を沒してしまつた。飽かず見送つてゐた二人の心には、その時から聞き慣れた港の哀歌が何處からともなく、いつまでもかすかに續いて來るやうに思はれた。

　船は出てゆく、霧はおこる、
　空は曇る、雨は降る……

暗い海の底で歔欷してゐるやうな哀切な肉聲は、汽關の音に紛れながら縷々として斷續した。何處まで行つても際涯のない別離の怨みがその聲とともにかすかに咽んでゐた。そしてその果敢ない紅唇は實感よりも遙かに悲痛な力をもつて彼等の心の底へ滲みていつた。彼等は知らぬ他國へ旅立する自分達の運命を思ひ較べて、胸に溶きつくやうな悲しさを怺へながら猶も暗い海と空とを眺めてゐた。

「あれ、あんな高い處へ灯がついてゐますよ。何でせう。」と、田之助は暫く默つてゐるのがつらくなつて高い空を指さしながら獨語のやうに呟いた。と見ると、直ぐ間近な岬の頂に寂しげな灯がたつたひとつ點つて、霧のやうな粉雪にかきくれながら夜の海を守つてゐた。

女は涙を呑んでゐるやうな微かな聲で、「あれは燈臺さ。」と、答へてぢつとその光を見

詰めてゐたが、暫らくすると突然田之助の胸を激しく抱きしめて、涙に濡れた氷のやうな頬をその顔へ押當てた。

船は黒い山陰を左舷にみて、漸次と沖の方へ進んだ。そして大きな岬の外へ廻ると、急に舷へ砕ける波の音が凄まじくなつて、船體は氣味の惡い程上下に動搖しはじめた。寒氣はそれと共に針のやうに鋭くなつた。相客の老紳士は手荷物のなかから壜詰の正宗を取出して頻りに呷つてゐたが、二本目の壜が空になつてしまふと、厚い毛布を頭から被つて鞄を枕にぐつすり寢込んでしまつた。その心地好げな樣子をみると、彼等はひどく妬ましくなつて、抱き合ふやうに身を寄せて寢てはみたがもう眠るにも眠られなかつた。寒氣はしんしんと着物を徹して背なかから水でも浴びせかけられるやうに骨身に滲みわたつた。

田之助は醉ひざめの激しい悪寒にふるへながら、暗い灯影が船室の壁にゆらぐさまを一心にみまもつてゐた。正氣が少しづつ歸つて來るに從つて、何とも云ひやうのない悔恨の念が彼の心に深い陰影を落して來た。大恩のある座頭に不義理をして、女と一緒に出奔してゆく自分の姿がはつきり映ると、彼はふと思ひ出すともなく、彼の心に最も鮮やかな印銘を殘してゐる或出來事を思ひ起した。……それは彼がまだ子役を勤めてゐる時分の事だつた。或年の夏、漁場の景氣を見込んで、江差から岩内の海道を巡業して歩いたことがあつたが、生憎戰爭が、始まつてから間もない頃だつたので、行く所で聞いたのとはまるで反對に、何處の漁場もみんなひどくアブレてゐた。初めは前の年の穴を埋める位の意氣込みでゐたが、目算はからりとはづれて、岩内の町へ乘り込んだ頃はもう一座は矢だねの盡きた落人で、明日の食物にも差支へるやうな哀れな體態だつた。座頭は其處でどうにかして一旗揚げるつもりで、手慣れた新派ものの戰爭劇を出して客足を繋ぐもくろみを立てたが、それも二十日の興行に、中日まで六日も丸札を出すやうな始末で、到頭見事に失敗してしまつた。

梅之助が出奔したのは一座がその悲境に沈淪して、盛んに飢渇と戰つてゐる最中だつた。彼も田之助と同じく子飼ひ同然に可愛がられた座頭の直參で、その頃にはもう一座になくてはならぬ立物の一人であつたが、或日のこと、役割の行違ひから何時になく座頭と激しい口論をして、その儘ふいと姿を隱してしまつた。彼はその時自分の持役の衣裳から手まはりの道具まで一切引纏めて持逃げした。そして豫々馴染を重ねてゐた漁師町のゴケ（後家）と一緒に、後志國の雪路を越えて、歌棄の方へ行方を晦ましてしまつた。

一座は打擊の上に打擊を重ねて、到頭ちりぢりに離散してしまはなければならないやうな悲運に陷つた。衣裳や道具は總て太夫元に抑へられてしまつたので、座頭は自分の持物から鍋釜の類まで賣り飛ばしてそれを路銀に殘り留まつた一座のものを引連れて小樽の方へ落ち延びた。

田之助は其當時からの凄まじい光景を今でもはつきりと記憶してゐるのである。便船はあつてもそれに乘ることは貧しい路銀が許さないので、近海を巡航してゐる荷船が入つて來たのを幸ひに、それへ頼んでやうやう便乘させて貰つた。肥料や、魚粕を積んだ穴藏のやうな船艙の闇へ蓆を敷いて、それへ坐りながら、薄暗いカンテラの光の中で顔を見合はせた時には、艱苦に慣れた流石の剛情も、暫くは冗談口ひとつきく事が出來なかつた。誰もみない、座頭はぼんやりした顔容をして始終欠伸ばかりしてゐたが、話が梅之助の上に及ぶと、浮世の辛酸を

嘗め盡したやうな蒼白い顔へ、僅に血の氣を漲らして、口を極めて彼の忘恩を罵つた。そして最後に、「あんな薄情な野郎はどうせ碌な死にやうはしやあしねえんだ。」と吐き出すやうに激しく云ひ放つた。

田之助はそれを聞きながら、梅之助が出奔する前の晩、黒眼鏡をかけた女と樂屋口の暗がりでひそひそと立話をしてゐた時の光景を思ひ出して、子供心にも妙な恐怖を感じた。そして舞臺でする定九郎のやうに知らぬ他國でのたれ死にする梅之助の身の上を思ふと、堪らない程悲しかつた。

それから後も一座には幾度となく此れに似た出來事があつた。芝鶴は小樽の興行の時逃げて、人の噂によれば今では夕張邊の炭山の坑夫にまで零落してゐるとか。又近頃では旭川で立女形の梅吉が手品遣ひの一座の女藝人と駈落して、今にその行方が杳として知れなかつた。かうした人達は今いづこの國々を漂泊して、どんな悲しい苦勞に身を窶してゐることであらう。逃げる時は大方女と一緒だつたが、それも今ではもう別れ別れになつて、互に似てもつかぬ運命を辿つてゐるに違ひない。それを思ふと田之助はその人達と同じ運命に陥つてゆく自分の行末が眼の前に、まざまざと浮き上つて來るやうな氣がして、思はず深い嘆息をついた。そして何時か一度はこのお勝さんにも捨てられる自分の身の果敢なさを思ひかへすと、深い深い夜の闇の底へ音もなくすうつと引き入れられてゆくやうに頼りなくなつて、顔を背けながらはらはらと熱い涙を流した。

何にも知らないお勝さんはいたいたしいその様子を横からぢつと見入つてゐたが、やがて蒼白くなつた脣の邊に苦しさうな笑ひを浮べながら、また男の肩を強く抱きしめて、冷たい頬をすり寄せた。そしていつまでもいつ迄も石のやうに押默つて、今更その切ない思ひを口へ出して掻口説かうとはしなかつた。

豫定より一時間ほど遲れて、朝の九時過ぎに船は漸う森の町の見える處まで辿り着いた。船に弱い田之助は幾度となく嘔吐して死ぬやうな苦しみをしたせゐか、その頃はもう永病ひをした人のやうに色蒼ざめて、船室の隅へ打倒れたまゝ力なげに喘いでゐた。曉の光が白んでくる頃までは元氣よく彼の介抱に心を盡してゐたお勝さんも、いつの間にか到頭同じ苦しみにうち負かされて、彼の枕許にぐつたりと俯伏してゐたが、愈々上陸口へ近付いて來たのを知ると、僅に氣をとり直して、勢よく起上つた。そして彼の側へにじり寄つて、姉のやうな態度で勞つたり、力をつけたりした。

「そんなに弱くちや東京へ出たつてとても出世は出來やしないよ。男のお前さんがしつかりして呉れなけりや私だつて心細いぢやないか。」と、力を籠めて云はれた時、田之助は答へる言葉もなく唯窶れた頬に苦笑を浮べたきりだつた。

騒々しい機關の音がやむと、吹雪と怒濤の航海に疲れ果てた船は急に船脚を落して、二聲三聲うめくやうな汽笛をながながと吹き鳴らした。それと同時に町の棧橋の方から二艘の艀船が波浪の間に隱見しながら漕ぎ寄せて來た。一座の人はそれが着くまでゆるゆると船室へ寝てゐる心算だつたが、ボオイにせかれて到頭ふらふらする足元を踏みしめながら甲板へ上つた。雪はすつかり降りやんでゐた。併し空はまだ一面の雪雲に閉ざされて、灰緑色に濁つた海の上にたち澱んだ濛氣のために、荒涼たる噴火灣の展望は全く遮られてゐた。

艀船はやがて本船の舷へぴたりと着いた。眞先の艀船には船頭のほかに一人正服巡査が乗

つてゐた。頭から眞黑な外套を被つて、舳の處へ鳥のやうな姿をして突立つてゐたが、艀船の準備がとゝのふと身輕に本船の舷梯へ乘り移つて、佩劍をならしながら大急ぎで甲板へ攀ぢ登つて來た。そして先を爭つて下りようとする三十人ばかりの乘客の前へ立塞がつて、

「まだ下りちや可かん。」と、聲高に云ひながら鋭い眼眸で四邊を見まはした。

船長はその時艫の方で、水夫等を督して雪を掻いてゐたが、その聲に驚かされてふと振顧ると、巡査はそれを目早く見付けて、

「船長さん。」と親しげに呼びかけながら、職權をもつて船客名簿を求めた。

船長は日に燬け黑んだ逞しい面貌に怪訝な表情を浮べながら默つて此方を瞻つてゐたが、やがて水夫の一人に何やら云ひつけて置いて群集の方へ歩み寄つた。

「何事です。」と彼は穩やかな聲で訊ねた。

「いや、本署の命令で、乘客の中に捜すものがをるんです。」と、巡査は事もなげに答へて又四邊の人顏をみまはした。

多くの乘客も意外の出來事に驚かされて、眼を欹てながら漸次と二人の周圍に集まつて來た。なかには鼠のやうな臆病な眼付をして、そつと人込みの中から巡査の顏を偸み視てゐるやうな蓬髮の男もゐた。そこへ一人の船員が黑表紙のついた船客名簿を持つて上つて來た。巡査はそれを受取つて、小首を傾けながら頁を繰つてゐたが、やがて一つの名を指さして、

「婦人の乘客はこれ一名きりですな。」と、確めるやうに云つて、煙突の方をきつと見た。船長の眼も乘客の眼も一齊に其方へ注がれた。

丁度その時、お勝さんと田之助は煙突の側へ積んだロオプの上へ腰をかけて何事かひそひそと囁き合つてゐた。ふたりとも沖の方を向いてゐたので、こつちの騷ぎには少しも氣が附かないらしかつた。

巡査は默つて二人の方へ歩み寄つた。そして突然後から、

「お前さんは小樽の佐川かつと云ふ人ぢやないかな？」と、聲をかけた。

お勝さんは不意をくつて吃驚しながら後を振顧つたが、その顏はみるみるうちに眞蒼になつた。そしてぶるぶる慄へる脣を强く嚙みしめて暫らくの間は口も利けないやうだつた。

「船客名簿にはこの通り變名が書いてあるが、隱すと却つてお前さんの爲めにならんよ。」と、巡査は口では笑ひながら、鋭い眼で彼女の顏をぢつと見据ゑた。

彼女は何時の間にか周圍へ寄り集まつて來た人々の好奇心と恐怖に充ちた瞳を避けるやうに俯向いてしまつたが、少時すると蒼ざめた顏を狂氣のやうに振り上げて、

「私がたしかにその佐川かつで御座います。」と、きつぱり云ひ放つた。その聲の底には男性のやうな强い反抗と、ヒステリックな自棄とが人を壓するやうに鋭く響いてゐた。

巡査はそれを聞くと、また意地の惡さうな笑ひを洩らしながら、

「それなら本署の命令ぢやから、一應私と一緒に來て貰にやいけん。」と、嚴格な官用語の間へ妙な訛りを響かせながら云つたが、今度は船醉ひと恐れで度を失つておどおどしてゐる田之助の方を向いて、

「お前も一緒に來るんだぞ。」と、威嚇するやうに嚴命した。

二人は默つてその命令に從ふよりほかに道がなかつた。警察の手廻しがかうまで行屆いてゐようとは思ひもかけなかつたので、夢をみてゐるやうな不思議な氣持もしたが、現在斯くの如く暴露してしまふ上はもうどうする事も出來なかつた。で、巡査を先頭に一團の人々に取

圍まれながらその儘舷梯を下りて艀舟へ乘り移つた。

艀舟の中では、また總ての眼が一樣に彼等の方へ注がれた。なかには冷かな眼で彼等の身の上を兎や角評し合つてゐるものもゐたが、騷々しい波浪の音に掻き消されて、二人は耳へは少しも入らなかつた。田之助は打ちのめされたやうな意氣地のない姿をして、觸れぬ處へ俯向きながら坐つてゐたが、お蝶さんの方は少し離れて、艀の間の中仕切りに積み重ねた郵便嚢の上へ巡査と並んで腰をかけてゐた。雪のやうに碎け散る波のしぶきは、妙に緊張した彼女の蒼い顏へ容赦もなく降りかゝつた。彼女はそれを拭はうともせず、燃えるやうな瞳を据ゑて、今乘り捨てて來た本船の方を一心に凝視してゐたが、沖はいつしか灰銀色にしぐれて、影の薄くなつた本船ではボオイや水夫が幾人となく舷の欄干へ倚りかゝつて、何事か語り合ひながらこつちを見送つてゐた。

棧橋へ着くと、彼等はその儘すぐ巡査に導かれて停車場の構内を通り拔けて町の方へ出た。夜ひと夜、波に揺られたので踏みしめて歩く足にも、何となく力がなかつた。二人は肩をならべて歩いてゐながら、どうしても口を利く氣になれなかつた。

雪降りから醒めたやうな街路では頭から厚い毛布を被つた町の人達が忙しさうに步を急いでゐた。遠方から眺めると丸くなつて立働いてゐるその姿が灰色に光る雪に照り返されて、まるで土龍の群のやうに見えた。彼等が間を通り過ぎる毎に、その人達は仕事の手をやすめて、白い息を吐きながら不思議さうに見送つた。とあるアカシアと山毛欅が生ひ繁つた丘陵を越えると、バラック風の小屋が建て續いた殖民地のやうな寂しい大通りへ出た。

駐在所はその通りの中程の處にあつた。先にたつた巡査は建附の惡い硝子戸を開けて、丸木小舍のやうなその建物の中へ入つた。二人は褄にはねあがつた雪を拂ひ落しながら恐る恐るその後に續いた。

中は十疊許りの狹い土間で、眞中の處に大きな爐がきつてあつた。その側にある造りつけの高机の前には今一人の年老つた巡査が外套を着たまゝ坐つて、何か書類のやうなものを調べながら頻りに居眠りをしてゐた。三人が入つて來るのをみると彼は薄く眼を開いて、髯だらけな顏に氣の好ささうな微笑を浮べながら、

「御苦勞だつたねえ。」と優しい聲で同僚を勞つた。

二人を連れて來た巡査は、

「[illegible]よ。」と、笑談のやうに云ひながら、彼を室の隅へ連れて行つて、何事か小聲で耳打ちをしてゐたが、やがて、

「おい、宜しく頼むよ。」と二人の方へそつと眼配せしながら囁いて、そのまゝ戸外へ出て行つた。そして忙しさうにもと來た道を丘陵の方へ引返して行つた。

後に殘つた老巡査は、丸木で造つた踏臺のやうなものを爐傍へ持ち出して來て、それへ二人を腰かけさせた。そしてぶすぶす燻る白樺の小枝を掻きたてながらいろいろなことを問ひかけた。しかしそれも立入つた訊問と云ふ程ではなく、たゞ何時に室蘭へ着いて、それから先何をしたかと云ふやうな筋道のあらましを訊いただけであつた。そして小樽と室蘭の警察署から二人の捜索方を依頼して來たことや、小樽新聞の記事で彼女の家出の顛末を詳しく知つた事などを問はず語りに話したあとで、

「今札幌署へ電話で照會してをるから、何とか命令の來るまで此處に待つてゐなさい。」と親切ら

しい靜であつた。彼はまたもとの机へ歸つて、書類の調べを續けた。

人を怯かすやうな異樣な沈默がおのづと二人の上へ掩ひかゝつた。軒先から雪の落ちる幽しい音が折々靜けさの底に響いて、爐からたち騰る煙は幻のやうに息づきながら室の中を彷徨ひ歩いた。お勝さんはふき切れた腫物にさはられるやうな慘ましい顏容をしながらひとり深い思ひに沈んでゐた。彼女はまだ絕望してはゐなかつた。唯餘りに早く行方を見現はされたのが一途に口惜しくて、これから先自分の身がどういふ風に成りゆくのかと思ふと、暗い心地にならずにはゐられなかつた。

そのうちに自分の家出に驚かされて混雜してゐる小樽の家の光景がはつきり心に映つて來た。敵意を含んだうちに、何處か當惑したやうな繼母の顏も思ひ起された。そしてこれ等の異常な出來事がみんな自分の手によつてなされたことを思ふと、彼女は疼くやうな不思議な快さを覺えて、

「誰が何んと云つたつて、家へたんぞ歸るもんか。」と、心のなかで勝ち誇つたやうに激しく叫んだ。

その一言で胸が漸次と明るくなつてゆくやうに思へた。で、何かそのうへ力を添へるやうなことでも語り合はうと思つて田之助の方を振顧ると、その時、彼は窓の棧へ頭を押當てて、魂を拔かれた人のやうにだらりと口を開けたまゝぶるぶる慄へてゐた。その蒼ざめた顏には彼の心中に漲つてゐるすべての感情がいたいたしいまでにあらはに露出してゐた。もう彼の眼の前には、お勝さんもなければ、東京もなかつた。唯眞暗な洞穴がすぐ足下に開いて、次の瞬間には自分の體がその底へすうつと吸ひ込まれてでもしまひさうに激しい恐怖が彼を心底から威嚇してゐた。お勝さんはその樣子をぢつとうち瞶つてゐたが、今迄は却つて快かつた男の不甲斐なさがその時急にしみじみ腹立たしくなつて齒痒さうに足摺りをしながら、そのまま開きかけた口を噤んでしまつた。

四

函館發の二番列車は雪のために三十分の餘も遲延して、漸う十二時少し前に森の孤驛へ到着した。眞暗な牢獄の中に閉ぢこめられたやうなやりばのない心持で、函館警察署からの返電を待ち焦れてゐた二人の耳には、その鋭い汽笛の響がさながら自分達の行詰めた運命を更に恐ろしい破綻の方へ追ひ落す慘酷な絕叫のやうに聞きなされた。

すぐ眞下の海岸を蹣々と凄まじい地響をうたせながら馳り過ぎて行く列車の行方を追つてゐる間にも、疲れ果てた田之助の心には冷汗の流れ出るやうな激しい戰慄が幾度となく襲ひかかつて來た。「あゝ、もう駄目だ！この儘牢屋へ入れられてしまふんだ！」と思ふと、その瞬間に覺えぬ鋭い恐怖がすつと頭の底に閃き過ぎて、彼は思はず輕く手足を縮めながら逃げだすやうな身構へをしたが、併しそれもほんの一時の發作で、意地も、張りもぬけはてた體中の筋肉にはすぐまたもとのやうな絕望に似た重苦しい倦怠が壓被さるやうに立戾つて來た。

その時、戶外の方からさくさくと雪を踏む靜かな音が聞えて、突如に入口の硝子戶ががらりと開いた。吃驚して振り仰いだ二人の眼の前には、何處から來たのか一人の異樣な風體をした男が突立つてゐた。紺口のやうな黑の大外套の上から格子縞の毛布をはおつた五十恰好の脊の高い男で、眼深にかぶつた鳥打帽の下に冷たく輝いてゐる眼は左の方だけ眇だつた。彼は帽子と、毛布だけぬいで小脇に抱きながら爐傍へ歩み寄つて、重々しい挨拶をしながら、

「私は小樽の角正から出ましたもので、此度は種々な御面倒を願ひまして、まことに何んともお禮の致しやうも御座いません。」と、柄には不似合な卑下した言葉でひと通りの挨拶を述べた。

書類の調べも大方終つて澁茶を啜りながらぼんやり欠びばかりしてゐた老巡査は、怪訝な顔をして頻りにその男の風體を眺めてゐたが、

「一體貴方は何處から來なすつたんぢやな？」

「只今の汽車で函館から參りました。實は昨朝から主人の命令で彼方の方へ出向いて居りましたので、彼地の警察の方々にも一方ならぬ御迷惑をかけまして、……」

「はゝあ、では何んぢやな、此方からやつた電報をみて引取りに來なすつたのぢやな。」

「はい、左樣な譯で。」

「さうでしたか。分りました。」と、老巡査はひとりでうなづきながら、まあ、此方へ寄つてあたんなさい。」と、自分から椽臺の隅へ身を寄せて、席を讓つた。

「いや、どうも恐れ入ります。」と、男は遠慮深く腰を屈めながら、そこへ座を占めようともせず、懷中から鼠色の封筒に包んだ一通の書狀を取り出して巡査の手へ渡しながら、

「これは彼地の警察からおことづけで。」と云つて又丁寧に頭をさげた。

巡査はすぐその封を切つた。中から赤い罫紙に認めた命令書らしいものが出て來た。彼はそれを見ると安心したやうに笑ひながら、

「ではこの瀬川久藏といふのが貴方ぢやな。實はな、私の方ぢや餘り本署から返電が來んもんぢやから、どう處置していゝやら分らんで、大いに困つとつた處ぢや。」

「はゝあ、左樣で。何でもこの雪で電線に故障が出來とると云ふ話で御座いますから、それで延着致しましたんでせう。私が本署へ伺ひました時に署長樣から今電報で命令を出して置いたからと云ふ御話が御座いましたから」

「さうでしたか。それぢや又大沼あたりで切れたんぢやな。どうも冬になると此れで困るてなあ。警察の事務なんちふものは電報が切れたとなると、まるで捗がいかんもんぢやから。」と、苦もなささうに笑つて又机の上へ倚りかゝつて、細い字で何か命令書のなかへ書き入れてゐたが、やがて、「この中には十分說諭を加へた上で引取人へ引渡す樣にと書いてあるが、それは貴方の方で適宜にやつて貰はにやならんな。」と、云つて腹の中まで見えるやうな口を開いて笑つた。

「どうも恐れ入ります。いろいろお忙しいなかに御厄介をかけまして。……」と、男は幾度か腰をまげて丁寧に禮を述べたあとで、又毛布を肩へかけながら此處を立去る氣勢をみせた。

お勝さんも田之助も殆んど同時のやうに立上つた。そして一言も言葉を交さず、男の後へ續いて入口の敷居を跨いだ。見送りに出て來た巡査は力なげな二人の容子をみると、急に年老つたやうに眞顏になつて、

「貴方がたも此れから性根を入れかへてな、二度と再び警察の手になんぞ掛らんやうにせんければいけんよ。」と、しみじみ云ひ放つた。

雪搔きのすんだ街路には往來の人影も途絶えて、何處までも建續いた低い家並の陰には何とも云ひやうのない寂しさが濃く凍りついてゐた。三人はまるで言葉を封ぜられた人のやうに押默つて、汚れた地肌のみえる雪のうへをとぼとぼ歩いて行つた。家禽の群が時々消魂しい啼き聲をたてながら物陰から走り出て、餌を啄みながら道を遮つたが、誰ひとりそれに眼を落すものさへなかつた。

停車場の前まで來かゝると、久藏は急に思ひ

ついたやうに左へ曲つて、その建物に附屬した旅客待合所へ入つた。この寒さに旅をする人もないとみえて、大火鉢の周圍に置並べた長椅子には客の坐つた氣勢もなかつた。彼は大聲で給仕を呼んで温かい蕎麥を三人前命じた。そして堅く拱手をして暫らくの間ぢつと考へこんでゐたが、やがて光のある右の眼で對向に坐つたお勝さんの方をきつと見すゑながら、はじめて口をきつた。

何故こんな無分別をなすつたんです。……人を壓しつけるやうな重々しいその聲には、犯し難い一種の權威がひそんでゐて、それが女の胸にはまるで致命傷のやうになつて鋭く響きわたつた。と、駐在所に抑留されてゐた三時間の間、絶えず心に描いてゐた空想も計畫も一瞬のまに泡沫の如く崩壊れ去つて、身に振りかゝつて來たすべての束縛から遁れさる望みが全く空頼みになつてしまふと同時に彼女の眼の前には冷たい絶望の影が忽然として浮きあがつて來た。事實、荒つぽい埠場人足の間に立交つて荷積の役を取締つてゐるこの閲歴の多い剛直な久藏の手に抑へられた上は、彼女がどんな激しい反抗を試みたところで、もう身動きすら自由には出來ないのであつた。唯もう温和しく彼の云ふが儘、なすがまゝに小樽の家へ連れて行かれるよりほかには途がなかつた。

久藏はまた冷やかに語をついで、

「一念のために伺つときますが、持つてお出でになつたものは、そつくり其處にお持ちでせうな。」

女は默つてうなづいた。

「では此方へお渡しになつて頂きませう、私がお預り致します。」と、云つて久藏はお勝さんの手から膃肭獸皮の鞄を受取つた。そしてその中から證書のやうなものを幾束も取出して、一々膝の上で仔細にあらためてみながら、

「貴女がこれを持つてお出でなすつた爲めに、帳場ぢやどれほど迷惑してゐるかお分りになりますまい。これがもう三日も遲れて出て御覧なさい、それこそ長年角正で賣り込んだ店の信用はまるで潰れてしまふんです。それにいくらこんなものを持つてお遁けなすつた處で、今の世の中にや警察もあれば、電報もあるんですから、とても貴女がたの御自由になるもんぢやありやしません。」

別に紛失したものも無いのを見屆けると、やつと安心したらしく、またもとのやうに鞄へ收めて、今度は懷中から、小さく折疊んだ新聞を取出して、お勝さんの眼の先へ突きつけながら、

「まあ此の新聞を讀んで御覽なさい。このなかに書いてあることを御覧なすつたら、少しは眼が醒めませう。十五や十六のお孃さんぢやあるまいし、莫迦々々しいにも程があるぢやございませんか。」と、力強く云ひ放つて、田之助の方をじろりと睨めやつたが、彼に對しては一言も口をきかうとしなかつた。

お勝さんはその新聞を膝の上へ置いたまゝぢつと石像のやうに俛首れてゐた。彼女の頬は鉛のやうに蒼ざめて、脣のあたりに漂つてゐた、總てのものに反抗しようとする男の様な表情も何時の間にかすつかり消え失せて、神經的にぴりぴり痙攣する眦には涙が零れさうに溢れてゐた。

そこへさつきの給仕が誂への蕎麥を運んで來た。田舍らしい大きな丼のなかからは匂ひの高い湯氣がぼつぼつと立騰つた。

「兎に角大旦那も非常な御心配で被在るんですから、此の次の汽車ですぐ小樽の方へお連れ申しますから、そのおつもりで被在つて下さい。」と久藏は人前を憚りながら少し調子を和げて云つたが、それを聞くとお勝さんは何と思つたか

突如頭から一にあつた闇をびりびりと引裂いて、

「私や死んでも家へなんざ歸らない。」と、丁度子供がむづかるやうに髮を掻んで、激しく頭振りあげながら叫んだ。

「莫迦なことを仰有るもんぢやありません。何と仰有つても私がお連れ申します、無理矢理をかりてもお連れ申しますこと、久藏はその頭を嘲るやうにみつめながら瞬き一つ動かさずに云ひ放つた。そして力めて平靜を裝ふやうに我から先に箸を執りあげて、旨さうに熱い丼を啖りはじめた。

函館行の上り列車が寒空へ汽笛の音をながながと響かせながら入つて來た。懶い靜けさに掩はれてゐたプラットフォームは俄に活氣だつて、蒸氣の奔出する轟響や、物賣りの呼び聲や、小砂利の上をせはしげに驅違ふ足音が渦巻きながら騷然と湧き起つた。待合所へも山地の牧夫らしい赤毛布の男が四五人一塊りになつてどかどかと驅け込んで來た。

久藏は空になつた丼を卓子の上へ置くと、今度は外套の内嚢から煙草入を取出して悠々と煙の輪を吹きはじめた。そして何か別な事で思案してゐるらしく、ぼんやり玻璃窓から戸外の景色を眺めてゐたが、遠くの方で子供等が鈴を振りながら、「室蘭行の艀船が出まあす」と、かすかに呼んでゐるのを耳に留めると、ふと思ひついたやうに田之助の方を振顧つて、

「お前さんはどうしなさるんだ。お嬢さんはもう私の方のもんだから、お前さんが何時までさうしてゐたつて、どうにもなりやしねえんだぜ。」

田之助は彈かれたやうに顏を振上げて、おどおどした眼眸で久藏の顏をちらりとみたが、すぐ又椅子の隅の方へ身を縮めてぶるぶる體を慄はせながら返事をすることさへ出來なかつた。

「一體今度のことについちやお前さんにも十分罪があるんだから、場合に依つちや私の方でも相當の手段を執らなけりやならねえが。……」と、久藏はその様をぢつと見詰めながら威嚇するやうに云つたが、「まあ併し、そんな荒立つた事は云はねえことにして、丁度都合よくいま船も出ることだから、この儘默つて室蘭の方へ引揚げちやどうだな。その方がお前さんの身の爲めにもなるぜ。」

「有難う御座います。さう願へれば。……」と、田之助は幾度か意氣地なく頭をさげて聞きとれないやうな細い聲で頻りに哀訴を繰返した。限りない恐怖に苛まれてゐる彼の耳には、その室蘭といふ言葉がどんなにうれしく聞きなされたらう。きつと何か酷い目に逢はされなければすむまいと思ひ諦めてゐたこの場合、思ひもかけぬその懐かしい町の名を聞いて、彼は實に百千の救ひの手を得たよりも猶ほ一層力強い氣にならずにはゐられなかつたのであつた。

「それなら早く支度をして、棧橋へ出てゐねえと間に合はねえぜ。」と、久藏は坐つたまゝ手でせきたてた。

田之助は氣を苛つてものに憑かれたやうな眼眸をしながらうろうろしてゐたが、やがて挨拶もそこそこにツッと飛び出してしまつた。そして後も見かへらずプラットフォームをぬけて棧橋の方へ驅けていつたが、線路を横切る時ふと枕木に躓いて思はず前のめりにばたりと轉んだ。ぐらぐらと眼が眩んで氣が遠くなりさうなのを無意識にとび起きて、又驅け出さうとすると、そこへお勝さんが息を切つて追驅けて來た。

「ちよいとお待ちよ。話があるんだから。」と、お勝さんは突如後から田之助の袂を攫んで、「お前さんも、私達と一緒に小樽へおいでよ。

私が私がきつと悪いやうにやしないから。」と、激しく喘ぎながらやつと云つたが、彼女の胸には田之助にも分る位高く波うつてゐた。
「いゝえ、私は歸ります。あの船で歸ります。」と、田之助も調子はづれな聲で爭ふやうに云ひ放つて女の手から身を振りはなさうと踠いた。
「だつて、今頃歸つたつて何の役にたつもんかね。彼地ぢやもう逃げたもんだと思つて。……」
「いゝえ、あの船で歸れば今夜までにや座へ着きます。さうして扇昇さんに賴んで座頭へ詫を入れて貰ひます。」
周圍には何時の間にか四五人の子供が集まつて來て、物珍らしさうに二人の容子を眺めてゐた。お勝さんはそれをみると急に我に返つて、恥かしさうに眼を落しながら、
「ぢやお前の勝手におし。」と、はげしく云ひ放つて、帶の間から皺だらけになつた小さな紙包みを取出し、それを田之助の手へ渡しながら、「ぢやこれをやるから、何處へでもお前の好きな處へお歸り。そのかはり私はもう一生お前にや逢はないよ。」
田之助はさう云ふ女の顏をちらりと流眄にみた。雀斑の浮きあがつた蒼白い頬は涙に濡れて、彼の方をきつと見上げた瞳の底には獸のやうに激しい憤怒が燃えてゐた。それをみると彼は俄に打ち擲してやり度いほど腹立たしくなつて、少時の間きつと女の眼のところを睨みかへしてゐたが、やがて口もきかずそのまゝついと後を向いて突如に棧橋の方へばたばたと駈けだした。そしてわくわくする胸を抑へながら、丁度纜を解かうとしてゐた汽船の舷へひらりと飛乘つた。
　夜航の振洋丸は眞黑な煙を大空へ吹靡けながら、今朝來た海のうへを再び徐々と室蘭の方へ引かへしてゆく。舷を撫でる低い曲波はこそりとも音をたてず、大洋の面にたち澱んだ限りない靜けさは僅かに推進器の回轉する響音によつて刻まれてゆくばかりであつた。田之助は船客の群から離れてたつたひとり甲板の冷たい鐵鎖の上へ倚りかかつて、ぢつと陸の方を眺めやつてゐたが、もうその時はプラットフォームの上にも、待合所の入口にも、また埠橋のあたりにも自分の行方を見送るお勝さんの姿らしいものを見出すことが出來なかつた。彼はやつと安心して、深い、深い嘆息をついた。鉛のやうに執念深く附纏つてゐた恐ろしい危險から、全く遁れ出たことを確めると、彼は何とも云へぬ歡喜を覺えて、勝ち誇つたやうに心底からお勝さんの名を呪つた。二度とふたたびあの女に出逢ふことがなかつたら、どんなに幸福だらうとしみじみ思はない譯にはいかなかつた。
　船は漸次と速力を早めて、一直線に沖の方へ進んだ。蒼茫と煙つた水平線には雲が白く光つて一艘の帆船が同じ航路を東へ馳つてゆくほかには一物も眼を遮るものがなかつた。冷たい海の風が靜かな囁きを殘してゆくごとに、田之助の心は次第々々に輕くなつてゆくのを覺えたがそれとともに堪へ難い疲勞と空腹とが犇々と五體を襲ひかゝつて來た。その時彼はふと室蘭にゐる一座のことを思ひ出した。今頃は階下の樂屋へ膳をならべて皆で笑ひ興じながら晝餐を食べてゐるころであらう。扇昇がまた茶ばかりがぶがぶ飲みながら調子のいゝ輕口を云つて、皆に腹を抱へさせてゐることであらう。さう思ふと下廻り達の手で作られる鹽のからい味噌汁までが急に懷かしくなつて來た。
「あゝ、自分のやうなものが、どうして東京へなぞ行かれよう。あの一座を離れることの出來ないのは初めから分りきつてゐたのだ。」と、今更のやうに氣付くと昨夜からの變化の激しい出來事が愚にもつかぬ惡夢のやうに思はれ、眼を

あいてゐながら誑かされたのが、此の上もなく腹立たしくなつて、思はず足摺をしながら眉根を寄せたり齒を喰ひしばつたりしたが、それと同時に今夜の芝居にも差支へる自分の不所業が犇々と身を責めて、行詰つたやうな鋭い悔恨の念が再び彼の心を暗くした。

「扇昇さん、全く私が惡かつたんだ。どうか座頭へお詫をしてお吳んなさい。」と、彼は胸の底から絞り出すやうに口のなかで呟いて、兩手をしつかり組み合はせた儘途方に暮れたが、その時、懷中へ無造作に突込んで置いた先刻の紙包みを忘れてゐたのに氣がついて、急に救はれたやうな心持になりながら、そつとそれを引出してみた。紙包みを解くと中には薄々豫想してゐたとほり、四つに折つた五圓紙幣が二枚入つてゐた。それを見ると彼の氣は忽ちにして變つた。彼の眼の前には、何といふことなしに、忘れられぬ小糸の姿がすうつと浮きあがつて來た。我にもあらず眼を奪はれて、そのさだかならぬ幻にぢつと見入つてゐると、熬りつくやうな戀しさが胸先へ込みあげて來て、靜かにしてゐることも出來ないほど氣が勇んで來た。今夜はどんな首尾をしても逢はう、逢つて有る限りの言葉を盡して詫を云はう、そして久し振りに今夜こそこの金であの女をまかなつてやらなければならぬと思ふと、今迄心の底に蟠つてゐた暗い悔恨や、恐怖がすべて拭いてとつたやうに消え去つて、彼はその二枚の紙幣を強く強く握りしめながら、抑へきれぬ微笑を脣のあたりに漂はせた。そして胸の裡で女を喜ばせる計畫をめぐらしてゐるうちに、いろいろな感情がむやみに迸發して來て、しまひには譯もなく淚さへ滲んで來た。

森の町はもういつしか水平線の下へ低く沈んでしまつた。北西の空には雲切れがしはじめて、その斷れめから、荒寥とした駒ケ嶽裾野の大傾斜が少しづつ姿を現はして來た。西へ傾いた薄い日射しがせはしげにその上を掃つてゆく度に、雪に降りこめられた一面の原野はきらきらと美しく映り輝いて、人住まぬ鄕國を思はせるやうな寂寥が自づと四邊に湧き上つて來た。そして灰綠色に靜まりかへつた海の面には一條の長い長い澪が軟風のために奇怪な象に吹き撓められながらうつすりと漂つて、眞白な海鳥の群がそのうへを啼きつれもせず高く低く飛びちがつてゐた。・・・・

（明治四十四年十二月作）

歩く（四）

殊に中學時代には端艇の選手であつたので心臟も頗る豪健であつた。甲府から黑森峠の險を越えて、信州の飯田へ出た時なぞには山道十二里を踏破して平氣であつた。又十九の年には下駄ばきで八ケ嶽へ登攀したほどの無法ものであつた。

ところが時運に惠まれて、文壇へ出て以來は、もうまるで元氣がなくなつてしまつた。酒と女と、過勞がいつの間にか、私を邪道に導入れてしまつた。こんな馬鹿氣たことをいふと笑はれるかも知れないが、どうも人間は野性を失ふと、何處かに早老的缺陷が現はれて來るやうである。都會人だなぞと自ら誇稱して、世紀末的錯覺を賣りものにしてゐた時代のことを想望すると、聊か尻こそばゆくなつて來る。近頃新感覺派の作品なぞを讀むとどうも擽つたい。我々が『屋上庭園』や「スバル」なぞといふ新らしい雜誌によつて、さかんに自然主義の鈍重さを嘲つてゐた時分の氣合がまざまざと思ひ出される。

浮名

秋風に寂しく暮れたある夜のことである。一力の奥の廣間には今宵もまたその頃祇園で成駒屋の力彌と綽名にまで唄はれた三條の素封家津川のぼんち清三郎のほつそりした處女のやうな美しい顏が見られた。正面の大床から紙襖際まで顏見世狂言の舞臺でも見るやうに風情よく置きならべられた五六臺の紙燭は時とともにじりじりと燃え落ちて、ほの暗いその光が喘ぐたびに、あるかなきかの陰影が何處からともなくたゆたふやうに間うちに搖曳して來る。黒光のする天井も、古めかしい紅殼色の壁も、煤けた紙襖の金泥も、みな一樣にしつとりとしたその薄明りのなかに溶けて、銅壺に生けた紫菀の花を背にした清三郎の白い横顏までが其處になくてはならぬ紋樣のやうにくつきりと浮きあがつた輪郭をみせてゐる。

清三郎の周圍にはいつものやうに四五人の舞妓が雛壇から降りて來た人形のやうな婉麗な化粧を凝らして各々思ひおもひの姿態をしながら右ひだりに居並んでゐる。老妓の仙吉は三味線の棹を横へずらして、今まで唄つてゐた小唄の跡を追ふやうにうつとり撥で調子をとりながら空を細く刻んでゐる。少しさがつて燭臺の傍には眉を落した若い仲居が黯んだ紅前垂を膝のわきに引きそばめて行儀よく控へてゐる。清三郎はそのなかで脇息に片肱をもたせかけながら、沈着いた顏容をして黒塗りの小さな膳から盃をとりあげては少しづつ濃い酒を啜つてゐるのである。

「なあ、、、川はん。どうぞたのみどすさかい、また何ぞ面白いお話を聞かしとくれやす。」舞妓の吉彌は待ちかねてゐたやうに口紅の光る脣を綻ばしながら云つた。

「また話かいな。あかんなあ。」と、清三郎は盃を置いて、厭でもなささうに微笑みながらさう云ふ吉彌の顏をしげしげ見た。清三郎が舞妓達を集めて多愛もない遊びに耽る時にはいつでもその「お話」が附きもののやうになつて座興を助けた。人並すぐれて讀書癖のある彼はさまざまな小說や、物語りのなかから解り易いものを選つてはよく彼等に話して聞かせた。はじめは罪のない童話のやうなものから、漸次と人情話に移つて、今では聞きての耳も心も相應に發達してきたので時々は鏡花の作物の荒筋などを掻撮んで話すこともあつた。舞妓達も彼の美しい顏をみる以外に、その面白い物語りを聞くことを樂しみにして大抵の座敷は貰つてでも彼の行つてゐる茶屋へ集まつて來るのであつた。

清三郎はぢつと紙燭の光を見つめながら考へてゐたがやがて、

「そやけど、今夜は頭が怪體になつてひとつも思ひ出せんぜ。もう種が盡きたんかも知れへん。」

「いけずやなあ!」なかでも一番美しい眼をもつた久勇は拗ねるやうに肩をゆすつて「そなこと云はんと、お云ひやはいな。どないに短うても大事おへんさかい、云うとくれやすな。」

「さうかて、思ひ出せんものは仕樣がないやないか。」

「思ひ出せんちふ筈がおへんわ。なあ、吉彌はん。あなこつちらて私らを嬲らはんにやわ。ほんまに惡いお方やなあ。」

「ほんまにいな。この頃はえゝひとがお出來や

したさかい、あんたはん賴りないお方におなり
やしたわ。一遍きつい目に云うて上げんなら
ん。」
「はゝゝゝ。こらまたきつい權やな。」清三郎は
笑ひながら急に當惑らしい顔つきになつて、「そ
ないに云ふけど、此頃は忙しうて村ちふやうな
もん讀んでゐる暇があらへんのやがな。」
「そらさうどすやろ。私らには聞かしと呉れ
やしまへんやろ。桂勇はんやつたらさらのえゝ
話をたんとたんと聞かしとあげやすやろけどな
あ。」今まで默つてゐたおうめは清三郎の方へ
肩を傾けて、眞顔になつて口をいれた。それと
一緒に舞妓達はどつと笑ひ崩れて、
「ふわッ、きつい氣、どうえ。」と、云ひながら
雅けない嫉みをみせた瞳で彼の方をとりどりに
瞻つた。
清三郎はそれを聞くとてれたやうに、
「なんでそれが。」と、口籠つて、眼尻から頰へ
若々しい血を波だたせながら側を向いてしまつ
た。
仙吉も一座の容子をみると面白さうにくすく
す笑ひ出して、
「この頃の舞妓はんはほんまに恐らしやの。」
と、云ひながら仲居のおさだと顔を見合はせた。

やがて吉彌はまた詰るやうな調子で、
「なあ、へ、川はん。あんたはんとこの桂勇は
んに情人れしとるやうちふ噂しますが、ほんまどつ
か？　ほんまにあの人好きどつか？」
「阿呆らしい。誰がそなこと云ふてるのえ。」
「誰がて皆して云うてやはりますがな。えらい
評判どつせ。」
「阿呆やなあ。そなこと嘘や。私はなあ、縹緻
はんやつたら誰かて好きや。」
「おゝ、おゝ、そゝやうに云うて呉れやはる。」
と、吉彌は信じ難いやうに傍たまで寄つて、「よ
んべもなあ、私と小染はんと、梅勇はんと、それ
から久勇はんとあんたもおゐやしたえなあ、みん
なして大榮はんで緣結びしたんどつせ。ほした
ら、二度ともあんたはんと桂勇はんといツつ
かはつた。私、もうてれくさうなつて來てな、
えゝッちうて引割いて緣から川へ投げてしまう
たんどつせ。」
「さうどしたそなあ。姐はん。」久勇も眼を据
ゑながら小さな嫉妬を顔に現はして、「私、も
うあんなんやつたら叶はんわ。」
「ほんまにいな。川はんもよう考へとみやす、
倖りやおへんか。」一番年の下な蝶子までがま
せた口をきく。

仙吉は黙つて口を尖らしてゐるその様を眺めてお
たがやがて年寄らしい口調で、
「そんなことお云ひやすけど、あんたはんがた
も粋な手やないか。なんぼ云うたかて、川はん
がお好きなものは仕様がないやないか。さうや
ろ、あんたかてほんまに好きと思ひやるお
方がある時には、そのお方のことを皆から噂し
うて云うたかてあかんやろ。」
「さうかて、姐はん、そんなんやつたら頼りな
いわ。こないして辛抱して待つてんの
に、たつたそれだけ桂勇はんばつかりお好きやす
ちふ話がないわ。誰かてみんな好いて欲しい
わ。」久勇は鼻を鳴らしながら拗ねるやうに云
ふ。
「ほゝゝゝ。やゝこしいこと。もうちよつと
賢うおなりんか。」仙吉は細い煙管の煙管をと
り出して冗談のやうに唾を吐きながら、「そやけ
ど、川はんも難儀どすえなあ。こないにたんと
好いて呉れる人があつてはなあ。ほゝゝゝ。そ
れこそほんまに難儀なうおつしやろ。」
清三郎は恥かしさうに薄笑ひを洩らすばかり
で返事をしようともしなかつた。
一時、年頃から云つても、趣味性から云つて
も彼はもう既に成熟した立派な男になつてお

たゞ、どういふものか彼には鑑賞的な、非現實的な處があつた。現實に接着して、そのなかに沒頭してゆくことはどうしても彼には出來なかつた。出來ないといふより、さう云ふことをするのがひどく厭はしかつた。ひとつには傳統の多い大家に育つたせゐでもあらうが、反面から見ると、それは放縱でゐながら、何處か打破り難い因襲の網に絡まれてゐる消極的な京都の生活がその性格の底に重い礎石を置いてゐるのであつた。つまり一言にして掩へば彼も趣味生活を唯一の道德とする京都人の一人であつた。

彼は異性に接する機會の多い遊蕩の巷に出入してゐながら、此の年になるまで全く女といふものを知らなかつた。そして遊ぶにしてから、若い藝妓などを招び集めて色つぽい華美な遊び方をするのが嫌ひで、いつもかうした地味な趣致の多いしかたで遊んだ。美しい舞妓達を集めて、紙燭の光にそむけた横顔や、紅いだらりの帶のはらぎや、罪のない言葉の綾のなかに身を置いてそれを唯一の嗜美の對象とした。それでゐて今迄に彼には戀の事件がないのかといふと、決してさうではなかつた。彼の美しい容貌と貴族的な優しい擧止とは若い藝妓や、舞妓の心を捕へずには置かなかつた。彼を戀ひ慕ひ、彼に情を訴へて迫つた女も今迄に一人や二人ではなかつた。併し、そんな場合に途端ばになると彼は自分から無理にもその女の腕を振拂つて逃げた。そしてもう二度とふたたびその女に近づかなかつた。

今年の春にもさうした事件が彼と舞妓の小千代との間に起つた、二人の仲はもう去年の秋頃から祇園では人々の口の端に上つてゐた。たとひ最後には逃げをうつにしても、その間際までは女の心を誘ひ惹きつけてゆくことに興味をもつてゐる彼のことゝて、彼は酒席に集まつて來る妓達の前でも、その時は小千代との間柄を公言して憚らなかつた。山科の茸狩、白川邊りの夜歩きといふやうな本筋を辿つてその關係は漸次と開展していつた。よそめにも可笑しいほど二人は熱していつた。そして到頭、今年の春もう東山に緑も色づいて、そろそろ圓山の樹蔭にも行樂の人影がしげくならうとする頃になると、彼等はお互に情緒の絶頂に到達して、何うにかしなければそれから先、各自の道を歩いてゆくことが出來ないやうな處までのぼりつめてしまつた。――少なくとも周圍のものの眼にはさう映つたのであつた。

最初に二人の仲を取りもつた大利の女將は丁度それをいゝしほに思つて、二人の間に最後の關係を結ばせようとした。殊に小千代の母親といふのが頗る因業な女で、爲めになる旦那筋の客をとらないと云つてひどく彼女を責めたててゐる最中だつたので、女將はそつちの方ともよく談合して、都踊の時、話がきまつてゐないのは一流の舞妓の恥になるからといふやうな巧みな口實のもとに小千代を自分の持ちものにすることを淸三郎に強ひた。

丁度、あと四日ほどで祇園名代の都踊が始まらうといふ日のことであつた。二番の踊りに太鼓の出番をつとめる筈の小千代は一日稽古を休んで大利の女將に連れられてそれとなく宇治へ行つた。前からの打合はせで淸三郎もその日の午過ぎから宇治川の淸瀨に臨んだ古めかしい旅籠屋で彼等に出逢ふことになつてゐた。そして彼等は他人交ぜずの親しげなまとゐをつくつて、中島の洲に思ひ草を摘みに出たり、まだ肌寒い河瀨の風を平等院の釣殿に避けたり、面白くその半日を遊び暮らして、灯ともし頃になつてやつと旅籠屋の奥の離座敷に落着いた。そして咽ぶやうな寂しい河瀨の音をきゝながら夕餉の膳に向つたが、その時はもう二人ともすつか

り心の底から理解し合つたやうな嬉しさうな眼色をしてゐた。
　大利の女將はその夜、恥かしさうに口籠る小千代の言葉を聞き捨てて、ひと足さきに京へ歸つた。あとは思ひ合つた二人きりの世界だと思つて女將は汽車のなかでひそかに北叟笑んだ。そして京へつくとその儘小千代の居邸へ寄つてさも安心したやうに事の顚末を主人に物語つたあとで、さて家へ歸つてみると彼女は思ひもかけぬ出來事に驚かされた。今頃は宇治で初めて結ぶ仇枕の甘い夢を貪つてゐるとばかり思つてゐた小千代が、何うしたものか何時の間にかたつたひとりで歸つてきて、女將の居間の隅にしよんぼり坐つてゐた。驚いて譯を訊ねると、小千代は急に涙聲になつて女將の乘つた次の汽車で歸つて來たといふばかりで、その儘しくしく泣き出してしまつた。
　淸三郎はそれからぱつたり大利へ足ぶみをしなくなつてしまつた。それのみか小千代さへも其ののちは一度も知らせなかつた。偶に座敷などで出逢ふことがあつても、相變らず親しい言葉はかけてゐながら妙に冷たい擧動をみせて、決して傍へ寄せつけなかつた。……
　今日この頃、舞妓達の間で淸三郎と浮名の立つてゐる君勇は祇園で名うての溫しやかな舞妓だつた。
「あの娘は一日ものも何も云はんとちんと坐つてやはりまつせ。」などと朋輩からも笑はれるほどの無口な女だつた。夢みるやうに睫毛の長い眼をすゑて、ちつと坐つてゐる處に彼女の全幅の價値があつた。舞ひはさして巧みでもなかつたが、そのかはり小鼓が人に優れて堪能だつた。伏眼がちに瞳を落して紅の調緒を肩から友禪の長い袂に垂らしながら流れるやうな纖やかな手先で一調をしらべる彼女の姿は纖細な美を好む京の畫家の筆に幾度か寫しとられたのであつた。
　淸三郎は彼女との浮名を早くから薄々耳にしてゐた。何うした機會に、どんなことからそんな噂がたちそめたものか少しも知らなかつたが、それを知らないだけに彼の好奇心は平常よりもより强く動いた。彼は默つて宙に彼女の姿を描いてみる時、必ず胸の底に淡い歡びが燃えあがつて來て、胸が輕く喘ぎさへもした。そして此れから先彼女との間柄がどう云ふ風に發展してゆくだらうといふことが、彼にとつては深い興味を與へた。その興味はかうして舞妓達の間に取圍まれながら遊んでゐる間にも刻々に增大してゆくのであつた。
「えらうひつそりして來ましたな。ちつと何ぞ云ひまへうか。」仲吉は一座が妙に白けて來たのをみて、また三味線をとりあげながら云つた。
「おほきに。」淸三郎は漸次と寂しい顏容になつて、「そやけどもう宜しいわ。何やしら怪體な氣になつて來た。山へでもあがつて來うか。」
　舞妓達はひとりもそれに答へるものはなかつた。
　吉彌は隅の方の燭臺の蔭から淸三郎の橫顏をちつと瞻つてゐたが、やがて急に氣をかへて、
「おさだはん姐はん。君勇はんはえらう遲うおすなあ。何をしとゐやすのやろ。」
「私もさつきにからさう思うて、せいせい急いて貰うてんのやけど、お客はんと一緒に京極へいたたら云うて、どうしても逢うて貰へんのどつせ。」仲居のおさだはもちまへの細い聲をとぎらせながら云つた。
「京極へ。怪體な人やなあ。京極やつたらいつかて行けるのになあ。」と、久勇は吉彌の顏をみながらもどかしさうに云つた。
「ほんまにそや。川はんがこないにしゆんどゐ

やすうになあ。

一座はまた話がふつりと途斷れてしまつた。仲居は皆の氣を讀むやうな老巧な眼つきをして一人ひとりの顏を順々に偸み見ながら押默つてゐたが、一座がますます沈んで來るので、急に可笑しくもなさゝうに笑ひ出して、

「こらどもなりまへんな。舞妓はん達までそないにひつそりしてしまうては私らどないにしてえゝや分らしまへんがな。」と、氣を引きたてるやうに云つたが、すぐにまた調子を變へて、「ほんならえゝ、今夜は川はんのかはりに私が面白い話を聞かしてあげうか。そのかはり恐い話え。聞いとお呉れやすか。」

「へ、おほきに。どうぞ云うとくれやす。」久勇はその顏をみながら氣の乘らない聲で云つた。

仲居はそれと一緒に三味線を傍へずらして、また煙管をとりあげながら、

「あんたはんがた、昔この万亭はんにゐやはつた化猫の話知つてるか？」

「知りまへん。」雛子は無邪氣な顏をしながら答へる。

「さうやろなあ。今は餘り云はん話やさかい。……」と、眼を落して、靜かに柔らかな煙を吐きだしながら、彼女はやがてその化猫の無稽な物語りをしはじめた。

それはまだ仲居が若い娘だつた時分のことである。この一力に年古く住み慣れた一疋の猫がゐた。不思議と全身手足まで眞黑で體の小さな割りにまるで可愛氣のない猫だつた。いつも人を恐れるやうな、蔑むやうな意地の惡い眼つきをしてゐて、滅多に人の傍へ近寄るやうなことはなく、いかさま業でもしさうな柄のよくない猫だつた。

その猫が或日、突然かき消すやうに姿を隱してしまつた。前にもさう云ふことは度々あつたが、大抵その翌日か翌々日には再び歸つて來るのが常だつた。それにその時はどうしたものか、三日經つても四日たつても歸つて來なかつた。で、家ぢうのものは誰れも彼も皆不思議がつて仲居達から出入する藝妓や舞妓に至るまで寄るとさはるとその噂で持ちきつた。と、それから幾日か經つた或晩のこと、ふと舞妓達の小さな心を慴えさせるやうな出來事が起つた。……

「その晩は、なんやしら陰氣な雨夜やつた。私はな、よう知つてるお客はんで寄せて貰うて、今の吉次はん姐はんな、あの人やおしけはんやたらみんな一緒に來てた。おゝ、そや、このお座敷や。私は久勇はんが今坐つとゐる邊にやつぱりそないにして坐つてたんえ。とな、もう夜が更けてから、着物を換へさせて貰はう思うてな、ふつと立つと、その時何やしら庭の方で螢のやうにぴかりと光るものがあんの。まあ、怪體な、冬のことやさかい今頃螢の出る譯はないし、何やろと思うてぢつと見ると、私ははツちうて喫驚して突如お客はんのねきへ飛んでいて顏をかくしてしまうた。……」

「まあ、厭らしやの、姐はん、そら何どす？」

「私もう恐うなつて來たわ。」と、久勇は少しづつ清三郎の方へにじり寄りながら顏色を變へてゐる。

「それがな、あんたはん。姿を隱したちふ猫やが、いつ歸つて來たんか、そこの御不淨の傍に石の手洗水鉢があるやろ。あの蔭にこないになつてつくばうてな、座敷の容子をぢつと見てゐるのどすがな。私もう恐うて恐うて、その時こそほんまにどないにせう思うたか知れんのどつせ。……」

「ふわツ雛子はん。厭やわ！」おうめはそのとき雛子が恐ろしさに思はず彼女の膝へ手をつかへたのに吃驚して、いきなり聲高に叫んだ。他

興次もその時は一寸ひやりとして、おろおろと顔を見合はせながら肩をすくめたが、やがてまたしんと鳴りを靜めて片唾を呑みながら後の話に聞き入つた。

猫はその日からいろいろな奇怪をみせはじめた。最初のうちは死んだやうになつて何處かの隅へ潛んでゐて、夜になるとそつと忍び出て來て、家ぢうをのそりのそり歩きまはつた。食べものは何をたべてゐるのか、お座敷の餘りの魚などをやつても口もつけなかつた。そして不思議なことには鳴き聲といふものをまるで立てなくなつてしまつた。

それからといふものは毎日のやうに不思議な事が續いた。棚の上に載せてあつた白紙が包紙だけになつてゐたり、床の間の掛軸の前へ平つたい猫の足跡がついてゐたり、閉めて置いた雨戸が開かつてゐたり、さまざまの異變が家のなかに起つた。なかでも一番變なのは風もないのに紙燭の火がすうと息をひくやうに消えてゆくことであつた。時過ぎになつて、さんざめいてゐたお客も女達もひつそりと寢靜まつてしまふ頃になると、必ず何處かの紙燭が力なくはためいて瞬にみえぬ息吹きが來て吸ひとつてでもゐるやうにいつともなくすうつと消えた。

或夜のことであつた。

江州から一力へ遊びに來る大盡が酒に醉ひつぶれて奥座敷にたつた一人で寢てゐた。丑滿時になつて頻りに渇を覺えるのでふつと眼を覺ますと、今迄點つてゐた枕許の行燈の火がいつのまにか消え落ちて何處かでぺちやぺちやといふ異樣なものの音がひそかに聞えてゐる。不思議に思つてよく眼をとめて見ると、襖間からさす薄明りのなかに眞黑な猫の姿が朦朧とみえた。後足ですつくと立つて、脊たけの延びるだけ體を延ばして行燈の火口から頻りに燈油を舐めてゐるのであつた。その話がぱつと家ぢうにひろがると同時に、今迄の異變は全くその猫の業ときまつて、誰れいふともなく妙な因縁話が口々に傳へられた。主人をはじめ仲居達まで氣味惡がつて、到頭そのことのあつた翌日、その猫の體に魔除けの護符を結びつけて、東福寺の近くにある猫が辻へ捨てさせてしまつた。……

「それからちふもんはもうこの万亭はんへ寄せて貰ふのが恐うてな、舞妓さんが逢ひに來やはる度に、どないにせうかと思うてよう姐はんを困らせましたえ。今から思うてみれば怪體な話やけど、その頃にそれ汽車やたら電信やたら云ふせうむないもんがない時分どつしやろ、それよつてにそれでよう通じたんどすな。」仙吉はまたゆるやかに煙を吐きながら、昔を懷かしむやうな眼色をして話をきつた。

「ほんまに恐い恐い話どすえなあ、」久勇は脣の色まで失つて胸苦しさうに溜息をつきながら云つて、「行燈のとこまで行た時には、この邊どないになるのやろと思うて、私もう息もなにも出來んやうに恐うおしたえ。」

「もう今夜はおいとくれやすな。思ひ出しても恐うなるわ。」露子は圓らな眼を瞠つて吐息するやうに云つた。

「そやけど、油をねぶるところをとつくりおみやしたそのお客はんの氣はどうどしたやろ。どのお座敷や知らんけど、ちよつと考へてみてもぞつとするえなあ。」おふさは久勇の方を顧みて云つた。

「ほんまにいな。私らやつたらきやツちうてそのまゝ死んでしまうたかも知れまへんえ。」

と、その時まで仙吉の後に坐つてぼんやりしてゐた春菊は面白さうに口を入れて、

「私やつたらぱつと電氣をともして、しッちうて追うたるわ。」

「阿呆らしい。電氣もなにもない昔のことやえ。今まであんたはん何を聞いとゐたんえ。私

「もう春菊はんの顏みてると、てれくさうなつて來るわ。」久勇は春菊の寢惚けたやうな顏のゆるんだ顏をみると、堪らないやうにくすくす笑ひだした。一座はその聲に煽られてやつとまた少しづつ氣が浮きたつて來た。

と、みると緣側の障子には話に氣をとられてゐる間に、いつしか下椽のうへの處まで冴え返つた月光が一面に射しかゝつてゐた。處々に濃い庭木の陰を倒して、濕氣を含んだ蒼白いその光からはしつとりとした秋の夜寒が深々と迫つて來るやうに思はれた。そして庭の面には嗄れ細つた頼りなげな蟲の聲が斷えだえに聞えて、表座敷の方から漂つて來る遠い絃歌のさんざめきに縺れながら大寺の庫裡のやうな廣間の壁に云ひ知れぬしめやかな情趣を響かせてゐるのである。

何處か遠くの方で、娘衆たちが纖細い聲をそろへて、

「はあい……」と、言葉尻を長くながく引きながら手の鳴る座敷の方へかすかに返事をした。廊下を滑つてゆく足音も少時の間杜絶えて、花見小路の方からは思ひがけない焼栗賣りの聲が聞えて來る。

建仁寺の鐘がもうそろそろ鳴りはじめる頃である。

いつまで待つても君勇が顏をみせないので清三郎はいつになく焦れだした。彼は今夜ほどもどかしい思ひをして君勇を待つたことはなかつた。自分でも何う云ふ譯とも覺えずに唯彼女が姿をみせないのが無上に寂しかつた。しまひには到頭いつもの節制を失つて、突然歸るといひだした。

仲居をはじめ舞妓達までいろいろに言葉を盡して止めてみたが、彼はそれでもどうしても聞き入れなかつた。彼は自分で外套をとつて着て、妙にいこぢな顏をしながらすたすた玄關口の方へ出て行つた。

「どうぞまたお早うお越しやしとくれやす。」玄關まで送り出した仲居は仕方がなささうに式臺に手をついて云つた。

あとから出て來た舞妓達は仲居の周圍に集まつて、

「さいなら。」

「さいなら。」

と、透きとほるやうな聲で口々に別れを告げた。

「おほきに。また寄せて貰ひますわ。」と、清三郎はわざと笑顏をつくりながら改まつた調子でそれに答へて、濃染めの暖簾をくゞつてその儘ついと戸外へ出た。

四條通りはまだ宵の口のやうな賑はひで、兩側の店から溢れ出る明るい灯明りのなかには、道往く人の姿が黒の斑を拖くやうに流れてゐた。丁度芝居の出替りになる時刻なので、その間には半襟に色をもたせた若い藝妓や、舞ふやうな恰好をして戯れながら歩いてゆく舞妓の後姿も見えた。そして東山の眞正面からさし渡す月光がすべての物象の上に濃く淡く落ちてゐるので、一筋の町の色彩がしつとりとした夢のやうな感觸をもつてゐる。

清三郎は引き入れられるやうな果敢ない寂しさを覺えながら首を垂れて、そのなかを四條の大橋の方へ歩いて行つた。平常は何となしに興味を唆る茶屋々々のほの暗い出入口やさまざまな店の窓が、今夜は顧みるさへ厭はしかつた。

南座の前まで來かゝると、彼はふと行くての橋の上に藝妓につれられた一人の舞妓の姿をみた。並みはづれた鮮やかな衣裳に、燃えたつやうな龜甲模樣の結ひだらりをゆらゆらさしながら漸次に此方へ歩いて來る。彼等はやがて電燈

と箱行燈の映り返しで明るく照らしだされた芝居の前ではたと行きあつた。と、みるとそれは思ひがけもない君勇だつた。清三郎ははツとして胸が破れるやうに躍つて來た。
　君勇は伏眼がちに首垂れながら歩いてゐるので、五歩と距らぬ間近に清三郎がゐるのを少しも氣付かないらしかつた。その儘靜かに木履を踏み鳴らしながら行き過ぎてしまつた。
　清三郎は後を振顧りざま聲をかけようとして、君勇といふ名が脣まで込みあげて來たが、咄嗟に歩いてゆく人顏をみると、妙に氣恥かしくなつてそのまゝぐつと呑み込んでしまつた。そして四五歩橋の方へ歩みつゞけたが、到頭思ひ切れなくなつて、くるりと踵をかへしてまたもと來た道を一力の方へ引返しながら見えがくれに彼女の跡をつけて行つた。
　人込みの間に、新地の子のかけものをかけた京風の髷が浮いたり沈んだりしてゆく。ある時は明るい店明りのなかに紅い襟の出た暗から、だらりの片側だけがちらりと見えることもある。清三郎はそのたびにわくわくして胸を壓し付けられるやうな歡びともつかず、苦悶ともつかぬ異樣な感じに心を浸しながら随いて行つた。
　花見小路の角まで來ると、君勇が一力へ入ることが分つたので、彼は思ひきつてつかつかと足早に歩み寄つて、
「君勇はん。」と、後からそつと聲をかけた。
　その聲で君勇は後を振顧つたが、格別顔いろも動かさず、
「ほ、川はん。」と、云つたぎりそこへ立止つた。
「あんた何處へいくのえ?」清三郎は彼女の側へ歩み寄りながら、そはそはした聲できいた。
「万亭はんへ寄せて貰ふのどすえ。」
「さうか。ほんならもう行たかて駄目や。」と彼は態ととつてつけたやうに笑ひながら、「今迄待つてたんやけど來やへんよつてに今歸るとこやな。えらう待たしたえなあ。」
「さうどつか。ほんなら知らしとくれやしたのはあんたはんどしたかいな。」
「ふん、私や。」
「まあ、まあ、ほんまにえらい濟まんこと。家からはえらう急いて來やはつたんどつけど、お客はんがどないにしても往なしとお呉れやしまへんもんどすさかい。……」と、細い聲で口籠りながら云ふ。
「京極へ行てたんやてな。えゝことよ。」清三郎は稍落着きを取りかへして、言葉の調子をかへながら揶揄ふやうに云つた。
「私、行きたいことはないのどつけど、さんざはこや、君勇はん君勇はんが喧ましう云はゝるもんやさかい。……ほんまに濟まんこと。どうぞ惡う思はんとおいとくれやす。」
　清三郎は優しい申譯のやうなその言葉をきくと、その儘口を噤んでしまつた。おつとり眼を細めて薄明りのなかに立つた君勇の姿をまじまじみてゐたが、やがて、
「これから何處ぞへお花に行くのやろな。」
「私、どうや知りまへん。」
「まあ、そゝれ。[illegible]は引留めんといて、そこらまで一緒に行つてえな。」
　君勇は默つて合點いた。そして箱屋に一力の方を斷らせて、すぐ家へ歸る用を云ひ含めて歸したあとで、彼女は清三郎と肩を並べてぶらぶら祇園社の方へ歩いて行つた。
　途々、ふたりの間には格別とり留めた話もなかつた。時々清三郎が何か云ひかけると、君勇は言葉少なに纏りのない返事をするばかりで、浮名のたつやうな情緒も彼女の胸に燃えてゐるらしい樣子は微塵もみられなかつた。何かしら淡い豫期をもつてゐた清三郎は、それをみると

相手がたつた一人ぎりでゐるだけに、ひどくもどかしい失望を覺えない譯にはいかなかつた。そしてそれと同時にさまざまな疑惑が胸に湧いて、自然と氣の集まるやうな沈默に落ちて行つた。

石段を上つて、祇園社の境内へ入ると、月の光は葉陰に遮られて石鋪きのうへには斑らやうな美しい斑點が數限りもなく零れてゐる。眞暗な樹下道には常夜燈の光が潤んだ眼のやうに點つて木履の音はその奧でかすかな木魂をよんでゐる。枯れ落ちた木の葉の匂ひがじめじめと何處からともなくほのかに匂つて來る。

「ほんまに寂しいえなあ。」と、清三郎は心の底からさら感じてゐるらしく呟いた。君勇はその聲でちよつと顏をあげたばかりで、返事をしなかつた。

社を右にみて、裏道を廻るとやがて、廣々とした圓山の公園へ出た。爪先あかりに東山の山腹へ展がつてゐるなだらかな傾斜には人影も絶えて眞晝のやうな明るい月光ばかりがわがもの顏に一面に刺し渡つてゐる。樹々の葉末や芝草の上にはもう露がきらきら光つて吹く風もないのに夜寒が袖口から斜々としみ渡つて來る。

「寒いな。歸らうか。」清三郎は君勇の方を顧みていつたが、また何か思ひついたやうに、「どうせ此處まで來た序や。一遍智恩院へあがつてほして歸らう。」と云ひながらずんずん先に立つて歩きだした。

高い石段を息せき登つて、二人はやがて智恩院の境内に入つた。こゝも一山闃として、月の光ばかりが徒らに寂しさを添へてゐる。宏壯な本堂の扉はもう悉く盲ひたやうに閉ざされて、大屋根の庇がその面に眞黒な陰影をくつきりと印してゐる。耳をとめて聞くと、水盤から水の滴り落つる音が忍びやかに聞えて、限りなく展がつた幽寂の底に一脈の深秘を響かせてゐるのである。

二人は本堂の階段の下へ歩み寄つて、砂塵を拂ひ落しながらそこへ腰を下ろした。清三郎は今こそ何か君勇の胸にしみじみと應へるやうなことを云つて、彼女の心を唆かさなければならぬと思ひながら、四邊の靜けさに氣壓されていつかその言葉さへ思ひ出せないやうになつてしまつた。唯折々瞳を据ゑて半面に月光を浴びた美しい君勇の姿をつくづくと眺めつくすばかりであつた。

少時すると何處からともなく異樣なもの音が響いて來た。靜けさの底から律を刻むやうにそれも、音は絶えず同じ間隔をおいて徐々と響いて來る。よく耳を澄まして聞くと、それは廣縁を傳つて來る足音で、やがて本堂の曲角から一人の脊の高い僧がぬけでたやうに、ふはりと月光のなかへ姿を現はして來た。眞黒な法衣から白襟と、下着の裾だけがくつきりみえて、宙に浮んで居るやうに漸次と此方へ近寄つて來る。そして大前まで來かゝると、そつと立止つて、珠數を爪繰りながら閉ざされた扉に額を押しつけるやうにして少時の間默禱した。それが濟むと今度は階段を二三段下りて、氣味惡さうに顏を背けてゐる二人の姿を後からぢつと見入つてゐる容子であつたが、やがて不意に若々しい聲をだして、

「あんたはん津川はんやおへんか？」と、臆面もなく訊ねた。

清三郎はびくりツとして振顧つた。よくみると、それは本家の隱居所へ法要ごとに出入する本山の若僧だつた。

「ほう、御念いれてしたことなあ。えらい失禮を。」と、彼はそのまゝ立ち上つて丁寧に挨拶をした。

「こら惡いところへ來ましたな。丁度お邪魔をしに來たやうなもんどすなあ。ふゝゝ」と、

若僧は氣のよささうな笑ひ聲を立てて、「此頃はこちらは南町へ凝つとゐやすちふ噂は聞いてましたけど、御盛んで羨ましうおすなあ。」

「阿呆らしい。」と、清三郎はどぎまぎして、「餘り月がえゝもんどすさかいについ浮かれてこゝまで上つて來たんどつせ。」

「さうどつしやろ。どないにしても月見ちふ風に見えまんなあ。はゝゝ。」と、若僧は柄にない捌けた調子で輕い皮肉を弄する。

「てんかう云はんとおおきやす。そやけどあんたはん、今頃お勤めどつか。」清三郎は仕方なしに言葉をそらさない譯にはいかなかつた。

「さうどす。毎晩十時にこないにして山を見廻るのが私の役目どすがな。叶ひまへんな。これから大方丈小方丈を廻つて、大師堂から御廟のうへまで上らんなりまへん。」と、若僧は月光のなかに片手だけ出して、白い指先で珠數を弄びながら云つたが、やがて何と思つたか、「どうどす。これから一緒に大方丈をお廻りになりまへんか？ 夜はしんとしてゐてそらほんまに宜しいえ。」

「おほきに。さぞ宜しうおつしやろなあ。」と、清三郎はひどく好奇心を唆られたやうな調子で答へたが、「行て見度うおすけど、女連れどすさかい。……」

「ほんなら舞子はんも一緒に連れといでやす。もう誰れもゐやしまへんさかい大事おへん。」

清三郎はそれを聞くと急に行く氣になつて、俯向いてゐる君勇の方を顧みて、

「どうえ？ いてみるか？ 外に誰れもゐやはらんいはるさかい、だんないやないか。」

君勇はまた默つて合點いた。

やがて二人は下駄を脱いで階段の裏へ隱して、その儘若僧の後に從つて廊下傳ひに奧へ入つて行つた。はじめは誰れかに後見られるやうな氣がしてびくびくしてゐたが、幸ひにほかの僧にも出逢はなかつたので、その杞憂は少しづつ消えて行つた。

本堂から執行所へ入ると、人氣のない大廊下には處々に鐵骨の古風な行燈が掛けてあつて、朧ろげな光に彩られた周邊の氣勢がみるから大寺院らしい嚴かな感じを與へる。執事溜りや、向う方の大臺所の部屋々々もひつそりと更け靜まつて、柱時計の音ばかりが寂しく時を刻んでゐる。そして大廊下を行き盡して幾曲りかすると、ほの暗い行燈の蔭に常住局と書いた札の下つた入口があつてそこから右へ入るともう大方丈だつた。

大方丈にはそれこそあやめも分かぬ眞暗がりだつた。四方に張り廻した內廊下を手探り足探りにこつそり通つてゆかなければならなかつた。闇の底からは何處からともなく冷たい風が頭筋へ滲まるやうに吹き寄つて來て古めかしい木の香や、しめつぽい香の匂ひがすうつと鼻を打つ。そして足音を忍べば忍ぶほど廊下の床が高く鳴り響いて、何となく陰森とした氣が足許から湧き上つて來るやうに思はれた。

通ひ馴れた若僧はずんずん先へ歩いて行つて、二十歩に一度ぐらゐづつ立止つては後から來る二人を待つた。清三郎も君勇も俄盲目になつたやうに障子の面や、板戸の面を撫でまはしながら、薄氷を踏むやうな思ひでやつと一歩一歩足を運んだ。

「此處が鷺の間どつせ。こないにして毎晩廻つて歩いてゐると、杉戸に描いてある繪に觸つてみただけで、何の間やちふことがよう分りまつせ。」と若僧は得意らしく事もなげに云つた。

成程、さう云はれてみると闇によつて杉戸の手觸りが少しづつ違つてゐる。元信や永德の筆によつて描かれた名畫は、顏料は消えても、木の面だけはくつきりと盛りあがつて、匂やかな筆勢の痕を殘してゐる。暗闇に脅威された神經

はいやがうへに指の尖端に働いて、その微妙な構圖の變化が針のやうになつて胸の底まで滲み入つて來る。」

「ほう、こゝが鶯の間か。」などと呟きながら若僧は杉戸の處へ來る度に立止つた。そして闇のなかから眼を瞠つて目方を瞑つてゐるやうな調子でひそひそとあらぬことまで説明して聞かせた。

そのうちに闇は漸次と視覺に慣れて來て、廊下の構造がそれとなく呑み込めて來ると、清三郎は何かなしに急に氣が弛つて、かうした人眼のない暗がりのなかで、君勇の柔らかな腕に手を觸つてみたくて耐らなくなつて來た。それとなく後先を窺つてゐると、やがて彼女はふと敷居を跨ぎそこなつて、ごとりと音をたてながら彼の腕へ手を投げかけた。それをきつかけに彼は到頭、

「危いえ。」と、云ひながら、冷たい白絹のやうな手觸りを持つたその手をしつかりと握りしめた。彼女は初めは避けるやうに柔らかな力でそつと振りきらうとしたが、少時たつともう默つて彼のなすがまゝに任せてゐた。清三郎はほんのりした濕みの通つて來る小さな掌の觸感や、媚びるやうに漂つて來る白粉の香に引入れられて、氣が遠くなるやうな快感に眼を瞑らせてゐた。

「この彼方が御前樣の御居間どつせ。」と若僧は突然小聲で云つた。その聲があんまり耳近く聞こえたので、清三郎はひやりッとして突如君勇の手を離した。そして思はず顏を振りあげると、外戸の上の高い明窓にはほのかな燈火の光が映つてゐる。何處から射して來るのか、その光の影はぼんやり紡のやうにゆらめいて、何とも云へぬ陰々しい色に見えた。若僧はその儘、彼等の身近に立つて誦でもするのか、珠數の音をかすかにさらりと鳴かせながら、少時の間身動きもしなかつた。

それから後は何となく妙に氣が焦だつて、再び君勇の手を握らうとする度に電氣にでも打たれるやうな小刻みな戰慄が清三郎の四肢に走つた。もとのやうに肩は近づけてゐても、暗闇のなかの何處かに彼等を凝視してゐる恐ろしい神でもあるやうに思はれて、指先を君勇の手に觸れることすら何うしても出來なかつた。そのうちに彼等は到頭大方丈から小方丈へ通ふ渡廊下の處へ出てしまつた。

そこは戸がさしてないので、眼の覺めるやうな銀色の月光が一面に射し込んでゐた。庭の面には雪のやうな白砂が盛つてあるので、その反映が庭の東まで明々と照らし出してゐる。その明るみのなかへ思ひがけもなくすつと立つた君勇の姿はまるで此世のものとは見えないほど美しかつた。髮うつりから衣裳や長帶まで現實の姿とは似てもつかぬ妖艶な色彩をみせて、眩しさうに半ば瞑つた眼や、きつと結んだ脣が名匠の筆に刻まれた童女の姿のやうに輝いてゐた。清三郎は貪るやうにその横顏を凝視してゐたが、歡びに充ちた感歎はやがて漸次と瞳の底に殺到して來て、この女ばかりは永遠に自分のものにしなければならないといつた強い慾望が燃えて來た。

歸途、祇園社の暗闇から賑やかな四條へ出ると君勇はどうしたものか急に口數をきかないやうになつて、四邊を見廻しながら、

「もう遲うおすやろなあ。」と、呟いた。

「まだそないにもないやろ。さつきから一時間も歩いてゐやへんぜ。」

「さうどつしやろか。」と、彼女は疑はしさうに云つて、つくづく厭だといふやうな歎息をつきながら、

「私、これからまたお花にいかんならん思ふと、ほんまに厭になつて來るのどつせ。」

「そないに云はんとおおき。えゝ人がたんと待つてるやろ。」清三郎はわざと揶揄ふやうに云つた。

「まあ、好かんこと。私にえゝ人てあらへんえ、」彼女は無作法に云つて拗ねるやうに眉を落した。そして、少時は間默つてゐたが、急に親しげな調子になつて、

「私の好きな人はあんたはんどすやないか。せんどな、女紅場で温習會のお稽古があつた。その折にな皆して私に誰れが好きや云ははるさかい、私は川はんが好きや云うたんどつせ。ほしたらな皆してきつう嬲らはつてな、何處へいたかてあんたはんの好きやんは川はんや云うて喧しう云うて呉れやはるのどつせ。私もう晴れがましうて晴れがましうて叶はんね。」

清三郎はそれをきくと心持顔を赧めながら側を向いて、

「あんたがそなことを云ふさかいや。そやけどあんたも迷惑ななあ。」

「迷惑ちふことはおへんけど。……」と、云ひ澱んでゐたが、やがてまた急に氣を變へて、「なあ、へ、川はん。この頃に一遍何處ぞ遠い處へ連れていて欲しいわ。」

「そらえゝな。何處かえゝやろ。」清三郎もその言葉と一緒に浮き立つて云つた。

「さうどすな。あんたはん何處がえゝとお思ひやす。」

「あんたの好きな處やつたら何處でもえゝやないか。」

「ほんなら嵯峨にしましよ。私嵯峨がいつち好きどつせ。こんな月にえゝ晩やつたらほんまによろしうおつしやろなあ。」

「嵯峨もえゝな。」と、清三郎は考へてゐたが、やがてそれと決めたらしく、「明日の晩方から行かうか。」

君勇はそれを聞くと嬉しさうに笑つて、

「ほんまどつか。ほんまに連れつてくれやすか。おほきに。そやつたら私明日朝からすんと支度して待つてまつせ。」

「さうおしやす。月のあるうちやないと嵯峨も面白うないさかいなあ。」

「さうどす。紅葉はん姐はんな、あの妓今夜お客はんと一緒に連れつてお出やしたんやつせ。私もなりいてはなりたい川はんいうてすかな」と、彼女は嬉しさに胸が躍るやうな眼付をして云ふと清三郎の顔を見た。今迄にないその打解けた容子を見ると、彼は一段と深い或ものを彼女の瞳の底に發見したやうに思はれて無上に胸が込みあげて來た。

こんな話をしながら歩いてゆくうちに彼等はいつの間にか、木屋町の方へ曲る角まで來てゐた。君勇の家はそこから右に折れた横町にあるので、清三郎も一緒にその角を曲つた。と、その時、向うから賑やかな木履の音が聞えて、逆山歸りらしい舞妓が三人程家並の秋草の花をもつて、何ごとか笑ひ興じながら薄暗いなかからついと出て來た。

彼等は出遇ひがしらに君勇の顏をみると、驚いたやうに立止りながら、

「ほ、君勇はん。」と、呼びかけて、「何處へお行きたんえ?」と、口々に訊いた。と、君勇は餘り咄嗟のことなので恥かしさうにいきまぎしながら、

「万亭はんへいてたんえ。」と、答へて、その儘先へ行きすぎようとした。と一人の舞妓はまた眼早く清三郎の姿をみつけて、

「ほ、川はんと一緒やないか。」と、ませたことを大きな聲で云つて、皆して一緒に聲をそろへてくすくす笑ひ出した。それを聞くと清三郎は何か悪いことでも犯したやうに気おくれて、何の

考へもなくすたすた足早に彼等の群から遁げていつた。そして先に行つた君勇のあとを追ひながら少時経つてそつと後を振顧つてみると、舞妓達はまだ角の煙草屋の店明りのなかに立塞がつてゐて、騒ぎ捲りながら此方を見送つてゐた。

明日はまたいろいろな浮名が彼等の唇から方々へ語り拡げられるのかと思ふと、清三郎はその刹那、却つてぞくぞくするやうな嬉しさが五體に漲つて来るのを覚えた。そして嵯峨野の月夜に、二尊院あたりの樹立の蔭で蟲の音を聞いたり、嵐山の谿間で水に碎ける月影をみたりしながら君勇とふたりで語り合ふことが出来る明日の樂しみは心に描いてみるさへ胸が割けるやうに思はれた。彼は、急に素氣なく黙り込んで一足さきに首垂れた儘歩いてゆく君勇の白い襟脚のところをみつめながらうつとり夢のやうな氣持になつてとぼとぼと随いてゆくのであつた。●

歩く（五）

若いといふことは實にいゝことだ。あの時代にはあれでなくては可けなかつたのだとは思ふが、併し附焼刃ははげやすい。ジャズやテンポは一生はつゞかない。今にあの一層の藝術家達もきつと歩くやうになる。道草を食ふのが面白くなつて来る。

此頃映畫なぞをみても、立體派や構成派や表現派の手法が眼にみえて疲れて来てゐるやうだ。その證據にはロケーションとセットがいつもちぐはぐだ。喘いでゐる。無理をしてゐる。一寸いたましい感じだ。疲れて来たなぞといふて又叱られるかも知れないが、確かに或る平和な境を求めてゐる。的種状態から脱出しようとしてゐる哀れな矛盾が目につく。

『夜ひらく』が與へた大きな變動が今や旋回運動に移らうとしてゐる。神經の藝術は疲勞が早い。それもいつそエレンブルヒの『歐羅巴の滅亡』位まで進出すると却つて疲勞がないやうに思はれる。私はあゝいふものも矢張り一種の偉大なる野性の藝術だと考へ度い。私は長い間、何かなしに焦躁な自分を感じてゐた。思ひ切つて山野へ出てみると、實にのびのびして来る。ぶらりぶらりと人生を漫歩してみると、甘い呼吸が感じられる。神經のやさしい假睡が感じられる。何よりも歩くことだ。

私は、旅役者の群に入つてゐた頃にも、一日に五里六里は平氣で歩いた。今でも覚えてゐるのは、夕張から苫小牧までのあの懐かしい道だ。野の花の群落といつたあの索漠とした淋しさなぞは他では到底味へない。銀色の砂薄、紫色の牛の群、赤色の林道、それに褐色のアイヌ部落。私は泥炭地なので、仕方がなしに鐵道線路ばかり歩いていつた。錦多佈で、鐵道工夫と道連れになつた。なにしろ腹がすいて耐らないので、途中の農家へ寄つて、絞りたての温かい牛乳を飲ませて貰つた。その晩は八人の工夫と一緒に、小屋へとめて貰つた。

私は僅か十三錢しか金をもつてゐなかつたので、煮賣屋の飯もたべられない。そこで工夫達の賭博の仲間へ入つて、「赤ごへい」といふ博奕をやつた。子供の中ぶ竹返しのやうなものである。それで七十錢ばかり勝つて、酒を飲んで、たうとう工夫と大喧嘩をはじめてしまつた。スコップをどう振り廻すのが喧嘩の定法だといふやうなこともその時教はつたのである。

烏

一

その晩、二十二卷からある三本の映畫を不足なく映寫し終つたのはもう午後の十時十五分過ぎであつた。關西上りの、舊劇の時代ものを廻してゐる最中に、古アクメ・モーターの工合が急に惡くなりだしたので、技士の宮崎は應急の手當を施してゐる間に、もうそれだけでも十分なら時間を食はれてしまつた。それにアキュムが草臥れきつてゐて、光を返しに倍も手數がかゝつたって、當てにしてゐた時間がすつかり番狂はせになつてしまつた。

宮崎は汚れたワイシャツの袖で、汗ばんだ額を自棄に拭きながら、もう一ぺん愛想が盡きたといふやうに、助手の大野の方を顧みて、

「どうも弱つちやつたなあ。今夜はどうかして、九時半過ぎには上げてやらうと思つてたんだが、この機械のおかげで、折角の苦心も水の泡さ。このアクメもいよいよ云ふことを聞かなくなりやがつたよ。人間の古いのは、まあどうにか誤魔化しが利くが、機械の古くなつたのはどうにも、使ひ途にならねえからなあ。」と、運轉臺に手を置いて、明り口をぱくんと引開けて恨めしさうに映寫機の中を覗き込む。

大野もアキュムの蒸れッ臭い中で、フヰルム罐の蓋をこつんこつん靴の先で踏んづけながら、もう癇癪を起して、禁制の煙草に火をつけて、

「まあどうだとも。モーターばかりや、とつても動けやしねえからね。もう俺あ、倦怠をたつ時からこいつあ、散々にまじくなつてあるんだもの。さうさうはね。」と、云つて、煙脂でよごれた黄いろい歯を剝き出しながら、あーッと大きな欠伸をひとつして、そこの石油箱のうへへぐツたりと腰を下ろしてしまふ。

二坪ばかりの狹ッ苦しい映寫室の横手では、百四五十も入つてゐるかと思はれる觀客が、下駄の音をガタンガタンと、止め處なく響かせながら、先を爭つて歸つていく。子供の泣き喚く聲も聞こえる。田舎娘たちのはしやいでゐる町の女達の聲も聞える。

戸外はいつか、しとしと小雨になつてゐるらしかつた。

宮崎も髭の蓬々と生えた腫れぼつたい顏でバットの銜へ煙草をして、

「おい、大野君。もう閉場つたんだから、そんなにシケ込んでゐねえで、早くこのキートンのあとを捲き返しておくれよ。俺一人ぢやとつても手に了へねえからなあ。」

大野はさう云はれると、苦さうな曖氣をぐんで、又もぞりと捲き返しのハンドルを執つて、氣のない樣子でカラカラ廻しながら、

「また今夜も雨か。幾日降り續きやがるんだらうな。此處へ乘り込んでから、一日だつてからッとした天氣はありやしねえぜ。かうなると、全く東京が戀しいなあ。それでなくつたつて、もう里心がつききつてるんだからなあ。」としみじみ云ふ。

宮崎もアクメから洩れて來る青白い燈火で、せつせと大野に手傳つてやりながら、

「ほんとによ。もう彼此二月にもなるんだ。熱燗の酒もやりてえもんだなあ。ほんとに馬鹿馬鹿しいにも程があらあ。俺もこんな旅はこの道へ入つてから初めてだよ。どうも踏み出したら

ツケが惡いと思つたら、到頭この始末だ。」
「實際ラストが可かんねえ。古狸の君でさへさうなんだもの。僕なんざもう懲りごりだよ。一體いつになつたら東京へ歸れるんだな。」と嘆息を吐いて、大野は宮崎がもう一杯の殘りまで手をつけようとするので、それを抑へたから、
「君、いゝよ。そいつは僕がやるから、さうやつといて呉れよ。今向うへいつて、僕、喇叭を片づけてすぐに又やつて來るからね。さうしたら、僕一遍にやつちやふよ。」と、云つて、例の映寫口から舞臺の方の樣子を差覗く。——大野は自體は樂士の一人なのだが、無人な一行なので、手があくと映寫の方の手傳ひもしてゐるのであつた。

四谷町のボロ小屋なので、舞臺はすぐ眼と鼻の間にみえてゐた。そこでは簀の子の照明を消して、舞臺端の電燈だけがぼんやり點つてゐた。舞臺のシーツの前には、脊丈のひよろ長い主任辯士の香月翠波が腕組みをしながら影のやうに突立つて、下のオーケストラボックスにゐる樂士達と何やら笑談口でもきゝ合つてゐるやうであつた。それが翠波だといふことも、たい商賣聲でやつと分る位四邊は暗かつた。下の樂士達も大入道のやうなぼやけた影を觀客席の兩袖へ匍はせながら、立つたり、蹲んだりして、頻りに樂器の始末をしてゐるので、絃の鳴る音や、サックの蓋をする音が、薄寒く觀客席のがらんとした天井へ響いてゐた。

だしぬけに、舞臺の方からは銅鑼聲が聞えてきた。觀客がゐないと、變な谺がキーンと後に殘つた。
「おい、宮崎君、大野君! 一寸舞臺まで御用ッ。」それは次席辯士の畑[illegible]波の聲であつた。彼は聲だけ聞えて、何處にゐるのだか、姿はみえなかつた。
大野は掻き返しの手を止めて、映寫口へ顏を摺りつけながら、中ッ腹で、
「何んだな。畑さん。今大急ぎで商賣ものを戾してゐるんぢやねえか。さうガアガア怒鳴らねえでおくれよ。それでなくつてさへ空ッ腹だ。うつかり大きな聲を出されると、氣が遠くなつちやふぢやねえか。」
舞臺の方ではくすくす笑ふ聲が聞えた。
今度は翠波の氣取つた聲が、
「どうもまことにお氣の毒樣です。御足勞を願つて甚だ恐縮ですが、實は今こゝで緊急動議が提出されたので、どうか皆さんに至急こゝまでお運びが願ひ度いのです。お空きッ腹でも御座いませうが、是非どうか、……」と、笑談に切口上で云つたが、その聲も寒さうであつた。
宮崎は一人で苦り切つて、
「畜生ッ、笑談ぢやねえや。向うぢや又皆集まつて、洒落のめしてやがるんだらう。このギリギリ舞ひのさなかに、奴等あいゝ氣なもんだ。ちつと時節柄を考へろい。」と、つんつんしながら云つたが、やがて小首をひねつて、「大野君。それともいよいよ城開け渡しの相談かも知れんぞ。今夜あたりや、とても形勢ア惡だからね。まあ、こゝはかうやつといて、兎に角行つてみようや。どうせ碌な事はねえに極つてるけど。……」と、ぶつぶつ云ひながら、やがて古プロで穢らしく張り廻した板壁に懸けてある油じみたよれよれの上着をとつて、背中へ引懸ける。大野はゲップばかりしながら、これも手を廻して映寫室の開戸を開けて、ぴよいと後向きに下の通路へ飛び下りた。
形ばかりのオーケストラボックスのところまでやつて來ると、翠波は小手を翳して、舞臺のうへから此方を見下ろしながら、
「やあ、宮崎君かい。御苦勞樣。さあ、どうかまあ、そこいらへでも坐つて呉れ給へ。」と、云ふ。彼は喉をひどくやられてでもゐるとみえ、

しつきりなしにごほごほ力のない咳ばかりしてゐた。それが又妙に冷え冷え寒く天井へひゞき上つていつた。
宮崎も大野も電流熱でむしむしする映寫室から急に外へ出て來たので、觀客の歸つたあとの觀覽席へ下りて來ると、ぞうッとするほど寒かつた。蒸れ返つたやうな、惡臭い人いきれがまだ殘つてゐて、そこいらの床には、蜜柑の皮や、南京豆の殼や、プロのもみくしやにしたのなぞが薄汚く散らばつてゐる。二人は一番端のかぶりつきの座席へいつて腰を下ろした。と、粗末な木片をいゝ加減に打ッつけてこしらへた腰掛はぎしぎし不氣味に軋んで、ひやッとするやうな冷たさがズボン越しに感じられる。
宮崎は肩を縮めて、不貞ッ腐れに又立上りながら、
「畜生ッ、こりや可けねえ。せめて女の子の腰をかけた跡へでもいつて坐つてやれ。まだいくらか人肌の温みが殘つてるだらう。」と、呟いて、その隣りの側の婦人席へ移つていく。此處邊でも、婦人席だけは別に畳が張つてあつた。
畑静波は舞臺からスリッパのまゝひよいと飛び下りて來て、彼の傍へいつて坐りながらにやにや變に笑つて、
「成程ね。宮さんの仰有る通り、こりやいくらか温かいやうな氣もするね。女つて奴あ、不思議なもんだ。どうだい、宮さん、匂ひを嗅いでみねえか。白粉の匂ひが殘つてるかも知れねえぜ。先刻ここにたしか淑婦體の太つちよが坐つてたやうだつたからなあ。はゝゝゝ」
宮崎は苦笑ひをして、
「馬鹿ッ、犬ぢやあるめえし、この助平野郎！……こちら、あんな太ッちよの脂氣の匂ひなんぞ嗅がされて耐るもんか。」
オーケストラボックスの中からは、又笑ひ聲が起つた。それは無理にお調子を合はせてゐるといつたやうな笑ひ聲であつた。
翠波はつかつか舞臺端へ出て來て、ずうッとひとわたり皆の方を眺め廻しながら、
「諸君、これで皆揃つた譯だね。」と、聲をかけると、静波は素頓狂な調子で、
「は、さうです。先生。樂士が五名、技士が一名、樂士と技士の兩棲動物であるところの變な存在がもう一匹、それに説明者二名、合計九名也。終りッ。」と、まぜッ返す。
大野は自分のことを、兩棲動物だの、一吹き代へだのと渾名されてゐるので、後から拳固で静波の頭をこつんと音のするほど毆つた。
翠波は笑ひ聲が静かになるのを待つて、又切口上で、
「諸君！」と、いつたが、急に彼も皆と一緒に噴笑して、「いや、どうも觀客がこれぢや馬鹿々々しくつて、正面も切れないね。ぐッと砕けて、ひとつ世話でいかう。」と、無理に笑つて、「ねえ、諸君。實は、その、諸君とも旅へ出てからもう二月もかうやつて音樂を共にして來たが、諸君も豫てから御存知の通り、今度は興行成績が實際のところ散々で、實はただ以てお氣の毒な話だが、いよいよ今夜をもつて、この一行もポシャと、かういふことになつたんだよ。そこで僕もいろいろ方法も講じてみたんだが、生憎八方塞がりで、不肖翠波微力にして遂に頽勢を挽回する能はず、こゝに涙を揮つて、一行の解散を宣言するの已むを得ざるに立至つた次第なのだ。今度の興行は先づ仙臺で恩師島田光波先生が俄に病氣に罹られたのが一大打撃で、それから打ち續く各興行先の不景氣、それに仕込み寫眞の不當り等が原因をなして、遂に斯かる悲境に沈淪してしまつたのだ。その點はどうか諸君にも不惡御諒解を願ひ度いのだ。初めは笑談のやうな口調で、成る可く皆を笑はせようと試みてゐたが、眞實が骨身に應へてゐるので、

彼は途中まで來ると、つい濕つぽくなつてしまふのであつた。
　ボックスの隅で、煙草ばかりぱくりぱくり吸つてゐた若い樂士の一人は、その時、焦れッ度さうに立上つて、
「併し、香月さん。いくら解散するといつても、この儘ぢや何うにもならんでせう。」と嘲るやうに云つたが、翠波はじろりとそつちをみて、
「まあ、中島君、一寸待ち給へ。靜かにおしまひまで聞いて居つて呉れんけりや困るよ。」と、たしなめて、又咳に追はれながら、「そこでだ。フヰルムや何かは皆島田先生の方の仕込みなんだから、これは別勘定として、實は今夜こゝの館主から、分合として金五十六圓十三錢也を受取つたのさ。それをこゝで全部諸君に提供するから、どうか御不足もあらうが、先づとにかくこれをもつて、東京まで引揚げて貰ひ度いんだ。あとのことは歸京のうへで又改めて御相談するとしようぢやないか。」と、押伏せるやうに云ふ。
　と、その樂士は腹を立てて、
「いや、それぢやいかに何んでも、餘り酷過ぎるぢやないですか。僕等は契約によつて働いてゐる勞働者だ。しかもこんなやくざなヴァイオリン一挺で君、女房や子供を食はせてるんだ。せめて旅へ出たら、米代位土産に持つて歸らなけりや君、……それに仙臺で、給金の殘りをたつた十圓づつ貰つたきりで、それから後はもうずうつと唯働きだからなあ。何んとかして貰はなくちや、……」
　翠波はだしぬけに大きな聲を出して、
「おい、中島君、そりや君、誰しも相身互ぢやないか。君ひとりが何うつて云ふんぢやない。一行のものは皆、食ふや食はずでやつと此地まで引揚げて來たんぢやないか。それとも厭なら、君一人で何うとも自由行動を執るさ。こりや君、勞働爭議ぢやないんだからな。」と、怒りつぽい調子でいふ。
　樂士はそれでもひるまずに、
「併し、……」と、云ひかけたが、翠波は彼の方へ詰め寄つていつて、性急に、
「何が併しだ。贅澤云ふなよ。君達は東京を立つ時、既に給金の半金を受取つて來てるんぢやないか。それで文句を云はれちや一體我々說明者側は何うすりやいゝんだ。分らない奴だなあ。」と、荒つぽくなつていく。
　皆はさすがに默つて見てゐた。四邊はしいんとして、觀客席は亞鉛屋根に降りそゝぐ雨の音ばかりになつてしまつた。その薄暗闇を冷つこい風がすうッと吹いて通つていつた。
　技士の宮崎はもう端の奴には構つてゐられないといふ風に、煙草の吸殼をぐいぐい靴先で踏みにじつて、
「ねえ、香月さん。それよりも君は一體どうするんです。一緒に歸れるんですか。」と、おだやかな聲で訊く。
　翠波は彼の方へ振顧つて、
「僕か。いや、僕は無論諸君の犧牲になつて、當分處置のつく迄會津屋へ殘らなけりやなるまいと思ふんだ。何しろ、あの久保井の奴が先乘りに廻つて、方々で勝手な眞似をして歩きやがつたんで全く何うにも始末にいかんのだ。手前の利喰ひばかりしてやがつて、行く先々の仕打を皆失策つちまつてるんだ。實は島田先生の方へも先刻又電報を打つてみたんだが、先生の方だつていろいろ都合もあるだらうしなあ。又たとひ送金して呉れるにしたつて、それが我々の手へ入るまでの諸君のアゴや足が恐いからね。かう頭數があつちや、一日つなぐんだつて、金高が上るばかりだからなあ、そこで僕ももう背に腹は代へられんから、全く涙を揮つて解散を宣言するんだ。君なぞはもう隨分旅をかけて

るから、何も彼もよく〱呑み込んで呉れると思ふが、全く僕の立場は實に辛いんだよ。」と、泣き言になつてしまふ。

宮崎は強ひて笑顏をつくりながら、

「さうですか。あんたが殘るんですか。そりやどうもお氣の毒ですな。一人で殘りますかね。」と、成行は百も承知してゐるやうに落着いて訊く。

翠波は一寸云ひ難さうに、

「いや、先刻までは僕一人で殘るつもりでゐたんだが、そこは實どうも少々心細いんでね。仕方がないから、無理に賴んで、德ちやんにも殘つて貰ふことにしたんだ。から見廻した時に、野郎で金になる可能性のある奴は一人も居らんからねえ。はゝゝゝ。」

「左樣。この鬚ツ面ばかりぢやね。旅の居殘りは全く女に限りやすよ。會津屋だつて、何しろ七八十兩になつてるでせうから向うでもうつかりしちやゐますまいからなあ。それに此處迄でも度々この手を食つてるでせうしなあ。いや、全く哀れな末期を遂げたもんですよ。」と、云つて宮崎はすぐ前のボックスの中で、ふらふらしてゐる[illegible]な女の河童頭を後から見ながら、にやりと笑つて、

「おい、德ちやん。君も扨ては因果を含められたね。まあ、いゝさ。兎に角これだけ大の男が揃つてゐても、體で金になる奴は一人もゐないんだからね。これだけの人間の人質になると思やあ、君も名譽の至りさ。はゝゝゝ。」

女ヴァイオリン彈きの德枝は、默つてうつむいたまゝ、ぼくぼくになつた樂器入のケースを開けたり、閉めたりしてゐた。さすがにいつもは浮ついてゐる彼女も、妙に悄氣てゐた。

と、又先刻の中島は突然口を出して、

「ねえ、香月さん。そりや酷い。人權蹂躙だ。いくら女だつて、それぢやあんまりぢやないですか。人質にするのに、事をかいて、この、この德ちやんを……」と、急き込んで云ひかけるのを、翠波は到頭むかツ腹をたてて、

「默つてろ、この野郎ッ。小僧ッ子の癖にしやがつて、餘計な口を出しやがると、撲り倒すぞ。手前はこの社會の法則を知らねえんだ。皆が承知してるのに、それが不服ならどうとも勝手にしたらいゝぢやねえか。頓え野郎だ。もう疾うに手前は首になるところをやツと俺がつないでやつたのに、その義理も忘れやがつて。……」

と、打つてかゝりもしかねまじい權幕を示す。

中島はその語氣に壓せられて、ぐうの音も出なかつた。彼は當るところがないので、長い蓬髮の頭をごしごしやけに搔きながら、一人で貧乏搖りをしてゐた。

皆もそれで一度と白けてしまつた。いつもなら各々煩い文句のある處であらうが、から切迫つてしまつては、東京へ歸れるといふだけでも全くのところ儲けものであつた。東京へ歸つてから、何んとかし一喫へゝば萬更よし、さもなくてもこんな心細い旅をつゞけてゐるより、淺草へさへ歸れば何んとかして食べツぱぐれはないので、彼等はたつた今にも歸り度いのであつた。

殊に宮崎は旅の御難には慣れてゐるとみえ、眞先に足が浮いてゐた。彼はからなるともう人情も何もなく、自分一人が素敏ッこく立廻つて、その五十六圓なにがしかの歩合の配分方を、翠波に迫つた。樂士達の方では頭割りを主張したが、宮崎は恐い顏をしてそつちをじろりと睨めつけながら、

「おい、笑談云つちやいけねえよ。こんな些細な金だつて、今の俺達にや生命とかけがへになる大事な水の手だ。とにかく翠波さん、そいつあ歩合の高に應じて、按分にして貰ひませう。いさこざいつてる野郎は勝手にさせときやいゝん

だから。」と、頑固に云ひ張る。青く膨れた額には、梃でも動きさうもない色がみえてゐた。

　翠波は一寸處置に困つてゐたが、やがて一定法だといつて、技士と樂士と說明者と三つに分けて渡すことにした。中で十五圓だけは宮崎の分に頭引きして、あとの三十五圓だけを樂士に渡してやり、殘りは皆弟子の翠波の所得にしてやつた。汽車賃が足りないの、辨當代がないのと云つて、樂士の方では頻りに揉んでゐたが、翠波はもう知らん顏をして、薄暗い舞臺のうへをポケットハンドをしたまゝこツこツ歩いてゐた。

　そのごたくさしてゐる最中に、電燈がぱツと消えてしまつた。

　翠波は忌々しさうに、舌打ちをして、

「つツ、これだから田舍の貧乏小屋は厭さ。電燈料まで吝々してやがるんだからなあ。」と、呟いて、大きな聲で、「おい、表の老爺つあん。もうおきに行くんだから、電燈位つけといてお呉んな。これぢや眞暗で身動きも出來ねえぢやねえか。歸るにも歸られねえよ。」と、怒鳴る。

　向うからは返事はなくて、又はツと電燈がついた。

　宮崎はもう委細構はず身支度をして、

「香月さん。そいぢや僕は先が急ぐから、今夜の汽車で立ちますよ。何んでも十一時四十五分かに、たしか東京行がある筈だからこれから行きやゆつくり間に合ひますからね。」と、云つて、「あのそれから島田先生の方はもう萬事僕が呑み込んでるから、よろしくやつときますよ。そいぢやお先に。あんたも成る丈け早く足を拔いて歸つてらつしやい、左樣なら。」と、半分から先は後向きになつて云ひながら、彼はそゝくさ映寫室の方へ歸つていく。やがて彼はそこで恐ろしくがたぴし物音を立てだした。

　樂士達もさうなると、急に靜かになつて、我勝ちに支度をしはじめた。逃げ足は可笑しいほど早かつた。とみる間に彼等はもう各々樂器をかついで、默つてぞろぞろ館の出口の方へ出ていく。翠波までが素早く外套を引被つて長居は無用といふやうな恰好をして、とつとと皆の先廻りをしていつた。

　映寫室では宮崎が大野に手傳はせて、もうすつかり荷物をこしらへ上げてゐた。まるで早立ちの乘り込みのやうに、ちやんと手配がついてゐた。宮崎は帽子を阿彌陀に被つて、テケツ場の庇で、雨のしぶきを避けながら、

「扨てと。雨には弱つたな。いつもなら俥を奢るんだが、この懷ぢや贅澤も云へねえなあ。どうだい、大野君。君このアクメを擔いで呉れんか。俺がフヰルムサックを引負ふから。」

　後に突立つてゐた大野は口を尖らかして、

「いや、僕には樂器があるかんな。」と、云つたが、もう臆面もなく、

「おい、君、それとも、煙草代を呉れるかね。さうすりや擔いでいつてやるよ。」と、まんじりともしずにいふ。

　宮崎もさすがに苦笑ひを洩らして、

「コン畜生、足許を見やがつたな。油斷も隙もありやしねえ。ようし、そんなにおつかつしてやがるんなら、五十錢で負けとけよ。さ、そのかはり、擔いだり、擔いだり。」と云つて、もうアクメを有無も云はさず大野の肩へのツけて、そのうへからさツさと穴だらけの桐油を押被せてしまふ。そして自分もズックの袋へ入つたフヰルムをうんとこしよと背負ひ上げて、他人には構はずにどんどん雨の中へ出ていつてしまつた。

「捲き返し」や、大野の大喇叭や、その他のこまこましたものは、手ぶらな翠波が背負にされてしまつた。彼にぶつくさ云ひながらもそれを兩方の手で抱へ込んで、諦めたやうに、

「まあ、いゝや。どうせ停車場までは六七町しかないんだからな。その代り、おい、宮崎君、明日の朝の汽車賃はお前さんの持ちだよ。かうなりや俺だつて、他人樣のお錢に乘ッからなけりやなあ。はゝゝゝ。ぢや先生。ひと足お先へ。德ちやん、あばよ。」

チャップリン髭を生やした、小ちあな、氣の利いた館の持主であるだけに、よちよち歩いていく恰好が噴笑し度いほど可笑しかつた。

皆はやがて百鬼夜行といふ形で、それでも成る可く着てゐるものや、持つてゐるものを濡らすまいとして、町家の軒先から軒先を傳つて、停車場の方へ歩いていつた。翠波の笑ひ聲だけはいつまでも聞えてゐたが、皆の後姿はやがて降りしきる雨の闇に消えていつてしまつた。

その町筋には理髪店と、小料理屋と、それから雜貨屋がたつた一軒起きてゐるつきりで、もうあとはすつかり大戸を下ろしてゐた。

あとに殘る翠波と德枝も身支度をして、繪看板の陰へ突立つて、皆の立去つた跡をぢいッと見送つてゐた。德枝はぶるぶるッと身慄ひをして、向側の家並を透かしてみながら、

「あら、雨かと思つたら、雪もまじつてるのね。」

と、呟いて、もう我慢が出來なくなつたやうに、哀れッぽい聲で、

「ねえ、香月さん、とにかく宿屋へ歸りませうよ。傘がないから、仕方がない。このまゝ濡れて歸るのねえ。さ、思ひ切つて行かうぢやないの。」

翠波も空を見上げながら躊躇してゐたが、やがて德枝に眼まぜをしてついと往來へ出た。二人は皆の立去つた方とは反對の方角へとッとと歩いていつた。前屈みになつて、片手で裳をよけてゐたが、耐らなくなつたとみえ、德枝の方が先にばたばた驅け出した。彼女は樂器を濡らすのが何よりも恐ろしいので、そればかり氣にしながら息せき驅けて行つた。

二人の姿が遠のくと、間もなく、館の中から眼たゞれの小さな老爺がよぼよぼ出て來た。

その老爺は水洟を啜りながら、惡どいペンキ塗りの剝げちよろけた扉を片寄せ、建ち腐れのしさうなテケツ場の窓を閉めて、建看板も軒内へ取り込んだが、やがて表懸りの電燈もポッポッと二度に消されて、そこいらは急に眞暗になつてしまつた。

無燈の自轉車に乘つた子供が、霙の降りしきるその闇の中を、それでも元氣のいゝ口笛を吹きながら、ついと驀地に乘り切つていつた。

あとにはもう人通りもなかつた。

二

一行がずつと滯在してゐた會津屋といふ小宿は、館から三町ほど下の町へ下つた、裏通りのだらだら坂の下にあつた。往來に沿つた總二階建の、こゝいらでは一寸眼につく家であつたが、先年の大火のあとで無理をして建てた低普請なので、ナマコ板張りで、軒が低くて、いかにも見すぼらしかつた。青ペンキで塗り立てた宿屋の旅籠らしい大看板が入口の屋根一面に上げてあつて、柄にもなく大きな電燈ばかりが明るく四邊を照らしてゐた。

德枝は玄關の硝子戸を開けて、照れ隱しに、「おゝ、寒い。」と、云つて、土間へ飛び込んでいつたが、帳場には誰れもゐなくて、お歸りと迎へる聲も聞えない。

翠波も結局それをいゝことにして、そのまゝ大きな顏をして正面の階段を上つていつた。

よつぽどあの大火が痛かつたと見え、そこから廊下へかけては、柱毎に眞紅な、安ものの消火器が懸けつらねてあつた。

彼等の借りてゐる座敷は、二階の一番どんづまりの八號だつた。がらんとした、置床の間の

ついた八疊で、申譯ばかりに黑塗りの田舍臭い衣桁と、長火鉢と、ニス塗りの餉臺が置いてあつた。疊はぼくぼく膨れ上つて、歩く度にやはな根太がぎしりぎしり鳴つた。

二人は火の消えた長火鉢の側へいつて、先づ坐るには坐つたが、何しろ齒の根も合はないほど寒いので、翠波は、

「ねえ、徳ちやん。とにかくこんな濡れたものを着てゐちや毒だから、早速ひとツ風呂溫まらうぢやないか。」と、空咳をしいしい云つたが、面長の、鼻筋のきりツとした彼の顏はまるで、土氣色をしてゐた。縁なしの華奢な眼鏡も雨に濡れて、カラーの隙間からみえる頸筋はいたいたしいほど鳥肌だつてゐた。

徳枝は手巾でしきりに樂器入のケースを拭きながら、

「ほんとにこれぢや風邪をひいちやふわね。」と云つたが、彼女ももう長いこと理髮店へもいかないと見えて、斷髮の衿の窪のところには黑くみえるほど毛が伸びて、耳朶ばかりが紅をひいたやうに眞紅になつてゐた。

そこへ裏階段の方から、脊丈のずんぐりした金齒を入れた、人の好ささうな女中が十能に火を入れてもつてきた。

翠波はその女中の方へ、態々愛想のいゝ笑顏をみせて、

「お常さん。唯今。お風呂は何うだい。すぐに入つてもいゝかね。」と、云つたが、女中は氣の毒さうに、

「は、あの、生憎ね。今夜はあのお釜がどうかしちやつたとか云つて、沸かしませんの。どうもお氣の毒樣。」と、云つて、宙腰になつて、長火鉢へ炭火をつぎたす。大震災から此方、東京を流れ出して來たとかいふので、その女は珍らしく輕い東京辯をつかつた。

翠波は落膽して、

「おや、おや。お風呂も立てないのかい。どうも實に手酷しいね。はゝゝゝ。」と、仕方がなささうに笑つて、やがてすごすご背廣をぬいで、褞袍へ着換へながら、

「沸かさんといふものを愚圖々々云つた時に仕方がないが、併しこゝの家の老爺さんも金を取るのは下手だね。客遇ひをよくして置きやこれで義理つてものもかゝるのになあ。はゝゝは。まあ、仕方がない。兎に角これぢや風邪をこぢらせてしまふから、ねえ、お常さん、お氣の毒だけど、大急ぎで熱い奴を一本つけて來て頂戴な。お帳場ぢや何んと云つても、そこはひとつお常さんの働きでね。君は僕等の隱れたる同情者なんだからなあ。」と、煽て上げて、「それともうお酒は現金でなくちや出さんかね。」

お常は困つたやうな顏をして、

「さあ、如何ですかねえ。」と、云つて、鐵瓶の湯を見たりしてゐたが、翠波はシャツのポケットから財布を引出して、何うしたのか、その中から五圓紙幣を一枚氣前よく放り出して、

「いや、お常さん、このうへ君をいぢめても始まらない。これをお帳場へ持つてつてね、とにかくお勘定の件は明日きつぱり極りをつけるから、どうか今夜の酒だけは心持よく出してくれるやうにさう云つて吳れないか。賴むよ。この通りがたがた慄へてゐる始末なんだからね。」

お常はもぢもぢしながら、

「どうもほんとに相濟みません。何しろ家の旦那と來たら、因業なんですからねえ。」と、笑つて、「あの、他の方達は何うなさいましたの。大變に遲うございますのね。」と、訝る。

翠波は火鉢の前へ坐つて、

「皆かい。皆はもう君、この前の汽車で東京へ歸つちまつたよ。いよいよ一行解散と來ましたからね。實に慘憺たる有樣さ。はゝゝゝ。」

お常は眼を丸くして、

「あら、まあ。……」と、云つて、「あの、それでもまだ皆さんのお荷物なんか殘つてますのにねえ。」

「はゝゝゝ。荷物? どうせ碌なものは殘しちやゐないさ。開けてみりや猿股の汚れたのか、古ポスター位なものさ。はゝゝゝ。まあ、いゝ。とにかくお常さん、大急ぎでお菓子をね――」

お常は狐につまゝれたやうな顏をして、階下へ下りていつてしまつた。

德枝もその間に宿の男褞袍に着換へて、長火鉢の向うへ坐りながら、翠波の煙草入から敷島を拔きだして、うまさうに吸つてゐた。まだ寒さが應へてゐるとみえ、鼻の頭が眞紅になつて、眼も低く窪んでゐたが、翠波の顏を下からみて、

「ねえ。あんた。かうなつてみると、何んだか急に寂しくなつちやつたわねえ。もう皆汽車に乗つちやつたでせうか。」

翠波は腕時計をみて、

「さあ、もう十一時三十分だから、そろそろ乗る頃だね。今頃はもう歩廊へ出てやがるだらう。」と、云つて、自分も煙草に火をつけて、

「併し全くかうなると、實に薄情な野郎ばかり揃つてゐやがるぢやないか。別れ際に誰一人だつて、氣の毒さうな顏をして呉れるものもありやしないもの。尤も樂士の連中は、今度は突込みで風來ものを引張つて來たんだから、人情のねえのは當り前だが、併しそれにしても今時の[illegible]位は何んとかひと愁嘆場あつてもよささうなもんぢやないか。彼奴までがいゝ加減な茶羅ッぽこを云つて、とッとと歸つてつちまひやがつた。さすがに僕あ涙が出たね。今時は全く賴りにならねえね。」

德枝は吸殼を灰の中へ突込んで、袋の中からコンパクトを出して、顏を直しにかゝりながら、

「ほんとにさ。私もあの時にや呆氣にとられちやつたわ。隨分な人達だと思つて、口惜しかつたのよ。二月もひとつ釜の御飯を食べて來たのにねえ。……それにあんた、機械だつて[illegible]だつて、まだ九日も日が殘つてるんぢやないの。」と、云つて心細さうに自分の鼻をみながら、

「でも、私、正直なことを云ふと、私も全く歸り度かつたわ。もう東京を出てから二月にもなるんだものねえ。一體あとはどうなるの。ほんとに東京からお金が來るの。大丈夫なの?」

翠波は平氣な顏で、

「それや僕、大丈夫だよ。間違ひッこないよ。島田先生だつて君、かうなりや自分の責任もあるんだからねえ。」と、云つて、「大勢入りだから、それに、今だから云ふが、あゝやつて一行を拵へてみたものゝ、いくら先生だつても金を送つて寄越しッこないよ。先生は兎に角、奥さんの蛇がね。實にあの蛇と來たら[illegible]高いからね。あゝ人數が多くつちや、とてもちつとやそつとの金ぢや見切りがとれないつてとこを見てるから、中々何うして。そこで僕は考へてね。いよいよ今夜解散の宣言を下した譯なのさ。たつた二人で身輕になりや、これで何うにだつてなるもの。從つて先生の背だつて輕くなる譯だからね。そこは先生だつて、ちやあんと考へてらあね。」

「さうか知ら。それだと私も安心が出來るんだけど。これでやつぱり心配でね。あんたに任しときやいゝと思つても、やつぱり不安なもんだわ。惡いけど。……それに私、何しろ旅は今度が初めてなんでせう。大きな顏はしてるけど、その實心細いのよ。それにあんた、手持ちのお金は何う。少しは殘つてんの。」

翠波は狡さうな眼つきをして、舌舐めずりをしながら、

「はゝゝゝ。徳ちゃん。細工はりうりう仕上げを御覧じろさ。いや、實はね、どうせこんなことになるだらうと思つたんで、先刻盛春館の館主から分金を受取る時に、そつとピンを切つてやつたんだよ。あの時には五十六圓なにがしと報告したが、實は君、九十三圓ばかしになつてゐたのさ。その中から丸々三十七圓がとこぽいつぽをしてやつたんだから、一寸いゝ仕事だらう。それで君、あとは知らぬ顔の半兵衛さ。どうだい、凄い腕だらう。はゝゝゝ。」と、自慢さうにいふ。

徳枝は呆れて、

「まあ、おや一寸三分の一、頭を張つた譯ね。全くこの道は、仲間でもうつかり氣が許せないわね。呆れツちやふわ。」と、云つて、コンパクトをそこへ放り出して、今度はだらしなく、火鉢のうへへ被さるやうにしてあたりながら「おや今の五圓もその中から出したのね。道理で氣前がよすぎると思つたわ。ほゝゝゝ。そいで誰れも氣がつかなかつたの。」

「氣がつくもんかね。[illegible]目勘定だから、客の頭が分つてやしないもの。それにあのどさくさの中だらう。やたらとガツガツしやがるばかりで、そんな血のめぐりのいゝ奴は一人だつてゐやしないんだ。まあ、あの宮崎の奴位は、あれで汽車に乗つてからどうも少々變だな位感づいたかも知れないが、もう後の祭だからね。はゝゝゝ。」

そこへお常がやつと銚子の支度をして運んで來た。もう火を落して何んにも肴が出來ないからと云つて、しなびた燒海苔と殘りものらしい蛸の酢ぬたをつけて來た。

徳枝はそれを置いて出ていかうとするお常を後から呼び止めて、

「ねえ、ちよいと、お常さん。いろいろ我儘を云つて濟みませんけどねえ。私、お腹が空いて耐んないのよ。火を落したんなら、あの、何處かそこいらからおうどんを取つて呉れない。うどんかけを二つでようござんすわ。」と、いふ。

お常は障子を閉めながら、

「はい、畏りました。旦那の方は如何です。」

と訊いたが、翠波はもううどんなんか澤山だと云つて、まるで餓ゑてゐるやうに黒塗りの盆のうへから盃を取り上げた。

徳枝は酌をしてやつた。

徳枝も廣へ出てからは、すつかり手が上つたので、彼女も翠波に酌をして貰つて、ぐいぐい呷つた。酢つぱいやうな地酒だつたが、二人は文句も云はなかつた。

徳枝は煙草ばかり吸つて、

「でも香月さん。今度の旅は振り出しから無理があつたんだわねえ。何しろ宇都宮の軍隊が外れたのが、躓きの初めだわ。それに福島もいけなかつたし、郡山もあの通りでせう。そこへもつてきて、仙臺で島田先生に脫けられちまつたんだもの。助かりッこないわ。ほんとに運が惡かつたんだわねえ。」

翠波は蛸の脚を口の中でもぐもぐやりながら、

「いや、そこへいくとこの旅つて奴は全く水ものなんだよ。それこそ出たとこ勝負だからね。併しこれも今だから云ふんだが、實はね、あの島田先生の病氣だつて、ほんと云や臭いもんさ。先生はもう白河ですつかり懲りちやつて、もうこりやとても可けないと見て取つたんで、あの假病をつかつて、巧くドロンちやつたのさ。先生なんか、この道ぢや三十年も叩ッ込んでゐるんだもの。そりや眼先は早いやね。」

徳枝は變に口尻を歪めて、

「まあ、さうか知ら。ぢやあの病氣は狂言なの。隨分失禮しちやふわねえ。折角の上機嫌があんた、そんなことをしていゝのか知ら。

「いくら可けなくても、師匠と弟子ぢや咎める譯にやいかんからね。」と、云つて、翠波は口惜しさうな顏になつて「いや、併し今度の失敗はね、いつも云ふことだが、たしかにあの久保井の野郎が片棒かつぎやがつたんだよ。彼奴が至るところの土地で、いゝ加減な契約をして廻りやがつたから、到頭雪隱詰めを食つちやつたのさ。どうも、彼奴、此の前の時から臭いと思つてたが、やつぱり僕の眼鏡は違はなかつたよ。」
「ぢや彼奴、上前でもかすつて歩いたのかしら。」
「いや、上前どころぢやない。中にや仕打の懷までいびつてやがる處があるに相違ないんだ。須賀川なんか、さう云やあ、實に怪しかつたもの。」と、云つて、翠波は手酌でやりながら、「今更、愚癡を零したつて追付かないけど、僕は今度東京へ歸つたらと思つてるんだ。彼奴まんまと、我々をはめやがつたから、今度こそもう島田先生のところへ顏出しの出來ねえやうに、ぎうと首根ツこを押へつけてやらなけりや、此方だつて胸がをさまらねえからね。何うするか、それこそ覺えてゐろさ。」
　徳枝も口惜しさうに、
「ほんとだわ。今度こそうんと叩きつけてやる方がいゝわ。何も私達がこんな辛い目をみて、默つてることはないんだものねえ。」
　翠波は立て續けに飲んだので、もうそろそろ醉つて來て、血線の出た白眼をくるくるさせながら、
「いや、それにやつぱり今から考へると、持つて來た書も可けなかつたんだね。劍劇ものの「敵討八方鏡」に、正喜劇、「亭主」なんて並べ方ぢや、いくら東北でもお客が來ッこないよ。せめて君、一本位はやつぱりしんみり泣ける情緒ものがなけりやねえ。おかげ樣で、この翠波のにぎはやんやと來る儲け場所更になしさ。はゝ。」
「だつて、あの書はみんな島田先生が選定なすつたんでせう。」
「もとよりさ。つまり露骨に云へば、先生が義理のある手持ちのものをさつぱり掃いた形さ。それ我々が默つて、それへ載つけられたのさ。それに大きな聲ぢや云へないけど、もう先生だつて此節ぢや時勢に遲れちやつてるからね。」
「さう云やあ、さうだけど。でもやつぱし貫祿はあるわね。何處の田舍へいつたつて、先生の名だけは知つてますからね。」
「そりや入れた年期の餘德さ。田舍へ來りやこれで強いもんだからね。說明界の大キング、辯士界の大明星と來らあ。はゝゝ。大天狗の間遊ひぢやねえか知ら。」
「あら、隨分口が惡いわね。ほゝゝ。そんなこと云ふもんぢやないわよ。恩師に對して。ほゝゝ。」
　翠波は頭を抱へて、
「こりや失禮。口が曲る、膝が曲る、足が曲るッと。序に小便へでもいつて來ようッ。はゝゝは。」と思ひ切り笑つて、彼はそのまゝ勢よく立上つて、便所へ下りていつた。
　徳枝はひとりでちびりちびり飲んでゐたが、翠波は便所から歸つて來ると、今度は徳枝の傍へ態と崩れるやうに橫坐りに坐つて、彼女に酌をしてやりながら、一寸彼女の肩へ顎をもたせかけて、
「ねえ、徳ちやん。そりやさうと、先刻別れ際に、君と僕との關係に對して、何んか槍でも入れる奴がゐるかと思つたら、案外何奴も默つてやがつたぢやないか。意氣地やねえんだね。」
　徳枝も色めかしく、頰ッぺたを翠波の顏へ押しつけて、橫眼で秋波を送りながら、
「いゝえね、私も實はびくびくしてたのよ。今迄だつて、あんたは知るまいけど、蔭ぢやそり

や煩さかつたのよ。だから私、きつと宮崎さんが何んか厭なことを云ふに違ひないと思つてたら、案外だつたわ。」

「はゝゝゝ。そりや君、あの宮崎は苦勞人だよ。人間が出來てらあね。薄情なだけに、そこいらの要領はまことにいゝんだがね。併し中島のにきび野郎がそれでも小刀でちよいと斬りかけて來たぢやないか。はゝゝゝゝ。」

徳枝は媚びるやうに大仰に噎び笑ひをして、

「ほゝゝゝ。あの人、ほんとにいつも三枚目ね。慾の皮も突張つてるが、あれでゐて色氣の方もたつぷりなんだから滑稽だわね。今日の云ひ草だつて、もとを洗やあやつぱし嫉ッかみなのよ。」

「はゝゝゝゝゝ。今更嫉いたつて始まらないぢやないか。ほんとに彼奴は、いくらか君に脈があると思つてんのかね。」と、云つて翠波は徳枝の絃蛸の出來た手をいぢくり出す。

徳枝はするがまゝに任せて、

「そりやあんた、思つてるどころぢやないわ。あの人、昨夜もね。私がお風呂へ入つてたら、そこへこつそり入つて來てね、變な眞似をすんのよ。」

「はゝゝゝ。頬ッぺたのにきびを潰しつぶしね。ほんとに氣の利かない野郎だ。何うして彼奴はあゝ薄汚いんだらう。傍へ寄るとぷうんと酢ッぱいやうな匂ひがするからね。厭な體臭だね。」

徳枝は盃を銜みかけて、手を振りながら、

「あんた、もう止してよ。私、思ひ出しても、お酒の味がまづくなつちやふわ。それでゐてあんな氣の利かない顏をしてて、あの人、これなんですつてね。」と、人指指でカギをこしらへてみせる。

翠波は合點いて、

「さうだとも。その方ぢや一ッ端やれるんだからね。人は見かけに依らないものさ。白河でなくなつたあの井上の指環だつて、到頭吐き出さなかつたからね。」と、云つて、彼は自分の薬指にはめてゐる印臺の大きな金指環をはめ直しながら、ちらと徳枝の顏を見て、「ねえ、徳ちやん。君ばかり飲まないで、僕にも一杯おくれよ。」

徳枝は自分の飲みかけを、翠波の口へもつて行つてやりながら、

「ねえ、香月さん。だけど、併し、旅つてものは、全くいゝ加減なもんね。私、全く愛想が盡きちやつたわ。同じ仲間うちでも、女と見たら、それこそもう逼さないのね。とても凄いわ。」

翠波は徳枝の肩へ手を廻して、

「はゝゝゝ。何奴も皆餓ゑてやがるからねえ。それに御難つゞきときてるんだもの。その方ぢや氣も荒くなつてるからね。」

「でもそれにしたつても、あんまり見境がなさすぎるわ。私、まさかと思つてたのに、……」

翠波は變に思はせッ振りなその云ひ方を聞き咎めて、

「何がさ。中島の他に何かい、まだ誰れか君に思召しをつけてゐた奴がゐるのかい。……あゝ分つた、宮崎だらう。」

徳枝は手を振つて、

「うゝん。さうぢやないわよ。あんたに云つたら、きつと吃驚するわ。」

「云つたらいゝぢやないか。どうせもう皆歸つちまつて、今夜は君とたつた二人きりなんだもの。いやに君にも似合はず持つて廻るぢやないか。」

「いゝえ。さういふ譯ぢやないのよ。だけどあんた、聞いたあとで氣を惡くしないでね。私、もう今だから云つちやふけど、あの、實はね、島田先生までが私を口說いたわよ。呆れるぢやないの。」

翠波も意外さうに、うすら笑ひを洩らして、
「へえ。あの禿ちやんがね。一體何處でさ。」
「何處つて、あの、白河の宿屋でよ。そらあすこを立つ前の晩、例の村上さんの揮毫一件で遲くまでごたごたしてたでせう。あん時、あんた達は表二階へいつて荷物を調べてたわねえ。あの留守によ。」
「へえ。あの留守にね。いや、こりや驚いた。」と、翠波もさすがに少し白けて、德枝の肩から手を外しながら、「尤も先生は昔からチョッカイが早いんで有名だつたが、併し君に當りをつけるとは聊かたしなみがなさすぎるねえ。寧ろ少々慨然だよ。それで何うしたい、君はうんと云つたかね。」
德枝はふんと鼻で投つて、
「まさかあ。いくら何んでも先生ぢやあねえ。私、だからもうはつきり厭だつてさう云つてやつたの。さうしたらね、先生つたら、禿の中まで眞紅にしちやつてね、何しろ、燈がカンカン照ついてる中でせう。もうそりや可笑しいほど照れちやつて、到頭私の手を放しちやつたわ。それからは何うしたんだか、氣味の惡いほどお世辭を使つてね、私の機嫌ばかりとるやうにしてるんだもの。私、却つてお氣の毒になつちやつたわ。やつぱし他人に知れると可けないと思つてびくびくしてらしつたんだわねえ。」
「そりやさうだらうとも。もし東京へ歸つて蛇へでも云ッつけ口をされようもんなら、それこそお家騷動だからね。併し辯士界の重鎭、島田光波先生も、德ちやん風情を口說くやうになつちや、いよいよ焼きが廻つたね。」と、嘲るやうに云つたが、さういふ彼の顏色は、妙に鬱つてゐた。彼はそのまゝ火鉢の火をみつめながら、ふと何か別なことでも頭腦へ映つて來たやうに少時の間考へ込んでゐた。
德枝は二本ついて來た銚子が、もうすつかり空になつてしまつたので、殘り惜しさうに一本一本振つてみながら、
「ねえ、あんた、もうお酒がなくなつちやつたわよ。あんたもう止す。もつと飲みませうよ。今夜は皆歸つちやつて、どうせ邪魔ものがゐないんだから、私、うんと飲んでうぢやうぢやけ度いわ。ほゝゝ。もう三本位いゝわね。お常さんを呼んでよ。」と、云つて、ふらふらしながら立上つたが、ふと戶外へ聞耳をたてて、
「あら、雨は止んぢやつたのか知ら。いやにしいんとしちやつたわねえ。」と、云ひながら呼鈴を押す。
翠波は思ひ出したやうに、ぶるぶるッと胴震ひをして、
「あゝ、又めつきり冷え込んで來やがつた。さつきの雲がきつと雪になつたに違ひないよ。それで音がしなくなつたんだ。」と、呟いて、彼ももぞもぞ立上つて、空咳をしいしい梯子を下りていつた。

三

その翌日、二人は午過ぎまでぶらぶら寢をしてゐたが、起きると引違へに宿の亭主が上つて來て、もう宿料の勘定に對する手詰めの談判であつた。
昨夜降つた雪も三寸ばかり積つたきりで、午過ぎにはすつかり霽つてゐた。低い雲の切れ目からは時折寢ぼけたやうな薄日が射したりしてはゐたが、何分にも底冷えがつよいので、翠波は炬燵の中へちゞこまつてゐた。彼は顏色はまるで鉛のやうで、熱ッぽい潤んだ目をしながら、咳ばかりせいてゐた。德枝も昨夜の酔ひが殘つてゐるとみえ、生欠伸ばかりしながら、安もののガタガタ鏡臺を炬燵の傍へ引寄せ、さつきから火箸で横鬢の毛へ丹念にウェーブをかけてゐた。それがうまくいかないので、彼女は横坐

りにだらしなく坐つて、一人で焦れてゐた。
宿の亭主は、今日はもうすつかり濟にかゝつてゐた。黒痣の處斑らに出來た、胡麻鹽頭を振りたてながら圖々骨でいつこゝにまくしたててゐたが、翠波はまるで取合ひもしなかつた。
「いや、今も御覽の通り、東京の方へあゝいふ電報も打つたんだから、その返事が來るまで何んとかして待つて貰ふより他はないですよ。一行のものも今朝はもう東京へ着いてゐますから、必ず送金はしてよこしますよ。まあ、どうかさう物事を窮屈にせんで、もう少時ですから待つてゐて下さい。決して御迷惑はかけんといふてるぢやないですか、私も東京の藝人界では相當に人氣もの、香月翠波です。たつた七八十圓の金で、御當地を賣りやしませんよ。」
亭主も度々藝人には踏み倒されてゐるとみえて、いつかな聽き入れなかつた。因業といふよりは、少し手筋のよくない老爺らしいので、いふことも隨分荒ッぽかつた。それだけに翠波もうつかりタンカも切れず、風に柳とあしらつてゐるより他に仕樣がないのであつた。
二時間ばかり坐り込むと、階下から女の子供が用があると云つて呼びに來たので、老爺はしぶしぶたつていつた。とにかくたいものは取る譯にはいかないので、いくら凄味なことを云はれても、かうなると居坐つてゐる客の方が強かつた。
翠波は老爺の足音が裏階段の下へ消えていつてしまふと、いくらかほッとしたやうに大きな伸びをひとつして、
「あゝッ、骨を折らせやがつた。畜生奴ッ。僕はどうも今日は少しばかり熱があるやうだよ。その筈さね、昨夜ひと晩ですつかり風邪をこじらせてしまつたんだものなあ。」と、云つて、そのまゝ座蒲團を枕にして、ごろりと横になつてしまふ。その顔は今度は眞紅になつてゐた。
徳枝も翠波が思ふやうにならないので、もう斷念めて、蒲團をがたがた向うへ足で押しやつて、もう一度欠伸をしながら、
「あゝ、ほんとに厭になつちやふわねえ。お金の催促つてものは、いつ聞いても不愉快なものね。」と、投け出すやうに呟いて、自分も炬燵へ入つて來た。ふいと膝小僧を入れようとすると、そこの布團の下には、翠波の足の先が來てゐるので、徳枝はそれをよけて、向うへ居坐つていつた。翠波の足はいかにも細つこくて、青い靜脈が蚯蚓のやうにうねうね浮いて、まるで血の氣がなかつた。
徳枝はさうしたまゝぼんやり考へ込んでゐたが、少時するとたしなみもなく鼻の穴をほじくつて、
「ねえ、香月さん。昨日の晩打つた電報の返事はもう來さうなもんぢやないの。何うしたんでせうねえ。先生又病氣でもして彼在るんぢやないでせうかねえ。」
翠波は天井ばかりまじまじ見上げながら、
「さあ……」と、浮かぬ聲で答へたが、急に徳枝の方へ上半身を捩り寄せて來ながら、眉をぴくりぴくりと痙攣させ、
「ねえ、徳ちやん。昨夜君に聞いた話ね。そら、先生が白河の宿屋で、君を口説いたつて話さ。あいつはまさか嘘ぢやないんだらうねえ。」
徳枝は平氣な顔で、
「嘘ぢやないわよ。何うして。」
「いや、あれがほんたうとすると、何うもちつとばかり形勢が面白くなくなつて來るんだよ。一寸困つたなあ。」
「だつてあんた、先生はあんなことを眞道根にもつてやしないでせう。私、そんな了簡の狹い先生でもないだらうと思ふわ。商賣と、私事とは違ふんだもの。」
翠波は變な眼つきをして、

「いや、ところがさうでないんだよ。これで色事の恨みといふ奴は、誰れしも厭にこだはるもんだからねえ。僕、實は昨夜も寢てから考へてみたんだが、先生があの時急に仙臺からずらかつたのにも、幾らかそつちの方の事件がこだはつてゐるんぢやないかね。少なくとも一つの原因にはなつてゐると思ふよ。」

徳枝は鼻の先で笑つて、

「まさか、そんなことないわ。どうせあんた、先生だつて旅先のこつたもの。木刀休めに掃き倒す位のつもりで、私に當つてみたに違ひないわ。きつとさうよ。だからもう今頃はけろりと忘れてるわよ。ほゝゝゝ。」

「いや、中々さうでないて。年を老つてるだけに、さう君、さらりとは行かんよ。それに第一面目つてものがあるからね。案外あの禿ちやん、氣を惡くしてゐるに相違ないよ。どうも僕にはそんな氣がしてならないんだ。さうとすると、これで一大事だからね。」翠波は力めて笑談めかしく云はうとするのだが、彼の感情が許さなかつた。彼の表情は段々硬ばつてきた。

徳枝は駄々ッ兒のやうに、

「さうか知ら。男つてそんなもの。案外ね。あんな先生のやうな相當地位のある人でもやつぱりさうなのかなあ。可笑しなものね。そいぢやつまりあの事を根にもつて、お金を送つて寄越さないんだわねえ。」

「まあ、疑へばさうだね。それでなけりや昨日つからあんなにもう五通も電報を打つてるんだもの。金は兎も角として、返事だけでも寄越さないつて法はないよ、先生の氣性としてだね。……それに皆ももう今頃は東京で先生に逢つてるだらうし、奴等のこつたから又どんな讒訴をして、その又上塗りをやつてるか分らんしね。兎に角困つたことになつたもんだよ。少々僕も心細くなつて來たよ。」

徳枝は炬燵の櫓へ顎をもたせかけて、急に眼だけ心配さうに動かしながら、

「困るわねえ。もしお金が來なかつたら、私達どうするの。」と、悄氣返つてしまふ。

翠波は又ごろりと仰向けに寢て、

「そこさ。それを僕はもう今朝から考へてゐるんだよ。何か他にいゝ方法はないかと思つてね。」と、云つたつきり、彼は妙に默り込んでしまつた。

肱掛窓の障子にはすうッと日が當つて來た。それはもう紅味がかつた弱々しい夕陽の光で、雲が去來する度に、座敷の中までが息を引くやうに明るくなつたり、暗くなつたりする。丁度そこから眞向うにみえる崖地では、今鐵道線路の増幅工事をやつてゐるので、カチンカチンと石を割る鐵槌の音や、コンクリートミッキサーの轟音がしつきりなしに遠く聞えてゐた。

そこへすぐ二階の軒下のところで、だしぬけに烏がかアかアと二聲ほど取つてつけたやうに啼いた。風が障子をひとしきり搖り動かすと、つゞいて又その烏が不愛想な、變哲もない聲で今度は三聲ばかり空へ向つて啼きつゞけた。

徳枝は場合が場合なので、忌々しさうに舌打ちをして、

「つッ、又あの烏が啼き出したわ。縁喜ッくそが惡いッ。」と、云つて、障子の腰硝子から伸び上つて階下を覗いたが、何うしたのか、彼女は顔色をかへて、

「まあ、厭な奴ッ。」と、叫んで、ついと肩を縮めた。

そこから工事場まではずうつと材料置場になつてゐて、枯草の生えた草地には處斑らに雪が消え殘つて、板つぺらと菰でこしらへた工事小屋が幾棟となく建ちつゞいてゐた。低い丘陵の起伏した向うには、うら枯れた赭肌の山が、尾根尾根に雪を抱きながら幾重にも立重なつて、

どんよりと雲の多い空の色までが耐らなく陰鬱であつた。夕陽は四角く切つた花崗石の山へきらきら輝いて、ピラミッド型に積み上げてあるセメント樽や、眞紅な鐵橋材料の間では小さな勞働者の群が蟲のやうに默々として働いてゐた。

とみると、すぐ窓の下の工事小屋の横手では、餓鬼のやうに痩せた蓬髮の男がセメントの空樽のうへへ腰をかけて此方向きになつて頻りに何かやつてゐる。腐つたやうなシャツや褌をずらりと乾しつらねた軒先で風を避けて、その男は小さくかゞまりながら、一心になつて、何かやつてゐるのである。よく見ると、そこに積んである古木箱の中には、何羽も何羽も氣味の惡い、眞黑な烏が入れてあつて、その男は小さな箸のやうなもので今餌を食はせてゐるのであつた。餌は彼の足許の缺茶碗の中へ入つてゐて、それは何かしら蚯蚓のやうなものらしかつた。烏は板の割目から風つきのよくない頭を突き出しては、貪るやうに餌をついばむ。ついばんではやがて二聲ほどかアかアと啼くのであつた。空を仰いできよろきよろしながら嘴を開ける度に、夕陽がかッとあたつて、傷口のやうな眞紅な口中が何とも云へない凄味を帶びて見えてくる。

徳枝はその樣をみると、白粉の粉ッぽく浮き上つた顏を醜くしかめて、

「あら、まあ、あの人ッたら、烏に餌をたべさせてるわ。物好きな人もあるもんねえ。」と、唾棄するやうに云つて、それでも厭なものみたさに、又炬燵の櫓へ手を突いて、そつちを差覗きながら、

「どうも私、こゝへ來た時から變だと思つてたら、やつぱしあの烏は飼つてあるのねえ。道理で變な時にばかし啼くんだわ。」

翠波も氣を變へるためにむくむく起き上つて、同じやうに障子の腰硝子から戸外をそうッとみて、

「いやあ、氣持の惡い奴が何羽もゐるぢやないか。明るいうちに見たことはないんで今迄ちつとも知らなかつたが、成る程、變な道樂もあるもんだねえ。烏を飼ふとはどうも氣が知れないねえ。」と、笑つて、もぞもぞ煙草を取り上げながら、「昨日お常さんがさう云つてたが、何んでもあの連中は皆朝鮮人の土工なんだつてさ。晩になると、酒を食つちや喧嘩をしたり、賭博を打つたりして、もう手にをへないんださうだ。それに通りがかりの女に惡戯をしたりして、この町ぢやもう持て餘してゐるんだつて話だよ。」

「まあ、さうでせうともねえ。あの男の顏なんか、凄いわね。どうせ烏なんか飼つてる位だもの、どこか人間離れがしてるわ。朝鮮ぢや烏を珍重するのか知ら。」

翠波は火鉢の火が消えてしまつてゐるので炬燵へもぐり込んで、その火で煙草を吸ひつけながら、

「まさか。併しやつぱりあれでも、飼つて見ると、何處か可愛氣があるのかも知れないのよ。ほれ、御覽。今度は手の掌へ餌をのつけて食べさしてゐるぢやないか。」

「あらッ厭だッ、あの紅い口の忌らしいッたらないわね。あゝ、私、ほんとに厭なものを見ちやつたわ。何んだか、變にぞくぞくして來た。私もう昔ッからそりや烏が嫌ひなんだもの。」

翠波も彼女と並んで、今度は肱枕をして寢た。そして吸ひつけた煙草を纖細い指の先でパチンパチン鳴らしながら、徳枝の顏の方へ流れていくその煙の行方をぼんやり追つてゐたが、少時すると、咳を押へて、

「ねえ、徳ちやん。つかんことを聞くが、併し、何處かから金を引出す口はないかね。」と、切り出す。

徳枝は、男のやうに兩手で頭を抱へて、そ

れで調子をとりながら、齒齦をチュッチュッと吸すつてゐたが、翠波の方は見もしずに、
「私に、そんな口なんかないわよ。それがあるツ位なら、あんたにお小遣ひをせびりやしないわ。」
　翠波は意氣地もなく伏目になりながら、一寸云ひ難さうに、
「あの、いつかの深井つて人は、ありや何うしたね。」と、云つたが、徳枝は鼻の先で、
「あんな男駄目よ。もう半年も逢はないんだもの。」
「だつて、あの人、隨分君に惚れてたんだつていふぢやないか。」
「いくら惚れて呉れたつて、私ぢや三月と續きやしないわよ。それにあんまりお金をせびり倒したもんだから、恐れをなしちやつてね、向うから寄り付かなくなつちやつたのよ。」
　翠波は煙草をくはへたが、燐が入つたために眼をしよぼしよぼさせながら、
「それぢやあの、慶應の學生で、何んとかいふ人がゐたね。あれは何うしたね。あれもハイかい。」
「波多野さん？　あの人もう學校を卒業しちやつて、お嫁さんを貰つたわよ。」
「今でも東京にゐることはゐるんだらう。」
「さあ、何うですか。何んでも大阪の方の會社へいくとか云つてたけど、何うしましたかねえ。」
「恐ろしくさつぱりしたもんだなあ。はゝゝは。これぢやとても齒が立たないなあ。ねえ、徳ちやん。君もかういふ時の用意に、これからはいゝ常客を二三個つかまへとくんだねえ。まさかの時にや爲めになるからねえ。」
「私もう眞平だわ。もう旅へなんか二度と來ないから。」
「まあさ、旅へは出ないにしても、女は金穴が大事だよ。ほんとに少しでも金を送つて寄越すやうな口はないのかね。隠しちや可けないぜ。」
　徳枝は煩ささうに、
「隠したりなんかするもんですかよ。この頃はもう何も彼もおてツぱらひよ。そいだから旅へなんぞ出て來たんぢやありませんか。」と、云つて、彼女は爪の長くのびた指先で無意味に疊の目を勘定しながら、
「あゝッ、私、東京へ歸り度いッ、しみじみ歸り度くなつちやつたわ。ほんとに香月さん、何うするのよ。かうなると、あんたの責任よ。」
　翠波はさすがに厭な顏をして、
「いや、君と僕との間で、責任呼ばはりはよさうよ。さうなると、つい物事が角だつてくるからね。」と、云つて、咳をしながら、「それより徳ちやん、ほんとに何んとかしようよ。何とかして金を作る算段をしようぢやないか。かうなりや、君にも大いに心配して貰はなけりやねえ。責任問題が出て來りや、君にだつて幾分の責任はあるんだもの。僕も昨夕までは、白河で一件をちつとも知らなかつたんで、もう先生から金が來るものとばかり思つて當てにしきつて安心してゐたんだが、君の話で形勢がまるで一變してしまつたからねえ。だから君にもひとつ金をこしらへる口を心配して貰ひ度いんだ。そりや君だつて當然しなけりやならないことなんだからね。厭なことを云ふやうだが、君の口から責任て言葉が出たんで僕もついかう云ひ度くなるのさ。」彼はいくらか角目だつていふほど困惑しきつてゐるらしかつた。
　徳枝は默つて、齒ばかり吸つてゐた。不機嫌な、不貞腐れなその顏には、もう夕陽の殘映が暗くかげつてゐた。
　また戸外では鳥が騒がしく鳴き立て始めた。コンクリートミッキサーは遠くの方で、ダーと喚いて、日は寂しい風の音とともにとつぷりと

暮れかゝつていくのであつた。

四

その翌日になると、翠波は大分容態が悪くなつて、もう朝から寝たつきりになつてしまつた。碌に食べるものも喉へ通らないやうなので、頬のあたりにはめつきり衰へさへみえて來た。平常から色の淺黑い、角ばつた顏なので、肉が落ちると、輪郭が一層とげとげして來た。彼は熱も高いとみえ、額へ脂汗を浮かせ、眼ばかり力なく瞬きながら黃縞のゴツゴツな夜具の中へ仰向けに寝てゐた。枕が低いので、時々大儀さうに手を出しては、頭へかひ直してゐた。今日はもう激しい頭痛を訴へるばかりで、何うしたのか、大變咳の數は減じてゐた。

徳枝は何うにも手がつけられないので、自分も炬燵の中で寝たり起きたりしながら、ぼんやり時を消してゐた。戸外へ氣を紛らしに出ようにも、帳場の監視がきびしいので、氣味が悪くて、階段さへうつかり下りられなかつた。いくら翠波に相談をもちかけてみても、彼はうんうん云ふばかりで、別にこれといふ思案もなささうなので、徳枝はしまひにはほんとに腹が立つて來た。彼の寝てゐる顏へ何かものでも投げつけてやり度いやうな、ヒステリックな焦躁さへ覺えて來た。

徳枝は翠波が素湯を一杯呉れといふので、いけぞんざいな樣子で、ゆすぎもしない茶碗へ冷たい鐵瓶の湯をついで枕許へ押遣りながら、

「ねえ、あんた。そんなに苦しいんなら、風邪藥でも服んだらいゝぢやないの。うつちやつとくから駄目なんだわ。」と、つんけんしながら云ふ。

翠波は寝返りを打つて、その湯をまづさうに飲みながら、

「いや、今朝もアスピリンの錠劑を二粒も服んだんだが、さつぱり駄目なんだ。それにどうしたんだか、下腹がしくしく差し込んで、小便にばかり行き度くて耐らないんだ。」

徳枝は横眼でその顏をじろりと見遣りながら、

「ふん。だからさ、××××××××らなきやいゝんだわ。××ないつていふのに、××ないんだもの。私、もう此間ッから、あんまり汽車に乘り過ぎたり、冷え込んだりしたんで、××ものがして困つてるんぢやないの。」

翠波も口を尖らかして、

「そんなら、その樣に、はつきり云つて呉れりやいゝぢやないか。」と、云つたが、徳枝は蔑むやうに、

「そんなこと、云へやしないぢやないの。馬鹿馬鹿しくつて。」と、云つて、彼女はそのまゝ又ばたりと仰向けに寝てしまつた。

翠波は今度はよろよろ起き上つて、自分で鐵瓶の湯をお代りした。熱のせゐで、彼はひどく喉が渇くらしかつた。

徳枝はそつちは見てやりもしずに、節だらけの天井ばかり見上げてゐた。さうしてゐるうちに、ふつと旅へ出てからこのかたの出來事が、眩ろしいフヰルムのやうになつてまざまざと胸に去來して來た。ほんとに馬鹿々々しかつたと思へば思ふほど、さうした印象ははつきりと眼に映じて來た。彼女は耐らないやうな氣持で、今日迄の長い旅路を振顧らずにはゐられなかつた。

一行が東京を立つたは、十月二日のことであつた。それまで彼等の出勤してゐた四谷の喜樂館といふ小屋が、丁度持主と賃貸期限が切れたので、彼等は生憎一月ほど遊びになつてしまつた。館主の方では不景氣のどん底を衝いてゐる昨今のことであるから、いつそ小屋は當分乾して置いて、その間に修繕をしたり、座席

の改良をしたりすると云ひだしたので、主任辯士である香月翠波は闇へはさまつて、困りぬいた擧句、窮餘の策として旅を思ひたつたのであつた。それには一本立ちでいくのは少々不安でもあるし、又責任も重いので、彼は兩天秤をかける狡い了簡から、自分達の師匠である島田光波を擔ぎ出すことにした。光波を上置きにして行けば、分合も上がきれるし、一行の世界もずつと大きくなるので、彼は光波が横濱の館へ約束があつたのを、無理に斷つて貰つて、まるで泣きつくやうにして、一行の先達になつて貰つたのであつた。

畫や、樂士や、技士も無論そつくりそのまゝ喜樂館のを引ッこ拔くつもりでゐた。ところが途端場になつて、給金の分合で文句がついて、急に寢返りを打たれてしまつたので、翠波はひどく困つて、その方面のこともすつかり島田に一任してしまつた。で、館からは自分の弟子の畑翠波と、それから德枝だけが行を共にすることになり、あとは淺草にごろごろしてゐる烏合の衆を驅り集めて、それで曲りなりにも一行を組織したのであつた。

最初の振り出しは宇都宮であつた。それから栃木縣下を廻つて、福島へ出て、仙臺まで伸して、仙臺からそろそろ又東京の方へ足を向けたのであつた。東京を出る時には、皆も相當な意氣込みで、少なくとも千か千五百は拔くつもりで踏み出して來たのであつたが、併しそのもくろみはがらりと外れ、行く先々でいろんな御難をくつて、仙臺へ辿りついた時には、もうへとへとになつてしまつてゐた。それといふのも不景氣が祟つたのではあるが、一方又座組みの馴染がうすいので、仲間うちの氣が揃はなくて、その爲めにまるつきり油が乘らなかつたせゐもあつた。

白河ではもう二進も三進もいかなくなつたので、島田光波は最後の奥の手を出して、在方の役場へ頼み込んで、教育映畫といふ名を打つて、その村の寺で開演した。さうなるとさすがに年功を積んだ師匠のことゝて、「一騎討八方鏡」なぞといふヨタものを、巧妙な辯舌ですつかり忠君愛國の一大名篇といふことにしてしまつた。そこいらは實に得たものであつた。

德枝は思ひ出すと、可笑しかつた。村の小學校の校長さんが羊羹色のフロックで出懸けて來たり、青年團の團長が軍服をひけらかしながら場内を斡旋して歩いたりして、騷ぎは可成りえらかつた。寺の鐘樓の横腹へシーツをかけて、本堂の縁端から映すので、畫は絶えず微かにあふられて、歪んだり曲つたりした。それでも寒い地面へ蓆をしいて見物してゐる村の善男善女達は別に文句も云はなかつた。殊にその畫の中には田舍向きに日蓮宗の有難い事蹟が織り込んであるので、寺の坊主や、檀家の衆はひどく喜んで呉れて、思はぬ儲けものさへしたのであつた。

德枝は本堂の階段の隅でオーケストラを入れた。いゝかげんに浮かれてヴァイオリンを彈いてゐるうちに、妙に首筋がむづむづするので、德枝はふつと手をやつてみると、大きな蝨が洋服の襟のところへとまつてゐた。彼女はきやッと云つて、危くバウを放り出さうとして、やつと我慢した。明りも何もないので、皆は樂譜をみることが出來ないところから、同じメロディばかり矢鱈と繰返し、返し返し彈きまくつてゐた。映寫がすんで、青年團員達がアセチリン瓦斯のランプをともすと、村の娘達は德枝の斷髮を珍らしがつて、ぞろぞろついて來たりした。

その晩宿へ歸つて來てから、あの騷ぎが起つたのであつた。皆が風呂へ入つてゐる留守に、宿の床の間にのせてあつたクラリオネット吹きの井上の金の指環と、それから財布の中の金が

三圓ばかりいつの間にか失つてしまつたのであつた。連中が連中なので、そんな些細なものでもう大騒ぎになつて、宿屋の主人や内儀さんまでが呼び上げられる始末であつた。何か事がありさへすれば、因縁をつけ度い樂士連のこととて、中にはそれを結句云ひがかりにして、酒食を強請るものさへゐた。

　島田はひどく困つて、到頭自分が仲へ入つた。井上には自分の懷からその盜まれた三圓と別にもう二圓だけつけて渡してやつたので、それでやつと騒ぎがをさまつた。他の者達はそれを羨んで、その晩二三人で井上を淫賣買ひにでも誘き出したらしかつた。

　島田はそのどさくさが靜まると、自分だけ奥二階へ歸つて來て、それから酒を飮みだした。徳枝は座敷の隅で、ヴァイオリンの絃をかけ直してゐた。

「それにしても、あの時、若し島田先生の云ふことを聞いてゐたら、この自分はどうなつたらう。」徳枝はふつとそれを考へると、胸がどきどきして來た。もう斯界の元老として、自分でも箔をつけてゐる光波に、いきなり手を握られた時には、徳枝も悸乎として二の句がつげなかつた。どうせその場の出來心だらうとは思つたが、自分風情にと思ふと、さすがの彼女もわくわくしてしまつた。電燈はかんかんついてゐるし、それに表二階の方では翠波や宮崎の聲も聞えてゐるので、いかに徳枝が思ひ切つてゐても、すぐその場でうんとは云へなかつた。で、彼女は氣の毒だとは思つたが、麥酒臭い脣で、自分の脣を探す島田の肩をとんと突いて、

「あら、先生、笑談をなすつちや厭ですわ。そんなことをなさると、私、大きな聲を出しますわよ。」と、照れ氣味に笑つてみせた。

　と、島田は禿の中まで眞紅になつて、急に取つてつけたやうに笑ひ出しながら、

「そんな野暮を云ふもんぢやないよ。」と、柔らか調子で云つて、それでもついと握つた手を放して呉れた。……

「先生はあの事を根にもつて、それでお金を送つて呉れないんだらうか。まさかねえ。まさか私のやうなものに眞面目で何うかうつていふんぢやないもの。そんな氣の狹い先生ぢやないに極まつてるわ。……それとも先生はあれで少しは眞面目だつたのか知ら。」さうした疑ひは急に徳枝の心にこびりついて來た。それにしても、若い時からその方へかけては隨分修羅場も踏んで來た島田が、まさかそれツくらゐなことで、重弟子の一人を失策らせるやうなことはあるまいと思ふと、徳枝には却つてそれを云ひたてにする翠波の方が惡く僻んでゐるとしか思へなかつた。

　それから三日目に、丁度仙臺へ乘り込んだ晩、島田光波は館の樂屋で急に眩暈がすると云ひ出して、その晩の夜汽車で突然東京へ歸つていつてしまつたのであつた。歸る時に、彼は二百圓からの金を投げ出して、皆に給金の殘部の内金を渡して呉れた。徳枝はその時には生憎樂屋に居合はせなかつたので、何んにも知らなかつた。……

　徳枝がそんなこんなを思ひ合はせながら、ぼんやり考へ込んでゐるところへ、だしぬけに裏階段の方からみしりみしり大きな足音が聞えて來た。お常にしてはどうも變なので、きつと又宿の亭主が上つて來たのだらうと思つて、びくりと寢返りを打つと、廊下の障子の外ではお常ではないもう一人の女中の聲が、

「此方です。」と、誰れかを案内でもして來たやうに云ふ。

　と、同時に、そこの障子はぎしぎし軋みながら引開けられて、思ひもかけない官服のまゝの若い巡査がぬうッと入つて來た。

徳代は度膽を拔かれて、
「あらッ。」と、叫んだつきり、夢中ではつと起き返つてしまつた。彼女はみるみる脣の色も何もなくなつて、卓子の端へ兩手をかけて、蒼くなつたり、紅くなつたりしてゐた。
巡査はまだ二十二三の、朴直さうな男で、その樣をみると、却つて照れたやうに笑つて、
「やあ、お邪魔します。」と、東北訛りをぴちぴち響かせながら云つて、そのまゝ帽子を傍へ置いて、端近なところへ坐りながら、「私はこゝの署のもんだが、あんた方活動の方の人ですな。」と、じろじろ徳代の方をみる。
徳代はひと竦みになつて、
「はい、あの、左樣で御座います。」と、答へて不行儀に披つた裾をおづおづ引繕ひながら、繋波の方へ助けを乞ふやうに眼をやる。
繋波も寢ながら顏色を變へてゐたやうであつたが、巡査は今度は彼の方をみて、
「やあ、あんた、體でも惡いですか。いや、いや、もう起きんでもえゝですよ。さうして寢とつて下さい。」と、氣の毒さうに笑つたが、繋波はそれでもそもそも起き上つて、
「どうも、こんな失禮な風をして居りまして、申譯も御座いません。何あに大したことはないのですが、一寸風邪をこじらせましてな。」と、苦しい中にも無理に愛想笑ひをして、「あなたは、此方の警察のお方で、はあ、左樣で御座いますか。それはわざわざどうも。はゝゝゝゝ。」と、頭をかきながら、「いや、何に、もう御用の趣きは大概分つて居りますのですが、どうも御繁用中、ほんとに恐れ入りましたなあ。さあ、どうかまあ、お楽に。」と、下へも置かないやうに云ふ。
巡査は厚い脣のうへへちよつぴり生えた薄髭を撫でながら、
「いや、私こそお寢みのところへ踏込んで濟まんでした。實はもうお分りだらうか、その、此の宿の主人から一寸話がありましたのでなあ。……」
繋波はそれを顫へる手で遮つて、
「いや、どうかまあ。それよりもお平に被在つて下さい。私も失禮しますから。」と、云つて、つくり笑ひをしながら、「いや、どうも面目次第も御座いません。私共も實はこんなことになる筈はなかつたのですが、生憎どうも今年は御承知のとほりいづ方へ參りましてもこの不景況で、すつかり手違ひになつてしまひましてなあ。全く近來にない馬鹿々々しいトヤをいたして居りますのですよ。はゝゝゝゝ。」
巡査も笑つて、
「さうですか。その話も此處の主人から聞いたですが、此處もやつぱり商賣の方が振はんで、非常に手許につまつて居るやうなのですよ。それでまあ、やむを得ず、先刻一寸署へ來て、何んとかして呉れちふもんですから。」
「はい、いや、恐れ入ります。貴方方にまでお手數をかけてほんとに恐縮です。何に、實はどうも主人の方があんまり氣が短いで御座いましてな。もう東京の方へも疾うに電報で打合せもしまして、今明日中には送金もして呉れるやうな手筈になつて居りますのですから、もう少々待つて呉れますと、よろしいんですがな。……」
「ふむ、それで、東京の方からは何處から送金して來るのですか。」
繋波はにこにこ笑つて、
「それがで御座います。隨分主人にも說明して聞かせましたんですが、一向に興行の方のことを心得ん人だもんですから、呑み込んで呉れんので御座いますなあ。御承知のとほりかうやつて地方巡業をして歩きますには、やつぱりちやんとした太夫元が御座いましてなあ。その方からの指揮命令で我々は動きますやうな譯で、

からいふ場合にもその太夫元が責任を分擔して呉れることになつて居りますのですよ。それが我々同業者仲間の定款になつて居りましてな、いや、定款といふよりも一種の義務で御座いますな。」翠波はどうしたのか、まるで熱に浮かされてゐるやうな調子で、可笑しいほど雄辯にべらべら饒舌りだした。

徳枝は傍ではらはらしてゐた。

巡査は一々分つてゐるのか、分つてゐないか唯こくりこくりと合點いて、

「それでは、つまりその太夫元から送金して來るのですな。太夫元といふのをもつと普通の言葉でいふと何ういふですか。」と、途徹もないことを云ひ出す。

翠波はもう先を呑んでゐるやうに、

「太夫元で御座いますか。それはつまり興行主といふことと同意義で御座いますよ。私の方はそれが師匠の名になつて居りますので、その名前も申上げてよろしう御座いますし、又お取調べの必要が御座いましたら、いつでも彼地の淺草の象潟署へ御照會下さいますれば師匠の身許もよく分りますから。」

巡査は初めて官服のポケットから手帳を出して、

はあ、太夫元、興行主ですな。」と、獨語のやうに呟いて、「それでは念の爲めにその送金先を聞いておきませうか。東京の何處ですか。」

翠波は一寸徳枝の方を顧みて、

ねえ、徳枝さん。お茶でも入れてね。」と、こあらぬ顔で眼配せして、やがて師匠の住所町名を述べた。淺草區象潟町二丁目十二番地、島田光波といふうちにも、巡査は象潟の字が分らないとみえて、幾度も幾度も聞き直した。翠波は臥床から乘り出して、疊のうへへ大きく指で書いてみせたりした。

巡査はやつと呑み込めたやうに、鉛筆を舐めずり舐めずり、手帳へ書き留めて、

「それではこの島田といふ人から、こゝの宿泊料を送つてよこす譯なのですな。いや、よく分りました。實は一寸盛榮館へもいつて、あすこの館主にも聞いてみましたですが、さつぱり要領を得んのでねえ。」

翠波は徳枝のついで出す茶を巡査にすゝめながら、

「さうで御座いませうとも、いろんな藝人が入り込んで參りますから、中々あすこいらも大變で御座いませうからなあ。併し私共は寫眞をもつて歩きますだけに、旅先でうつかりした不義理は出來ませんのですよ。東京へ出て來られればこれで何の某で相當門戸も張つて居りますし、それに第一新聞を御覽になれば、誰れそれは何處の館へ出てゐるといふことが一目にして分りますからなあ。はゝゝゝ。私も僅か七十圓や八十圓の金で、御當地を賣り度くは御座いませんよ。そこの心持が當家の主人に少しでも分つて呉れるとよろしいんですが。……」

巡査は茶碗を取り上げて、

「いや、此處の主人は町でも有名な一石もんだからなあ。私からよく云うて置きますよ」と、もうそれで自分の用は濟んだと云はぬばかりに呑氣な顔をして、間内を眺め廻しながら、ふつと床の間に置いてあるヴァイオリンのケースを見附け出して、「や、あれはヴァイオリンぢやねえですか。」と、いふ。

翠波はおいでなすつたなといふやうな顔をして、

「左樣です。此方は樂士の一人だもんですから。」と、徳枝の方をみながらいふと、巡査は親しげな眼つきをして徳枝の顔をそれでもいくらか恥かしさうにみながら、

「やつぱりさうでしたか。實は私、一昨日の晩非番であつたので、盛榮館へいつてみましてな。

たしか音樂の中にあんたがゐられたのを見かけたやうに思つたですが、やつぱりさうでしたか。なあ、あんた、甚だ勝手ですが、ちよつとそのヴァイオリンを見せて呉れんですか。」

徳枝はケースごと床の間から下ろして來て、中から白粉ッ臭いヴァイオリンを出して見せた。彼女ももうすつかり膽を撫で下ろして、にこにこ笑つてゐた。

巡査はそのヴァイオリンをそつと取り上げて、大事さうに引繰返してみてゐたが、

「うむ。これは何うして、中々木が枯れてる。これ位使ひ込めば、いゝ音が出ませう。」

徳枝は小娘のやうに嬌態をして、

「え、もう隨分長いこと持つて居りますから。」

と、云つたが、巡査はGの絃を太い、眞紅な指でぽつんぽつんと彈いてみながら、

「もうこれは買つてから何年程になるですか。」

と、訊く。

徳枝は一寸考へるやうな風をして、

「さうで御座いますわね。私が學校に居ります時分に手に入れましたんで御座いますから、さう、もう八年になりますわね。」

「八年？　うむ、それではね。」と、云つて、巡査は云ひ難さうに、「あの、これぐらゐなのぢやつたら、失禮ですが、何程位しますかな。」

「左樣ですわね。その時分たしか八十圓かで求めましたんですから、今ぢや大分致しますでせう。」その實彼女は三年程前に二十圓で、質流れの品を買つたのだが、勿體をつけて六十圓も法螺を吹いたのであつた。

巡査は一寸顏をあげて、眼を据ゑながら、

「八十圓？　それではえゝ品の筈ですよ。ふむ！」と、頻りにブリッヂのあたりをいぢくり廻してゐた。

徳枝はその樣子で、巡査もきつとヴァイオリンを彈くなと察したので、水を向けるつもりで、

「あの、失禮で御座いますけれど、あなたもヴァイオリンをなさるんぢや御座いませんの。」と、笑ひながら、訊いたが、巡査はつぶつぶな頬ッぺたを妙に紅くして、

「いや、ほんの僕なぞは慰みにやるのですよ。それも田舍で買つたものですから、音が惡くてね。」と、いつて、思ひ切つたやうに、「いや、あなたに伺つたら分るでせうが、流行唄のやうなものの樂譜は何處にあるのですかな。きつと東京へいつたらいゝのがあるに違ひねえが。……」

徳枝は媚びのある眼でぢッとその顏をみて、

「あの、流行唄つて申しますと、何んなんで御座いますの。」と、訊き返したが、巡査は眼をそらして、にやにやしながら、

「いや、つまり「漂泊の唄」とか、「北はシベリア」とかいふやうな唄ですな。あゝいふ種類のものの譜ですよ。」

「あゝ、あゝいふもんで御座いますか。それならあなた何處にだつて御座いますわよ。私共は皆自分で寫しますけど、印刷したのも出版されて居りますわ。私、東京へ歸つたら、送つて差上げませうか。」

「やあ、それぢや恐縮ですから、どうか賣つとる店を報せて下さらんですか。僕はかういふものですから。」と、云つて、巡査は手帖の間から、官名を書いた自分の名刺を出して、疊のうへへ置いた。

徳枝はちよつとそれをみて、

「いゝえ、あんなものはあなた、幾らも致しやしませんもの。それに館で澤山使ひますから、私、送つて差上げますわ。いゝのを選びましてね。なあに御心配なんか要りませんわよ。」

巡査は困つたやうに又顏を紅くしてゐたが、

「いや、一昨日その、あの劍劇の間でやつた唄ですな。あゝいふのが僕は好きなんですが、……」

「あ、あの、「父を尋ねて」ですか。あれはよう御座いますね。」と、云つて、徳枝はもう臆面もなく、鼻唄のやうにその唄を小聲で唄ひ出した。

巡査は卑俗な、センチメンタルなその唄をぼんやり聞き惚れてゐた。そのうちにふつと彼にも職務の意識が歸つて來たと見え、ヴァイオリンを押しやつて、俄に慌てて、

「や、どうもいろいろ有難う。それではどうか、よろしくやつて下さい。私からも主人の方へ云うて置きますから。」と、云つて、そゝくさ立ち上つた　その樣子がひどく可笑しかつたので、危く徳枝は噴笑しさうになるのをやつと我慢して、

「どうもほんとにとんだ御迷惑をかけまして。」なぞと、蓮葉に云ひながら、彼を送り出していつた。

徳枝は階段のところまで送つていつて、氣輕に先刻の唄のつゞきを唄ひながら又座敷へ引返して來たが、到頭腹を抱へて、

「ほゝゝゝ。可笑しな巡査さんもあるもんねえ。子供々々してゐて、ほんとに可愛らしいぢやないの。」と、いふ。

翠波はそれを抑へて、

「しッ。聞えるぢやないか。いや、實に善良ないゝ警官だよ。實際愛す可き青年だ。」と、彼もにこにこしてゐたが、急に彼は顏色をかへて、さも苦しさうに胸を抑へる。

徳枝は炬燵のところへ突立つたまゝ、

「あら、あんた、どうしたの。又差し込むの。」

と、眉を寄せたが、翠波は、そのまゝ氣狂ひのやうにぴよいと突立つて、いきなりばたばた廊下の方へ驅け出していく。何をするのかと思つて、呆氣にとられてみてゐると、彼はその足で便所の方へ驅け下りていつた。

徳枝はきつとあの人便所がつかへてゐたのよと心の中で可笑しく思ひながら、やがてヴァイオリンを又片づけて、茶道具はそのまゝ火鉢の傍へ押しやつて、炬燵の中へごろりと横になつた。そして先づまあ、よかつたと思つてほッとした。

便所の方では、翠波がしきりに咳き入る聲が聞えてゐたが、徳枝は別に氣にもしてゐなかつた。天井の節穴を見上げてゐると、彼女の胸には又島田のことがいつともなく歸つて來た。

・・島田はりうとした縞のモウニングを着て、宇都宮の萬歳館のステーヂへ立つてゐた。彼はいつも映寫をはじめる前に一度スクリーンの前へ立つて明るい照明の中で一場の挨拶をするので、その晩も、てかてかした禿頭を光らせながら得意の辯舌を揮つてゐた。彼はもとからその愛嬌が賣りもので、一寸場違ひな英語なぞを入れるところが又觀客の氣に入つた。徳枝はボックスの中から彼の顏を見上げてゐたが、彼女はその顏をみてゐると叔父さんと呼びかけたくなるほどの親しみを覺えた。彼の癖で、兩方の手をズボンの前ボタンのところで始終からみ合はしては、言葉の調子をつけてゐるのが、徳枝には何んとなく可笑しかつた。あの人に色氣があるのか知ら。若し二人になつたら、どうであらう。さぞ柔らか調子で殺し文句の百萬遍も云ふだらうと思ふと、徳枝は實に可笑しかつた。

あの島田が白河の宿ではでれりとした顏をしていきなり自分の手を握つたのである。もつと何んとか形のつけやうもあるだらうに、いきなり變な顏をして摺寄られたんでは、此方がてれてしまふ。もしあの時、もつとうまく持ち懸けられたら、自分だつてきつと厭とは云へなかつたであらう。どうせ旅先ででもなければ、師匠なんかに口説かれることなんかありッこないんだから。さうしたら、今頃はどうなつてゐるだらう。・・・・

そんなことを空想してゐる間に、翠波はどたりどたりと重い足音をたてながら裏階段を上つて來た。座敷へ入つて來るのをみると、いたいたしいほど息を切らしてゐて、顏色はまるで死人のやうだつた。

德枝は默つてもゐられないので、

「ねえ、あんた、どうしたの。お腹でも通したの。」と半分起き上つて云つたが、翠波はもう崩れるやうに寢床の中へ倒れ込んで、肩で息をしながら、

「いや、何しろ眼が廻るんでね。」と、生唾を呑んで、「ねえ、君、氣の毒だが、僕のスーツケースの中から美音錠を出して吳れないか。あれでも飮んだら。……」と、云ひ云ひ枕の方へ、額を押しつけてしまふ。

德枝は押入の中から、彼の古びたスーツケースを出して來て、その中から小壜に入つた美音錠のボンボンを出して、壜ごと彼の枕許へもつていつてやつた。

翠波はそれをわななわな慄へる指先で取り上げて、栓をあけて、二つ三つ口の中へ入れたが、その時に、ふつとみると、彼の口尻のところには何うしたのか、眞紅な血が紅でも含んだやうに、少しばかりくツついてゐた。

德枝は吐胸をつかれて、

「あら、あんた、何うしたの。血でも吐いたんぢやないの。」と、みるみる眉を顰めたが、さう云はれると翠波は慌てて舌苔の一杯くツついた舌の先で口のまはりをべろべろ舐め廻して、一層蒼白な顏色になりながら、

「いや、我々の、我々の、商賣の人間は、血位吐くの珍らしくないよ。かう咳が出ちや喉が堪らないからね。」と、云つて、肩でぜいぜい息を引きながら、「ねえ德ちやん。僕まさか肺病ぢやないんだから、安心してお吳れよ。さうならさうとはつきり云ふから。……喉が痛くつてね、ほんのほんの少しばかり血が出たんだ。……」さう辯解するやうに呟いて彼は無理に笑はうとしたが、彼自身が既に極度の不安と、恐怖に襲はれてゐるとみえて、その顏は妙に歪んで、強張つて絶望的な物凄い表情になつていくばかりだつた。

德枝は默つて、彼の顏をみてゐた。羽毛を拔いた鳥の肌のやうな彼の喉首がひくひく動くのをぢいつとみてゐる彼女の眼にはもはや一點の同情もなく、まるで穢いものでもみてゐるやうな冷刻な殘忍な嫌惡の色が露骨に現はれてゐた。

五

その晩、德枝はもう早くから寢てしまつた。お常がいつものやうに、二人の寢床をぴつたりくツつけて敷いていつたのを、德枝は態と自分のだけ窓際へひいていつて、その間に火鉢を置いて寢た。床の中へ入つてみると、底冷えがして耐らないので、彼女はもう一度起きて、炬燵の火を直して、それへ男のやうに兩足を踏懸けて寢た。さうしなければ、下腹がしくしく痛んで眠れさうもないのであつた。

德枝は眠れないまゝに、又いろんなことを考へ出した。翠波が吐血をしたのをみてからは、もう彼女の氣持は一變してしまつてゐた。彼女はいくら翠波が辯解しても、もう彼の病氣が何んであるかといふことはよく分つてゐた。

翠波がそんな咳をしだしたのは、今年の夏頃からであつた。喜樂館にゐる時分から樂屋へ入つていくと、彼は輕い空咳をたてつゞけにやつては、あとでがぶがぶ湯茶を飮んで、それを紛らかしてゐた。時々は熱ッぽい潤んだ眼つきをして、錠劑にした賣藥を飮んでゐることなぞもあつた。併しいづれも藥を使ふ商賣同士なので、一人としてそれを氣にするものはなかつた。或

時なぞは說明をしてゐる間に咳嗽が入るので、樂屋でそれを聞いてゐた弟子達は、「いよいよ大將。毒が喉へ來たな。」なぞと笑談を云ひ合つて、くすくす笑つてゐた。

　翠波は秋口へ入つてから滅切り肉が落ちて來た。それでも食べるものはどしどし食べるし、元氣なぞもさう衰へないので、徳枝は別に何んとも思つてゐなかつた。口の匂ひがアセチリン瓦斯のやうな臭氣をもつてゐるのが厭ではあつたが、それは胃が惡いせゐだと思つてゐた。一緒に泊るやうな場合でも、あんまり彼の體が溫かいので、冷性の徳枝は却つて羨ましかつた。漸々時冷え込んで來るのに、此の人はまあ何んて溫かいんだらうなぞと云つては、それを口說の種にしたことさへあつた。

　併しもう今日になつてみると、彼が肺を冒されてゐるらしいのは、火を睹るよりも明らかであつた。さう思つてみると、一々思ひ當ることばかりであつた。肺の惡い人間は、よく指の先が丸く膨れてゐるといふが、翠波もやはりさうであつた。それに頰の肉がげつそり落ちて、頰には細い毛細管が葉脈のやうに浮いてゐた。一つとしてその恐ろしい病氣の徵候でないものはなかつた。

　徳枝はさう考へて來ると、底の知れない不安と恐怖に襲はれずにはゐられなかつた。何うして今の今までそれに氣がつかなかつたらう。これだけ證據が揃つてゐるのに、自分は今迄何んだつてうつかりしてゐたのであらう。病氣のことに對しては可成りに神經質な自分であるのに、そんなことは思つてもみなかつたのが、實に不思議であつた。それが又一層の不覺であるやうにも思へた。彼女はさうなると、もう自分にも恐ろしい結核菌が取憑いて、體中の血の中にうぢやうぢや泳ぎ廻つてゐるやうな氣がして、ゐても立つても堪らなかつた。口の中にも黃いろい膿汁のやうなものがねちやねちやねばりついてゐるやうで、喉はいりつくやうに渇いて來る。胸から肩先へかけて、むらッと熱くなつて來て、彼女は不知不識の間に、兩方の手足が我にもなく宙に慄へて來るのであつた。

「あゝ、厭だ、厭だ。何うすりやいゝんだらう。」

彼女はづきづき體中を突ツつき廻されるやうな堪らない心持がして、身悶えするやうに、何遍も何遍も寢返りを打つた。その彈みに、ふつと咳が出たりすると、今度は體中がびんと硬直してしまつた。

　それと同時に、徳枝はもう矢も楯も耐らないほど東京へ歸り度くなつてきた。東京へ歸つて、もう上野の停車場からすぐに病院へ驅けつけて、信賴の出來るお醫者樣にすつかり體を診察して貰ひ度かつた。

　それにしても、一體自分は何ういふ氣で、今迄こんな翠波のやうな男にくツついて歩いてゐたのであらう。自分はこの男に少しでも惚れてゐたのであらうか。翠波は講士の中では、いゝ男として評判の彼であつた。小生意氣な弟子達は逢つてゐもしない癖に、文豪尾崎紅葉先生にそつくりだなぞと云つて、彼を煽いでゐた。翠波自身もその氣でゐるらしかつた。色が淺黑くて、きりつとしてゐるので、徳枝は初めて逢つた時から、いゝ男だなとは思つてゐた。併し變に氣障で、樣子振つてゐて、自分には何處か好かないところがあつた。

　それでも初めて紅葉軒といふ近邊の支那料理屋へ飯を食ひに連れられていつて、その歸りに津守の小待合で譯もなく出來合つてしまつた時には、彼女も嬉しいなと思つた。少なくとも彼が後楯になつてついてゐて呉れゝば、何んでも何かと便利だし、それに時々はお小遣ひもせびれた。

　一度關係が出來てからは、徳枝も隨分我儘を

ぶつた。甘つたれるやうにしてやると、翠波はすぐに長兵衛になつて、大概の無理は聞いてくれるので、それが何んだか嬉しいよりも面白かつた。時々は自分でも馬鹿々々しいとは思ひながら、いろんな手管もつかつた。狡ッ辛いやうでゐて、何處か氣の弱い翠波の氣性もその間に、彼女はすつかり呑み込んでしまつた。

　その時分にはさうは云ひながらもたしかに少しは惚れてゐたやうな氣もするのであつた。その證據には、徳枝も彼のいふことだけはよく聞いた。そして從順であつた。それに薄寒いボックスで、巧みな彼の説明を聞いてゐるうちに、ぼうッとするやうなこともあつた。翠波は自體情緒もので賣り出した男なので、悲しい戀の場面の説明なぞは手に入つたものであつた。つい前の晩に、徳枝の云つた殺し文句なぞをふッと説明の中へ織込んだりして、見物を泣かせたりするのを聞いてゐると、徳枝は無上に嬉しかつたものであつた。

　併し今から考へてみても、徳枝は決して彼に心から惚れてはゐなかつた。その場その場の感情は何う動いたにしても、自分から進んで彼の爲めに苦勞をしようと思つたことなぞは唯の一度もなかつた。何も彼も先樣任せで、唯水のやうに一つ溝を流れて來たに過ぎなかつた。それに時も經つてしまつた。だからかうなつてみると、考へれば考へる程、馬鹿々々しいやうな氣がして、一方からいふと變に翠波が憎くさへあつた。今すぐに別れてしまつても、別に悲しくもなければ惜しくもないのであつた。殊にこんな切迫つまつたトヤをしてゐる際に、彼が俄にいまはしい吐血なぞをしたのであるから、徳枝が殘忍な氣持になるのも決して不自然ではなかつた。

「それにしても、何うしたら自分はこの男の傍を遁れることが出來るであらう。」徳枝は冷たい枕に頰を押しつけて、そればかり考へだした。自分の財布には、今たつた七八十錢しか殘つてゐないのであるから、たとひ此宿はうまくドロンだにしても、東京までの旅費の算段がつかない。これから電報でも打つて、自分だけの旅費を呼ぶにしても、それを頼むあてがなかつた。さうなると、徳枝はせめてあの深井の方でもうまくつないで置けばよかつたと、しみじみ口惜しくなつて來た。あの甘い男であるから、旅先から二三本繪葉書でも出して置けば、まさかの時には二十圓位な金は何んとかして呉れるにきまつてゐる。自分は何故それをやらなかつたのであらう。手間も隙も入る話ではないのに、何んだつて不精をしたのであらう。自體、翠波と出來てからは、妙に他の男にかゝづらふのが、億劫になつて、あれからはもうちつとも音信をしなかつたのが、今になつて考へてみると、飛んだ不覺であつた。一人二人なら何うにでもなつたのに、全く惜しいことをしたと思ふと、徳枝は自然と深い嘆息が出て來た。下の病氣にかかつてからは、實際徳枝は浮氣心が動いて來ないのであつた。

　徳枝は闇の中でぽつかり眼を睜いて、

「あッ、島田先生！」と、思はず口の中で叫んだ。

明日の朝早く、翠波には知れないやうに、あの島田先生のところへ電報を打つたら何うだらう。詳しいことは云つてやらなくても、もう先方では事情をよく知つてゐるのであるから、ひよつとかしたら金を送つて呉れやしまいか。あの先生は仙臺を立つ時に、二百圓といふ大金を投げ出していつた位であるから、東京までの旅費位ならいつでも電報爲替で送つてよこすだらう。

「さうだ。あの島田先生に！」と、前後の考へもなくさう思つた時に、ふと戸外では何か變な聲がした。

徳枝はそれに氣を取られて、思はず聞耳をたてたが、それは階下の工事小屋に飼つてある例の鳥がふいに夜啼きをしたのであつた。

徳枝は脊筋がづうんとするやうな感じがして、變な〃騒ぎに襲はれながら、

「つッ、仕様がないねえ。又あの烏奴、啼いてやがんだ。幸先の惡い。」と、やけに呟いた。それと一緒に彼女の眼には、夕陽の紅つぽくしぐれた中で、眞紅な創口のやうな口をあけて餌をたべてゐたあの物凄い眞黒な烏の姿がまざまざと暗闇の中にみえて來た。

それから間もなく、今度は又戸外で、だしぬけにガラガラッ」と何かものの崩れ落ちるやうなえらい物音がした。徳枝は生憎うとうとッとしかけた時であつたので、思はず枕から頭を持上げる程吃驚したが、それと同時に、階下の廣場の方ではわあッと恐ろしい鬨の聲が起つて、醉つた男達の聲が何ごとか盛んに罵り合ひ出した。何をいつてゐるのだか、何をしてゐるのだかさつぱり分らなかつたが、唯ガアガア喚き合つて、時々は木箱でも蹴散らかすやうな荒つぽい音がする。それは何んでも三四十人もゐさうな大勢の聲で中には女の金切り聲も交つてゐた。

徳枝は息を殺して聞耳をたててゐたが、これは唯事ではないと思つた。きつと又下の工事場で、土工達が酒に醉つて喧嘩を始めたのだらうと思ふと、徳枝はぢつとしてゐられなかつた。

しばらく聞いてゐると、何んでも日本人の土工達が、朝鮮人の小屋へ何か返報でもしに來たやうな様子であつた。朝鮮人の方が多勢なので、譯の分らぬ朝鮮語で喚き合ひながらしきりに氣勢を添へてゐた。日本人の土工の方はひどく醉つてゐるとみえ、云ふこともしどろもどろで、ひどく旗色が惡いらしかつた。それでも中には、シャベルや、スコップのやうなものでも振り廻して、阿修羅の如くに狂ひ廻つてゐる奴が二人三人ゐて、その男達の聲はひと際鋭く聞えて來た。皆それにあふられて、もう無我無中で暴れてゐるやうであつた。小屋の軒先を叩ッこはすやうな物音や、息せききつて組んづほぐれつ揉み合つてゐるやうな聲までが物凄く聞えて來た。

そのうちに若い男の聲が、魂消るやうに、

「あッ、痛えッ、斬りやがつたな、こン畜生ッ。」

と、叫んだかと思ふと、急に四邊が陰慘として來た。

徳枝は誰れか殺されたなと思ふと、ぞうッと體中に鳥肌だつて來た。今のあの聲ははつきりはしてゐたが、たしかに深創を負つた絶叫に相違なかつた。さう思ふと、思ひなしか呻き聲が恐ろしく聞えて來た。實際戸外ではそれからひどくざわついて來て、なほ一層騒ぎが殺氣だつて來たのであつた。小屋までも叩き潰しかねまじい勢で、雙方わッわッと叫喚しながら、無二無三に大格闘を演じ出した。必死な絶叫や、呻き聲の様子では又四五人は斬られたか、突かれたかしたらしく、荒くれた土工達が血みどろになつてのた打ち廻つてゐる有様が眼にみえるやうであつた。

何を投げるのか、時々宿の板羽目や、雨戸へもガチリガチリと石のやうなものが飛んで來て打衝かつた。その都度に徳枝はひやりとして、首を縮めたが、もう聲を聞いてゐるだけでもぞくぞくするので、彼女はいつの間にか夜着の中へすつぽり潜り込んで、息を凝らしてゐた。

騒ぎの鎮まつたのは、それから小半時ばかり經つてからであつた。町の人達や、警官達が集まつて來て、やつと雙方取鎮めたらしかつたが、徳枝はもう懼えて、顔を出さなかつたので、何が何うなつたのかさつぱり分らなかつた。警察へ引かれていつたものも多勢あるらしかつた。

騒ぎい清んで、ひとしきり四邊がしいんとすると、やがて階下の帳場のボンボン時計が寝ぼけたやうな聲で、十二時を打つたのがかすかに疊を傳はつて響いて來た。

戸外では物見高い野次馬がこの寒いのにまだそこいらを立ち去らないとみえ、ぶつぶつ何か話し合つてゐるのが、吹く風に乘つて寂しく聞えてゐた。風で動く障子の面には、提灯の光らしいものが、雨戸の隙間からちろちろ映つて來たりした。

徳枝は氣がたつて、中々眠れなかつた。

六

……とみると、何うしたのか、徳枝はいつの間にか、高い草土手の上へ體を固くして腹ン匍ひになつてゐた。眞青な草いきれがむんむと匂つて、刺々した草の根が素肌の下腹のあたりに氣味惡く感じられた。餘り體をすくめてゐるので、肩にはひどい凝りが來て、彼女は息をするのにも痛苦しかつた。

空には雨雲がどんよりと一面に垂れ下つて、日の光さへ見えない。眞青な草が眼路の限りにふかぶかと生えてゐるなから、吹く風は妙に冷々と濕つぽかつた。

徳枝はふと考へた。

「自分は一體何處にゐるのだらう。」たつた今しがたまで館のボックスでヴァイオリンを彈いてゐたのに、何處へあの樂器を落して來たのだらう。

「はゝあ、自分はロケーションに來てゐるんだな。」彼女は何んといふ譯もなくそんなことも思つてみた。すると、彼女は急にぞうッとして來た。

と、草土手の彼方では、「キャラバン」のオーケストラが、細く刻むやうなリズムをふはふはと此方へ流してゐる。あの漂渺とした樂曲が、どうしたのか、彼女には耐らなく悲しげに聞えて來る。なるほどヴァイオリンの數が増えたせゐだな。いつの間にあんなに樂士がやつて來たのだらう。自分も早く行つて彈かなけりやならないのではあるまいか。

徳枝はそうつと頭を擡けて、土手のうへから向うを覗き込んだ。と、その土手の向側は急に落ち込んだやうに斷崖になつてゐて、眼が眩むやうだつた。その下には一面の眞青な馬場がはるかに展けてゐて、とみると、フロックコートをしやんと着た英國紳士のやうな男が馬に騎つて、同じやうな恰好をして、幾人となく右往左往に入亂れながら疾驅してゐる。青草は縱横に薙ぎ倒され、砂塵は白つぽく陽炎のやうに地に個つて、幾頭となく馬の脚は宙を飛んでゆく。騎つてゐる男達の顔は皆のやうに白茶けて、山高帽子は今にも飛び脱げさうで、彼等はもう氣が狂つたやうに無我夢中で手綱を操つてゐるらしかつた。その中にはダグラスのやうな顔をした西洋人もゐれば、コールマンのやうな男もゐた。バーセルメスもゐれば、リチャーヅもゐた。一番可笑しいのは、その中に島田光波が混つてゐることであつた。彼は苦蟲をかみつぶしたやうな生眞面目な、しかも何處か悲壯な顔つきをして、徳枝が覗いてゐるのなぞはもう眼中にないやうに、一生懸命になつて芝坪を踏んまへてゐた。サラが眞白に光つて、馬が前脚を高く踏み上げる度に、彼は聲は立てずに、口だけで悲鳴をあげてゐるやうであつた。

一體何うしたことなのであらう。

徳枝はいつか、何處かでこんなノキルムを見たことがあるやうだなと思つた。彼女ははらはらしながら島田の馬ばかり眼で追つてゐた。その端、彼女自身は今にも前の斷崖が崩れ落ちさうで、もう恐くて恐くて耐らないので、兩手でしつかりと草の根をつかんでゐた。手の指は汗

でにちやにちやしてゐた。

そのうちに、何處か高い空の彼方で、カアカアと二聲ばかり鳥が啼き渡つた。しいんとしてゐるので、その聲は突きぬけるやうに鼓膜に響いて來た。もうほんとにいゝ加減にすればいゝのにと、忌々しい氣持で聞いてゐると、やがて突然に、德枝のすぐ鼻の先を掠めて、それこそ飛行機ほどもあらうかと思はれる一羽の奇怪な鳥が、紅い口を一杯に開いて、さツと眞黑な風のやうに翔り去つていく。その羽搏きのあふりをくらつて、德枝は息が塞りさうになつた。

はツと思つて、德枝は首を縮めたが、その鳥はやがてそのまゝ大きな圓を描きながら、馬場の上空を非常な速さでぐるりぐるり旋回しはじめた。或時は點のやうな高さにまで飛び上つたり、さうかと思ふと、颯と逆落しに舞ひ下つて來て、馬場の青草のうへに白々と風路を開きながら平地とすれすれに飛び去つていつたりする。その度に疾驅狂奔してゐる馬はいづれも懼えたやうに前脚を上げて丈一杯に躍り上つた。馬は青銅の肌のやうに光つてゐた。

德枝は何うしたのか、急に悲しくなつて來た。何かなしに胸はぎうツと喉のところまで込み上げてきて、涙がぼろぼろ頬を傳はつて流れ落ちて來るのが、自分にもよく分つた。彼女は何も彼もちやんともう知つてゐた。あの氣味の惡い鳥が丁度眞上の空へ來懸つた時には、その下に當つた馬上の人は必ず自殺しなければならない宿命をもつてゐるのだ。いつもかういふ場合にはさうであつた。

今日は誰れの番であらう。この陰鬱な曇り空の下で、悲しく自殺を遂げるのは誰れであらう。あんな立派なフロックコートの死出の禮服を着て、あんな綺麗なカラーをつけて。……

その途端に、馬場の眞中のところでは、拘攣つたやうな、汗ばんだ聲が、

「ヤツ、しまつたツ。」と、絕叫した。

悸乎として眼を据ゑると、そこには一頭の栗毛の馬がつくねんと佇んで、その鞍上からはだらりと黑いものがぶら下つてゐた。それは思ひもかけない島田光波で、彼は鞍から眞逆樣に吊下つて、片手にピストルをぎらつかせながら、もう觀念したやうに眼をはつきり瞬つたまゝ死んでゐた。フロックの上着はぬけかゝつて、禿げた彼の頭は地面へ屆きさうになつてゐた。

鳥が空中でカアと事もなげに啼いた。……

德枝は心臟が今にもはち切れさうに縮むので、その時、我にもなくはツと眼を覺ました。

「あゝツ、夢だつたのか。」と、思ふと、彼女は引く息と一緒に渾身に冷水を浴びせかけられたやうなショックを感じて來た。手足はすつかり硬直して、心臟の鼓動は脊筋から五體の節々にまでづしんづしんと響き渡つてゆく。意識がはつきり歸つてみると、彼女は體中にびつしより盜汗をかいてゐるのが分つて、身動きをするのも氣味が惡かつた。

と、その時、眞暗な中からは翠波のしや嗄れた聲が、

「德ちやん、德ちやん。」と、呼んでゐる。

德枝は仰向けに寢たまゝ、もうぐつたりとしてゐたので、餘程返事をしてやるまいかと思つたが、あんまり翠波が煩く呼ぶので、邪險に、

「何よツ。」と、怒鳴る。

と、翠波は枕をぎうツと鳴らして、

「ねえ、德ちやん。君、何うしたの。先刻から大變にうなされてゐたぢやないか。僕、泣いてるのかと思つた。」と、妙に優しくいふ。その聲は德枝のすぐ枕の側で聞えて、彼女は自分の夜着の中へ入つてゐる翠波の手をそれとなく感じた。

德枝は又引彈くやうに、

「私、泣いてなんぞゐやしないわよツ。」と、云

つて、ごそりと寢返りを打つてしまつたが、翠波の手はそれを追つて來て、彼女の肩のところへ觸る。
徳枝はまるで駄々ツ兒のやうに、
「いやよッ、いやよッ。」と身を揉んで、それを恐ろしい勢で振切らうとしたが、それでも翠波の手は執念く追つて來るので、徳枝は到頭がばと彈ね起きて、さも憎々しげに、
「何をすんのよッ、ほんとに私、厭だツたら。病人の癖に、しッこいッたらない。」と、舌打ちをしながら云つて、今度は自分の臥床をずるずる力一杯に引摺つて、ずッと遠くの紙襖の方へ持つていつてしまふ。長火鉢へ、蹴躓いたので、鐵瓶が大きな音をたてて躍り上つた。
翠波は變に鼻を鳴らして、
「いや、徳ちやん。さうぢやないんだ。さうぢやないんだよ。僕、今しがた君のうなされる聲で眼を覺ましたら、もう何んだか急に寂しくなつちやつてねえ。何か君と話をしようと思つただけなんだよ。」と、痰を切つて、臥床の中でもぞりもぞり音をたててゐる。
徳枝はそのまゝ夜着をすつぽり引被つて、
「もう默つてお寢なさいつたら。夜中に冷えると、又明日になつて血を吐くわよ。」と、當て付けるやうに云つた。
翠波はそれでげそりとして默り込んでしまつたが、今度は悲しさうな聲で、
―ねえ、君、徳ちやん、君と初めて、そら、津守の琴月へいつたのは、ありやたしか今年の二月の十一日、さうさう、紀元節の晩だつたねえ。寒い晩だつた。たしかあの晩、坂町に火事があつたね。それで歸れなくなつて泊つちやつたんだつけね。」と、いつて、嘆息をついて「あの晩は封切りで、さうだ、「地の涯まで」だつたねえ。君がヴァイオリンのソロでつけて呉れたんだ。思ひ出すよ。さうだ、クライスラーの子守唄のやうなものだつた。大變に出來がよかつたんで、僕が紅葉軒を奢つたんだつたね。……」
徳枝は返事もしなかつた。
翠波はそれからも一人で何かぶつぶつ思ひ出話をしてゐたが、徳枝がちつとも返事をして呉れないので、少時すると諦めたやうに默り込んでしまつた。そして頻りにぜいぜい喉を鳴らしてゐたが、やがて又耐らなくなつたやうに、悲しげに、
―ねえ徳ちやん。君、寢ちやつたのかい。おい、起きてるのかい。ねえ、君、後生だから何んか云つてお呉れよ。何んかさ。ほんとに後生だからさ。……と、聲を慄はしながらいふ。
徳枝はもうすうすう態とらしい鼾をかいてゐた。
翠波は又默つて心細げに喉を鳴らし出した。初めは息遣ひが苦しいのだとばかり思つてゐたが、漸次聞いてゐると、それには抑揚があつて、時々ぐらッと込み上げて來るやうに喘鳴が高まつては、ぷッつりと止んでしまふ。かと思ふと、又せかせか刻むやうに息をしだして、歯をしつかり喰ひ緊つてでもゐるとみえ、痙攣するやうな嗚咽は鼻の方へ洩れていつた。
徳枝は身慄ひが出さうな厭な氣持になつて、
―あの人、泣いてるんだよ。見ッともない。きつと死ぬのが恐いんだよ。」と嘲るやうに心の中で呟いた。

七

徳枝が二度目に眼を覺ましたのは、もう曉方であつた。何時間かそれでもうとうと眠りつゞけたので、彼女はいくらか心持も落着いてゐた。
そうッと眼を瞬けてみると、建付けの惡い雨戸の隙間からはほの白い曉の光が幾筋となく射し込んで、障子の面にうすぼんやりした縞を

描いてゐる。戸外ではまだ昨夜の寒風が吹いてゐるとみえ、雨戸はことことと鳴つて、冷たい風が息をするやうにすうッと吹き込んで來て、德枝の顏や肩先へ滲み渡つていく。

炬燵の火も消えてしまつてゐるので、德枝は下腹が板のやうに冷え込んで、便所へいき度くて耐らなかつた。折角寢溫つてゐるのにと思つて、わが身ながら腹がたつたが、どうしてももう我慢が出來ないので、彼女はむくむくと起き上つた。

とみると、翠波は宵とは變つて紙襖の方を枕にして、夜具の中へ海老のやうにちぢこまつて、ぐつすり寢入つてゐる。もう咳もしずに、彼は前後も知らず熟睡してゐるらしかつた。

德枝は成る可く音を立てないやうに、足音を忍んで階下へ下りていつた。

用を足して、手を洗はうと思つて手洗場の硝子戸を開けると、戸外はまだ暗かつた。雪の薄白く殘つた庇間から吹き込んで來る風は、氷のやうに冷たかつた。隣りの家の屋根のうへにはほんのり蒼ざめた曉が催して、何處もかもまだしんと寢靜まつてゐる。

手洗場の向うは通ひの路次になつてゐて、低い板塀のつゞきには不態な鷄小屋が建つてゐた。何の氣なしに伸び上つて覗くと、その先は何うやら吹きッ曝しの工事場の方へ出られるやうになつてゐるらしかつた。

德枝はその時、ふッと心が動いた。さうだ、こここからこッそり忍び出れば、分りッこないではないか。さう思ふと彼女は頭の頂邊から足の爪先までさッと電光のやうな感じが走つて、もう決心は立ち處に極つてしまつた。さうだ。こんなうまい脫出口が眼の先にあるのに昨夜はあんなに考へても、何うして氣が附かなかつたのだらう。こゝから遁げてしまへば、誰れに見付かるでもなし、何も彼ももう譯なしだと、彼女はさう思つたのであつた。

さうなると、德枝は自分でも不思議に思はれる位、頭腦がはつきりして來た。何から何までが極めて用意周到に考へられた。機會は今だ。今を措いては、もう二度と再びかういふいゝ機會は來ないのだ。さう覺悟をきめると、彼女は胸騷ぎはしながらも、急に氣が勇んで來た。

德枝はその硝子戸は開けッ放しにして置いて、又二階座敷へ歸つていつた。翠波は先刻のまゝ、眼を覺まさうともしない。で、彼女は先づ薄氷を踏むやうな心持で洋服に着換へた。ボタンなどは碌にとめもしずに、うへからうへからやたらと羽織つていつた。ひよつとして翠波に感づかれてはもう百年目なので、彼女は歯の根ががくがく痛むほど緊張しきつた心持で事を運んだ。洋服を着てしまふと、今度は持ちものを入れたあけび籠と、それからヴァイオリンのケースをそつと廊下まで運び出した。暗い中なので、ともすると何處かへ打衝かりさうで、彼女はやたらとひやひやしてゐた。神經はまるで針のやうに尖つてゐた。

すつかり用意が整ふと、最後の仕事が一番重大であつた。それは眠つてゐる翠波の枕の下から、財布を拔き出すことであつた。德枝は兩手から先へそうッと枕許の疊のうへへ突張つて、出來るだけ輕く自分の片膝をそこへ突いた。そして息を深く吸ひ込んだあとで、どきどきする胸を押へながら、最初は眠りの度を計る爲めに彼の枕へさはつてみた。

一氣を急いては可けない。レッレッ。と、自分で逸る氣を制しながら、いよいよ枕の下へ右の手を突込まうとしたが、曉方の寒氣の爲めに上體が耐力もなくぶるぶる慄へて來るので、全く氣が氣でなかつた。ふッと突込んだ途端に、肱が翠波の枕許に置いてあつた急須へさはつて、かちやりと音がしたので、德枝はひやりとして腰

を落すと、もう今度は腕の附根からやけに懐へが出て、手が伸びなかつた。
それでも幸ひ寧淡は眼を覺まさうともしなかつた。
徳枝は到頭夢中で彼の枕の下から、革でこしらへた二つ折の財布を引出すことに成功した。彼女は寝濕りのしみてゐるその財布を開けて、その中から十圓札を一枚ぬきだすと、それを手早く自分のポケットへ突込んで、もう用はないといふやうにすうッと素早く立上つた。
あけび籠と、ヴァイオリンのケースを、両腋に抱へ込んで、急な階段を下りることも隨分困難な仕事であつた。今度は階下に寝てゐる宿の者達に對する不安であつた。ともすると、階段全體がミシミシ音を立てるので、足を下ろす度に徳枝は肉を削られるやうな心持がした。併しもう半分は安心が出來てゐるので、しきりに氣を勵ましながらやつと階下の手洗場のところまで下りた。そして先刻態と閉めずに置いた硝子戸からひと思ひに戸外へ下りたが、その時にはもう自分でもはつきりした意識はなかつた。鶏小屋の前まで歩いてきて、彼女は初めて自分が裸足であることに氣がついたくらゐであつた。
鶏小屋の前では、尻尾のはけた、ひねッこびれたチャボがたつた一羽、クックッと寒さうに啼きながら、薄暗い殘雪の上で餌を漁つてゐた。鶏小屋と、掃溜の間の低い竹垣が倒れかゝつてゐるので、そこから出ればもうひとつ跳びに工事小屋の方へ出られた。此方側は丁度浴場の硝子戸になつてゐて、磨硝子越しにぼやけた電燈の光が雫で汚れた溝板のあたりを照らしてゐた。
ふつと足許をみると、そこには一足の下駄がぬぎ捨ててあつた。それは下働きの男のでであるとみえて、革の緒のすがつたぴたんこな、センの古下駄であつた。
徳枝は天の與へだと思つて、早速それを穿いた。鼻緒が凍ててゐて、ひどく穿き難かつたが、彼女はそんなことを氣にしてゐられる場合ではなかつた。下駄をはくと、彼女はすぐさま掃溜のうへを踏み越えて、脱兎のやうに竹垣から戸外へ飛び出していつてしまつた。
外には低い工事小屋がつゞいてゐた。すぐとッつきの一軒では、横手の泥濘のところへ木片や、洗濯ものなぞがずたずたに引散らかしてあつて、そのうへには霜が眞白に置いてゐた。軒先には何の古箱とも知れない木箱が三つ四つ引轉がしてあつて、その一つからは變な黒いものが顔を出してゐた。
徳枝は氣が急いてゐるので、おちおちみてもゐられなかつたが、あゝ、此處は昨夜あの恐ろしい騒ぎのあつた跡だなと、唯さう思ひながら、その前を急いで駈け拔けていつたが、ふつとみると、その黒いむくむくしたものは烏の死骸であつた。それも一羽ではなくて、木箱の中へ入つてゐる烏は皆叩き殺されてゐて、汚れた殘雪のうへには、血糊のくッついた黒い羽根が彼方にも、此方にも飛び散つてゐた。その工事小屋自身もよくみると、無慘に打ち壊されてゐて、鮮人の土工達は昨夜そつくりあつさと、警察へ引かれていつたとみえ、木戸は開け放されて、電燈の薄ぼんやり點つた小屋の中には人氣さへなかつた。
徳枝はそれでなくてさへもう後から追ひたてられるやうな氣持がして、セメント樽や、石材の間を右に左に駈けぬけながら、足を宙にしてやつと工事場の端れまで出ていつた。そこでヴァイオリンのケースと、あけび籠を持ち代へて、半分掘り崩された赤土の山を越え、すぐ上の鐵道線路の草土手へ、どんどん登つていつた。
彼女はもう息がはずんで、喉はからからに渇い

てゐた。少し息を强めに吸ひ込むと、鼻咽喉の奥が、空氣の冷たさで、眼にしみるほど痛かつた。

後を振顧つてみると、町の方には炊煙のやうな濃い朝靄が低く凍てついてゐた。町の家並はまだ黑々と眠つてゐて、ところどころに點つた電燈が白けたやうな丸い光環をつくつてゐた。會津屋の二階ももう小さくなつて、廊下の突當りと覺しい個所に、たつた一つ燈が瞬いてゐるのが見えるばかりであつた。まだ皆は馬鹿な顏をして寢こけてゐるのかと思ふと、德枝は態ア見ろといふやうな氣がして、そつちへ向いて唾でもひつかけてやり度かつた。

朝靄の中では、彼方此方で鷄が時をつくつてゐた。

鐵道線路は遠い切取線からぐうツと大曲りに曲つて、彼方の停車場の構内へ入つてゐた。薄白いレールには、蒼ざめた信號燈の光がちろちろ映つて、何も彼もが霜に凍てゝゐた。丘陵の彼方ではそろそろ夜が明け放れて、明るくなつた山の頂には、殘んの星を抱いたうすい薔薇色の朝雲が、帶のやうになつてひと筋長く漂つてゐた。

德枝は今度はレールに沿つて歩いていつた。さう遠くも來ないのに、あんまり興奮し過ぎたせゐか、もうへとへとになつてゐた。彼女は幾度か枕木へ躓からうとして、危く膝を踏みしめながら急いでいつた。彼女の心はもう汽車に乘つてゐた。

とある踏切を越えると、停車場の構内へ入つた。そこには貨車と無蓋車が十輛ほど置き放しにしてあつたが、そこから彼女は草土手の斜面を傳へつかまつて横に渡つて、便所の後からやツとのことで停車場の建物の前へたどりついた。正面の大時計をみると、もうそれでも午前五時四十分であつた。

停車場にはまだ誰れも來てゐなかつた。かんかん明りのついた驛員の溜りでは、二三人の驛員が何か大聲で話し合つてゐたが、その聲が天井に寂しい反響を呼んでゐるのも、朝らしかつた。時々電話のベルが消魂しく鳴り渡つて、警報機のカタカタ動く音がしつきりなしに聞えてゐた。そんなもの音までが德枝を妙に神經的に脅えさせた。併し彼女は他に乘る客が一人も來てゐないので、それが何よりも嬉しかつた。

德枝は東京行は何時に出るのだらうと思つて、そのまゝ時間表の下へ歩いていつて見た。と、幸ひにも五時五十二分といふ一番があつて、それは福島で乘り換へなければならなかつたが、德枝は何しろ一刻も早くこの町を立去りさへすればいゝので、とにかくそれへ乘らうと思つた。彼女は慌てて出札口へいつて、翠波の財布から盜んで來た例の十圓紙幣を出して、それで東京までの三等の切符を買つた。

彼女が斷髮に洋裝で、しかも下駄穿きといふ異樣な風つきをしてゐるので、切符を切りに出て來た若い驛員は怪訝な顏をして、じろじろみてゐた。

歩廊へ出ると間もなく、列車は入つて來た。鋼鐵の巨獸のやうな５２型の機關車が、シュッシュッと眞白な蒸氣を吐き出しながら、地響を打つて彼女の眼の前へ近づいて來た時には德枝はもう涙ぐましいほど胸が込み上げて來た。

德枝の乘つた三等のボギー車には一人も乘客がなかつた。明りがついてゐないので、車室の端れの方は薄暗くて見えなかつた。德枝は二つの荷物を網棚へ載せてしまふと、急に何んだか人に顏を見られるのが恐くなつて、隅の方の座席へ體ごと隱してしまつたが、列車が動き出すと、それでもおづおづ起き上つて、車窓から町の方を見下ろした。

町の方ももう明るくなつてゐた。紅茶けた軒燈の列は小さく曲りくねつて、乘込みの時に、一寸休んだ驛前の休憩所が須臾の間に後へ飛んでいつた。旅館の建物も飛んでいつた。石灰工場もとんでいつた。と思ふと、今度は一昨日まで働いてゐたあの盛榮館の屋根が靄の中にでこぼこ浮き上つてみえたが、それもほんの束の間であつた。列車は疎林の間を町の外郭に沿つて西の方へ駛つていくので、無論あの會津屋をもう一度見ることは出來なかつた。さうしてゐるうちに列車は殘雪の斑らな、水の枯れた廣い川を渡つて、雜木のしげつた傾斜地の方へ入つていつてしまつた。

徳枝はやつとほつとしたやうな氣持で、車窓を掠めて、高く低くさツさツと流れていく煤煙を眺めながら、今の自分を考へてみた。到頭うまく逃げ了せたなといふ嬉しい安心はあつても、實際は何んとなく氣が濟まなかつた。かうなつてみると、何かなしに翠波のことばかりが思はれてならなかつた。

今頃、あの翠波は何うしてゐるだらう。あのまゝまだ何んにも知らずに眠つてゐるであらうか。それとも自分がゐないのに氣づいて、ごほごほ咳入りながら方々を探し歩いてゐるであらうか。それにしても、彼は今日から先は何うして日を送ることであらう。彼の財布の中には、まだあと二十圓位は殘つてゐたやうであつたが、あれだけの金では何うすることも出來まい。それに又あのうへ吐血でもしたら、何うするであらう。彼は果して東京へ歸つて來ることが出來るであらうか。もうあのまゝころりと死んでしまふのではあるまいか。

一昨夜は、男の癖に、あんなに意氣地もなく泣いてゐた。あの人は自分が死ぬのをちやんと知つてゐるのではなからうか。—さう思ふと、さすがに徳枝は兩顳顬のつけ根がむづむづして來た。彼の爲めに自分も泣いてやらなければ、何んだか義理が濟まないやうな苦ッぽい氣持がして、彼女は洋服のポケットから我にもなく手巾を取出した。汚れた、白粉臭い手巾をみると、何うした譯か、彼女は急に眼が熱くなつて、胸がぐうッと込み上げて來て、それで口のあたりをしつかりと押へながら可笑しい程しくしく欷り上げて泣き出してしまつた。さうなると、彼女はもう留めどもなく涙が湧いて來て、泣けて泣けて仕樣がなかつた。その癖、彼女は白粉の匂ひから、ふツとコンパクトを會津屋の机のうへへ置き忘れて來たことをも思ひ出してゐたのであつた。

さうかと思ふと、徳枝は又翠波の口尻についてゐたあの血の色も思ひ出してゐた。もうあの樣子では、あの人はずうッと長いこと惡かつたに相違ない。さうするとこの自分にもきつと傳染してゐるかも知れない。自分ももとからあんまり丈夫な方ではないのだし、それに自分を育てて呉れたあの叔母も昨年あの病氣で死んでいつたのであるからと思ふと、彼女は急に胸がうづうづして來た。泣くのを止めて、口から手巾を外して、思ひッ切り力を入れて咳をせいてみると、どうやら肩胛骨の下あたりがぴんぴん絲をひくやうに痛んでくる。若しや今自分がそんな恐ろしい病氣に取憑かれたら、もうそれこそ萬事休すである。さうなると、三井の慈善病院で、餓鬼のやうに痩せ呆けて、血といふ血を吐き盡したやうな物凄い姿になつてねちねち死んでいつた叔母のことまでが矢鱈に思ひ出されて來る。いくら考へまいとしても、もう何うにも出來なかつた。

徳枝は、いつの間にかすつかり朝になつてしまつた輝かしい野山を車窓から眺めながらも、耐らないほど絶望的な氣持になつていつた。今度咳をせいたら、口から生温かい血がたらたらツと流れ出て來さうで、彼女はうつかり身動き

も出來ないやうに思ひ詰めてしまつた。彼女の眼は底光を帶びて、暗く乾いてきた。

列車が次の驛へ着くと、徳枝はふらふら立上つて、車窓の硝子戸を落した。そこは私設線への乘換驛なので、步廊には乘客も相當に待つてゐた。寶子達はその間を忙しげに走り廻りながら、聲高な岡々辯で朝の辨當や、牛乳などを賣つてゐた。

徳枝はもう恥も外聞もなく、車窓から上半身を突き出して、

「ちよいと。ちよいとツ。あの正宗の壜詰を一本頂戴ツたらツ。」と、大きな聲で叫んだ。

寶子の一人は四合壜を一本ついと差出した。徳枝は金を拂つて、首を引込めるとそのまゝ座席へがくりと腰を落して、その壜詰の栓を起して、眼を据ゑながらごくりごくり壜の口からラッパ飲みに叩り出した。

どやどや乘り込んで來た四五人連れの鐵道工夫達も、呆氣にとられたやうな顏をして此方をみてゐた。

四合壜を半分ほどひと息に呑んでしまふと、徳枝は手の掌で口を拭いて、じろりと鐵道工夫達の方を見廻したが、やがて、座席の肘掛を枕にしてそのまゝ横になつてしまつた。ゲップをする度に、彼女の顏は陰鬱になつてきて、しまひには口を力一杯に引歪めて、眼をつぶつてしまつた。彼女はさうやつてせぐり上げる涙をやつと我慢してゐるのであつた。

列車はしばらくすると又慵い鐵輪の音をごとりごとり響かせながら動き出した。寒さうな朝日の影は、眼の下にうすい淋毒性の黑斑の浸潤した彼女の頰を容赦もなく横合から照らしだした。よぼよぼした冬の蠅が一疋ぶうんと飛んで來て、彼女の搖れ動く斷髮のまはりをいつまでも離れなかつた。

歩く（六）

苫小牧から室蘭まで歩いた。室蘭ではあのコールパイアーが出來る前だつたので、町は炭運びの勞働者で一杯だつた。雪と石炭と勞働者。そして燒酎とゴケと喧嘩、その中で私は肩をすぼめてばかりはゐなかつた。何しろ、頭の毛は肩まで伸ばして、浴衣の重ね着をして、しかも女の伊達卷を帶にしてごろごろしてゐるのであるから、どうみたつて筋のいゝ風ぢやない。仲間は皆私を浪花節語りだと思つてゐた。警察でもさう思つて帳面へ上げてゐた。署長の前で、俺は早稻田の學生だと威張つてやつたら、一喝の下に馬鹿ムヘツを食はされてしまつた。癪に障るから英語をべらべら饒舌つてやつたりした。

私が無産派文藝に對して多大の同情を感じるのは、その時分の體驗が然らしめるのである。氏より育ちである。唯マルクス藥局の處方箋みたいな作品には閉口するが、あとは皆好きだ。皆より分る。但し私はそんな境涯にゐても、スェーターは着なかつたし、原理は體得しても、所謂「主義」は感じなかつた。だから原稿料や印税がうんと取れ出すと、忽ちにして藝術至上主義になつたり、享樂主義になつたり、耽美主義になつたりした。それも自分がなつたんぢやない。人がさういつたやうな御都合主義の眞唯中へすつぼりと嵌め込んで呉れたのである。體驗は相當に深刻でも、人間が甘かつたから、押せ押せで羽二重の夜具の中へ寢せられてしまつたのである。初めは手のさゝくれが引懸つたり、足のあかぎれがさつついたりして、いやに寢工合が惡かつたが、何あに馴れてみりや文壇のブルジョアジイなんて直きに板につくものである。

扇昇の話

今夜はまた滅切り寒くなつたぢや御座んせんか。あの凩の吹き荒れる音は何うでせう。あの音を聞いてゐると、もう冬がすぐ眼の先へ押寄せて來たのがよく/\解ります。あれがぱつたり吹き止んでしまふと、もう此處邊には來年の春まで溶けない雪がちらちらと降つて來るんです。

併し、かういふ晩にかうして炭火を掻きたてながら語りあかすのもまた一興ぢや御座んせんか。こんな薄穢い樂屋でも雨風だけは防げます。惡い地酒も手前共の口には結構すぎます。私は何よりかうしてあなたに話を聞いて頂くのが一番嬉しいんです。

今夜は梅之助の話を致しませう。いつも同じことばかりで御退屈で御座んせうが、どうか彼奴の話だけは聞いてやつて下さいまし。一座にや役者の出入も隨分多う御座んしたが、あの梅之助ほど變な奴はありませんでした。今でも彼奴の噂だけは皆の耳に殘つてゐます。

丁度一座が小樽をうつて、札幌の大黒座へ乗り込む手筈をきめた時でした。

小樽では鶴藏さんの「由良之助」が大當りで、割れ返るやうな入りを取りましたので、久し振りに旨い酒も飲める、着物も身のまはりのものも少しは出來るといふ景氣で、私共はもうほく/\ものだつたんです。丁度秋の初めのことでしたから、その景氣を背負つて旭川からずつと奥の方まで伸さうといふので、座頭はいつになく張切つた顔つきをして毎日太夫元や帳場まはりをして居りました。この巡業が當れば今迄の借金も濟せる。それに越年になつても、旨く小樽の枕元へをさまつてゐさへすりや遊んでゐても樂に食べていけるといふんですから、一座の意氣組みはすばらしいもんでした。

丁度千秋樂になる前の晩でした。

その晩は恐ろしい吹き降りで、年數をくつた小屋のことですから樂屋でも雨漏りがする、舞臺でも二重のうへへぽたりぽたりと滴水が落ちて來る始末なので、もう樂屋は芝居よりもその騒ぎで大混雜をしてゐました。

その最中に私が樂屋で、平右衛門の鬘を扮て居りますと、下の木戸番の老爺が妙な顔をして入つて來て、

「扇昇さん、今木戸へ變な男がやつて來て、是非座頭に逢ひ度えと云つてやすが、何うしやせう。」

と、かう云ふのです。

變な男だけぢや解りませんから、名前やら用事やらを一應聞いて貰ふやうに云ひますと老爺は首を振つて、

「それが中々云ひやがらねえんです。座頭に逢ひさへすりや解るつて云ふつきりで、實はさつきから持て餘してゐるんですが。……」

「妙な奴だね。どんな風をしてゐるんだい。」

私も妙に氣がかりになつて來ましたので、それとなく聞きますと、

「いえ、それがまた酷い風なんです。この寒さに盲縞の單衣一枚でぶるぶる慄へてゐやがるんです。」

「そりや可けねえ。また此間の奴みてえな落魄者だ。何とか旨く云つて追ひ歸しちまへ。うかうかしてるとまた飛んだかゝり合ひになるぜ。」

側で矢張り作内の鬘を扮つてゐた時之助は一

も二もなく追ひ歸さうとしました。

實はその少し前、座頭に逢ひ度いと云つて樂屋へ訪ねて來た男があつたんです。そいつは市内の方から流れて來たほんたうの破戸漢で、芝居の當りを見込んで强請りに來たのでした。さういふ目には始終逢つてゐながら、その時は一寸した手ぬかりで、その男を怒らしてしまつたので、木戸へ來ちや喧嘩を吹つかける、看板はぶちこわす、それからあと二三日といふものは御難つゞきだつたんです。

それに懲りてゐますから、座頭やそんな男が樂屋へ訪ねて來ると、もう後も振りのないやうに渡り錢を少しばかりつかんで體よく追ひ歸す工夫ばかりしてゐたんです。

で、その時も大方破戸漢がやつて來たんだらうといふので、木戸番が氣を利かしてその手も用ゐてみたんださうですが、訪ねて來た男といふのはたゞ座頭に逢はしてくれといふ許りで、どうしても歸らないといふんです。

私も初めは破戸漢ぐらゐに思つて、時助と一緒に追ひ歸さうと云つてゐましたが、漸次容子を聞いてみると、破戸漢にしちや云ふことが餘り執拗いので、少しづつ氣に留め出したんです。座頭は生憎由良之助で舞臺へ出てゐるので、樂屋がらの年寄といふので私が到頭使者に立つてその男に逢ふことになりました。それも昔なら不承知で、なることなら誰れも逢はずに歸してしまふ積でゐたのですが、私には何んだかその男が何かの用事で逢ひに來たやうに思はれてなりませんでしたので、半分は私がその役を買つて出たんです。

木戸番に連れられて半分顏を扮たまゝ、階下の樂屋口へ降りてみると、なるほど土間の隅にひとりの男がしよんぼり突立つてゐます。年は二十四五位で、濡れしほれた單衣一枚でぶるぶる慄へてゐます。私はその男があんまり見じめなので、折角腹のなかへ拵へて置いた强い挨拶も出なくなつて、

「お前さんかい、座頭に逢ひ度えと云ひなさるのは？」と、かう聲をかけてみました。と、その男はびつくりしたやうに顏をあげて、

「へえ、私で御座んす。あなたが座頭さんで？」

と流れ者にも似合はねえ立派な東京語できつぱり云ふんです。

私も不思議に思ひまして、こんな北の果てで生れ故鄕の人間に逢ふたあ珍らしいもんですから、つい人情にからまつて、

「いや、私は座頭ぢやねえが、何か用があるなら、私に云つとくれ。座頭は今舞臺なんだから。」

と、やさしく云つてみました。

するとその男は急に人懷こさうな顏をして私の顏をまじまじ見ながら、

「實は私は一寸お願ひがあつて出たんですが、座頭がおさしつかへなら誰方でも宜しいんです。」

と、そのまゝ土間の側の板敷へ腰をかけて芝居者らしい形をしながら私に一伍一什を話しました。

その男は私共と同じ役者だつたんです。なんでも磐城あたりを打つて歩いてゐる一座の流れ者で、何かの事情のため北海道まで流浪して來て、今では食ふにも困つてゐるからもし人が要るなら下廻りでも何んでもいゝから使つて貰れといふのです。かう云ふ男は二月に一人ぐらゐは必ずやつて來るので、私は又かと思ひましたが、その言葉つきや、容子が何處となくいゝので、すつかり話を聞いたあとで、私は、

「お前さんは一體何んなことが出來るんだい？」

と、訊いてみました。

と、その男は急に眞顏になつて、

「こんな見つともねえ風をして居りますからほんとにやして下さらねえかも知れねえけれど、私や前の一座ぢや二枚目でしたよ。自體云やあ女形に仕込まれたんですから、こんな面でも出しものに依つちや隨分當りを取つたこともあります。」と云つて何處そこで何をやつて受けたの、何のと、自分の今迄の當り役の自慢をはじめました。

私は初對面の人間の前で臆面もなく自分の藝を自慢するその口振が、どうも氣に入つてしまひました。からして芝居へやつて來る男は大抵自分の藝のことは云はずに、給金とか手當の話ばかり先へするのに、その男は慾氣のねえ口振りで頻りに藝の話ばかり持ちかけるのです。言ひ口ほどにや出來ないにしてもその熱心な心掛が私にやちやんと見えました。何處か見どころのある役者だと私はその時から眼をつけてゐたんです。そしてよく見ると痩せてはゐましたが、顏だちも鼻は高いし、眼は大きいし、立派に拵へさせたらなるほど二枚目どころにはなれるだらうと思ひましたんです。

で、私の一存でも返事をしかねるからといつて、明日また樂屋へ來るやうに約束をきめて、その儘私はその男を歸しました。そして樂屋へ歸つて來ると、座頭も舞臺をひいてその席、居合はせましたので私は皆にその男の話をしました。

座頭は笑ひながら少時考へてゐましたが、

「どうせこんだの巡業にや手不足なんだから一人ぐらゐ入れてもいゝが。……」と云ひました。

時之助なんぞはてんで私の云ふことを笑つて、

「又親方さんの物好きが始まつたぜ。年は老つても親方は人が好いからねえ。そんな氣の知れねえ奴を入れたあとで騙された目に逢はされないやうに要心しなせえよ。」とからかふんです。

私はひどく氣に障りましたけれど、やつと蟲を抑へて我慢してゐました。俺の眼鏡が違つたら首でも何んでも呉れて遣らあと腹んなかぢや威張つてゐましたが、併し今の素性の知れない男なんで少しは先方を怪しむ氣が起りました。

その晩はそのまゝ何事もなく濟んでしまひました。

その翌日は愈々千秋樂といふので皆は朝からざわざわさわいでゐました。この興行を打ちあけて明日はすぐ近在の大黑座を開ける手筈なので、氣の早い下廻りなどはもうそろそろ荷づくりの支度に取りかゝつてゐました。

その朝十一時までに來る約束にして置いた男は十一時になつても十二時になつても來ませんでした。何か差支へでも出來て午過ぎにしたのだらうと思つて心待ちに待つてゐましたが、夕方になつても來ません。そのうちに芝居はあく、何んの彼のと取紛れてゐるうちに夜も更けてしまひましたが、どうしたものかその男は到頭影も形も見せません。

昨夜の容子ぢやきつとやつて來るに違ひないと思つてゐたのが、かう當てがはづれてみると、私は變な氣持を起さずにはゐられませんでした。折角好い運に向いてゐるのに、それを捨てて何處へ行つてしまつたんだらう。それとも昨夜の俺のあつかひが氣に喰はなかつたのか知らん。などといろいろに考へて見ましたが、結句私は手許に入れようとしたものがいつの間にか自分の手から逃げていつてしまつたやうな殘り惜しい氣がして耐らなかつたのでした。

その翌朝、もうその男のことは忘れて愈々札幌へ向けて發たうとしてゐます、その混雜のさなかにその男は思ひがけなくひよつくら顏を

出しました。そして楽屋口で俥車の手配りをしてゐる私を見ると、突如なれなれしい聲で、

「ねえ、親方。あの話は何うなりましたらう。」

と聞きました。

見れば昨日とはまるで見違へるやうな風をしてゐるんです。木綿ものではありますが堅氣のこざつぱりした給に角帶をきちんとしめて、折目のついた袴まで着てゐるんです。私は何處までも變な男だと思ひまして、

「兎に角座頭に相談してみたら、こんだの巡業にて一人位相方らしい者も欲しいといふことだから、お前さんの心持次第で當分來てみちやどうだい。」

と云ひますと、その男は待ち構へてゐたといふやうに、

「有難う御座んす、是非ともさういふことに願ひ度えんで。」

と云つてもう座員になつたやうな顔をしてゐるんです。

私は益々不思議になつて、

「一體昨日は何うして顔を出さなかつたんだい。あれほど約束して置いたのにすつぽかすやうな了簡ぢや頼もしくないぢやないか。」

と云ひますと、

「まことに濟みません。昨日はちよいとばかり……へゝゝゝ。」

と云ひながら人の好ささうな笑ひかたをするんです。

で、到頭一座へ入れることになつて、

「おや此れから直ぐ札幌へ發つんだから、ちやんと支度をして、夕方までに大黒座へ來なさい」

と云つていろいろ先での打合せなどの話を聞かしてやらうとしますと、その男は急にそれを遮つて、

「いえ、支度といつたつて何にもありやしません。この儘御一緒に行きます。」

「だつて着換への一枚ぐらゐ持つていかなけりや先は寒さが強いぜ。さうして此方へは越年前でなくつちや歸つて來ねえんだぜ。」

「そりや承知で御座んすが、しかし持つて行くものなんざあひとつもねえんで、全くお恥かしいお話ですが此の通り着のみ着のまゝなんです」と、恥かしげもなく云つてけろりとしてゐるんです。

隨分呑氣な男ぢや御座んせんか。いくら旅あるきの役者だつて、二枚目どこになりや着換への一枚位は持つてゐる筈なんです。それに見も知らねえ私共の一座へ加入するのに着のみ着のまゝてえんですから驚いてまさあ。はゝゝ。

で、兎に角立ち際で忙しいなかでしたから、座頭や、座員にひき合はせをするのもやめて、札幌へ着いてからゆつくり取りなしてやるつもりで、下廻りと一緒に荷づくりの加勢やら、荷車の後押しやらをさせました。さうして一座はその日の午後に愈々小樽を立ちました。

札幌へ着くと、前景氣がよかつたんで、乘込みなんかも隨分彈んだものでした。久し振りで化粧馬も出す、座員一同俥で町まはりもやる、ビラはとぶやうにはけるといふので、一座のものは到頭幕開きまで眼のまはるやうな忙しさでした。

初日には序幕に三番をつけて、忠臣藏をとほしで出すことになりました。それに半値だといふので、さすがの小屋も六時には客止めといふ景氣でした。

忙しいにかまけてあの男のことはすつかり忘れてゐましたので、幕のあく間際に、皆樂屋へそろつた時を見計らつて、私は座頭へ引き合はせてやりました。

「役にも立たねえ奴で御座んすが、どうぞ宜しくお引き廻しを。」といふやうな博徒の挨拶み

達の出稼ぎはだん〳〵帰つて行つたんです。そしてその年の十一月の末になつて一座はたんまり金を残して、また小屋の帳元へ帰つて来ました。一座はそこで愈々越年の支度をしてしまひました。

その間に私はそれとなく梅之助の素性を知ることが出来ました。楽屋でごろごろしてゐる間にその身の上ばなしも出る、それからまあ女の話は私共に打明けるんですから、頗い惚気を云ふ奴もあるやうな訳で、一座の誰れはかう彼はかうと大方氏も素性もすつかり洗ひざらしになつてゐたんです。その中で梅之助ばかりはどう云ふものか、そんな話になるといつもにやにや笑つてゐるばかりで、余り自分の話をしないんです。

「お前」「俺」などと云ふ口の利ける間柄になつてからは、

「おい、梅さん。お前は腕がよささうだから罪な話があんとあるだらう。そんなに隠しとかねえで、ちつと蟲干しをしたら何うでえ。」

なんて持ちかける奴がゐても、梅之助はただ、

「俺にそんな話があるもんか。いつも女にや酷え目にあはされるばかりさ。一向面白え話もねえや。」

と云つてにやにや笑つてゐるばかりでした。

それでも梅之助は私にだけはいろいろな話をしました。殊に一杯やつてゐる時なんかには、

「ねえ、親方。まあ聞いて下せえな。私は此迄に随分悪いこともしましたが、善いこともやつてゐますぜ。」

などと云ひながら、身の上ばなしをぼつぼつやりました。

梅之助は東京の生れだつたんです。母親は浅草辺で常磐津の師匠をしてゐた女で、親父は矢張り小芝居の帳方か何かをやつてゐたらしいんです。東京を出てからもう四年になるとかいつて、今では両親も生きてゐるか死んでゐるか分らないのでした。一年に二度ぐらゐ思ひ出しちや手紙をやるが、返事の来ないところをみるともう亡くなつたかも知れない。それに母親の方はひどい喘息もちだつたから、知らない間にあの世へ行つてしまつたかも知れないなどと云つてゐました。

梅之助は子供の時分からひどく芝居が好きで、親爺の勤めてゐた芝居へはもう毎日のやうに行つてゐました。そして漸次もう心がつくに従つて、役者で飯を食つて行き度いといふ気になつて、親の不承知なのも構はず、到頭家出同様にしてある小芝居の親方のところへ転げ込みました。そこで下廻りから勤めあげて、二年ばかりの間にちよつとした役もつくやうになつたんですが、そのうちに何かの拍子で急に役者稼業がふつつりと厭になつて、到頭また両親の家へ帰つて来ました。

病身で弱つてゐる母親は梅之助が詫びを入れて帰つて来たのを幸ひに、今度は年期の堅い約束で時計屋の下職にしました。母親のつもりぢや堅気な職人に仕上げて、末始終は梅之助に懸つていからといふ腹だつたんでせう。

そこでも二年ばかり神妙に勤めあげました。並はづれて器用な手を持つてゐたんで、そこの主人にも一廉の職人になれると見込をつけられて随分可愛がられもしたんですが、持つた病の芝居好きが仇になつて、また店の隙を盗んぢや、芝居入りばかりはじめました。その上、公園のなかにある小料理屋の女と出来て、互に思ひ募つた揚句が駈落と相場がきまつて、梅之助は店の仕込みものを持つたまゝ東京を出奔してしまつたんです、

それが東京を出て北海道くんだりまで流浪して來る足の踏みだしだつたんです。その時にちよいと腹をしめてゐさへすりや、今頃は店から小さな暖簾でも分けて貰つて安氣に暮らして行けるのにねえ、あなた。さうすりや母親も安心する。當人もこんな萍のやうな賴りねえ身すぎ世すぎをして苦勞を重ねなくつたつていゝのに、そこが全く若氣の過ちなんでさあねえ。

で、一旦出奔をしてみたものゝ先に當てがある譯ぢやなし、その時には隨分酷い目に逢つたと云つてました。そのうちに女にや逃げられてしまふ、食ふものはなしといふ譯で到頭茨城の龍ケ崎といふ町で旅役者の一座へ飛び込んでしまつたんです。

彼地いらぢや此地と違つて仲間に組合もあれば、看板も割りにしつかりしてますから自分の腕次第ぢや相應に收入もあるし、稼げば十分身につくものも出來るんです。そこで梅之助も昔とつた杵柄つてな譯で隨分面白い目も逢つたらしいんです。女の出來たもその時分だとか云つて、今でも思ひ出しちやちよいちよい話しますが、その工面のいゝのが結句身のつまりで、東京へ歸るのはいつか忘れちまつて、到頭その一座から又ほかの一座、そこから又その次の一座といふ風にぐらぐら渡り歩いて、いつのまにかほんたうの旅鳥になつちまつたんです。

私共の一座へ來る前は青森にゐたんださうですが、そこでも何んか惡い女に引懸つて到頭此地まで渡つちまつたんです。人間も內地にゐる間は東京から下つて來る千兩役者の話も聞くし、またちよいちよい東京の方の噂も聞いたりして張合ひもありますが、もう一旦此地に渡つちまつたら一生浮ぶ瀨はないと云つてもいいんです。四邊を見廻したつて被さつて來るやうな役者はなし、安氣は安氣ですが實に心細うございますからなあ。さう云ふなりゆきで此地まで流れて來た私共にや梅之助の腹んなかがよく解るんです。

此地へ渡つてからはどうして暮らしてゐたんですか何んでも三日も四日も飯を食はずに山んなかをうろついて歩いてゐたこともあるなんて云つてましたから、そりや隨分お話にならない苦勞もしたんでせう。どうもあの樣子ぢやちよこちよこ賭博なんかもやるらしいやうですから、いづれそんな人間の集まるところを渡つて來たんでせう。併しその割りにや人間が素直で、惡擦れがしてゐなくつて、私にやあの男ばかりはどうしても惡人とは思はれませんでした。兎に角、皆樂屋へ寄り集まつて飯をやつてゐる時なんぞに、例の開けつぱなしな聲で笑談口をきゝながら、腹を抱へて笑つてゐる處があの男の身上でした。ものにかゝづらひのない、淡白な性質で、女で苦勞したといひつゞけてゐながら、苦勞する程執着もなささうな男でした。私はその氣性がばかに氣に入つたのでした。

兎に角、梅之助の素性はそれ位にして置いて、それから先の話を致しませう。

梅之助はさうかうして到頭一年ばかり私共の一座に居りました。その間にやいろいろな面白い出來事もありましたが、話の本筋には何にも拘りがありませんからいづれ又お話しします。

どつちかといへば梅之助は女をこしらへるのが上手で、小遣ひぐらゐ絞るのは朝飯前の仕事だといつてゐました。それはさうでせう、なにしろ年は若いし、いつでも役の上ぢや儲けてゐるし、それで女が出來なきや此方に嘘がないんです。その上私共のやうな稼業をしてゐりや、旅は旅でまた相當なところの役得があるんですから。はゝゝゝ。

併しいくら女をこしらへても他の奴と違つて

梅之助は深まになることがありませんでした。女の方からは随分頻々持ちかけて来ることもあるさうでしたが、大概のとこまで行くと、あの男は此方から見切りをつけて、離れてしまふんです。その別れ方がいかにも器用なんで楽屋うちぢや梅さんの情事は烏の行水みたいだつてんで冷評したもんでした。薄情といへば薄情なんでせうが、私に云はせりやつまり眼先が見えるんですな。それたろ熱くなりだしたなと思つて、「どうだい、梅さん、今度は少し長病らしいね。」なぞと、冷評かすと、梅之助はいつでも笑ひながら、

「なあに、大丈夫でさあ。此方の量にかけがつかねえうちに又おさらばです。」

さうして少時日数が経つてから、

「どうだい、此頃はちつともレコの噂を聞かねえぢやねえか。内々で旨くやつてるんだらう。」

といふとその時にやもう何處を風が吹くといふやうな顔をして、

「あゝ、彼女ですか。あれならもう疾うに縁ひ下げにしちまひました。別れ際はさつぱりしたもんでしたよ。」

「笑談云つちや可けねえ。つい此間ぢやねえか。手紙なんぞ見せびらかして歩いてゐたなあ。」

「えゝ、さう一處に引掛つちやゐられませんや。女なんてものは精々三ケ月の辛抱ですね。もう顔に穴があくやうになつちや駄目でさあ。」

といふやうなんです。

然しそんなことを云つてゐた梅之助が到頭どえらい女に引懸つちまつたんです。もう烏の行水も今度はほんとに通用しなくなりましたんです。顔に穴があくところぢやない、梅之助はたうとうその女に體ごと引浚はれてしまつたんです。

丁度梅之助が一座へ加入した翌年の冬でした。私共の一座は暮前に小樽近在をうろうろしてゐるのもはじまらないといふので、何處かをひと廻りしてこようといふ企てを起したんです。その時丁度都合よく港内から一座をそつくり十日だての芝居で買ひに来たので、座頭も帳元も渡りに船といふ工合で、一も二もなく引受けてしまつたんです。

その年は渡島から天塩までの海が一帯に非常な大漁で、戦争中なのにも拘らず恐ろしく景氣だつてゐるといふ噂を生野町に聞き噛つてゐたので、一座は行かない前からもうそつくり上錢を懐へ入れた氣でゐたんです。今度こそ夏以來の不入りを一度にとり返してやらうといふので、十日ぎこの芝居はその儘打つて、あとでそこいらの町々で手芝居の五つ四つぐらゐは打つつもりで、ひどく調子に乗つてゐたんです。

ところがいざ出かけてみると、目算はがらりとはづれて、買ひ出しに來た男が口から出任せを云つたことがその時になつてやつと解つたんです。なるほど魚は随分集つてゐるやうでしたが、何分露助の軍艦が近海をうろうろして歩いてゐるの、水雷が流れて来るのといふ噂が頻りに立つてゐる最中だつたので、網元でも船主でも大仕掛けに漁をするものは一人もないんです。ですから景氣のつきよう筈がないぢやござんせんか。町へ入つて見ると、てんでがらんとしてゐて、芝居なんぞに身を入れて見れるやうな人間はひとりも見えないんです。さすがに私共もこれにはひどく驚かされました。

それに座の方も散々なんです。一寸六百ぐらゐ入れる小屋があつたんですが、其れがその四五日前の嵐ですつかり屋根を吹きめくられてしまつたので、それを修繕するまで待つてゐて呉れといふんです。そして太夫元のいふにはか

ら見えてゐても芝居を開けてしまへば六分位な客足はきつとつく。表は不景氣に見えてゐても、儲け込んでゐるんだから漁師達は歩合ひの入るに任せて網を落して呉れるにきまつてゐる。それだから、狂言もなるべく海の上のものに向くやうな考へで蓋をあけてくれ、とかう云ふんです。

　私共は仕方がないので小屋の手入れがすむまでのらくらして待つことにしました。その間の雜用もすつかり太夫元で持つ話になつてゐましたんで、上等ではありませんでしたが、町でも相當な宿をとつて貰つて、そこで毎日ごろごろしてゐたんです。

　ところが其小屋の手入れといふのがいつ迄かかつても出來上らないんです。そつと普請場へ人をやつて探らせてみると、職人の入つてゐるやうなけしきはまるで見えないんです。で、何度も何度も懸合ひを入れちや見たのですが、今日はやる、明日はやるで、一向埒が明きません。そのうちに三日經ち、四日經ちして到頭中日すぎになつてしまひました。

　十日だての約定にそんなことで中日まで食はれてしまつては、とても座の方で算盤がとれる譯のものぢやありません。それで金の話になると急に素氣ない顏をして、とにかく芝居の方に興行がつかなければ動きがとれないといふのです。だから少しばかりの手金は小樽で取つて置いたんですが、中日が過ぎたら全部を拂ひをして、上り高でまた歩を出すといふやうなうまい話だつたので、あとのことはその儘にして置いたんです。

　それに太夫元といふのが餘り容子が變ですから、よく身許を洗つてみると、漁師組合の者といふのは眞赤な譃で、もと魚の仲買をしてゐた男で餘り質のよくない人間なんです。私共はその時になつてこりや一杯喰はされたなと氣ついたんですが、もう後悔してもあとの祭です。から乘りかゝつちまつちやどうする譯にもいきません。

　で、芝居の方の金は兎も角として、何よりもまづ宿屋や、そのほかの雜用だけは何うにかして取らうといふのでいろいろ責めつけてみましたが、先方に金がないんだからてんで話にならないんです。さうしてとどの詰りには太夫元といふのがお風を喰つてどろんを極め込んぢまつたんです。隨分酷え奴もあるもんぢや御座んせんか。

　跡に置き去りを食つた一座のみじめさ。こゝいらの土地ぢやかう云ふ御難は珍らしくもないんで、諦めのいゝ座頭は、

「まあ、仕方がねえ。どうせ惡奴等に比べりや俺達は運のめぐりが鈍いんだから、惡い星を背負つたと思つて諦めるさ。天道樣に申譯の出來るやうにさへして置きや又いゝ運も向いて來るだらう。下手に事を荒らだてゝ此樣な人氣の荒え土地をしくじつた日にやそれこそ命がねえからなあ。

と、きれいに度胸をきめてしまひました。

　兎に角小樽へ引上げるにしても動きがつかないので、それだけの路錢のあるまでその町に御輿を据ゑる覺悟をきめてしまひました。さうして小樽の帳もとへ無心を云つて、そこへ預けて置いた一座の道具や、衣裳を質に置いて少しばかりの金を融通して貰つて、ひとまづ息をつきました。一方では又小屋の持主に泣きついて僅かな保證金を納めて小屋の手入れをして貰ふ。宿屋の方はその日ぎりに引上げて荒屋のやうに住み荒らした樂屋へ一座二十五人、憐れな態で巣をくひました。

　曲りなりにも芝居の蓋をあけたのはその町へ入つてから丁度十七日目のことでした。もうかうなりや自棄ッ腹だからあるつたけの景氣をつ

けろといふんで、一座は道具師から鳴ものまで大車輪になつて勤めました。
　初日から三日目ぐらゐまではそれでも六七十の客はかゝしませんでした。久しく役者が乘り込まなかつたんで、平常ならもとよりすばらしい景氣だつたんでせう。併し前のやうな一件なので賴みにした入りも中日からはがらりと來なくなつてしまひました。これぢやとても算盤がとれねえといふんで一座でも智慧者の鶴藏さんや金八さんなんかが額を集めて評定をしました。こんなことをしてゐりやもう十日と經たねえうちに皆の口が干上つちまふといふ途端場ですから皆はもう一生懸命です。
　そのうちに金八さんの趣向がいゝといふことにきまつて、當て込みの戰爭物で客足をつなぐ工夫をしました。もとより臺本もなけりや、着つけもなし、道具もないといふ始末なんです。それをまあどうにか搔き集めて、恐ろしく奇妙な解題にでつちあげて看板にしたんです。もう筋も何も覺えちやゐませんが、なんでも大家のひとり息子が出征して討死をする、そこへ惡が出てきてその家を乘取る、その息子さんと許嫁になつてゐる娘と云ふのが氣丈な女で、いろいろな苦勞をしてその家を救はうとする、そこへ死んだ筈で實は軍事探偵に化けて戰地で働いてゐた息子がひよつくら凱旋して來て目出度しになるつてな筋でした。
　併し見物といふのは妙なもので、手馴れねえ新派ものにつき換へると、またぐいと景氣が持ちなほして來たんです。一日の頭數がふえりや一座の口は助かるんで、まあどうにかかうにか上錢と食ひ扶持がとんとんにいくやうなことにはなつたんです。
　その苦しいさなかに梅之助は女に引懸つて恐ろしく上血せてゐたんです。私共がそれと氣づいたのはもう出來合つてからずうつと後のことで、その頃にやあの男が今迄に見なかつた程血道をあげてゐたんです。
　女といふのは漁師町の淫賣で、もう年も梅之助よりは三つぐらゐも上でしたらう。髮の毛の薄い、何處かしほのある女でしたが、私共が見ちやまあ踏める面ぢやなかつたんです。それでも何處か息のあふ處があると見えて二人とも夢中になつてゐたんです。私はぢかに見た譯ぢやありませんが、よく舞臺で下廻りなぞが、あれが梅さんの情婦だといふのを聞いてそれとなく見る位が關の山でしたが、なんでもその女は毎晩のやうに芝居へ來てゐました。そしてかぶるとすぐ何處かへ誘ひ出して晩は大方歸つて來たことはありませんでした。聞けば女も梅之助のために年期まで延ばして貢いでゐたんださうで、梅之助もその女のためにやずゐぶん無理もしてゐるらしかつたんです。
　座頭もその時ばかりはさすがに腹を立てて幕あきに間に合はない時なぞはひどく極めつけました。そりや全く無理もねえ話で、一座が食ふや食はずでゐるのに梅之助ひとり勝手な眞似をしてゐるんですから誰だつて腹が立ちまさあ。私も時々は見るにみかねて意見をすると、その擧句はきつと口論になつてしまふんです。
　芝居の方はまた三の替りを出す頃からまるで入りがなくなつて了ひました。もう何しろ先が見えすいてゐる話なんですから、座頭もすつかり氣を腐らして、いろいろ思案をしたあげ句、到頭一座を解散することにしてしまひました。持つて來た衣裳から道具、鍋釜の類までですつかり賣り飛ばして、それで下廻りや、鳴ものや、道具方なぞにいくらかの草鞋錢を持たして勝手に何處へでも踏み出せるやうにしてやりました。中にや義理を考へて何うにかしてももう一度小樽の帳元で一座に逢ひ度いと云つて別れを惜しむ奴もゐましたが、大方は流れ者なので二三日

たつと何處へともなく散々に出て行つてしまひました。そして座頭はあとに殘つた私共代の座員六人ばかりと一緒に、夜逃げ同樣にしてその町を引拂ふことになつたんです。そのみじめた樣といつたら今々思ひ出しても涙がこぼれます。

梅之助もその六人のなかへ混つてはゐましたが、何か云ひがかりをつけてはその土地に居殘らうとしました。そして最後の相談の席で座頭や鳴瀧さんとひどく口論をして、その時こそほんとうに皆の氣を惡くしてしまひました。

私はいつもの梅之助とまるで勝手が違ふので、いろいろなだめたり賺したりして兎に角一座と一緒に小樽まで引揚げることだけ納得させました。實の話が、そんな下らねえ女に引掛つてむざむざと藝を潰すより、引き分けてしまひさへすりや跡はどうでもなると思ひましたから、座頭なんかの首尾は惡くてもさうしてやつたんです。

ところが丁度小樽へ向けて立つ前の晩になつて、梅之助はひどく醉つぱらつて樂屋へ來まして、いきなり座頭へ金の無心を云ひ出したんです。つまり給金としていくらか寄越せといふんです。餘り僻られえ話ですから座頭も腹を立ててしまひまして、一手前みてえな薄情な奴はねえ。と、いつて、一座から縁を切ると云ひ出しました。そして座頭は御存知のとほり氣の大きな男ですから、なけなしの財布のなかから幾らかの錢を纏めに投げ出して、

一俺あ義理を缺いたといはれるは厭だから、少しだが、まあ、此れだけ取つといて呉れ。そのかはりこんなことをして別れたからには手前も寢覺めはよかあるめえぜ。といつたぎりもう一言も口をきゝませんでした。

それを聞いた時にやさすがの梅之助も腹にこたへたとみえまして、しくしく泣きながら立つて出て行きました。そしてその[illegible]到頭その淫賣と一緒に何處かへ姿をかくしてしまひました。跡で聞けば[illegible]をして俱知安の方へ逃げたんだといひますが、私共はその時はまだ岩内の町に殘つてゐるものだとばかり思つてゐました。

その翌日私共は鯡を賣り込みにゆく荷船に泣きついて、やつと岩内の町を離れました。乘り込みの時とはまるで違つて、皆口もきけないほど悄氣込んでゐました。そして碌に飯も食つてゐないんで、その晩の寒さほど身にこたへたことは今迄に一度もありませんでした。

私共はそれから一月ばかりたつて小樽でやつと又旗上げの出來る體になりました。梅之助のことはそれぎりふッつりとも耳にしませんでした。

その暮も濟んで、その翌年の春には、一座は旭川に居りました。岩内で居殘つた五人のほかには一座の座員もちよく〳〵出入りして、新らしい顏もその頃はもう座に居ついてゐました。いつまでたつても變らねえのは私達で、七轉び八起きをしながら、いつでも同じ境涯で、同じ街道や同じ藝を賣りものにしては旅を歩いてゐるのでした。

旭川での興行は可成りな景氣で私共も一年越しにらしい酒も飲みました。そして珍らしく二十日の日數をうつて、今度はまたずつと奥の方までのさうとしてゐると、その時私は思ひがけもなく梅之助に逢つたんです。この稼業に落ちたものはどうせ同じやうな道を歩くもんですから、廣い世間も思ひの外狹くしてしまふんです。

梅之助に逢つたのは落合へ行く汽車のなかでした。いつもの例で荷物だけは先へ出して、體は着のみ着のまゝで乘り込むのですから、丁度先方へ着く時間と、芝居のあく時間とを見計ら

つて午過ぎに旭川をたちました。旭川をたつて少時の間は梅之助が同じ車室に乗つてゐることを少しも氣づきませんでしたが、ふとしたはずみに私は隅の方の腰掛けに坐つてゐるあの男を見つけ出したのでした。彼方ぢや私達が乘つて來たのを前からちやんと知つてゐたと見えて、態と帽子の庇を深くおろして、なるべく私共の眼につかないやうに人影へ隱れてゐました。近頃は工面がいゝと見えて、鯉口のやうになつた豪勢な外套なんかを着込んで、もみあげの恰好でみると髮も分けてゐるらしい容子でした。

私は此方から正面きつて挨拶するのも變なので、きつかけを見ながら默つてゐました。そのうちに座頭も氣づく、鶴藏さんも氣づく、顏見知りのある連中は皆梅之助のゐることを知つたので、話はだんだんと梅之助のことに引かれていつてしまひました。そしていろいろ小聲で評定をした揚句、やつぱり役者をしてゐるのだらうといふことにきまつて、話は其れからそれへ飛んでいきました。

下廻りのなかに知つた奴がゐて、梅之助のまはりにゐる七八人の連れは新派の役者だといふことが間もなく分りました。その連中のなかには女役者が三人もゐるんです。いづれももう年増で、淫賣のやうなだらしのない風をしてゐましたが、實際私共に云はせるとそいつらは大概な土地で私達の人氣を淩つていつてしまふ奴なんです。云はば仇のやうなものなんです。それに男の役者どもも大概は兇狀もちか、流れものゝ手におへねえ人間なんで、新派といふと私達はひどく卑しめてゐたもんです。ですからそのなかへあの梅之助が落ちていつたのかと思ふと、何だか惜しいやうな云ふに云はれぬ厭な氣持がするのでした。そしてあの男の氣まづい別れ際や、別れて後のことなんぞを思ひ起しながら、ひよつとしたら岩内の淫賣も、座ぢやあるまいかと思つて女役者の面を詮索してみました。しかし私の思惑はまるで違つてゐました。その女に似た顏はひとつもありませんでした。

汽車が落合へ着くと、私達は何とか一言ぐらゐは言葉をかけてみたいやうな氣がしましたが、到頭汽車を降りてしまひました。そしてふと振顧ると、驚いたことにはその連中もその町で降りるのと見えて、大きな荷物を窓からせつせと抱き下ろしながらがやがや騷いでゐるんです。そのうちに改札口のところで私達は到頭そいつらとばつたり顏をあはせてしまひました。梅之助はもう遁れないと思つたのかいきなり私のそばへやつて來て、

「親方。しばらく。」と、いつて挨拶をしました。

私はこんな氣性だもんですから例の調子で、

「珍らしいぢやねえか。さつきから實は氣がついてゐたんだが、餘り風が變つてるんで恐れをなしてゐたとこさ。一體どうしてゐるんだい。」

「いや、どうも先頃は申譯のねえ眞似をしまして、こんなとこでお目にかゝらうとは思はなかつたもんですから。」と、云ひ云ひ頭を掻いてゐるんです。

私はあの容子ぢや定めし變な挨拶をしやがるだらうと思つて内々恐れてゐたのですが、かう素直に出られてみると此方の方が變な氣になつて、

「その話はまあよしにして、一體今は何をしてゐるんだい。新派の方かね。」

「えゝ、まあ下らねえ眞似をしてゐます。」

「そしてレコは何うしたね。」

「えゝ、あいつとは疾うに別れてしまひました。」と云つて一座にゐた時のやうな笑ひ顏をみ

せるんです。

そこへ座頭や一座の連中が顏を並べたんで梅之助もたゞ、氣拙さうな顏をして、

「座頭、お久し振りで御座んす。お變りも御座んせんで。」なぞと改まつた口をきゝました。

座頭は一徹な男ですからそれに一言返事をしたきりでずんずん行つてしまひました。

梅之助の話ではそいつらの一座は落合から二里ばかり離れたある村へ打ちに行く途中なんださうでした。そして別れてから後の話もしたさうでしたが、何しろ場合が場合なのでその儘惜しい別れをしてしまひました。別れ際に、

「私は昔内でお別れした時のことは今だに忘れません。座頭に言はれた言葉は始終何かにつけて思ひ出します。」と、云つて、私共の一座が落合で打つてゐる間にぜひ一度遊びに來ると堅い約束をしていきました。落合へついてから今日は來るか、明日は來るかと思つて心待ちに待つてゐましたが梅之助からはその後到頭何の音沙汰もありませんでした。座頭はいくら彼奴が圖々しくつても一座へ遊びに來るだけの度胸はあるまいといつて笑つてゐましたが、私にはどうしても、

「今日は。」といつて、樂屋口からひよつこり入つて來さうな氣がしてなりませんでした。梅之助は確かにそんな男だつたのでした。薄情なところがあるために却つて女たんかに引懸るんだといふことが私にはよく解つてゐました。

私はどうも氣になるので樂屋へよくやつて來る郵便配達にそれとなく梅之助の一座がかゝつてゐる村の樣子をきいてみました。と、もうその時にはその一座は五日ばかりの日數を打つて入りがないので何處かへ流れて行つてしまつた後でした。

それからはまた梅之助の噂は頓と聞えませんでした。

いつぞや札幌でその一座が打つてゐるといふ話を聞いたので、ついで、折に調べさしてみると、どうしたものか表看板には梅之助の名は出てゐなかつたといふ話でした。藝名をかへてゐるのか、それとももうその一座から出てしまつたか、そこはまるつきり當てがつきませんでした。

兎に角、それから長い間、私は梅之助といふ名をきくたびにいろいろな出來事を思ひ出して、妙に懷かしい氣にならずにはゐられませんでした。今頃は何處でどうしてゐることだらうなんぞと云ひだしちや座頭によく笑はれました。二度あつたことはきつと三度あるとはよく云つたもので、私はつい此頃になつてまた思ひがけない處で梅之助に逢ひました。それが三度目の出逢ひで、そしてその別れがほんとに最後の別れになつてしまつたのでした。

それは丁度この夏の事でした。

その時の興行は巡業先の都合で苫小牧まで行つて、そこからすぐ札幌へ引上げるつもりだつたんですが、餘りめぼしい入りもなかつたので、買はれるのをつけめに到頭そのまゝ室蘭まで打つことになりました。あそこは土地の寂れてゐる割りにいつ行つても大して動きのないとこで、殊に私共の一座は座頭が三枚目で苦勞してゐた時分からすつかり賣込んであるので、その興行は初めつから安氣なものなのでした。

丁度乘り込みの濟んだ晩のことでした。帳元になつてくれる土地の料理屋の主人が樂屋へ打合はせにやつて來て、座頭や私共は夜遲くまで看板にする出しものの詮議などをやりながら話し込んでしまひました。その話がひとわたりすむと、いつも話の多い主人は自宅から[illegible]ものの料理や酒を仕出させてちびりちびりやりながら四方山の世間話に身を入れだしました。

その土地へ打ちに來るいろいろな一座の話や

其の話が段々と彈んで、座が賑やかになつて來ると、主人は突然思ひ出したやうに膝を打つて、

「ねえ、座頭。私はすつかり忘れてゐたが、實はお前さんが來なすつたら是非聞いてみようと思つてゐたことがあるんだよ。此間實は面白いことがあつてねえ。お前さん達は市川梅之助といふ役者を知つてゐなさるだらう。」

といふのです。

市川梅之助といふと何處かの興業先で一二度聞いたことのあるやうな名ではありましたが、それがどんな役者だか私共にはさつぱり馴染がありませんでした。どうかといふと優形の、顔だちのすつきりした、なかなか艶のあるいい役者だといふのですが、私共はいくら考へても一寸思ひ出せませんでした。で、座頭は私達の方をみながら、

「なあ、おい、何處かで聞いたことはあるやうな氣もするが、顔を合はせたことはねえやうだな。」

「いや、そんな筈はねえ。なにしろ當人の話ぢやお前さん達の一座に一年ばかしゐたといふ話だぜ。鶴蔵さんや、扇さんの話は始終してるんだ。」

だんだん様子をきいて見ると、それがどうも梅之助らしいんです。もうすつかり微祿してゐるのでまさかとは思ひましたが、話の様子では梅之助らしいと思はれる節が澤山あるんです。

主人はその役者が室蘭へ流れ込んでから今までの話をすつかりして聞かせました。その役者は名も聞いたことのないやうな見すぼらしい手品師の一座にまじつてつい今年の春此處へ流れ込んで來たんださうです。悪い病氣が骨に絡んだので舞臺へたつことも出來ず、鼓を一張もつて手品の前藝に唄をうたつたり淨瑠璃をやつたりしてやつとお茶を濁してゐたんださうです。

室蘭でその一座は彼是三十日あまりも打つてゐましたが、そのうちに時候の變りめがその役者にはひどく障つたと見えて、持病がどつと重くなつてしまひました。五日ばかり熱をやんで寝ついた揚句が大事な一方の手と、右の足とをすつかり利かなくしてしまつたんです。當人は僂麻質斯だと云つてゐましたが、もうその時には梅毒が脊骨へ食ひ入つて、不治の難症になつてゐたんでした。

一體かうして旅から旅を打つて歩いてゐる一座なんて云ふものは人間が皆薄情ですから、體のきかなくなつた使途のねえ役者なんか飼つとく座は一軒だつてありやしません。その役者もそんな體になつてしまつたからにや先は知れてゐます。それ迄にいくら一座のために盡した奴だつて、この社會ぢや親心で一生養ひ殺しにして置くなんてえことは到底出來ねえんですからなあ、考へて見りや心細い世渡りです。

その役者も先の興行地から歸りにやきつと迎ひに來るからとかなんとか旨い餌をくはされて到頭この土地へ置去りを食つちやたんです。一座から離れてみれば知り人はなし、身寄りはなし、それに體まで利かねえつてんですから、何うにもかうにも仕様がありやしませんや。病氣の養生はさて置き飯を食ふことも出來ねえ始末なんです。

で、主人は見るに見かねて自分の乾兒のうちへ引取らして、そこでまあ露命を繋げるやうに計らつてやつたんです。有難いもんぢや御座んせんか。見ず知らずの他人だつて義理を知つてくれる人にやこんな情があるんですからなあ。

そこで半月ばかし養生をさせて貰つてゐるうちに何うかかうか足だけは立つやうになつたんです。さうなつてみるとまさかのめのめと遊んで

思ふと、私は我慢も何もなくなつて、突如そこへいつて、梅之助を呼び起さうとしました。

「おい、梅さん、梅さん。」と、二聲ばかり呼ぶと、梅之助は夢でもみてゐるやうに薄く眼をあいて、

「誰れだい。」と嗄れた聲で云ひます。

「誰れだいつて、お前、俺だよ。」

私は顏が見えるやうに蠟燭の火を顏の近くへ持つていきますと、それでも解らないのか、梅之助は勢のない聲で、

「勝つあんか。濟まねえけど、俺あ寢起きに梅干をひとつ喰べてえんだが。……」と、夢幻でつかぬことを云ふんです。

私はもう堪へきれなくなつて、

「何を云つてるんだな。お前もう俺を見忘れたのかい。俺あ中村座の頭取だぜ。厚界だぜ。」

その聲をきくとさすがに梅之助はそれと解つたと見えまして、突如苦しさうに手足をもがきながら私の顏をまじまじみて、

「あゝ親方。」と云つたきり啞のやうに落ち込んだ眼からほろほろ涙を零すんです。

「俺今日また一座とこの土地へ來て、今宮川亭の主人にお前が途方もねえ難儀をして居るつて噂をきいて、早速驅けつけたんだが、どうでえ、體は？　しばらく逢はねえうちにえらく變れたぢやねえか。」と云ひますと、梅之助は急にきよとりとした顏になつて、

「親方、お前さんは私を連れに來たんでせう。今度はひとつ私もどうにかして體を直して一座してえと思つてるんですが、樺太は少し遠すぎますからなあ。」とうなされてでもゐるやうな事を云ふんです。さうして息がきれるかして唇をぶる／＼震はしながら、もう兩方の眼を据ゑてゐるんです。

それから長い間いろいろと優しい言葉をかけて慰めてやりましたが、もうその頃には病み疲れて頭の調子がすつかり狂つてゐたものと見えまして、私の云ふことは一つも彼奴の耳へは入りませんでした。

「體を大事にしなよ。」と云へば、

「着つけの支度の方から先へしといて下さい。」などと途方もない事を云ひ出す始末なんです。

私も手がつけられなくなつて、到頭一時間ばかりゐて樂屋へ歸つて來ました。そして座頭や鶴藏さんにその話をして聞かせますと、滅多に涙なんか見せたことのない鶴藏さんが、

「藝人は舞臺の上で死ねると思つてゐると、大した間違ひだなあ。」と云つてその時ばかりはほろりとしました。全くその通りで御座んさあ。舞臺の上で死ねるなんていふのは檜舞臺を踏んで居る千兩役者のことでさあ。こんなしがねえ旅役者風情ぢや野良犬同樣に何處かの軒先で餓ゑ死をしねえのが關の山なんです。

その翌日、精のつくやうなものを少しばかり買つて、鶴藏さんと二人でまた梅之助を訪ねてやりました。その時は昨夜よりも氣持がはつきりしてゐまして、私共の云ふことは大抵は通じました。そして、

「御志は忘れません。」などと云つて、別れてから後のことなどもぼつぼつ話をするほど力づいてゐました。

それから丁度六日目に梅之助は到頭その燕屋のなかで息を引取つてしまつたんです。私共は芝居をあけてゐたんで、死にめには逢ひませんでしたが、あとの弔ひは出來るだけのことをしてやりました。東京にゐる母親や親爺のことも少しは聞いてゐましたので、どうにかして報せだけはしてやらうと思ひましたが、居處もなにもさつぱり分らないんで到頭そのまゝになつてしまひました。兩親とも音信不通の間に死んでしまつてゐたとすれば、梅之助は彼の世で久しぶりに對面も出來た譯なんです。可哀さう

な男ぢや御座んせんか。……

　梅之助の話はざつとこれで濟みました。

　私は今でもあの宇蘭の梅之助の住んでゐた家のことを思ひ出すと、もうつくづくこの稼業が厭になります。私なんざ殊に老さきの短え體なんですから、あゝした仲間のもののみじめな生き死を見るとしみじみ心細くてなりません。これで手に職でも持つてゐりや少しは安心も出來ますけど、舞臺から下りてしまやあ二本の腕はちやんとしてゐても、自分ひとりの身すぎさへ出來ねえ意氣地なしなんですからなあ。さうして萍のやうな頼りない世渡りをしてゐながら、人間の仲間入りも出來ねえやうに身を持ち崩して、旅から旅を性懲りもなく渡り歩いてゐるんです。女房はなし、子供はなし、結句安氣な身の上だなんて自慢らしく云つちや居りますが、梅之助のやうに體が利かなくなつていざ息を引取るといふ時にや一體誰れが死水をとつて呉れるんでせう。あんな見すぼらしい荒屋で、しかも燈もない暗闇のなかで夜つぴてまじまじしながらひとりぼつちでお迎ひの來るのを今か今かと待つてゐる身になつて御覽じろ。その寂さはとても口にや云ひ盡せますまい。それを思ふと、あゝやつて田之助たちが女の子にちやほやされながらうかうかと日を送つてゐる心根が私にはどうしても解らないんで御座いますよ。

　ですがもうその愚癡はやめに致しませう。あなたがまたお株をはじめたなんてな顔をなさるのをみると、私は年甲斐のねえ話だと思はずにやゐられませんよ。はゝゝゝ。

　長話をしたんですつかり火を消してしまひました。どりやひとつお燗を熱くしませう。それよりもあの音をお聞きなさいまし。また霙が落して來たやうぢや御座いませんか。

（大正二年六月作）

歩く（七）

　それで體重が二十貫になつて、心臟に脂肪のマントが出來て、葡萄糖のまじつた尿を出して、フェリュソカで口がたゞれて、ウヰスキイで動脈が硬化して、女に草臥れる。虚榮心が强くなつて、借金の云ひ譯が下手になつて、精神的斜視になつて、白晝夢を見て、心悸亢進して、ファンドシェクルの息を吐く。

　そして歩くことをすつかり忘れてしまふ。唯それだけのことである。もつと可けないのは異常亢奮といふ奴で、一日に原稿が六十枚も平氣で書けることだ。その方のホルモンだけは枯渇しないで、毎晩活字の母型と、足の曲つた女と、腐つた紙幣の亂舞を虚空に瞶める。

　第一次の決算はどうやらついたやうだ。羽二重の夜具や羽根蒲團は他人が來て、いつともなく競賣に附してしまつたらしい。裸になつては、自動車にも乘り度くない。ぶらぶら歩くことだ。青草を踏むことだ。臭い息をついてゐた唇で、新鮮な外氣を呼吸することだ。人間の別嬪はもう澤山だから、海の犬カインのやうな犬の別嬪に逢ひ度い。ジャズや生産過剩の嵐や、科學の綺看板ももう結構だから、せめて一生に一度はレンブルヒの影を踏んで、無人の曠野へ出てみたい。歐羅巴の曠野で紅い月がみたい。永遠の妖姫の頰に浮ぶ微笑がみたい。

　もつともつと歩くことだ。歩いて、歩いて當てずつぽうに本道へ迷ひ出たいものだ。

圏で名の通つた亡きお母さんの跡を襲いで、川端の芝居裏でお茶屋をしてゐる女なのです。若い藝妓や舞妓達にも氣の置けない人なので、お蝶はん姐はん、お蝶はん姐はんと云つてほんとの姉さんのやうに懐いてゐます。話し上手な京都の人のなかでも又立ちまさつた話し上手で、この人の口へかゝると大方の話が立派なユーモアもあれば、人情味もある小説になつてしまふのです。柔らかな、鼻へかゝる言葉の抑揚を聞いてゐると、話すといふことも天稟の技能の一種だといふことをつくづくと感じさせます。お蝶さんはその技能をもつて、訪ねて來る度に私を笑はせたり悲しませたり歡ばせたりしてくれます。春雨の宵のつれづれなどには、私にとつて全くこのうへもない良い話對手だつたのです。

今夜も亦私達は高瀬川の水音の聞える離れ座敷をあけて貰つて、鯛のおつくりや筍の煮たのを肴に少しづつ酒を汲み交しながらそのお話に耽りました。いろいろな面白可笑しい話の數々は、それからそれへと移つてゆきます。ふと河原を見ると、もう空も山も家並も燈火の影ばかりになつて、眞黒な東山の上には白い月が、五分ほど顔をみせてゐます。そして三條の大橋をゆく花見歸りの人足のどよみがかすかに河瀬を渡つて、何處からともなくほつかりとした美女の吐息のやうな夜風がそよそよ吹き込んで來ます。

「ほ、宜しいなあ。ほんまに春の宵らしい晩どすえなあ。」

お蝶さんは吹く風の中から花の匂ひを嗅ぎ出さうとでもするやうな樣子をしながら、ふつと東山にほの明るむ月の出端を眺めてゐましたが、やがてその儘ふつと口をつぐんでしまひました。いつも何か面白い話を想ひ出す時にはさうするのが癖なので、私はそれを促すやうに態と盃をすゝめもせず、此方も押黙つて河原の方を眺めてゐました。

少時するとお蝶さんはふいに口をきつて、

「なあ、へ、あんたはん。お月さんちふもんはほんまに、綺麗なもんどすえなあ。あないに美しう照つてやはると、なんぼえゝ晩かて、氣がしゆんで叶ひまへんえな。」と、云つて、昔の人も思ひ出されるといつたやうなしんみりした眼色をしてゐましたが、その前置きがすむと今度は又一段と聲を落して、

「うちもこないにして長いことお茶屋をしてますさかい、此れまでにも隨分面白いことがたんとありましたえ。人の身の浮沈ちふもんはほんまに分らんもんで、よう來とくれやしたお客さんで、今頃はほんまにどないにしとゐるやろと思ふやうなお方も仰山ありまつせ。あの頃はあないにようお遊びやして、結構な日にばかり逢うとゐやしたお方が、今は何處ぞ遠い遠いところで、淋しいこの月をみとゐやすやろかと思ふと、ほんまに悲しうなりますえなあ。……」

お蝶さんはさう云ひながら廓へ來る人々の身の浮沈をしんみり思ひ遣るやうな樣子をしてゐましたが、やがて語り出したのは、これから私が書かうとする京は四條烏丸の分限者、戶田一家の憐れな運命であります。華やかな祇園の廓を背景に、泡沫の如く落魄していつたその一家の物語りこそ、かうした春の宵には最もふさはしい話ではありますまいか。私はお蝶さんが歸つて行つたあとで、なんだかぢつとしてゐられないほど心寂しくなつたので、高瀬川の水音がだんだんと高くなりまさつてゆく夜更けにもかかはらず、電燈の下へ机を持つて行つて、この一篇の哀史を書きはじめました。感興と涙とが盡きないかぎり、私は曉方になつても、白晝になつてもこの筆を擱かないつもりです。それほど私はその物語りに興を覺え、涙を催したのでした。

お蝶さんの話した物語りの筋道にしたがふ

と、それは丁度今から八年ほど前のことでした。その頃はお蝶さんのお母さんに當るお蔦さんもまだ此の世にゐて、吉嶋の家は繩手通りの古めかしい小格子をした茶屋々々の間に軒をつらねてゐたのでした。お蝶さんはその時とつて二十歳、もともと水商賣をあんまり好いてはゐなかつたので、座敷へは出ても、妓達の振分けや散財の入費などはよく分らず、時とすると折角お母さんの手助けをするつもりでゐながら、あべこべにお母さんに迷惑をかけたりするやうなこともあつたと云ひます。今と違つてその頃は祇園町にもまだ文明が浸蝕してはゐなかつたので、昔めかしい立兵庫に緋の裲襠の艶を競ひながら三つ足の羽音で宵闇をさゞめかしにゆく太夫もゐれば、舞妓達の口紅も輕い役者の惚話を云ふにしては濃すぎるほど諸譯が古風で、物堅かつたのです。さういふ廓の有様を背景に、烏丸で分限者とうたはれた戸田一家が沒落していつた哀史はどんなに美しく憐れであつたでせう。南園小路、花見小路、その名の美しい餘韻が今もなほ廓に殘つてゐるやうに、その哀史は幾代の人々の口に傳へられても、決して色褪せた花瓣のやうな趣を失ひはしないだらうと思はれるのです。

それは丁度正月の松がとれて幾日、薄暗い座敷の床の間で賑やかな御祝儀の妓達の聲々に聞き倦きてゐたお鏡も開かれようといふ日のことでした。その頃毎日のやうに遊びに來てゐた客のなかに村はん、と云ふ四條の時計屋の若旦那がありましたが、話はその人によつて緒をひらかれることになるのです。

その晩のもう十時過ぎた頃、お蝶さんが臺所で婢衆を對手に客へ出す臺の物の支度をしてゐると、ふと戸外の方で少し醉つてゐるらしい二三人の人聲が聞えました。

「そないに堅いこと云はいでも宜しいやないか。君ぐらゐな年頃でお茶屋の暖簾をくゞつたことがないちふやうな、そんな不細工なことがあるか。君のはそら喰はず嫌ひと云ふもんや。長うは引留めんさかい、どうぞ一遍寄つとみいな。」と云つてゐるのは正しく村はんの聲でした。

何事かと思つてお蝶さんは土間へ下りて潜り戸のところまで出てみますと、丁度店先の小格子のところに村はんともう二人、同じ年頃ともみえる若旦那風の男が揉み合ひながら立つてゐるのです。村はんはどうかして振りきつて逃げようとするそのたつたひとりの外套の翼をしつかりと握りしめながら、頻りに管を卷いてゐます。ほんのりと照らしてゐる軒行燈の灯影にみえるその人の顏は、帽子を眼深に被つてゐるので誰とも分りませんでしたが、そのあとから木履の音を賑々しくたてながらやつて來る舞妓や藝妓の姿を見ると、お蝶さんも打棄つておけなくなつて、

「まあ、若旦那、何をしとゐやすのえ。」と云つて門口へ出てゆきました。

村はんはお蝶さんの姿をみると、殊の外の御機嫌で、

「お、お蝶はん。今晩は。今夜はな、此間いうたそら學校の連中の宴會で、今迄山の中村樓へ居つたんや。まだ時間もそないに遲うないさかい、もう一杯飲み直さう思うて、寄せて貰ひに來たんやぜ。」

「さうどすか。そらまあ、ようこそ。そんな處で怪體なことしてんと、お入りやしとくれやすいな。」お蝶さんは村はんの背なかを抑へながら云ひました。

「ところが此の男がどないにしても厭や云うてあかんのやがな。こんなえゝ男で、まだお茶屋の門をくゞつたことがないのやて。そんな怪體な話があるかいな。私どうでも今夜は往なさ

へん。さ、戸田はん。そないに世話を燒かせんと一寸でえゝさかい、寄つていてんか。」

そこへ藝妓や舞妓達がぞろぞろ追ひ縋つて彼等を手取りでもするやうにおつ取卷きながら、口々に、

「そないにてらさんと、村はんもあないにお云ひやすさかい、どうぞお入りやしとくれやすいな。」

「寄つとくれやすな、いけずやなあ。」

などと四方から責めたてだしたので、そこいらの往來の人々も足をとゞめて眺めてゆくほどの騒ぎになつてしまひました。

戸田と呼ばれた男は格子の前庇を更に低くおろして、ほとほと當惑したやうに立ちすくんでゐましたが、藝妓のなかで友菊といふひとりの妓が、

「あんたはんも男はんどすやないか。一遍いくておいなやしたんどすさかい、卑怯やわ。さ、おいでやす。」少し醉つてゐるうへに平常からお俠で名の通つた妓のことゝて、突如その手を執つて引立てましたので、さすがの戸田もよろよろしながらその儘門口へ引込まれてしまひました。その時、くゞり戸の敷居を跨ぎそこねてごとりと躓きかゝつたのを友菊は柔らかな胸でとんと支へて、

「ほ、危な。」と云ひながら抱きしめるやうな恰好をしました。それとみてとつた舞妓達は、

「ふわあッ。」と、云つて意味もなく大聲で囃し立てましたが、今から思ふと此敷居に躓いたことも取りやうによつては惡い事の前觸れだつたやうにも思はれ、友菊のことを思ひ合はせるとあの敷居が戸田一家の浮沈の瀬戸に浮ぶ端緒でもあつたのでした。あの晩、戸田が吉萬の敷居をくぐりさへしなければ戸田家は今でも四條烏丸に見越の松の甍を見せて、幾代前の藏も人手に渡らずに濟んだかも知れません。今くらうかと出來ないのは人の身のさだめではありませんか。

丁度その晩は廣い方の二階座敷が皆塞がつてゐましたので、お蝶さんは早速奥の離座敷へ座敷をつくりました。仲居のお園や孝蝶のお絹は座蒲團を運ぶ、脇息を運ぶ、燭臺へ火を點す、年代のついた奈良に插し竹の床柱をもつた茶座敷は二臺の燭臺に照らされても何處となく薄暗い陰影が立ちそふのでした。彼等は四つの火鉢を各自の間へ入れて、三人の舞妓と三人の藝妓に取圍まれながら宴會の席をそのまゝ此處へ持つて來たやうに久賑やかな酒をはじめました。

店の方が少し手すきになるとお蝶さんは離座敷へ行つてみました。村はんは持ちまへの大聲を張りあげて頻りに舞妓達をきやあきやあ云はせてゐましたが、お蝶さんが入つてゆくと醉つた體をくなくなさせながら、

「なあ、お蝶はん、この男を紹介せうか。あんたも知つてるやろ、烏丸の四條で今名の高い戸田家の一子竹太郎とはこの男のこつちや。男がようて、金持で、しかも極道のごの字も知らん石部金吉、はゝゝゝ。これではまるで廣告屋やな。阿呆やなあ。」

「ほゝゝ。惡い村はん。さうどすか、あんたはんがあの戸田はんの若旦那。」

お蝶さんはさう云ひながら戸田の顏をはじめて眞正面にみました。烏丸の四條には亡き伯母が住んでゐたので戸田の邸も知つてゐれば、そこの若旦那が業平のやうな美男だと云ふこともよく噂には聞いてゐましたが、顏をみるのはほんとに今日がはじめてでした。かうして自分の家へ連れて來られたのがお蝶さんには今更のやうに不思議にも思はれるのでした。

「なにもそんなに驚くことはあらへん。此の男が美男やちふ評はあこらで誰かて知つてるぜ。」村はんはお蝶さんが戸田の顏をぢつとみ

つめてゐるのを見ると、いつもの癖で少しから
むやうに云ひました。
「怪體な云ひやうどすえなあ、村はん。又いつ
も一緒に出ましたえなあ。」お蝶さんは村はん
を手で制して、又戸田の顔をみまもりながら、
「まあ、あんたはんが戸田はん、若旦那はんど
したかいな。ようこそお越しやしとくれやし
た。どうぞこれから又ちと御贔屓に。」お蝶さん
ははじめて改まつた調子で挨拶をしました。
お蝶さんはその時、こんな美しい男を見る
のははじめてだと思ひました。年も漸う二十二
三、色はさして白いといふ方ではありませんが、
鼻筋がきりゝと通つてゐて、引緊まつた脣と
いひ、切れの長い眼といひ、何處と云つて非の打
ちどころはひとつもありませんでした。役者に
したらまづ我童の顔をもう少し初心らしくした
ところでせう。お蝶さんは今でもその顔を思ひ
出すと惚れ惚れすると云ひます。
お茶屋の座敷などにはまるで慣れてゐないと
見え、戸田はとても窮屈さうにちんと坐つたなり
で腕拱みをしてゐました。七分めに顔をあげる
ことはあつても眞面に妓達の顔をみることは
なく、大方は俯向いてばかりゐました。そして
妓達が盃をさしたりして喧しく言葉をかけ
だすと、彼は妙にてれたやうに笑ひながら顔を
ぽつと染めるのでした。その様子が何とも云へ
ず可愛かつたといひます。これがあの大身代を
やがては自分のものにする人か、いろいろな評
判をたてられるあの戸田の後家さんが、死にさへ
すれば當主となつて一家の跡を襲ぐ人かと思ふ
と廓のものにはこの儘打棄つて置くのが惜しい
やうに思はれるのでした。
その夜はさすがの村はんも醉つてはゐたが
さまでは亂れもせず、十一時少し前に戸田やも
うひとりの連れに急き立てられて腰をあげまし
た。もう夜も更けてゐるので三人は人力車を呼
ばせて、門口からそれへ乘せられました。妓達
は店先へ花のやうに寄り固まつて、
「村はん。あしたまたしらしとくれやすや。ほ
んまにつせ。」
「私も知らしとくれやす。」
「ほして戸田はんも連れといでやすや。」
などと黄いろい聲をたてて喚き合ひました
が、村はんは幌のなかから醉つた聲でそれに
一々答へをしながら、
「さいなら。」
「さいなら。」の聲に送られて、底冷えのする夜
霧のなかを歸つてゆきました。
次の座敷へ廻る妓達はぼちぼち帳場へ挨拶
をして歸つてはきましたが、友菊と舞妓の小江
と友彌だけはお花が二時までになつてゐるので
その儘お帳場へ殘りました。二階座敷では[illegible]
妓達が撥をそろへて三味線の連彈きをやつてゐ
る、隣りのお茶屋でも太鼓の鼓まで入つて[illegible]
底拔けの騒ぎをやつてゐるので、夜は更けても
春らしい[illegible]は雑閙の影に[illegible]てゐま
す。彼等は[illegible]
模様に[illegible]しい快をかきそばめてそこの火
鉢にあたりながら[illegible]座敷の[illegible]に散つてゐ
ました。いつの間にか話は戸田のうへに落ち
て、お蝶さんが何氣もなく、
「ほんまにえゝ顔してやはる。」と、云ひだすと、
舞妓達までが口を揃へて、
「さうどすえなあ、姐はん。私あのお方ほんま
に好きや。美しうて、温しいて、ほんまにえゝ
わ。」などと云ひだしました。
友菊はさういふ妹妓達の顔をまじまじ見なが
ら、紅くほてつた頬を抑へてゐましたが、いつ
になく口を噤んで何とも云ひません。いつもな
ら眞先にしやしやり出て、好き勝手なことを云
つて皆を笑はしたり、冷評したりするのです
が、その晩に限つてさも思ひありげにしゆんで

ゐるのです。そしてお蝶さんが忘と気を引くやうに、
「あんたはん、どないにお思ひる。あんな堅いお方はふとしたことでお遊びやすと、女に深うおなりる方え。」と、云ふと、彼女は急に我に歸つたやうに顔をあげて、
「へえ、何どすて？」といひながら聞いて聞かないやうな風をしました。
「いえ、なあ、あんな戸田はんのやうなお方は却つて女に深うお陥りやすちふことやわ。」
「あ、戸田はんのことどつか。私また誰のことを云うてやはるのやしらと思うた。」友菊はその言葉と一緒に妙に笑ひ崩れて取つて附けたやうに、「さうどすなあ、私もそないに思ひます。男はんかてあないにえゝ顔にお生れやしたら徳やわなあ。皆に好かれてな。」
「怪體な友菊はん。あんた今夜は餘程どうかしとゐるえ。ほゝゝ。」と、お蝶さんは友菊の顔をぢつと見ながら、「どうもさつき戸田はんが門口をお入りやす時が怪しかつた。手でもお握りたんと違ふか。」
「阿呆らしい。私、叶はんわ。」さすがの友菊がその時ばかりはすつかりてれてしまひました。お蝶さんはその様子から友菊が戸田に氣のあることをそれとなく感ついたのでした。

それからは村はんは相變らず三日とあげず吉島の暖簾をくゞりましたが、どうしたものか戸田の若旦那の方はその後ふつりとも音沙汰が聞えませぬ。廓と云ふものは不思議なもので、あの晩はじめて逢つた藝妓や舞妓が方々の座敷へ行つて、戸田の美男なことを云ひ觸らして歩くものと見え、その噂は日に日に廣まつて、何の關係もない妓達までが吉島へ来るとお蝶さんをつかまへて戸田はんがおいでやしたら是非知らしとくれやす、私も、私もと方々からせがむのでした。

あの晩逢つた連中は村はんの顔さへ見ると、戸田はんはどないにおしやしたと云つてうるさく責めます。村はんは、その都度、
「彼奴はもうあかん。なんぼ僕が行かう云うても厭や厭や云ひをる。男やないのや。」と云つて匙を投げたと云ふやうな顔をしてゐます。妓どもはそれを頼りながつて、
「今度あには首へ繩をつけて引張つといでやしたらえゝにやわ。」
「ほんまにさうおしやすな。そんでもおいでやさしまへなんだら、私らが皆してお迎ひにいてあげまつさ。」
などと云つて、否でも應でも戸田を引張り出す工夫をしたりしました。

併しその次に村はんで知らして貰ふ折にはいくらいそいそ座敷を貰つて行つても、矢張り戸田の姿は見えないのでした。二階座敷で脇息に倚りながらたつたひとりでちびちび盃をあげてゐる村はんの姿をみると、妓達はわれにもなく、「ふわツ、またすかたんや。てれくさその。」と云つて、お蝶さんの肩を打つたりするのでした。

そのうちに寒い寒い二月の月も戸田の浮名ばかりで過ぎ去つて、祇園町には都踊の稽古で忙しい三月が來ました。妓達にお花の順をみはからつては舞扇を持つたり、お煎茶の袱紗を持つたりしてちよこちよこと花見小路の女紅場へ通つてゆきます。そこで行き逢ふ連中達はいづれもおつれなので、前の晩の座敷の噂や、闘助を的にした戀にもつかぬ惚話などで恐ろしく話がはずみます。噂は噂を生んで、そこの門口からは色街の出入りが忽ちにして人間の姿になつて出てゆきます。云爭ひもあれば笑ひ話もある。妬みもあれば、歡びもある。春を待つ女達

の心持は今から華やいでゐる時で、都踊は何と云つても年中一の行事なのでした。

そこで上村はんの事からふいに戸田のことが妓達の口の端にのぼつて、誰もかゝはりがないだけに噂には先々と枝葉がさしてゆきました。その頃女将は村はんを客にとつたといふ話も何處からともなく聞えて來ましたので茶屋の數も多いに、戸田も何處かでこつそり誰かに逢つてゐるのではなからうかといふので、物好きな手合のなかにはそれとなくおつれの詮索をするものなどもゐました。一度顔見知りのある舞妓などが、昨夜お客さんに連れられて京極へ仁輪加芝居をみに行きしなに四條のお旅所で逢つたなどと觸れまはると、それがいつのまにかまことしやかな事實になつて、妓達の薄い唇のうへを先から先へと渡つて歩くのでした。年老つたお客などは座敷でその噂をきくと、

「えらい人氣やな。一體何處の役者や。」などと云つて、妓達を揶揄ふのでした。

七分は村はんのお庇護とは云ひながら、たつた一度の顔合はせで、からまで騒がれる戸田はなんと云ふ果報者でしたらう。その果報があべこべに仇となる日のことを思ふと、笑止な氣もするのです。

都踊がはじまつてから丁度五日目の晩。その日は五番の出番で友菊も、友彌も西方の踊り子になつて出てゐました。春江だけはお囃しに廻つて、燃えたつやうなだんだら幕と櫻の花の蔭で得意の小鼓を打つてゐました。

その日は朝から、好い天氣で、もうぼちぼち寺々の御法會ははじまる、圓山の櫻も此處二三日といふ瀬戸際なので、おつほりはんはもとより花見歸りの醉つたくれた連中まで續々と繰込んで來る、歌舞練場の入口は巡査が聲を嗄らして制しても制しきれぬほどの混雜でした。殊に三回目四回目になるとお茶屋で酒に飽きた客達が藝妓や舞子を連れて押懸けて來るので、觀客席をあける時の騒ぎなどと云ふものは大したものでした。押し合ひ揉みあふなかに妓達の黄いろい悲鳴が聞える、それがまた面白いことにして態と常談をいひながらわいわい喚きたてる手合もあるのです。

觀客がやつと落着くと、やがて小さな木の頭をきつかけに、三味線、鼓の曲の音もろとも三方の幕はきりきりと卷き上げられる。それと一緒にお囃しの響聲はぱつと觀客席の方へ流れ出して、眞黒に押し重なつた觀客の頭は一齊に花道の方へ向けられます。舞臺の方を明るくする爲めにそこらは妙に薄暗くしてあるので、その顔はまるで白い波のやうに見えます。

唄聲もひと節ひと節と進んで、鼓の音と三味線の音が波のやうにもつれて來ると、やがて踊り子達の出になります。お囃しの裏でお師匠さんの聲が、

「都をどりはえゝ……」と、涼しげに響き渡ると、それにつれて、

「よういやさあ。……」と、口々に黄いろい聲で囃しながら、十數人の踊り子が兩方の花道のうへをまるで花束のやうになつてしづしづと練り出して來ます。

觀客達は手を拍くものもあれば、贔屓の妓の名を呼ぶものもあります。わつとさわめいて來るなかに人の頭の波は白く黒く揺らめいて、舞臺の前でお囃しのうへに吊した紅提灯の光りが一時に踊り子の振袖や緋のだらりへ、ほの明るくしみついて來ます。踊り子たちも顔見知りの客が來てゐやしまいかと氣にかけるかして、時々踊りながら花團扇の蔭から場の方や御殿の方へそれとなく優しい流眄をくれます。

丁度友菊が、鼓を打つてゐる舞妓の春江の前まで踊りすゝんで來ると、ふとしたきつかけに鼓の音にもつれて後から、

「戸田はんが來とるやすえ。」と云ふかすかな囁きが聞えました。それは友菊に知らせるために春江が囁いたのでした。友菊はそれを聞くと何故か顔をそむけて、何喰はぬ顔をして踊つてはゐましたが、舞ひの一手で後向きになると春江の顔を見て我知らずにつと笑ひながら、

「何處へ？」と、小聲で訊ね返しました。

春江は眼顔で御殿の方を知らせながら笑つてみせましたが、友菊が今度あに場の方へ體をかはすとその時御殿の垂の陽のところに友菊にとつては忘れられぬ人の顔がほの白く浮んでゐるのがはつきりと見えました。それから後は踊りながら間さへあると戸田の方ばかりみてゐた友菊の心にはその晩といふ晩こそ身をひきしめられるやうな戀しさが湧き起つたのでした。どうしてももう一度是非逢ひ度い、ものが云はして貰ひたい、とう思ひ詰めると妙に悲しくなつて、彼女は浮き立つやうな三味線の音に足をとられながらうつかり涙ぐんだのでした。そして戸田の眼が自分のうへにばかり注がれてゐるやうに思はれて、ひとつの足を踏むにも、舞ひの手を返すのにも、わが體とは思はれぬやうな頼りなさが骨身にしみじみとまつはつて來るのでした。

ひとくさりの舞ひが濟んで他の踊り子達と入れ換りに部屋へ歸つて來ると、もう友彌か誰れかが偵吿つたものと見えて四五人の妓は戸田はんが來てゐると云つて息つぎの砂糖水を飮みながら頻りに湧いてゐるのです。なかにはそれに釣り込まれて、お師匠さんの眼を盜んでこつそり揚幕のところまでのぞきにゆく者もゐる、友菊はそのさまを見ると心細くなつて、いつになく黙り込んだまゝ朱塗の鏡臺の前へ坐つてしよんぼり顔をなほしてゐました。そして妙に焦躁つたいやうな、もどかしいやうな氣持に責められて、時々襟附けてこてあけた襟のあたりを前鬢でごしごし掻いたりしてゐました。

その晩、踊りがはねると古鳥から部屋へ知らして來たので、友菊は友彌や春江達と一緒に、頬紅や白粉を油で拭き落すとすぐさま取るものもとり敢ず吉萬へ駈けつけました。踊り歸りには昔からの習慣で踊りの髪も花簪もそのまゝに、襟のついた部屋着のうへから羽織を引懸けたなりの姿で座敷に行くので、それがまた何とも云へない艶なものの一つになつてゐます。友菊は容貌から云つたら決して美しい方ではありませんでしたが、この踊歸りの姿だけはどうしても彼女を美しくみせずには置きませんでした。

「今日は、姐さんおほきに。」と、云ひながら吉萬の小格子を入ると、なかからはいきなりお蝶さんがとびだして來て、

「ほ、割りかた早うおしたえなあ。矢張り蟲が知らしたんと違ひますか。」と、云つてにやにや笑ひました。

「何どす？ 戸田はんでしらしとくれやしたんやないの？」

「ほゝゝ。きつい氣えなあ。誰方かてえゝやないか。まあ、離座敷へいとみやす。戸田はんやつたら闘助お出しやす。」とう云ひながらお蝶さん自身も嬉しさうに眼を輝かしてゐました。

二人つながつたまゝ離座敷へ行つてみますと、案の定床の間の前に坐つてゐるのは戸田でした。今日はどうしたものか村はんはゐず、たつたひとりで、しかも美しいその顔は酒氣で紅くほてつてゐます。そして彼のまはりには踊りの出番でない勝明や秀奴や政千代などがうす暗い燭臺の陰に行儀よく坐つてゐました。

「ほ、ながいこと。一體あんたはんどないにしとゐやしたんどす。ちよいともしらしとくれやしまへんやないか。」友菊は座敷へ入るなり態と親しげには云つてみたが、どうもいつものや

うに調子が揃つて來ません。ともすると嬉しさに手先がふるへたりするのでした。

戸田はちよつと挨拶をしたきりで、

「今夜は獨り、行つた。」と、ぼんちのやうな口をきゝながら慣れぬ手つきで盃をさしました。

お蝶さんはその時ほど友禰が酒を飲んだのを見たことがないと云ひます。

「私ちよつと飲まんならん譯がありますよつてに。」などと云ひながらしまひには洋杯で呷つたりしました。そしてぼうつとしたやうな眼つきになつて、

「一寸戸田はんの傍へ坐らしとくれやすな。」と云つて、戸田の隣りに坐つてゐた秀奴を押し除けるやうにしながらそこへ割り込みました。そしていつになく惡躁ぎをして、戸田の膝へ手を突いたり、肩へもたれたりしては、却つて戸田に迷惑さうな顔をさせました。お蝶さんにはさうした友禰のそぶりが、強いて自分の感情を押し隱さうとするやうにも、亦、戸田の廓馴れぬ心をうへから壓しつけようとするやうにも思はれたのでした。しかし漸次と酒の醉ひが廻つて妙にからむやうな、取りとめのない事をのべこべと云ひ出すのを見ると、いくら商賣染みないお蝶さんにも友禰の口說下手なのが傍で見てゐてはらはらするやうに思はれたのでした。

その時座敷に來てゐた秀奴にも政千代にも友禰の言葉尻にのつてはそれとなく氣を持たせたものゝ云ひ振りをしてゐました。殊に秀奴の方は舞妓から襟かへをしたばかりで、若い妓のなかでも家柄がいゝのと、顔が美しいのとで一流どころの列に入れられ、少し頼りないと云ふ評判はありましたが、先づ祇園では賣つ妓の一人で、戸田には持つて來いのいゝ對手だつたのでした。さすがはもの柔らかな京女のこととて、表だつて戀敵になるやうなことはありませんでしたが、お互に云ひ合ふ言葉の底には小さな怨みや妬みがそれとなく美しい調子で匿されてゐました。友禰と秀奴、それに舞妓たちまで尻馬に乗つて、これからは三つ巴五つ巴の戀爭ひがはじまるのかと思ふとお蝶さんは面白いやうな、氣の毒のやうな、それでゐてまた今迄にあつたさうした例を考へ合はせると少し恐ろしくも思はれるのでした。

戸田はその晩かれこれ一時頃まで現を抜かしたやうな顔をして面白さうに遊んでゐましたがふと時計を出してみると、慌てて起ちあがりました。そして妓達が、

「もう遲うおすさかいに、往なはつたらおおきやす」と、云つて往なしともないにまつはりつくのを無理に押し除けながら振り切つて、そこそこに歸り支度をしはじめました。

友禰はもうその頃には大分醉つてゐましたが、戸田が歸ると聞くと自分もふらふら起ちあがつて、

「どないにしてもお歸りやすのやつたら、私そこまで送つていてあげまつさ。どうぞ頼みますさかいに、送らしとくれやす。」と、云つて聞きません。

お蝶さんは烏丸までの路を氣遣つて、妓達をひきとめ、戸田だけを俥で送らせようとしましたが、友禰が送ると云ひ出すと、我れもわれもと送りてがふえて、到頭座にゐる藝妓も舞妓も總立ちになつて、長い廊下を階口の方へぞろぞろ出てゆきました。

戸外へ出てみると、春とは云ひながらまだ霜の降りさうな冷たい冷たい夜風がそよそよと吹いてゐます。空には片破れ月の影が冴えて、茶屋へ着換へを運んでゆく半玉の姿も細長い影をひいてゐます。舞妓達の木履の音だけは更け靜

まつた家々の軒にころころとしみついて、放蕩の味を知らぬ戸田にはその夜の情趣が骨の髄まで深く深く浸みとほるやうに覺えられたらしかつたのでした。
　四條の大橋の橋詰めまで來ると、お蝶さんはそこで俥を傭つて戸田を乘せようとしました。月は河原に蒼白い夢を落して、川端につゞく柳並樹がまるで水藻のやうに寂しく水に映つてゐます。橋の下から涌き出るやうな哀音が咽んでゐます。戸田も藝妓達も默つてひと塊りになつて橋のうへに立澱んでゐましたが、さうしてゐてもきりがないので、お蝶さんは無理に戸田を促して俥に乘せてしまひました。
　秀奴も政千代も、それから舞妓の佐江も俥の泥除けのところへ取縋つて、
「また明日來とくれやすや。ほんまどつせ。」
「もしおいでしまへなんだら、村はんのお名前をかつて電話かけまつせ。」
などとわいわい云つてゐましたが、そのうちに俥は妓達の聲をあとに到頭橋を向うへ渡つて行つてしまひました。友菊だけはたつたひとり群を離れて、橋の欄干に倚りながら、提灯の灯が小さくなるまでうつとりそのあとを見送つてゐました。獨りの姿で片破れ月を背負ひながら橋に立つその風情は何とも云はれなかつたと云ひます。色戀の道に疎かつたお蝶さんもその時にはつくづく戀をする人の心が妬ましく、羨ましかつたと云ひます。
　歸りみちには川下の角で、大方の藝妓、舞妓は、
「姐はん、おほきに。」
「さいなら。」
「さいなら。」を云ひ交して、各自屋形の方へ別れて歸つてゆきました。友菊は新橋の方に屋形があつたので、お蝶さんとたつたふたり肩をならべて一吉蔦の方へ歩いてゆきました。お蝶さんはあんまり友菊が默つてゐるので、ひやかす氣で、
「えらいしゆんどるやすえな。そないによくよく思はんとおいとくれやす。」と、笑ひかけますと、その時友菊は何とも返事をしません。よくみると、彼女は顔をあげたなりで、しくしく泣いてゐるのです。足もとには醉ひが見えてゐても、心のなかはせぐり來る戀しさ、懐かしさでものも云へないほど燃えてゐると見えて、彼女の頬には次々と涙が流れ落ちてくるのです。お蝶さんはそれをみるとしみじみ可哀想になつて、あの横着者の友菊がからまで人を思ひ詰めたかと思ふと、どうしてでもこの戀を遂げさしてやり度いと思はずにはゐられないのでした。
「怜悧な友菊はんえなあ。」とは云つてみましたが、何んだか自分までが同じ思ひに引込まれさうなので、お蝶さんは急に氣を變へて、
「なあ、へ、友菊はん。戸田はんてほんまに可愛らしいお方やおへんか。今夜うちへおいでやすのに村はんは御一緒やないので、よう譯がお分りいしまへんとみえて、お金をたんと十圓お出しやして、こんで散財させて呉れお云ひやすのどすがな。私もう可笑しうて、可笑しうてせんど笑うたんどつせ。ほんまに誰方かて散財に馴れとゐしまへんうちは面白うおすえなあ。それでも豪さうにおしやすお方もあんのに、あないにしておづおづお金をお出しやす戸田はんのお心持が嬉しいやおへんか。ほんでに今夜はお母はんがお師匠はんで廓の方をすつくり教へてあげたんどつせ。ほしてあんなお方やさかいに、じやうじおいでやしたら可かんさかい、月に二度づつ散財おしやすいうて、もうえらいことやつたんどつせ。」
　友菊はそれにも返事をしませんでした。たゞ虚空に虹を瞻めてゐるやうに、ゆくての道にほ

かせたあとで、
「ほんまに今日は御所へ上つたやうな氣がした
え。」と云つたひと言かお蝶さんには戸田家の屋
敷の樣子を眼に見るやうに思ひ浮べさせたので
した。
お母さんがさうした氣ですから戸田はどうし
て遊ばずにゐませう。もともと好きな道ではあ
るし金があり餘るほど費へるだけに深みへ入れ
ば入るほど面白さも身にしみて來て、それから
二三箇月の間、戸田はほんとに羽根をのばし
て遊べるだけ遊びました。舞妓や藝妓を六人も
七人も連れて城崎の温泉や山中の温泉へいつた
り、宇治や嵯峨、さては又竹生島詣でを試みた
り、ちよつと大阪へ芝居を見にゆくと云つても
彼の周圍には必ず四五人の女の影をみないこと
はありませんでした。そんな風ですから妓達
の間では益々噂か高くなつてゆく。中原の鹿は
果して誰の手に落ちるであらうといふやうなこ
とが新聞の艶種を賑して、妓達の競爭に次第
次第に激しくなつていきました。
眼の黒いお蔦さんは時分よしと見てとつて、
こつそりそのなかからひとりの藝妓をえりだし
て戸田につける手段をめぐらしました。一方で
は遊びがあんまり野方圖になつてゆくのを引緊
めるつもりもありましたし、又遊び馴れてくる
に從つて漸々と戸田が大膽になつて、もてるが
まゝにせうもない藝妓などに手をつけるやうな
ことがあつてはとそれを心配もしたのでした。
或晩のことお蔦さんは自分も酒に醉つてそれ
となく戸田の思惑をたゞしてみました。からと
云つてきりだしてみると戸田の方は案外、ふはふ
はした氣で、まだほんとに女を知らない男の
常としてえらさうなことを口では云つてゐなが
ら、まだ誰と云つてしつかり當りがついてゐる
譯ではありませんでした。友菊もいゝ、秀奴も
いゝ、政葉も政千代もいゝ、又舞妓では友彌も
春江もみんな氣に入つてゐて、誰といつて圖拔
けて好きと云ふ女はなく、皆から同じやうに
思はれて自分ひとりが色男になつていゝ氣持に
なつてゐるのでした。
さすがのお蔦さんも選擇に困つて、今度は自
分の方でいゝのを搜しだしてつける工面をしま
した。丁度打つて付けと思ふ妓は屋形と折合ひ
が悪いし、また屋形と折合ひのいゝ妓は此方で
悪しといふ風で、對手が戸田だけに中々適當な
妓がありませんでしたが、それでもやつとその
なかから秀奴と、政葉と、春江の三人を選り出し
ました。中でも秀奴は少し輕りないといふ缺點
はあつても兎に角押し出しなり、位置なり、容貌
なりが祇園町ではまづ一流の雄なるもので、戸
田には至極似合ひの妓なので、お蔦さんは第一
にその妓に白羽の矢を立てたのでした。
お蔦さんは自分の心でさうきめると、お蝶さ
んにもその事を相談しました。お蝶さんはその
話を聞くと眼を丸くしてしまひました。なにし
ろお蝶さんの方は友菊の切ない胸のうちをすつ
かり見せつけられてゐるので、若しお母はんが
戸田はんに秀奴はんをおつけやしたりしたら、
それこそどんな騷動が持ちあがるかも知れぬ。
それでなくても狂氣のやうになつてゐる友菊が
若し秀奴に戸田を寢とられたと知つたらどんな
に怒り悲しむことであらう。それを思ふとお蝶
さんは頻りに友菊の心のうちが可哀さうに思は
れて、自分としては秀奴を戸田のものにするの
が不承知だと云ふことをきつぱりお母さんの前
で云ひました。
お蔦さんはそれを聞くとさも意外だといふ顏
をして、
「ほんならあんた誰がえゝとお思ひる。政葉は
んか？ それとも政千代はんか？」と、訊きまし
た。
お蝶さんはその時お母さんの顏色をみなが

田の遊びも大分手に入つて來て吉萬ではそんな贅沢な散財はさせませんでしたが、併し若い水の出端のことですから面白づくならどんなことでもする。茶屋ばかりが夜を明かすところでないのを知ると大津へ行つてみたり、奈良へ行つてみたり、月の半分ぐらゐは家を明けるやうな有様でした。それでも家からは何の小言も出ません。金が欲しいと云へば銀行の窓を今くゞつて來たばかりといふやうな手の切れるやうな新幣を十日目十日目にきまつて渡す。茶屋小屋の拂ひは家で執事のやうなことをしてゐる會社員あがりの山口といふ男が一切始末をしてくれるので、所謂極道者から云へばそれほど結構な身分はなかつたのでした。

お蔦さんは一度招ばれてからはそれにしほを得て、時々戸田の家へ御機嫌伺ひ旁々遊びに寄せて貰つてゐました。二度三度となると漸次、後家さんの氣心も知れて來て、もう五六度め位にはさすがのお蔦さんのこととてすつかり後家さんの氣を見ぬいてしまひました。これこれの藝妓をつけてこんな遊びをしてゐられますと云つて、戸田の遊び振りや、その都度にあつた笑話などを、ひとつには自慢ですつかり打あけて話すと、後家さんはいつも面白さうにして聞いてゐました。お蔦さんはその樣子をみて、どれぐらゐの財産があるのかは無論知りませんでしたが、この後家さんではもう戸田の家も一代限りで倒れてしまふのではなからうかと云ふことをその時分に既にそれとなく豫覺したのでした。

物堅い京都では遊びの世界も極めて物堅く出來てゐたので、その頃では市中の可成りの家柄の人々でも藝妓や太夫の噂なぞをあからさまに話したりするのを少しも不思議には思つてゐませんでした。殊に都踊や、島原の太夫道中や、祇園會の日などには良家の旦那衆も御内儀もみんな美しい妓達を見にいくと云つた風で、誰それはんなどと妓達の名を子供達までが口にして恥としなかつたのでした。他土地のやうに彼等を下賤なものとは思はず、廓が既に市中のめぬきの處で普通の人家と軒を並べてゐるがごとくに、花明柳暗の巷の生活と市井の生活とは極めて密接な關係をもつてゐたのでした。

戸田家の後家さんが廓染みた派手なことを好むのは無論不思議なことではありませんでしたが、しかしさうした半面では昔は遊びの場所で何分何厘の蠟燭代迄取つたほど、土地です、いくら極道させなければ世間が分らぬとは云へ野方圖に息子の遊蕩の資を貢いでやるなどは到底物堅い京都ではあり得ぬことだつたのです。大家になればなるほど却つてつましくて、土塀に細目格子の大屋臺を踏んでゐながら裏へ廻つてみると臺所口でその家のおへさんが振賣りの岩倉の百姓から茄子を一錢二錢づつ小買ひしてゐると云つたやうな土地柄なのですから、お蔦さんには餘りにぱつぱつとしすぎる戸田家の世帶向きがなど〳〵、だらしなく思はれ、却つてその中に一家倒産の忌はしい前徵をみたのでした。

「あの後家はん誰ぞ隱し男でもあつて、ほんまは自分も極道してやはるのかも知れんえ。」お蔦さんはお蝶さんと對向ひの時、こんなことまで云つたことがあつたのでした。

戸田がそれまでにつかつた金高も可成りな額にはのぼつてゐましたが、それも戸田の屋臺骨に傷をつけるといつた程のものではありません。東京や大阪でてつぱつて遊ぶのとは違つて、いくら遊びでも京のは諸式が手堅く出來てゐるので、殊に吉萬のやうな堅い地味な家で遊んでゐたのでは金の費ひやうがないのです。戸田もぼんちではありながら自づとその風に染んで、さう圖抜けた馬鹿は盡しませんでしたので、

月々大凡定まつた額だけしきや浪費しなかつたのでした。

　戸田が本式に亂暴な金を費ひだしたのは、もう暫くあとのことでした。一旦妙な工合で離れた村はんと又仲よしになつて、それにもう一人堀川の呉服問屋の息子で北島といふのが仲間に入ると、今度は急に遊びがおほがかりになつて來ました。祇園町だけでは何んだか鼻がつかへるやうなので、北島の先棒で先斗町へも足をいれる。いつの間にか島原、上七軒などの噂も覺えて、それがちよこちよこ大阪まで手を延ばすやうになると、もう今迄の戸田ではゐませんでした。風姿もぐつと張つてくる、することも旦那衆のやうに花やかになつて、戸田の腹には妙にくそ度胸まで出來て來たのでした。お蔦はんは一度はどうしてもさうなるのが當りまへなので、なるべく間接にひきしめて自分では眼をつぶつてみてゐましたが、漸次とその風が募つてゆくにつれお蔦さんの胸には實のところ心配が絶えなかつたのでした。

　お蔦さんが一番惡く思つたのはあとから出來た友達の北島でした。その男は祇園でも餘り顔のきかない茶屋を根城にして、一時大分よくない噂のたつやうな遊びをしてゐたので同じ廓の水をのむお蔦さんにはその素性がよく分つてゐたのでした。その後彼はどうしたわけでか神戸の方へ行つてゐて、そこでもひどく遊び歩いたらしく、再び京へ舞ひ戻つて來た時には、表は手堅さうにみえてゐながら油斷の出來ない男になつてゐました。たとへば戸田と一緒に吉蔦へやつて來ても、妙に帳場へ入り込んではお君さんや仲居どもに親切な口をきいては家の情まで喰ひついてしまはうとする。勘定のことなども口では、

「僕は戸田君のやうに金が廻らんよつて、割前にしとくれやす。」などと正直らしく打割つて云つて置きながら、いざとなるとみんな戸田の懐から拂はせてしまふやうなことばかりしてゐました。

　北島は戸田や村はんを煽てて大阪へ引張りだしていくうちにいつともなく彼等を北濱へ連れ込むやうになりました。資本さへ少し纏まつたものがあれば、ともすると空拳で巨萬の富を贏ち得られる相場の面白さはどうして戸田の若い心を唆かさずに置きませう。なまじ金がまはるだけに、その價値もよく分るので、人一代の運勢がたつた一場の當り不當りできまつてしまふやうな際どいその道の面白さが到頭物堅い京育ちのぼんちの頭の底深くしみついてしまつたのでした。それに北島には筋のよくない商賣人がついてゐたので、初めはさまざまの忠義だてをして、小買ひの儲けの味をうんと占めさせる、此の男ならばと戸田が氣をゆるしたあとで、大きな立ての株をはつて、無論損をさせる氣は毛頭ありませんでしたが、自分達にも潤澤な利益のまはるやうな機會をつくらうと云ふのですから、戸田にしてみれば實に危險な位置に立たせられたものと云はなければなりません。儲かつてゐるうちは頭をはられて、いざはづれたとなると總ての責任が自分のうへに懸つてくることを戸田は少しも心にかけてゐなかつたのでした。世間を横に歩いて來た人間には戸田の心をうまく捕へてしまふくらゐ造作もないことだつたのでした。

　戸田もはじめのうちは村はんと乘りで金をおろしました。ぽちぽち當つて來ると皆に勸められるがまゝに漸々と自分一手で金を動かすやうになつて、戸田としては今迄に持つたことのないやうな高の金を都合して來ては、その時分動搖してゐた際どい株を買つたり賣つたりして、その間の利をつかんでゐました。兎に角その時は大した失敗もなくて、戸田の手へは可成りい

い利益が廻つて來ました。

金が入ると戸田は面白さにそれを持つては今日は南地、明日は曾根崎と浮かれて歩きました。どうせ浮いた金ですから身につく筈がありません。取巻きにはいつも村はんや北島がついてゐるので、金の足は猶さら早い。そして自分の力で儲けたといふ腹があるので、何となく心にも自信が出來て、漸々と金づかひも荒くなつていきました。京都から秀奴をはじめ春江や政葉などを呼んで總勢八人で別府の温泉へ遊びにいつたりしたのはその時分のことでした。その時お蔦さんは家の都合でいけませんでしたので、お蝶さんが代りについていきましたが、皆が餘り亂暴な遊びをするので氣の小さいお蝶さんははらはらしたと云ひます。その旅から歸つて來た時お蔦さんはお蝶さんの話を聞いて、それとなく戸田に意見をしましたが、そんなことは戸田の耳へは入りませんでした。

丁度鳴尾の競馬が京阪の人氣を呼んでゐる最中のことでした。その前の日戸田が鳴尾で當つたといふので、京都からは例のごとく秀奴をはじめいつもの藝妓や舞妓達が六人ほど呼ばれて笠屋町の紫秀を根城にして遊んでゐました。その頃は千代鶴や、小はつなどと云ふ新らしい顏もちよくちよく呼ばれてゐましたので、以前吉蔦で小遊びをしてゐた時分とは遊びの樣子からして違つてゐたのでした。お蔦さんに來られるとどうも煙つたいので、さうした時にはいつでもお蝶さんが引張りだされることになつてゐました。

戸田はその頃には少しづつ酒の方もいけるやうになつてゐましたので、その二三日の間南地で馬鹿な遊びをした酒疲れが出て、妙にヒステリーのやうになつてゐました。遊び疲れたあとには耐らない寂しさが來ると見えて、彼は賑やかな妓達の聲に包まれながら青い顏をして妙にふさぎ込んでゐました。放蕩の悲哀、から云ふと妙にうはついた言葉に聞えますが、しかし放蕩をしてゐるものにはこの感情ほど痛切にひびくものはありません。遊びが派手になればなるほどそのあとに殘る寂しさは深くなつて、さうした巷にゐながら取留めのない悲しさ、頼りなさが胸に迫つて來る時ほど寂しいものはありません。放蕩のどん底に落ちて、空虚な幻影を眼の前に描きながら自分の身を振返つてみたものでなければ、到底その感情の深さを味ふことは出來ませぬ。世間を知らぬぼんちなぞはそんな時必ず親を思ひ出したり、家を思ひだしたりしてしんみりした心持になります。又良心のないものが自身に不相應な罪惡をたくらんだりするのもその寂しさに迫られるためなのです。

戸田はその夜遲くまで北島や村はん達の騷ぐなかへしよんぼり坐つてゐましたが、もう十二時近くなつてから急に京へ歸ると云ひだしました。なんだか戸田が餘り寂しさうにしてゐるのが氣になつてゐましたので、お蝶さんは、

「そんならさうおしやす。もう餘り大阪も長うなりますさかい、一遍お家へお歸りやした方がよろしいえ。お家でもおかあはんが心配してやはりますかも知れまへんさかいなあ。」と云つて自分も急にいそいそ起つて歸る支度をしはじめました。

その時、戸田は、

「お蝶はん、私、あんたがいつち好きや。」と、云つて、ぼろぼろ涙を流してゐたと云ひます。

村はんや北島はまだ遊び足りないとみえ、もう時間が遲いからといつて頻りに彼を止めましたが、彼はどうしても歸ると云つて聞きません。で、連中達の方は藝妓や舞妓達と一緒に明日道

堀の中座をみてから歸ることにきまつて、戸田は秀奴とお蝶さんを連れて到頭その晩のうちにひとあし先へ歸ることになりました。

もう京阪電車の方は間に合ひさうもないので、彼等は日本橋の橋詰めまで駈けるやうにしていつて、そこから電車に乘つて大急ぎで梅田の停車場へかけつけました。そして、やつと京都行の終列車に間に合つたので、しんと更けたプラットフォームの石敷きへ冴えた下駄の音をひびかせながら、息をきらしてその二等車へ乘り込みました。

汽車が大阪を出てしばらくすると、彼等はふとすぐ隣りの車室に一人の藝妓らしい女が旦那ともみえる三十恰好の肥つた客と一緒に乘つてゐるのを見つけだしました。乘客といつても僅か數へるほどしきや乘つてゐないので、それも大方は醉つたやうな顏をして座席の彼方此方に長くなつて横になつてゐるのでつい彼等の眼はその二人の方へひかれて行きます。女の方はひどく醉つてゐるらしく、男の肩へぴたりと凭れかゝつて、時々は甘えるやうにその膝へ顏を押し伏せたりしてゐます。

一番先にその女が誰であるかを發見したのは秀奴でした。彼女はいつになく覺りの早い眼つきをして、

「お蝶はん。友菊はんが乘つてやはりまつせなあ。」と、お蝶さんの耳へ囁きました。

お蝶さんも實は先刻からさうではないかしらと内々危んでゐましたので、その言葉を聞くと一も二もなく友菊だと分つてしまひました。根の低い銀杏返に結つて、薄地のコオトを着たその後姿はたしかに友菊でした。お蝶さんは惡い機會に惡い妓に出逢したものだと、心のなかではひどくはらはらしたのでした。

實を云ふとその頃吉蔦では戸田に秀奴といふものが出來てからはそれとなく友菊をせくやうにしてゐたのでした。友菊をあんまり戸田に接近させては雙方のためになりませんし、又ひとつには村はんとの仲もあるので、お蔦さんは三度に一度ぐらゐしきや彼女をしらさなかつたのでした。友菊の方でも薄々自分が堰かれてゐることを感づいてゐたので、吉蔦の仕打ちがひどく水くさく思はれ口へ出しては云ひませんでしたが、自分の心持をよく知つてゐてくれる筈のお蔦さんまでがと思ふと、分けてもお蝶さんが怨めしく思はれてならないのでした。で、お蝶さんも友菊に逢ふ度に此頃は何だか氣がさして妙な工合になつてゐたのでした。

お蝶さんはその時よつぽど戸田に友菊が乘つてゐることを耳打ちしようとは思ひましたが、戸田は座席の隅へ背をもたせかけたまゝぢつと眼をつぶつてもう四邊に起る物音は何ひとつ耳へも入らないやうにしよんぼり深い思ひにくれてゐましたので、言ひ出す機を失つてその儘口を噤んでしまひました。そして自分も低く首垂れて、戸田がかうなるまでのなりゆきや、彼の周圍に始終まつはりついてゐる妓達の思ひなどを寂しい心持で思ひ出してみたりしました。友菊と秀奴とが眼と鼻の間にゐるだけに、お蝶さんはその晩ほど人の縁の果敢なさをしみじみ覺えたことはなかつたといひます。

列車はいつの間にか茨木、高槻も過ぎて、もうそろそろ山崎の山間へ入らうとする頃になつて、それまで氣づいてゐたのかゐなかつたのか、友菊がふつと此方を振返りました。そしてさも吃驚したやうに眼を瞬つてぢつと此方の連れをみつめてゐましたが、そのまゝ立つて來ようともしずに、唯お蝶さんの方へちよいと頭をさげて挨拶したつきりで、又彼方を向いてしまひました。お蝶さんは何だかひどく呆氣ない氣もしましたが、併しそれとなく氣を配つてみてゐ

るうちに、友菊の樣子がまるで變つて來たのに氣がつきました。友菊は强ひて自分を抑へてゐたらしく、それから後は再び此方へ眼もくれないでゐましたが、うとうと居眠りをしかけてゐる客に顏をそむけて、車窓から外を眺めてゐる後姿でみると彼女はどうしても嗚咽をくひしばつて泣いてゐるとしきや思はれませんでした。時々そつと手巾を出して顏を拭いてゐるのが、よそめにもいぢらしいほど悲しげにみえました。

戸田の方でももうその頃には無論友菊がゐるのを知つてゐたのですが、彼もそのことについては一言も口をきゝません。三人とも妙に痛いものに觸るやうに押默つて、互に心をはぐらかしあつてゐました。

列車が京都へつくと、戸田は態とぐづぐづしてゐて、友菊をやり過してから下車しました。電燈ばかりが明るく點つてゐるプラットフォームは此處も寂しく夜が更けて、友菊の後姿は客の外套の影にみえたり隱れたりしながらやがて改札口の向うへ見えなくなつてしまひました。そして彼等が停車場前の暗い廣場へ立つた時には二臺の俥の提灯が黑い小路を東へ走つてゆくばかりで、そこいらには誰の姿もみえませんでした。

戸田はお蝶さんがもう今夜は時が遲いから吉蔦へ泊つて明日家へ歸れと云ふのをたつて振り切つて、

「いや、私、どないにしても一遍家へ歸らんならん。」と、云つてきゝません。で、お蝶さんは秀奴もゐるのにいつにないことだと思ひながら自分で俥をさう云つて來て、二人はとにかく烏丸の四條まで彼を送ることにして、やがて三臺の俥は本願寺の前の暗い大通りを眞直に上つていきました。

戸田の邸の角のところでお互に車上から、

「さいなら。」を云ひかはして、到頭その晩はそのまゝ別れてしまひました。なんだか戸田のさうした樣子が遊び疲れたといふだけにしてはひどく變に思はれお蝶さんには何となく彼が可哀さうに見えてなりませんでしたが、併しさう思つただけで口へは出しませんでした。

お蝶さんはその足で秀奴を花見小路の屋形まで送つていつて、もう二時ぢかくなつてやつと吉蔦へ歸りましたが、家へ歸つて見ると、夜の遲い廓とは云へ二時になれば大方は消される店の燈がその晩はどうしたものかかんかんともつてゐて、お帳場のほの暗い燭臺の灯影にはお蔦さんが居眠りをしながら坐つてゐます。

お蝶さんはいつものやうに、

「おかはん。今戻りました。」と、云つて店先へ上りましたが、それを聞くとお蔦さんは眼を覺まして自分から立つて來て、

「ほ、お歸り。あんたひとり戻つて來たんか。ほかの子供衆はんどないにしたんえ。」

「秀奴はんだけ一緒に戻らはりました。あとは明日芝居をみてから往ぬ云うて村はんやら北島はんやらと一緒に殘らはりました。明日誰ぞ大阪へ迎へに行かんなりまへんな。」

「へ、ほんなら村はんはお歸りしまへんのか？」と、お蔦さんは怪訝さうに云つて、「そら怪體やなあ。ほんなら誰方はんやろ。」

「何んどす？　電話でもかゝりましたんか。」

「怪體な、何んやろ。實はな、さつきに木屋町から電話で、村はんが友菊はんをしらしてくれ云はるゝさかい、可笑しいとは思うたが、今のさき醉うて寢てゐるのをやつと起して送つたところや。」

お蝶さんはそれを聞くと狐につまゝれたやうな氣がして、

「阿呆らしい、なんぞ調伏と違ひまつか。」と云ひましたが、何だか氣がかりで耐りません。大

家にゐる筈の村はんがこの夜更けに木屋町から消息をしらせる筈もなし、と云つて、木屋町の静月は村はんが長いこと隠れ遊びをする處になつてゐて、吉蔦からも度々友菊を送つたことのある家なので、村はんの名で電話がかゝつたとあれば無論その言葉に從つて友菊を送らなければならない。それとも村はんはあんなことを云つてゐながら、すぐ自分達のあとをつけて同じ列車で京へ歸つて來てゐるのではあるまいか。

母子はそのまゝ店先へ坐つて頻りに評議をしましたが、さうしてゐても埒があきませんので、何はともあれひよつとして間違ひでもあつてはと云ふので、お蝶さんは待たしてあつた俥に乘つてそれからすぐさま木屋町の靜月へ驅けつけてみました。

お蔦さんが氣を利かして電話をかけて置いたので、靜月では寢たとなると恐ろしく便利の悪い遠い門口をあけて待つてゐました。お蝶さんは何しろもう時が遅いので、お帳場へ挨拶するとそのまゝ仲居のあとについて一番奥の川つきの離座敷へいつこみましたが、そこの紙襖をあけると、先づ餘りに思ひがけないその場の有様にひどく驚かされてしまひました。

村はんとは名ばかりで、そこにはつい今しがた烏丸の四條で別れたばかりの戸田が友菊とさしむかひになつて坐つてゐました。しかもそればかりではなく戸田の顔色は別れた時よりも一層蒼く沈んで、美しい眼は深い絶望を現はすやうに物凄く光つてゐます。友菊の方はもう身も世もあられぬやうに顔を伏せて、だらしなく横坐りに坐つたまゝしやくりあげて泣いてゐます。

お蝶さんが入つてゆくと二人はさすがに氣拙さうに居坐ひをなほしましたが、ひとことも口をきゝません。お蝶さんは却つて自分の方が變な羽目になつて、いろいろ譯をたゞしてはみましたが、戸田はだんだんと涙ぐんで來て、たゞ心配をかけて何とも申譯がないと頻りに云ひつゞけるばかりで、一向に要領を得ません。

お蝶さんは手がつけられなくなつて、とにかく今夜はこのまゝにして、いづれまた明日にでもお互にすつかり氣心も打明け、話し合ひもつけてからどうでもするとして、一旦友菊の方だけ一緒に連れて歸らうとしましたが、さうなると今迄はたゞしくしく泣いてばかりゐた友菊が急に氣狂ひのやうに狂ひだして、もしこのまま戸田に別れなければならないなら疏水へでも何處へでも身を投げて死ぬ、いつそ自分をひと思ひに殺してから連れて歸つてくれなどと埒もないことを云ひ張つて、どうしても歸ることを肯じません。

から手詰めになつてはお蝶さんもほとほと途方に暮れずにはゐられませんでした。もとを云へば友菊の切なる思ひには少なからず泣かされてゐたお蝶さんのこととて、口ではきついことを云ひながらも、心では知らず識らずのうちに情にひかされて、あゝ可哀さうな人やと思ふにつけ、さう云ふ自分までがつい貰ひ泣きをしてしまふやうなことになつてしまふ。併し茶屋としての義理を考へればどうしても、この場合友菊の味方にはなつてゐられないので、到底これでは自分の手にはおへないと見てとつたお蝶さんはひとまづ吉蔦へ歸つてお蔦さんによく相談をしたうへでどうにでも事を取極めようと心を据ゑて、その儘ひとつにはせめてつかの間の逢ふ瀨なりとも二人のうへに時を與へる粹をきかせ、自分では責任を背負ふ身の慌しい心持になりながら吉蔦へ歸つて來ました。

お蔦さんはもう臥床へ入つてゐましたが、それを聞くと呆れたやうに、

「ほんまにせうむない事になつたえなあ。戸田はんもせんど頃とはころッと違うて、えらう軍

師におなりやしたもんや。」と、云つて、そのまま起き上つて電話室へ入つてゆきました。そして戸田が出ないと云ふのを無理に電話口へよびだして、皮肉まじりの愚癡を二言三言いつたあとで、

「あんたはんも男はん、友菊はんも藝妓はんや、からなつてしまうては私の家ではもうどないにも出來しまへんさかい、よう考へて、あとはきつぱりと極まりのつくやうにしとくれやす。宜しいか、ほんまどつせ。私もこないにして吉蔦の名をはつてお稼業をしてますのやさかい、このお蔦の顔に泥をぬるやうなことをしとくれやしたら、その時こそもう戸田はんの若旦那とは云はさしまへんえ。」と、いつにない强い調子で云ひました。

その晩はそれなり味氣ない夢にあけて翌日の午後にお蔦はんは自分で靜月へ出掛けて行きました。そしてその日のうちに秀奴と手をきる手筈をきめて、戸田はどうしたものかその晩の夜汽車で友菊を連れたまゝ急に東京へ向けて旅立つてしまひました。

お蝶さんはあんまり鳥の立つやうな騷ぎなので頻りに不思議がつてお蔦さんに前後の樣子を訊ねましたが、お蔦さんはたゞ、

「戸田はんもあれで何んぞ自棄になつとゐやすのやろなあ、私には分らんけど。考へてみればあのお方もほんまに可哀さうなお方や。」と、云ふだけで、あとは何か深い秘密を暗示するやうにしんみりした眼色になるばかりでした。

これはずつと後になつて分つた話ですが、實はその晩戸田は自分の心に取返しのつかぬ打撃を與へるやうな事件に遭遇したのでした。以前からひどく彼を惱ましてゐたのは彼の母と家で執事のやうな役をしてゐる山口との關係でした。山口といふのはその頃三十八ばかりの年恰好で、亡くなつた戸田の主人が生前自分の關係してゐた會社で秘書役のやうにして使つてゐた男でしたが、實直でかつ敏捷な男なので主人の死後は母からひどく信用されて、到頭家の執事代りに傭はれることになつたのでした。うちみたところ男前がいゝ譯でもなく、お蝶さんなどは、

「あんな男はんかて好きな女があるのどつしやろか。」などと蔭口をきくやうな男なのにもかゝはらず、母はいつのまにかその男と道ならぬ間柄になつてゐたのでした。戸田もはじめはまさかと思つてゐましたが、自分が放蕩の巷に日に夜を明かして家をあけ勝ちなところからその疑團はいつも暗い影になつて消えもせず募りもせずに心の面に殘つてゐたのでした。それが丁度あの晩、思ひがけない夜更けに家へ歸つてみると、彼は自分の居間から遠くもない母の室で見るも忌はしい狼藉な樣子を見たのでした。若い戸田の心は眞底から極道の泥水に浸みてはゐなかつたので、それと知つた刹那、彼は自分ながら冷汗の滲むやうな羞恥に打たれたのでした。母に對する忿怒は忽ち體ぢうに燃えて、とてもぢつとしてはゐられないやうな氣がするので、彼はそのまゝ又ぷいと家を飛びだして靜月へいつたのでした。大阪から歸る時に氣持が妙に沈んでゐただけに、たつたひとりで靜月の離座敷で鴨川の水音を聞いた時には耐らなく情なくなつて、たうとう汽車の中でそれとは云はずに眼に見えぬ思ひの絲で自分の心を泣かせた友菊に逢つてみたいやうな氣になつてしまつたのでした。なにも變つた女が欲しいと云ふやうな浮ついた氣からではなく、その時車窓に倚つて泣いてゐた友菊の姿が彼には又とない憐れさを覺えさせたので、秀奴に倦きてゐた彼の心は一瞬の間に友菊の方へ移つていつたのでした。そして一度友菊に逢ふと興奮してゐた心は更に熱して、戸田はその夜極道しだしてから茲幾月の間

に初めて戀の心の切なさを知つたのでした。
　このことに就いてはお蔦さんが死ぬ時にも遺言のやうにしてこまごまと云ひ殘していつたと云ひます。
　戸田は東京へ行つたまゝそれからたうとう半年ほど歸つて來ませんでした。友菊の方はいろいろな都合で幾度となく京と東京の間を往返しましたが、その噂でみても戸田は東京で散々な生活をしてゐたらしかつたのでした。
　戸田の家が少しづつ左前になりだしたのは戸田が半年の放埓な生活を東京で送つてゐる間のことでした。あれだけの家のことですから戸田の費つた金ぐらゐでどうのかうのと云ふのでは無論なかつたのでせうが、新聞などで書立てた處によると戸田が東京で散々株で失敗してその跡尻が家まで報つて來たからだといふことになつてゐました。併しお蔦さんが戸田の口から直接に聞いたところでは、倒産の原因は全く母にあつたのだと云ひます。母は家の資産を山口の手に委ねて置いたので、彼はいゝ氣になつて、朝鮮へ山を買つたり、又會社時代から仲間だつた大阪の辯護士と謀れあつて堂島へ手を出したりしたので、それが一年々々と戸田家の創傷になつて、戸田が東京から歸つて來た頃にはもうとり返しのつかないやうな狀態になつてゐたのでした。そして張本人の山口は戸田が歸洛すると引違へに、その辯護士と相談して、法律上何等のひけめもないやうにして置いて、自分は戸田家を資本に堂島でまうけた可成りな金を懐にして、先斗町に置いてあつた藝妓あがりの妾をつれ朝鮮へ高飛びをしてしまつたのでした。どうせ後家さんを綾なすくらゐな惡徒ですからそれくらゐなことは無論やりかねなかつたでせう。それに戸田の母はその以前にも軍人あがりの妙な男と噂をたてられ、五千に近いほどな手切金を取られた事もある人だと云ひますから、お蔦さんにはどうしても山口の仕業だと云ふ方が眞個のことのやうに思はれてならないのでした。極道をはじめるまではほんのぼんちで、戸田はさうした一家の秘密を少しも知らなかつたのでした。
　家の工合が惡くなりだしてからの戸田は殆んど常人の心では律しられないやうな行動ばかりしてゐました。東京から歸つて後はまるで人間が變つて、あんな温和しやかな、初心な男が、萬事につけ荒々しく太々しくなつて、もうとてもお蔦さんなぞの手にはおへませんでした。時々親子で激しい云爭ひをしては母親を足蹴にしたりすることもあつたと云ひます。又或時などは家へ火をつけて焼いてしまふと云つて、石油の罐を座敷へぶちまけて狂ひ廻つたことなどもあります。漸次と募つてゆく自暴自棄はそれに薪を添へて、家ですらそんな風ですから廓へ來てからの彼は手のつけられぬ亂暴な遊びをします。その間にたつてひとり憂い辛い思ひをしたのは友菊で、あれほどお俠だつた彼女が、まるで世話女房のやうに容色まで痩せ衰へ、始終沈んだやうな眼つきをして戸田の後にくツついて歩いてゐる有樣は誰の眼にもいぢらしく映つたと云ひます。戸田が醉つて亂暴をしだすと、彼女はいつもその拳を身に受けて泣きながら止めます。その眞實は折々お蔦さんをまで涙ぐませることがありました。
　散々な放埓をやつた揚句、戸田は到頭金につまつて、それから半年も經たないうちに祇園町の茶屋々々からせかれてしまひました。吉蔦だけは前々からの關係があるので、お蔦さんは自分で廻るだけのことはして客にしてゐました。友菊は幾度かお蔦さんに强意見をされましたが、さうなり果てても猶戸田が思ひ切れず、祇園町の藝妓としては出來ない苦勞までして戸田を庇つてゐました。昔は何のかのと浮名を唄

はれた朋輩達も其頃は戸田といふとまるで腫れものにでもさはるやうに避けて歩いてゐるなかに、友菊だけは自分の體をないものにして盡してゐたその眞實をお蔦さんは今でも涙ぐんで話すのでした。

戸田の家は姻戚先にあたる丹波の人が出て來て、禁治産の訴訟を提起するやら、不法な書類の整理をするやらいろいろに手を盡してみましたが、併し大厦の倒るゝ時一木を以て支ふる能はずで、到頭その翌年の春、戸田が吉蔦の門を潜るやうになつてから三年目の秋に、大阪の債權者の手で家邸地所ぐるみ競賣に附せられることになつてしまひました。それでも競賣の方法が極めて温和だつたのでいゝ買手がついて、昔から持ち傳へた什器や高價な骨董品などが賣りに出た時などには競賣者自身も驚くほど莫大な上りがあつて、とにかく僅かながら後家さんと戸田だけは一生安々と食つていけるだけのものは引殘され、彼等はそれをもとに烏丸を引拂つた後は南禪寺のかたほとりに小さな家を借りてそこで淋しい朝夕を過すことになつたのでした。

競賣の札が落ちた日には、お蔦さんも何んだか自分までが世の浮沈の波に漂はされてゐるやうな悲しさにせめられて、その朝早くお參詣にいくといつて家を出て、烏丸の邸の前へ樣子をみにいきました。土塀の横に穿たれた小門からは宰領のやうな男に指揮されながら戸田家と書いた大形の箱やら、何が入つてゐるのか菰包をした屛風やらがむさくろしい荷車に積まれてひき出されて來ました。月末々々には書き出しを持つて入つて行つた内玄關の格子戸を取外され、そこには品書きを手にした人達が上草履のまゝ忙しさうに出たり入つたりしてゐます。その朝は薄霜の置くやうな寒い風の朝でしたので、庭先に落ち散つた紙片の動いてゆくのまでが妙にうら悲しく、お蔦さんは明るい朝の日影に照らされた邸の甍をみてゐるうちに幾度か涙を押拭はずにはゐられなかつたと云ひます。

南禪寺の家へ引移つてからはさすがの戸田も破産の噂が洛中に高いだけに身を恥ぢてか祇園町へはふつつりと姿をみせなくなりました。吉蔦へはそれでも時々こつそり人目を忍んで遊びにやつて來て、帳場の奥の間へ入り込んではお蔦さんが氣の毒がつて出す一本か二本の酒に陶然と醉つて身のなりゆきの愚痴ばかりこぼしてゐました。そんな時にはお蔦さんも身につまされて、惡いとは知りつゝも自前で友菊のおはなを買つて一時間でも三十分でも逢はせてやるのを常としました。二人はもう茶屋の座敷では逢へないやうになつてゐましたので、時々こつそり首尾をしては何處か廓の外で逢つてゐたらしく、さうした折々は眼にあまるほどの情愛が二人の樣子に現はれてゐました。お蔦さんもそればかりは粹をきかせて眼を瞑つてゐるより外はありませんでした。そして戸田も少し醉つて來ると、昔のやんちやな氣になつて我儘を云ひ出すやうなこともありましたが、併し肩身が狭くなるにつれ氣も挫けて、お蔦さんの云ふことには少しも抗はず、時々は意氣地がないと思はれるほど涙もろくなつてゐました。昔は盛んに取卷いて遊んでゐた村はんも北島も戸田が東京へ行つてからはすつかり疎々しくなつて、殊に村はんの方には友菊の一件があるので、その頃では戸田を惡く云ふ噂は大方この二人から出ると云つてもいゝほど、淺猿しい仲になつてゐたのでした。そんなことからぼんち氣質の戸田

も人の心の薄情さをしみじみと覺えて、漸次と世間に對する別な眼があいて來たのでした。そして村はんと秀奴との間に關係が出來たと云ふ噂が聞えて來た時なぞには、唯默つて苦笑ひをしてゐたほど氣弱くなつてゐたのでした。

友菊もはじめのうちは隨分戸田の厄介にもなりましたが、戸田が零落になつてからは身の皮を剝いでまで彼を助ける一方だつたので、その間に不義理はかさむ、それに戸田との浮名がやかましくなつてからは折角ついてゐたお客も落ちる、おはなの賣れ高も數へるほどに落ちてしまつたので屋形のお女將はんも到頭愛想をつかして、もう戸田の家が競賣にでるずつと以前から彼女をひどく責めだしたのでした。根がやかましい家のことですから、さうなつた以上は唯では置きません。散々彼女をいびつた末、警察にまで突き出すと脅して到頭彼女の體を幾百圓の金と引換へに遠い朝鮮へ住みかへさせることにしてしまつたのでした。

それを聞いた戸田の心はどんなでしたらう。今では賴りにするのはこの友菊一人で、どんな悲しいことがあつても彼女の顏さへみれば慰められるほど思ひをかけてゐた女をば無情ない世間の義理は理が非でも彼の手から奪ひ去つてしまはうとするのです。戸田は苦しい中から少しばかりの金を死ぬ思ひで工面していろいろ手を盡してみましたが、どうしても友菊を引止めることは出來ませんでした。お蔦さんも思ひ迫つた二人のうへに若し忌はしい情死沙汰でも起つてはと云ふので、自分も出來るだけの懸合ひはしてみましたが、意地になつた屋形はどうしても云ふことを聞いてくれません。總ての手段は仇になつて、心の底から自棄になつた友菊は祇園町にもうそろそろまた都踊が春の宵を色めかせようとする頃になつて到頭たつたひとりその春をあとに見捨てて遠い異國の空へ身を賣られていつたのでした。

お蝶さんは今でもはつきり覺えてゐると云ひます。友菊が愈々京をたつ日は都踊の初日で、祇園町の家々にはもう艷めかしいつなぎ團子の紅提灯が宵闇にほのめいてゐました。今と違つて四條もあふさきるさの人影は賑やかでも、町筋は何處となくしんみりと古めかしかつたので、さうした晩には町の角に佇む闇のなかにも春の動いてくるのがそれとなくみつめられるやうだつたのでした。

友菊はその二三日前にもう朝鮮からはるばる出て來た判人の手に渡つてゐましたので、ひよつとして戸田に逢はせて大金を拂つた玉をば逃してしまふやうなことでもあつてはと云ふ懸念から、七條の寺裏の安宿にこつそり隱されてゐたのでした。さうとも知らず鵜の眼鷹の眼になつて行方を探してゐた戸田はほとほと根をきらして、せめて立つ前にもう一度ぐらゐ顏をみせてくれてもとその薄情を恨むやうに吉嶋へ來ては愚痴をこぼしてゐました。その晩もう汽車が出る間際になつて、友菊はついてゐる男をどう說き伏せたものかその男をつれてこつそり吉嶋の門口までやつて來ました。

その時お蝶さんは店で客へ出す膳の支度をしてゐましたが、門口で、

「お蝶はん、お蝶はん。」と、友菊らしい聲がするので、慌てて飛び出して見ますと、丁度それからは四年昔の同じ宵に、戸田が村はんにせめられてどうしても茶屋の門はくぐらぬと云ひ張りながら隱れてゐたあの店格子の薄闇のところに友菊が背の高い鳥のやうな顏をした男に護られながらしよんぼり佇んでゐました。

「ほ、友菊はん。まあお入りやすな。」お蝶さんはその姿をみただけで胸が塞つて、やつとこれだけ云ひましたが、友菊は、

「へ、おほきに。あの今夜は來てやはらしまへ

んか。」と、おづおづ戸田のことを聞きました。

「あ、いんまの先ちよつと來てやはりましたけど、これから高倉までいくたらいうて歸らはりました。ほんまにどんなことどしたえなあ。」

友菊はそれをせめてもの望みに態々吉蔦まで無理をしてやつて來たらしかつたのですが、そのあてがはづれると急に悄れかへつて、

「ほんまに運がないのどつせなあ。もうちよつと早う來たらお目に懸れたんどつせな。」と涙聲で云つて、「あの私、この次の汽車でいきますさかいな、ちよつとお別れに來たんどつせ。もう戸田はんにも一生お目にかゝれまへんやろと思ひますさかい、どうぞあんたはんから宜しう云うといておくれやす。ほてあんたはんもどうぞ私を忘れずにゐとくれやす。生きてゐるうちはおたよりをしますけど。……」と、そこまで云つて嗚咽をのみこみながら急に言葉をきつて顏を伏せてしまひました。

そこへお蔦さんも出て來て、二人はどうにかして一日でも戸田に逢はせたいとは思ひましたけど、その時になつてはもうどうすることも出來ないので、お互に涙を絞りながら飽かぬ別れをするより外はありませんでした。

「長いことえらい御世話になりまして、……さいなら。」と、云つて、やがて友菊はもう一度お蔦さんに頭をさげました。

「ほんならせいらい體に氣をつけて、又早う京へ歸つといでやす、待つてるさかいな。」と、氣の強いお蔦さんも泣きながら云ひましたが、友菊は、

「おほきに。」と、云つたぎり到頭そのまゝ細手の通りを停車場の方へ別れていつてしまひました。その時、紅提灯の薄闇をばさも人目を忍ぶやうにすごすごとうなだれながら步いていつたその後影、褪えた紫紺色の縮緬の羽織の撫肩を思ひだすとほんまに堪らなくなるといつて、一心になつて話してゐたお蝶さんもその時言葉をきつて淚に咽んだのでした。

それからは寄るとさはると可哀さうな友菊の噂ばかりで、戸田には少しも關係のない妓達までがよくその噂では貰ひ泣きをさせられたのでした。

遠い朝鮮へ行つた友菊からは彼地へ安着したといふはがきと、それからもう忘れた時分になつてから京城の何とか云ふ料理屋の繪葉書に無事で暮らしてゐるから安心してくれといふやうなことを書いて寄越したつきりその後はふつつりと消息が絶えてしまつたのでした。無論戸田のところへは詳しい便りもあつたのでせうが、それから後は戸田もぱつたり吉蔦の門をくぐらなくなりましたので、その後の樣子はかいくれ知れませんでした。

戸田が愈々性根を入れ換へて再び家運を挽回するために上海へ向つて旅立つて行つたのは友菊が朝鮮へ行つてから五箇月ばかりたつてからのことでした。もと亡父の關係してゐた會社の重役達が心配して、彼はその人達の世話で上海の支店詰めになることになつたのでした。吉蔦へ別れに來てくれた時には、昔と違つてすつかり男振りの下つた彼の顏にも何處か生々とした光があつて、

「今度こそ私もしつかりするぞ。今度めにはどんなことがあつても昔の戸田になつて歸つてくると思うて待つてとくれやす。」と云つて肩をいからして見せたりしました。

神戸を出帆する日には お蔦さんの代りにお蝶さんが波止場まで送つていきましたが、見送人とても僅か四五人しきやゐない寂しさに、お蝶さんは蒼ざめた顏に涙を一杯浮べながら大汽

船の舷に佇つてゐる戸田の顔を見た時には、果して此の人が生きてもう一度京へ歸れるだらうかとそんな心細いことも考へられたのでした。その時戸田のお母さんにも逢ひましたがこれもしばらく見ないうちに見る影もなく年老つて、歸りに一緒の汽車に乘り合はせても始終涙つぽい愚痴ばかりこぼしてゐました。これがあの烏丸の四條で分限者とはやされた戸田の一家の末路かと思ふと、お蝶さんは廓で育つただけに浮ついた水商賣が心底から嫌になるほど世の浮沈が情なく思はれたのでした。前後五年と云へば決して長い月日ではありません。その間にもかうした激しい流轉があるのかと思ふと、世の中ほど頼りにならぬものはないとその時お蝶さんはつくづく浮世の無常の速を感じたのでした。

お蝶さんはそこまで話して來ると急に言葉をきつて、

「もう餘り長うなりますさかいこれでやめまへう。こんだけではとても筋が立ちまへんけど、そこはあんたはんのことどすさかい、あんばい察しとくれやす。」と、云つて寂しく笑ひながら息つぎにさす私の盃を受けて、「そやけど、戸田はんも人の噂では今も上海にはおゐしまへんのやさうにおつせ。なんでも遠いとい南洋のジャワたら云ふところへいとゐやすさうにおすけど、此頃ではちよいとも手紙も來いしまへん。ほんまにそんな遠いところかてこんな晩には月が出まつしやろに、今頃はどないにしとゐやすやろなあ。」

私が友達はどうなつたらうと訊ると、お蝶さんは又急に涙ぐんで、

「あの人もどないにならはりましたやろ。その後はちよいともたよりもおへんよつて、私、時々ふつと死なはつたんやないやろかと思ふことがあるのどつせ。なにせ今お話したなかでも噂の高かつた秀奴はんは一昨年の秋肺病で死なはりましたし、うちのお母はんも去年死なはりましたし、もうあの時分の人は彼是三年ほどの間に皆それぞれになつてしまはりましたさかいなあ。」と云つて親思ひのお蝶さんは又亡きお蔦さんのことを思ひ出しながら新らしい涙に暮れました。

私はその話をきくと今更のやうに泡沫夢幻のたとへにもました果敢ない世の樣が悲しく思はれてなりませんでした。わけても浮沈の迅速な廓の別世界は私に詩のやうな匂ひを覺えさせ、かうしてゐるうちにもあの艶めかしい祇園町には眼にみえぬ運命の流轉の波がひたひたと打寄せていくやうな氣ばかりして頻りに寂しい心持がするのでした。さうして何處からともなく聞えてくる絃歌のさんざめきが、その晩は色と苦の世界から響いてくる寂しい挽歌のやうに、却つてもの悲しく私の胸の底へしみ渡つてゆくのでした。

お蝶さんはいつの間にか西へ廻つた月の光が鴨川の夜岸に點る燈影を紅く濕ませてゐるさまを打眺めながら、

「もう夜が更けましたな。」と、呟くやうに云ひましたが、その時河原の草叢からは提灯がひとつひよつこり浮き上つて來て、黑い人影が何やら泣くやうな聲で唄をうたつていきます。耳をとめて聞くと、それは果敢ない運命の戯れを日毎夜毎に一錢二錢の金にかへてこの世のたつきを求めてゐるあはれな辻占賣でした。

「辻占よろしいか、辻占。花のたよりに戀のつじうら。……」

唄ふやうな泣くやうなそのかぼそい聲は薄寒い春の夜風のなかをいつまでもいつまでも聞えてゐました。

霧の小唄

一

小澤と雪江は、もう彼此れ三時間も前からカッフェ・スヾランの二階の一室で、眞白な卓布のかゝつた卓を中にしよんぼり對向ひに腰を下ろしてゐた。小澤は兜町の店が退けると直ぐに、一寸所要があつて丸の内の十五銀行の支店まで廻つて、五時に丸ビルの入口で待ち合はせてゐるといふ雪江に逢つて、それから一緒にぶらぶら又日本橋へ歸つてきて、到頭兜町の裏河岸にあるこのスヾランへ御輿を据ゑてしまつたのであつた。もう二人は食事も濟ましてウヰスキイを入れた紅茶をちびりちびり飲みながらいろいろに話し合つたが、どうしてもうまく話が纏まらないので、いくらか焦れ氣味で、兩方ともあんまり口數もきかずに唯意地づくで坐つてゐるといふ風があつた。

戸外ではつい今しがたから降りだした霧雨がしとしとと音もなく硝子窓を濡らせてゐる。すぐ下は堀割になつてゐるので向河岸の火影はまるで水中花のやうにぼうッと滲んで、薄白い河面にぢッとしてゐる泊り船の姿も怪物のやうに眞黒くぼやけてみえてゐる。大川の方からは時々汽笛の音が寒さうに聞えて、鎧橋を渡つてゆく電車の響音は時を限つて、どッどッと重苦しく響いて來る。それは十二月の末によくあるやうな、底寒い、それでゐて吹く風もない陰鬱な晩であつた。

雪江は少し醉つて來たとみえ、眼のまはりをぼうッと紅くして、頻りに卓布のうへで白い指を弄んでゐたが、やがてふつと顏を上げて、どうかしてこの物憂い、重ぼッたい心持を拂ひ去らうとするやうに、

「ねえ、小澤さん、あんたそんなことを仰有るけど、やつぱりあんたにだつて、一種の社會意識に囚はれて被在ると思ふわ。人が何を云つたつて、そんなことちつとも構やあしないぢやありませんか。何うせ世間の人は他人のことなら無責任に何んとでも云ふんですもの。」と、云つて又美しい眼を卓のうへへ落しながら、「そりやあなた、私のやうなものが傍についてゐちやあなたの出世のお邪魔になるかも知れませんけど、でももうかうなつてしまつたものは何うにもなりやしないわ。何も私はあなたと結婚をしようつていふんぢやないんですもの。結婚は抜て置き、あなた、あなたを身動きが出來ないやうに束縛しようなんていふ心持はさらさらないんですもの。露骨に云へばあなた、今迄のことはあなたが唯私の脣に接吻をして下すつた、たゞそれだけの事實ぢやありませんか。」

小澤は神經質らしい細面の顏に、何處か沈痛な色を浮べて、

「いや、雪江さん、それが君、君の可けないところなんだよ。僕はこれでも眞面目に話をしてゐるのに、君は先々と反抗的に自棄なことを云ふから可けないんだ。それぢや君、まるで實も花もなくなつちまふぢやないか。何故君はもつと素直な、純な心持になれないのかなあ。」

「あら、私、隨分ねえ、私も先刻からこれで隨分考へながら話をしてゐるつもりなのよ。反抗的だの、自棄だのッて、そりやあなた、あなたの誤解だわ。あなたが何んでもさういふ風に解釋なさるから、つい事が面倒になつてしまふのよ。あなたこそもつと素直に考へて下さる必

要があるわ。」
　小澤は仕方がないといふやうに苦笑ひをして、
「ぢや雪江さん、兎に角ぎりぎりの處、何ういふことになるんだね。僕から提出したあの條件に對して、君は正直のところ、何ういふ態度で返事をするんだね。」と、彼は椅子の椅背へ凭れながらいふ。今流行の粋な縞柄の背廣の胸では白金の細い鎖がきらりと光つた。
　雪江はぢいッと指環をみつめて、
「そりやあなた、もう何度も何度も云つてゐるぢやありませんか。あなたが何うしても別れるつて仰有るんなら、私、仕方がないからこれつきりの御縁だと諦めますわ。私は、私はから見えても自分ぢや強い女だと信じてゐるんですもの。まさかの時になりや諦めは早うござんすわ。」
　小澤は指の先で頭髮をやけにいぢりながら、
「それで、もうさうなりや僕に對して、何にも條件はつけんと云ふんだね。別れるなら別れるで、默つて別れて呉れるんだね。」と、駄目を押すやうにいふ。
　雪江は一寸云ひ淀んで、
「え。」と、簡單に答へたが、やがて、「ねえ、小澤さん。あの私は、唯ひと言云つて置き度いことがあるんですのよ。未練だと思はないで頂戴。私にそれはね、他のことぢやないけど、あの、私には母つてものがありますからね、母に生活の苦勞をみせない爲めには、私どんなことでもしなけりやなりませんわ。ですからね、私今も一寸お話したやうに、あの、あなたと手が切れたら、すぐに私、大阪へ行つてしまひますわ。大阪の方の店へ行けば、此方にゐるより月給もいいんだし、それに見ず知らずの土地だから私、却つて生活がしいゝと思ふんですの。今迄はあなたに月々少しづつでも面倒を見て頂いてゐたから、まあ何うやら見得も張つていけたけど、あなたにお別れしてしまへば、もう私明日からすぐに困るに極つてゐるんですもの。」
　小澤は眉根をぴくぴくさせて、
「雪江さん、君もほんとに隨分分らない人だね。その方のことは、今も僕があんなに詳しく話して聞かせたぢやないか。別れるとなりや君が困るのは知れてゐるんだから、今迄のやうに月々金の方の面倒だけは見てやるつて、あれ程僕は説明して聞かせたんぢやないか。どうしてさう分らないんだらうなあ。」
　雪江はそれを押へて、
「いゝえ、あなた。あなたの仰有ることは私にやようく分つてゐますわ。そりや私、あなたの思召しは有難いと思つてゐるんですけど、ねえ、小澤さん、まあ、どうかあなたも私の立場に立つて考へて見て下さいましな。自分の戀人が新たに結婚する爲めに自分を捨てていかうといふのに、いくら先が深切でして下さるとは云つても、その人からどうして生活の補助をして貰へるでせう。それぢや私女の意地が立たないと思ふわ。どうせそれ位なら、いつそ前通りの關係を繼續していつて、そのうへで補助をなして下さるがいゝぢやないの。それなら話は分つてゐるけど、さもないものをどうしてそんな、そんな意氣地のないことが出來るでせう。小澤さん私、そんな女ぢやあないわ。」と、嘲るやうにいふ。
　小澤は少し腹立たしげに、
「どうも實に話が分らないんだなあ。それならいつそそれで、君のいゝやうにするさ。大阪へなりと何處へなりと勝手に行くがいゝぢやないか。そんな辛い思ひをさせちや濟まないと思つて、僕がこれ程心配してやつてゐるのに、それが分らないんなら、僕はもう手を引くよ。どうでも君の考へ通りにするさ。」と、云つて、ぱッと

燐寸をすつて、細卷の金口へ火をつける。
雪江はその顏をあからめもしずに見詰めながら、默つて下俯ばかり向んでゐたが、少時すると、寂しく微笑んで、
「ねえ、小澤さん。ほんとにいつそその方がいいわ。貴方もさういつて何處までも私を分らないものにして、きつぱり話をつけておしまひなさる方が却つて跡腐れがなくていゝわ。さうすりや私も思ひ切りがつくんですもの。なまじツかこゝでお金のことなんかで縁がつながつてゐると、却つて雙方の爲めにならないわ。」と、云つて、何うしたのか、そのまゝついと椅子から立上りながら、「ねえ、あなた、それぢやもう此處いらで幕を下ろして、そろそろ歸らうぢやないの。私のやうな分らずやといつまで話して被在つたつて、それこそ限りがないわ。もう何時だらう。」と、云つて、腕時計をみる。
小澤はそれでも身動きもしずに、煙草の煙をふうッと空へ吐き出してゐたが、よくみると、彼の眼にはうすく涙が滲んでゐるのであつた。
雪江は態と見ない風をして、
「おや、もう九時だ。これから電車で歸るとたつぷり一時間半はかゝるから十時半になつてしまふわ。」と、獨語のやうに云つて、「ねえ、小澤さん、あなたまだ此處に被在るの。そんならそれで私、ひと足お先に失禮するわ。」と、何氣ない調子でいふ。
小澤はその顏を涙の眼で睨めつけてゐたが、やがて、
「雪江さん、ぢやこれでもう萬事話はついたことになるんだねえ。もう何にも思ひ殘すことはないんだねえ。」と、いふ。その聲は調子を張つてゐながら、何處か涙つぽく聞えた。
雪江は態とらしい嬌態をして、
「え、これでもういゝんですの。伺ふことは伺つたし、私、申上げ度いことは申上げてしまつたし、……」と、云つて、顏を伏せる。
小澤は煙草を半分でよして、ぽいと灰皿へ投げ込みながら、
「あの、雪江さん、それで君は、いつ頃大阪へ立つんだい。」
雪江は顏を伏せたまゝ、
「さあ、それはまだよく分りませんけれど、成るたけ急いで行き度いと思ひますわ。明日早速常務さんに御相談してみて、その時の樣子で何んとか極めますわ。」
「ふむ、ぢや、まあ兎に角、君の意志がさうなら、僕も無理をしてまで引留めないよ。いゝやうにし給へ。」
雪江は合點いて、
「あの、それぢや私、道が違うござんすからひと足お先に失禮いたしますわ。どうもいろいろ御馳走樣になりまして。」と、急に改まつた聲音で云つて、彼女はそのまゝついと扉の方へ出ていつてしまふ。彼女は小澤がもう一度呼び留めるかと思つて、歩きながらも聞耳をたててゐたが、何の氣勢もないので、態と大急ぎでどたばた階段を下りて、店口へ出てしまつた。
「あら、もうお歸りで御座いますか。」と、云つてバーにゐた女給の一人は慌てて此方へ出て來たが、雪江はにつこり笑つて、そこに傍寄せてある下駄を穿きながら、
「どうも大變に長居をしてしまつて、又そのうちに。」と、口の中で云つて、そのまゝ扉を開けて戸外へ出てしまつた。
女給は後から、
「あら、あなた、あの、降つて居りますから、お俥をさう申しませう。一寸どうか。」と、いふのを、雪江は笑顏で押へて、
「いゝえ、いゝのよ。私、そこの角へ出て、自分で乘りますから。」と、云捨てて、取引所の横手の道を低い下駄でばたばた驅けていつてしまつ

た。朝出る時に洋傘だけは用意して來たので、彼女は十間ほどいくとそれを擴げてさしかけたが、その時、ふつと後を振返つてみると、スヾランの二階の窓硝子には黒い人影が映つて、ぢいツと此方を覗いてゐるらしかつた。その人影はたしかに小澤であつた。

それをみると、今迄堪へに堪へてゐた胸が俄に込み上げて來て、雪江は思はず聲を呑んで咽ぶやうに啜り泣きをしだしてしまつた。もうさうなると、熱い涙は先から先と湧いて來て、ところどころに點つてゐる軒燈の光が濡れた道にぼうツと映つてゐるのが夢のやうにみえ、運ぶ足もいつかしら竦みがちになつてしまふのであつた。

二

雪江は何處を何う歩いたか自分でも知らないうちに、横合からだしぬけに自動車の警笛が消魂しく聞えたかと思ふと、彼女はもういつかしら日本橋の橋詰めまで來てゐた。今迄は霧雨が降つてゐるとばかり思つてゐたのに、明るい大通りの燈影の中へ來てみると、雨はいつの間にか雪に變つて、切斑のやうな白い雪片がちらりちらりと彼方でも此方でも舞ひ散つてゐた。寒氣は俄に酷しくなつて、往來の人影はいづれも前屈みにせつせと歩いてゐる。

雪江の家は府下の高圓寺にあるので、彼女は白木屋の前から市内電車に乘つて、鍛冶町までいつた。そして神田驛から今度は省線に乘りかへて、それでずつと市外の方へ運ばれていつた。もう夜が更けてゐるのと、それに天氣が天氣なので、さすがの省線の電車もがらがらに空いてゐた。で、雪江はなるべく人の出入りのない隅の方の座席へいつて、そこへ腰をかけながら肌にしみ入る寒さに裾をきちんと合はせて兩袖を胸のうへでしつかりと合はせてゐた。

雪江は漸次と心が落着いて來るにつれて、今夜のことがはつきり胸に返つて來た。涙はもう乾いてゐたが、瞼が妙にしばしばするので、成るべく彼女は顔を上げないやうに、頭を襟の中へ埋めてゐた。さうしてゐるうちに彼女は何かなしに感傷的な心持になつて、小澤とかうなる迄の長い月日のいきさつがはつきりと思ひ返されて來るのであつた。

雪江が丸の内の仲通りにある東亞商事へ常務づきの女事務員として入社したのは、もう三年ほど前のことであつた。彼女は女學校を卒業する前の年に父親を喪つてしまつたので、學校生活を離れるともうすぐから世間といふものに直面しなければならなかつた。東亞商事へ入るにも別に引きがあつた譯でもなく新聞に出た募集記事をみて打突けに訪ねていつたのだが、幸ひ十人ばかりの中から選拔されて、譯もなく入社することが出來たのであつた。

初めはお茶汲みから仕上げて、それから漸次に引上げられ、此頃ではもう常務にも十分信頼されて、可成り面倒な仕事までも任せられるやうになつてゐた。それでも收入は僅か六十圓ばかりで、年二期の賞與を入れても到底彼女は母と二人の生活を支持していくことは困難であつた。併しまあ何を云つても彼女の父親といふのは官吏として相當な地位にゐたので、あとに殘していつた公債類やら恩給のやうなものも多少はあつて、それで何うやらかうやら月々の足りないところは誤魔化して暮らしてゐたのであつた。家賃のやうなものにしても、到底二十圓より上は出せないので、仕方がなしに郊外の淋しいところへ引込んで、それこそ端からみたら火の消えたやうな生活をしてゐたのであつた。

そこへもつて來て、丁度去年の春、母親が痰咳といふ難病に罹つて、まる二月病院通ひをするやうなことになつたので、雪江は背に腹はかへ

られなくなつて、大分公債も賣る、會社の方へも前借なぞもして、いよいよ生活が立ちゆかなくなつてしまつた。その苦しい最中へひよつこり現はれて來たのが、今の小澤であつた。

小澤は高商出の商學士で、もう長いこと、兜町の山勝の店にゐた。主人の山勝とは伯父甥の仲なので、從つて羽振もよく、二十九といふ年の割りにしては金廻りも水際だつてゐた。

小澤はまだ獨身で、牛込の砂土原町の山勝の邸内にある借家の一軒をかりて、そこで婆やと女中をつかつて、至極暢氣に暮らしてゐた。

小澤は東亞商事の常務とは年こそ違へ、同窓の關係で、しかも常務が株の賣買をする場合にはいつもその手先になつて働いてゐたので、會社へも一日置き位には出入りしてゐた。で、雪江ともいつかしら顏馴染になつたのであつた。

雪江の母親の病氣が稍快方に向ひ出した或日のこと、小澤は會社へ來た歸りに、雪江とひよつこり同じ電車に乘り合はせた。小澤には前々からその氣があつたものとみえ、一緒に夕飯でも食べないかといふやうな機から、二人は牛込で電車を下りて、その晩は神樂坂にある鳥屋へ上つたのであつた。

小澤は大分道樂の方も盛んな男なので、誘ひをかける手段も手に入つたものであつた。雪江はそれまでまるで男の關係はなかつたので、初めのうちは恐い一心で、うつかり氣を許さなかつたが、併しもう母親の病氣ですつかり氣が惑亂してゐるさなかだつたので、つい人情らしいことを云はれると、引入れられて、今の悲しい境遇のことを打明けて小澤に物語つてしまつた。

小澤も情に脆い男なので、終には涙を流してしんみに聞いて吳れた。そしてそんなに困つてゐるのなら、まさか高金を上げると云つても受けられまいから、無利子で要るだけの金を貸して上げようと云つて吳れた。その時の深切な言葉は、雪江にとつては全く地獄で佛に逢つたよりも嬉しかつた。で、彼女はその場でおづおづ彼から五十圓だけ借りたのであつた。

そのことがあつてからは、もう雪江は唯一途に小澤を賴りにするやうになつていつた。それからも二十圓三十圓と彼女は小澤の手から融通して貰つて、やつとその當座の苦しさを凌いでいつたが、そのうちにいつかしら知らず識らずの間に、彼女は自分の方からも小澤を戀するやうになつていつた。

二人の間に切つても切れない關係が出來たのは、去年の夏のことであつた。雪江はその時小澤に誘はれて日歸りのつもりで箱根へいつたのがつい泊ることになつて、到頭二人は逃れられない運命に自ら落ちていつたのであつた。それからはもう毎日毎日にきつと遠出をするやうになつて、二人の間は益々深くなつていく一方であつた。雪江は世間は何う誤魔化しても、家にゐるものにはいくら隱してもかくしおほせる筈がないので、到頭母親にも打明けて、彼女の家ではもう小澤のことは公然になつてゐたのであつた。二人は無論その時には、結婚といふことを豫想してゐた。

一年の月日は夢のやうに過ぎ去つていつた。二人にはその一年が實に樂しかつた。ところがついこの十月の初旬になつて小澤には突然他に結婚の話が持ち上つて來たのであつた。その相手といふのは、山勝と肩を並べてゐる兜町の半田の娘で、今年十九になる評判の美人であつた。それも向うからの強つてといふ望みで、媒に立つたのは帝國銀行の頭取をしてゐる宮越であつた。

小澤は初めのうちこそ強がつて、そんな話には耳も傾けないやうなことを云つてゐたが、

漸く話が進んで山岸の伯父までがやいやい云ひ出したので、小澤の心もいつか動いて來た。いづれの點から云つても、雪江とは比較にならない程い〻相手なので小澤が迷ふのも全く無理はなかつた。併し小澤はさうは云ひながらも雪江のことだけは何うしても思ひ切れないので、その話は有耶無耶で今日迄持越してしまつたのであつた。今日こそ何とか話を極めよう、極めようで二人はもう六七度もその爲めに無駄な逢ふ瀬を重ねてゐるのであつた。

三

雪江にしても、ちいツと心を冷たくして考へてみると、到底小澤と別れるなんていふことは出來さうもなかつた。先刻はあ〻やつて氣の强いことを云つて、到頭別れて來てしまつたが、併しもうこれツきりになるものとは何うしても思へなかつた。又此方から誘ひをかけるか、或は向うから呼び出しが來るかで二三日中にはもう一度はきつと逢へるのではないかといふやうな氣がしてゐた。

雪江がそんなことを考へてゐるうちに、ふつと電車が止つたかと思ふと、車窓の外では、「高圓寺」「高圓寺」といふ驛員の呼び聲がしてゐる。

彼女ははツと我に返つて、可笑しいほど慌てながらそ〻くさ電車を下りた。

いつものやうに改札口で定期券をみせて、停車場の外へ出ると、もう戸外はさかんな降りになつてゐて、往來の片蔭にはうつすりと積雪がみえてゐる。方々の新開の店屋も大方は戸を下ろして、何處か見も知らぬ町のやうにしんしんと更け渡つてゐる。雪江は洋傘を擴げて、寂しい泥濘道をとぼとぼと歩いていつた。店屋の續いた通りから横へ曲ると、もう四邊は眞暗で、人の往來なぞはまるで途絶えてゐた。

雪江の家はそこから地均しをした畑地の中をぬけて、雜木林のあるだらだら坂を下りた谷間にあるので、彼女は通ひ馴れた道ではありながら何んだか恐くて、後も振返らずに大急ぎで歩いていつた。とある邸の角から見下ろすと、すぐ下に杉垣根をした小さい平家がみえて、そこいらには彼女の家の軒燈がたつた一つ闇の中に點つてゐるつきりであつた。

やつとのことでわが家の格子戸まで辿りつくと、彼女はそこで先づ雪を拂つて、格子戸を開けた。と、もう遠くから足音でそれと知つたとみえ、母親はいきなり襖を開けて、ごほごほ力のない咳嗽をしながら、

「お、雪江。お歸り。」と、云つて、「私あんまり遲いから又今夜はお泊りかと思つてゐたよ。まあ、よく歸つて來て呉れたねえ。さぞ寒かつたらう。さあ、早くお上り。」と、さもさも待ちかねてゐたやうに云ふ。

雪江は電燈の光に十分照らし出された色澤の惡い母親の顔をみると、妙に眼が熱くなるのを、やつと我慢しながら、

「母さま。どうも遲くなつて相濟みませんでしたどうも生憎、惡いものが降り出したもんですから。」と、云つて、泥にまみれた足袋の始末をして、そのま〻上へあがつていつた。

明るい電燈の光の中へ入ると、母親はさも驚いたやうに、

「おや、まあ、お前大變な泥濺ぢやないか。まあ、羽織をぬいで、着換へかへおしな。」と、いふ。

雪江は一寸後をみて、すぐさま羽織をぬぎながら、

「何しろ母様、下駄があれでせう。だもんだからいくら氣を注けて歩いてもこれなんですもの。」と、云つて、「まあ、い〻わ。どうせもうすぐに寢るんですから、構やしないわ。このま〻でゐませう。とにかく私、凍え死にさうです

わ。」と、云ひ云ひそこに仕懸けてある炬燵の中へ入つてしまふ。

母親はちらりとその顏をみて、機嫌をとるやうに、

「ほんとにこんな日にはお勤めも辛いよねえ。私も家にゐて氣が氣ぢやなかつたよ。それよりも御飯はどうしたい、もう濟まして來たの？」と、やさしく訊く。

雪江は合點いて、

「え、もう濟まして來ましたわ。」と、態と氣輕に云つたが、母親は又その顏をみて、

「まあ、さうかい。そりやよかつた。今日は生憎魚屋も何にも來ないんで、私もほんの有合せで食べたのさ。それならまあ熱いお茶でも入れませう。さうしたら少しは體が溫まるかも知れない。」と、云つて、傍の小さな茶戸棚から茶道具を引出して、茶を入れ始める。

雪江は炬燵の蒲團の中へ頤を突入れるやうにして、ぢいッと母親の手の動くがまゝに瞳を動かしてゐたが、やがてぶるぶるッと身慄ひをしながら突如に、

「ねえ、母さま。私、もういよいよあの、大阪へ行くことに極めましてよ。」と、突拍子もない調子でいふ。

母親はふと眼を上げて、

「まあ、さうかい。」と、云ふには云つたが、さも氣難りさうに、

「あの、私もねえ、實は今日は何んな返事が聞けるかと思つて一日首を長くして待つてゐたのさ。ぢややつぱり大阪の方へ行かなけりやならないのかねえ。」と、何處か心細さうにいふ。

雪江は態と元氣のいゝ聲に返つて、

「ねえ、母樣、母樣はあんまりお進みにならないやうですけど私、いろいろ考へてみるのに、やつぱり何うもさうした方が結局いゝやうな氣がするんですわ。こんなことをしていつまで愚圖愚圖してゐたつて仕樣がないんですもの。それよりもいつそ思ひ切つて彼地へいつてしまへば、第一生活は樂になりますしねえ、それに私、末の希望もあると思ふんですわ。」

母親は熱いお茶を二つの湯呑に注ぎ分けて、

「そりやさうだらうけれど、……」と、云つて、氣をかねてゐるやうに、「あの、それで一體小澤さんの方は何うなのさ。今日は彼方ではお目にかゝらなかつたのかい。」と、おづおづ訊く。

雪江は口尻を曲げて、

「いゝえ、逢ふには逢つたんですけど、小澤さんは母樣、もう駄目よ。私、今日はもうしみじみあんな人厭だと思ひましたわ。女の腐つたみたやうに、口でばかりいろんなことを云つてゐてまるで性にならないんですもの。男ならもつと男らしく、かうならかうときぱき物を極めて下さりやいゝんですけど、それだけの決斷があの人にやないんですもの。私、厭になつちまひましたわ。」

母親は眼をしよぼしよぼさせて、

「あの、それぢややつぱり半田さんの方の御緣談が定まるのかねえ。」と、力なくいふ。

雪江はふんと鼻の先で笑つて、

「きつとさうなんでせう。口ぢやいろんなことを云つて辯解して被在るけど辯解なさるだけ可笑しいんですもの。ですから私も腹が立つちまつて、あの、今夜はもう云ひ度いだけのことをすつかり云つて上げたんですわ。さうしたらね、さすがに氣の毒だとお思ひなすつたとみえて、いろんなことを仰有るのよ。でも私、もう先がみえてしまつたから、あの、もうこれを御緣の切れ目と思つて、お別れしますつて、そのまゝどんどん歸つて來てしまつたんですの。」と、さばさばしたやうな口調でいふ。

母親は失望をありありと眼に現はして、

「まあ、さうかい。」と、云つたが、又茶を注い

で、「でも雪江、今の若い男の方つてそんなものかねえ。ほんとに私にやどうしても分らないよ。」

「いゝえ、母樣。そりやあの小澤さんはたとひ緣は切れても、お金の補助だけは今迄どほりにするつて仰有るのよ。でも、私、そんなこと厭ですわ。ですからもうどうせかうなりや私一人で何うでもするわ。ねえ、母樣。そんなに心配なさらなくたつてようござんすよ。又明日になりや明日の風が吹きますわ。」と、云つて、彼女は又腕時計を見ながら、「おや、母樣、もう十一時だわ。こんな寒い晩にいつまで起きてゐたつて仕樣がないからもう寢ませうよ。寢て、せめていゝ夢でもみるんですわねえ。ほゝゝゝ。」

さう云つて、彼女はついと立つて、便所へいつた。

母親はまだしよんぼり火鉢の前へ坐つて、さも腑に落ちないやうに、

「そんなものかねえ。どうも私にや譯が分らないけど、今の世の中はそれで通つていくのかねえ。」と、呟いてゐたが、このうへ云ひ募ると、又雪江がむかツ腹を立てて、しまひには手に負へないやうにヒステリックになるいつもの癖を知つてゐるので母親も心を殘して寢支度をした。

雪江はさすがに隣りの六疊へ母親と床を並べて寢に就いたが、いくら眼を瞑つてみてもその晩はどうしても眠りを呼ぶことが出來なかつた。妙に行く末のことばかりが思はれて、何處か高い高い崖の緣へでも立つてゐるやうな空怖ろしい氣がして、考へは益々感傷的になつてゆく。あゝせめて、こんな時に亡き父親がゐて呉れたらなぞと思ひ出すともう限りがなかつた。久し振りに女學校時代のことなども思ひ起されて、雪江はいつかしら又熱い涙が頰を傳つて來るのを覺えた。さうなるともう悲しさは理性の堰を越えて、歔欷は一種の發作のやうになつて喉もとへ突き上げて來た。彼女はいきなり蒲團を引被つて、どうかして泣き聲をたてまいと焦つたが、しまひには息が苦しくなつて、腋の下には氣味の惡い生汗さへ湧いて來た。

隣りに寢た母親も眠れないとみえて、ごそごそ寢返りばかり打つてゐる。戸外では寂しい夜の雪がまだしつきりなしに降りしきつてゐるとみえて、時々雨戸に當る音がさらさらと悲しげに聞えてゐる。裏の雜木林では枝摺るゝ雪の音がこつそりと夜のしゞまを破つて、寒氣は肩先からぞくぞくする程忍び込んで來た。

雪江は少時するとそつと起き上つて眩しい灯りに顏をそむけながら、電燈をぴちんと消した。

四

その翌朝になつても夜來の雪は止まなかつた。狹い小庭にはもう一尺近くも積つて、ひつくりかへつた盆栽や、手水鉢の傍がもくもくと盛り上つてゐるだけで、うらの雜木林につゞく赤土の崖も今朝はまるで繪のやうに美しく飾られてゐた。

雪江はいつものやうに七時には起きて、母親の沸かして呉れた湯で顏を洗つて、茶の間の窓際に置いてある鏡臺の前へいつて身じまひをした。明りの工合か、それとも寢不足であつたせゐか、妙に顏色が蒼ざめてゐて、眼までが腫れぼつたくなつてゐる。雪江は頻りにそれを氣にして、いつもよりぐつと白粉を濃くしてみたが、それでもちつとも冴えなかつた。何度化粧をしなほしてみても、氣に入らないので、終には焦々して來て、いゝ加減で彼女はやめてしまつた。そのうへひよいと立つ拍子に鏡臺の緣へのせて置いたクラブ白粉の壜を引覆してしまつたので、彼女は一層氣持が惡くなつてしまつた。

朝飯が出來ると、雪江はいつものやうに母親

と二人で差向ひに飯臺へ坐つて、さつさと食べてしまつた。母親も今朝は元氣がなくて、たつた一杯で箸を置きながら、

「ねえ、雪江。こんなお天氣でも今日はお會社へ行くのかい。」と、いふ。

雪江は力めて氣を引立てて、

「え、無論いきますわ。もう此頃は決算で、そりや忙しいんですもの。一日だつて休めやしませんわ。」と、云つて、そろそろ着換へにかゝりながら、「ねえ、母樣。あの、昨夜のことね、どうかもう決して心配なさらないで下さいましな。私、今日會社へ行つて、きつと何んとかうまい工合に話を極めて來ますからね。そのつもりでどうか待つて被在つて下さいましな。」といふ。

母親は飯臺のうへの跡かたづけをしながら合點いて、もう雪江ひとりを賴りにしてゐるやうに、

「ほんとに何んとかねえ、後生だからいゝ話にして來てお吳れな。私、晝間のうちはたつた一人なんで、つい思ひ過してしまふんだよ。」

「ほゝゝゝ。相濟みません。いろいろ御心配ばかしかけて、私、申譯もありませんわ。實はね、私、昨夜一晩考へて、いゝ方法を考へついたんですの。今日はひとつそれをうまい工合に運ばせてみますわ。」と、云つて、雪江はせつせと帶をしめながら、「あの、ね、母樣。それはきうと晩に歸る時に、又母樣のお好きな薩摩揚げを買つて來ませうね。どうかそのつもりで晩の支度をなすつて置いて下さいましな。今夜は遲くも五時半頃には歸りますから。」と、云つて

やがて支度が出來ると、もう一度飯臺の前に立つて、頭髮を直して、そのまゝ玄關へ出た。

母親もあとからついて來て、コートを被せかけて吳れるやら、雨傘を出して來て吳れるやら、こまごまと世話を燒いて、

「おや、五時半にはきつと歸つて來れるねえ。」

と、云ひながら送り出した。

雪江はにつこり笑顏をみせて、態といそいそ降る雪の中へ出ていつた。

雪江は高圓寺の停車場から電車に乘つて、丁度九時一寸前に丸の內の會社へやつて來た。

天氣のせゐかさすがに社員の中にも遲刻が多くて、オフィスへ入つてみると、彼方此方の椅子が齒がぬけたやうに空いてゐて、いつになくがらんとしてゐた。

雪江が事務の椅子へ就くと間もなく常務の廣瀨が肥つた體に丸々とロングを着て、ゆらりゆらりと扉から入つて來た。例にいつものやうに入口で、帽子をとつて、半分禿げ上つた頭をてかてかさせながら此方へ入つて來て、皆の挨拶を機嫌のよささうな笑顏で受けながら、一番正面の自分の席へ就く。そして脫いだ外套を後からついて來た給仕に渡しながら、雪江の方を向いて、

「おゝ、關口さん。この大雪に大層出勤が早いぢやないか。はゝゝゝ。」と、笑ふ。

雪江はしとやかに挨拶をして、そのまゝ默つてゐると、廣瀨は今度は葉卷に火をつけて、

「併しどうも今日の雪にや驚いたねえ。何しろ自動車のタイアが滑つて、こゝまで來るのに小一時間もかゝつてしまつたんだからなあ。かうなると電車で通ふ諸君の方がはるかにいゝよ。はゝゝゝ。」

雪江も默つてゐる譯にいかないので、につこり愛想よく笑つて、

「ほゝゝゝ。でもそれにしましても、お寒くないだけでも自動車の方がよろしう御座いますわ。それに今朝の電車の混み方と申しましたら、それこそもう大變で、馴れない方なんかとても乘れないやうな騷ぎなんで御座いますもの。」

「いや、はゝゝゝ。その代り、今日一日の苦

給や市内電車の收入といふものは又大したものだらうからなあ。かうなると、何方へ廻つても結局諸君達が一番損をする役廻りになる譯だねえ。はゝゝゝ。」と、大きな口を開けて笑つて、彼はそろそろ卓の鍵を開けたりしだした。

その日は、横濱の倉庫の方から受荷の傳票が一時に廻つて來たので、雪江は午過ぎまで殆んど眼の廻るやうな忙しさだつた。時間がたつてゆくのもまるで分らないやうな騷ぎで、皆社員達が食事に立つていつても、雪江だけはどうしても手が放せないので、仕方がなしにペンを持つたきりで、自分の席で轉手古舞ひをしてゐた。

常務の廣瀬は何んでも十一時一寸前頃に、何處からか電話がかゝつて來て、自分の卓上電話で長いこと何かひそひそ話してゐたやうであつたが、それからすぐに外へ出ていつて、丁度その時、やつと歸つて來た。ふつとみると、彼は外で酒でも飲んで來たものとみえ、眼のまはりをぽうツと紅くして、ふうふう肩で息をしてゐたが、やがて雪江の方を向いてにやにや薄氣味惡く笑ひながら、

「どうだ、關口さん。もう先刻の傳票は粗方整理がついたかね。」と、いふ。

「はい、あの、もうあと十枚ばかりで濟みますの。どうも今日は一どきなんで、ほんとに困つてしまひましたわ。」と、體を伸ばしながら答へる。

廣瀬は何かものありげな顔になつて、

「ふむ、やつぱり何を云つてもあんたが一番能率をあげるなあ。男の連中は顔色なしぢやないか。頭腦のいゝのと、惡いのはそこで分るんだ。」と、云つて、そのまゝ自分の卓のうへへ俯向いて、何やら傳票へ鉛筆で走り書きをしてゐたが、少時すると六七通の書類と一緒に隙を窺つて、それをぽいと帳簿越しに雪江の卓の方へ投げて寄越して、

「さあ、ところで關口さん、一難去れば又一難だ。はゝゝゝ。それが濟んだら今度は大至急でこれを賴みますよ。書類の方は專務の印を取らなけりやならんから、あんたから庶務の方へ廻してた。」と、いつもの顔で云つて、又ふかりふかりと葉卷を吸ひ出す。

雪江は何かしら變な氣がしたので、思はずひよいと書類をみると、そのうへには彼が今鉛筆で書いてゐた傳票が載つてゐる。何んだらうと思つて默つて讀んでみると、それにはこんな文言が斜ッかいに書いてあつた。

「至急面談し度き重大要件あり、今日退社の際、一足先に出て保險協會地下室の入口にて待受けられ度し。」

雪江はそれを讀むと、徐々變な氣がして來た。常務は冗談にこそあけすけにいろんなことも云ふが、いつもはこんな持つて廻つたことをする人ではないので、何かひよつとかしたらほんたうに急用があるのであらう。前々から話のあつた大阪行の件なら、いつもこの場席で公然に話をするのであるから、何も今日に限つて態々こんなことをしないでもいゝ筈である。

さう思ふと、雪江の頭腦には突如或る豫想が電のやうに閃いて來た。これは何かきつと小澤に關する要件に相違ない。昨夜小澤に大阪行のことをあゝきつぱり云ひ切つたのであるから、小澤がそのことに就いて何かきつと廣瀬に打明け話でもしたのに違ひない。これほどの關係になつてゐても、小澤は會社に對して面目があるし、それから又雪江も會社ではそれぞれ氣を配つて利口に立廻つてゐるので、今迄二人の關係は無論常務にはまるで知れてゐないのであつた。從つて今迄は常務も何の疑惑も

もつてゐなかつたのは事實だが、併し事態がかうなつてみると、小澤は自分を守る必要からも、いづれ常務に對して何等かの手段を執る筈である。いゝにせよ、惡いにせよ、きつと何か相談を持ち込んだに相違ない。さう思ふと、先刻の長い電話もひよつとかしたら小澤がかけて寄越したものかも知れないと思はれ、二人は打合はせをしてあれから何處かで午飯でも一緒に食べながら、今迄自分のことを語り合つてゐたのではあるまいかと、あらぬ邪推も起つて來るのであつた。

雪江はさうなると、もう妙に胸騷ぎがしだして、とてもぢツとしてゐられなかつた。次第に依つては此方でも何んとか腹を極めて置かなければと思ふと、相手が平常信頼しきつてゐる常務だけにうつかり返事が出來なかつた。

その時常務が、態とらしい咳拂ひをしたので、雪江はふつと釣り込まれて思はず顏を上げたが、向うでは常務が返事を促すやうな顏で、それとなく此方をみてゐる。雪江はその咄嗟妙に意地が張れなくなつて、常務の眼が此方へ動いて來た時に、自分の方でも承諾の心持を瞭に云はせながらそツと見返すと、もう常務はその一瞥で呑み込んで、一寸合點いてみせる。それと同時に彼は又葉卷を取り上げて何喰はぬ顏でぷかりぷかりと紫色の煙を空樣へ吹きつけ出したが、そのてかてかした橫顏には向う屋根の雪が明るく映つて、剃りたての蒼い髯のあとがいつになく若々しくみえた。

雪江はそのまゝ今の傳票をそつと掌で押丸めて袂へ入れたあとで、又せつせと仕事に取懸つたが、併しもうとても先刻のやうにペンの先へ心を打込むことは出來なかつた。一體常務は保險協會の地下室の入口なんぞへ自分を待たして置いて何うする氣であらう。それから又何處かへ連れていつて、小澤と突合はせるつもりででもゐるのであらうか。もしそんなことになつたら自分は何ういふ態度を執らう。

それにしてもあの小澤は昨夜あれから、何うしたであらう。あの時にも涙ぐんでゐた位であるから、昨夜は夜ツぴてさぞ懊惱したことであらう。いゝ氣味だとは思つても、併し又一方から考へると、あの神經質な男のことであるから、氣の毒な氣持もする。いづれにせよ、小澤だつてどうせ自分のことはこのまゝに出來る氣遣ひはないのであるから、今夜はきつと又何うにかするに違ひない。さう思ふと、雪江は何かなしに小澤の洋服の匂ひや汗ツぽい手や、涙ぐんだやさしい顏容が自然と心に浮んで來て、胸がぎうツと押塞がるやうな心持と一緒に、兩方の頰が俄に熱くなつて來た。彼女の手からはいつかしらペンがお留守になつて、帳簿の上にはインキの汚點が丸く滲んでゐた。

五

午後の五時になつて、いよいよ會社が退けると、雪江は態と他の社員達に見られないやうにこつそり便所へ行つた。此れから何處へ連れていかれるか分らないので、彼女はせめて身だしなみだけはして置かうと思つた。便所の手洗場のところには白いタイルで張つた化粧室がついてゐるので、このビルディング內に割據してゐる方々の會社の女事務員達は間さへあるとそこへ入つて、べちやくちや勝手なことを饒舌り合ひながら顏を洗つたり、白粉をつけなほしたりするのであつたが、そんなことでつい事務の方が遲れ勝ちになるので、此頃では五分間以上化粧室を使用す可からずなぞと庶務課から張紙を出した位であつた。男の社員達は、そこから中白粉の匂ひだらけにするなぞと文句は云ひながらも、午飯のあとなぞには誰かしら揶揄ひに入つて來たりするのであつた。

もう方々へ社員は引けてしまつたあとで、その時分には化粧室には誰も入つてゐなかつた。ふとみると、黒い上被りを着た雑役婦の婆さんが、隅の方で何か金具のやうなものをごしごし磨いてゐたが、雪江はそれをみると、につこり笑つて、

「まあ、お婆さん、もう掃除をしてゐるんですつ。私、一寸顔を洗はして貰ひ度いんだけど、まだお湯は出て？」と、訊く。

と、その婆さんは、うんとこしよと腰を伸ばして、

「お湯ならまだ出ますよ。今夜は何んだか又会議があるとか云ふんで、七時までスチームを通すんだつて云ひますから。」と、云ふ。

雪江は持つて来たバッグの中から、いろんな化粧道具を取り出しながら、

「まあ、さう。おやきつと階上の東京住宅の方で会議があるんだわねえ。私の方はもう退けたんですから。」と、云ひ云ひ、正面にある蛇口から洗面器の中へ湯を出して、すぐさませつせと顔を洗ひ出す。そして顔を洗つてしまふと、今度は傍の壁へはめ込んである大鏡の前へいつて頻りに化粧をしはじめたが、雑役婦の婆さんはそれをちいッと見ながら、にやりと笑つて、

「関口さん、今日はこれから何方です。大層おめかしぢやありませんか。」と、冷評すやうに云ふ。

雪江も鏡の中で彼女の顔をみて、

「いゝえ、私これから一寸用があつて、知人のところへ廻らなけりやならないんですの。ほんとにこの寒いのに、弱つてしまふわ。」と、態と眉をひそめながらいふ。

婆さんは物臭さうに又磨きものをやりだしながら、

「でも、今頃こゝへ入つてお化粧をする人は、皆さん、どうも怪しう御座んすねえ。階上の会社の島田さんや、北村さんは注意人物だつて噂ですよ。ほゝゝゝ。」と、笑つて、「あんたも、あの、今夜は丸ビルの角へ自動車が待つてゐる口ぢやないんですか。」と、臆面もなくいふ。

雪江は笑ひもしずに、

「まあ、厭だ。そりやお門が違ふわ。」と、云つたきり、せつせと白粉をのばして、もう相手にもしないやうに口を噤んでしまふ。事実この雑役婦の婆さんはもうビルディングの中のことは見透しで、殊にこゝへ勤めてゐる女事務員達の噂は細大洩らさず心得てゐるのであつた。いつもこの化粧室へ掃除に来る度に、皆のお饒舌をいゝ気持で聞いてゐるので、自然誰はかう彼はかうとすつかり知つてゐるのであつた。

雪江はやつとのことで化粧をしてしまふと、もうあとの始末もそこそこにして、バッグを手首へぶら提げながら、

「お婆さん、どうも汚して済みません。」と、云つたつきり、化粧室を出てしまつた。そしてその足でオフィスへ帰つて来るとその時分には、隅の方の庶務課の連中が四五人残つてゐるばかりで、電燈の光がやけに明るいので、却つて四辺ががらんとしてゐる。雪江は大急ぎで支度をして、残つた人達に挨拶をすると、そのまゝ地下室の方へ下りていつた。

地下室で下駄に穿きかへて戸外へ出ると、もうそこいらは薄暗く暮れかゝつて、雲の多い空からは頬を劈くやうな北風がぴゆうぴゆう吹き落して来る。歩道に積つた雪は片側へ掻き寄せられてはゐたが、もうアスファルトで舗装した路面はそろそろ凍り出して、今通つたばかりの自動車のタイアの痕がチロチロ冷たく光つてゐる。それに映る街燈の光まで、明るく凍ててゐた。

雪江は何んだか、人に顔を見られるやうな気がしてならないので、肩懸けで鼻から下を包ん

で、成るべく步道の隅の方をことこと小走りに歩いていつたが、保險協會の角を曲ると、すぐそこの地下室の入口のところには、一臺の大型の自動車が道の隅へ停つてゐる。ふとみると、その後窓のところには、白い顏がみえてゐて、いきなり手招きをするので、雪江はもう何を考へてゐる隙もなく、そつちへ駈けていつて、運轉手が扉をあける間ももどかしさうに、その車へ乘つてしまつた。

中には廣瀨が厚い毛織物の膝掛けへ包まつてむつとする程葉卷の匂ひをさせながら座席へ腰を下ろしてゐたが、にこにこ笑つて、

「おい、關口さん。まあ、此方へ腰を懸けるがいゝ。早くせんと、會社のものにでも見られたら大變だからな。」と、いふ。

雪江は胸ばかり躍らせながら、云はれるまゝに、彼の隣りへ腰をかけて、照れ隱しに鬢の毛を掻き上げながら、

「どうもほんとにお待たせして、相濟みませんでした。餘程お待ち遊ばしまして？」と心持顏を赧くしながらいふ。自分ではこんなに打融けた樣子を見せてはいけないと、それとなし愼しんではゐながら何うしたのか、つい馴々しくなつてしまふのであつた。

廣瀨は葉卷を指の間で弄びながら、

「いや、一寸十分ばかりしか待たんよ。あんたが先刻化粧室へ入つていつたやうだから、きつと又お粧しをして來るのだらうと思つて、私は時間を見計らつて出て來たのだ。」と、いつになく物優しい調子で親しげに云ふ。

自動車はそのまゝ一旦濠端へ出て、そこから今度は日比谷公園に沿うて、帝國ホテルの角まで來たが、そこでぐるりと又曲つて、銀座の方へ向つて、驀地に駛つてゆく。雪江は何處へ連れられていくのかと思つて、そればかり心配しながら不安な豫期に責められてゐた。

廣瀨は車窓から戶外をみて、

「いや、それにしても、今夜は又馬鹿々々しく寒いぢやないか。まだどうもこれだけぢや降り足らんやうな空合だねえ。」と、云ふ。

雪江は浮の空で、

「ほんとにねえ。このらへ降りましたら何う致しませう。それでなくても、私の家の方なんかもう足駄ではとても歩けないんで御座いますもの。」と、いふ。

廣瀨はその顏を横目でちらりと見ながら、

「さうだらうとも。かういふ時には郊外居住者は眼も當てられんねえ。」と、云つて、又葉卷を口へもつていきながら、「併しやつぱりあんた達は郊外へ住んで居る方が、生活の爲めにはいゝのかねえ。一寸考へると、少し位家賃なぞは高くても、やつぱり市内に住んで居る方が經濟のやうな氣もするがなあ。」

雪江は眼を落しながら、

「あの、でもやつぱりそりや郊外の方がよろしう御座いますわ。何と申しましても、周圍がひつそり致して居りますもの。」

「併しそれにしたつて、一體に郊外は物價も高いさうだし、第一足に金がかゝつてしまふだらう。」

「でも、私共のやうにたつた親子二人で暮して居りますものは、さう大して物價の違ひなんか感じも致しませんし、電車賃に致しましても、定期ですとほんの僅かで濟みますから。」

廣瀨はひとつ處へ眼を据ゑて、

「ふむ、併しまあ、いづれにせよ、あんた達には生活といふ一大脅威があるからなあ。それは私も察して居るよ。實際今の時世に、六十圓や七十圓の收入ぢやとてもやつて行ける譯がないからなあ。而も今日のやうに物價高で、そのうへ一般が派手になつて居るのだもの。女として獨立して生計を立てていくといふのは容易なこ

とちやないさ。寧ろ私達からみると、よくやつて行くと思つて、感心して居るのだ。」と、微笑みを含んで、「それであんたのお母さんは、此頃は達者かな。」

雪江は頭を下げて、

「はい、有難う御座います。お庇護様で此頃は何うやらかうやらまあ丈夫で居ります。」

「ふむ、それは結構だ。それであんたが會社へ出て居る間は、何うして居るのだ。たつた一人で留守番をして居るのか。」

「はい、あの、何を致すにもたつた一人だもんで御座いますから。」

「併しさぞ寂しいだらうなあ。何か一寸した仕事位は出來るのか。」

「はい、まあ、針仕事位なら何うやらまだ出來ますので、……」

「ふむ、それにしたつて、とてもそれで生活の足しにするといふやうな譯にはいかんだらうし、實際お氣の毒だなあ。一體幾歳になられたんだ。」

「あの、今年で丁度五十二になりますんで御座いますけれど、あの、やつぱり病身だもんで御座いますから、この二三年滅切り年を老つてしまひまして、……」

雪江がさう云ひかけてゐると、その時、突然自動車はぶうぶうと二聲程警笛を鳴らして、そのまゝ停つてしまつた。とみると、いつの間にか築地の裏河岸へ來てゐて、まだ新建築をして間もないらしい、二階建の立派な家の門の前へ自動車は横づけになつてゐた。

雪江は廣瀬が下りろといふので、彼のあとからおづおづ下りたが、ふと眼をあげると、そこの粹な門に點つた角形の電燈には「芳川」と洒落れた字で書いてあつた。

六

雪江はその家の一番奥まつた數寄屋風の六疊へ通されてみて初めてそこが何をする家であるかといふことが分つた。料理屋や待合といつたやうなものの話も小澤からよく聞かせられてゐるので、彼女には女中の風をみただけでもそれと合點がれるのであつた。その六疊には粹な飾りつけがしてあつて、隅の方には眼の覺めるやうな手綱染めの錦紗の懸けものをかけた炬燵なぞがしかけてあつて、紫檀の臺の兩側へ敷いてある座蒲團も錦紗のすばらしいのであつた。廣瀬は、この家でも大事な客筋であるとみえ、女中達は下へも置かずにもてなした。

廣瀬は妙におどおどとしてゐる雪江を無理に座蒲團のうへへ坐らせて、

「なあ、關口さん。こゝへ來ればもう常務も事務員も何もないさ。すべて平等といふことにして貰はんと、話がし難いからなあ。はゝゝは。」と、態と大きく笑つて、「決して遠慮する必要はないから、今夜は大いに寛いで、ゆつくり飯でも食べて行つて下さい。」と、いふ。

雪江は默つて、膝のうへで手を弄りながら顔を伏せてゐた。彼女は女中達が出入りに、じろじろ此方を見るので、それが厭で耐らなかつた。

やがて酒の支度が出來る、料理の皿や鳥鍋なぞも次々と運ばれて來て、座敷の中が俄に暖かくなつて來るやうな感じがした。廣瀬は態と女中達を退らせて、自分でウヰスキイを小さな洋杯に注いではちびちびやり出したが、少時すると彼は片手を伸ばして雪江の前の盃をおこして、それへ日本酒を注ぎながら、

「どうだい、關口さん。あんたも一つやらんか。寒さしのぎには何を云うても酒に限るよ。さ、熱いうちに一杯やらんか。はゝゝゝ。」と、笑ふ。

雪江は嬌態をして、

「あら、私、そんな、お酒なんか、……」と、云つたが、廣瀬は片頰を微笑へ突いて、

「いや、さう云ひ拔けは此處では通らんよ。いくら隱しても私はよく知つて居るんだ。あんたは蟲も殺さんやうな顏をして居つて、中々やるんだといふぢやないか。はゝゝゝ。」と笑談らしく、こだはりのない調子で云ふ。

雪江はさう云はれると、一寸顏色を動かして、

「あら、貴方、そんなことを仰有つちや、私、厭で御座いますわ。そんな私、……」と、云つたが廣瀬は頭から笑つて、

「はゝゝゝ。どうもさう開き直られちや此方が恐縮するが、併しまあ、いゝさ。私にはこんなことであんたの操行上の祕密を素破拔かうといふんぢやない。まあ、いゝから、默つて飲むさ。その盃をあけんけりや此方にも考へがあるよ。はゝゝゝ。まるで強迫だね。」と、いかにも輕く、圓轉滑脫に云ふ。

雪江はもうその言葉の調子で、それとなく廣瀬の胸の中にあることが感じられて來た。先刻から彼女が想像してゐたことは果して當つたのである。やつぱり小澤はこつそりこの廣瀬に逢つて、何か自分に關することを打明けて話したに相違ない。きつとその用件で廣瀬は今夜自分をこんな處へ連込んだに違ひないと思ふと、雪江は却つて妙に度胸が据つて來た。それならそれで此方にも仕樣があると思ふと、彼女はもうすつかり段取りを考へて來てゐるだけに、ほつと安心も出來るのであつた。

雪江はあんまり頻く廣瀬が酒を強ひるので、やがて盃へ口をつけて、

「ほんとに、あの、私、頂けるつていふほど頂けやしないんで御座いますから、……」と、云つて、「あの、貴方はいつもそんな強いお酒を召飲るんで御座いますか。」と、きつかけを探すやうに廣瀬へ話しかける。

廣瀬は洋杯を置いて、脣を嘗めながら、

「いや、私はもう此頃はこればかりさ。といふのはね、私は先年糖尿をやつたものだから醫者から日本酒を封じられてね。仕方がなしにウヰスキイを始めたのさ。それもあんまり澤山はやらんが、ついやつぱり好きだもんだから、興に乘ると度を過していかんのだよ。それに此頃のやうに宴會がつゞくと、どうも誘惑が多くてね。はゝゝゝ。」

雪江は手巾を出して、口を拭きながら、

「まあ、そんな御病氣なのに、強いお酒を召飲つて、お體に障らないんで御座いませうかね。」と、いふ。

廣瀬は笑つて、又そつと彼女の盃へなみなみと酌をしてやりながら、

「はゝゝゝ。いやそりや大丈夫さ。まだ私なぞは年が若いもの。はゝゝゝ。」と、云つて、又手代りにウヰスキイの壜を取り上げて、

「それに、こんな常務稼業なぞをして居ると、酒と遊びがついやつぱり本業になつて來るからねえ。やれ、お客の、やれ、招待のと、毎晩々々そんなことばかりして居るのだもの。會社に居る間こそこれで神妙にしてゐるが、もう晩になりや重役も何もあつたものぢやないさ。我々の飲んで居るところをそつとエツキス光線ででも照射してみたら、それこそ醜態の限りを盡して居るからねえ。はゝゝゝ。」

雪江も仕方がなしに笑つて、

「そりや貴方、殿方はどうせ皆さんさうで御座いますわ。こんな場所へ被來りや、ほんとにそれこそ何をなさるか知れたもんぢや御座いませんわ。」と、云つたが、廣瀬は今度は料理の皿を片端から荒らしながら、

「さ、關口さん。ちつとどうか何か食べて呉れないか。そんなに行儀をよくして居られると、

此方が氣がひけて可かんよ。はゝゝゝ。」と、云ひ云ひ、又雪江に無理に酒を强ひて、「併し關口さん。その點へいくと、女だつてやつぱりさうだよ。人の見て居るところでは巧みに猫を被つて居るが、陰ぢや何をして居るか分らんからねえ。全くそこへ行きや五分々々さ。はゝゝゝは。あんただつて、かうやつてゐるところを見りや志操の堅固な、模範的な女事務員だが、併し表と裏とは又格別だからねえ。はゝゝゝ。」

雪江は又嬌態をして、

「あら、隨分なことを仰有いますわねえ。私そんな女ぢや御座いませんわ。私に御覽のとほりの……」と、云ひかけるのを、廣瀨はぼうツと醉ひの出た顏でにやりと薄氣味惡く笑つて、

「うまく云ふぜ、關口さん。それや何にも知らない素人に云ふことだよ。もうちやんと種が上つて居るんだから、素直に恐れ入つてしまふ方が身の爲めだぜ。はゝゝゝ。」と、笑ふ。

雪江はそれでも白ばつくれて、

「あら、嫌ですわ。私、御冗談にもそんな、……」と、云つたが、廣瀨は洋杯の酒をぐうツと飮んで、

「いや、關口さん。それならひとつ素破拔かうか。あんまり罪たから、私も今迄は知らん顏をして居つたが、さういふ綺麗な口をきくんなら、ひとつぎうといふ目に遭はしてやらうかなあ。どうだい、お望みとあればいつでも犯人の名前を云ふが、それでもあんたは白を切る氣かね。はゝゝゝ。」

雪江は恥かしさうに顏を伏せて、くすくす色めかしく笑つてゐたが、やがてもう自分でもすつかり度胸をきめて、急に態度をかへながら、上眼で廣瀨をみて、

「あなた。もう何うか、その事なら何にも仰有らないで下さいましな。私面目なくつて、とても正面からお話は出來ないんで御座いますもの。」

「はゝゝゝ。到頭甲をぬいだな。いゝ氣味だ。さう來なくちや、話が面白くないのだ。はゝゝゝ。」と廣瀨は面白さうに笑つて、「併しあんたも中々えらいよ。よく此れ迄襤褸を出さずにやつて來たものだと思つて、私は却つて敬服して居るのだ。かういふことといふものは、得てしてバレ易いもので、とても七箇月も八箇月もの間祕密が保てるもんぢやないもの。それを今日まで平氣で隱しおほせてゐたところを見ると、あんたは餘程腹が黑いねえ。實際油斷がならんよ。はゝゝゝ。」

雪江はもう穴へも入り度いやうな恰好をしてゐたが、廣瀨はとろんとした眼で、その美しい横顏のところをじろじろみながら、

「實際のところを白狀すると、私は全くあんたとあの小澤との間にそんな事實があらうとは今日の今日まで夢にも知らなかつたんだ。あんたばかりはほんとに身持が堅くて、實に心懸けのいゝ人だと思つて、私は陰ながら感服して居つたのだ。ところが今日計らずもこれこれだと聞いて、私は正直な話が全く吃驚してしまつた譯さ。初めはまさかと思つて、いろいろに疑つてもみたのだが、何しろ當の本人が云ふんだから、これより確かな證據はないからなあ。はゝゝゝ。それにしてもほんとに今時の若い女は實際油斷がならんよ。うつかりして居ると、どんなことになるか分らんからねえ。はゝゝゝ。」

雪江は想像してゐたことがまざまざと事實になつて現はれて來たので、何んだか自分でも可笑しいほど、心持が擽つたかつたが、併し又一方ではひどく照れて、さすがに顏が上げられなかつた。世間にありふれた情事ではあるが、平常信頼してゐる廣瀨の口からかう云はれてみると、全く頭が上がらないのであつた。

廣瀨は猶も笑ひつゞけて、

「いや、それにしたつて、かういふ事實が上つてみると、世の中の人間なんていふものは實に甘いものさ。私にしたつて、オフイスに居るものの行動は大概見透して居る氣で、内心大いに得意でゐたが、この一事でもうぺしやんこさ。實にどうも呆れたもんだね。小澤も小澤だが、關口さん、あんたもあんただよ。何うすりやかう迄知らん顏でゐられたらうと思つて、さすがの私も舌を捲いて居るのさ。はゝゝゝ」

雪江は默つて、今度は着物の前褄の吹綿を弄びだした。彼女の顏にはいつかしらもう何うでもなれといふやうな投げやりな氣持が現はれて態度は一段と平氣になつて來た。

七

雪江は少時すると、やつと顏を上げて、廣瀨の眼のところを見ながら、

「あの、私、もう何も彼も御存じだと思ひますから、あの、今更何に致しやしませんけど、……」と、云つて、「あの、あなた、今日その話をお聞き遊ばしたんですか。」と、そろそろ此方からも積極的に陣立てをかへてゆく。

廣瀨は合點いて、

「うむ、實は先刻小澤が電話をかけて寄越して、東電の株式のことで急に逢つて話し度いことがあるからといふんで、早速中央亭の食堂へいつてみると、何んのことだ。つまりその話なのさ。はゝゝゝ。私もかう云つちや何んだが、面白かつたもんだから逐一伺つたよ。大分どうも際どい惚話まで聞かされちまつて、大いに羨ましかつたが、併しねえ、關口さん、それはさうと一體あんたは何うする氣なのだ。私はもうすつかり話を聞いてしまつたんだから、實際のところ隱す必要はないんだ。ほんとに何んなりと打明けに話して貰つて、又何か私で出來るやうなことがあつたら大いに力にならうぢやないか。」

雪江は輕く頭を下げて、

「有難う御座います。」と、云つたが、又眼だけあげて、「あの、それで、小澤さんは何んて仰有いまして？　私のことについて、何かあなたに仰有いましたことは御座いませんの。」と、訊く。

廣瀨は葉卷をくはへたまゝ又雪江に酒をすゝめて、

「はゝゝゝ。いや、もう小澤はあんた、すつかり悄氣てしまつて居るのさ。何しろ奥さんの方の口はやいやい迫ツつかれるし、あんたの方はあんたの方で旨く手が切れんし、もう板挾みになつてひどく煩悶して居るのさ。それで到頭思案に餘つて、私に告白した譯なんだが、併し私にしたつて突如にそんなことを打明けられて、さあ、何うにか始末して呉れと云はれたつてさう何うも右から左にいゝ考へが出るもんぢやないからなあ。そこでまあ、私も友達甲斐に、それぢやまあ兎に角私が仲へ入つて何んとかしてやらうといつて、實は別れて來たんだが、併し關口さん、ほんとにあんたは何うするつもりなんだね。小澤の話ぢや、あんたが自棄なことばかり云つとつて、それにあゝいふ性質だから若しものことでもされたらそれこそ取返しがつかんからと、そればかり心配して居るのだが、ほんとにあんたは何ういふ考へで居るのかね？」と、眞顏になつて訊く。

雪江はいくらか詰るやうな色をみせて、

「ほんとに小澤さんも隨分分らない方ですわねえ。昨夜もあれほど私、事を分けてお話したんですのに、まだそんなことを云つて被在るんですかねえ。いくら私だつて、まさかあの方の御婚禮の席へ拳銃をもつて暴れ込むほどの勇氣はありませんから御安心なすつて下さるがいゝんですわ。婚禮、婚禮つて、もうあの方はそればつ

かし心配して被在るんですもの。私こんな性質ですから一旦手を切るとなつたら、もうそれでほんとに手を切りますから、何もさうまでにびくびくなさらないだつていゝぢや御座いませんか。可笑しな方ですわねえ。ほゝゝゝ。」

廣瀬は葉卷の煙をふッと吐き出して、

「ぢやあんたは、もう自分でも手を切るつもりで居るのか、さうか。それなら何も問題はないのさ。何んでも小澤の話ぢや、あゝは云つて居つても、何んだか心殘りがあるらしいからといふんだが、そんなことでは私にしたつて心配だからなあ。」

「小澤さんはそんなことを仰有るんですの、まあ隨分己惚れて被在いますわねえ。私はそんな女ぢやありませんわ。捨てられた男にいつまでも未練を殘してゐるやうな私なら、もうとつくに結婚してしまつてゐますわ。私は初めつから何も生命まで捧げるほどあの方に何してゐた譯ぢやないんですもの。そこが舊時代と新時代と違ふところなんですわ。」と、反抗的に云つて、雪江はつとめて笑ひながら、「唯ね、私、あの方があの、關係が斷れても、私に物質上の補助はするつてから仰有つたもんですから、そのことで私、昨夜一寸氣拙い問題を殘してしまつたんですわ。」

「いや、そりや小澤も云つて居つた。つまり小澤の心配して居るのはそこなんだよ。たとひこのまゝになつても、あんたの生活だけは何うにかして見てやり度いつて、それはもう誠心誠意さう云つて居るのだ。」

「ほゝゝゝ。つまり何んで御座いませう。御自分はもう他の女のものになつてしまふから、せめて罪亡しにお金でもやつたらとかういふ思召しなんですわねえ。」

「いや、そりや一概にさう云つてしまつちや彼奴が可哀想だよ。それはあの男の心からの深切なのさ。つまりあんたの將來といふことを考へるあまりにあの男は飽く迄もそれだけは責任を持たうとかういふ氣で居るのさ。」

雪江は片頬に微笑を湛へて、

「でもあなた、私にしてみますとねえ、そんな御慈善を受けるだけ却つて此方の恥になると思ひますんですわ。どうせお捨てになるんなら、いつそもつと男らしく、私を踏み躙るやうにして捨てて下さる方が私も張合ひがあつてよう御座いますわ。小澤さんにしてみれば、これから幸福な結婚生活にお入りになるんですもの、私の一生なんか何うなつたつて問題ぢやないぢや御座いませんか。ほゝゝゝ。」と、ヒステリックに笑つて、

「ねえ、あなた、もうその問題はそれだけにして、あの、お話は違ひますが、私も實を申しますと、まあ差當つて、生活といふ問題が眼の前に迫つて來て居りますので、その方のことを考へ度いと思ひますんですわ。あの、それで先達てお願ひ致しました例の大阪の方のことは、如何遊ばして下さいますんでせうか。」と、話頭を轉じてしまふ。

廣瀬はさう云はれると少時の間、考へてゐたが、やがて變にもぢもぢしながら、

「うむ、大阪の方の件か。ありやあんた、あんたの腹さへ極まりや、どうにでもしてやるさ。だがね、關口さん、ほんたうのことを云ふと、あんたもうかうやつて長い間私の下で働いて居つて呉れたんだし、それに全くの話が此頃ぢやもうあんたといふものは我々の課でも極めて重要な人間になつて居るのだ。何も煽てる譯ぢやないが、實際仕事の能率は上げて呉れるし、商賣上の機密なぞも相當に呑み込んで呉れて居るんで、私は全くあんたといふものを離し度くないんだ。出來ることなら今迄通り私の下に置いて、先々も私は面倒をみてやり度いと思

つて居るんで、まあ、私は何うかして大阪行のことは思ひ止まつて貰ひ度いのだよ。つまりあんたにしてみりや、問題は收入如何といふ點にあるのだらう。唯それだけのことなら、又何うにでもなるからねえ。」

　雪江はぢいッと考へて、

「あの、さう仰有つて下さいますと、私、ほんとに嬉しいんで御座いますけれど、でもあの、小澤さんとのことがあなたのお耳に入つてみますと、私、やつぱり何んだか此方に居辛う御座いましてねえ。それに私、もう東京が厭になりましたんで、實は何うかして見ず知らずの土地へ參り度くつて仕樣がないんで御座いますわ。」

　廣瀨は大きく笑つて、

「はゝゝゝ。いや、そりや尤もな話さ。此方の會社に居りや、やつぱり每日のやうに小澤と顏も合はせんけりやならんしなあ。そりやあんたにして見りやきつと氣拙いに違ひないが、併し……」と、云つて、彼は醉ひに驅られてゐるやうに、「併し關口さん、もうどうせかうなつたんだ。いつそ思ひ切つて、唯生活の爲めといふ心持になつて、もつと體の樂をする氣は出んものかねえ。」

　雪江は眞顏になつて、ふつと聞咎めるやうに、

「體の樂をするつて、何ういふ意味なんで御座いますの。」と、云つたが、廣瀨はにやりと變に笑つて、

「いや、早い話が、月六十圓や七十圓の金で朝から晩まで汗みづくになつて働いとるのは一方から考へりや實に馬鹿々々しい話ぢやないか。それよりももう會社なんか止めちまつて月々百五十圓なり、二百圓なりの補助を受けて、お母さんにも樂をさせてやるし、あんた自身も學校へ通ふなり何んなりして、もつともつと意義のある立派な職業に就けるやうな道を執つたら何うかと思ふのさ。これからはあんた、女だつて語學の一つもやつて居れば、後になつてずつと出世の段階が違つて來るからねえ。もしさういふ氣があるんなら、私も及ばずながら力になつて上げるつもりで居るんだが……」と、底意ありげな眼つきでぢいッと雪江の顏をみる。

　雪江は彼の云ふことが先刻と違ふので、怪訝な顏をしてゐたが、さうしてゐるうちにも彼女にも廣瀨が何を考へてゐるかといふことがそれとなく呑み込めて來た。

八

　雪江は默つて、首を垂れて考へ込んでゐたが、やがてしつかりした聲で、

「有難う御座います。御深切にさう仰有つて下さるのは私、嬉しう御座いますけれど、でも私、やつぱり自分の力で働いて出來ることなら眞面目にして生活していき度う御座いますわ。私共は安易な道を執らうと致しますと、ついやつぱり後で取返しのつかないやうなことが起りますのでねえ。」と、いふ。

　廣瀨はもうすつかり露骨な態度になつて、

「はゝゝゝ。どうもいやに堅いことばかり云ふぢやないか。あんただつてもうづぶの處女ぢやなし、立派な兒狀をもつて居るんだもの。どうだい、もつと分る話にしようぢやないか。後で取返しのつかんことが起るといふが、つまりそれまで十分責任をもつといふ契約をすればそれでいゝんぢやないか。」と云つて、彼は誤魔化すやうに臺布巾なぞを弄びながら、少しづつ雪江の方へ寄つて來る。

　雪江は遁げるのも可笑しな工合なので、それとなく警戒しながら、默つてゐたが、廣瀨は突如につと彼女の手を横合から握つて、態と蹌くやうに炬燵の櫓へ片肘つきながら、

「ねえ、關口さん。もういつそそれに極めるさ。はゝゝゝ。もしあんたがこのまゝ會社へ勤

めてゐたいといふんなら、まあ、それでもよし、又會社を退いて呉れるんなら猶ほ此方は好都合なんだが、いづれにせよ、先づ第一に東京市内の山の手方面へでも家を借りて、そこでお母さんと二人で小婢でも使つて悠々と暮らしていくのさ。月々幾何なんていふケチな制限を設けずにだね。あんたの要求するだけの額はいつでも渡すといふ條件にして、その他まあ、學校へでも通ふといふんなら、無論その方の補助もするし、つまり私はあんたの望む通りの條件で協約を締結しようといふのさ。何うだ、それでうんと云はんか。」と、酒臭い息をつきながらいふ。

雪江は默つて身動きもしずにゐたが、やがてそつと握られた手を引いて、きちんと居住ひを正しながら、

「あなた、あの、それは本氣で仰有つてゐるんで御座いますか。」と、きつとしながら云つたが、もう廣瀨はだらしなく彼女の肩へ手をかけて、無理にも頬摺りをしようとしながら、

「無論本心から云うて居るのさ。誰が笑談にこんなことを云ふものか。いや、私はね、正直なところを告白すると今迄にも實はあんたに對して度々さういふ野心を起したこともあつたんさ。併しどうもあんたは捕へ處がなくて、つまり乘ずる隙がなかつたんだね。ところが今日小澤の話を聞いて、私はもうすつかり興奮しちまつたんだよ。どうせ小澤と手が切れたのなら、どうあつても私はその後釜へ割込んで、あんたを自分のものにし度いと私もから思つたんだ。そこでまあ、口説くといつちや可笑しいが、つまり此方の條件を明らかに提出して、あんたの承認を求めようと、かういふ段取りになつたのさ。どうだ、關口さん、もう說明の方はそれ位にして、手取早く協定書に調印をして呉れんかね、はゝゝゝ。」と、云つて、ひどく興奮した顔で今度はほんたうに戯れかゝる。

雪江はそれを一心になつて避けながら、

「あら、あなた、どうかそんな、そんな亂暴をなさるのはよして下さいました。私、いくらあなたが何んと仰有つても、自分で考へが定まらないうちは、いくら暴力をお用ゐになつても、私、御自由にはなりませんわ。どうか、このお手をお放しなすつて下さいまし。」と、云つて、そのまゝ紙襖際の方へ摺りぬけていきながら、「ねえ、あなた、私、あなたの仰有ることはようく分りましたわ。いろいろ御深切に仰有つて下すつて、有難う御座いますけれど、でも併し今日が今日つて仰有るのは、あんまりぢや御座いませんか。私にだつていろいろ考へなけりやならないことが御座いますし、それに、……」と、云ひかけて彼女はふつと口を噤んでしまふ。彼女はもう口惜し涙が胸一杯に込上げて來るのをそつと肩で息をしながらぢいッと押耐へてゐるのであつた。もし相手が廣瀨でなければ思ふ樣毒舌を弄して恥しめてやるものをと、彼女はもうその言葉が喉まで突き上げてゐるのであつたが、併し長い間恩顧を蒙つた人だけに、つい此方も氣が折れてしまふのであつた。

廣瀨は又も彼女の方へ摺り寄つて來ようとしたが、何うしたのか、急に大聲を出して無理に笑つて、そのまゝ未練らしく自分の座へ歸りながら、

「いや、どうもあんたは中々手强いなあ。まあいゝ、急いては事を仕損ずるといふことがあるから、私も暴力を用ゐたり、責木にかけたりするやうな卑怯な態度を執るのはよさう。そんなことをして若しあんたに逃げられでもしたら、それこそ私の精神上の打擊は一層深刻なものになつて來るからな。いや、それは笑談ぢやないよ。眞面目に解釋して呉れなけりや私が可哀想だ。さ、關口さん。もう何にもせんから、どうかその座蒲團へ坐つて呉れんか。私も男

だ。手出しをせんといふたら、もう決して手出しはせんから。」と、せかせかと息を彈ませながら云つて、彼は又ウヰスキイの盃を取り上げながら雪江の方をみる。その顔には醉ひが眞紅に燃えて、蟀谷のところには蚯蚓のやうな靜脈が浮き上つてゐるので、可笑しいほど顔違ひがしてみえた。

雪江は亂れかゝつた髪を直しながら、そのまゝ又もとの席へ歸つて、少時の間顔を伏せながらぢいッと考へ込んでゐたが、やがて意を決したやうに、打沈んだ顔色になつて、

「あの、私、失禮で御座いますけれど、もう歸らして頂いてもよろしう御座いませうか。お話もうすつかり伺ひましたんですし、それに、私、今夜は少し體の工合も惡う御座いますんで、……」と、落着いた聲でいふ。

廣瀬はそれを手で押へて、

「いや、まあ、もう少しいゝぢやないか。折角だから、せめて飯でも食べていつて呉れんか。まだ八時だもの。」と、殘り惜しさうにいふ。

雪江は丁寧にお辭儀をして、

「有難う御座います。あの、折角で御座いますけれど、私、又流感にでもなりますと、大變で御座いますから、どうか今夜はこれで歸して頂きます。」

「はゝゝゝ。一度で懲りたかね。それならそれで又無理に引留めても何んだから、一寸待つて呉れ。停車場まで車をさう云はせるから。」

雪江はもう腰を浮かして、

「いゝえ、もう何うか、却つてそれでは私、困りますから。」と云つて、逃げるやうに歸り支度をする。

廣瀬は自分も中腰になつて、それを慌てて押へながら、

「いや、それぢやあんたの勝手にさせるが、併しまあ一寸兎に角待つて呉れ。それで一體私の今云つたことに對する返事はいつ頃聞かして貰へるだらうか。」と、云ひながら、彼はポケットから紙入を出して、何をするのか、卓臺の下でもそもそやつてゐる。

雪江は其方を見もしずに、もう紙襖の方へ寄つて、

「あの、私、ようく考へて見ました上で、いづれあの一兩日中に御返事を致しますから。」と、云つて、「どうもいろいろ有難う御座いました。それではお先に失禮致します。」と、云ひながら到頭紙襖を開けて廊下へ出てしまふ。

廣瀬はそゝくさ續いて立つて來て、

「いや、それぢやまあ、それ迄樂しみにして待つとするよ。はゝゝゝ。」と、笑つて、何喰はぬ顔で小さな紙包のやうなものをそつと雪江の手へ握らせながら、

「關口さん。何は兎もあれ、これだけは默つて持つて行つて呉れ。又四の五の理窟がつくと私は愈々退込みがつかなくなるからねえ。譬ひ氣に喰はなくても何んでも、何うか私の好意なんだから無條件で受けて貰はなけりや困るんだ。いゝか。」と、賴むやうに云ふ。

雪江はきつと金だと思つて、餘程そのまゝ叩きつけて歸らうかとは思つたが、併しそんなことでいさくさしてゐると又廣瀬が何をしだすか分らないので、彼女は默つて辭儀だけして、それなり廣瀬に送られて玄關の方へ出てしまつた。女中達も白々しい世辭なぞを云ひたがら送つて來たが、雪江はもう唯一刻も早くこんな家から出度くて、挨拶もろくにしずに戸外へ出てしまつた。

外戸へ出ると、殘雪のうへを吹いて來る夜風はまるで氷のやうに冷たくて、温かいところから急に出て來た雪江は、齒の根も合はないやうな胴慄ひを覺えて來た。四邊の町の樣子をみると何うやら築地の本願寺の横町あたりらし

いので、雪江はやがて見當をつけて、銀座の方へ向けてせつせと歩きだした。踏み固められた路上の雪はもうすつかり凍てついてゐて、ともすると足を取られさうなので、彼女は明るい通りへ出るまでは少しも足先に氣が許せなかつた。

やつとのことで萬年橋を渡つて、農商務省の横手まで來ると道もいくらかよくなつたので、彼女は今度は歩度をゆるめて、ほッとしたやうな心持でぽつぽつ歩いていつた。

彼女はふつと思ひ出して、いゝ加減に帶の間へ突込んで置いた先刻の紙包を取り出して、街燈の光の中で開けてみると、それは庶務課用の小さな封筒で、その中には百圓の紙幣が三枚縱に折つたまゝ入れてあつた。雪江もさすがに驚いたが、併し彼女は、何んだか廣瀨といふ人間が急に卑しく思へて、われにもなく嘲笑に似た笑ひが唇に上つてくるのを押へることが出來なかつた。

あの廣瀨ばかりはこんなことをする男ではない。あの人こそほんたうに賴りになる重役だと長い間心から信賴して來ただけに、雪江は一層男性の淺猿しさといふやうなものをしみじみ感じずにはゐられなかつた。

小澤の問題を聞いたすぐその跡に、自分に對して今のやうな無禮なことを仕向けるとは、何んといふ淺薄な人であらう。あの時にはこんな侮辱を受けて口惜しいと思つたが、併しかうやつて離れて來てみると、却つて總てが滑稽にさへ思へて、雪江は心の中では何んだか腹立たしい中にも、可笑しくて耐らなくなつて來た。

あの廣瀨が會社の應接室で、もつともらしい顏をしながら訪問客と商談なぞをやつてゐる時には實に堂々とした立派な重役の貫目もみせてゐたが、今のあの醉つた顏や、激しい息遣ひなぞを思ひ出すと、全く一文の値打もなかつた。

雪江はそれから明るい銀座通りへ出て、尾張町から數寄屋橋を渡つて有樂町の停車場までやつて來たが、そこで電車を待つてゐる頃にはもう彼女は廣瀨のことは忘れて、小澤のことばかり思つてゐた。廣瀨の話だけでは何うもまだ小澤の本心が腑に落ちなくて、彼女にはそればかりが何かなしに心殘りになつて耐らなかつた。

廣瀨が今夜あんな態度に出たのにも、何かあの裏には小澤の心持が反映してゐるやうな氣さへして、雪江は益々いろんな疑ひが湧いて來るのであつた。吹き曝しの歩廊からみると、方々のビルディングには窓々の燈影が燦爛と冴え返つて、薄白の殘雪が果らなく侘しい色にちろめいてゐる。

雪江はそれを眺めながら小澤のことを思ひ續けてゐると、いつかしら今度は又妙に淚を誘はれるやうな心細さ、悲しさが胸に迫つて、吹く風の冷たさも何も打忘れながら彼女は襟卷の中へ頤を埋めてしよんぼり立つてゐた。

その時、ふつと何處かで、若い女の聲が、「關口さん！」と、自分の名を呼んだやうな氣がしたが、雪江は空耳だと思つてうつかり聞き流してゐると、今度はもう一度、

「關口さん、あなた關口さんぢやありませんこと？」と、云つて、彼女の方へ歩み寄つて來た女がある。とみるとそれは今風の極くハイカラな洋裝をした、雪江と同年輩位な女で、黑天鵞絨の長い外套に身を包んだ恰好が何うみても唯ものではなかつた。

雪江はその咄嗟、何處の誰ともまるで見覺えがないので、眼の覺めるやうな美しいその女の顏をぼんやり呆氣に取られて見てゐた。

九

雪江がどぎまぎしてゐる間に、その女は彼

女のすぐ鼻の先まで歩み寄つて來て、さも親しげについゝ彼女の肩へ、手袋のまゝ手をかけながら、

「まあ、やつぱり關口さんぢやないの。ほんとに、あんた、何うなすつて、隨分久濶ねえ。」と可笑しい程誇張した身振りをしながら云ふ。

その咄嗟、小さな八重齒のみえるその口つきから、雪江は何かなしにその女が誰であるかといふことを今度は譯もなくふつと思ひ出した。

あゝ、宮川さん！　その名をはつきり思ひ出すと雪江は堪らなく懷かしくなつて、

「あらッ、まあ、あなた、宮川さんでしたのねえ。どうもほんとに失禮いたしました。まあ、私、あんまりお變りになつたんで、ついお見逸れしてしまつて、……」と、あとは恥かしさうに笑ひに紛らかしてしまふ。

と、その女は口尻を一寸曲げて、態とつんとしたやうな顏をみせながら、

「まあ、あんた隨分ねえ。私の顏を忘れてしまふなんて、ほんとに隨分ですわ。心細い人ッ」と、云つて、「でもほんとに妙な處で逢つたわねえ。やつぱり御緣が盡きないんだわねえ。」と、いふ。

雪江も合點いて、

「ほんとにねえ、私何んですか、夢のやうな氣持がしてならないんですの。よくねえ。」と、彼女は今更のやうに宮川の顏をおづおづみた。

そこへ突然上り線の方で轟々と鐵輪のどよみが聞えて、東京驛へいく電車が入つて來た。

それを、みると宮川はいきなり雪江の二の腕をとつて、

「ねえ、關口さん。あんた何方へ乘るの？　これ？」と、云つたが、雪江が合點いてみせると、彼女は電車があふりつける風の中で、大きな聲で、「まあ、嬉しい。私もこれへ乘るのよ。さあ、そんなら、御一緒に乘りませう。」と、云つて丁度眼の前へ來て停つた三等の車室の昇降段へぴよいと身輕に乘る。雪江もつゞいて乘つた。

時間が時間なので、さすがに乘客も混んではゐなかつたが、宮川は態と中へは入らずに、

「ねえ、關口さん、たつた一驛で乘り換へなんだから、こゝに立つてゐませうよ。ほんとにそれにしてもよく逢へたわねえ。もう何年になるでせう。」と、いかにもしみじみといふ。

雪江は眞鍮の棒へつかまりながら、

「さあ、さうですねえ、私一寸思ひ出せませんけど、彼此七八年になりますわねえ。」

「七八年、あらもうそんなになるか知ら。」と、云つて、宮川は上眼遣ひをして、「でも私の父が亡くなつたのが、大正六年ですから、さうねえ、もう丁度八年になるわねえ。隨分久濶だわねえ。」

雪江も唯合點くばかりで、寂しく微笑んでゐた。車內にゐる人達が頻りに此方をみるので、彼女は譯もなく氣恥かしくて、はきはき返事さへ出來ないのであつた。思ひ返してみると、この宮川に別れたのは八年の昔で、彼女がまだ女學校の三年にゐる時分のことであつた。宮川の家は女學校から僅か一町ばかりのところで、相當な菓子屋を營んでゐて、小學校は違つたが、女學校では一年から三年まで同級で通して來たのであつた。宮川は父が病死するとすぐに學校を退いて、何んでも橫濱へとか行つたといふ噂であつたが、その後は杳として消息が知れなかつたのであつた。女學校では級の中でも一番の仲好しだつたが宮川の方からふッつり消息を絕つてしまつたので、もうそれつきり雪江も彼女の行方を知るよすがもなく、いつ忘れるともなく忘れてしまつたのであつた。その宮川に八年振りで、しかもこんな思ひ懸けないところで、ひよつくら出會したのであるから彼女が驚くのも

無理はなかつた。
　宮川は雪江の方へ顔を寄せて、
「あの、それで、あんたのお父樣やお母樣はまだ御丈夫？」と、訊く。
　雪江は眼を落して、
「え、あの、母は達者でゐますけど、あの、父は先年亡くなりましたの。」
「まあ、お父樣が。そりやお氣の毒ねえ。でもやつとそれで私と相子になれた譯ねえ。ほゝゝ。」と、美しく笑つて、「あの、今はお住居は何方？」
　雪江は少し當惑したやうに、
「あの……」と、云ひ澁つて、「あの、私、今、高圓寺にゐますの。」と、云つたが、宮川はにつこりして、
「まあ、郊外に被在るの。そりやいゝわねえ。きつと分化式のお宅か何んかで、スヰートホームといふ奴ぢやないの。ほゝゝ。お子樣は？」
　雪江は片手で口を掩ひながら、
「あら、笑談ぢやありませんわ。私、まだ結婚なんかしやしませんわ。母とたつた二人つきりでゐるんですもの。」
　宮川は大仰な表情をして、
「あら、ぢやまだお獨身なんですの。そりや失禮したわねえ。ほゝゝ。私、あんたは御家庭が御家庭だつたから、もう疾うにお嫁きになつて、いゝお母さんになつて被在るんだとばかり思つてゐましたわ。」
　雪江は寂しく微笑んで、
「それならいゝんですけど、相變らず暢氣だもんですから、……」と、云つて、「あの、それよりもあなたは、今何方に被在いますの？」と、訊く。
　宮川は小首を傾げて、西洋人のやうな眼づかひをしながら、
「私？　私は今蒲田にゐるんですの。今夜はね、一寸人に誘はれて銀座へ來ましてね　これからもう一つ用があるんで、神田の連雀町まで行かうと思つてゐるんですの。」
　二人がそんな話をしてゐるうちに、電車は東京驛へついてしまつた。とみると、中野行の電車はもうちやんと歩廊の向側へ來て待つてゐるので、二人はそのまゝ歩廊を斜に横切つて、一番先頭の車へ乘つて、今度は隅の方の座席へ並んで腰を下ろした。
　雪江はどう考へても宮川が今何をしてゐるのだか、さつぱり見當がつかなかつた。洋服だつて素晴らしい高價なものを着てゐるし、少し派手過ぎる程の濃化粧もして、目顏に似合つてゐて見るから滴るやうな美しさである。女學校にゐた時代から宮川は始終白粉などをつけてゐて、級中でも一二を爭ふ洒落ものだつたが、それにしても八年振りに逢つてみると、その時分とはまるで較べものにはならない程眼鼻立ちも整つて、何方かといふと明るい、牡丹の花のやうな美しさであつた。
　雪江は不思議でならないので、どうかして彼女の今の身のうへを聞かうと思つたが、併しそれを云ひ出すと、從つて自分の現在の境涯も語らなければならないので、雪江はそれが辛さに態と控へてゐた。
　宮川は快活さうに、足をついと前へ踏み出しながら、
「ねえ、關口さん、あの、あんたこれからずつと高圓寺へお歸りになるの。」と、いふ。
　雪江はふつと眼をあげて、
「え、……」と、答へたが、宮川は右の手の手袋の留口をめくつて、小さな角型の腕時計を覗いてみながら、
「まだ、やつと九時だわねえ。」と、呟いて、「あの關口さん、まだ時間があるから、あんた一時間ばかし私につきあつて下さらないこと。私、

折角お目にかゝつたんですもの、何んだかもう少しお話がし度くつて耐らなくなつて來たわ。可けなくつて？」と、雪江の顏を覗き込みながらいふ。

雪江はあの侘しい家で、たつた一人で自分の歸りを待ちわびてゐる母親のことを思ふと、何んだか早く歸り度くもあつたが、併し宮川に逢ふのも年年振りだし、それにすつかり心持が攪亂されてしまつてゐる今夜なので、もう何うでもいゝやうな氣もしてゐた。久し振りで逢つた舊友と、せめて打融けて話でもしたら、少しは胸も鎭まるだらうとそんな氣もして、彼女はコートの前を合はせながら、

「あの、私、いつも歸りが遲いんだから、時間は構ひませんけど、……」と、いふ。

宮川はにこにこして、

「あら、そんなら構はないぢやないの。ぢや私と一緒に萬世橋で下りて、彼處のカッフェで熱い紅茶でも飲みながら、ゆつくりお話をしませうよ。それがいゝ。それがいゝ。」と、云つて、男のやうに肩を張つてみせたりする。

雪江にはさうした自由な、體のこなしまでがどうしても腑に落ちなかつた。

やがて電車が萬世橋の驛へ着くと、宮川は先づ立つて、雪江を促しながら下車した。彼女は後から危ふやうに右の手を雪江の腰へ廻しながら、

「ほんとに今夜は隨分寒いわねえ。今年は一體何うしたつて云ふんでせう。雪ばかり降つてゐるぢやないの。」と、云ひ云ひ、石階を下りてゆく。

雪江は一足々々注意して、下りながら、

「ほんとにねえ。今夜も曇つてますから、まだ降るかも知れませんわねえ。」と、云つたが、宮川はツツと輕い舌打ちをして、

「もう御免だわ。雪が降ると私達の商賣は全く遣り切れないんですのよ。明日もこれぢやひよつとかすると、又朝早くからお召し上げかな。」と、云つて、ほゝゝゝと笑ふ。

停車場の出口を出ると、今迄温かかつたので、刺すやうな寒氣が俄に襟もとから染み込んで來た。須田町の辻にも往來の人影が疎らで、空ッ風が明るい店明りの中を縱横に吹きまくつてゆく。電車の車輪の軋みまでが歯の根にきいんと響いて來た。

宮川は電車通りで、一寸立止つて、四邊を見廻してゐたが、やがて何か面白いことでも思ひついたやうに、

「あ、關口さん。いゝ家があるわ。彼處へ行きませう。彼處なら小ぢんまりしてゐて、人立ちがしなくつていゝわ。」と、一人で合點いて、彼女は市街自動車の後からついと向角の人道の方へ渡つてゆく。もう道が凍つてゐるので、雪江は足許を取られさうで、冷汗が滲むやうな思ひをしながら、やつと宮川のあとを追つていつた。

大通りを小川町の方へ向つて歩いていくと、丁度左側の二つ目の横町にカッフェ・若村といふのがあつた。そこはやつと間口五間ばかりの、明るいバラック建で、外から見ただけでも感じがよかつた。

宮川はそこの扉を明けて、

「さ、……」と、云ひながら、自分が先づ先へ入つて、雪江が入る間扉を押へてゐてやつて、そのまゝ隅の方にある卓へいつて腰を下ろした。

そこは卓の數も七つばかりしかなくて裝飾なぞも相當に凝つてゐて、而も丁度幸ひ相客がなかつたので、話をするには持つて來いの家だつた。

二人が卓に就くと、十七八の女給が、

「被來いまし。」と、云つて、此方へやつて來たが、豫てから宮川とは馴染とみえ、にっこり視

しげに會釋をする。
宮川も微笑みながら、
「今晩は。先達は遲くまでお邪魔をして濟みません。」と、云つて、「ねえ、菊枝さん、あの、濟みませんけど、もつとどんどんストーヴを焚いて頂戴な。石炭のお代は私が出すわ。ほゝほ。ほんとに今夜は寒くつてねえ。」と、笑談を云つて、今度は雪江の方を見ながら、「ねえ、關口さん、あんた何か召食らない？　こゝのビステキはそりや素敵よ。ほゝゝゝゝ。」と、笑ふ。その顏には電燈から流れて來る柔かい光がちろめいて、女でも懷ひつき度いやうな艶めかしさが動いてゐた。

十

雪江はやがて何を食べるかと註文を聞かれると、返事に困つてしまつた。もう胸が一杯で、とても食べるものなぞは喉へ通りさうもないので、
「さあ、……」と、云ひながら默つて俯向いてゐると、宮川は笑つて、
「丁度今は時間が惡いわね。私もたつた今しがた食事をして來たもんですから、……」と、氣を通して「あゝ、そんなら何か飲みものをさう云ひませうよ。あなた、お酒は何ら？」と、いふ。
雪江は、先刻芳川で飲んだ酒が途中の寒さでもう醒めてしまつてゐるので、何んだか喉が渴いて、飲みものが欲しくて耐らなかつた。で、宮川の顏色を讀み讀み、
「さあ、私、何か紅茶のやうなものならおつきあひ出來るんですけど、……」と、いふと、宮川は引受けて、
「ねえ、菊枝さん。そんなら此方には紅茶を差上げて下さいな。それから私にはね、あの、それ、例のをね。」と、眼交ぜをしながらいふ。
女給はそのまゝバアの方へ入つていつてしまつたが、やがて紅茶と、それから葡萄酒の洋杯にリキユールらしい紅い酒をついだのを運んで來て、卓のうへへ置いてゆく。
宮川は洋杯の方を取り上げて、
「ねえ、關口さん。貴女の前でこんなものを飲んで御免なさい。私、何んだか寒くつて仕樣がないんで、こんな晩には少しでもお酒を飲んでゐないと歩けないのよ。惡い習慣だわねえ。ほゝゝ、……」と、艶やかに笑ひながら媚びのある口つきをして、少しづゝ酒を飲む。
雪江も紅茶の中へ角砂糖を入れながら、
「ほんとにねえ。お酒を召飲る方はこんな寒い晩には何うしてもねえ。ほゝゝゝゝ。」と、口だけで笑つて、「あの、それは何んといふお酒なんですの？」と、訊く。さういふ雪江もあんまり宮川がうまさうに飲むので、何んだか羨ましくてならないのであつた。
宮川は一寸洋杯を電燈の光で透かしてみながら、
「これですか。これはね、チェリー・ブランデーですの。甘くつてそりやおいしいわ。」と、云つて、「あなたはちつともお酒は召飲らないんですの。」と、雪江の方をみる。
雪江はその場のきつかけで、まさか飲むとも返事が出來なくなつて、
「え、私、その方は、……」と、云つて、紅茶の茶碗を取り上げながら、少時の間は默つて、それとなく宮川の樣子を偸み視てゐたが、やがて思ひ切つて、
「ねえ、あなた、宮川さん。あの、失禮なことを伺つて濟みませんけど、あの、貴女は唯今何をして被在いますの。もう何方へか。……」と、云ひかけると、宮川は大袈裟な表情をして、
「關口さん、笑談云つちや厭だわ。私、結婚なんかしやしませんわ。ほゝゝゝゝ。」と、一

も二もなく云ひながら、「さうねえ、何をしてゐるつて、さう正面から訊かれると困りますけど……ねえ、あなた、當らないつて、當てて御覽なさいましよ。この風つきをみたつて分りさうなもんぢやありませんか。」と、くすくす笑つてゐる。

雪江も無理に笑つて、

「さうねえ。でも私にはまるで見當がつきませんの。私、實は先刻からいろいろに考へてみたんですけど、どうしても分らないんですわ。」と、遠慮しいしい云ふ。

宮川は聲を立てて笑ひ出しながら、

「やつぱりさうか知ら。あんまりズバ拔けた商賣をしてゐるから、あなたのやうに堅くして被在る人には見當がつかないかも知れませんわねえ。それに私、自分の眞實の名と商賣の名と違つてゐるから、猶のこと想像がつかないでせうねえ。」と、又洋杯をあげながら、「ねえ、關口さん、ぢや私、打明けてお話しませうか。でも聞いたあとで、何あんだ、そんな下らないことをしてゐるのかなんて、輕蔑なすつちや厭あよ、あの、實はね私、今蒲田の撮影所にゐますの。」と、ぢいッと雪江の顏をみながらいふ。

雪江は驚いて、

「あら、まあ、ぢや活動の方を？……」と、半信半疑で云つたが、宮川はにいつと笑つて、

「さうですの。活動女優ですの。隨分變つたものになつたでせう。ほゝゝゝ。私もね、ですから昔の學校のお友達なんかに逢ふと、そりや變な氣がしましてねえ。此間も私、淺草で、それ草野さんていふ方が被在つたでせう？眼のお惡い、あの方にばつたり出會しちやつて、ほんとに困つてしまつたのよ。何しろ彼方は御主人と御一緒で、お子さんを三人も連れて被在るんでせう。こんな風姿をして、御挨拶をしていゝんだか何うだか、分らないもんですから、私到頭逃げてしまひましたの。それにそれ、ファンの連中がいろんなことを云つちや私の周圍でわいわい囃し立てるんでせう。私、猶のこと、困つちまひましてねえ。私、あんなに閉口したことはありませんでしたわ。ほゝゝゝ。」

雪江もさうだらうと思つて、合點きながら、

「あゝ、それで、何んていふお名前でフヰルムへ出て被在るんですの。」と、訊く。彼女は活動女優と聞いて、一方ならず、興味を湧かせてゐるのであつた。

宮川はいかにも自由な體のこなしをして、

「私、あの、住江千鶴子つていふ名で出てゐるんですの。」と、答へたが、無造作には云つてゐながら、何處かに得意さうな色がみえてゐた。

雪江は二度吃驚して、

「まあ、住江千鶴子！　あれが貴女で被在るんですか。まあ……」と、眼を丸くして、「私、忙しいんで、つい寫眞を見て歩く隙がないもんですから、今迄ちつとも存じなかつたんですわ。住江千鶴子つて云へば、貴女……」と、我を忘れてじろじろ宮川の顏を見ながら、「まあ、ほんとに私、失禮して申譯もありませんわねえ。あんまり時勢に遲れてゐるやうで、ほんとに私、恥かしう御座いますわ。」と、少し顏を紅くしながらいふ。

住江千鶴子と云へば、つい最近に賣出した蒲田の名星で、よく新聞なぞにも出てゐる名であつた。雪江は自分でも云つてゐる通り、活動寫眞なぞをみて歩く隙がないので、今の今までそれが宮川であらうなぞとは夢にも思はなかつたのであつた。さう云へばつい昨日の新聞にも何んとかいふ大映畫に出演してゐるとか大きな廣告が出てゐたのを思ひ出したが、雪江にはそんなことを思ひ合はせると、一層何も彼もが不思議に思へて來るのであつた。

宮川はもう一杯酒を持つて來させて、それを

ちびりちびり嘗めながら、

「ほゝゝゝ。關口さん、そんなに吃驚なさらないだつていゝぢやありませんの。今の世の中ですもの。どうせ女に生れたからには私どんな思ひ切つた職業についたつて、ちつとも構はないと思ひますわ。女優だつて何だつて、貴女、自分の腕で稼いで生活を支持していけりや、ちつとも世間へ對しても恥かしいことはありやしないんですもの。世の中にはお女郎になる女さへあるんですものねえ。」

雪江は深く共鳴するやうに合點いて、

「さうですとも。そりや無論のことですわ。殊に貴女のやうに立派に成功なさりやもう何んな方面へ出て被往つたつて、結局人間の問題ですわねえ。ほんとにお羨ましうござんすわねえ。私、寫眞さへみてゐりや、もつと前に、あなたが住江千鶴子だつていふことも分つたでせうに、ほんとに私、意外でなりませんわ。」と、興奮しながらいふ。

當の住江千鶴子は快ささうに笑つて、

「ほゝゝ。でも今迄に撮つた寫眞なんか見て下すつちや、私困りますわ。今迄はもうほんのつまらない役ばかりしきや演つてゐないんですもの。」と、云つて、「でもねえ、お庇護様で、此頃では多少でも人様に名前も知られましたし、蒲田でも相當にいゝ役もつくやうになつたんで、私、此れからだと思つてゐますの。どうか私もからやつて何うやら世間へ顔も出せるやうになつたんですから、貴女もお馴染甲斐に、これからは大いに宣傳して下さいましな。お願ひ致しますわ。」と、笑ひながらいふ。

雪江は頭を下げて、

「あら、私のやうなものに、そんなことは出來ませんけれど、でも陰ながらお力添へを致しますわ。それにしてもほんとに結構でしたわねえ。もうそれ迄に賣出して被在れば、あとは貴女、何うにだつてなりますわ。ほんとに何うか、このうへとも御勉强なすつて、うんと成功して下さいましな。私達も同窓の中にあなたのやうな方が被在るのかと思ふと、鼻が高う御座いますわ。」と、彼女は心から云つた。

住江千鶴子も、昔の友達からさう云はれると妙にいゝ心持になつて、

「有難う。私、そんなに仰有つて下さると、穴へでも入り度くなりますわねえ。ほゝゝ。私も今迄はお話も出來ないやうな苦勞をして來ましたから、今度こそ何うかしてこの道で思ふ存分なことをしてみたいと思つてゐますの。私これで隨分野心家なんですのよ。一つの事を仕遂げると、もうすぐその次のことが眼の前へぶら下つて來るんで、その爲めにどんなに勵まされるか知れないんですの。ですからね、こんな自慢をして笑はれるかも知れませんけど、私、今度こそはきつと何うにかなるだらうと思つてゐますわ。映畫つていふものはそりや奥行が深いんですからねえ。何處まで行つたら、もうこれでいゝつていふことはないでせうけれど、でもそれだけに又先に樂しみがありますわねえ」

雪江はもうすつかり氣壓されて、默り込んでしまつた。今の自分の憐れな境涯に比べて、昔友の成功の輝かしさ！ たとひ世間からは一種の眼でみられる職業ではあつても、その名を萬人に知られるだけでも、その人にとつては生き甲斐があるのである。何うせこの世の中へ生れて來たからには、一人でも多くの人に、自分の存在を知られるといふことが確かに生存の慾望のひとつであり、而もフヰルムのうへで、自分の藝を演じて、幾萬のファンを熱狂させ、自分の美しい容姿を人々の胸臆に印銘するのであるから、その面白さ得意さは何んなであらう。それを思ふと、雪江は、住江千鶴子の前へ坐つてゐることさへがひどく晴れがましくなつて來た。

十一

そこへ突如に、カッフェの扉が開いて、會社員風の男が二三人どやどやと入つて來た。

「おゝ、寒い。おい、成る可く煖爐に近い卓へ坐らうぢやないか。」なぞと云ひながら、そのひと連れは不遠慮に、雪江達のゐる卓の方へ入つて來たが、皆は一様に住江千鶴子がゐるのを知つて、そのまゝ照れたやうに奥の卓へ入つていきながら眼ひき袖ひき、こそこそ話をやり出す。そして三人別れて卓へ就くと、今度はじろじろ氣味の惡いほど此方ばかりみてゐた。

千鶴子はそれでも平氣な顔で、洋杯をあげてゐた。見られてゐることを意識して、却つて彼女は一種の媚のある態度をみせながら、

「ねえ、關口さん。私、自分の話ばかりして御免なさいました。ほゝゝゝ。」と、笑つて、「あの、それよりも今度は貴女のお話を伺はうぢやありませんか。私も打明けてお話したんですから、貴女もどうかほんたうのことを話して下さいましな。」と、迫るやうに親しげに云ふ。

雪江はさう云はれてもとても自分の身のうへなぞは語れなかつた。相手が輝かしい名をもつてゐるだけに、益々雪江は卑屈になつて、却つて何かなしに悲しくさへなつて來る。又今夜のこの氣持で、何うして今の境涯のことを千鶴子に打明けて語れよう。彼女はやがて顔を伏せながら、

「私、私のことなんか、何うでもよう御座んすわ。私、貴女に比べたら、とてもお話にならないやうな惨めな境遇にゐるんですもの。お話しようつたつて、とてもお話出來やしませんわ。」と、それでも意地張りらしく、うすく笑つて、俄に又話頭を轉じながら、「ねえ、あなた、それよりも、私是非一度貴女が撮影して被在るところを拜見し度いんですが、一度お邪魔に出ちや可けませんこと。」と、いふ。

千鶴子は笑つて、歡迎するやうに、

「え、被來いとも。是非來て下さいましな。私、實は今度、「永遠の道」つて云ふ、大物にかかりますから、いゝ都合ですわ。ほんとにいつでも見に被來いましよ。」と、態と聞えよがしに云つて、「尤も私、明後日から多分五日間ほど信州の方へローケーションにいくだらうと思ひますから、その間は可けませんけど、その後なら、いつでも構ひませんの。あ、いゝわ、私、無駄足をおかけしても何んですから、面白い撮影のある日を前以てお報せしますわ。貴女のお住居は何處なんですの。御番地だけ伺つて置き度いわ。」と、得意さうにいふ。

雪江は仕方がなしに、千鶴子がバッグの中から取り出した華奢な手帳へ、高圓寺の番地を書き留めた。さうした持物にも、艶めかしい化粧品の移香が匂つて、雪江には女優といふやうなものの派手やかな生活が眼にみえるやうであつた。

千鶴子は序に小型の名刺を一枚出して、雪江の前へ置きながら、

「あの、私はね、今此處にゐますのよ。大森にほんたうの家が出來る迄、一寸假り越しをしてゐるんですけど、若し彼方の方面へでも被來つたら、是非お寄んなすつて下さいましな。もうかうして久し振りでお目にかゝれたんですから、これからは何うかちよくちよくお便りもね。」と、いふ。

千鶴子はそれからも興に乘つて、撮影所の内部のことなぞをかれこれとさも面白さうに話してゐたが、ふつとみると、もう十時が二十分程過ぎてゐるので、さすがに彼女も吃驚して、

「あら、もう十時過ぎてゐるのね。驚いたわねえ。私、十時に人に逢ふ約束をして置いたんだ

けど、……。」と、云ふ。彼女はあれからも四杯程洋杯の數を重ねたのでもう大分酒が廻つて、ふつくらした頬を眞紅にしてゐた。
雪江もうつかりしてゐたので、十時過ぎと聞くと、俄に慌しい心持になつて、
「私、もうあんまり遅くなると、歸りが恐う御座んすから。」と、云つて、そろそろ歸り支度をする。
千鶴子も最後の洋杯をぐツと飲んで、女給を呼んで勘定を命じた。雪江が拂ふといふのを彼女は無理に自分で拂つて、そのまゝ椅子から立ち上りながら、
「ぢや行きませうか。これから高圓寺迄ぢや大變ですのねえ。京濱方面と違つて彼方は不便でせうからねえ。」と、云ひ云ひ、送つて出て來た女給に會釋をして、雪江よりも一足先に戸外へ出た。
雪江はそのあとについて出ながら、
「ほんとに同じ郊外でも彼方方面とはまるで違ひますわ。第一電車ももう十一時四十分迄しきやありませんしね。それにもう今時分になると眞闇で、そりや恐いんですのよ。」と、いふ。
戸外へ出ると、氷のやうな北風がぐわうツと電信線を鳴らして、雪江はまるで血も凍るやうな恐ろしい寒氣に思はず脣を噛ひしばらずにはゐられなかつた。
須田町の角まで出て來ると、千鶴子はいきなり手袋をはめた手で、雪江の手をしつかり握つて、いかにも機嫌がよささうな調子で、
「ぢや關口さん、私、お名殘り惜しいけど、此處で失禮しますわ。」と、云つて、「あの、ほんとに是非一度撮影所へ被來つて下さいましな。私、自分で働いてゐるところを是非貴女に見せ度いわ。さうすりや私がどんなに自分の藝つていふもので苦しんでゐるかつていふことが、貴女にもお分りになるわ。ほゝゝゝ。ほんとに私、手紙を差上げますから、きつと被來つて下さいましな。ゲンマンよ。」と、いふ。
雪江もいざ別れることになると、何んだか急に感傷的な心持になつて、
「有難う。きつと伺ふわ。今夜はあんまり飽氣なかつたから、この次の時にゆつくり私お話し致しますわ。」と、云つて、握られた手を又うへから握り返しながら、「ぢや左様なら。又ね。」と、いふ。
千鶴子もやつと手を離して、投げキッスでもするやうな恰好をしながら、それなり別れていつてしまつた。雪江は萬世橋の停車場の方へ入つていきながら、そつと後を振返つてみると、千鶴子はまるで西洋人のやうに、大股でとつとと歩いて、薄暗い軒燈の影を連雀町の方へ曲つて、いつてしまつた。これから何處へいつて、何をするのだらうと思ふと、雪江には相手が相手だけに、いろんな空想が浮ぶのであつた。
雪江がやつとのことで、高圓寺の家へ歸り着いたのは、もう十二時一寸前であつた。その晩も母親は彼女の歸りを待ち侘びて、炬燵の中へ藻繰り込みながらぼんやりしてゐたが、雪江は唯何氣ない調子で世間話をするだけで、今日の出來事については何にも語らなかつた。彼女は餘程千鶴子の話をしようかと思つたが、何んだか氣が向かないので、到頭噯氣にも出さなかつた。
母親は今日の成果に就いて、さも話が聞き度さうな顔をしてゐたが、雪江はその顔をじろじろみて、何處か小意地の惡い聲で、
「ねえ、母様。私、今夜は何にもお話しませんわよ。今日は生憎忙しかつたんで常務さんにもゆつくりお話をすることが出來なかつたんですもの。」と、云つて、何うしたのかひとりで焦れながら、もう直ぐに寢支度をしだした。
雪江はその晩もおちおち眠れなかつた。何よ

りも一番彼女を焦だたせるのは、あの千鶴子であつた。千鶴子に逢つてからはもうまるで別な世界が眼の前に展けて來たやうで、雪江は何かなしに、唯彼女のことばかり思はれるのであつた。學校時代にはあんなだつた彼女が、今はもう住江千鶴子で、あれだけの名聲を馳せてゐるのかと思ふと、雪江は妙に嫉ましいやうな、羨ましいやうな氣がしてならなかつた。容貌だつてさう大していゝといふのではなし、頭腦なぞは寧ろ普通以下だつた彼女が、今あんなに豪くなつて自分の眼の前に現はれて來ようとは實際のところ夢にも豫想しなかつた。もう他の女達たちはいづれも嫁いて、それぞれ人にも羨れないやうな道を歩いてゐるのに、あの千鶴子ばかりは女でゐながらたつた一人で現在の地位を築きあげ、而も社會の人に活動女優界の花形として持て囃されてゐるのである。それを思ふと雪江は終には變に氣がこじれて、口惜しいやうな、腹の立つやうな氣持さへして來るのであつた

「人間の世の中は全く運だわ。いゝ運さへ廻つて來れば、誰だつてあゝなれるんだ。」と、彼女は口の中で呟いてみたが、併しそれも氣休めにはならなかつた。

雪江は暗闇の中で、吹き荒ぶ風の音を聞きながら頻りに千鶴子の生活に對する空想ばかり描いて、あゝもあらうか、かうもあらうかといろいろに考へつくしてゐたが、考へれば考へる程今の自分の身のうへが情なくて耐らなくなつて來るので、彼女は到頭意を決して、もうこれからは決して千鶴子のことは考へまい、逢はぬ前に返つて、もう決して千鶴子といふ名さへも思ひ出すまいと、今度は意地になつてさう極めた。そしてどうかして心持を他へ轉じようとすると、すぐその後からは待ち構へてゐたやうにあの廣瀬の顔や、今夜の口惜しい情景がありありと心の眼にうつつて來る。併しもう彼女にはその事實さへ昨日のことのやうに感じられて先刻ほどの興奮はまるで胸に湧いては來ないのであつた。

雪江の心はいつしか又千鶴子のうへに歸つてゐた。

十二

その翌日は朝から何んだか、氣がくさくさして耐らないので、いつそ會社を休んでやらうかと思つたが、併し昨夜の出來事を思ふと、今日休んでは何かしら意氣地がないやうで自尊心を傷けられるやうな氣もする。と、云つて、廣瀬に逢ふのも厭なので、何うしようかと思つて雪江は臥床の中にゐる時から迷つてゐた。

昨夜廣瀬から貰つた三百圓の金は、態と母親にも見せずに、自分の鏡臺の抽斗の奥深く藏つてある。あの三百圓があればたとひ何うなつても當分の間、生活に心配はないのである。月々百圓はかゝるにしても、優に三ケ月は支持していけるのである。さうとすれば雪江は會社へ出ても、何もさうびくびくするには當らない。廣瀬の出ように依つては、もうあんな會社はやめてしまつてもいゝのである。三ケ月の間に探せば、或はもつともつといゝ勤口があるかも知れない。さう思ふと、雪江は妙に腹に力が出て來て、何うでもなれといふやうな自棄な氣も手傳つて、彼女はその日兎に角會社へ出てみることにした。

八時を打つと、雪江はどうせ遅刻するのを覺悟して、いつものやうに支度をして、母親には何にも云はずに家を出た。留守の間にひよつとして母親が鏡臺の抽斗を開けてみたりすると可けないので、彼女は例の金をそつと紙入へ入れて、肌身につけて家を出たのであつた。

會社へ來てみると、まだ廣瀬は出てゐない。

雪江はほつとして、すぐさま仕事にかゝつたが、自分の方が先へ來ただけに、妙な優勝者の地位に立てるやうな氣がして、雪江は一時間ばかりの間にすつかり心持ち落ちついて來た。
　廣瀨は何うしたのか、もう十一時過ぎになつてからやつと姿を現はした。雪江は何喰はぬ顏で挨拶をしたが、とみると、彼の顏にはいつになく宿醉の色が現はれて、寢不足らしく、何處か心が疲れきつてゐるやうな體のこなしをしてゐた。朝つぱらから詰めかけて來た用のある客が幾人も待たせてあるので、廣瀨は席へ落着く隙もなく、オフィスの扉を出たり入つたりしてゐた。
　午過ぎになると、少し手がすいて來たので、廣瀨はやつと自分のデスクへ納まつて、給仕がもつて來る書類や傳票へ、さも物憂さうにぺたりぺたりと印を捺してゐた。それ位な仕事も彼には重荷であるとみえ、三十分もやりつゞけると、もう倦怠を覺えるのか不遠慮に兩手を押擴げながら大きな欠伸ばかりしつゞけてゐた。よくみるとその顏は血色も惡くて、あんまり欠伸をするせゐか頰の肉がたるんで、腫れぼつたい眼には絕えず淚が宿つてゐた。
　雪江は、自分の方でも昨夜のことなぞは曖氣にも出さなかつた。いつもと同じやうな平氣な顏で、一生懸命に働いてゐたが、廣瀨もさすがに年を爭つてゐるだけに、それらしい樣子は少しも見せなかつた。時々此方を向いて、仕事のことで話もしかけるが、併し彼は平常とまるで違はない態度をみせてゐた。
　三時頃になると、雪江は一寸隙が出來たので、例の化粧室へいつて、身じまひをした。そこには二人ばかり階上の會社の女事務員がやつて來て、面白さうにぺちやくちや何事か饒舌りあつてゐたが、その間にも入口の扉は二度ほど開いた。雪江はもう後も振返らずにせつせと化粧を直してゐたが、その二人が出て行つてしまふと入違ひに今度はひそやかな靴音が入つて來ていきなり小聲で後から、
「おい、關口さん。」と、呼びかける。
　鏡の中へ映る顏をみると、それは廣瀨であつた。
　雪江は仕方がなしに、一寸頭を下げたが、廣瀨は子供のやうな無邪氣な顏をして、四邊を憚るらしく聲を落しながら、
「ねえ、關口さん、昨夜はどうも。」と、云つて、一層聲を潛めながら、「ねえ、關口さん、昨夜實はあれから小澤に逢つてねえ、いろいろあんたの話もしたんだよ。それでね、今夜にも一寸あんたに話し度いことがあるんだが、どうだらう、何んとか都合をして吳れないかねえ。」と、いふ。
　雪江は返事をしかねて、牡丹刷毛をもつたまゝもぢもぢしてゐると、廣瀨はにたりと笑つて、
「いや、關口さん。もう今夜は昨夜のやうな怪しからん眞似は斷じてしないから、そんなに警戒しずに、一寸一時間ばかりでいゝから逢つて吳れんか。大丈夫だよ。私もいろいろ考へて居ることもあるから、決してあんたの迷惑になるやうなことはしないよ。何うだね、私の口から誓へばそれでいゝぢやないか。」と、少しは照れてゐるやうに云ふ。
　雪江はそれでも返事をしなかつた。
　廣瀨は今にも誰かが入つて來やしないかと悄々してゐるらしく、急に性急な調子になつて、
「ぢや兎に角、私は會社が退けると直ぐに自動車を日比谷公園の北門の前へ待たせて置くから、もしあんた、氣が向いたら來て吳れんか。いゝかい、分つたかい。北門だよ。私、あすこで三十分位は待つとるからね。」と、云つて、右の

手を額の前へ突き出して、承認を求めるやうに合點きながら、彼はそゝくさ便所の方へ驅け込んでいつてしまつた。

雪江は手早く化粧道具をしまつて、彼が用を達して出て來ない前に、化粧室を出てしまつた。

それからも雪江は廣瀨のすぐ横の卓へ、けろりとした顏をしながら坐つて、又あとの仕事をしはじめてゐた。彼女の心には今廣瀨から云はれた言葉がはつきりと映つて、彼女は何うしようかと思ひ惑つてゐるのであつた。彼女は小澤との話の内容も知り度いし、さうかと云つて今夜廣瀨に逢へば、又何か恐らしいことを仕向けられるのは分つてゐる。昨夜の今夜であつてみれば、もつともつと廣瀨は思ひ切つた手段を執るかも知れない。口ではあんなに誓つてゐても男位當てにならないものはないのであるから、それはもう前以て覺悟してかゝらなければならない。

ふつとみると、廣瀨はすぐ前で、何か仕事のうへの間違ひでもあつたとみえ、若い男の社員の一人を呼びつけて、例の柔らか調子で叱りに油を絞つてゐる。その風恰好には何處となく重役らしい貫目がみえて、雪江は昨夜の廣瀨とは別人のやうな彼をみた。かうしてゐるところを見れば、男前もよし、滿更彼女にはさまでに厭な人ではなかつた。言葉つきにも、態度にも十分ゆとりがみえて、何處か頼もしいやうな處がある。

雪江の心持は何うしたものか、急にあらぬ方へ動いていつた。もし彼を自分のものにしたら、何んな感じがするであらう。たつた二人きりになつて、打解けて話をしたら、彼は何んな態度をみせるだらう。それよりも自分の性的な××の對象にしたら、一體彼はどんな男であらう。さうしたことを考へると、雪江は妙な好奇心が湧いて來るのを覺えた。昨夜手を握られた時にも、ふつとそんな心持がしたが、確かに彼は女を誘ふ或ものをもつてゐる。雪江はそれとなく上眼で廣瀨の顏をみてゐるうちに漸次と體が熱くなつて來るやうな氣持がして來た。

どうせもう自分はあの小澤とは早かれ、晩かれ別れてしまはなければならないのである。もしさうとしたら、この廣瀨の云ふことを聞いて、反對に小澤を見返してやるといふやうな手もある。譬ひ廣瀨が氣に入らなくても、廣瀨のものになるといふことは小澤に對する一種の復讐にもなるのである。そのうへ昨夜の樣子でみると、廣瀨には可成り甘さうな處がある。そこが此方のつけ目で、小澤などに關係して無理をしてゐるよりも、どんなに樂であるか知れない。第一小澤と廣瀨では自分に呉れる金といふ點でも雲泥の相違がある。たつた一度の逢ふ瀨で、しかも云ふことも聞かない自分に昨夜は三百圓といふやうな大金を惜しげもなく呉れた廣瀨である。もし自分が彼の自由になつたら、あの廣瀨は幾何でも金を呉れるに相違ない。小澤のやうに此方から愛情を捧げてかゝるのではないだけに、その點ではどんな術策でも廻らせるやうな氣がする。さうして金に倦きるやうな生活をしながら、あの住江千鶴子などと、心置きなくつきあつて面白可笑しく世を渡つたら、何んなに樂しいことであらう。さうなれば、無論、思ふ存分な風姿も出來ようし、好き勝手なことも出來るに相違ない。あの住江千鶴子と同等な立場に立つて、少しも此方が卑下しずに交際つていけるだけでも、何んなに愉快だか知れやしない。そんな考へから雪江は漸次とそつちの方へばかり心持を惹かれていつた。彼女は考へれば考へるほど自分の辯解の言葉が先々と思ひ浮べられて來て、いつの間にか仕事の方はお留守になつていつた。

十三

もう間もなく五時が過ぎようといふ頃、日比谷公園の北門の角に停つてゐる一臺の自動車の窓には雪江のこつてりと化粧をした綺麗な顏が、薄闇の中へほんのりみえてゐた。彼女は會社が退けると、社のものに見附かるのを恐れて、ぐるりと有樂町のガードの方から廻つて、日比谷公園へやつて來たが、案の定、そこには廣瀬の自動車が置き捨ててあるので、彼女は居眠りをしてゐる運轉手を起して、それへ乘せて貰つたのであつた。

運轉手に聞くと、廣瀬は一寸丸ビルの大丸へ寄つて、買物をして、すぐに日比谷の方へ廻るから、お前は北門のところへ車を持つていつて待つてゐろと云つたといふ。雪江はそれから車の中でずつと二十分間も待つてゐるのであつた。彼女は道ゆく人にも顏をみられるやうな氣がして、幾度か窓のカーテンを下ろさうと試みたが、生憎上の紐が切れてゐて、どうしても下りて來ない。で、そのまゝ彼女は隅の方へ小さくなつて、電車が通る度に隱れるやうにしながら、それでも人通りが途絶えるとこつそり窓硝子の方へ顏を出して、もう眞闇になつた濠端の方を眺めてゐた。今にも廣瀬がやつて來るかと思つて、彼女は焦りつくやうな思ひで待つてゐるだけに、もう待遠しくて耐らないのであつた。

それから十分ばかり經つと、ふつと自動車の窓硝子の處へ立つて、車内を覗き込むものがある。よく見ると、それは廣瀬で、彼はもういそいそしながらすぐさま車に乘つて來て、自分で扉を閉めながら、

「やあ、どうも大變に待たせて濟まなかつたな。あゝいや、大丸へ一寸買物に寄つたら、支配人に捕まつてしまつて、今迄丸の内會の相談さ。どうも私も氣が氣ぢやなくてねえ。はゝゝゝ。」

と、云つて、どつかりと雪江の隣りへ坐る。

それと一緒に自動車は駛り出した。もう行先は運轉手もちやんと心得てゐるとみえ、自動車はそれから日比谷公園の裏通りへ曲つて、佐久間町の方へ向けて、驀地に駛つてゆく。

雪江は今夜もきつとあの芳川へ連れて行かれるのだらうと思つて、それとなく豫期してゐたが、案外な方面へ向つて駛つていくので、内心では妙に不安な氣持でゐた。併し彼女は口へ出して訊くのもあんまり意氣地がないやうなので、態と默つてゐた。

廣瀬はあんまり雪江がむッつりしてゐるので、機嫌をとるやうにいろんなことを話しかけたが、それでも彼女は言葉少なに受け答へをするばかりで、始終俯向いて、車の床に敷かれたマットばかりみてゐた。さすがに運轉手がゐるので、廣瀬も相當に威嚴をみせて、さあらぬ話ばかりしきやしなかつた。

自動車が神谷町の角まで來ると、廣瀬は頻りに車窓から外を覗いてゐたが、突如に、

「おい、此處でよろしい。此處で止めて呉れ。」

と、いふ。運轉手はとある道傍のポストの角へ、そつと車を停めた。

廣瀬は自分が先へ下りて、運轉手に何やら耳打ちをしてゐたが、やがて外套の襟を立ててつかつか眞暗な道の方へ曲つてゆく。雪江は何處へいくとも見當がつかないので、默りこくつて、そのあとから從いていつた。

廣瀬は一足先へ歩いていつたが、そこから坂を下りて崖下のやうな陰氣な町へ入ると、丁度角から二町ばかり行つた、とある暗い細路地の中へはいつていつた。その突當りには小ぢんまりした、家賃にして五十圓位な二階家があつたが、廣瀬はそこの格子戸の前へ立つて、こつそり、

「御免。」と、案内を乞ふ。

雪江は薄暗い隣りの家の庇間に佇んで樣子をみてゐたが、そこの家の門口には、「古流生花指南、荒木理榮」と書いた古びた看板がかゝつてゐて、屋根の上から出てゐる枇杷の樹がくれに、雨戸を閉めきつた二階が隱見してゐる。そこいらは愛宕山に續く丘陵の懐のやうな處なので、こんもりした樹立に掩はれた高い崖がすぐ後を取圍んでゐて、何となく町から懸け離れたやうなひつそりした一郭であつた。雪江は何が何んとも腑に落ちないので、猫のやうに聞耳を立てながら、家の中の氣勢を窺つてゐた。

廣瀬はもう一度、聲を潜めて、

「御免。」と、云つたが、と、その途端に、玄關の上框の障子にぱツと、電燈の光が映つて、やがてその障子がすらツと開くと、内からは五十恰好の、品のいゝ後家さん風の女が顏だけ出して、

「まあ、彼來いまし。ようこそ。さあ、どうかお上り遊ばして。」と、丁寧に頭を下げる。

廣瀬はもう長年の馴染のやうに、いかにも調子のいゝ言葉で、

「やあ、どうもその後はつい忙しいもんだから、御無沙汰ばかりして居つて申譯もありません。今夜は一寸用があつてね、少時の間お邪魔をさせて貰はうと思つてやつて來たんだが、お差支へはないですか。」と、笑ひながら云ふ。

と、女主人はにつこりして、そつと雪江のゐる方を透かしてみながら、

「いゝえ、もう何う致しまして。さあ、どうか、お上り遊ばして。」と、いふ。

やがて廣瀬は靴をぬいで、雪江の方へ眼まぜをしながら家の中へ上つていつた。雪江も立つてゐる譯にもいかないので、思ひ切りよく庇間を出て、廣瀬のあとから上つていつた。

女主人は雪江にも愛想のいゝ笑顔をみせて、

「まあ、どうも今夜は生憎女中が居りませんで、私ひとりだもんで御座いますから。」と、云つて、「あの、廣瀬樣、御存じで在いませう。そこの階段のうへのところにスヰッチが御座いますから、まことに相濟みませんが、お捻りになつて下さいましな。貴方をお使ひ立て申してほんとに相濟みません。」と、いふ。

廣瀬は玄關の横手についてゐる急な階段のうへでもそもそ手探りに探つてゐたが、やがて燈がついたとみえ、どしどし上へあがつてゆく。雪江も云はれるまゝに、二階へ上つていつた。

階上は六疊と、四疊半が二間つゞいてゐて、震災後まだ手入れもしないとみえ、土壁には處々に割れ目がみえてゐたが、それでも疊などはまだ眞新らしく、殊にお手のもの床の間が一際眼立つて、いかにも小體にちんまりと暮らしてゐる家の内の樣子がひと眼でそれと見て取られた。床の間の花筒には苔つきの松が巧みに生けてあつて、丁度そのところ塵ひとつ落ちてゐなかつた。

廣瀬は隅の方へ積んである擬ひ緞子の座蒲團を二枚もつて來て、電燈の下へ足で敷きながら、

「さあ、關口さん、遠慮なく敷いて下さい。」と云ふ。

そこへ階下からは女主人が火鉢を運んで來て、改めて挨拶をすると、又下りていつて今度は茶道具やら菓子やらを持つて來ては厚遇振りを見せる。

廣瀬はにこにこ笑ひながら、

「ねえ、奥さん、今夜は特別に塞いから、御手數をかけて濟みませんが、炬燵をして下さらんか。お手不足なら、私も手傳つて上げるから。」

「はいはい。」と、笑ふ。

女主人も笑つて、

「はい、畏りました。すぐにお支度を致しますから。」と、云つて、「今夜はね、女中が活動をみに参り度いつて申しますもんですから、ついうつかり出してやりましたんで御座いますの。ほんとに御不自由な目をおみせ申して、相済みません。」と、云つて、又階下へ下りてゆく。

廣瀬は火鉢へ手をかざして、座蒲團も敷かずにゐる雪江の方をみながら、小聲で、

「ねえ、關口さん。不思議な家だらう。」と、肩を竦めながらくすりと笑つて、「あんた、此處は何をする家だと思ふね。一寸分るまい。」と、いふ。

雪江もさつぱり見當がつかないので、口だけで笑つてゐると、廣瀬は此方へ顔を寄せて耳打ちをするやうに、

「こゝはね、からみえても一種の魔窟なのさ。つまりこつそり女を周旋したり、女の合宿をしたりする家なんだよ。あの後家はあゝみえても、中々凄腕でね。此處へ出沒する客は相當なお馴染ばかりなんだ。尤も大概客の數が定つてゐるんで、滅多な人間は上げんから、その點は安全なんだが、併し靜かで人の眼に立たんで、一寸いゝだらう。何しろ待合なんかと違つて、座敷を借りて逢ふだけのことなら、至極簡便でねえ。」と、聲は立てずに笑つて、「それはさうと關口さん、あんた腹が空いたらう。何かさう云はせよう。何がいゝ。尤も此處はあんまり仕出屋なんぞが出入りをすると、つい足がつくからといふんで、まあせいぜい丼飯位なところさ。鰻でも取らせようか。」と、いふ。

そこへ、女主人は炬燵の支度をして、運んで來た。それを廣瀬の傍へ据ゑると、四疊の方の押入を開けて懸けものを出して來たが、それはメリンスではあつたが、柄のいゝ、色めかしに三越ものであつた。

廣瀬は女主人に鰻丼を二つ取つて呉れるやうにと云つて、女主人が下りていつてしまふと、炬燵を雪江と自分の間へ引寄せながら、

「さあ、關口さん。入つたら、何うだ。今夜もどうも實に寒いねえ。からやつてゐてもぞくぞくするよ。こゝもいゝが、何しろ酒を飲ましてくれんのでねえ。こんな晩にや何んだか口寂しいが、まあ、いゝ、我慢しよう。はゝゝ。」と、笑つて、苦い茶をぐッと飲む。

雪江も強ひられるまゝに炬燵へ入つた。廣瀬は態と腰まで藻繰り込むやうにしながら、又微笑を含んで、

「ねえ、關口さん。昨夜はほんとに失禮したねえ。どうか許してお呉れ。あとから大いに後悔したが、もう駟馬も及ばずでねえ。はゝゝ。」と、云つて、惚れ惚れと雪江の顔をみながら、「あれからね、小澤のところへ電話をかけてさ、奴をあの家へ引張り出してやつたのさ。さうしてね、あんたのこともいろいろ話をしたんだが、妙に話がこんがらかつちやつてなあ。到頭昨夜は小澤につきあつて、午前の二時迄飲みぬけてしまつたのさ。私もいつになく醉つて、家へ歸つたのも何も實はよく覺えて居らん始末さ。實に醜態だつたよ。はゝゝ。それで今夜は、昨夜、小澤に逢つてからあとの事件を、あんたに是非報告し度いと思つてね。それで性懲りもなく又あんたを誘ひ出した譯なのさ。はゝゝ。」さう云ひながら、廣瀬はいつかしら手を伸ばして、それとなく雪江の手を探つてゐたが、ふつと櫓の端のところへ懸けてゐる彼女の手へ觸ると、うへからそれをそつと押へつけた。その手はふはふは溫かくて、何にもしない彼のこととて、掌の皮膚が護謨のやうに柔らかかつた。

雪江は思はず顔を伏せたが、それでもぢいッとして、廣瀬のするがまゝに任せてゐた。彼女は自分で意識して、態と初心らしい媚態をやつ

てみせてゐるのを、はつきり承知してゐた。もう手を出すかと思つて、絶えず氣を許さずにゐるだけに、彼女は今夜は昨夜と違つて、此方から積極的にどんな手管でも持ち懸けられるだけの餘裕をもつてゐた。

戸外では空を渡つてゆく風の音が、裏の露地の樹立を轟々と吹きとよもして、精製うどんの鈴の音が吹き斷られるやうにきれぎれに聞えて來た。

十四

廣瀨は雪江が自由になつてゐるので、今度は足の先で彼女の膝のところをぐりぐり探りながら、變ににいツと笑つて、

「そこでだね。先づ私は小澤の話をし度いんだが、ねえ、關口さん、あんた怒つちや可かんよ、私はもう洗ひざらひ本當のことを話すんだからね。」と、駄目を押すやうに、ぢいツと雪江の眼のところをみる。

雪江もその眼を見返しながら、思はず愛想らしく笑つて、

「あら、私怒つたりなんかしや致しませんわ。私にだつて昨夜のお二人のお話は大概想像が出來るんで御座いますもの。どうせあゝいふ處で、お酒を召飮りながらお話をなすつたんぢや、碌なことにやなりや致しませんわねえ。ほゝゝゝゝ。」と、待ち設けてゐるやうにいふ。彼女はその一言でもう先をすつかり呑み込んでしまつたやうに思へた。

廣瀨は舌の先で上脣を舐めながら、

「はゝゝゝゝ。いや、その通りさ。酒に醉ふと男といふものは、全く他愛のないもんだからね。」と、云つて、「でも、關口さん、あれで小澤の奴はまだあんたに十分未練はあるんだね。あんたの云つたことをすつかり彼奴に話してやつたら、奴、ひどく憤慨しやがつてね。そんな性根ならもう私もすつかり嫌氣がさしたから、心置きなく手を切つてやる。此方ぢや深切で云つてやるのに、自惚れとは無禮だ、實に見下げ果てた女だ、なんて云つてゐるかと思ふと、その口の下からもう一度逢つてうんと懲らしめてやり度いなんて下らんことを云ひ出すんだ。實際人間の戀愛心理なんていふものは不思議なもんだよ。はゝゝゝゝ。」

雪江も微笑んで、

「ほんとにね、あの方のことですから、又いろいろに感繰つて、きつと自分勝手なことばかし仰有つたんだらうと思ひますわ。私、もうこのうへ懲らしめてなんか頂かなくたつてよう御座いますわ。もう澤山ですの。」

廣瀨は又炬燵の懸けものゝ下できうツと雪江の手を握つて、

「はゝゝゝ。全くだねえ。あゝいふ神經質な男にかゝつちや、女も耐らんねえ。お察し申すよ。彼奴は一つの出來事を三つにも四つにも考へる癖があるんだねえ。ありやたしかにあの男の缺點だよ。男つていふものは何處か鷹揚で、ぬうツとしてゐなくちやねえ。そこにつまり男の値打があるのさ。はゝゝゝ。」と、得意らしく笑つて、「それで、もう話がいろんな風にこんがらかつて行くんで、私ももう面倒臭くなつちまつたから、此方から打ちまけて、どうだ、小澤君、手を切るの何んのといふと君もいろいろ文句もつけ度くなるだらうから、いつそ綺麗さつぱりあの關口を私に讓つて呉れんか、さうすれば雙方兩爲ぢやないか、私は實はあの關口ばかりは何うみても堅さうなんで、うつかり手を出して失策るといかんと思つて、大いに悶々の情を押へて居つたんだ、ところが君と關係があると聞いて、實際のところ、それなら乘ずる隙があると思つて、實は今夜もあの女を

此處へ呼んで、露骨に口說いてみたんだ。たつた今しがた、あの關口は此處から歸つていつたんだよ、噓だと思ふんなら、女中に聞いてみたまへ、と、私は面と向つて云つてみたんだ。さうするとね、小澤は顏色を變へたね。さうして私に對しこ今度は頭から惡口雜言を吐き出したんだ。そりやまあ酒のうへではあつたが、併し生醉ひ本性に違はずでね、奴としては確かに眞實の腹を吐いたに違ひないんだ。」

雪江は好奇心が動いてゐるやうな顏で、

「あの、それで、どんなことを申しまして、」と、訊いたが、廣瀨はにやりとして、

「そりやまあ、取立てて云ふ程のことでもないが、……まあ、大概の男がさういふ場合云ふことなんだが、つまり詮じつめてみると、手は切り度いが、と云つてあんたをみすみす私に取られるのは忌々しいと云つたやうな腹なんだね。それに第一あんたが私の手へ移りや、彼奴の今迄の祕事も自然、私の耳へ入るし、それにもつと彼奴にとつて忌々しいことは、つまりあんたがこれから私の仕送りで、贅澤三昧な生活に入ることなんだよ。今迄は思ふ存分の仕送りもしてゐなかつた奴が、急に私の手へ移つて、眼に立つやうな立派な風姿でもされて見給へ、それこそ誰だつていゝ氣持ぢやないからね。藝者達にしたつて、今迄世話をしてやつてゐた奴が、自分よりも數段上の男を旦那にしたりなんかすりや此方は決していゝ氣持ぢやないからね。而もその男と別懇にしてゐるやうな場合にや猶さら忌々しいもんだよ。つまりそこで小澤の奴はこだはつて居る譯なのさ。」

雪江は嘲るやうに笑つて、

「でも、それはもう何うにもならないことなんぢやありませんの。自分の方から手を切る以上は、それ位な苦痛は承知の上でなけりやねえ。何も私があの方を捨てて、此方へ何うのかうのといふんぢやないんですもの。……」

廣瀨はその顏をぢいツとみて、ふすりと噴笑しながら、

「おい、おい、關口さん、笑談ぢやないぜ。そんなことを云つて、あんたの方も少々怪しいぜ。その顏つきぢやあんたの方もたつぷり未練がありさうぢやないか。いゝ加減にしろよ。間に入つてゐる私は一體何うなるんだい。」と、握つた手を緊める。

雪江は眼を逸らして、

「あら、厭だ。私もう未練なんかちつともありやしませんわ。そんなあなた、そんなことを云ふ人に未練なんか殘してゐた日には、私……」

と、云ふのを、廣瀨は揶揄ふやうに受けて、

「いや、口ぢやさう云ふが、併し全く怪しいもんさ。女つていふものは、手を切る時に、先が薄情なら薄情でまた未練を出すし、つまり此方から男を振り捨てるんでない以上は、どうしたつて、そりやあんた、とてもおい、それでいくもんぢやないよ。たとひ戀は感じなくつても、意地だとか、嫉妬だとか、或は又妙な復讐心といふやうなものだとか、さう云つたものから、却つて男に未練が殘るやうになつてしまふのさ。そこが又戀愛哲學の深奧なところでね。はゝゝ。」と大きく笑つて、今度は左の手で煙草を取り出しながら、併しまあいゝさ。さういふあんたの心理にまで立入つて詮索して居つたら、何日まで經つたつてとても此方のものにはなりツこないから、もう私の方は私の方で、小澤には構はずに、どしどし此方の作戰計畫を進めるといふことにしたのさ。私にすりや、まあ假にあんたが小澤に未練を殘して居るとしても、此方の要求さへ納れて呉れりやそれでいゝ譯なんだからね。先づ今日のところではあんたが私に惚れて呉れようなんていふことは、一寸豫想もされんから、まあ、天運に任せて、長い

戦をするんだねえ。そのうちには何んとかなるぢやないか。はゝゝゝ。」

さう云つてゐるところへ、階段の方からはみしりみしりと静かな足音がして、やがて女主人の聲が、

「あの、お話中にお邪魔を致して相済みませんが、あの、唯今お誂へのものが参りましてよ。此方へ置いて置きますから。……」と、云つて、かちやかちや瀬戸ものの觸ふ合ふ音をたてながら、盆のやうなものを、紙襖の外へ置いて、又そのまゝ階下へ降りていつてしまつた。

廣瀬はそれを聞くと、自分で立つていかうとしたが、雪江は眼で押へて、

「あら、私が持つて参りますわ。」と、云つて、握られた手をそつと離して、炬燵から出た。ひよいと立つと、裾がまくれて、下から長襦袢の模様がちらりとみえたので、雪江は慌ててそれを隠した。

紙襖の外には小綺麗な平臺へ、鰻丼が二つと、それに香のものと、熱い茶を入れた番茶の茶瓶までが添へて置いてあつた。雪江はなるべく色めかしくみえるやうに嬌態をしながら、それを炬燵の側へ運んでいつた。

廣瀬は余程腹が空いてゐるとみえて、すぐさま箸を執りながら、

「さあ、何は兎もあれ、關口さん、兵糧から詰め込まうぢやないか。あんたもさぞお腹が空いたらうから、遠慮なくおやり。」と、云つて、もう丼の蓋をあけて、烟の立つやつをぱくぱく食りだす。

雪江はさすがに遠慮してゐたが、廣瀬は笑つて、

「さ、關口さん、早く片づけたら何うだね。どんなに大きな口を開いて食べたつて、私は決して愛想はつかさんよ。もう惚れたとなると、欠伸の仕ッ振りまで氣に入る方の性なんだからね。はゝゝゝ。」と、云つたが、その時、口から二粒三粒、飯がこぼれた奴を彼は慌てて拾つて、平臺の端へぬりつける。

雪江も笑つて、

「まあ、厭ですわ。……」と、云ひながら、やつと丼を取り上げた。

飯をたべてゐる間はさすがに廣瀬も默つてゐたが、やがて一粒殘さず食べてしまふと、湯呑を二つとも起して、それへ自分で茶を注ぎ分ける。そしてそれを飲みながら、今度は、俯向いて箸を動かしてゐる雪江の姿を、襟脚から肩、肩から腰のあたりまでじろじろ偸みみながら、何事か頻りに考へ込んでゐた。

十五

やがて雪江が半分程食べて箸を置くと、廣瀬は頻りに楊枝をつかひながら、もう待ちかねてゐたやうに、

「そこでだね、關口さん。今の話で大體昨夜の紛紜は分つたらうが、今度は私の方の問題だ。一體あんたは何うして呉れるんだね。何かうまい考へがついたかね。」と、にやにやしながらいふ。

雪江は額を伏せて、つゝましやかに茶を啜りながら、少時の間、默つて考へてゐたが、やがて初心らしく體をくなくなさせながら、

「あの、そのことに就きまして、實はあの、私昨晩ひと晩考へましたんで御座いますわ。」と、云つて、又間を置きながら、「あの、それで、御存じの通り、私もこんな生活を致して居りますんですから、若しかあなたの御機嫌でも惡く致しましたら、もう私、ほんとに立つ瀬がないと存じましてねえ。冷靜に考へてみますと、あの、小澤さんとのことがお耳に入りましただけでも私、ほんたうならお叱りを蒙ります筈ですのに、却つてあんなに御深切に仰有つて下さ

いまして、私、ほんとに有難いと思つて居りますんで御座いますわ。私にしてみますと、小澤さんとのことは自分達同志の問題で、何も他人樣へ御迷惑を及ぼすやうなことでもないと存じますけど、でも會社に致してみますと、隨分重大な問題で御座いますからねえ。そのことで私たとひ會社から退職を命ぜられましても、それは無論當然の御處分なんで御座いますわ。それですのに、私、ほんとに、……」
廣瀨は嬉しさうに合點いて、
「いや、そりや事理の上から云へば、さういふ處分も是認出來るが、併し私はそんな野暮な人間ぢやないよ。いつぞやもそれ、杉本と、原の事件な、あの時にも專務の方ではいろいろ議論もあつたが、私は自分で杉本の費消んだ社の金を補塡してやつて、而も媒人になつて、あの二人を結婚させてやつた位だもの、色事に對して、實に思ひやりのある、寛容な常務さんさ。はゝゝゝ。第一さういふ御自分がこれなんだもの、全く口幅つたいことは申上げられんよ。はゝゝゝ。」と、笑つて、「そこで、關口さん、まあ、そんなことは何うでもいゝとして、それよりも肝心なあんたの存念から聞かして吳れんか。厭に迫つくやうだが、全く私は何んか色よい返事を聞かして貰はんうちは、どうも氣が落着かんのでなあ。ねえ、關口さん、一體あんたは先づ第一の要件として、私の要求を入れて吳れるのかい、それとも何うなのだ。……」と、雪江の顏を下から覗き込むやうにして訊く。
雪江は猶ほ顏を伏せて、
「あの、私……」と、云つて、色めかしく肩を落しながら、「あの、それはもうお解りになつて被仰る癖に。……」と、口の中でいふ。
廣瀨は態と大仰な表情をして、
「ほう、お解りになつてゐる癖にか。はゝゝゝ。乙な文句だなあ。聊か端唄からでも出た身形だね。いや、どうも有難う。」と、滑稽けた身振りをして、「だが、併しそれはほんたうだらうねえ。」
雪江は顏を伏せたきり、唯合點いてみせるばかりであつた。
廣瀨はもうさうなると大膽になつて、叉手を解つたり、足の先で雪江の膝を弄んだりしながら、
「ふむ、さうすると愈々もう私も安心していゝ譯だねえ。いやどうも大分骨が折れたが、併し有難い。そこでだ、先づ私はもう一歩進んで、昨夜も話したあの問題だが、一體あんたは生活の方は何うするつもりだね。」と、炬燵の櫓へ顎を押付けながら云ふ。
雪江は少し顏をあげて、もぢもぢしながら、
「あの、それはもうあなたの仰有る通りに致しますわ。私には何うしていゝか分らないんで御座いますもの。」と、娘々した調子で、甘えるやうにいふ。
廣瀨は一人で引受けて、
「それぢや私から云ふが、やつぱり高圓寺なんかに居つちや、一寸逢ふにしても不便で仕樣がないから、せめて麻布か赤坂あたりへでも出て來て貰ふんだねえ。まあ、家賃にして、六七十圓の家を借りて、そこで小婢でも使つて安氣に暮らすんだ。それが第一の條件だよ。」と、太腹らしく云ふ。
雪江はやつと顏を擡げて、
「あの、でも、あなた、私、さうして頂けば大變に結構には、結構で御座いますけど、でもあなたが家へ被來つて下さるんぢや厭で御座いますわ。私、小澤さんのことは母も知つて居りますんですけれど、あなたのことは私、當分の間、母には話し度くないんで御座いますもの。」
廣瀨は笑つて、

「ふむ、さうか。併しいくら隱したつてそれもどうせ一度に知れるんだから、いつそ今のうちに話してしまつた方がよからうと思ふがね。さうはいかんかねえ。」
「だつて、私、恥かしいんで御座いますもの。」
と、雪江は又顏を隱したが、廣瀨はわが意を得たやうににやりとして、
「ふむ、成程、その點もあるねえ。それぢやまあ、當分の間はあんたの家へはいかんことにするが、併しそれにしても家を引越すことだけは至急にやつて貰ひ度いねえ。さうだ、この界隈でもいゝんだから、ひとつこゝの家の細君にも頼んで置からぢやないか。此處邊なら出端もいゝしなあ。……」と、云つて、「そこで關口さん、それではさう極めるとして、それ迄何處で逢はうなあ。せめて一週間に三度、いや、まあ、初めのうちは熱が高いから、一日置き位には何んとかして逢ひ度いが、何處がよからうなあ。」
雪江は手巾を取り出して、
「あの、私、……いつそ此方のお家がいゝぢや御座いませんの。私、昨晩のやうな處はもう厭で御座いますわ。女中さん達がじろじろみるんですもの、私、ほんとに穴へも入り度いやうで御座いましたわ。此方なら人の目にも立ちませんし、それに靜かですから、……」
廣瀨は一も二もなく合點いて、
「うむ、それでもいゝね。いつも此處ぢや氣が變るだらうが、その時には又その時で、何處かへ遠出でもするさ。あんたは夜は何うだ、泊れるのか。」
「え、それは、あの、その時の都合で、何んとか致しますわ。」
「ほう、大分不良だね。尤も小澤のお仕込みだから、そこいらは萬事ソツもなからうが、はゝゝ。」と、笑つて、廣瀨はうつとり雪江の顏に見惚れながら、「それで、會社の方は何うするんだ。」と、訊く。
雪江は一寸考へて、
「さあ、あの、それは私出來ることなら、現在のまゝにさせて置いて頂き度いんで御座いますわ。さうしませんと、母に、あの私、噓を吐かなけりやなりませんから。」
「併し、もし會社の方の者に、この祕密がバレでもすると困るんだがなあ。」
雪江は美しく微笑んで、
「それはあの、大丈夫で御座いますわよ。私そこは要領をよくやりますから。」と、いふ。彼女はもうすつかり打融けた口調になつてゐた。
廣瀨は煙草に火をつけながら、
「はゝゝゝ。又小澤の傳を用ゐるかね。うまくやつて呉れりや、それも問題ぢやないが、併しあんたはよくても、私の方が怪しいからね。そこへいくとまだ私は何と云つても修行が足りんから、うつかり尻尾を出す恐れがあるよ。はゝゝゝ。」
雪江も一緒になつて笑つてゐたが、やがて眞顏になつて、
「あの、私、こんなことを伺つて何んで御座いますけれど、……」と、云ひそびれながら、「あの私、唯一つ心懸りになりますのは、あの、あなたの奧樣のことで御座いますわ。何んだか私、濟まないやうな氣が致しまして。……」と、云ひ云ひ、炬燵の懸けものの吹き綿を弄りだす。
廣瀨はいかにも平氣な顏で、
「はゝゝゝ、奧樣とは古風に出たね。そんなものはてんで問題ぢやないさ。たとひ家内に知れたつて、別に何うといふことはないんだもの。却つてつまらない藝者なんかに引懸つて、馬鹿な目に逢ふよりいくらいゝか知れんからねえ。」
と、云つて肩を縮めながら、「實を云ふとね、私

の家内はもう長年の腎臟病で、一切夫婦らしい關係は出來ん體になつて居るんだから、私が外へ出て何をしようと一切口は出さんといふことになつて居るんだよ。はゝゝゝ。」と、云つて、彼はついと雪江の肩へ手をかけて、自分の方へ引き寄せながら、「まあ、そんなことは問題にせないから餘計な心配はせん方がいゝよ。それよりも引越す先でも一生懸命になつて探すさ。成る可く氣に入つた家の方がいゝからね。」と、云ひながら、頬と頬を寄せる。

雪江はもう關口のするがまゝになつてゐた。

關口はぐッと手を握つて、

「併し、關口さん、あの小澤の奴も一度はあんたとからして握手をしたのかと思ふと、彼が先口だけに、少々癪に觸るね。せめてもう一年早く私の方が思ひ切つて先物を買つて置きやよかつたんだ。さうすりやあんたの處女を獨占することが出來たんだのになあ。」

雪江は切なさうに辛うじて息を吐きながら、廣瀨の胸へ顏を隱して、

「あら、もうそんなことを仰有つちや、厭ですッてば。もう此れから小澤さんの名を仰有つたら、私、……」

廣瀨はくすくす笑つてゐた。

十六

雪江が荒木の後家の周旋で、鎌倉の二丁目へ家を借りたのは、それから二十日ばかり後のことであつた。そこは某侯爵の宏大な屋敷の直ぐ眞下にあたつて、細い横町の突き當りにある[illegible]かな二階家であつた。すぐうへはこんもりした樹立の續く侯爵邸の庭先になつてゐるので、日當りは惡かつたが、併し何よりも閑靜なのが取柄であつた。間數は五間で、まだ建ててから三年位にしかならないので、間取りも至極便利に出來てゐて、雪江も母親もすつかり氣に入つてゐた。家賃も割りに安くて、六十五圓であつた。

雪江は母親とたつた二人で、その新居で新らしい年を迎へたが、家が變ると、自然いろんな道具のやうなものが欲しくなつて、雪江は廣瀨から貰つた金で、あれも、これもと茶棚や、火鉢のやうなものを買ひ揃へた。それに着物なぞも錦紗や、お召で二襲ねほどつくるし、帶も博多織の派手なのをこしらへ、母親にも夜着の綿を入れ換へてやつたりして、可成り氣前よく金をつかつた。

母親はそれを不審がつて、雪江の機嫌のいゝ時に、それとなく訊いてみたが、併し雪江は唯笑つて、

「私、泥棒をして來たんぢやないから、まあ默つてみて被在いよ。いづれそのうちに分るわ。」なぞと云つて、茶化してしまふのであつた。母親もあんまり立入つて詮索も出來ないので不安に思ひながらも默つてみてゐたが、そのうちに、ひよつとかしたら、小澤と手を切つた時に、莫大な金でも貰つたのではあるまいかと思ひついて、もうそれに極めてゐた。雪江もそれを知ると、態とそんな風にみせて、銀行の通帳なぞは一度も母親には見せなかつた。

廣瀨とは一日置きに位、荒木の家で逢つてゐたが、深くつきあつてみると、彼の鷹揚な、少し甘い氣風に馴れて、雪江はもうすつかり彼に懷いてしまつてゐた。情人にしてはどうも喰ひ足りなかつたが、併し世話になる人としては殆んど總ての點で理想的な廣瀨であつた。雪江はそれだけに此方でも一生懸命になつて勤める氣も出て、さういふ度に何んとかうまい手管を設けて先から先と彼の心持を惹込んでいくので、廣瀨ももう浮氣心ではなく、眞劍に彼女を愛するやうになつていつた。從つて彼も此方からは要求もしないのに、幾らでも金目をつけずに與

れた。廣衛は今迄に遊んだ日でも一流の妓にばかり關係をつけてゐたので、月に千圓位の金は平氣で女の爲めに出してやつてゐた振合から自分では却つて素人の方が金が掛らなくていゝ位に思つてゐたのだが、それが併し雪江の方では大變なことに感じられた。百圓と纏つた金は殆んど持つたこともない彼女のことゝて、まるで黄金の洪水の中にでも立つてゐるやうで、時々は氣味が惡くなることさへあつた。で、彼女も使ひ餘しがあると、自分でこつそり銀行へ運んで、まさかの時の用意に、そつくり貯金をして置いた。

廣衛に逢はない日は、會社が退けると直ぐに家へ歸つて來たが、そんな晩は何となく何だか張合がなくて耐らなかつた。何處かから明るい、華やかな處へでも行つて、思ふ樣遊んで見度いやうな氣持がして、彼女は夕飯をすますと、もう尻が落着かなかつた。で、やつと女中を一人探し當てると、もうそれからはその女に留守をさせて、母親と二人で銀座へ行つたり、芝居へいつたり、活動をみて歩いたりした。母親はそれを又無上に喜んでゐた。娘の働きで、こんな贅澤が出來る母親は誰しもさうであるが如く、たゞひその間に如何なる事情が伏在してゐるようと、もうそんなことはいつかしら忘れてしまふのが人情であつた。又いくら詮索をした時にも雪江は何にも云はないし、もう唯彼女の云ふ通りに體を預けてゐるのが母親にとつては何より樂な道であつた。

或晩のこと、雪江はいつものやうに母親を連れて、三田の活動寫眞をみにいつたが、そこで測らずも彼女に、住江千鶴子が助演をしてゐる映畫に初めて出會した。もう此間から新聞なぞを調べてみては、何處かに彼女の映畫が懸つてゐやしまいかと思つて頻りに探してゐたので、雪江は住江千鶴子の名の出た看板をみると、何かなしに嬉しくて耐らなかつた。で、すぐさま特等の切符を買つて入つてみた。

その映畫は「狂へる女」といふのであつた。筋は極くつまらないもので、何んでも或る富豪の娘が惡漢に誘拐され、長崎に住む支那人の手で曲藝團の一座へ賣られて、それから轉々と、各地を流浪して歩くうちに、或港で洋行歸りの醫學士と戀に落ち、その男に救はれて再びもとの幸福な境遇に歸ると云つたやうなものであつたが、千鶴子はその中で曲藝團の花形である花子といふ踊りつ子を演じてゐた。

雪江は千鶴子が輕羅を身に纏つて、大理石のやうな美しい肌を露はにみせながらフヰルムのうへに現はれて來ると、もう息が塞るやうな氣がした。それにしても何んといふ變りやうであらう。あんなに身輕にトオで踊るのは、皆ほんとに彼女が踊つてゐるのであらうか。學校時代にはさう大して器用といふ方でもなかつたが、いつの間にこれだけの藝を磨いたのであらう。ぎつしり入つた觀客達が、拍手喝采をするのをみると、雪江は我を忘れて一緒になつて手を拍いたりした。こんなに人氣のある女優が自分の親しい友達であるといふことさへ、雪江にとつては又とない誇りのやうに思へた。

雪江は態と母親には何にも云はなかつた。千鶴子はよく家へも遊びにやつて來て、母親もあの時分には始終逢つてゐたのだから、もう今にも氣がつくかと思つて、彼女は時々そつと母親の顏を覗いてみたが、それでも母親はちつとも分らないとみえ、默つて繪の筋にばかり心を打込んでゐた。

雪江はもう焦々して來たが、それでも彼女は態と我慢してゐた。自分ひとりでその場面、その場面へ現はれて來る千鶴子の美しい姿をこつそり樂しんでゐた。

千鶴子はほんの助演に出てゐるので、曲藝團

の場面が消えると、それと一緒に彼女ももう姿を消して、再びスクリーンへは出て來なかつた。
雪江は輕い失望を覺えて、もうそれからはすつかり映畫にも氣が向かなくなつて、やがて休憩になると、母親を促して館を出てしまつた。雪江は母親と二人で、寒い風の吹きしきつてゐる三田の通りを我が家の方へ歩いて歸つたが、母親はしみじみ感じてゐるやうに、
「ねえ、雪江。ほんとに活動の女優なんていふものもあれで中々大抵ぢやないねえ。あゝやつて踊りを一つ覺えるだけでもさぞ大變だらうにねえ。全く世渡りとなると、樂なものはないわねえ。」と、云ふ。
雪江は毛絲の襟卷の中から、
「でも母さま、人氣が出て來りや隨分面白い商賣だと思ふわ、日本國中の人に自分の姿を見られるだけでも、私、さぞいゝ氣持だらうと思ふわ。私も思ひ切つて活動の女優にでもならうか知ら。」
母親は本氣になつて、
「まあ、お前、そんなことを云つて、もう女優だけは私、御免だよ。笑談にもそんなことを云ふのはよしてお呉れ。お前があんなものになつたら、私やもう死んでしまふよ」と、いふ。
雪江も眞氣になつて、
「あら、母樣。何うして、そんなに女優がいけないの。隨分可笑しなことを仰有るわねえ。女に生れたからには、せめてあゝいふ道ででも名を出さなけりや、とても有名にはなれやしないわ。私、ほんとにさぞ面白からうと思つてねえ、今もつくづく羨ましくなつちまつたわ。」
母親にもうおろおろ聲になつて、
「雪江、もう何うかそれだけは云はないでお呉れ。私やお前が今の女優のやうに、あんなに素裸になつて、舞臺に立ちでもするやうなことがあつたら、もうゝしても恥かしくつて生きちやゐられないよ。人樣の前で女が見ツともない。考へてもぞツとするよ。」と、云つて、「もうお前、有名なんかにならなくたつて、もうこれで澤山ぢやないか。かうやつてゐれば、氣に入つた家にも住めるし、着るものも結構なものを着られるし、ほんとに今が一番仕合せだと思ふよ。だからもう世の中のことは上を望んだら限りがありやしないよ。自分の身分相應なことさへ考へてゐりや、いつまでも仕合せに暮らしていけるんだもの。今の女優だつて、いづれは親もあるんだらうに、ほんとにその親御達の身になつたら、さぞ辛いこともあるだらうと思つてねえ、私やあべこべに涙が出て來たんだよ。」と、愚癡つぽくいふ。
雪江はせゝら笑つて、
「ねえ、母樣、世の中には母樣のやうな人ばかり居やしませんわ。自分の娘の名が出るのを心から喜んで呉れる親だつてあるわ。」と、云つて、初めて打明けるやうに、「ねえ、母樣、母樣は氣がおつきにならなかつたかも知れないけど、今それ、あの踊り子になつて出て來たあの女優ね、あの人、母樣、御存じない？」と、訊く。
母親は氣にもかけてゐないやうに、
「私、あんなもの知らないよ。」と、云つたが、雪江は小首を傾げて、
「まあ、あの顏を見ても分らないか知ら。母樣も隨分忘れつぽいのねえ」と、云つて、母親の方へ肩を寄せながら、「ねえ、母樣、あれはね、そら、家のすぐ側にゐた宮川さんよ。私と一緒に女學校へ出てゐたあの宮川さんぢやないの。」と、母親の驚きを待ち設けてゐるやうにいふ。
母親もさうと聞くと、眼を丸くして、街燈の光の中でしげしげ雪江の顏をみながら、
「まあ！」と、云つたが、やがて思ひ出したやうに、「まあ、さうかい。それで分つた。私、どうも何處かで見た顏だと思つてゐたら、あの宮

川ごんかい。ほんとに驚いたねえ。何うしてまあ、あんなものになつちまつたんだらられえ。變れば變るもんぢやないか。」と、頻りに感じ入つてゐる。

　雪江は襟卷がずり落ちるので、又かけなほしながら、

「でも母樣、住江千鶴子つて云へば、今蒲田でも一二を爭ふ女優よ。あの人にしちや大した成功だわ。もう彼處まで行けば大したもんだわ。」と、云つて、險のある聲になりながら、「あの人なんか、學校時代にや屁とも思はなかつたけど、かうなつてみると、まるで私達とは地位が違ふわねえ。あの人にだつて成れるんだもの、私だつて一生懸命になりや何うにかなるに違ひないと思ふんだけど、……」と、云つて、彼女は態と欠伸をしながら、「もうこんな事務員なんかいつ迄してゐたつて同じなんだから、私も思ひ切つて宮川さんの弟子にでもして貰はうかな。」と、獨言のやうに云ふ。

　母親はそれには耳も藉さずに、千鶴子のことばかりくどくど云つてゐた。

十七

　その晩も廣瀬に逢ふ約束はなかつたので、雪江は今夜は一人でぶらぶら淺草へでもいつてみようと思つて、そのつもりで早く會社から家へ歸つてきた。會社でふとみた新聞に千鶴子の出てゐる「花の命」といふ映畫が電氣館へ懸つてゐるので、雪江はそれが見度くて耐らないのであつた。で、女中を急き立てて夕飯を喰べてゐると、そこへ誰かが突然格子先へ立つて、

「御免。」と、いふ。

　丁度女中が臺所へいつてゐたので、雪江は何氣なく自分で立つていつたが、格子の外には年老つた俥夫が突立つてゐて、帽子の庇へ一寸手を懸けながら、

「あの、關口さんといふのは此方ですか。」と、云つて、持つてゐた手紙を格子の間から差入れる。女ばかりの住居なので、表の格子にはいつも鎖がかけてあるのであつた。

　雪江は食物がまだ口の中にあるので、唯頭だけ下げて、手紙の裏を打返してみると、それは見覺えのある廣瀬の手蹟であつた。で、そのまゝ彼女は開封してもみずに、帯の間に入れて、

「どうも態々御苦勞樣でした。よろしく仰有つて下さい。」と、云つて、俥夫を歸してしまつた。

　雪江はそれなり又夕飯の膳に就いて、さつさと先へ濟ましてしまふと、今度はすぐに二階へ上つていつて、今の手紙を開けてみた。中からは廣瀬の名刺が出て來て、その裏へ、

「御面談し度し。」と、だけ書いてある。雪江にはもうそれで用が通じるのであつた。

　雪江はやがて自分で着物を出して、すつかり身じまひもすますと、母親には一寸そこまで出て來るからと云ひ置いて、そはそはしながら戸外へ出ていつた。母親は何かなしに氣になるとみえ、格子のところへつかまつて、

「ねえ、雪江や。お前、今夜は又遲いの。」と、心細さうに訊いたが、雪江はにつこり笑つて、

「さうねえ、十一時頃までには歸つて來ますわ。實をいふとね、母樣。私、今夜は淺草へ活動をみにいくのよ。母樣も連れていつて上げるといいんだけど、こんな寒い晩に又無理をして風邪でも召すと可けないと思つてね、ほゝゝゝ。」と、辯解するやうに云つて、そのまゝ往來の方へ出ていつてしまつた。

　荒木の家まではほんの四五町しかないので、雪江は大急ぎで歩いていつた。今夜は逢へないと思つてゐたのに、かうやつてひよつくらやつて來られるのも、却つて雪江には何んとなく嬉しかつた。逢ふといふやうな情趣よりも、彼女

はもう此頃ではもつと他の快味の方が先へ行くやうになつてゐた。それは廣瀬がさう訓練したのであつた。

荒木へ來てみると、その晩も家の中はしんとしてゐて、廣瀬は階下の座敷で、女主人と長火鉢へあたりながら、何か面白さうに世間話をしてゐた。彼は今夜は可成り醉つてゐて、脂氣の多い顔を一層てかてかさせながら、ひどく機嫌がよかつた。

雪江が入つていくと、女主人は挨拶もそこそこに、笑ひながら、

「さあ、さあ。」と、云つて、二人を二階へ追ひ上げた。二階にはもうちやんと寝間の支度もしてあつて、炬燵がほかほかしてゐた。

廣瀬は今日は和服なので、袴をとるとそのまま炬燵へ入つて、

「いや、雪江さん、豫定外の日にやつて來て、まことに相濟まんねえ。今夜は例のそれ、三井物産の宴會で、花月へ廻つたんだが、何んだかどうも今夜は氣がくさくさして耐らんのだよ。それで、いゝ加減に中座をして、もうずツと家へ歸らうと思つたが、日比谷まで來ると、急にあんたに逢ひ度くなつてねえ。はゝゝゝ。」と、笑ふ。

彼はもう雪江と名を呼ぶほどになつてゐた。

雪江もその隣りへいつて、艶めかしく横坐りになりながら、

「まあ、でもよく被來つて下さいましたわねえ。私、あんまり所在がなかつたんで、又活動でも見にいかうかと思つてゐたところなんですわ。」

「はゝゝゝ。どうも此頃は大分活動に凝つてゐるやうだねえ。あんなものがそんなに面白いかねえ。」と、云つて、「いや、それはさうと、雪江さん、大變なことが持ち上つたよ。あんたもうかうか活動なんかに浮身を窶してゐる場合ぢやないよ。ほんとに。」と、いふ。

雪江は廣瀬の方へ寄り添つて、

「まあ、何うしましたんですの。何事か起りましたんですの。」と、態と大仰に驚いてみせる。

廣瀬はその手を握つて、

「いや、實はね、今花月で山勝に逢つてねえ。いろいろ話を聞いたんだが、小澤はね、いよいよこの十一日の日に結婚式を擧げるんださうだよ。」と、いふ。

雪江もさう云はれると、幾らか感情を動かして、

「まあ、いよいよ極まりましたの。それはお芽出度う御座いますわねえ。」と、さあらぬ顔で笑つてみせる。

廣瀬はその頬ッぺたをちよつと突いて、

「はゝゝゝ。いざとなるとあんたも矢張り氣持が惡からう。どうだい、顔色が變つたぜ。まさか結婚の焔に身を焼かれ、そのまゝ蛇體と化身してしまふんぢやあるまいね。はゝゝゝ。」

雪江はそのまゝ廣瀬の胸へ顔を埋めて、

「あら、もう厭ですッてば。もうそんなことを云つてお冷評しになるのはおよしなすつて下さいましな。罪ですわ。」と、甘えるやうに云つて、「あの、それで、結婚式は何方であるんですの。」

廣瀬はその背中を愛撫しながら、

「結婚式は御定法通り、日比谷の大神宮さ。それから午後の二時から五時までホテルでお茶の會があつて、そこで御披露が濟むと、八時の急行で京阪地方へ新婚旅行と、かういふ風に段取が極まつてゐるんださうだ。うまくやつとるぢやないか。はゝゝゝ。」

雪江は息を呑んで、

「まあ、新婚旅行は上方なんですの。よう御座いますことねえ。」と、顔を上げずに云つたが、廣瀬は又笑つて、

「いや、まあ、雪江さん、落着くがいゝ。私が

従いて居るから大丈夫だ。しつかりして呉れ。」と、笑談のやうに云つて、「そこでだ、雪江さん、どうも此儘むざむざ彼奴に幸福の夢を見せるのも少々癪だから、私もひと思案して、何か悪戯をしてやらうと思つて居るんだが、雪江さん、あんたも片棒擔がんか。それにはねえ、どうも月並なことぢや面白くないから、ひとつあんたにも奮發して貰つて、此方も新婚旅行のつもりで、彼奴等の乗る汽車へ一緒に乗つて、京都まで行つてやらうぢやないか。精々此方もいちやついて、奴に見せつけて遣るんだねえ。此奴は面白い趣向だと思ふんだが、どうだい、賛成しないかい。」と、もう廣瀬は一人で面白づくになつてゐる。雪江も嬉しさうに笑つて、

「まあ、随分ですのねえ。そんなことをしちや小澤さんが可哀想ですわ。」と、云つたが、廣瀬は子供のやうな顔をして、

「何か可哀想なことがあるもんか。奴は奴で綺麗な花嫁さんと御同列なんだもの。はゝゝゝは。その代り、此方もうんと立派に拵へて、花嫁さんに負けんやうに綺羅を飾つていかなくちや可かんよ。そこで私は、今態々御木本へ廻つてこれを買つて來たのさ。あんたは着物だけは出來たやうだが、まだ他のものが揃つて居らんからねえ。」と、云つて、後から何やら紙に包んだものを取り出して、炬燵の櫓のうへでがさごそ開けだした。

とみると・その中からは綺麗な天鵞絨で張つた筥が三つ出て來て、それを一々開けると中から見事な寶石入りの指環や、眞珠を鏤めたヘア・ピンなぞが燦然と輝きながら現はれて來た。

雪江は呆氣に取られて、「まあツ。」と、呟いたきり、暫くは、その美しい裝身具に見惚れてゐた。

廣瀬はさも満足さうに、

「いや、それにあんたはコートのいゝのを持つて居らんだらう。コートがなくちや引立たんから、早速明日銀座の松井へいつて例の天鵞絨のを誂へておいで。一週間もあつたら間に合ふだらうから、成る可く急がせてね。」と、いふ。

雪江はもう頭脳が惑亂して、うはうはの空ばかりそはつかせながら、「あら、それではほんとにあなた、京都へお伴させて下さいますの。」と、云つたが、その聲は慄へを帯びてゐた。

廣瀬はヘア・ピンを弄びながら、

「無論さ。笑談ぢやないよ。かういふ機會は二度と來ないんだから、是非決行しようよ。面白いぢやないか。それに丁度幸ひ、私は大阪の支店へ用もあるから、それを表面の口實にして、四五日彼方で遊んで來ようと思つて居るんだ。」と、云つて、ヘア・ピンをそつと雪江の髪にさしてみながら、「ふむ、よく似合ふぢやないか。私はかういふものの見立てが割りにうまいんだが、やつぱりこれも失策らなかつたねえ。あんたは髪が黒いから、かういふ眞珠ものの方が似合ふんだ。さ、その指環をはめてみたまへ。このサファイアの入つてゐる方は随分高かつたんだよ。これなら何處へはめて出たつて恥かしかないよ。」と、いつて、今度は二つの指環を彼女の白い指へはめてやる。その指先も可笑しい程ぶるぶる慄へてゐた。

廣瀬はさも可愛らしくて耐らないやうに、もう口もきけないでゐる雪江の頬へ幾度も頬ずりをしてゐたが、やがて、

「あゝそれから、會社の方だがね。さうなるとあんたも私と一緒に休む豫定になつて工合が悪いから、もう七日頃から病氣といふことにして缺勤して貰ひ度いね。さうすりや萬事好都合にいくんだ。まあ考へてもみるがいゝ、こんなヘア・ピンをさしたり、こんな指環をはめたりしてまるで貴婦人のやうな恰好をしながら、あんた

が私と一緒に列車に乘つて居つたら、小澤の奴何んと思ふだらう。成る可く奴の眞前へいつて坐つてやるんだねえ。實に愉快ぢやないか。それだけでも立派な復讐になるぢやないか。はゝはゝ。」と、彼は自分までが胸がすくやうに笑つた。雪江はもう何うしていゝか分らなくなつて、少時の間、茫ッとした顏で指環をはめた指ばかり見守つてゐたが、やがて何うしたのか、雙眼に薄く涙を溜めて、

「私、嬉しう御座いますわ。ほんとに先の先まで考へて下すつて、……」と、云つて、今度は我を忘れて、まるで熱狂したやうに廣瀬の胸へ顏を埋めてしまつた。

十八

　愈々約束の十一日はやつて來た。雪江は廣瀬に云はれたやうに、その四日ほど前から病氣缺勤の屆を出して、會社の方は態と休んだ。外を出歩いて、ひよつとかして會社の誰かに見附かりでもすると尻が破れるので、雪江はその間、神妙に家にばかり引込んでゐた。そして母親には内證でいろんな細々した旅の道具などを取揃へながら、もうその日が來るのを一日千秋の思ひで待つてゐた。晩寢てからも、ふつと旅のことを思ひ出すと、胸がつまるやうな氣がしてもういろんな空想が先から先と湧いて來て、とてもおちおち眠つてはゐられない程であつた。

　十一日には豫て打合せをして置いたやうに、午後の八時十分前までに、廣瀬は自動車で、飯倉の角のところまで迎ひに來て呉れることになつてゐたので、雪江は支度をすますと大慌てに慌てて家を出た。

　廣瀬はもう先に來て、人通りの少ないポストのところへ自動車をとめさせて待つてゐた。彼もすつかり旅の扮へをしてゐて、雪江がやつて來ると、にこにこしながら自分で扉を開けて、

「やあ、割りに早いんだねえ。さあ、お乘り。」と云つて、座を開けてやる。

　雪江はせかせかと息を彈ませながら、車に乘つて、そのまゝ崩れるやうに座席へ腰をおろしながら、

「どうもほんとに遲くなつて相濟みません。これでも隨分急いだんですけれど。大分お待ちになりまして？」と、云つて、激しい動悸を抑へるやうに胸へ手を置く。

　廣瀬は彼女の持物を自分で持つてやりながら、

「いや、さうだなあ。それでも五分か六分は待つたなあ。はゝゝゝ。なあに、これ位なら上出來だよ。藝者なんかとこんな約束をすると極つてひと汽車は乘り遲れるからねえ。まだ八時二十分過ぎだもの。ゆつくり間があるさ。」と、いふ。廣瀬はひどく機嫌がよかつた。

　雪江は仕立下ろしのコートへ、嬉しさうに、肩を彼方此方へ動かして、

「汽車はたしか八時三十分で御座いましたわねえ。」と、云つて、廣瀬の顏を甘えるやうに横眼でみながら、「ねえ、あなた、私、ほんとに今日は困つてしまひましたのよ。旅をすることを、あの、實は今朝初めて母に云ひましたもんですから、母が怒り出してしまひましてねえ。今迄私散々云ひ合ひをして來ましたの。……」と、いふ。

　廣瀬は笑談のやうに眉を顰めて、

「おや、おや。そりや可かんねえ。何んだつて又今朝まで默つてゐたんだい。そりやあんたの方が惡いよ。お母さんが怒る方が尤もだ。」と、云つて、雪江の美しい横顏を貪るやうに見ながら、それで、何んて云つて家を出て來たんだね。」

　雪江は嬌態をして、

「あの、私ね、うつかりしたことは云へません

から、あの、會社の方の急用で、二三日大阪の方の支店へ行くつて、さう申したんですの。さうしますとね、母はそれならそれで、二日や三日位前に分りさうなもんだ、今日になつて急に足許から鳥がたつやうにそんなことを云ふのは可怪しい、第一留守に困るなんて、勝手なことを申すんですもの。ほんとに腹が立つちまひましたわ。ちやんと私がいゝやうにしてやつてゐますのに、不足がましいことなんか云はれちや、私、堪まりませんわ。どうせ母は私がゐなけりやその日の御飯も頂けない身のうへ、なんぢや御座いませんか。それだのに、自分の都合のいゝやうにばかりしようとするから、つい不足も出て來るんですわ。やつぱり餘り體を樂にさせつけると、親だつて附上るんですわねえ。」

廣瀬は笑つて、

「はゝゝゝ。附上るは猛烈だねえ。まあいゝさ。折角の旅立ちに、そんなことで心持を惡くしちや可かんよ。まあ、どうか私に免じて、機嫌を直して呉れよ。はゝゝ。」と、云つて、ふつと氣がついたやうに、「ねえ、雪江さん、それはさうと、あんた此間のヘア・ピンや、指環はどうしたい。」と、怪訝さうに訊く。

雪江は手提袋を膝のうへで開けて、

―私ね、又いろんな文句がつくと可けないと思つて、態としずに參りましたのよ。お車の中で支度をしようと思つて。」と、可愛らしく云つて、彼女は袋の中から、ヘア・ピンや指環を大事さうに取り出す。そして、先づ指環からはめて、今度はヘア・ピンを黒い髮へさしながら、嬉しさうに、「あの、失禮ですけど、一寸御覽遊ばして下さいましな。これでよう御座いまして？」と、

廣瀬の方へ頭を寄せる。

廣瀬は艶めかしい化粧品の匂ひに魅せられてゐるやうに、それとなく小鼻で息をしながら、

「いゝとも、いゝとも。もう少し上の方へいく方が引立つかも知れないね。」と、云つて、自分で直してやりながら、「いや、これで上等、上等。どうもかうやつてみると、素敵だねえ。まるで何處かの令孃のやうだよ。それに今日は白粉がよく伸びてゐるから、一層シャンにみえるぜ。指環もよく似合ふねえ。」と、斜めに眺めまはしながら、頻りに讃めそやす。

雪江も得意さうに、

「あら、そんなにお冷評しになつちや厭ですわ。でもね、私、今日はもう一生懸命にお化粧を致しましたのよ。貴方があゝ仰有いましたんで、若し彼方のお嫁さんより見劣りがするやうだと貴方に申譯がないと思ひましてね、そりやもう一生懸命にやりましたの。」と、云つて、ぢいツと自分の白い指に見惚れながら、「ほんとに、いい指環ですことねえ。私、もうすつかり氣に入つてしまひましたわ。」と、いふ。

廣瀬も滿足さうに、

「いや、かういふものは、全く人の柄を見て買はんけりや駄目だよ。それにしてもコートもなかなか見立てがいゝぢやないか。私はどうかと思つて心配して居つたが、この趣味なら、あんたも中々隅に置けんねえ。はゝゝ。」

そんな話をしてゐるうちに、もう自動車は濠端から東京驛の方へ曲つていつた。八時三十分の神戸行の急行はさすがに混むとみえて、驛前の廣場には自動車の前燈がしつきりなしに集まつていつた。

お互に人目があるので、廣瀬は先づ先に自分が自動車から下りて、前以て買つて置いた乘車券と、寢臺券を雪江に渡し一足先に歩廊へ出てゐるやうにと耳打ちをした。そして自分は赤帽を呼んで、トランクや手荷物の始末をさせて、若しや知り人にでも逢ひはしまいかと、人込みの中をきよろきよろ見廻しながら、やつと

改札口を出た。
　どうせ小澤達も一等寝臺へ乘るに相違ないと當てをつけてゐるので、廣瀬は列車の一番後に連結してある一等の寝臺車へ隱れるやうに乘つた。遠くでそれをみてゐた雪江は此方へ歸つて來て、自分もその後から乘つた。廣瀬は給仕を呼んで寝臺券の番號を示して、自分の座席へ手鞄を置きながら、
「雪江さん、あんたの座席はこの隣りだよ。いいかい。」と、云つて、赤帽に荷物をすつかりそこへ運び込ませ、そのまゝ外套をぬいで、腰を下ろしながら、「いゝ塩梅に誰も知つた顔に逢はなくて何よりだつたよ。寝臺は割りに隙いてゐるんだね。うへの方はがら空きだ。まあ、雪江さん、そんなところに立つてゐないで、此處へ來てお懸けよ。」と、云ひ云ひ、葉卷を取り出す。
　雪江は初めて、寝臺車なぞへ乘るので、さつぱり様子が分らなくて、もぢもぢしてゐたがさう云はれると、遠慮しいしい廣瀬の傍へいつて坐つた。そして四邊を見廻しながら、小聲で、
「ねえ、あなた。まだ小澤さんは乘つて被在らないやうですわねえ。」と、囁く。
　廣瀬はチュッとマッチを擦つて葉卷に火をつけながら、
「うむ、まだ發車迄には十二分ばかりあるもの。悠々と構へ込んで居るのさ。」と、笑つて、「併しそれにしても、丁度うまくこの近所へ乘つて呉れりやいゝがねえ。二等の方へでも乘られたんぢや眼も當てられないね。」と、云つて紫色の煙りをぷかりぷかりと吐き出してゐる。
　さういふうちにも乘客は一人二人づつその車室へ乘り込んで來る。丁度折よく先刻の給仕が廣瀬の前を通り懸つたので、彼は小聲で呼び止めて、
「ねえ、給仕さん、この車室に小澤といふ人の寝臺がエンゲーヂしてありやせんかね？」と、訊く。
　と、給仕は持つてゐた座席番號の綴ぢ込みをみて、
「小澤様で御座いますか。はあ、御座います。このお向ひの二十一號と、二十三號になつて居ります。」と云つて、丁寧に會釋をしながら、行き過ぎてしまふ。
　廣瀬は嬉しさうに首を縮めながら、雪江の方をみて、
「この向ひとは驚いたねえ。あんまりお誂へ通りに行き過ぎて少々空恐ろしくなつて來たねえ。小澤の奴もいよいよ運の盡きさ。はゝゝ。」と、笑つたが、雪江の方は急に臆病な顔になつて、
「まあ、ぢや向ひ合はせになるんで御座いますの。厭ですわねえ。私、何うしませう。」と、云つてさすがに照れてしまつた。

十九

　もう發車間近くなつて、乘降段の方では何やら人聲がしたかと思ふと、やがてどやどやと一團の乘客が乘り込んで來た。廣瀬はそつと首を出して、そつちを覗いてみたが、急に帷の蔭へ隱れて、
「おい、小澤だよ、小澤だよ。雪江さん、あんたも、汽車が出るまでは成る可く隱れるやうにして居る方がいゝよ。」と、いふ。
　雪江も帷の蔭へ顔を隱してしまつた。
　そこへ小澤達のひと連れは、がやがや話しながら入つて來た。先頭に立つた、世話役らしいモーニングの男は、
「此處だ、此處だ。」なぞと云つて、赤帽に手傳つて、荷物の世話を焼いてゐたが、それと同時にもう發車の警鈴がヂリヂリ鳴り出したので、その男は慌ててもと來た方へ歸つていく。小澤

辻は見送りの人に挨拶でもしてゐるとみえ、此方へは入つて來なかつた。

間もなく列車は長い汽笛を吹き鳴らしながらごとりごとりと動き出したが、それと一緒に見送る人と、見送られる人の聲が彼方でも此方でも賑やかに聞えて、列車は漸次に速力を增してゆく。

外が急に靜かになつたかと思ふと、列車はもう步廊を出離れてしまつてゐた。ところどころに輝く電燈の光が車窓からさッさッと射して來たが、廣瀨と雪江はその光の中で眼を見合はせながら、もう今にも小澤辻が此方へ入つて來るかと思つて、跫音にぢいッと聞耳を立ててゐた。

と、やがてすぐ鼻の先へぬうッと人影がさしたので、廣瀨は思はず眼をあげてみたが、そこへ來て立つてゐるのは、案の定小澤で、今夜はもう禮服をぬぎかへて、粹なお召に鐵無地の羽織、それに雪駄といふ扮へであつた。彼の後に續いて入つて來た花嫁さんも派手なお召づくめで、今風のハイカラな行方不明に結つて、ちらりと見ただけでも、容貌のいゝのが眼に立つた。顏を云へは背丈が低いので、體が肥りすぎてゐるやうにみえたが、併し着物の好みが素晴らしいので、それを償ふて餘りあるのであつた。

小澤はすぐ眼の前に廣瀨や雪江がゐようとは夢にも知らないので、ほッとしたやうな樣子で、

「さあ、京さん、まあ、そこへお坐り。」と、云つて、自分が先に荷物を片寄せて坐る。まだ馴れない同志なので、その言葉つきは何處となく打解けなかつた。

花嫁もつゝましやかに體を堅くして、少し離れて坐つたが、小澤は袂から煙草入を取り出しながら、

「いや、やつと間に合つてよかつたねえ。私はもうとてもこの汽車には乘れまいと思つてゐたが、まあ兎に角何よりだつた。」と、いふ。その聲でみると、彼は相當に醉つてゐるらしかつた。

花嫁は小澤がマッチを擦るのを、眩しさうに見ながら、

「少し時間が無理で御座いましたわねえ。」と、小聲で云つたが、その聲は案外にも太くて、色氣に乏しかつた。

廣瀨はそれまでは半分帷の蔭へ顏を隱して、俯向きながら葉卷ばかり燻らしてゐたが、もう我慢が出來なくなつて、つと顏を上げて態とらしく驚いたやうな樣子で、突如に、

「やあ、君、小澤君ぢやないか。」と、此方から呼びかける。

小澤は悸乎として、此方へ眼を据ゑながら、

「やあ、何んだ、廣瀨さんですか。」と、云つたが、それでもまだ雪江がゐるのには氣がつかないやうに、「一體何うなすつたんです。又大阪のお店へでも被往るんですか。」と、いふ。その言葉にはひどく落着きがなかつた。

廣瀨はそれと一緒に半身前へ乘り出して、

「いや、どうも飛んだところで逢つちまつたねえ。實はもう先刻から君だといふことは分つて居つたんだが、どうも顏が出し難くてねえ。はゝゝゝ。惡いことは出來んもんだ、全くとんでもない汽車に乘り合はせたよ。」と、先を呑むやうに云ふ。

小澤も笑つて、

「いや、私こそ意外でしたよ。まさか貴方が……」と、云つて、ちらりと雪江の方をみたが、暗い中でもやつとそれと分つたか小澤はさッと顏色を變へて、思はず眼を逸らしてしまふ。

廣瀨も雪江の方をみて、

「いや、雪江さん。もう仕方がない。かうなつちや拔き差しはならんよ。まあ、度胸をきめて顏を出しなさい。はゝゝゝ。」と、笑つて、

手巾で冷汗を拭くやうな眞似をしながら、「いや、全く惡いことは出來ねえ。向ひ合はせになるなんて、どうも實に皮肉だよ。いや、參つた。」と、頻りに芝居をやる。それが又いかにも眞に迫つてゐた。

雪江もおづおづ顏を出したが、取附き場がないので、唯眼顏で小澤に會釋した。彼女もすつかり上氣して、顏を紅くしてゐた。

小澤は手を置く場所もないやうに體を突張らせながら、少時の間、云ふ言葉に困つてゐるらしかつたが、やがて、

「矢張りそれぢや大阪のお店へ被往るんですな。まあ、併しお連れが出來て、何よりです。」

と、取つて附けたやうに云つたが、廣瀨は無遠慮な聲で、

「はゝゝゝ。小澤君、うまいことを云ふなよ。大きに君にはお邪魔で、お氣の毒な譯さ。かうと知つたら、僕はこの前の列車に乘る筈だつたが、實に運が惡いねえ。御同列のところを見せつけられながら五十三次の宿送りは少々罪が深いねえ。はゝゝゝ。」と、笑つて、「兎に角もう何も首の座に直るから、ひとつ君、新夫人を紹介し給へ。」と、此方から逆襲してゆく。

小澤はもうへどもどして、とにかく花嫁を廣瀨に紹介した。廣瀨は氣輕な調子で、

「いや、初めてお目にかゝります。小澤君には毎々御厄介ばかりかけてゐますよ。どうか奧さんも今後は御別懇に。」と、挨拶を返して、「ねえ、小澤君、實は僕も今夜は是非盛儀に列するの光榮を得度いと思つて居つたが、お察しのとほり會社の方の急用で、大阪へ行かなければならなくなつたもんだから、つい心ならずも失禮してしまつたよ。どうか許して下さい。その代り、かういふ辛い目に遭ふのだから、帳消しになる譯だね。はゝゝゝ。」

小澤もやつといくらか落着いて、

「いや、今日は皆さんをほんのお茶にお招きしたばかりで、却つて御迷惑であつたらうと思ひますよ。又お宅から、御丁重なお祝物を頂戴したりして、……」と、云つたが、廣瀨はゆつたりとした態度になつて、

「いや、もう君、今の時勢だもの、披露なんていふものは、お茶に限るよ。御招待に與るものも、その方が簡單でいゝからねえ。はゝゝゝは。」と、云つて、「併しどうも今夜は全く意外だつた。まさかこの汽車で君に出逢さうとは夢にも思はんかつた。ねえ、それで君達のホーネムーンの先は何方方面だ。君のことだから、まさか箱根なぞといふ平凡な趣向ぢやあるまいねえ。」と、態と白ばツくれて訊く。

小澤は又新たな煙草に火を點けて、成る可く雪江の方を見ないやうにしながら、

「いや、箱根へは行きません。これから京都までずつと乘り通して、まあ彼處いらをぶらぶら歩いて、歸りに伊勢參宮でもしようと思つて居るのですが、……」

「ふむ、伊勢へ廻るのか。そりやいゝ。お羨ましい限りだね。何日位の御豫定だ。」

「さあ、それはまだはつきり極めては居らんのですが、十九日の日には何うしても東京へ歸つて居なければならない用がありますので、……」

「それでも一週間はたつぷり遊べる譯だね。何しても羨望の至りだよ。まあ、一生に二度とないことだから、出來るだけ羽を伸ばして遊ぶんだねえ。はゝゝゝ。」

小澤は今度は自分の方から口を切つて、

「それであなたはずつと大阪へおいでですか。」と、探るやうに訊く。

廣瀨は態と雪江の方をみながら、

「いや、大阪へは明後日改めて行くつもりで居るのさ。何しろ、雪江さんが是非京都見物がし度いといふので、まあ、明日の朝京都へ下りて、

都踊でもみて、一日ゆつくり骨を伸ばすつもりで居るんだよ。丁度明日は生憎日曜に當るんで、大阪の店へ行つてもどうせ用は足りんからねえ。そこで日數のサバを讀んで、前後で一日か二日うまく誤魔化してさ、惡事を働からうとかういふ寸法さ。どうか東京へ歸つたら、祕密に願ひ度いね。はゝゝゝ。」と、云つて、花嫁の方をみながら、「いや、どうも此れは。新夫人の前でこんなことを申上げちや底が割れてしまふが、どうか御内分に願ひますよ。」と、いふ。
　花嫁は笑ひもしずに顏を背けてゐた。
　小澤は言葉の穴を隱すやうに、
「それで、今度は京都と大阪だけですか。」と、云つたが、廣瀨は葉卷の煙をすうつと鼻の先へ吐き出して、
「はゝゝゝ。小澤君、さう探りを入れんでもいゝぢやないか。明日の朝京都の停車場でお別れしたら、それから先はもう僕等の方で避けて通るからどうか御心配なく。このうへお邪魔をしちや、君より新夫人の方へ申譯がないからなあ。」と、云つて、「小澤君、まあ、何は兎もあれかうして居つても詰らんから、ひとつ食堂車へ行つて、ホーネムーンの門途を祝する爲めに、一杯獻じようぢやないか。僕等の方もこれでお芽出度くないこともないんだからねえ。はゝゝゝは。」と、笑ひながらもう座席から立ち上る。
　小澤は何んだか、行き度くなささうであつたが、廣瀨は無理に彼を引立てて、
「さあ、奥さん、あなたも如何です。雪江さん、あんたも來るんだよ。遠慮して居つても始まらんから、さあ、勢よく立つた、立つた。」と、云つて、到頭二人を立たせてしまふ。
　廣瀨は小澤を後から押すやうにして、そのまま食堂車の方へ行つたが、雪江は先づ花嫁に先を讓つて、
「さあ、どうか。」なぞと云ひながら自分も一緒あとから身輕に從いて來た。彼女は後から覗い眼つきでじろじろ花嫁の着物や帶や髮のものまで値踏みするやうに見てしまつた。さすがにいいものは身につけてゐたが、併しよくみると何處か自分よりも器量が劣つてゐるやうに思はれて、雪江はそれとなく、ほつと安心したやうな、優越感を覺えたのであつた。

二十

　食堂車は割合ひに混んでゐなかつた。
　廣瀨は成る可く勝手に話が出來るやうにと思つて、一番隅の卓へ行つて、そこへ先づ雪江を坐らせ、小澤には態と彼女と差向ひになるやうに椅子を與へて、自分は花嫁と向ひ合ひに座を占めた。小澤は眩しさうな眼つきをして、隙があつたら花嫁と入れ換らうとしてゐるらしかつたが、うまい機がないので、仕方なしにそこへ落着いてしまつた。
　廣瀨は花嫁の顏をみて、
「どうです、奥さん、何か召食りものの注文を出して呉れませんか。」と、云つたが、花嫁は辭儀をして、
「あの、私もう、結構ですの。もし何んで御座いましたら、紅茶を頂き度う御座いますわ。」と、いふ。
　廣瀨は笑つて、
「紅茶はないでせう。そんなことを云はないで、何か召食つて下さいよ。食べる方なら、この雪江さんもきつとおつきあひするでせうから。はゝゝゝ。」と、云つて、じろじろ花嫁の顏を無遠慮にみながら、「いや、婚禮の日なんていふものは、何うしたつて食べるものが喉を通る筈がないんだ。きつとあなたもホテルぢや何にも召食つてゐないに相違ないから、僕が粹を利かして上げるんですよ。花嫁さんはもう寢る時分になつて、よく腹を空かすもんださうぢやあり

ませんか。さ、遠慮しないで、何んなりと仰有つて下さい。」さういふ言葉の調子は、まるで藝者にでも對するやうな笑談めかしいところがあつた。
　花嫁は氣恥かしさうに嬌態をして、
「でも、私、もう澤山なんで御座いますもの。」と、云つて、ちらりと小澤の方をみたが、小澤はもう度胸を極めたやうな顏で、
「いや、ほんとに廣瀨さん、食べるものならもう結構なんですよ。お茶が濟んでから、食堂へいつて十分腹をこしらへて來たんですから。……」と、助太刀に出て、「それよりも廣瀨さん、私麥酒を頂戴し度いですなあ。何んだか、喉が渇いてならんので。……」
　廣瀨は笑つて、
「麥酒かね。恐ろしく御尋常だね。麥酒なんかで乾杯なしちや水くさすぎるよ。まあ、いゝ。男の方にはもうちやんと趣向が出來てゐるんだ。それよりも奧さん、ほんとに何か食べてお置きにならんと、毒ですよ。それぢやあつさりサンドウヰッチなんか何うです。おい、雪江さん、あんたも無論つきあふだらうねえ。」と、雪江の方を振返つて、もう給仕にその註文を出してしまふ。そして自分達にはウヰスキイを持つて來いと命じた。
　ウヰスキイが來ると、廣瀨は生のまゝで小澤に乾杯を強ひたが、小澤ももう醉つてこの場を切拔けるより他には逃路がないと諦めたか、勢よく洋杯を取り上げて、
「それでは、……」と、云つて、廣瀨と眼を見合はせながら、ぐッと飲んでしまふ。
　廣瀨も酒精に餓ゑてゐるやうに、三杯ほど立て續けに飲んだが、やがてそろそろ醉ひを覺えて來て、
「いや、兎に角、小澤君、君と僕とはどうも惡緣がつきんのだねえ。今夜汽車中で、偶然出會すなぞは、全く不思議たよ。どうかそこをひとつお心にかけられて、何事も秘密に願ひ度いね。その代り向後は何事に依らず、君の仰せに從ふよ。はゝゝゝ。」と、云つて、雪江の方をみながら、「どうだ、あんたも飲める口なんだから、少しウヰスキイでもやつたらいゝぢやないか。そんなに小さくなつて、びくびくしてゐることはないさ。もうかうなりや、卑怯な眞似をするだけ此方の役が惡くなるからね。」と、云つて、もう一つ洋杯を持つて來させて、ウヰスキイを注ぐ。
　雪江も案外平氣になつてゐて、
「あら、私、ウヰスキイは嫌で御座いますわ。」なぞと云つて、花嫁の方を見ながらにつこり笑つてみせて、「あの、そんなら私紅茶を頂いて、その中へ混ぜて頂きますわ。生のまゝぢやとても頂けませんもの。」
　廣瀨は又紅茶を一つ命じた。
　小澤はその樣を知らん顏をして眺めてゐたが、何うかして話を轉じようとして、
「ねえ、廣瀨さん、今度の大阪は何の御用です。例の製麻の問題ぢやないんですか。」と、云つたが、廣瀨は葉卷をぷかりぷかり吸ひながら、瞼を開いて、
「いや、それもあるが、別に一寸面倒なことがあつてねえ。どうも此頃のやうに不景氣だと、僕の方なぞもいろんな問題が先から先と湧いて來るんで、實に閉口するよ。僅か四五萬の仕事でも、一々常務閣下の御出張をと來るんでねえ。全く商賣がしにくくなつたよ。それだからついやつぱり頭腦の保養も必要になつて來る譯さ。はゝゝゝ。」と、笑つて、「ねえ、小澤君、まあ、お互にかういふ旅だから、商賣の話は一切拔きといふことにしようぢやないか。それよりも君達は明日は何うするんだい。君達もやつぱり京都泊りか。」

小澤は次の洋杯をぐッとあけて、

「さあ、まだそれはよく極めて居らんのですが、……」と、云つたが、廣瀨はその顏をみて、

「はゝゝゝ。いや、さう警戒せんでもいゝぢやないか。先刻も云つたやうに、もう決してお眼醒りになるやうなことはしないから、大丈夫だよ。京都だつたら何處へ泊るんだい。」

小澤も煙草に火をつけて、

「さあ、豫定はまあ、澤文か何處かへ泊ることにしてゐるのですが、併し町中ぢやあんまり平凡ですからねえ。いつそ嵐山のほとゝぎすか、或は宇治の「花やしき」へでも伸さうかと思つてゐるんですよ。」

廣瀨は頭を搔いて、

「はゝゝゝ。いや、そいつは困つたね。いづれも狙ひ處は同じなんだね。どうだい、小澤君お互に意地惡のしつこをしても詰らんから、豫め落着く先を打合はせて置かうぢやないか。それでないと、此の樣子ぢや又かち合ふぜ。君達が若し宇治へ行くんなら、僕等は嵐山と、かういふ風に讓り合はうぢやないか。どうだね。」

小澤も少しづつ醉ひが廻つて來たとみえ、言葉つきもはつきりして來て、

「いや、望むところです。さう願へれば猶ほ好都合ですよ。」と、云つたが、廣瀨は親しげに雪江を顧みて、

「ねえ、雪江さん。それぢや僕等は嵐山の方にしようぢやないか。宇治もいゝんだが、併し小澤君達はとにかく新婚の第一夜だ。まあ思ひ切つて、あの絕景の眺めを讓らう。全く宇治と來たら、新婚旅行のお客にやお誂へ向きだからね。はゝゝゝ。」

雪江もぽうつと顏を紅くしながら、

「あの、私、何方でもよろしう御座いますわ。初めて參るところなんで、さつぱり樣子が分りませんから、一切お任せ致しますわ。」と、につこり笑ふ。彼女は態と手を卓のうへで組み合はせて、小澤達に美しい指環が見えるやうにしてゐた。

小澤も笑つて、

「いや、それではどうかさう云ふことに願ひませう。さうすれば先づ明日の朝京都へ下りて、一寸何處かへ落着いて、それから自動車で方々を見物して步いて、晩は宇治へ行くことにしませう。」と、云つて、彼も花嫁の方をみる。

花嫁は何んだか、先刻から妙に居辛さうにもぢもぢしてゐたが、その時、自分も小澤の方をみかへして、恥かしげに、

「あの、あなた。……」と、いふ。

小澤も間が惡さうに、

「何んです。」と、云つたが、花嫁はそつと遠慮しいしい彼の方へ顏を寄せて、何事か耳打ちをする。

小澤は合點いて、

「さう。それぢや構はないから、失禮して、彼方へ被往い。」と、いふ。

花嫁はほッとしたやうな顏で、そうッと立上つて、

「あの、それでは私、失禮で御座いますけれど、お先へ。」と廣瀨の方へ辭儀をして、そのまま扉の方へ出ていつてしまふ。

廣瀨はその後姿を見送つて、

「いや、もうお歸りか。まあ、いゝぢやないですか。何か用でもあるんかね。」と、小澤の方へ云つたが、小澤は、

「いゝえ、何んだか、頭痛がするとか云つて。……」と、云ふ。

廣瀨は列車の動搖で危げな足つきをしてゐる花嫁の方をみて、

「いや、そりや可かん。それぢや君、室まで送つていつて上げろよ。それでなけりや新郎の役は勤まらんぢやないか。さ、送つていつて上げ

ろよ。」と、冷評すやうに云ふ。
小澤はひどく照れてゐたが、やがて思ひ切つて、椅子から立つて、
「それぢや一寸失禮します。」と、云つて、花嫁の後を追つていつた。
廣瀬は笑つて、
「ねえ、小澤君、このまゝ彼方へ引取られてしまつちや卑怯だぞ。もう一度此方へ歸つて來給へ。きつとだよ。」と、浴びせかけるやうに云ふ。
小澤は一寸此方を振返つて、合點いてみせた。

二十一

小澤が扉を閉めて、外へ出ていつてしまふと、廣瀬は首を縮めて、ぺろりと舌を出しながら、
「ふん、どうだい、うまく行つたねえ。」と、雪江の方へ顏を向けたが、雪江もにやりとして、聲を潜めながら、
「ほんとに豫定の通りで御座いましたわねえ。」と、囁いて、「でも、小澤さんは今日はまるで人違ひがして被在るやうですわねえ。お顏容までがいつもと違つてますわ。」
廣瀬は又洋杯を取り上げて、
「いや、奴もさすがに照れて居るのさ。いゝ氣味ぢやないか。これで私もすつかり溜飮が下つたねえ。はゝゝゝ。」と、笑つて、「併し花嫁さんは思つたよりもシャンぢやないねえ。寢臺へ入つて來た時にや、これはこれはと思つたが、明るい處でみると、存外見ざめのする顏ぢやないか。あんなに綺麗に化粧をしてゐて、あの位ぢや生地はあんまり結構ぢやないよ。まあ、よかつた。」と、云つて、ぐうツと洋杯をあける。
雪江はウヰスキイの壜を取つて、危げに酌をしてやりながら、
「あの、さう云へば、片眉毛が少し跛ですわねえ。眉の引き方がうまくいつてゐないからでせうか。」と、云つたが、廣瀬はぽいと葉卷を灰皿の中へ投げ入れて、
「いや、今日は一生に一度の花嫁姿だ。いづれ美容院か何かでお化粧をしてきたんだらうから、その點はもう申分がない筈ぢやないか。あいふ顏容の女にや、きまつて雀斑があるもんだよ。あれで白粉をとつてみたまへ、きつと顏の色光澤が悪いからねえ。」
「まあ、散々ですわねえ。でも、雀斑は美人の要素だつていふぢや御座いませんか。」と、云つて、雪江は傍に置いた手提袋の中から、化粧道具を取り出して、手鏡を持ち添へながら顏を直し出す。
廣瀬はその顏をうつとり見ながら、
「いや、そこへ行くと、何を云つてもあんたの方が、數等上だよ。私の慾眼か知れんが、第一品物が違ふからなあ。はゝゝゝ。花嫁さんも氣になるとみえて、先刻から頻りにあんたの方ばかり見て居つたぢやないか。」
雪江は鏡の中で返事をして、
「え、見ないやうな風をして、私の指環までみて被在るんですもの。でもあの方のダイヤは隨分大きいんですのねえ。私の石の倍もありますわねえ。」
「うん、大きいにや大きいが、併しダイヤつていふものは嵩の大きいばかりが能ぢやないからね。いつそ威嚇すつもりなら、一萬圓二萬圓の小切手で手袋でもこしらへて、それをはめてゐる方が氣が利いてゐるさ。あの嫁さんは親爺が成金だから、總體、拵へが嫌に金々してゐてちつとも品がないぢやないか。」と、くさすやうに云つて、又洋杯を取り上げながら、「併し嫁さんは一體あんたを何んと思つて居るだらう。まさか自分の亭主の關係者だとは夢にも知らんだらうね。はゝゝゝ。」

雪江はその膝をそつと押へて、
「あら、あなた、そんな大きな聲をお出しになつちや、厭ですわ。」と、たしなめて、あかず鏡を見ながら、「ほんとに、私も先刻からそればかり考へてゐましたのよ。何んだと思つて被在るでせう。面白う御座んすわねえ。」
廣瀨は今度は金口の煙草を取り出しながら、
「併しいくら何んでも、小澤の奴は嫁さんにかうからだと事實を告白するだけの勇氣はないだらうねえ。さうなりやあんたといふものは、永久に謎として殘る譯だね。」と、云つて、雪江の方へ顏を寄せながら、「併し小澤の奴の腹の中はどんなだらうなあ。それを考へると、少々殘酷なやうな氣もするねえ。」
雪江はそれには答へずに、默つて笑つてゐたが、やがて、
「それよりも貴方、小澤さんはもう一度此方へ出て被來るでせうか。あのまゝ逃げておしまひなさりやしないでせうか。」
雪江がさう云ひかけてゐるところへ、扉ががちやりと開いて、小澤がひよつくら入つて來た。雪江は慌てて化粧道具を藏つて、何喰はぬ顏になつたが、小澤はもとの座席へ歸つて、
「やあ、失禮しました。」と、云ひながら、もう直ぐに先刻飲みさしていつたウキスキイをぐツと呷る。
廣瀨はにこにこして、それへ又酌をしてやりながら、
「やあ、到頭歸つて來たねえ。えらい、えらい。新夫人は何うした。あんまり氣をつめたんで疲れが出たんだらう。男と違つて、かういふ日には全く嫁さんは可哀想だよ。はゝゝゝ。」
小澤はもう醉ひのために眼まで濕ませてゐて、
「今日はそれに餘りお客の數が多かつたもんですから、……」と、云つて、「併し廣瀨さん、それにしても、どうも今夜は驚きましたなあ。あなたは何か計畫を立てて被在つたんぢやないんですか。」と、腹に一物ありげに云ふ。
廣瀨は白ばツくれて、
「何、計畫？　計畫とは何ういふ意味だね。」と、訊き返したが、小澤はそぐはぬ苦笑を浮べて、
「いや、兎に角、あなたはなさることが何うも惡辣ですよ。まあ私からは何にも申しませんがね。實にどうもかういふことで敵をとられるのは、少々殘酷ですなあ。」と、額ばかり撫でてゐる。
廣瀨は態と大きく笑つて、
「はゝゝゝ。邪推をしたな、邪推を。これはどうも驚いた。そんな氣で企んだと思はれちや、全くどうも僕の方が恐縮するねえ。僕達こそ、こつそり逃げるやうにしてこの列車へ乘つたのに到頭君に出會してしまつて、全く因果だと思つて居るのだよ。ねえ、雪江さん。はゝはゝ。」
雪江は默つて、微笑んでゐた。
廣瀨は又語をつゞけて、
「ねえ、小澤君、まあ、冷靜に考へて見給へ。一體僕と雪江さんとかうして汽車に乘つて居るところを、君にみられたら何うなると思ふんだ。雪江さんだつて實のところを云へば、君に正面から逢へる人ぢやないぢやないか。あゝいつた經緯があつた後の今日だ。而も君は新夫人と御同列で、樂しい新婚旅行に出懸けるその途中だ。雪江さんにしても、何うして君に逢へると思ふ。」
小澤は兩腕を組んで、
「いや、もう何にも申しません。唯私は心から恨み度い人がたつた一人あるのです。私は今ではもう何うにもならん體ですから、甘じてあなた方に負けてゐます。併し、併し他日私はきつと、……」と、云つて、彼はどうしたのか、俄に

顔色まで變へてしまふ。
　廣瀨は可笑しさうに笑つて、
「はゝゝゝ。小澤君、君も實にさばけん男だねえ。からなつちや恨みも何もないぢやないか。まあ、いゝ。もつと飮むさ。何を云つたつて、君には可愛い花嫁さんが附いてゐるんだ。君は兎に角幸福だよ。」と、云つて、雪江の方を向きながら、「おい、雪江さん、何をぼんやりしてゐるんだ。私にも酌をして呉れんか。さうしてあんたももう一杯やつて、景氣をつけるさ。もう何うせこの儘寢臺へ入つてしまへば、京都まではぐつすり寢て行けるんだ。お向ひに新婚の夢を乘せた新夫婦のベッドがあつちや、あんただつてとても氣が揉めて、素面ぢや眠れやせんよ。はゝゝゝ。」
　雪江は云はれるまゝ酌をしてやつて、今度は自分の洋杯へも注ぎながら、
「でも、私、こんなに頂いて、醉やあしないでせうか。途中で苦しくなりでもしたら、大變ですわ。」
「はゝゝゝ。苦しくなつたら、私が介抱してやるよ。小澤君ほどにやいかなくても、私だつてその方ぢや相當に修行をして來たんだからねえ。さ、ぐツとお飮み。ぐツと。」と、云つて、廣瀨はもう醉つてゐるので、これ見よがしに雪江の手を持ち添へて、飮ませる。
　雪江は態と彼の肩へ寄りかゝるやうにしながら、
「あら、もう、もう、澤山ですわ。」なぞと甘えながら、到頭すつかり飮んでしまふ。
　小澤は顏を背けて煙草ばかり吸つてゐたが、自分でウヰスキイの壜をとつて、三四杯立てつづけに飮む。雪江はその時初めて正面から口を切つて、
「小澤さん、もう奧さんは被在らないんですから私にだつて私にだつて、お酌位させて下すつてもいゝでせう。」と、戰を挑むやうに云つたが、小澤はそつちは見もしずに、ぶツきらぼうに、
「有難う。まあ、そちらの方でよろしく。」と、云つたきり、もう我慢が出來なくなつたやうにつと立上つて、「いや、廣瀨さん。私はもうひどく醉つてゐますから、此れで御免蒙ります。又醉つた紛れに失禮なことでも云ふと後であなたに申譯がありませんから、……」と、云つて、そのまゝカウンターの方へ行く。
　廣瀨は、後から呼び留めて、
「おい、小澤君、勘定なんかせんでもいゝよ。僕達はもう少し此方に居るんだから、……」と、云つたが、それでも小澤は向うを向いて、懷から財布を出して、勘定をする。それが濟むと、今度は一寸此方へ會釋をして到頭彼は扉から出ていつてしまつた。
　廣瀨はあつけらかんとして、
「どうも仕樣がないなあ。彼奴は遊ぶところぢや相當に粹なことをしてゐながら、どうしてこの問題になるとあゝぎすぎすするんだらう。なにも勘定をしていくところはないぢやないか。話せない奴だ。」と、ぶつぶつ云つてゐたが、雪江はぼんやり小澤の出ていつた扉の方を見詰めながら、何にも云はなかつた。よくみると、彼女の雙眼にはどうしたのか、薄く涙が浮んでゐた。
　列車はその時、停車場へ入るとみえ、速力が急に遲くなつてやがて、「沼津」「沼津」といふ聲が車窓を掠めて流れていつた。

二十二

　その列車は翌朝の七時四十五分に京都へ到着するのであつた。雪江は寢臺車の中で夜を明かすのは生れて初めての經驗なので、初めのう

ちは車輪のどよみや汽笛の音が耳について何うしても睡りを呼ぶことが出來なかつた。それにすぐ眞向うに、あの小澤が寢てゐるのかと思ふと、いろんな妄想が先々と湧き起つて、彼女はその爲めにもいくら眠りを妨げられたか知れなかつた。併しもう豐橋を過ぎる頃には、飲んだウヰスキイが工合よく體に廻つて、漸次といゝ氣持になつていくなと思ふと、もう彼女は自分では知らないうちにぐつすりと睡込んでしまつた。それからは彼女は一度も眼を覺まさなかつたのであつた。

ふつと氣がつくと、車窓に懸つた窓帷の陰からは、ほのぼのとした朝の光が縞のやうに射し込んでゐる。雪江は何んだか夢でもみてゐるやうな心持で、ぶるぶる顫へるその光を見守つてゐたが、そのうちに、やつと夜が明けたのが分つて來た。さうなると、彼女はもう何うしてももむむとする寢臺の中へ寢てゐる氣になれなくなつて、そつと起き上つた。そして成る可く音をたてないやうにこそこそ車窓の窓帷を上げてしまつた。

列車は今、紫色に夜の明けかゝつた湖の岸をひた駛りに駛つてゐる。こんなところに何うしてこんな大きな湖があるのかと思ふと、雪江はふつと、あゝ、これがきつと琵琶湖なんだなと氣がついた。名にばかり聞いてゐた琵琶湖を眼のあたりに見るだけでも、彼女はもう胸が躍つてならないのであつた。

雪江は昨夜廣瀬に敎へられて長襦袢一枚になつて寢たので、しどけないその姿を人に見られるのも恥かしいと思つて、やがて低い天井の下で、さも窮屈さうに着物を着た。着物はよかつたが、帯を緊める段になると、何うしても手が自由にならないので、彼女は仕方がなしに帷を拂つて廊下へ下りた。そして四邊に氣を配りながら、成る可く他の乘客達に氣取られないやうに、そうツと帯をしめた。

その時、すぐ前の寢臺では、うーんと伸びをする聲が聞えて、間もなく帷の隅の方が一寸ばかり開いた。と、そこから眼だけ出してじろりと此方を見たものがあつたが、それは無論小澤で、雪江が思はずそつちを向くと、彼は態とらしくぼつたりと又その帷を閉めてしまつた。小澤は昨夜何うしても眠られないとみえ、雪江がまだ眼を覺ましてゐる間にも、絶えず寢返りを打つたり、欠伸をしたりして轉々反側してゐたのであつた。

雪江は小澤が起きてゐるのだなと思ふと、妙に胸がそはついて來た。彼女はそのまゝ又寢臺の中へ坐つて帷を引いて、袋の中から手鏡を出すと、もう一生懸命になつて顏を直し出した。

少時すると、小澤もごそごそ起き出した。つづいて花嫁も起きたとみえ、向ひ側の寢臺では着物を着換へる音や、何かひそひそ語り合ふ聲が聞えて來た。雪江は帷の陰からそツとその話し聲に聞耳をたててゐた。そこへ給仕がやつて來て、帷の外からもうお眼覺めかと訊く。雪江はせめて口だけでも漱ぎ度いと思つて、給仕に敎へて貰つて、洗面所へ行つた。

洗面所から歸つて來ると、給仕はもうちやんと寢臺を片づけて、荷物などもきちんと取揃へて置いてあつた。小澤達夫婦は前の車の方へ顏を洗ひにいつたとみえ、座席にはゐなくて、給仕はそこの寢臺をせつせと片づけてゐた。廣瀬の寢臺ではまだ帷を開けてゐないので、雪江はもう待ち切れなくなつて、そつと帷の間から顏を入れて、

「貴方、貴方。」と、起してみた。廣瀬は昨夜は隨分醉つてゐたので、まだその時分まで鼾をかきながらぐうぐうと睡込んでゐたが、二度も三度も起すと、それでもやつと眼を覺まして、

「お、お早う。やあ、どうもすつかりいゝ氣持に寢込んぢまつて。はゝゝゝ。」と、朝から如何にも機嫌よく笑つて、「今何處いらだい。もう米原は通つてしまつたんだらう。」と、欠伸をしいしい云ふ。彼は月のうちに二度は必ず通るので、沿線の樣子は掌を指すやうに知つてゐた。

雪江はにつこり美しく笑ひながら、

「あら、何んですか、今琵琶湖の縁を通つてゐますのよ。ほんとにいゝ景色ですわ。早くお起き遊ばせよ。もう小澤さん達も起きて、顏を洗ひに行つて被在いますわ。」と、云ふ。

廣瀨はそのまゝごそりと起き上つて、すぐさま、鞄の中から洗面の道具を入れたサックを出して、身輕に洗面所の方へ立つていく。汽車中の起居に馴れてゐるので、端でみてゐても、いかにも氣易さうだつた。

雪江は自分の座席へ歸つて、そこへ腰を下ろしながら、晴々とした顏で、移り變る朝の景色を車窓から眺めてゐたが、少時すると、廣瀨は濡れたタオルで顏を拭きふき歸つて來て、それなり手早く洋服を着ながら、

「雪江さん、もうあと一時間ばかりで京都へ着くんだよ。ほれ、あすこにみえるあの山が比叡山さ。あの町が大津だ。此處いらへ來るとなかなかいゝ景色だらう。」なぞと云ふ。

雪江はもう嬉しくて耐らないやうに、

「まあ、あれが比叡山で御座いますの。ぢや京都はあの山の向うにあるんで御座いますのねえ。もう一時間なら、ぢきですわ。」と、云つたが、いくら押へようとしても彼女の唇には自然に微笑が上つて來るのであつた。

廣瀨はやがてすつかり洋服を着てしまふと雪江の隣りへ來て、どかりと坐りながら、葉卷を取り出して、

「ねえ、雪江さん、小澤達は何うしたんだらう。まだ歸つて來んぢやないか。まさか食堂へ行つたんぢやなからうねえ。」と、事を好むやうな顏をしながら云ふ。

雪江も小首を傾げて、

「さあ、私、向うの洗面所へ被來つたんだらうと思ひますけど、それにしちや長過ぎますのねえ。ひよつとかしたら、食堂へ被往つたのかも知れませんわねえ。」

廣瀨は靴の裏でマッチをすつて、葉卷に火をつけながら、

「きつとさうだよ。あの嫁さんは昨夜あんなに瘦我慢をして居つたんで、今朝はきつと腹が空いて眼を廻して居ること。それだから私が云はんこつちやないんだ。はゝゝゝ。實にすることが滑稽だね。」

「ほゝゝゝ。ほんとにねえ。」と、雪江も態を見ろと云はぬばかりに云つて、「あら、さう云へば、私も今朝は何うしたんですか、お腹が空いて耐りませんのよ、何うしたんでせう。いつもはこんなことはないんですのにねえ。」

「そりや、あんた當然だよ。汽車つて云ふ奴は何う云ふもんだか腹の空くもんでねえ。はゝゝ。併しもう僅か一時間で京都へ着くんだから、食堂車のまづい朝飯なんかよして、彼地でゆつくり朝飯にしようぢやないか。その方がいくら利口だか知れんよ。」

そんな話をしてゐるところへ、小澤夫婦はひよつくり歸つて來た。此方で想像してゐたやうに、二人は食堂へ行つてゐたものとみえ、花嫁の口尻にはハム・エッグスの汁が少しばかりついてゐて、素知らぬ顏はしてゐながら、ものを食べて來たことは爭へなかつた。

廣瀨はそれを見ると、此方から機嫌のいゝ朝の挨拶を浴びせかけて、

「やあ、小澤君、お早う。昨夜はどうも大變に失敬しちまつたよ。私はいつになく醉つちまつて

ねえ。はゝゝゝ。」と、大きな聲で笑ふ。
小澤も口だけで微笑みながら、
「やあ、私こそ。」と、云つて、そのまゝ差向ひの座席へ二人並んで坐つて、「今朝はまたいゝお天氣ぢやありませんか。昨夜の模様ぢやひよつとかしたら曇るかと思つてゐましたが、いゝ鹽梅でした。」と、取つてつけたやうに云ふ。彼女は昨夜はたしかに碌々寐てゐないらしく、眼はどんより血ばんでゐて、いかにも不愉快さうな顏をしてゐた。花嫁の方も今朝は化粧が出來ないとみえ、白粉もよく伸びてゐなくて、廣瀬が昨夜冗談に云つたやうに、鼻のまはりには一杯に雀斑が浮いてみえてゐた。
列車は間もなく東山の隧道へ入つたが、それを出ると、もう山々に圍まれた京都の町が朝明けのほいやりとした霞に包まれながら眼に見えて來た。東寺の塔や、本願寺の高い甍がその霞のうへへぼんやり浮きあがつて、まるで繪のやうな美しい光景であつた。
車中の人々は急にざわざわ下車の準備をしはじめた。小澤も立つて、荷物なぞを彼方へやつたり、此方へやつたりしだしたが、やがて列車は轟然たるとよみを上屋へ響かせながら京都驛の歩廊へ入つていつた。
廣瀬は悠然と立つて、車窓から赤帽を呼び止め、トランクや小鞄をすつかり渡して、
「さあ、雪江さん。いよいよ京都へ來たよ。何も忘れものはないかね。」なぞと云ひながら、自分が先に下りて、小澤達のあとから、跨線橋を越えていつた。そして驛前へ出ると、赤帽に呼ばせたタクシを探して、それへ荷物を積ませたが、小澤夫婦はもう別のタクシへ乘つてゐて、
「それでは廣瀬さん、お先に失禮します。」と、云ひながら、そのまゝ烏丸の大通りを北へ向つて駛らせていつた。
廣瀬はそれを見送つたあとで、タクシへ乘りながら、
「ねえ、雪江さん。小澤の奴はやつぱり澤文へ行くんだよ。今夜は果して昨夜の約束を守るか知ら。はゝゝゝ。」なぞと笑つて、雪江が乘ると、氣輕に、「おい、ショファ。木屋町のな、松絲へやつて吳れ。」と、行先を云ふ。
タクシは小澤達の行つた道とは違つた電車通りの方へ驀地に駛つていつた。

二十三

廣瀬と雪江が落着いたのは、三條から一寸上つた木屋町の松絲といふ席貸だつた。そこは鴨川に臨んだ粋な家で、廣瀬は始終世話になる宿坊とみえ、若い女將さんから仲居達まで皆出て來て、下へも置かないやうに待遇した。
川緣の六疊の離座敷へ案内されると、廣瀬はどかりと座蒲團へ坐つて、
「いや、女將、此間はどうも大變に御世話になつて有難う。今度はね、私は新婚旅行なんだ。つい五日ばかり前にこんな若い、綺麗な女房を貰つてなあ。一つ皆に見せつけてやらうと思つて、實は京都見物と洒落込んだ譯なのさ。よろしく頼むよ。いゝかい。」と、眞顏になつていふ。
女將は場所柄とて、何も彼も心得てゐて、愛嬌よく挨拶をしながら、
「まあま、きつい云ひやうどすえなあ、何うどつしやろ。ほゝゝゝ。」と、云つて、雪江の方へも丁寧に辭儀をしながら、「さあ、どうぞ彼方へお入りやしといくれやす。さ、どうぞ。」と、雪江を廣瀬と差向ひの座蒲團へ坐らせて、「なあ、廣瀬はん。あんたはんもほんまに怪體におすやないか。今日お越しやすのやつたら、一寸電報でも打つとくれやしたら、お迎ひにも出ましたのに、……」と、恨みがましくいふ。
廣瀬は笑つて、

「はゝゝゝ。いや、此處へ泊ると分つて居りや、ちやんと段取をつけて置くんだが、併しほんたうはお忍びでな、大阪の芝居の奴にでも知れると煩いで、態と不意打ちを食はしたのさ。はゝゝゝ。」と、云つて、「女將。それよりも此方の御婦人はひどく腹を空かして居るんだから、大急ぎで朝飯と、お風呂を頼むよ。」と、いふ。

女將は合點いて、

「よろしう御座ります。あんたはんのおあがりやすやうなもんでよろしうおすなあ。」と、註文を訊いて、二言三言世辭を云つたあとで、彼方へ行つてしまつた。

廣瀬は自分で立つて、障子を開けながら、

「雪江さん、まあ、出て御覽よ。どうだい、憧憬の京都はいゝだらう。あれが、東山さ。あすこにみえる大きな屋根が智恩院で、むかうのあの塔が八坂の塔だ。あれがあんた、三條の大橋さ。」と、一々指呼してみせる。

雪江は凝と廣瀬の胸へ寄り添ひながらもうつとりと四邊を眺め廻してゐた。彼女の口から出て來るのは、唯感嘆と歡喜の言葉ばかりであつた。

「ほんたうによう御座いますのねえ。私、話には聞いてゐましたけど、こんな綺麗なところだとは夢にも思ひませんでしたわ。まあ、あすこが祇園なんですの。祇園の舞妓さんてほんとに綺麗なんで御座いませうねえ。」と、茫然してゐる。東京以外の何處もみたことのない彼女には、京の町々が夢の國のやうに思へたのも無理はなかつた。

廣瀬はやがて座に歸ると、口寂しさうに、

「いや、どうも昨夜のあのウヰスキイはあんまりよくなかつたねえ。今朝まだ頭に殘つてゐるよ。ひとつ口直しにビールでもやるかな。」と、笑つて、仲居を呼んでビールを命じる。

ビールが來ると、彼は雪江に酌をして貰ひながら、さもうまさうに立續けに三杯ほど空けて、ほツと息を吐きながら、

「いや、いゝ氣持だ。天國だね。これで飯をくつて、それから先の自動車で東山廻りでもするかな。どうだい、雪江さん、あんた、昨夜はよく眠れたかね。」と、とろりとした眼で雪江をみる。

雪江は嬌態をしながら、

「あの、私ね、お恥かしう御座いますけど、寢臺つていふものに初めて乘りましたんでね。初めは何んだか、勝手が惡くつて、寢苦しう御座いましたけど、それでも豐橋から先はよく寐ましたわ。」

「さうかい。そりやよかつた。私はひよつとかしたら眠れなかつたんぢやなかつたかと思つて心配して居つたんだよ。何しろ眞正面には小澤が寢とるんだからねえ。いろいろと過ぎし逢ふ夜のことなんか思ひ出して、感慨に耽つたらうと思つて、實は大いに私も羨望に耐へなかつたんだよ。はゝゝゝ。」

雪江は睨むやうな眼つきをして、

「あら、もうあなた、そんなことは仰有らない御約束だつたんぢやありませんの。私、厭ですわ。小澤さんの名を伺つただけでも、私、ぞツとするんですもの。もう何うか後生ですから、それぱつかりは仰有らないで下さいました。」と、甘えるやうに云ふ。

廣瀬はごろりと横に寢て、

「いや、こりや御免、御免。私が惡かつたよ。はゝゝゝ。」と、云つて、「ねえ、雪江さん、寢臺へ初めて乘つたんなら訊くが、一體寢臺つていふものの感想は何うだね。よかつたかね。」

雪江は可愛らしく小首を傾げて、

「さうですわねえ。私、何んですか、あんまりいゝ心持は致しませんでしたわ。何んだか西

洋人のやうな匂ひがするんですのねえ。」

「はゝゝゝ。西洋人の匂ひはよかつたね。成る程、確かにそんな匂ひがするね。兎に角、實に殺風景なものだよ。この旅の中の貴重なひと晩をあんなもののうへで過したのかと思ふと何んだか惜しいやうな氣持がするね。はゝゝは。」さう云ひながら雪江を見詰める、廣瀬の眼には、何處か放恣な慾望が動いて來るのであつた。

雪江も色めかしく笑つて、

「ほんとにね。何よりも私、夜の汽車は景色が見えないんで嫌ひですわ。歸りには是非晝の汽車になさいませんこと？」と、云つて、廣瀬がうまさうにビールを飲むのを見ながら、いきなり彼の側へ摺り寄つて、「ねえ、あなた。私にもビールを少し下さいましな。ほんとにおいしさうなんですもの。」と、彼の肩へ甘え寄る。

廣瀬は自分の飲みさしをそのまゝ雪江の口へ持つていきながら、につこり笑つてみせたが、雪江はそれをぐうッとひと息に飲んでしまつた。

そのうちに朝飯の支度が出來て來たので、二人は膳についたが、廣瀬はビールばかり飲んでゐて中々飯にしなかつた。雪江も相手をして三杯ほど飲んだので、いゝ氣持に醉つてしまつた。

廣瀬はもう眼まで眞紅にして、頻りに肩で息をしてゐたが、やがて手洗場の方へ立つていつた。そこへさつきの女將がひよつこり出て來て、妙に笑ひながら、小聲で、

「なあ、廣瀬はん。あんたはん、あのお伴れの女はんな、あら何をしやはるお方どすね。藝妓はんどつか。」と、好奇心をもつて訊く。

廣瀬はにやりとして、

「あれかい。あれは私の會社の女事務員さ。こればかりは祕密なんだから、どうか誰にも饒舌らんで呉れよ。」

女將は眼を丸くして、

「まあま、どうえ。あれが女の事務員はんどつか。そやけどえゝ顏してやはりますえなあ。あんたはん餘程女はんの見立てが上手や。私、藝妓はんにしてはどこや風が變やと思うてましたが、あんたはんもほんまに浮氣もんやなあ。御自分の會社に勤めてやはる女はんにまで手つけたりして、せうむない。」と、睨むやうな眼つきをする。

廣瀬は笑つて、

「いや、それはお前、重役の役得さ。何も私の方から云ひ出した譯ぢやなし、据膳を食はんのは、男の恥だからなあ。はゝゝゝゝ。」と、洒蛙洒蛙してゐる。

女將はその肩をぽんと叩いて、

「まあ、忌らし。あんな素人の娘はんに惡いことしやはつて、あとでえゝことはおへんえ。ほんまどつせ。」

廣瀬は手を洗ひながら、

「いや、それはさうと、女將、私は何んだか一杯飲んだら、すつかり體が溶けさうになつちまつたよ。どうかお前の機轉で、よろしく頼むぜ。」と、變な恰好をしてみせる。

女將はくすくす笑つて、

「今、すぐどすか。」と、訊いたが、廣瀬はその肩へ手をかけて、

「いや、まあ、飯が濟んでからでもいゝよ。昨夜は何しろ、寢臺の中で假寢の夢を結びけりだからな。はゝゝゝ。」

「阿呆らしい。よう そんなこと云へる。」と、女將は笑つて、向うへいきながら、「それまでにお風呂もあんじようしときますさかいに、まあ、朝はあんまりたんと召飲らんと、早う御飯をおあがりやす。私が鹽梅しときますさかい。」

廣瀨はそのまゝ又離座敷へ歸つて來て、仲居を相手に何か話してゐる雪江の方を見ながら、

「ねえ、雪江さん。どうだい、そろそろ飯にしようか。今女將に叱られて來たよ。女將は朝からあんまり酒を飲んぢや可かんて云ふんだ。はゝゝゝ。此處の女將と來たら、中々やかましいんだからね。はゝゝゝゝ。」

雪江はさう云はれると、自分の膳のうへへ置いてある洋盃を態と取り上げて、ぐッと飲みながら、

「でも、おビールですもの、ぢきに醒めてしまひますわ。」と、いふ。

廣瀨は隅の方へいつて、無造作に洋服をぬぎだした。仲居は立つて來て、浴衣を下に襲ねた褞袍を後からそッと着せかけてやつた。

二十四

午過ぎになると、廣瀨は自動車を呼ばせてそれで銀閣寺を先づ振り出しに、南禪寺、智恩院、高臺寺から清水寺の方までも見物して歩いた。途中[illegible]亭で夕飯を食べたりしたので、清水へ來た頃にはもう日もとつぷり暮れて、あの高い石段が折柄の月の光に、白々とみえてゐた。

廣瀨はさも疲れたやうに肥つた體をもてあつかひながら、

「やあ、この石段はえらいなあ。私はとても上れんぞ。弱つたなあ。」なぞと弱音を吹いてゐたが、雪江は誰も人がみてゐないので、いきなり廣瀨の腰へ手を卷いて、

「そんな意地の惡いことを仰有らずに、どうせ此處まで來たんぢやありませんか、一緒に上つて下さいましな。私が押して差上げますからさ。」と、いふ。

廣瀨は[illegible]亭で飲んだ酒が丁度體へ廻つてゐるので、ふうふう息をしながら、

「やあ、さう云はれりや仕方がない。途中で心臟がパンクしたら、雪江さん、あんたの所爲だよ。懸換へのない生命だが、からなつたら、もうわが愛する雪江孃に獻上するよ。はゝゝゝ。」なぞとせいぜい笑談を云ひながら、それでも一段々々、石段を拾つて上つてゆく。雪江は足の達者な方なので、後から一生懸命に押してやつた。

やつとのことで舞臺まで上つて來ると、雪江はほんのりと點つた燈籠の光を魅せられたやうにうつとり眺めながら、

「ねえ、貴方、ほんたうによう御座いますのねえ。私、何んだか、夢でもみてゐるやうな氣がしてなりませんのよ。これが現實の世の中の出來事でせうか。」なぞともうまるで感激の絕頂に立つてゐるやうに云つて、廣瀨の方へ寄り添つてくる。

廣瀨は四邊が眞暗なので、彼女の肩をしつかりと抱いて、そのまゝ舞臺の欄干へ倚りかゝりながら、

「いや、全くいゝねえ。私だつてあんたと二人つきりでこんな處へ來ようとは夢にも思はなかつたよ。矢張り何を云つても旅をするに限るねえ。たとひ惚れた同志でなくたつて、人情が深くなるんだもの。增してやだね。」と、云つてぎいッと雪江の手を握る。

雪江は廣瀨の肩へ頰をのせるやうにしながら、もう恍惚の境に遊んでゐるやうに、

「ほんとですわ。私、何んて云つたらいゝでせう。何んだかもう醉つちまつてゐるやうですわ。」と、呟いて、「でもねえ、あなた、そんな惚れてゐるなんて言葉をお遣ひになつちや私、厭ですわ。もつと何んとか云つて下さらなけりや私、折角の幻影がこはれちまひますわ。」と、甘えるやうに體を摺りよせる。

廣瀨はすつぽりと彼女の體を抱へるやうにしながら、

「いや、惡かつたよ。どうも私は言葉遣ひが下卑て居つていかんねえ。これから大いに愼しまう。それぢやつまり、熱愛しあつた同志とかいふやうな云ひ廻しをすりや氣に入るんだらう。萬事流行の戀愛小說の臺白で行かうぢやないか。月はいゝし、時は春だしもう申分はないよ。暗い中にほら、ほんのり白く見えてゐるだらう。ありやあんた、皆櫻なんだぜ。實にいいぢやないか。」

そこからみると、暗い舞臺の陰には淸水で名代の地主櫻がほの白い花を闇の中へ浮き上らせて、その下には新高尾の櫻がまるで泡のやうに美しく、彼方にも此方にも咲き滿ちてゐる。まだ滿開には二三日間があつたが、併し花陰には紅提灯が點々とゆらめいて、段々になつた茶屋茶屋の緋毛氈がうへから下瞰すると何んとも云へない艶めかしい色にみえてゐる。京の町には數限りもない燈影が瞬いて、洛西の方は靄のやうな淡い夜霧に閉ざされてゐた。

雪江は夢をみつめてゐるやうな聲で、

「ねえ、あなた。いつまでもかうして居度う御座いますわねえ。私、こんなことを云つて何んですけれど、あなたが又いつか、別な女の方とかうやつて此處へ被來るんぢやないかと思ふと、ほんとに寂しくなつちまひますわ。私、どうかしてそんなことのないやうにつて、今も觀音樣にお願ひをしてゐるんですけれど、……」

廣瀨はその頰にやたらと接吻をしながら、

「おい、雪江さん、そんな取越苦勞をしてどうするんだ。そんな馬鹿な、私はもうあんたを捨てるやうな、そんなことはしやしないよ。大丈夫だから安心してゐたまへつたら。」

雪江は急に淚聲になつて、

「でもいくら口で何んて仰有つても駄目ですわ。あなたのやうな方は、どんな女だつて征服なさる力を持つて被在るんですもの。私だつて、いつ倦きられてしまふか分りやしませんわ。」

廣瀨は口だけで笑つて、

「冗談を云つちや可けないよ。捨てられるのは反對に私の方かも知れないさ。前にも小澤といふ前科があるんだからね。」と、云つて、雪江の襟脚に又唇を寄せる。

雪江はしくしく泣き出して、

「あら、隨分なことを仰有いますわねえ。私、そんな、そんな女ぢやありませんわ。」と、顏をあげて云ひ募らうとするのを、廣瀨は笑ひに紛らかして、

「もういゝ。もういゝぢやないか。何も泣くことはないよ。今頃からそんな別れ話の稽古なんか眞平だ。はゝゝゝ。」と、笑つて、その時、廻廊の方から人の跫音が近づいて來たので、彼は思はず雪江の肩を胸から離しながら、「それよりも雪江さん、もう時刻がいゝから、これから都踊へ行かうぢやないか。都踊は實に綺麗だよ。それこそあんたの好きな舞妓が厭つていふ程みられるからねえ。さ、あんまり遲くならないうちに行かうぢやないか。」と、いふ。

雪江も默つて歩き出した。

二人はそれから音羽の瀧の方へ下りて、ずつと廻つて以前の石段下のところへ歸つて來た。そしてそこに待たせてあつた自動車に乘つて、今度は歌舞練場の方へ駛らせた。

雪江は明るい光の中へ出ると、態と顏を隱しながら、

「あなた、そんなに御覽になつちや厭ですわ。彼方を向いて被在つて下さいましな。」と、云つて、手提袋の中から化粧道具を取り出して、急いで顏を直す。

廣瀨は笑つて、

「そら御覽な。詰らんことを云つて泣くもんだから、折角のお化粧が臺なしになつてしまつ

たぢやないか。偶にや口說も惡くないが、併し理由のないことで責められるのは少々閉口だねえ。はゝゝゝ。」と、いふ。
雪江は恥かしさうに手鏡で顏を隱しながら、
「もう何にも仰有つちや厭、私が惡かつたんですわ。私、やつぱりヒステリーなんですわねえ。」
「はゝゝゝ。ヒステリーか。ヒステリーも場合に依つちや結構なもんだよ。」と、云つて、廣瀨は金口を取り出した。
歌舞練場へ來てみると、丁度二の替りなので、押返すやうな混雜だつた。もう幕が開くのも間もないとみえ、觀客はあらまし座席の方へ入つてゐたので、二人は茶席へも一寸顏を出しただけで、そのまゝ御殿へ入つていつた。そこも割れ返る程の大入りで、二人は仕方がなしに一番後の座席へやつと腰を下ろした。
つなぎ團子の紅提灯と、眼も綾な舞臺裝置の中で、群がる胡蝶のやうに舞ひつゞける舞妓達の姿は、忽ちにして雪江を眩惑してしまつた。彼女はもう息もつけないやうな顏をして、巧みに轉換されてゆく舞臺のうへの場景に見入つてゐたが、その時、廣瀨は突如に、彼女の肩を突いて、
「ねえ、雪江さん、あすこに小澤達が來てゐるぢやないか。ありや確かに小澤だよ。あんたにやみえんかね」と、耳打ちする。
雪江はもう小澤のことなんか何うでもよかつたが、さう云はれるのにまさか默つてゐる譯にもいかないので、前の方の座席を見廻しながら、
「何處いらですの。ずつと前?」と、訊いたが、廣瀨は伸び上るやうにして、
「ほら、これから五側ほど前に西洋人が三人程居るだらう。あの右のところさ。」と、いふ。
成る程、そこにみえてゐるのは、確かに小澤の頭だつた。彼は花嫁と二人並んで坐つて、一生懸命になつて花道の方をみてゐた。雪江は一寸見たつきりで、又直ぐに踊りの方へ眼を轉じてしまつた。
祇園囃しの鉦の音が浮々した一節を場內へ流し出すと、間もなく踊りは濟んでしまつた。雪江は他愛ないやうな顏をして、まだぼんやり舞臺の方をみてゐたが、廣瀨は先に立上つて、
「ねえ、雪江さん、小澤に顏を見られるのも氣が利かんから、先に出ようぢやないか。このうへ彼奴を揶揄ふのも大人氣ないからね。」と、云つて、群集に揉まれながらどんどん出口の方へ出ていく。雪江ははぐれまいとして、彼の上衣の裾につかまりながらあとから從いていつた。
二人は待たせて置いた自動車を探し出すのにひと骨折りをやつたが、やつとそれでも迎ひに出てゐる運轉手を見付け出したので、直ぐさま又自動車に乘つた。それからずつと嵐山まで飛ばす豫定にはしてゐたが、何んだか廣瀨は疲れたと云つて、ひと先づ木屋町の松絲へ引返すことにした。
松絲へ歸ると、京の夜は春とは云ひながらまだ底寒いので、廣瀨はすぐ樣又酒を命じた。そして雪江が是非舞妓をみたいといふので、それから三四人舞妓を呼んで、その晩は到頭そこで醉ひつぶれてしまつた。
雪江も廣瀨の相手をして隨分飲んだので、寢る頃にはひどく醉つてゐた。冷たい枕に頰を當てると、咽ぶやうにせゝらぎ流れてゆく河瀨の音が耳について、その合間々々に先刻みた都踊の鉦の音や、唄聲が縺れて、雪江は却つて眠れなかつた。彼女は生れて初めて幸福といふ感じをしみじみ心の底から味つたのであつた。

二十五

その翌日は一日、上加茂から嵯峨の方を見物

して、嵐山のほとゝぎすへ泊つた。その翌日は今度は洛中へ歸つて、いろんな土産物なぞを見て廻つたあとで、もう一度ゆつくり都踊を觀てその晩は趣と氣を變へる爲めに、下河原の竹の家といふ席貸へいつて泊つた。

その翌朝は素晴しい好晴であるうへに、花日和でほかほかする程溫かかつたので、廣瀨は遲い朝飯を濟ますと、もう氣が浮々してゐるやうに、

「ねえ、雪江さん。今日こそ宇治へ行つてみようぢやないか。電車ぢや面白くないから、こゝの家で辨當をこしらへて貰つて、先づ東福寺から伏見へ出て、桃山の御陵へ參拜してさ、そのあとで宇治へ行きや丁度いゝドライブが出來るよ。さうしよう。早く支度をしないか。」と、いふ。

雪江もいそいそして、

「あの、それで宇治から何うしますの。又もう一度京都へ歸つて來ますの。」

廣瀨は笑つて、

「はゝゝゝゝ。もうすつかり京都が氣に入つてしまつたんだねえ。まあいゝさ。その時の都合でもう一度此地へ歸つて來てもいゝが、併し却つて奈良へ出て、あれから伊勢へ廻つた方が面白いかも知れないぜ。まあ、兎に角宇治へ行つてからのことにしよう。」

呼んで貰つた自動車の支度が出來ると、二人はすつかり荷物を積んで、やがて竹の家を出た。途中三十三間堂を見たり、東福寺から泉涌寺へ廻つたりして桃山の御陵へ着いたのは、もう午後の二時近かつた。御陵へお詣りを濟まして、彼等は御陵の下の茶店で辨當を食べると、三十分間ばかり休んで又自動車に乘つた。

自動車は菜の花の咲き亂れた廣々とした洛南の野を塵も立てずに氣持よく駛つてゆく。その道は宇治川に沿つてゐるので、青々とした堤防が畑の彼方に蜒々と續いてゐたが、廣瀨は葉卷を燻らしながら頻りに四邊を眺め廻して、

「ねえ、雪江さん、まだ時間が早いから、黃檗へも寄つて行かうぢやあないか。あすこいらはお茶の名所さ。見て置いても損はないよ。」と、云ふ。

雪江は襟卷で風を避けながら、

「え、何うか。私、何處でも見られるところは皆見て行き度う御座いますわ。もう二度と再び來られるかどうか分りませんもの。」と、いふ。

廣瀨は笑ひ出して、

「はゝゝゝゝ。又始めたね。もう清水の晩のやうな口說は御免蒙らうねえ。私までが何んだか心細くなつて來るからね。」と、いふ。

雪江も笑つて、

「もう私、決してあんなこと申しませんわ。いくら云つたつて、どうせさうなる時には、さうなるんですものねえ。それに人間ですもの、いつ死ぬか、それさへ分らないんですもの。」と、云つて、廣瀨の方へ顏を寄せながら、「ねえ、貴方、それよりもこんな贅澤な旅をしてゐると、隨分お金が澤山要りますわねえ。私何んだか、お氣の毒で耐らないんですの。」と、小聲で云ふ。

廣瀨はその顏をみて、

「何んだい、そんなことまで苦勞してゐるのかい。あんたも見懸けに依らないねえ。もつと氣が大きいかと思つてゐたら、案外だねえ。はゝはゝ。こんなことをしたつて、金なんか幾何かゝるもんぢやないよ。面白ければ結句いゝんぢやないか。そんな心配をしずに、もつともつとぱつぱと遣ふ工夫をするさ。はゝゝゝゝ。」

「でも、私、さうは仰有るけど、……」

「さうは仰有るけど、何んだい。もつとしみつたれに遣れつて云ふのかい。いや、そりや御免蒙らう。そんなことをしちや折角旅へ出た甲斐

がないよ。まだ千や二千の金なら此處に入つて居るから、まあ安心するさ。はゝゝゝゝ。」と、廣瀨は笑つて、「それよりもねえ、雪江さん、一體あの小澤の奴は何うしたらう。まだ京都にうろうろしてゐるだらうか。」と、いふ。

雪江も氣をかへて、

「さあ、何うしたでせう。あの晩宇治へ被徃つたとすりや、もう奈良の方へでも行つて被在るかも知れませんわねえ。今日で丁度三日目ですからねえ。」

「三日目か。もうそろそろ嫁さんが鼻につく時分だねえ。あの晩、彼奴のことだもの、都踊をみてからずつと宇治へ行つたに相違ないよ。さうすると、一昨日の晩ひと晩泊つて、それから先の旅程へ廻つたらうから、もうまさか宇治にはゐまいねえ。うつかり行つて又出會しでもすると、大笑ひだからねえ。はゝゝゝ。」

「ほんとにね。でも一つ處にさう二晩も三晩も泊つていらつしやりやしないでせうから大丈夫で御座いませう。今夜は私達もいよいよ宇治へ泊るんですのねえ。汽車の中で一晩、松絲で一晩、嵐山で一晩、それから昨夜が竹の家と、おや、もうそれでも東京を出てから今日で四晩になりますのねえ。私、何んだか、もう半月も前に東京を出て來たやうな氣が致しますわ。」

そんな話をしてゐるうちに、自動車は本街道から左へ折れて、まるで支那の風物を一つ處に集めたやうな黄檗の萬福寺の前へやつて來た。とみると、そこの寺門の前には既にフォードの自動車が三臺ほど停つてゐる。廣瀨は悠然と車から下りながら、

「やつぱり花時で、此處いらへも參詣人が澤山押懸けて來るんだねえ。」なぞと云つて、手を執らんばかりにしながら雪江を扶け下ろして、「ねえ、雪江さん。ずつとお寺へ上るかい。それとも喉が渇いてならんから、そこの茶店でシトロンでも飲んでいかうか。どうだい。」と、やさしくいふ。

雪江も何か飲みものが欲しくて耐らないのだ、すぐに贊成して、寺門の前の懸茶屋へ入つていつた。そして毛氈をかけた緣臺へ腰を下ろして、シトロンを飲んでゐると、その時、寺の境內では何事が起つたのか、突如にぱあんと恐ろしい物音がする。その物音が後の山間や樹立に谺して、四邊が森としてゐるだけに何んとも云へない物凄い感じを湧かせる。

廣瀨は飲みさした洋杯を脣から離して怪訝としてゐる雪江の顏をみながら、

「何んだらう。何んの音だらう。」と、訝しんだが、葭簀の陰に立つてゐた茶店の爺さんは笑つて、

「旦那はん。あれは何んでも御座りまへんで。今日はこのお寺の中で活動寫眞撮してゐますさかいに、又拳銃でも打つたんのツしやろ。」と、平氣な顏をしてゐる。

廣瀨はそつちを向いて、

「何、活動寫眞を撮つてゐるのかい。こんな處でね。」と、云つたが、爺さんは眼の前に並んでゐる三臺の自動車を指さして、

「この自動車も皆活動の人のでつせ。今日はもう朝早うにから來て、まだやつてますのどつせ。もう此頃は常時來ますのでなあ。」と、笑ふ。

廣瀨は喜んで、

「ふむ、活動を撮つてゐるとは面白いね。雪江さん。いゝ景物ぢやないか。いづれ日活とか、松竹とかいふんだらうが、うまい處へ來合はせたねえ。私は話にや聞いてゐるが、まだ撮影の本物は見たことがないんだよ。今日はまだ時間がたつぷり殘つてゐるから、ゆつくり見て行かうぢやないか。東京へ歸つてからいゝ話の

種になるよ。はゝゝゝ。」

雪江も此頃は活動寫眞に浮身を窶してゐるだけに、ひどく興味を覺えて、

「あの、それぢや何んで御座いませう、震災から此方何んでも日活の撮影所はすつかり京都の方へ移つたと聞いてゐますから、きつとその連中が撮つてゐるのかも知れませんわねえ。ねえ、お爺さん、舊劇を撮つてゐるの、それとも新派の方？」と訊く。

爺さんは何方だか分らないやうに、

「さあ、私、何方やよう知りまへんけど、何んでも皆支那人の服着てましてなあ。先刻にから、彼方へいたり、此方へいたりして、えらい騷ぎしてますがな。まあ、一遍みとおみやす。面白うおつせ。」

雪江は首を傾げて、

「支那の服を着てゐるんなら、きつと新派の方ですわねえ。ぢや松竹の方か知ら。」

廣瀬はもう立上りながら、

「成る程、雪江さんは此頃はキネマ・ファンだつたんだねえ。こりやお見外れした。そんなら役者の顏にもお馴染があるだらうから、大いにひとつその方面の知識を吹き込んで貰ふかなあ。はゝゝゝ。まあ、行かう。」と、云つて、彼はステッキだけ持つて、つかつか寺門の石段を上つてゆく。

雪江も笑ひながらその後を追つていつた。

寺門を入ると、支那流の鋪石をした彼方には古雅な禪堂が常磐樹の間に隱見してゐる。西へ沈みかけた太陽はその幹にあかあかと、陽炎を燃え立たせて、春ながら四邊には閑寂な風趣が溢れてゐる。

とみると、そこの廻廊のところには異樣な風體をした男達が、五六人、撮影機へしがみつくやうな恰好をして、熱心に撮影をやつてゐる。その向うでは、銀色をしたレフを彼方からも此方からも反射させてゐて、その明るい光の中で、今一人の支那人の處女に扮した美しい女優が馬賊のやうな恐ろしい扮装をした男優と對向ひに立つて、頻りにアクションを演つてゐる。女優の方は後向きになつてゐるので、顏はみえなかつたが、男優の方は髯だらけなその顏に浮んでゐる表情までよくみえるのであつた。

廣瀬と雪江は物見高な顏をしてそつちへ近寄つていつたが、雪江はふと廣瀬の手へ觸つて、

「ねえ、あなた。あれは井上ですわ。井上正夫ですわ。」と、もう息を彈ませながら囁く。

廣瀬も感心して、

「ほう。あれが有名な井上かね。それぢやこの一座は大したもんぢやないか。」

「え、きつと蒲田の連中がロケーションに來てゐるんですわね。こんな遠い處まで態々來て、ほんとに大變ですわねえ。」と、云ひながら雪江はいつかしら上の空になつて、そこいらに立つてゐる見物人や、俳優達や、技師達の顏を見廻してゐたが、その時、何うしたのか、彼女は、

「あらッ。」と、叫んで、思はずはたとそこへ足を止めてしまつた。

とみると、今迄向うむきになつてゐた女優が、男優に腕を鷲掴みにされたまゝ突如にぐるりと此方へ顏を向けてゐるのであつた。それは支那風な扮へをしてゐるので、顏容は變つてみえたが、併し紛ふ方もない住江千鶴子なのであつた。

雪江は餘りに意外な邂逅なので、はツと息がつまるやうな氣がした。

二十六

雪江は默つて立つてゐても、何んだか胸がぐんぐん突上げて來るやうな氣持がして來た。今にも此方から聲をかけようかと思つて、わくわくしながら機會を窺つてゐたが、併し住江千

鶴子の方では、もうアクションに一心を打込んでゐるので、此方を振返つても、まるで雪江の姿なぞは眼に入らないやうな様子であつた。彼女は演技に熱中してゐる餘りに、遠くからも見えるほど胸に波打たせて、せいせい力一杯に息をしてゐる。

廣瀬は、さも感じ入つたやうにその有様を眺めてゐたが、やがてそつと雪江の耳へ口を寄せて、

「ねえ、雪江さん、あの女優は何んといふ女優だね。馬鹿に色つぽい眼つきをしてゐるぢやないか。」と、囁く。

と、雪江は夢から覺めたやうな聲で、廣瀬の方を見上げながら、

「あれですか。あれはね、住江千鶴子といつて、今賣出しのスターですわ。」と、息がつまるやうに云つて、自分のことでも誇るやうに、

「あの、あの人ね、實は私よく知つてゐるんですのよ。私と學校が一緒だつたもんですから。」

と、云ふ。

廣瀬は一層好奇心が燃えて來たやうに、

「へえ、あんたと同窓の人かい。そりや愉快だねえ。それぢや相當に教養もある女優なんだねえ。」と、獨語のやうに云つて、

「併し活動女優にも、あんな綺麗な人がゐるのかねえ。いや、大分此頃世間では評判のやうだが、私は恥かしながら本物の活動女優を見るのは、今日が初めてなんだよ。碌でもない山出しばかりゐるのかと思つたら、實際中にはいゝのがゐるんだねえ。」と、いふ。

雪江はくすりと笑つて、

「あなた、もつと小さな聲で仰有いよ、人に聞えると可笑しいぢや御座いませんか。」と、たしなめるやうに云つて、「あの、千鶴子さんは、今日はあんなに厚化粧をしてゐるから何んですけど、でもそれにしたつて、素顔も隨分綺麗よ。活動女優だつて、そんなに馬鹿に遊ばすもんぢやありませんわ。」

「はゝゝゝゝ。いや、さう云ふ譯ぢやないが、私は活動女優つていふと何んだかどうも安つぽく感じられるんだよ。やつぱり遲れてゐるんだねえ。」と、廣瀬はさも愉快さうな顔で笑つて、「ねえ、雪江さん、あんたあの女優を知つてゐるんなら、あとで私に紹介してお呉れよ。私もあゝいふ人に接近してゐないと、時代から置いてきぼりを食つてしまふからね。」と、いふ。

彼方では、撮影がやつとひとくぎりついたと見えて、今迄レフの光の眞中に立つてゐた二人の俳優は何事か笑ひ興じながら、監督達のひと群の方へ歩み寄つていつた。井上正夫は監督を呼びかけて、低い地聲で何やら熱心に註文を出してゐたが、その間に住江千鶴子は頸筋に滲んだ汗を拭きながら、キャメラ・マンの傍へやつて來て、

「ねえ、水野さん、今日は時間がたかつたんで、私、氣持が惡くて仕様がないのよ。メーキアップがうまくいかなくて、何うでして。横を向いた時に、眼の下へ隈が出やしなくつて?」と、心配さうに訊く。

キャメラ・マンは煙草に火をつけながら、

「さうねえ。さう云へば、何んだか鼻のところが暗かつたなあ。併し大丈夫ですよ。今日はこのライトですもの。」と、云つたが、アッシスタントの一人は笑ひながら傍から口を出して、

「住江さん、御心配には及びませんよ。木村君ががうんと馬力をかけて、レフを當ててゐたから、あなたの眼のチャーミングなところは十分フヰルムが感じてますよ。はゝゝゝゝ。」

千鶴子は滴るやうな愛嬌を見せて、

「ほゝゝゝゝ。厭な松ちやんねえ。そんなことを云ふと、晩にあれを奢らないわよ。」さう云

ひながら、千鶴子はふつと軀を轉じて、見物人の方を見たが、その時、五間と距らないところに立つてゐる雪江の顔が期せずして彼女の眼に入つたとみえて、彼女はさも悸乎としたやうに、一度は眼を瞬きながら、雪江の方へ瞳を据ゑたが、その咄嗟、雪江はもう我慢がしてゐられなくなつて、思はず、二足三足つかつかッと千鶴子の方へ歩み寄つていきながら、

「千鶴子さん!」と、溢れ出るやうな聲で呼びかける。

その聲で、千鶴子もやつと雪江だと見極めがついたやうに、

「まあ、關口さん!」と、叫んで、彼女も此方へ走り寄つて來る。そしていきなり雪江の手を執りながら、心から嬉しさうに、

「まあ、關口さん。あんた何うしたの。どうしてこんな處へ被來つたの。隨分思ひがけないぢやありませんか。」と、さも意外さうに云ふ。

雪江は皆の見てゐる中なので、顔を眞紅にしながら、少し吃つて、

「千鶴子さん、あの、あの、私ね、一寸用があつて、あの、大阪まで來ましたのよ。それでね、序だと思つて、桃山の御陵へ參拜しましてね、これから宇治へ行からと思つて、實は一寸此處へ寄りましたの。ほんとに隨分珍らしい處でお目にかゝりましたのねえ。」と、息を彈ませながら云ふ。

千鶴子も押へ切れないやうに脣をむずむずさせて、

「あら、まあ、さう。大阪へ。私、そんなこと夢にも知りませんでしたわ。實に不思議ねえ。ほゝゝゝゝ。それで大阪へは、會社の方の御用?」

「え、さうなんですの。」と、雪江は先にさう云つて呉れたので、ほッとしたやうに合點いて、もう腹を極めながら、そつと傍に立つてゐる廣瀬の方へ流眄をくれて、「あの、實はね、私の會社の常務さんのお伴をして來ましたもんですから。」と、口籠る。彼女の顔には力めて平氣を裝つてゐるながら、いかにも切なさうな、惑亂がみえてゐた。

千鶴子はさう云はれて、初めて氣がついたやうにじろりと廣瀬の方を見たが、すぐに美しい笑顔になつて、彼にも愛想よく眼で會釋をする。廣瀬もその機を逸せずに、ひと足前へ進み出て、自分の方から、

「やあ、私は廣瀬です。初めてお目にかゝります。」と、にこにこしながら、自ら紹介する。

千鶴子はもう一度笑顔でじいッと廣瀬の顔をみて、いかにもソツのない態度で、

「私、住江千鶴子でございます。どうかよろしく。」と、云つて、コケティックな體のこなしをして、初對面の挨拶をする。

三人の間には、一寸の間、そぐはぬ沈默が流れたが、千鶴子はやがてそらさぬ顔で、

「ねえ。關口さん、それぢやあんた、今夜は宇治へお泊りなんですの。」と、訊く。

雪江もやつと落着きを取返して、手巾を口へ當てながら、

「え、あの、今夜はさうしようと思つてゐますの。あなた方は何時此方へ被來つたの?」

千鶴子は片手を腰へ廻して、

「私達はね。實はあの、今朝京都へ着いたんですの。昨夜の十時に皆一緒に横濱を立ちましてね、今朝の十一時に京都へ着くと、もうそのまゝ自動車の中でお辨當を食べるやうな騷ぎをしましてね、此處へ着くと、すぐに撮影を始めなけりやならないやうな始末なんでせう。もうそれこそ、とても忙しい思ひをしましたわ。ほゝゝゝほ。」と、半分は廣瀬の方へ笑つて見せる。

廣瀬もゆつたりと微笑んでみせた。彼の眼は、可憐な支那の少女に扮した千鶴子の姿から

寸時も離れなかつた。
雪江もにつこりして、
「隨分大變な仕事ですことねえ。それで、もう今日で撮影は濟んでしまふんですの。」と、訊く。
千鶴子は、まるでフヰルムの中の樣な態とらしい表情をして、
「いゝえ、どうして、何うして。まだ撮らなきやならない場面が九つも殘つてゐるんですもの。何うしたつて明日一杯はたつぷりかゝりますわ。」
「まあ、ぢや明日まで？　今夜は何方へお泊りになるの？」
「今夜？　今夜は何んでも此の先の木幡とかつていふ村へ泊るんだつていふんですけれど、私、村の宿屋なんか厭ですからねえ、いつそ京都へ行つて泊らうかと思つてゐるんですけど、あの私が朝寢坊だもんだから、監督さん達が中々許して呉れないんですの。ほんとに意地惡ばつかし揃つてゐるんでね。ほゝゝゝ。」と、笑談のやうに云ひながら、監督達の方を見る。
監督達も笑つてゐた。
廣瀨も笑つて、これ幸ひと云ひ度げに、
「いや、時間が生命の仕事だから、全く監督をなさる方も大抵ぢやありませんなあ。いつそ何うです、京都へ被往るおつもりなら、宇治へ被來つて下さらんですか。宇治なら自動車で十分もかゝらんのですもの、その方が何んなにいいか分らんですよ。私達は『花やしき』へ行くつもりにしてゐますから、御都合さへ好かつたら御一緒になつて、ひと晩ゆつくりお話でもしようぢやないですか。」と切り込んでゆく。
千鶴子も嬉しさうに笑つて辭儀をしながら、
「有難う。『花やしき』へ被往るのはお羨ましう御座いますわねえ。あすこはさぞよう御座いませうねえ。」
廣瀨は金口を一本取り出して、
「何うです。誘惑は感じませんか。はゝゝゝ。あなたが被來つて下さるんなら、私達も大いに御馳走をこしらへさせて歡迎しますよ。どうせあなた、木幡へお泊りになるのも、宇治へお泊りになるのも、道程に於いちや違はんのですもの。明日の朝何時に集合するといふ時間さへしつかり打合せをしてお置きになれば、いくらあなたが寢坊をなすつても私と關口さんで責任をもつてお起しして、自動車で此處までお送りしますから、大丈夫ですよ。さうなさい。さうなされば第一關口さんがどんなに嬉しがるか分らんですよ。ねえ、關口さん、私にばかり口をきかせないで、あんたもお勸めしたら何うです。」と、いふ。
雪江も無論さうし度い一心らしく、
「ほんとに、千鶴子さん、此方の方の御都合がよかつたら、さうなさいましよ。私、何んだか、もうお話し度いことが山程溜つてゐるやうな氣がするんですわ。それに旅先でかうしてお目にかかれるなんて、もう二度とないことなんですもの。是非來て下さいましな。いゝでせう。」と、いふ。
千鶴子は笑つて、
「あの、そりや私の方は何うにでもなるけど、でも、何んだか變ですわねえ。お邪魔になるやうで。」と、云つたが、雪江は眞氣になつて、又頰を紅くしながら、
「あら、千鶴子さん。そんな、そんなことありやしませんわ。厭な方ねえ。」と、云つて、ぢいッと見られるのを避けるやうにしながら、「ほんとに、そんなことを仰有らずに被來いましよ。折角いゝ機會なんですもの。こんなことはほんとに二度と再びありやしませんわ。」と、鼻聲になつて云ふ。
千鶴子は廣瀨の方へ笑顏をみせて、

「あの、お邪魔にさへならなけりや、私、願つてもないことなんですから、是非お伴をさせて頂きますわ。ねえ、關口さん、私もお話し度いことか澤山溜つてゐるのよ。宇治川の流れの音を聞きながらゆつくりお話をしたら、どんなにいゝ心持でせう。」と、上眼づかひをして子供のやうに足摺りをしながら、「ねえ、關口さん、ぢや私、もうお言葉に甘えて、今夜は御厄介になりますわ。一寸待つて頂戴。私、彼方へ行つて相談をして來ますから。」

千鶴子はさう云ひながら、そのまゝ監督達のかたまつてゐる方へ小走りに走つていつた。そこでは、煙草の煙がふはりふはりと皆の頭の上に這つて、西へ傾いた春の日は、長閑な光を斜めに投げてゐた。

廣瀨と雪江と顏を見合はせて、にいツと笑つたが、その眼は晴々として、いかにも愉快さうであつた。

二十七

少時すると、千鶴子は躍るやうな恰好をしながら、又雪江の傍へ歸つて、

「關口さん、やつとお許しが出ましたわ。私嬉しいわ。ほゝゝゝゝ。」と、笑つて、廣瀨の方へぴよつこり頭を下げてみせながら、「どうかそれぢやお邪魔でも、今夜ひと晩御厄介にならして下さいました。ほんとに初めてお目にかゝつたのに、不躾で御座いますけど、私はもうこんな、ちつとも構はない性分で御座いますから、どうかそのおつもりで。ほゝゝゝゝ。」

廣瀨も喜んで、

「いや、その方がどんなにいゝか分らんですよ。私も一向無遠慮な方でね。」と、云つて、雪江の方を向きながら、「ねえ、關口さん、それぢや何うしよう。私達は先へ行つてお待ち受けするか、それとも撮影が濟むまで待つてゐて、御一緒にお伴をしようか。」と、相談をかける。

千鶴子は雪江の肩へつと手を置いて、

「あら、どうせお伴をするんなら、御一緒に參りませうよ。私たつた一人で後から伺ふのは寂しう御座いますわ。もうあとたつた一場面撮れば、私だけは體があくんで御座いますもの。」と、云つて、くすりと噴笑しながら、「可笑しいんで御座いますのよ。今日撮影に使ふ孔雀をね、京都の岡崎の博物場へ借りに行つたんですの。ところがね、それが何うしても今日の間には合はないんで、監督さんがいくらやいやい云つても、今日はもう何うしたつて私の出場は後ひと場面しきや撮れないんですわ。ひと場面と云つても、ほんの十分ばかしですから、勝手を申して相濟みませんが、どうかお待ち遊ばして下さいましな。」と、首を傾げながらいふ。

廣瀨は一も二もなく合點いて、

「いや、一緒に行つて下さるんなら此上なしですから、十分か一時間でもお待ちしますよ。どうせ私達も撮影して被在るところを見學させて頂き度いんですから。はゝゝゝゝ。」と、云つて、悠々と煙草の煙を吐いてゐる。

さうしてゐるうちに、彼方では次の場面の撮影準備が出來たので、アッシスタントが千鶴子を呼びに來た。千鶴子はそゝくさ化粧を直しながら、キャメラの方へ身輕に歩いていつた。

今度は神堂の廻廊のところの場面で、井上の扮した馬賊の頭領のやうな男が、青龍刀を提げて、血走つた眼つきをしながら先づキャメラの前を掠めて通つてゆく。彼の熱の籠つた藝は殆んど神に入つてゐて、惡相を現はしたその顏には大きく瞬いた眼が爛々と焔のやうに輝いてみえ、手に握つた青龍刀は惡魔の牙のやうに恐ろしく生動してゐた。

廣瀨は固唾を呑んでみてゐたが、感に耐へないやうに、

「ねえ、雪江さん。かうなるともう舞臺の芝居をみてゐるよりも、遙かに緊張してゐるねえ。井上といふ役者は全く名人だね。それ、見給へ、あゝやつて歩いていく歩調までがもうそつくり支那人になりきつてゐるぢやない。うまいもんだなあ。」と、頻りに見惚れてゐる。

雪江も胸が躍るやうな心持で、一心になつて演技に見入つてゐた。

禪堂の內外はしいんとして、時々小鳥の囀る聲がぴよぴよと谺を呼ぶばかり、その靜けさの中にキャメラの把手を廻す音が異樣に斷續して、キャメラマンもアッシスタントももう息も吐けないやうに緊張しきつてゐた。そこへ今度は千鶴子の扮した支那の少女が大きな彩壺を肩にして、徐々と歩み出て來る。彼女ももうすつかりその境地の人となつてゐて、レフの光の交錯する中で、樣々な姿態をしながら、やがて十五分ほどでその場面の撮影を終つてしまつた。

撮影が終ると、彼女は兩手を擴げながら廻廊から駈け下りて來て、

「どうもお待たせ致しました。もうこれで濟みましたから、すぐにお伴を致しませう。」と、いふ。

そこへ衣裳の一人がやつて來て、

「ねえ、住江さん。あんた何うします。どうせ衣裳を換へて被在るんでせう。」と、云ふと、千鶴子は面倒臭さうに、

「私、もういゝわ。どうせ明日は朝早く此方へ來なけりやならないんだもの、可笑しいけど、このまゝ行くわ。私の着物や何か、皆、あんた預つといて頂戴。」と、云つて、廣瀨の方をみながら、「ねえ、貴方、こんな風姿をしていつても宜しう御座いませうか。もしお顏に拘るやうでしたら、着換へをしてまゐりますわ。」と、笑ひながらいふ。

廣瀨は却つて喜んで、

「はゝゝゝ。いゝですとも。その方が却つて面白いですよ。はゝゝゝゝ。」と、笑つて、「ねえ、雪江さん、『花やしき』で、何んと思ふだらう。扮へがうまいから、ほんたうの支那人と思ふかも知れんねえ。實に愉快だなあ。はゝゝ。」と、一人で悦に入つてゐる。

千鶴子も笑つてゐたが、やがて衣裳に賴んで、小さな手鞄と、手提袋を持つて來させ、それだけ持つて、監督に、

「ねえ、武田さん。ぢや私、今夜はお暇を頂きますわ。明日は七時までにきつと此方へ來てゐますから、どうか、よろしくね。」と、會釋をする。

鳥打帽を阿彌陀に被つた監督はマドロス・パイプを口に銜へながら、

「まあ行つて來給へ、その代り明日は何事があつても、七時迄には必ず來なけりや駄目だぜ。いゝかい。」

「それはもう大丈夫だよ。このお二方が責任を持つて下さるつて仰有るんですもの。ほゝゝゝほ。」と、云つて、雪江達の方へ眼配せしながら、歩き出さうとしたが、そこへのそりとやつて來た井上は、太い地聲で、

「やあ、住江さん。『花やしき』は羨ましいですなあ。明日お土産を澤山持つて來て下さい。」と、笑談のやうな眞面目なやうな調子で聲をかける。

千鶴子はにつこりして、

「先生。それにもう心得てますわよ。せめてお年相當なところで、お茶でも澤山買つて來て差上げますわ。樂しみにして待つて被在いましな。ほゝゝゝゝ。」と、彼女は笑ひ崩れながら、逃げるやうに走つてゆく。

廣瀨も、雪江も皆に會釋をして、そのまゝ千鶴子の後を追つていつた。

寺門まで出ると、廣瀨は待たせて置いた自動車のところへ歩いていつて、先づ自分が先へ乘

つた。千鶴子と、雪江は先を讓つてゐたが、千鶴子は笑つて、
「ぢや私、お先へ失禮するわ。御免遊ばせ。」と、云つて、身輕に乘つて、廣瀨の隣りへ腰を下ろしてしまふ。雪江は裾を氣にしながらその後から乘つて、一番端へ腰をかけた。
自動車はやがて茶屋の爺さんの聲に送られて動き出したが、千鶴子はまだ白粉の一杯ついてゐる手で、ついと雪江の手を握つて、
「でも、關口さん、ほんとにこんなところであんたにお目にかゝれようとは、意想外だつたわねえ。私いくら考へてみても不思議でならないわ。」と、しみじみ云ふ。
雪江も又新たな歡びを覺えてゐるやうに、
「ほんとにねえ。もし御陵からずつと宇治へ行つてしまつたら、とても逢へなかつたのねえ。今夜はほんとに私、嬉しいわ。」と、心から云つて、今度は握られた手を下から握り返す。
廣瀨はいつの間にか葉卷をくはへながら、默つてにこにこしてゐたが、自動車が動搖する度に支那服の滑らかな衣摺れの底から豐滿な千鶴子の腰のあたりの觸感が媚びるやうに迫つて來るので、それにばかり氣をとられてゐた。千鶴子が珍らしい異裝をしてゐるだけでも、彼の好奇心は十分に高潮されて來るのであつた。
自動車は又菜の花の咲き亂れた野路へ出て、淀川の眞緑な堤防を右に眺めながら宇治の方へ向けて駛つていつた。朝日山からずつと近江の方まで連亙してゐる山脈には薄紫の春霞が立ち罩めて、高い空では燕が二三羽礫のやうに斜めに舞ひ上つていつた。
四五十戸の村を過ぎるともう行手には宇治橋の橋欄が白々と見えて來た。

二十八

三人が浮舟の瀨の彼方にある瀟洒とした「花やしき」へ落着いたのは、もうそろそろ薄暮を催して來る頃ほひであつた。廣瀨は、此處へも度々新橋の伉者なぞを連れて遊びに來たことがあるので、仲居達の中にも顏見知りがあつて電話で前觸をして置かなかつたにも拘らず、「花やしき」では座敷の仕繕りをつけて、新建の二階座敷を明けて呉れた。
廣瀨はひどく喜んで、座敷へ入るとそのまゝ河添ひの窓を開けひろげながら、
「いや、この座敷を都合してくれたのは、何よりだねえ。姐さん、どうも有難いね。はゝゝゝはゝ。」と、頗る機嫌のいゝ調子で笑つて、「ねえ、雪江さん、そんなところにすツこんで居ないで、まあ、こゝへ來て御覽よ。こゝからみた宇治川の景色は又格別だからねえ。これならもう申分はないだらう。はゝゝゝゝ。」と、
雪江は、千鶴子と手を握り合つたまゝ廣瀨の傍へやつて來て、美しい黃昏の色に掩はれてゆく宇治の川瀨を差覗くやうに下瞰しながら、
「まあ、ほんとにいゝ景色で御座いますのねえ。先刻宇治橋のうへからみたのとはまるで違ひますのねえ。」と、又感激の聲をあげる。
廣瀨は態と二人の方へ寄り添ふやうにしながら、
「雪江さん。ほれ、彼處にみえるのがあれが朝日山さ。あの此方にあるのが温泉で、それからあのこんもりした森の中に有名な興聖寺といふお寺があるんだよ。」と、まるで自分の邸の庭園でも誇るやうに云つて、「何しろ、あれ、あんな急流なんだからねえ。あすこに下り船が一艘みえてゐるだらう。あれ、あれ、あんなすばらしい速力で下つていくんだもの、あれを見たつて、流れの早さが分るだらう。」と、頻りに指さしをしながら一人で饒舌つてゐる。
雪江の眼は、もう涙含ましいばかりの嬉しさに輝いてゐた。

女中達はその間にすつかり座敷の形をとゝのへて呉れたので廣瀬も窓に近いふつくらした座蒲團へどつかりと腰を据ゑながら、
「さ、皆さん、どうです、ひとつ坐つて呉れませんか。支那のお孃さんは、今日は御正客だから、どうか床の間の方へ坐つて貰ひませう。はゝゝゝ。」と、笑つて、「ねえ、姐さん、實に彼方の娘さんは綺麗だらう。殘念なことに、まだ日本語がちつともいけないんでねえ。何う云つて、おもてなしをしていゝか分らんが、まあ、何んとかして手眞似でいくんだねえ。はゝゝゝ。」と、千鶴子と、女中の方を交互にみながらいふ。
二人の女中は先刻から千鶴子の變つた姿ばかり見てゐたが、さう云はれると、茶を入れてゐた若い方の女中はにつこり微笑んで、
「まあ、阿呆らしい。そんなことお云ひやしたかて、私、ようよう知つてますわ。ほゝゝゝ。」
と、云つて、千鶴子の方をみる。
千鶴子は態と口をきかずに、座蒲團のうへへ横坐りに坐つて、支那人らしい恰好をつけてみせてゐた。
廣瀬は葉卷を取り出して、女中の方へ、
「ようよう知つてますつて、何を知つてゐるんだね。君は、この人に逢つたことがあるかね。」と、知らばつくれてみせたが、女中はいかにも物馴れた口振りで、
「いえ、あの、お目にかゝるのんは初めてどつけど、寫眞ではな、ようお目にかゝつてますわ。なあ、旦那はん、住江はんどつしやろ、違ひますか。」と、素破拔く。
廣瀬は腹を抱へて、
「はゝゝゝゝ。いや、どうも隱せんねえ。これ位有名な人になると、うつかり人も擔げんのだからねえ、いや、こりや大失敗だよ。はゝゝはゝゝ。」
千鶴子もぷッと噴笑して、
「あら、到頭見現はしになつちまひましたのねえ。やつぱり駄目ねえ。はゝゝゝゝ。」と、雪江の方へ得意さうな流眄をくれて、「でも、ねえ關口さん、私、此間濱松へロケーションに行つた時には、それこそうまく化けおほせたのよ。その時には伯爵令孃つていふ觸れ込みなんでせう。翌朝、メーキアップをして濱へ撮影に出る迄は宿屋の女中さん達がもうすつかりその氣になつてゐるんですもの。ほんとにいゝ氣持だつたわ。ほゝゝゝゝ。」
「はゝゝゝ。伯爵令孃とは罪が深いですねえ。そりや支那人より一層性が惡い。はゝゝゝ。」
と、廣瀬は面白さうに笑つて、熱い茶をぐッと一杯飲み干しながら、「それはさうと、住江さん、どうです、すぐにお風呂へお入んなすつたら。今日は一日働いたんで、汗になつてゐるでせう。それにいつ迄もそんな商賣の扮裝をしてゐるのは氣が利きませんから、さらりと白粉を落して、日本の人におなんなさい。さうして、何かうまいものを拵へて貰つて、ゆつくり飯にしようぢやありませんか。」と、いふ。
千鶴子はにつこりして、
「ほんとにねえ。關口さん、そいぢやさうさせて頂きませうか。」と、雪江の方へ云つて、何か思ひついたやうに、「でも、貴方、貴方が先へお入り遊ばさなけりや、私達困りますわ。殿方よりも先にお風呂を汚してしまつちや、申譯が御座いませんわ。」と、いふ。
廣瀬はそれを手で押へて、
「いや、そりや却つていかんですよ。どうも女の人はあとのお化粧が長いんで、その間、馬鹿な顔をしてぼんやり待つてゐるのは、實に辛いもんですからなあ。私なぞは度々の經驗で、もう懲りごりしてゐるんですよ。ですから、まあ、どうかお願ひですから、先へ入つて下さい。

ねえ、小江さん、あんたどうしたんだい、ぼんやりしてゐちや可かんぢやないか。」
雪江もさう云はれると、そはそは立上つて、
「ぢや、千鶴子さん、失禮してお先へ入らうぢやありませんか。廣瀨さんの仰有るやうに、私達はどうしたつて、殿方の倍は時間がかゝるんですからねえ。」と、微笑む。
千鶴子もさう云はれると、合點いて、
「そいぢやお先に頂戴しませう。貴方を一人置いてきぼりにして申譯も御座いませんけど、……」と、云つて、彼女はそのまゝ風呂の道具や化粧道具を持つた雪江と一緒に座敷を出ていつた。
庭下駄を突ッ懸けて、浴室へきてみると、女中が氣轉を利かして、家族風呂の方へ支度をして置いて呉れたので、二人は傍に氣がねをする要もなく、もう着物をぬいで、浴槽へつかるまで、しつきりなしに話しつゞけてゐた。
千鶴子はふつくりとした美しい腕を湯の中で揉みながら、
「でも、雪江さん、ほんとに隨分今日は嬉しかつたわねえ。私、こんな處で貴女にお目にかかれようとは夢にも思はなかつたわ。」と、にこにこ親しげに笑みかけながらいふ。
雪江も頻りにタオルで頸筋のところを洗ひながら、
「私だつて、さうですわ。やつぱり神樣のお引合せなんですわねえ。私、黃檗のお寺へ着いた時に、ほら、あの、門の前にお茶屋があるでせう、あそこのね、お爺さんがね、今日はお寺の内で撮影をやつてゐるつて云ふもんですから、初めのうちは、ひよつとしたら、日活の方の人かと思つたんですのよ。さうしたら、貴女、偶然にも貴女に逢つちまつたんですもの。ほんとに不思議ねえ。何う考へてみたつて、不思議だわ。」
「ほんとにねえ。でも私は商賣で來てゐるんですもの、何も何處へいつたつて、不思議なことはないけど、あなたがこんな處へひよつこり出て被來つたのが、何よりも變だわ。全く世の中つて可怪しなものねえ。」
雪江はさういふ千鶴子の顏をしげしげみながら、ふつと感傷的な調子になつて、
「でも、考へてみると、あんたなんかほんとにいゝわねえ。かうやつて、日本國中何處へでも來られるんだし、それに何處へいつたつて、あなたの名前は皆人が知つてゐるんですものねえ。こんな家の姐さん達だつて知つてゐるんですもの。」と、さも羨ましさうに云ふ。
と、千鶴子は無造作にぐるりと肩を廻して、湯をぢやぼぢやぼやりながら、
「駄目よ。どうせ虛名なんだもの。」と、云つて、急に氣を變へながら、「それよりもねえ、雪江さん、こんなことを露骨に伺つていゝか何うか、私知らないけど、一體あなた、あの廣瀨さんとたつた二人ッきりで、旅をして被在るの？」と、雪江の顏をぢッとみる。
雪江はどうせ一度は千鶴子がそれを訊くだらうと思つて、覺悟はしてゐたのだが、顏を見られると、さすがにかッとして、
「え。」と、答へながら、あらぬ方へ眼を逸らしてしまふ。

二十九

千鶴子はその眼を又ぢいッと見て、妙に微笑みながら、
「それで、いつ東京を發つて被來つたの。もうそれでも二三日は此地で遊んでゐるんでせう。」と、何も彼も見透かしてゐるやうに云ふ。
雪江はいくら隱したつて、どうせ一度は知れると思つたが、併し自分の口からいろいろ説明するだけの勇氣はないので、成る可く先の想像

に任せるやうに、
「え、あの、もう三日ばかり前に東京をたつて來ましたの。」と、言葉少なに答へる。
千鶴子は好奇心の燃えた顏になつて、
「まあ、やつぱりさうなんでせう。私の想像に大概當つたわねえ。ほゝゝゝゝ。それで、ずつと京都に被在つたの。」
「え、今日迄京都にゐて、すつかり見物をさせて頂きましたの。」
「まあ、そりやよかつたわねえ。ほんとにゆるゆる見物の出來る人が私、ほんとに羨ましいわ。あなた此地は初めて?」
「え、私は、あの、まるで旅へなんか出たことがないんですもの。今度はほんとに面白う御座いましたわ。」
千鶴子は何かぢいッと考へてゐたが、やがてぬうッと浴槽から上つて、
「あ、いゝ心持に溫まつたわ。さ、雪江さん、二人で洗ひッこをしませうよ。女學校にゐた時分に、ほら、日光へ修學旅行にいつたことがあつたでせう。あの時以來だわねえ。ほゝゝゝゝほ。」
雪江も艶やかに笑ひながら流しへ上つて來て、明るい電燈の光の下で、二人は互に笑ひさゞめきながら背中を流し合つた。
雪江は肉附のいゝ千鶴子の肩へ手を置きながら、
「まあ、あんた、ほんとに肉體美だわねえ。だからダンスをやつても、あんなに形がいゝんだわねえ。どうでせう、まるで西洋人のやうぢやないの。」
千鶴子は笑つて、後を振返りながら、
「あら、私、何んだか、擽つたいわよ。これが私の大事な資本なんだもの。だけどさういふあんただつて、隨分いゝ肉附ぢやないの。それに肌の白さッたら、何うでせう。ほんとに綺麗だわねえ。」と、云つて、「あの、でも、お互に學校にゐた時分には隨分貧弱な體をしてたわねえ。やつぱり榮養不良だつたんだわ。あんな、あんた、始終、豆とお香の物のお辨當ばかり食べてゐたんですものねえ。ほゝゝゝゝ。」と、快活に笑ふ。
雪江は石鹼の泡に塗れながら、せつせと千鶴子の背中を洗つてやつてゐたが、千鶴子はさも快ささうにうつとりして、
「全く昔のお友達つていゝものねえ。いつになつたつて遠慮はなし、かうやつて懸け隔てなしでつきあへるんですものねえ。」と云つて、何か胸の中で考へてゐることがあるやうに、「でもねえ、雪江さん、あの廣瀨さんて方もほんとによささうな方ぢやないの。粹で、捌けていらしつて、そのくせ、何處か深切なお心持が一寸見ても分るぢやないの。隨分お金も持つてらつしやるんでせうねえ。」
雪江も誘ひ出されて、
「え、何んでも私、よく知らないんですけど、私の會社の株なんかも隨分澤山持つて被在るんですつて。人の噂を聞くと、三百萬圓以上の財産をお持ちになつて被在るんださうですわ」
「まあ、三百萬圓? さうでせうねえ。一寸見ても何處かかうゆつたりして被在つて、お金持らしい風があるわねえ。それでゐて、厭に振らなくつて、ほんとに感じのいゝ方だわ。あんな方とたつた二人で旅をするなんて、あんたもほんとに幸福な人ねえ。」と、云つて、千鶴子はじろりと雪江の顏を覗き込んだが、雪江が照れて、何か辯解でもしさうにするのを、彼女は手で押へて、「雪江さん、もう何にも云はなくたつていゝわよ。私ね、もうちやんと察してるわ。そりや誰だつて今の人には祕密があるんだもの。いろんな意味で人生を享樂するのは若い女の

特權なんだわ。それにしたつて、廣瀨さんのやうな相手なら、もう申分はないぢやないの。聞いただけでも羨ましいわねえ。」と、妙にしみじみした調子でいふ。

雪江は恥かしい中にも、何かしら得意な心持も働いて、

「私なんか、どうせ日蔭者なんですもの、何うなつたつて構やしないと思つて私、實は今こんな生活をしてゐるんですけれど、でも、どうかあんた、此ればつかりは祕密にして置いて下さいな。私、實は母にも祕密にしてゐる位なんですもの。私は構はないけど、若し彼方に御迷惑でもかゝると、それこそ大變ですからねえ。」

千鶴子も合點いて、

「あら、そんなこと私、大丈夫よ。」と、云つて、考へながら、「あの、廣瀨さんには無論奧樣がおありなんでせう。」

「え。でもね、何んでも御病身なんですつて。だもんだから、新橋あたりぢや隨分眼に立つやうな遊びもなすつて居るらしいんですわ。」

「そりや、さうでせうともさ。お道樂をなさらない方ぢや、とてもあゝいふ調子は出ないわ。全く仰有ることが灰汁がぬけ過ぎてゐるものねえ。」

千鶴子はすつかり體を流してしまつたので、そのまゝ又浴槽の中へ入りながら、急に氣を變へて、窓の磨硝子を振仰ぎながら、

「あら、もうこんなに暗くなつちまつたのねえ。雪江さん、もうひと温まり温まつて、早く出ませうよ。でないと、廣瀨さんがたつたお一人で寂しがつて被在るわ。」

二人はやがて湯から上つて、隣りの化粧室で、一生懸命に氣を入れて化粧をしだした。

若い女同士のことゝて、こんなに打解けてはゐながらお互に胸の中では美しさを競ふ心もあつて、さ、もういゝ加減に切り上げよう、切り上げようと口では云ひ合つてゐながら、つい白粉刷毛を持つ手が手間取るのであつた。

千鶴子に着換へをもつて來なかつたので、宿の褞袍を借りて着た。そして雪江が又もとの着物を着ようとするのを押へながら、

「ねえ、雪江さん。あんたも褞袍におなんなさいよ。私一人ぢや恰好がつかないわ。」と、云つて、無理に彼女にも褞袍を着せ、着物は各自に始末をして、やがて廣瀨のゐる座敷へ歸つていつた。

廣瀨は別の浴場で風呂を使つたとみえ、これも褞袍に着換へて、もう女中に酌をさせながら酒を始めてゐた。二人が明るい電燈の光の中へ入つてゆくと、廣瀨はさも待ちかねてゐたやうに、

「やあ、綺麗になつて來ましたね。いや、これは素晴らしい。眩しいやうだね。はゝゝゝゝ。」と、云つて、二人を先刻の座蒲團へつかせ、「いや、成る程、こんなに綺麗になるんだから時間もかゝる筈だ。もう君、雪江さん、君達が湯へいつてゐる間に、そら見給へ、戸外はすつかり夜になつちまつたよ。はゝゝゝゝ。私は庭へ下りてみたり、何かしたが、とても待ち切れんので、到頭今しがたから飲み始めちまつたんだ。此處の家にはね、この通りすばらしいウヰスキイがあるんだよ。今夜は實に惠まれてゐるね。はゝゝゝゝ。」

千鶴子は紫檀の餉臺のうへに載せてあるウヰスキイの壜のペーパーを覗いてみながら、

「まあ、これはブラック・キングぢや御座いませんの。隨分ハイカラなお酒がありますのねえ。」と、云つたが、廣瀨は驚いたやうにその顏をみて、

「やあ、あなたはブラック・キングを知つてゐるんですか。こりや話せる。ぢや此方の方は飲けるんですね。」

「ほゝゝゝ。さう開き直つて仰有られると私、恥かしう御座いますけど、私は職業柄、相當に不良なんですのよ。お酒も頂きますし、實は煙草もなんですの。」
廣瀨は大仰な表情をして、
「やあ、そりやどうも失禮、失禮。それなら早く仰有りやいゝのに。」と、云つて、自分で立つていつて、トランクの中から、三種類ほど西洋煙草の箱を出して來て、それを千鶴子の前へ置きながら、「さあ、こんなのでよかつたら、いくらもありますから、どうか召喫つて下さい。それから姐さん、濟まんがねえ、もう一つウヰスキイの洋杯と平野水を持つて來て呉れんか、それから此方のお孃さんはビールでなけりや召飲らんのだから、そのビールを拔いて上げて呉れ。」と、女中の方へ命ずる。
もう一人の女中はその時、料理場から運んで來たくさぐさの皿を順序よく餉臺のうへへ並べだした。
三人はそれを機にちやんと餉臺の周圍へ行儀よく座に就いた。
千鶴子はやがて自分に注がれたウヰスキイを生のまゝで少しづつ飲みながら、
「ほんとにおいしいウヰスキイですことねえ。」
と、艶めかしく口を窄めてみせたが、廣瀨は滿足さうに、
「いや、このウヰスキイが生のまゝ飲めるやうぢや全く話せますよ。そこへいくと、雪江さんは、まだ駄目だねえ。この人はまだビール程度ですからねえ。はゝゝゝゝ。」
雪江は負けない氣になつて、
「あら、そんなに仰有るんなら、私だつて其方を頂きますわ。今夜は助太刀がゐますから私、心丈夫ですわ。ほゝゝゝゝ。いつもは私、あんまり醉ふと、あとで貴方がお困り遊ばすだらうと思つて、それで控へてゐましたんですもの。ねえ、千鶴子さん、今夜は二人して廣瀨さんを散々に醉はして上げようぢやないの。此方だつて、そんなにお強かあないんですもの、二人でかゝりや譯はないわ。ほゝゝゝゝ。」
廣瀨は腹を搖り上げて笑ひ崩れながら、
「いや、二人束で來たつて、私は一向驚かんよ。千鶴子さんのお手並はまだ知らんが、雪江さんなら大概程度が分つて居るからねえ。はゝゝは　さあ、そんな大きな口をきくんなら、私の洋杯を上げるから、これを受けてみたまへ。」と、云つて、彼は自分の洋杯を干して、それへなみなみとウヰスキイを注いで、雪江の前へ押し遣つた。
そこへ突然、帳場の方から別な女中がやつて來て、座敷の入口へ手を支へながら、
「あの、旦那はん、唯今大阪の清水はんちふお方からお電話がかゝつて參じましたが、旦那はん、お出やすか。」と、いふ。
廣瀨はそれを聞くと、ふつと笑ひ聲をとぎらせて、
「何んだ、大阪の清水から。ふむ、それは何うも不思議だねえ。私が此處に居ることが何うして分つたらう。」と、少し顏色を動かしながら云つたが、そのまゝ立つて、「まあ、いゝ。兎に角圖星をさゝれちや仕方がない。出てみよう。電話は何處だね。」と、云つて、ちらりと雪江と眼まぜをし合ひながら、座敷から出てゆく。
女中は、今此の下の卓上へ切りかへるからと云つて、大急ぎで階下へ下りていつたが、廣瀨もそのあとから重い足どりで下りていつた。

三十

千鶴子はそのあとを見送りながら、少し聲を潛めて、
「ねえ、雪江さん、何處からお電話なの。大阪の清水さんて、私、聞いたやうな名なんだけ

ど、……」と、云つたが、雪江もどうしたものか、當惑らしい顏をして、

「いゝえ、あの、清水さんていふのはね、私の方の會社の支店長なんですの。ほんとに何うして私達が此處へ來てゐることが分つたんでせうねえ。何んだか氣味が惡いわねえ。」

千鶴子は事もなげに笑つて、

「ほゝゝゝゝ。そんなことはよくあるものよ。此方ぢやひし隱しに隱してゐるつもりでも、往來なんかでぱつたり出會して、生憎此方がちつとも氣づかずに通り過ぎてしまふやうな場合がよくあるわ。全く惡いことは出來ないものねえ。ほゝゝゝゝ。」

雪江はもう自棄になつて、ウヰスキイをぐいと一どきに飮み干しながら、

「まあ、いゝわ。もし私が一緒だつていふことが知れたら、その時こそ、覺悟をきめて辭表を出してしまやあいゝんですもの。それでなくたつて私もう會社づとめなんかしみじみ厭だと思つてゐるんですわ。ねえ、千鶴子さん、もしさうなつたら、あんた、私をお弟子さんにして下さらない。私、もう何うかして、女優になり度くつて仕樣がないんですもの。」と、親身になつていふ。

千鶴子は笑つて、

「駄目よ。そんな詰らない野望を起しちや。それよりもこんな幸福があなたのものになつてゐるんだもの、やつぱり堅氣でやつてる方がいいわ。女優なんて、見懸けはいゝけど、全くつまらないものよ。」

さう云つてゐるところへ、廣瀨はふうふう息を吐きながら、階段を上つて來た。彼はもとの座へ歸ると、變に笑ひながら雪江の顏をみて、

「ねえ、雪江さん、身の一大事とこそはなりにけりだよ。全く油斷も、隙もならんねえ。」と、云つて、灰皿のうへへ置いていつた葉卷を取り上げる。

雪江は彼の方へ顏を寄せながら、

「まあ、何うしましたんですの。私心配ですわ。早くお話し遊ばしてよ。」と、甘えるやうに云つたが、廣瀨は頭をかいて、

「いや、それ程心配することでもないが、實はね、先刻それ、此方へ來がけに桃山の參道の下のところで、三臺ほど自動車がつながつて來るのに出會したらう。あいつに清水の奴が乘つて居つたのださうだよ。何んでも九州の方の客先を招待して、桃山へ參拜したとか云ふのでねえ。」

「まあ、あの自動車に？」と、雪江もさすがに顏色を變へたが、廣瀨は今度はコップへウヰスキイを注いで、

「全くうつかり落人は天下の公道は歩けんねえ。はゝゝゝ。まさか彼奴に踏捕まらうとは思はなかつたよ。」

雪江は眉を顰めて、

「ぢやあの、無論私がお伴をしてゐることも清水さんは御存じで被在るんでせうねえ。」

「うむ、どうもさうらしいんだよ。彼奴はあの通り皮肉な奴だから、お連樣もあるやうでなんて、氣味の惡い笑ひ方をして居つたが、併し兎に角彼奴に見附かつちや百年目さ。はゝゝは。」

雪江は手巾を取り出して、口のあたりを拭きながら、

「あの、それで何うなんですの、もう清水さんは大阪へお歸り遊ばして、彼地からお電話をかけて被在るんですの。」

「いや、彼奴は彼奴で、その客の伴をして、京都の松糸へ行つとるんださうだ。それで、多分あの自動車の方向では、今夜は宇治泊りで被在るだらうと思つたから、一寸電話で敬意を表したといふのさ。それに何んでも東京の店からも

私が大阪へ行つたといふ電報でも打つたとみえて、清水はもう今日にも來るかと思つて、毎日毎日待つて居つたんださうだ。大分重大な要件も溜つて居るらしいんでねえ。」と、云つて、ぐうツとウヰスキイを呷りながら、
「それに、彼奴は實に云ふことがエライぢやないか。もし御用の御都合で、大阪へお越しがないやうでしたら、明日一寸歸りにお立寄りいたしませうかと來たね。はゝゝゝゝ。ほんとに仕樣のない奴だ。」
「あら、此處へ被來つちや厭ですわねえ。私何うしませう。」
「だからさ、私は仕方がないから、明日大阪へいくことにしたんだ。何あに四五時間ありや行つて來れるから、その間、あんたは此處で待つて居つて呉れるんだねえ。まあ、何かのことは明日考へよう。こんな詰らんことで座興を殺がれちや大變だから、もうその話はよさうぢやないか。ねえ、千鶴子さん。どうもあんたを抛つて置いて、濟みません。さ、今夜は大いに飲んで、面白く遊ばうぢやないですか。それでなけりや折角、あなたを御招待した意味がなくなつてしまひますからねえ。はゝゝゝゝ。」
千鶴子も笑つて、
「ほゝゝゝゝ。全く好事魔多しですわねえ。あんまりお二人でいゝことばかりなすつて被在るから罰が當つたんですわ。いゝ氣味。」と、云つて、西洋煙草の烟をふうツと吹き出しながら、
「ねえ、雪江さん、そんなに悄氣るもんぢやないわ。あんた、わたしと廣瀬さんがついてゐて下さるんぢやありませんか。あとはいゝやうにして下さるに極つてるから、もうお任せしてお置きなさいましよ。ほゝゝゝゝ。」
廣瀬も雪江の方を向いて、
「ほんとですとも。雪江さん、そんなに考へ込む程の問題でもないさ。それよりも何うだい、先刻の元氣でもう一杯ぐツとやり給へ。」と、云つて、又なみなみと酌をしてやる。
雪江も力めて氣を浮かせて、
「私、何にも考へてゐやしませんわ。何しろ、お風呂から上つて直ぐでせう。何んだかたつた一杯のウヰスキイが體中へ廻つて、もうぼうツとしてしまつてゐるんですの。」と、云つて、彼女は注がれたウヰスキイを又勢よく飲み干してしまつた。
廣瀬は千鶴子の方をみて、
「いや、それにしてもあんたは中々豪の者ですなあ、ちつとも顔へも出てゐやしないぢやありませんか。さう云ふ私ももう何んだか少しばかりいゝ氣持になつて來たが、こりやひよつとしたら兜をぬぐやうなことになりやしないかな。はゝゝゝゝ。」
千鶴子は平氣な顔で、
「あら、今頃から、そんな意氣地のないことを仰有り出しちや駄目ぢやありませんか。私口幅つたいことを申すやうですけれど、こんないゝウヰスキイなら、大概なところまではお相手が出來ますわ。ほゝゝゝゝ。」
雪江は横から口を出して、
「ねえ、千鶴子さん、あんた一體いつ頃からそんなにお酒を召喫るやうになつたんですの。」と、云つたが、千鶴子は一寸眼を落して、
「さうねえ、いつ頃からだらう。蒲田へ來たのが、丁度今から三年前だから、もう彼此五年位にはなるわねえ。私、横濱にゐる時分にお酒を飲むことを覺えたんですわ。」
廣瀬は合點いて、
「ふむ、横濱でね。横濱ではあなた何をしてゐられたんですか。」
千鶴子は惑はすやうな媚態をみせて、
「あら、そんなことをお訊き遊ばすもんぢやありませんわ。今夜は私の古傷をさぐるやうなこ

とはなさらないでね。折角私いゝ氣持にならして頂いてゐるんですもの。」

「いや、あなたのことだから、さぞいろんなロマンスがあつたんでせうなあ。是非伺ひ度いもんだが。はゝゝゝゝ。」

「そりやあなた、どうせこんな思ひ切つた境遇へ落ちた私ですもの、今迄にはいろんな世界もみて來ましたわ。でもね、私はこんな女ですけれど、隨分涙の多い生涯も送つて來ましたんですのよ。見懸けはこの通りはしやぎやですけれど、矢張り心は弱い女なんですのねえ。ほゝほゝゝ。いづれ又今度お目にかゝつた時に、ゆつくり身のうへ話を致しますわ。ほゝゝゝ。」と、笑つて、雪江の方をみながら、「あら、雪江さん、あんた、何うしたの、何んだつて涙なんか零してゐるの。可笑しな人ねえ。ほゝゝゝゝほ。」と、さも可笑しさうに笑ふ。

とみると、雪江はどうしたのか、雙眼に溢れる程、涙を湛へて、ぢいツと卓の隅のところを見詰めてゐるのであつた。

三十一

雪江はさう云はれると、もう耐らなくなつたやうに、手巾を眼に押し當てて、しくりしくり歔り上げて泣き出してしまつたが、廣瀨もあんまり突如なので、驚いて、

「おい、おい、雪江さん、何うしたんだい。ほんとに可笑しな人だねえ。何が悲しいんだらう。譯が分らんねえ。」と、云つて、彼女の肩へ手をかけたが、雪江はその手へしつかりと縋りついて、

「ねえ、貴方、御免遊ばせ。私、私、急に何んだか泣き度くなつて、……」と、呟いたが、廣瀨はやさしく愛撫するやうに、

「まあ、いゝ。そんなあんた、折角の晩に、涙なんか見せちやいかんよ、一體何うしたといふんだい。何か氣に障つたことでもあるのかい。」と、訊いたが、雪江は頭を振つて、

「いゝえ、いゝえ、私、さうぢやないんですの。私、何にも譯があるんぢやないんですけれど、あの、何んだか急に胸が一杯になつて來たんですわ。私、自分でも分らないんですわ。」と、やつと涙を拭いて、「ねえ、千鶴子さん、御免なさい。私、決して、あの、何んでもないんですから、どうか氣を惡くなさらないでね。」と、詫びるやうに云ふ。

千鶴子は笑つて、

「あら、私、それ位なことで氣なんか惡くしやしないわ。それよりもあんた、ほんとに何うかなしてゐるのねえ。もつとお酒を飲んだら何う。さうすりや氣が紛れていゝかも知れないわ。そりや私達にしたつて、ふつとそんな氣になることがあるけど、あんたのは隨分發作的なのねえ。ほゝゝゝゝ。」

廣瀨もやつと安心して、

「いや、雪江さん、又あんたヒステリーを始めたんだね。きつとさうだよ。もうそろそろ旅疲れが出る頃だから、例のヒステリーさ。どうかお願ひだから、あんまり私に心配させないでお呉れよ。」と、云つて、彼は握られた手をそつと離して、「さあ、もう詰らないことは考へずに、もう一杯ぐうツと空けるがいゝ。さ、私がお酌をして上げるから。」と、云つて、又酌をしてやる。

雪江は素直に涙を拭いて、又洋杯を取り上げた。泣いたあとの、寂しい顏が又なく美しくみえるのであつた。

千鶴子も少しづつ酔ひが廻つて來たとみえ、ほツと溜息を吐いて、

「あゝ、私、何んだか、急に寂しくなつて來ましたわ。こんなに深切にして下さる方が、もし私にたつた一人でもあつたら、私どんなに嬉し

いでせう。」と、云つて、兩肱を餉臺へ凭せかけながら、ぢいツと廣瀬の方をみる。
廣瀬は頭を掻いて、
「いや、どうも相濟みません。眼に餘つたら堪忍して下さい。はゝゝゝゝ。」と、大きく笑つて、「さういふあなたなんぞは、もう男なんかにや厭き倦きしてゐるんでせう。そんなことを云つて、變に初心なものを揶揄ふのは罪ですよ。はゝゝゝゝ。」
千鶴子はつと顏を上げて、
「あら、隨分なことを仰有るわねえ。何うして世間の方は、私達をさういふ風に解釋して被在るんでせうねえ。活動女優なんていふとさもさも身持の惡い、碌でなしのやうに思つて被在るやうですけど、皆が皆さうぢやありませんわ。そりやキャメラの前ぢやどんな思ひ切つた場面も演じますけど、それだけに却つて純な處もあると思ふんですわ。私、一概に活動女優、活動女優つて云はれるのが、ほんとに厭なんですの。」
廣瀬は又頭を掻いて、
「おや、おや、又失敗りましたねえ。氣に障つたら、許して下さい。はゝゝゝゝ。私はさういふ意味で云つたんぢやないんですよ。あなた方の周圍には、好い意味でも、惡い意味でも、澤山にして見れる男が雲霞のやうに集まつて來るだらうとかういふやうな意味で云つたんです。どうか誤解しないで下さい。」
千鶴子は急に可笑しさうに笑ひ出して、
「ほゝゝゝゝ。そんなに正面から辯解遊ばさなくつてもよう御座いますわよ。どうせ私達は始終そんなことばかり云はれつけてゐるんですもの。ほゝゝゝゝ。」と、云つて、又洋杯を取り上げながら、「でも、それにしたつて、私達の周圍へ集まつて來る男なんて、皆駄目ですわ。それこそ一顧の價値もないと、云つてよう御座いますわね。だからつい今のやうな場面を拜見させられると、私、氣が鬱いで來ますの。これは正直な話ですわ。」と、云つて、雪江の方へ美しい瞳を投げながら、「ねえ、雪江さん、私とあんたとはもうどんな遠慮のない口でも利ける間柄なんですから、私、云ひますけど、どうか今夜だけは勘辨して頂戴よ。こんな處へ連れて來て頂いたんですもの、いくら私だつて、センチメンタルになるわ。そこへもつて來て、今のやうな結構なところを見せつけられちや、私、ほんとに寂しくなつちまふんだもの。私は今夜たつた一人で寢なけりやならない體なんですからね、少しは察しるもんだわ。ほゝ。」
雪江もうすく笑つて、
「厭な千鶴子さんねえ。」と、口の中で云つたが、急に燥ぎ出して、「ねえ、千鶴子さん、それよりもあんた、何か面白い話をして下さらない。何んかかう涙の出るやうな戀の話をさ。」――さういふ彼女は少しづつ舌が縺れて來た。
廣瀬は笑ひ出して、
「はゝゝゝゝ。そろそろ面白くなつて來たね。どうも雪江さん、あんたは隨分と面白くないよ。さうだ、さうだ、その意氣で千鶴子さんに取組んでいくんだ。何うしたつて、今夜は千鶴子さんの素晴らしいラブ・ストーリーでも伺はなけりや、とてもこの情景としつくりしないねえ。」
千鶴子は媚びるやうに笑つて、
「どうせさうでせうよ。あなた方はもう戀の旅に疲れて被在るんですから、生半可なことぢや刺戟をお感じにならないんですのねえ。私にはようくそのお氣持が分りますわ。私こそほんとにいゝツマねえ。ほゝゝゝゝ。」と、口では笑つてゐながら、彼女は一寸寂しさうな眼色をして、「あれ、あの音は何んでせう。あふぐわう

ッていふ音は？」と、眼を据ゑる。
廣瀬は戸外を見遣つて、
「今氣がついたんですか。あれは瀬の音ですよ。流れが強いんで、夜が更けて來ると、漸次あの音が耳について來るんですよ。」
「まあ、あれが流れの音なんですか。ほんとにさう思ふとよう御座いますわねえ。」と、云つて、千鶴子も窓の腰硝子から戸外を覗いてみながら、「お、眞闇だ。向う岸の灯がぽつりぽつりと瞬いて、實によう御座いますのねえ。こんな晩にあの中流のところへ船を出して、戀人と一緒に體をしつかり結へて、あの眞闇な川の中へ飛び込んだら、どんなでせう。しつかりと抱き合つて、あの早い瀬に揉まれながら流されていく心持つたら、どんなでせう。」
廣瀬は笑つて、
「宇治川心中ですか。名前だけは綺麗だが、あの水勢に揉まれたらとても十分とは生きちやゐられんでせうなあ。はゝゝゝゝ。」
千鶴子は體をぞくぞく揉みながら、「でも死んぢまつちや詰りませんわねえ。私、水へ入る刹那の感じがさぞよからうと思ふんですわ。死を賭けた心持つていふものは、かうやつて想像してみても、胸がぎうッと引緊まるやうですわねえ。」と、彼女は暗い戸外を飽かず眺め入りながら獨語のやうにいふ。
その時、卓袱臺の下では白い手が伸びて、廣瀬の手を血の出る程ぎうッと握りしめた。それは雪江の手で、彼女は千鶴子に氣取られないやうに少し廣瀬の方へ體を摺り寄せながら、彼の顏をぢいッと見たのであつた。廣瀬はちらッとその眼を見返したが、につこりして、そのまゝ何喰はぬ顏で、又コップを取り上げた。その時、千鶴子は何うしたのか、すぐ下の往來の方へ眼をやつて、
「あら、自動車が來ましたわ。又お客樣か知ら。」と、呟いたが、やがて、「雪江さん、何んだか變よ。今自動車から下りた人は看護婦を連れてゐるの。白い服を着てゐたから、確かにありや看護婦よ。」と、初めて此方を振返る。雪江も窓際へ寄つて、
「まあ、看護婦を連れたお客なんて變ねえ。何うしたんでせう。此處の家に病人でもあるのか知ら。」と、小首を傾げる。
廣瀬は笑つて、
「まあ、そんなものはどうでもいゝ。それよりも、何うです、千鶴子さん、もう一杯注ぎませうか。どうもあなたは實に強いですなあ。さすがの私もこれぢや太刀打ちが出來さうもないなあ。」と云つて、彼女の洋杯へ又酒を注いでやつたが、千鶴子はそのまゝ自分の座蒲團のうへへ歸つて、
「いゝえ、もう私も何んだかふらふらして來ましたわよ。お酒つてほんとに氣持のもんですわねえ。まあ雪江さん、あんたは蒼くなつて來たのねえ。ほゝゝゝゝ。面白いわねえ。もう廣瀬さんのお顏が二つにみえやしなくつて。」
さう云つてゐるところへ、仲居の一人が樣子をみに上つて來た。千鶴子はそれをみると、氣懸りになつてゐるやうに、
「ねえ、姐さん、今被來つたお客樣は、何んだか看護婦さんを連れて被來つたやうぢやないの。さうぢやないんですか。」と訊く。
仲居は笑つて、
「まあ、あんたはんお見やしたのすか。あれはな、お客さんと違ひます。京都の病院からお醫者はんが來とおくれやしたんどす。」
「え、お醫者樣？ 何うしたんですの。此方には誰か、御病人でもあるんですか。」
「へ、この奥のお座敷に滯在してやすお方はんが、今急にお惡うなりましたんで、京都へ電話かけましてな、先生に來て頂きましたんどす。」

やつぱり東京のお方はんで、奥様がお惡うおすのでなあ。」

「東京の方? まあ、そりやお氣の毒ですのねえ。旅先で病氣になる程心細いことはないのねえ。」と、云つて、千鶴子は思ひ遣りが深さうに眉を顰めたが、やがて又洋杯を取り上げて、一雪江さん、この洋杯を廣瀬さんに差上げてもよくつて? あら、何うしたのさ。あんた、又始めるの。私、眠あね。ほゝゝゝゝ。」

雪江はもうどろんとした眼つきをして、いつの間にか、廣瀬の肩へぐつたりとしなだれかゝつてゐた。彼女はもう一人で坐つてゐられない程醉つてゐるのであつた。

三十二

それから少時すると、雪江はもうとても起きてゐられさうもないので、廣瀬も困つて、女中を呼んで隣りの座敷へ臥床をとらせた。それでも雪江は廻らぬ舌で、

一ねえ、貴方。私、こゝへ寢るの。こゝへ寢るの。」と、云つて、どうしても隣りへ行かうとは云はない。

廣瀬はそれを宥めるやうに、

「おい、雪江さん。君、此處へ寐ちやつちや駄目だよ。旅先で風邪でもひいたら大變ぢやないか。さ、そんなお駄々をこねずに、向うへ行つてお寐。」と、やさしくいふ。

それでも雪江は眼を据ゑて、子供のやうにじぶくつてゐたが、さうかうしてゐるうちにもうぐらりと横へ引繰返つて、髪も何も滅茶々々にしながら、しどけない様子で寐てしまふ。

廣瀬はその腋の下へ手を入れて、引起さうとしたが、彼も醉つてゐるので、一手に力が入らない。それに雪江がそろそろ吃逆をしだしたので、仲居達は無理をして、もし嘔しでもすると可けないからと云つて、到頭そこへ臥床を運んで來て、やつとその中へ寢せた。せめて帶だけでもとつてやらなければ苦しからうといふので、廣瀬は自分も手傳つて雪江の帶をといてやり、漸く長襦袢一枚にして仰向けに寢せてやつた。雪江は唯うんうん呻るばかりで、もう前後正體もなくなつてゐた。

その騒ぎが濟むと、千鶴子は又もとの席へ歸つて、

一ねえ、貴方、雪江さんは隨分醉つてますのね。いつもこんなですの。」と、稍呆れてゐるやうにいふ。

廣瀬も自分の座蒲團へ歸りながら、ゲラゲラ笑つて、

一いや、こんなに醉つたことは初めてですよ。又今夜は自棄に飮みましたからね。いつもは大概ビールを飮るのに、今夜はウヰスキイを洋杯でやつたんですもの。醉ふ方が當然ですよ。はゝゝゝゝ。」

千鶴子もふうツと息を吐いて、

一でも雪江さんも變りましたわねえ。學校にゐる時分には、隨分温和しい人だつたけど、やつぱり世の中がからしてしまつたんですわねえ。第一、廣瀬さん、あなたのお仕込みがいゝからですわ。あなたのやうな方にかゝつちや女は耐りませんわねえ。私、さう思ひますわ。」

「はゝゝゝゝ。こりや驚いたねえ。どうもさう惡黨扱ひをされちや、困るなあ。私はあんた方からみりやずつと善良ですよ。」

「あら、ほゝゝゝゝ。さういふ意味で申してるんぢや御座いませんわ。あなたはもう隨分お道樂もなすつて、御修行が積んでゐるから、あなたのやうな方とおつきあひしてゐる女はさぞ幸福だらうと思ひますわ。何から何迄お氣がついて、それこそ痒いところへ手が屆くやうで、さぞ私、樂だらうと思ひますわ。私、何んだか雪江さんが羨ましくつて仕様がないんですの。」

廣瀬はさういふ千鶴子の顔をぢつとみなが
ら、

「はゝゝゝ。おいでなすつたね。その手にう
かと乘ると、後が恐いですからね。さすが仲江
千鶴子さんだ。」「でも芸者なんかの手練手管と
はものが違ひますね。まあ、どうかお手柔らか
に願ひませうか。私は到つて初心なんですから
ね。はゝゝゝゝ。」

「ほゝゝゝゝ。厭な方ねえ。何か申上げると、
直ぐに茶羅ッぽこを云つて、うまく逸らしてお
しまひなさるんですもの。私、もう憎らしい
わ。」と、云つて、又洋杯を取り上げながら、「あ
あ、私もうすつかり酔つちまひましたわ。何
んだか、家が廻るやうな氣がしますわ。ほゝ
ほゝ。でも、誰か一人先に酔つてしまふと、あと
の者は割りに酔はないもんですわねえ。」

廣瀬は殘り少なになつたウヰスキイの壜を透
かしてみながら、

「いや、私は酔つたですよ。この壜の色が青く
みえるですもの。はゝゝゝ。」と云つて、又壜
を取り上げて、自分の洋杯へ酒を注ぎながら、
「もう大分心細くなつてしまひましたね。これ
で二本目ですよ。よく飲んだもんですな。」

千鶴子は憖と廣瀬の方へ顔を寄せて、色めか
しく肩をくなくなさせながら、

「まあ、もう二本なんですの。驚きましたわね。
私、何んだか寂しくなつちまひましたわ。」と、云
つて、ふつと眼を据ゑて、「あら、ねえ、あなた、
何處かで鐘が鳴つてゐるぢや御座いませんか。
寂しい鐘の音ですことねえ。」

廣瀬もさう云はれて、初めて耳を澄ましたが、
成程丁度その時、河向うの興聖寺では、夜更
けの鐘がごうーんと餘韻をひきながら、遠く聞
えてゐる。その鐘の音は河を渡つて來るので、
何んとも云へない夜の寂寥を響かせて來るので
あつた。

廣瀬もしんみりして、

「千鶴子さん。あれは興聖寺の鐘ですよ。實
にいゝねえ。あの鐘の音がどんなにこの宇治の
夜に情味を添へるか分らんですよ。」と、云つた
が、千鶴子はその顔を上眼でみて、

「ほんとにねえ。でも一人ものには耐らなく寂
しう御座いますわ。あゝ、もうそんなことを考
へるだけでも、私、厭になつちまひますわ。ね
え、あなた、私、此處にゐちや、お邪魔でせうか
ら、そろそろ別のお座敷へいつて寝ますわ。犬
にでも食はれると、恐う御座いますからね。」と、
云つて、やつと姿勢を正す。

廣瀬は思はず手を伸べて、その肩をぽんと叩
きながら、

「はゝゝゝ。千鶴子さん、そんな嫌味を云ふ
のはおよしなさいよ。雪江さんとは今日や昨日
出來た仲ぢやなしさ。そんなんぢやありません
よ。まあ、お氣に入つたら、もう少し起きてゐ
て下さい。私だつて今一人ぽつちにされちまつ
ちや寂しいからねえ。若し何んなら、夜明けま
で語り明かしてもいゝですよ。こんなところで
あなたにお目にかゝれるのは、或は一生に一度
しかないことかも知れないからね。」

千鶴子も眼を落して、

「ほんとにねえ。全く御縁ていふものは妙な
ものですのねえ。思ひもかけない方とふつとし
たことでおつきあひになれるんですものねえ。
私、それを考へると、全く世の中つて妙なも
のだと思ひますわ。」と、云つて、雪江の寝顔を
じろじろ覗きながら、聲を潜めて、「ねえ、廣瀬
様、どうかこれを御縁に、これからは私ともつ
きあつて下さいませんこと。私のやうな職業を
して居りますと、何かにつけて後援して下さる
方がないと、正直なところやつて行けないんで
すもの。私もさうなつたら、ほんとに雪江さ
んを御恩に被ますわ。」

廣瀬はにやりとして、

「いや、千鶴子さん、今更になつて、そんなことを云はなくつたつていゝぢやないですか。あんたが云はなくたつて、私の方から煩い程押懸けていきますよ。何んなりとかうして呉れと云つて下されば、私で出來ることなら何んでもして上げようぢやありませんか。だから、もう遠慮をしずに、何んでも私にさう云つて下さい。私は、口幅つたいことを云ふやうだが、相當な程度までは必ずあなたのお力になれると思つてゐるんですよ。あんたのやうな御職業の人の生活こそ私、よくは知らんが、併しこれでも藝者づきあひならずゐぶん長年やつてゐますからね。はゝゝゝゝ。」と、大きく笑ふ。

千鶴子は露骨な媚態をみせて、

「ほんとに有難う御座いますわ。あなたのお口からそんな深切なお言葉を頂戴しますともう私、百萬の味方を得たより、もつと力強い氣が致しますわ。別にこれと云つて御迷惑のかゝるやうなことは決して私、致さないつもりですけれど、……」

「はゝゝゝゝ、いや、ちつとやそつとの迷惑位かけたつて、私はびくともしやせんですよ。あんたがかける位の迷惑なら、私には何んでもないかも知れんからね。はゝゝゝゝ。」と、云つて、彼はそろそろ立上つて、「どれ、千鶴子さん、一寸私、失禮して御手洗へいつて來ます。いや、これは可かん。自分ながらしつかりしてゐるつもりでも、これは可かんなあ。脚がふら／＼して、何んだか頼りないですよ。はゝゝゝゝ。」と、笑ふ。彼は立つには立つたものゝ、ふらふら足許が定まらないのであつた。

それをみると千鶴子は自分も立つて、

「あら、危う御座いますわ。私、お伴して參りませう。階段が危う御座いますから。」と、云つて、彼女は廣瀬のあとからついていつたが、醉ふ程醉つてはゐても、千鶴子の方がよつぽどしつかりしてゐた。

二人は出たあとの座敷をしめて、そのまゝ寢室の方へいつたが、そこで千鶴子は廣瀬に肩でも貸してやつたらしく、

「まあ、隨分お醉ひになりましたのね。しつかり遊ばして下さいまし。あれ、危い。」なぞと云ひながらくすくす笑ふのが、廊下の方から洩れ聞えて來た。

三十三

その翌朝、雪江が眼を覺ましたのは、もう八時過ぎであつた。ふつと枕から頭を上げてみると、隣りの寢床には、廣瀬がぐうぐう鼾聲をたてて、前後も知らずに寢こけてゐる。よくみると、彼はよく／＼醉つたものとみえ、夜具を倒樣に着て、寢てゐるのであつた。

雪江はまだ醉ひが頭に殘つてゐるので、枕から顏をもたげると、何かしら頭腦がぐらぐらツとして、胸がむうつと突上げて來る。苦い水が喉一杯に溜つてゐるやうで、息が苦しくて耐らないのを、彼女はやつと我慢してゐたが、そのうちに身も心も滅入つていくやうな果敢ない氣がして、もう泣き度い程辛くなつて來たので、仕方なしに廣瀬の方へ、そつと上半身を寄せていつて、彼を呼び起した。

と、廣瀬も熟睡してゐるので、中々眼を覺まさなかつたが、やがてやつとむくむく寢返りを打つて、そこいら中をぼりぼり掻きながら、

「うむ、やあ、雪江さん、もう起きてゐるのかい。昨夜は君も隨分ひどく醉つて居つたね。今朝はどうだい。氣分はいゝかい。」と、やさしく云ふ。

雪江は濁んだ眼を力なく瞬いて、

「ほんとに昨夜は御心配をかけて、私、濟みません。あんなに醉つたのは生れて初めてですわ。

さぞ心配をなすつたでせうねえ。」と、云つて、そろそろ起き上りながら、「私、何んだか、また胸が苦しくつて、氣持が悪くつて耐らないんですのよ。何うしたらいゝだらう。」と、胸を押へながら呟く。

廣瀬は大きな欠伸をして、

「いや、さうだらうとも。あれ位飲みや素人は宿醉をするよ。私の鞄の中に、重曹の錠剤があるから、あれでも飲んだら何うだい。さうしたら、いくらか胸がすつとして、氣持が癒るかも知れない。」と、いふ。

雪江はもう氣持さへよくなればと思つて、そつと臥床からぬけ出て、廣瀬の鞄の中から藥品のサックを出して來た。そしてその中から重曹の錠剤を出して、枕許に置いてある水でぐつと飲んだが、冷えきつた水が舌をさすやうで、それだけでも塞がつてゐた胸が開いてきた。彼女は洋杯で三杯ほどたてつゞけに呷つた。

廣瀬はそれをみながら、笑つて、

「雪江さん、それが君、下戸の知らない醍醐の水だよ。うまいだらう。はゝゝゝ。」と、云つたが、雪江も幾分氣持が直つたので、伊達卷をしめ直して、

「ねえ、貴方、それはさうと、千鶴子さんは何うしましたの。何處のお座敷で寝てゐますの。」と、心配さうに訊く。

廣瀬はごろりと仰向けになつて、枕許の煙草を取りながら、

「千鶴子さんか。千鶴子さんは階下の六疊に寝てゐるよ。」と、いふ。

雪江はその[illegible]をみて、

「まあ、お別々に寝たの。あの人も[illegible]わねえ。」と、云つて、「あの、昨夜あの人の方は何うでして。あの人も隨分酔つたんでせう。」と、豫期をもつて訊く。

廣瀬は苦い顔をするやうツと呟いて、

「いや、ところが君、あの人が昨夜は一番しつかりしてゐたのさ。私の方はもうすつかり[illegible]て頭がぼけてしまつてゐるのに、千鶴子さんは案外に平氣なんだもの。實に強いねえ。私も驚いちまつたよ。はゝゝゝ。」

「まあ、呆れましたわねえ。あんなに飲んで酔はないなんて、ほんとに憎らしいわねえ。それで何時頃、お寝みになりましたの。」

「さあね、時計はみなかつたが、あれでももう一時は過ぎてゐたらう。君が寝てから三十分位はたつてゐたね。」と、云つて、廣瀬は急に思ひついたやうに、枕許の亂れ箱から時計をとつて、

「おや、君、もう八時過ぎてゐるぜ。こりや困つたねえ。七時にはきつと歸すつてあんなに約束して來たのに、とんだことをしてしまつたなあ。千鶴子さんはまだ寝てゐるのか知ら。一寸樣子をみせにやつてみよう。」と、云つて、彼は手を伸ばして、電鈴を押す。

電鈴に答へて間もなく仲居がやつて來たので、千鶴子は何うしたと聞くと、仲居はくすくす笑つて、

「あちらさんはもうあんたはん、七時にお起きになりまして、お風呂もおつかひになりまして貴方のお座敷でお待ちになつてやはりますのどつせ。」と、いふ。

廣瀬は滑稽けた恰好をして、

「いや、そりや大變だ。お客樣をおつ放り出しといて、自分達ばかりいゝ氣持に寝て居つちや申譯がないねえ。雪江さん、それぢや君も大急ぎで支度をして來給へ。私も顔を洗つてすぐに座敷の方へいくから。」と、云つて、彼はそゝくさと化粧箱をもつて、座敷を出てゆく。彼女も宿醉で顔色はよくなかつたが、併し力めて元氣さうにみせてゐるのであつた。

雪江は苦しいのをやつと耐へて、自分も着換へをして、浴場で身じまひをすると、千鶴子の

る座敷の方へいつた。今朝は隣りの棟にある浮舟といふ十疊がとつてあつて、そこにはもう朝飯の支度がとゝのへてあつた。
千鶴子はもう昨日の支那服に着換へてゐて、醉の殘つた眼をぽッと紅くしながら、蓮葉に煙草をくはへて、廣瀬と何やら話してゐたが、雪江が入つていくのをみると、浮々して、
「あら、雪江さん。お早う。あんたよく起きられてねえ。私、時間が急くから、揺起しに行かうかと思つたんだけど粋をきかして上げたんだわ。ほゝゝゝゝ。」と、笑ひかける。
雪江はそれを笑顔で受けるだけの元氣がないので、そのまゝ廣瀬の傍へいつてぐつたりと横坐りになつて、
「お早う。私もうほんとに懲りごりしちやつたわ。もうお酒なんぞ飲むもんぢやないわねえ。」
と、いふ。
千鶴子は笑つて、
「ほゝゝゝ。誰だつて宿醉をした時にやきつとさう思ふわねえ。でも馴れて來ると、おつきに苦しかつたことなんか忘れちまふわ。ねえ、廣瀬さん、熱いお酒を一本とつて、雪江さんに迎ひ酒を上げさせらよ。さうすりや氣分がきつとさつぱりしますわよ。」
廣瀬はそこに持つて來てある銚子へさはつてみながら、
「いや、こりやいゝお燗だ。まあ、とにかく雪江さん。一杯その茶碗でぐうつと呷るさ。どうしたつてそんな氣持の時には、迎ひ酒をやらんけりや直りやしないよ。匂ひが鼻につくけど、眼をつぶつてぐつとやるんだ。さ、飲り給へ。」
と、云つて、有合ふ茶飲茶碗へ波々と注いでやる。
雪江はさう云はれると、仕方がなしにその茶碗を取り上げて口のところへもつていつた。酒の匂ひが眼にしみて、とても飲めさうもなかつたが、廣瀬がやいやいいふので、到頭鼻で息をしずに、ぐつと一息に飲み下してしまつた。そこへ仲居が洋杯と肴をもつて來て呉れたので、皆はそれで熱い燗酒をこしらへて二杯も三杯も飲んだ。雪江も言はれて洋杯でもう一杯呷つたが、たつたそれだけの酒が體中へ廻つて、みるみるうちに醉つていくのが分つた。
廣瀬も顔を紅くしながら、
「やあ、お庇護で、いゝ氣持になつた。それぢや千鶴子さん、あんた、早く飯を食べてお作をしようぢやないですか。七時の約束が九時になつてしまつちや、私が申譯ないからね。」と、云つて、自分の汁のものへ手をつけながら、「ねえ、雪江さん、實はいゝ相談が出來てねえ、どうせ千鶴子さんは今朝又黄檗へいかなけりやならんのだから、私もその自動車へ一緒に乘せて貰つて、御陵前までいつて、あすこから京阪電車に乘らうと思つてゐるのさ。」と、いふ。
雪江はとても箸をもつ元氣がないので、片手で上半身を支へながら、
「おやあなた、今朝は何うあつても大阪のお店へ被往るんですの。」と、寂しさうな、恨めしさうな顔でいふ。
廣瀬はもう遠慮なく千鶴子と二人で飯を食べ出して、
「いや、その方がいゝだらう。さうせんけりやあの清水の奴、きつとのこのこ此處へやつて來るからね。彼奴に踏込まれちやあんたも引込みがつくまい。はゝゝゝ。それとも一人で留守番をしてゐるのが心細かつたら、君も一緒に大阪へ行くかい。」
雪江は顔を背けて、悄然と考へ込みながら、
「私、とても今日はこの氣持ぢや電車や自動車にや乘れませんわ。途中で苦しくでもなり出したら、大變ですもの。」
廣瀬は合點いて、

「いや、どうだらうとも。それを察して、私、一人で行つて來ようと思つてゐるんだよ。何あにこれから行きや遲くも午後の二時迄には歸つて來れるから、たつた四五時間の辛抱さ。まあ、一人でゆつくり臥床を敷かせて寢るさ。さうして私が歸つて來る迄にすつかり元氣を直して、又晩にや千鶴子さんに來て貰つて、今夜こそ面白く遊ばうぢやないか。はゝゝゝ。宿醉の時にや迎ひ酒をやつて、ぐつすり寢るに限るよ。ねえ、千鶴子さん。」

千鶴子もさすがに一杯しか飯が喉へ通らないとみえ、やがて箸を置いて、

「ほんとに、寢るのが一番だわ。さうすりやもう午過ぎにや癒るわよ。私、今日はどうせこのお天氣だから夕方までにや全部撮り上るに極つてるから又撮影がすんだら、直ぐに此方へお邪魔に伺ふわ。さうしてもし何んなら、御一緒に東京へ歸らうぢやないの。せめて汽車の中だけでも御一緒だと賑やかでいゝわ。」

雪江は何んだか二人を自動車で送り出してやるのが厭で耐らなかつたが、併しさうかといつて、自分も一緒に大阪へ行くだけの勇氣はとてもなかつた。で、うじうじしてゐる間に廣瀨はもうすつかり支度を整へて、仲居が自動車の支度が出來たことを報せて來ると、元氣よく立上りながら、

「ぢや千鶴子さん、大急ぎで行からうぢやありませんか。もう八時が二十分も過ぎてゐますよ。監督さんがもうかんかんになつて怒つてゐるだらうと思つて、それが私は心配でならんのですよ。何んとかして申譯をしなけりやねえ。」

千鶴子もやつと立上つて、

「監督なんぞが何を云つたつて、ちつとも恐かありませんわ。いつものことなんだもの。ほゝほゝ。」と、云つて、銜へ煙草をしながら、「ぢや雪江さん。私、失禮しますわ。又きつと晩にやつて來ますからね。まあ、ゆつくりお寢みなさい。鼠に引かれないやうにしてね。ほゝゝゝほ。」と、云ひながら、廣瀨のあとから引添うて座敷を出てゆく。

雪江は仕方がなしに上框まで送つて出て、

「ぢやあなた、きつと二時迄にお歸り遊ばしてね。私寂しいんですもの。」と、甘えるやうに云つたが、廣瀨は此方を振返つて、

「無論二時迄には歸るよ。今仲居さんに話して置いたから、階下の水仙へでも臥床をとつて貰つて、靜かに寢たまへ。」と、云つて、葉卷に火をつけながら自動車の方へ下りていつた。支那服を着た千鶴子は身輕について石段を下りて、一寸此方を振返つて、コケットな身振りをしながら、

「雪江さん、左樣なら。」と、云つたかと思ふと、もう自動車の中へ乘つてしまつた。

やがて自動車は警笛を鳴らしながら河添の明るい道を町の方へ走つていつてしまつたが、雪江はあかあかと日の射した青草の河原をみてゐると、何んだか妙に拗ね度いやうな、淚含ましいやうな心持が胸一杯に込み上げて來た。

雪江は少時すると、立つてゐるのまでが辛くなつて、仲居に連れられて、池の向うにある水仙の座敷の方へいつた。その時にふつとみると、そこの樹蔭には三十恰好の、背の高い男が宿の褞袍を着て、ぼんやり池の汀に佇んでゐる。此方の跫音を聞きつけると、その男は思はず顏をあげたが、それと同時に、雪江ははつとして、そのまゝそこへ立ち竦んでしまつた。

そこに立つてゐるのは、思ひもかけない小澤であつた。

三十四

雪江はそこに立つてゐるのが、小澤だと知ると、もう何うしようかと思つた。まさか今頃彼

がこんなところにうろうろしてゐようとは夢にも思はないので、彼女はまるで息が塞がるやうに惑亂して、立つてゐても、頭がきいんとして、體が浮くやうで今にも眩暈がしさうになつて來た。

小澤は一度此方を見た眼を無意識に逸らしたが、又もう一度瞳を据ゑて、ずいツと眞面に雪江の顏を見た。その眼眸は明らかに或憤怒を語つてゐて、彼の方ではこの宿に雪江が來て泊つてゐることを反對によく知つてゐるらしかつた。ひよつとかしたら、今廣瀨を送り出したところを隙見でもしてゐて、態と彼はこんな處に待ち伏せをしてゐたやうにも思へた。

雪江はどうにも引込みがつかないので、いつそこのまゝ知らん顏をして水仙の座敷へ入つていつたら、小澤が何うするだらうと思つて、やがて態と傍の敷石道から樹立の裏を通つて、すぐ向うの水仙の方へ入つていつた。若し變なことをして、仲居の見てゐる前で小澤に亂暴な口でもきかれたら、それこそ恥の上塗りをするやうなものなので、雪江としては、もうその場合さうするより他に手段はないのであつた。

仲居は、何にも知らないので雪江を座敷へ入れると、愛想のいゝ調子で、

「あの、ほならお次へお臥床を伸べて置きましたさかいに、どうぞ旦那はんがお歸りやすまで御悠りお寝みやしとくれやす。何んぞ御用が御座いましたら、電話をおかけやしとくれやす。」

と、につこり笑つて、四邊を片づけると、それなり又庭の方へ歸つていつてしまつた。

雪江はたつた一人になると、もう辛抱がしきれなくなつて、火鉢の前に敷いてある座蒲團へぐつたりと腰を落して、兩肱を疊のうへへ突きながら、突俯してしまつたが、何うにも小澤のことが氣になつて耐らないので、少時するとそつと縁端の方へ這つていつて、そこの障子を音のしないやうに細目に開け、その隙間から池の方を覗いてみた。

小澤はその時、いつかしら池の此方側の岸へやつて來て、肩寒げな恰好をしながらぢいツと池の水面に見入つてゐた。彼は何うしたのか、二三日剃刀も當てないとみえ、遠くからみえる程、青々と鬚を伸ばしてゐて、顏色も見違へる程惡く、しかも、眼には何處か鋭い光が陰鬱に輝いてゐて、見るから感情の焦だつてゐるやうな相貌に變つてゐた。初めはさうは思はなかつたが、漸々みてゐるうちに、雪江はひよつとしたら小澤がひどく醉つてゐるのではないかと、その時になつてやつと氣がついたのであつた。さう思つてみると、彼の額には絶えず[illegible]が動いて、體は時々思ひ出したやうにふらりふらりと搖れてゐた。

小澤はさうやつたまゝ長いこと汀の石のうへに立つてゐたが、やがてふと此方を見たかと思ふと、今度はいよいよ腹を極めてか、四邊の様子を臆病な眼つきで窺ひながら、跫音を盗むやうに水仙の座敷の方へ歩いて來た。

雪江ははツとして、思はずもとの座蒲團の方へ逃げ歸つたが、矢鱈に胸騒ぎがして、耳鳴りがして、胸はわくわくするばかりである。彼女はもとのやうに疊のうへへ突俯して、息を殺してゐた。

間もなく水仙の上り口はそつと開いて、そこから跫音がうへへ上つて來た。雪江はもう何うにもならなくなつて、そのまゝ默つてそつちも見ずにゐると、跫音はずつと間内へ入つて來て、いきなり鋭い聲が、

「おい、雪江さん。」と、呼ぶ。

雪江はそれでも返事をしなかつた。

と、小澤は彼女の傍へもう一足近寄つて來て、そこへ坐りながら、

「雪江さん。」と、もう一度呼ぶ。

雪江はその時、やつと喉にからむ痰を切りながら、成る可く聲だけでも落着かせて、
「何んですの。」と、答へた。
小澤は一寸間を置いて、
「ねえ、雪江さん。そんなに君、逃げ隱れをしないでもいゝぢやないか。まあ、顏を上げ給へ。僕は君に少し云ひ度いことがあつて、やつて來たんだ。」と、稍調子を落していふ。
雪江もさうなると、今度はかつとして、いきなり起き上りながら、
「小澤さん、何んですの。無斷でこんなところへ入つていらしつて、あんたも隨分失禮ぢやありませんか。何か云ひ度いことがあるんなら、廣瀬さんの彼在る時に伺ひませう。私一人のところへ入つて彼來るなんて、あなたも隨分卑怯ですわねえ。」と一生懸命になつていふ。
小澤も怒りを押へて、
「いや、僕は昨夜のうちに君がこゝへ來てゐることをちやんと知つて居つたのだ。僕は、餘程逢ひに行からかと思つたが、併し他にお連れもあつたやうだから、態と蟲を押へて、差控へて居つたんだ。」と、息を呑んで、「おい、雪江さん。君も實に酷い人ぢやないか。汽車の中で僕があれ程云つたのが、君にや分らないのか。」と、詰るやうにいふ。さういふ小澤の體からはウヰスキイの匂ひがぷうんと匂つて來た。
雪江は胸が惡いやうな氣がしてその眼を態と眞面に見ながら、
「小澤さん。汽車の中で云つたつて、何を仰有つたんですの。私にやそんなこと分りませんわ。何んでもよう御座んすから、どうかこのまゝお歸んなすつて下さい。私、今朝は氣分が惡くつて、これから一人で寢むところなんですから。」
小澤はその眼を氣味の惡い程じろりと見返して、
「まあ、待ち給へ。君もそれだけの口がきけるんなら、兎に角僕の云ふことを聞くがいゝぢやないか。君の心にやもう何にもないんだらうから、僕の云つたことが或は感じられなかつたかも知れないが、僕は、僕はあの時、君に對して間接にかういふ意味のことを云つたつもりなんだ。そりや惡戲もいゝ、面當てもいゝ、併し僕にしてみりやあゝまでに惡どい復讐をされる覺えはないんだから、こつちへ何かし度いんなら、何うかもう僕の眼の前でやるのだけは止めて呉れ、若しそれをするんなら僕は君を恨む、君を僕は呪ふ。――それだのに今日になつて、この宇治へ追駈けて來てまで今のあの態はありや何んだ。僕はもうとても耐らないんだ。僕は、僕は、……」と、云つたかと思ふと、彼はだしぬけにぽろぽろッと涙を零して、可笑しいほど興奮した涙聲になつて來る。
さうなると、今度は雪江の方が妙に落着いて來て、冷然とした嘲りを脣に含みながら、
「小澤さん。あなた、今日は何うかして彼在るんぢやありませんの。そんなまるで筋の違ふことを仰有つて、あなた、御自分で恥かしいとはお思ひにならないんですの。」と、云つて、「私達は何もあなた方の後を追駈けて、この宇治へ來たんぢやありませんわ。第一私達はあなた方がこゝに彼在らうなんていふことは夢にも知りやしませんし、それに失禮ですけれど、そんなことを氣にしてゐるだけの餘裕もなかつたんです。御存じか何うか知りませんが、昨夜私達と一緒にゐたのはありや松竹の女優で住江千鶴子つていふ人なんです。あの人が、黄檗へ撮影に來てゐて、偶然逢つたんで、そんなら宇治へいかうつていふんで、此處へ來たんぢやありませんか。そんな馬鹿々々しい云ひ懸りなんかおつけになつちや、私厭ですわ。」
小澤ははふり落ちる涙を拭かうともしずに、

「いや、そりや譃だ。君達は僕が此處にゐるのを知つて、態々やつて來たんだ。そんなに隱すんなら、僕の方から云はう。君達はあの大阪の支店の清水さんに逢つて、僕達のことを聞いたらう。それ、見給へ。ちやんと種は上つてゐるんだ。」と、云ひ放つて、彼は白い齒をむき出しながら態を見ろと云はぬばかりに笑つた。

雪江は譯が分らないので、

「まあ、そんなあなた、そんなことがあるもんですか。私達は清水さんに逢ひもしなければ、そんな話なんかまるで聞きもしやしませんわ。何んでも私達が桃山の御陵の下を自動車で通つてゐる時に、彼方の乘つて被在る自動車と擂れ違つたとかいふんで、あとから電話がかゝつて來たばかりですわ。何うしてあなたはそんな下らない邪推をなさるんでせう。」と、笑つて、「それよりも一體貴方こそ、何うして今頃こんな處に被在るんですの。もう私、ほんたうのことを云ふと、今日あたりは伊勢の方へでもお廻りになつてゐる時分かと思つてゐたんですわ。」

小澤は額を伏せて、

「いや、僕は、僕は、實は家内が急に病氣をしたもんだから、もう三日ばかりこゝに滯在して養生をさせて居るんだ。それで、……」

「まあ、奧さんが御病氣なんですか。」ああ、さう云へば成る程、昨夜、女中さんが京都からお醫者樣と、看護婦が來たなんてさう云つてゐましたが、あれは貴方の方だつたんですの。まあ、そりやお氣の毒ですわねえ。嘸ぞお困りでせう。」と、雪江は幾分憐れむやうな、勝ち誇つた表情をしながらいふ。

小澤はじろりとその顏を睨めつけるのであつた。

三十五

小澤はやがて又焦々してゐるやうに、手ばかり擦して、

「いや、雪江さん。そんなことは何うだつていいんだ。君の心持はよう〜く僕には分つてゐるんだ。態みろ、いゝ氣味だと口へ出しては云はなくても、君のその顏がちやんとさう云つてゐるんだ。」と、突懸るやうに云つて、又涙聲になりながら、「おい、雪江さん、併し僕は君がかうまでに執念深い人間だとは少しも思はなかつた。實に君位殘酷な女に、僕は逢つたことがない。僕は君からこれ程迄に惡辣な復讐をされようとは今日の今日まで想像だにしなかつたんだ。」

雪江は皮肉に笑つて、

「小澤さん。今更になつて、そんな愚癡を仰有るもんぢやありませんわ。私は何も自分から意識してあなたに復讐をしようなんて、そんな卑劣な考へに捕はれてゐないんです。唯私が自分で求めた道が、自然にあなたに復讐をするやうな工合になつていつてしまつたんですわ。」

小澤は暫く、

「いや、そんな、そんな辯解をしても駄目だ。君はちやんと企んでやつてゐるんだ。何處までも僕に祟るつもりで、君はいろんな計略を用ゐてゐるんだ。實に恐ろしい女だ。」

雪江は吹き出して、

「ほゝゝゝ。貴方も隨分變な方ねえ。もう何事も過ぎ去つてしまつたことぢやありませんか。いつまで私がそんな執着を持つてゐるもんですか。そんな可笑しな未練を持つてゐる位なら、私は廣瀨さんと旅へなんか出やしませんわ。男の方なんて、ほんとに自惚れの强いもんですわねえ。馬鹿々々しいにも程があるわ。ほんとに。」と、云つて、彼女は火箸を取り上げて炭火を弄り出した。

小澤は默つて、火をなむやうな眼をしてゐたが、やがて憤怒に充ちた聲で、

「おい、雪江さん、その言葉は何んだ。もう一度云つて見給へ、あれ程お互に理解をしあつて別れた君と僕ぢやないか。そんな、そんな残酷なことを、何うして君は云はなけりやならんのだ。君は、君は、僕を気狂ひにしようといふのか。」

雪江はそれでも態度を變へずに、

「ほゝゝゝ。小澤さん、どうかもうそんな誇張した厭なものゝ云ひ方をなさるのは、よして下さいましな。貴方に逢つてゐた時分には、私、そんなことを云はれると、無上に嬉しくなつたもんですけれど、もう今ぢやそんな氣障なことを聞くと、胸が悪くなつてしまひますわ。ほゝゝ。貴方は残酷だつて仰有るけど、そりやあなたが御自分でさうお考へになるやうな地位にお立ちになつたから悪いんですわ。私をこんな拗ねくれものにしておしまひなすつたのは、小澤さん、あなたぢやありませんか。ほんとに有難う御座いましたつて、私、反對にお禮を申しますわ。」雪江は冷たい調子でさうは云つてゐるものの、いつかしら心の中では、小澤に別れたあの兜町の河岸の霧の夜の思ひ出をそれとなく思ひ浮べてゐるのであつた。あの時の悲しさ情なさを思ひ起すと、彼女はかうまでに變り果てた自分が寧ろ不思議で、却つて何かしら胸が一杯になつて来るのであつた。小澤は下唇を破れる程、噛ひしばつて、

「雪江さん。君は、君は、……」と、云つたが、もう耐らなくなつたやうに、いきなり雪江の肩へ獅嚙みついて、せぐり上げて泣きながら、急に今迄とがらりと語調を變へて、「雪江さん。どうかもうそんな残酷なことを云ふのはよして呉れ給へ。僕はいかに君を恨んでゐても、君の口から、君の口からそんな言葉を聞くともう耐らなくなつて来るんだ。僕は、僕は、あの時に、十分君の諒解を得て別れたと信じてゐるんだ。それだのに、今君にかうまでにされると、僕は全く耐らないんだ。」と、云つて、彼女の體を夢中になつてしめつけようとする。

雪江はそれを邪険に振り切つて、後へ身を退きながら、

「小澤さん、何をなさるんです、そんな氣味の悪いことをなすつちや。私、嫌ですつて云ふのに。」と、云つて、衣紋をつくろひながら、「ねえ、小澤さん。貴方は忘れつぽい方だから、もう覺えては被在らないかも知れないけど、あの時、私はあなたと別れたんぢやありませんわ。私、無理に捨てられたんです。いゝえ、貴方は私に、あなたを捨てるやうに無理にお仕向けになつたんですわ。それだのに、今になつて何を云はれたつて、貴方として私に對して返すお言葉はない筈ぢやありませんか。私は、私は、……」と、云つたかと思ふと、彼女もふつと眼が熱くなつて来て、我にもなく聲を落してしまふ。

小澤は又雪江の體へ手をかけながら、

「いや、雪江さん。さう云はれると、僕は、全く一言もないんだ。頭から君を怒らせるやうなことを云つて、僕は申譯がないと思つてゐるんだ。ねえ、君、雪江さん。僕は此頃になつて、しみじみあの時のことを思ひ出して、實際自分のしたことを後悔してゐるんだ。もう少しお互に深く心持を打明け合つて、心置きなく別れてゐさへすれば、僕は、僕は今こんな苦痛を味はなくつても濟んだんだ。僕には君が、君が、あの廣瀬さんのものになつてしまつたことが、此うへもない屈辱なんだ。ねえ、雪江さん。君もそこを考へて見てくれないか。え、君。……」

雪江は涙を拭いて、

「小澤さん。到頭本音をお吐きなすつたわね。」と、睨んで、「だつてそりや私の勝手ですわ。自分の道を自分で選ぶのに何んの束縛があるでせう。廣瀬さんのものになつたつて、誰のものに

なつたつて、どうせ貴方がお捨てになつた私ぢやありませんか。廣瀬さんは、あの時に、心から私に同情して下すつて、私を救つて下すつたんです。私、有難いと思ひました、嬉しいと思ひました。私、廣瀬さんのお庇護で貴方のことをきつぱり忘れることが出來たんです。私、廣瀬さんがゐて下さらなけりや、もう疾うの昔、死んでしまつてゐたかも知れませんわ。」と、云つて、彼女はしくしく泣き出してしまつた。彼女は今泣いたりしてはいけないと、頻りに自分を叱りながら唇を噛ひしばつてゐたが、それでも譯のない涙は雫のやうになつて頬を傳つて來るのであつた。

小澤は蒼ざめた顔になつて、おいッと雪江の泣くのを見てゐたが、少時すると漸しく嗚咽しながら、

「雪江さん。全く僕が惡かつたんだ。僕はその爲めに、ほんたうのことを云ふと、今になつて恐ろしい責罰を受けてゐるんだ。僕は、僕は、何うしたつて、君と結婚しなけりやならない運命を持つてゐたんだ。それだのに、それだのに、ふづとした迷ひが出て、あんなことをしたために、僕の一生は到頭滅茶々々になつてしまつたんだ。君はまだ何にも知らないから、僕のこの言葉に少しも同情を持つては呉れまいが、ねえ、雪江さん、僕は今自分の生活の上で非常な危機に立つてゐるんだ。あんな家内と結婚したばかりに、僕の一生は事實に於て暗いものになつてしまつたんだ。雪江さん、僕は恥を忍んで打明けるが、實は今の家内はねえ、君、恐ろしい黴毒をもつて僕と結婚をしたんだ。」と、雪江の氣を唆るやうに云ふ。

雪江にそれには返事もしなかつたが、小澤は涙を呑んで、猶も言葉を續けながら、

「ねえ、君、雪江さん。その黴毒つていふのは、僕の口からは恥かしくつて、迚も云へないが、倂し雪江さん、どうかまあ聞いて呉れ給へ。僞りの道を歩いたものの、當然受く可き責罰として、どうか君、聞くだけ聞いて呉れ給へ。さうすればいくらか君の怒りも解けようし、又僕に對する恨みも和ぐだらうから、どうか君、僕を笑つて呉れ。僕を嘲つて呉れ。」と、云つて、ひどく興奮して來ながら、「ねえ、雪江さん。僕はもう君だから總てを告白するが、僕の今度貰つた家内に、ありや僕よりも一層恐ろしい僞りの假面を被つて僕のところへ嫁いで來たんだ。恐ろしい黴毒といふのは、他でもない、彼女は既に處女ではないんだ。……」と、眼を据ゑていふ。

雪江はきいて、浮かない顔をしながら、默つて、唇を噛んでゐたが、やがて顔はあげずに、

「それ、御覧なさい。今になつてよくお分りになつたでせう。ほんとにいゝ氣味だわ。」と、云つて、もう涙の乾いた眼だけ上げながら、「でも、小澤さん。奥様が處女でないからつて、貴方はそれを非難なさる資格がおありになつて？その前に、まあ、御自分の今迄なすつて來たことをようく振顧つて御覧なすつたらいゝでせう。私一人なら兎に角、貴方は隨分際どい遊びもなすつて被來つたんですし、童貞なんか、もう十年も前に破つておしまひなすつたんぢやありませんか。それでゐて女にばかり處女を要求なさるのはあんまり蟲がよすぎますわ。」

小澤は慌ててそれを押へながら、

「いや、雪江さん。まあ、待ち給へ。さう辛辣なことを云はずに、まあ、僕の云ふことをよく聞き給へ。」と、云つて、生唾をごくりと呑みながら、「いや、そりや僕が家内に處女を要求するのには或意味から云つて、隨々し過ぎるとしても、倂し雪江さん、他人のこしらへた肉塊を胎の中に宿してゐる女と結婚しなけりやならないといふのは、あんまり慘酷すぎるぢやないか。如何

に何んでもそんな君が、そんなことが何うして忍べると思ふ。」

雪江もそれを聞くと、さすがに驚いたが、又脣を皮肉に曲げて、相手にもしないやうに、

「それも、これも皆運命の惡戲ですわねえ。何も私が何うつて云ふんぢやなし、小澤さん、あなたが御自分でお選びになつた道なんぢやありませんか。その責任は御自分でお持ちになるより他はありませんわ。ほゝゝゝ。」と、聲だけで笑つて、「ねえ、小澤さん、あの失禮ですけれど、どうかもうそのお話はその位になすつて、お願ひですから此のお座敷を出て下さいませんか。私、何んだか眩暈がして來て耐りませんし、それにそんなお話はあんまり愉快ぢやありませんからね。そんなことを今更私が何つても、何うなる譯のもんぢやないんですもの。」

小澤はさう云はれると、力なく肩を落してしまつたが、やがて俄に狂ほしげに、

「おい、雪江さん。」と、聲を荒げて、「雪江さん。僕は、僕は何もこんなことを云つたからつて君の、君の憐れみを乞はうなんて云ふ卑劣な料簡は少しもないんだ。僕を馬鹿にしたやうな、その眼つきは何んだ。僕だつて、僕だつて男だ。そんな、今更になつて、君の憐れみを求めるなんて、悍りながらそんな情ない心持に持つちやゐないんだ。」と、下脣を噛む。

雪江は冷たい笑ひを笑つて、

「ほゝゝゝ。それなら何もこんな處でそんなお話を私に聞かせて下さる必要はないぢやありませんか。そんな負惜しみを仰有らないで、もつと正直になさる方がいゝわ。私だつて無理に聞けと仰有れば聞きもしませうし、又同情をしろと仰有るんなら、同情もしますわ。でも、その同情は唯の同情で、結果といふものが伴はないことだけははつきり申して置きますわ。」

「ふん、何んでも構はないさ。精々君も冷靜がるがいゝさ。はゝゝゝ。」と、小澤も白い歯を出して嘲るやうに笑つて、「僕はもう誰からも同情なんか求めようとは思はないんだ。自分の運命を明らかに自分で感じて、時期が來たら、その時こそ潔く處決をしてしまへばそれでいゝんだ。人生なんて云ふものはどうせお約束通りに出來上つてるもんぢやない。お約束どほりでない道を歩くから却つて意味があるのかも知れないからね。」

「ねえ、貴方、そこまで悟つて被在るんなら、何も私が一人でゐる處へ入つて被來つて、大の男が泣いてまでお騒ぎになることはないぢやありませんか。ほゝゝゝ。ほんとに可笑しな方ねえ。そんなことをして被在る隙に、早く奥様の側へいつて看病でもしてお上げなさる方がよつぽど氣が利いてゐますわよ。さ、私、もう寢るんですから、彼方へお歸んなさいましよ。ここに被在つちや私が困つてしまふぢやありませんか。」と、彼女は額に八の字を寄せる。

小澤はその樣を何んとも云へない悲壯な、險しい眼で睨めつけてゐたが、少時すると何んと思つたか、不意に腰を浮かして、

「おい、雪江さん。」と、叫んで、いきなりぶるぶるッと渾身の筋肉を戰慄させながら、まるで躁狂患者のやうに夢中で、彼女の顔をぴしりと横合から打擲した。それと同時に彼は倒れかゝるやうに、雪江の胸へ武者振りついて、顔と云はず、肩と云はず、胸と云はず、唯無二無三に兩手で突いたり、毆つたり、引小突いたりしだして、まるで手がつけられなかつた。

雪江はうつかり悲鳴を上げたりして、隣り近所へ聞えでもすると外聞が惡いと思つて、

「あなた、あなた、何をなさるのよう。そんな亂暴をなすつて。男の癖に、男の癖に、卑怯ぢやありませんか。」と、泣き聲で云つて、力任せに抵抗しながら、やつと次の間の襖のとこ

ろまで逃げていつた。そしてそこで立たうとすると、小澤は又激しく噛みついて來て、到頭紙襖と一緒に雪江を隣りの間に[illegible]ばたりと押倒してしまふ。押倒すと一緒に今度は彼女のうへへ馬乘りになつて、手當り任せに彼女の體をぶつて、打つて、打ちのめした。彼にそんな亂暴を働きながらも、子供のやうに歔り上げて嗚咽してゐるのであつた。

雪江は何うにもしようがないので、兩手でしつかり顏だけ押へながら齒を喰ひしばつて我慢してゐたが、小澤は少時するとせいせい息を切らしながらやつと立上つて、激しく嗚咽しながら、

「おい、雪江さん。覺えてゐるがいゝ。僕は、僕は、今に、今に、きつと、きつと、……」と、云つて、それなり袂からハンケチを出して、顏を押へたまゝ、彼方の柱へぶつ突かつたり、此方の壁へ突當つたりしながら、足の踏みども分らないやうに、やがて水仙の座敷を出ていつてしまつた。上り口のところで下駄を突懸ける音がやゝしばらく聞えてゐたが、間もなく彼は水仙の座敷から裏庭へ拔ける路を飛石傳ひに何處かへ歩いて行つてしまつた。

雪江もあんまり力任せに反抗したので、息はかりが彈んで耐らなかつたが、それでも小澤の跫音が聞えなくなると、やつと起き上つて、[illegible]りに口の中で舌打ちをしながら、先づ倒れた紙襖を起し、それをもとのやうに立てて、自分は臥床の敷いてある次の間へ倒れ込むやうに入つていつて、そのまゝ羽二重の夜具のうへへぐつたりと打倒れてしまつた。今毆られた額や、肩や、乳房にはまだ痛みがずいッと殘つてゐて、彼女は少時の間は身動きさへ出來なかつた。

雪江はさうしてゐるうちに、何とも云へない口惜しさと、憤怒が胸一杯に湧いて來た。それと同時に、彼女は口の中で小澤のことを散々に罵つてゐたが、いつかしら喉へ押塞がるほど悲しくなつて、彼女は夜具のうへへ顏を押しつけたまゝ、肩や背中に波を打たせて、頻りに泣き出した。夜具は湯のやうに氣味惡く濡れて、ひとしきりは息が止まるのではないかと思はれるほど、彼女は激しく歔り上げて泣きしきつてゐたのであつた。

小半時ばかりもさうやつてゐたが、ふつと我れに返ると、雪江は何かしら鼻口から生温かいものが頻りに流れ出てゐるのを感じた。驚いて顏を上げてみると、夜具のうへには強か血が滲んで、彼女の鼻からは猶も鼻血が滴をなしてしたゝり落ちて來つゝあつた。

雪江は慌ててハンケチを出して、顏へ當てたが、もうその時には彼女の感情はすつかり今迄とは變つてゐた。蒼ざめた半狂亂な小澤の恐ろしい顏が心の眼にくつきりと描き出されて、それが不思議な魅力をもつて、雪江に迫つて來るのであつた。雪江は毆たれた痕の痛みが犇と胸に甦つて來るにつれ、そこに自つと或一種の漠然とした魔的な誘惑のやうなものを感じずにはゐられなかつた。

雪江は鼻血が止まるのを待ちながら仰向けに寢てゐたが、もうその時には、今からは小一年も前、小澤とたつた二人で箱根の強羅へ遊びにいつた或夜のことを我にもなくうつとり思ひ起してゐた。

三十六

雪江はやつと胸が鎭まると、それから[illegible]りの仲居に來て貰つて、鼻血で汚れた小夜着だけ替へさせ、そのまゝ長襦袢一枚になつて、枕に就いた。ほつかりとした寢濕りが來るにつれて、小澤との間のいろんな過去のいきさつも先々と思ひ出されたが、いづれも性的な場面ばかりで、深い反省を强ひるやうな追憶は一つも浮んで來

なかつた。今打ち打擲された時のあの痛さ、それがいつまでも彼女の肉體にこだはりついてゐるのであつた。

　そのうちについうとうととしたかと思ふと、雪江は夜來の疲れで、もうぐつすりと睡込んでしまつた。夢さへ碌にみないやうな深い深い熟睡が彼女のうへに來た。

　枕許でふと人聲がするのに氣がついて、ぽつかり眼を瞬いてみると、枕許へ來て趺坐をかいてゐるのは、思ひもかけない廣瀬であつた。彼は少しづつかげり出した夕陽の中で、さも愉快さうににつこり笑つて、

「おゝ、雪江さん、やつとお眼覺めかい。はゝゝゝ。あれからずつと今迄寐てゐたんだつてねえ。いゝ梅だつた。それだけ寐たら、もうすつかり宿醉もとれたらう。」と、いふ。

　雪江も廣瀬が約束通り早く歸つて來て吳れたのが嬉しくて、寢てゐては惡いと思つて起き上りながら、

「お歸んなさいまし。お庇護様で、大分頭が輕くなりましたわ。」と、微笑んでみせて。「いつお歸りになつたの。私ちつとも知りませんでしたわ。」と、髮を直す。

　廣瀬も金口を取り出して、

「いや、たつた今しがた歸つたのさ。あんまりあんたがよく寐込んでゐるんで、起すのも可哀想だと思つて、實は今迄お美しい寐顔に見惚れてゐたんだよ。はゝゝゝゝ。」と、云つて、「ねえ、雪江さん、今仲居に聞いたら、あんた大變に鼻血を出したんだつて云ふぢやないか。もういゝのかい。」と、機嫌を取るやうに云ふ。

　雪江ははツと思つたが、さあらぬ顔で、

「いゝえ、大したことはないんですのよ。一寸少しばかり。」と、云つて、そろそろ脱ぎ捨てた着物を着ようとしたが、廣瀬はそれを押へて、

「まあ、雪江さん。まだ顔色がほんたうぢやないから、もう少し寢ておいでよ。何も私が歸つて來たつて、さう改まるにや及ばないさ。はゝゝゝ。」と、笑ふ。

　雪江はそれでも着物を着てしまつた。彼女はもう小澤のことは噯氣にも出すまいと心に極めて、態と氣を浮かせるやうに、うきうきして見せながら、

「まあ、あなた、こゝは何んですからそちらの六疊へ參りませうよ。さうして熱い鹽茶か、お昆布茶でも入れて貰はうぢや御座いませんか。」と、云つて、隣りの間へいつて、世話女房のやうに座蒲團を直したり、火を搔き立てたりする。

　廣瀬もそれまで着てゐたオーバーをぬいで、此方へ入つて來たが、雪江はその顔をみて、

「ねえ、あなた。それはさうと千鶴子さんは何うしまして。時間にうまく間に合ひまして。」と、訊いたが、廣瀬は何したのか、ゲラゲラ笑ひ出して、

「いや、それがあんた、實に面白いんだよ。間に合ふには間に合つたが、とんだぶまをやつちやつてね。大笑ひさ。」と、云つて、火鉢の方へ寄つて來ながら、「ねえ、雪江さん。あれから自動車で黄檗へいくと、もうあんた、撮影隊の連中は彼處で撮るだけのものを撮つちやつて、あれから六町もある宇治川の下流の方へ行つちまつてゐるのさ。それもあの寺の前の茶屋の爺さんに聞いてやつと分つたんで、仕方がないから畑の中の狹い道を河の岸の方へ入れて貰つて、やつと連中のゐる處へ行き着いた始末なのさ。もう監督はかんかんになつて怒つてゐてね、千鶴子さんはあゝいふ氣象だから、負けてはゐずに盛んに遣り返すし、もう私は何うなることかと思つたのさ。ところへ井上正夫が出て來て、仲に立つ。各自も仲へ入つて、まあ、やつと何うやら納まりがついたが、その爲めに私は三十分から時間を食はれちやつてねえ。とんだ災

難き。」
雪江も笑つて、
「さうでせうともねえ。何しろ此處を出る時に、もうこれ程も遅れてゐたんですもの、ねえ。あんな時間限り、仕事をする人達ですもの、怨るのは當然ですわ。」
寛治は煙草の煙を夕闇の光の中へ吐き出しながら、
「併しねえ、あの千鶴子さんの頑張りつていふものは大したもんだねえ。あんまり監督が頭からびしびしやりつけるんで、千鶴子さんも眞氣になつて怒つちやつてね、そんなに叱言けりや、私やもう撮影をやめて、この次の汽車で東京へ歸るからいゝなんて云ひ出すんだ。それを云ひ出されると、もう元も子もないんで、監督それで泣き寝入りさ。その時の井上監督の顔なんてものは見せ度かつたねえ。馬鹿の[illegible]をして、ぬうッと立つたまゝ、困つたですなあといかめッ面をしてゐる樣子つたら、實にもう天下の喜劇だつたよ。」
雪江も思はず唇を綻ばして、心から笑つた。
寛治は煙草を吸つてしまふと、灰の中へ無造作に突込んで、何か思ひ出したやうに、
「ところでだ雪江さん、實は足許から鳥が立つやうな話だが、何うだい、その、我々も今夜の汽車でずつと東京へ歸らうといふ話が持ち上つたんだが、あんたは何うする。私はあんたの氣持ちいゝやうにするから、ひとつあんたの方へ遠慮なく云つてみて貰へないかね。」と、相談を持ち掛けるやうに云ふ。
雪江もさう云はれると、何んだか急に里心がついて來た。もう東京を出てから今日で一週間になつて、旅慣れない彼女は、何かしら心の隅では東京の家が戀しくて耐らないのであつた。いつこの旅路の面白さはあつても彼女にはもうそれが何となく物足りなくなつてゐるのであつた。それにこの「花」ときには小濱へ泊つてゐるのだといふ噂に、而も彼女の體を壓迫して來て、此頃あんな亂暴にこれ以上は、この懸念を思ひ切つた眞似をするか分らないので、雪江は何よりもその理由から一刻も早く遁れ度いのであつた。
雪江は一寸考へたあとで、又眉をあけながら、
「さう仰有られると、私も何んだか、東京へ歸り度くなつて來ましたわ。折角こんな面白い目に逢はせて頂いてゐるのに、こんなことを申しちや失禮ですけれど、……」
「はゝゝゝ、里心がついたかい。そりや無理もないよ。私だつて何んだか、東京が戀しいやうな氣がするからなあ。それに大阪の店で清水に逢つた結果、どうやら私も明後日の朝は社へ出てゐなけりやならないやうな形勢なんだ。第一明後日は、課長會議もあるんだからねえ。もうこれだけ面白く遊んだら、文句はないだらう。又東京が戀しくなつたら、いつだつて出懸けられるんだからねえ。はゝゝゝゝ。」
雪江も合點いて、
「ほんとですわ。一度かうしてお伴をさせて頂けば、もう[illegible]身が輕くなりますからねえ。そして、[illegible]日を合はせなかつたら、—ああ、それで、千鶴子さんは何うするんですの。あの人ももう東京へ歸るんぢやないんですの。」
寛治はその顔をみて、
「それさ、それなんだよ。今夜東京へ一緒に歸らうつて云ひ出したのは、實は千鶴子さんなんだよ。今日は幸なこの通りお天氣がいゝんで、皆は午後の四時迄には全部撮り上つてしまふから、午後の六時の汽車で東京へ引揚げるんださうだ。で千鶴子さんだけはあの連中に離れて、夜の十時二分の急行で、私達と一緒に歸らう

とかういふ譯なんだ。」

雪江も笑んで、

「まあ、それやいゝ都合ですわねえ。長い道中ですから、一人でもお伴れの多い方がよう御座んすわ。それで千鶴子さんは何うしますの。もう一度此家へ來ますの。」

廣瀨は火の消えた煙草を出して、

「いや、初めはさうするつもりでゐたらしいが、時間の都合からうまくいかないんで、京都で待つことになつたんだ。午後の六時迄にきつと京都の驛の二階の都ホテルで待つてるから、是非それ迄に我々にも來て呉れとかういふんだ。だからまあ、それまでに我々もこゝを引揚げて、ホテルの食堂で落合つて、十時迄なら隨分時間もあるから、それからすぐに八瀨へでもいつて夕飯を一緒に食べて、それから立たうと思つてゐるんだよ。何うだい、いゝ趣向だらう。はゝゝはゝ。」

雪江もすつかり元氣づいて、

「まあ、それやうまい工合ですわね。私もう一度は京都の町を通つてみたいし、ほんとに私、嬉しう御座いますわ。そんなら、もうそろそろお風呂へでも入つて、支度をしかけりやなりませんのねえ。」と、俄にそはそはしだす。

廣瀨は笑つて、

「いや、私もちやんと風呂浴びようと思つてゐる處なんだ。家族風呂へ一緒に入らうよ。」と、云つて、大きな伸びをしながら、「ねえ、雪江さん、八瀨へいつたら、お宿の庭にでもあんたのお氣に入りの舞妓でも呼んで遊ぶかね。それで又京都の櫻が見えちまつたら、何うだらう。千鶴子さんなんぞはさぞ驚くだらうねえ。はゝゝはゝ。」と、腹を揺つて笑つた。

三十七

東京へ歸つて來てからは、長らく會社を休んだので忙しいとみえて廣瀨は少時の間、まるで雪江をかまひつけなかつた。雪江もあんまり煩く云つて、又愛想でもつかされると可けないと思つて、此方でもじつと控へてゐた。

母親ともあんなに云爭までして一旦家を出たものの、やつぱりそこは親子のことゝて、僅か一週間でも逢はずにゐると、もう前のことは忘れて、又妙な情愛が湧いて來るのであつた。それにいろんな土産ものなぞもしこたま持つて歸つたので、母親は機嫌をなほして喜んで、それから四五日の間は、雪江の家の長火鉢の前は京阪の旅の話で持ち切つてゐた。母親は京都見物なぞをしたことはないので、嵐山や、宇治の話をうつとり夢のやうな顏をして聞き入つてゐた。

雪江は晩寢ると何うしたものか、小澤のことばかり思ひ出した。あゝしたことで別れてしまつたが、まだ小澤達夫婦は宇治に滯在してゐるであらうか。立つ時に、廣瀨には隱れて、小澤の細君へ見舞だと云つて、態と見せつけがましく果物の籠を買はせ、自分達が立つたあとでそれを彼の座敷へ屆けて呉れるやうにと仲居に賴んで殘して來たが、小澤はあれを受取つて、どんな氣持を味つたらう。それにしてもいかに運命とは云へ、他人の子を胎に宿した女と結婚を餘儀なくされるなぞとは、小澤も何んといふ不幸な男であらう。いゝ氣味だとは思つても、雪江はあの宇治で逢つた時の恐ろしい小澤の顏や言葉を思ひ出すと、何んだか可哀想でならないのであつた。もうこれで自分は心ゆくまで復讐もしたのである。それも自分から進んで計畫したことではなくて、神がいゝ鹽梅に自分のし度いと思ふことを代りにやつて呉れたのである。從つていくら小澤が不幸のどん底に落ちても、それは自分の所爲ではなく、總ての責任は小澤が自身で負ふ可きものである。雪江は理性ではさう斷定しながらも、內心では何かなしに恐怖

ろしいやうな、氣の毒なやうな心持をいつとはなしに懷くやうになつてゐたのであつた。

雪江は誰か出入りのものの聲をかりて、小澤の家へ電話をかけさせ、大磯からもう東京へ歸つて來たか、どうかをそれとなく確めてみたくて耐らなかつた。

雪江は旅の氣分が漸く消えてゆくと、何んだか一日淋しくて耐らないので、千鶴子のところへも手紙を出してみた。もし千鶴子が都合がよかつたら、豫てから約束してあるやうに蒲田の撮影所に彼女を訪ねてみようと思つて、雪江はその好奇心に驅られてゐるのであつた。

千鶴子からは三日ばかり經つてやつと返事が來た。それもほんの走り書きのプロマイドで、今は次のセットの撮影で殆んど御飯を食べてゐる暇もないやうな忙しさだから、もし訪ねて呉れるのなら、もう十日ばかり後のことにして呉れ、いづれ東京へいく序があるから、間をみて貴女のお宅へも寄るからと書いてあつた。

雪江はもう何うにもしやうがなくなつて、その翌日、思ひ切つて例の花の師匠の荒木の家へいつてみた。京都からもつて來た土産ものなぞも出して、いろいろ旅の話をしては女主人を羨ましがらせたあとで、女主人に頼んで角の酒屋の電話をかりて、廣瀬のところへ呼び出しをかけて貰つた。と、廣瀬は自分で電話口へは出て來たが、その晩は丁度生憎上海から來た得意先の者を招待してあるので、いづれ二三日うちに此方から改めて報せるから、その時にゆつくり逢はうといふ返事であつたさうである。

雪江はもう[illegible]場がなくなつて、女主人もその晩は隙だといふので、近所の小屋へ活動寫眞を見にいつてしまつた。その往路にもう一度酒屋へ寄つて、試しに小澤の家へ電話をかけて貰つた。と、女中が出て來て、小澤は今夜はお留守だが、もう三日も前にたつた一人で旅から歸つて來たといふことであつた。奥様はと聞かせてみると、新嫁は病氣の經過が面白くないので、此方からお里の方々が出向いて、今は京都大學の病院へ入院してゐるといふのであつた。

雪江はもうその日から、何んといふ譯もなく氣が鬱してならなかつた。皆自分の知つた人達は、自分から遠ざかつてしまつたやうな氣持がして、持病のヒステリーが又少しづつ起つて來た。家にゐても時々は母親にも辛く當るし、晩になるとよく酒を買はせては、公然で洋杯酒を飲んだりした。

彼方は二三日といつたので、雪江はその日を心待にしてゐたが、併しその後廣瀬からは何んの音沙汰もないので、彼女は何かなしに心配になり出して、よつぽど直に宛てて手紙を書かうかと思つたが、併しそれもなんとしても出來なかつた。

さうかうしてゐるうちに到頭四日目になつてしまつた。雪江はもう氣がくさくさして耐らないので、別に何うといふ氣もなく、荒木の女主人を誘ひ出して、夕方から銀座へ遊びに出懸けた。女主人は心配して、

「でも、關口さん、若し私達が留守の間に旦那がみえたら、大變ぢやありませんか。今夜はきつと被來つて下さるやうな氣がしますから、兎に角、七時まで待つて御覧なさいよ。」と、云ふ。

雪江はそれでも駄々をこねて、

「今夜はとても被來りやしないわよ。若し被來つたら、反對に待たして上げる方がいゝわ。人の氣も知らないで、ほんとに男なんて勝手なもんですわねえ。」と、云つて、さつさと肩掛けをかけて、上框の方へ出ていつてしまふ。

女主人も仕方がないので、ぶつぶつ愚痴のやうなことを云ひながら後からついて來た。

二人は先づ電車で銀座へ出て、資生堂で一寸した買物をして、ぶらぶら人波の中を歩いていつた。その晩はほつかりとした朧夜で、吹く風も温かく、あの廣々とした歩道は押返すやうな混雑であつた。男も女も派手な春の裝ひを凝して、緩々と渦卷くどよみと店明りの中を、肩で人を押分けながら歩いてゐた。

雪江はいくらか氣が晴れたやうに、

「ねえ、あなた、いつ來てみても銀座はいゝ心持ねえ。それに今夜は温かいから、ほんとに出て來ていゝことをしましたわねえ。こんな晩に家に引込んでゐたら、くさくさするばかりですわ。」と、云つて、四邊を見廻しながら、「ねえ、あなた、いつそ出て來た序だわ、何處かで御飯を食べて歸りませうよ。それがいゝわ。」と、浮々していふ。

女主人は遠慮をして、

「でも、私、いつも御馳走になるばかりで、お氣の毒ですから。」と、いふのを、雪江は何を吝臭いといはぬばかりに、

「いゝわよ。そんなあなた、そんなこと何うだつていゝぢやないの。私、廣瀬さんが來て下さらない罰に、今夜はぱつぱとお金をつかつてやるんだわ。ねえ、あなた、何處がよくつて？ 西洋料理？ それとも日本料理の方がよくつて？」

女主人は笑つて、

「さあ、さう仰有られると、私又厭つていふことが云へなくなつちまひますけど、さうですねえ、どうせ御馳走になるんなら、私、西洋料理よりも日本のお料理の方がよう御座んすよ。」

雪江はふつと思ひ出したやうに、

「あゝ、さうさう。小母さんは天麩羅つていふと眼がなかつたんだわねえ。私、忘れてゐて相濟みません。そんなら天金へいきませうよ。今頃は混んでるかも知れないけど、どうせ行くんなら他の處より、彼處の方がようござんすわねえ。」

女主人は嬉しさうに、

「天金なら、もう申分はありませんわねえ。私の連合ひはあんまり天麩羅を食べたんでたうとう胃癌になつて亡くなつてしまつたんですけど、どうも私も性懲りのない方でね。あのお鍋の油の匂ひを嗅ぐと、意地の汚い話ですが、その前を素通りにすることが出來ないんでねえ。ほゝゝゝ。」

雪江はくすくす笑つて、それなり又尾張町の方へ引返しながら、

「ねえ、あなた、お宅の御主人は何時頃お亡くなりになつたんですの？」と、つかぬことを訊く。

女主人はもう別に何の感情ももつてゐないやうに、

「良人ですか？ 良人はあなたもう七年も前に逝つてしまつたんですよ。丁度五十でしてねえ。」

「まあ、五十で？ 何處かへお勤めにでもなつてゐたんですか。」

「え、死にますまで、遞信省に出てゐましてねえ。何しろ律儀な人でしたから、丁度同じ役所にあなた二十二年も勤めてゐましてねえ。それでつまり私も今ぢやいくらか恩給も頂戴してゐられるやうな譯なんですよ。とんだ世帶じみたお話をして濟みませんけど、やつぱりかうなつてみますと、良人を持つんなら地味な稼ぎ人の方が賴もしう御座すんね。ほゝゝゝ。」

雪江は空笑ひをして、鸚鵡返しに、

「あの、それでお子さんはなかつたんですの。」と、訊いたが、女主人は眼を落して、

「いゝえ、男が一人と、それから女が一人ありましたんですよ。女の子の方は良人が亡くなります前の年にやつぱり亡くなりましてねえ、今ぢや總領が一人ツきりなんです。」

雪江は大仰な聲で、

「まあ、ぢや後をお嗣ぎになる方はあるんですのねえ。東京に被任るんですの。

「いゝえ、あの、一昨々年早稲田を卒業しましてね、それから直ぐに朝鮮へ役づきをして今でも彼地にゐますんですよ。これはまあ、どうやら一人立ちでやつてゐますんで、私も安心してゐるんですけれど、……」

「まあ、こりや驚いた。小母さんにそんな大きなお子さんがあるんですかねえ。さうすると、一體貴女はお幾歳なんですの。」

女主人はくすりと笑つて、

「私ですか。私にあなた、もうお婆さんですよ。もう四十四ですもの。」

「それでお子さんが?」

「總領が今年たしか二十七だと思ふんですけど、……」

「まあ、ぢや十八の年のお子ねえ。ほんとに驚いた。昔の人は隨分早く結婚なすつたものねえ。私、みたところあなたはまだやつと四十におなんなすつた位かと思つてゐたんですわ。それ位なお年なら、何もそんなに老い込んでおしまひなさらずに、どうせあゝいふ商賣をなすつてゐるんですもの、少しはねえ、ぱつとしたことがあつてもいゝと思つてゐたんですわ。何うですの、いつそ若い燕でもおこしらへになつたら。今でもいゝぢやありませんか。ほゝゝゝほ。」と、ヒステリックに息を引いて笑つたが、その時、二人は丁度竹川町の四辻へ來かゝつて、ひよいとみると、直ぐ鼻の先を藝者でも送つていくらしい俥が二臺と、それから二臺の自動車がつながつて道を横切つていく。

二人は出足を押へられて、兩方から、「危いッ。」と云ひながらはたと足を止めたが、二臺の俥が先づ先に通つていつてしまふと、今度はあとの自動車が警笛をぶうぶう吹き鳴らしながら、徐かに二人の眼の前を横ぎつてゆく。

雪江は何の氣なしに、その自動車の中をふいと覗いたが、眞先のには若い背廣を着た男が乗つてゐて、その次のには男と女が二人並んで、さも睦まじげに談笑しながら乗つてゐる。雪江は女があんまりけばけばしい洋裝をしてゐるので、我にもなくそつちへ眼をひきつけられたがもう一度瞳を定めてみると、それはまるで思ひもかけない住江千鶴子であつた。

雪江ははッとして、

「あらッ。」と、聲を出したが、その次の瞬間には又次の叫び聲が、「あッ廣瀬さん。」と、口を衝いて出て來た。

千鶴子と一緒に乗つてゐるのは、たしかに廣瀬であつた。彼は帽子の鍔を低く垂れ、外套の襟を可笑しいほど兩方の頬のところへ立ててゐたが、その帽子の被りつきといひ、體のこなしといひ、紛ふ方もない廣瀬であることは雪江にはひと眼で分つたのであつた。雪江はもう眼の前がかッとして、

「廣瀬さん、廣瀬さん!」と、呼びながら、電車の線路の方へ駛り出ていく自動車のあとを追つたが、向うでは車窓を閉めてゐるので、その聲が聞える筈もない。自動車はあれあれといふうちに、知らん顔で電車通りを乗り切つて、築地の方へ驀地に走つていつてしまつた。

雪江は思はず、艴氣にとられてゐる女主人の手を握つて、

「ねえ、あなた、ありや確かに廣瀬さんよ。まあ、千鶴子さんと一緒に何處へいくんだらう。」と、夢中になつて呟いたが、やがて雙眼をきりりと据ゑて、「きつと、きつと、あの、築地の芳川へ行くんだわ。きつとさうだわ。どうも私、變だと思つてゐたら、やつぱり……。私、此間からこんなことぢやないかと思つてゐたんだわ。つッ、……」と、云つて、彼女は往來中で俄に見

境もなくしくりしくりヒステリックに泣き出してしまつた。女主人は當惑顔で、

「ねえ、あなた、そんな處で泣いたりなんかしちや困るぢやありませんか。人中で見つともない。さ、彼方へ行きませう。彼方へ行きませう。」と、云つて、無理に雪江の體を押すやうにして、横町の暗い通りの方へ連れて行きながら、「あなた、ほんとに何うなすつたのさ。私、うつかりしてゐて氣がつかなかつたけど、今の自動車に廣瀨さんが乘つて被在つたんですか。人違ひぢやないんですか。」と、いたはりながら訊く。

雪江は駄々ッ子のやうに泣い欲つて、

「いゝえ、いゝえ。今のは確かに廣瀨さんですわ。一緒に乘つてゐたのが、此間もお話したあの住江千鶴子なんですもの。私、この眼でみたんだから、間違ひはありませんわ。」と、云つて、自動車の去つた築地の方を睨めつけながら、「きつと廣瀨さんはあの、あの人と一緒に、芳川」へ被往るに極つてますわ。私、ほんとに口惜しいわ。何うしてやらうか知ら。」と、云つて、又息も出來ないやうに咽び泣く。

女主人は無理に笑つてみせながら、

「でも、それにしたつて、何もそんなにあなた、泣いたりなさることはないぢやありませんか。どうせ活動の女優ですもの、お座敷で呼ばれもしようし、……」と、云ふのを、雪江はその口を手で押し塞ぎもしかねまじい劍幕で、

「いゝえ、小母さん、小母さんなんか駄目よ、駄目よ。何にも知らないんですもの。私、私、ほんとにかうしちやゐられないわ。ねえ、小母さん、そんなに落着いてないで、私の味方になつて下さいな。ねえ、小母さん。何處か此處いらに電話を借りる處はないか知ら。自動電話でも何んでもいゝんだけど、……」と、もう雪江は半狂亂になつていくのであつた。

女主人はほとほと困つたやうに、暗い軒燈の光の中で、眼ばかりぱちくりさせてゐた。往來の人も何やら變な眼つきをしながら二人の方をじろりじろりと眺めながら通つていつた。

三十八

荒木の女主人は、あんまり雪江がやいやい云ふので、仕方がなしにそこから山下橋の方へ出て、とある四角にある自動電話を探してやつた。

雪江は女主人も一緒にボックスの中へ呼び込んで、雙眼に一杯涙を湛へながら、頻りに電話の番號帳を繰つてゐたが、やがて築地の芳川の番號を探し當てると、懐から財布を取り出し、五錢の白銅を一つ出して、もう息を切りながら、そこへ電話をかけた。彼女は顔色も眞着になつて、眼さへ据つてゐた。

芳川は間もなく出て來た。電話口へ出てゐるのは、女中らしく、此方が女の聲なので、いけぞんざいな口調で受答へをしてゐたが、雪江が廣瀨の在否を聞くと、向うでは急に丁寧な調子になつて、

「は、あの、廣瀨の旦那なら、唯今おいでになりました。貴女は何方様で？」と、いふ。その聲は受話器を洩れて、女主人の耳へも入つて來た。

と、雪江はもうカッとなつて、前後の見境もなくなつたやうに、

「あの、それぢやお氣の毒ですが、私は廣瀨の宅のものですがねえ、一寸旦那を電話口へ出して頂き度いんですよ。急な用が出來ましたからねえ。」と、息を彈ませながら云ふ。

女中はそのまゝ、

「一寸お待ち下さい。」と、云つて引込んでいつたが、稍少時待つてゐると、やがて電話口へ現はれて來たのは、廣瀨であつた。彼は家からの電話だと信じ切つてゐるやうに、横柄な調子で、

「おい、おい。誰だ。安か？」と、云つたが、雪

江はぐツと生唾を呑んで、
「あゝ、あなた、廣瀬さん。私で御座いますよ、お分りになつて？」と、いふ。成る可く落着いて云はうと努力はしながらも、つい言葉は彈んでいくのであつた。
廣瀬もはツとしたやうに、
「お、何んだい。あんたかい。分るよ。」と、云つて、誤魔化すやうに笑つてみせたが、雪江は隙かさずに、
「あゝ、廣瀬さん、貴方も隨分な方ですのねえ。私ちやんと知つてますわよ。そんな、そんなことをなすつていゝんですの。」と、今度はもう涙聲になつてしまふ。
廣瀬は稍、面喰つて、照れたやうに笑ひながら、
「何んだね、だしぬけに、又あんたは何うして此家へ電話をかけたんだね。何か用があるのかい。」と、飽く迄知らばつくれようとする。
雪江は電話の呼鈴のところを睨みつけながら、ぼろぼろ涙ばかり零して、
「何か用があるかもないもんぢや御座いませんか。あなたは御存じないでせうけど、私、今、銀座の角のところで、貴方のお車に逢つたんですわ。貴方と御一緒に乗つてゐた人も私、ちやんと見たんですわ。ねえ、貴方、そんな、そんなことをなすつて、いゝんですか。」
廣瀬もぎくりとしたらしく、くすくす笑つてゐたが、やがて恍けたやうな聲で、
「あゝ、何んだ、あんたはあの千鶴子さんのことを云つてゐるのか。はゝゝゝゝ。大笑ひだね。何も、私があの人と一緒に自動車に乗つて居たつて不思議はないぢやないか。若しそれがお氣に障つたんなら、一應申開きをしよう。實はね、さうだ、前以てあんたに斷つて置けばよかつたんだが、實はその、今日この芳川で、東洋製鐵の連中の會合があるんでね、向うの重役連がどうせ御馳走になるんなら、もう藝者も何んだから、少し變つた種類の女を見せて呉れと、かういふのだ。そこで私もいろいろ考へてね、これは何うあつても千鶴子さんに出席して貰ふのが一番いゝと思つたもんだから、それで急に千鶴子さんの處へ使ひをやつて、撮影で忙しいといふのをやつと三時間だけ借りて、今私、自身で新橋の驛へ迎ひに行つて、あすこから自動車で此處へやつて來たばかりの處なんだよ。打割つて話しやそんな譯なんだもの、何もさうがみがみお叱りを受けるものはないぢやないか。はゝゝゝゝ。」と、笑ふ。廣瀬は指の先で電話器の板を叩いてでもゐるとみえ、カンカンといふやうな物音が話に混つて聞えて來た。
雪江はそれでも嵩にかゝつて、
「私、あの、そんな辯解は、いくら何うたつて無駄ですわ。お二人の樣子で私にはもう何も彼もちやんと分つてゐるんですもの。私、隨分だと思ひますわ。男らしくもない。千鶴子さんも千鶴子さんだわ。」と、云つて、又泣き聲になりながら、「あの、私、兎に角、これから芳川へ伺ひますわ。さうしてあの、私、お目にかゝつてお話いたしますわ。貴方もまさか居留守なんぞお遣ひになるやうな卑怯な眞似はなさいますまいねえ。」と、いふ。
廣瀬は當惑したやうに、
「いや、そりや困るなあ。いかに何んでも、そいつは勘辨して貰ひ度いねえ。何しろ今夜は七人からのお客をして居るのだし、それに會社からも皆來て居るのだからねえ。」と、云つて、盛んにカンカンやりながら、「兎に角、何か氣に入らないことがあるんなら、明日のことにして貰はうぢやないか。明日なら何んとか時間の都合をして、晝の中にでも逢へるやうな段取りにするから、どうか今夜だけは勘辨して呉れよ。」

と、少し不機嫌さらにいふ。

雪江はその言葉も耳へ入らないやうに、

「いゝえ、私、厭ですわ。貴方はそんなことを仰有つちや。もう此頃は私に逢はない算段ばかしして被在るんですもの。私、今夜はどうしたつて、お目にかゝらずにやゐられませんわ。これからすぐに伺ひますから、どうかそのおつもりで被在つて下さいまし。」

廣瀬は一寸考へて、

「いや、それなら、あんた、いつそかうしよう。私もそんな無い腹を探られるのは厭だから、それぢやこゝの會が濟んだら、何處か處を變へて、千鶴子さんと三人で逢はうぢやないか。どうせ此方は九時半頃には終るからそれから何處かのカッフェへでも行つて、兎に角、譯の分るやうに話をつけよう。さうして呉れないか。私は忙しいからそれぢやもう御免を蒙る。九時に又もう一度此家へ電話をかけて呉れ。」と、妙にぶつきらぼうに云つて、彼はそれなりがちやりと電話を切つてしまつた。

雪江はもう自棄になつて、それからも何度も何度も電話をかけたが、廣瀬は到頭出て來なかつた。

女主人もさすがに見かねて、

「ねえ、あなた、もうお止しなさいッたら。そんなことをして旦那がお怒りにでもなつたら、それこそ何も彼も打ち壊れてしまふぢやありませんか。男の方つていふものは世間態の大事なもんですから、そんなお顔をつぶすやうなことをしちや損ですよ。」と、何うかして宥めようとする。

雪江はもうしくしく泣き出して、

「もう何も彼も打ち壞れてしまふ方がいゝんだわ。私、あんな、あんなうまいことを云つて、私を誑さうとなさるんだもの。憎らしい。私、そんな馬鹿ぢやないわ。第一千鶴子さんが酷いんだわ。私どうしてやらうか知ら。」と、齒嚙みをする。

女主人はその肩へ手をかけて、やつと自動電話のボックスから雪江を外へ誘ひ出しながら、

「ねえ、あなた、もうそんなに一途に考へておしまひなさらないで、私も相談に乘つて上げますから、ゆつくり前後のことをお考へになつたら、何うですの。こんな時にカッとして見境もなくやつておしまひなさると、もうそれこそ後から取り返しがつかないやうなことになつてしまひますよ。さ、もう泣くのはよして、私、先刻のお話の天麩羅を御馳走になり度う御座んすわ。ねえ、あなた、あれはもうお流れなんですか。ほゝゝゝ。」と、態と彼女を落着かせるやうに、笑つてみせたりする。

雪江は浮の空で歩きながら、

「私、兎に角、芳川へ行つてみますわ。私、それでないと、……」と、せぐり上げていふのを、

女主人は手で押へながら、

「それ、それ、それが可けないんですよ。そんなあなた、宴會をなすつてゐる中へ、あなたが訪ねていつたりしたら、廣瀬さんがどんなにお困りになるか知れやしませんよ。そんなことをすりや、平にお話の出來ることもつい喧嘩になつてしまふぢやありませんか。廣瀬さんの御氣象は私もよく知つてゐますが、平常はあんな氣の練れたいゝ方ですけど、あれでお金持だけに中々我儘なところがありましてねえ、一度お怒りになると、もうそれつきりになつてしまふことがよくあるんですよ。ですからあなた、あちらでも宴會が濟んだら、その、千鶴子さんとかいふ方と一緒に逢はうと仰有つてゐるんですもの、それまで待つて上げる方がよう御座んすよ。その時になつて、よく話の分るやうになさりやいゝんぢやありませんか。」

それからも雪江は駄々をこねて、散々女主人を手古摺らせたが、それでも女主人は暗い濠端の道を歩きながら氣永に彼女をあやして、到頭芳川へいくのだけは思ひ止らせた。そして又もう一度數寄屋橋まで歸つて來て、そこから銀座の方へ出て、先刻の約束通りに天金へ上つた。

三十九

もう時間が時間なので、天金もさう混んではゐなかつた。で、女主人は成る可く四邊に話し聲の聞えないやうな窓際の方へ席をとらせて、そこで雪江と二人でゆつくり飯をたべた。

雪江は頻りに酒を欲しがつたが、女主人はそれを止めて、

「ねえ、あなた、今夜はお酒はおよしなさいよ。そんなに氣が荒くなつてゐるのに、このうへお酒なんぞ飲んだら、それこそ何んなことになるか知れやしませんよ。それでなくたつて、私もうほとほと持て餘してゐるんですもの。今夜はどうか私に免じて、お酒だけはよして下さいましな。」と、笑ひながら嘆願するやうに云ふ。

雪江はそれでも一本だけ飲まして呉れといつて、無理にせがむので、女主人も仕方がなしにお銚子を命じた。

雪江はその酒を味もなささうに飲みながら頻りにぶつぶつ怒つてばかりゐたが、終にはもう愚痴になつて、ともすると聲を呑んでは泣いたりする。そしてもう一本、もう一本と云つて、先々と酒を欲しがるので、女主人は困つて、自分ばかり貪るやうに食べてゐた天麩羅の箸を置きながら、

「ねえ、あなた、そんなに飲むと、これから廣瀬の旦那に逢ふのに困るぢやありませんか。もうあなた、醉つて被在るんだもの。」と、云つて考へながら、「もうあなた、いつそこゝへタクシでも呼んで、ずつと私の家へ行からぢやありませんか。そんな氣持で廣瀬さんに逢つたら、きつと貴女、失策りますわ。私、あなたの爲めを思つて云つて上げるんだからどうかさうなさいよ。私、決して惡いことは云ひませんから。」と、女主人も親身になつて云ふ。

雪江はしくりしくり泣き出して、もう氣弱くなつたやうに、

「小母さん。濟みません。私、こんな我儘ばかし云つて、惡いのは私、よく知つてゐるんですけど、……」と、云つて、「あの、私もう小母さんの仰有るやうにしますわ。私、若し今夜逢つたら、きつと廣瀬さんと喧嘩をしちまふに極つてゐるんですもの。……」

女主人も大きく合點いて、

「ほんとにさうですともさ。それも何か根のあることなら何んですけど、ほんとに旦那が千鶴子さんと譯が出來たのか、何うか分りやしないんですもの。そんなことをいざこざ云つて、反對に旦那の御機嫌を惡くしてしまふのは、それこそ馬鹿氣てゐますからね。」

雪江も力なく合點いて、

「あの、私、一度は變にも思つてみたんですけど、でもひよつとかしたら私の思ひ過しかも知れませんからねえ。」と、彼女は無理に自分の考へを否定してゐるやうに云つて、「ですから、小母さん、私、もう何も彼もみんな小母さんにお任せしますわ。どうか小母さんのいゝと思つたやうに裁いて下さいましな。若し私が惡かつたら、謝りもしませうし、……」と、云ふ。

女主人はそれを聞くとひどく喜んで、

「あなたがさう折れて下されば、もう何も面倒なことはないんですよ。それなら私、云ひますがねえ、今夜はもうこのまゝ家へ歸ることにして、廣瀬さんに逢ふのはお止しなさい。廣瀬さんだつて何かとお事の多い中へ、變なことを持ち出したら、きつとお怒りになるに極つてます

よ。さうすれば兩方でいろんなことを云ひ募るやうにもおなんなさるでせうし、結局厭な思ひをして別れなけりやならなくなるに極つてますもの。さうなりやその千鶴子さんとの間にしたつて、却つて變な方へ間違つちまつて、出來ないものも反對に出來るやうに此方から仕向けるやうなことになつてしまひますからねえ。」

雪江も素直に合點いて、

「ほんとにねえ。そんなことはよくありますからね。」と、云つて、急に何か氣にかゝり出したやうに、「あの、小母さん。私、ほんとに何うしたらいゝでせう。やつぱり私の方が惡かつたか知ら。何んとかしてうまく廣瀨さんに逢ふ工夫はないでせうかねえ。」と、いふ。

女主人は殘りの天麩羅へ手をつけながら、笑つて、

「それはあなた、もう心配なさらなくつてもようござんすよ。今夜はこのまゝにして置いて、明日私が何んとかしますよ。私が仲へ立ちや、こんなことは譯なしですもの。何もこれつていふ問題がある譯ぢやないんですものねえ。ほゝほゝゝゝ。」と、云つて、「ですからねえ、雪江さん、あなた、今夜は早く寢て、よく頭腦を休めて置くんですねえ。さうして明日私、廣瀨さんの會社へ電話をかけて、何んとかしてお晝の時間に一寸來て頂きますから、その時には笑つて逢へるやうにちやんと段取りをこしらへてお置きになるとようござんすよ。こんな嫉妬も偶にやいゝもんですからねえ。うまく持ち懸けりや、旦那だつて滿更ぢやなし、却つて雨降つて地固まるつていふことになりますよ。ほゝゝほゝゝ。」と、冷評すやうにいふ。

雪江はそれでも何かなしに不安さうな顏をしてゐたが、もう何んとも云はなかつた。

やがて間もなく、二人は飯にして、勘定を濟ますと、女主人の云ふやうに、雪江は女中に賴んでタクシを一臺さう云つて貰つた。そしてそれに乘つて飯倉の方へ向けて歸つていつたが、途中で又氣が變つて、兎にも角にも、一度築地の芳川の前を通つてみなければ何うしても胸が納まらないといふので、女主人はどんなことがあつても斷じて車から下りないといふ約束で、仕方がなしに雪江の云ふなりに、帝國ホテルの横を曲つて築地の方へ行つてみた。

芳川の前へ來てみると、何の變哲もなかつた。松の葉越しにみえる二階座敷には、明るい電燈が煌々と點つて、門の前には伴待ちの自動車が三臺ほど乘り捨ててあるばかり、而もその中には見覺えた廣瀨の車らしいのは見えなかつた。

雪江は自動車がすつと芳川の前を通り過ぎてしまふと、まだ殘り惜しさうに後窓から振返つてみながら、

「ねえ、小母さん。何んだか宴會があるにしちやいやに靜かなやうねえ。」と、呟いたが、女主人は笑つて、

「さうあなた、何から何まで一々氣にするもんぢやありませんよ。あんな大きな待合ですもの、外からお座敷の樣子が分るやうぢや、とても廣瀨さんのやうなお方はお客にや出來やしませんよ。ほゝゝゝゝ。」

雪江も温しく合點いて、

「それもさうねえ。」と、云つたが、自動車はやがて本願寺の横手から又引返して、今度は電車通りを日比谷の方へ向けて走つていく。

雪江は片手で頭を押へて、しよんぼり考へ込んでゐたが、少時すると何んと思つたか、

「ねえ、小母さん。私、それぢや今夜はもうこれで失禮しますわ。神谷町のところで止めて貰つて、あすこで下りて、私、ずつと家へ歸りますわ。」と、云ふ。

女主人は笑つて、

「まあ、大層何んだかシケ込んぢまつたんですのねえ。まあいゝぢやありませんの。氣晴しに家へ寄つて、もう少し話して被往いな。」と、云つたが、雪江はひとつ處をみて、

「え、有難う。もうそれでもそろそろ九時になりますから。私、失禮しませう。何んだか、私、頭痛がして耐りませんから。」と、云ふ。

自動車が神谷町の角まで來ると、雪江はいつものポストの處で止めて貰つた。女主人もそこで一緒に下りて、

「それぢや雪江さん。何んでもいゝから明日はもう十時頃から私の家へ來て被在いよ。その時にいろいろ御相談しませうよ。きつと來て下さいますねえ。」と、駄目を押すやうに云つて、「どうもほんとにいつも御馳走にばかりなつて相濟みません。いづれ又。」と、會釋をする。

雪江は自動車の賃金を拂ふと、女主人の方へ歩み寄つて、

「小母さん、今夜はいろんな我儘をいつて、ほんとに御免なさい。どうかこれにお懲りなくね。私、明日はそれぢや十一時迄にきつとお宅へ伺ひますから、廣瀬さんの方は呉々もよろしくお願ひ致しますわ。お寢み。」と、云つて、それなり別れてしまつた。

町にはふつとみると、吹く風も絶えて、いつの間に降り出したのか、靄のやうな薄白い霧雨がしとしとと降つてゐた。雪江はコートの兩袖を合はせて、大急ぎで自分の家の横町の方へ駈け込んでいつた。

四十

家へ歸つてみると、母親はいつものやうに中の間の長火鉢の傍へ坐つて、年の若い女中を相手に何やら針仕事をやつてゐた。母親は自體が針仕事が好きで、夜は目に障るからやめろと云つても、間さへあると眼鏡を頼りに、洗ひさらした端布をせつせと縫つてゐるのであつた。

雪江はそれをみると、いつもなら又眉を顰めるのだが、その晩は何にも云はずに、

「唯今。」を云ふと直ぐさま、自分も長火鉢の向うへどかりと坐つて、少時の間、ぼんやり母親の手許ばかりみてゐた。

母親も何んだか取附き場がないので、やがて針をおいて、自分で茶を入れながら、

「雪江や。今夜は又何んだか、馬鹿に溫かいやうぢやないか。戸外は何うだい、ちつとは人が出てゐるかね。」と、口を切る。母親は此頃では雪江が戸外から歸つて來ても、何處へいつたかなぞと聞くことは滅多になかつた。

雪江はピンを拔いて、横鬢のところをやけに搔きながら、

「え、銀座あたりは隨分な人出よ。でも生憎今しがたから雨が降つて來たんでねえ。」と、浮かぬ調子で云つて、女中の方を向きながら、「ねえ、時や。お前、お湯に行き度いとか云つてたわねえ。若し何んなら、これから行つて來てもいゝよ。」と、云ふ。

女中はにつこりして、

「有難う御座います。まだ十時前で御座いますから、それぢや一寸お暇を頂いて、……」と、云つたかと思ふと、もう自分の針箱をしまつて、風呂にいく支度をし出した。

母親は序だからと云つて、明日の朝の味噌汁の實を八百屋から取つて來るやうに頼んだりした。

少時して、女中が出ていつてしまふと、雪江は自分で臺所へ立つていつて、そこの戸締りをしたあとで、戸棚から取つて置きの酒を洋杯に一杯もつて來て、それを火鉢の銅壺へつけた。

母親は見て見ぬ振りをしてゐたが、雪江はいい加減、燗がつくと、そつと引上げて、そのままちびちび飲み出した。初めのうちは唯默つて

考へ考へ飲んでゐたが、その一杯をあけてしまふと、又もう一杯ついで來て燗をする。そして再び針を持ち出した母親の顏をぢいッと横合から見ながら、

「ねえ、母樣。だしぬけにこんなことを云つて何んですけど、私、又こゝの家を引越さなけりやならないかも知れませんのよ。」と、いふ。さういふ彼女の眼にはうすく涙が光つてゐた。

母親は愕乎としたやうに顏を上げて、

「えッ、引越す？」と、訊き返して、「そりやまあ何うしてさ。何か此處にゐちやいけないことでも出來たのかい。」と、不安さうに云ふ。

雪江は燗の鹽梅を見ながら、

「え、あの、私、又お金の方がね、あの、お金の方が今迄のやうに自由にならなくなるかも知れないんで、もうこんな贅澤な生活もしてゐられなくなりさうなんですわ。まだそれも極つた話ぢやないんですけれど、……」

母親は眼を据ゑて、ひどく失望したやうに、

「まあ、そりや困つたねえ。一體何うしたつて云ふのさ。私にや何んだかさつぱり分らないけど、……」

雪江は洋杯を引上げて、今度はぐうッと半分ばかりひと息に呑んで、苦さうに口を拭きながら、

「ねえ、母樣。私、今夜こそすつかり白狀してしまひますわ。今迄にも母樣から私、いろんなことを聞かれたけど、私、打明けてお話も出來ないから默つてゐたんですの。母樣も今迄隨分不思議だと思召したでせう。」と、云つて、雙眼に溢れる程涙を溜めながら、「ねえ、母樣。母樣は私が何處からかお金をもつて來ると、いつも變な顏をして、私の顏ばかりみて被在いましたわねえ。私きつと母樣がよくないお金ぢやないかとお思ひになつて、心の中ではさぞ心配して被在つたらうと思つて、私蔭ではほんとに濟まないと思つてゐましたんですわ。何あに打明けてお話ししてしまやあ、何んでもないことだつたんですけれど、私にやそれが出來なかつたんですの。」と、泣き出してしまふ。

母親も涙ぐんで、

「いゝえさ。雪江。私は何もそんなことは思やあしないけど、實は私、ほんとにお前に濟まないと思つてね。いつか折があつたらようくそれをお前に話して、詫を云はうと思つてゐたんだよ。お前も此頃では會社の方へもあんまり行かないし、何かその間に譯があるんだらうと思つて、私もいろいろに考へてみたのさ。何にもしずにゐて、こんなに澤山お金が入つて來る譯がないんだものねえ。それで私、此頃になつてやつと氣がついたんだけど、……」と、涙聲になつて來る。

雪江はもう我慢が出來なくなつて、

「母樣。私もう何も彼もお話ししてしまひますわ。ねえ、母樣。私ほんたうのことを云ふと、あの、會社の廣瀨さんに生活を保證して頂いてゐるんですの。あんないさくさがあつて、小澤さんと手を切らなけりやならなくなりましたんで、私、もう自棄になつてしまひましてねえ。つい深切に云つて下さるもんですから、あの、廣瀨さんのお世話になることになりましたんですわ。」と、云つて、殘りの酒をぐつと呷りつけて、「ねえ、母樣。でももうそれもそろそろ先が見えて來たんですの。廣瀨さんとある女の人との間に變なことが起りましてねえ。私、又近いうちにきつと廣瀨さんとも手を切らなけりやならなくなるだらうと思ふんですわ。若しさうなりやとてもこんなところに住んぢやゐられませんからねえ。……」

母親は袖口で涙を拭いて、

「雪江や。そりやお前、どうせ仕方がないことなんだもの。私やもうほんとのことを云ふとい

つからか覺悟をしてゐたんだよ。お前だつて、いつまでこんなことをしてゐられる體ぢやないんだし、きつとそのうちに又もう一度郊外の方へ歸らなけりやならなくなるだらうと思つて、私、その覺悟はしてゐたんだよ。」と、云つて、せぐり泣きに泣きながら、「ねえ、雪江。私つていふものさへなけりや、お前も肩が輕くつて、自分一人のことなら何うにだつてやつていけるんだけど、私がかうしてゐるばかりに、お前はそんな辛いことまでするんだよねえ。私やそれを思ふと、ほんとにお前に氣の毒で。お前だつて決して浮いた心で、そんなことをしてゐるんぢやないのは、私だつてよく知つてゐるんだけど、……」

雪江も涙を呑んで、

「母様、母様。私、母様がそれさへ知つてゐて下されば、それでもういゝんですわ。私だつて自分の體まで賣つて、かうやつて暮らしてゐるのは、ほんとに辛いんですの。已むを得ないことだと諦めてはゐますけど、私だつて時々は人間の本心に歸ることがありますからねえ。あの小澤さんが私と結婚さへして下されば、私は決してこんな邪道には踏み込まなかつたんですわ。自棄になつて、折角親から頂いたこの體まで汚してしまふやうな、そんなことはしないだつて濟んだんですわ。私、それを思ふと、ほんとに口惜しう御座んすわ。」

母親も息がつまるやうに泣いて、少時の間は顏も上げなかつたが、やがて、

「雪江や。もう何にも云はないでお呉れ。私やそんなことを聞くと、もう何んて云つていゝか分らなくなつてしまふんだよ。私は決してお前にそんな辛い思ひをさせて、自分が樂をしようなんとは夢にも思つたことはありやしないんだもの。お前がいゝことばかりして呉れるもんだから、此頃ぢやつい私もいゝ氣になつてしまつて、私やほんとに濟まないと思つてゐるんだよ。ねえ、雪江や。若しお前、その廣瀨さんの方と話がつくんなら、今度こそいゝ機だから、もう一度もとのやうな家へ歸らうぢやないか。さうして、私、どんなに貧乏をしても構はないから、又お前とたつた二人で、根限り働いて、お父様にも申譯の立つやうな生活をしようぢやないか。此頃ぢやお前も旅へ出たりして、ほんとに親子でしみじみ御飯を一緒に食べたりするやうなことさへないんだもの。私や體は樂でも、ほんとに寂しくつて寂しくつて耐らないんだよ。」

雪江もぢいツと遠くをみるやうな眼つきをして、

「母様。さう云へば全くあの高圓寺の家は靜かでよう御座いましたわねえ。今迄私の考へてゐたことは皆間違つてゐたんですわ。私、母様にもいゝ思ひをさせて上げ度かつたし、それに自分もやつぱり派手なことをしたり、おいしいものを食べたり、贅澤をしたりしたかつたんですわ。さういふことでは私、いつも自分で自分に譃を吐いてゐたんですわ。生活を保證して貰ふつて云へば聞えがいゝけど、實はお妾さんて云はれても返す言葉はないんですものねえ。心の中では何んて辯解をしてもやつぱり私、自分を欺いてゐたんですわ。ねえ、母様。私、廣瀨さんていふ方は會社でも一番位置の高い方ですし、それに立派な人格の方だと信じ切つてゐたんですけれど、全く男なんて當てにならないもんですわねえ。」と、今眼が覺めたやうに云ふ。

雪江はそれからはもうすつかり素直な自分に歸つて、今迄の出來事を一々母親に告白してしまつた。

母親もさすがに呆れて聞いてゐたが、事柄が事柄なので、親の身としてはそんな話に深入りも出來なかつた。

そのうちに風呂へいつた女中が、大根を一本提げて歸つて來たので、話はそれつきりになつてしまつた。

その晩、臥床へ入ると、雪江はもう身の行末のことばかりが思はれてならなかつた。つい昨日迄は明るかつた自分の世界が何んだか急に暗くなつて、何から何迄が頼りなかつた。いかに何んでも廣瀬の所業はあんまりで、どうせ此處まで來たからには、このまゝで別れてしまへるものではないと、彼女は何かなしに復讐的なことばかり考へ續けてゐたのであつた。

併し雪江はさうは云ふもののそこまで思ひ詰めても、廣瀬と住江千鶴子との間に新らしい關係が成立して、その爲めに自分がむざむざと捨てられてしまふものとは少しも信じてゐないのであつた。千鶴子よりも自分の方がはるかに廣瀬の胸に深く深く食ひ入つてゐると自分では堅く信じてゐた。それは考へれば考へるほど明らかに證據立てられる事實のやうに思へるのであつた。

四十一

その翌日、雪江は荒木の女主人に云はれたやうに、午少し前に家を出て、そこいらの菓子屋で、女主人の好きな羊羹を一折買つたりして、荒木へ行つてみた。一體がさうした隱れた商賣をしてゐる家に似氣なく荒木の家は朝が早くて、もうその頃にはすつかり座敷の拭き掃除も出來て、玄關先には打水までしてあつた。

雪江はもう心易立てに、案内も乞はずに、ずつと上つていつたが、茶の間で新聞を讀んでゐた女主人は、雪江の姿をみると、につこり笑つて、

「おや、雪江さん。お早う。今日は珍らしく時間通りですのねえ。ほゝゝゝゝ。如何です、今朝は御機嫌は?」と、いふ。

雪江も精々快濶らしく振舞つて、そのまゝ長火鉢のところへいつて坐りながら、

「有難う。昨晩はどうもいろいろと御迷惑をかけて、ほんとに申譯も御座いませんでした。小母さん。どうか堪忍して下さいましな。」と、詫びて「小母さんの家はほんとに朝がお早いのねえ。私、お午前に伺つたことはないんで、あゝは仰有つたけどどうかと思つてゐたんですわ。ほゝゝゝゝ。

女主人は新聞を置いて、すぐ後の茶棚から茶道具を下ろしながら、

「私の家はね、もう七時には何んなことがあつても起きるんですよ。女中一人つきりでせう。ですから却つて手捌きがいゝんですのよ。」

「さうねえ。却つてさうかも知れませんわねえ。夜泊つて被仕る方なんかないんでせう。」

「え、そりやもう堅くお斷りしてあるんですの。お泊めすると、どうしたつて眼に立ちますからねえ。」と、云つて、新聞を指さしてみせながら、「これ、御覽なさい。此節は何んだか警察の方が馬鹿にやかましくなつちまつて、今朝の新聞にも手の入つた家のことが出てますよ。」と、いふ。

雪江も火鉢へあたりながら、何氣なくその新聞をみたが、丁度展がつてゐる社會面のところには、可成り大きな見出しで「人肉の市」云々といふ記事が出てゐる。讀んでみるとそれは麹町の五番町での出來事で、元看護婦であつた何んとか云ふ女が、五番町の屋敷町に堂々たる貸家をかりて、それで有名な高官連や、實業家連を相手に人肉の市を開いてゐたが、遂に麹町署の刑事の探知する處となり、昨夜午後八時に三名の女は客と一緒に取押へられ、猶ほ同家へ出入してゐた女達は續々檢擧される模樣であるといふのであつた。

雪江は讀むともなしに讀んでしまふと、眉を

ひそめて、さも苦々しさうに、
「まあ、厭あねえ。何うしたつていふんでせう。」と、云つて、女主人の顔をみたが、女主人は割りに平氣な顔で、
「あんまり手を擴け過ぎたからですよ。私達も此間から噂は聞いてゐたんですけど、もう危いと思つてゐたんですよ。何しろ、面白いやうにお金が儲かるんで、つい圖に乘つて、お客樣の選り好みをしなかつたからですよねえ。それが一番いけないんですよ。」
雪江は障子の面へ匍ひかゝつてゐる薄い日射しを眺めながら、「でも、小母さん、此方にや眞面目に生花を習ひに來る方もあるんでせう。」と、訊く。
女主人は苦笑ひをして、
「そりやありまさあね。これで私、出稽古に行く先もあるんですもの。」
雪江は又新聞をみて、
「ねえ、小母さん。こんなかに隨分澤山女の人の名前が出てますが、誰か此方へ來る方はないんですの。」と、訊く。
女主人はやつと茶が入つたので、雪江にすゝめながら、
「大丈夫ですよ。私の家へ來て下さる方は皆堅い方ばかりですからねえ。そんなのは皆貴女、もう渡り者の、手のつけられないやうな女ばかりですもの。そんなのを入れた日にや、それこそ恐う御座んすよ。ほゝゝゝ。それにあなたも御承知の通り、私の家ぢやもう一切お酒は上けませんし、又お客樣もしつかりした御紹介がなけりや決してお上げしませんからねえ。これで堅い方が十人ゐて下されば、そんなにガツガツしなくつても、結構やつて行けるんですもの。」と、云つて、女主人は急に氣を變へて、「ねえ雪江さん。それはさうと、廣瀨の旦那ですがねえ。又妙なことがあるもんで、私、今日會社の方へ お電話をかけようと思つてゐたんですけど、あなた、反對に彼方樣が今朝會社へお出がけに、家へ寄つて下さいましたんですよ。」と、いふ。
雪江も驚いて、
「まあ、……」と、半分は嬉しさうに云つたが、
女主人はその顔をみて、
「あれは、さうですね、まだ八時半頃でしたらうか。女中が戸外を掃いてゐますとね、だしぬけに旦那が入つて被來いましてね。私、お勝手で働いてゐたもんですから、まあ、どうかお上んなさいましつて申上げると、旦那はお靴のまんまで、あの、今朝は急な用があつてこれから横濱までいかなけりやならないから、一寸これを雪江さんの家まで屆けさせて呉れないかと仰有つて、何んだかお手紙を置いて、そのまゝお歸りになつてしまつたんですよ。私、昨夜のことを申上げようと思つて、後を追駈けたんですけど、もうお自動車に乘つておしまひになつた處だつたもんですから、……」
雪江は怪訝さうに、
「まあ、ぢやそれつきり歸つておしまひなすつたの、隨分變な方ねえ。」と、云つて、何かなしに不安を覺えてゐるやうに、「何うしたんでせう。手紙なんか下さるなんて、妙ですわねえ。」
女主人は後の茶棚の抽斗から一封の手紙を出して、雪江に渡しながら、
「さあねえ。私も變だと思つたんですけど、でも今朝は旦那も大變に御機嫌のやうでしたよ。にこにこ、にこにこして被在いましたもの。」
雪江はその封書を取り上げてみたが、表書は自分の名になつてゐて、裏には唯Hといふ字が一字書いてあつた。それは會社の封筒で、いつも廣瀨が使ひつけてゐるやつであつた。
雪江は何か惡い便りではないかと思つて、目を瞑りながら一二三で封を切つてみたが、中か

らは平ぺらい書簡用箋と、それからいつも廣瀬が寄越す銀行の小切手が出て來た。それは月々お極りの手當で、額は二百圓に極つてゐた。

雪江は小切手だけ脇のうへへ置いて、急いで用箋の文言を讀んでみた。それには廣瀬自身の手蹟でかう書いてあつた。

「昨夜は失禮。あとの電話を待つてゐたが、かゝらないので歸つてしまつた。私は昨夜のあなたの云分は不心得だと思ふ。考へてみたつて分る話だ。つまり貴女にはもう此方の仕てやつてゐる事の有難味が判らなくなつたに相違なし。しばらくの間逢はずにゐて、反省を待つことにする。悪いと思つたらあやまる可し。ヒロセ。」

雪江はそれをみると、もう顔色を變へてしまつた。あゝ、矢張り昨夜のあの事が廣瀬を怒らしてしまつたのだと思ふと、今朝は彼女も氣弱くなつてゐるだけに、飛んだ失敗をしたと思はずにはゐられなかつた。

女主人はそつとその手紙を覗き込みながら、

「まあ、大層あなた叱られてゐるぢやありませんか。」と、薄く笑つて、急に態度をかへながら、

「それだから私、昨夜もあんなにさう云つたんですよ。正直なことを云ふと、昨夜のあなたの電話は隨分手酷しかつたんですものねえ。あれぢや男の方なら誰方だつて機嫌を悪くなさいますよ。」と、それ見ろと云はぬばかりに云ふ。

雪江もすつかり悄氣返つて、

「ほんとに私、悪いことをしましたわねえ。何うしたらいゝだらう。」と、聲を潛めて、「でも、私、彼方のことを思ふからこそ、あんなことも云つたんですわ。何にも思はなけりや、私何をされたつて默つてゐるんですけど……」と、もう涙ぐんでしまふ。

女主人は笑つて、

「まあ、ようござんすよ。そんなにあんた心配しなくつたつて何んとかなりますよ。」と、云つて、「私は廣瀬の旦那の御氣性はようく知つてますけど、でもこんなことを仰有るやうぢやここ少時の間はとても御機嫌が直りませんねえ。まあ、雪江さん。私が引受けますから何も彼も任せてお置きなさいよ。」と、いふ。その言葉には、昨夜ほどの深切氣がなかつた。

雪江はそのまゝ火鉢の炭火をぢいッと見詰めながら默つてゐたが、何うしたのか、急にしくしく泣き出して、

「小母さん。もう私、こんなことをしてゐるのが、つくづく厭になりましたわ。どんな人でもいゝから私、もう結婚したくなつちまひましたわ。私、眞面目に働いて、私を可愛がつて吳れる人なら、私、どんな人とでも一緒になるんだけど……」と、泣き欷りながらいふ。

女主人は茶碗をゆすいで、

「ほゝゝゝ。今朝は又大層貴女生眞面目なんですねえ。昨夜とまるで違つた人のやうですよ。あなたなんぞはまだ若いんですもの。かうあゝ思ふのもその時、かう思ふのもその時ですよ。」と云つて又急須に茶をさしながら、「まあ、云つちや何んですけど、全く廣瀬さんばかりが旦那ぢやありませんからねえ。そんなに思ひ詰めてしまはないで、まあゆつくりお天氣をみることですよ。今月のお極りだけは頂いてあるんですもの。ほゝゝゝ。」

雪江はさう云はれると、ふいに顔を上げて、燃えるやうな眼つきをしながら、

「小母さん。もう何うか、何うか、そんな厭なことは云はないで下さいな。私、それでなくつてもう死に度い位なんですもの。」と、體を揉んでゐたが、やがて俄に歸り支度をして、「小母さん。私、もう失禮しますわ。いづれ又伺ひますから。……」と、つんつんしながら云つて、雪

江は女主人が止めるのも聞かずに玄關の方へ出ていつてしまつた。

戸外へ出ると、もう雪江は胸が突き上げていくら押へようとしても、涙ばかりがぼろぼろ可笑しい程流れ出て來た。

何んだか夢がさめたあとのやうな氣持で、何も彼もが心細く、頼りなくて、何うにもからにも誤魔化しのつけやうがなかつた。

往來の人に見られるのも見つともないと思つて、雪江はそこから人通りの少ない横町をぬけてそのまゝ芝公園へはひつていつた。そして深い森蔭のベンチを探して、そこへたつた一人で腰を下ろしながら、手巾で顔を掩つて、泣けるだけ泣いた。

それから二時間ばかりの後、雪江は田町の停車場へ來てゐた。彼女は兎にも角にも一度住江千鶴子に逢ひ度いと思つて、蒲田までの切符を買つて、手に持つてゐたのであつた。

四十二

雪江はやがてその儘ふらふらッと來合はせた電車に乘つてしまつたが、妙に胸がわくわくするばかりで、もう何を考へる餘裕もなかつた。住江千鶴子に逢つて何んとか話し合つたら、事の眞相が分るであらう。何氣ない調子で話を持ち懸けてみたら、彼女だつてきつと不用意に何か尻尾を出すに相違ない。雪江は唯空にそんなことを豫想してゐたに過ぎなかつた。

蒲田の驛で下車すると、雪江は初めて來る處なので、まるで案内が分らなかつた。千鶴子の家は女塚の千七百二十一番地なので、彼女は驛前の煙草屋で道を敎へて貰つて、先づそつちへ行つてみた。

途中でふつと考へると、丁度今が二時半である。今頃はきつと撮影所の方で撮影をやつてゐるに相違ないと思つたので、雪江は又氣が變つて、今度は角の小間物屋で訊いて、撮影所の方へ足を向けた。

撮影所は直に分つた。細い路を突き當ると、スタディオらしい大きな木造の建築物がみえてその羽目には白く松竹キネマ蒲田撮影所と書いてある。雪江はアメリカの實寫もので、彼地の撮影所の俯瞰圖なぞをみたことがあるので、もつともつと大懸りな立派なものであらうと想像してゐたのだが、實際來てみると案外にがらんとしてゐて貧弱で殺風景なので力ぬけがしてしまつた。こんな處なら別に珍らしくも何んともないといふやうな呆氣ない嘲りをさへ感じて來たのであつた。

何處へ入つて何う聞いていゝか分らないので、雪江は仕方がなしに門衞の小舍へ入つていつた。そして住江千鶴子が來てゐるなら逢ひ度いといふと、門衞は割りに深切ものらしい口調で、

「住江さんですか。住江さんはもう一昨日で撮影が上つたんで、休んでゐますよ。」と、いふ。

それを聞くと雪江は却つて譃のやうな氣がした。つい昨夜まで撮影が忙しいので、僅か三時間の時間すらやつととつて貰つたといふやうなことを廣瀨自身の口から聞いてゐるのである。又彼女の手紙にも、とてもこゝ二週間位は體があかないからとはつきり書いてあつた。

雪江は臆びれた樣子で、

「あの、では唯今はお家の方に被在るでせうか。」と、訊いてみたが、門衞は笑ひながら、

「さあ、そりや私にや分りませんねえ。今のところ別に先の撮影が始まるやうな樣子もないですから、多分家にゐるだらうと思ふんですが、……」

さう云はれてしまふと何うにも仕樣がないので、雪江は丁寧に一禮して、

「あの、それでは兎に角、私、お宅の方へ行つ

てみますわ。どうもお邪魔をいたしました。御免下さい。」と、云つて、それなり門衛小舍を出てしまつた。

雪江はそれから又もう一度通りへ歸つて來て、ぶらぶら女塚の方へいつてみた。人通りのない片側町へ出ると、彼女は帶の間からそつと手鏡を取り出し、歩きながら化粧を直したりして、これと思ふ方へ足に任せて歩いていつてみた。

千鶴子の家は、とある小川の岸にあつた。僅か四間ばかりの、さゝやかな平家で、それも雪江にはひどく案外であつた。自分の今ゐる家よりも却つて見劣りがするので、どうも腑に落ちなかつた。あれほど有名な女優なのであるから、せめて文化式か何かの氣の利いた家で派手に暮らしてゐるのかと思つてゐたのに、これはまた何んといふ見窄らしさであらう。初めは雪江も家が違ふのではないかと思つたが、門の柱に「住江千鶴子」と書いた小さな標札が出てゐるので、もう疑ふ餘地もなかつた。

雪江は少時の間ためらつたあとで、やがて思ひ切つて衣紋をつくろひながら、そこの家の格子を開けて、

「御免下さい。」と、小さな聲で案内を乞うてみた。

と、すぐ端近で若い女の聲がして、障子も開けずに、

「誰方？」と、蓮葉に云ふ。

雪江はおづおづ、

「あの、私、關口と申すものですが、千鶴子樣はお宅でせうか。」と、云ふと、その時、初めて障子が中から開いて、まだ十八九の、でぶでぶ肥つた變な女が、白粉ばかり毒々しく塗つた顏をぬツと出して、

「關口さん？」と、怪訝さうに云つて、「あの、お氣の毒ですけど、先生は今日はお留守なんですのよ。又被來つて下さいな。」と、いやにぞんざいに云ふ。

雪江は不在と聞くと落膽して、

「まあ、お留守なんですか。」と、呟きながら、まじまじしてゐたが、やがて元氣を出して、「あの、それでは失禮ですが、お出先は分らないでせうか。東京の方へお出懸けになつたんぢやないんですの。」と、もう一度云つてみた。

と、その女は首を振つて、

「いゝえ、さうぢやないんですの。ほんとのことを云ふとね、實は今朝早くお立ちになつて、箱根へ被往つたんですの。ですから二三日はとてもお歸りになりやしないわ。」

雪江は思はず、

「え、箱根へ？」と、訊き返したが、その聲があんまり度外れてゐたので、却つて自分の方が恥かしくなつて、みるみる顏が紅くなつていくのを自分でもはつきり感じながら、慌てて紛らかすやうに、「まあ、箱根へ被往つたんですか。それぢやロケーションですね。」と、態と云つてみた。

女は頤を突出して、素人が何をと云ひ度げにうすく笑ひながら、

「あら、今度はロケーションぢやないんですわ。唯遊びに被往つたの。いつも先生は撮影で疲れると、保養に被往るんですよ。」

雪江は益々變になつて、

「まあ、保養に被往つたんですか。さうですか。それではあの、……」と、云ひかけて、「あの、それではお宿は分つてゐまして？」

「さあ、それは分りやしないわ。あんな氣紛れな先生ですもの。そんな宿を極めて被往るやうな、そんなんぢやないんですもの。いつも行き當りばつたりで、まるで風のやうなんですの。家に被往つてもさうですわ。ほゝゝゝ。」と、笑つてゐる。

雪江はその女が眞氣なのか、茶化してゐるのか、よく分らなかつた。いづれは千鶴子の弟子の一人なのであらうが、顏つきはさうではなくても、その應對ぶりでみると心は低能なんぢやあるまいかといふやうな氣がした。と、彼女は何といふ理由なしに、急に腹立たしくなつて來て、こんなものを相手にしてゐても限りがないといふやうな氣がして、やがて、

「あの、それでは私、關口つていふものですが、もしお歸りになつたらさう仰有つて下さいました。いづれ又お歸りになつた頃をみてお邪魔に出ますから。どうも失禮いたしました。」と、云ひ捨てて、格子戸をぴたりと閉めてしまつた。

雪江はもと來た道の方へ引返して來ながら、どうしたのかもう腹が立つて、腹が立つて耐らなかつた。きつと千鶴子はもう前から豫防線を張つて、留守のものに態とあんなことを云はせてゐるのであらう。關口といふ名を云つた時に、變な顏をしたが、あれもきつと芝居に相違ない。それでなくては、あんな空惚けたやうな口のきゝ方をする譯がないのである。ひよつとかしたら、自分が今日あたり、彼女の家へ來るに違ひないと當りをつけ、廣瀬と打合はせをして、先廻りをしたのかも知れない。

それにしてもあんな狹い家のことであるから、居留守が使へる筈もない。さうとしたら一體何處へいつたのであらう。若し今のあの女が云つたやうに、箱根へ行つてゐるとすれば、そこには大きな疑問が湧いて來るのである。撮影で疲れると温泉へ保養にいく。そんな榮耀なことを云つてゐても、あの生活ではとても自力でそんな贅澤が出來る譯のものではない。きつと誰か相手があるに相違ない。さうなると、彼女を連れ出した相手は廣瀬ではなからうか。さう云へば廣瀬も荒木の女主人の話では横濱へ行つたといふのである。箱根と横濱、それを考へ合はせると、雪江にはもう何も彼も分つてしまつたやうな氣がした。

さうだ、きつと千鶴子は昨夜築地の芳川で、廣瀬とすつかり手順を打ち合はせて、今朝二人は箱根へ向けて立つていつたのに違ひない。さうした遣口はいつも廣瀬が用ゐる手である。それでなくては、どうして廣瀬がそんなに朝早く邸を出て、荒木へ寄つたりする筈がないのである。

そこへ考へつくと、もう雪江は頭がかつとする程熱して來た。何うして呉れるか覺えてゐろといふやうな憤怒ともつかず、嫉妬ともつかぬ激しい感情が胸一杯に込み上げて來て、とても眞直に立つて歩いてはゐられなかつた。で、彼女はなるべく人家のない處を探して歩きながら、やつと地均をしたばかりの空地のつゞいた原つぱへ出た。彼女はそこに置捨ててある石材のうへへ腰を下ろして、兩手で顏を掩ひながら、胸が惡くなる程眼がまはるのをやつと我慢してゐた。

四十三

雪江はもういつそのこと、箱根へすつ飛んでやらうと思つた。そんな無茶なことをして、末がどうなるかといふことも考へないではなかつたが、然し一途に迫き上げた彼女にはもう何うでもなれ、別れるものなら別れてしまへといふやうな自棄な心持の方がはるかに強かつた。そしてあの廣瀬の手が、荒れすさんだ千鶴子の肉體へ觸つたのかと思ふと、何んだか妙に穢らしいやうな、忌らしいやうな氣持がして、嫉妬の底にはさうした不思議な感覺の問題も織り込まれて來るのであつた。

二人はきつと昨夜、あの芳川で打合はせをして、箱根へいつたに相違ない。もう京阪の旅にゐる時分から、何か關係が出來てゐて、それが

今日になつて、一層深く進んでいつたに相違ない。あの、コケットな、手管のある千鶴子のことであるから、廣瀬のやうな節操のない道樂者をあやなす位は譯のないことであらう。さう云へば此方へ歸つて來る日、廣瀬は大阪へいくと云つて、千鶴子と一緒の自動車で撮影の現場まで送つていつたが、あの時なぞは何をしたか知れたものではない。口ではうまいことを云つてゐても、あの廣瀬のことであるから、全く怪しいものである。それを思ふと、雪江は何んだか、自分が長い間、欺かれてゐたやうな氣ばかりして腹が立つて、腹が立つて耐らないのであつた。もし今日この氣持で千鶴子に逢つたら、頭からつかみかゝつて、打つて打つて打ち踏してやり度いと思ふほど、もう激情に眼が暗んでゐるのであつた。

雪江は少時すると、もう顔色まで變へて、ついと立上つた。そして口の中で舌打ちばかりしながら、その空地から今度は鐵道線路に添つた道をとツとと歩き出した。彼女の妙に据つた眼からは涙がほろりほろりと自然に落ちて來た。

雪江はやつとのことで停車場まで歸りつくと、いきなり財布を帶の間から引出して、中を調べてみた。と、中には紙幣や銀貨を取り交ぜて、現金がすつかりで三十圓ばかり入つてゐた。それは昨夜銀座へ出て天金へ上つたあとの剰錢であつた。

雪江はもう前後の考へもなく、出札口へいつて、箱根の湯本までの連絡切符を買つてしまつた。それは無論二等であつた。そしてプラットフォームへ出ていつたが、生憎省線には何か故障があつたとかで、中々櫻木町行の電車がやつて來なかつた。向うの線路には熱海行の列車や、横須賀行の列車が二つも續けざまに通過していつたので、雪江はもう足摺りし度いほどもどかしくて耐らなかつた。

雪江はいつそもう横濱で列車に乘り換へるのはよして、東京驛か、品川驛まで引返して、そこで次の汽車を探さうと思つて、驛員達の溜りへいつて、そこにゐた若い驛員の一人に、

「ねえ、あなた。いつまで待つたら、櫻木町行は來ますの。」と、訊いてみた。その言葉つきはひどく突慳貪であつた。

驛員は彼女の方をみて、愛想のいゝ調子で、

「いや、どうもお氣の毒樣です。實はね、大井町の附近で、今轢死人がありましてねえ。それで遲れてゐるんですよ。どうかもう少々お待ち下さい。あと五分も經つたら參りますから。」といふ。

轢死人と聞くと、さすがに雪江もひやりとした。

「まあ、轢死人。」と云つて、彼女は眼ばかりまじまじさせながら、「あの、それぢやもう五分位で來るんですか。實はね、私小田原まで行き度いと思ふんですけれど、これから横濱へいつて乘り換へるのと、品川で乘りかへるのと、どつちが早いでせう。一體この次の小田原行は何時なんですの。あんた御存じぢやなくつて？」

驛員は考へて、ポケットから時間表を取り出してみながら、

「さあ、小田原行と。この次の熱海行は、お、もうあとは午後の七時しきやありませんなあ。」と、いふ。驛員の溜りでは信號器や、電話がしつきりなしに口佐にかちやかちや鳴り響いてゐるので、驛員達は立つたり、居たり少しも落着かなかつた。

雪江は眉をひそめて、

「まあ、午後の七時ですつて？」と、云つて、腕時計をみながら、「今が三時五十分ですから、まだあと一寸三時間ありますわねえ。そりや困つたわねえ。それよりもつと早いのはないんですか。」

「さあ、それより早いんだと、どうしても四時半の急行ですなあ。急行で國府津まで被往つて、あすこでお乘り換へになるんですなあ。それより他には都合のいゝ奴はないですよ。」

雪江はもう何を考へる餘裕もなく、急行でも何んでも構はないから、それへ乘らうと思つた。で、驛員に禮を云つて、

「どうも有難う、それぢや私それに乘りますわ。それにしても早く電車が來て呉れなくつちやねえ。」と、又もどかしさうに貧乏揺りをしながらいふ。

そこへ突然、消魂しい汽笛の聲が聞えて、櫻木町行の電車がだしぬけに疾風のやうに入つて來た。約四十分間程遲延してゐたので、どの車室も、どの車室も一杯で、乘客は昇降段のところまで房なりに零れてゐた。

雪江はもう慌てきつて、おろおろしながら車室の前を驅けて廻つてゐたが、それでも二等車から四五人下車するものがあつたので、どうやら、かうやらそれへ乘り込むことが出來た。

電車が發車すると、もう車内は彼方でも此方でも轢死人の噂で持ち切つてゐた。默つて聞いてゐると、大方樣子は分つたが、何んでも丁度その電車が大井町の驛を出外れて、約四分の一哩程進行して來た時に、突然踏切の土手の影から二十ばかりの、女給風の女がひらりと線路へ飛び込んで、見るも無慘な轢死を遂げたといふのであつた。

雪江と一緒に蒲田から乘つて來た一人の老紳士は今初めてその話を聞いたらしく、盛んに饒舌つてゐる會社員のやうな脊廣服の男に、

「やあ、轢死人があつたんですか。」と、もの珍らしさうに訊く。

と、その男は得意さうに、

「え、どうも實に見られた態ぢやなかつたです。丁度この車室の眞下へ死體が引懸つたんで、私は見まいと思つても何しろすぐ目の下なんですからなあ。實にどうもあんな慘酷な死態は初めてですよ。もう手も足もばらばらになつちまつて、それ、そこの昇降段の下のところへ、あなた、眼の玉の飛びだした首だけがころりと轉つてゐるんですもの。それに耳隱しに結つた髮が不思議にこはれずにちやんとしてゐるんですから、猶更凄うござんさあねえ。」

雪江は息がつまるやうな心持がして、思はず頭へ手をやつた。

老紳士も舌の根に苦みを覺えてゐるやうな顏で、鼻で息をしながら、

「ふむ、併しこの晝日中に、思ひ切つたことをする人もあるもんですなあ。自殺でせうなあ。」

「無論自殺ですとも。帶の間へ二通も遺書を入れて居つたといふんですからな。」

雪江はそれを聞くと、何かなしにぞつとした。かうした氣持でゐるところへ、女の轢死人とは何んといふ幸先の惡いことであらう。どんな事情があつて死んだのか分らないが、併し何にしても辻占が惡かつた。

さうかうしてゐるうちに、電車は横濱へ着いたので、雪江は急いで下車した。昇降段を下りる時に、恐いもの見たさでそつと車體の下を覗いてみると、何んだか水で洗つたあとがまだ濡れてゐるやうで、車輪の胴が銀色に油ぎつて光つてゐるのが、氣味が惡かつた。

四時半に東京驛を發車する急行列車は、五時十二分に横濱を出るので、まだ少し時間があつた。で、雪江は驛員に注意されて、大急ぎで急行券を買つて來て、列車の來るのを待つてゐたが、春とは云へその日は夕暮になると何んだか急に薄寒くなつて來て、プラットフォームの吹き曝らしに立つてゐると、何かしら遠い旅へでも出ていくやうな悲しさばかりが込み上げて來た。

急行列車の二等車は可成り混んではゐたが雪江は行き當りばつたりで後部から三番目の車室へ乘つて、幸ひひとつの椅子を一人で占領することが出來た。汽車に乘ると少しは心持も落着いて來たが、それと同時に、先刻の轢死人のことが思ひ出されて、何んだか、まだ空怖ろしいやうな氣がしてならなかつた。死ぬにも事を缺いて、眞晝中に、しかも野天で、醜い自分の死骸を衆人の眼の前に晒すとは、何んといふ忌はしいことであらう。さうしたことにも無智な人間の情なさがみえるのである。もし自分がさういふ場合に望んだら、どうかして死體を人に見せないやうに、水の底へ永遠に沈んでしまふとか、或は噴火口へ飛込むとかして、それつきり、總ての存在をこの世から消してしまひ度い。手足もばらばらになつて、血塗れになつて、而も線路端の砂利のうへ、最期の屍を横へるやうなことは到底忍ぶ可からざる恥辱である。

それにしてもどんな女であつたらう。美人であつたらうか、或は醜い女であつたらうか。女給風の女であつたといふからには、きつと何か癡情の果てか、或は金錢上のことで自殺をしたのであらう。さう思ふと、雪江は身慄ひが出る程、自分の身のうへのことが思ひ合はされて來た。

車窓から見ると、列車は今飛ぶやうな速力で、砂山や、畑や、小松原の續いた平野を驀地に駛つてゐる。遠くには蒼茫と黄昏れた相模灘が鑄銀のやうに光つて、ほの白い暮靄の色とともに四邊は刻一刻に侘しく夜の翼に掩はれていきつゝあるのであつた。

雪江はこれから箱根へ着く頃にはもう日もとつぷりと暮れてしまふので、それを考へただけでもひどく心細かつた。廣瀬達がいゝ鹽梅に湯本か塔の澤にゐて呉れゝばいゝが、もしもつと上へでも上つてゐたら、一人の夜道がたとひ自動車ではあつてもどんなに恐ろしいことであらう。箱根へはあの小澤と二人で前後六七度も來てゐるので、案内はよく知つてゐたが、果して廣瀬達が何處へ泊るかは見當がつかなかつた。よく廣瀬が環翠樓や、富士屋ホテルのことを云つてゐたから、それを當てにして探すより他はなかつた。

その列車はもう眞暗になつてからやつと國府津へ着いた。雪江はそこで下車して、ずつと自動車でいくか、それとも小田原まで汽車でいつて、そこから自動車に乘るか、それを極めなければならないので、先づ車室から下りた。そして通りすがりの驛員をつかまへて、熱海行の列車の時間を訊いてみたが、あと五十五分ほどしなければ出ないといふ。

五十五分も待つ位なら、國府津から自動車をとばして箱根へ行つてしまつた方がずつと早いので、さうしようかと思つたが、併し懷合を考へるとどうも、工合が惡かつた。先に廣瀬がゐて呉れゝば何んとかなるが、若し探し當てることが出來なかつた場合には、歸りの自動車賃や、汽車賃も考へて置かなければならなかつた。

雪江はどうしようかと思ひ惑ひながら、プラットフォームを出口の方へ向つてぶらぶら歩いて行つたが、その時、ふつと聞くと、喧しい物賣の聲の中に、誰やらが自分の名を呼んでゐるやうな氣がする。

「雪江さん、雪江さんぢやないか。」その聲は四邊を憚るやうに、而も今度ははつきりと聞えて來た。

雪江は悸乎として聲のする方を振返つてみたが、とみると、すぐ目の前の二等車の昇降段のところには長い外套を着た一人の紳士が乘り出すやうにして、此方を見ながら片手をあげてゐる。その様子は可笑しい程慌しかつた。

四十四

雪江はハッと思つて、そのまゝそこへ立ちすくんでしまつた。――列車の昇降段のところから半身を此方へ突き出してゐるのは、思ひもかけないあの小澤であつた。

小澤は雪江が立止つたのをみると、思はず彼もそのまゝプラットフォームへ飛下りて來て、

「やあ、やつぱり雪江さんだつたねえ。その後は。」と會釋をして・彼はひどく照れてゐるやうに、「あの、あんたは何處へ行くんだね、珍らしいところで逢ふぢやないか。」と、しどろもどろに云ふ。彼は息まで彈ませてゐるとみえ、顔が紅くなつてゐた。

雪江はあんまり意外なので、返事に困つてしまつたが、四邊の旅客達に變に思はれてもと氣を配つて、何氣ない顔で、

「まあ、貴方。いつぞやは大變に失禮いたしました。貴方は何方へおいでになるんですの。又御商用で、大阪の方へでも被往るんですか。」

と、云ふ。

と、小澤はもう一足此方へ歩み寄つて來て、

「あの、私は、一寸急な用が出來て、京都まで行くんだが、雪江さん、あんたは？　又箱根へでもお出懸けかね？」と、彼も感情を押隱してゐるやうに云ふ。

雪江は今度は態と輕い調子で、

「え、私、あの、お友達が箱根へいつてゐるもんですから、あの、それを訪ねていくところなんですの。」と、云つて、妙に手持無沙汰さうにしてゐたが、やがて心にもなく、「あの、私、一寸急ぎますから、これで失禮いたしますわ。どうか御機嫌よう。」と、云つて、そのまゝ彼を抛り出して、別れていつてしまはうとする。

と、小澤は慌てて、追ひ縋つて來ながら、悲しさうな、暗い顔になつて、聲を潛めながら、

「ねえ、雪江さん。ほんとにいゝ處で逢つて、私は實はこんないゝ機會はないと思つてゐるんだ。あの、それでその、實は私、是非あんたに話し度いことがあるんだが、……」と、耳打ちをするやうにいふ。

雪江はそれでも知らん顔で、

「あら、さうですか。あの、それでは又東京へお歸りになつてから、ゆつくり伺ひますわ。私、急ぎますから、……」と、飽く迄、別れ度さうな氣勢をみせる。

小澤は反對にひどく熱して來ながら、

「いや、こんなことを云つては何んだが、東京へ歸つてからでは、一寸その、都合が惡いんだ。」と、早口に云つて、四邊を見廻しながら、「どうもこりや困つたなあ。もう、停車時間もあと幾らもないし、……」と、呟いて、慌て返つてゐる。

雪江はその心持をすつかり見透して、落着き拂つた調子で、

「ねえ、貴方。もしたつて私に話がし度いとお思ひになるんなら、汽車をお下りになつたらよろしいでせう。何の御用で京都へ被往るのか知りませんけど、私もあの、急いでゐるんですから、あなただつて、それ位な犠牲はお拂ひになつたつていゝでせう。」と、無理に微笑みながらいふ。

小澤は可笑しい程素直になつて、

「さうだねえ。私はさうしてもいゝが、……」と、云つて、直に決心を極めたやうに、「ぢや、私、さうしよう。何、この次の九時の急行へ乗つてもさう大した違ひはないんだから、さうすりやこゝで四時間ばかり時間がある譯だからねえ。」と、云つて、今度はいそいそしながら、「ぢや一寸待つて呉れないか。私、帽子と鞄をとつて來るから。」さう云つて彼は大急ぎでもとの車室へ引返していつた。そして直ぐさま中型のトランクを提げて、帽子を被りかぶり彼は又

プラットフォームへ下りて來た。

雪江はそのそゝくさしてゐる樣子が何んだか氣の毒で、勝ち誇つたやうな中に、いぢらしくも感じられるのであつた。

小澤は赤帽を呼んで、鞄を渡すと、やがて雪江に、

「それぢや雪江さん、兎に角外へ出よう。」と、云つて、腕時計をみながら、「この次の急行が丁度九時〇二分に此處を出るんだから、さうだ、まだ丁度三時間と四十四五分はあるねえ。それだけあれば、ゆつくり飯ぐらゐは食へる。さ、それぢやお作をしよう。」さういふ聲は、何んだか耐らなく嬉しさうであつた。

雪江もまるで思ひも設けない成行きになつてしまつたので、妙に氣がぬけたやうな顏をしながら、それでも默つて、出口の方へ歩いていつた。

小澤はその肩へ寄り添ふやうにしながら、煙草に火をつけて、

「ねえ、雪江さん、あんたもやつぱり東京驛から今の列車に乘つてゐたのかい。」と、問ひかける。

雪江は首を振つて、

「あの、いゝえ。私、横濱から乘つたんですの。」と、答へたが、小澤は大仰な顏をして、

「何に？　横濱から？　さうか。お隣りの車室にゐて、何うして分らなかつたんだらうねえ。その癖私は横濱ぢや夕刊を買はうと思つて、窓から顏を出して居つたんだがねえ。」と、云ふ。

驛前へ出ると、小澤は前以て赤帽に命じて置いたとみえ、例の富士屋の自動車が一臺、扉をあけて待つてゐた。小澤は雪江の腰を押すやうにして、

「兎に角、雪江さん、こんなところでうろうろしてゐても詰まらんから、いつそ箱根までお作をしようぢやないか。そのうへで何處か場所を選ばう。」と、いふ。

雪江もこれで助かつたと思ひながら、默つてその自動車へ乘つた。

自動車が駛り出すと、その時、小澤はさも懷かしさうにぐツと雪江の方へ寄り添つて來ながら、

「ねえ、雪江さん。ほんとに不思議なところで逢つたねえ。これも何かの引合はせかも知れないよ。」と、云つて、もう氣弱くなつてしまつてゐるやうに、「ねえ、雪江さん。此間、宇治ではほんとに失敬した。僕はひどく酒を飲んで居つたもんだから、あんな亂暴をしてしまつて、僕、あとからほんとに申譯ないと思つてねえ、幾度か詫の手紙を出さうと思つたんだが、つい體に隙がなかつたもんだから。」と、恥ぢ入つてゐるやうに云ふ。

雪江は暮れかゝつた國府津の町を眺めながら、冷たい聲で、

「いゝえ、何う致しまして。……」と、云つて、「あの、あれから何うなさいまして。奧さんのお加減は何うなんですの。」と、訊く。

小澤はさう云はれると、力ない溜息を吐いて、

「いや、雪江さん、僕は實はそのことでこれから京都へ行くところなんだよ。」と、云つて、又新らしい煙草に火をつけながら、「實はね、雪江さん、あれから家内の容體が一日々々に惡くなつていくんで、もう何うにも出來なくなつてしまつたもんだから、醫者のすゝめに從つて、ひと先づ京都の大學病院へ入院させて、僕だけ東京へ歸つて來たんだ。ところが君、昨夜になつて、俄に容體が急變して、家内は到頭死んでしまつたのさ。」と、息を呑みながらいふ。

雪江もあまりのことに悸乎として、

「えツ、お亡くなりになつたんですか。まあ、ほんとですの。」と、云つて、初めて眞面に小澤

の顔をみる。

小澤もその眼を見返して、

「いや、ほんとだとも。昨夜の午前一時に息を引取つてしまつたんだ。それで僕も打棄つて置けないんで、朝のうちに東京の方の用を片づけて、實はこの列車に乘つた譯なのさ。」

雪江はまだ眼をまじまじさせて、

「まあ、ほんとにお亡くなりになつてしまつたんですかねえ。あの方がねえ。」と、腑に落ちないやうに云つて、「あゝ、御病氣は一體何んだつたんですの。そんなに急にお惡くなるやうな御病氣だつたんですか。」

「うむ、それがその疑問なのさ。此間も云つたやうに、彼奴は姙娠して居るのに無理に堪へ出たんで、腎臓炎を起したといふんだが、……」と、云つて、暗い眼つきになりながら、「尤も死因は子癇だといふんだが、併しそれにはいろんな疑問があるんだ。こんなところでは話せないが、此間も云つたやうに、いくら彼奴にだつて、犯した罪に對する自責の念もあるだらうしねえ。それで死ぬほど惱みもすれば、又煩悶もして居つたのは、事實なんだからねえ。」

雪江はその言葉の裏を察して、

「まあ、ぢや此間のお話はお陣ひになつた紛れの御冗談ぢやなかつたんですか。ほんとにそんな事實があつたんですかねえ。」と、呆れてゐるやうに云ふ。

小澤は煙草の煙ばかり吐き出しながら、神經的に、

「そりや、君、無論事實さ。いくら何んだつて、僕の口からそんな嘘が何うして吐けるもんか。考へてみたつて分るぢやないか。」

雪江はさうと聞くと、事實に於て二の句がつげないのであつた。あの話を聞いてからは妙に心の底にこだはつてゐただけに、そのショックも餘計に感じられて來る。姙娠した體で、小澤のところへ嫁いて來て、それを苦に病んで死んでいつた彼女。それに病名はたとひ子癇といふことになつてはゐても、その蔭にはどんな恐ろしい事實が潜んでゐるのかも知れないのである。

四十五

雪江の心の中では、

「自殺！　自殺！」と、いふ呟きがいつともなく聞えて來るのであつた。

少時すると、小澤は自動車の運轉手に聞かれてもと思つて、態と氣を變へながら、

「ねえ、雪江さん、まあ、その話はあとでゆつくりするとして、一體君は箱根の何處へいくんだい。湯本かい、塔の澤かい？」と、訊く。

今度は雪江の方がきうと詰つて、もう口から出任せに、

「え、あの、塔の澤なんですの。」と、答へたが、

小澤は變に笑ひながら、

「塔の澤なら、いづれ環翠樓だらう。彼處は廣瀨さんの定宿だからね。」と、云つて、「それぢや環翠樓へいくのも顏がさすから、いつそ一の湯へでも行からうか。君も早く廣瀨さんのところへ落着き度いだらうが、併しまあ、今夜はゆつくり出來るんだから、せめて二時間だけ僕の爲めに割愛して異れないか。いゝだらう。二時間でいけなければ、一時間でも我慢するよ。」と、いふ。さういふ云ひ方には何處か厭味がなくて、もう何も彼も諦めてゐるやうな弱さがみえてゐた。

さうした態度に出られると、雪江は却つて虛を突かれて、今度は此方が危く感傷的になりながら、

「あら、小澤さん、私、廣瀨さんの處へなんか行きやしませんわ。憚り樣ですわねえ。私はあの、住江千鶴子のところへ訪ねていくんです

わ。あの人と約束がしてあるんで、私、二三日遊んで來ようと思つて、かうやつて出懸けて來たんですわ。彼女はいけずらしく云つてはゐながら、何處か腰の弱いところがあつた。

小澤は寂しく笑つて、

「いや、雪江さん、もう他人行儀はお互によさうぢやないか。どうせ意地の張りつこをしたつて、もうかうなりや、僕の方が負けに極つてゐるんだもの。僕はもう實際のところ諦めてゐるんだよ。だから素直に白狀し給へよ。その方が手綺麗でいゝんだ。」と、さつぱり云ふ。

雪江は急に悲しくなつて、聲を打慄はせながら、

「あら、私、そんな、そんなことでもう譃なんか吐きやしませんわ。ほんとに私、今夜は廣瀨さんのところへ行くんぢやないんですわ。私、住江千鶴子のところへいくんですもの。」

小澤は無理に聲を出して笑つて、

「はゝゝゝ。まあ、それならそれにして置かう。ぢやその住江千鶴子といふのは、一體何處へ泊つてゐるんだい。」

雪江はもう自棄になつて、脣を噛みながら、

「小澤さん。私、ほんとのことを云つちまひますわ。もう今更になつて、あなたに隱してゐたつて仕樣がないんですもの。かうやつて一緒に自動車に乘つちまつた以上は、いくら譃をついたつて、箱根へ着きやもう何うしたつてバレてしまふんですもの。」と、云つて、彼女は涙の眼をきつと据ゑながら、「ねえ、小澤さん、實はね、私もう廣瀨さんにも捨てられてしまつたんですの。廣瀨さんはもう私なんぞ抛り出しちまつて、あの住江千鶴子と一緒に今夜は箱根へ隱れちまつたんですもの。」さう云ひながら、彼女はせぐり上げて來る涙をぢいッと押し耐へてゐた。

小澤も息をつめて、

「ふむ、そりや、そりや大變なことになつてしまつたねえ。」と、云つて、態と眼を伏せながら、「いや、それもこれも雪江さん、皆一時の綾だよ。いつかも僕が云つた通り、どうせ男と女の仲なんていふものはさう長く續くもんぢやないさ。やつぱり僕の豫言がちやんと當つたねえ。」

雪江は袂からハンケチを取り出して、意氣地もなく顏を掩つてしまつた。

小澤も俄に感傷的になつて、

「いや、雪江さん、僕はそんなことを聞いても、決して態アみろといふやうな氣持にはなれないんだよ。僕ももう昔の小澤とは違ふからねえ。僕は全くのところ、そんなことを聞くと、君が可哀想でならないんだ。當然來る可きことが來たには相違ないが、併し雪江さん、ちつと餘りなかつたねえ。」と、云つて、彼も深い溜息を吐くのであつた。

雪江はもう耐らなくなつて、

「小澤さん。私、貴方にそんなことを仰有られると、もうほんとに恥かしくつて……」と、云つて、頻りに泣きながら、「やつぱり私が惡かつたんですわねえ。お互に話し合つて別れられるやうなのなら別に何んですけど、私、自分の友達に取られたと思ふと、ほんとに口惜しいんですわ。」

小澤は煙草をぽいと幌の間から捨てて、

「いや、やつぱりさうだつたのかねえ。實を云ふと、宇治でも君達が歸つてから後で、そんな評判があつたんだよ。あの廣瀨さんと、住江千鶴子はどうも怪しいといふんで、仲居達が頻りに噂をしてゐたもの。何んでも二人は自動車で花やしきを出てから、ずつと玉池の方へいく裏街道を馳らせて、車の中でとてもみてゐられたいやうな醜態を演じたさうでねえ。それが運轉手の口から仲居へ洩れた譯なんだよ。」

雪江は肩を竦めて、
「まあ！」と、云つたつきり返事も出來なかつた。
小澤は兩腕を組んで、
「僕もまさかと思つてはゐたが、併し今迄の廣瀨さんの遣口を考へると、滿更噓とばかりは思へんのでね。實のところ、ひよつとかしたら、何か君達の仲に變化が起つたんぢやあるまいかと思つて、それとなく心配もして居つたのさ。こんなことは僕の口から云ふ可きことぢやないんで、默つてゐたんだが、それぢや今夜、廣瀨さんは住江と一緒に箱根へ來てゐるのかい。それで君は何うするつもりで此方へやつて來たんだい。」
雪江は涙を拭いて、
「いゝえ、私、やつぱり一途にカッとしてしまつたんですわ。實はね、私、今日どうしても住江千鶴子に逢ひ度いと思つて、蒲田の家へ訪ねていつたんですの。さうしてあの箱根へ來たことがやつと分つたもんですから、私、もう何うしてやらうかと思つて、そのまゝ夢中で汽車に乗つちまつたんですわ。」と、いふ。
小澤は笑つて、
「まだ雪江さんにもそんな情熱があるのかねえ。頼もしいねえ。」と、云つたが、雪江は又涙聲になつて、
「だつて、だつて、貴方、口惜しいぢやありませんか。私もう宇治にゐる時から變だとは思つてゐたんですけど、そんな、そんな、立つたあとまで噂を殘してるやうぢや私、もうあの住江千鶴子を殺したつて飽き足りませんわ。何んて云つたらいゝでせう、あんな毒婦つてもう二人とありやしませんわねえ。」
小澤はそれを押へて、
「まあ、君、さう云つたもんでもないさ。どうせ後から來たものにや敵はんのだし、今はどうでも、住江千鶴子だつて、又もう直きに飽かれて、捨てられてしまふんだもの。はゝゝ。廣瀨さんのやうな人生觀を最後迄持ちつゞけてゐられる人間は結句幸福だといふことになるのさ。金の有り餘る人間は、一生飽りるといふことがないからねえ。いゝ加減なところで、大躓きをやつて、それなり道德的になつてしまふ吾々は、結局不徹底なのさ。けれども雪江さん、その不徹底の中にもやつぱり幸福はあるんぢやないのかねえ。」
雪江は默つて返事をしなかつた。
小澤は又寂しく笑つて、
「ねえ、雪江さん。僕自身にしたつて、今度家内を喪つてみて、隨分自分の考へも違つて來たと思ふんだ。廣瀨さんは凡ゆる女を漁つて、その女を一人々々金で幸福にしてやつたといふ強い信念と、それから自信とをもつてゐるから、先々と進めるけど、僕にはもうそれが出來ないんだ。女を不幸にしたと感じるやうになつちやもう情癡の世界もそこで一轉機を劃するんだからねえ。女といふものがあんまりよく分りすぎることは結局、道德の存在を確認するといふ結論になつて來るんだもの。」
ふつとみると、もう行手の山峽には湯本の宿の灯影が美しくきらめいて、早川の瀨の音は眞暗な河床から侘しく湧き上つて來た。

四十六

小澤は前硝子から行手を眺めながら、
「ねえ、雪江さん、君はほんとに何うする。環翠樓へ行くか、それとも一の湯にするか。廣瀨さんはいつも環翠樓へばかりいくんだから、今夜も恐らく彼處へ納まつてゐるだらうとは思ふが、どうだい、君、住江千鶴子と二人で對向ひになつてゐる處へ、暴れ込んでいくだけの勇氣があるかね。」と、眞顔でいふ。

雪江もさう云はれると、まさか合點きも出來なくなつて、涙ばかり拭いてゐた。

小澤はその樣をさも氣の毒さうに見ながら、

「ねえ、雪江さん。もういつそあんたもすつかり諦めてしまつたら、何うだね。僕は決して惡いことは云はないよ。廣瀨さんのやうな男は決してあとを追つてはならないんだ。つまり自省の念もなければ、人生といふものの眞實を見る氣もないんだから、捨てられたが最後、もう此方に勝味はひとつもないんだよ。俺は金をやつて女を買つたのだ、買はれた女はたしかにそれで滿足して、自分の爲めにいゝ目に逢つたことを感謝してゐるに相違ないとさう信じきつてゐるんだから、手がつけられやしないさ。買つたものが厭になつたら、又捨ててしまふ。決してその金を取返さうとは云はんのだから、女の方は結句いゝ儲けをしたことになる。さういふ風にあの人は信じきつてゐるのだからねえ。」

雪江は齒嚙みをして、

「小澤さん。私、私それが口惜しいんですわ。私、一度でいゝから、廣瀨さんをもう懲りごりだといふ目に逢はして上げ度いんですわ。」

「いや、そりや可けない。先刻も云つた通り、金のある人間は、とても懲りるもんぢやないからねえ。そんなことをするだけ雪江さん、此方が損だよ。だからもう君、このまゝそつとして置く方が却つて君の利益になるんだ。」

さういふうちにもう自動車は環翠樓の手前まで入つて來てしまつた。小澤はそこの二階座敷に點る美しい灯の色を見上げながら、運轉手に、

「ねえ、君、運轉手さん。何時の列車かで、あの活動女優の住江千鶴子が下りやしなかつたかねえ。あれ程の人氣者だから、大概君達だつて顏は知つてゐるだらう。」と、いふ。

運轉手は態と控へ目な調子で、

「さあ、私は國府津の方へ詰めてゐますんで、よく存じませんが、何んでも先刻、小田原の方の者達がそんな噂をして居りましたよ。」

「ぢややつぱりこの箱根へ入り込んで居るのは事實なんだね。何處へ落着いたか、君は知らんかね。」

「さあ、はつきりしたことは申上げられませんが、何んでもお伴れは御年輩の立派な方で、環翠樓へ被往つたさうです。皆ロケーションでお馴染になつてゐますから、あの女優さんなら、よく知つて居りますからねえ。」

自動車は橋を渡ると、環翠樓の前で速力をゆるめながら、運轉手は、

「あの、こちらでお止めするんで御座いますか。」と、訊く。

雪江はその時、苦しさうな聲で、

「いゝえ、あの、運轉手さん、どうかもつともつと上へいつて下さい。私、上へいき度いんですの。」と、駄々をこねるやうに云ふ。

自動車は一の湯の前も通り過ぎて、やがて又暗い山路へ入つていつた。

雪江はいきなり小澤の手を上からぐいッと握つて、ヒステリックに、

「ねえ、小澤さん。これで、これで、相子ぢやないの。分つて？」と、蒼ざめた顏でいふ。涙は頰を傳つて、ぼろぼろ膝掛けのうへへ零れて來るのであつた。

小澤も眼を据ゑて、

「雪江さん。よく分つたよ。分つたとも。」と、彼も涙ぐみながら、雪江の耳へ口を寄せて、「ねえ、雪江さん。ほんたうのことをいふと僕の家内は、僕の家内は昨夜、看護婦のゐない隙を見計らつて、注射薬を飲んで、自殺をしたんだよ。もうかうなりや僕もすつかり白狀するが、それも僕が殺したといふことも云へるのだ。僕はあの女を隨分責めた。自分のことは棚に上げて置

いて、頭ごなしに責めたのだ。僕は、僕は今となつちや後悔もしてゐるが、併しその時には、僕もう實際耐らなかつたのだからねえ。もうとても妥協なんかしてゐられなかつたのだ。併し可哀想なことをした。」と、云つて、彼も涙に咽んでしまふ。

雪江はその肩へ頰を寄せながら、

「ねえ、小澤さん。一體相手は誰だつたの。」と、かすかな聲で訊く。

小澤は涙を呑んで、

「相手はね、相手はね、あすこの店にゐた若い店員で、山田といふ男なんださうだ。それが知れたんで、親父がそつと南洋へやつてしまつたんださうだが、殘つたものが胎の中の子供だつたんだ。」

「それで、今でもやつぱりその男のことを忘れなかつたんですか。」

「いや、もうそりや忘れて居るのさ。却つて今ぢや憎んで憎んで、憎みきつて居つたのだからねえ。どうせあの女は病氣で斃れるのは分つてゐたが、その前に自分で手を下して死んだのが僕には耐らないのだよ。僕はそれを思ふと、實に自分までが死に度い位なんだ。」と、熱しきつていふ。

雪江もせぐり泣いて、

「ねえ、小澤さん。これでほんとに相子だわねえ。あなた、あなた。もし私が一緒に死んで下さいと云つたら、あなた何うして。」と、小澤の耳へいふ。

小澤は頻りに合點いて、

「そりや無論君のいふ通りになるさ。僕は、僕はもう生命なんか何うだつていゝと思つてゐるんだ。」と、云つて、彼も肩掛けの下で、ぎうッと雪江の手を握りしめたが、雪江は唾を呑んで、

「ねえ、小澤さん、私、もう決してそんな無理は云ひませんわ。そのかはり、そのかはり、あなた、私と結婚して下さらないこと? 私さうすりや救はれるんですもの。」

小澤は熱狂して、

「雪江さん。ほんたうかい。ほんとに君は、そんなことを考へてゐて呉れるのかい。」と、云つて、彼は後からそつと手を廻して、雪江の體を力一杯に抱き緊めるのであつた。

「ねえ、小澤さん。私、母が可哀想ですし、それに、私、もうそれより他に生きていく道がないつていふことが、今日になつてはつきり分つて來たんですわ。ねえ、あなた、私を、私を救つて下さいましな。私、もう生れ變つた氣になつて、ほんとに今迄の生活を今日限りすつかり捨ててしまひますわ。」

小澤は胸が一杯になつて、ぶるぶる唇ばかり慄はしてゐたが、やがて、

「ねえ、雪江さん。兎に角それぢや強羅まで上らう。あの思ひ出の多い強羅へいつて、今夜はひと夜、君と語り明かさうぢやないか。僕はどうせ明日中に京都へ着けばいゝのだから、明日の朝の特急に乘らう。僕は家内の死顏をみる前に、もつともつと自分の生活意識を深めて置かなければならないのだからねえ。さうしたら、僕はきつと最も正しい方法であの家内の死體を永遠に葬つてやることが出來るだらうと思ふのだ。それが僕にとつてはせめてもの奉仕だよ。僕はあらゆる憎しみや、恨みを家内の墓の中へ一緒に葬つてしまへるのだからねえ。」と、云つて、運轉手に、「ねえ、運轉手さん。それぢや氣の毒だが、強羅まで上つて呉れないか。」と、いふ。

運轉手は頻りに行手の暗を差し覗くやうにしながら、

「はい、畏りました。ですがお客樣、今夜は

少し時間が餘計にかゝりますから、どうか御勘辨を願ひます。この霧ぢやとても速力が出せませんからなあ。」

さう云はれてふつとみると、もう幌の外には、薄明るい霧がまるで煙のやうになつて一面に立ち罩めてゐた。つい今しがたまでは晴れてゐた山路が、日和續でいつの間にか濃い濛氣に襲はれて來たのであつた。

小澤も驚いて、

「やあ、こりや酷い霧だねえ。これぢやとても前燈の光が利かんねえ。」と、云つたが、運轉手は探るやうに把手を動かしながら、

「もう此頃ぢや二日置き位にこの霧で、實に私達は惱ませられるんで御座いますよ。これで大平臺あたりまで上るともうまるで車の運轉なんか出來なくなつてしまふんです。ほんとに困りますよ。」

小澤は不安さうに、

「強羅までなら行けるかね。どうだい。」と、いふと、運轉手は首を傾げて、

「さあ、大概大丈夫でせうが、まあ、宮の下まで上つてみませんことには、……」

雪江は小澤の手を握つたまゝ、幌の間から外の霧をぢいッとみてゐた。

やがて霧はいつかしら小雨に變つて、自動車の幌の上では囁くやうな、唄ふやうな音がしつきりなしに聞えて來た。それは寂しい中にも、何處か艶めいた、靜かな山路の春の雨であつた。

祇園雜吟

春寒の花見小路は灯しけり
短夜や誰がひきすてし緣むすび
とく帶の指につめたし春の雨
銀屏に鴛鴦二つゐる夜半の冬
鞠唄に雪すこし降り日暮れたり
黄葉の遠忌の鐘の日永かな

雜吟（二）

亡き母の白き手思ふ火桶かな
深川は紅霧の海や寒詣で
とかげ走る土ほろほろと日照かな
白鳳の夢土となる鷄頭花
河岸倉に波たぷたぷの朧かな
風白きこの夏草や會津城
燒栗や山越えてゆく雨の音
砂山は風に暮れたり冬の海
無動寺の谷に雲湧く冬の月
冬晴れや淀の堤の幾曲り
ゆく秋の壁に蟲聽く旅寐かな

略歴・著作年表

略歴

私は、明治二十年三月一日、東京市麴町區九段中坂下で生れました。秀雄とは二つ違ひの弟です。

私の父母はいづれも熊本縣菊池郡の出身で、父は長田足穂、母は志喜といひます。祖父は長田忠直といひまして、極めて貧しい神官でした。肥後藩の城山に鎮座してゐる官幣社菊池神社に長い間奉仕してゐまして、現存してゐる拜殿は祖父の時代に建立されたものだと聞いてゐます。母方の方は酒造家で、明治維新までは相當に榮えてゐたのださうですが、今では一家離散して、あとかたもなくなつてしまひました。城山は今は總て櫻花の名所になつてゐますが、それも私達の伯父が寄進したものださうです。

私達は國學者であり、歌人であつた祖父の血を享けついでゐるのだ、と亡父は云つてゐました。私達の父は若い時に志を立てて、熊本の町へ出まして、そこで蘭法の醫術を學びました。西南の役後東京へ出て來まして、大學の前身を卒業、警察醫などをしながら九段附近で丁度三十五年間、正直な町醫者として一生を終つたのであります。

私は富士見小學校から一橋の高等師範の附屬小學へ轉校、それからずつとお茶の水の附屬中學へ入りまして、日露戰役の終つた年に同校を卒業しました。その間は、所謂東京の山手町の坊ちやんとして極めて平凡に育ちましたが、十一二の頃から稗史や小說類に親しみ、十三の年には、雜誌などに投書をしたりするやうな文學少年になつてゐました。

私は中學を卒業する時分には、文學で身を立てようなぞとは考へてゐませんでした。北海道へ渡つて、札幌の農學校へはいらうと思つてゐたのですが、體が弱かつたので、父が酷寒の地に赴くことを許しませんでした。そこで已むなく早稻田の英文學科へ入つたのでした。

早稻田では隨分怠けました。講堂へ出る時間よりも、圖書館で費す時間の方がはるかに多かつたのです。そこで私はツルゲーネフやトルストイや、フローベル、モウパッサン、ドーデ、ゾラ、あらゆるものを亂讀しました。そしてその頃與謝野寛氏が率ゐてゐた新詩社へ入社、雜誌「明星」へ二三、短いものを發表させてもらつたのが病みつきで、到頭文學的生活へ第一歩を踏み入れてしまつたのでした。

それから三年ばかりの後、私は新詩社を脫退した北原白秋氏や木下杢太郎氏等に追隨して、雜誌「スバル」へ轉向しました。森鷗外先生や、上田敏先生の指導のもとに、所謂スバル派の陣營となつて、小說道に精進しました。

二十歲頃から始まつた放蕩生活が昂じて、私達兄弟は物堅い父の家庭から追放されてしまひました。それからが完全な暗黑時代が始まりまして、私は一種の都會放浪者になつてしまつたのでした。都會で暮らせなくなると今度は旅へ出ました。東北地方をさんざ流浪して、到頭北海道まで落ちていつてしまひました。或時は鐵道工夫の群に入り、或時は炭坑の人夫とともに流れ歩き、その擧句が田舍廻りの貧しい旅役者の群に身を投じて、私は一生彼等とともに生きていき度いと思ふほどに零落してしま

つたのでした。長い木賃宿の生活は随分陰惨たるものでした。
明治四十四年に私はやつと再び東京へ歸つて來まして、その年の冬、「旅役者生活」を題材とした『澪』を「スバル」へのせてもらひました。それが幸ひにも諸先輩の眼にとまり、翌年の四月には「中央公論」に出世作「零落」を發表させてもらふといふやうな光榮と幸運に際會したのでした。
併し心の底までしみついた放浪癖はやみませんでした。その年の五月には、もう又私は京阪地方へ流寓してゐました。つゞいて「母の手」「尼僧」なぞを發表、谷崎潤一郎氏と約一年の間、京都の風物に耽溺してゐました。
東京へ歸つてくると、間もなく神田の大火で身ぐるみ焼き出されたりしましたので、放浪癖は益々つのり、全く定住の地を失つてしまつたのでした。
大正五年に父を喪ひましたので、それからやつと一家をもつて生活するやうになりました。爾來轉住すること八度、京阪と東京との間に轉々して、日夜酒色の巷に沈湎、五年の歳月は夢の如くに過ぎ去つてしまつたのでした。
大正十一年、齢三十六にして辯護士の娘である橋本政江と結婚、翌十二年大震災の年に一女美代子を設けました。大正十四年、東京放送局が創設されると、文藝顧問としてラヂオドラマの建設に努力しまして、二年にして退局、それから今日に至るまで、小説を執筆する傍、活動寫眞なぞを研究しながら暮らしてきてゐる譯です。大正十六年に斷然禁酒しまして、それだけの時間を讀書と社會探訪に費し、他日どうかして書き上げようと思つてゐる社會小説の基礎をきづくことに懸命になつてゐます。
私が文壇へ出てから丁度今年で滿二十年、その間に出版した著書八十九巻、短篇小説三百二十八、長篇作品九十一篇、劇場での上演數四十六回、活動寫眞に撮影されたもの三十九篇。
私は今年四十四歳であります。

著作年表

明治四十二年より四十四年まで。
『潮來より』(方寸)『鎌倉より』『埠頭にて』『舞姫ダーヤ』(スバル)「死體」「果實」「足音」(明星)

明治四十五年(大正元年)
『澪』(スバル)「寂しき日」(三田文學)「零落」『母の手』「尼僧」(中央公論)『砂丘』(新小説)「海邊の町」(太陽)

大正二年
『雛勇』『京極』『浮名』『お鶴』『醫局の窓』(中央公論)「師匠の娘」(新小説)「扇昇の話」(太陽)「霧」(東京朝日)

大正三年
「尼僧光珠」(三田文學)「鰊場」「アイヌの子」(中央公論)「老兵の話」(東京朝日)「鳥邊山」「夢占」(新小説)

大正四年
「蕩兒」「糺の森」「大佛供養」「野分のあと」「法燈」(中央公論)「未墾地」(文章世界)「自殺者の手記」(太陽)「小夜ちどり」(新潮社)「木屋町夜話」「死靈」「しぐれ空」「薄雲太夫」(新小説)『埋木』(萬朝報)

大正五年
『情炎』(婦人公論)「地主櫻」(文藝倶樂部)「浮草」(福岡日日)『舞妓殺ろし』「霜月の頃」「海月寺」(新小説)「港の歌」「積丹の少女」「錦之助」「歸國」(中央公論)「紅屋の娘」(婦人公論)「夕潮」(家庭雜誌)「虚榮」(時事)「ゆく春」(新家庭)「港の唄」(讀賣)『西鶴情話』(新潮社)

大正六年
「桑名心中」「石蕗の花」「夜寒」「惡僧了玄」(新小説)「小里」「樂ころし」「淨明寺横町」(中央公論)「殘る花」(福岡日日)「續金色夜叉」(やまと)「井筒屋」

（文藝倶樂部）『わかれ霜』（家庭雜誌）

大正七年

『夜の雪』『暗い路』『歸雁』（新小說）『不知火』（大阪朝日）『嵐の曲』（婦人公論）『舞ひの袖』（中央公論）『若き妻』（報知）『しぐれ唄』（新家庭）、『呼子鳥』（福岡日日）

大正八年

『蔦奴』（文藝倶樂部）『濃霧』『女人堂』（新小說）『白鳥の歌』（大阪每日、東京日日）

大正九年

『地獄』（萬朝報）『戀ごろも』（報知）『九番館』（家庭雜誌）『夕雲』（新家庭）『靈場』（新小說）『灰色の顏』（人間）『闇と光』（東京朝日）『祇園夜話』（春陽堂）

大正十年

『見果てぬ夢』（婦人之友）『朝顏』（婦人公論）『旅鳥』（小說倶樂部）『青春の夢』（大阪每日、東京日日）『富籤』（中央公論）『野に咲く花』（やまと）『春の波』（春陽堂）『未決監の夜』（新小說）、『幻の塔』（新家庭）

大正十一年

『惡魔の鞭』（讀賣）『柳の糸』（中央）『永遠の謎』（大阪朝日、東京朝日）『沈む夕陽』（婦人倶樂部）『出水のあと』（新小說）『波のうへ』（講談倶樂部）

大正十二年

『若葉の家』（新愛知）『廢墟に立ちて』（女性）『呪ひの館』（萬朝報）『火の柱』（東京每夕）『蒼き死の腕環』（婦人世界）

『燕は歸る』（料理之友）『妖魔の笛』（都新聞）『松の葉』（苦樂）『大地は衰ふ』（春陽堂）

大正十三年

『青袷の女』『死にゝゆく』（改造）『綠の處女』（東京日日）『火焰の鼓』（やまと）『黃い鳥』（婦人公論）『知盛の靈』（女性）『涯なき路』（婦人世界）『霧の小唄』（苦樂）『旅僧雲海』（サンデー每日）

大正十四年

『撮影所祕聞』（改造）『嵐のあと』（九州日報）『悲しき遍路』（新小說）『沙上の花』（中央）『夢魔』（新青年）

大正十五年（昭和元年）

『歸らぬ船』（國民）『惡靈篇』（サンデー每日）『不滅の光』（現代）

昭和二年

『女樂士』『鳥』（改造）『狂へる孔雀』（苦樂）『夜々の星』（福岡日日）

昭和三年

『雲の柱』（主婦之友）『夜の魂』（講談倶樂部）『綠衣の聖母』（婦人倶樂部）

昭和四年

『陽氣な風車』（中央公論）『東京新景』（國民）『躍ふ黎明』（現代）『楡の落葉』（時事）

江の島より

昨夜から俺は江の島へ來てゐる。金龜樓の二階座敷で櫻正宗の熱燗を飲みながら、島の藝者の錆びた磯ぶしを聞いた。旅愁といつたやうな Conventional な情趣が頻りに湧く。

雨の晴間をみて窟へ行つてみた。最も平凡な自然現象を崇拜する人間の淺ましさが見え透いて何ともいへない厭な氣がした。それでも洞窟の奧へ奧へと響いてゆく波浪の音には暗示的なシムボリックな盡きない興味を感じることが出來た。

夜寢てゐると、吹き荒ぶ風の音とともに岩に碎ける波の叫び聲が凄まじく聞えて來る。黑耀石のやうな暗闇のなかで自然がその暴威を逞しくしてゐるさまを想像して俺は幾度かぞつとした。そして美しい肌をもつた處女の姿を幻に描きながら安らかな睡眠を得ようとあせつた。

俺は又今日一日あの岩礁の上にとびかふ鷗の群を眺めながら物悲しい思ひ出にふけるんだ。そして幾分でも思索といふものから脫離することが出來たならばそれで滿足しなければならない。健康を祈る。

（『草笛』より）

昭和五年三月十日印刷
昭和五年三月十三日發行

現代日本文學全集　第四十三篇

著作者　岡本綺堂
　　　　長田幹彦

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷